



BL
1411
T8J3
1927
v.1-18
2

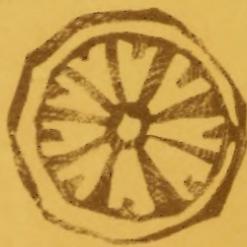
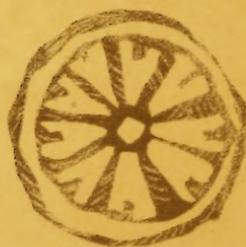
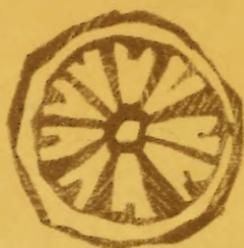
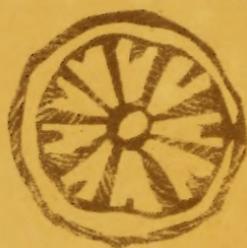
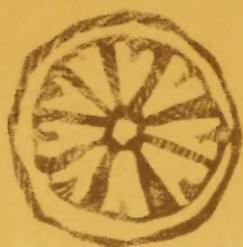
C BL
1411
T8J3
1927
Suppl.

RI CARD

EAS

BL Tripitaka. Japanese. 1927
1411 Kokuyaku daizokyo
T8J3
1927
v.1

East Asia



國譯大藏經

經部
第一卷

BL
1411
T8J3
1927
v.1



目次

法華經三部開題	一一八
國譯無量義經	一四二
國譯妙法蓮華經	一三〇
國譯佛說觀普賢菩薩行法經	一二九
淨土三部經解題	一四
國譯佛說無量壽經	一八一
國譯佛說觀無量壽經	一三七
國譯佛說阿彌陀經	一〇

漢譯原文

無量義經 一一一

妙法蓮華經 一一四

佛說觀普賢菩薩行法經 一一〇

佛說無量壽經 一一五

佛說觀無量壽經 一一一

佛說阿彌陀經 一一三

淨土三經校訂記 一一六

以上

目次

蕭齊天竺三藏曇摩伽陀耶舍譯(無量義經)

姚秦三藏法師鳩摩羅什奉詔譯(妙法蓮華經)

劉宋罽賓三藏法師曇摩密多譯(觀普賢菩薩行法經)

法華經二部開題

第一 結集

釋尊の在世には經卷無し。入滅の後、大弟子長老摩訶迦葉 (Mahākāśyapa) を首とし、一千人の大阿羅漢 (Mahā Arhat) 等相集まつて、釋尊一代の説法を筆冊に載せて、始めて經卷と爲す。この事を結集と云ふ。結集とは結束集成的の意にして、即ち編輯と云ふに同じ。

結集の地は、玄奘の『西域記』(卷九)に據れば、印度、摩揭陀國 (Magadha) の矩奢揭羅補羅城の北方一里程の迦蘭陀園を更に西南數里を過ぎて大竹林あり、是れ其の結集の當時阿闍世王 (Ajātasattu) 堂宇を建てて此に従事せる大阿羅漢等を供養せし蹟にして、摩訶迦葉の棲みたる石室も尙遺存せりと云ふ。『部執論疏』(卷二)には王舍城 (Rājagṛha) の七葉巖と記し、『撰集三藏傳』には僧伽尸城の北方と記せ

るも、地理より云へば皆『西域記』に同じ。

獨り龍樹(Nāgārjuna)の『大智度論』(二卷)には耆闍崛山(Grīhvalaka)を結集の地と云へり。是れ全く別説なり。但し『法苑義林章』(卷二)にはこの説を非とせり。

結集の本意は釋尊に對する報恩として未來の一切衆生に永く法益を與ふるが爲めなること、『大智度論』の記事最も詳著なり。其文に曰く、

是時、佛、涅槃に入り已りて、大迦葉是の如く思惟すらく、我れ云何にしてか是の三阿僧祇にも得難き佛法をして久住することを得せしめむ、應當に三藏を結集して久住することを得せしむ可し、未來世の人をして受行することを得せしむ可し。是の語を作し竟りて、須彌の頂に住し、銅の鞮槌を擣つて、此の偈を説いて言く、佛の諸の弟子、

【一】(Gāṅṭhī) (銅鐘)

若し佛を念はむ者は、當に佛の恩を報すべし、涅槃に入ること莫かれと。是の鞮槌の聲、迦葉の語を傳へて、三千界に遍く、皆悉く聞知す。諸の大弟子の神通を得る者、皆來り集會して、迦葉の所に至る。迦葉告げて言く、佛法滅せむと欲す、諸大弟子の中に、法を知り法を持つもの、亦逐つて滅度す、未來の衆生甚だ怙惑す可し、結集既に竟らば、隨應に滅度せよと。諸の來れる大衆、皆教に隨つて住す。九百九十九人を得、唯阿難を除く。

結集は摩訶迦葉の熱烈なる首唱なりしこと此に依りて知るべく、今日經卷の存在されて永く佛敎を傳ふことを得るは、全く摩訶迦葉の偉なる恩賚なりと謂はざる可からず。

此の如く報恩利生は結集の本意なるが、其の之を促したる一種の動機また別に在りたり。其は釋尊入滅の後未だ幾日をも經ざるに、多くの弟子の中に已に懈怠放逸に墮して、戒を犯し法に背くも呵責

撰出を蒙ること無きを喜ぶの一類出来したることは是れなり。摩訶迦葉自身の弟子たる難陀 (Ananda) 優婆難陀 (Upananda) の二人も亦その列なりき。摩訶迦葉深く之を嘆き、竟に法藏を結集して、法文に據つて此等懈怠放逸の弟子等を治罰するの必要を適切に感じたるに由ると云ふ。

今擧げたる『大智度論』の文の如く、初に摩訶迦葉の召命に應じて集會したる者九百九十九人、後に阿難 (Ananda) 之に參加して一千人の大阿羅漢なり。阿難は釋尊在世の常侍にして釋尊に給仕して曾て佛邊を離れず、且佛覺三味の智を得て能く釋尊の心中を領知し、一代の説法悉く記して忘れず。茲に於てか摩訶迦葉は阿難を高座に推し登せて、一代の説法を一一に如是我聞と宣べ語らせ、餘の九百九十九人をして一同に之を筆記せしめ、而して經卷の結集方に始めて成る。委くは『大智度論』に記せるが如し。

然るに『法苑珠林』(卷十) には結集に左の四時ありしことを記せり。

- 一、大乘結集。釋尊及び十方諸佛、文殊師利菩薩と共に鐵圍山外に於て大乘經を結集す。
 - 二、五百結集。釋尊滅後 一七日を過ぎて摩訶迦葉、五百人の大阿羅漢と共に十方世界に往返して結集す。
 - 三、千人結集。釋尊滅後、其歳の夏安居の初の十五日より九旬の間、摩訶迦葉一千人の大阿羅漢と共に王舍城に於て結集す。
 - 四、七百結集。釋尊滅後一百年、摩訶迦葉七百人の大阿羅漢と共に毘舍離城(即ち三舍)に於て結集す。
- 此の『法苑珠林』の記は蓋し結集に關する古來の異説を孰れも事實として、竟に前後四時の結集と云ふに至りしものならむも甚だ依用し難し。況や大乘の結集を釋尊自ら鐵圍 (Iron Mountain) 山外に於て

爲したりと云ふが如きに於ておや。但この中の千人結集のみは『大智度論』と全く同じく、先哲の多く取るところなり。

又結集に就て小乗の部執のこと『法苑義林章』卷二、諸藏章の下に記せり。即ち二藏、三藏、四藏

五藏、六藏、七藏、八藏等なり。その中三藏結集は薩婆多部 (Sarvastivada) の説なれども古今概ね之

に據る。三藏とは經と律と論となり。これを藏 (Trika) と稱する所以はこの經と律と論との三に釋尊

一代の説法が皆含藏せらるるが故なり。經とは梵語修多羅 (Sutra)、支那に契經と翻す。契は合の義、

佛教の經典に載せたる釋尊一代の説法は上は諸佛の證理に契ひ、下は衆生の機根に契ふを以てなり。

經はその契を略して呼ぶなり。律とは梵語毘奈耶 (Vinaya)、支那に律と翻す。即ち佛教の戒律なり。

論とは梵語阿毘達磨 (Abhidharma)、支那に論と翻す。諸法を論義問答して佛教の正義を決擇判明な

らしむるものは是れなり。結集の時部類をこの三藏に分かつて、經藏には釋尊の説法を攝し、律藏には

一切の戒律を攝し、論藏には弟子阿羅漢等の書ける一切の論を攝す、之を三藏結集と云ふなり。

この三藏結集にも異説あり。『大智度論』には阿難が經と論との二藏を演べ、優婆離 (Uppalavaśī) が律

藏を演べて、三藏を結集したりと云ひ、『西域記』に、阿難は經、優婆離は律、摩訶迦葉は論を演べた

りと云ひ、『部執論疏』には經は阿難、律は優婆離、論は富婁那 (Purna) と云ひ、又大乗は經、律、論

共に阿難一人の口演によりて結集せられたりと云ふ。又小乗は摩訶迦葉が結集の上首、大乘は文殊師

利 (Majjhima) が結集の上首と云ふ。この文殊師利が大乗結集の上首たりしことの本據は『大智度論』にして『西域記』も亦同じ。即ち釋尊入滅の歳の夏安居の初の十五日より九旬三月を満じて先づ小乘の結集を訖へ、尋で同處に於て更に文殊師利上首となりて阿難等と共に大乘を結集したりとなり。凡そ結集の事實は上に引ける諸書の外に尙撰集三藏傳、『出三藏記集』(卷一)、『菩薩處胎經』出經品、(卷七)、『法住記』、『阿育王傳』(四)、『迦葉結經』、『付法藏因緣傳』(卷一)、『四分律』(卷五)等の參照すべき各書あり。然れども通じて『法苑義林章』を以てその所據の本と爲すべし。今爰に言ふところも多く彼に記するものを取りたるなり。

第二に 法華經の梵本

此の『法華經』は釋尊七十二歳より八十歳入滅の年まで八年間の説法なり。故に之を結集したる原書の梵本は随つて亦頗る浩瀚なりと傳稱せらる。『法華傳』(卷一)に曰く、

八載結集の文は應さに一由旬の城に敷くべし。若し盡く結集すれば容受する所無けむ。

由旬 (Yojana) は印度の里數にて種種の異説あれども概して一由旬は十六里と云ふを以て通説と爲す。即ち十六里方の大城に敷き擴げて充滿すべき程の『法華經』の梵本なりとの記事なり。同書に又曰く、

西方相傳ふ、佛、法華を説きたまふに不可説の品あり、品の内に多くの偈あり。

又『法華經』の別譯たる『薩婆分陀利經』に曰く、

佛、四輩の弟子比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の中に在して、薩婆分陀利(漢に法華と云ふ)を説きたまふ。佛の説きたまふに無央數の偈あり。

前者は不可説の品と云ひ、後者は無央數の偈(Gutha)と云へり。不可説の品とは言説の及ぶ可からざる程の多數の品目なり。無央數の偈とは央は盡の義にして計り算ふべからざる程の無盡數の偈頗なり。佛の説きたまふ『法華經』の品目偈頌は實に斯の如く弘博無邊なりしとなり。此等が縦ひ誇大浮華の形容文辭なるにもせよ、其の梵本の頗る浩瀚なりしことは亦以て推想するに難からざるなり。

然るに其の浩瀚なる梵本の『法華經』が何故に支那に翻譯さるるに方りて極めて僅小の物となりしや。法護の譯せる『正法華』が十卷(或は七卷)羅什の譯せる『妙法華』が八卷(或は七卷)に過ぎず、何ぞ其の不可説の品、無央數の偈と稱せらるるに似ざるの甚しきや。最初成道の樹王の『華嚴經』は三七日の説なれども而も其の譯せるものは六十卷(佛陀數)八十卷(實又難陀譯)四十卷(般若)等あり、又最後雙林の『涅槃經』は一日一夜の説なれども而も四十卷(曇無)三十六卷(再治)等あり、然るを八箇年の長日月に涉りて説きたる『法華經』が僅に十卷八卷なるは訝かし。縦ひ譯家の意樂より節略を試みたるにもせよ、一由旬の域に敷くと云ふ梵本に比して餘りに相應せず。

今按ずるに結集當時の梵本は八箇年間の説法を記せるものとして實に一由旬の城に敷く程の浩瀚なるものにてありしならむ。而も亦後に之を節略したる謂ゆる略本の梵本が、別に存在せられて久しく已に印度に流行し居たるならむ。支那に將來して翻譯したるものは蓋しその略本なるべし。故に僅に十卷八卷なり。又その略本も印度に已に若干種の不同ありて決して一本にあらざりしと想はるることとは『添品法華』の序に護、什二譯を批評せる下にこの消息あり。曰く、

二經を考驗するに定めて一本に非ず、護は多羅葉に似、什は龜茲文に似たり。余經藏を検して備さに二本を見るに、多羅は則ち正法と符會し、龜茲は則ち妙法と共に允に同じ。

これに依れば『正法華』、『妙法華』の二譯は已に其の所據の本を異にしたることや明かなり。『法華傳』に曰く、

今長安に傳ふる所は四本同からず。一は五千の偈、正無畏の傳ふる所是れなり。二は六千五百の偈、竺法護の傳ふる所是れなり。三は六千の偈、鳩摩羅什の傳ふる所是れなり。四は六千二百の偈、闍那崛多の傳ふる所是れなり。三本は是れ多羅葉、什本は白氈なり。

多羅と白氈と違へるは勿論、同一多羅に尙三本各異りて偈數不同なるはこの『法華傳』の記事に於てこれを知るべし。彼の『薩曇芬陀利經』の如き只僅に一卷のものも、亦彼の如き節略の本印度に在りしを取りて譯出したることや疑ひ無し。此等は總べて同一法華の題下に於ける同種の略本と云ふべきものなり。

尚ほ他に別種の略本あり。浩瀚の廣本より其の幾部分を抄出し別題として一種の別行本と爲せしもの是れなり。現に法華三部と云はるる中の『觀普賢經』の如き即ちそれなること論を須たす、左の諸經も亦此の類にして皆別種の略本と云ふべきものなり。

『廣博嚴淨不退轉輪經』 六卷 智嚴譯。

『法華三昧經』 一卷 同人譯。

『大毘跋路經』 二卷 求那跋路羅(Kimbhala)譯。

『大薩遮尼乾子所說經』 十卷 菩提留支(Bodhiśuci)譯。

『金剛三昧經』 一卷 失譯。

又廣本の中には眞言陀羅尼、印契の類も多くありて、儀軌等も定めて種種ありしことならむ。不空の譯せる『成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌』(卷一)及び同人譯の『法華十羅刹法』(卷一)の如き即ち其の一部分なりと爲すべし。

『華嚴經』には恒本、大本、上本、中本、下本の五類ありと云ひ、『大日經』にも常恒本と分流本との二種ありて、その分流本に又廣略の二本ありと云ふ。この例に依りて『法華經』の梵本にも廣略數種の本ありと云ふことを妨げざるなり。即ち攝して四本と爲すべし、一には常恒本、二には大本、三には廣本、四には略本なり。

一に常恒本とは三世十方不斷常説の『法華經』なり。壽量品に曰く、

我が常に此の娑婆世界に在て説法教化す、亦餘處の百千萬億那由他阿僧祇の國に於ても衆生を導利す。

又同品の偈に曰く、

常に法を説て無數億の衆生を教化して佛道に入ら令む。爾しより來た無量劫なり。衆生を度せむが爲めの故に、方便して涅槃を現す。而も實には減度せず、常に此に住して法を説く。

この常住の説法は即ち常恒本の『法華經』と云ふべきものなり。然れどもこれ結集の攝に入らず。

二に大本とは往昔の大通智勝佛の『法華經』は恒河沙の偈（化城）、威音王佛の『法華經』は二十千萬億（論品）

億の偈（常不）、宿王智佛の『法華經』は八百千萬億那由佗（Navuta）、甄迦羅（Kankura）、頻婆羅（Kimbarna）

阿闍婆（Aksobhya）等の偈（藥王）、今の釋尊は無央數の偈（陀利經）ありと云ふ。これ等は大本の『法華經』と云ふべきものなり。

三に廣本とは一由旬の城に敷ける程の印度結集の梵本なり。無央數偈の『法華經』に較ぶれば本より抄節したるものなるべきも、結集して文字卷軸の『法華經』となりてよりは、此一由旬の梵本を推して最大弘博の廣本と稱せざるを得ざるなり。然れどもこの廣本の全部今何の地に在るやを審にすること能はず、曾て傳ふるところに依れば他の諸大乘經と共に龍宮に藏すと云ふ。

四に略本とは前の一由旬の廣本を更に節略したるものにして、現に今日經藏に存在し世間に流行せらるる『正法華』、『妙法華』等の原書たる梵本なり。これに同種の略本と別種の略本と若干種ありて

不同なること前に述べたるが如し。

已上『法華經』の四本なり。若し略本の中の同種と別種とを聞せば、應に『法華經』の五本と云ふべし。尙尼波羅本等のことは便宜上次節の終に記さん。

第三 翻譯

【法華經】支那に於ける『法華經』の翻譯には全本と支本の二類ありて、全本は前後合せて六譯な

り。

第一譯 『法華三昧經』 六卷 正無畏譯。

是れ全本六譯の第一出にして、智嚴譯の一卷の法華三昧經とは全く別なり。『出三藏記集』卷四に此經の名を掲げて失譯と爲せども、『歷代三寶記』卷五には正無畏の譯と爲して曰く、

法華三昧經、右一部六卷は高貴鄉公の世、甘露元年七月、外國沙門支彌婆接、魏には正無畏と言ふ、交州に於て譯す。沙門道聲筆受。

これに甘露元年とあるは魏の錄に編入したるが故なり。『開元釋教錄』卷二には吳の下に錄して翻譯の年號を孫亮の五鳳二年乙亥と爲せり。譯者正無畏の傳は委しきもの無し。翻譯もこの『法華三昧經』一部六卷のみにて他には之あるを聞かず。

第二譯 『薩芸芬陀利經』 六卷 法護譯。

是れ第二出なり。但し『出三藏記集』には之を載せず。同書卷三に『芬陀利經』一卷とあるは即ち

一卷の『薩曇芬陀利經』を指したるにて此の六卷の本に非ず。然るに『歷代三寶記』卷六にはこの本

を標出して『正法華』と共に同じく法護の譯と爲せり。以後の諸錄は大抵皆同說なり。『開元釋教錄』

卷二に曰く、

薩曇芬陀利經六卷、太始元年に譯す。竺の道祖の晉世雜錄に見ゆ。第二出なり。隋錄に薩曇と云へり、芸は恐らくは誤り。

第二譯 『正法華經』 十卷(或は七卷) 法護譯。

『歷代三寶記』卷六に曰く、

太康七年出だす。清信士張士明、張仲正及び法獻等筆受。或は七卷なり 聶道眞の錄に見ゆ。曇遷之を誦すること日に一遍、遂

に神を感ず。請すること九十日畢りて、白馬一疋、白羊五頭、絹九十疋を施す。

又『開元釋教錄』卷二に曰く、

正法華經十卷、或は方等正法華と云ふ、或は七卷なり、二十七品あり、太康七年八月十日出だす、第三譯なり、清信士張士明、

張仲正、聶承遠等筆受。

然るに道宣の『法華弘傳序』には西晉惠帝の永康年中に『正法華』を譯したりと記せり(注法華新)。この説は諸錄に違するのみならず、道宣自身の選述したる『大唐內典錄』にも異れり。同書卷六に曰く

正法華經十卷、一百八十九紙、西晉太康の年、竺法護、長安に於て譯す。

同一人の筆にしてこの相違あるは訝し。法護の傳記に據れば其の翻譯事業は西晉武帝の太始元年より興れり。其の以後の太康七年の譯出と云ふに何の支吾ありや。反つて惠帝の永康年中と云ふことは他に一の徵證無し。故に『法華弘傳序』は是れ必ず誤りなり。

この第二、第三の譯者は梵名曇摩羅刹 (Dharmaraksā) 熾煌郡の人、八歳にして出家し印度の沙門竺高座を師とし、普く西域諸州を巡り、異言三十六種を習ひ、後梵本を齎して熾煌に歸り、盛に翻譯の業を興し、この『正法華』及び『光讚般若』以下百七十五部、三百五十四卷を譯出せり。當時の人尊んで熾煌菩薩と稱す。又月支菩薩、天竺菩薩等の名あり。後に召されて長安の青門外に居り、惠帝の時、國亂を避けて河南府の灑池に住し、七十八歳にして没す。(梁僧傳) (卷一)

第四譯 『方等法華經』 五卷 支道根譯。

『開元釋教錄』卷三に曰く、

方等法華經五卷、咸康元年に譯す。竺の道祖の晉世雜錄に見ゆ。第四出なり。法護の正法華等と同本なり。

この譯者支道根は東晉の沙門なり、『方等法華經』五卷の外、『阿闍佛刹諸菩薩學成』二卷の譯あり。

第五譯 『妙法蓮華經』 八卷 羅什譯。

『開元釋教錄』卷四に曰く、

妙法蓮華八卷、僧祐の錄(出三藏記集)には新法華經と云へり。初は七卷二十七品爲り、後人天授品(提婆達多品)を益して二十八

品と成す。弘始八年夏、大寺に於て出だす。僧叡筆受、并に序を製す、第五譯なり。

この中の天授品とは即ち提婆達多品なり、即ち羅什の譯せるものこの一品を闕くが故に二十七品なりしとなり。此に就ては下の支本の第七譯に至りて當否を述べし。僧叡の序とは『法華經後序』なり。この『後序』には般若等の諸大乘經を法華經に對望して總べて權方便の教となせり。又この『後序』の記するところに據れば、後秦の代、秦主の姻戚に姚嵩なる人あり、この人前譯の『正法華』等に幾多の失點あることを曉悟し、羅什に遇うて遂に此の『妙法華』八卷を翻譯するの大因縁を爲したりと云ふ(出三藏記集卷八參照)。而來支那、日本等に盛に流行せられ、殊に我が聖祖日蓮聖人の宗旨の本典と奠むるところは即ちこの羅什譯の本なり。

羅什具さには鳩摩羅什、支那には童壽と讎す。父の名鳩摩炎(Kumarayana)と母の名耆婆(Siva)とを合せ取りて名と爲すと云ふ。龜茲國の人なり。天資聰悟、七歳の時母と與に出家し、師に従つて經を受け、日に千偈を誦んず。一偈ごとに三十二字あり。その日に誦んずるもの三萬二千言なり。人皆驚嘆して奇と稱せざるは莫し。九歲闍賓に到り、盤頭達多(Bandhatata)に遇うて小乘を習ひ、『中』、『長』二合及び雜藏四百萬言を受く。尋で沙勒に赴き須利耶蘇摩(Suryasoma)に遇うて大乘を習ひ、『中』、『百』、『十二門』等を受誦す。須利耶蘇摩は國王の子にして出家して當時の碩匠爲り。羅什の去らんとするに當り『法華經』の梵本を以て羅什に囑して、茲の典東北に緣有れば汝慎んで傳弘せよと云ひた

り。後に支那に來りてこの經を譯したるは即ち其の屬に應じたるなり。學已に成りて名聲甚隆し。舊師盤頭達多、羅什に大乘を聽き信服して反つて弟子と爲る。及び諸の外道。羅什の爲めに挫かるる者頗る多し。時に支那前秦の苻堅其の將呂光を遣はし龜茲を伐つて之を破り、羅什を獲て還る。後秦の弘始三年其の主姚興、羅什を請して長安に入り衆經を譯出せしむ。譯に與かる者當時の龍象僧叡僧肇等八百餘人、皆羅什に師事して諳受せざる莫し。譯出するところの經論凡そ七十四部、三百八十四卷。中に就てこの『妙法華』は弘始八年夏、艸堂寺に於て譯す。我が人皇第十八代反正天皇の即位元年(洋曆四〇六)なり。其の卒去の歲月は異説あり。或は弘始七年と云ひ、或は八年と云ふ。『高僧傳』卷二には弘始十一年八月二十日と爲せり。然るに『成實論』の後記に依れば弘始十四年九月論の譯訖れり。即ち十一年には羅什未だ滅せずして譯業に従事せるなり。又僧肇の『涅槃無名論』を秦主に上る表には肇の羅什門下に在りて翻譯に與かりしこと十有餘載なることを記せり。若し十一年に滅せば弘始三年始めて譯業を興せしより以來八年に滿たす。十有餘載と云ふの理無し。故に弘始十一年に卒去すと云ふは尙ほ悞りなり。況や七年或は八年と云ふをや。年代更に促りて事實に合はず。よりに弘始十五年に卒去すと云ふ一説を取るべきなり。(卷四上參照)

姚興曾て羅什の聰明超悟天下に匹無きを感じ、其の嗣を得むと欲して、逼つて宮女を受けしむ。故に羅什は兩來別舎に在りて僧房に住せず。講說毎に衆に謂つて曰く、譬へば臭泥の中の蓮の如し、但

蓮れんを採りて泥でいを取ること勿なれと。其の本國ほんこくに在るの時とき、羅什らじふの母は、羅什らじふに大乘だいじようを東土とうどに傳つたふべきことを告つげ、且かつ曰いはく、但懺だんざんむらくは利他りたの爲ためにして自身じしんに利無りなげんと。羅什らじふ對こたへて曰いはく、他の爲ために身を忘わするるは菩薩ぼさつ大士だいじの道みちなり。苟いやしも斯乘こふみちを傳つたふべくんば爐鍍ろくわくの苦あた當あたるも敢あへて辭じせずと。蓋けだし姚興えうきうに逼せまられて破戒はかいを忍しのぶも亦また此この大志願だいしけんの爲ためなり。臨終りんじうに衆しゆを集あつめ誓ちかつて曰いはく、若ちし所譯しややく謬あやまり無なくば當まさに身を焚やくの後舌のちしたのみは焦爛せうらんせざるべしと。乃すなはち逍遙園せうせうえんに於おいて茶毘ちやびせしに薪滅たきぎめつし形碎かたちくだけたれども唯舌ただしたは灰はひとならざりきと云いふ。翻譯ほんやくの外著ほかあらすす

【一】 Juyin(火葬)

所『實相論』二卷及び『注維摩』あり。(高僧傳卷二、開元釋教錄卷四、參照)

第六譯 『添品妙法蓮華經』七卷(或は八卷) 闍那崛多、達磨笈多、共譯。

『衆經目錄』卷二に曰く、

妙法蓮華經七卷、大隋仁壽元年、三藏囉多譯。

此に依れば闍那崛多一人の譯の如くなれども、『大唐内典錄』卷六には「反つて達磨笈多一人の譯と爲せり。曰く、

妙法蓮華經八卷、一百五十五紙、囉累品を移して末に在り。藥草品に加ふること五紙、咒文異れり。隋の仁壽二年笈多興善寺に於て翻す。

年代も前者は仁壽元年と云ひ後者は仁壽二年と云ひて違へり。『大周刊定衆經目錄』(三)は大唐内

典錄』に同じ。但『開元釋教錄』卷七には嘸多、笈多二人の共譯と爲す。曰く、

妙法蓮華經添品七卷、或は八卷、二十七品あり、寶塔と天授とを連れて一と爲すが故に二十七なり。仁壽元年普曜寺沙門上行の請ふところに因り、嘸多、笈多の二法師、重ねて梵本を勘へて、闕けたる者ば之を添ふ。經の前序に具さなり。

若し經の前序の如くなれば嘸多、笈多二人の共譯と爲すべきこと固より妥當なり。又年代も仁壽元年なるべきなり。然るに『衆經目錄』が嘸多の譯と爲し、『大唐内典錄』が笈多の譯と爲して、兩書に相違の生じたることに就ては聊か所以あり。按ずるに嘸多は其の傳に依れば隋の文帝の開皇二十年に七十八歳にして没せり。添品の譯出は仁壽年間にして嘸多の已に没したる後の事なるが故に『大唐内典錄』は笈多の譯と爲せしならん。然らば『衆經目錄』に何故に嘸多の譯と爲せしかと云ふに、嘸多は當時隋朝に於ける翻譯の主任にて、始めは耶舍(Yeshe)と云へる人と二人之に當りしが耶舍の没後嘸多一人専ら之に任じたること『續高僧傳』卷二嘸多の傳に之を記せり。而して笈多は當時その下僚として嘸多の譯業を助け居たるものにして、その翻譯も主任者たる嘸多の名に於てして、自身は敢て公に獨り表面に立たざりしなり。同じく『續高僧傳』卷二笈多の傳に曰く、

時に嘸多權を控へて令望敢に居る。梵隋を傳度するに、時に唯美を稱するも、深義に至りては反つて斯人(笈多)に啓せざるは英し。而も容貌滔然として世路に涉ること無し、所以に傳譯の聲望は、己を抑へて人を揚ぐ。

此は嘸多の下に於ける笈多の狀態を善く寫せり。現に嘸多の筆受者の一人たる費長房の錄せる『歷

代三寶記』卷十二に開皇七年より同十五年までの囑多所譯の經三十一部百六十五卷を擧げ、其の中十四部は囑多の自翻、其の十七部は笈多等の共譯なることを記せり。而してその共譯の本も皆囑多の名の下にその經名を列ね、笈多の下には別に録せず。即ち是れ囑多の主任にして笈多は唯その下僚の一人に過ぎざりしが爲めなり。『衆經目錄』は蓋しこれ等の事實によりて囑多の譯と爲せしならん。『歷代三寶記』に掲げたる囑多所譯の三十一部百六十五卷の中に『添品法華』の名は見えざれども、尙他に九十餘部の現在續翻のものある由を記しあれば、『添品法華』は必ずその中に在りしなるべし。即ち彼の經の序に云へる如く囑多、笈多の二人が梵本對照の事等は定めて此の間なるべし。故に『添品法華』の翻譯は囑多の主任中已に著手せられたりと云ふを至當と爲すべく、殊に其中の普門品の重偈は後周の武帝の時早く已に翻譯を了へたるもの如し。囑多の没後は笈多の力を以て全く其の功を成し、これを仁壽年間に出經するを得たるなるも、囑多在世中よりの繼續事業にして而も其の主任なりし點より云へば囑多譯と稱すること亦理あることなり。然れども『開元釋教錄』の如く二人共譯と爲すべし。

『添品法華』は大體羅什の『妙法華』を本とし、その闕文を補うて、藥艸喻品の後半の偈と提婆品の文と陀羅尼とを添へたり。是れ添品と稱する所以なり。而して字句も閉改定するところあり。又法護の『正法華』を參酌し、神力品の後の囑累品を卷末に移せり。其の藥艸喻品の後半の偈と提婆品の文とを添へたるは實は『正法華』に依りしが故なり。『正法華』に二本あり、一は梵志品と題して提婆品の

文を別品と爲したるもの、黄檗版の藏經本六の二十八品の『正法華』是れなり。一は提婆品の文を實塔品に連續して別品と爲さざるもの、縮刷藏經(高麗)盈二の二十七品の『正法華』是れなり。『添品法華』はこの二十七品の體に倣ひて亦提婆品の文を實塔品に連續して一品と爲せり。

この添品の譯者、閩那崛多 (Jinacupta) は隋に志徳と云ふ。北印度の犍陀羅國 (Gandhara) の沙門なり。後周の明帝の武成年閏長安に屆り、勅を受けて四天王寺を造り、其處に居て翻譯の事に従ふ。後に會譙王宇文儉と與に蜀に赴き、武帝の廢佛毀釋に遇ひ、一旦胡地に逐はれ、隋の文帝の開皇年間復び支那に還つて殊遇を蒙り、大興善寺に住して盛に譯業を興し、遂に三十九部百九十二卷を譯出す。『續高僧傳』卷二に其の傳あり。

達磨笈多 (Dharmasupta) は、隋に法密と云ひ、又法藏とも云ふ。南印度の羅囉國 (Rala) の人。隋の開皇十年始めて支那に來りて崛多の譯業を助け、崛多の没後には代つて譯人の首座と爲る。而後の自譯凡そ九部四十六卷あり。然れども崛多の在世中崛多の名を以て譯出したるもの亦鮮からず。『歷代三寶記』に二人共譯十七部あること上に已に云へるが如し。

以上の六譯は『法華經』の全本なり。この中第一譯の『法華三昧經』と第二譯の『薩芸芬陀利經』と第四譯の『方等法華經』とは闕本に歸して世に傳はらず。今經藏に現存するものは第三譯の『正法華經』と第五譯の『妙法蓮華經』と第六譯の『添品法華經』との三本なり。これを『法華經』の三存

三闕と稱せり。

次に『法華經』の支本を云へば、或は一卷、或は一品、或は一品中の幾部を別に抄出して翻譯したるものあり。今その翻譯の年代を逐つて左に順次掲ぐべし。

第一 『佛以三車喚經』 一卷 支謙譯。

『衆經目錄』卷二には『佛以三車喚子經』とあり。念ふに是れ支那に於ける法華部翻譯の最初にして、譬喻品中の一部三車出宅の一節なるべし。『開元釋教錄』卷二に曰く、

佛以三車喚經一卷、長房の錄に見ゆ。云く法華より出だすと。應に第二の譬喻品より出だせしなるべし。(同書卷十四、參照)。
然るにこの本疾くに闕本と爲りて今在らず。

第二 『法華光瑞菩薩現壽經』 三卷 失譯。

失譯なるが故に翻譯の時代を審にすること能はざれども、多數の目錄は大抵魏吳の間に編入せり。

これに依りて當時の本たることを識る。『開元釋教錄』卷二に『正法華』の抄本ならんと云ひたれども『正法華』は西晉時代の譯出なれば、その以前の魏吳の間に其の抄本ありしことは訝かし。この本亦闕失なれば之を檢するに由無し。

第三 『光世音經』 一卷 法護譯。

これ全く『正法華』の抄本にして、當時この一卷單獨の本として世に流行せられたるなり。『衆經目

録』卷二に曰く、

光世音經一卷、正法華より出づ。右西晉の永嘉二年竺法護譯す。長房の錄に出づ。

然るにこの『衆經目錄』に『光世音經』の外尙法華部の經十餘種を擧げ、その中に『普門品經』一卷として同じく西晉の代法護の所譯なることを記せり。この法護譯の『普門品經』は寶積經の一部なれば之を法華部に攝したるは『衆經目錄』の誤りなり。『開元釋教錄』卷二に曰く、

普門品經一卷、初出なり。又普門經と云ふ。寶積の文殊普門會と同本なり。太康八年正月十一日出たす。聶道眞の錄及び僧祐の錄に見ゆ。

蓋し『法華』に普門品あるを以て『衆經目錄』はその本なりと誤想したるならん。

第四 『薩曇芬陀利經』 一卷 失譯。

失譯なれども西晉の部に錄されれば支本の第四譯なり。『開元釋教錄』卷二に曰く、

薩曇芬陀利經一卷、舊錄には薩曇芬陀利經と云ふ。亦直ちに芬陀利經とも云ふ。是れ法華經の寶塔、天授の二品各少しづつなり。

この本は今現に存せり。

第五 『觀世音經』 一卷 羅什譯。

『開元釋教錄』卷四に之を載せり。蓋し羅什の『妙法華』の中より抄出し單獨の本と爲して流行せしめたるものならん。

第六 『法華二昧經』 一卷 智嚴譯。

全本第一譯の六卷の經と同名なれども、譯者已に異なり卷數亦違ひて別本なること論無し。『開元釋教錄』卷五には『法華』の支流なりと云へり。この本は今現に存せり。

第七 『妙法蓮華經提婆達多品等十二』 一卷 達磨摩提譯。

この譯者達磨摩提 (Dharmapātri) は支那に法意と云ふ。西域の沙門なり。蕭齊の武帝の永明八年に楊都の瓦官寺に於てこの『提婆品第十二』と及び『觀世音懺悔除罪咒經』一卷とを譯出す。『開元釋教錄』卷六に曰く、

妙法蓮華經提婆達多品第十二、一卷、今妙法華に編入して第五卷に在り。初め沙門法獻、于填國に於て梵本を得來る。道惠の宋齊錄に見ゆ。僧祐の錄に云く、高昌郡に於て梵本を得と。未だ孰れか正なるを詳にせず。

提婆品は其の梵本を法獻支那に將來し達磨摩提之を譯したりと云へること諸錄概ね一致せり。即ち今『妙法華』の中の提婆品は羅什の譯に非ずとなり。『開元釋教錄』卷十一に曰く、

此の妙法蓮華經の第五卷の初め提婆達多品は、蕭齊の武帝の時、外國の三藏達磨摩提、楊都の僧正沙門法獻と共に瓦官寺に於て譯す。其の經の梵本は是れ法獻、于填より將來す。其の第八卷の初の普門品の中の重頌の偈は、周の武帝の時、北天竺の三藏闍那崛多、益州の龍淵寺に於て譯す。秦本に並に開けたれば、後に續で編入す。

然るに天台は獨り之に反して羅什譯の提婆品已に在りしことを云へり。同品の『文句』に曰く、

當時二十八品あり。長安の宮人此の品提婆品を請うて淹留して内に在く。江東の傳ふる所は止二十七品を得。乃至、今四讀混和

して長安の舊本を見る。

羅什の所譯に提婆品ありて二十八品なりしを、長安の宮人が提婆品を宮中に留めて世に出たさざりしが故に外に流布するものは二十七品のみなりしが、四瀆混和し天下一統の今日に及び幸に長安の宮中に在りし祕藏の舊本を見ることを得て、正しく羅什譯の提婆品あることを識れりとなり。特に羅什の弟子僧叡の講じたるに九轍及び二十八品の生起あり。若し羅什提婆品を譯せざれば僧叡何ぞ二十八品の生起と言はんや。是れ最も有力の證なり。故に羅什譯に已に提婆品ありしことは全く天台の言の如くなるべし。但その久しく長安の宮中に淹留して世に流布せしめざりしを以て、偶ま法獻の子闔(Kiokan)より梵本を得たるを機として、達磨摩提をして別に之を譯せしめ、以て其の闕を補ひたるものならん。然るに現今『妙法華』中に在る提婆品が果してこの達磨摩提の本なりや、將た後に長安の宮中より發見されたる羅什の舊本なりやと云ふことに至りては、妙樂は同『文句』の『記』に按じて全く什公の文體に似たりと云へり。且つ天台親く已に其の舊本を視たりと云ふ、豈にその視たる舊本を捨てて反つてこの一品のみ獨り達磨摩提の本を取つて釋するの事あるべけんや。加之す所釋の中その視たる舊本に據りて滿法師、南岳禪師を稱揚して深く經意を得たり等と云へり。『文句』は實に羅什の舊本を取つて釋したること此等を以て推想するに足る。而も其の『文句』の本文今の妙法華中の提婆品と一字一句を異にせず。是れ即ち今の提婆品は長安の舊本なること斷じて亦知るべきなり。故

に『開元釋教錄』の記するところの如きは輕忽に聽受し難し。羅什譯に闕けるものありとして彼の『添品法華』の如きもの出でて藥艸喻品の後に日月譬の文を加へ、提婆品を加へ、普門品の偈を加へたれども、羅什譯に全く此等が無かりしや否やは更に一考すべきことなり。縦ひ、世流布の本は初めは二十七品のみなりしも、後に提婆の一品が長安の宮中に淹留されしことを識り得たるが如く、他の闕文も已に翻譯されたる後別に單獨の本と爲りて尙ほ當時に存在されざるを保せず。前の第五支本の『觀世音經』の如き其の一例なり。又秦宋の間に譯人の姓氏を失せる『日月譬經』、『藥艸喻經』等各一卷ありしこと『開元釋教錄』卷五に之を記せり。或は是れ羅什所譯の藥艸喻品の日月譬が單獨の本と爲りたるに非ざるか。又その單獨の本と爲りしが爲め本經に竟に之を闕くに至りしに非ざるか。當時翻譯は國主保護の下に於て爲され、幾ど國家事業の最大盛儀として萬般すべて整備せられたりとは云へ、六朝の間に天下の戰亂絶えず、國家の興亡常無くして、堂堂たる朝廷一旦破壊せらるれば、影響は直ちに翻譯事業に及ぼし、流離困頓の弊は忽ち經典の上にも現出して、失譯闕本相踵で生じたるは勢の免れざるところなり。即ち彼の『日月譬經』、『藥艸喻經』等亦この間に於て『妙法華』より奔跳脱出して一部の別本と爲りたるものならんか。此等は更に後日の檢按を待つべきなり。又妙樂の『記』に齊宋の錄を擧げて、梁の末に西天竺沙門拘羅那陀なる人ありて此提婆品を譯することを記せり。若し此事真なれば是れまさに支本の第八譯と言ふべきなり。然れども天台の『文句』に之を言はず、妙樂

亦必しも信せず、本の有無今檢するに由無し。

第八 『妙法蓮華經普門品重頌偈』 一卷 闍那崛多譯。

是れ普門品の世尊偈なり。現在の『妙法華』にこれを編すと雖も、羅什譯には之を闕失せり。隨つて天台の『文句』亦この偈を釋せず。妙樂の『記』に曰く、

文の後の偈頌は什公譯せず。近代皆梵本の中には有りと云ふ。此亦未だ什公の深意を測らず。續僧傳の中に云く、偈は是れ闍那崛多の譯する所と。今は舊本に従ふ、故に釋する所無しと。

單に什公の深意とのみ云ひて其の所以の委悉を妙樂に聽かざることは遺憾なり。按ずるに此の偈の有無は即ち是れ梵本の不同なるべし。貝葉には有りて白氎には無かりしならん。羅什は白氎に依る、故に亦この偈の譯無きのみ。而して法護の『正法華』にも同じくこの偈を闕けるは貝葉の中更に不同なるものあるが爲めならん。『添品』はその有の梵本を取り、『正法華』はその無の梵本を取りしが故なり。而も近代本邦所譯の尼波爾本は亦『添品』にも異なりて偈の終りに更に西方淨土を讚頌したる七偈二十八句あり。故に知る梵本數種の不同ありて決して一樣ならざることを、又この偈は無盡意菩薩の間に對して釋尊の答説なること具足妙相尊偈答無盡意の文に於て已に明かなれども、尼波爾本に依れば偈はすべて妙幢菩薩(Bhṛta Nivajal)の間に對して無盡意菩薩之に對へしなり。然るにその長行には無盡意菩薩問ひ、釋尊之に對へ給ふこと支那の三譯と全く同じ。但偈頌に至りて忽ち無盡意菩薩の對と

爲ること幾ど長行に應ぜず。随つて其の體裁は重頌偈と言ふべからずして寧ろ孤起偈に當れり。此等を考ふればこの偈は別に觀音を讚したる一種のものなりしならん。其が頗る普門品の説相に似たるより後に普門品に摺入して竟にその重頌偈と稱するに至りしならん。『添品法華』は即ちその一種の梵本を取りしならん。尼波爾本は更にその異本なるものならん。而もその長行に相應せざる點は寧ろ『添品』の所依にも劣れるものと云はざるべからず。故にこの偈無き『正』妙二本は蓋し梵本中の古純なるものなるべし。羅什の所譯無き所以は乃ち是れ歟。

第九 『法華經藥王菩薩等咒』 六首 玄奘譯

『衆經目錄』卷二に大唐永徽の年三藏玄奘譯とあり。又『開元釋教錄』卷十一に曰く、第八卷の藥王菩薩等の咒六首、大唐の三藏玄奘重譯。音義の中に在れば此に別に出ださす。

音義と指したるは玄應の『一切經音義』（又大唐衆經音義とも云ふ）卷六の末尾にこの咒の全章を掲げたるを云ふ。以上支本の翻譯なり。

次に別種の『法華』中、本經と共に重用せられ居るものは『無量義經』と『觀普賢經』との二本なれば他を略してこの二本の翻譯を云はん。

この二本は『法華經』の開結二經にして『法華經』と合せて『法華三部』と稱せらるるものなり。『無量義經』は『法華經』の前に在りて序分なり。序分を名けて開經と爲す。『觀普賢經』は『法華』の後に

在りて後分なり。後分を名けて結經と爲す。故に説の次第に依れば『無量義經』先なれども支那に於ける翻譯の年代は反つて『觀普賢經』を先と爲す。

【觀普賢經】この『觀普賢經』には左の三譯あり。

第一譯 『普賢觀經』一卷 東晉、西域沙門祇多密(或は祇密多、晉には壽友)譯。

第二譯 『觀普賢菩薩經』一卷 羅什譯。

第三譯 『觀普賢菩薩行法經』一卷 宋、罽賓國沙門曇摩密多(宋には法秀)譯。

この中第一、第二の兩譯は已に闕失と爲り、今現存せるものは第三譯曇摩密多の本なり。『衆經目錄』卷三に曰く、

觀普賢菩薩行法經、右宋の元嘉の年、曇摩密多、揚州の道場寺に於て譯す。

曇摩密多の傳は『梁僧傳』卷二及び『出三藏記集』卷十四に在り。

【無量義經】『無量義經』には左の二譯あり。

第一譯 『無量義經』一卷 宋、天竺三藏求那跋陀羅(宋には德賢)譯。

第二譯 『無量義經』一卷 蕭齊、西域沙門曇摩伽陀耶舍(齊には法生)稱譯。

これも第一譯は闕失して第二譯曇摩伽陀耶舍(Dharmagata yasya)の本現存す。『古今譯經圖記』卷四に曰く、

沙門曇摩伽陀耶舍、此に法生稱と言ふ。印度國の人、物を惜り情に居り、導利して捨つること無し。齊の高帝の建元三年歲次辛

西を以て、廣州の朝帝寺に於て無量義經一卷を譯す。沙門惠表筆受。

又天台の『文句』卷三に曰く、

此經は是れ宋の元嘉三年惠表比丘、南海郡の朝廷寺に於て曇摩耶舎に遇うて此本を受け、武當山に還り、永明三年始めて世に傳ふ。

妙樂の同『文句』の『記』に曰く、

註無量義經の序に云く、此の無量義經は、法華の首に其の名目を載すと雖も、而も中夏に未だ觀ず、譯肆に臨む毎に未だ嘗て廢談して嘆ぜずんばあらず。忽に武當山の惠表比丘有り、自ら僞帝姚秦の略が從子といふ。略は是れ婁が子なり。因て晉軍の河濶に得られて養て假子と爲る。俄に放されて出家し、慇懃に道を求む。齊の建元三年を以て廣州の朝廷寺に至り、曇摩伽陀耶舎に遇ひ、此經を傳へんと欲す。表乃ち詩を致し、僅に一本を得、仍て武當に還る。永明三年九月十八日始めて世に傳ふ。

天台の『文句』に宋の元嘉三年とあるは蓋し後人の寫悞なり。元嘉三年は文帝の代にして齊の永明三年までは五十餘年を隔てたり、事實適合し難し。然るに若し齊の建元三年と爲せば永明三年までは才かに五年なれば此經を受け翻譯を成就して出經するまでの期間に恰當す。妙樂の『記』に『註無量義經』の序を引く所以は即ち『文句』本文の誤りを正すが爲めなるべし。又『文句』に曇摩耶舎とあれどもまささに曇摩伽陀耶舎を正と爲すべし。曇摩伽陀耶舎の傳は『歷代三寶紀』卷十一及び『貞元錄』卷八に在り。又曇摩耶舎は其傳別に『梁僧傳』卷一及び『開元釋教錄』卷四に在り。

以上は『法華經』の全本、支本、及び別種の本の翻譯なり。更に論部の翻譯を云はんに、元來論に

は通申と別申とあり。通じて諸經の意に涉つて申べたるは通申の論なり。別して一經の旨を取つて申べたるは別申の論なり。『法華』に就ては別申の論として支那に翻譯されたるものは天親の『法華論』一部のみ。此に左の二譯あり。

第一譯 『妙法蓮華經優婆塞提舍』 一卷 勒那摩提 (Lohanatissa) 譯。

優婆塞提舍 (Upasaka) とは即ち論と云へる梵語なり。『開元釋教錄』卷十二に曰く、

妙法蓮華經論一卷、婆藪盤豆 (Panchandru) 造る。元龜中、天竺三藏勒那摩提、僧朗等と共に譯す。第一譯なり。

又同書卷六に曰く、

妙法蓮華經論一卷、婆藪盤豆菩薩造る。亦法華經論と云ふ。侍中崔光、僧朗等筆受、長房の録に見ゆ。初出なり。菩提留支の譯する者と大同小異なり。題して妙法蓮華經優婆塞提舍と云ふ。

譯者勒那摩提 (實意) は中印度の人、魏の宣武帝の正始五年に洛陽に届りて、この『法華論』と外二卷の論、合はせて三部九卷を譯出せり。

第二譯 法華經論 二卷 菩提留支譯。

『開元釋教錄』卷六に曰く、

法華經論二卷、題して妙法蓮華經優婆塞提舍と云ふ。或は一卷。曇林筆受、并に序を製す。第二出なり。前の實意の出だす者と同本、初に歸敬頌ある者なり。

譯者菩提留支 (道希) は北印度の人、魏の永平年中支那に來り、宣武帝の寵遇を得、永寧大寺に居て

この論及び『金剛般若經』、『十地論』等凡そ三十部、百一卷を譯出せり。

又『開元釋教錄』卷九に唐の義淨の譯出せる五卷の『法華論』なるものありしことを記して曰く、

法華論五卷、造りし者を知ること莫し。單重未だ悉くさす。景雲二年の譯なり。

單譯(初)か重譯(出)かをも悉知する能はざるは當時この譯本早く已に闕失されたるが爲めなり。若し天親所造の論なれば則ち第三譯なれども、卷數大に異なれば無論他人所造の論なるべし。『法華傳』に據れば、五天竺の間に『法華經』を傳弘せし人五十餘名あり、龍樹及び堅慧(Saichū)等の諸論師皆その論釋を造りし由なれば、義淨の所譯は恐らくはこの中の一種なりしならん。その闕失に歸したるは眞に遺憾なり。

以上は支那に於ける『法華經』及び『法華』部の翻譯にしてその中闕失せるものを除き皆東漸して現に經藏に存せり。而してその西方歐洲に傳へられたることは年紀舊からず。今を距ること僅に八十余年、英人ホツチユンン辨理公使として北印度の尼波羅國(Nepal)に駐在中、其の國內に在りし大乘經の古寫本數十通を得て、英佛二國の大學、圖書館等に寄贈したることあり。佛教の梵本が西方に赴きしは蓋し此を以て嚆矢と爲す。元來尼波羅國は曩縛達磨(Navatharma)と稱して曩縛は九、達磨は法、即ち九部の經典を専ら尊崇するの教風なり。その九部とは、一に『八千頌般若波羅密多經』二に『十地自在經』三に『三昧王經』四に『密嚴經』五に『妙法蓮華經』六に『金光明經』七に『入楞伽

經』、八に『神通遊戲經』、九に『如來祕藏經』なり。此等の梵本がホツヂユソンの手に依りて歐洲に傳へられ、就中『法華經』は已に英佛二國の語に翻譯せられたり。その佛語は佛人ユーヅエン、ビユルヌフ之を譯して、西曆一千八百五十二年、我が嘉永五年、パリに於て出版。その英語は蘭人ケールン之を譯して、西曆一千八百八十四年、我が明治十七年、牛津に於て出版せり。又ケールンは其後カシユガル地方より更に發見されたる上古の梵文寫本を得、之を參考として訂正したる梵文の『法華經』刊行を企畫し、西曆一千九百八年、我が明治四十一年に其第一卷を出版し、翌年第二第三兩卷、又其翌年第四卷、而して一千九百十二年、我が大正元年に第五卷を出版し、爰に始めて梵文の『法華經』全部出版を了じたり。大正二年出版の『新譯法華經』の序に具にこの事を記せり。このケールン訂正の『法華經』が更に歐文に譯せらるるの日は蓋し遠きに非ざるべし。尙佛人フューの出版したる梵文の信解品一卷あり、及び英人ワイリーの北京に得たる木版の梵經帖中の普門品ありて頗る歐洲に珍重せられ居ると云ふ。我が日蓮上人の預言せし佛法西漸の機已に熟したるなる歟。大に喜ぶべきことなり。

第四 支那の傳弘

『法華經』が支那に翻譯せられてより、特に羅什が『妙法華』を翻譯してより以後は、支那の佛教は忽ち『法華經』勅典の時代となりて、或は之を誦して自行となし、或は之を講じて化他と爲すもの、

其の傳弘の諸師實に夥しく、『高僧傳』卷十二、誦經第七の下に擧げたる釋曇邃以下二十一人の中、十七人は皆『法華經』の持者なるをみて其の一斑を知るべし。『法華新注』の無盡傳燈の序には天台以前六朝の閉、諸師競うて法華の註疏を作り、その數七十餘人に及びたることを記せり。六朝は晉、宋、齊、梁、周、隋の代にして、羅什の『妙法華』を翻譯したるは姚秦の弘始七年、即ち晉の安帝の義熙元年なり。其後十六年にして晉亡び、宋の代五十九年、齊の代二十三年、梁の代五十四年、周の代二十五年にして隋に移れり。その周、隋の閉は天台已に盛に『法華』を傳弘し居たれば、羅什と天台との閉は百五十年を踰えず。この閉に七十餘人も『法華經』の註疏を作れるもの續出したることはその盛況實に想ふべし。然るにその註疏は今日已に淪亡に歸するもの多く、七十餘人の誰誰なるやを擧ぐること能はざれども『高僧傳』に據れば左の諸師各皆法華の註疏を作りたること明かなり。

竺法崇(『法華義疏』、四卷)。釋道融(『法華疏』、卷數未詳)。釋曇影(『法華義疏』、四卷)。釋僧叡(『法華序』、九轍)。竺道生(『法華疏』、卷數未詳)。釋慧觀(『法華宗要』、卷數未詳)。釋僧含(『法華宗論』、卷數未詳)。釋梵敏(『法華要義百科』、卷數未詳)。釋僧鏡(『法華義疏』、卷數未詳)。釋法珍(『法華義疏』、卷數未詳)。釋慧基(『法華義疏』、三卷)。釋法雲(『法華義疏』、八卷)。釋智藏(『法華義疏』、卷數未詳)。釋寶瓊(『法華疏』、卷數未詳)。釋智方(『法華序王』)。釋吉藏(『法華義疏』、十二卷、『法華玄論』十卷等)。この中釋法雲は光宅寺に居したれば通稱光宅と云へり。『高僧傳』には七十家中の第一と嘆稱せり。その『義疏』は今尙ほ傳へり。又吉藏は即ち嘉祥大師と云はるる人にて、世に百部の記主と稱し著述最も多し。『高僧傳』には『玄論』、『義疏』の二書を出だしあれども、尙ほ『法華經遊意』二卷、『法華經

統略六卷等あり。又天親の『法華論』を釋せる『法華論疏』三卷あり。此等皆謂はゆる天台以前の七十餘人なること論亡し。

又註疏家として劉虬なる居士ありたり。和本の法雲の『法華義疏』の序に鳳潭この居士のことを叙して曰く、

昔者姚秦の什公親く妙經を震旦に翻じ、上足僧禮創めて九藏を開し、叡、生等林立し、諸曹相繼で著作あり、齊の時に在りて劉虬居士、十名の僧と共に、務めて輿師の異言を措ひ、撰して注法華を爲る。梁の初に逮んで、光宅法師、師として中興を受け、獨り雄匠爲り。云云。

上は羅什門下の駿逸たる融、叡等を逐ひ、下は七十餘人の第一たる光宅の法雲と角べて、併せて美名を千載に馳する居士は實に非凡と言ふべきなり。居士の傳は『廣弘明集』卷十九に齊の文宣公より居士を請する書簡を載せ、其の前後に居士一生の行狀を附せり。又居士は『法華經』の序分『無量義經』の講説にも努め、その著に『無量義經序註』と題するものあり。

是の如く僅僅六朝百五十年間に多數の註疏家、講説家の續出したることは眞に『法華經』の勃興時代なることを證せるものなれども、然れども此等の人人、總じて通大乘の義にして『法華經』の優越なる異點特色を發揮したるものは幾ど鮮し。概して皆『涅槃』若くは『華嚴』に依りてこれを宗旨の本と爲し、その宗旨より翻つて『法華經』を講説したるものなれば、『法華經』の位置は反つて『涅槃』

若しくは『華嚴』の下に在り。一例を擧ぐれば、今云へる劉虬居士の如き、彼は『涅槃』を最勝とする宗旨の一人なるが故に、『無量義經序註』の中に於て諸經の七階を立て、『法華經』を第六階と爲し、『涅槃經』を第七階と爲して、『法華』は『涅槃』に劣れりと判じたり。七十餘人の第一たる光宅の法雲も亦居士と同じく『涅槃』勝『法華』劣の說なり。他は推して知るべし。故に『法華』一經を以て純ら宗旨と爲し、『法華』最勝の義を主張したるものは唯天台一人のみにして、その以前は『法華經』の『法華經』たる所以未だ曾て世に顯れざりしなり。

天台以後は其の義に醇化せられて人人漸く『法華』最勝の旨を領得するに至れども、而も法相・眞言の二宗新に興りて亦各自其の宗を以て『法華經』を判じ天台の義に反せり。法相の窺基(慈恩)の著したる『法華玄贊』の如き、名は『法華』を贊して實は『法華』を死せり。亦眞言の如きは『法華』『大日』二經理同と稱して而も顯密の勝劣を判ずるには全く『法華經』を顯劣の地位に貶したり。一行の『大日經義釋』即ち是れなりと爲す。

之を約するに支那に於ける『法華經』の傳弘は應さに三代期に分かつべきものにして、第一期は六朝の前期時代、即ち天台以前の七十餘人の傳弘、第二期は六朝の後期時代、即ち周・隋(隋陳)の間に於ける天台の傳弘、第三期は唐時代、即ち窺基、一行等の傳弘なり。この中第一期は涅槃宗華嚴宗等を本と爲し、第三期は法相宗眞言宗を本と爲したるものなれば異系なり。中間の第二期は法華宗の正系

なり。宋元以下は概ね皆この正異二系の餘脈支流たるに過ぎず。

第一期、六朝前期時代「涅槃宗」七十餘人——異系

第二期、六朝後期時代「法華宗」天台 正系

第三期、唐時代——「法相宗」窺基「真言宗」一行「異系

異系は且らく之を略して今第二期の正系即ち法華宗の天台に就てその概要を述べんに左の如し。

【一、天台の畧傳】天台諱は智顛、字は徳安、姓は陳氏、父の名は起祖、母は徐氏、荊州の華容に

生る。幼名は王道、又光道とも云ふ。七歳の頃より好んで寺院に遊ぶ。寺僧試みに『法華經』の普門

品を口授せしに、一遍にして直ちに誦んず。十八歳湘州果願寺の法緒に就て出家。慧曠に從つて學ぶ。

二十三歳大蘇山の慧思に詣り法華三昧を修習し、大悟是の時に發す。慧思は世に南岳大師と稱す。三

十歳法喜等二十七人を率ゐて陳の金陵に移り、瓦官寺に駐まりて八年閒大に法鼓を鳴らす。陳の宣帝

歸依甚厚し。三十九歳天台山に入り佛窟に居る。已にして陳の少主の懇請に因りて再び金陵に還り

太極殿に『智論』及び『仁王般若』を講ず。又晉王廣(後に隋主と爲る煬帝なり)に菩薩戒を授く。是の時晉王廣、

師を稱して智者と呼ぶ。天台を智者大師と云ふの親なり。晉王廣更に師の爲めに荊州當陽縣の玉泉山

に一字を創す。勅額して一音寺と號す。後に玉泉寺と改む。『法華玄義』及び『止觀』の講説是の寺に於てす。已にして復天台山に入る。隋の開皇十七年十一月二十四日寂す。春秋六十七、著す所の書は

『淨名疏』二十八卷（通稱廣本淨名經疏）、『淨名玄疏』六卷（又淨名玄）、『金光明玄義』六卷、『仁王疏』三卷、
『梵網菩薩戒經義疏』二卷、『六妙法門』二卷、『禪門要略』一卷、『四教義』十二卷、『三觀義』二卷、『觀心
論』一卷、『五方便』二卷、『淨土十疑論』一卷、『小止觀』一卷、『覺意三昧』一卷、『法華三昧』一卷、『法
界次第』三卷等なり。亦『法華玄義』、『法華文句』、『摩訶止觀』各十卷あり。師の講説にして門人章安
之を筆す。之を天台の三大部と稱す。即ち一宗の要典なり。寂後追諡して法空實覺尊者と云ふ。宋の
靈雲帝更に靈慧大禪師と加諡す。凡そ一生の行狀は章安の『智者別傳』一卷あり。その他『續高僧
傳』卷二十一、『佛祖統紀』卷六等に亦傳あり。看るべし。

【二、法華宗名】正系の傳弘たる天台の法華宗は具さに云へば法華經宗、更に具さに云へば妙法蓮
華經宗なり。以てその『法華經』を宗旨と爲すことを標榜す。然るにこの宗名は支那に於ては天台以
前に已に舊くあり。羅什の門人慧觀の作れる『法華宗要序』は、恐らくは是れ其宗名の初めなるべし。
この『法華宗要序』のことは『高僧傳』卷七に看え、全文も今日まで傳はりて、僧叡の『法華經後序』
と與に並べて雙璧の美文と稱せらる。（『出三藏記集』。又南宋の文帝の時代に僧含の『法華宗論』なる書
あり。『高僧傳』卷八慧基の條、同く僧印の條に亦法華宗の名を記せり。然れども一家を成したるに於
ては天台實に其の祖爲り。故に又天台宗と呼べども正しき宗名は法華宗なるべきなり。

【三、宗脈祖承】法華宗は天台其の祖爲りと雖も、而も亦自ら由來するところ莫きに非ず。之を宗

脈と云ひ、祖承と云ふ、此に二十三祖の祖承と四師の祖承とあり。二十三祖の祖承といふ、

- 【三】迦葉——(B)阿難——(五)商那和修——(六)優婆塞多——(七)提多迦——(八)彌迦迦——(九)佛
- 陀難提——(10)佛駄蜜多——(11)枳比丘——(11A)富那夜奢——(11B)馬鳴——(12)迦毘摩羅——
- 【15】龍樹——(16)迦那提婆——(17)羅睺羅——(18)僧伽那舍影——(100)鳩摩
- 羅多——(111)闍夜多——(111A)婆修盤駄——(111B)摩拏維——(112)鶴勒夜那——(113)師子——

已上二十三人なり。この二十三人は釋尊の後相踵で印度に佛教を弘めた
 人にて之を付法藏の二十三祖と稱せり。この中商那和修の同時代に
 (三六)末田地あり、若し之を加ふれば二十四祖なり。この付法藏の二十三祖
 のことは『付法藏因緣傳』に詳に記せり。(六卷の本と七卷の本とあり、元魏の代、
 吉迦夜、曇曜二人共譯)

次に四師の祖承とは、
 龍樹——慧文——慧思——天台

この四人なり。天台一家としては正しくこの四師の祖承なれども、先づ
 二十三祖を言ふに非ざれば龍樹の人と爲りを顯すに由無し。故に一往二十
 三祖の祖承を立て、而して後別して四師の祖承を列するなり。此等のこと

- 【三】 Mahākāśyapa.
- 【四】 Ananda.
- 【五】 Śākyasiṃha.
- 【六】 Uśākin.
- 【七】 Dīpaṅka.
- 【八】 Mīdāka.
- 【九】 Brahmadatta.
- 【10】 Brahmadatta.
- 【11】 Pārśva.
- 【11A】 Pūrvaśākyaputa.
- 【11B】 Pūrvaśākyaputa.
- 【11C】 Asthiraśākyaputa.
- 【11D】 Kappināsa.
- 【11E】 Nāgārjuna.
- 【11F】 Kāśyapa.
- 【12】 Kaśyapa.
- 【12A】 Śākyasiṃha.
- 【12B】 Śākyasiṃha.
- 【12C】 Śākyasiṃha.
- 【12D】 Śākyasiṃha.
- 【12E】 Śākyasiṃha.
- 【12F】 Śākyasiṃha.
- 【12G】 Śākyasiṃha.
- 【12H】 Śākyasiṃha.
- 【12I】 Śākyasiṃha.
- 【12J】 Śākyasiṃha.
- 【12K】 Śākyasiṃha.
- 【12L】 Śākyasiṃha.
- 【12M】 Śākyasiṃha.
- 【12N】 Śākyasiṃha.
- 【12O】 Śākyasiṃha.
- 【12P】 Śākyasiṃha.
- 【12Q】 Śākyasiṃha.
- 【12R】 Śākyasiṃha.
- 【12S】 Śākyasiṃha.
- 【12T】 Śākyasiṃha.
- 【12U】 Śākyasiṃha.
- 【12V】 Śākyasiṃha.
- 【12W】 Śākyasiṃha.
- 【12X】 Śākyasiṃha.
- 【12Y】 Śākyasiṃha.
- 【12Z】 Śākyasiṃha.
- 【13】 Manu.

は『摩訶止観』卷一及び『弘決』卷一に示せり。その『弘決』に曰く、

南岳を以て父師と爲し、慧文を祖師と爲し、龍樹を曾祖師と爲す。乃至、今家亦龍樹を以て始めと爲す。是故に智者は指して高祖と爲す。

是れ天台より仰で龍樹を高祖と爲し慧文慧思順次に祖承を列して宗脈の由來系統を立つるなり。この四師の祖承に於て天台一家の教相及び觀心の二門は興れり。教相とは四教五時の判釋なり。この教相門に依りて『法華』最勝の義を顯す。觀心とは一心三觀の觀法なり。この觀心門に於て『法華』の妙行を立つるなり。

【四、其の觀心門】觀心門の起因は遠く龍樹の『中觀論』を本と爲す。彼論の四諦品の偈に曰く、
因縁より生ずる所の法をば、我れ即ち是れ空なりと説く、亦名けて假名と爲す、亦是れ中道の義なり、

この一偈に空と假と中道との三を示せり。是れ即ち空、假、中の三諦なり。諦とは眞實不虛の理を稱する詞にして眞理と云ふに同じ。この空、假、中の三は一切萬法の眞理なるが故に三諦と名くるなり。空は一切萬法の平等性なり。假は一切萬法の差別相なり。中は一切萬法の根本體なり。この三諦の外に一切萬法とはあらぬなり。釋尊一代の説法も概してこの諦理を明らむるに過ぎず。然るに其の説法一準ならず。或は空諦の一面のみを説けるあり。或は假諦の一面のみを説けるあり。或は中諦の一面のみを説けるあり。或は三諦を説きても三諦隔別なるあり。即ち空、即ち假、即ち中の三諦圓融を説

- 【一】 Hakamanyaya.
- 【二】 Shinan.
- 【三】 Foddokyerincha.
- 【四】 Mudyganika.

論中より一本を執るに龍樹の『中觀論』を得たり。是に於て潛思沈想懇懃にこれを讀み、前に引ける四諦品の偈に至りて豁然として大悟し、頓に一心三觀の妙旨を領す。この事慈覺の『私記』に看えたり。慧文の事蹟多く世に識られず、『佛祖統紀』卷六に簡單の傳あり。

祖承の第三師慧思即ち南岳は陳の代の人にして、幼少にして出家し、『法華經』を誦すること一千反、後慧文に從つて觀心を受け、光州の大蘇山に留まり、徒衆を聚めて化を盛んにす。天台に一心三觀を授けたるは此際なり。その後衡陽の南岳に入りて居ること十年。南岳大師の稱はこれに由る。その間一たび陳の宣帝の召に應じて下山したることあれども直ちに復山に還れり。大建九年(建德六年)六月二十二日六十四歳にして寂す。『續高僧傳』卷七、『佛祖通載』卷十、『佛祖統紀』卷六等に其傳あり。又藏經(北藏起)の中に『南岳思大禪師立誓願文』あり、是れ慧思自身の書きたる一篇の願文にて、その前半は殆ど自叙傳なり。『四十二字門』三卷、『無諍行門』二卷、『釋論玄』二卷、『隨自意』一卷、『次第禪要』一卷、『三智觀門』一卷、『安樂行儀』一卷等の著あり。就中『安樂行義』は『法華』の觀法に關して最も重要なるものなり。

祖承の第四師天台は大蘇山に於て南岳に從つて一心三觀を受け傳へたるより後人は之を大蘇の妙悟と云へり。『續高僧傳』(七)の南岳の傳に據れば、天台、大蘇山に於て南岳より觀法を修習する當時、師の南岳に代り徒衆の爲めに『大品般若』を講じ、一心具萬行の文に至りて、忽ち一の疑を生じて之を

南岳に質せしに、南岳答へて、汝が疑ふ所は此れ乃ち「大品」の次第の意なる耳、未だ是れ『法華』圓頓の旨ならずと云ひたり。『法華』の一心三觀を傳へたるは茲時なりと云ふ。而してこの一心三觀を傳ふるに三種の止觀あることを以てせり。三種の止觀とは、一に漸次止觀、二に不定止觀、三に圓頓止觀なり。止（奢摩他 Samatha）は萬境を寂默ならしむるを謂ひ、觀（毘婆舍那 Vipassana）は諸法を照了ならしむるを謂ふ。この止觀に漸次と不定と圓頓との三種の別を立てて以て天台に傳へしなり。漸次とは初めは淺く後は深く漸次に進むの止觀なり。不定とは時に或は漸・時に或は頓、或は初めに深く、或は後に淺く、敢て觀相を一定せざるの止觀なり。圓頓とは初めより諸法實相の三諦圓融の妙理を觀じて初後淺深を立てざるの止觀なり。漸次は次第行なり。圓頓は不次第行なり。中間の不定は次第不次第不定行なり。この三種の止觀は何れも三諦を觀する實相觀なるもの方法なり。即ち實相觀の漸次、實相觀の不定、實相觀の圓頓なり。而してこの三種の止觀に於ては他の諸大乘經に説けるところをも一一に『法華經』の旨に結歸し會入せしめて皆『法華』の觀心の答歸と爲す。此を止觀の妙解と云ふ。故にこの止觀の妙解の下には諸大乘經の三種の次第、不次第等の行すべて皆『法華』の圓頓の一心三觀ならざるは莫きなり。この妙解に由りて更に一念三千の妙行を立てて之を『法華』の正觀と定む。即ち止觀の妙行是れなり。言はゆる大蘇の妙悟は正しくこの一念三千の妙行正觀にして、天台の觀心門はこの一念三千を究竟と爲す。要するに一念三千は一心三觀を尅證したる『法華』

の觀法なり。「摩訶止觀」卷五に曰く、

夫れ一心に十法界を具し、一法界に又十法界を具すれば百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば、百法界に即ち三千種の世間を具す。此三千は一念の心に在り。

一心とは行者の一心なり。十法界とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛の善惡迷悟の界なり。この十界ごとに各他の九界を具有するが故に百界なり。又一界ごとに三十種の世間を具有するが故に百界なれば三千種の世間なり。この三千全く吾等の一念に具有して森羅の諸法皆一心の不可思議境界なり。この一心の不可思議境界を觀する是れ即ち一念三千の妙行正觀なり。三十種の世間とは、凡そ佛教には宇宙間に在らゆる有情、非情、一切の物を三種の世間に攝す。世は隔別の義、間は開差の義、各各形類を異にし彼我隔別して互に開離交差せるが故に世間と云ふ。三種とは衆生世間と五陰世間と國土世間と云ふ。衆生、五陰の二世間は有情界なり。國土世間は非情界なり。人類の多數聚合して一社會を爲せる如きは衆生世間なり。その個人個體は五陰世間なり。五陰とは一に色(Rupa)、四大五根の形色なり。二に受(Valana)、色、聲、香、味、觸の他境を感受する眼、耳、鼻、舌、身の苦樂なり。三に想(Samita)、他境を感受するに由りて起すとこの善惡の分別の念想なり。四に行(Anikata)、分別の念想に由りて更に未來の果に趣行するなり。五に識(Vinnana)、是れ眼、耳、鼻、舌、身、意の心識にして三世の善惡の體なり。初の色は形なり。後の受以下は意

り。即ち色と心との二法なり。之を陰(五kanjin)と云ふは業を名けて陰と爲す。業とは善惡の業作なり。亦蘊と云ふ、積聚の義なり。個人個體に皆この五種の業蘊あるなり。國土世間はこの衆生、五陰の依止し住居する國土にして、山河大地、日月星辰、乃至草木等の一切の非情の物なり。尅して言へば十界の衆生各各不同なるは衆生世間なり。衆生の五陰各各不同なるは五陰世間なり。衆生の國土各各不同なるは國土世間なり。佛教はこの三種の世間を立てて一切の物をこの中に攝收す。而して此の三種の世間に一一皆相と性と體と力と作と因と縁と果と報と本末究竟との十如是なるものあり。『法華經』の方便品に説けるが如し。故に一界ごとに三十種の世間となり、百界にして三千の數を成す。即ち三千は一切の物と云ふに同じきなり。

抑も『法華經』以外の各大乘經に説くところの觀心は唯一心に萬法を具有することを觀するに在り。若しそれを以て足ると爲さば『大品般若』に對する天台の疑は曾て生ぜざるべし。又南岳は『大品般若』を排して未だ是れ『法華』圓頓の旨ならずと言はざるべし。故に天台が一念三千の名數を立てて『法華』の妙行と爲したるは即ち『法華』の觀心と諸大乘經の觀心と頗異なる所以を明かにしたるものなることを識らざる可からず。然るを世の多くの學者は天台の一念三千に『華嚴經』の心如工畫師の文を引けるを視て、一念三千は『法華經』以外の『華嚴經』にもその義ありと念へり。此は是れ三種の止觀を以て各大乘經を『法華』圓頓の旨に結歸會入せしむる妙解の意に由るものなることを

識らざるが故なり、之を要するに『法華』の觀心たる圓頓の一心三觀は天台の止觀の一念三千に於て方めて究極せられたるなり。故にその究極せられたるの功を言へば天台は前の三師にも愈ざりて天真獨朗と稱せらるることを得るなり。

【五、其の教相門】次に天台の教相門たる四教五時の判教は前の觀心門の如く祖承甚だ明確ならずして、南岳に四教の判ありや無しやを疑ふ者すらもありしなり。然れども妙樂は『弘決(二卷)』に明にそのこれありしことを記せり。南岳のみならずその以前の祖承の師に亦皆この意ありしなり。

抑も天台の教相門たる四教五時は畢竟『法華經』の最勝を顯示するが爲めの一代判教なり。南岳等の祖師にして已に『法華』を最勝と爲すの旨あるからは、縦ひ明確に四教五時の名目を立てざるも、その旨は即ち四教五時の判教の意に渝はれるに非ず。要は『法華經』を以て最勝と爲すの點に於て亦その教相門の祖承を立つることを得るなり。

第一に高祖龍樹は『大智度論』一百卷を造つて『般若經』を釋し、而して最後に『般若』と『法華』との勝劣を判じて曰く、

問て曰く、更に何の法か甚深にして般若よりも勝れたる者あつて、而も般若を以て阿難に囑累し、餘經を菩薩に囑累するや。答て曰く、般若波羅密は祕密の法に非ず、而るに法華等の諸經には阿羅漢の受決作佛を説き、大菩薩能く受持し用ふ。譬へば大藥師の能く毒を以て藥と爲すが如し。

是れ龍樹は『法華經』を以て最勝と爲すの旨たること一見して甚だ明かなり。但し法華等と云ひたるは『法華』の後の『涅槃經』及び『法華』部に屬する諸經を指すなり。何となれば『法華』以前には曾て阿羅漢の受法作佛を説かざればなり。而してその『涅槃經』等も阿羅漢の受法作佛に就ては全然功を『法華』に譲れり。故に同經(北)卷九如來性品に曰く、

是の經の世に出づるは彼の果實の如し、利益する所多くして一切を安樂ならしめ、能く衆生をして佛性を見せしむ。法華の中の如きは、八千の聲聞、記別を受くることを得て、大果實を成ぜり、秋收冬藏更に所作無きが如し。

『涅槃』自ら果實に比べて而して『法華』を大果實と稱したるに深く留意すべし。その大果實たる所以は即ち阿羅漢の受法作佛正しく『法華』に在るが爲めなり。龍樹の『大智度論』はこの經意に由りて『般若』を劣と爲し『法華』を勝と爲し以て『法華』の最勝なる所以を示したるなり。

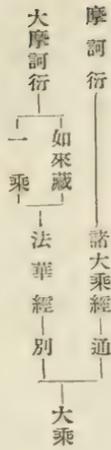
第二祖の慧文師は別に文書の徵すべきもの無けれども、既に龍樹を師宗と爲したる人なることは前の觀心門に云ひたる如くなれば、亦龍樹と同旨なること推して知るべし。

第三祖の南岳師は其著『安樂行義』の中に『妙法蓮華經』は是れ大摩訶衍なり、衆生教の如く行せば自然に佛道を成ず」と云ひたり。言はゆる大摩訶衍とは諸の大乗經の中に更に勝劣を判じて『法華』を獨り眞實極大の摩訶衍(Mahayana)と定めたるにて、即ち大乘と大大乗との異目を以て諸經と『法華』とを別ちて『法華』の最勝なる所以を標顯したるなり。是の如きは六朝前期の七十餘家中曾て看

ざるの大斷案だいだんあんなりと爲す。『安樂行義』の次下に曰く、

云何なるを名づけて妙法蓮華經と爲すや。云何なるを復た一乘の義と名づくるや。云何なるを復た如來藏と名づくるや。云何なるを名づけて摩訶衍と爲すや。云何なるを復た大摩訶衍と名づくるや。小品經に説くが如くんば、摩訶はたとひ云ふ。衍は乘と名づく、亦は到彼岸と名づく。云何ぞ更に大摩訶衍なるもの有らんや。

摩訶衍の外ほかに更に大摩訶衍なる名目を『法華』に付するに付て世人の疑惑有るべきを豫想して代つて先づこの自問を設け、以下具さにその所以を答釋せり。今その論旨の歸するところを圖表すれば左の如し。



この南岳の摩訶衍、大摩訶衍の判別も淵源遠く龍樹に在り。前に引ける龍樹の『大智度論』の『般若』劣『法華』勝の次に曰く、

般若に二種あり、一者聲聞に共して説き、二者但大菩薩の爲に説く。乃至、般若波羅密の總相は是れ一なれども、而も淺深異有り。是れ般若に淺深の二種あることを示したるなり。言はゆるその深般若は即ち『法華經』を指すこと上の阿羅漢の授決作佛等の文に連續してその意明かなり。而して般若波羅密（Pratyparamita）の波羅密は度と翻す。度は到彼岸の義、即ち亦乘の意と同じ。故に淺深の般若波羅密と云へば隨つて大乘大

大乘の二種の義を生ず。これに由りて南岳の此の摩訶衍、大摩訶衍の名目は起れるなり。

是の如く「法華」最勝の義は三祖の旨なるが故に天台之を祖承して遂に四教五時の判教を立て以て一家の教相門を成立したり。四教五時のことは天台自ら「四教義」十四卷を著し、其外「玄義」「文句」「止觀」の三大部に處處に散説せられ、随つて後人の之に關する選述亦甚多し。就中高麗の諦觀が書きたる「天台四教儀」(諦觀錄)は簡にして要を得、尤も廣く世に行はる。

便宜上先づ五時を云へば、天台は釋尊一代五十年の説法を大判して左の五時と爲す。

第一時 華嚴 第二時 阿含

第三時 方等 第四時 般若

第五時 法華涅槃

第一華嚴の時とは、釋尊十九歳にして出家、三十歳にして成道、その成道せし菩提樹下に於て三七日の閒利根の菩薩の爲に「華嚴經」を説かれし時を云ふ。

『華嚴』は具に大方廣佛華嚴經 (Mahāvairocana-sūtra) と云ふ。華嚴は雜華嚴飾の略語。此經の法門は種種の雜華を以て嚴飾せられたる如く美妙なるが故に喩を借りて經に目づけたり。支那には此經三本あり、覺賢 (Buddhānanda) 譯六十卷、實叉難陀 (Silananda) 譯八十卷、般若三藏 (Pratyak) 譯四十卷なり。

第二阿含の時とは、華嚴の後波羅奈國 (Varanasi) 鹿野苑に於て鈍根の二乗に對して小乗の「阿含」を説かれし時を云ふ。亦處に約して鹿苑の時とも云へり。この期間は十二年なり。

『阿含』は支那に教法と譯し、又傳とも譯せり。(三七) 四『阿含』あり、『增一阿含』二十二卷、『長阿含』五十卷、『中阿含』六十卷、『雜阿含』五十卷、合せて一百八十二卷なり。

第三方便の時とは、前の阿含十二年の後、『維摩』(二五)、『思益』(三〇)、『楞伽』(三三)、『楞嚴』(三四)、『金光明』(三五)、『勝鬘』等の諸大乘經を説かれし時を云ふ。この期間八箇年と云へる説と、別に年數を云はず後の

第四般若の時と通じて汎爾に三十年と云へる説とあり。

方等(Varuṣa)とは方廣平等と熟字して大乘を云ふ。天台が別してこの第三の時を方等と名けたる所以は前の阿含の小乘なるに對してなり。『維摩經』は三卷、『思益經』は四卷、『楞伽經』は四卷と七卷と十卷と三本あり、『楞嚴經』は三卷、『金光明經』は四卷と八卷と十卷と三本あり、『勝鬘經』は一卷なり。此等は、この方等部中の主なるものにして、尙此部に攝するの經頗る多し。計ふるに違あらず。淨土の三部經の如きは亦この方等部の攝なり。

第四般若の時とは、方等の後に於て一切皆摩訶衍なることを示し大小二乘融通の教を説かれし時を云ふ、上方等は大乗なれども小乘に相對して小乘を斥ひ大乘を褒む、この般若は小乘を大乘に歸攝せしめて其の差別を撥ふ、故に般若を法開會とも云へり。

般若(Prajñā)は支那の譯に多くの異解あり、或人(安法師)は『放光般若經』卷二十二に據つて清淨と翻じ、又有人(敦法師)は『大般若經』卷六無生品に據つて遠離と翻じ、或は『六度集經』に據つて明度と翻じ、或は『大智度論』卷七八に據つて慧と翻じ、又同論卷四十三に據つて智慧と翻ぜり。慧琳の『音義』卷十二には慧と智慧と同じと云ひ、『瑜伽論記』卷九には智の梵語は若那

- 【一七】 (1) Anguṣṭhara (2) Dīgha
- 【一八】 Maḍḍima (4) Saṃyutta
- 【一九】 Ariya pañcaviṅśatī-pariprocchā
- 【二〇】 Laṅkāvatāra
- 【二一】 Sūtrāṅga
- 【二二】 Svapṇapraśaṅga
- 【二三】 Śrīmad-viśvavajra-kāvya
- 【二四】 Sūtra

(12)にして慧の梵語は般若なれば慧と智慧と同からずと云へり。然れども多くは智慧の翻に従ふなり。又玄奘は智慧の詞は世間に慣用せられて輕淺なれば五種不翻の一として般若の原語をその儘に用ふ可しと云へり。この部の經は玄奘譯の『大般若經』(Mahāpañcāśatikāstra)最も完備せられ、その以前に譯出せられし『大品』等の般若の諸經は皆その一部分なり。即ち『大品』、『放光』、『光讚』の三般若經は『大般若』十六會の中の第二會なり。『小品』、『道行』、『新道行』、『大明度』の四般若經は同くその第四會なり。『勝天王般若經』はその第六會なり。『文殊般若經』はその第七會なり。『金剛般若經』はその第九會なり。

第五法華涅槃の時とは、『法華經』と『涅槃經』とを同じく眞實大乘經として二經を同時と定むるなり。『法華』は『般若』の後八箇年の閉之を説き、『涅槃』は『法華』を説き了りて一日一夜之を説く、臨滅度の遺經なるが故に『涅槃經』と名く、最後の經なり。天台の意は二經同じく眞實大乘經にして同時同味なれども、尙その中に勝劣を判する時は『法華』勝『涅槃』劣なり。然れども是れ同一部中の勝劣のみ。若し他の大乘に對比する時は二經は同じく眞實大乘なるなり。この第五時の法華涅槃に於て方に釋尊の本懷を顯し一代五十年の化事を成就満足せるなり。

涅槃(Nirvāṇa)は支那に滅度と翻す。其には般涅槃那(Pāṇinivāṇa)。之を普究竟出離煩惱結と翻ずるも亦滅度の義に外ならざるなり。涅槃經は支那譯に『大涅槃經』(Mahāpāṇinivāṇa-sūtra)と題して、これに北本と南本とあり。北本の譯者は曇無讖、北涼の代に譯出せるを以て北本と云ふ、四十卷あり。南本の譯者は慧觀、慧嚴の二人、南宋の代に譯出せるを以て南本と云ふ。三十六卷あり。尙その異譯若くは支本と云ふべきもの左の如し。

『佛說大般泥洹經』六卷 法顯譯。

『大悲經』五卷

那連提耶舍譯。

『大般涅槃經』三卷 法顯譯。

『四童子三昧經』三卷 闍那崛多譯。

『大般涅槃經後分』二卷 若那跋陀羅譯。

『方等般泥洹經』二卷 法護譯。

『般泥洹經』二卷 失譯。

『佛般泥洹經』一卷 白法祖譯。

『佛臨涅槃法住經』一卷 玄奘譯。

『佛遺教經』一卷 羅什譯。

この中に『佛遺教經』及び法顯譯三卷の『大般涅槃經』の如きは小乗の部なれば、『法華』と同時に『大涅槃經』の異譯若くは支本と云ひ難きも、天台已に釋したるが如く、『涅槃』は追説追浪にして、曾て説ける大小乗の教法を復び追つて之を説き而して更に追つて之を汎して、結句『法華』の一乘に歸入せしめたるものなれば、追説の分には『阿含』小乗の義も本より之れあるなり。その小乗の義を説ける一邊を抄出して別行の一本として古く印度に流行せしめたるを以ての故に、涅槃部中『佛遺教經』等あるに至りたり。故に『佛遺教經』も亦『大涅槃經』の支本と稱すべきものなり。然れども其已に別行の本となりたる上からは教意全く小乗なれば『佛遺教經』の如きは第五時に攝せずして第二時阿含小乗の部に屬せしむ。此を義類の攝屬と稱す。尤も『佛遺教經』は小乗ならずと云へる異説もあれど、天台としては然らざるなり。尙釋尊入滅以後の經あり。左の如し

『佛滅度後棺斂葬送經』一名『比丘師教經』 失譯。

『般泥洹後灌臘經』 法護譯。

此は前に掲げたる『涅槃後分』に連續して看るべきの經なり。

『法華』の異譯支本等は前に已に云へり。

以上の五時は天台の教相門に於ける一代大判と稱するものなり。これを五味とも云ふ。五味とは乳、酪、生酥、熟酥、醍醐なり。『大涅槃經』卷十三聖行品に曰く、

是の諸の大乗方等經典は復無量の功德を成就すと雖も、是經に比べんと欲するに喩を爲すを得ず。百倍千倍百千萬億倍乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる故なり。善男子、譬へば牛より乳を出だし、乳より酪を出だし、酪より生酥を出だし、生酥より熟酥を出だし、熟酥より醍醐を出だしが如し、醍醐は最上なり。若し服すること有る者は、衆病皆除く。所有諸の藥悉く其の中に入る。佛も亦是の如し。佛より十二部經を出だし、十二部經より修多羅を出だし、修多羅より方等經を出だし、方等經より般若波羅密を出だし、般若波羅密より大涅槃を出だし、猶醍醐の如し。

乳は十二部經即ち華嚴、酪は修多羅即ち阿含、生酥は方等、熟酥は般若、醍醐は大涅槃即ち法華涅槃同一醍醐味なり。天台は正しく此文に據りて五時の大判を立てたるなり。而してこの五時の化儀の次第は『法華』の信解品等に分明なれば天台の五時は釋尊の金口に基く。敢て私家自立と言ふ可からず。

この五時の中、第一時華嚴は大乗なり。第二時阿含は小乗なり。第三時方等、第四時般若、第五時法華涅槃は亦俱に大乘なり。大乘の中、華嚴方等般若の三時を權大乘と爲し、獨り第五時法華涅槃を以て實大乘と爲し、特に『法華』一經をその醍醐の正主と爲す。是れ天台五時大判の大綱なり。次に四教とはこれに化儀の四教と化法の四教とあり。故に四教五時をば亦是五時八教とも云ふ。化儀とは

- 【一】 Kṣīra
- 【二】 Duddhī
- 【三】 Sarpinīmūṭṭa
- 【四】 Ghṛta
- 【五】 Sarphimūṭṭa

教化の儀式なり。化法とはその教化の法體即ち教法の實質なり。喻へば化儀は醫藥を調劑する方法の如し。化法はその藥品の如し。化儀の四教とは一に頓、二に漸、三に祕密、四に不定なり。頓とは次第に由らずして直ちに大乘を説くなり。漸とは漸次に衆生の機根を調養して小乗より大乘に導き教ふるなり。即ち五時の第一時華嚴は頓教、第二時阿含以下は漸教なり。之を大小二乗に配せば大乘は頓教、小乗は漸教なり。更に大乘の中に頓漸を云へば華嚴は頓大乘、方等般若は漸大乘なり。祕密と不定とは語互に略せり。具さに云へば祕密不定と顯露不定となり。祕密不定とは或は此處に於て此の人の爲めに大乘を説き同時に又彼處に於て彼の人の爲めに小乗を説きて彼此互に相知らしめざるなり。顯露不定とは同一座席に於て彼此の聞法得益同じからしめざるなり。之を化儀の四教と云ふ。化法の四教とは一に藏、二に通、三に別、四に圓なり。藏とは經、律、論の三藏なり。三藏の名は大小乗に通ずれども今は別して小乗の三藏を指す。即ち第二時阿含に説く所の教なり。通とは大乘小乗の機類俱に通じて稟くるところの教なり。別とは別して大乘の菩薩稟くるところの教なり。圓とは圓融の妙理を説ける教なり。第一時華嚴は別圓の二教なり。第三時方等は藏通別圓の四教なり。第四時般若は通別圓の三教なり。この化儀化法の八教と法華との關係を云へば、化儀の四教は法華以前の四時四味の諸經に之を談じて法華に及ぼさず。故に『諦觀錄』には華嚴より般若までの前四時の間に化儀の四教を録し、而して化儀の四教は此に齊ると云ひたり。次に化法の四教の圓教に法華を攝するや否や

は古來の評論なり。然れども天台の本意としては法華は四教の中の圓の外と云ふべきが當れり。即ち化儀化法俱に法華以前の教に約するなり。故に妙樂の「記」(卷)に曰く、

若し超八の醍醐に非ずんに安んぞ此經の所聞と爲さんや。

超八の醍醐とは化儀化法の八教を超絶したる醍醐の法華なりとなり。日本の天台宗の祖師傳教の「守護國界章」(卷上)に曰く、

其の八教とは但前四味に立つ、第五時に涉らず。法華涅槃は第五時に攝す、何ぞ八教に攝せんや。

この論斷や明快なりと云ふべし。故に法華以前の華嚴等に何かに玄妙の圓理を説くも、天台宗としては全く法華に同すべきに非ず。各大乘經の圓は八教の中の圓、法華の圓は超八の圓、言はゆる般若と深般若となり。摩訶衍と大摩訶衍となり。然るに「玄」「文」「止」の三大部等に問爾前と法華との圓妙同を判するものあるより、深くその底意を窮めずして、彼宗の末學終に一家教相の大格を忘るものあるは太た憾みと爲すべし。

以上言ふところは天台の教觀二門の概要なり、若しその詳細は須らく彼宗の章疏に就て懇に尋討すべし。

天台の後その法燈を傳持相續したる者は、天台を初祖と爲し、第二祖に章安あり、第三祖に智威(法華)あり、第四祖に慧威(天宮)あり、第五祖に玄朗(左)あり、第六祖に妙樂(前)あり、この中第二祖章安は諱

を灌頂くわんていと云ひ、字あざなを法雲ほほうんと云ふ。臨海縣りんかいげんの章安しょうあんに生れたるを以て人呼ひとよびて章安大師しょうあんだいにしと爲す。七歲章安の攝靜寺せつじやうじ惠拯ゑいせいに投じて出家しゆつ。陳ちんの至德元年しとくねん天台てんたいを師しとし造詣ぞうげい甚だ深ふかし。天台てんたいの講かうずるところは多く之を筆記ひつぎす。三大部さんだいぶ等是れなり。唐たうの貞觀六年てんくわんねん八月七日國清寺こくせいじに於て寂じやくす、壽七十二。其自著そのぢちやくは「八教大意はつかうたいい」、「智者別傳ちやくしやくべつでん」、「觀師傳くわんしでん」、「南岳記なんがくき」各一卷、「觀心論疏くわんしんろんしゆ」、「涅槃玄ねはんげん」各二卷、「國清百錄こくせいひやくろく」五卷、「涅槃疏ねはんしゆ」二十卷等なり。「續高僧傳ぞくこうそうでん」卷二十三、「佛祖統紀ぶつそとうき」卷七にその傳出でんいづ。第六祖妙樂めくろくそみやくは諱なづなを湛然たんぜんと云ふ、その晉陵しんりやうの荆溪けいけいに生れたるを以て人呼ひとよびて荆溪大師けいけいだいにしと云ひ、又妙樂大師みやくらくだいにしと稱なづす。年二十を過ぎて始めて第五祖玄朗だいにこそげらうに従したがふ。遂つひに大志だいしを發はつし天台てんたいの三大部さんだいぶを注ちゆうす。「玄義げんぎ」の注ちゆうとして「釋籤しやくせん」十卷、「文句もんぐ」の注ちゆうとして「記き」十卷、「止觀しくわん」の注ちゆうとして「弘決かうけつ」十卷、前疑ぜんぎを明決めいけつし、後滯ごたいを開發かいはつし、天台てんたいの教學けうがく茲こゝに復また大おほいに興おこる。又章安しょうあんの「涅槃疏ねはんしゆ」を再治さいぢして三十三卷と爲し、益ます々ま法華ほふわ涅槃ねはんの宗要しゆやうを明あらむ。尚なほ「略維摩疏りやくゑいばしゆ」十卷、同どう「疏記しゆき」三卷、「方等懺補闕儀ほうとうぜんぷくけつぎ」二卷、及び「法華三昧補助儀ほふわさんさいふじぎ」、「金鉢論きんぱつろん」、「止觀大意しくわんたいい」、同どう「義例ぎれい」等各一卷の著書ちやくしよあり、唐たうの建中三年けんちゆうさん二月五日寂じやくす。壽七十二。「宋僧傳そうそうでん」卷六、「佛祖統記ぶつそとうき」卷七にその傳出でんいづ。妙樂みやくらくの弟子でし頗おほく多おほし、就中すなはち道邃だうすい、行滿ぎやうまんの二人ににん其そのの雄ゆう爲なり、日本にっぽんの傳教でんけうは入唐にゅうたうしてこの二人ににんより天台てんたい教觀けうくわんの旨むねを傳つたふ。道邃だうすい以後いご廣修くわうしゆ、無外むがい、元琇げんしゆう、清疎せいそ、義寂ぎじやく、知禮ちれい、遵式じゆんしき、仁岳にんがく、從義じゆうぎ等の諸師しよしありたれども、教學けうがくの傾向けいかう徒たらに閭牆けいじやうの弊へいに陥おちり、概おほして妙樂みやくらく以後いごは法華ほふわ傳弘でんかうの功こう、外ほかに觀かんすに足たるもの無なし。

第五 日本の傳弘

【其一、聖德皇太子の傳弘】天台の正系を受けて日本に法華宗を肇めたるは叡山の開祖傳教其人なりと雖も、その以前に於て法華傳弘の功は第一に聖德皇太子を推さざるべからず。

今より一千三百餘年以前、人皇第二十九代欽明天皇の即位十三年（日本紀元一二二二、洋曆五五二）冬十月百濟國王聖明より釋迦の銅像及び經論幡蓋を朝廷に獻す。是れ佛敎渡來の初めなり。又一説には前帝宣化天皇の時已に渡來し居たりと云ふ。『三國傳通緣起』(卷)に曰く、

日本佛法初傳の年代を記するに惣じて二説あり。一は昔新羅の學生大安寺審祥大徳の記に云く、楯岡廬入野宮の御宇宣化天皇即位三年歲次戊午の年十二月十二日百濟國より佛法傳來す。宣化天皇は即ち第二十九代の帝也(楯岡廬入野宮は宣化天皇の御宮號、この宣化天皇を第二十九代と記せるは、古は多く神功皇后を第十五代の皇統に數へたるが故なれども、正しくは第二十八代宣化天皇第二十九代欽明天皇なり、(纂輯御系圖)卷上を看るべし)二に東大寺の圓超僧都、延喜十四年甲戌詔を奉じて華嚴宗并に因明の章疏の目錄を撰す。彼の序の中に云く、磯城島金指宮の御宇欽明天皇の十三年に佛法始めて傳ふ。(磯城島金指宮は欽明天皇の御宮號。)

今考ふるに宣化天皇の時已に渡來し居たるも未だ多く人に識られず、欽明天皇の時百濟王聖明の貢獻に由り上下始めて佛敎あることを知りしが故に古來この時を以て佛敎渡來の初と爲したるならん。

又『日本書紀』卷二十二推古天皇十四年の條の鳥佛師より佛像を獻納したるに對する勅あり。これに

依れば、烏佛師の祖父司馬達等が曾て佛舍利を朝廷に獻じたりしこと、及び父の多須奈が橘豊日天皇（天皇）の爲めに僧となり、姨の島女が尼になりし等の事あり。司馬達等は支那梁朝の人、繼體天皇の即位十六年に佛舍利を携へて日本に來り、歸化して大和に住したる人なり。繼體天皇の即位十六年と云へば欽明天皇の即位十三年よりは二十九年、宣化天皇の即位三年よりは十四年前、故に佛渡來はこの司馬達等の來朝を以て最初と爲すべきなれども、宣化天皇の時の渡來と同じく世人多く之を識らざりしならん。又司馬達等の携へ來れるものは佛舍利にして經卷は將來せざりしが如し。宣化天皇の時も渡來の事實甚だ判明せず。但欽明天皇の即位十三年には佛像の外に經論及び幡蓋等の佛具法器の一式皆渡來し、加之百濟國王の表文も添へられ、言はゆる國交關係より公式に渡來したるものなれば、この點より佛教渡來の初を欽明天皇の時と爲すことの允當なるを知るべし。

然るに佛教渡來以後の状態如何と云へば、當時の大匠蘇我の一家は直ちに之を容れんとし、同僚の物部、中臣等は之に反し、殊に欽明天皇の御子敏達天皇の御宇に至りては排佛の氣勢一層昂く、その即位八年に新羅より佛像を獻じたりしものを斥け、同十四年三月には灼然として宜く佛法を斷つべしとの詔勅を發せられたり。是より先き百濟より欽明天皇に獻せし釋迦の銅像は欽明天皇より蘇我の一家に賜はり、蘇我は向原の家を寺としてそこに奉安せしを、排佛一派の爲めに焼き拂はれ、佛像は難波の堀江に投棄せられぬ。其後蘇我は鹿深臣の藏せし彌勒の石像と、佐伯連の有せし佛像を請受し、

司馬達等の女の島が尼となりて善信尼と稱し居たると、及び其弟子の禪藏、惠善との三尼を右二體の佛像に侍せしめ、石川の家を寺として之を安じ居たるを、この佛教禁斷の詔勅に由りて再び寺を燒き拂はれ、佛像も亦先の如く難波の堀江に投棄せられ、善信等三尼は衣を褫がれて禁錮せられぬ。後蘇我家の哀願甚だ切なるが爲めに特に蘇我家のみに佛教を信ずることを許したれども餘人には飽まで禁斷を勵行されたり。然るに其後用明、崇峻の二帝過ぎ、推古天皇の即位二年に到り、俄然從來の排佛主義を一變し、三寶興隆の詔勅を煥發して、佛教尊崇の意を普く天下に示されたり。日本に於て佛教の大發展を觀たるは正しくこの三寶興隆の詔勅に由る。『日本書紀』卷二十二に曰く、

二年春二月丙寅朔、皇太子及び大臣に詔して、三寶を興隆せ令めたまふ。是の時より諸の臣逆等、各君親の恩の爲めに競うて佛會を造る。即ち是を寺と謂ふ。

佛教が一時に勃興したる状態想ふべし。而してその皇太子とあるは即ち聖德皇太子なり。是の時皇太子は已に攝政として天皇に代つて萬機を統べられたれば、三寶興隆は全くは皇太子の意に出でしものなり。同書同卷に曰く、

夏四月庚午朔己卯、厩戸豐聰耳皇子を立てて皇太子と爲し、仍て政を攝録せしめ、萬機を以て悉きに委す。橘豐日天皇の第一子也。母皇后は穴穗部間人皇女。皇后懷妊胎の日に、禁中監察諸司を巡行して、馬宮に至り、乃ち厩戸に當りて、勞みなくして忽に産す。生れて能く言ひて聖智有り。壯に及び十人の訴を聞て失たず、能く兼て未然を知り辨ふ。内教を高麗僧惠慈に習ひ、外典を博士覺鸞に學び、兼て悉く達す。父天皇之を愛し、宮南の上殿に居らしむ。故に稱して上宮厩戸豐聰耳太子と謂ふ。

これ三寶興隆の詔勅を煥發する前年、即ち推古天皇即位元年夏四月皇太子攝政と爲るの記事なり。

橘豊日天皇は人皇第三十一代用明天皇、皇太子はその第一の皇子なり。人皇第三十代敏達天皇の

即位元年（日本紀元一二三二、洋曆五七二）壬辰正月朔日誕生（誕生に異説あり「神皇正統記」卷三、「元

癸巳正月朔日と爲す、今）。「下學集」卷上に聖德皇太子に六の異名ありしことを記せり、一は厩戸、此は

母后出産の因縁よりこの名あり。二は上宮、かむづみやと呼ぶ。南宮の上殿に住し居られたるが故

なり。古書に漢津宮とも書けり。今は音を以て呼べり。三は豊聰耳、四は耳聰、五は八耳、此等は善

く十人の訴を一時に並べ聽きて決斷を誤らざる聰明の徳を稱しての名なり。（豊聰耳を「とよけみみ」とよ

従つて耳聰をも「みみけ」と讀むべからず、必す「とよとみみ」「みみ」と讀むべし）六は法大王、また法主王。（「書紀」卷二十三用明）然れども上宮之

厩戸豊聰耳命と呼ぶを以て正式と爲す。聖徳は後世よりの尊稱なり。（聖）

は「しやうとく」に非ずして「しやうとく」と呼ぶ古例なり、「纂輯御系圖」卷上を見るべし）

皇太子の聰明は「書紀」に「生れて能く言ひて聖智有り」と記せるが如

く實に非凡にて、殊に佛教に就ては生知の徳あり、奇蹟亦頗る多し。その

誕生の時手に佛舍利を握られしこと「神皇正統記」(三)に看えたり。曰く、

天皇（敏達）の御宇豊日皇子の妃御子を誕生す、厩戸皇子にてまします。生れ給ひてより種種の奇瑞あり、凡人にはまします。

御手を握り給ひしが、二歳にて東方に向きて南無佛と聞き給ひしかば、一の舍利ありき。佛法流布の爲に（三）権化し給へること疑

【三】「権化」とは権現化生とも権應化身とも熟字す、佛菩薩等の聖者が假に凡夫の身を現じ世に生れ出るを云ふなり。

ひ無し 佛舍利は今に大和の法隆寺に崇め奉る。

『太子傳(上)』には佛舍利を握るの事は看えざれども、誕生の後二歳の時、敏達天皇の二年春二月十

五日東に向つて南無佛と稱へて再拜されし由を記せり。又同天皇の八年冬十月新羅國より柘叱政奈未

と云へる人を使として佛像を朝廷に獻せし時、僅に入歳の皇太子は天皇に左の奏を上つれり。

西國の聖人釋迦牟尼佛の遺像は、末世之を尊めば則ち勳を銷し福を蒙る、之を蔑れば則ち災を招き壽を縮む。兒、佛經を讀むに其旨微妙なり。望むらくは佛像を崇貴して如説に修行せん。(『太子傳』卷上、『元亨釋書』卷二十)。

排佛主義の敏達天皇も奏に接して言の奇なるに感じこの時のみは皇太子

の言に従ひてその像を納られたり。今奈良の興福寺の東の金堂に安置せ

る像是れなり。蘇我と守屋との戦には皇太子は泊瀬部皇子、竹田皇子、難

波皇子、春日皇子等と共に軍を率ゐて蘇我を援け、諸皇子の軍利あらざる

を看、白膠木を以て 四天王の像を作り、之を頂髻に戴き、我れ敵に勝た

ば必ず護世四天王の爲に寺塔を建立せんと誓ひ、遂に進んで守屋に克つことを得たり。今の攝津の四

天王寺はこの誓に酬いられたるなり。而して推古天皇の時に及び遂に攝政として三寶興隆の大詔を煥

發せらるるに至れり。『正統記』の佛法流布の爲に權化したまへりとの言は宜なりと謂ふべし。

又十七條の憲法を創定し、その第二條に佛教を尊崇すべきことを規定して、佛教をして全く日本の

【四】 四天王は持國(東方)増長(南方)廣目(西方)毘沙門(北方)なり、四方を守護する神にて多く軍陣に之を請じて益を祈る、尙ほ本經序品の註を看るべし。

國教たらしめたり。其の條文に曰く、

篤く三寶を敬ふべし。三寶とは佛、法、僧なり。即ち〔四〕四生の終歸、萬國の極宗なり。何の世何の人か是の法を貴むに非ざる。人は〔四〕尤惡越し、能く教へば之に従はん。其れ三寶に歸するにあらずんば、何を以てか在れるを直うせん。

日本の佛教をして今日あらしめたるは實に皇太子の恩賚なり。特に法華傳弘の功績は頗る著大にして皇太子畢生の精神幾ど注いで此に在りしことを識らざる可からず。

欽明天皇の時百濟より佛像并に經論を獻りし其中に『法華經』有りしや否や今之を徵するに由無し。敏達天皇の六年冬十月皇太子六歳の時百濟より二百餘卷の經論渡來せし中に『法華經』有りしこと『法華驗記』〔恒樂〕に

看えられたば『法華經』の日本に來りしは皇太子誕生以後と云ふべきを當れりと爲す。別本の『法華驗記』〔源鎮〕及び『太子傳』、『元亨釋書』等に依れば皇太子六歳の時敏達天皇に

對して「兒、昔漢土に生れ南岳に於て數十年佛道を修行したれば今また讀誦せんと念ふ」と奏されたりと。蓋し百濟より『法華經』の來れるに就て此の奏請ありたるものならん。皇太子と『法華經』と

重厚の因縁亦太だ奇なりと謂ふべし。

同く推古天皇の十四年、天皇の爲に皇太子親ら『勝鬘』及び『法華』を講せらる。是れ實に日本に於ける『法華經』講説の初なり。『書紀』〔卷二〕同年の條に曰く、

【四】 四生とは卵、胎、濕、化の四生にて、一切有情はこの四生を離れざるなり、故に四生と云へば衆生と云ふの意也。

【四】 尤は罪なり。

秋七月、天皇、皇太子を請じて勝鬘經を講ぜしめたまふ。三日に説きたまふこと竟る。是歳皇太子亦法華經を岡本宮に講じたまふ。天皇ただ喜びたまひて、播磨國の水田百町を皇太子に施したまふ。因て以て斑鳩寺に納む。

又『太子傳』(卷)に曰く、

天皇復太子に勅して曰く、法華經は如來の妙義なり、宜く亦講説すべしと。太子謹で受け、亦僧の儀の如くにして、岡本宮に於て説きたまふ。王子、大臣、大夫以下信受せざるは莫し。天皇、命婦以下を率ゑ、亦以て聞き看そなはしたまふ。七日にして竟る。天皇大に悦び、播磨國の水田二百六十町を以て太子に施したまふ。因て以て法隆寺に納む。

法隆寺は斑鳩寺を後に改稱したる名なり。布施の水田二百六十町は『書紀』の「一百町」と相違あれども他の事實は皆同じく、且つ講説の盛儀歴然觀るが如し。僧の儀の如くとは、『法華』講説の時袈裟を著し、柄香爐を執持せられしを云ふ。今法隆寺所藏の皇太子の像は正しく此時の儀装を寫せしものなり。

又止だ講説のみならずして、『勝鬘』、『維摩』、『法華』の三經に各注疏を作られたり。是れ亦日本に於ける『法華經』の注疏の初なり。而も其注疏は推古天皇二十三年夏四月の作と稱すれども、其以前に已に書けるもの別に一卷ありて其は支那に遣はされ、後更に改めて復び之を書かれたるなり。故に『法華經』の注疏は前後兩度にして、現に今流布せる四卷の本は世に之を『上宮法華後疏』と呼べり。その深く意を『法華』に傾けられしことを以ても亦推知すべし。又難波の荒陵(今の)に四天王寺を造り、それに『勝鬘』、『維摩』、法華の三經を安きて鎮護國家の三部と定め、三經の中『法華』をこ

の主と爲して以て特に尊崇の旨を表せり。而して法隆寺にも同く三經を安き、學問の僧侶に毎年夏九旬の間之を講贊して率土安穩庶民快樂を祈請せしめぬ。後年傳教が法華弘通の願文を四天王寺の皇太子廟前に捧げたる中に云へることあり、曰く、

今我が法華の聖德太子は、即ちこれ南岳慧思大師の後身なり。既戸に生を託して、四國を汲引したまふ。持經を大唐に請じて、
「妙法を日域に興す。」(「一心戒文」卷中。)

皇太子を『法華の聖德太子』と贊したるは妙法を日域に興したる傳弘第一の人なりしが爲めなり。

其の南岳慧思大師の後身と云ひたるは持經を大唐に請せられたる事實に因る。皇太子平常一部の『法華經』を持經と爲し懷より離せず。その『法華經』は支那の衡山に在りて本南岳の所持せし經本なり。皇太子遙にその經本の所在を識り、遣唐使小野妹子に命じて遠く彼國より將來せしめ以て持經と爲す。持經の『法華』は一部一卷、黃紙黃表にて一行三十四字の極細字なりしと云ふ。皇太子の薨去後山背大兄皇子之を奉持して六時に禮敬せられしが、一夜忽ち經本の所在を失して復世に現はれざる等の事委くは『太子傳』(下)に記するが如し。

斯く皇太子と『法華經』とは因縁重厚にして、講説と云ひ、注疏と云ひ、法華傳弘に就ては偉大の功勞なれども、而も當時天台の教書未だ日本に傳來せざるを以て皇太子の講説注疏は天台と逕庭莫き能はず。寧ろ支那の異系七十餘人の中の光宅の義に傾き居られたるは止むを得ざることなり。三國傳

通緣起(中卷)に曰く、

日本佛法初傳の時、成實宗と三論宗と與に同時に傳來す。是故に後代成實宗を以て三論宗に附す。聖德太子三經の疏を作りたまふに、成實論を以て法相門と爲し、光宅の義に依りて以て義門を立てたまへり。光宅法師は是れ成實の師、正さしく大乘を弘めて而も成實を以て法の性相を判す。高麗の慧慈、慧觀、百濟の慧聰、觀勒、並に三論宗にして法輪の匠なり。是れを初起と爲して後漸く傳敷す。此等の諸師皆成實に通ず。太子は慧慈、慧聰、觀勒を以て師と爲し佛法を習學したまふ。即ち是れ三論成實の義ならん而已。

光宅は前章に云へるが如く一代判教に於ては『法華』劣『涅槃』勝にして、皇太子も亦この義に同じ。故にその『法華後疏』(卷一)に於て方便品の(四)更以異方便助顯第一義の句を釋して曰く、

更以異方便助顯第一義とは、本義明かならず、但し私懷を云へば、異方便とは是れ般若、維摩の二教を謂ふ。此の二教は初の相教に異なる。故に異と云ふ。第一義とは今日(法華)の一理を云ふ。言ふころは、此の二教も亦今日の一理を顯さんと欲するが故に説くなり、餘の故に非ざるなり。亦今日の法華は猶未だ常住を明かさざるが故に義自ら方便なるべし。前の三教に異なる、故に異と云ふ。第一義とは亦前の如し。

即ち更以異方便助顯第一義の句に兩解を設けて、第一の解は『法華』に相對して般若『維摩』を異方便と爲し、第二の解は『涅槃』に相對し、

【四】更に異の方便を以て第一義を助顯す、

『法華』を異方便と爲す この第二の解は即ち『法華』劣『涅槃』勝にして明に是れ異系の見解なり。

然るにこの異系の皇太子に對して天台の正系たる傳教が「我が法華の聖德太子」と贊し、南岳慧思大師の後身なり等と云ひたるは甚だ怪むべし。今考ふるに釋尊一代設化の大格は先權後實の次第なり。

滅後の傳弘亦この大格に順じて違はず。印度も初は迦葉阿難等の小乘の傳弘、次は龍樹天親等の大乘の傳弘、支那も亦初は七十餘人の異系、次は天台の正系。言はゆる禮樂先に駢せて眞道後に啓くの意是れなり。日本の傳弘亦この次第を濫せざるは奇と謂ふべし。正系の傳教已前に先づ小權の成實、三論、法相、俱舍、律、華嚴の六宗渡來す。而して皇太子の時は僅に成實三論の二宗渡來したるに過ぎず。この時や、正系の本義未だ顯示すべきに非ざるなり。皇太子は内證に深く『法華』の何物なるかを識るの點に於て明に南岳の後身たるべき權化の聖者なるが故に其時の來るを待つて反つて暫く異系の義に同じ居られたるに非ざる歟。即ち光宅の義に依られしことを以て先權後實の傳弘の大格を我邦に立てられたるに非ざる歟。傳教は蓋しその内證を贊して「我が法華の聖德太子」等と稱揚せしものならん。且つ今引ける『後疏』の『法華』劣『涅槃』勝の文も一往之を看れば全然異系の見解なれども、而も其間亦自ら内證の本意を漏示せり。先づ更以異方便助顯第一義の句を標して本義明かならずと云ひ、次に私懷を云はばとして兩解を出だす。即ち兩解は言はゆる私懷にして眞實の本義は必ず別に指すものあることを諷せり。但その眞實の本義は明かならずとして故らに之を述ぶることを避けられたる深遠の妙味を感せざるべからず。尤も『後疏』には本義明かならずの詞尙他の處にもあれど少くも光宅の義をば本義として信用せられざりし旨はこの詞に由りて推知することを得べきなり。故に皇太子は外用の邊は異系に屬し、内證の邊は正系の人爲ること争ふべからず。

皇太子くわうたいしの薨去こうきょは推古天皇すひこてんのうの二十九年にじふくね（日本紀元一二八一、洋曆六二二）春二月己丑朔夜半にして壽じゆう四十九歲しじゅうくさか。『書紀』（卷二）同年同月の條（十二）にその薨去當時の狀こうきょたうじを記して曰く、

是時諸王諸臣及び天下の百姓、悉くの長老は愛兒を失ふが如くにて、鹽酢の味口に在れども嘗めず。少幼き者は己の慈父母の如くにて哭泣の聲は行路に滿てり。乃ち耕夫は耕を止め、春女は杵せず。日月輝を失ふ、天地既に崩れなん。今より以後誰をか恃まん哉と。是月上宮太子を磯長陵に葬る。是時に當り、高麗の僧慧慈（慧慈は皇太子佛典の師、是より先推古天皇の二十三年に高麗に歸れり、彼地にて皇太子の薨を聞けるなり。）上宮皇太子薨すと聞き、以て大に悲み、皇太子の爲に僧を請して設齋す。仍て親く經を説くの日誓願して曰く、日本國に聖人あり、上宮豐聰耳皇子と曰ふ。固に天縱なり、玄聖の徳を以て日本の國に生まる。三統を綜貫し、先聖の宏猷に纂ぎ、三寶を恭敬し、黎元の危を救ふ、是れ實に大聖なり。今太子既に薨す、我れ異國と雖も、心は斷金に在り。其れ獨り生けりとも何の益か有らんや。我れ來年二月一日を以て必ず死なん。因りて以て上宮太子に淨土に遇うて、以て共に衆生を化せんと。是に於て慧慈期に當りて死す。

國內の諸人の悲嘆は固より然るべきところ、外國高麗の僧が之が爲めに死を決したるが如き、聖徳の名實に虚しからざるなり。皇太子の傳は『太子傳』の外『元亨釋書』卷十五の傳紀及び卷二十の資治年中に行實あり。史としては、『書紀』卷二十一及び卷二十二、『舊事記』卷九等なり。

『其二、傳教の傳弘』日本に於ける天台法華宗の祖傳教は諱は最澄、字は藥證、（仁忠の叡山大師傳）、俗姓は三津首、近江滋賀の人、後漢孝獻帝の裔登萬貴王の後なり。登萬貴王我が輕島豐明宮應神天皇の御宇遙に皇化を慕うて歸化す、朝廷その貴種なるを憐み、滋賀の地を賜うて食邑と爲す。三津首

は其の賜姓なり。父の名は百枝、内外の學に富み、郷黨に推さる。且つ深く佛法を信じて、禮佛誦經業課怠らず。常に子無きを憂へて祈願懷に在り。一日叡山左麓の神祠に至りしに名香馥郁として巖阿に流る。異んで香源を求覓すれば一勝地あり。景趣幽邃幾ど仙境の如し。百枝乃ち草庵を此に造り、一七日を期して至心に懺悔す。(今の神宮)。第四曉に至りて靈夢あり、妻乃ち娠む。人皇四十八代稱徳天皇の神護景雲元年(日本紀元一四二七、洋曆七六七)八月十八日師其の胎より出づ。生れて穎悟、鄰里嗟異す。七歲學に就き、十二歲大安寺行表に投じて出家し唯識を習ひ、旁ら博く諸宗の章疏を讀む。十五歲國分僧闕に補せられ、二十歲進具す。時に人皇五十代桓武天皇の延曆四年四月六日なり。是歲七月中旬より叡山上り草莽を披き草菴を卜し、日日『法華』を讀誦し、苦修鍊行具さに至る。有名なる五大誓願は其時に發ししなり。(五大誓願は「叡山大師」)。時に内供奉禪師壽興、五大誓願の文を見て大に感嘆し厚く金蘭を結び、爲めに『起信論疏』、『華嚴五教章』等の披覽の便を與ふ。又この際に於て更に『止觀』、『玄義』、『文句』、『四教義』、『維摩疏』等の天台の教迹を寫すの便を得たり。是れ東大寺鑿眞の將來するものなり。已にこの天台の教迹を得て精勤披閱深く天台の旨を領す。延曆十六年三十一歳にして内供奉の列に預り近江の正税を賜うて山の供費に充つ。蓋し精進の名聲天關に達せしが故なり。同二十年十一月十講法會を立て七大寺六宗の碩學十人を叡山に會して『法華』三部を講演す。聖二十一年正月十九日復七大寺の碩學十有餘人を高雄寺に會して天台の教旨を談論す。當時七大寺

より朝廷に上りし謝表の文中に曰く、

竊に天台の支疏を見るに、釋迦一代の教を總括し、悉く其趣を顯して通ぜざる所無し。獨り諸宗に逾えて殊に一道を示す。其中説く所の甚深の妙理は、七箇の大寺、六宗の學生、昔より未だ聞かざる所、曾て未だ見ざる所なり。三論法相の久年の諍ひ、澳焉として氷のごとく釋け、照然として既に明かなり、猶ほ雲霧を披いて三四三光を見るがごとし。聖徳の弘化したまふより以降今に二百餘年の間、講ずる所の經論其の數多し。彼此理を争うて其の疑ひ未だ解けず。而るに此の最妙圓宗猶ほ未だ闡揚せず。蓋し以みるに此間の羣生未だ圓味に應ぜざる歟。伏して惟ふに理朝久く如來の付囑を受け、深く純圓の機を結ぶ。一妙の義理始めて乃ち興顯し、六宗の學衆初めて至極を悟る。謂つ可し此界の含靈而今而後悉く妙圓の船に乗り早く彼岸に濟ることを得むと。譬へば猶ほ如來成道四十年の後乃ち法華を説いて悉く三乘の侶をして共に一實の車に駕せしむることくなり。

高雄寺の會は朝廷特に其の儀を督したるを以て之に列せし十有餘人の七大寺の碩學等は斯る謝表を朝廷に上りしなり。傳教の法鼓が何かに諸宗の心腑に響きたるかはこの謝表の文を看て其の一斑を窺ふべし。聖徳皇太子以來傳教に至るまでの間を釋尊の爾前四十餘年に比したるが如きは是れ寧ろ諸宗の權小たるを自覺したるものならずや。日本に於ける傳教の出世は實に釋尊在世八箇年の法華會を再現したるものなり。

然るに當時天台の教迹は僅に鑒眞の將來したる數部の書に過ぎず、且つ師傳に依らざれば義趣間通じ難きところあり。是に於てか入唐求法の志を起して朝廷に奏請す。朝廷之を納れ而も朞月必ず歸りて淹留を許さざるの旨を以てす。皇弟神野平城天皇大に此舉を賛し金銀數百兩を布施して入唐の費に

【三四】 三光は日月星なり

供し、又好手を擇びて法華三部二本を書寫し、その一本は託して唐に贈り天台山修禪寺の一切經藏に置かしめ、一本は叡山に置き以て法華弘通の根本經と爲さしむ。延曆二十二年閏十月二十三日大宰府に至り窺門山寺に於て法華を講說し、又藥師佛の像四軀を造る。同二十三年秋七月遣唐使菅原清の第二船に上りて海に遊び明州の鄞縣に著す。彼の德宗の貞元二十年なり。九月台州に起き天台山國清寺に至る。道邃一見之を器許し、一心三觀の奥旨を傳へ、并に菩薩三聚大戒を授く。又佛隴寺行滿を見。滿曰く、昔智者大師門人に告げて曰く、我が滅後二百年を過ぎて我法東國に傳はらんと、祖識虛からず、子や即ち其人なりと。乃ち天台以來妙樂に至るまでの諸の祕籍凡そ八十二卷を出だし悉く之を付す。翌年四月更に密教を求むるが爲に越州龍興寺に如き順曉に遇ひ三部灌頂を承け、及び諸の眞言陀羅尼の經書一百餘卷印契圖樣灌頂器物等を領得す。その順曉の付法書に依れば善無畏、義林、順曉を歴て傳教は第四の付囑傳授たるなり。尋で唐興縣に於て倅然に逢ひ達磨一派牛頭山の禪法を稟受す、蓋し本師行表曾て道邃より北宗禪を傳へ之を以て傳教に付す。故に復た禪要を尋求したるより。以上入唐の間に承くるところを台、密、禪、戒四宗の相傳と云ふ、道邃行滿は台教なり。而して道邃よりは更に戒宗を傳ふ。順曉は密教なり。倅然は禪宗なり。夏五月、大使藤原實能の第一船に乗り長門に歸著。延曆二十四年八月入洛して上表以聞す。其表に依れば將來したるところの經并に疏等總じて二百三十部、四百六十卷、別に見進せるもの金字『妙法蓮華經』七卷、金字『金剛般若經』一卷、

金字『菩薩戒經』一卷、金字『觀無量壽經』一卷、及び天台智者大師靈應圖一張、天台大師禪鎮一頭、天台山香爐峰神送經、及び柏木尺文四枚、說法白角如意一等なり。天皇大に悦び、特に七大寺の爲めに天台の教迹七通を書寫せしめ、禁中の上紙を給し、國子祭酒和氣弘世をして之を監守せしめ、書寫已に成るや七大寺の碩學道證、守尊、修圓、勤操、慈蕙、慈寬等に勅して野寺の天台院に會して新寫の教迹を受學せしむ。又勅を下して曰く、眞言祕教未だ此土に傳ふるを得ず、然るに最澄闍梨幸に此法を得、良に國の師爲り、宜く諸宗の智行兼備の者を拔て灌頂三昧耶を受けしむべしと。是に因りて高尾寺に始めて大壇を起し法會を設備し、小野岑守をして諸事を檢校せしめ、畫工二十餘人を召し、毘盧遮那佛像一幅、大曼荼羅一幅、寶蓋一幅を圖し、又佛菩薩神王の像、幡五十餘旒を縫造し、莊嚴の調度皆内裏より出づ。灌頂を受くる者道證、修圓、勤操等凡そ八人。是れ日本に於ける密灌の始まり、尋で又城の西郊を卜して好地を擇び再び壇場を築き、八大徳の外豐安、靈福、泰命等に灌頂せしむ。二十五年正月奏して新に天台法華宗を加ふ。時に大乘に四宗あり。此に至りて五宗と爲る。又年分十二人度者の制を定む、五宗各各二人、俱舎成實各各一人なり。後平城天皇の大同五年正月に至り天台宗年分度者を増して八人と爲す。又一乗止觀院に於て始めて『法華』、『仁王』、『金光明』三部の長講を凝む、毎日長講一日も闕げざらしむ。嵯峨天皇の弘仁三年七月法華三昧堂を造り、淨行の侶を簡び、晝夜不斷に『法華』を誦せしむ。弘仁五年筑紫に向ひ宇佐八幡の爲めに神宮寺に於て自ら『法

華』を講ず。滿講の日神託あり紫袈裟一、紫衣一を奉施す。この所施の法衣現に山院に在りと云ふ。又賀春神宮寺に於て『法華』を講じ渡海擁護の神恩に酬ゆ。是歲詔あり諸宗の碩學を宮中に召して傳教と法要を對論せしむ。天台の妙義轉た諸宗を壓し、『法華』の佛日益益光輝あり。弘仁六年春三月天皇親ら金字を以て『摩訶止觀』に題書し七大寺に頒つ。同年秋八月和氣氏の請に因り大安寺の塔中院に於て大に法鼓を震ふ。諸寺の碩學大德皆法筵に集まり論難頗る熾んなり。然れども悉く傳教の爲めに摧折せらる。是歲東國に赴き、『法華經』二千部一萬六千卷を寫し、上野下野二國に各一級の寶塔を建立し、一塔毎に別つて八千卷を置き、その塔下に於て毎日『法華』を長講せしむ。その他の勝修今具さに計げ難し。弘仁九年暮春諸の弟子に告げて曰く、我れ法華圓宗の元由を尋ぬるに、初は靈山(釋尊)、次は大蘇(南岳)、後は天台、並に皆山に於て説聽し修學し解悟す。是故に我宗の學生は、初修の頃當さに國の爲め家の爲め山修し山學して有情を利益し佛法を興隆すべし。世間の讒嫌、巖窟に止息し佛種の萌芽、山林に滋茂せん。今より後は聲聞の利益を受けず、永く小乗の威儀に乖かんと。即ち自ら誓願して二百五十戒を棄捨し已る。又告げて曰く、南岳天台の兩大師、昔し靈山に於て親り『法華經』を聞き、兼て菩薩の三聚戒を受く。所以に師資相授す。智者は灌頂に授け、灌頂は智威に授け、智威は慧威に授け、慧威は玄朗に授け、玄朗は湛然に授け、湛然は道邃に授け、道邃は最澄、義真に授く。我常に正教を披閱するに、既に菩薩僧菩薩威儀あり。亦一向大、一向小有り。今我宗の學生を

して大乘の戒、定、慧を開して永く小乘下劣の行を離れ令めん。之に因り弘仁十年三月十五日奏して天台圓宗の大乗戒壇を叡山に建てんことを請へり。その奏文に曰く、

沙門最澄言す。最澄聞く、如來の制戒は機に隨つて同からず、衆生の發心大小亦別なり。文殊、頭盧、上座に位を別ち、一師、十師、羯磨全く異なり。乃ち法華宗年分兩箇得度の者あり。登天の桓武聖皇帝法華宗に歸して新に開建したまふ所の者なり。伏して惟ふに弘仁元聖文武皇帝陛下、德、乾坤を合せ、明、日月を並ぶ。文藻古を絶し、銀鈞今に新なり。萬國歡心して、兩蕃歸化す。治を定め禮を制するは、今正に是れ時なり。誠に願くば兩業の出家は、永く小乗の儀を廻して、同く大乘の儀と爲し、法華經の制に依りて、小律儀を交へす。毎年春三月先帝國忌の日(十七日)、比叡寺に於て、清淨の出家の與めに、菩薩の沙彌の爲めに、菩薩の大戒を授け、亦菩薩の僧と爲して、即ち便ち住山修學せしめ、十二年、國家衛護の爲めにして、羣生を福利せん。圓寶國利、具さには宗式等の如し。天恩開許したまはば、先帝の高願、載載彌興し、大乘の戒珠、祀祀清淨ならん。弘仁を源と爲して、此の大戒を傳へ、戒福を廻傳して、將た主上を護せん。誠懇の至りに任ふること無し。謹で表を奉じ、陳請以聞す。伏して願くば、仁慈、矜允を垂るるを賜へ。輕しく聽覽を座し、追つて戰汗を増す。謹で言す。

同時に副るに年分度者の永式四條を以てして裁允を請へり。其の式に曰く、

天台法華宗年分度者同心向大式。合せて肆條。

凡そ佛寺に三有り。一には一向大乘寺、初修業の菩薩僧の住する所の寺なり。二には一向小乘寺、一向小乘律師の住する所の寺なり。三には大小兼行寺、久修業の菩薩僧の住する所の寺なり。

今天台法華宗年分の學生并に同心向大の初修業の者は、十二年深山の四種三昧院に住せしめ、得業以後利他の故に假りに小律儀を受けば、假りに兼行寺に住することを許す。

凡そ佛寺の上座には大小の二座を置く。一には一向大乘寺に文殊師利菩薩を置き以て上座と爲す。二には一向小乘寺に寶頭盧和尚

を置き以て上座と爲す。三には大小兼行寺は文殊と賓頭盧と兩の上座を置き、小乗の布薩の日は賓頭盧を上座と爲して小乗の次第に座し、大乘の布薩の日は文殊を上座と爲して大乘の次第に座す。此の次第の座は此間に未だ行はれず。

凡そ佛戒に二有り。一には大乘の大僧戒は十重四十八輕戒を制して以て大僧戒と爲す。二には小乗の大僧戒は二百五十等の戒を制して以て大僧戒と爲す。

凡そ佛受戒に二有り。一には大乘戒は普賢經に依りて三師證等を請す。釋迦牟尼佛を請じて菩薩戒の和上と爲す。文殊師利菩薩を請じて菩薩戒の羯磨阿闍梨と爲す。彌勒菩薩を請じて菩薩戒の教授阿闍梨と爲す。十方一切の諸佛を請じて菩薩戒の證師と爲す。十方一切の諸菩薩を請じて同學の等侶と爲す。現前の一の傳戒の師を請じて以て現前の師と爲す。若し傳戒の師無くんば、千里の内に請す。若し千里の内に能く戒を授くる者無くんば、至心に懺悔し、必ず好相を得て、佛像の前に於て、自誓受戒す。今天台の年分學生并に回心向大の初修業の者には所説の大乗戒を授けて將に大僧と爲さん。二には小乗戒は小乘律に依り、現前の十師を請じて白四羯磨す。清淨持律の大徳十人を請じて三師七證と爲す。若し一人を闕かば戒を得せず。今天台の年分學生并に回心向大の初修業の者には此戒を受くることを許さず。其の久修業をば除く。(已上四條式なり)

竊に以るに菩薩の國寶は法華經に載せ、大乘の利他は摩訶衍に説く。彌天の七難は大乘經に非ざれば何を以てか除くことを爲さんや。未然の大災は菩薩僧に非ざれば豈に冥滅することを得んや。利他の徳、大悲の力は諸佛の稱むる所にして天人歡喜す。仁王經の百僧は必ず般若の力を假り、請雨經の八徳は亦大乘戒を屈す。國寶國利菩薩に非ずして誰ぞや。佛道には菩薩と稱し、俗道には君子と號す。其戒廣大にして、眞俗一貫す。故に法華經に二種の菩薩を列れたり。文殊師利菩薩彌勒菩薩等は皆出家の菩薩なり。跋陀婆羅等の五百の菩薩は皆是れ在家の菩薩なり。法華經の中具さに二種の人を列れて以て一類の衆と爲し、比丘の類に入れずして以て其の大類と爲す。今此の菩薩の類此間に未だ顯傳せず。伏して乞ふ。陛下維弘仁の年より新に此の大道を建て、大乘戒を傳流して而今而後を利益したまへ。固く大鐘の腹に鏤めて、遠く塵劫の後に傳へん。仍て宗式を奉じ、謹て天裁を請ふ。謹て言す。

是より先弘仁九年五月十三日六條の式を立てて天台法華宗の年分度者は其の度牒に官印を捺し其の

戒牒にも亦官印を加へんことを請へり。是れ從來の慣例を破り天台法華宗の度者は六宗の僧綱に支配せらるること無く、戒に於ても亦全く小乘戒と分離せんと欲したるが爲なり。又同年八月二十七日更に八條の式を立てて、再び前意を披き天台法華宗の年分度者は十二年修學の後國師國用として國の講師に任せられんことを請へり。蓋し前六條式の裁可無きを以て重ねて八條式の奏請に及びしなり。然るに廷議亦容易に之を納れず。是に於て三たびこの四條式の請に及ぶ。而して大小二戒の別を正すの旨益強し。又特に法華一乘の圓頓戒壇を叡山に建立せんと欲するの一事は全く佛教の一大革新を試みたものなり。抑も支那及び日本の佛教は宗派にこそ大乘小乘の別はあれ、戒としては偕に皆小乘七衆の戒を受け大乘の僧も形儀は聲聞比丘の具戒なるに過ぎず。一言以て之を蔽へば從來の佛教は戒に於ては殆ど大小二乘の別あることを識らざりしなり。今傳教のこの奏請は乃ち其の舊陋を打破し東大寺等の戒壇の外に別に戒壇を叡山に建立し、大乘の僧は必ずこの大戒を受けしめ、以て大小二戒を畫然判別せんと欲す。此の如きは是れ佛教に與ふる非常の變なりと言はざるべからず。而も亦大乘の中『梵網』の戒と『法華』の戒とに權實を判じて主伴傍正を立て、叡山の戒壇は法華實大乘の一乘戒を主とし正とするの旨を明かにす。更に非常の大變なり。大小二戒の別あることにすら惑へる諸宗の學者等、何ぞ大乘戒に權實の異なることを辨へんや。『梵網』の外に更に法華一乘の圓頓大戒ありと謂ふが如きは當時に在りては夢想だも及ばざることなり。果せる哉、この傳教の奏請に對し諸宗の學者等一時に

紛起して論争蜂の如し。護命、長慧、施平、豐安、修圓、泰演の六僧統相與に闕下に訴へて切りに傳教の奏請を妨ぐ。傳教乃ち『顯戒論』三卷を著し、且つ『佛法血脈』一卷を添へ、弘仁十一年二月二十九日を以て之を内裏に上り觀覽に供す。論中縱横に諸宗の頑迷を破斥して完膚莫からしめ、文に其の證を示し、辭に其の理を盡くして、大小の別、權實の異、戒旨方に炳焉たり。天皇『論』を以て護命等に示しその答解を徴す。然るに護命等『論』を一見して忽ち屈して復た言はず。後竟に奏請の意を貫徹して法華圓頓の一乘戒壇を叡山に建立することを得たるは全くこの『顯戒論』の力にして、斯の一事や蓋し『法華』に對する傳教畢世の偉功なり。我が聖祖日蓮之を贊して曰く、

人王第五十代像法の八百年に相當りて桓武天皇の御宇に最澄と申す小僧出來せり。後には傳教大師と號し奉る。始には三論、法相、華嚴、俱舍、成實、律の六宗并に禪宗等を行表僧正等に習學せさせ給ひし程に、我と立て給へる國昌寺後には比叡山と號す。此にして六宗の本經本論と宗宗の大師の釋とを引合せて御覽ありしかば、彼の宗宗の大師の釋は所依の經論に相違せる事多き上僻見多多にして信受せむ人皆惡道に墮ちぬべしと考へさせ給ふ。其上法華經の實義は宗宗の人人我も得たり我も得たりと自讃ありしかども其義なし。此を申すならば喧嘩出來すべし、黙して申さずば佛誓にそむきなむと、思ひわづらばせ給ひしかども、終に佛の誠を畏れて桓武皇帝に奏し給ひしかば、帝此の事をおどろかせ給ひて六宗の碩學に召合はさせ給ふ。彼の學者等始は慢慳山の如く惡心毒蛇のやうなりしかども、終に王の前にして責め落されて六宗七寺一同に御弟子となりぬ。例せば漢土の南北の諸師陳殿にして天台大師に責め落されて御弟子となりしが如し。但し此はこれ圓定圓慧計りなり。其上天台大師の未だ責め給はざりし小乘の別受戒を責め落し、六宗の八大德に梵網經の大乘別受戒を授け給ふのみならず、法華經の圓頓の別受戒を叡山に建立せしかば、延曆圓頓の別受戒は日本第一たるのみならず、佛滅後一千八百餘年が間身毒尸那一閻浮提に未だ無かりし靈山の大戒日本國に始まる。

されば傳教大師は其功を論すれば龍樹天親にも超え、天台妙樂にも勝れて座します聖人なり。(撰時鈔卷上)

實に傳教の傳教たる所以は三國未弘の靈山の大成を日本國に肇始したるに在り。「法華」の傳弘史を識らんと欲する者は須らく斯の一事の最も重要なることを知悉せざる可からず。同十三年二月十四日天皇親しく宸筆を下して傳燈大法師位を賜ふ、蓋し特例なり。是歲夏四月、四大和を缺く。同五月十五日法を弟子義真に付し、且つ遺誡を諸の弟子に諭告す。同六月四日辰刻叡山中道院に於て頭北面西右脇に臥して寂す。壽五十六歲。同月十一日初七日忌に際し天皇、右大臣藤原冬嗣を勅使と爲し法華一乘の戒壇を叡山に建立するの裁許を齎らして靈前に供せしむ。同十月十七日更に追悼の詩を賜ふ。人皇五十六代清和天皇の貞觀八年七月十七日法印大和尚位を贈り傳教大師の諡號を賜ふ。其の著書は「註法華經」十二卷、「註金光明經」五卷、「註仁王般若經」三卷、「註無量義經」三卷、「天台靈應圖集」十卷、「頭陀集」三卷、「守護國界章」十卷、「法華去惑」四卷、「法華輔照」三卷、「照權實鏡」一卷、「決權實論」二卷、「依憑集」一卷、「依新集總持章」十卷、「顯戒論」三卷、「顯戒緣起」二卷、「血脈」二卷、「付法緣起」三卷、「長講願文」三卷、「六千部法華銘」一卷等頗る多し。(仁忠の「叡山大師」傳に記するところに據る、尙ほ修禪院の「傳教大師御撰述目錄」一身延日朝の「傳教大師章疏」可透の「傳教大師撰集錄」祖徳の「山家高祖傳教」。一生の行實傳記はその古きものを大師最撰撰「等數種」の目錄近刊の「傳教大師全集」の別卷に載せれば参照すべし)。

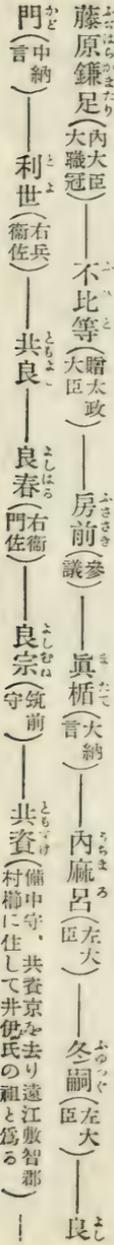
仁忠の「叡山大師傳」と爲す。仁忠は傳教の直弟にして上座なり。次は智證の「祖師行業記」并に三好爲康の「拾遺往生傳」に錄せる「傳教大師傳」。覺深の「國字傳教大師傳」二卷は最も新し。並びに

『傳教大師全集』の別巻に載せたり。然れども『國字傳』は多く事實を誤り後世の妄誕を加ふ。上の三傳の據るべきに若かず。『元亨釋書』の卷一にその傳あり。戒壇に關しては直弟光定の記せる「一心戒文」二卷に資料具さに富めり。これ亦『全集』の別巻に載せたり。

傳教の後の天台法華宗は名は天台法華宗なれども其の人や正系と認め難きもの多し。慈覺、智證の如きは意竊に善無畏、一行に私淑して顯密二教の判、反て傳教の本志に違へり。而もこの二人の法流天下に周くして一宗全く異系の徒類と爲る。又安然の如きは禪に僻し、惠心の如きは淨土に流る、並に皆異系のみ。故に正系の傳弘は傳教以後に之を取るべきの人無しと言ふを以て當れりと爲す。或は開傳教の古風に復さんとする篤志の人無きにしも非ざれども、『法華』傳弘の功として數ふるに足るものは幾ど絶無なり。

【其三、聖祖日蓮の傳弘】一 聖祖日蓮の略傳。我が聖祖日蓮は人皇第八十六代後堀河天皇の貞應元年(日本紀元一八八二、洋曆一二二二)二月十六日を以て安房國長狹東條の郷小湊に誕す。幼名善日麿。父は貫名重忠、母は梅千代、畠山の族、下總大野吉清の女なり。

聖祖世譜(年譜攷 異卷上)



直、奥山氏の祖と爲る、三は政直、山名部貫名に住して貫名氏の祖と爲る

名部貫名に住して貫名氏の祖と爲る

次は藤平重友なり。父重忠鎌倉執權北條時政と好からず、人皇八十三代土御門天皇の建仁三年五月事に託して所領なり。

奪はれ安房小湊に謫せらる。爾來捕漁以て活を支ふ、聖祖自ら吾は旃陀羅の家に生まると稱するは乃ち之が爲めなり。

人皇八十七代四條天皇の天福元年(日本紀元一八九三、洋曆一二三三)十二歳、清澄寺道善に投じ、

名を藥王麿と改む。(清澄寺は郡の互刺なり、千光山と號す。人皇四十九代光仁天皇の寶龜二年、不思議法師之を創し、後に天台

嘉禎三年(日本紀元一八九七、洋曆一二三七)十六歳、道善によりて得度雜染、諱を蓮長と名け是生

坊と稱す。(出家得度の年紀に異説あり) 曆仁元年(日本紀元一八九八、洋曆一二三八)十七歳、鎌倉に赴き主として禪、淨土の二宗を習ふ。

仁治三年(日本紀元一九〇二、洋曆一二四二)二十一歳、叡山の僧鎌倉に來るに會し、導かれて叡山

に登り、居ること十二年天台の教觀、及び密、禪、戒等の相承具さにその蘊を極む。初め傳教の學生

式を定むるや、在山十二年の修學期間は一歩も山門を出るを許さず。後に及び十二年を分つて初六、後

六の兩期と爲し、智解優秀の者は後六年には特に山門を出て他處に遊學することを許す。然れども

學版は依然として叡山に在り、聖祖亦後六年の期間は南都及び高野、東寺等の各地に歴遊して精しく

諸宗の祕奥を探り、又傍ら博く外典に涉り諸子百家を究む。是より先聖祖叡山に在りて熟ら其の學風

を視るに 満山の大衆久しく慈覺、智證に狂醉して一宗の學者全く天台傳教の本旨を悟らず、正系の

『法華經』の爲めに捨つるならば石を珠に代へ糞を米に換ふるなり。かくて過去無量劫より以來の謗罪を今生一世に亡ぼして父母、師匠、主君の大恩に酬い、一切衆生の奈落の門を閉ぢて咸く此土寂光の妙境に遊ばしめなん哉。聖祖の大志乃ち決して金剛の如し。

人皇第八十九代後深草天皇の建長五年(日本紀元一九一三、洋曆一二五三)三十二歳、叡山を辭して安房に還るの次、路を伊勢に取り國祖天照大神の廟に謁す。蓋し深故あるなり。已にして安房に還り清澄の一室に住し、四月二十二日より一七日間寂然として三昧に入る。同二十八日拂曉、三昧を起ち山嶺に登り赫赫たる東海の旭日に對して高聲に南無妙法蓮華經を唱ふること十遍。是れ實に本化別付の佛勅に當れる本門『法華』傳弘の發軔なり。是日大に緇素を寺内南面の持佛堂に會し始めて四箇格言を建てて大に諸宗の邪非を責む。之を折伏弘通の第一聲と爲す。曰く、淨土の祖師法然は偏に彌陀一佛を念じ淨土の三部に執し、『法華』實大の妙經を難行、聖道等に攝して之を捨閉閣抛す。この謗法や必ず阿鼻地獄に入らん。故に之を念佛無間と言ふ。四箇格言の一なり。禪宗の師徒は教外別傳と稱して聖經を輕侮し、佛説に依らずして反つて己臆を放まます。宛も是れ波旬なり。故に之を禪天魔と言ふ。四箇格言の二なり。眞言の弘法は經王の『法華』を下して第三戲論と爲し、釋尊を貶して別に教主を立て、護國と稱して還て天藥を招く、故に之を眞言亡國と言ふ。四箇格言の第三なり。律宗は小乗の小律を旨として自ら國寶と謂ふ。徒らに檀施を費して國家に益無し、故に之を律國賊と言ふ。

四箇格言の第四なり。獅吼の威音聽者震駭して皆色を失ふ。邑主東條景信大に怒り將に聖祖を斬らんとす。法兄義淨、淨顯の二人竊に聖祖を護して厄を華房の蓮華寺に避けしむ。居ること數日聖祖本門の大戒を父母に授け、父に妙日、母に妙蓮の法名を與へ、又親ら蓮長の法諱を日蓮と改む。即ち父母の法名を取れるなり。而して懇に別離を告げて鎌倉に適く。折伏の法幢を彼地に樹てんが爲めなり。五月居を鎌倉名越の松葉谷に下す、而してより來た日日市街に出で道路に立ちて盛んに毒鼓を鳴らす。誘人の瓦石四面より飛んで幾ど一身を埋むれども泰然として動かす。世に之を日蓮の辻説法と稱す。是歲十一月天台の學匠成辨遠く化を慕ひ來りて弟子と爲る。聖祖より長ずること一歲、名を日照と賜ふ。六老僧の一人辨阿闍梨是れなり。

同六年(日本紀元一九一四、洋曆一二五四)三十三歲、是歲冬十月下總平賀の豪族印東有國其子吉祥鷹を携へて室に投ず、鷹甫て十歲、名を日朗と賜ふ。六老僧の一人大國阿闍梨是れなり。

正嘉二年(日本紀元一九一八、洋曆一二五八)三十七歲、駿河岩本實相寺に赴き大藏を閲す。蓋し比年天變地天荐りに至り、殊に去歲(正嘉元年)の大地震前代未だ聞かず。乃ち其の所由を明かにして國主を諫曉せんと欲し、先づ徵證を經典に取るの要あるが爲めなり。是より先叡山に、奈良に、土橋に、鶴岡に、已に大藏を閲し、茲に至りて合せて第五次なり。是歲二月十四日父重忠逝く。

人皇第九十代龜山天皇の文應元年、日本紀元一九二〇、洋曆一二六〇)三十九歲、『立正安國論』一卷

を著して鎌倉幕府の前執權北條時頼に獻す。宿谷光則之が介爲り、『論』中先づ天變地天の所由は一國咸く謗法の大罪を放まよまにするが故なりと爲し、之を證するに『藥師經』、『大集經』、『金光明經』、『仁王經』の四經の文を以てし、而してその謗法の元凶として淨土宗の法然を指斥して『選擇集』の邪義を破し、更に百尺竿頭に一步を進めて將來起るべき重大の國難を豫言す。その文に曰く、

若し先づ國土を安んじて現當を祈らんと欲せば速に情慮を回らし急に退治を加へよ。所以は何、藥師經の七難の内五難忽ち起りて二難猶ほ殘れり。所以は佗國侵逼の難、自界叛逆の難なり。大集經の三災の内二災早く顯れて一災未だ起らず。所以は兵革の災なり。金光明經の内、種種の災禍一一起ると雖も、佗方の怨賊國內を侵掠する此の災未だ露れず此の難未だ來らず。仁王經の七難の内、六難今盛にして一難未だ現はれず。所以は四方の賊來りて國を侵すの難なり。加之國土亂れん時は先づ鬼神亂る。鬼神亂るるが故に萬民亂ると云云。今此文に就て具に事の情を案するに、百鬼早く亂れ、萬民多く亡ぶ。先難是れ明かなり、後災何ぞ疑はん。若し殘る所の二難惡法の科に依りて並び起り競ひ來らば其時何か爲ん哉。帝王は國家を基として天下を治め、人臣は田園を領して世上を保つ。而るに佗方の賊來りて我國を侵し、自界叛逆して其地を掠領せば、豈に驚かざらんや、豈に騒がざらんや。國を失ひ家を滅せば何の所にか世を通れん。汝須らく一身の安堵を思はば先づ四表の靜謐を禱るべき者歟。

『仁王經』の如くんば將來必ず當に四方の賊來りて國を侵すべし、『金光明經』の如くんば將來必ず當に佗方の怨賊來りて我が國內を侵掠すべし、『大集經』の如くんば將來必ず當に兵革の災ありて起るべし、『藥師經』の如くんば將來必ず當に佗國侵逼の難と自界叛逆の難とあるべし。自界叛逆は猶ほ制すべし、佗國侵逼は最大の國難なり。之を以て前執權北條時頼に警告して以てその悔悟を促したり。是時幕府の執權は北條長時なりしも主權は依然時頼に在りしが故に直ちに之をその手に獻せしなり。

然れども彼や冷然として之を省みず。八月二十七日夜、諸宗の道俗數百人鼓噪して松葉谷の丈室を圍み火を放ちて之を焚き將に聖祖を殺害せんとす。進士善春等拒ぎ戦つて傷を蒙る。之を聖祖四大難の一と爲す。遇ま下總中山の領主富木胤繼法華堂を營みて聖祖を請す。乃ち之に赴きて一百日間法輪を轉ず。地方の豪族太田、曾谷等の諸氏歸敬する者頗る多し。是歳岩本實相寺の學僧來りて弟子と爲る、名を日興と賜ふ。六老僧の一人白蓮阿闍黎是れなり。

弘長元年(日本紀元一九二二、洋曆一二六一)四十歳、錫を還して再び松葉谷の舊趾に庵して獅吼愈々猛なり。幕府大に之を忌み、遂に五月十二日を以て聖祖を伊豆の伊東に竄す。之を聖祖四大難の二と爲す。

弘長三年(日本紀元一九二三、洋曆一二六三)四十二歳、二月赦されて鎌倉に還る。折伏更に前よりも激し。是歳駿河松野の邑主松野六郎の子松千代弟子と爲る、名を日持と賜ふ。六老僧の一人蓮華阿闍黎是れなり。

文永元年(日本紀元一九二四、洋曆一二六四)四十三歳、八月安房に歸り先考の墓を展ず。時に母齡七十餘、會ま病んで瞑す。聖祖潛然として壇を設け法を修し誓つて曰く、「法華經」果して日本國に弘まる可くんば慈母其れ蘇せんと、乃ち水を其面に灑ぎしに遽然として蘇醒し、身意更に爽朗として壽を延長すること四載に及び文永四年八月十五日に至りて逝く。十月上總藻原の男金實信の子、弟子

と爲る、名を日向と賜ふ。六老僧の一人民部阿闍梨是れなり。十一月十一日小松原を過ぐ。東條景信百餘卒を従へ急に聖祖を襲撃す。時に聖祖に侍する者僧俗七八人奮つて之に當る。然れども衆寡敵せず、弟子鏡忍先づ斃れ、乘觀、長英等亦皆疵を蒙る、景信馬を進めて直ちに聖祖に通り刀を揮つて其の頭を傷く、會ま天津の豪族工藤吉隆聖祖を途に迎ふるが爲めに斯に來り、其の急を見て馳せて之を遮り奮闘して遂に死す。閒に乗じて其臣北浦忠吾及び弟忠内二人聖祖を護し奔つて市阪の窟に隠れ、尋で天津に奉送して僅に無事なることを得たり。之を聖祖四大難の三と爲す。景信日ならずして狂死す。

文永四年（日本紀元一九二七、洋曆一二六七）四十六歳、富木胤繼の子、弟子と爲る、名を日頂と賜ふ。六老僧の一人伊豫阿闍梨是れなり。文永元年より茲歲に至るまで房總常野の各地を巡化し、而して復鎌倉に還る。

文永五年（日本紀元一九二八、洋曆一二六八）四十七歳、是歲蒙古の牒狀始めて到る。『立正安國論』の豫言是に至りて符を合すが如し。乃ち先づ一書を宿屋光則に贈る。其の狀に曰く、

其後は書絶て申さず不審極り無く候。抑去る正嘉元年（丁巳）八月二十三日戌亥の刻の大地震は、日蓮諸經を引て之を勘ふるに、念佛宗と禪宗とを御歸依有るの故に、日本守護の諸大善神願志を作して起す所の災なり。若し此の對治無くば陀國の爲に此國を破らる可き由の勘文一通之れを撰し、文應元年、庚申七月十六日御邊に付し奉つて故最明寺入道殿へ之を進覽せり。其後九箇年を経て今年大蒙古國より牒狀有りし由風聞す。經文の如くんば彼國より此國を責むる事必定なり。而るに日本國の中には日蓮一人當

に彼の西戎を調伏するの人爲る可しと、兼て之を知りて論文に之を勸へたり。君の爲め國の爲め神の爲め佛の爲めに内奏を經らる可き歟。委細の旨に見參を遂げて申す可く候。恐恐謹言。

文永五年八月二十一日

日蓮

宿屋左衛門入道殿

文應元年より文永五年に至るまで其閒實に九箇年なり。九箇年前に豫言せし他國侵逼難は茲に其の兆を現して蒙古第一回の牒狀と爲りたるなり。而も其の牒狀の來れるを聞て直に彼國より此國を責むると必定なりと言ふ。即ち更に文永五年より十四年後の弘安四年の國難を豫言したるなり。然れども當時の上下尙悟らずして光則も亦この聖祖の狀に報せず。是に於てか執權北條時宗を首とし、宿屋光則、北條頼綱、同彌源太、極樂寺良觀、建長寺道隆、大佛殿別當、壽福寺、淨光明寺、多寶寺、長樂寺等十一箇處に書狀を贈りて速に謗法を改め以て國難を免るべきの意を苦言す。痛切針の如し。世に之を十一通御書と稱す。同時に更に諸弟子檀那に狀あり、曰く、

大蒙古國の簡牒到來に就て十一通の書狀を以て方方へ申せ令め候。定めて日蓮弟子檀那流罪死罪一定ならむのみ、少しも之を驚くこと莫れ。方方への強言は申に及ばず是併而強毒之の故なり。日蓮庶幾せしむる所に候。各各も用心有るべし、少しも妻子眷屬を憶ふこと莫れ、權威を恐ること莫れ、今度生死の縛を切て佛果を遂げ令め給へ。鎌倉殿、宿屋入道(光則)、平左衛門尉(頼綱)、彌源太、建長寺、壽福寺、極樂寺、多寶寺、淨光明寺、大佛殿、長樂寺已上十一箇所、仍て十一通の狀を書して諫訴せ令め候畢め。定めて子細有る可し。日蓮が所に来りて書狀等披見せ令め給へ。恐恐謹言。

文永五年 戊辰 十月十一日

日蓮

日蓮弟子檀那中

後に龍口の死刑、佐渡の遠流等の來るべきことを是時早く已に弟子檀那等に覺悟せしめたること此狀以て識るべし。

文永六年（日本紀元一九二九、洋曆一二六九）四十八歳、是歳蒙古復國使を遣して對馬に來る、對馬守宗資國之を逐ひ還す。聖祖甲州吉田に如き手ら『法華』一部を書寫して以て富士の半腹に瘞む。蓋し國家鎮護を祈り國主の踐むべき本門戒壇の建立を未來に期するが爲めなり。世に其地を稱して經嶽と言ふ。

文永八年（日本紀元一九三一、洋曆一二七一）五十歳、諸宗の僧等背議して幕府に訴へて曰く、日蓮、毎に言へり、故執權時頼は無間地獄に墮在せりと。又建長寺極樂寺等を燒き拂ひて道隆、良觀等の頸を刎ねずば日本國は必ず亡ぶべしと。若しこれ等の暴言を恕せば政道恐らくは立たじ、乞ふ審議あれと。九月十日執權の家宰北條頼綱、聖祖を其の邸に召して事實を驗問す。聖祖曰く、彼等の訴訟する所は實なり虚に非ず。その故最明寺殿を墮獄と言ふことの如きは吾れ最明寺殿在世の日、殿の面前に於て親しく之を言へり、今に至りて何ぞ違ふことあるべけんや。又建長寺極樂寺等を燒き拂ひて道隆良觀等の頸を刎ぬべしとは亡國の大事を念へばなり。凡そ邪法は必ず國を亡ぼす。此事已に『立正安國論』に之を勸へて故最明寺殿に呈せり。已に蒙古の牒狀來れるは彼等邪法の日本國を亡すべき

著しき徴證ならずや。この言は私の詞に非ずして三世了達の釋尊の金言なり。請ふらくは重ねて『立
正安國論』を看られよと。意氣昂然、群吏聽を聳かす。乃ち還りて更に『立正安國論』を手書し十二
日狀を副へて之を賴綱に贈付す。幕府急に議して曰く、日蓮橋慢竟に屈せず、事を佛法に托して敢て
政府に抗す、辜當に大辟に處すべしと。即日賴綱をして聖祖を捕へしむ。賴綱士卒數百人を率ゐて松
葉谷の草菴に向ふ。時に聖祖徒衆を會して説法す。遂に賴綱の來るを視て先づ徐に『法華經』をその
懷に納む。賴綱の衆中少輔なるものあり、馳せて聖祖の懷より『法華經』を奪ひ之を四邊に散じ、そ
の一卷を把て三たび聖祖の面を撲つ。之を視れば經の第五卷なり。聖祖莞爾として曰く、此の第五卷
の中勸持品ありて末代無智の俗衆等『法華經』の行者を打擲すべしと説けり。今適々之を把て吾を撲
つ亦奇ならずやと。又賴綱に謂て曰く、吾は天下の棟梁なり、吾を虐するは棟梁を傷ふなり、國家其
れ頽れんのみと。賴綱忿然衆を麾きて聖祖を馬上に拘し直ちに四衢に徇へて將に龍口に戮せんとす。
途若宮を過ぐ。八幡の宮前に至りて聖祖大音に呼んで曰く、何かに八幡、曾て靈山會上に於て『法華
經』の行者を守護せんと誓ひしことを今は打忘れしか、日蓮今夜頸斬られて釋尊の御前に至るならば
日本の八幡こそ起請に違背したれと告げ參らせん、苦しくば急ぎ急ぎ計らふべしと。之を聽きて警護
の士卒等皆哄然大笑す。曰く日蓮は全く狂せりと。由井濱に至りて四條賴基兄弟四人の來るに會す。
賴基は篤信の士なり。聖祖告げて曰く、今夜頸切られにまかるなり、この數年が閒願ひつる事はこれ

なり、抑も此の娑婆世界にして雄となりては鷹に掴まれ、鼠となりては猫に啖はれ、或は妻に子に讎敵に身を失ひし事は大地微塵よりも多し、『法華經』の御爲には一度も失ふこと無し、日蓮貧道の身と生れて父母の孝養心に足らず國恩を報すべき力なし、今度頭を『法華經』に奉りて其功德を父母并に國主の恩に回向せん、其の餘りは弟子檀那等にはぶくべしと。賴基心中竊に聖祖に殉せんと欲し、兄弟四人従つて龍口に往く。已に刑場に至りて賴基顛頤して泣く。聖祖曰く、不覺の殿原哉、此程の悦びをば笑へかし、何に不惜身命の約束を違へらるるぞと。時維れ鷄鳴、劊子依智直重刀を擧げて將に一下せんとす。忽ち物有り滿月の如く飛んで刑場を過ぐ、光芒眼を射、烈風面を裂き、其響萬雷の一時に下るが如し。直重戰慄起つ能はず、警吏皆地に伏す。聖祖大音に呼んで曰く、斯る大禍の召人を何ぞて早く斬らざるや。夜明けなば見苦しかりなん、急ぎ近く打寄れやと。然れども畏怖して一人の還る者無し。同時に執權の邸亦惟星ありて地に隕ち、虚空に大音ありて人語の如し。時宗大に愕き以て聖祖を戮するの天譴と爲し、急使を龍口に驅つて刑を止めしむ。賴綱亦使を馳せて刑場の狀を執權に報ず。兩使途に七里濱に遭ふ。行逢川即ち其地なり。十三日平旦、聖祖を依智に護送し本間重連の家に置き、十五日改めて佐渡に流謫を命ず。之を聖祖四大難の四と爲す。是時捕れて土牢に幽囚せられたるもの日朗、日心等僧俗六人、日蓮の類囚徒として姓氏を錄せられたるもの二百六十餘人なり。十一月佐渡に到り大野の塚原に入る、塚原は屍陀林にして中に方丈の弊廬あり、屋漏り下濕ふ。聖祖

之に處て飢寒常に逼れども晏如として憂色無し。

文永九年（日本紀元一九三二、洋曆一二七二）五十一歳、正月十六日當國の學匠唯阿、生喻等を魁首と爲し奥羽信越の諸國の僧凡そ數百人塚原に來りて更迭宗義を詰問す。聖祖一一之を辯析して快決鏡斷利刀を以て瓜を割くが如し。衆皆屈して退く。世に之を塚原問答と稱す。四月七日石田郷一谷に移る。是歳北條時直遂に命を下して聖祖に親近するものを禁せしむ。

文永十一年（日本紀元一九三四、洋曆一二七四）五十三歳、二月十四日幕府聖祖を赦す。三月二十日鎌倉に還る。四月八日執權の邸に赴く。頼綱、時宗の命を承けて聖祖に問て曰く、蒙古の來る其れ何れの日ぞと。聖祖對て曰く、經文は期日を指さず、然れども天の氣色甚だ急なり、恐らくは今年を踰えじと。舉座愕然として色を失ふ。聖祖乃ち更に『立正安國論』の意を陳べて懇に謗法治罰の要を説く。十二日執權内旨を下して曰く、今日以後願くは永く念佛無閉等の折伏を停止せられよ、若し然らば持佛愛染の別當と爲し堂を城西に建て莊田一千町を衣鉢の資に充て、以て國家鎮護の祈願所と爲さん、上人其れ之を圖れと。聖祖曰く、官若し國家を祈らんと欲せば宜しく諸宗の謗法を治罰すべし、吾が折伏の格言を沮む可からず、吾何ぞ榮利を以て佛勅に更へんやと、斷として之を絶つ。五月十二日鎌倉を去つて甲斐の身延山に入る。此より北條時宗の八女を娶ひて出で、五月十一日蒙古の忽必烈其將忻都、洪茶丘の二將をして艦艘九百艘を率ゐて西邊に寇せしむ。壹岐の太宰景隆、對馬の宗資

國迎戰之に死し、蒙古虜掠を放まに於て去る。今年を踰えじの言果して徵あり。

人皇第九十一代後宇多天皇の弘安四年（日本紀元一九四一、洋曆一二八一）六十歳、五月十五日大日本國衛護の大曼茶羅を圖し異敵降伏を祈請す。七月蒙古の右丞相阿剌罕、左丞相范文虎、及び忻都、洪茶丘等大擧して來寇す。偶ま神風あり蒙古の艦皆覆没し、將士悉く溺死し、還るを得るもの僅に三人。之を弘安の役と云ふ。

弘安五年（日本紀元一九四二、洋曆一二八二）六十一歳、九月身延を發し武藏池上宗仲の家に至り、十月十三日寂す。法騰四十六。遺命に依り身骨を身延山に送り墓を其地に立て、六老僧等輪次に之を衛る。

聖祖の筆翰太だ豊多なり。小祥忌に丁りて六老僧輯むる所凡そ四十卷一百四十餘篇、之を『録内』と稱す。後更に輯むる所『録外』二十五卷、『他受用』七卷、『續集』三卷等あり。近代に造び合せて之を編年と爲し『高祖遺文録』と稱す。凡そ三十卷。又其の小字縮刷の一巻の本あり尤も廣く世に行はる。最近『類纂遺文録』なるもの出でて學者の便益更に加ふ。その中重要なるものは『立正安國論』一巻、『開目抄』上下二卷、『撰時抄』上下二卷、『報恩抄』上下二卷、『觀心本尊抄』一巻なり。之を五大部と稱す。又身延山に在るの日、六老僧等の爲めに『法華』を講じて其の深義を口訣相承す。此に兩記あり、初は日興の記上下二卷、之を『御義口傳』と題す。次は日向の記一巻、之を『御講開書』と

題す。此の興、向兩記は實に宗要なり。學者講究せざる可からず。又『法華』三部に親しく諸經論疏の要文を手抄したるもの十卷あり、現に印行して世に傳ふ、『注法華經』と稱するもの是なり、別に『撰法華經』一卷あり、祕書として中山に藏せり。

二、佐前佐後の相異。天台傳敎の傳弘と聖祖の傳弘とは均しく『法華經』なれども同あり異あり。今その同異を辨するの前に於て、先づ聖祖の佐前佐後の相異ありしことを述べん。『三澤鈔』(建治四年)に曰く、

法門の事は佐渡の國へ流され候ひし已前の法門は但佛の爾前の經と思召せ。此國の國主我代をたもつべくは眞言師等にも召合せ給はむすらむ、爾時まことの大事をば申すべし。弟子等にも内内申すならば披露して彼等知りなむす、然らばよも合はじと思ひて各各にも申さざりしなり。而るに去る文永八年九月十二日の夜龍の口にて頸を刎られむとせし時より後ふびんなり我に附きたりし者どもに眞の事を言はざりけりと思ひて、佐渡の國より弟子どもに内内申す法門あり。此は佛より後迦葉・阿難、龍樹、天親、天台、妙樂、傳敎、義眞等の大論師、大人師は知りて而も御心の中に秘させ給ひし、口より外に出だし給はず。其故は佛制して云く、我滅後末法に入らずんば此大言ふべからずとありし故なり。日蓮は其御使にはあらざれども、其時剋に當る上、存外に此法門をさとりぬれば、聖人の出させ給ふまで先づ序分にあら申すなり。而るに此法門出現せば、正法像法に論師、人師の申せし法門は、皆日出て後の星の光、巧匠の後に拙きを知るなるべし。此時には正像の寺塔の佛像僧等の靈驗は皆消え失せて、但此大法一耳一鬮浮提に流布すべしと見えて候。各各はかかる法門に契り有る人人なれば頼もしと思すべし。

佐渡流罪以前を釋尊の爾前經に比して未顯眞實と爲し、佐渡以後を三國末弘の大法と演べ、この大法に對しては正像二千年の論師、人師の一切の法門は日出の後の星の光、巧匠の後の拙手と貶し、未

法當今は唯この佐渡以後に申しし大法のみ一閣浮提に流布すべしと云ふ。この佐前佐後の相異は聖祖一代の化儀の大判なるものなり。

佐前に於ける聖祖は専ら爾前と『法華』との權實を明かにすることに努めて未だ『法華』の中の本迹の不同を言はず。言はゆる未顯眞實の時代なりしなり。この時代に在りては聖祖は單に天台法華宗の一沙門なり。根本大師の一門人なり。その權實判の旨は全然天台に頼じて敢て違せざりしなり。故に眞言を破するにも彼の東密の弘法を破して台密の慈覺、智證等を破せず。その弘通の題目は經名に約して經體に約せず、即ち本門の題目なるものに非ざりしなり。この本門の題目は佐後に至り本迹の不同を言ふに及びて而して後乃ち之を顯示す。言はゆる天台傳教も未だ曾て口に宣べざりし末法應時の大法なるものは是れなり。この佐後の法門に由るに非ざれば聖祖の聖祖たる所以は決して之を識るべからざるなり。

三、内外二箇の相承。聖祖一代の化儀にこの佐前佐後の相異あるが故に『法華』の相承に亦内外の二箇を立てて以て系統の分脈を明かにす。外相承とは『法華』の迹化付屬にして釋尊、藥王、天台、傳教の次第なり。其の圖左の如し。

大恩教主釋迦牟尼如來迹門付屬授職灌頂——藥王菩薩天竺授職灌頂——後身天台大師大唐授職灌頂——
後身傳教大師日本授職灌頂

内相承とは『法華』の本化付囑にして釋尊、上行、日蓮の次第なり。其の圖左の如し。

大恩教主釋迦牟尼如来本門付囑授職灌頂——上行菩薩天竺授職灌頂——日蓮日本授職灌頂

この内相承の一途をば内證血脈と稱す。即ち佐後に顯示するところはこの一途の付囑法門なり。若し佐前は反つて外相承に由る。『顯佛未來記』に曰く、

天台大師は釋迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す、安州の日蓮は恐らくは三師に相承し法華宗を助けて末法に流通す。三に一を加へて三國四師と號づけん。

この三國四師の師資相承は即ち外相承なり。(顯佛未來記は文永十年五月の撰にして佐後の書なれども、佐後に於て翻つて佐前の義意を示したるなり。其の例他にも少からず。)『法華宗内證佛法血脈』に曰く、

問、法華宗の名言之れ同じ。何ぞ天台を高祖と爲さざるや。答、今外相は天台宗に依る、故に天台宗に依る、故に天台を高祖と爲す。内證は獨り法華經に依る、故に釋尊、上行菩薩を直師と爲すなり。

外相承には天台を祖と爲し、内相承には直ちに釋尊を直師と爲すことこの文明白なり。而してその内相承に至りては天台の傳弘をば昨厩廢紙と爲す。『本尊得意抄』に曰く、

縱ひ天台傳教の如く法のままに弘通ありとも今末法に至りては去年の曆の如し、何に況や慈覺より已來大小權實に迷うて大謗法に同ずる開像法の時の利益も之れ無し。

弘安二年四月の『上野抄』に曰く、

天台の學者慈覺よりこのかた玄文止の三大部の文とかく料簡し義理を構ふとも、去年の曆、昨日の食の如し、今日の用にならず。

末法の始の五百年に法華經の題目を離れて成佛ありと云ふ人は、佛説なりと云ふとも用ふべからず、何に混や人師の義をや。

又この内相承の一途からは天台の已證たる『摩訶止觀』の一念三千をも之を奪つて爾前別教の分齊なりと破す。『立正觀抄送狀』に曰く、

若し與へて之を論ぜば、止觀は法華迹門の分齊に似たり、乃至、若し奪つて之を論ぜば、爾前權大乘即ち別教の分齊なり。

この『立正觀抄』の本書及び『送狀』何れも天台との相異を辨せり。學者須らく往て看るべし。

四、迹化付囑と本化付囑。言はゆる迹化付囑、本化付囑とは如何。夫れ『法華經』に本迹二門あり、その迹門は釋尊之を迹化の菩薩に付囑して未來に傳弘せしめ、本門は之を本化の菩薩に附囑して末法に傳弘せしむ。迹化とは迹中の所化と云へることにして、釋尊垂迹の間に此土及び他土に於て教化し成就せしめたる菩薩を云ふ。藥王等の菩薩是れなり。本化とは本地の所化と云へることにして、釋尊の本地久遠の最初一番の時本の娑婆世界に於て教化し成就せしめたる菩薩を云ふ。地涌千界の上行菩薩等是れなり。この本迹二箇の付囑は經の現文已に分明なれども、聖祖の『觀心本尊抄』中之に關する一節最も熟讀すべし。曰く、

本門を以て之を論すれば一向に末法の初を以て正機と爲す。謂ゆる一往之を見る時は久遠を以て下種と爲し大通前四味迹門を熟と爲し本門に至りて等妙に登ら令るを脱と爲す。再往之を見れば迹門に似ず、本門は序、正、流通、俱に末法の始を以て證と爲す。在世の本門と末法の初は一同に純圓なり。但し彼は脱、此は種なり。彼は一品二半、此は但題目の五字なり。問て曰く、其證文如何。答て云く、涌出品に云く、爾時に他方の國土の諸の來れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の數に過ぎたる、大衆の中に於て起立し合掌

し禮を作して佛に白して言さく、世尊、若し我等に佛の滅後に於て此の娑婆世界に在りて勤加精進して是の經典を護持し讀誦し書寫し供養せんことを聽したまはば當に此土に於て而も廣く之を説くべし。爾時に佛、諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまはく、止れ善男子、汝等が此經を護持せんことを須ゐず等云云。法師より已下の五品の經文前後水火なり。寶塔品の末に云く、大音聲を以て普く四衆に告げたまはく、誰か能く此の娑婆國土に於て廣く妙法華經を説かんものなる等云云。設ひ教主一佛爲りと雖も之を獎勵したまはばは藥王等の大菩薩梵帝日月四天等は重んず可きの處に、多寶佛、十方の諸佛客佛と爲りて之を諱曉したまふ。諸の菩薩等は此の懇勸の付囑を聞て我不愛身命の誓言を立つ、此等は偏に佛意に叶はんが爲めなり。而るに須臾の間に佛語相違して過八恒沙の此土の弘經を制止したまふ。進退惟れ谷る、凡智に及ばず。天台智者大師は前三後三の六釋を作りて之を會したまへり。所詮迹化他方の大菩薩等に我が内證の壽量品を以て授與す可からず。末法の初は謗法の惡國惡機なるが故に之を止めて、地涌千界の大菩薩を召して、壽量品の肝心たる妙法蓮華經の五字を以て闕音の衆生に授與せしめたまふなり。又迹化の大衆は釋尊の初發心の弟子に非ざるが故なり。天台大師曰く、是れ我が弟子なり應きに我法を弘むべし。妙樂云く、子、父の法を弘むるに世界の益あり。輔正記に云く、法是れ久成の法なるを以ての故に久成の人に付す等云云。又彌勒菩薩疑請して云く、經に云く、我等は復佛の隨宜の所説佛の所出の言に未だ曾て虚妄ならずと信じ佛の所知は皆悉く通達すと雖も、然れども諸の新發意の菩薩は佛の滅後に於て若し是の語を聞かば、或は信受せずして而も法を破する罪業の因縁を起さん。唯願はくは世尊、爲めに解説して我等が疑を除きたまへ。及び未來世の諸の善男子、此事を聞き已みなば亦疑を生ぜん等云云。文の意に壽量の法門は滅後の爲めに之を請するなり。壽量品に云く、或は本心を失へる、或は失はざる者あり。乃至心を失はざる者は此の良藥の色香俱に好きを見て即便ち之を服するに病盡く除きり愈えぬ等云云。久遠下種大通結緣乃至前四味速門等の一切の菩薩二乘人天の本門に於て得道する是れなり。經に云く、餘の心を失へる者は其父の來れるを見て亦歡喜し問訊して病を治せむことゝ求索むと雖も、然ら其藥を與ふるに而も肯て服せず。所以は何、毒氣深く入りて本心を失へるが故に此の好き色香ある藥に於て而も美からずと謂へり。乃至、我今當に方便を設けて此藥を服せ令むべし。乃至、是の好き良藥を今留めて此に在く、汝取て服すべし、差えじと憂ふること勿れ。是の教を作し已りて復他

國に至りて使を遣はして還て告ぐ等云云。分別功德品に云く、惡世末法時等云云。問て曰く、此の經文の遣使還告は如何。答て曰く、四依なり。四依に四類あり、小乘の四依は多分は正法の前の五百年に出現す。大乘の四依は多分は正法の後の五百年に出現す。三に迹門の四依は多分は像法一千年少分は末法の初めなり。四に本門の四依の地涌千界は末法の初めに必ず出現すべし。今の遣使還告とは地涌なり。是好良藥とは壽量品の肝要たる名體宗用教の南無妙法蓮華經是れなり。此の良藥を佛猶迹化に授與したまはず、何に況や他方をや。神力品に云く、爾時に千世界微塵等の菩薩摩訶薩の地より涌出せる者皆佛前に於て一心に合掌し尊顔を瞻仰して佛に白して言さく、世尊、我等佛の滅後に於て世尊の分身所在の國土滅度の處に、當に廣く此を説くべし等云云。天台云く、但下方の發誓を見る等云云。道宣云く、付囑を云はば此經は唯下方湧出の菩薩に付す。何が故に爾るや、法是れ久成の法なるに由るが故に久成の人に付す等云云。夫れ文殊師利菩薩は東方金色世界の不動佛の弟子、觀音は西方無量壽佛の弟子、藥王菩薩は日月淨明德佛の弟子、普賢菩薩は寶威佛の弟子なり、一往釋尊の行化を扶げんが爲に娑婆世界に來入す。又爾前迹門の菩薩なり、本法所持の人に非ざれば末法の弘法に足らざる者歟。經に云く、爾時に世尊乃至一切衆の前に大神力を現じたまふ、廣長舌を出だして上梵世に至らしめ、乃至、十方世界の衆の寶樹の下の師子座上の諸佛も亦復是の如く廣長舌を出だしたまふ等云云。夫れ顯密二道一切大小乘經の中に釋迦諸佛並て坐し舌相梵天に至るの文之れ無し。阿彌陀經の廣長舌相三千を覆ふは有名無實なり。般若經の舌相三千光を放ちて般若を説きしも全く證明に非ず。此は皆兼帶の故に、久遠を覆相する故なり。是の如く十神力を現じて地涌の菩薩に妙法五字を囑累して云く、經に云く、爾時に佛、上行等の菩薩大衆に告げたまはく、諸佛の神力は是の如く無量無邊不可思議なり。若し我れ是の神力を以て無量無邊百千萬億阿僧祇劫に於て囑累の爲の故に此經の功徳を説かんに猶盡くすこと能はず。要を以て之を言はば、如來の一切の所有の法、如來の一切の自在の神力、如來の一切の祕要の藏、如來の一切の甚深の事、皆此經に於て宣示顯説す等云云。天台云く、爾時佛告上行より下は第三に結要付囑なり云云。傳教云く、又神力品に云く、以要言之如來一切所有之法乃至宣示顯説（已上經文）明かに知んぬ、果分の一切の所有の法、果分の一切の自在の神力、果分の一切の祕要の藏、果分の一切の甚深の事、皆法華に於て宣示顯説するなり等云云。此の十神力は妙法蓮華經の五字を以て上行安立行淨行無

遊行等の四大菩薩に授與したまふなり。前の五神力は在世の爲め後の五神力は滅後の爲めなり。爾りと雖も再往之を論ずれば一向に滅後の爲めなり。故に次の文に云く、佛の滅度の後に能く是經を持つを以ての故に諸佛皆歡喜して無量の神力を現じたまふ等云云。次の囑累品に云く、爾時に釋迦牟尼佛法座より起つて大神力を現じたまふ。右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩でて乃至今以て汝等に付屬す等云云。地涌の菩薩を以て頭と爲して迹化他方乃至梵釋四天等に此經を囑累したまふ。十方より來る諸の分身の佛各本土に還り、乃至、多寶佛塔還て故の如くしたまふ可し等云云。藥王品已下乃至涅槃經等は地涌の菩薩去り了つて迹化の衆他方の菩薩等の爲めに重て之を付囑したまふ、拊拾遺囑是れなり。疑て云く、正像二千年の間に地涌千界閻浮提に出現して此經を流通するか。答て曰く爾らず。驚て云く、法華經并に本門は佛の滅後を本と爲して先づ地涌千界に之を授與す。何ぞ正像に出現して此經を弘通せざるや。答て云く、宜はず。重て問て云く、如何。答ふ、之を宣べず。又重て問ふ、如何。答て曰く、之を宣ぶれば一切世間の諸人は威音王佛の末法の如く、又我が弟子の中にも、粗之を説けば皆誹謗を爲す可し、默止せんのみ。求めて云く、説かずんば汝慳貪に墮せん。答て曰く、進退惟れ合れり。試に粗之を説かん。法師品に云く、況滅度後。壽量品に云く、今留在此。分別功德品に云く、惡世末法時。藥王品に云く、後五百歲於閻浮提廣宣流布。涅槃經に云く、譬へば七子あり、父母平等ならざるに非ず然れども病者に於ては心則ち偏に重きが如し等云云。已前の明鏡を以て佛意を推知するに、佛の出世は靈山八年の諸人の爲めに非ず、正像末の人の爲めなり。又正像二千年の人の爲めに非ず、末法の始め予が如き者の爲めなり。然於病者と云ふは滅後の法華經誹謗の者を指すなり。今留在此は於此好色香樂而謂不美の者を指すなり。地涌千界正像に出でざるは、正法一千年の間は小乘權大乘なり、機時共に之れ無し。四依の大小權を以て縁と爲して在世の下種をば之を脱せしむ。謗多くして熱益を破る可きが故に之を説かず。例せば在世の前四味の機根の如し。像法の中の末に觀音藥王南岳天台等と示現して、迹門を以て面と爲し、本門を以て裏と爲して、百界千如一念三千其義を盡せども、但理具を論じて、事行の南無妙法蓮華經の五字并に本門の本尊をば未だ廣く之を行せず。所詮圓機有れども圓時無きが故なり。今末法の初小を以て大を打ち權を以て實を破し、東西共に之を失し、天地顛倒せり。迹化の四依は隠れて現前せず、諸天其國を棄てて之を守護せず。此時地涌の菩薩始て世に出現し、但妙法蓮華經の五字を以て幼稚に服せしむ。因謗墮惡必由得益とは是れなり。我が弟子之を惟へよ。地涌千界は教主釋尊の初發心の弟子なり。寂滅

道場にも來らず、雙林最後にも訪はず、不孝の失之れあり。迹門十四品にも來らず、本門六品に座を立つ、但八品の間に來還せり。是の如き高貴の大菩薩三佛に約束して之を受持す。末法の初に出でざる可き歟。

概括して之を云へば、(一)本化付囑と迹化付囑との二あることは經の説相に於て明かなり、(二)天台妙樂等の疏釋また明かなり。(三)而して其の本化付囑は一經の肝心たる妙法蓮華經の五字の題目なることや明かなり、(四)この五字の題目は迹化の菩薩天台等の像法の傳弘に非ざることや明かなり、(五)只末法の始本化の菩薩出現して之を傳弘すべきものたることや明かなり。經證道理俱に確たり争ふべからず。

五、迹門の法華經と本門の法華經。言はゆる本迹二門とは如何。本迹の名は什門の上足肇師之を立て、天台用ひて以て『法華經』を判す。一經二十八品の中左の前十四品は迹門なり。

序品、方便品、譬喻品、信解品、藥舞喻品、受記品、化城喻品、五百弟子授記品、授學無學人記品、法師品、見寶塔品、提婆達多品、勸持品、安樂行品。

次に左の後十四品は本門なり。

從地涌出品、如來壽量品、分別功德品、隨喜功德品、法師功德品、常不輕品、如來神方品、囑累品、藥王品、妙香品、普門品、陀羅尼品、妙莊嚴王品、普賢品。

この一經に二の序、正、流通の三段あり。一の三段は本迹を分かつとして通じて序、正、流通を判す。云く、初の序品を序分と爲し、方便品より分別功德品の十九行の偈に至るまでの十五品半を正宗分と爲し、偈の後より終り普賢品に至るまでの十一品半を流通分と爲す。此を一經三段と名く。又一

の三段は本迹を分かつて二門に各各序、正、流通を判ず、云く、序品を序分と爲し、方便品より授學無學人記品に至るまでの八品を正宗分と爲し、法師品より安樂行品に至るまでの五品を流通分と爲す。是れ迹門の三段なり。涌出品の始より同品の彌勒已問斯事佛今答之の文に至るまでの半品を序分と爲し、次の佛告阿逸多より下壽量品の全品及び分別功德品の十九行の偈に至るまでの半品を正宗分と爲し、以下經畢るまでを流通分と爲す。是れ本門の三段なり。此を二經六段と名く。本迹二門の判は正しくこの二經六段の科に由るなり。(法華新注卷一上の首紙に二の三段の圖)

迹門の正宗分は方便品より授學無學人記品に至るまでの八品なれどもその主は方便品なり。故に前十四品は只方便の一品なり。又本門の正宗分は一品二半なれどもその主は壽量品なり。故に後十四品は只壽量の一品なり。方便品は實相の一理を開し諸乘を會して悉く一佛乘に入らしむるを旨と爲し、壽量品は佛陀の久遠を顯し諸佛を統して與に絶對の唯一本佛に歸せしむるを旨と爲す。法華の本迹二門を識らんと欲する者は先づこの方便壽量の二品を究むべし。

爾前四十餘年の間の諸大乘經に説く所は人天乘及び聲聞緣覺の二乘并に菩薩乘の諸教隔別して各各同からず。縦ひ佛乘と稱すと雖も只是れ菩薩乘の果なり、諸乘を會したる唯一の佛乘に非ず。然るに今法華の迹門は一切諸乘を開會し破廢し、七方便九法界の人をして均しく皆佛乘の人と爲らしむ。諸大乘經の未だ曾て言はざる二乘成佛を迹門に主説したるは乃ちこの故なり。又爾前の諸大乘經

には曾て佛陀の久遠實成を言はず。その之を顯したるは一代の閑獨り法華本門の壽量品あるのみ、故に法華の本迹二門は爾前の諸權に對すれば皆是れ眞實なり、一妙なり。雙輪の如く、雙翼の如し。然るに此は是れ爾前に對して云ふ、即ち權實相對の一邊なり。若し更に本迹相對して之を云へば迹門は未だ久遠實成を顯さざるが故に仍ほ爾前に同じ。「開目抄」(卷)に云く、

華嚴乃至般若大日經等は二乗作佛を隱すのみならず久遠實成を説きかくさせ給へり。此等の經に二の失あり、一には存行布故仍未開權とて迹門の一念三千をかくせり、二には言始成故曾未發迹とて本門の久遠をかくせり。此等の二の大法は一代の綱骨、一切經の心髓なり。迹門方便品は一念三千二乗作佛を説きて、爾前二種の失の一を脱れたり。然りと雖も未だ發迹顯本せざればまことの一念三千もあらはれず、二乗作佛もさだまらず、永中の月を見るが如し、根なし草の波の上に浮ぶるに似たり。本門に至りて始成正覺を破れば四教の果を破る、四教の果を破れば四教の因破れぬ。爾前迹門の十界の因果を打破つて本門の十界の因果を説き顯す、此即ち本因本果の法門なり。九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備りて、まことの十界互具、百界千如、一念三千なるべし。斯くてかへりみれば華嚴經の臺上十方、阿含經の小釋迦、方等般若の金光明經、阿彌陀經、大日經等の權佛等は、此壽量品の佛の天月暫く影を大小の器に浮べ給ふを、諸宗の學者等近くは自宗に迷ひ違ひて法華經の壽量品のを誦らず、水中の月に實の月の想をなし、或は入て取らむと思ひ、或は繩をつけてつなぎとめんとす。天台云く不識天月但觀池月等云云。

同抄(卷)に又云く、

佛壽量品を説て云く、一切世間天人及阿修羅皆謂今釋迦牟尼佛出釋氏宮去伽耶城不遠坐於道場得阿耨多羅三藐三菩提等云云。此經文は始寂滅道場より終り法華經の安樂行品に至るまでの一切の大菩薩等の所知を擧げたるなり。然善男子我實成佛已來無量無邊百千萬億那由他劫等云云。此文は華嚴經の三處の始成正覺、阿含經に云へる初成、淨名經の始坐佛樹、大集經に云へる始十六年、大日經の我昔坐道場等、仁王經の二十九年、無量義經の我先道場、法華經の方便品に云へる我始坐道場等を一言に大虛妄なりと破る文な

り。此過去常顯るる時諸佛皆釋尊の分身なり、爾前迹門の時は諸佛釋尊に肩を並べて各修各行の佛、かるがゆゑに諸佛を本尊とする考釋尊を下す。今華嚴の臺上、方等般若大日經等の諸佛は皆釋尊の眷屬なり。佛三十成道の御時は大梵天王第六天等の知行の娑婆世界の奪ひ取り給ひき。今爾前迹門にして十方を淨土と號して此土を穢土と説かれしを打かへして、此土は本土なり、十方の淨土は垂迹の穢土となる。佛久遠の佛なれば迹化佉方の大菩薩も教主釋尊の御弟子なり。一切經の中に此壽量品ましまさずば、天に日月の、國に大王の、山河に珠の、人に神のなからんが如くにてあるべきを、華嚴眞言等の權宗の智者とおぼしき澄觀・嘉祥・慈恩、弘法等の一往權宗の人人且自の依經を讚嘆せんために、或は云く華嚴經の教主は報身、法華經は應身と。或は云く法華壽量品の佛は無明の邊域、大日經の佛は明の分位等云云。雲は月を隠し、讒臣は賢人を隠す、人讒れば黃石も玉と見え、諛臣も賢人とおぼゆ。今濁世の學者等彼等の讒義に隠されて壽量品の玉を奪はず。又天台宗の人人も誑されて金石一同の思ひなせる人人もあり。乃至、壽量品の佛を識らざる諸宗の學者は畜生に同じ、不知恩の者なり。

この兩處の文よく迹劣本勝なる所以を示せり。この本迹二門の判は已に云へる如く本是れ天台の所立にして聖祖自作の新義に非ず。但天台は斯く本迹二門を判じながら而もその宗とする所は反つて迹門の方便品を主と爲す。乃ら迹化付囑なる所以なり。茲を以て聖祖は天台に對して之を批するに内證と外用とを分かてり。その本迹二門を判じて本門の特勝を示す如きは内證の邊なり。而も自ら迹門に依りしは即ちその外用なり。

夫れ此の如く法華經には本迹二門ありて前十四品は迹門、後十四品は本門なり。然りと雖も迹化付囑の天台は後十四品を取らずと謂ふに非ず。又本化付囑の聖祖は前十四品を捨つると謂ふに非ず。但迹門を主と爲して本門を迹門に順せしむる是れ天台の法華經なり。本門を主と爲して迹門を本門に

順せしむる是れ聖祖の法華經なり。故に天台の法華經は一部唯迹と爲り、聖祖の法華經は一部唯本と爲る。天台は一部唯迹の故に二十八品は只迹門の正宗たる方便品に結歸し、聖祖は一部唯本の故に二十八品は唯本門の正宗たる壽量品に總收す。而して一部唯迹の法華經は開權顯實を以て其の旨と爲し、一部唯本の法華經は開迹顯本を以て其の要と爲す。言はゆる開迹顯本とは迹の妙法を開して本の妙法を顯すなり。大通智勝佛の出世以來十方諸佛乃至娑婆世界の釋迦牟尼佛の世世番番の成道乃至今番出世成道の所得等總じて皆迹中に於ける能證所證の妙法なり。この迹の妙法を開して五百塵點の久遠本地に於ける能證所證の妙法を顯す。是れ即ち本門壽量品の題號たる開迹顯本の妙法蓮華經の五字なり。故に壽量品の題號たる妙法蓮華經の五字は今番樹王の始得の妙法に非ず、又十方諸佛の始得の妙法に非ず、佛陀言說して方めて起るところの妙法に非ず、唯是れ久遠無始本有の妙法にして宛然法爾の能證所證なるものなり。茲に於てか更に一經迹門、五字本門の義格を成す。法華一經は無始本有の妙法に對すれば尙ほ迹中の所說なるが故なり。今本化付囑は正しく壽量品の題號たる開迹顯本の妙法蓮華經の五字なり。久遠無始本有の妙法なり。我が聖祖はこの五字を末法の初に傳弘す。即ち五字本門なり。五字の壽量品なり。五字の後十四品なり。五字の一經二十八品なり。五字の他に法華經なるものあるに非ざるなり。斯の如き妙法蓮華經の五字は迹化の天台内證に之を識れども外用には全く秘して之を語らず、付囑を重んじて末法の初に讓りしが故なり。建治元年七月の『高橋入道抄』に云

我等が慈父大覺世尊は入壽百歳の時中天竺に出現しましたして一切衆生のために一代聖教を説き給ふ。佛在世の一切衆生は過去の宿習有りて佛に緣厚かりしかば既に得道成りぬ。我滅後の衆生をばいかんがせんとなげき給ひしかば、八萬聖教を文字と爲して、一代理教の中に小乘經をば迦葉尊者に譲り、大乘經并に法華經涅槃經等をば文殊師利菩薩に譲り給ふ。但八萬聖教の肝心法華經の眼目たる妙法蓮華經の五字をば迦葉阿難にも譲り給はず又文殊普賢觀音彌勒地藏龍樹等の大菩薩にも授け給はず、此等の大菩薩等の望み申せしかども佛許し給はず。大地の底より上行菩薩と申せし老人を召出して、多寶佛十方の諸佛の御前にして、釋迦如來七寶の塔中にして、妙法蓮華經の五字を上行菩薩に譲り給ふ。其故は我が滅後の一切衆生は皆我子なり、いづれも平等に不便に念ふなり。然れども醫師の習ひ病に隨つて藥を授くることなれば、我滅後五百年が間は迦葉阿難等小乘經の藥をもて一切衆生に與へよ。次の五百年が間は文殊師利菩薩、彌勒菩薩、龍樹菩薩、天親菩薩等、華嚴經、般若經等の藥を一切衆生に授けよ。我滅後一千年過ぎて像法の時には藥王菩薩、觀世音菩薩等法華經の題目を除きて餘の法門の藥を一切衆生に授けよ。末法に入りなば迦葉、阿難等、文殊、彌勒菩薩等、藥王觀音等の讓られしところの小乘經、大乘經、并に法華經は文字はありとも衆生の病の藥とはなるべからず、所謂病は重し藥は淺し、其時上行菩薩出現して妙法蓮華經の五字を一閻浮提の一切衆生に授くべし。其時一切衆生此菩薩を敵とせん。

この中法華經を他の小乘經大乘經に例同して文字はありとも衆生の病の藥とはなるべからずと云へるは即ち天台傳弘の一部唯迹の『法華經』を斥ひたるなり。故に天台は他の七十餘家に對すれば法華の正系なりと雖も未だ本門の五字を言はざれば只その支系にして本系に非ず。本系の人は三國三時を通じて釋尊以來實に我が聖祖の五字の傳弘あるのみなり。是れ本迹二門の經體の相違之を然らしむ。強て自ら高うするに非ざるなり。

六、五綱。是を以て聖祖は教、機、時、國、教法流布の前後の五綱を立ててその傳弘の意を明かにし而してよく佛教を擇ぶ所以を識らしむ。『教機時國抄』に云く、

一に教とは、釋迦如來所説の一切の經律論五千四十八卷四百八十帙、天竺に流布すること一千年。佛の滅後一千一十五年に當つて震旦國に佛經渡る。後漢の孝明皇帝永平十年丁卯より唐の玄宗皇帝開元十八年庚午に至るまで六百六十四年の間に一切經渡り畢ぬ。此の一切經律論の中に小乘大乘權經實經顯教密教あり、此等を辨ふべし。此の名目は論師人師より出でず、佛説より起る。十方世界の一切衆生一人も無く之を用ふ可し、之を用ひざる者は外道と知るべきなり。阿含經を小乘と説くことは方等般若法華涅槃等の諸大乘經より出でたり。法華經には一向小乘を説きて法華經を説かざれば佛慳貪に墮すべしと説きたまふ。涅槃經には一向小乘經を用ひて佛を無常なりと云ふ人は舌口中に爛る可しと云云。

二に機とは、佛教を弘むる人は必ず機根を知るべし。舍利弗尊者は金師に不淨觀を教へ洗衣者に數息觀を教ふる間、九十日を經て所化の弟子佛法を一分も覺らず、還て邪見を起し一闍提と成り畢ぬ。佛は金師に數息觀を教へ洗衣者に不淨觀を教へたまふが故に須臾の間に覺ることを得たりき。智慧第一の舍利弗すら尙ほ機を知らず、何に況や末代の凡師は機を知り難し。但し機を知らざる凡師は所化の弟子に一向法華經を教ふべし。問て云く、無智の人の中に此經を説くこと莫かれとの文は如何。答て云く、機を知るは智人の法を説く事なり、又誘法の者に向つては一向法華經を説くべし、毒鼓の縁と成さむが爲めなり。例せば不輕菩薩の如し、亦智者と成るべき機と知らば必ず先づ小乘を教へ、次に權大乘を教へ、後に實大乘を教ふべし。愚者と知らば必ず先づ實大乘を教ふべし。信誘共に下種と爲ればなり。

三に時とは、佛教を弘めん人は必ず時を知る可し。譬へば農人の秋冬田作るに種と地と人の功勞とは違はざれども一分も益無く還つて損す。一段を作る者は少損なり、一町二町等は大損なり。春夏耕作すれば上中下に隨つて皆分分に益有るがごとし。佛法も亦復是の如し、時を知らずして法を弘むるは益無きが上還つて惡道に墮するなり。佛出世したまうて必ず法華經を説かんと欲したまふに縱ひ機有れども時無きが故に四十餘年此經を説きたまはず。故に經に云く説く時未だ至らざるが故に等云云。佛の滅後の次の

日より正法一千年は持戒の者は多く破戒の者は少し。正法一千年の次の日より像法一千年は破戒の者は多く無戒の者は少し。像法一千年の次の日より末法一万年は破戒の者は少く無戒の者は多し。正法には破戒無戒を捨てて持戒の者を供養すべし、像法には無戒を捨てて破戒の者を供養すべし。末法には無戒の者を供養すること佛の如くにすべし。但し法華經を謗する者をば正像末の三時に互りて持戒の者をも破戒の者をも無戒の者をも共に供養すべからず、供養せば必ず國に三災七難起り必ず無間大城に墮すべきなり。法華經の行者の權經を謗するは主君親師の所從子息弟子等を罰するが如し、權經の行者の法華經を謗するは所從子息弟子等の主君親師を罰するが如し。又當世は末法に入つて二百一十餘年なり。權經念佛の時歟、法華經の時歟、能能時刻を勤ふべきなり。四に國とは、佛教は必ず國に依りて之を弘むべし。國には美國、熱國、貧國、富國、中國、邊國、大國、小國、一向偷盜國、一向殺生國、一向不孝國等之れあり。又一向小乘國、一向大乘國、大小兼學の國も之れあり。而るに日本國は一向小乘國歟、一向大乘國歟、大小兼學の國歟、能能之を勤ふべし。

五に教法流布の前後とは、未だ佛法渡らざる國には未だ佛法を聽かず、既に佛法渡れる國には佛法を信する者あり。必ず先きに弘まるの法を知つて後の法を弘むべし。先きに小乘權大乘弘まらば後に必ず實大乘を弘むべし。先きに實大乘弘まらば後に小乘權大乘を弘むべからず。瓦礫を捨てて金珠を取るべし、金珠を捨てて瓦礫を取る、こと勿れ。

已上此の五義を知つて佛法を弘めば日本國の國師とも成るべき歟。所以に法華經は一切經の中の第一の經王なりと知るは是れ教を知る者なり。乃至、日本國の一切衆生は桓武皇帝より已來四百餘年一向法華經の機なり。例せば靈山八箇年の純圓の機爲るが如し、是れ機を知れる者なり。乃至、日本國の當世は如來の滅後二千二百一十餘年、後五百歲に當りて、妙法蓮華經廣宣流布の時刻なり、是れ時を知れる者なり。乃至、日本國は一向法華經の國なり、例せば舍衛國の一向大乘なりしが如し。又天竺には一向小乘國、一向大乘國、大小兼學國之れあり。日本國は一向大乘國なり、大乘の中にも法華經の國爲るべきなり。是れ國を知れる者なり。乃至、日本國には欽明天皇の御宇に佛法百濟國より渡り始め、桓武天皇に至るまで二百四十餘年の間、此國に小乘權大乘を弘む。法華經有りとしも其の義未だ顯れず。桓武天皇の御宇に傳教大師有り、小乘權大乘の義を破して法華經の實義を顯せしより已來又

異義無く純一に法華經を信ぜり。設ひ華嚴般若深密阿含大小の六宗を學する者も法華經を以て所詮と爲す。況や天台眞言の學者をや。何に況や在家無智の者をや。例せば觀音山に石無く蓬萊山に毒無きが如し。建仁より已來今に五十餘年の間、大日佛陀、禪宗を弘め、法然隆寛、淨土宗を興し、實大乘を破して權宗に付き、一切經を捨てて教外を立つ。譬へば珠を捨てて石を取り、地を離れて空に登るが如し。此は教法流布の先後を知らざる者なり。

この五綱は蓋し「涅槃經」の九莫の垂誡に由りて之を立つ。同經卷十六(南)梵行品に云く、

復次に善男子、若し我が弟子是の涅槃經を受持し讀誦し書寫し演說せんには非時に説くこと莫れ、非國に説くこと莫れ、請せざるに説くこと莫れ、輕心にして説くこと莫れ、處處にして説くこと莫れ、自嘆して説くこと莫れ、輕他して説くこと莫れ、佛法を滅して説くこと莫れ、世法を熾然にして説くこと莫れ。

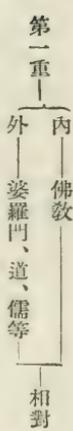
非時に説くこと莫れとは時を知るの謂ひなり。非國に説くこと莫れ處處に説くこと莫れとは國を知るの謂ひなり。請せざるに説くこと莫れとは機を知るの謂ひなり。佛法を滅して説くこと莫れ世法を熾然にして説くこと莫れとは教を知るの謂ひなり。教法の流布は必ず由あり序あり、豈に輕忽なるべけんや、故に輕心にして説くこと莫れと謂ふなり。前權後實の次第は佛意より興る、豈に私情の讚毀を許さんや、故に自嘆して説くこと莫れ輕他して説くこと莫れと謂ふなり。

而もこの九莫は時を知るの一事を以てその要と爲す。時を知るを以て大法師と名くと説けるは是れなり。故に今の五綱も亦偏に末法の時を知るを以て主と爲す。謂はゆる教は末法の教云何を知るなり。機は末法の機云何を知るなり。國は末法の國云何を知るなり。教法流布の前後は末法の流布云何を知

るなり。斯くてこの五綱を以て一末法應時の大法は本化付囑の本門の題目五字なることを知らしむるなり。

七、本化別頭の教相門。天台に教相觀心の二門あり。聖祖も亦教相觀心の二門あり。彼の迹化なるに對して名けて本化別頭の教觀と云ふ。謂はゆる其の教相は五重相對、其の觀心は三大祕法なり。先づ教相の五重相對とは、第一に内外相對、第二に大小相對、第三に權實相對、第四に本迹相對、第五に種脱相對なり。

第一に内外相對とは、凡そ一切の教法を分類して内外の二道と爲す。釋尊説く所の佛教は出世間の内道なり。他の婆羅門、及び道、儒等の諸の教法は世間の外道なり。この二道を相對して外道の諸の教法を捨てて内道佛教を取る。是れ第一重の教相なり。此の重には所對只彼の外道に在るが故に敢て内道の中の得失を言はず。通じて一の佛教なり。



第二に大小相對とは、内道佛教の中に更に大小二乗を判ず。釋尊一代五十年の閉、鹿野阿含の十二年の説は小乘なり、最初華嚴の三七日、方等般若の三十年、法華涅槃の八年及び一日一夜の説等は大乘なり。この大小二乗を相對して小乗を捨てて大乘を取る。是れ第二重の教相なり。此の重には所對

只彼のただか小乘せうじように在るが故ゆゑに敢て大乘だいじようの中の淺深せんじんを言はず。通じて一いちの大乘だいじようなり。

第二重 小—阿含 大—華嚴、方等、般若、法華、涅槃 一相對

第三に權實相對とは、大乘だいじようの中に又更に權實二教ごんじつにけうを判ず。華嚴けごん、方等ほうとう、般若はんにかの各部かぶぶは權大乘ごんだいじようなり。

法華涅槃は實大乘じつだいじようなり。この權實二教ごんじつにけうを相對して權大乘ごんだいじようを捨てて實大乘じつだいじようを取る。是れ第三重の教相けうさうなり。

此の重ちゆうには所對しよたい只彼の權大乘ごんだいじように在るが故ゆゑに敢て實大乘じつだいじようの中の勝劣しやうれつを言はず。法華の本迹ほんじやくは通じて一いちの妙法めうほふなり。

第三重 權—華嚴、方等、般若 實—法華、涅槃 一相對

第四に本迹相對ほんじやくたいとは、實大乘じつだいじようの中に又復更に本迹二門ほんじつにもんを判ず。一往之いちわうこれを云へば法華の前十四品ぜいじよしほしやくは迹門じやくもんなり。

後十四品ごにじよしほしやくは本門ほんもんなり。再往之さいわうこれを云へば本門正宗分ほんもんしやうじゆぶんの壽量じゆりやうの一品二半いつほんにはんを除きて前後の諸品しよほん及び

『涅槃經』等ねはんぎやう皆是れ迹門じやくもんなり。又一品二半またいつほんにはんの中に更に序、正、流通りゆうつうの三段さんだんあり、初の涌出品ゆふしゆくの半品はんほんは序

分ぶんなり、壽量じゆりやうの一品いつほんは正宗分しやうじゆぶんなり、後の分別功德品ぶんべつくどくほんの半品はんほんは流通分りゆうつうぶんなり。故に本門ほんもんとしては正しく壽

量りやうの一品いつほんなり。この本迹二門ほんじつにもんを相對して迹門じやくもんを捨てて本門ほんもんを取る。是れ第四重の教相けうさうなり。此の重ちゆうに

は所對しよたい只彼の迹門じやくもんに在るが故ゆゑに敢て本門ほんもんの中の文上文底もんじやくもての別を言はず。唯一ただいちの壽量品じゆりやうほんなり。

第四重——本——壽量一品——相對
——前後各品涅槃經等——相對

第五に種脱相對とは、本門壽量一品に又復更に種脱の二を判ず。文上の壽量品は在世の衆生の脱益を説く、即ち脱益の本門なり。文底の壽量品は末法の衆生の種益を示す、即ち種益の本門なり。脱益の本門は壽量一品なり。種益の本門は只久遠無始の本有の本法たる題目の五字のみなり。この種脱の二を相對して文上の壽量一品を捨てて文底の題目五字を取る。是れ第五重の教相なり。

第五重——種——題目五字——相對
——脱——壽量一品——相對

約して之を云へば一切の教法の中には只内道なり。内道の中には只大乘なり。大乘の中には只實大乘なり。實大乘の中には只法華本門壽量一品なり。壽量一品を詮するに畢竟して只題目の五字なり。この五字は久遠無始の本有の本法なり。是の如く五重迭に相對取捨し、次第に従淺至深して竟に本有の本法たる題目の五字に結歸せしむ。是れ此の本化別頭の教相門なり。

この五重教相の從淺至深の次第は釋尊一代の化儀全く然るのみならず、滅後の傳弘亦之に準せざるは莫し。正法の初の五百年の迦葉、阿難等の小乘の傳弘は主として外道を破す、第一内外相對の重なり。次の五百年の龍樹、天親等の權大乘の傳弘は主として小乘を破す、第二大小相對の重なり。像法

の一千年の閉天台傳教等の傳弘は主として爾前の權大乘を破して法華の實大乘なることを顯す、第三權實相對の重なり。第四重本迹相對は天台の言太た幽微にして其旨未だ彰著ならず、第五重種脫相對は全く默して之を秘せり。この本迹・種脫の兩重は即ち本化たる我が聖祖の末法に於ける教相の破立なるものなり。然れども五重は相聯して迭に援引せり。若し先づ内外を判せざれば大小別つに由無し。先づ大小を判せざれば權實別つに由無し。先づ權實を判せざれば本迹別つに由無し。故は前三重亦皆本化別頭の教相たることを得るなり。是故に我が本化の家にては内外相對の重には迦葉、阿難等を正師と爲して其の義を用ひ、大小相對の重には龍樹、天親等を正師と爲して其の義を用ひ、權實相對の重には天台傳教等を正師と爲して其の義を用ふ。所用彼に在りと雖も能用我に在り。彼の内外、大小、權實の各重は皆我が本化の教相なり。囑累品の總付の意深く之を念ふべし。

神力品に本化付囑を説き而も且つ豫めその傳弘の相を示して云く、

如來の滅後に於て、佛の所説の經の四緣及び次第を知つて、義に隨つて實の如く説かん。日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて、能く衆生の闇を滅し、無量苦難をして畢竟して一乘に住せしめん。

言はゆる佛の所説の經とは一代五十年の説法なり。因緣とは久遠の下種を因として今番脱益の緣あり、本門を因として迹門の緣あり、實教を因として權教の緣あり、大乘を因として小乘の緣あり、内道を因として外道の緣あり。故にその教に入るには又外道を因と爲して而して内道の緣生じ、小乘を

因と爲して而して大乘の縁生じ、權教を因と爲して而して實教の縁生じ、迹門を因と爲して而して本門の縁生じ、在世の脱益を因と爲して而して末法下種の縁生ず。在世滅後に通じて皆經の因縁に非ざるは莫し。此の因縁や即ち五重なり。五重の從淺至深はその次第なり。是の如き經の因縁及び次第を知つて義に隨つて實の如く説かん、斯の人豈に本化なるに非ずや。

『涅槃經(南本卷)の聖行品に云く、

文殊師利菩薩、佛に白して言く、世尊、言はゆる實諦とは其義云何。佛の言く、善男子、實諦と言ふは名けて眞法と曰ふ、善男子、若し法の眞に非ざるは實諦と名けず。善男子、實諦とは顛倒無きなり、顛倒無きものを乃ち實諦と名く。善男子、實諦とは虛妄有ること無きなり、若し虛妄有るは實諦と名けず。善男子、實諦とは名けて大乘と曰ふ、大乘に非ざるものは實諦と名けず。善男子、實諦とは是れ佛の所説なり、魔の所説に非ず、若し是れ魔の説にして佛の説に非ざるものは實諦と名けず。善男子、實諦とは一遣清淨にして二有ること無きなり。善男子、常有り樂有り我有り淨有り、是則ち名けて實諦の義と爲す。

初に文殊師利實諦の義を問ふ。佛之に答ふるに七句あり。始の五句は五雙各對す。云く眞法非眞法對、云く無顛倒顛倒對、云く無虛妄虛妄對、云く大乘非大乘對、云く佛說非佛說對なり。その佛說非佛說對は今の五重の第一重内外相對なり。大乘非大乘對は第二重大小相對なり。この二、並に解すべし。その無虛妄虛妄對は權を虛妄と爲し實を無虛妄と爲す、爾前四十餘年未だ眞實を顯はさざるは虛妄なり。法華獨り眞實無虛妄なり。即ち是れ第三重權實相對なり。無顛倒顛倒對は本門を無顛倒と爲し迹門を顛倒と爲す。壽量品の偈に迹門の見を破して顛倒の衆生と云へるは是れなり。即ち是れ第四

重本迹相對なり。眞法非眞法對は本門の中にも、文上脱益の壽量は尙ほ非眞法の嫌あり、只久遠下種の題目五字のみ應當に稱して眞法と爲すべし、神力品に題目五字を眞淨大法と云ひたるは是れなり、即ち是れ第五重種脱相對なり。『涅槃』の五對は深を先とし淺を後とし、今の五重は淺を先とし深を後とす。次第は異なるに似れども、義意は毫も渝らず。復次に六七の兩句は正に實諦を結示す。言はゆる實諦とは題目の五字なり。是を以て一道清淨二有ること無しと云ふ。妙法の故に一道なり、蓮華の故に清淨なり、二有ること無きが故に經なり。而してこの題目の五字は本門壽量の教意に在りては是れ唯一本佛の寶號なり。本佛の寶號に乃ち四德波羅蜜の眞實の義あり。是を以て常あり樂あり等と云ふ。結經にこの旨あり云く、

釋迦牟尼佛をば毘盧遮那通一切處と名け、其佛の住處を常寂光と名く、常波羅蜜に攝成せられたる處、我波羅蜜に安立せられたる處、淨波羅蜜の有相を滅するの處、樂波羅蜜の身心の相に住せざるの處、云云。

是の如く五重の教相は源遠く如來の金口に出づ、豈にそれ私臆ならんや。天台の五時八教はこの中第三重の教相に止まる。況や華嚴の五教、眞言の十住心、淨土の聖淨二門等の諸判をや。その優劣較するに足らざるのみ。

又本化の正判たる第四、第五兩重の中第四重本迹相對に至りて縱横の二判あり。上に云ひたるが如き内外、大小、權實、本迹の從淺至深の次第は是れ縱なり。更に本門正宗壽量一品二半を取つて獨り

名けて内、大、實、本と爲し、其の他の諸經を束ねて皆外、小、權、迹と爲すの判あり、是れ横なり。
『觀心本尊抄』に云く、

一品二半よりの外を小乘教、邪見教、未得道教、覆相教と名く。其の機を論すれば德薄垢重功權貧窮孤露禽獸に同じ。

この義また壽量品の文に明かなり。云く、

一切世間の天人阿修羅は、皆今の釋迦牟尼佛、釋氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂へり。

凡そ壽量顯本の本佛を識らずして釋尊を伽耶始成の佛陀なりと謂はんは天人修羅の六道の妄見なり、未だ出世間の内道の正見に到らざる一切世間の外道の邪見なり。故に一品二半よりの外は一切諸經を皆邪見教と名く。即ち内外相對なり。又云く、

如來、諸の衆生の小法を業へる德薄垢重の者を見ては、是人の爲めに我れ少くして出家し阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く。

凡そ伽耶始成の佛陀を説くは小機に對するの小法なり、大乘の法に非ず。故に一品二半よりの外は一切諸經を皆小乘教と名く、即ち大小相對なり。又云く、

然るに善男子、我れ實に成佛してより已來無量無邊百千萬億那由佉劫なり。乃至、常住にして滅せず。

我實成佛の實の一字は正しく本覺を指す。凡そ久遠の本覺を隠して伽耶始成を説くの經は皆是れ未得道の權教にして眞實の教に非ざるなり。故に一品二半よりの外は一切諸經を皆未得道教と爲す。即ち權實相對なり。若し本迹相對は壽量一品二半の全文皆斯旨なること煩しく言を須たす。然れども今

別して一文を擧げば、云く、

善哉善哉、阿逸多、乃し能く佛に是の如き大事を問へり。汝等當に共に一心に精進の纏を被、堅固の意を發すべし。如來今諸佛の智慧、諸佛の自在神通の力、諸佛の師子奮迅の力、諸佛の威猛大勢の力を顯發し宣示せんと欲す、當に精進に一心なるべし。我れ此事を説かんと欲す、疑悔有ることを得ること勿れ。佛智は思議し且し、汝今信力を出して、忍善の中に住せよ。昔より未だ聞かざる所の法、今皆當に聞くことを得べし。我れ今汝を安慰す、疑懼を懷くことを得ること勿れ。佛は不實の語無し、智慧量る可からず、得る所の第一の法は甚深にして分別し且し、是の如きを今當に説くべし。汝等一心に聽け。

是れ本門正宗の中前半品略開近顯遠の最初文なり。壽量正説の廣開近顯遠は此れより起る。此の中「昔より未だ聞かざる所の法」とは總じて華嚴以來法華經迹門に至るまでの一切諸經に對して云ふなり。之に對して今當に説かんとする壽量品の本門をば「得る所の第一の法」と嘆せり。爾前及び迹門の一切諸經と本門の一品二半とを相對したる勝劣の判、よりにて以て之を見るべし。而して其の「得る所の第一の法」は即ち諸佛の智慧なり。諸佛の自在神通の力、諸佛の師子奮迅の力、諸佛の威猛大勢の力は皆壽量の顯本に由りて其の祕蓋を盡くさるべし、爾前及び迹門は其の祕蓋を隱覆す、今顯本を説く時その祕蓋を開發す、故に顯發宣示と云ふなり。『涅槃經』(南本卷五)に曰く、

秋の満月の空に處して顯露清淨にして翳り無く人皆觀見するが如く、如來の言も亦復是の如し、開發顯露清淨にして翳り無し。

爾前及び迹門は顯本を説かざれば顯露清淨ならずして方便の翳り月光を覆へり。故に一品二半より外の一切諸經を覆相教と爲すなり。

縦は一往當分の判なり。横は再往跨節の判なり。この縦横の兩判を以て一切の諸教を本門正宗一品二半に結束せしめ、而して更に第五重の種脱相對を開して竟に久遠無始の本種本法たる題目五字に歸會せしむ。是れ本化別頭の教相門なるものなり。

尙ほ爾前、迹門、本門、觀心の四重に約して興廢を判するの義『十法界抄』等に看えたり、これ等と今の五重教相の同異委しく云ふに違あらざれば且らく之を略す云云。

八、本化別頭の觀心門。五重の教相を尅詮するに唯題目五字のみなること上に言ふが如し。而してこの題目五字に於て本化別頭の觀心門を立す。之を稱して三大祕法と云ふ。三大祕法とは第一に本尊、第二に戒壇、第三に題目なり。

夫れ教相門に於て已に題目五字のみなることを識らば、更に之を將つて轉じて自家の信行と爲さざる可からず。この信行や即ち觀心門なり。故に教相門に於ける題目五字は觀心門に至り南無の二字を冠らせて七字と爲す。

教相門——妙法蓮華經——五字

觀心門——南無妙法蓮華經——七字

即ち南無妙法蓮華經の七字は本化別頭の本尊なり。南無妙法蓮華經の七字は本化別頭の戒壇なり。南無妙法蓮華經の七字は本化別頭の題目なり。故に之を開すれば三祕なれども合すれば只南無妙法蓮

華經の一祕なり。一祕即三祕、三祕即一祕なり。今之を辨するに分つて三と爲す。初に總説。次に各説。三に結。

第一 總説。(南無妙法蓮華經) 觀心門の三大祕法は總じて之を言へば唯南無妙法蓮華經の一祕なること今已に述べたり。然らば斯の南無妙法蓮華經の七字の意義果して如何。抑も教相第三權實相對

の重の題目五字は一經二十八品の名なり。第四本迹相對の重の題目五字は本門正宗壽量一品二半の名なり。而して第五重種脱相對の重の題目五字は直ちに久遠無始の本種本法を指すなれば一經の名に非

ず又一品二半の名に非ずして本有の經體なるものなり。その言はゆる妙とは本佛の不可思議を歎美したるなり。法とに其の不可思議の自證境界なり。蓮華とは更に其の不可思議の自證境界を況顯す。而

も亦其の不可思議の自證境界は實に蓮華の當體なるが故なり。蓮は本佛本有の妙果なり。華は本佛本有の妙因なり。本有の妙果として無始の佛界あり、本有の妙因として無始の九界あり。九界佛界與

に無始にして本因本果並に本有に非ざるは莫し。皆本佛の當體蓮華なり。經とは本佛の慈悲益物三世常住にして變らざるなり。即ち斯の五字は是れ全法界にして五字の外に一法一物を存せず、森羅三千

は唯本佛一體の妙法蓮華經なるものなり。而して本佛の過去久遠五百塵點の時斯の五字を一切衆生の心田に下して佛種と爲す、之を下種と云ふ。この下種の時や一切衆生をして妙法蓮華經の五字を信じ

行せしむる本佛の教令始めて下りしの時にして、正了縁の三佛性の中には之を了因の種と云ふなり。

語を換へて言へば五百塵點の下種は妙法蓮華經の本佛を信じ行する南無妙法蓮華經の信心の智種を下したるなり。是の下種の時に於て經體たる五字は信心の七字と爲りて本因佛種と云はれ、一切信行の根本と爲る。下種の信心と云ふは是れなり。是故に南無妙法蓮華經の七字は本佛の教令に順ずる信心なり。五百塵點の下種の本因佛種なり。この七字の外に更に佛種なるもの無し。三世諸佛の成道も唯この七字の下種信心を開發するに在り。餘教餘行を以て種と爲すに非ず。此の義最も精討を要す。諸宗無得道の折伏の元意深く此に在るなり。今末法に於て南無妙法蓮華經の七字を信じ行するは亦本佛下種の教令に順ずるが爲めなり。更に又この七字を以て普く逆謗に當るは末法の今日は即ち五百塵點の下種の時と同じきを以ての故なり。壽量品に云く、

是の好き良藥な、今留めて此に在く、汝取つて服すべし、差えじと憂ふること勿れ。

是れ醫王の譬喩にして、末法の爲に南無妙法蓮華經の七字の良藥を留むることを説けるなり。末法の要法豈に七字の良藥に過ぎんや。之を取らず之を服せざるは實に本佛の教令に背戾せる謗法の大罪なるなり。

然るに是の好き良藥をば壽量品に色香味皆悉具足と説けり、色は以て戒に喩へ、香は以て定に喩へ、味は以て慧に喩ふ、即ち南無妙法蓮華經の七字の良藥に戒定慧の三皆悉く具足せるを云ふなり。故に此の七字を開して本尊、戒壇、題目の三祕と爲す。本尊は定なり、戒壇は戒なり、題目は慧なり。

この三學藏秘して悉く七字に具足す、故に三祕の名あり。三學の三祕は只七字の一祕なり。夫れ七字の信心は已に本佛本因の妙位に於ける境智一如の大寂にして行者の自身全く是れ本尊の當體なり。此の觀心の本尊は究竟の妙定なり。又七字の信心は餘教餘行の惡非を防止す。萬戒の功德攝めてこの七字の信心に在り。究竟の妙戒なり。又復七字の信心に即ち本佛本因の佛智佛慧にして如來行なるものなり。究竟の妙慧なり。

又壽量品に云く、

爾時に佛、諸の菩薩及び一切大衆に告げたまはく、諸の善男子、汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし。復大衆に告げたまはく、汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし。又復諸の大衆に告げたまはく、汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし。是時菩薩大衆彌勒を首と爲し合掌して佛に白して言く、世尊、唯願くば之を説きたまへ、我等當に佛語を信受したてまつるべし。是の如く三たび白し已りて復言く、唯願くば之を説きたまへ、我等當に佛語を信受したてまつるべし。爾時に世尊、諸の菩薩の三たび請して止まざることを知ろしめして、之に告げて言く、汝等諦に聽け如來祕密神通の力を。

天台の『文句』(卷九)にこの如來祕密を釋して云く、

祕密とは、一身即三身なるを名けて祕と爲し、三身即一身なるを名けて密と爲す。又昔し説かざる所を名けて祕と爲し、唯佛のみ自ら知るを名けて密と爲す。乃至、佛三世に於て等く三身有り、諸教の中に於ては之を祕して傳へず。

この三身祕密の經文は正に是れ三祕の依據爲るなり。故に『御義口傳』(卷下)に云く、

如來祕密神通之力の事、無作三身の依文なり。

無作三身の寶號を南無妙法蓮華經と云ふなり、壽量品の事の三大事とは是れなり。

五雙各對して一の眞實諦に歸せしめ、而して一の眞實諦を示すに三法を以てす。即ち五重相對して妙法蓮華經の五字に歸せしめ、而して更に觀心門に於て三祕を開するとその旨毫も異らず。況やその依據の明文として已に壽量品の三身三學あるをや。この壽量品を正證として尙且つ『涅槃經』の三法を助證と爲さば三祕を開する所以の決して妄ならざることを知るに足るべし。

『涅槃經』の三法は文の如く如來眞實と虚空眞實と佛性眞實となり。言はゆる如來眞實とは本尊なり。虚空眞實とは戒壇なり。佛性眞實とは題目なり。題目は南無妙法蓮華經の信心なり、此の信心は即ち下種本因の佛性なり、題目の外に佛性眞實なるものあらざるなり。又南無妙法蓮華經の信心は是れ本有靈山の虚空會なり、本佛の寂光本土なり、一切諸佛菩薩乃至全法界皆この信心の虚空本土に住して自爾の戒曼荼羅常住にして毀れず、戒壇の外に虚空眞實なるものあらざるなり。又南無妙法蓮華經の信心は本佛の本因なり。本因の處に本果を具足す。信心の當相即ち本佛の全體なり。之を觀心本尊と云ふ。本尊の外に如來眞實なるものあらざるなり。

已上述べるところは三祕の經證なり、而して自ら滅後の宗に對して此の名を立つるの意をも含めり。即ち眞言宗の三密に對して三大祕法と云へるなり。本尊は意祕密なり。戒壇は身祕密なり。題目は口祕密なり。この三業は本佛不可思議の三業なるが故に名けて祕密と爲す。亦是れ如來祕密神通之力の經意なり。又廣く諸宗に對するの意なり。本尊は別して眞言宗に對し、戒壇は別して律宗に對し、題

目は別して念佛宗に對す。而して南都時代の各宗は攝して之を律宗の下に收め、鎌倉時代の諸宗は攝して之を念佛の下に收めたり。又迹化たる天台に對するの意あり。即ち迹門の本尊に對して本門の本尊と云ひ、迹門の戒壇に對して本門の戒壇と云ひ、迹門の題目に對して本門の題目と云ふ是れなり。此等の意義廣く遺文に散在せり。委しく識らんと欲せば請ふ懇に之を檢せよ。之を概するに諸宗に對するの三祕は權實相對に約し、天台に對するの三祕は本迹相對に約す。然るに其の究竟の實義は必ず種脫相對の上に於て立つるところの觀心門の三祕ならざるべからず。久遠下種の南無妙法蓮華經の本尊、戒壇、題目ならざるべからざるなり。七字に約して三祕を總説すること了る。

第二 各説 其一。(本尊) 次に三祕を各説せば第一に本尊なり。本尊の名は密教渡來以後諸宗皆之を用ふ。梵名は娑地提嚩多なり。(大日經義釋卷十四、)娑地を本と譯し提嚩多を所尊と譯す。故に具さには本所尊なり。又娑地を自とも譯す。自所持の尊なり。これ等を略して本尊と云ふ。『法華』の中に亦この名義を示せり。方便品に云く、

我れ相を以て身を嚴り、光明世間を照らす。無量の衆に尊まれて、爲めに實相の印を説く。

この中、所尊の二字は提嚩多なり、我の字は自、又は本にして娑地なり。即ち本所尊の旨正しく此の文に在るなり。古來本尊の二字を解するに根本尊崇、本來尊重、本有尊形等の諸義を用ふれども本有尊形を以て適當の解と爲すべし。殊に本化の宗としては十界の色像をば直ちに本佛本有の無作の尊

形と爲す事圓常住の旨なれば、聖祖も本有尊形の一義に約して他の義を取らず。是れ注意すべきことなり。

其の言はゆる本尊とは即ち南無妙法蓮華經の七字なり。斯の七字即ち無作三身の本佛の寶號なり。

『日向記』に云く、

日蓮建立の御本尊は南無妙法蓮華經是れなり。

此の七字の寶號を以て本佛の正體を顯す、本佛の正體是れ即ち本化別頭の本尊なり。故に『本尊問答抄』に云く、

釋迦多寶を本尊と爲るは法華經の行者の正意に非ず。

尚ほ『法華經』の虚空會上の釋迦多寶を取らず、況や大日、彌陀等の迹中水月の諸佛如來等をや。況や其以下の菩薩羅漢乃至人天鬼畜等をや。彼の大日、彌陀等は佛界なり。菩薩以下は九界なり。而して本佛は佛界に非ず九界に非ず十界に超絶して全法界の總體爲り。この總體を取つて本尊と定むる時只南無妙法蓮華經の七字なるなり。『御義口傳』(卷上)に云く、

妙法蓮華經は十界の頂上なり。

『諸法實相抄』に云く、

釋迦多寶の二佛と云ふも用の佛なり、妙法蓮華經こそ本佛にては御座し候へ。

夫れ無始本有に本佛本果の佛界あり、この佛界より迹中の佛界を現す。又無始本有に本佛本因の九界あり、この九界より迹中の九界を現す。今釋迦多寶及び大日彌陀等は佛界と云ふと雖も迹中の所現にして用の三身に過ぎず。妙法蓮華經の本佛こそ正しく體の三身なるべけれ。又體用を攝したる俱體俱用の本有三身なるべけれ。この本有三身の本佛を以て本尊と爲す是れ法華經の行者の正意なり。

この本尊を示すが爲めに文永十年四月（日本紀元一九三三、洋曆一二七三）先づ『觀心本尊抄』を製し、次で同年七月八日始めて之を圖顯す。稱して大曼荼羅と云ふ。中央に本尊の正體として南無妙法蓮華經の七字を書し、左右に釋迦多寶以下の十界を羅列して三千の諸法皆本佛一念の不可思議境界なることを識らしむ。言はゆる事の一念三千なるものはれなり。故に委しく其の義意を檢せんと欲せば正しく『觀心本尊抄』に據るべしと雖も他に亦簡要の説明無きに非ず。建治三年八月の『日女抄』の如きは尤も吾人をして本尊曼荼羅を解了し易からしめたり。其文に云く、

抑も此御本尊は在世五十年の中には八年、八年の間にも涌出品より囑累品まで八品に顯れ給ふなり、さて滅後には正法像法末法の中には正像二千年にほいまだ本門の本尊と申す名だにも無し、何に況や顯れ給はむや、又顯すべき人も無し。天台妙樂傳教等は内には驗み給へども故こそあるらめ言には出だし給はず。乃至、然るに佛滅後二千年過ぎて末法の始の五百年に出現せさせ給ふべき由經文赫赫たり明明たり、天台妙樂の解釋分明なり。爰に日蓮いかなる不思議にてや候らむ、龍樹天親等天台妙樂等だにも顯はし給はざる大曼荼羅を、末法二百年の比はじめて法華弘通の旗印として顯はし奉るなり。是れ全く日蓮が自作に非ず、多寶塔中大平尼世尊分身の諸佛すりかたぎたる本尊なり。されば首題の五字は中央にかかり、四大天王は寶塔の四方に坐し、釋迦多寶本化の四

菩薩肩を並べ、普賢文殊等舍利弗目連等坐を屬し、日天、月天、第六天の魔王、龍王、阿修羅、其外不動愛染は南北の二方に陣を取り、惡逆の達多、愚癡の龍女一座をばり、三千世界の人の壽命を奪ふ惡鬼たる鬼子母神、十羅刹女等、加之日本國の守護神たる天照大神、八幡大菩薩、天神七代、地神五代の大神、總じて大小の神祇等、體の神つらなる、其餘の用の神豈もるべきや。寶塔品に云く、接諸大衆皆在虛空云云。此等の佛菩薩大聖等、總じて序品列座の二界八番の雜衆等一人ももれず、此御本尊の中に住し給ひ、妙法五字の光明に照されて本有の尊形となる、是を本尊とは申すなり。經に云く、諸法實相とは是なり。妙樂云く、實相は必ず諸法、諸法は必ず十如、乃至、十界は必ず身土と云云。又云く、實相の深理本有の妙法蓮華經と云云。傳教大師云く、一念三千即自受用身、自受用身とは出尊形佛なりと。此故に未曾有の大曼荼羅とは名付奉るなり。佛滅後二千二百二十餘年には、此御本尊いまだ出現し給はずと云ふことなり、乃至、此御本尊全く餘所に求むる事なけれ、只我等衆生の法華經を持ちて南無妙法蓮華經と唱ふる胸中の肉團におはします事なり、是を九識心王眞如の都とは申すなり。十界具足とは十界一界もかけず一界ごとにあるなり、之に依りて曼荼羅とは申すなり。曼荼羅と云ふは天竺の名なり、此には輪圓具足とも功德聚とも名くるなり。此御本尊も只信心の二字にをさまれり、以信得入とは是なり。日蓮が弟子檀那等正直捨方便不受餘經一偈と無二に信する故によつて、此御本尊の寶塔の中へ入るべきなり、たのもし、たのもし。

この中「首題の五字中央にかけり」とあるは五字即七字なることを顯したるにて、本尊曼荼羅の中央は必ず南無妙法蓮華經の七字なり。この七字の信心即ち五字本佛の全體なるが故なり。又「妙法五字の光明に照されて本有の尊形となる」とは、妙法五字は本佛なり。その光明は下種の信心にして即ち南無の二字なり。南無妙法蓮華經の下種の信心によりて十界の衆生皆本有の尊形となる、是れ本尊の正しき名義なり。「此御本尊全く餘所に求むる事なけれ、只我等衆生の法華經を持ちて南無妙法蓮華經と唱ふる胸中の肉團におはします事なり」とは即ち觀心本尊の旨を詮す。夫れ本佛は十界の頂上なり。

森羅三千の總體なり。而も下種の故に宛然として吾等衆生の心内に在り。今この心内の本佛を信知する是れ觀心門たる所以にして信行の肝要全く茲に存す。故に一餘所に求むること勿れ」と云ふ。又その心内に在りとは只下種の信心に在るなり、餘心に在るに非ず。南無妙法蓮華經の下種の信心に非ざらんよりは本佛本尊は座しますべからずと知るべきなり。

是の如く本尊は必ず南無妙法蓮華經の七字なれども此の七字に亦人法の二義あることを識らざるべからず。人とは本佛本有の能證なり。法とは本佛本有の所證なり。本佛本有の能證の人に從へば南無妙法蓮華經の七字は人本尊爲り、本佛本有の所證の法に從へば南無妙法蓮華經の七字は法本尊爲り、人本尊の故には十界皆本佛の智ならざるは莫く、法本尊の故には十界皆本佛の境ならざるは莫く、境智一如人法一體にして唯本佛の南無妙法蓮華經なるなり。『報恩抄』に云く、

問て云く、天台傳教の弘通し給はざる正法ありや。答て云く、有り。求めて云く、何物ぞや。答て云く、三あり、末法の爲めに佛留め置き給ふ、迦葉、阿難等、馬鳴、龍樹等、天台傳教等の弘通せさせ給はざる正法なり。求めて云く、其形貌如何。答て云く、一には日本乃至一闍浮提一同に本門の教主釋尊を本尊とすべし、所謂寶塔の内の釋迦多寶外の諸佛并に上行等の四菩薩勝士となるべし。二には本門の戒壇。三には日本乃至漢土月氏一闍浮提に人ごとに有智無智をきらはず、一同に他事をすて南無妙法蓮華經と唱ふべし。

この中本尊を示すに「本門の教主釋尊を本尊と爲すべし」と云ふは、即ち人本尊の義にして、南無妙法蓮華經の七字を指して本門の教主釋尊とは云ひしなり。この本門の教主釋尊とは本門壽量に説き顯

はされたる五百塵點の下種の教主なり。その下種の教主たる釋尊を本尊とする時に唯南無妙法蓮華經の七字なるなり。是故に本門の教主釋尊とは本佛なり。この本佛に對しては釋迦多寶及び十方の諸佛并に上行等の四大菩薩皆脇士爲り。曼荼羅の座位之を看るべし。豈にその脇士の釋迦を將つて中央の本佛に濫せんや。『本尊問答抄』に言はるる釋迦多寶を本尊とするは法華經の行者の正意に非ざるの理深く按ずべし。

尚ほ一尊四士、二尊四士等本尊に關する種種の義あれども今且らく之を略す。要は七字本尊の正義なり。之を失へば則ち本尊を失ふ。徒に紙墨木繪の末に趁りて下種信心の本意を忘るること勿れ。信心の外に全く本尊はあらぬなり。

第三 各説 其二。(戒壇) 次に戒壇とは戒を受得する作法の壇場なり。小乗には二百五十戒五百戒等の七衆各別の戒を受得し、大乘には十重、十無盡戒を受得し、乃至顯密權實戒體各各同からず。今本化別頭の觀心門の戒壇は全く彼等に異なりて南無妙法蓮華經の下種の信心を以て戒體と爲しこの下種の信心を發得し領納するの處を戒壇と爲す。

夫れ南無妙法蓮華經の下種の信心は元是れ本佛の教令にして一切戒の根本なり。この教令に順ずる者は一切戒の根本を持つ眞實の持戒なり。之に背く謗法の者は一切戒の根本を破る破戒なり。故に信と不信とを以て直ちに戒の持破を判す。二百五十戒等の大小諸乘の戒の如きを詮と爲さず。信は作な

り。不信は止なり。この止作は本佛の教令なり。五百塵點の久遠の下種なり。故に下種の信心と云ふ。この信心全く下種なるが故に本有なり。本有の戒體たる南無妙法蓮華經の信心なり。この本有の戒體を發得し領納する時行者直ちに本佛の戒曼荼羅に入り、自身の當位を改めずして無作三身の覺體を究竟し成就し本佛本因の妙位に安住す。之を名けて授職灌頂と云ふ。授職とは妙覺法王の職位を授くるの意なり、灌頂とは授職の時行者の頂に智水を灌ぐの義なり。この授職灌頂の作法は是れ戒壇の儀相なるものなり。文永九年四月の『最蓮抄』に云く、

貴邊に去る二月の比より大事の法門を教へ奉りぬ。結句は卯月八日夜半寅刻妙法の本圓戒を以て授職灌頂せしめ奉る者なり。此の授職を得るの人争でか現在なりとも妙覺の佛を成ぜざらんや。若し今生妙覺ならば後生豈に等覺等の因分ならんや。

又『得授職人功德法門抄』の一書に具さに爾前と法華との授職灌頂の相違を示して法華の授職の功德を讚嘆せり。その結文に云く、

是の如き莫大の功德を今時に得受せんと欲せば、正直に方便の念佛真言禪律等の諸宗諸經を捨てて、但南無妙法蓮華經と唱へ給へ

至心に唱ふ可し唱ふ可し。

凡そ授職灌頂を得受せんには正直捨方便乃至不受餘經一偈の金言に隨順して念佛真言禪律等の諸宗諸經を捨つべし、是れ即ち止戒なり。但本佛下種の信心を發得し領納して南無妙法蓮華經と唱ふ可し、至心に唱ふ可し。是れ即ち作戒なり。この止作の二戒によりて授職灌頂の作法を受くるの戒壇たるなり。

南無妙法蓮華經の下種の信心を以て戒體と爲すことは前節に引ける是好良薬色香美味の壽量品の文已に明なり。南無妙法蓮華經の良薬全く戒色にして本佛止作の教令この七字の信心に在り、豈に他を求むべけんや。『日向記』に云く、

根莖枝葉の事。仰に云く、此文を釋には信戒定慧と云云。此の釋の心は、草木は此の根莖枝葉を以て増長すと成り。佛法修行も又斯の如し。所詮我等衆生の法華經を信じ奉るは根をつけたるが如し。法華經の文の如く、是名持戒の戒體を本として正直捨方便但說無上道の如くなるは戒なり。法華經の文相にまかせて法華三昧を修するは定なり、題目を唱へ奉るは慧なり、乃至、所謂戒定慧の三學は妙法蓮華經なり。此れを信するを根と云ふなり。釋に云く、三學俱に傳ふるを名けて妙法と曰ふと云云。

三學を一言に傳ふる時南無妙法蓮華經の一言なることは是の言の如し。一信に萬戒を具足す、信は萬戒の根なり。又此の處に是名持戒の戒體と云へるは寶塔品の偈を用ひたるなり、彼の偈に末代に妙法蓮華經を受持する者をば是れを戒を持ち頭陀を行ずる者と名くと説きたり。故に南無妙法蓮華經の信心を以て戒體と爲すことは法華の明文なり。怪しむべからず。

又戒壇には約そ三重あり。一に本有法爾の戒壇、二に虚空大會の戒壇、三に末法應時の戒壇なり。一に本有法爾の戒壇とは、十法界の森羅三千の諸法は一として因果の理法に隨順せざるものあらず。この因果の理法は即ち本佛の教令なり。本有法爾の戒壇なり。この本有法爾の戒法界は即ち是れ壇なり。戒壇の故に名けて法界と云ふなり。之を第一重と爲す。

二に虚空大會の戒壇とは、釋尊『法華經』を説く時虚空大會を示現す。この虚空大會によりて以て

本有法爾の戒壇を顯す。之を第二重と爲す。

三に末法應時の戒壇とは、末法の時に應じ本化世に出現してこの戒壇の儀相を立つ。之を第三重と爲す。戒曼荼羅に約するに、中央に南無妙法蓮華經の七字ありて、左右には具さに十法界を列ぬ。もしこの戒曼荼羅を本有法爾なりと云ふは第一重なり。虚空大會なりと云ふは第二重なり、末法應時なりと云ふは第三重なり。三重俱に唯一の戒曼荼羅にして各別なるに非ず。

第三重末法應時の戒壇に更に身、家、國の三あり。一身の止作は身の戒壇なり。五陰世間をその壇場と爲す。一家の止作は家の戒壇なり。衆生世間をその壇場と爲す。一國の止作は國の戒壇なり。國土世間をその壇場と爲す。更に云へば一身よく本佛の教令に隨順して下種の信心を發得し領納するは即ち身の戒壇なり。又一家をしてよく是の如くならしむるは家の戒壇なり。又復一國をしてよく是の如くならしむるは國の戒壇なり。此の身、家、國の三に於て止作の戒を持ちて以て本佛の妙國土常住の三世間を示現し莊嚴し成就せしむ。是れ戒壇の要期なり。『三大秘法抄』に云く

戒壇とは、王法佛法に冥し、佛法王法に合して、王臣一同に本門の三大秘密の法を持ちて、有徳王覺徳比丘の其乃往を末法濁惡の未來に移さん時、救宣并に御教書を申し下して、靈山淨土に似たらむ最勝の地を尋りて戒壇を建立すべき者歟、時を待つべき耳、事の戒法と申すは是なり。三國并に一閻浮提の人の懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王帝釋等も來下して踏み給ふべき戒壇なり。然るにこの國の戒壇は事相としては建立尙ほ遠く未來の時を期すれども理壇としては始めより合せて一身に在り。身即家なり。身即國なり。依正一體にして二あるに非ず三あるに非ず。是故に戒曼荼

羅の前に在りて受持する時左右の十手を合せて能く持ち奉る南無妙法蓮華經と唱ふ、その十手は十法界なり。一身本佛に歸命し奉まつる時十法界の依正皆悉く南無妙法蓮華經と唱ふるなり。此の觀心の心地に於て受くるところの戒なるが故に、一身の受戒に非ずして法界同時の受戒なり。『日向記』に云く、

授職の法體の事。仰に云く、此の文は唯佛與佛の祕文なり、輒く云ふ可からざる法門なり、十界三千の諸法を一言を以て授職する所の祕文なり。其の文とは、神力品に皆於此經宣示顯說と云へる文是れなり、此の五字即ち十界同時に授職する所の祕文なり、十界己己の當體本有の妙法蓮華經なりと授職したる祕文なり。

此等深重の意義及び王法佛法の冥合等の肝要須らく子細に研尋すべし。云云。

第二 各説 其三。(題目) 又次に題目とは南無妙法蓮華經の行なり。下種の信心を以て其の行と爲すなり。故に之を受持一行と云ふ。受持とは信心の義なり。即ち信心の一行なるなり。『御義口傳』卷下に云く、

二佛並座し分身の諸佛集まりて、是好良藥の妙法蓮華經を説き顯し、釋尊十種の神力を現じて四句に結び上行菩薩に付囑し給ふ。其の付囑とは妙法的首要なり、惣別の付囑塔中塔外之を思ふべし。之に依りて涌出壽量に事顯れ、神力囑累に事竟るなり。此の妙法等の五字を、末法白法隱没の時、上行菩薩御出世有て、五種の修行の中には四種を略して、但受持の一行にして成佛すべしと經文に親く之れ有り。それは神力品に云く、於我滅度後應持斯經是人於佛道決定無有疑云云、此の文明白なり。仍て此の文をば佛の邁向の文と習ふなり。

夫れ『法華經』の法師品には受持、讀、誦、解說、書寫の五種の修行を説けり。然るに今讀、誦、

解説、書寫の四種の行を略して唯受持の一行を取る。彼の法師品の五種は迹化の行なり。受持の一行は神力品に據るにて本化の行なり。本化の行は直ちに久遠無始の本法を取るなれば南無妙法蓮華經の下種の信心の外に全く取るべきの行相無きなり。『四信五品抄』に云く、

文句九に云く、初心は縁に紛動せられて正業を修するを妨ぐるを畏る、直に専ら此經を持つに即ち上の供養なり、事を廢して理を存するに所益弘多なりと。此釋に縁と云ふは五度なり、初心の者兼て五度を行すれば正業の信を妨ぐるなり、譬へば小船に財を積んで海を渡るに財と與に俱に没するが如し。直に専ら此經を持つと云ふは一經に互るに非ず、専ら題目を持ちて餘文を雜へず、尙ほ一經の讀誦を許さず、何に況や五度をや。事を廢して理を存すと云ふは、戒等の事を捨てて題目の理を專にするなり。所益弘多とは、初心の者諸行と題目と並び行すれば所益全く失ふとなり。

是れ天台の釋を轉じて本化の行を示したるなり。本化の行は尙ほ法華一經の讀誦を許さず。何に況や檀、戒等の五度の行をや。唯題目を持つ南無妙法蓮華經の受持の一行のみなり。言はゆる初心とは一念信解初隨喜の氣分にして、末法の行者は皆この初心の類攝なり。末法に後心の機ありと謂ふべからず。『建治元年七月の高橋抄』に云く、

末法に入りなば迦葉阿難等、文殊彌勒等、藥王觀音等の讓られしところの小乘經、大乘經、并に法華經は文字はありとも衆生の病の藥とはなるべからず。所謂病は重し藥は淺し、其時上行菩薩出現して妙法蓮華經の五字を一闍浮提の一切衆生に授くべし、

『法華經』の文字をも斥ひしは即ち讀誦解説書寫の四種の行を嫌ひたるなり。末法の機に當らざるが故なり。『日向記』に云く、

凡そ法華經と申すは一切衆生皆成佛道の要法なり。されば大覺世尊は説時未至故と説かせ給ひて、説く可き時節を待たせ給ひき。例せば郭公の春をおくり、雞鳥の曉を待ちて鳴くが如くなり、此れ即ち時を待つ故なり。されば涅槃經には以知時故名大法師と説かれたり、今末法は南無妙法蓮華經の七字を弘めて利生得益あるべき時なり。されば此の題目に餘事を交へば僻事なるべし、此の妙法の大曼荼羅を身に持ち心に念じ口に唱へ奉るべき時なり。

身口意の三業只南無妙法蓮華經の受持一行なり。此の題目に餘事を交へば僻事なり。弘安元年四月の『上野抄』に又云く、

又日蓮が弟子等の中になかなか法門知りたげに候人人はあしく候げに候。南無妙法蓮華經と申は法華經の中の肝心、人の中の神のごとし。此に物をならぶれば、きさきのならべて二王をおとことし、乃至きさきの大臣已下に内内とつぐがごとし、禍のみなもとなり。正法像法には此法門をひろめず、餘經を失はじがためなり。今末法に入りぬれば餘經も法華經も詮無し、但南無妙法蓮華經なるべし。かう申し出だして候も私の計らひにはあらず、釋迦多寶十方諸佛地涌千界の御計らひなり。此南無妙法蓮華經に餘事をまじへばゆゆしき僻事なり。日出でぬれば燈は詮無し、雨のふるば露は何の詮かあるべき。嬰兒に乳より外のものをやしなふべき歟、良薬に又薬を加ふる事なし。

凡そ遺文中此等の諸文を擧ぐれば維日も足らず、皆受持一行の旨を示すに非ざるは無し。文永九年五月の『四條抄』に云く、

今日蓮が弘通する法門は狭きやうなれども甚だ深し。其故は彼の天台傳教等の所弘の法よりは一重立入りたる故なり。本門壽量の三大事とは是なり。南無妙法蓮華經の七字ばかりを修行すれば狭きがごとし。されども三世の諸佛の師範、十方陸埵の導師、一切衆生皆成佛道の指南にてましますなれば深きなり。經に云く、諸佛智慧甚深無量云云。此經文に諸佛とは十方三世の一切の諸佛、眞言宗の大日如來、淨土宗の阿彌陀、乃至諸宗諸經の佛菩薩、過去未來現在の總諸佛、現在の釋迦如來等を諸佛と説き擧げて、次

に智慧といへり。此智慧とは何物ぞ、諸法實相十如果成の法體なり。其の法體とは又何物ぞ、南無妙法蓮華經是れなり。

この甚深無量の諸佛の智慧たる南無妙法蓮華經の信心は實に狹きに似て深きなり。受持の一行には普く諸佛菩薩の萬行を攝せり。更に何の比すべき行かあらんや。

若し佐前の弘通には迹化に順するが故に通じて五種の修行を取り、五種の中に受持を以て正行と爲し餘の讀誦等の四種を以て助行と爲す。若し佐後の弘通には本化なるが故に只受持の一行にして餘事餘行を交へず。上に引ける諸文は即ちこの旨なり。蓋し迹化の妙法蓮華經は一部の經卷なり。故にその行は五種ならざる可からず。今本化の妙法蓮華經は久遠の本法なり。經卷に非ず。何の讀、誦、解説、書寫かあらんや。故に唯受持の一行なり。而して一部の經卷は本化より之を觀れば皆この受持の一行に於ける本佛の教誨訓諭なり。更に云へば一部の經卷は釋尊の所説ながら直ちに本佛常住の言音なり。この本佛常住の言音に信順して受持の一行を取る之を如說修行と云ふ。言はゆる讀誦とは南無妙法蓮華經と唱ふることなり。解説とは南無妙法蓮華經を解説することなり。書寫とは南無妙法蓮華經を書寫するなり。是の如く皆受持の一行に結歸し、一部の始終南無妙法蓮華經に非ざるは莫きなり。この義具さには『御義口傳』『日向記』等の如し。

神力品の本化付囑の前に常不輕の一品あり。常不輕菩薩は經卷を讀誦せずして但衆生本有の佛種を禮拜せり。是れ下種逆化の方規なり。是を以て末法下種の時亦讀誦等の餘行を捨てて唯南無妙法蓮華

經の受持の一行を取る。即この行や衆生本有の佛種を禮拜する常不輕菩薩の行なり。南無妙法蓮華經の外に本有の佛種あるに非ざるなり。日蓮は不輕の跡を紹繼すと云ふは是れなり。

然るにこの受持の一行は全く本佛本因の妙行にして如來行なるものなることを辨ふべし。即ち吾等行者の唱ふる南無妙法蓮華經は本佛の音聲なり。身口意の三業皆本佛不可思議の三祕密業なるなり。これをば壽量品には如來祕密神通之力と説けるなり。分別功德品に云く、

佛子此地に住すれば、即ち是れ佛受用し給ふ。常に其中に在して、經行し若ば坐臥したまはん。

『御義口傳』(下)に云く、

今日蓮等の類、南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は、妙法の地に住するなり、佛の受用の身なり、深く之を案すべし。

第三 結。この三大秘法をば遺文には多く本門の二字を冠して之を呼べり。本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目なり。此は迹化弘通の迹門なるに對して本化弘通の本門なることを顯すが爲め、又この三大秘法は正しく本門正宗の壽量品に依ることを示すが爲めなり。然れども三大秘法は種脱相對の上の久遠下種の南無妙法蓮華經なるを以て文上教相の本門の名を之に冠らしむべきに非ず。故に本門の三大秘法と稱すと雖も元意は必ず文底觀心の本門なるべきなり。三大秘法を觀心門と爲すの旨實に茲に在り。誤まること勿れ。

聖祖日蓮の傳弘に踵で、その門下に日興、日像、日暉、日眞、日隆、日什等傑出の人影らずして聖祖の義を各方面に分張したり。然れ

ども今煩しく之を述ぶるの要無し。又聖祖日蓮の寂後に於て他宗の人にして法華を講説するもの間も無きに非ざれども、傳弘として數ふべきもの幾ど一人をも看す。蓋し聖祖日蓮は三國三時を通じ、法華傳弘の最終として獨り大に其の美を完済せしものなり。

第六 五重の三段

以下聖祖の所立の義に據り正しく問題として先づ五重の三段を述ぶべし。『觀心本尊抄』に云く、法華經一部八卷二十八品、進では前四味、退では涅槃經等、一代の諸經は惣じて之を括るに但一經なり。始め寂滅道場より終り般若經に至るまでは序分なり。無量義經法華經普賢經の十卷は正宗なり。涅槃經等は流通分なり。

是れ五重の三段の第一にして之を一代三段と云ふ。總じて一代の諸經を束ねて只一經として序、正、流通の三段を判するなり。乃ち文の如く『法華』以前の四十餘年の諸經は始め寂滅道場の『華嚴經』より乃至『般若經』まで皆『法華』の序分なり。『法華』を説かんが爲めの前序方便なり。『無量義經』

『法華經』『觀普賢經』の『法華』三部は正宗分なり。一代の正說宗主にして釋尊の本懷茲に在るなり。この『法華』三部の後の『涅槃經』等は『法華』の流通分なり。『法華』を未來に傳流弘通せしめんが爲めに説きたる信行の方規及び其の功德等なり。この一代三段の大科に由りて釋尊一代の諸經に對する『法華』三部の位置如何を識るべし。實に『法華』三部は一代の中心爲るなり。

- 一 序分——『華嚴』乃至『般若』等四十餘年諸經。
- 二 正宗分——『無量義經』『法華經』『觀普賢經』。
- 三 流通分——『涅槃經』等。

又同抄に云く、

正宗十卷の中に於て亦序、正、流通あり。無量義經并に序品は序分なり。方便品より分別功德品十九行の偈に至るまでの十五品半は正宗分なり。分別功德品の現在四信より普賢經に至るまでの十一品半と一卷は流通分なり。

此れ五重三段の第二にして之を十卷三段と云ふ。前の一代三段の正宗分たる『法華』三部に就て更に序、正、流通を判するなり。

序分——『無量義經』、『法華』序品。(一卷一品)。

十卷三分——方便品、譬喻品、信解品、藥草喻品、授記品、化城喻品、五百弟子授記品、授學無學人記品、法師品、寶塔品、提婆品、勸持品、安樂行品、從地涌出品、如來壽量品、分別功德品十九行偈に至る前半。(十五品半)

流通分——分別功德品現在四信以下半品、隨喜功德品、法師功德品、常不輕品、神力品、鬘累品、藥王品、妙音品、普門品、陀羅尼品、妙莊嚴王品、普賢品、觀普賢經。(十一品半一卷)。

又同抄に云く、

又法華經等の十卷に於て二經ありて各序、正、流通を具するなり。無量義經と序品は序分なり。方便品より人記品に至るまでの八品は正宗分なり。法師品より安樂行品に至るまでの八品は正宗分なり。法師品より安樂行品に至るまでの五品は流通分なり。

是れ五重三段の第三にして之を迹門三段と云ふ。『法華』三部を本迹二經に分つ時、初の『無量義經』と『法華』の前十四品とを迹門と爲して此に序、正、流通を判するなり。

迹序分——『無量義經』、『法華』序品。(一卷一品)

門三分——方便品、譬喻品、信解品、藥草喻品、授記品、化城喻品、五百弟子授記品、授學無學人記品。(八品)

段流通分——法師品、寶塔品、提婆品、勸持品、安樂行品。(五品)

又同抄に云く、

又本門十四品の一經に序、正、流通あり。涌出品の半を序分と爲し、壽量品と前後の二半とを此を正宗と爲す、其餘は流通分なり。是れ五重三段の第四にして之を本門三段と云ふ。『法華』の後十四品と及び『觀普賢經』を之に附せしめて本門と爲して此に序、正、流通を判するなり。

序分——涌出品の初の半品。(半品)

門本——涌出品の次の半品、壽量品、分別功德品の初の半品(一品二半)。

三門——分別功德品の次の半品、隨喜功德品、法師功德品、常不輕品、神力品、彌果品、藥王品、妙音品、普門品、陀羅尼流通分(一品妙莊嚴王品、普賢品、觀普賢經)(十一品半二經)

天台一家に立つるところの『法華』の科段に總別の三段あり。その總分の三段は『法華』の二十八品を分かつて序、正、流通と爲す、之を一經三段と云ふ。その別分の三段は本迹二門に各序、正、流通を立つ、之を二經六段と云ふ。今の第二重は彼の一經三段に同じく、第三四重は彼の二經六段に同じ。但『無量義經』『觀普賢經』を加へて判するが故に第二重には十卷三段と云ひ、第三重には序品の前に『無量義經』を加へ、第四重には普賢品の後に『觀普賢經』を加ふ。蓋し通じて一代三段の正宗分たる『法華』三部を遺亡せざらしむるが爲めなり。

又同抄に云く、

又本門に於て序、正、流通あり、過去大通佛の法華經より、乃至現在の華嚴經乃至迹門十四品涅槃經等の一代五十餘年の諸經、十方三世の諸佛の微塵の經經は、皆壽量の序分なり。

是れ五重三段の第五にして之を三世三段と云ふ。過去、現在、未來の三世を通じて壽量品の一經と爲して序、正、流通を判するなり。

この三世三段に於ては過去久遠三千塵點劫の最初現前の一佛たる大通智勝佛の所説の『法華經』乃至現在釋尊の一代五十餘年の所説の諸經、乃至十方三世の諸佛の所説の不可稱計の微塵の經經、此等を悉く皆壽量品の序分と爲す。何が故に然るや。凡そ此等三世諸佛の一切の諸經は皆本種本法の妙法蓮華經の五字を以て其根本と爲し其究竟と爲すものにして、五字より開出せられて五字に結歸せらる。乃ち五字の爲の一切の諸經なるなり。五字の爲の一切の諸經なるが故に皆五字の序分なるなり。

『抄』の文は唯その序分を示して正宗と流通とを云はざれどもその意須らく解すべし。乃ち本種本法の妙法蓮華經の五字は是れ壽量品の正宗なり。今末法にこの南無妙法蓮華經を弘通するは是れ壽量品の流通なり。三世を通じて唯本種本法の妙法蓮華經の五字の三段なり。故に亦本法三段とも稱せり。壽量品の教意は正しく茲に第五重の三段に於て顯るることを得るなり。更に語を換へて之を言へば十方三世の一切諸經は壽量品の序分なり、妙法蓮華經の五字は壽量品の正宗なり、末法弘通の南無妙法蓮華經は壽量品の流通なり。是の如き序、正、流通は壽量品の教意なり。『法華二經の旨茲に盡くせり。』

序分——十方三世一切諸經
正宗分——妙法蓮華經五字——壽量品

三世三段——流通分——南無妙法蓮華經七字

第七 正依の『法華』三部

是の如く、三世はただ壽量の一經となりて、末法は南無妙法蓮華經の流通分と定まれる時に於て、『法華』三部は、正に七字の三部爲り。即ち『無量義經』は七字の流通分の『無量義經』なり。『法華經』二十八品は、七字の流通分の二十八品なり。『觀普賢經』は、七字の流通分の『觀普賢經』なり。即ち末法の『法華』三部なり、末法に七字を弘通し信じ行ずる行者一身の『法華』三部なり。末法に於ける壽量一經の『法華』三部なり。この旨を丁寧反覆したるもの、之を『御義口傳』『日向記』等と爲す。よく深くこの旨を了せざれば、恐らくは聖祖の本意を失はん。輕忽なるべからず。この故に末法本化の宗は『法華』三部を正依の本典と爲すと雖ども、天台の『法華』三部を取用するに同じからず。彼の『無量義經』は釋尊在世の教法に就て、前四十餘年を捨て將に眞實を顯はさんとして説きたる序分の一經なり。『法華經』の迹門は在世の人をして初住に入らしめ本門に進んで地上に登らしめたる脱益の一部なり。『觀普賢經』は靈山結縁の機類が未來に自誓受戒して佛種を護持するの功能あることを説ける結分の經なり。之を他の諸大乘經に比ぶれば勝劣本より言を俟たず、然れども此等は末法今日の用に非ず。言はゆる文字は有りとも、衆生の病の藥とはなるべからず。末法下種の時に於ては、在世の脱益は詮なきのみ。但この『法華』三部を壽量の一經と爲し、七字の流通分と爲すが

故に、方に末法應時の『法華』三部と爲る。本化の宗の正依たる所以なり。本尊抄に又云く、

述門十四品の正宗八品は一往之を見るに二乘を以て正と爲し菩薩凡夫を以て傍と爲す。再往之を勸ふれば凡夫正像末を以て正と爲す。正像末の三時の中にも末法の始を以て正が中の正と爲す。問曰、其證如何。答曰、法師品に云く、而も此經は如來の現在にすら猶怨嫉多し、況や滅度の後をや、寶塔品に云く、法をして久く住せしむ、乃至、來る所の化佛當に此意を知るべし等。勸持安樂等之を見る可し。述門是の如し。本門を以て之を論すれば一向に末法の初を以て正機と爲す。所謂の一往之を見る時は久遠を以て下種と爲し、大道前四味述門を熟と爲して、本門に至りて等妙に登らしむるを脱と爲す。再往之を見れば述門に似ず、本門は序正流通俱に末法の始を以て證と爲す。

『法華取要抄』は此旨を述ぶるに更に審詳なり。云く、

問曰、法華經は誰人の爲に之を説くや。答曰、方便品より人記品に至るまでの八品に二意あり。上より下に向つて次第に之を讀めば第一菩薩、第二二乘、第三凡夫なり。安樂行より勸持、提婆、寶塔、法師と進次に之を讀めば滅後の衆生を以て本と爲す、在世の衆生は傍なり。滅後を以て之を論すれば正法一千年像法一千年は傍なり、末法を以て正と爲す。末法の中には日蓮を以て正と爲すなり。問曰、其證據如何。答曰、況滅度後の文是なり。疑曰、日蓮を正と爲すの正文如何。答曰、諸の無智の人の惡口罵詈等し及び刀杖を加ふる者有らん等云云。問曰、自讀は如何。答曰、喜び身に餘るが故に堪へ難くして自讀するなり。問曰、本門の心に如何。答曰、本門に於て二意あり。一には涌出品の略開近顯遠は前四味并に述門の諸衆をして脱せしめんが爲めなり。二には涌出品の動執生疑よりの一半并に壽量品分別功德品の半品、已上一品二半を廣開近顯遠と名く、一向に滅後の爲めなり。問曰、略開近顯遠の心は如何。答曰、文殊彌勒等の諸大菩薩梵天帝釋日月衆星龍王等は初成道の時より般若經に至る已來一人も釋尊の御弟子に非ず、此等の菩薩天人は初成道の時佛未だ説法したまはざりし已前に不思議解脱に住して我れと別圓二教を演説す。釋尊其後阿含方等般若を宣説したまふ、然りと雖も全く此等の諸人の得分に非ず。既に別圓二教を知れば藏道も又知る、勝は劣を兼ねる是れなり。委細に之を論ぜば或は釋尊の師匠歟、善智識とは是れなり。釋尊に隨ふには非ず、法華經の述門八品に來至して、始めて未聞の法

を聞て、此等の人人は弟子と成る、舍利弗目連等は鹿苑已來の初發心の弟子なり。然りと雖も權法のみを許せり。今法華經に來至して實法を授與し、法華經本門の開近顯遠に來至して、華嚴よりの大菩薩二乘大梵天帝釋日月四天龍王と等しく位妙覺に隣り、又妙覺の位に入るなり。若し爾らば今我等天に向つて之を見るときは生身の妙覺の佛が本位に居して衆生を利益する是れなり。問曰、誰人の爲に廣開近顯遠の壽量品を演說するや。答曰、壽量品の一品二半は始より終に至るまで正しく滅後の衆生の爲めなり。滅後の中には末法今時の日蓮等が爲めなり。疑曰、此法門前代未だ之を開かず、經文に之ありや。答曰、予が智前賢に超えず、設ひ經文を引くと雖も誰人か之を信ぜん、卞和が啼泣、伍子胥の悲傷是れなり。然りと雖も略開近顯遠動執生疑の文に云く、然も諸の新發意の菩薩は佛の滅後に於て若し是の語を聞かば或は信受せずして法を破する罪業の因縁を起さん、云云。文の心は、壽量品を説かずんば末代の凡夫は皆惡道に墮せん等なり。壽量品に云く、是の好き良藥を今留めて此に在く等云云。文の心は、上には過去の事を説くに似たる様なれども、此文を以て之を案するに滅後を以て本と爲して先づ先例を引けるなり。分別功德品に云く、惡世末法の時等云云。神力品に云く、佛の滅度の後に能く是經を持つを以ての故に諸佛皆歡喜して無量の神力を現じたまふ等云云。藥王品に云く、我が滅度の後、後の五百歳の中に廣宣流布して閻浮提に於て斷絶せ令むること無けん等云云。又云く、此經は即ち爲れ閻浮提の人の病の良藥なり等云云、涅槃經に云く、譬へば七子の如し父母平等ならざるに非ず然れども病者に於ては心即ち偏に重し等云云。七子の中の第一第二は一閻浮提謗法の衆生なり。諸病の中には法華經を謗する第一の重病なり。諸藥の中には南無妙法蓮華經は第一の良藥なり、此の一閻浮提は縱横七千由緒那、八萬の國之れあり、正像二千年の間未だ廣宣流布せず、法華經を當世に當つて流布せしめざれば、釋尊は大妄語の佛、多寶佛の證明は泡沫に同く、十方分身の佛の助舌も芭蕉の如くならん。疑曰、多寶の證明十方の助舌、地涌の涌出此等は誰人の爲めぞや。答曰、世間の情に云く在世の爲めと。日蓮云く、舍利弗、目連等は現在を以て之を論すれば智慧第一、神通第一の大聖人なり。過去を以て之を論すれば三惡頓盡の大菩薩なり。本を以て之を論すれば内秘外現の古菩薩なり。文殊、彌勒等の大菩薩は過去の古佛現在に生を應ず、梵帝日月四天等は初成已前の大聖なり、其上前四味の四教一言に之を覺れり。佛の在世に於ては一人も無智の者之れ無し、誰人の疑を晴さんが爲めに多寶佛の證明を借り諸佛舌を出し地涌の菩薩を召さんや、方方以て謂れ無きことなり。隨て經文には況滅度後合法久住等云云。此等の經文を以て之を案するに偏

へに我等が爲めなり。隨て天台大師當世を指して云く、彼の五百歲遠く妙道に沾はん。傳教大師當世を記して云く、正像稍過ぎ已つて末法太だ近きこと有り等云云。末法太だ近きこと有りの五字は我世は法華經流布の世に非すと云ふ釋なり。問云、如來滅後二千餘年に龍樹、天親、天台、傳教の殘す所の秘法は何物ぞや。答曰、本門の本尊と戒壇と題目の五字となり。問曰、正像等に何ぞ弘通せざるや。答曰、正像に之を弘通せば小乘、權大乘、迹門の法門一時に滅盡すべきなり。問曰、佛法を滅盡するの法をば何ぞ之を弘通せんや。答曰、末法に於ては大小權實顯密共に教のみ有りて得道無し。一闍浮提皆謗法と爲り畢ぬ。迹縁の爲めには但妙法蓮華經の五字に限るのみ、例せば不輕品の如し。我が門弟は順縁、日本國は逆縁なり。疑云、何ぞ廣略を捨てて要を取るや。答曰、玄奘三藏は略を捨てて廣を好めば四十卷の小品經を六百卷と成す。羅什三藏は廣を捨てて略を好めば千卷の大論を百卷と成す。日蓮は廣略を捨てて肝要を好む、謂はゆる上行菩薩所傳の妙法蓮華經の五字なり。九方淵の相馬の法は玄黃を略して駿逸を取り、史陶林の講經は細科を捨てて元意を取る等云云。佛既に寶塔に入り、二佛座を並べ、分身來集し、地涌を召出し、肝要を取りて末代に當て五字を授與せしことは、當世異義有る可からず。

是の如く末法の爲の『法華經』なるが故に廣略を捨て唯五字の肝要を取る。故に『法華經』三部は唯南無妙法蓮華經の七字なり。『無量義經』『觀音賢經』亦然り。一代三段の正宗たる『法華三部』に非ず。十卷三段の『法華三部』に非ず。前十四品の迹門三段の『法華』に非ず。後十四品の本門三段の『法華』に非ず。天台一家の一經三段、二經六段を超過して三世三段の流通分たる南無妙法蓮華經の七字の『法華』三部なり。今の本化の宗の正依の本典とは是なり。以下此旨に由て各品の大要を擧げん。

第八

法華三部各品の大要

(全文御義口
傳卷下抄錄)

二十八品悉く南無
妙法蓮華經の事。

疏の十に云く、惣じて一經を結するに唯四のみ、其の樞柄を撮つて之を授與すと。

御義口傳に云く 一經とは本述二十八品なり、唯四とは名用體宗の四なり、樞柄とは唯題目の五字なり、授與とは上行菩薩に授與するなり、之とは妙法蓮華經なり云云。今日蓮等の弘通の南無妙法蓮華經は體なり心なり、二十八品は用なり、二十八品は助行なり、題目は正行なり。正行に助行を攝すべきなり云云。

無量義經の事。 御義口傳に云く、妙法の序分無量義經なれば十界悉く妙法蓮華經の序文なり。

序品。 御義口傳に云く、如是我聞の四字を能く能く心得れば一經無量の義は知られ易きなり、十界五具三千具足の妙と聞くなり。此の所聞は妙法蓮華と聞く故に妙法の法界五具にして三千清淨なり。此の四字を以て一經の始終に互るなり、二十八品の文文句句の義理をば我身の上の法門と聞くを如是我聞とは云ふなり。其の聞く物は南無妙法蓮華經なり、されば皆成佛道と云ふなり。此の皆成の二字は十界三千に互るべきなり、妙法の皆成なるが故なり。又佛とは我が一心なり、是れ又十界三千の心心なり。道とは能通に名くる故に十界の心に通するなり、此の時皆成佛道と顯はるるなり。皆成佛道の法は南無妙法蓮華經なり。

方便品。 御義口傳に云く、此の品には十如是を説く、此の十如是とは十界なり。此の方便とは十界三千なり。既に妙法蓮華經を頂くが故に、十方佛土中唯一乘法なり。妙法の方便蓮華の方便なれば秘妙なり、清淨なり。妙法の五字は九識、方便は八識已下なり、九識は悟なり。八識已下は迷なり。妙法蓮華經方便品と題したれば迷悟不二なり。森羅三千の諸法は此の妙法蓮華經の方便に非ずと云ふ事無きなり。品は義類同なり、義とは三千なり、類とは五具なり、同とは一念なり、此の一念三千を指して品と云ふなり。此の一念三千を三佛合點したまへり、仍て品品に題せり、南無妙法蓮華經の信の一念なり、三千具足と聞こえたり云云。

譬喩品。 御義口傳に云く、此の品の大白牛車とは無明癡惑本是法性の明闇一體の義なり。即ち三千具足の一乘をかかげたる車なれば明闇一體にして三千具足の義を顯すなり。法界に徧滿すれども一法なるを一乘と云ふなり。此の一乘とは諸乘其足の一乘なり、諸法其足の一法なり、故に一の白牛なり。又白牛は一なりと雖も無量の白牛なり。一切衆生の體は大白牛車なるが故なり。然らば妙法の大白牛車に妙法の十界三千の衆生乗じたり、蓮華の大白牛車なれば十界三千の衆生は蓮華にして清淨なり、南無妙法蓮

華經の法體此の如し。

信解品。 御義口傳に云く、此の信解は中根の四大聲聞の領解に限るに非ず、妙法の信解なるが故に十界三千の信解なり、蓮華の信解なるが故に十界三千の清淨の信解なり。此の信解の體とは南無妙法蓮華經是れなり云云。

藥草喩品。 御義口傳に云く、妙法の藥草なれば十界三千の毒草も蓮華の藥草にして本來清淨なり、清淨なれば佛なり、此の佛の說法とは南無妙法蓮華經なり云云。されば此の品には種相體性の種の字に種類種、相對種の二の開會之れあり。相對種とは三毒即三徳なり。種類種とは、始めの種の字は十界三千なり、類とは互具なり、下の種の字は南無妙法蓮華經なり、種類種なり。十界三千の草木各各なれども只南無妙法蓮華經の一種なり、毒草の毒もなきなり、清淨の草木にして藥草なり云云。

授記品。 御義口傳に云く、十界己己の當體の言語は妙法蓮華の授記なれば清淨の授記なり。清淨の授記なれば十界三千は佛なり。爰を以て佛なれば南無妙法蓮華經と授記するなり云云。

化城喩品。 御義口傳に云く、妙法の化城なれば十界同時の無常なり、蓮華の化城なれば十界三千の開落なり。常住無常俱に妙法蓮華經の全體なり、化城寶處の生死本有なり、生死本有の體とは南無妙法蓮華經なり。釋に云く、起は是れ法性の起、滅は是れ法性の滅と。

五百品。 御義口傳に云く、此の品には五百弟子授記作佛すと現文に見えたり。然りと雖も妙法の五百なれば十界三千皆五百弟子なり、蓮華の弟子なれば又清淨なり、所詮十界三千は南無妙法蓮華經の弟子に非すと云ふ事なし。此の經の授記是れなり云云。**人記品。** 御義口傳に云く、此の品には學、無學の聖者來つて成佛するなり。既に妙法頂戴の學、無學なれば十界互具三千具足の學、無學なり。妙法の學、無學なるが故に不思議の十界にして煩惱未だ盡さざるなり。蓮華の學、無學なれば十界三千は清淨の開落なり。此の學、無學何物ぞや。學とは法なり、無學とは妙なり、所謂南無妙法蓮華經なり云云。

法師品。 御義口傳に云く、妙法の法師なれば十界皆妙法受持の一句一偈の法師なり。蓮華の法師なれば十界三千は清淨の法師なり。十界の衆生の色法は能持の人なり、十界の心性は所持の法なり、仍て色心共に法師にして自行化他を顯すなり。所謂る南無

妙法蓮華經の法師なるが故なり云云。

寶塔品。 御義口傳に云く、此の寶塔は寶淨世界より涌現するなり。其の寶淨世界の佛とは、事相の義をば且らく之を置く、證道觀心の時は母の胎内是れなり、故に父母は寶塔造作の番匠なり。寶塔とは我等が五輪五大なり、然るに託胎の胎を寶淨世界と云ふ、故に出胎する處を涌現と云ふなり。凡そ衆生の涌現は地輪より出現するなり、故に従地涌出と云ふなり。妙法の寶淨世界なれば十界の衆生の胎内は皆是れ寶淨世界なり。蓮華の寶淨なれば十界の胎内は悉く無垢清淨の世界なり。妙法の地輪なれば十界に互るなり。蓮華の地なれば清淨地なり。妙法の寶淨なれば我等が身體は清淨の寶塔なり。妙法蓮華の涌出なれば十界の出胎の産門は本來清淨なり。寶塔は法界の塔婆にして十法界即塔婆なり。妙法の二佛なれば十界三千は皆境智の二佛なり。妙法の一座には三千の心性皆以て二尊の所座なり。妙法蓮華の二佛一座なれば不思議なり清淨なり。妙法蓮華の見なれば十界の衆生三千の群類皆自身の塔婆を見るなり。十界の不同なれども己が身を見るに三千具足の塔を見るなり、己の心を見るは三千具足の佛を見るなり、分身とは父母より相續する身を分つの意なり、迷ふ時は流轉の分身なり、悟る時は果中の分身なり。さて分身の起る處を習ふには地獄を習ふなり。かかる寶塔も妙法蓮華經の五字より外に之れ無きなり。妙法蓮華經を見れば寶塔一切衆生、一切衆生即南無妙法蓮華經の全體なり云云。

提婆品。 御義口傳に云く、此の品には釋尊の本師提婆達の成佛と文殊師利敬化の龍女の成佛とを説くなり。是れ又妙法蓮華經の提婆、龍女なれば十界三千は皆調達、龍女なり。法界の衆生の逆の邊は調達なり。法界の貪欲、瞋恚、愚癡の方は悉く龍女なり。一切衆生は性徳の天王如來、調達は修徳の天王如來なり。龍女は修徳の龍女、一切衆生は性徳の龍女なり。所詮釋尊も文殊も提婆も龍女も一つの妙法蓮華經の功能なれば本來成佛なり。仍て南無妙法蓮華經と唱へ奉る時は十界同時に成佛するなり。是を妙法蓮華經提婆達多品と云ふなり。十界三千の龍女なれば無垢世界に非すと云ふことなし。龍女の一身は本來成佛にして南無妙法蓮華經の當體なり云云。

勸持品。 御義口傳に云く、此の品の姨母、耶輸の記別は十界同時の授記なり。妙法の姨母妙法の耶輸なるが故なり。十界の衆

生の心性は所持の經體なり、是れ即ち勸持の流通なり。心性所持の經を勸持して自行化他に趣くなり。姨母、耶輸は女人の成佛なり、二萬の居士は男子の流通なり。此の品陰陽一體にして南無妙法蓮華經の當體なり云云。

安樂行品。 御義口傳に云く、妙法の安樂行なれば十界三千は悉く安樂行なり。自受用の當體なり。身、口、意、誓願悉く安樂行なり。蓮華の安樂行なれば、十界三千は清淨の修行なり。諸法實相なれば、安樂行に非ざること莫し。本門の意は十界の色心本來本有として眞實の安樂行なり。安樂行の體とは、所謂る上行所傳の南無妙法蓮華經是れなり云云。靈山淨土に安樂に行詣すべきなり云云。

涌出品。 御義口傳に云く、此の品は迹門流通の後、本門開顯の序分なり。故に先づ本地無作の三身を顯はさんが爲めに、釋尊所具の菩薩なるが故に本化の弟子を召すなり。是れ又妙法の從地なれば十界の大地なり。妙法の涌出なれば十界皆涌出なり。十界妙法の菩薩なれば皆饒益有情界の慈悲深重の居士なり。蓮華の大地なれば十界の大地なり。蓮華の居士なれば十界涌出の菩薩本來清淨なり。所詮悟道に約する時は、從地とは十界の衆生の大浮所生なり。涌出とは十界の衆生の出胎の相なり。菩薩とは十界の衆生の本有の慈悲なり。此の菩薩に本法の妙法蓮華經を付囑せんが爲めに從地涌出せしむるなり。今日蓮華の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は從地涌出の菩薩なり。外に求むること莫れ云云。

壽量品。 御義口傳に云く、壽量品とは十界の衆生の本命なり。此の品を本門と云ふ事は、本に入る門と云ふ事なり。凡夫の血肉の色心を本有と談するが故に本門とは云ふなり。此の重に至らざるを始覺と云ひ迹門と云ふなり。是を悟るを本覺と云ひ本門と云ふなり。所謂る南無妙法蓮華經は一切衆生の本有の在處なり。爰を以て文に我實成佛已來とは云ふなり云云。

分別品。 御義口傳に云く、此の品は上の品の時本地無作の三身如來の壽を聞く故に今品にして上の無作の三身を信解するなり。其の功德を分別するなり。功德とは十界己己の當體の三毒の煩惱をば此の品の時其の儘妙法の功德なりと分別するなり。其の功德とは本有の南無妙法蓮華經是れなり云云。

隨喜品。 御義口傳に云く、妙法の功德を隨喜すること説くなり。五十展轉とは、五とは妙法の五字なり、十とは十界の衆生

なり、展轉とは一念三千なり。教相の時に第五十人の隨喜の功德を校量せり、五十人とは一切衆生の事なり、妙法の五十人なり。妙法蓮華經を展轉するが故なり、所謂る南無妙法蓮華經を展轉するなり云云。

法師功德品。 御義口傳に云く、無作三身の如來の壽も、分別功德も、隨喜も、我身の上の事なり。然らば父母所生の六根は清淨にして自在無碍なり。妙法の六根なれば十界三千の六根は清淨なり。蓮華所具の六根なれば全く不淨に非ざるなり。此の六根にて南無妙法蓮華經と見聞覺知する時は本來本有の六根清淨なり云云。

不輕品。 御義口傳に云く、此の菩薩の禮拜の行とは一切衆生の事なり。自他一念の禮拜なり。父母果縛の肉身を妙法蓮華經と禮拜するなり。佛性も佛身も衆生の當體の色心なれば直ちに禮拜を行するなり。仍て皆當作佛の四字は南無妙法蓮華經の種子に依るなり。

神力品。 御義口傳に云く、十種の神力を現じて上行菩薩に妙法蓮華經の五字を付囑し玉ふ。此の神力とは十界三千の衆生の神力なり。凡夫は體の神力、三世の諸佛は用の神力なり。神とは心法、力とは色法なり。力は法、神は妙なり。妙法の神力なれば十界は悉く神力なり。蓮華の神力なれば十界は清淨の神力なり。惣じて三世の諸佛の神力は此の品に盡くせり。釋尊出世の神力の本意も此の品の神力なり。所謂る南無妙法蓮華經の神力なり。十界皆成と談するより外の諸佛の神力は之れ有る可からず。一切の法門は神力に非すと云ふ事なし云云。

囑累品。 御義口傳に云く、此の品には摩頂付囑を説きて此の妙法を滅後に留め玉ふなり。是れ又妙法の付囑なれば十界三千は皆付囑の菩薩なり。又三摩することは、能化所化所具の三觀三身の御手を以て、所化の頂上に明珠を護り與へたる心なり。凡そ頂上の明珠は覺悟知見なり。頂上の明珠とは南無妙法蓮華經是れなり云云。

藥王品。 御義口傳に云く、此の品は藥王菩薩の佛の滅後に於て法華を弘通するなり。所詮燒身燒臂とは、燒は照の義なり。照は智慧の義なり、智能く煩惱の身、生死の臂を燒くなり。天台大師も本地藥王菩薩なり。能説に約する時は釋迦なり。衆生の重病を消除する方は藥王藥師如來なり。又利物の方にて藥王品と云ふ。自悟の方にて藥師と云ふ。此の藥王藥師出世の時は天台大師な

り。藥王も滅後に弘通し、藥師如來も像法暫時の利益有情なり。時を以て身體を顯はし、名を以て義を顯はすことを佛顯はし玉ふなり。藥王菩薩は止觀の一念三千の法門を弘め玉ふ。其の一念三千とは所謂る南無妙法蓮華經是れなり云云。

妙音品。御義口傳に云く、此の菩薩は法華弘通の菩薩なり。故に三十四身を現じて十界五具を顯はし玉ふ利益說法するなり。是れ又妙法の妙音なれば十界の音聲は皆妙音なり。又十界は悉く三十四身の所現の妙音なり。又蓮華の妙音なれば十界三千の音聲身皆無染清淨なり。乃至、所謂る法界の音聲は南無妙法蓮華經の音聲に非すと云ふことなし云云。

觀音品。御義口傳に云く、此の品は甚深の祕品なり。息災延命の品なり。當途王經と名く。されば此の品に就て職位の法門を繼ぐぞと習ふなり。天台も三大部の外に觀音玄と云ふ疏を作り、章安大師は兩卷の疏を作り玉へり、能く能くの祕品なり、觀音法華眼日異名と云ひて、觀音即ち法華の體なり。所謂る南無妙法蓮華經の體なり云云。

陀羅尼品。御義口傳に云く、此の品は二聖二天王十羅刹女陀羅尼を説きて持經者を擁護し玉ふなり。所謂る妙法陀羅尼の眞言なれば十界の語言音聲は皆陀羅尼なり。されば傳教大師云く、妙法の眞言は他經に説かず、普賢の常護は他經に説かずと。陀羅尼とは南無妙法蓮華經の用なり。此の五字の中には妙の一字より陀羅尼を説き出すなり云云。

嚴王品。御義口傳に云く此の品は二子の教化に依て、父の妙莊嚴王邪見を翻し正見に住して、沙羅樹王佛と成なり。沙羅樹王とは梵語なり、此には熾盛光と云ふ。一切衆生は皆是れ熾盛光より出生したる一切衆生なり。此の故に十界の衆生の父なり。熾盛光とは、或は大黑天神とも云ひ、或は土宮神とも云ふなり。然れども父母交會の一念なり。法華の心にては自愛用智なり、忽然火起焚燒舍宅とは是れなり。煩惱の一念の火起りて迷悟不二の舍宅を燒くなり。邪見とは是れなり。此の邪見を邪見即正と照したる南無妙法蓮華經の智慧なり。所謂る六凡ば父なり、四聖は子なり、四聖は正見、六凡ば邪見。故に六道の衆生は皆是れ我が父母とは是れなり云云。

勸發品。御義口傳に云く、此の品は再演法華なり。本迹二門の極理此の品に至極するなり。慈覺大師云く、十界の衆生は發心修行と釋し玉ふば此品の事なり。所詮此の品と序品とは生死の二法なり。序品は我等衆生の生なり、此の品は一切衆生の死なり。

生死一念なるを妙法蓮華經と云ふなり。品品に於ても初の題號は生の方、終の方は死の方なり。此の法華經は生死生死と轉りたり。生の故に始めに如是我聞と置く。如は生の義なり。死の故に終りに作禮而去と結したり。去は死の義なり。作禮の言は生死の間に爲すと爲す處の我等衆生の所作なり。此の所作とは妙法蓮華經なり。禮とは不亂の義なり、法界は妙法なれ不亂なり。天台大師云く、體の字は禮に訓ず、禮は法なり、各々其の親を親とし、各々其の子を子とす、出世の法體も亦復是の如しと。體とは妙法蓮華經の事なり。先づ體玄義を釋するなり。體とは十界の異體なり、是れを法華經の體とせり。此等を作禮而去とは説かれたり。法界の千草萬木、地獄餓鬼等何れの界も諸法實相の作禮に非ずと云ふ事なし、是れ即ち普賢菩薩なり。善とは法界、賢とは作禮而去なり、此れ即ち妙法蓮華經なり。爰を以て品品の初めにも五字を題し、終りにも五字を以て結し、前後中同南無妙法蓮華經の七字なり。末法弘通の要法唯此の一段に之れ有るなり。此等の心を失うて要法に結ばずんば末法弘通の法には不足の者なり。剩へ日蓮が本意を失ふべし。日蓮が弟子檀那は別の才覺無益なり。妙樂の釋に云く、子、父の法を弘むるに世界の益ありと。子とは地涌の菩薩なり、父とは釋尊なり、世界とは日本國なり、益とは成佛なり、法とは南無妙法蓮華經なり。今又以て此の如し、父とは日蓮なり、子とは日蓮が弟子檀那なり、世界とは日本國なり、益とは受持成佛なり、法とは上行所傳の題目なり。

是れ『御義口傳』の中別して品品の題意を示せるものにして、正し七字の『法華』三部の開題に當り。若し善く之を看れば本化の本典たる所以益明了ならん。但し此題釋には『觀普賢經』を缺けり。念ふに普賢品に已に普賢の二字を釋したるを以ての故に煩を避けて略したるものならんか。然ども上の廣釋の中の『普賢經』五箇の大事の第一は自ら今の題釋に當れば茲に轉將して之を補ふべし。云く、普賢經。御義口傳に云く、此の法華經は十界互具三千具足の法體なれば十界三千は悉く普賢なり。法界一法として漏るる義之れ無し、故に普賢なり。妙法の十界、蓮華の十界にして依正の二法は悉く法華經なりと結し納めたる經なれば此の普賢經を結經とは云ふなり。然らば十界を妙法蓮華經と結し合せたり云云。

第九 法華三部の科段

本化の正依たる本典としては上に示したるが如く唯南無妙法蓮華經の七字の『法華』三部にして之を稱して觀心の大教と云ふ。此の三世三段の觀心の大教は即ち是れ種脱相對の重なり。本門の上に更に種脱を對判し、在世脱益の一品二半を簡捨し、久遠下種の本法の題目五字に遡りて、而して末法をその下種の流通分と爲し、文上教相の分域を離れて行者自身の信行の『法華』三部と爲すの重なり、之に對して種脱相對の前に本迹相對あり、之を稱して本門の大教と云ふ。又本迹相對の前に權實相對あり、之を稱して迹門の大教と云ふ。その權實相對は一經三段の科の意なり。本迹相對は二經六段の科の意なり。此の權實相對、本迹相對の二重は、即ち是れ文上教相の重なり。釋尊一代の化導の『法華』三部なり。在世脱益を旨とするの『法華』三部なり。『御義口傳』(卷)下に云く、

文は教相、義は觀心なり。所説の文字を心地(行者の心に)沙汰するをば義とは云ふなり。

種脱相對の觀心の大教は『法華』三部の義の重なり。本迹相對及び權實相對の本門并に迹門の大教は『法華』三部の文の重なり。文の重は在世なり脱益なり。義の重は末法なり下種なり。文上教相、文底觀心の別ある所以は是れなり。

若し其れ觀心の義の重には唯七字のみなるを以て一經の始中終文文句句皆南無妙法蓮華經なり、何

の分節章科あらんや。『御義口傳』日向記』等に示すが如し。然れども義は必ず文に藉る。觀心を詮せんには必ず教相を尅すべし。權實、本迹を由序と爲して而して方に應に種脱を判じて本法に歸從すべし。是を以て本化の宗には學道の一途に於て必ず先づ權實を了らめ本迹を究めしむ。而して其の權實を了らめ本迹を究むるには天台を取り、殊に權實の九重には全然彼の説に依り、『法華』三部の文上の解釋には庸にその所立の分科に順ず。蓋し分科無ければ一經の本迹は究むべからず。一經の本迹を究めざれば一代の權實亦了らむべからず。若し權實、本迹に暗ければ種脱亦竟に識るべからざればなり。是れ學道の一途に於ける智人解人の要意なり。然れども信行は有智無智有解無解與に必ず初より七字の法華三部なることを忘るべからず。

左に掲ぐるところは即ち天台所立の分科にして「法華文句」に在り。但し「無量義經」「觀普賢經」は天台に所判無きを以て傳教の「開結科文」を取れり。

○無量義經總科



大衆重微問分
如來廣說分
此方隨喜供養分
他方隨喜供養分
聞經得益分

正説の經を標歎す
所利益の人を擧げて能利益の經を歎す
得用益を擧げて未聞の失を示す
菩薩の發問
如來の答
如來の試問
菩薩問はんと欲して答へ奉る

流通

菩薩の領解
重れて時會の得益を讀す
瑞を現して供養す
大莊嚴菩薩等に付屬す
滅後弘經の佛敎を敬愛す
流通を讚歎す
經を聞いて受持す

十功德品

○無量義經德行品第一

通序

衆成就

法・人・時・主・處成就

標

聲聞衆
菩薩衆

四衆

輪王

人衆

列名唱數

自利

歎徳

利他

止徳

轉法輪

法身

利他徳

序分

列

菩薩衆

歎徳

利他

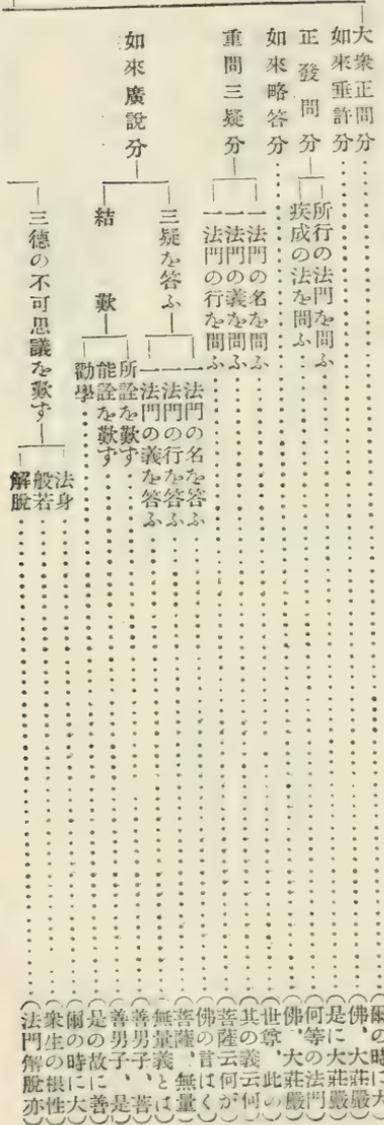
利他徳

是の如きを
大比丘衆萬
菩薩摩訶薩
天龍夜叉
諸比丘
國王王子
大轉輪王
其の菩薩の
其の諸の善
大智悲を得
又善く諸の衆
是れ諸の衆

○無量義經說法品第二

正宗分

開題

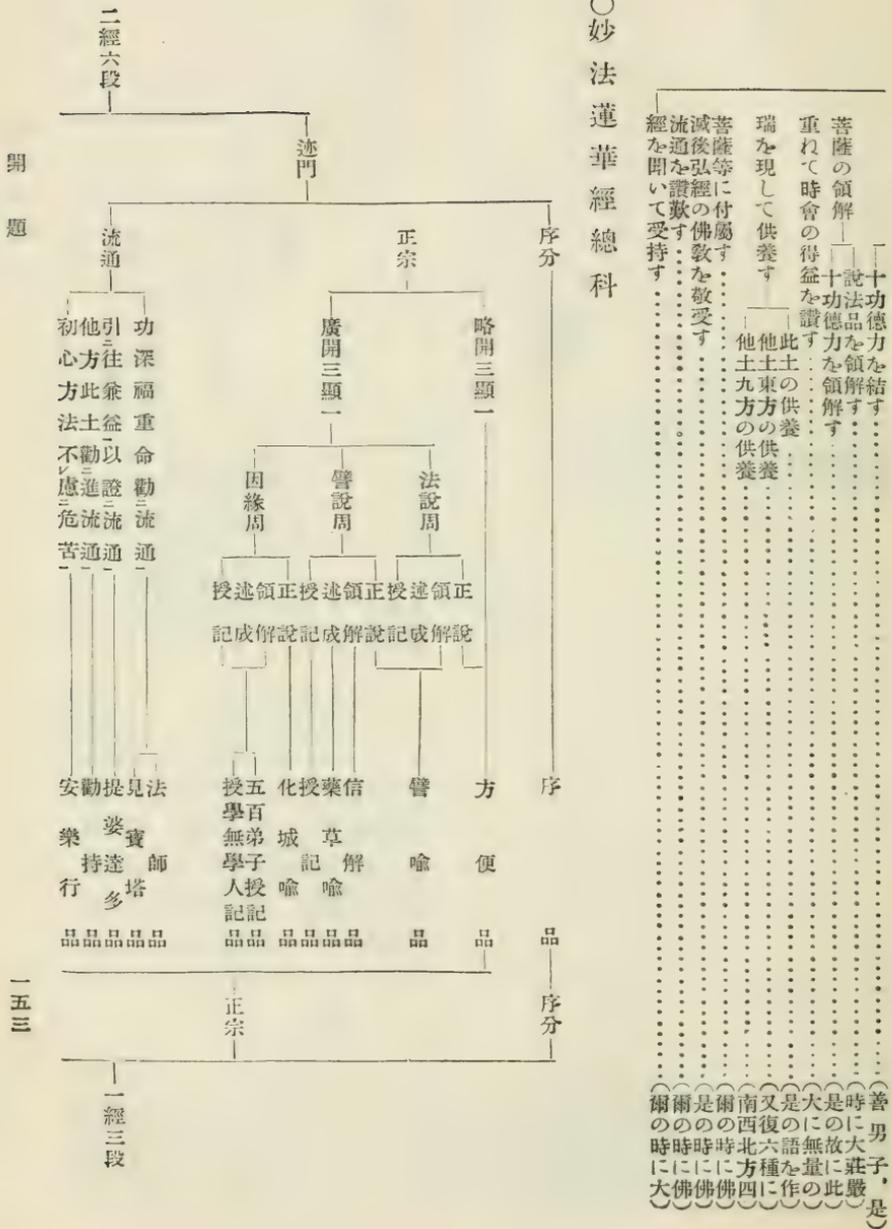


爾の時に大莊嚴
佛等大莊嚴
何此莊嚴
世尊云何
其義云何
佛言無量
菩薩無量
善男子善
善男子善
是男子善
爾の時故
樂生時に
法門解脫
亦性



善薩の諸波
願力の安住
其の比丘の
久の時に大
爾の時に大
智の時に大
其の時に大
戒の時に大
而もして六
能く我衆を
今我等衆を
稽首して八
稽首して八
能く我衆を
是の故に切
是の故に切

○妙法蓮華經總科



開題

一五三

一經三段

○妙法蓮華經譬喻品第三

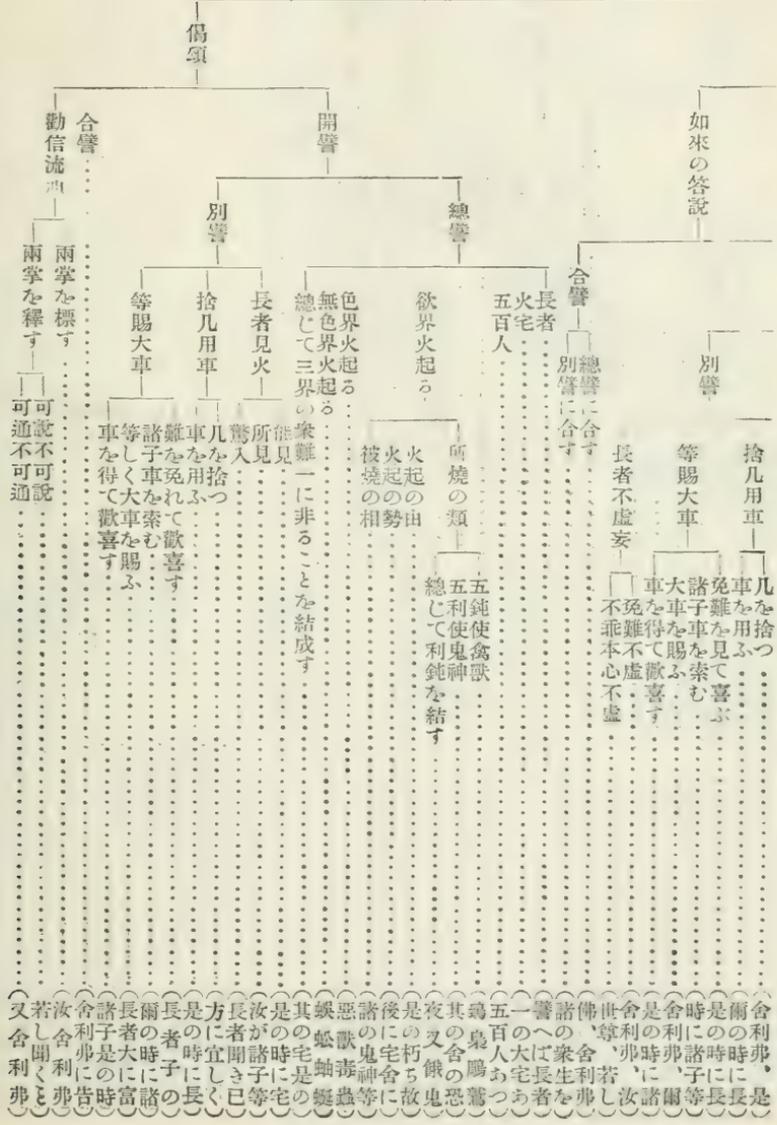
法說周



開題

譬說周正
正說段

○妙法蓮華經信解品第四

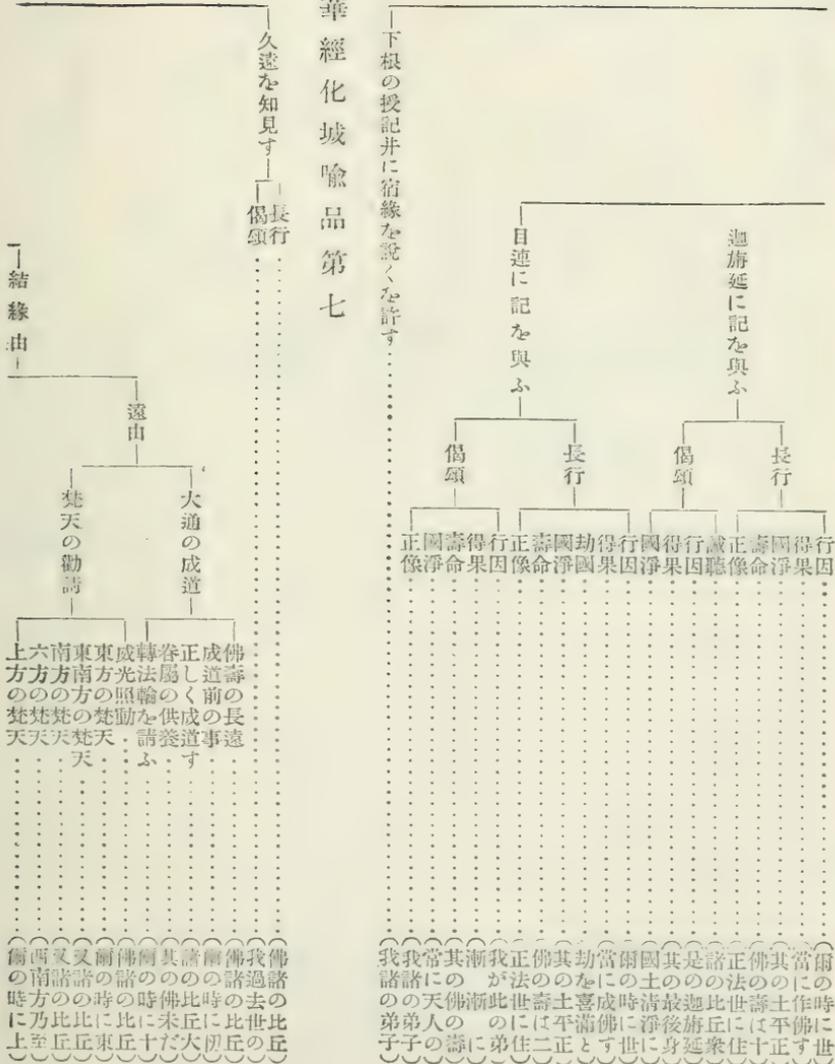


舍利弗、是の時に長是
爾の時に長是
是の時に長是
時に諸子等
舍利弗、汝
是の時に長是
世尊、若し
佛、舍利弗
諸の衆生を
譬へば長者
五百人あつ
鶏、鶩、鴛、鴦
五、百、人、あ
是の舍の恐
夜、又、俄、鬼
是の朽ち故
後に宅舍に
諸の鬼神等
惡、蛇、蝮、毒、蟲
其の宅是の
是の時に已
汝が諸子宅
長者聞き已
方、の時に長
是の時に長
長者子の
爾の時に諸
長者大に富
諸子、是の時
汝、舍利弗、
若し、聞くと
又、舍利弗、

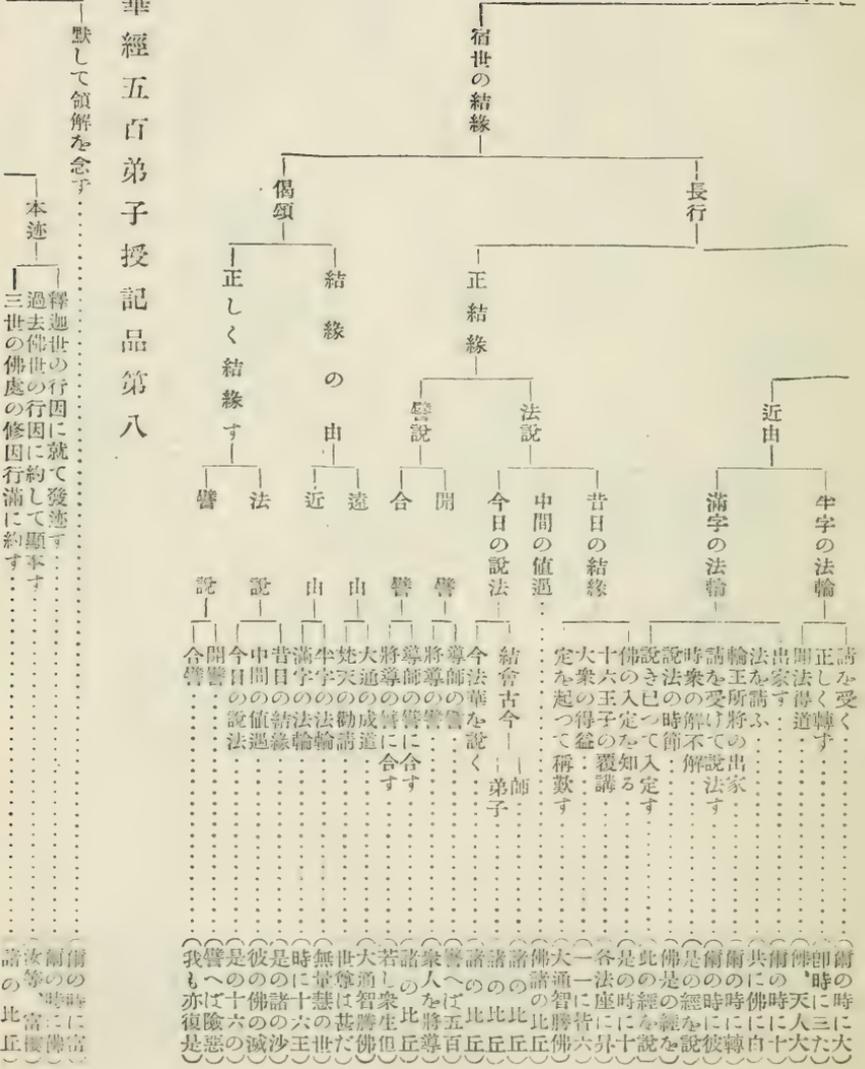
○妙法蓮華經化城喻品第七

下根の授記并に宿縁を説くを許す

久遠を知見す 長行 偈頌



○妙法蓮華經五百弟子授記品第八



黙して領解を念す

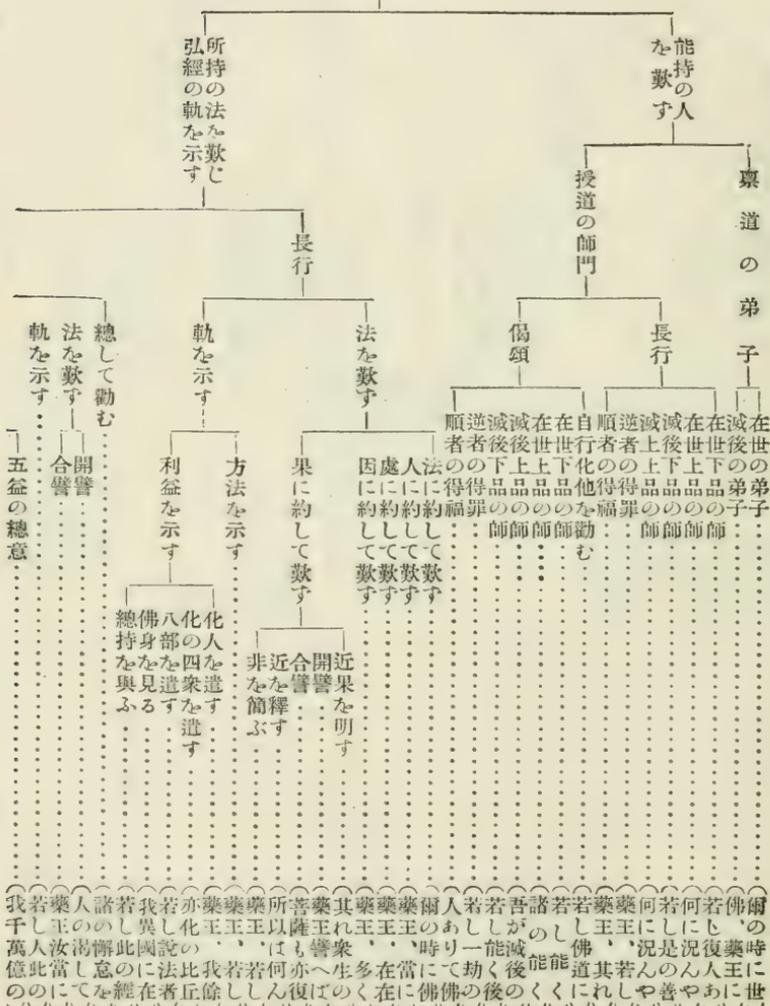
本述

釋迦世の行因に就て發迹す
過去佛世の行因に約して顯事す
三世の佛處の修因行滿に約す

- 1. 諸の時に富
- 2. 爾の時に富
- 3. 爾の時に富
- 4. 爾の時に富
- 5. 爾の時に富
- 6. 爾の時に富
- 7. 爾の時に富
- 8. 爾の時に富
- 9. 爾の時に富
- 10. 爾の時に富
- 11. 爾の時に富
- 12. 爾の時に富
- 13. 爾の時に富
- 14. 爾の時に富
- 15. 爾の時に富
- 16. 爾の時に富
- 17. 爾の時に富
- 18. 爾の時に富

○妙法蓮華經法師品第十

迹門流通分功深福重
命勸流通釋尊自說



開題

○妙法蓮華經見寶塔品第十一

功德福重命動
流通多寶分身

長行

偈頌

益を示す

結論

四衆を遣す
化人を遣す
總持を興ふ
佛身を見る
八部を遣す

(若し我が滅)
(若し衆生を)
(若し聖法を)
(若し人空を)
(若し法師に)

多寶の涌現

塔現するの相
諸天の供養
多寶の稱歎
時衆の驚疑

第一問
第二問
第三問

第一問を答ふ
第二問を答ふ
第三問を答ふ

(爾の時天に佛)
(爾の時四寶)
(爾の時に出)
(又其の涌出)
(爾の時佛に)

分身の來集

如來の答釋
多寶を見んと請ふ
應に分身を集むべし
樂説集めたまへと請ふ
光を放つて遠く召す
諸佛同じく來る

第一問
第二問
第三問

第一問を答ふ
第二問を答ふ
第三問を答ふ

(爾の時佛に)
(爾の時佛に)
(爾の時佛に)
(爾の時佛に)
(爾の時佛に)

國界を嚴淨す
開塔を興欲す

娑婆を變す
八方二百萬億那由他の佛を變す
重て八方二百萬億那由他の佛を變す
諸佛問訊して興欲す
釋迦塔を開く
四衆皆同じく見聞す
二佛並び坐す
四衆加を請ふ

(爾の時佛に)
(爾の時佛に)
(爾の時佛に)
(爾の時佛に)
(爾の時佛に)

釋迦の唱募
大聲に唱募す
付屬の時至る
付屬の有在

第一問
第二問
第三問

第一問を答ふ
第二問を答ふ
第三問を答ふ

(爾の時佛に)
(爾の時佛に)
(爾の時佛に)
(爾の時佛に)
(爾の時佛に)

多寶の減度
分身の來集

佛來此久
聖主我分

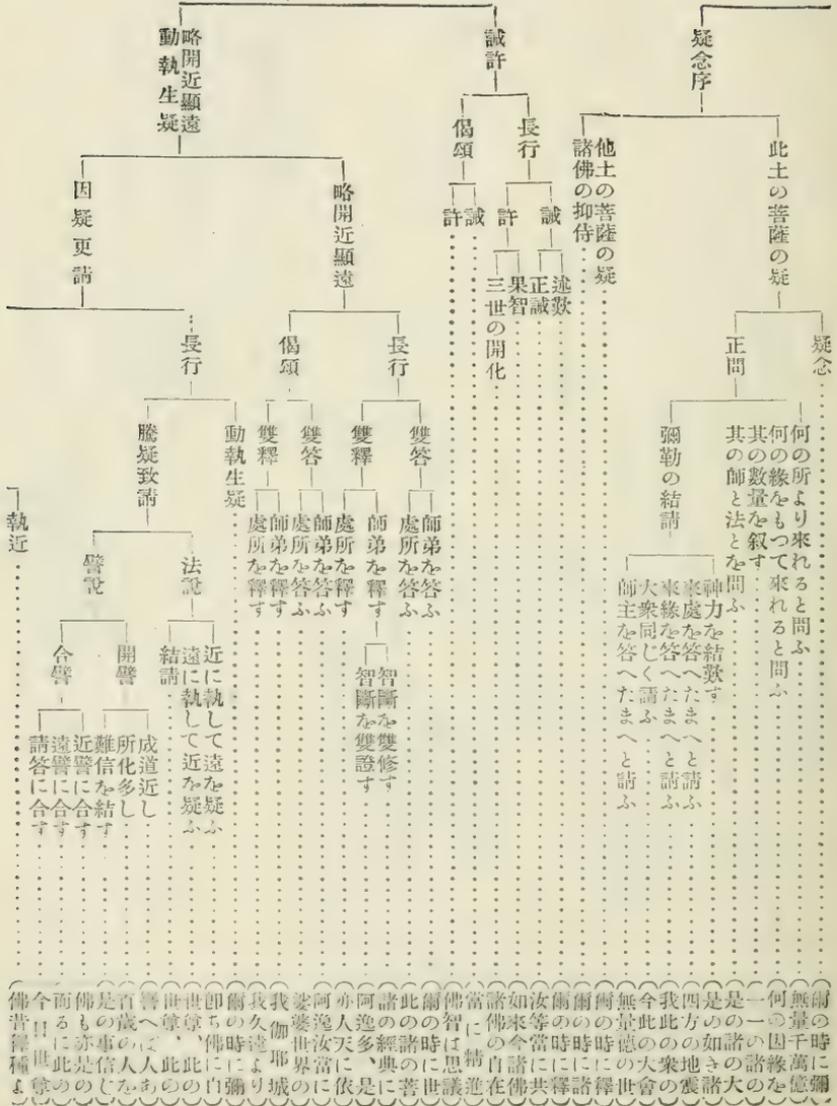
第一問
第二問
第三問

第一問を答ふ
第二問を答ふ
第三問を答ふ

(爾の時佛に)
(爾の時佛に)
(爾の時佛に)
(爾の時佛に)
(爾の時佛に)

本門正宗
分正說段

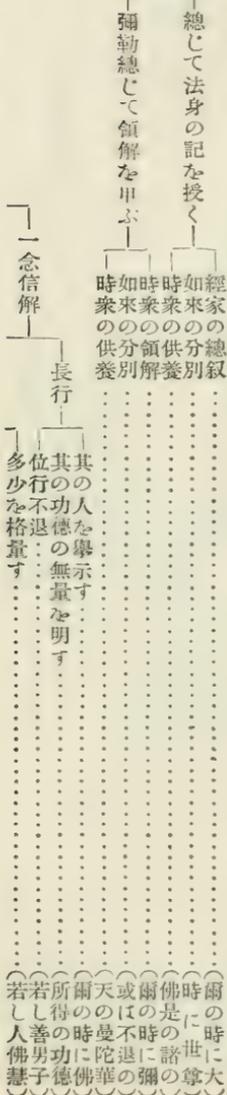
開
題



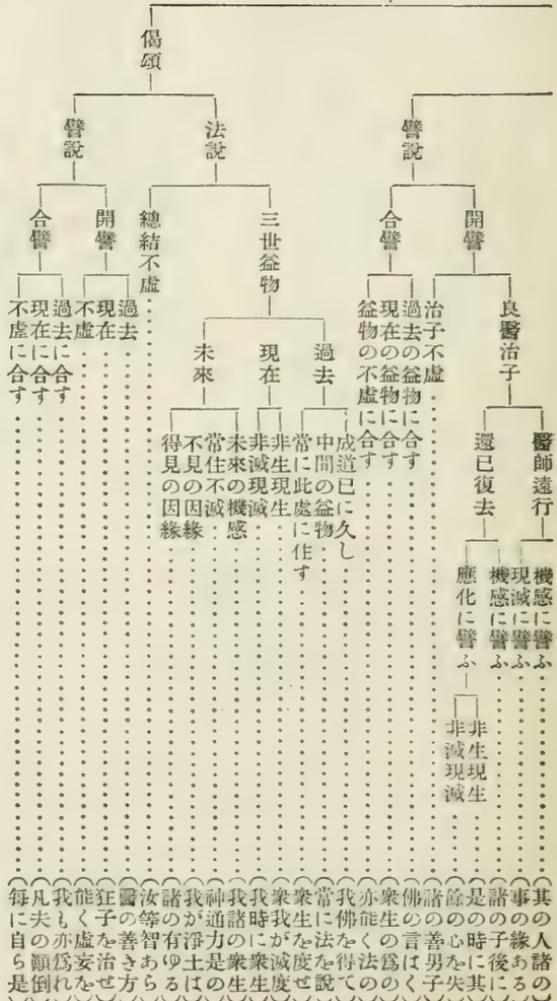
佛書經論
今日世尊
而此亦信
是百歲人
善事人此
世章佛自
即佛自彌
爾久遠耶
我佛耶城
我佛耶城
婆羅世界
阿逸天當
亦人當依
諸經典是
此諸時世
爾智時世
佛智時世
諸佛自思
如佛自共
法等當釋
爾等當釋
爾等當釋
無量時世
今此大衆
我四方地
是此大地
一之諸緣
何一之諸
無量千萬
爾時因緣

○妙法蓮華經分別功德品第十七

授記領解



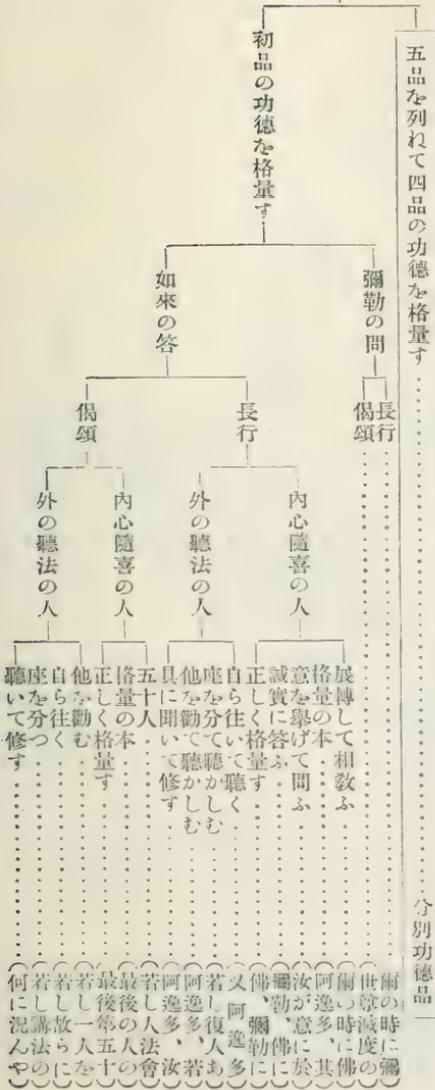
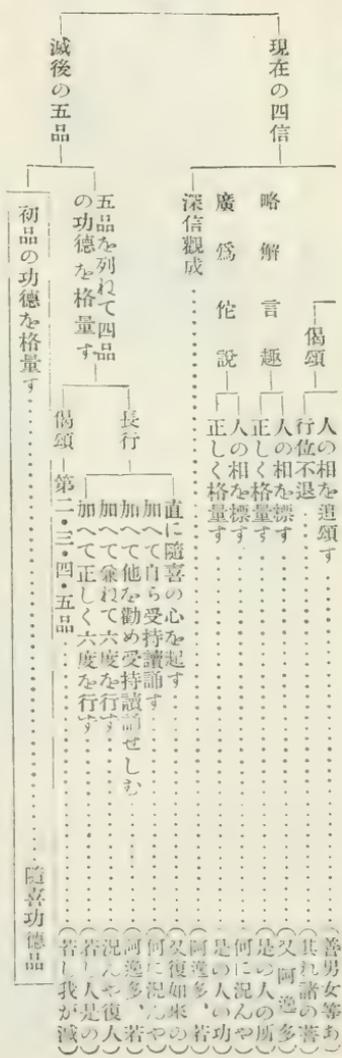
正答



本門流通分明初品因功德勸流通

○妙法蓮華經隨喜功德品第十八

明初品因功德勸流通



○妙法蓮華經法師功德品第十九

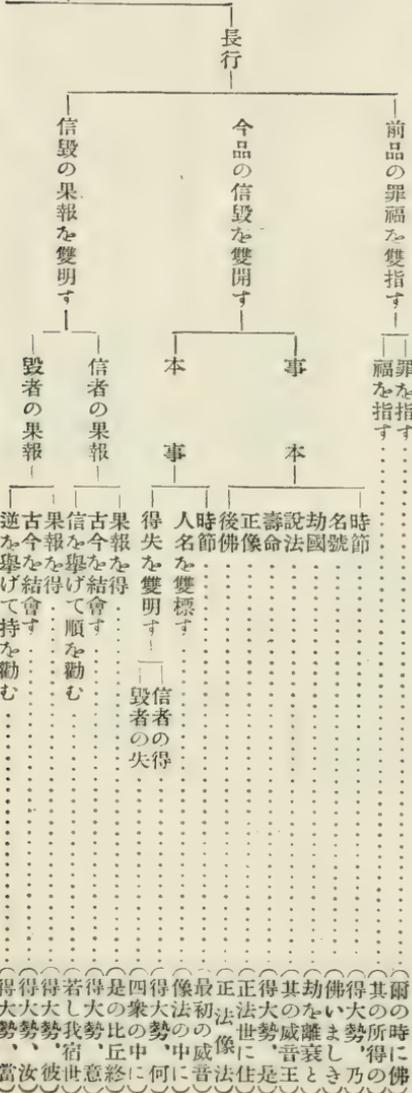
明初品果功德勸流通

總じて六根の功德の盈縮を列す
別して六章を列れて各各解釋す

眼根	長行	爾の時に佛
耳根	長行	若し大衆の常
鼻根	偈頌	復次に常精
舌根	偈頌	復次に常精
身根	長行	復次に常精
意根	偈頌	復次に常精

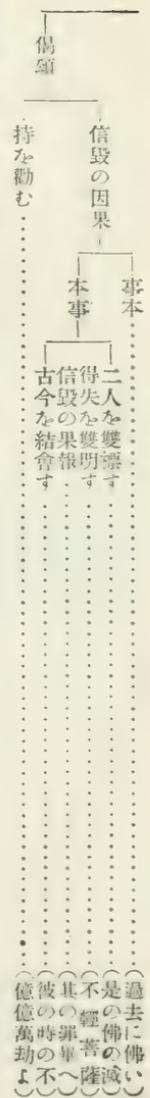
○妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十

引信毀罪福
證勸流通

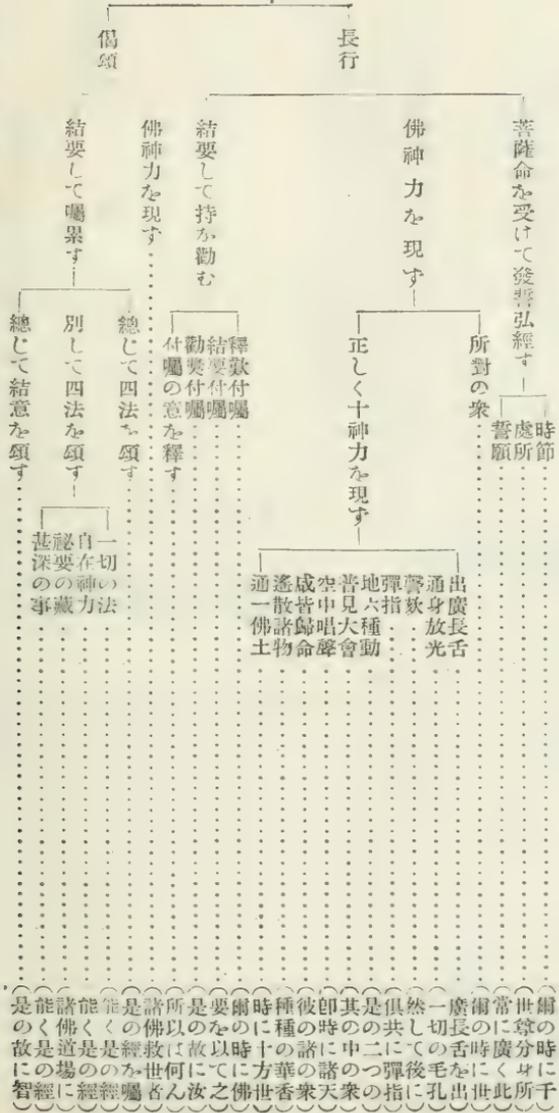


開題

○妙法蓮華經 如來神力品第二十一



明菩薩受命弘經



○妙法蓮華經 囑累品第二十二

爾時佛在舍衛城祇樹園中說法。時諸菩薩摩訶薩。聞佛所說。皆大歡喜。受持奉讀。思惟修習。

○妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五

化他流通
三昧乘乘

光を放つて東召す

發來の縁

命を奉じて西來す

正發來

十方の弘經

二土の得益
本國に還歸す
此の品を聞いて道を進む

前番問答

無盡意の問
 如來の總答
 如來の別答
 勸持名答

苦に遭ふ
 聞名稱號
 解脫稱得
 口の機應
 身の機應
 勸持
 格量
 結歎
 身業

爾の時に無
 佛の無盡意
 諸の觀世音
 觀世音菩薩
 若し衆生あ
 若し女人あ
 是の故に來
 無盡意に來
 無盡意觀
 無盡意菩薩

第一問答

華德の問

善根を問ふ
神力を問ふ
神力を答ふ

爾の時に華
佛の華德菩薩

第一問答

如來の問

善根を問ふ
神力を問ふ
神力を答ふ

爾の時に華
佛の華德菩薩

塔中善と稱す

爾の時に華
佛の華德菩薩

多寶を見んと請ふ

爾の時に華
佛の華德菩薩

相訊して旨を傳ふ

爾の時に華
佛の華德菩薩

眷屬と經歷す

爾の時に華
佛の華德菩薩

佛旨を受く

爾の時に華
佛の華德菩薩

至誠にせよと誠む

爾の時に華
佛の華德菩薩

本佛を辭す

爾の時に華
佛の華德菩薩

經家神慧を叙す

爾の時に華
佛の華德菩薩

兩番の問答

長行

後番問答

三業を問ふ

口業

三種の聖身

六種の人身

四種の婦女身

童男童女身

八部身

執金剛身

命を奉ず

受け奉ず

重ねて奉ず

佛勸む

即ち受く

總結

如來の別答

如來の總答

供養を勸む

旨を受く

德を歎す

雙問

經家の叙

加へて行願を總歎す

觀音得名

總答七難

總答三毒二求

普門示現

別答

顯機を加頌す

雙頌二門

雙頌二勸

雙頌二答

偈頌

聞品の功德

持地徳を歎す

聞品の得益

境智深の妙を明して常念を勸む

感應の難測を明して勿疑を勸む

供養を勸む

佛の時に普門持徳

念の時に疑を

一切の觀世音

妙音觀世音

諍訟して戒雷

悲愍の清淨觀

種種の諸觀

衆生困厄を具

假使生困厄を具

我汝が爲に

妙相を具足

我今重ねて

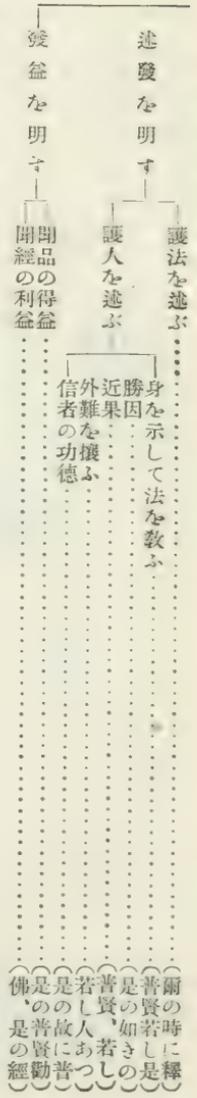
世尊は妙相

無意に觀世

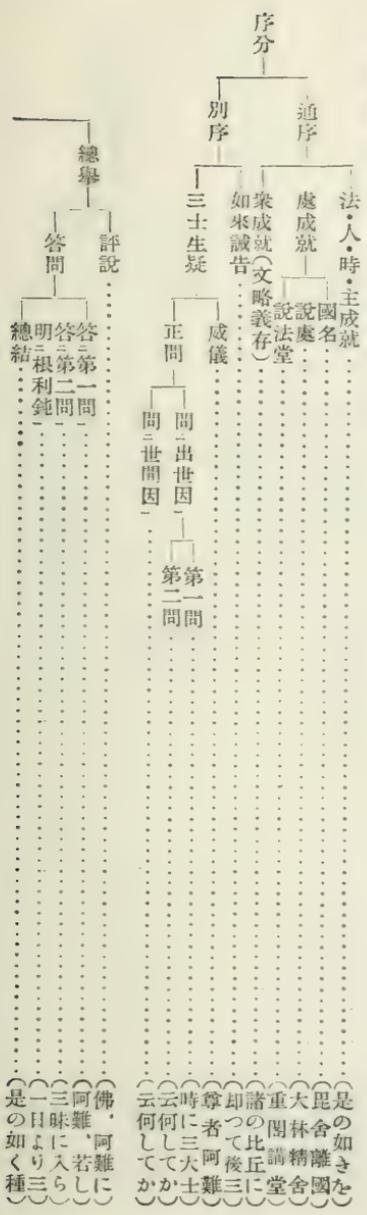
即時に觀佛

無意に觀世

佛說觀普賢菩薩行法經總科



佛說觀普賢菩薩行法經



六根懺悔法

菩薩廣說

總明 說三念法

眼根

耳根

鼻根

舌根

身意

舉前總結

大乘勝故 減惡生善

明減惡生善

生善

眼根

耳根

但當在大乘

總結

生善由

印功能

應供中最

具佛功德

生佛五眼

實相印

能生三身

此佛阿難

此方等經

佛印

此大如海

此的如乘

其乘

諸惡永滅

爾時大

是當眼

耳根

結減惡

觀念

結減惡

耳過

眼惡

結減惡

眼根懺悔法

眼懺悔力見多寶

於善賢所懺悔

善賢說耳懺悔法

證諸正法

諸佛讚歎

普賢說鼻懺悔法

行者正法

讚歎佛德

十惡業懺悔

舌懺悔法

異聖教誡

異施勸二根懺悔法

行者問懺悔處

能住佛名

舉法

莊嚴相

究竟法

諸佛說甚深大懺悔法

眼根懺悔法

眼懺悔力見多寶

於善賢所懺悔

善賢說耳懺悔法

證諸正法

諸佛讚歎

普賢說鼻懺悔法

行者正法

讚歎佛德

十惡業懺悔

舌懺悔法

異聖教誡

異施勸二根懺悔法

行者問懺悔處

能住佛名

舉法

莊嚴相

究竟法

諸佛說甚深大懺悔法

眼根懺悔法

眼懺悔力見多寶

於善賢所懺悔

善賢說耳懺悔法

證諸正法

諸佛讚歎

普賢說鼻懺悔法

行者正法

讚歎佛德

十惡業懺悔

舌懺悔法

異聖教誡

異施勸二根懺悔法

行者問懺悔處

能住佛名

舉法

莊嚴相

究竟法

諸佛說甚深大懺悔法

眼根懺悔法

眼懺悔力見多寶

於善賢所懺悔

善賢說耳懺悔法

證諸正法

諸佛讚歎

普賢說鼻懺悔法

行者正法

讚歎佛德

十惡業懺悔

舌懺悔法

異聖教誡

異施勸二根懺悔法

行者問懺悔處

能住佛名

舉法

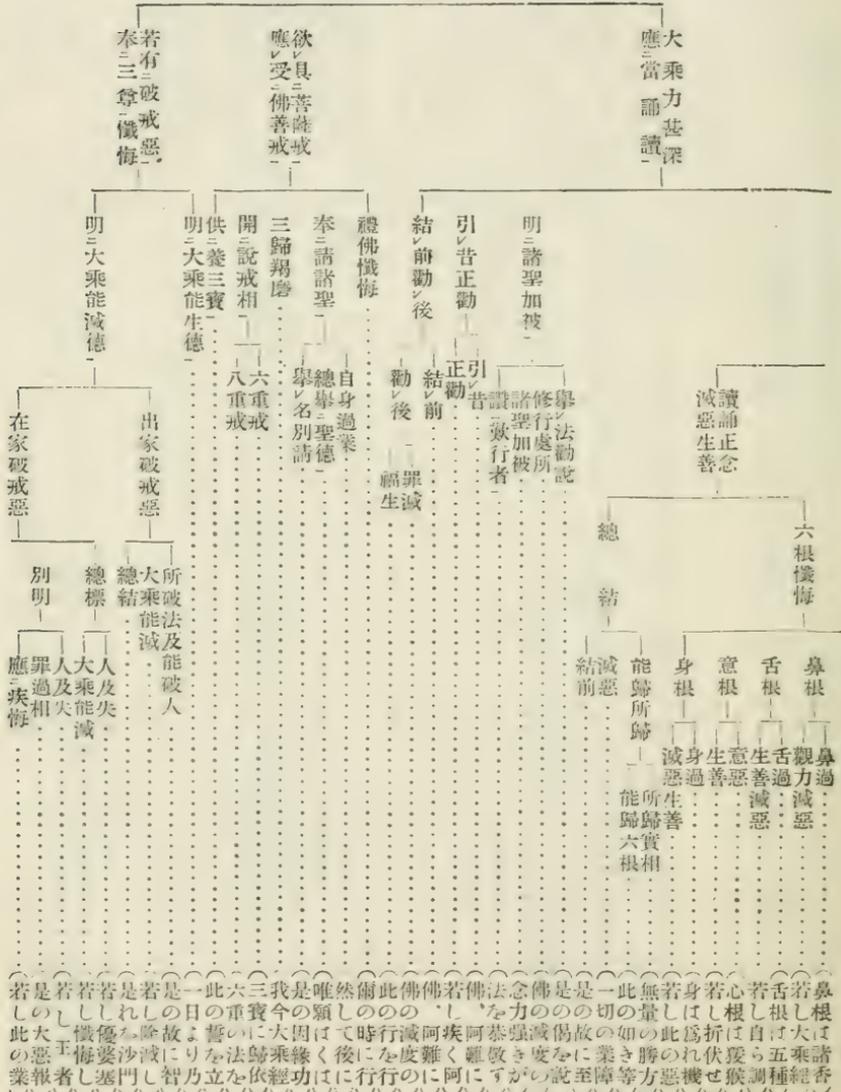
莊嚴相

究竟法

諸佛說甚深大懺悔法

正宗分勸
物令修分

開
題



流通分——明持者疾成……明聞經得益……



(佛、阿難に) (是の語を説)

第十 『法華』三部の梵名、及び各品の梵漢對照。

『法華』三部の梵名は左の如し。

『無量義經』 Mahāvaidśā-sūtra

『妙法蓮華經』 Siddharmaprajñāra-sūtra

『觀音賢經』 Samantabuddhī-sūtra-vaidśā-c-ryādharma-sūtra

『無量義經』の梵名に就ては Amītartha-sūtra なるべしとの或氏の説あれども、『法華』序品の梵文に準ずれば Amītartha に非ずして Mahānīrveda なることは明かなり。Mahā (摩訶) は大なれば大義と云ふべきなれども、大多勝の三意を含める詞の Mahā なれば、羅什はその多の意を取つて無量義と譯したるものなるべし。

『妙法蓮華經』は法護は『正法華經』と題したれども梵名は與に異なるに非ず。支那にこの梵名を書けるに多くは薩達磨芬陀利佉蘇多曠の字を以てせり。

『觀音賢經』は具さには「觀音賢菩薩行法經」なること已に翻譯の章下に記せるが如し。又略して「觀音賢」とも云ふなり。又『出深功德經』とも稱せり。

『法華』各品の梵漢對照。

漢

梵

妙法蓮華經	正法華經	添品法華經	尼波羅品
序品第一	光瑞品第一	序品第一	(1) Nāgā-parivarta
方便品第二	善權品第二	方便品第二	(2) Upāyakauśalya
譬喻品第三	應時品第三	譬喻品第三	(3) Ananyā
信解品第四	信樂品第四	信解品第四	(4) Adhimukti
藥草喻品第五	藥草品第五	藥草喻品第五	(5) Ośadhi
授記品第六	授釋闍品第六	授記品第六	(6) Vyākaraṇa
化城喻品第七	往古品第七	化城喻品第七	(7) Puravoga
五百弟子授記品第八	授五百弟子決品第八	五百弟子授記品第八	(8) Pañcābhīṣṭasāraṇa
授學無學人記品第九	授阿難羅云決品第九	授學無學人記品第九	(9) Ananda-kāṅkolābhyaṃ bhyaṃ et dvābhyaṃ bhikṣu-sa-harā bhyaṃ vyākaraṇa
法師品第十	藥王如來品第十	法師品第十	(10) Saddharmabhāṣaka
見寶塔品第十一	七寶塔品第十一	見寶塔品第十一	(11) Stūpasandāraṇa
提婆達多品第十二	梵志品第十二		
勸持品第十三	勸說品第十三	勸持品第十三	(12) Uśāh
安樂行品第十四	安樂行品第十四	安樂行品第十三	(13) Sukhavahāra
從地涌出品第十五	菩薩從地涌出品第十五	從地涌出品第十四	(14) Bodhisattva-prahīyovāra-sa-muṅganā' or Būhis tva-pīhī

如來壽量品第十六	如來現壽品第十六	如來壽量品第十五	(15) Tathagatāy ujjayamaṇa
分別功德品第十七	例福事品第十七	分別功德品第十六	(16) Paṇḍaparyāya
隨喜功德品第十八	勸助品第十八	隨喜功德品第十七	(17) Anamo bhāṇapunyaireśa
法師功德品第十九	歎法師品第十九	法師功德品第十八	(18) Dharmabhāṇakānāṅgaṇa
常不輕菩薩品第二十	常被輕慢品第二十	常不輕菩薩品第十九	(19) Sādhanābhāṇa
如來神力品第二十一	如來神足行品第二十一	如來神力品第二十	(20) Tathagatarūpābhāṇa
囑累品第二十二	囑累品第二十八	囑累品第二十七	(21) Dhārmā
藥王菩薩本事品第二十三	藥王菩薩品第二十二	藥王菩薩本事品第二十二	(22) Bhāṇaśāstra
妙音菩薩品第二十四	妙吼菩薩品第二十三	妙音菩薩品第二十三	(23) Śāntarājanīya
觀世音菩薩普門品第二十五	光世音普門品第二十四	觀世音菩薩普門品第二十四	(24) Śāntarājanīya
陀羅尼品第二十六	總持品第二十五	陀羅尼品第二十一	(25) Śāntarājanīya
妙莊嚴王本事品第二十七	往世淨復淨王品第二十六	妙莊嚴王品第二十三	(26) Śāntarājanīya
普賢菩薩勸發品第二十八	樂普賢品第二十七	普賢菩薩勸發品第二十七	(27) Dharmaparyāya

正法華に二十七八兩本あること續譯の章下に已に云へるが如し。今の品名及び品数は黄葉版(本)の本を取りしなり。

この外『法華』三部の説處等は本文に註するを看るべし、又其の文辭語句の同異等は主として宗淵の『法華經考異』を參せり。學道の爲めに少資あらば幸なり。

譯者 清水梁山 識

國譯無量義經

德行品第一

是の如く 我聞き
き。一時、佛、王
舍城、耆闍崛山の中
に住したまひ、大比
丘衆萬二千人と與に俱
なりき。菩薩摩訶薩
八萬人あり。天、龍、
夜叉、乾闥婆、阿修羅、
迦樓羅、緊那羅、摩睺
羅伽、諸の比丘、
比丘尼、及び優婆塞、

德行品第一

【一】我。經の結集家阿難尊者
自ら稱して云ふなり。

【二】佛(Buddha)。具さには佛
陀、略して佛と云ふ。知者と
翻じ、覺者と翻じ、亦淨覺と
も翻ぜり、十方三世に佛あり、
今の言はゆる佛とは釋迦牟尼
佛なり。(浮陀、佛駄、歩他、
浮圖、浮頭、釋陀、勃陀)

【三】王舍城(Kāśyapa)。中印
度、摩揭陀國の首都なり。羅
闍祇、羅闍祇伽羅、羅闍揭梨
醯、囉惹訖哩哩、伽羅闍吉哩
只、曷羅闍娑利哩)

【四】耆闍崛山(Girivraja)。
鷲頭山と翻じ、亦鷲臺山とも

翻す。山頂の形狀鷲に似たれ
ば鷲頭山と云ひ、多く鷲を棲
ましめて而も且つ高臺の狀に
似たれば鷲臺山と云ふ。亦鷲
峰とも翻ぜり。靈山、靈鷲山
等と云ふは、其の地仙人所棲
の靈境なるが故なり。又一説
には鷲を靈鳥と名づく、能く
人の死活を知るが故なりと云
へり。然れども梵音には靈の
義無し、王舍城の東北に在り
て、王舍城五山の一なり。耆
闍崛多山、伊沙崛山、揭梨駄
羅鳩低山、娑栗陀羅矩吒山)

【五】大比丘衆(Mahāksa)。
比丘は佛弟子の四衆の一にし

て、大比丘は比丘の中の勝者
なり。名義は後の四衆に云ふ
べし。

【六】菩薩摩訶薩(Bodhisattva
mahāsattva)。具さには菩提薩
埵摩訶薩埵なり。菩提は道と
翻じ、薩埵は心と翻じ、摩訶
薩埵は大心と翻す。上の菩提
薩埵は自行の道心、下の摩訶
薩埵は化他の大心なり。又薩
埵に衆生と云へる義を含め
り、故に大道心成衆生とも翻
す、亦覺有情大有情とも翻
す、有情とは衆生なり。總じ
て佛弟子の中に化他大悲の行
を修す者、これを菩薩摩訶

一

優婆夷も俱なりき。

大轉輪王、小轉輪王、

金輪、銀輪、諸輪の王

と、國王、王子、國臣、

國民、國士、國女、國

大長者と、各眷屬百

千萬數の而も自ら圍繞

せると與に、佛の所に

來詣して、(二)頭面に足

を禮し、遶ること百千

匝して、香を燒き華を

散じ、(三)種種に供養す

ること已つて、退いて

一面に坐しぬ。

其の菩薩の名をば、

薩と云ふ。又略して單に菩薩

とも云ふなり。(冒地薩桓嚩野

摩賀薩桓嚩野、菩提索多)

【七】天龍、夜叉、乾闥婆、阿

修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺

羅伽。(デーア)梵天、帝釋等の天

界の神の通稱なり。(提婆、薩

婆、地婆)

龍(ヌオカ)。八大龍王等の龍神

を云ふなり。(那伽)

夜叉(ヤクシャ)。是れ鬼神の一

種にして、天部に攝せらるも

のと、鬼趣に攝せらるものと

の二類あり。又地に在るもの

と、虚空に在るものと、天界

と翻す。其他、貴人、輕捷、

苦活、暴惡、祠祭、盡、可畏

等の諸翻あり。この中暴惡、

可畏は羅刹の譯名なれども、

地居の羅刹は總べて夜叉に統

せらるるが故に直ちに夜叉を

暴惡、可畏とも云ふなり。密

教に言はゆる密迹は即ちこの

夜叉なり。北方毗沙門天王に

隸屬す。(閻叉、藥叉、野叉)

乾闥婆(Gandharva)。常に十

寶山の中に居り、帝釋天王の

樂を須ゆる時は天に上りて樂

を奏す、即ち天の樂神なり、

故に直ちに樂神と翻ざり、義

香神即ち音樂の神なればな

り。若し其の大海の中に在る

ものは阿修羅に隸屬す(健達

縛、乾香和、健達縛、健陀羅、

彦達縛)

阿修羅(Asura)。非天と翻す。

天趣に在る者も、詔許多くし

て天の實徳無きが故に之を斥

つて非天と云ふなり。亦三十

三天と闢殺するが故に非天と

云ふなり。其の障蔽と翻する

は、天と闘ふの時手を以て日

月を蔽くし其の光を障へしが

故なり。又無極妙戲と翻す。

常に怖畏多くして天の極妙の

戲樂無きが故なり、故に亦劣

天とも翻ざり。又非端正と翻

す、阿修羅の男に身皆醜なる

が故なり。或は又不酒、無

酒、不飲酒等と翻す、四天下

の華を採つて大海に浸し、海

水を悉く醸して酒と成さん

とせしに、其の味變ぜざりし

三 文殊師利法王子、大

威德藏法王子、無憂藏

法王子、大辯藏法王子、

彌勒菩薩、導主菩薩、

藥王菩薩、藥上菩薩、

華啼菩薩、華光幢菩薩、

陀羅尼自在王菩薩、觀

世音菩薩、大勢至菩薩、

常精進菩薩、寶印首菩

薩、寶積菩薩、寶杖菩

薩、越三界菩薩、毗摩

臚羅菩薩、香象菩薩、

大香象菩薩、師子吼王

菩薩、師子遊戲世菩薩、

師子奮迅菩薩、師子精

德行品 第一

かば、怒つて酒を飲むことを
斷ちしが故にと云ふ。然るに

一説には、酒の梵名は宰利に
して修羅に異なり。但其の音

近似せるを以て此の謬傳を生
ず。此の阿修羅は四種あり、

鬼趣に在る者は卵生、人趣に
在る者は胎生、天趣に在る者

は化生、畜趣に在る者は濕生
なり。(阿素羅、阿須倫、阿須

羅、阿素洛) 迦樓羅(ガルーダ)

して、諸鳥の王と稱せらる。
其の翅金色なるを以て金翅鳥

と翻す。又但金色のみに非ず
して種種寶の翅色なれば妙翅

鳥とも翻す。又食吐悲苦聲と
も翻ざり、此の鳥常に龍を食

ふ、其の食ふに一たび噉中に
内れ、後必ず吐て而して食ふ、

吐く時龍猶ほ活きて悲苦の聲
を出すが故なり。又大噉項

鳥、項瘻等の翻あり。此の鳥

亦四類ありて、卵生の鳥は卵
生の龍を食とし、濕生の鳥は

卵生と濕生の龍を食とし、胎
生の鳥は卵生と濕生と胎生の

龍を食とし、化生の鳥は具さ
に四生の龍を食とす。(迦婁

羅、迦留羅、伽樓羅、揭路荼

・誨(嚙摩) キンナラ

緊那羅(Kinnara)。疑人と翻
す。此の神形貌人に似れども

頂に一角あり、見る者をして
人が人に非ざるかを疑はし

むるが故なり。疑神、是人非
人、猶豫丈夫等の諸翻概れ此

の旨に由る。亦歌神と翻じ、
歌樂神と翻ずるは其の技能に

由る。此の神美妙の音聲あつ
て能く歌舞を作し、帝釋天王

の法樂を執掌するが故なり。
畜趣の攝にして、四天王に隸

屬す。(緊那羅、緊捺落、甄陀
羅、眞陀羅) ホーラガ

大腹行、大腹行龍、地龍、大
蟒神等の諸翻あり。即ち無足

腹行の蟒神なり。一説には樂
神の部類と云へり。畜趣にし

て龍の所攝なり。(牟呼洛迦、
莫呼洛迦、摩護囉誑、摩跋勒、

摩休勒) 以上を八部と云ふなり。

【八】比丘、比丘尼、優婆塞、
優婆夷。

比丘(Bhikṣu)。比丘尼(Bhikṣuṇī)。

出家の僧の男を比丘と云ひ、
出家の僧の女を比丘尼と云

ふ。有翻無誑の兩説あり。無
翻は、怖魔、乞士、淨命、淨

持戒、破惡等の諸義あるを以
て、多含不翻の例に従つて梵

言を存すとなり。有翻は比丘
を除鐘男と識じ、比丘尼を除

鐘女と翻す。情欲の鐘湯を斷
除するが故なり。又薰士、薰

女と翻す、如來の善法を薰修

進菩薩、勇銳力菩薩、
 師子威猛伏菩薩、莊嚴
 菩薩、大莊嚴菩薩と曰
 ふ。是の如き等の菩薩
 摩訶薩八萬人と俱なり
 是の諸の菩薩よ、
 皆是れ 法身の居士
 ならずといふこと莫
 し。(四) 戒、定、慧、解
 脱、解脫知見の成就す
 る所なり 其の心禪寂
 にして、常に 二二昧
 に在り。恬安澹泊にし
 て、無爲無欲なり。顛
 倒亂想、復入ることぞ

練行するが故なり。又勤事男、
 勤事女と翻す。如來に常侍し
 て佛事に精勤なるが故なり。
 年二十歳以上、男は二百五十
 戒を受けて比丘の稱を得、女
 は五百戒を受けて比丘尼の稱
 を得。其の以前は沙彌、沙彌
 尼なり。此の二衆に出家の佛
 弟子なり。(苾芻、苾芻尼、
 苾芻塞(Upekka)、
 優婆塞(Upekka)、
 優婆夷(Upekka)。
 近善男子、近善女人と翻す。
 又近宿男、近宿女と翻す。又
 近事男女、近侍男女等と翻す。
 優婆塞は男、優婆夷は女、此
 の男女、出家の比丘に親近し
 三寶に従つて常に住宿し給事
 するが故に此の諸翻あるなり。
 五戒八齋戒を受く、在家
 の佛弟子なり。(鄔波索迦、優
 婆娑迦)
 已上を四衆と云ふなり。

【九】 轉輪聖王 (Chakravartin)。
 轉輪とは、王の行くに、前に
 輪寶あつて一切を摧伏して過
 ぐ、故に轉輪聖王と云ふ。又
 略して輪王と云ふ。其の輪寶
 は一王一箇なれども徳に従つ
 て差あり、四輪王の輪寶各異
 なるが如し。輪王世に出でざ
 る時は輪寶は鐵圍山の間に懸
 れ、諸の大力の鬼神之を守護
 し、輪王世に出づれば送つて
 王の所に致す。又或は帝釋天
 王の内宮に在るを五百の夜又
 に守護せしめて輪王の所に致
 すとの説もあり。或は福德力
 の故に獨り自然に王の所に來
 るとも云ふ。王の行かざる時
 は常に玉の左手に在り。玉の
 七寶の一なり。
 大轉輪王。大千世界を領する
 輪王なり。
 小轉輪王。小千世界を領する
 輪王なり。

四
 金輪、銀輪、諸輪の王。是れ
 四輪王なり。金輪王は普く須
 彌の四洲を領し、銀輪王は北
 狗盧洲を除いて他の三洲を領
 し、銅輪王は北狗盧洲と西瞿
 耶尼洲を除いて他の二洲を領
 し、鐵輪王は東弗波提洲と北
 狗盧洲と西瞿耶尼洲を除いて唯
 南閻浮提の一洲を領す。又鐵
 輪王は敵と戰つて之を殺し、
 銅輪王は敵と戰つて之を降
 し、銀輪王は戰はずして往し、
 説て之を降し、金輪王は戰は
 ず往かず坐からにして四方歸
 來悅服す。鐵輪王の輪寶は二
 百五十輻、銅輪王の輪寶は五
 百輻、銀輪王の輪寶は七百五
 十輻、金輪王の輪寶は千輻な
 りと云ふ。今銅鐵の二輪王を
 略して諸輪の王と云ふなり。
 新迦囉跋底、遮加羅伐辣底迦
 羅闍、新迦羅伐刺底、遮加越
 羅、遮迦越)

得ず。靜寂清澄にし

て、志玄虚漠なり。之

を守りて動せざること

億百千劫、無量の法門

悉く現在前せり。大

智慧を得て、諸法に通

達し、性相の眞實を

曉了し分別し、有

無、長短、明現顯白

なり。又善能く諸の根

性欲を知り、陀羅

尼、無礙辯才を以

て、諸佛の轉法輪

を、隨順して能く轉ず。

德行品第

微滲先づ墮ちて以

【一〇】 頭面に足を禮し。自身を

俯伏し頭面を佛の足に接觸し

て禮することなり。恭敬の極

盡なり。

【一一】 種種に供養す。衣服、臥

具、飲食、醫藥の四供養を略

して云ふ。

【一二】 文殊師利法王子等。八萬

の菩薩中の二十九人を列す。

其の中初めの四菩薩は位を表

して法王子と云へり。法王子

は圓教の第九住の位なり。法

王の子と云へることにして、

佛子と云ふに同じ。初めに文

殊を擧ぐるは釋迦牟尼佛の過

去七世の師なるが故に。終り

に大莊嚴を置けば是の經の正

しき對告衆なるが故なり。

【一三】 法身の居士。法身とは生

身肉身に對する名なり。法に

よじて成就せられたる無漏の

法性身を云ふ。居士は菩薩の

異稱にして、大人と云ふに同

じ。

【一四】 戒、定、慧、解脫、解脫

知見。これを五分法身と稱す。

前の法身を分つにこの五ある

なり。即ち戒身、定身、慧身、

解脫身、解脫知見身なり。謂

はゆる戒所成の法身、乃至解

脫知見所成の法身にして、法

身はこの五によりて成就せら

れたるなり。故に前の法身を

所成就と云ひ、この五を能成

就と云ふ。この五分法身をば

又無漏の五蘊とも云ふなり。

大小乘に俱に各この五分法身

あれども、今は大乘の五分法

身なり。

【一五】 三昧(サマーデー)

は三摩地と云ふ。等持と翻す、

等は正なり、正等に心を持す

るの義なり、即ち攝心禪定を

三昧と名くるなり。故に又正

思、正定、正受等と翻す。正

受とは定中に安じて一切法を

受けざるの義なり。亦正心行

處とも翻す。細に之を言へば

禪定には凡そ七名あり、第一

は三摩地、第二は三摩鉢底、

等至と翻す、第三は三摩嚩多、

等引と翻す、第四は默那演那

靜慮と翻す、第五は質多髻迦

阿羯羅多、心一境住と翻す、

第六は奢摩他、止と翻す、第

七は毗婆舍那、觀と翻す。而

て欲塵を淹し、(三) 涅槃の門を開き、解脱の風を扇ぎ、世の惱熱を除き、法の清涼を致す。

次に (三) 甚深の十二因

縁を降らして、用つて

無明、老、病死等の猛

熾熾然なる苦衆の日光

に灑ぐ。爾して乃し洪

に無上の大乘を注い

で、衆生の諸有の善根

を潤ひ漬し、善の種子

を布きて、功德の田に

遍じ、普く一切をして

菩提の萌を發さしむ。

と翻す、凡そ功德あるは總じて皆持つが故なり。又能持と翻す、能く功德の善法を持つて失はざるが故なり。又能遮と翻す、能く惡を遮止して作さしめざるが故なり。又遮持と翻す、遮惡持善の故なり。此れに三陀羅尼、四陀羅尼等あり。三陀羅尼とは、一には聞持陀羅尼、凡そ聞く所の諸法は一切の語言を皆忘失せざるなり、之を名けて名持と爲す。二には分別知陀羅尼、一切諸法の相、衆生の好醜等、分別して能く知るなり、之を名けて義持と爲す。三は入音聲陀羅尼、一切の語言音聲に通達し、衆生の惡罵せんに順らず、讚嘆せんに喜ばず、其の心動ぜず轉ぜずして常に平等なるなり、之を名けて行持と爲す。菩薩は此の三陀羅尼を得るなり。又三陀羅尼あり、

一には旋陀羅尼、旋とは轉なり、假を轉じ空に入つて眞諦を證するなり。二には百千萬億旋陀羅尼、百千萬億は假差別の相なり、即ち空より假に入つて旋轉分別して恒沙の佛法を顯はし俗諦を證するなり。三には法音方便陀羅尼、前の空假二諦の觀を方便として中諦を證するなり。又三陀羅尼あり、一切の陀羅尼を之に類攝す。一には旋陀羅尼、是れ修定なり。二には聞持陀羅尼、是れ知法なり。三には咒陀羅尼、是れ秘密語なり。又咒陀羅尼に自ら三陀羅尼あり、一には多字咒、二には一字咒、三には無字咒なり。四陀羅尼とは、一には法持、一切雜染の法を遮して清淨法を持つなり。二には義持、一字の義に於て無量の義を悟得するなり。三には三摩地持、深

く三昧に住持するなり。四には文持、無量の修多羅を聞いて悉く皆通達し受持して永く忘失せざるなり。密教には之を法明、義明、三摩地明、開持明と稱せり。明と陀羅尼と一にして、眞言とも密言とも云ふなり。之を要するに、大乘に二種の道あり、諸の波羅蜜に依つて修行して成佛すると、陀羅尼に依つて修行して成佛するとなり。陀羅尼亦三陀羅尼、四陀羅尼等あれども所詮は受持に過ぎず。佛の陀羅尼を説きたまふは皆所化をして受持せしめんが爲なり。一文一字を受持して而して無量の修多羅の功德を證得し、自然に佛如來の土地に入る、即ち是れ陀羅尼の勝用なるものなり。(陀隣尼、陀隣尼鉢【元】無礙辯才(Hierarchia)。これに四ありて四無礙辯と云ふ。

智慧の日月、方便の時節、大乘の事業、扶疎し增長して、衆をして疾く、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、常住の快樂、微妙眞實に、無量の大悲、苦の衆生を救はしむ。是れ諸の衆生の眞善知識なり、是れ諸の衆生の大良福田なり、是れ諸の衆生の請せざるの師なり、是れ諸の衆生の安穩の樂處、救處、護處、大依止處なり。處處に衆

一には義無礙辯、義持陀羅尼を得るが故に、またこの辯才を得て、諸法の義を顯了するに無礙自在なり。二には法無礙辯、法持陀羅尼を得るが故に、またこの辯才を得て、諸法の名字を稱説するに無礙自在なり。三には言詞無礙辯、三摩地陀羅尼を得るが故に、またこの辯才を得て、一切の言詞を演暢するに無礙自在なり。四には樂説無礙辯、聞持陀羅尼を得るが故に、またこの辯才を得て、衆をして好樂して聞かしむるに無礙自在なり。菩薩は陀羅尼を得ると共に必ずこの無礙辯を得るなり。(鉢底婆)

【二】 微滯。小乘四諦の教を一滴の微滯に喩ふるなり。
 【三】 涅槃。涅槃に大小乗の別あり。今この涅槃は小乗に就て云ふ。名義は説法品の下に至りて註すべし。
 【四】 甚深の十二因縁。前の四諦の微滯に比對して十二因縁を甚深と云ふ。四諦は聲聞の修する所、十二因縁は緣覺の觀する所なり。十二因縁の名數は本經化城喩品に具さに之を列せり。

【五】 阿耨多羅三藐三菩提。アヌタラムサマササムボーデー (Anuttarasamyak-sambodhi) 阿は無、耨多羅は上、三藐は正、三は遍若しは等、菩提は正覺、故に無上正等覺と翻するなり。又三藐の三を正と爲し、藐を等と爲して、無上正等覺と翻す。又無上正偏知道とも翻す。又阿を無、耨多羅を上答と爲す義あり、此れに依れば無上答正等覺なり。一切の外道は答ふべく破すべきも、佛法は答ふべからず破すべからず、故に無上答なり。要するに佛如來所成の道果を阿耨多羅三藐三菩提と云ふなり。
 【六】 諸の波羅蜜。波羅蜜 (Pāramitā) は事究竟と翻す、自行化他の事を究竟するが故なり。又到彼岸と翻す、彼の涅槃の岸に到るが故なり。又度無極と翻す、能く曠遠無極の境を度するが故なり。又單に度とも翻す。總じて菩薩の行する所を波羅蜜と云ふなり。故に八萬四千の波羅蜜度門ありて頗る弘博なれども、概要は六波羅蜜なり。六波羅蜜とは、一に布施、二に持戒、三に忍辱、四に精進、五に禪定、六に智慧なり。分別功德品に名數を列ねたれば其處に至り

生の爲に大良導師、大導師と作れり。能く衆生の盲せるが爲には、而も眼目を作し、聾、聵、癩の者には耳、鼻、舌を作し、諸根毀缺せるには能く具足せしめ、顛狂荒亂せるには大正念を作す。船師なり、大船師なり、群生を運載して、生死の河を度して、涅槃の岸に置く。醫王なり、大醫王なり、病相を分別し、藥性を曉了して、病に隨つて

て註すべし。尙ほ六波羅蜜に方便、願、力、智の四を加へて十波羅蜜あり。此の如きをば今諸の波羅蜜と云ふなり。(波羅蜜多、播囉彌多)

【六】大智舍利弗等。萬二千の比丘衆の中に二十人を列す、大智、神通、慧命、天眼、持律、侍者、佛子、頭陀は其の德稱なり。異本に等天眼阿那律とあり。天眼に等しとの義なり。上の阿若憍陳如の下に續けて助詞と爲すべからず。各德稱の因縁は本經各處の註に明らかなるべし。

【七】阿羅漢(アルハン)。應供と翻じ、不生と翻じ、殺賊と翻す。阿羅漢にこの三義を含むが故なり。又遠惡を加へて阿羅漢の四義と爲す。無生、無著、破賊、害怨、應受供養等の諸翻あれどもこの三義、四義に外なるに非ず。一説には

應と譯するを以て正翻なりと云へり、應は契當の義なり、應さに煩惱を斷すべく、應さに供養を受くべく、應さに分段の生を受けざるべし等の意義皆具有するが故にとなり。又應眞、應人等とも翻ぜり。聲聞比丘の四果の最後の位稱なり。(阿盧漢、阿羅訶、囉訶諦、阿梨訶)

【八】伎樂。伎は舞伎、樂は歌詠なり。

【九】胡跪。印度の敬禮に九等あり。一は發言して慰問す、二は俯首して敬を示す、三は舉手して高揖す、四は合掌、五は屈膝、六は長跪、七は手膝を地に跪す、八は五輪を屈す、九は五體を地に投するなり。今の胡跪とは即ちこの中の屈膝なり、右膝を地に著くるを云ふ。若し兩膝を地に著くるは長跪なり、長跪は但尼

女の體弱き者の爲めに、この禮法を聽るす、然らざれば必ず胡跪屈膝なるべきなり。今將さに偈を以て佛を讚めんとす、五輪を屈し及び五體を地に投すべからず、故に胡跪するなり。右膝は力有つて跪するにその身安ければなり、起止に便なればなり。又右を慧とし左を定とす、慧膝を地に著けて定意不動の一心を表するなり。

【一〇】合掌。二合掌の中の三補陀合掌なり。三補陀は虛心と翻す、十の指爪掌を合せて、而も掌の中心をして微しく空虚ならしむるなり。

【一一】偈(ガイターゲヤ)。具さに偈偈、又は偈他と云ふ。偈偈は于闐國の音、偈他は中天竺の正音なり。伽陀と云ふは伽他的訛音なり。今偈と云ふは于闐國の偈偈の音に從つ

て註すべし。尙ほ六波羅蜜に方便、願、力、智の四を加へて十波羅蜜あり。此の如きをば今諸の波羅蜜と云ふなり。(波羅蜜多、播囉彌多)

藥を授け、衆をして樂たのしみうて服せしむ。調御てうごなり、大調御だいてうごなり。諸もろの放はな逸いつの行無ぎやうなし、猶なほ象馬ぞうま師しの能よく調てうするに調てうせざること無く、師子ししの勇猛ゆうまうなる、衆獸しゆじゆを威伏ゐふくして、沮壞そゑすべきこと難かたきがごとし。菩薩ぼさつの〔三二〕諸もろの波羅蜜はらみつに遊戯ゆげし。如來にょらいの地ぢに於おて、堅固けんこにして動どうせず、願ぐん力りきに安住あんぢゆうして、廣ひろく佛ぶつ國こくを淨きよめ、久ひさしからずして阿耨多羅三藐三菩あうたらかさんみやくさんぼ

て、而も佗の音を略して單に偈と云ふなり。然れども正しくは當さに伽他なるべし。此れは是れ古來諸師の多く云へる説にして、偈と伽陀と一にして異ならざる義なり。然るに十二部經の中、第二は祇夜〔偈〕、第四は伽陀にして、偈と伽陀と全く異なり。且つ本經の中、方便品には伽陀及本事、譬喩并祇夜等と説いて明かに偈と伽陀とを別かてり。故を以て先師の中にも亦た之を異にして、伽陀は孤起偈、祇夜は重頌偈と列ぜり、今此の義に従ふべきなり。孤起とは長行に伴はずして孤り起る偈なり。重頌とは長行の意を重ねて頌したる偈なり。この重頌に對して孤起偈をば不重頌偈とも云ふなり。俱に偈なれども重頌不重頌別なるが故に隨つて偈と伽陀とを異にす

るなり。又一師の説に依れば偈に總じて四種あり。一は阿耨鞞都槃、これは長行偈頌を問はず、但字數三十二に滿するを一偈と爲す。二は伽陀、即ち孤起不重頌にして、或は直頌とも名けり、長行に關らず直ちに偈を起して法を説くが故なり。三は祇夜、即ち重頌にして又應頌とも名けり、重ねて長行に應じて説くが故なり。四は纏馱南、これは集偈頌と云ひて、多義を少言の偈に集め攝めて他に施して誦持せしむるが故なりと。是れ亦た偈と伽陀とを別てる義なり。或は重頌の偈を路伽偈と稱して伽陀に別つ説もあり。すべて偈は頌と譯すべくして詩の如きものなり。四言、五言、七言、九言等ありて、皆四句を以て一偈と爲す。今大莊嚴菩薩等の説かんとするは

七言の孤起偈即ち伽陀なり。
〔偈他、伽他、伽陀、竭夜〕
〔三三〕 意、識、心。思量を意と名づけ、了別を識と名づけ、集起を心と名づく。
〔三四〕 思、想、念。尋伺を思と名づけ、妄想を想と名づけ、雜念を念と名づく。
〔三五〕 六、陰、入、界。四大、五陰、十二入、十八界なり。地、水、火、風を四大と爲し、色、受、想、行、識を五陰と爲し、眼、耳、鼻、舌、身、意の六根と、及び其の眼等の六識とを十二入と爲し、之に色、聲、香、味、觸、法の六塵を加へて十八界と爲す。總じて言へば有漏の色心二法の一切なり。
〔三六〕 其の身に有に非ず等。以下種種色の身に非ずまでの十二句は佛の内證の法性常身を顯するなり。

提を成ずることを得べし。是の諸の菩薩摩訶薩は皆斯の如きの不思議の徳有り。

其の比丘の名をば、大智舍利弗、神通目犍

連、慧命須菩提、摩訶迦旃延、彌多羅尼子富樓

那、阿若憍陳如、天眼阿那律、持律優婆離、侍

者阿難、佛子羅雲、優波難陀、離波多、劫賓那、

薄拘羅、阿周陀、莎伽陀、頭陀大迦葉、優樓頻

螺迦葉、迦耶迦葉、那提迦葉と曰ふ。是の如き

等の比丘萬二千人なり。皆阿羅漢にして、

諸の結漏を盡くし、復縛著無くして、眞正の

解脱なり。

爾の時に大莊嚴菩薩摩訶薩、遍く衆の坐して

各定意なるを觀じ已つて、衆中の八萬の菩薩

摩訶薩と與に俱に坐より而も起つて、佛の所に

來詣し、頭面に足を禮し、遠ること百千匝して、

【三】戒、定、慧、解、知見等。

この句は佛の修徳の法身を頌し、三昧の句は修徳の報身を頌し、慈悲の句は修徳の勝應

身を頌し、衆生の句は修徳の劣應身を頌す。初の戒定の句

には即ち五分法身を標せり。

次の句の三昧は前に註せる如

し。今佛身の因徳果徳の三昧

は正しく空、無相、無願の三

三昧なり。六通は天眼、天耳、

他心、神境、宿命、漏盡の六

神通なり。道品は四念處、四

正勤、四如意足、五根、五力、

七覺支、八正道の三十七品種

の菩提分法なり。次の句の慈

悲は、四無量心の中の慈無量

心と悲無量心となり。喜、捨

の二無量心は略してこの中に

存す。十力は、是處非處力、

業智力、定力、根力、欲力、

性力、至處道力、宿命力、天

眼力、漏盡力なり。無畏は一

切智無畏 漏盡無畏、說障道

無畏、說盡苦道無畏の四無畏

なり。

【七】示して丈六紫金等。已下

二十句佛の三十二相を擧げて

讚嘆す。中に於て初の二句は

總じて佛身を嘆じ、第三句よ

り第十六句まで正しく三十二

相を擧げ、第十七八の兩句は

重ねて總じて佛身を嘆じ、第

十九二十の兩句は三十二相を

結し更に八十種好を標。三

十二相を擧ぐる中、毫相月旋

一相、項日光一相、旋髮紺青

一相、頂肉髻一相、淨眼明鏡

一相、上下胸一相、眉睫紺舒

一相、方口頰一相、唇一相、

舌一相、白齒四十一相、猶珂

雪一相、額廣一相、鼻脣一相

面門開一相、臂表萬字一相、

師子臆一相、手足柔軟一相、

具千輻一相、腋合纒一相、掌

合纒一相、内外握一相、臂脩

天華、天香を燒散し、天衣、天瓔珞、天無價寶、
 上空の中より、旋轉して來下し、四面に雲のご
 とく集まつて、而も佛に獻る。天厨の天鉢器
 には、天の百味充滿溢し、色を見、香を聞ぐ
 に、自然に飽足せり。天幢、天幡、天軒蓋、天
 妙樂具、處處に安置し、天の伎樂を作し
 て、佛を娛樂せしめたてまつる。即ち前んで
 胡跪し、合掌して、一心に俱に共に聲を
 同うして、偈を説いて讚めて言さく、
 『大なる哉大悟大聖主、垢無く染無く著す
 る所無し、天人象馬の調御師、道風徳香一
 切に薰せり。
 智恬かに情怕かに慮凝靜なり、意識し識
 亡じて心も亦寂なり、永く夢妄の思想
 念を斷じて、復諸大陰入界無し。』

德行品第一

一相、肘長一相、指直纖一相、
 皮膚濡潤一相、毛右旋一相、
 踝膝露現一相、陰馬藏一相、
 細筋一相、鑊骨一相、鹿膊展
 一相、合せて三十二相なり。
 丈六。周尺(唐尺八寸)の一丈
 六尺なり。
 紫金。具さには紫磨黃金と云
 ふ、紫金色なり。
 方整。方は正等の義、整は圓
 備の義なり。
 毫相月旋。毫相とは眉間の白
 毫なり、その白毫の光りあり
 て右に旋れるを喩へて月旋と
 云ふなり。
 項目光。項は頭の後なり、佛
 の項に圓相ありて光れるを日
 に喩ふるなり。
 旋髮。佛の頭上の毛皆右に旋
 れるが故に云ふ、即ち螺髮な
 り。
 肉髻。頂上に肉ありて自然に
 髻を作すを云ふ、其の色は赤

し。
 丹華。赤き華と解すべし。
 珂雪。白き雪と解すべし。
 面門。口の異名なり。
 滿字。佛の臂には自然に梵字
 の已の形あるなり。
 千輻。佛の手の裏、足の底に
 各輪の紋あつて、其の輪の輻
 の數一千なれば千輻の輪と云
 ふなり。
 合綬。網綬なり、佛の腋の前
 後と及び指掌指岐にこの網綬
 の紋あるなり。
 陰馬藏。馬の陰は平常外皮に
 藏くる、佛の勢峰亦常に隠れ
 て現見せざるを以て、陰は馬
 の如くにして藏くと云ふな
 り。相好の名稱としては音に
 おん(陰)、め(馬)、さう(藏)
 と連續すべし、又馬陰藏と書
 ける經もあるなり。
 鑊骨。骨の連結せる狀宛も鎖
 の如くなるを以て云ふなり。

【三〇】其の身は有に非ず亦無に非ず、因に非ず

縁に非ず自他に非ず、方に非ず圓に非ず短

長に非ず、出に非ず没に非ず生滅に非ず。

造に非ず起に非ず爲作に非ず、坐に非ず臥

に非ず行住に非ず、動に非ず轉に非ず閑靜

に非ず、進に非ず退に非ず安危に非ず。

是に非ず非に非ず得失に非ず、彼に非ず此

に非ず去來に非ず、青に非ず黄に非ず赤白

に非ず、紅に非ず紫種種の色に非ず。

【三一】戒定慧解知見より生じ、三昧六通道品

より發し、慈悲十力無畏より起り、衆生善

業の因縁より出でたり。

【三二】示して文六紫金の暉りを爲し、方整に照

り曜きて甚だ明徹なり。毫相は月のごとく

旋りて項には日の光りあり、旋れる髪は紺

鹿膊脹。膊は肩膊(かたほね)

にして膊の字と同じ。漢音にては「はく」、吳音にては「ふ」

なり、之を「せん」と讀むは膊

の字に混同したるにて誤りなり、膊は腋の骨なれば今の膊

と全く異なるなり。脹は腸と同じ、鹿の肩膊は脩く織く、

又鹿の腸は常に脹滿する、と無し、是れ鹿の尋常の諸獸に

優れたる所、今その優れたる所を表するが故に膊と脹との

二を擧げたれども、相好として正し、取るところは膊の方

なり、鹿の肩膊を以て佛の相好に況したるなり、故に膊と

脹との二なれども三十二相には唯一の相なり。

【三三】八十種好。一、無見頂。

二、鼻直く高く好くして孔見えす。三、眉初生の月の如く

紺琉璃の色。四、耳輪垂成。

五、身堅實にして那羅延の如

し。六、骨際鈞鑊の如し。七、身一時に廻ること象王の如し。八、行く時足地を去ること四寸にして而も印文現はる。九、爪赤銅の色の如く薄くして而も細澤なり。十、膝骨堅著にして圓好なり。十一、身淨潔。十二、身柔軟。十三、身曲ならず。十四、指長く纖圓なり。十五、指文莊嚴。十六、腋深し。十七、踝現れず。十八、身潤澤。十九、身自持して透迢ならず。二十、身満足。二十一、識満足。二十二、容儀備足。二十三、住處安くして能く動かす者無し。二十四、威一切に震ふ。二十五、一切觀ることを樂ふ。二十六、面大長ならず。二十七、正しき容貌にして不撓の色なり。二十八、面具足滿。二十九、唇色頻婆果の如し。三十、普薄深。三十一、臍深くして

青にして頂には肉髻あり。

淨き眼は明鏡のごとくにて上下に朧き。

眉睫は紺にして舒び方しき口頬なり、唇舌

は赤く好くして丹華の若く、白き齒の四十

は猶ほ珂雪のごとし。

額は廣く鼻は脩く面門は開け、胸には萬字

を表はして師子の臆なり、手足は柔軟にし

て千幅を具へ、腋掌には合纒あつて内外に

握れり。

臂は脩く肘は長く指は長く織し、皮膚は細

軟にして毛は右に旋れり、踝膝は露はに現

はれ陰馬のごとくに藏れ、細き筋鎖の骨鹿

の膊脹なり。

表裏映徹して淨くして垢無く、濁水にも染

まること莫く塵をも受けず。是の如き等の

圓好なり。三十二、毛右旋。

三十三、手足滿。三十四、手

足如意。三十五、手文明直。

三十六、手文長。三十七、手

文不斷。三十八、一切惡心の

衆生も見ては和悦す。三十九、

面廣妹好。四十、面淨滿月の

如し。四十一、衆生の意に隨

つて和悦して與に語る。四十

二、毛孔より香氣を出だす。

四十三、口より無上の香を出

だす。四十四、儀容師子の如

し。四十五、進止象王の如し。

四十六、行法鷲王の如し、四

十七、頭摩陀那果の如し。四

十八、一切聲分具足。四十九、

身和。五十、舌色赤し。五十

一、舌薄し。五十二、毛紅色。

五十三、毛潔淨。五十四、廣

長眼。五十五、孔門相具。五

十六、手足赤白蓮華の色の如

し。五十七、臍出です。五十

八、腹現れず。五十九、細腹。

六十、身傾動せず。六十一、

身持重。六十二、身分大。六

十三、身長。六十四、手足輒

淨滑澤。六十五、邊光各一丈。

六十六、光身を照して行く。

六十七、等しく衆生を視る。

六十八、衆生を輕ぜず。六十

九、隨衆の音聲不過不減なり。

七十、說法無著。七十一、衆

の語言に隨つて爲に說法す。

七十二、一の發音衆聲に報ず。

七十三、次第に因緣有つて説

法す。七十四、一切衆生盡く

觀る能はず。七十五、觀て厭

足無し。七十六、髮長好。七

十七、髮不亂。七十八、髮旋

好。七十九、髮色青珠の如し。

八十、手足有徳の相。以上八

十種好なり、好は美なり、善

なり。前の三十二と合せて佛

の相好と稱するなり。

【三九】見る可きに似たり。佛の

法身は實には見る可からざれ

相三十二ありて、八十種好 見る可きに似たり。

而も實には相非相の色無く、一切の有相の眼の對絶せり、無相の相にして有相の身なり、衆生の身相のごとく相も亦然なり。

能く衆生をして歡喜し禮して、心を投じ敬を表して誠に慇懃ならしむ、是れ自高我慢の除こるに因りて、是の如き妙色の軀を成就したまへり。

今我等八萬の衆、俱に皆稽首して咸く歸命したてまつる、善く思想心意識を滅したまへる、象馬調御の無著の聖に。

稽首して歸依したてまつる法色身の、戒定慧解知見聚に。稽首して歸依したてまつる妙種相に。稽首して歸依したてまつる

ども、而も此等の相好を見ることを得、故に見る可きに似たりと云ふなり。

【四〇】稽首。稽は至と訓ず、首を垂れて地に至らしむるなり。

【四一】歸命。歸は歸奉、命は氣命、人身の重きは氣命に過ぎたるは莫し、今その氣命を佛に歸奉す、即ち一身を佛に捧ぐるの意なり。南無と唱ふるは是れ其の意を表す、故に南無を歸命と翻するなり。尙ほ神力品南無釋迦牟尼佛の註を見るべし。

【四二】戒定慧解知見聚。戒と定と慧と解脫と解脫知見との五分法身を聚と云ふ、聚は積聚の義にして即ち蘊なり、五分法身は佛の無漏の五蘊なるが故なり。五蘊を又五陰とも書くなり。

【四三】妙種相。三十二相、八十種好を妙種相と云ふ。傳教の

註釋の近一乘云は文を離れる巧釋なり。よつて次の句の難思議も只妙種相の難思議なるべきなり。

【四四】梵音雷のごとく震びて響八種あり。傳教の註釋には梵音を十四音、八種を八轉聲なりと云へり。十四音は涅槃經文字品に説ける阿、阿、伊、伊等なり。巧釋は然るべしと雖も普通に文を解せば、梵音とは、梵は清淨の義にして、佛の説法の音聲を梵音と云ふ。

響八種とは佛の八音なり。八音とは、一に極好音、二に柔軟音、三に和適音、四に尊慧音、五に不女音、六に不誤音、七に深遠音、八に不盡音なり。

【四五】須陀洹、斯陀、阿那、阿羅漢。是れ聲聞の四果なれども、七字偈の故に、中間の斯陀舍阿那舍の舍の字を略せり。

須陀洹 (Srotāyana) 正音

る難思議なんしぎに。

梵音ぼんおんは雷らいのごとく震ふるひて響ひび八種はつしゆあり、微

妙めう清淨じやうじやうにして甚はなはだ深遠じんのんなり。四諦したうくど六度じふ

二緣にえん、衆生しゆじやうの心業しんごふに隨順ずいじゆんして轉てんじたまふ。

若もし聞きくこと有あれば意開いこころけずといふこと莫な

く、無量むりやうの生死しやうじの衆結しゆけつを斷だんず。聞きくこと有あ

れば或あるひは須陀洹しゆたおん、斯陀阿那阿羅漢あなあらかん。

無漏むろ無爲むゐの緣覺處えんかくしよ、無生無滅むじやうむめつの菩薩ぼさつ

地ぢを得え、或あるひは無量むりやうの陀羅尼だらに、無礙樂說むゐげらくせつの

大辯才だいべんさいを得えて、

甚深微妙じんじんみうめうの偈げを演說えんせつし、法ほふの清渠しやうこに遊戲ゆけし

深浴しんよくし、或あるひは躍とつり飛騰ひとつして神足じんそくを現げんじ、水すゐ

火くわに出沒しゆつして身自由みじゆうなり。

如來にらいの法輪ほふりんの相是さうかくの如ごとし、清淨無邊しやうじやうむへんに

して難思議なんしぎなり。我等われら咸ことごとく復共ふたごとに稽首けいしゆして、

は鞞路多阿半那なんじやうたあはんなり、須陀洹しゆたおん

と云いふは訛しなり。鞞路多なんじやうたを入い

と翻かじ、阿半那あはんを流りゆうと翻かず、

即すなはち入流にりりゆうなり。初はつめて聖性せいじやうを

獲とて聖行せいぎやうの流れに入るいるが故ゆゑなり。

又また預流よりりゆうと翻かず、預よは參預さんよ

なり、初はつめて聖人せいじんの流れに參

預よしたるが故ゆゑなり。又また至流しじりゆうと

翻かず。又また逆流にじりゆうと翻かず、逆さかは瀾

の義ぎなり。又また溝港みうかうと翻かず、溝

港かうは水の分流しりゆうなり、初はつめて聖

果くわを分得ぶんとくしたるが故ゆゑなり。梵

音おん鞞路多なんじやうたにこの分得ぶんとくの義ぎある

なり。之これを聲聞しやうもんの初果しゆくわの位ゐと

稱せうするなり。(須陀般那しゆたはん、須甄

品殘の故に更に人界にんがいに来きるが故ゆゑなり。之これを聲聞しやうもんの二果にくわの位ゐと稱せうするなり。(斯陀伽彌しだかみ、斯陀迦迷しだかみ)
阿那含あながん (Anāgamin)。不來ふらいと翻かず、全く欲界九品の惑まごを斷た盡じんして色界無色界しきがいむしきがいの天てんに上じやう生じやうし、更さらに還來えんらいして生じやうを欲界よくがいに受うけざるが故ゆゑなり。不還ふえんと翻かずるもこの意いなり。之これを聲聞しやうもんの三果さんくわの位ゐと稱せうするなり。(阿那伽彌あなかみ、阿譯伽迷あやくかみ)
阿羅漢あらかん。翻譯たうやくの名義なごうは前に云いひたるが如ごとし。之これを聲聞しやうもんの四果しやくわの位ゐと稱せうするなり。この位ゐにして全く三界さんがいの生死しじやうを離りれ灰身滅智かいしんめつちして、無餘涅槃むよねはんに入いるなり。
【四六】緣覺處えんかくしよ。後の句ごの菩薩地ぼさつぢの地ぢと此この處ところと何なにれも同じおなく位ゐと云いふの詞ことばなり。
緣覺えんかく (Pratyek-buddha)。辟支佛びやくしふの譯語やくごなり。辟支佛びやくしふは又

法輪轉するに時を以てしたまふに歸依したてまつる。

稽首して梵音聲に歸依したてまつる。稽首して

緣諦度に歸依したてまつる。

世尊は往昔の無量劫に、懃苦して衆の徳行を修習して、我人天龍神王の爲めにし、普

く一切の諸の衆生に及ぼしたまへり。

能く一切の諸の捨て難き、財寶妻子及び

國城を捨て、法の内外に於て慍む所無く、

頭目髓腦悉く人に施したまへり。

諸佛の清淨の禁を奉持し、乃至命を失

ふまでも毀傷したまはず。

若し人あり刀杖をもつて來つて害を加へ、

惡口罵辱すれども終に瞋りたまはず。劫を歴て身を挫けども愍愍したまはず。

常に禪に在り。

【四八】無礙樂說の大辯才。無礙は法、義、言詞、樂說の四無礙辯なり。今其の第四を標す。樂說とは衆生の機樂に隨つて説法することなり。

【四九】法輪の相。如來の法輪を轉する相なり。之に三あり、樂說無礙の大辯才の如きは口輪と稱す、水火出沒の神變の如きは身輪と稱す、善く衆生の根性に入るが如きは意輪と稱す。身口意の三輪是れ如來轉法輪の相なり。

【五〇】緣諦度。十二因緣、四諦六度なり。

【五一】清淨の禁は禁戒なり。禪那と云ふ。靜慮、思惟修等と翻す。分別功德品六度の下に委しく註すべし。

【五二】禪 (Dhyana) 具さには

【五三】善陸地。菩薩の位には總じて五十一位あり、十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺なり。等覺を超えては即ち妙覺の佛陀なり。五十一位は瓔珞本業經に委悉なり。

【五四】善陸地。菩薩の位には總じて五十一位あり、十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺なり。等覺を超えては即ち妙覺の佛陀なり。五十一位は瓔珞本業經に委悉なり。

【五五】善陸地。菩薩の位には總じて五十一位あり、十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺なり。等覺を超えては即ち妙覺の佛陀なり。五十一位は瓔珞本業經に委悉なり。

【五六】善陸地。菩薩の位には總じて五十一位あり、十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺なり。等覺を超えては即ち妙覺の佛陀なり。五十一位は瓔珞本業經に委悉なり。

【五七】善陸地。菩薩の位には總じて五十一位あり、十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺なり。等覺を超えては即ち妙覺の佛陀なり。五十一位は瓔珞本業經に委悉なり。

【五八】善陸地。菩薩の位には總じて五十一位あり、十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺なり。等覺を超えては即ち妙覺の佛陀なり。五十一位は瓔珞本業經に委悉なり。

【五九】善陸地。菩薩の位には總じて五十一位あり、十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺なり。等覺を超えては即ち妙覺の佛陀なり。五十一位は瓔珞本業經に委悉なり。

【六〇】善陸地。菩薩の位には總じて五十一位あり、十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺なり。等覺を超えては即ち妙覺の佛陀なり。五十一位は瓔珞本業經に委悉なり。

【六一】善陸地。菩薩の位には總じて五十一位あり、十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺なり。等覺を超えては即ち妙覺の佛陀なり。五十一位は瓔珞本業經に委悉なり。

遍あまねく一切いっさいの衆もろもろの道だう法はふを學がくして、智ち慧えい深ふかく衆しゆ生じやうの根こんにい入いりたまへり。是この故ゆゑに今いま自じ在ざいの力ちからを得えて、
法はふに於おいて自じ在ざいにして法ほふ王わうと爲なりたまふ。
我われ復また咸ことごとく共ともに俱ともに稽けい首しゆして、能よく諸もろの勤つとめ難がたきを勤つとめたまふに歸き依えしたてまつる。』

説法品第二

爾の時に大莊嚴菩薩摩訶薩、八萬の菩薩摩訶薩と與に、是の偈を説いて、佛を讚むること已つて、俱に佛に白して言さく、『世尊、我等八萬の菩薩の衆、今者如來の法の中に於て諮問する所あらんと欲す。不審、世尊慈聽を垂れたまはんや、不や。』

佛、大莊嚴菩薩及び八萬の菩薩に告げて言たまはく、『善哉善哉、善男子、善く是れ時なることを知れり。汝の所問を恣にせよ。如來は久しからずして當に 般涅槃すべし。涅槃の後、普く一切をして復餘の疑ひ無からしめん。何の所問をか欲するや、便ち之を説く可し。』

是に大莊嚴菩薩、八萬の菩薩と與に即ち共に聲を同うして、佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩疾く阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得んと欲せば、應當に何等の法門をか修行すべき。何等の法門か能く菩薩摩訶薩をして疾く阿耨多羅三藐三菩提を成せしむる。』

佛、大莊嚴菩薩及び八萬の菩薩に告げて言たまはく、『善男子、一の法門

【一】般涅槃 (Parinirvāṇa)。涅槃 (Nirvāṇa)。般涅槃の般をば人と翻す、即ち涅槃に入るなり。又普究竟と翻す、涅槃を普く究竟するなり。涅槃は有翻無翻の兩説あり。其の有翻の説も諸義同じからず、或は滅と翻じ、或は寂滅と翻じ、或は祕藏と翻じ、或は安樂と翻じ、或は無累解脫と翻じ、或は單に解脫と翻じ、或は不生と翻じ、或は無爲と翻じ、或は滅度と翻す、言はゆる十家九義の不同なるものなり。又別に圓寂と翻する一家あり、則ち十義の不同なり。然るに經文は多く滅、寂滅、滅度の語を用ふ、殊に最も多く用ひらるるは滅度なり、故

有りて、能く菩薩をして疾く阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得せしむ。若し菩薩あつて、是の法門を學せば、則ち能く阿耨多羅三藐三菩提を得ん。」

「世尊、是の法門は、字をば何等と號づくるや。其の義云何、菩薩云何が修行せんや。」

佛言たまはく、「善男子、是の一の法門は、名づけて無量義と爲す。菩薩、無量義を修學することを得んと欲せば、應當に一切の諸法は、(三)本、來、今、性相空寂にして、大無く小無く、生無く滅無く、住に非ず動に非ず、進ならず退ならず、猶ほ虚空の如し、二法有ること無し。而も諸の衆生は、虚妄をもつて横さまに是れは此れ、是れは彼れ、是れは得、是れは失なりと計して、不善の念を起し、衆の惡業を造り、(三)六趣に輪廻して、諸の苦毒を受け、無量億劫にも、自ら出づること能はずと觀察すべし。菩薩摩訶薩、是の如く諦に觀じて、憐愍の心を生じ、大慈悲を發して、救拔せんと將欲せよ。又復深く一切の諸法に入れ。法の相は是の如くにして是の如きの法を生じ、法の相は是の如くにして是の如きの法に住し、法の

に此翻を取る人亦最も多し。滅度とは煩惱を滅盡して生死を度るの義にして、即ち如來覺悟の境界なり。已に生死を度るが故に不生不滅なり、不生不滅の境界是れ即ち涅槃なり。凡夫は生ける時も煩惱界、死して亦煩惱界、佛は生の時已に涅槃界を證し、化して全く涅槃界に入る、故に佛の化滅を入涅槃と云ふなり。尙ほ涅槃の名義は大涅槃經卷二十三徳王品、及び卷三十一迦葉品に廣く説けるを看るべし。(般利涅槃那、波利坭縛喃、波利曬縛喃、涅槃那、泥洹、泥曰)

【一】本、來、今。本は過去世、來は未來世、今は現在世、即ち三世を云ふなり。

【三】六趣。地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上の六道なり。道は其の果に名づけ、趣

相は是の如くにして是の如きの法を異し、法の相は是の如くにして是の如きの法を滅す。法の相は是の如くにして能く惡法を生じ、法の相は是の如くにして能く善法を生ず。住と異と滅とも亦復是の如し。菩薩、是の如く四相の始末を觀察して、悉く遍く知り已んぬれば、次に復諦かに一切の諸法は念念に住せず新新に生滅すと觀せよ。復即時に生住異滅すと觀せよ。是の如く觀じ已つて、而も衆生の諸の根性欲に入れ。性欲無量なるが故に說法無量なり。說法無量なるが故に義亦無量なり。無量義とは一法より生ず。其の一法とは即ち無相なり。是の如きの無相は相無くして相ならず。相ならずして相無きを名けて實相と爲す。菩薩摩訶薩は、是の如きの眞實相に安住し已つて、發する所の慈

は其の因に名づく。

【四】四相、生、住、異、滅を四相と稱するなり。即ち次上の文の法の相是の如くして是の如き法を生ず等と説けるものは是れなり。此の四相に小の四相と大の四相とあり。後の文に即時に生住異滅すと觀ぜよとあるは、即時刹那の生住異滅にて、之を小の四相と云ふ。今此の處は大の四相なり。

【五】無量義とは一法より生ず。此の下名けて實相と爲すまでの數句は開經の肝要なり。一切の法門無量義は實相の一法より生ず。この實相の一法をば法華經に正に開示したるなり。

【六】必ず疾く阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得。此れに正しく疾成の二字を標出せり。凡そ菩薩の成佛得道には二あり、一は歷劫、二は疾成。

歷劫とは多劫を過ぎて成佛得道す。疾成とは即身に直ちに成佛得道す。實相の一法無量義を修する者は即ち疾成の大利を得るなり。諸餘の大乗は之に反して皆歷劫なるなり。

【七】衆魔群道。傳教の註釋に衆魔は四魔八魔十魔等、群道は三師外道六師外道なりと云へり。四魔は、五陰魔、煩惱魔、死魔、天子魔なり。八魔は分段と變易とに、各この四魔あるが故なり。又四魔に常、樂、我、淨の外道の四倒を加へて八魔と稱することもあり。十魔は、欲と、憂愁と、飢渴と、憂と、睡眠と、怖畏と、疑と、毒と、名利と、自高輕慢となり。又別に十魔あり、蘊魔と、煩惱魔と、業魔と、心魔と、死魔と、天魔と、善根魔と、三昧魔と、善知識魔と、菩提法智魔となり。尙ほ

悲は、明諦にして虚からず、衆生の所に於て、眞に能く苦を抜く。苦既に抜き已れば、復爲めに法を説いて、諸の衆生をして快樂を受けしむ。善男子、菩薩、若し能く是の如く一切の法門無量義を修する者は、必ず疾く阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ん。善男子、是の如き甚深の無上大乗無量義經は、文理眞正なり、尊にして過上無し、三世の諸佛の共に守護したまふ所なり、(モ)衆魔群道得入すること有ること無し、一切の邪見生死に壊敗せられず。是故に善男子、菩薩摩訶薩、若し疾く無上菩提を成ぜんと欲せば、應當に是の如き甚深の無上大乗無量義經を修學すべし。』

爾の時に大莊嚴菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、世尊の説法は不可思議なり。衆生の根性亦不可思議なり。法門解脱亦不可思議なり。我等は佛の説きたまふ所の諸法に於て、復疑難無けれども、而も諸の衆生は迷惑の心を生じながら故に、重ねて世尊に諮ひたてまつる。如來得道したまうてより已來四十餘年、常に衆生の爲めに、諸法の四相の義、苦の義、空の義、無常無我、無大無小、無生無滅、一相無相、法性法相、本來空寂、不來不去、不出不沒を演説したまふ。若し聞くこと有る者は、或は煥法、

魔の音義翻譯等のことは本經譬喻品に至りて註すべし。次に群道の三師は、迦毘羅、優樓僧伽、勒叉婆の三人なり、之を三仙と稱す。六師は迦毘羅の支流にて、富蘭那迦葉と、末伽黎拘除黎と、刪闍毘羅毗と、阿耨多翅舍欽婆羅と、迦羅鳩駄迦旃延と、尼毘陀若提子との六人なり、此等外道のことば安樂行品に至りて註すべし。群は衆魔の衆と同じく諸の義、道は外道なり。

【八】如來得道。三十歳の時、菩提樹下にして成佛せられたること云ふ。

【九】煥法等。聲聞の人未だ初果の位に入らざる前に、五停心、別相念處、總相念處、煥法、頂法、忍法、世第一法の七位あり、之を七方便の位と稱す。その中五停心、別相念處、總相念處の三位は外凡な

頂法、世第一法、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道を得、菩提心を發し、

第一地、第二地、第三地に登り、第十地に至

る。往日説きたまふ所の諸法の義と、今の説きた

たまふ所と、何等の異なること有りてか、而も

甚深の無上大乘無量義經のみ菩薩修行すれば、

必ず疾く無上菩提を成ずることを得んと言たま

ふ。是の事云何。唯願はくは世尊、一切を慈哀

して、廣く衆生の爲めに、而も之を分別し、普

く現在及び未來世の法を聞くこと有らん者をし

て、餘の疑網無からしめたまへ。」

是に佛、大莊嚴菩薩に告げたまはく、「善哉善

哉、大善男子、能く如來に是の如き甚深の無上

大乘の微妙の義を問へり。當に知るべし、汝能

く利益する所多く、人天を安樂し、苦の衆生を

り、未だ四諦の理を觀ざる理
外の人なり。煖、頂、忍、世
第一の四位は内凡なり、四諦
の理を觀する理内の人なり。
然れども俱に只伏惑のみにし
て斷惑なきが故に凡夫なり。

煖は、火の然えんとして先づ
煖氣を生ずるが如く、諸理の
觀粗顯はれて將に分明ならん
とするの位なり。頂は、山の
高頂に登つて四方を觀望する
が如く、諸理の觀に於て遮障
なく、悉く皆明了なるの位な
り。忍は默識心通と云ふが如
き意味の詞にて、諸理の觀に
於て印可決定して退すること
無きの位なり。世第一は未斷
惑の有漏の世間に於て是の人
第一の位なり、之を過ぎて始
めて聲聞の聖位須陀洹に入る
なり。この煖等の四位を四善
根の位と云ひ、亦四加行の位
と稱す。加行とは功を加へて

行を用ふるの義、即ち聖位に
入るの前に於て先づ方便進趣
の功用道を修する位なるが故
なり。今の經文はこの四位の
第二忍法を闡けり、或は脱せ
るか。

【一〇】 第一地等。菩薩の位には
五十一位あり。又略して十地
と立つることあり、金光明經
及び勝天王般若經の如し、即
ち聖位の十地のみを擧げて賢
位の三十位を略するなり。今
の文亦是れなり。

【一一】 菩提樹 (Bohidruma)。

道樹と翻す。釋尊の樹下に
坐して成道したまふ。今現に
佛陀伽耶 (Buddhagaya) にそ
の靈蹟を存す。一説にこの菩
提樹は畢鉢羅樹 (Pippala) なり
と。又一説には畢鉢羅樹と菩
提樹とは異なり、只善く類似
すと。畢鉢羅樹を似菩提樹と
翻するが如きは即ち其の説な

抜かん。眞の大慈悲なり、信實にして虚からず。

是の因縁を以て、必ず疾く無上菩提を成ずることを得ん。亦一切の今世來世の諸の有らゆる衆生をして、無上菩提を成ずることを得せしめん。

善男子、我先きに 道場菩提樹下にして、端坐すること六年にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。佛眼を以て一切の諸法を觀するに、宣説す可からず。所以は何、諸の衆生の性欲不同なることを知る。性欲不同なれば種種に法を説きき。(三)種種に法を説くこと、方便力を以てす。(四)四十餘年には、未だ眞實を顯はさず。是故に衆生の 得道差別して、疾く無上菩提を成ずることを得ず。善男子、法は譬へば水の能く垢穢を洗ふが如し。若しは井、若しは池、若しは江、若しは河、溪、渠、大海、

り。

【三】(原文)。種種説法、以方便力、四十餘年、未顯眞實。

【四】四十餘年には未だ眞實を顯はさず。釋尊菩提樹下に成道して、三七日間華嚴經を説き、それより阿含十二年、方等般若三十二年、此等を總じて合せて四十餘年と云ふ。即ち法華三經以前に於ける一切大小乘の諸經は皆この四十餘年の所攝なり。是の如き四十餘年の諸經には未だ如來の眞實を顯はさずとなり。諸經を權と爲し法華を實と爲すことは金口として正にこの一語に發す。雞鳥の一聲天將に曉けんとするが如し。

【二】得道差別。四十餘年の諸經は聲聞、緣覺、菩薩の三乘の果を異にして、衆生の得道皆同じからざるを云ふ。是れ未だ如來の眞實を顯はさざるが故なり。法華は獨り如來の眞實を顯はして唯一の佛乘を説き、三乘をして等しく皆無上の佛果を得せしむ、復得道の差別無し。得道差別の故に諸經は疾成の益なく、得道無差別の故に法華は疾成の利あるなり。

【三】諸有。二十五有を云ふ。二十五有とは、須彌の四洲を四有と爲し、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅の四惡趣を四有と爲し、四天王天、忉利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天の六欲天を六有と爲し、初禪の中の梵天を一有と爲し、四禪の中の無想天を一有と爲し、又四禪の中の無煩天、無熱天、善見天、善現天、色究竟天の五那含天を通じて一有と爲し、色界の初禪天と二禪天と三禪天と四禪天とと四有と爲し、無色界の空處天、

皆悉く能く (二五) 諸有の垢穢を洗ふ。其の法水も
 亦復是の如し、能く衆生の (二六) 諸の煩惱の垢を
 洗ふ。善男子、水の性は是れ一なれども、江と、
 河と、井と、池と、溪と、渠と、大海と、各各
 別異なり。其の法の性も亦復是の如し。 (二七) 塵勞
 を洗除することは等しくして差別無けれども、
 (二八) 三法、(二九) 四果、二道一ならず。善男子、水
 は俱に洗ふと雖も、而も井は池に非ず、池は
 江河に非ず、溪、渠は海に非ず、如來世雄は、
 法に於て自在にして、説く所の諸法も、亦復
 是の如し。初、中、後の説、皆能く衆生の煩
 惱を洗除すれども、而も初は中に非ず、而も中
 は後に非ず。初、中、後の説、(三〇) 文辭は一なり
 と雖も、而も義は各異なり。善男子、我れ (三一) 樹
 王を起つて、(三二) 波羅奈鹿野園の中に詣り、(三三) 阿

識處天、無所有處天、非想非
 非想處天の四空處天を四有と
 爲し、通じて二十五有と稱す、
 要するに三界六道なり。有と
 は生死因果有つて輪廻して亡
 びざるが故なり。この中梵天、
 無想天、五那含天の三天は四
 禪天の中に在り、然るに之を
 別つて各有と爲すは、外道の
 計を破するが爲めなり。外道
 は梵天を以て萬物の主なりと
 計し、無想天の無心を以て涅
 槃なりと計し、五那含天を以
 て眞の解脱なりと計すればな
 り。

【六】 諸の煩惱。三界を通じて
 見惑に八十八使、思惑に十使、
 合せて九十八使あり、之を諸
 の煩惱と云ふ。見惑とは分別
 の邪見なり、諸の外道の見計
 の如し、故に迷理の惑と云ふ、
 見諦道所斷の惑なり。この煩
 惱は六根の中の意根が六塵の

中の法塵に對して非理に起る
 所の煩惱なり。思惑とは貪愛
 を思と云ふ、色に謝れ香に迷
 ふの類の如し、故に迷事の惑
 と云ふ、思惟道所斷の惑なり。
 この煩惱は六根の中の眼耳鼻
 舌身が六塵の中の色聲香味觸
 に對して染著して起る所の煩
 惱なり。三界六道の一切凡夫
 の煩惱は百八煩惱乃至八萬四
 千の塵勞總じて此の見思の二
 惑を出でざるなり。

【七】 塵勞。塵は染汚の義、煩
 惱は眞性を染汚するが故な
 り。勞は勞役の義、衆生は煩
 惱の爲めに勞役驅使せらるる
 が故なり。即ちこの二字は煩
 惱の異稱なり。

【八】 三法。四諦、十二因緣、
 六度の三乗の法なり。

【九】 四果。二道。傳教の註釋
 には四果を須陀洹等の聲聞の
 四果と爲し、二道を權實二道

若拘隣等の五人の爲めに、四諦の法輪を轉せし
 時も、亦諸法は本來空寂にして、代謝して住せ
 ず、念念に生滅すと説き、中間此及び處處に於
 て、諸の比丘并に衆の菩薩の爲めに、十二因
 縁、六波羅密を辯演し宣説せしにも、亦諸法は
 本來空寂にして、代謝して住せず、念念に生滅
 すと説き、今復此に於て、大乘無量義經を演説
 するにも、亦諸法は本來空寂にして、代謝して
 住せず、念念に生滅すと説く。善男子、是故に
 初説、中説、後説、文辭は是れ一なれども、而
 も義は別異なり。義異なるが故に、衆生の解異
 なり。解異なるが故に、得法、得果、得道亦異
 なり。善男子、(二)初に四諦を説いて、聲聞を求
 むる人の爲めにせしかども、而も八億の諸天來
 下して法を聽いて菩提心を發せり。中ごろ處處

説法品第二

と解せり。按ずるに上の三法
 已に三乘なれば、その得果の
 四果、得道の二道亦具さに三
 乘に涉るべし、故に四果は羅
 漢果、支佛果、菩薩果、佛果
 と云ふべく、二道は大小二乘
 の道なるべきか。四果の中の
 佛果は四十餘年の四教の權佛
 果なること論なし。註釋亦別
 に此の意を存せざるに非ず、
 須らく檢すべし。

【一】(原文)。文辭雖一而義各
 異。

【二】樹王の菩提樹の敬稱なり。
 三七日間の華嚴の會座を畢つ
 て菩提樹下を去りしことを樹
 王を起つと云ふなり。

【三】波羅奈鹿野園(Vārāṇasī-
 Mṛigadāra)。波羅奈は國の名、
 中天竺に屬す、一名諸佛國と
 云ふ。本は川の名なり、其の
 水を繞らして國都を建つ、故
 に繞河城、江繞城等と翻す。

鹿野園は國都の北二十里に在
 る一地名なり。又施鹿林と云
 ひ、仙人墮處と云ひ、仙人園
 とも云ふ、此等の名の因縁具
 さには註釋の如し。現今サル
 ナータ(Sarnāth)と稱する
 地は即ち鹿野園説法の聖蹟な
 りと云ふ。(波羅奈斯、婆羅痾
 斯、婆羅奈寫)

【三】阿若拘隣等の五人。
 一、憍陳如(Kāundinya)。阿

若憍陳如とも云ふ。阿若は
 名、憍陳如は姓なり。又拘隣
 と云ふ、即ち阿若拘隣なり。
 名義は本經序品に至りて註す
 べし。

二、阿説示(Asvajit)。阿濕婆
 氏多、阿濕縛伐多、阿濕婆
 特、阿奢論時等と云ふは具音
 に従ふなりの略音にて阿濕卑、
 類轉、類陞、或は濕縛と云ふ、
 即ち阿説示なり。馬勝、調馬、
 馬星等と翻す。舍利弗曾て師

に於て、甚深の十二因縁を演説して、辟支佛を
 求むる人の爲めにせしかども、而も無量の衆生、
 菩提心を發し、或は聲聞に住しき。(三)次に(三)方
 等十二部經、摩訶般若、華嚴海空を説いて、菩
 薩の歷劫修行を宣説せしかども、而も百千の比
 丘、萬億の人天、無量の衆生は、須陀洹を得、
 斯陀舍を得、阿那含を得、阿羅漢果を得、辟支
 佛の因縁の法の中に住しき。善男子、是の義を
 以ての故に、故に知るべし、説は同じけれども
 而も義は別異なり。義異なるが故に、衆生の解
 異なり。解異なるが故に、得法、得果、得道亦
 異なり。是故に善男子、我れ得道して初めて起
 つて法を説きしより、今日大乘無量義經を演説
 するに至るまで、未だ曾て苦なり、空なり、無
 常なり、無我なり、非眞なり、非假なり、非大

とせし人なり。

三、跋提(Bhadrika)。具さに
 跋提黎迦と云ふ、又或は略し
 て婆提とも云ふ。小賢と翻
 す、白飯王の長子なり、或は
 甘露飯王の子なりとも云ふ。
 四、娑婆波(Śrīvāṣṭī)。又婆頗
 と云ひ、娑敷とも云ふ。起氣
 と翻す。十力迦葉なり。
 五、摩訶男(Mahānāma)。摩
 訶那摩、摩訶納、摩訶摩男等
 と云ふ。此に大名と翻す。甘
 露飯王の長子俱利太子なり。
 又斛飯王の子なりとも云ふ。
 摩訶男拘利、摩男拘利等とも
 稱す。
 已上五人は釋尊出家入山の時
 俱に従つて入山修行し、中途
 釋尊を捨つ、是の因縁を以て
 釋尊成道の後先づこの五人を
 化度して弟子と爲す、五比丘
 と稱する是れなり。五人の中、
 憍陳如と娑婆波は釋尊の母の

親族、他の三人は父の親族な
 りと云ふ。今の經文は五人の
 中阿若拘隣即ち憍陳如一人を
 擧げて他の四人を等略す。拘
 隣と拘利と別人なることは傳
 教の註釋の如し。又註釋には
 十力迦葉を有婆帝利迦と書け
 り。

【四】(原文)。初説四諦。

【五】(原文)。次説方等十二部
 經・摩訶般若、華嚴海空、宣
 説菩薩歷劫修行。

【六】方等十二部經。摩訶般若。
 華嚴海空。説時の次第は、華
 嚴は阿含の前なれども、今は
 教の淺深の次第を示すが爲め
 に却つて方等般若の後に置く
 るなり。

方等十二部經。方等とは、方
 廣平等の略語にして大乘の異
 稱なり。十二部經とは小乗の
 九部なるに對して大乘を十二
 部經と云ふ。即ち大小を相對

なり非小なり、本來不生なり、今も亦不滅なり、
 一相なり、無相なり、法の相なり、法の性なり、
 不來なり、不去なり、而も諸の衆生は、四相に
 遷さると説かず。善男子、是の義を以ての故に
 一切の諸佛は、二言有ること無く、能く一音を
 以て、普く衆聲に應じ、能く一身を以て、百千
 萬億(三七)那由他無量無數 恒河沙の身を示し、
 一一の身の中に、又若干の百千萬億那由他
 阿僧祇恒河沙の種種の類形を示し、一一の形の
 中に、又若干の百千萬億那由他阿僧祇恒河沙の
 形を示す。善男子、是れ則ち諸佛の不可思議甚
 深の境界なり。(三〇)二乗の知る所に非ず。亦(三一)十
 住の菩薩の及ぶ所に非ず 唯佛と佛とのみ、
 乃し能く究了したまへり。善男子、是故に我説
 く、微妙甚深の無上大乗無量義經は、文理真正

説法品第二

して其の異を別かつが爲めな
 り。故に般若 華嚴經等の大
 乘は皆方等十二部經と稱すべ
 きものなれども、今は大乘の
 初めなるに約して別して五時
 の中の第三時生酥味の教を指
 す、天台の言はゆる方等部な
 り。十二部經の名義は本經方
 便品に至りて註すべし。
 摩訶般若。即ち大般若經なり、
 光讚般若、金剛般若、六品般若
 若等あれども、その具有せる
 ものは唐譯六百卷の大般若經
 なり。是れ五時の中の第四時
 熟酥味の教なり。
 華嚴海空。華嚴は華嚴經、海
 空は無極無邊の義なり。註釋
 には三昧の名と爲せり。三七
 日樹下の思惟は即ち華嚴の海
 空三昧なるが故なり。
 【七】 那由他(Nayuta)。印度の
 大數量は、且らく大莊嚴經
 に依るに、約三十三の名稱あ

り、第一は百の千百億を摩由
 他と云ひ、第二は百の摩由他
 を那由他と云ふ。
 【八】 恒河沙。恒河は印度第一
 の川の名(Canah)なり。其の
 川の沙を以て無數の量に況し
 て恒河沙數と云ふなり。
 【九】 阿僧祇(Asankhya)。無
 數と翻す、大數量の極なり。
 (阿僧企耶)
 【一〇】 二乘。聲聞緣覺を云ふ。
 【一一】 十住の菩薩。道教の十地
 別教の十地の菩薩を云ふ。
 【一二】 唯佛と佛と。上の佛は妙
 覺にして究竟即の果佛、下の
 佛は四十一位の分證即の因
 佛。果佛は善く究め、因佛は
 分に了するなり。
 【一三】 三千大千世界。須彌四洲、
 日月、欲天、梵世天等各一千
 を小千世界と名づけ、此の小
 千の千倍を中千と名づけ、此
 の中千の千倍を大千と名く、

二七

にして、尊にして過上無し、三世の諸佛の共に守護したまふ所なり、衆魔外道得入すること有ること無し。一切の邪見生死に壞敗せられず。

菩薩摩訶薩、若し疾く無上菩提を成せんと欲せば、應當に是の如き甚深の無上大乗無量義經を修學すべし」と。

佛、是れを説きたまふこと已つて、是に

千大千世界、六種に震動し、自然に空中より

種種の天華、天優鉢羅華、鉢曇摩華、拘物頭

華、分陀利華を雨らし、又無數の種種の天香、

天衣、天璣珞、天無價寶を雨らし、上空の中より、

旋轉來下して、佛及び諸の菩薩、聲聞、

大衆に供養す。天厨の天鉢器には、天の百味食

充滿盈溢し、天幢、天幡、天軒蓋、天妙樂具、

處處に安置し、天の伎樂を作して、佛を歌歎し

即ち千萬億の世界を三千大千世界と云ふ。同一の成壞にして一佛の化境なり、娑婆世界の總稱なり。

【三四】六種に震動。本經序品に至りて註すべし。

【三五】種種の天華。天上の種種の華の中に今四種を標せり、四種皆蓮華なり。

優鉢羅華 (Uttarā) 青色華と翻じ、亦黛色華とも翻す。

又この華に赤白及び不赤不白の華ありとも云ふ。(鳥鉢羅、

優鉢刺、滿鉢羅、尼羅鳥鉢羅) 鉢曇摩華 (Padma) 赤色華と

翻す、蓮紅華なり。又これに白色の華ありとも云ふ。但

し芬陀利には非ず。又或は赤黄色華とも云ふ。(鉢曇、鉢特

摩、鉢頭摩、鉢拏摩、鉢納摩、

波頭暮、鉢特忙)

拘物頭華 (Kumuda) 黄色華と翻じ、亦地喜華と翻す。

又或は深藍色とも云ひ、青色とも云ひ、赤白色とも云ひ、白色なれども芬陀利に攝びて小白華とも云ふ(拘物陀、拘

車頭、拘貨頭、拘某陀、兜牟地、拘牟耶、屈摩羅、句文羅) 分陀利華 (Pundarikā) 即ち白色華にして、他の異説無し、皆白蓮華と翻す。その華百葉なるを以て亦百葉華とも翻す。(分陀利、分荼利、分荼利迦、奔荼利迦、分陀利伽) 按ずるに四種の中、鉢曇摩はその赤色を取り、拘物頭はその黄色を取つて、四華の次第を青、赤、黄、白と爲すべし。青は東方にして春なり、赤は南方にして夏なり、黄は西方にして秋なり、白は北方にして冬なり、即ち四方四時を以て一切をこの四華に攝す。亦生、住、異、滅の四相の色を表す。若し佛陀に於ては發心、

たてまつる。

又復六種に東方恒河沙等の諸佛の世界を震動し、亦天華、天香、天衣、天瓔珞、天無價寶を雨らし、天厨の天鉢器には天の百味あり、天幢、天幡、天軒蓋、天妙樂具、天の伎樂を作して、彼の佛及び彼の菩薩、聲聞、大衆を歌嘆したてまつる。南、西、北方、四維上下も亦復是の如し。

是に衆中の三萬二千の菩薩摩訶薩は、無量義三昧を得、三萬四千の菩薩摩訶薩は、無數無量の陀羅尼門を得て、能く一切の三世の諸佛の不退の法輪を轉す。其の諸の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、大轉輪王、小轉輪王、銀輪、鐵輪、諸輪の王、國王、王子、國臣、國民、國士、國女、國大長者、及び諸の眷屬、百千の衆と俱なる、佛如來の是の經を説きたまふを聞きたてまつる時、或は煖法、頂法、世間第一法、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛果を得、又菩薩の無生法忍を得、又一の陀羅尼を得、又二の陀羅尼を得、又三の陀羅尼を得、又四の陀羅尼、五、六、七、八、九、十の陀羅尼を得、又百千萬億の陀羅尼を得、又無量無數恒河沙阿僧祇の陀羅尼を得、皆能く隨順して不退轉の法輪を轉す。無量の衆生は阿耨多羅三藐三菩提の心を發しき。

修行、菩提、涅槃の四門の次第なり。

【三六】無生法忍。無生とは不生不滅の中道なり、法とはその中道の理なり、忍とは中道の理を悟る智を云ふなり、忍智と熟字するなり、即ち無生の法を悟る忍智と云ふ事なり。圓教の菩薩は初住に於てこの忍智を得るなり。

十功德品第三

爾の時に大莊嚴菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、『世尊、世尊是の微妙甚深の無上大乗無量義經を

説きたまふ、眞實甚深なり。甚深甚深なり。所以は何、此の衆の中に於ける、諸の菩薩摩訶薩、及び

諸の四衆、天、龍、鬼神、國王、臣民、諸の有らゆる衆生、是の甚深の無上大乗無量義經を聞いて、

陀羅尼門、三法、四果、菩提の心を獲得せずといふこと無し。當に知るべ

し、此の法は文理眞正なり、尊にして過上無し、三世の諸佛の守護したま

ふ所なり、衆魔群道得入すること有ること無し、一切の邪見生死に壞敗せ

られず。所以は何、一たび聞けば、能く一切の法を持つが故なり。若し

衆生有つて、是の經を聞くことを得れば、則ち爲れ大利なり。所以は何、

若し能く修行すれば、必ず疾く無上菩提を成ずることを得ればなり。其

れ衆生有つて聞くことを得ざる者は、當に知るべし、是等は爲れ大利を失へり。無量無邊不可思議阿

僧祇劫を過ぐれども、終に無上菩提を成ずることを得じ。所以は何、菩提の大直道を知らざるが故

なり。險逕を行くに、留難多きが故なり。世尊、是の經典は不可思議なり。唯願はくは世尊、廣く

大衆の爲めに慈哀して、是の經の甚深不可思議の事を敷演したまへ。世尊、是の經典は、何れの所よ

【一】(原文)。一聞能持一切法
故。

【二】(原文)。必得疾成無上菩
提。

【三】(原文)。終不得成無上菩
提。

【四】(原文)。行於險逕多留難
故。

りか來り、去つて何れの所にか至り、住まりて何れの所にか住まり、乃至是の如き無量の功德不思議の力有つて、衆をして疾く阿耨多羅三藐三菩提を成せしむるや。』

爾の時に世尊、大莊嚴菩薩摩訶薩に告げて言たまはく、『善哉善哉、善男子、是の如し、是の如し、汝が言ふ所の如し。善男子、我れ是の經を説くこと甚深甚深なり、眞實甚深なり。所以は何、衆をして疾く無上菩提を成せしむるが故なり、一たび聞けば、能く一切の法を持つが故なり。諸の衆生に於て、大利益あるが故なり。大直道を行くに、留難無きが故なり。善男子、汝、是の經は、何れの所よりか來り、去つて何れの所にか至り、住まつて何れの所にか住まると問ひしことは、當に善く諦かに聽くべし。善男子、是の經は、本諸佛の室宅の中より來り、去つて一切衆生の發菩提心に至り、諸の菩薩の所行の處に住まる。善男子、是の經は是の如く來り、是の如く去り、是の如く住まる。是故に此の經は能く是の如き無量の功德不思議の力有つて、衆をして疾く無上菩提を成せしむ。善男子、汝、寧ろ是の經に復十の不思議功德の力有ることを聞かんと欲するや不や。』

大莊嚴菩薩言さく、『願樂はくは聞きたてまつらんと欲す。』

【五】(原文)。行大直道無留難故。

【六】諸佛の室宅。諸佛は大慈悲を以てその室宅と爲して常に此に住するなり。本經法師品に亦この義あり。

【七】十の不思議功德力。已下の經文之を説けり。註釋にこの十種を淨心不思議力、養生不思議力、船師不思議力、王子不思議力、龍子不思議力、治等不思議力、眞封不思議力、得忍不思議力、拔濟不思議力、登地不思議力と名づけたり。

佛言たまはく、『善男子、第一に是の經は能く菩薩の未だ發心せざる者をして菩提心を發さしめ、慈仁無き者には慈心を起さしめ、殺戮を好む者には大悲の心を起さしめ、嫉妬を生ずる者には隨喜の心を起さしめ、愛著ある者には能捨の心を起さしめ、諸の悭貪の者には布施の心を起さしめ、憍慢多き者には持戒の心を起さしめ、瞋恚盛んなる者には忍辱の心を起さしめ、懈怠を生ずる者には精進の心を起さしめ、諸の散亂の者には禪定の心を起さしめ、愚癡多き者には智慧の心を起さしめ、未だ彼を度すること能はざる者には、彼を度するの心を起さしめ、十惡を行ずる者には、十善の心を起さしめ、有爲を樂ふ者には、無爲を志ざさしめ、心に退心有る者には、不退の心を作さしめ、有漏を爲す者に、無漏の心を起さしめ、惱煩多き者には、除滅の心を起さしむ。善男子、是れを是の經の第一の功德不思議の力と名づく。

善男子、第二の是の經の不可思議の功德力とは、若し衆生有つて、是の經を聞くことを得む者、若しは一轉、若しは一偈、乃至一句もせば、則ち能く百千億の義に通達し、無量數劫にも受持する所の法を演說すること能

【八】慈仁無き者等。此の下の四句は四無量心なり。第一句慈心は慈無量心、第二句大悲心は悲無量心、第三句隨喜心は喜無量心、第四句能捨心は捨無量心なり。

【九】諸の悭貪等。此の下の六句は布施乃至智慧の六度心なり。

【一〇】未だ彼を度する等。以下除滅の心を起さしむまでの六句は、度他心、十善心、稀無爲心、不退心、無漏心、除滅煩惱心の六種心なり。

【一一】十惡。殺生、偷盜、邪淫、(身三支)、妄語、綺語、兩舌、惡口、(口四支)、貪欲、瞋恚、愚癡、(意三支)なり。

【一二】十善。不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不綺語、不兩舌、不惡口、不貪、不瞋、不癡なり。

はじ。所以は何、其れ是の法は義無量なるを以ての故なり。善男子、是の
 經は、譬へば、一の種子より百千萬を生じ、百千萬の中より、一に復百
 千萬數を生じ、是の如く、展轉して、乃至無量なるが如し。是の經典も亦
 復是の如し。一法より百千の義を生じ、百千の義の中より、一に復百千
 萬數を生じ、是の如く展轉して乃至無量無邊の義あり。是の故に此の經を
 無量義と名づく。善男子、是れを是の經の第二の功德不思議の力と名づく。
 善男子、第三の是の經の不可思議の功德力とは、若し衆生有つて是の經
 を聞くことを得て、若しは一轉、若しは一偈、乃至一句もせば、百千萬億
 の義に通達し已つて、煩惱有りと雖も、煩惱無きが如く、(三〇)生死に出入す
 とも、怖畏の想ひ無けん。諸の衆生に於て、憐愍の心を生じ、一切の法に
 於て勇健の想ひを得ん。壯なる力士の、諸の有らゆる重き者を、能く擔
 ひ能く持つが如し。是の持經の人も亦復是の如し。能く無上菩提の重き寶
 を荷ひ、衆生を擔ひ負うて、生死の道を出だす。未だ自ら度すること能は
 ざれども、已に能く彼れを度せん。猶ほ船師の、身重病に嬰り、(三一)四體御
 まらずして、此の岸に安止すれども、好き堅牢の舟船あつて、常に諸の彼

【三】 有爲。三界の中の諸の業煩惱に就て爲作する所あるを有爲と云ふ。

【四】 無爲。之に反して爲作すること無きを無爲と云ふ。

【五】 退心。三界に退墮する心を云ふ。

【六】 不退心。三界に退墮せずして出離の道に精進なる心を云ふ。

【七】 有漏。三界の業因たる見思の煩惱を云ふ。この業煩惱に依りて三界二十五有の生死に漏沈するが故に業煩惱を有漏と名づくるなり。

【八】 無漏。業煩惱を斷じて漏有ること無きを云ふ。

【九】 煩惱多き者。百八煩惱等な云ふ。

【一〇】 生死。二十五有の分段生死な云ふ。

【一一】 四體。人の身體は地、水、火、風の四大合成なるが故に

を度する者の具を辨せるを、給ひ與へて去らしむるが如し。是の持經の者も、亦復是の如し。五道諸有の身、百八の重病に嬰り、恒常に相ひ纏はれて、無明老死の此の岸に安止せりと雖も、而も堅牢なる此の大乗經の無量義には、能く衆生を度することを辨するもの有り。説の如く行ずる者は、生死を度することを得。善男子、是れを是の經の第三の功德不思議の力と名づく。

善男子、第四の是の經の不可思議の功德力とは、若し衆生有つて是の經を聞くことを得て、若しは一轉、若しは一偈、乃至一句もせば、勇健の想ひを得て、未だ自ら度せずと雖も、而も能く他を度せん。諸の菩薩と與にして以て眷屬と爲し、諸佛如來、常に是の人に向つて而も法を演説したまはん。是の人聞き已つて悉く能く受持し、隨順して逆はず、轉た復人の爲めに宜きに隨つて廣く説かん。善男子、是の人は、譬へば、國王と夫人と新に王子を生まんに、若しは一日、若しは二日、若しは七日に至り、若しは一月、若しは二月、若しは七月に至り、若しは一歲、若しは二歲、若しは七歲に至り、復國事を領理すること能はずと雖も、已に臣民に宗び敬はれ、

四體と云ふ。
 【三】、五道諸有の身。五道は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間の五界なり、亦五趣とも云ふ。諸有は二十五有なり。三界流轉の身を五道諸有の身と云ふなり。

【三】、百八の重病。百八の煩惱を重病に喩へて云ふ。百八に二解あり、一は見惑の八十八使と思惑の十種と、無慚、無愧、嫉、慳、悭、睡眠、掉舉、昏沈、瞋忿、覆の十纏を加へて百八と爲す。二は六根六塵に對するに、各好と惡と平との三ありて、十八煩惱と成り、又六根六塵に對する好惡平の三種に苦受、樂受、不苦不樂受の三ありて十八煩惱と成り、共に三十六種と成り、更に之を過去、現在、未來の三世に約するに各三十六種なるを以て總じて百八の煩惱なり

諸の大王の子を、以て伴侶と爲し、王及び夫人、愛心偏へに重くして、常に與に共に語らん。所以は何、稚小なるを以ての故にといはんが如し。

善男子、是の持經の者も亦復是の如し、諸佛の國王と、是の經の夫人と、和合して、共に是の菩薩の子を生ず。若し是の菩薩、是の經を聞くことを

得て、若しは一句、若しは一偈、若しは一轉、若しは二轉、若しは十、若しは百、若しは千、若しは萬、若しは億萬恒河沙無量無數轉せんに、復眞

理の極を體ること能はずと雖も、已に一切の四衆八部に宗み仰がれ、諸の大菩薩を以て眷屬と爲し、深く諸佛の祕密

の法に入つて、演説する所、違ふこと無く、失無く、常に諸佛に護念せられて、慈愛偏へに覆はれん。

新學なるを以ての故なり。善男子、是れを是の經の第四の功德不思議の力と名づく。

善男子、第五の是の經の不可思議の功德力とは、若し善男子、善女人、若しは佛の在世にもあれ、若しは滅度の後にもあれ、其れ是の如き甚深の無上大乘無量義經を受持し讀誦し書寫すること有らんに、是の人、復縛煩惱を具して、未だ諸の凡夫の事を遠離すること能はずと雖も、而も能く大菩薩の

道を示現し、一日を延べて以て百劫と爲し、百劫を亦能く促めて一日と爲して、彼の衆生をして歡喜し信伏せしめん。善男子、是の善男子、善女人は、譬へば、龍の子の始めて生まれて七日にして、即

と爲す。
【四】雷奮梵音、雷のごとく奮へる佛の梵音なり。即ち佛の四辯八音を雷に喩ふ。潤稿の衆生之を聞いて皆快樂の念を生ずるが故なり。本經藥草喻品には雷聲遠く震ひて衆をして悅豫せしむとあり。

ち能く雲を興し、亦能く雨を降らすが如し。善男子、是れを是の經の第五の功德不思議の力と名づく。
 善男子、第六の是の經の不可思議の功德力とは、若し善男子、善女人、若しは佛の在世にもあれ、
 若しは滅度の後にもあれ、是の經典を受持し讀誦せば、煩惱を具すと雖も、而も衆生の爲めに法を説
 いて、煩惱生死を遠離し、一切の苦を斷ずることを得せしめん。衆生聞き已つて修行して、得法、得
 果、得道すること、佛如來と與に等しくして差別無けん。譬へば、王子の復稚小なりと雖も、若し王
 の巡遊し、及び疾病するには、是の王子に委せて、國事を領理せしむ。
 王子はの時に、大王の命に依つて、法の如く、群僚百官に教令し、正化
 を宣流するに、國士の人民、各其の要に隨つて、大王の治するが如く、等
 くじて異なること有ること無きが如し。持經の善男子、善女人も、亦復是
 の如し。若しは佛の在世にもあれ、若しは滅度の後にもあれ、是の善男子、未だ 初二不動地に住す
 ることを得ずと雖も、佛の是の如く教法を用説したまふに依つて、而も之れを敷演せんに、衆生聞き
 已つて一心に修行せば、煩惱を斷除して、得法、得果、乃至得道せん。善男子、是れを是の經の第六
 の功德不思議の力と名づく。

善男子、第七の是の經の不可思議の功德力とは、若し善男子、善女人、佛の在世に於てもあれ、若
 しは滅度の後にてもあれ、是の經を聞くことを得て歡喜し信樂して、希有の心を生じ、受持し讀誦し、

【二五】 初二不動地。菩薩十地位の
 初地を云ふ、即ち歡喜地なり、
 第八の不動地には非ず。この
 位より以往を聖位と名づく、
 その以前は皆賢位なり。

書寫し解説し、説の如く修行し、菩提心を發し、諸の善根を起し、大悲の意を興して、一切の苦惱の衆生を度せんと思ふは、未だ六波羅密を修行することを得ずと雖も、六波羅密自然に在りし、即ち是の身に於て無生法忍を得、生死煩惱一時に斷壞して、菩薩の第七の地に昇らん。譬へば、健人の王の爲めに怨を除くに、怨既に滅び已れば、王大に歡喜し、半國の封を賞賜して、悉く以て之れに與へんが如し。持經の善男子、善女人も、亦復是の如し。諸の行人に於て最も是れ勇健なり。六度の法寶求めざるに自ら至ることを得、生死の怨敵、自然に散壞して、無生忍を證し、半佛國の寶、封賞安樂ならん。善男子、是れを是の經の第七の功德不可思議の力と名づく。

善男子、第八の是の經の不可思議の功德力とは、若し善男子、善女人、若しは佛の在世にもあれ、若しは滅度の後にもあれ、人有つて能く是の經典を得ん者をば、敬信すること佛身を視たてまつるが如くにして、等くして異なること無からしめ、是の經を愛樂して、受持し讀誦し書寫し頂戴し、法の如く奉行し、戒忍を堅固にし、兼て檀度を行じ、深く慈悲を發して、此の無上大乘無量義經を以て、廣く人の爲めに説かん。若し人の先より來た都て罪福ありと信せざる者には、是の經を以て之れに示して、種種の方便を設け、強て化して信せ

【六】 原文。雖未得修行六波羅密、六波羅密、自然在前。
 【七】 在前。現在前とも云ふ。現れて眼前に在るを云ふなり。
 【八】 第七の地。十地位の第七遠行地なり。初地よりこの第七地までは下地の位とも云ふなり。
 【九】 罪福。謗罪と信福との二なり。

しめん。經の威力を以ての故に、其の人の信心を發し、欸然として廻すことを得ん。信心既に發して、勇猛精進なるが故に、能く是の經の威德勢力を得て、得道得果せん。是の故に善男子、善女人、化の功徳を蒙むるを以ての故に、男子にもあれ、女人にもあれ、即ち是の身に於て、無生法忍を得、(三〇) 上地に至ることを得て、諸の菩薩と與に以て眷屬と爲し、速に能く衆生を成就し、佛國土を淨め、久しからずして無上菩提を成ずることを得ん。善男子、是れを是の經の第八の功徳不思議の力と名づく。

善男子、第九の是の經の不可思議の功徳力とは、若し善男子、善女人、若しは佛の在世にもあれ、若しは滅度の後にもあれ、是の經を得ること有つて、歡喜踴躍し、未曾有なることを得て、受持し讀誦し書寫し供養し、廣く衆人の爲めに是の經の義を分別し解説せん者は、即ち (三一) 宿業の餘罪重障一時に滅盡することを得て、便ち (三二) 清淨なることを得、(三三) 大辯を逮得し、次第に (三四) 諸波羅密を莊嚴し、(三五) 諸の三昧、(三六) 首楞嚴三昧を獲、(三七) 大總持門に入り、勤精進力を得て、速に (三八) 上地を越ゆることを得、善能く分身散體して十方の國土に遍じ、一切二十五有の極苦の衆生を拔濟

【二〇】 上地。第八不動地已上を
上地と名づくるなり。

【三一】 宿業。宿は宿世、即ち過
去世なり、業は業作なり。過
去の惡業を云ふなり。

【三二】 清淨なることを得。六根
清淨を得るなり。

【三三】 大辯。四無礙辯なり。

【三四】 諸波羅密。六波羅密、十
波羅密等を云ふ。

【三五】 諸の三昧。百八三昧を云
ふ。

【三六】 首楞嚴三昧。百八三昧の
第一の名を此に標するなり。

首楞嚴 (Sūrahṅgam) は健相
分別と翻す。又勇健定、健行
定、堅固、一切事究竟堅固等
と翻す。諸の三昧を分別し究
竟して勇健堅固なるなり。

【三七】 大總持門。總持は陀羅尼
なり、一切の諸の陀羅尼を攝
して大總持門と云ふなり。

して悉く解脱せしめん。是の故に是の經は此の如きの力有り。善男子、是れを是の經の第九の功德不思議の力と名づく。

善男子、第十の是の經の不可思議の功德力とは、若し善男子、善女人、

若しは佛の在世にもあれ、若しは滅度の後にもあれ、若し是の經を得て大

歡喜を發し、希有の心を生じ、既に自ら受持し讀誦し書寫し供養し、説の如く修行し、復能く廣く在

家出家の人を勸めて、受持し讀誦し書寫し供養し、説の如く修行せしめん。既に餘人をして是の經を

修行せしむる力の故に、得道得果せん。皆是の善男子、善女人の慈心をもつて勲化するの力に由るが

故なり。是の善男子、善女人、即ち是の身に於て、便ち無量の諸の陀羅尼門を逮得し、凡夫地に於て、

自然に、初時に、能く無數阿僧祇の弘誓の大願を發し、深く能く一切衆生を救ふことを發し、大悲を

成就し、廣く能く衆の苦を抜き、厚く善根を集めて、一切を饒益せん。而も法の澤を演べて、洪に枯

涸に潤し、能く法の藥を以て諸の衆生に施し、一切を安樂ならしめ、漸く超登して 三九 法雲地に住す

るを見ん。恩澤普く潤ひ、慈被外無く、苦の衆生を攝めて、道跡に入らしめん。是の故に此の人は久

しからずして阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ん。善男子、是れを是の經の第十の功德不思議の

力と名づく。

善男子、是の如き無上大乘無量義經は、極めて大威神の力有り、尊にして過上無し、能く諸の凡夫

【三】 上地を越ゆ。第九善慧地に入るを云ふなり。

【三九】 法雲地。第十地なり。若し別に等覺を立てざる時は、この第十地即ち等覺なり。

をして、皆聖果を成じ、永く生死を離れて、皆自在なることを得せしむ。是の故に是の經を無量義と名づくるなり。能く一切衆生をして、凡夫地に於て諸の菩薩の無量の道芽を生起せしめ、功德の樹をして鬱茂扶踈増長せしむ。是故に此の經をば、不可思議功德力と號づく。』

時に大莊嚴菩薩摩訶薩、及び八萬の菩薩摩訶薩、聲を同うして、佛に白して言さく、『世尊、佛の説きたまふ所の如き甚深微妙の無上大乘無量義經は文理真正なり。尊にして過上無し。三世の諸佛の共に守護したまふ所なり。衆魔群道の得入すること有ること無し。一切の邪見生死に壞敗せられず。是の故に此の經は乃し是の如きの十の功德不思議の力有るなり。大に無量の一切衆生を饒益して、一切の諸の菩薩摩訶薩をして、各無量義三昧を得、或は百千の陀羅尼門を得せしめ、或は菩薩の諸地諸心を得せしめ、或は緣覺羅漢の四道果の證を得せしむ。世尊慈愍して、快く我れ等の爲めに是の如きの法を説きたまひて、我れをして大に法利を獲せしめたまふ。甚だ爲れ奇特にして未曾有なり。世尊の慈恩は實に報す可きこと難し。』

【四〇】 諸地諸心。諸地は十地、諸心は十住、十行、十廻向の三十心を云ふ。

是の語を作し已りし、爾の時に三千大千世界六種に震動し、上空の中より復種種の天華、天優鉢羅華、鉢曇摩華、拘物頭華、分陀利華を雨らし、又無數の種種の天香、天衣、天瓔珞、天無價寶を雨らして、上空の中より、旋轉來下して、佛及び諸の菩薩、聲聞、大衆に供養す。天厨の天鉢器には、

天の百味、充滿溢し、色を見、香を聞ぐに、自然に飽足す。天幢、天幡、天軒蓋、天妙樂具、處處に安置し、天の伎樂を作して、佛を歌嘆したてまつる。又復六種に東方恒河沙等の諸佛の世界を震動す。亦天華、天香、天衣、天瓔珞、天無價寶を雨らし、天厨の天鉢器には、天の百味あり。色を見、香を聞ぐに、自然に飽足す。天幢、天幡、天軒蓋、天妙樂具、處處に安置し、天の伎樂を作して、彼の佛及び諸の菩薩、聲聞、大衆を歌嘆す。南西北方、四維上下も、亦復是の如し。

爾の時に佛、大莊嚴菩薩摩訶薩、及び八萬の菩薩摩訶薩に告げて言たまはく、『汝等當に此の經に於て、應に深く敬心を起し、法の如く修行し、廣く一切を化して、懃心に流布せしむべし。常に懃懃に、晝夜に守護して、諸の衆生をして、各法利を獲せしむべし。汝等眞に

是れ大慈大悲なり。以て神通の願力を立てて、是の經を守護して、疑滯せ

【四二】閻浮提。本經藥王品に至りて註すべし。

しむること勿れ。當來世に於て必ず廣く 閻浮提に行せしめて、一切衆生をして、見聞し讀誦し書寫し供養することを得せしめよ。是れを以ての故に、亦疾く汝等をして速に阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん。』

是の時に、大莊嚴菩薩摩訶薩、八萬の菩薩摩訶薩と與に、即ち座より起つて佛の所に來詣して頭面に足を禮し、遶ること百千匝して、即ち前んで胡跪し、俱に共に聲を同うして、佛に白して言さく、

「世尊、我等快く世尊の慈愍を蒙りぬ。我等が爲めに、是の甚深微妙の無上大乘無量義經を説きたま

ふ。敬んで佛勅を受けて、如來の滅後に於て、當に廣く是の經典を流布せしめ、普く一切をして、受持し讀誦し書寫し供養せしむべし。唯願はくは憂慮を垂れたまふこと勿れ。我等當に願力を以て、普く一切衆生をして、此の經を得て、見聞し讀誦し書寫し供養して、是の經の威神の福を得せしむべし。』

爾の時に佛、讀めて言たまはく、『善哉善哉、諸の善男子、汝等今者眞に是れ佛子なり。弘き大慈大悲をもつて、深く能く苦を抜き厄を救ふ者なり。一切衆生の良福田なり。廣く一切の爲めに大良導師と作る。一切衆生の大依止處なり。一切衆生の大施主なり。常に法利を以て、廣く一切に施すべし。』

爾の時に大會、皆大に歡喜して、佛の爲めに禮を作し、受持して而も去る。

【四二】受持して而も去る。是れ譯家の詞にして衆經の例に従ふのみ。然るに無量義經は説會說座本經の法華と連りて斷絶せず、故に實は一會その座を去らざるなり。

國譯無量義經終

國譯妙法蓮華經

卷の第一

序品第一

是の如く我聞く、
一時、佛、王舍城、
耆闍崛山の中に住した
まひき。

大比丘衆 萬二千
人と與に俱なりき。皆
是れ阿羅漢なり。
諸漏已に盡くして、復
煩惱無く、己利を

序品第一

【一】我。開經德行品の註み看るべし。

【二】佛。開經德行品の註を看るべし。

【三】王舍城。耆闍崛山。開經德行品の註を看るべし。

【四】大比丘衆。開經德行品の註み見るべし。

【五】萬二千。正法華、尼波羅の二本は千二百人に作れり、添品は今と同じ。

【六】阿羅漢。開經德行品の註を看るべし。

【七】諸漏。開經十功德品有漏の註を看るべし。

【八】煩惱。開經說法品諸の煩惱の註を看るべし。

【九】己利を逮得し。己利とは空理を照らす智徳と煩惱を盡くす斷徳との二を云ふ、この二徳を具したるは即ち己が利なるが故なり、逮得は二字にて得るの義なり、逮の一字を以て得の字に換用したる例は正法華に逮是經卷、皆逮總持等とあり、及の訓を以てすべ

からず。

【一〇】諸の有結。有は二十五有、結はその業因なり、二十五有は開經說法品諸の有の註を看るべし。

【一】阿若憍陳如。阿若は具々には阿若多、無知と翻す、無生智を得て眞空の理を知るが故なり。故に亦無智と翻す。亦初知、已知等とも翻す。佛の最初の弟子にして、他の弟子よりも早く已に無生を知るとの

逮得し、(一〇) 諸の有結

を盡くして、心に自在

を得たり。其の名を、

(二) 阿若橋陳如、(三) 摩訶若橋陳如、

訶迦葉 (二) 優樓頻螺迦

葉、伽耶迦葉、那提迦

葉、舍利弗、(三) 大目

健連、(二) 摩訶迦旃延、

阿菟樓駄、(一) 劫賓

那、(二) 橋梵波提、(三) 離

婆多、(三) 畢陵伽婆蹉、

薄拘羅、(三) 摩訶拘

羅羅、(二) 難陀、(三) 孫陀

羅難陀、(二) 富樓那彌多

羅尼子、(二) 須菩提、

義なり。亦解とも翻す、その

意知に同じ。亦了本際、知本

際等とも云ふ。此は是れ名なり。

橋陳如は姓なり。或は無

翻と云ひ、或は火器と翻す。

事火婆羅門種なりし故に此の

姓族の稱ありと云ふ。五比丘

の一人拘隣なり。(阿若多橋陳

那、阿若拘隣、阿若居隣

那、阿若迦葉 (Māṅgalyāyana)

摩訶迦葉 (Mahākāśyapa)

摩訶は大と翻し、迦葉は

姓にして龜と翻す。佛弟子の

中他に十力迦葉及び三迦葉あ

るを以て、これに擇んで大迦

弟子の一人にして苦行第一と

稱せらる。佛の滅後首として

三藏を結集したる事問題の初

に記せるが如し。付法藏第一

位の人なり。(迦葉波、摩訶迦

葉) (Uḍḍiaka)

優樓頻螺迦葉 (Uḍḍakāra)

伽耶迦葉 (Gāyākāra)

那提迦葉 (Nāḍīkāśyapa)

三人の兄弟にして、長は優樓

頻螺、仲は那提、季は伽耶な

り。尼波羅本の列名の次第は

之に合へり。優樓頻螺は木瓜

林と翻す。聚落の名なり。こ

の聚落五百の家あり、木瓜林

に在り。佛の滅後首として

三藏を結集したる事問題の初

に記せるが如し。付法藏第一

位の人なり。(迦葉波、摩訶迦

葉) (Uḍḍiaka)

優樓頻螺迦葉 (Uḍḍakāra)

伽耶迦葉 (Gāyākāra)

那提迦葉 (Nāḍīkāśyapa)

三人の兄弟にして、長は優樓

頻螺、仲は那提、季は伽耶な

り。尼波羅本の列名の次第は

之に合へり。優樓頻螺は木瓜

林と翻す。聚落の名なり。こ

の聚落五百の家あり、木瓜林

に在り。佛の滅後首として

阿難、羅睺羅と

曰ふ。是の如き衆に

知識せられたる大阿羅

漢等なり。復學、無

學の二千人あり。摩

訶波闍波提、比丘尼、

眷屬六千人と與に俱な

り。羅睺羅の母、耶

輸陀羅比丘尼、亦眷屬

と與に俱なり。

菩薩摩訶薩八萬

人あり。皆阿耨多

羅三藐三菩提に於て、

退轉せず。皆陀羅

尼を得。樂說辯才あ

序品第一

の摩訶俱絺羅と論議するも常

に弟の爲めに屈せしが、已に

懷妊してより顛る捷辯となり

弟復た勝つ能はず、依つて稱

して舍利と云ふ。百舌の善く

嚙するが如くなりとなり。そ

の所生の子なるを以て舍利弗

多羅と云ふ。舍利子と云ふは

梵漢並稱なり。亦身子と翻す、

母の身色姝好なるが故なり。

或は云ふ、身の梵音は舍黎に

して、今の舍利と長短聲異な

り、謬翻なりと。亦舍利を珠

なりと云ふ、母の眼珠利相あ

りしが故にと。十大弟子の一

【五】大日毘連 (Mahā-Maitreya)

緣豆、採取緣豆、採茯苓等の

【六】摩訶迦旃延 (Mahā-Kāśyapa)

諸翻あり。上古に仙人ありて

唯だ胡豆及び茯苓を採取して

之を食し、餘物を食はず、故

に此の稱ありて子孫永く之を

姓とす。目連の母はその後な

れば目毘連子と云ふ。他の目

毘連の姓に比して豪富なりし故

に特に大目毘と稱す。若し父

の名に従へば俱律他なり。或

は俱洩多、俱利迦、拘隸多等

とも云ふ。吉占と翻するなり。

亦目毘連をば天台の文句には

讚誦と翻せり。舍利弗は左面

の弟子、目毘連は右面の弟子

として、二人並べて衆に推重

せられ、十大弟子の一人にし

す。婆羅門十姓の中の一姓な

り。延は具さには延那、之を

男と翻す、即ち大剪裁種男な

り。亦延を胤と翻す、大剪裁

種胤なり。胤は後胤なり。或

は迦旃延を通じて姓と爲して

好肩と翻す、肩相好きが故に。

亦文飾と翻す、文章に長じた

るが故に。亦思勝と翻す、論

議を善くして慧思他に勝さり

たるが故に。亦算數と翻す、

その祖算數を念するの仙あり

しが故に。亦扇繩と翻す、母、

夫を亡して再嫁せんと欲すれ

ども此の兒の爲めに碍せらる

三

つて、不退轉(三)の法(三)

輪を轉じ、無量百千の

諸佛を供養し、諸佛の

所に於て衆の徳本を植

ゑ、常に諸佛に稱嘆せ

らるることを爲、慈を

以て身を修め、善く佛

慧に入り、大智に通達

し、彼岸に到り、名稱

普く無量の世界に聞こ

えて、能く無數百千の

衆生を度す。其の

名を、(四)文殊師利菩薩、(五)觀世音菩薩、

(六)得大勢菩薩、(七)常

じ。此の人前生に稗一食を辟支佛に供養せし功德を以て八十一劫人天の勝果を得、今に滅せしめて貧渴無く如意なればなり。刹帝利種にして甘露飯王の子、釋尊の堂弟なり。

初め出家して日夜睡らず、遂に盲す。禪智力の故に半頭の天眼を得、半頭の上大千界の一切を見る。十大弟子の一人にして天眼第一と稱せらる。

(阿那律、阿樓駄、阿菟駄、阿泥律陀、阿泥盧豆、阿泥菟豆、阿那樓陀)

【一八】劫賓那 (Kapilā)。房宿と翻す。星の名なり。父母此の星に降つて生めるが故に命づく。亦初めて發心して佛に遇はんとする時陶師の家に宿す。後に一比丘亦その家に來る、乃ち己が座の草を推して比丘に薦め自ら地に坐す。

比丘爲めに法を説く、依りて

得悟す、比丘は即ち佛なりしなり。佛と同房に宿せしを以て房宿と云ふ。亦此人善く星宿を知るが故に命づく。

亦黃頭と翻す、この人黃頭仙人の族なるが故にと。亦この人は劫賓那の人なるが故に云ふ。那は那羅にして男なりと。諸説の中古師は多く佛と同房共宿の義を取れり。(劫譬那、劫賓菟、金毗羅)

【一九】憍梵波提 (Gāndhārī)。牛王、牛主等と翻す、この人の宿世牛王なりしが故に。亦牛相と翻す、この人常に牛の如き喘嚼を爲し、及びその跡牛蹄に似たるが故に。蓋し宿世の業習なり。その牛喘を爲すを以て亦牛呵と翻す。初め舍利弗に依つて得度す、その上足の弟子なり。律を解すること優波離に並べり。(笈房鉢底)

底)

【二〇】離婆多 (Revata)。室星と翻す。星の名なり。父母この星に降つて生むが故に。故にまた室星、星宿等とも翻す。或は亦彗星と云ふ、彗星現する時生まれたるが故に命づく。

亦假和合と云ふ、二鬼の屍を争ふを觀て自身の假和合なることを知悟したるが故に。亦知幻とも云ふ、常にこの假合如幻の理を以て人に問ふが故に。亦常作聲と云ひ、亦大號と云ふ、名稱大に高きが故に。亦所供養と翻す、その徳まさに供養せらるべきが故に。亦大路邊生と云ふ、路邊に生まれたるが故に。周利槃特の兄なり。坐禪を樂ふを以て稱せらる。(梨波多、離越、離日、揭麗筏多、纈麗縛多)

【二一】畢陵伽婆蹉 (Pindaraka)。餘習と翻す、この人宿世に獄卒たり、既に羅漢を得

得

精進菩薩しやうじんぼつさつ、不休息菩薩ふしゅうぎふぼつさつ

寶掌菩薩ほうしやうぼつさつ、藥やく

王菩薩わうぼつさつ、勇施菩薩ゆうせぼつさつ

寶月菩薩ほうげつぼつさつ、月つき

光菩薩くわうぼつさつ、滿月菩薩まんげつぼつさつ

大力菩薩たからきぼつさつ、無量むりやう

力菩薩りきぼつさつ、越三界菩薩えつさんがいぼつさつ

跋陀婆羅菩薩はつたはらぼつさつ

彌勒菩薩みろくぼつさつ、寶積ほうやく

菩薩ぼつさつ、導師菩薩だうしぼつさつと曰い

ふ。(五九)是の如き等のごと

菩薩摩訶薩ぼつさつまかざつ八萬人はちまんにんと俱とも

なり。

爾の時に(六〇)釋提しやくたい

桓因、其の眷屬けんぞく二萬にまんの

たる後も餘習猶殘りて動もすれば他を叱罵し、亦常に他を呼ぶに爾汝を以てす。恒河神を罵る因縁文句に記するが如し。樹下に苦坐して風雨を避けざるを以て稱せらる。(辟利斯、畢蘭陀笈陞)

【三】薄拘羅(Vakula)。善容、偉形、大肥盛、脰、慢鄙、賈姓等の諸翻あれども多くは美容を取れり、容貌善美なるが故なり。昔毘婆尸佛の時、一の訶梨勒果を一病僧に施す、この因縁を以て身に會て病ます。又この人出家已來八十年未だ會て欲想を生ぜず、未だ會て女人の面を視ず、乃至未だ會て壁に倚り樹に倚らず等の奇行多し。(薄拘羅、薄拘盧、縛俱羅、薄羅、薄俱盧、薄拘盧、盧、盧、盧)

【三】摩訶拘絺羅(Mahakausalya)。大殊と翻す、膝骨龜大

なりしが故に。亦大肚持と翻す、この人肚中に三藏の義を持つが故に。舍利弗の叔父にして長爪梵志と言へる有名な外道なりしが、後に佛弟子と爲り、機辨優秀難答に巧みなを以て稱せらる。(摩訶俱瑟恥羅)

【四】難陀(Mahanda)。善歡喜、欣樂、喜等と翻す、初に道を慕ふに歡喜他に勝りしが故に命づく。淨飯王十萬の釋子を出家せしむるの一人なり。牧牛難陀とも稱す、會て牧牛の人なりしが故に。(音聲絶妙を以て稱せらる。(跋難陀))

【五】孫陀羅難陀(Sundarānanda)。孫陀羅は、この人の俗たりし時の妻の名なり。又孫陀利と云ふ。前の牧牛難陀に擇ぶが爲めに妻の名を標してこの人を孫陀羅難陀と稱す。

孫陀羅は艶と翻じ、難陀は喜

と翻す、艶の喜なり。亦好愛、端正、柔順、善意等の諸翻あり。摩訶波闍波提の子にして佛の從弟なり。身長一丈五尺二寸あり。諸根を調伏する制欲の力強きを以て稱せらる。(孫達羅難陀)

【六】富樓那彌多羅尼子(Purandara-maitrayaniputra)。滿願子、滿慈子、滿祝子、滿足慈者等の諸翻あり。富樓那は滿願、是れ父の名、彌多羅は慈、是れ母の名、尼は女人の通稱、即ち父母の名を取つて滿願慈子と云ふ。滿願子、滿慈子等と云ふは互に略するなり。或は云く、富樓那は名、彌多羅は母の名と。或は云く、富樓那は姓、彌多羅は母の名と。

或は云く、富樓那彌多羅皆母の名と。十大弟子の一人にして說法第一と稱せらる。(富樓那彌室那尼子、富那曼陀弗多

天子と與に俱なり。復

名月天子、普香天

子、寶光天子、四大

天王あり。其の眷屬萬

の天子と與に俱なり。

自在天子、大自在天

子、其の眷屬三萬の天

子と與に俱なり。

娑婆世界の主、

梵天王、尸棄大梵、

光明大梵等、其の眷

屬萬二千の天子と與に

俱なり。

八の龍王あり、

難陀龍王、跋難陀龍王、

羅、補刺拳梅咄利曳尼弗咄羅、
富羅拳迷低黎夜尼弗多囉

須菩提、空生、

善吉、善現、善實、善業等の

諸翻あり、この人生るる時庫

藏の衆物一切皆空虛なりしを

以て空生と云ふ。父母この異

相を占師に問ひしに吉なりと

答へしを以て善吉等と云ふ。

十大弟子の一人にして解空第

一と稱せらる。須菩提、敷淨

帝、修淨帝

阿難、歡喜、

慶喜等と翻す、佛成道して舉

闕皆欣慶するの日に生まれたる

が故に命づく、亦無染、無

阿難陀、阿難跋陀、阿難陀
跋陀羅、阿難陀娑伽羅、阿難
伽羅

羅跋羅、覆障、

翻す、阿修羅の手を以て日月

を障ふるを云ふ。六年母胎に

在ること、亦之に似たるを以

て命づく。或は覆障の日を以

て生まれたるが故に命づくと

云ふ。亦富生と翻す、富中に

生まれたるが故なり。母は耶

輪陀羅、即ち佛の長子なり。

佛得道の後亦從つて出家して

弟子と爲る。この人深く自ら

徳を藏して聲揚を願はず。十

大弟子の一人にして密行第一

者阿那律、賢者劫賓菴、賢者
牛呌、賢者離越、賢者辟利斯、
賢者薄拘盧、賢者拘締、賢者
難陀、賢者善慧、賢者滿願子、
賢者須菩提、賢者阿難、賢者
羅云とありて、全く今の本の
列名に同じく、二十一尊者な
り。尼波羅本は二十六人を列
せり。亦阿難をこの中に加へ
ずして後の學無學の學の尊者
として之を標せり。

學無學、有學の二なり。

無學、有學の二なり。

四果の中、須陀洹、斯陀含、阿
那含の三果を有學位と云ふ、
尚ほ學すべきもの有るが故な
り。阿羅漢を無學位と云ふ、
衆事已に成就して復た學すべ
きもの無きが故なり。

摩訶波闍波提、大勝生主、大生主、
生主、衆生等と翻す。本は梵
王の名なり。梵王能く一切衆

娑伽羅龍王、和修吉龍王、德叉迦龍王、阿那婆達多龍王、摩那斯龍王、優鉢羅龍王等なり。
各若干千の眷屬と與に俱なり。

四の緊那羅王あり、法緊那羅王、妙法緊那羅王、大法緊那羅王、持法緊那羅王なり。
各若干千の眷屬と與に俱なり。

四の乾闥婆王あり。樂乾闥婆王、樂音乾闥婆王、美乾闥婆王、

序品 第一

生を生むが故なり、之に祈りて生む、故に亦名と爲す。天臂城の釋長者の第八女にして淨飯王の妃と爲り、佛母摩耶昇天の後代つて姨母と爲る。亦僑曇彌と云ふ、是れその釋姓氏の稱なり。亦大愛造とも翻す、佛の姨母と爲つて愛育したるが故なり。亦大慧、梵天等の諸翻あり。出家の後亦善く道を愛し及び尼衆の主たり、故に義を轉じて本の名を襲用す。(摩訶鉢刺闍鉢底)
【三二】比丘尼、開經德行品の註を看るべし。
【三三】耶輸陀羅 (Yasodhara) 持名稱者、持稱、具稱、持譽、名聞、名聲等の諸翻あり、皆開譽あることの名稱なり。亦華色と翻す、その容姿を嘆むるなり。佛に瞿娑、耶輸陀羅、鹿野の三妃あり。又善星、優婆塞耶、羅睺羅の三子あり。

耶輸陀羅は即ち羅睺羅の母なり。(耶戍多羅、以戍多羅)
【三五】菩薩摩訶薩、開經德行品の註を看るべし。
【三六】阿耨多羅三藐三菩提、開經德行品の註を看るべし。
【三七】陀羅尼、開經德行品の註を看るべし。
【三八】業說辯才、四無礙辯の一なり、開經德行品の註を看るべし。
【三九】法輪、開經德行品轉輪聖王、轉法輪、兩處の註を看るべし。
【四〇】衆生、梵名薩埵 (Sattva) 又有情とも翻す。色受想行識の五衆陰に依つて生ずるが故に衆生と名づく。即ち一切の生類なり。
【四一】文殊師利 (Mañjuśrī) 妙德、妙吉祥、妙首、敬首、滿首等と翻す。正法華には薄首に作る。(曼殊尸利、曼殊室利)

【四二】觀世音、娑盧枳底濕伐羅 (Avalokiteśvara) の譯なり。娑盧枳底を觀と翻じ、濕伐羅を世音と翻す。又濕伐羅を自在と翻じて觀自在とも云ふ。亦觀世自在とも云ふ。亦觀世音自在とも云ふ。正法華には光世音に作る。(阿縛盧枳帝濕伐羅耶、阿縛盧枳多伊濕伐羅、阿縛盧枳低舍婆羅、婆婁吉低稅)
【四三】得大勢、摩訶婆他摩鉢鉢多 (Mahāsthāmapātra) の譯なり。正法華には大勢至に作る。
【四四】常精進 (Nivodhaka) 正法華今の名に同じ。
【四五】不休息 (Ankṣipātura) 正法華にはこれを不置遠に作る。
【四六】寶掌 (Ratnapāṇi) 正法華今の名に同じ。
【四七】藥王 (Bhaiṣajyāvajra) 正

七

美音乾闥婆王なり。各

若干百千の眷屬と與に

俱なり。

四の阿修羅王あり、

婆稚阿修羅王、佉

羅騫駄阿修羅王、毘摩

質多羅阿修羅王、羅睺

阿修羅王なり。各若

干百千の眷屬と與に俱

なり。

四の迦樓羅王あり、

大威徳迦樓羅王、

大身迦樓羅王、大滿迦

樓羅王、如意迦樓羅王

なり。各若干百千の

法華今の名に同じ。

【四八】勇施 (Pratimasyāra) 正法華には妙勇に作る。

【四九】寶月 (Ratnacandra) 正法華今の名に同じ。

【五〇】月光 (Cātaphala) 正法華には寶光に作る。

【五一】滿月 (Pūrṇācandra) 正法華には月滿に作る。

【五二】大力 (Mahāvīryam) 正法華には大度に作る。

【五三】無量力 (Anantaśakti) 正法華には超無量に作る。

【五四】越三界 (Tṛilokyaikāramiṇī) 正法華には越世に作る。

【五五】跋陀婆羅 (Bhadrapāla) 賢護、善守等と翻す。正法華には解縛に作る。白衣居士の菩薩にして王舍城中に住する人なり。

【五六】彌勒 (Maitreya) 正法華

には慈氏に作る、即ち其の翻名なり。賢劫千佛の第五弗沙佛以來常に慈定を修す、因つて是の名あり。又過去に國王と爲る、曇摩流支と名づく、善く國人を慈育す、爾來慈念常に已ますして是の名を稱す。南天竺の人、婆羅門種、佛弟子と爲りて菩薩の土地に居り、阿逸多と名づく、阿逸多は無勝の義なり、位行俱にこの菩薩に勝ざる者無きを以てなり。佛の補處として今兜率に在り。次にこの娑婆世界に出現して八相成道廣く衆生を化すべしと云ふ。(梅怛麗藥、梅怛麗耶、味怛履曳、彌帝隸、迷底履)

【五七】寶積 (Ratnakuta) 正法華には寶事に作る、毘耶離國の人なり。

【五八】導師 (Dāyaka) 尼波羅本には (Sūratthavā) 美商主と

あり。舍婆提 (Śākyā) 國の人なり。正法華には大導師に作る。

【五九】是の如き等の菩薩。已上八萬の菩薩の上首として十八菩薩の名を列す。正法華はこの他に寶印手、恩施、雄施、水天、帝天、妙意の六菩薩を列して合せて二十四菩薩なり。尼波羅本には二十五菩薩あり、その外白衣居士の菩薩十六人を列し、跋陀婆羅、寶積、導師の三菩薩はこの十六人の中に在り。

【六〇】釋提桓因 (Śakṛdevānam, Indra) 具々には釋迦提桓因陀羅にして、釋迦を能と翻じ、提桓を天と翻じ、因陀羅を帝と翻す、即ち能天帝なり、能く三十三天の帝王爲るが故に。故に亦能天主とも翻す。之を帝釋と云ふは梵漢並稱なり。又釋迦を刹帝利姓と爲し、

眷屬と與に俱なり。

(七) 阿耨提希の子

闍世王、若干百千の眷屬と與に俱なり。

各佛を禮して、

爾の時に 世尊、

四衆に圍繞せられ、

供養、恭敬、尊重、讚嘆せられて、

の爲めに、大乘經の無量義、教菩薩法、

佛所護念と名づくるを説きたまふ。

佛、此の經を説き已つて、

釋氏の天帝と解する説あり。

又之に反して釋迦は梵音譯迦羅なれば姓氏に非すと云へる説あり。

又百施主とも翻す、百度大施會を設けてこの天帝の勝果報を得たるが故に。

この天帝は須彌の頂上善見城に在り。地居天の主なり。

(釋迦提婆因陀羅・釋迦提婆因提、鑠迦羅因陀羅、除羯羅因陀羅)

【六】 名月天子等。名月天子を月天子と爲し、普香天子を明星天子と爲し、寶光天子を日天子と爲す。

言はゆる三光天子なり。然るに正法華には日天子、月天子、寶光天子、光羅天子の四天子と爲せり。

更に尼波羅本は左の如く五天子なり。

一、月天子 (Candra Devaputra)。

二、日天子 (Surya D.)。

三、普光天子 (Samanatagan)。

【七】 寶光天子 (Ratnaprabha D.)。

五、光羅天子 (Avalokasmita D.)。

【八】 四大天王。前の名月天子等の三光天子を帝釋の内臣と云ひ、この四大天王を帝釋の外臣と云ふ。

須彌の四方に在つて帝釋を衛護す。護世四天王と稱する是れなり。

その名左の如し。

東方持國天王、提頭賴吒 (Dhātārāstra Mahārājā)。

南方增長天王、毘留勒叉 (Vṛhadevaka M.)。

西方廣目天王、毘留博叉 (Vṛhadevaka M.)。

北方多聞天王、毘沙門 (Vāśdevana M.)。

【九】 自在天子、大自在天子。自在天子は化樂天の主、大自在天子は他化自在天の主、即ち

第六天主にして、摩醯首羅 (Mahेश्वर) 是れなり。

外道は之を仰いで萬物の創造主と爲せり。

【十】 娑婆世界、娑婆 (Saha) は堪忍と翻す、又略して忍と云ふ。

この世界の人は諸惡の中に處して之を忍受するが故なり。

言はゆる忍土是れなり。亦雜土とも云ふ、諸惡餘道と雜居するが故なり。

亦雜惡、雜會、雜會世界等とも云ふ、義上と同じ、亦能忍とも云ふ、聖者この諸惡の中に於て能く忍んで化度するが故なり。

この世界總じて三千大千の國土あり、今吾人の住する閻浮提はその中の一部なり。

(沙訶、索訶、娑訶樓陀)。

【十一】 梵天王 (Brahman Sahasrabhai)。

【十二】 尸棄大梵 (Śikhin B.)。

【十三】 光明大梵 (Jyotishkha B.)。

梵は清淨と翻じ、離欲と翻

跏趺坐し、無量義處

三昧に入つて、身心動

じたまはず。是の時に

天より 曼陀羅華、

摩訶曼陀羅華、曼殊沙

華、摩訶曼殊沙華を雨

らして 佛の上、及び

諸の 大衆に散じ、

普佛世界、六種

に震動す。爾の時に會

中の 比丘、比丘尼、

優婆塞、優婆夷、天、

龍、夜叉、乾闥婆、阿

修羅、迦樓羅、緊那羅、

摩睺羅伽、人、非人、

す。色界の諸天は欲界下地を

離れて清淨なるが故なり。尸

棄は頂髻、有髻、螺髻、火首

等と翻す、赤色の肉髻その頂

に在るを以てこの名あり。色

界の初禪天に在つて三界を領

してその主爲り。光明大梵は

二禪天なり。二禪天已上は言

語なし、故に三界の主尸棄は

初禪天に在るなり。

【六】 八の龍王。

難陀龍王 (Nandana Naga Raja)。

難陀は歡喜と翻す。

跋難陀龍王 (Upananda N.)。

跋難陀は善歡喜と翻す。難陀

龍王の弟なり。摩竭提國の人

この兄弟の二龍王を仰いで護

神と爲す。(優波難陀)

娑伽羅龍王 (Sagarana N.) 娑

伽羅は海と翻す、海國の名な

り。この龍王の居る處に由つ

て名づく。(娑羯羅、娑婆羅)

和修吉龍王 (Vasuki N.)。和

修吉は多頭、亦は九頭と翻す。

九頭の龍なり。亦實稱とも云

ふ。(旃蘇枳、嚩蘇枳)

德又迦龍王 (Dharmakara N.)。德

又迦は能害於所害、能損害者、

視毒等と翻す、この龍王顯る

時、人畜を視れば皆毒せられて

死するが故なり。また多舌

と翻す、多言の故なり。亦兩

舌と翻す、二舌有るが故なり。

阿那婆達多龍王 (Anavadata

N.)。阿那婆達多是無熱、無

惱、清涼等と翻す、池の名な

り。香山の南、大雪山の北に

在りて周り八百里と稱せら

る。この龍王常にその中の五

柱堂に居る、故に池を以て名

づく。(阿那婆答多、阿耨達多)

摩那斯龍王 (Manasyu N.)。摩

那斯は大身、大力等と翻す。

この龍王の身頗る長大にして

須彌を繞る七匝、力能く海水

10

亦大意、慈意、慈心等と翻す、

慈心深きが故に。亦意高とも

翻す、意は慈意、高は徳高な

り。(摩耶蘇婆)

優鉢羅龍王 (Upatala N.)。

優鉢羅は開經說法品に已に註

せり、即ち青黛色の蓮華なり。

この蓮華所生の池を優鉢羅池

と云ふ、この龍王其處に居る

を以て亦名づく。(溫鉢羅、烏

鉢羅、優鉢刺)

【六七】 四緊那羅、緊那羅の名義、

開經德行品の註を看るべし。

【六八】 四乾闥婆、乾闥婆の名義、

樹 (Dryna Kimnarāja)。

大法 (Mahadharma K.)

順法 (Suhuma K.)

持法 (Dharmata K.)

およもろもろの小王、(八) 轉輪

及び諸の小王、(八) 轉輪

聖王、是の諸の大衆、

未曾有なることを得、

歡喜し合掌して、一心

に佛を觀たてまつる。

爾の時に佛、眉間

白毫相の光を放つて、

東方萬八千の世界を照

らしたまふに、周徧せ

ざることを靡し。下は

(公) 阿鼻地獄に至り、

上は (七) 阿迦尼吒天に

至る。此の世界に於て、

盡く彼の土の六趣

の衆生を見、又彼の土

序品第

柔輓、和音、美輓、悅響の四の淨身天子とあり。尼波羅本は左の如し。

樂 (Mavohi) (Ganhalra) (Vandhiyaswara) (Manghikara) (T.)

美 (Muhira) (T.)

美音 (Madhusvara) (G.)

【六一】 四阿修羅 阿修羅の名義、開經德行品の註を看るべし。

婆惟は跋維迦とも云ふ、團圓と翻す。佉羅蹇駄は廣肩脾、惡險等と翻す。毘摩質多羅は種種疑、種種絲、種種嚴儀等と翻す。羅睺は障持と翻す。

正法華には最勝阿須倫、欲錦阿須倫、燕居阿須倫、吸氣阿須倫とあり。尼波羅本は左の如し。

婆林 (Pilin) (Arendra) (Karasakanda) (Kharakavinda) (A.)

毘摩質多黎 (Vemodhi A.)

羅睺 (Rahu A.)

【七〇】 四迦樓羅、迦樓羅の名義、開經德行品の註を看るべし。正法華には大身、大具足、得神足、不可動の四の金翅鳥王とあり。尼波羅本は左の如し。

大威德 (Mahatejas) (Arude) (T.)

大身 (Mahakarā) (Mahapurna) (Maharudhira) (T.)

大滿 (Mahapurna) (Maharudhira) (T.)

得大如意 (Maharudhira) (T.)

【七一】 韋提希 (Vidhi) 思惟、思勝等と翻じ、亦勝妙身とも翻す。略して韋提又は提希と呼べり。摩竭陀國頻婆沙羅王の夫人なり。(吠題哩非咀多)

【七二】 阿闍世王 (Ajatasattu) 即ち韋提希の子にして摩竭陀國の王なり。阿闍世は未生怨と翻す。韋提希懷胎してより忽ち頻婆沙羅に不快なり、即ち未だ生まれざるの前より父王に怨惡せしに由るが故に名

【七三】 世尊。梵語路迦那陀 (Lohakassapa) 如來十號の第十なり。一切世間に最尊なるが故に世尊と云ふ。

【七四】 四衆。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を四衆と云ふ。名義は開經德行品の註を看るべし。文句には更に發起、影響、當機、結縁の四衆と爲せり。發起は説法を請して發動

の現在の諸佛を見、及び諸佛の所説の經法を聞き、并に彼の諸の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の諸の修行し得道する者を見、復諸の菩薩摩訶薩の種種の因縁、種種の信解、種種の相貌あつて菩薩の道を行ずるを見る。復諸佛の一般涅槃したまふ者を見、復諸佛の般涅槃の後、佛舍利を以て、七寶の塔を起るを見る。

興起す、閉經の大莊嚴菩薩、乃至本經毒量品の彌勒菩薩の如し、影響とは古佛及び地上の大菩薩衆中に現應して佛の會座に在りて化を輔く、形の影あり聲の響あるが如く、作爲すること無くして益あるを云ふ。當機は正しく聞法得益すべき機類なり。結縁は未來に得益あるべき勝縁を結ぶなり。比丘にこの發起等の四衆あり、乃至優婆塞にもあり、合せて十六衆なり。

乘なり。
 【七六】 結跏趺坐。此れに半跏趺坐、全跏趺坐とあり。左足を以て右腿を壓して坐するは半跏趺坐なり。更に右足を以て左腿を壓するは全跏趺坐なり。今の結跏趺坐は全跏趺坐なり。是れ出家人の坐法にして諸佛皆盡く行用すべしなり。
 【七七】 無量義處。Amantihitā (Amantihita) 三昧の名なり。三昧の名義開經德行品の註を看るべし

其の色赤に似て黃、青に似て紫、綠に似て紅、雜妙の色なりと云ふ。但し天台は白華と爲せり、即ち曼陀羅摩訶曼陀羅は白華大白華なり。曼殊沙は柔輓華、如意華、赤團華等と翻す。嘉祥は其の色鮮白と云ひ、光宅は赤と云ふ。天台は光宅に同じ、即ち曼殊沙摩訶曼殊沙は赤華大赤華なり。正法華には意華、大意華、柔輓音華、大柔輓音華とあり。
 【七八】 漫陀羅、曼殊顏華

【七五】 大乘經。菩薩大人所乘の經なりと云へることなり、之れに七代の義あり、一に法大、二に心大、三に解大、四に淨大、五に壯嚴大、六に時大、七に具足大なり。今法華は三乘を開して皆菩薩大人と爲して之を説く、爾前の小乘に對する大乘と同じからず、言はゆる大大乘經にして絶對の大

【七六】 曼陀羅華等。
 曼陀羅華 (Mandurava)。
 摩訶曼陀羅華 (Mahā Mandurava)。
 曼殊沙迦 (Mañjuśāka)。
 摩訶曼殊沙迦 (Mahā Mañjuśāka)。
 これを四華と云ふ。曼陀羅は適意華、成意華、圓華、悅音華、雜色華、天妙華等と翻す。

【七九】 大衆。法華會座に列れる多數の聽衆を云ふ。即ち此の品の初に列せられたる聲聞、菩薩、及び二界八番の雜衆等を總じて大衆と云ふなり。二界とは欲界と色界と也。欲界の天衆に釋提桓因等あり、色界の天衆に尸棄大梵等あり。次に八大龍王は龍衆、次に緊那羅衆、次に乾闥婆衆、次に

爾の時に彌勒菩薩、

是の念を作さく、今者

世尊、神變の相を現じ

たまふ、何の因縁を以

てか而も此の瑞ある。

今佛世尊は、三昧に

入りたまへり。是の不

可思議なる現せる希有

の事を、當に以て誰に

か問ふべき。誰か能く

答へん者なる。復此の

念を作さく、是の文殊

師利法王子は、已に會

て過去の無量の諸佛に

親近し供養せり。必ず

阿修羅衆、次に迦樓羅衆、次に阿闍世等の人王民衆、已上二界八番なり。

【八〇】 普佛世界。三千大千世界と云ふに同じ。

【八一】 六種震動。動、起、涌、震、吼、擊の六種なり。動、起、涌は震動の形狀なり、震、

吼、擊は震動の音響なり。六種の中に亦各三あり、動、徧

動、等徧動、乃至擊、徧擊、等徧擊なり。合せて十八種動

と云ふなり。

【八二】 比丘等。四衆の名義は開經德行品の註を見るべし。

【八三】 天龍等。八部衆の名義は開經德行品の註を見るべし。

【八四】 轉輪聖王。開經德行品の註を見るべし。

【八五】 眉間白毫相 (Urdhva-loma-mukha-loma)。三十二相の一なり。佛の眉間に右旋の毫あり、其の色白し、

初生の時之を舒ふるに五尺、

苦行の時一丈四尺五寸、成道の時一丈五尺と云ふ。今この白毫より光明を放つなり。

【八六】 阿鼻地獄 (Avasthita-mahā-raya)。阿鼻はまた阿鼻旨、無間と翻す、この地獄の苦報間

斷無きを云ふ。此に五義ありて五無間と稱せり、一には趣

果無間、一切衆生罪業によりてこの獄に趣向し同く苦果を

受くるが故に。二には受苦無間、劍樹刀山等の諸苦休歇無

きが故に。三には時無間、劫時間歇無きが故に。四には命

無間、長劫の間一日一夜無量の生死に苦報の命相續して斷

えざるが故に。五には形無間、この獄縱横八萬由旬の間一人

も満ち多人も亦満ちて身形邊際無きが故に。又二無間とも

稱せり、一には身無間、五無間の第五に同じ、二には受無

間、五無間の第二に同じ、而

して他の三無間の義をこの中に攝するなり。地獄は梵語泥黎、又は那落迦、苦具と翻す。又非行處、非法行處、不可樂處、不可救濟處、閻冥處等とも翻す。而も地獄の翻最も通す。八寒八熱等の諸地獄あり、

阿鼻地獄はその最底最惡なり。五逆罪を犯し及び謗法の

人この獄に落つ。

【八七】 阿迦尼吒 (Akaniṣṭha)。質礙究竟と翻す、即ち色界十八天の最頂色究竟天なり。(阿迦尼瑟吒、阿迦尼師吒、阿迦尼沙託)。

【八八】 六趣。趣は向の義、趣向して生を受くるの處なるが故に云ふ。道と同じ、即ち地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道なり。

【八九】 般涅槃。開經說法品の註を見るべし。

【九〇】 舍利 (Śāli)。身、身骨、

應に此の希有の相を見るべし。我今當に問ふべし。

爾の時に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及び諸の天、龍、鬼神等、咸く此の念を作さく、「是の佛の光明神通の相を、今當に誰にか問ふべし。」

爾の時に彌勒菩薩、自ら疑を決せんと欲し、又四衆の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及び諸の天、龍、鬼神等の衆會の心を觀じて、文殊師利に問うて言はく、「何の因縁を以て此の瑞神通の相有つて、大光明を放ちたまふや。東方萬八千の土を照らしたまふに、悉く彼の佛の國界の莊嚴を見る。」

是に彌勒菩薩、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を以て問うて曰く、

體等と翻す。佛涅槃してその身舍利と爲る。此れに全身と碎身とあり、全身は佛の法身の舍利、碎身は應身の舍利なり、金剛剎際に在つて而も四天下に徧く彌布す。(實利、室利羅、設利羅)

【九】七寶塔。七寶を以て嚴飾せる塔を云ふ、略して寶塔とも云ふ。七寶に六種の異説あること法華新註の卷の一中十六紙の如し。又大藏法數卷三十には二種の異説を擧ぐ。然るに今の七寶は、後の偈文に準すれば左の如き七寶なるべきなり。

- 一、金 (蘇伐羅、スガアラナ、ルンヤ)
- 二、銀 (阿路巴、Appa)
- 三、珊瑚 (鉢羅婆、Pivva)
- 四、眞珠 (鉢摩羅加、Māraṅga)
- 五、如意 (摩尼、Mani)

六、磔磔 (牟婆洛揭拉婆、Mūḍḍakāra)

七、磔磔 (摩羅伽鉢、Amraṅga)

塔は梵語にして其に牟婆洛揭拉婆(波)と翻す、略して亦塔婆とも云ふ。高顯と翻じ、又方墳と翻す、身骨を安置する處なり。佛、菩薩、緣覺、羅漢、那含、斯陀含、須陀洹と及び輪王の八人は起塔することを得、但し佛は塔上の露盤八重已上、菩薩以下は各一重を減するの制なり。起塔の意は人に勝れたるを表するが爲め、他に教信を生ぜしむるが爲め、心を標して在らしむるが爲め、供養して福を得せしむるが爲め、恩を報せしむるが爲め、罪を減せしむるが爲めの六意に由る。今佛舍利の七寶塔なれば八重已上なりと

『文殊師利、導師何が故ぞ、眉間白毫の、

大光普く照らしたまふや。

曼陀羅、曼殊沙華を雨らして、梅檀の香

ばしき風、衆の心を悦可す。

是の因縁を以て、地皆嚴淨なり、而も此の

世界、六種に震動す。

時に四部の衆、咸く皆歡喜し、身意快然と

して、未曾有なることを得。

眉間の光明、東方、萬八千の土を照らした

まふに、皆金色の如し。

阿鼻獄より、上、有頂に至るまで、諸の

世界の中の、六道の衆生、

生死の所趣、善惡の業縁、受報の好醜、此

に於て悉く見る。

又諸佛、聖主師子、經典の、微妙第一な

知るべし。(兜波、蘇儵婆、數斗婆)

【九二】 三昧。開經德行品の註を看るべし。

【九三】 國界莊嚴。國界は國土と云ふに同じ。莊嚴は端莊嚴正と熟字す、修飾の浮華雜亂ならすして端正なるを云ふなり。佛身佛土の美觀の相なり。

【九四】 偈。開經德行品の註を看るべし。

【九五】 梅檀の香ばしき風。天華の香を梅檀の香に喩へて云ふ也。梅檀は、具さには梅檀那(Chandana) 與藥と翻す、香木なり。赤白紫等の諸種あり。その白梅檀は能く熱を治し、赤梅檀は能く風腫を去る、故に與藥と云ふなり。或は云く支那に此の香木無し、故に經論は皆梵音を存して翻ぜずと。(梅彈那)

【九六】 皆金色の如し。佛の眉間

白毫の光は、五色乃至七色なり。然るに大會は之れを金色なりと觀る、故に金色の如しと云ふ。金は堅固淨白を相とす、即ち發菩提心の義之れに當る、今大會正眞の發菩提心に住す、故に亦白毫の光をその心相の如くに金色なりと觀たるなり。

【九七】 有頂。有頂は無色界の最極天、非想非非想天の異名なり。總じて諸天の頂上に唯この天のみ有るが故に有頂と云ふなり。然るに上の長行には白毫の光明上阿迦尼吒天に至るとありて色界の最頂天に止まるを、今の偈無色界の最極天に至るとあるは甚だ相應せざるに似たり。或師之を會して云く、佛の白毫は實は有頂に至ること偈文の如し、但し長行に色界阿迦尼吒に至るとあるは大會の所見に従ふ。無

るを演説えんぜつしたまふに、

其の聲こゑ清淨みよまじやうじやうに、柔軟じゆうなんの音みこゑを出いだして、諸ちろちろ

の菩薩ぼさつを教をへたまふこと、無數むすぶ億萬おくまん、

梵音ぼんいん深妙じんめうにして、人ひとをして聞きかんと樂ねがはし

め、各世界おのおのせかいに於おいて、正法しやうほふを講説かうぜつして、

種種しゆじゆの因緣いんねんをもつてし、無量むりやうの喻たとへを以もつて、

佛法ぶつぽふを照明せうめいし、衆生しゆじやうを開悟かいごせしめたまふを

觀みる。

若し人苦ひとくに遭あうて、老病死らうびやうしを厭いとふには、爲ために

涅槃ねはんを説といて、諸苦しよくの際さいを盡つくさしめ、

若し人福ひとふく有りて、曾かつて佛ほとけを供養くやうし、勝法しょうほふを志し

求ぐするには、爲ために（兜えん）緣覺えんかくを説とき、

若し佛子ぶつし有りて、種種しゆじゆの行ぎやうを修しゆし、無上むじやう慧ゑ

を求もとむるには、爲ために淨道じやうだうを説ときたまふ。
文殊師利もんじゆしり、我此われこゝに住ぢゆうして、見聞けんもんすること斯かく

色界しきがいは身色みんしき無なきを以もつて白毫光はくごう

の照相しやうしやうを大會たいかい普ふく見みること能あたはざるが故ゆゑなり。而も偈文ぎふんに

大會たいかい亦また無な色界しきがいの照相しやうしやうを見みること

とを顯あしたるは佛ほとけの所照しよしやうを且かつ

らく大會たいかいの所見しよけんに托たくして之これを

言いふのみと。亦また或師あるしは慧琳音えいりんおん

義卷ぎくわん二十にじゆに據たりて阿迦尼吒あぢあにぢは

即すなはち非想ひしやう非非想ひひしやう天てんなれば長行ぢやうぎやう

偈頌ぎふ相違さうゐせずと云いへり。然る

に慧琳音義えいりんおんぎの説せつは信しんじ難がたし、

定ぢやうめて謬みやうならん。正法華しやうほふけには

上徹じやうてつ三十三天さんじさんてんとあり、此こゝれに

依よれば欲界よくがい六天りくたいの中の第二にじ切せつ

利天りてんに止とまるなり。尼波羅本にばらほん
には長行ぢやうぎやうも亦有頂またありたう (Blavatra)
にして阿迦尼吒あぢあにぢに非あらず。若し
然らば今の什本の長行ぢやうぎやう亦また當あたり
に有頂ありたうなるべき歟やと云いふに、
必ずしも然しかく訂正ていせいを試こむる
を要いせず。東方とうほう萬八千まんぱちせんを照てら
すに餘方よほう照てらさざるは莫なし、
色天しきてんの阿迦尼吒あぢあにぢを照てらすに無

色天しきてんの有頂ありたう亦また照てらさざるは莫なし、靡な不周通ふしうつうと云いへるは是こゝれ

なり。苟しかも義ぎを得えば文敢ぶんかんて塞さい

がらず、疑慮ぎよどば詮せん無なきのみ。

【九六】聖主せいしゆ師子しし。聖主せいしゆは佛ほとけの尊そん

稱しやう、師子ししは獸衆じゆしゆの王わうなるを以もつて

亦また佛ほとけを稱しやうするに其名そのなを以もつて

するなり。説法せつぽふ無畏むゐの義ぎを象しやう

る、故ゆゑに法師ほふし (Vaidisya)
と云いふ、釋尊しやくそんの如ごときは、別わかに

釋師子しやくしし (Sakya-simha) の稱しやうあ

り。

【九七】緣覺えんかく。開經かいけい説法せつぽふ品の註しゆを

看みるべし。

【一〇〇】恒沙こんさ。開經かいけい説法せつぽふ品の註しゆを

看みるべし。
【一〇〇】金銀きんぎん等ら。已下いげ磻磻ばんばんまで七
寶はうなり。此品こゝの前に註しゆするを
看みるべし。
【一〇〇】金剛きんかう諸珍しよぢん。已下いげ華鬘けわままで
八珍はちぢんなり。金剛きんかうは八珍はちぢんの一いつ、
諸珍しよぢんは八珍はちぢんの二に、故ゆゑに金剛きんかうの
諸珍しよぢんと讀よむは可べからず。金剛

の若く、千億の事に及べり。是の如く衆多なる、今當に畧して説くべし。

我彼の土の、恒沙の菩薩、種種の因縁をもつて、而も佛道を求むるを見る。

或は施を行するに、金銀珊瑚、眞珠摩尼、砮磈碼碯、

金剛諸珍、奴婢車乘、寶飾の輦輿を歡

喜して布施し、

佛道に回向して、是の乗の、三界第一にして、諸佛の歎めたまふ所な

るを得んと願ふあり。

或は菩薩の、駟馬の寶車の、欄楯華蓋あると、軒飾とを布施する

あり。

復菩薩の、身肉手足、及び妻子を施して、無上道を求むるを見る。

又菩薩の、頭目身體を、欣樂施與して、佛の智慧を求むるを見る。

文殊師利、我諸王の、佛所に往詣して、無上道を問ひたてまつり、

便ち樂土、宮殿臣妾を捨てて、鬚髮を剃除して、法服を被るを見る。

は梵語縛日羅 (Vajra) 金中の至剛なるものを云ふ。諸珍は帝青寶 (Turquoise)、大青寶 (Malachite) 等の諸の珍寶なり。

【一〇三】奴。男の使役人。八珍の三なり。

【一〇四】婢。女の使役人。八珍の四なり。

【一〇五】車。輪車の總名。八珍の五なり。

【一〇六】乘。乗るべき象馬の類。八珍の六なり。

【一〇七】寶飾の輦。輦は輓車、人前に在つて之を引く、天子の乗る車。八珍の七なり。

【一〇八】輿。並に寶飾なり、輪無くして人之を肩にす、亦貴人の乗。八珍の八なり。

【一〇九】軒飾。軒は車なり、物を以て飾れる車を軒飾と云ふ。

或は菩薩の、而も比丘と作つて、獨り閑靜に處し、樂つて經典を誦するを見る。

又菩薩の、勇猛精進し、深山に入つて、佛道を思惟するを見る。

又欲を離れ、常に空閑に處し、深く禪定を修して、五神通を得るを見る。

又菩薩の、禪に安じて合掌し、千萬の偈を以て、諸法の王を讚めたてまつるを見る。

復菩薩の、智深く志固く、能く諸佛に問ひたてまつり、聞いて悉く受持するを見る。

又佛子の、定慧具足して、無量の喩を以て、衆の爲めに法を講じ、

欣樂說法して、諸の菩薩を化し、魔の兵衆を破して、法鼓を撃つ

を見る。

又菩薩の、寂然 宴默にして、天龍恭敬すれども、爲れを以て喜び

とせざるを見る。

又菩薩の、林に處して光を放ち、地獄の苦を濟ひて、佛道に入らしむるを見る。

又佛子の、未だ嘗て睡眠せず、林中に經行して、佛道を勤求するを見る。

又戒を具して、威儀缺ること無く、淨きこと寶珠の如くにして、以て佛道を求むるを見る。

又佛子の、忍辱の力に住して、増上慢の人の、惡罵捶打するを、皆悉く能く忍んで、以て佛道

【一〇】五神通。天眼、天耳、他心、宿命、身如意、漏盡の六神通の中第六漏盡道を除き、その餘の五神通を得るを云ふなり。

【一一】魔の兵衆。魔の名義、譬喩品安樂行品の註を看るべし。

【一二】宴默。宴は安、默は禪、即ち禪に安することなり。

を求むるを見る。

又菩薩の、諸の戲笑、及び癡なる眷屬を離れ、智者に親近し、

一心に亂を除き、念を山林に攝めて、億千萬歳、以て佛道を求むるを見る。

或は菩薩の、(二三)肴膳飲食、百種の湯薬を、佛及び僧に施し、

名衣上服の、價直千萬なる、或は無價の衣を、佛及び僧に施し、

千萬億種の、栴檀の寶舎、衆の妙なる臥具を、佛及び僧に施し、

清淨の園林の、華果茂く盛んになると、流泉浴池とを、佛及び僧に施し、

是の如き等の施の、種種に微妙なるを、歡喜し厭くこと無くして、無

上道を求むるを見る。

或は菩薩の、寂滅の法を説いて、種種に、無數の衆生に教詔するあり。

或は菩薩の、諸法の性は、二相あること無し、猶ほ虚空の如しと觀するを見る。

又佛子の、心に所著無くして、此の妙慧を以て、無上道を求むるを見る。

又佛子の、心に所著無くして、此の妙慧を以て、無上道を求むるを見る。

又佛子の、諸の塔廟を造ること、無數恒沙にして、國界を嚴飾し、

寶塔高妙にして、五千由旬、縱廣正等にして、二千由旬、

【二三】肴膳。肴は穀以外の蔬菜
 豆菓の類を云ふ。膳は善き食
 物なり。

【二四】塔廟。塔は窣堵婆の略に
 して梵語なり、名義上の【九〇】
 の如し。廟は支提の譯語なれ
 ば塔及び廟なり。

【二五】由旬。化城喻品の註を看
 るべし。

一一の塔廟に、各千の幢幡あり、珠をもつて交露せる。幔あつて、

寶鈴和鳴せり。

諸の天龍神、人及び非人、香華伎樂を、常に以て供養するを見る。

文殊師利、諸の佛子等、舍利を供せんが爲めに、塔廟を嚴飾す、

國界自然に、殊特妙好なること、二の樹王の、其の華開敷せるが

如し。

佛一の光を放ちたまふに、我及び衆會、此の國界の、種種に殊妙なる

を見る。

諸佛は神力、智慧希有なり、一の淨光を放つて、無量の國を照らした

たまふ。

我等此れを見て、未曾有なることを得。佛子文殊、願はくは衆の疑を

決したまへ。

四衆欣仰して、仁及び我を瞻る。世尊何が故ぞ、斯の光明を放ちたま

ふや。

佛子時に答へて、疑を決して喜ばしめたまへ、何の饒益する所あつてか、斯の光明を演べたまふ。

佛道場に坐して、得たまへる所の妙法、爲めて此れを説かんと欲す、爲めて當に授記し

【二六】幢幡。幡(Dhvaja)は「はたほこ」、幢(Pataka)は「はたしなり」。

【二七】幔。幔(Vimantana)は幕の如きものなり。

【二八】天の樹王、初利天の波利樹(Grīhi)を云ふ。その樹の高さ百由旬、華香徧す。こと五十由旬、光照八十由旬と傳説せらる。

【二九】授記。記は記別と熟字す、朔は符契なり、記して謬まらざるを云ふ。佛弟子の爲めに未來の證果を説くを記別を授くると云ふなり。此經の中の二乗の未來成佛を説くが如き即ち是れなり。

たまふべしや。

諸の佛土の、衆寶嚴淨なるを示し、及び諸佛を見たてまつること、

此れ小げの縁に非ず。

文殊當に知るべし、四衆龍神、仁者を瞻察す、爲めて何等をか説きた

まはん。

爾の時に文殊師利、彌勒菩薩摩訶薩及び諸の居士に語るらく、『善男子、

我が 惟忖するが如きは、今佛世尊は、大法を説き、大法の雨を雨らし、

大法の螺を吹き、大法の鼓を撃ち、大法の義を演べんと欲するならん。諸

の善男子、我過去の諸佛に於て、曾て此の瑞を見たてまつりしに、斯の光

を放ち已つて、即ち大法を説きたまひき。是故に當に知るべし、今の佛の

光を現じたまふも亦復是の如く、衆生をして咸く一切世間難信の法を聞知

することを得せしめんと欲すが故に、斯の瑞を現じたまふならん。諸の善

男子、過去無量無邊不可思議 阿僧祇劫の如き、爾の時に佛有まます。日

月燈明 如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世閒解、無上士、調御

丈夫、天人師、佛、世尊と號づけたてまつる。正法を演説したまふに、

【一】惟忖。「おもひばかり」と訓す。

【二】阿僧祇劫。開經說法日品の註を看るべし。

【三】如來應供等。是れ如來の十號なり。

一、如來。梵名は多陀阿伽度 (タターガタ) (Tathagata)。眞如實際の道に乘じ來つて正覺を成するの義なり。

二、應供。梵名は阿羅訶 (アルハ) (Arhat)。應に供養を受くべきの義なり。

三、正徧知。梵名は三藐三佛陀 (サンミョクサンブツダ) (Sammasambuddha)。正等覺とも云ふ、眞正等遍の覺知と云へる義なり。

四、明行足。梵名は卑多遮羅那三般那 (ビダシャラナサンパナ) (Vidyasannipanna)。

明行具足の義なり。五、善逝。梵名は修伽陀 (シュガタ) (Sugata)。善く逝いて涅槃界に入

初善、中善、後善なり。其の義深遠に、其の語巧妙に、純一無雜にして、具足清白、梵行の相なり。聲聞を求むる者の爲には、應せる。四諦の法を説いて、生、老、病、死を度し、涅槃を究竟せしめ、辟支佛を求むる者の爲には、應せる。十二因縁の法を説き、諸の菩薩の爲には、應せる。六波羅密を説いて、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切種智を成せしめたまふ。次に復佛有まます、亦日月燈明と名づけたてまつる。次に復佛有まます、亦日月燈明と名づけたてまつる。是の如く二萬の佛、皆同く一字にして日月燈明と號づけたてまつる。又同く一姓にして、頗羅墮を姓としたまへり。彌勒、當に知るべし、初佛後佛、皆同く一字にして、日月燈明と名づけ、十號具足したまへり、説きたまふ所可の法、初中後善なり。其の最後の佛、未だ出家したまはざりし時八の王子あり、一をば有意と名づけ、二をば善意と名づけ、三をば無量意と名け、四をば實意と名づけ、五をば増意と名づけ、六をば除疑意と名づけ、七をば饗意と名づけ、八をば法意と名づく。是の八の王子、威德自在にして、各四天下を領す。是の諸の王子、父の出家して阿耨多羅三藐三菩提を得たまへりと聞いて、悉

るの義なり。

六、世間解。梵名は路伽億(Lokeśa)。能く一切世間を解

了察知するの義なり。

七、無上士。梵名は阿耨多羅(Anuttara)。唯一無上の士と

云へる義なり。

八、調御丈夫。梵名は富樓沙(Plurisyadama)ヤサー

曇貌波羅提(Purisyadama)ワラ、

一切の諸惡を調伏制

御するの義なり。

九、天人師。梵名は舍多提婆

摩菟咩喃(Dharmaputrasara)

天上及び人間一切衆生の師と

云へる義なり。

十、佛。具さには佛陀(Buddha)。

覺者の義なり。

【二三】世尊。是れ十號の外にして

如來の總號なり。一切世間

の中の最尊なるが故なり。十

號は經論の開合不同なり、今

且らく天台の説に依る。

【二四】四諦。譬喩品の註を見る

く王位を捨てて、亦隨ひ出家し、大乘の意を發し、常に梵行を修して、皆法師と爲れり。已に千萬の佛の所に於て、諸の善本を植ゑたり。是の時に日月燈明佛、大乘經の無量義、教菩薩法、佛所護念と名づくるを説きたまふ。是の經を説き已つて、即ち大衆の中に於て、結跏趺坐し、無量義處三昧に入つて、身心動じたまはず。是の時に、天より曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華を雨らして、佛の上、及び諸の大衆に散じ、普佛世界六種に震動す。爾の時に會中の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人、及び諸の小王、轉輪聖王等、是の諸の大衆、未曾有なることを得て、歡喜し合掌して、一心に佛を觀たてまつる。爾の時に如來、眉間白毫相の光を放つて、東方萬八千の佛土を照らしたまふに、周徧せざること靡し。今の見る所の是の諸の佛土の如し彌勒、當に知るべし、爾の時に會中に二十億の菩薩有つて、法を聽かんと樂欲す。是の諸の菩薩、此の光明の普く佛土を照らすを見て、未曾有なることを得て、此の光の所爲因縁を知らんと欲す。時に菩薩有り、名を妙光と曰ふ。八百の弟子有り、是の時に日月燈

べし。
【三五】十二因縁、化城喻品の註を看るべし。

【二六】六波羅密。分別功德品の註を看るべし。

【二七】一切種智。一切の種種を能く知り能く解するの智、即ち佛智を云ふ。亦中道智とも云ふなり。

【二八】頗羅墮。具さには頗羅墮跋闍 (Barandava) 滿語と翻す、又捷疾、利根、辯才等の諸翻あり。婆羅門十八姓の一なり。

【二九】妙法蓮華。教菩薩法、佛所護念。法華論に法華の十七名を列せり。今その三名なり。

【三〇】六十小劫。劫 (Kalpa) は長時と翻す。此れに小劫中劫大劫あり。人壽十歳より百年ごとに一歳を増して八萬四千歳に至るを一の増劫と爲し、八萬四千歳より又百年ごとに

明佛、三昧より起つて、妙光菩薩に因せて、大乘經の妙法蓮華・教菩薩法、佛所護念と名づくるを説きたまふ。六十小劫・座を起ちたまはず。時の會の聽者も亦一處に坐して、六十小劫身心動せず。佛の所説を聽くこと、食頃の如しと謂へり。是の時に衆中に、一人の若しは身若しは心に、懈倦を生ずるもの有ること無かりき。日月燈明佛、六十小劫に於て是の經を説き已つて、即ち梵・魔、沙門、婆羅門、及び天、人、阿修羅衆の中に於て、此の言を宣べたまはく、「如來今日の中夜に於て、當に無餘涅槃に入るべし。」時に菩薩有り、名を德藏と曰ふ。日月燈明佛、即ち其れに記を授け、諸の比丘に告げたまはく、「是の德藏菩薩次に當に作佛すべし、號をば淨身。多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀と曰はん。」佛、授記し已つて、便ち中夜に於て、無餘涅槃に入りたまふ。佛の滅度の後、妙光菩薩、妙法蓮華經を持つて、八十小劫を満てて人の爲めに演説す。日月燈明佛の八子、皆妙光を師とす。妙光教化して、其れをして阿耨多羅三藐三菩提に堅固ならしむ。是の諸の王子、無量百千萬億の佛を供養し已つて、皆佛道を成す。其の最後に成佛したまふ者、名を然燈と曰ふ。

一歳を減じて人壽十歳に至るを一の減劫と爲し、この一増一減を一小劫と云ふ。これ二十合せたるを一中劫と云ふ。この中劫に成、住、壞、空の四劫あり、合せて一大劫と云ふ。今その小劫の百年ごとの増減の數を六十合せたるなり。但し正法華、及び尼波羅本は六十中劫に作る。

【三】梵魔。梵は色界の主、魔は欲界の主なり。

【三】沙門。具さには沙門那 (Sramana)。勤息と翻す、善を勤め惡を息むるの義なり。又止息と翻するは惡を息むるの一邊に善を勤むるの意を含ませしめたるなり。出家人の通稱なり。(桑門、沙迦那)

【三】婆羅門。新譯には婆羅習磨拏 (Brahmana)。印度四姓の一なり。靜胤と翻す、梵天の苗胤なるが故なり。亦靜志

八百の弟子の中に一人有り、號を求名と曰ふ。利養に貪著せり。復衆經を讀誦すと雖も而も通利せず、忘失する所多し。故に求名と號づく。是の人亦諸の善根を種ゑたる因縁を以ての故に、無量百千萬億の諸佛に値ひたてまつることを得て、供養、恭敬、尊重、讚嘆せり。彌勒、當に知るべし、爾の時の妙光菩薩は、豈に異人ならんや、我が身是れなり。求名菩薩は、汝が身是れなり。今此の瑞を見るに、本と異なること無し。是故に惟忖するに、今日の如來も、當に大乘經の妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念と名づくるを説きたまふべし。』

爾の時に文殊師利、大衆の中に於て、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、
『我過去世の、無量無數劫を念ふに、佛人中尊有まじき、日月燈明と號づけたてまつる。
世尊法を演説して、無量の衆生、無數億の菩薩を度して、佛の智慧に入らしめたまふ。
佛未だ出家したまはざりし時の、所生の八王子、大聖の出家を見て、亦隨つて梵行を修す。
時に佛、大乘經の無量義と名づくるを説いて、諸の大衆の中に於て、爲に廣く分別したまふ。
佛此の經を説き已つて、即ち法座の上に於て、跏趺して三昧に坐したまふ、無量義處と名づく。
天より曼陀華を雨らし、天鼓自然に鳴り、諸の天龍鬼神、人中尊を供養したてまつる。』

と翻す、亦淨行、承習等と翻す、梵志とも云ふ。

【三三】多陀阿伽度等。上の註【三二】を看るべし。如來十號の中略して三號を挙げたるなり。

【三五】無餘涅槃。涅槃に有餘涅槃と無餘涅槃とあり。心滅して肉尙ほ在るは有餘なり。心肉俱に滅無に歸したるは無餘涅槃なり。

一切の諸の佛土、即時に大に震動す。佛眉間の光を放つて、諸の希有の事を現じたまふ、此の光東方、萬八千の佛土を照らして、一切衆生の、生死の業報處を示したまふ。

諸の佛土の、衆寶を以て莊嚴して、
照らしたまふに由る。
瑠璃 頗黎の色なるを見ること有り、斯れ佛の光の

及び諸の天人、龍神、夜叉衆、乾闥、緊那羅、各其の佛を供養するを
見る。

又諸の如來の、自然に佛道を成じて、身の色金山の如く、端嚴にし
て甚だ微妙なること、

淨瑠璃の中、内に眞金の像を現するが如くなるを見る。世尊大衆に在
まして、深法の義を敷演したまふ。

一一の諸の佛土、聲聞衆無數なり。佛の光の所照に因つて、悉く彼の大衆を見る。
或は諸の比丘の、山林の中に在つて、精進し淨戒を持つこと、猶ほ明珠を護るが如くなる有り。

又諸の菩薩の、施忍辱等を行すること、其の數恒沙の如くなるを見る、斯れ佛の光の照らした
まふに由る。

又諸の菩薩の、深く諸の禪定に入つて、身心寂かに動せずして、以て無上道を求むるを見る。

【二三】業報處、善惡の業因報果の處にして即ち六道を云ふ。
【二七】瑠璃。具さには毘瑠璃(Vajrasira)。青色寶と翻す、亦青玉とも云ふ、七寶の一なり。
【二八】頗黎。亦薩頗抵迦(サハアタイカ)と云ふ、水精、水玉等と翻す、七寶の一なり。(塞頗抵迦)

又諸の菩薩、法の寂滅の相を知つて、各其の國土に於て、法を説いて佛道を求むるを見る。爾の時に四部の衆、日月燈佛の、大神通力を現じたまふを見て、其の心皆歡喜して、各各に自ら相問はく、「是の事何の因縁ぞ。」

天人所奉の尊、適めて三昧従り起つて、妙光菩薩を讚めたまはく、「汝は爲れ世間の眼なり。一切に歸信せられて、能く法藏を奉持す。我が所説の法の如きは、唯汝のみ能く證知せり。」世尊既に讚嘆し、妙光をして歡喜せしめて、是の法華經を説きたまふに、六十小劫を滿てて、此の座を起ちたまはず。

説きたまふ所の上妙の法、是の妙光法師、悉く皆能く受持す。

佛、是の法華を説いて、衆をして歡喜せしめ已つて、尋いで即ち是の日に於て、天人衆に告げたまはく、

「諸法實相の義、已に汝等が爲めに説く、我今中夜に於て、當に涅槃に入るべし。

汝一心に精進し、當に放逸を離るべし、諸佛には甚だ値難し、億劫に時に一たび遇ひたてまつる。世尊の諸子等、佛涅槃に入りたまはんと聞きて、各各に悲惱を懷く、「佛滅したまふこと一何ぞ速かなる」とし。

聖主法の王、無量の衆を安慰したまはく、「我若し滅度しなん時、汝等憂怖すること勿れ。

是の徳藏菩薩は、無漏實相に於て、心已に通達することを得たり、其れ次に當に作佛すべし。號をば曰つて淨身と爲さん、亦無量の衆を度せん。」

佛此の夜滅度したまふこと、薪盡きて火の滅ゆるが如し。諸の舍利を分布して、無量の塔を起つ。比丘比丘尼、其の數恒沙の如し。倍す復精進を加へて、以て無上道を求む。

此の妙光法師、佛の法藏を奉持して、八十小劫の中に、廣く法華經を宣ぶ。

是の諸の八王子、妙光に開化せられて、無上道に堅固にして、當に無數の佛を見てまつるべし。

諸佛を供養し已つて、隨順して大道を行じ、相繼いで成佛することを得て、轉次に而も授記す。

最後の (三元) 天中天をば、號を然燈佛と曰ふ。諸仙の導師として、無量の衆を度脱したまふ。

是の妙光法師、時に一りの弟子有り、心常に懈怠を懷いて、名利に貪著せり。

名利を求むるに厭くこと無くして、多く (四〇) 族姓の家に遊び、習誦する所を棄捨し、廢忘して通利せず。

【三元】天中天、四種の天の中に於て最勝なるが故に天中の天と云ふ。四種の天とは、一に世間天、國王等は是れなり。二に報生天、六欲天乃至有頂天等の二十八天是れなり。三に淨天、聲聞緣覺是れなり。四に義天、菩薩是なり。

【四〇】族姓。貴族高姓なり。

是の因縁を以ての故に、之を號づけて求名と爲す。亦衆の善業を行じ、無數の佛を見たてまつることを得、

諸佛を供養し、隨順して大道を行じ、六波羅密を具して、今（四二）釋師子を見たてまつる。

其れ後に當に作佛すべし、號をば名づけて彌勒と曰はん。廣く諸の衆生を度すること、其の數量り有ること無けん。

彼の佛の滅度の後、懈怠なりし者は汝是れなり。妙光法師は、今則ち我が身是れなり。

我燈明佛を見たてまつりしに、本の光瑞此の如し。是を以て知りぬ今

の佛も、法華經を説かんと欲すならん。

今の相本の瑞の如し、是れ諸佛の方便なり。今の佛の光明を放ちたまふも、實相の義を助發せんとなり。

諸人今當に知るべし、合掌して一心に待ちたてまつれ。佛當に法雨を雨らして、道を求むる者に充足せしめたまふべし。

諸の三乘を求むる人、若し疑悔有らば、佛當に爲に除斷して、盡くして餘り有ること無からしめたまふべし。』

【四二】釋師子。上の註【九】を
看るべし。

方便品第二

爾の時に世尊、三昧従り安詳として起つて、舍利弗に告げたまはく、

〔一〕諸佛の智慧は、甚深無量なり。其の智慧の門は、難解難入なり。一切の

聲聞、辟支佛の知ること能はざる所なり。所以は何、佛會て百千萬億無

數の諸佛に親近して、盡くして諸佛の無量の道法を行じ、勇猛精進して、

名稱普く聞こえ、甚深未曾有の法を成就して、宜しきに隨つて説きたま

ふ所は、意趣解り難し。

舍利弗、吾成佛して従り以來、種種の因縁、種種の譬喩をもつて、廣く

言教を演べ、無數の方便をもつて、衆生を引導して、諸の著を離れしむ。

所以は何、如來は方便、知見波羅蜜、皆已に具足せり。舍利弗、如來の

知見は、廣大深遠なり。無量、無礙、力、無所畏、禪定、解脫、三昧あ

つて、深く無際に入り、一切未曾有の法を成就せり。

舍利弗、如來は能く種種に分別して巧みに諸法を説き、言辭柔軟にして、

衆の心を悦可す。舍利弗、要を取つて之を言はば、無量無邊未曾有の法を、

〔一〕(原文)、諸佛智慧甚深無量其智慧門難解難入。

〔二〕辟支佛。開經說法品の註を看るべし。

〔三〕方便。梵語は溫和拘舍羅

(Upaya Kṣāntika) 善巧方便と翻す、略して方便と云ふ、

亦妙方便と云ふ、佛智よく衆生に適ふの慧力なり。世の

法と云ふに同じ、眞實に導くが爲めに先づこの方便を以て

衆生の機根を誘ふ假權且立の一切教法門なり。

〔四〕知見波羅蜜。波羅蜜は度と翻す、到達の義なり。佛知

佛見は悉く一切事理の邊底に到達して深く無際に入る、故

に知見波羅蜜と云ふ、即ち般若波羅蜜なり。

佛ほとけ悉しつく成就じゆうじゆしたまへり。止やみなん、舍利弗しゃりほつ、復またた説とく須すべからず。所以ゆゑは
何いかん、佛ほとけの成就じゆうじゆしたまへる所ところは、第一だいいち希有きゆう難解なんげの法ほふなり。(云云たはたとげ ほとけ
唯佛ただほとけと佛ほとけとのみ、
乃いよし能よく諸法しよふほつ實相じつさうを究盡くくじんしたまへり。所謂いはゆる諸法しよふほつの、(七七によぜ さいう によぜしやう
體たい、如是によぜり力りき、如是によぜ作さ、如是によぜ因いん、如是によぜ緣えん、如是によぜ果くわ、如是によぜ報ほう、如是によぜ本末ほんまつ究竟くわうじゆう等
なり。二

爾そのの時に世尊せそん、重ねて此この義ぎを宣のたまべんと欲おほして、偈げを説といて言のたまはく、
(六六)世雄せゆうは量はかる可べからず、諸天しよてん及び世人せじん、一切衆生いっさいしゆうじやうの類るゐ、能よく佛ほとけを知
る者もの無し。

佛ほとけの力りき無む所畏しよの、解脱げだつ諸の三昧さんまい、及び佛ほとけの諸餘しよじよの法ほふは、能よく測量しきりやうする者
無むし。

本無數ほんむしゆの佛ほとけに従したがつて、具足ぐそくして諸道しよだうを行ぎやうじたまへり。甚深微妙じんじんみゆうの法ほふは、
見難みがたく了す可べきこと難がたし

無量億劫むりやうおくこくに於おいて、此この諸の道だうを行ぎやうじ已まつて、道場だうぢやうにして果くわを成じやうずること
を得えて、我已われすでに悉しつく知見ちけんせり。

是かくの如ごとき大果報だいくわほう、種種しゆじゆの性相しやうさうの義ぎ、我われ及び十方じつぱうの佛ほとけ、乃いよし能よく是この事じ

【五】無量無礙等。無量は慈悲喜捨の四無量心。無礙は義法、言辭、樂説の四無礙辯。力は是處非處、業報、定、根、欲、性、至處道、宿命、天眼、漏盡の十方。無所畏は一切智、漏盡、說障道、說盡苦道の四無所畏なり。

【六】(原文)。唯佛與佛、乃能究盡諸法實相、所謂諸法如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等。

【七】如是相等。之れを十如是と云ふ、諸法實相を示すに、この十如是を以てしたるなり。相は森羅萬法の形色なり。性はその不變不改の性分なり。體はその主質なり。力はその功能なり。作はその構造なり。因はその習因なり。緣はその因の助なり。果はその習果なり。

を知らしめせり。

是の法は示す可からず、言辭の相寂滅せり。諸餘の衆生類は、能く得解すること有ること無し。

諸の菩薩衆の、信力堅固なる者をば除く。諸佛の弟子衆の、曾て諸佛を供養し、

一切の漏已に盡くして、是の最後身に住せる、是の如き諸人等は、其の力堪へざる所なり。

假使世間に満てらん、皆舍利弗の如くにして、思ひを盡くして共に度量すとも、佛智を測ること能はじ。

正使十方に満てらん、皆舍利弗の如く、及び餘の諸の弟子、亦十方の刹に満てらん。

思を盡くして共に度量すとも、亦復知ること能はじ。辟支佛の利智にして、無漏の最後身なる、亦十方界に満ちて、其の數竹林の如くならん。斯等共に一心に、億無量劫に於て、佛の實智を思はんと欲すとも、能く少分をも知ること莫けん。

(10) 新發意の菩薩の、無數の佛を供養し、諸の義趣を了達して、又能善く法を説かんもの、稻麻竹

り。報はその報果なり。本末究竟は初の相を本と爲し終りの報を末と爲してその究竟歸趣する所なり。この十如是の義旨至つて深し、委しくは天台の文句を看るべきなり。

【八】世雄。世間の雄と云へる詞にして佛の異稱なり。

【九】最後身。漏已に盡くれば復三界の生なし、故に最後身と云ふ。今この文は辟支の第四果阿羅漢の身を指して云ふなり。

【一〇】新發意。新に菩提の意を發して菩薩と爲りたる者を云ふ。初心十信の菩薩なり。

輩の如くにして、十方の刹に充滿せん、

一心に妙智を以て、恒河沙劫に於て、咸く皆共に思量すとも、佛智を知ること能はじ。

(一) 不退の諸の菩薩、其の數恒沙の如くにして、一心に共に思求すとも、亦復知ること能はじ。

又舍利弗に告ぐ、「無漏不思議の、甚深微妙の法を、我今已に具へ得たり。

唯我是の相を知れり、十方の佛も亦然り。舍利弗當に知るべし、諸佛は語異なること無し。

佛の所説の法に於て、當に大信力を生ずべし。(三) 世尊は法久うして

後、要す當に眞實を説きたまふべし。」

諸の聲聞衆、及び緣覺衆を求むるものに告ぐ、

「我苦縛を脱し、涅槃を速得せしめたることは、佛方便力を以て、示す

に三乗の教を以てす。

衆生の處處の著、之を引て出づることを得せしめんとなり。」

爾の時に大衆の中に、諸の聲聞、漏盡の阿羅漢、阿若憍陳如等の千二百人、及び聲聞、辟支佛の心

を發せる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷あり。各是の念を作さく、「今者世尊、何が故ぞ慇懃に方便

を稱嘆して、而も是の言を作したまふや。佛の得たまへる所の法は、甚深にして解り難く、言説した

まふ所有るは、意趣知り難し。一切の聲聞、辟支佛の及ぶこと能はざる所なり。佛、一解脱の義を説

【二】 不退。正しくは七住已去の菩薩なれども初住より皆通じて不退の菩薩と云はるるなり。
【三】 (原文)。世尊法久後要當説眞實。

きたまひしかば、我等も亦此の法を得て、涅槃に到れり。而るに今是の義の所趣を知らず。」

爾の時に舍利弗、四衆の心の疑を知り、自も亦未だ了らずして、佛に白して言さく、『世尊、何の因、何の縁あつてか、慇懃に諸佛第一の方便甚深微妙難解の法を稱嘆したまふや。我昔自り來、未だ曾て佛に従つて是の如きの説を聞きたてまつらず。今者四衆、咸く皆疑有り、惟願くは世尊、斯の事を敷演したまへ。世尊何が故ぞ慇懃に甚深微妙難解の法を稱嘆したまふや。』

爾の時に舍利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して偈を説いて言さく、
(三) 『慧日大聖尊、久しくあつて乃し是の法を説きたまふ。』
(四) 『兩足尊、福(戒德)・慧(定智)二種の莊嚴満足して世間の尊なるを云ふ、亦佛の異稱なり。』

自ら是の如き、力無畏三昧、禪定解脱等の、不可思議の法を得たりと説きたまふ。

道場所得の法は、能く問を發す者無し。我が意測る可きこと難し。亦能く問ふ者無し。

問ふこと無けれども而も自ら説いて、所行の道を稱嘆したまふ。智慧甚だ微妙にして、諸佛の得たまへる所なり。

無漏の諸の羅漢、及び涅槃を求むる者、今皆疑網に墮しぬ。佛何が故ぞ是を説きたまふや。

其の縁覺を求むる者、比丘、比丘尼、諸の天龍鬼神、及び乾闥婆等、

相視て猶豫を懷き、(三) 兩足尊を瞻仰す。是の事云何なる爲き、願はくは佛爲に解説したまへ。

諸の聲聞衆に於て、佛我を第一なりと説きたまふ。我今自ら智に於て、疑惑して了ること能はず、爲めて是れ究竟の法なりや、爲めて是れ所行の道なりや。

佛口所生の子、合掌瞻仰して待ちたてまつる。願はくは微妙の音を出だして、時に爲に實の如く説きたまへ。

諸の天龍神等、其の數恒沙の如し。佛を求むる諸の菩薩、大數八萬有り。又諸の萬億國の、轉輪聖王の至れる。合掌し敬心を以て、具足の道を聞きたてまつらんと欲す。』

爾の時に佛、舍利弗に告げたまはく、『止みなん、止みなん、復説く須からず。若し是の事を説かば、一切世間の諸天及び人、皆當に驚疑すべし。』

舍利弗、重ねて佛に白して言さく、『世尊、惟願はくは之を説きたまへ。惟願はくは之を説きたまへ。所以は何、是の會の無數百千萬億阿僧祇の衆生は、曾て諸佛を見たてまつり、諸根猛利にして、智慧明了なり。佛の所説を聞きたてまつらば、則ち能く敬信せん。』

爾の時に舍利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、

『法王無上尊、惟説きたまへ願はくは慮ひしたまふこと勿れ。是の會の無量の衆は、能く敬信すべき者有り。』

【五】佛口所生。衆生發得するところの法身は本是れ佛の説を聞きて信行するに由る、故に佛口所生の子と云ふなり。

佛、復『止みなん、舍利弗、若し是の事を説かば、一切世間の天、人、阿修羅は、皆當に驚疑すべし。』
増上慢の比丘は、將に 大坑に墜つべし。』

爾の時に世尊、重ねて偈を説いて言はく、

『止みなん止みなん説く須からず。我が法は妙にして思ひ難し。諸の増上慢の者は、聞いて必ず敬信せし。』

爾の時に舍利弗、重ねて佛に白して言さく、『世尊、惟願はくは之を説き

たまへ。惟願はくは之を説きたまへ。今此の會中の我が如き等比百千萬億

なるは、世世に已に曾て佛に従つて化を受けたり。此の如き人等は、必ず

能く敬信して、長夜安穩にして、饒益する所多からん。』

爾の時に舍利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、

『無上兩足尊、願くは第一の法を説きたまへ。我は爲れ佛の 長子なり。惟分別して説くこと

を垂れたまへ。』

是の會の無量の衆は、能く此の法を敬信せん。佛已に曾て世世に、是の如き等を教化したまへり。

皆一心に合掌して、佛語を聽受せんと欲す。我等千二百、及び餘の佛を求むる者あり。

願はくは此の衆の爲めの故に、惟分別し説くことを垂れたまへ。是れ等此の法を聞きたてまつら

【一六】 大坑。無間地獄をいふなり。
【一七】 長子。舍利弗は智慧第一にして十大弟子及び諸の羅漢の長老なるが故に佛の長子と云ふなり。

ば、則ち大歡喜を生ぜん。』

爾の時に世尊、舍利弗に告げたまはく、『汝已に慇懃に三たび請しつ、豈に説かざることを得んや。汝今諦に聴き、善く之を思念せよ。吾當に汝が爲に、分別し解説すべし。』

此の語を説きたまふ時、會中に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、五千人等有り、即ち座從り起つて、佛を禮して退きぬ。所以は何。此の輩は罪根深重に、及び増上慢にして、

未だ得ざるを得たりと謂ひ、未だ證せざるを證せりと謂へり。此の如き失有り、是を以て住せず。世尊默然として制止したまはず。

爾の時に佛、舍利弗に告げたまはく、『我が今此の衆は、復枝葉無く、純ら貞實のみ有り。舍利弗、是の如き増上慢の人は、退くも亦佳し。汝今善く聴け、當に汝が爲に説くべし。』

舍利弗の言さく、『唯然、世尊、願樂よくは聞きたてまつらんと欲す。』

佛、舍利弗に告げたまはく、『是の如き妙法は、諸佛如來、時に乃し之を説きたまふ。優曇鉢華の時に一たび現するが如き耳み。舍利弗、汝等當に信すべし、佛の所説は、言虚妄ならず。舍利弗、諸佛の隨宜の説法は、意趣解り難し。所以は何。我無數の方便、種種の因縁、譬喩、言辭を以て、諸法を演説す。是の法は思量分別の能く解る所に非ず。唯諸佛のみ有して、乃し能く之を知らしめせり。』

【二】優曇鉢華。亦優曇鉢華 (Udumbara) と書けり、略して優曇華と云ふ。瑞應華、靈瑞華等と翻じ、亦求願華とも翻す。此の樹の葉は梨に似、果は拳の如く、味甘し、花無くして果を結ぶ。若し靈瑞あれば花開く、然れども甚だ希有なりと云ふ。今その希有な佛の説法に喩ふるなり。

所以は何。諸佛世尊は、唯一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふ。舍利弗、云何なるをか諸佛

世尊は、(一九)ただいだいだいじ 唯一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふと名づくる。諸

佛世尊は、衆生をして (二〇)佛知見を開かしめ、清淨なることを得せしめんと欲するが故に、世に出現したまふ。衆生に (二一)佛知見を示さんと欲する

が故に、世に出現したまふ。衆生をして (二二)佛知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したまふ。衆生をして (二三)佛知見の道に入らしめんと欲

するが故に、世に出現したまふ。舍利弗、是れを諸佛は一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふと爲づく。佛、舍利弗に告げたまはく、諸佛如

來は、但菩薩を教化したまふ。諸の所作有るは、常に一事の爲なり。唯佛の知見を以て、衆生に示悟したまはんとなり。舍利弗、如來は但 (二四)一佛

乘を以ての故に、衆生の爲に法を説きたまふ。餘乘の、若しは二、若しは三有ること無し。舍利弗、一切十方の諸佛の法も亦是の如し。舍利弗、過

去の諸佛も、無量無數の方便、種種の因縁、譬喩、言辞を以て、衆生の爲に、諸法を演説したまふ。是の法も皆一佛乘の爲の故なり。是の諸の衆生

の、諸佛に従ひたてまつりて、法を聞きしも、究竟して皆一切種智を得たり。舍利弗、未來の諸佛の、

【一九】(原文)。唯以一大事因縁故、出現於世。

【二〇】(原文)。開佛知見。已下を開示悟入の四佛知見と云ふ、この四佛知見は是れ諸佛世尊出世の一大事因縁也、法華經を諸佛の本懷と云ふは即ち之れが爲めなり、法華已前の諸經には未だ曾てこの一佛乘の四佛知見を説かざるなり。

【二一】(原文)。示佛知見。

【二二】(原文)。悟佛知見。

【二三】(原文)。入佛知見。

【二四】一佛乘。佛乘の中に自ら因乘(Pada Mahayana)、果乘(Ekayana)の二あり、今は果乘の唯一佛乘なり。

舍利弗、未來の諸佛の、

當に世に出でたまふべきも、亦無量無數の方便、種種の因縁、譬喩、言辭を以て、衆生の爲に、諸法を演説したまはん。是の法も皆一佛乘の爲の故なり。是の諸の衆生の、佛に從ひたてまつつて、法を聞かんも、究竟して皆一切種智を得べし。舍利弗、現在十方の無量百千萬億の佛土の中の諸佛世尊の、衆生を饒益し安樂ならしめたまふ所多き、是の諸佛も亦無量無數の方便、種種の因縁、譬喩、言辭を以て、衆生の爲に諸法を演説したまふ。是の法も皆一佛乘の爲の故なり。是の諸の衆生の、佛に從ひたてまつつて、法を聞けるも、究竟して皆一切種智を得。舍利弗、是の諸佛は、但菩薩を教化したまふ。佛の知見を以て衆生に示さんと欲するが故に、佛の知見を以て衆生を悟らしめんと欲するが故に、衆生をして佛の知見に入らしめんと欲するが故なり。舍利弗、我も今亦復是の如し。諸の衆生の、種種の欲、深心の所著有ることを知つて、其の本性に隨つて、種種の因縁、譬喩、言辭、方便力を以ての故に、而も爲に法を説く。舍利弗、此の如きは、皆一佛乘の一切種智を得せしめんが爲の故なり。舍利弗、十方世界の中には、尚ほ二乘無し。何に況や三有らんや。舍利弗、諸佛は、(二五)五濁の惡世に出でたまふ。所謂劫濁、煩惱

方便品第二

【二五】五濁。

劫濁 (Kalpa-kāshaya)。滅劫の中、人壽三十歳に至る時饑饉災起り、二十歳の時疾疫災起り、十歳の時刀兵災起る、之れが劫濁と云ふ。又一説には劫濁は唯後の四濁起る時を通じ指して云ふと。

煩惱濁 (Kleśha-kāshaya)。衆生愛著に縛せられ、聞諍詬曲慳貪虛誑にして、正法に叛き邪法を受くるを云ふ。

衆生濁 (Sattva-kāshaya)。父母尊長を恭敬せず、善功德を修せざるを云ふ。

見濁 (Dṛṣṭi-kāshaya)。邪見熾盛にして、正法を毀傷するを云ふ。

命濁 (Āyus-kāshaya)。人間の壽數短促なるを云ふ。

濁、衆生濁、見濁、命濁なり。是の如し、舍利弗、劫の濁亂の時は、衆生垢重く、慳貪、嫉妬にして、諸の不善根を成就するが故に、諸佛、方便力を以て、一佛乘に於て、分別して三と説きたまふ。舍利弗、若し我が弟子、自ら阿羅漢、辟支佛なりと謂はん者、諸佛如來の但菩薩を教化したまふ事を聞かず知らずんば、此れ佛弟子に非ず、阿羅漢に非ず、辟支佛に非ず。又舍利弗、是の諸の比丘、比丘尼、自ら已に阿羅漢を得たり、是れ最後身なり、究竟の涅槃なりと謂うて、便ち復阿耨多羅三藐三菩提を志求せざらん。當に知るべし、此の輩は皆是れ増上慢の人なり。所以は何。若し比丘の實の阿羅漢を得たる有つて、若し此の法を信せずといはば、是の處り有ること無けん。佛の滅度の後、現前に佛無からんをば除く。所以は何。佛の滅度の後に、是の如き等の經を受持し讀誦し、其の義を解せん者、是の人得難ければなり。若し餘佛に遇はば、此の法の中に於て便ち決了することを得ん。舍利弗、汝等當に一心に信解して佛語を受持すべし。諸佛如來は言虚妄無し。餘乘有ること無く、唯一佛乘のみなり。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『比丘比丘尼の、増上慢を懷くこと有る、優婆塞の我慢なる、優婆夷の不信なる、

是の如き四衆等、其の數五千有り、自ら其の過を見ず、戒に於て缺漏あり、

其の瑕疵を護り惜む、是の小智は已に出でぬ。衆中の糟糠なり、佛の威徳の故に去りぬ。

是の人は福德尠くして、是の法を受くるに堪へず。此の衆は枝葉無し、舍利弗善く聽け、諸佛の所得の法は、無量の方便力をもつて、而も衆生の爲めに説きたまふ。

衆生の心の所念、種種の所行の道、若干の諸の欲性、先世の善惡の業、佛悉く是れを知ろしめし已つて、諸の縁、譬喩、言辭、方便力を以て、一切をして歡喜せしめたまふ。

或は 修多羅 伽陀及び本事、本生未曾有を説き、亦因縁、

譬喩并に祇夜、優婆提舍經を説きたまふ。鈍根にして小法を樂ひ、生死に貪著し、

諸の無量の佛に於て、深妙の道を行せず、衆吉に惱亂せらるるには、是れが爲に涅槃を説きたまふ。

我是の方便を設けて 佛慧に入ることを得せしむ。未だ曾て汝等、當に佛道を成ずることを得べしと説かず。

未だ曾て説かざる所以は、説時未だ至らざる故なり。今正しく是れ其の時なり 決定して大乘を説く。

惟諸の眞實のみ有り。

【二六】修多羅。この下伽陀等は

十二部經の中の九部を標す、二部經は左の如し。

一、修多羅 (Sūtra)。契經と翻す。理に契ひ、機に契ふが故に。亦經と翻す、法の本なるが故に。佛直ちに法相を説く之を修多羅。云ふなり。

(修妬路、修單羅、修單蘭多) 二、祇夜 (Geyā)。重頌なり。

(偈) 三、和伽羅那 (Vākyā-karāṇa) 授記と翻す。授記の義は、序品の計を看るべし。(弊羯羅拏) 四、伽陀 (Gāthā)。偈にして重頌ならざるものなり。之を孤起偈と云ふ。

五、優陀那 (Udanā)。無問自説と翻す。問を待たずして佛自ら讚嘆して説くなり。

我が此の(二六)九部の法は、衆生に隨順して説く。大乘に入るに爲れ本なり、故を以て是の經を説く。

佛子の心淨く、柔軟に亦利根にして、無量の諸佛の所にして、深妙の道を行する有り。此の諸の佛子の爲に、是の大乗經を説く。

我是の如き人、來世に佛道を成せんと記す。深心に佛を念じ、淨戒を修持するを以ての故に。

此れ等佛を得べしと聞いて、大喜身に充徧す。佛彼の心行を知れり。故に爲に大乘を説く。

聲聞若は菩薩、我が所説の法を聞くこと、乃至一偈に於てもせば、皆成佛せんこと疑ひ無し。

(二七)十方佛土の中には、唯一乗の法のみ有り。二も無く亦三も無し。佛の方便の説を除く。

但假りの名字を以て、衆生を引導したまふ。佛の智慧を説かんが故に、諸佛世に出でたまふ。

唯此の一事のみ實なり、餘の二は則ち眞に非ず。終に小乗を以て、衆

六、尼陀那(Nidāna)、因縁と翻す、本起の因縁を説くを云ふなり。

七、阿波陀那(Āpātana)、譬喩と翻す、法華の中の藥草喩等の如きを云ふなり。

八、伊帝目多伽(Indriyaka)、本事と翻す、本の因縁を説くを云ふなり。また如是語とも翻す。

九、闍陀伽(Jāyataka)、本生と翻す、宿世の本生を説くを云ふなり。

十、毘佛略(Vipula)、方廣と翻す、大乘を云ふなり。

十一、阿浮達磨(Abhitarṃha)、未曾有と翻す、種種の神力を現じて説くを云ふなり。

十二、優婆提舍(Upariśaya)、論と翻す、問答して義を論決するを云ふなり。

【三】(原文) 所以未曾説

生を濟度したまはず。

佛は自ら大乘に住したまへり、其の所得の法の如きは、定慧の力莊嚴せり、此れを以て衆生を度したまふ。

自ら無上道、大乘平等の法を證して、若し小乘を以て化すること、乃至一人に於てもせば、

我則ち慳貪に墮せん、此の事は爲めて不可なり。若し人佛に信歸すれば、如來欺誑したまはず。

亦貪嫉の意無し、諸法の中の惡を斷じたまへり。故に佛は十方に於て、而も獨り畏るる所無し。

我相を以て身を嚴り、光明世間を照らす、無量の衆に尊まれて、爲に實相の印を説く。

舍利弗當に知るべし、我本誓願を立てて、一切の衆をして、我が如く等しくして異なること無からしめんと欲しき。

我が昔の所願の如き、今者已に満足しぬ。一切衆生を化して、皆佛道に入らしむ。若し我衆生に遇へば、盡く教ふるに佛道を以てす。無智の者は錯亂し、迷惑して教を受けず。

時未至故、今正是其時、決定說大乘。

【二六】九部。小乘は十二部經の中、毘佛略、優陀那、和伽羅那の三部無くして唯九部なるなり。然るに大乘十二部小乘九部と云へるは大判なり、細に之を言へば小乘にも亦當分の三部あるなり。

【二七】(原文)。十方佛土中、唯有一乘法、無二亦無三、除佛方便說、但以假名字、引導於衆生、說佛智慧故、諸佛出於世、唯此一事實、餘二則非眞。

【二八】(原文)。欲令一切衆、如我等無異、如我昔所願、今者已滿足、化一切衆生、皆令入佛道。

我知んぬ此の衆生は、未だ曾て善本を修せず。堅く五欲に著して、癡愛の故に惱みを生ず。諸欲の因縁を以て、三惡道に墜墮し、六趣の中に輪廻して、備さに諸の苦毒を受く。受胎の微形、世世に常に增長し、薄徳少福の人にして、衆苦に逼迫せ所る。

邪見の 稠林、若しは有若しは無等に入り、此の諸見に依止して、

三六十二を具足す。

深く虚妄の法に著して、堅く受けて捨つ可からず。我慢にして自ら矜高し、詭曲にして心不實なり。

千萬億劫に於て、佛の名字を聞かず、亦正法を聞かず、是の如き人は度し難し。

是故に舍利弗、我爲に方便を設けて、諸の盡苦の道を説き、示すに涅槃を以てす。

我涅槃を説くと雖も、是れ亦眞の滅に非ず。諸法は本従り來、常に

自ら寂滅の相なり。

佛子道を行じ已つて、來世に作佛することを得ん。我方便力有つて、三乘の法を開示す。一切の諸の世尊も、皆一乘の道を説きたまふ。今此の諸の大衆、皆應に疑惑を除くべし。諸佛は

【三】 五欲。色、聲、香、味、觸の五境の欲を云ふ。

【三】 稠林。邪見の密茂なるを形容したるなり。

【三】 六十二。外道の計我の如き四句あり、四陰にも亦四句ありて二十と爲る。之を三世に約して六十と爲し、更に根本の有(常)無(斷)二見を加へて六十二見と云ふ。

【四】 (原文)。諸法従來、常自寂滅相。

語異なること無し、唯一にして二乘無し。

過去無數劫の、無量の滅度の佛、百千萬億種にして、其の數量るべからず。

是の如き諸の世尊、種種の縁、譬喩、無數の方便力をもつて、諸法の相を演説したまひき。

是の諸の世尊等も、皆一乘の法を説いて、無量の衆生を化して、佛道に入らしめたまひき。

又諸の大聖主、一切世間の、天人群生類の、深心の所欲を知ろしめして、

更に異の方便を以て、第一義を助顯したまふ。若し衆生類有つて、諸の過去の佛に値ひたてまつ

りて、

若しは法を聞いて布施し、或は持戒忍辱、精進禪智等、種種に福德を

修せし、

是の如き諸人等、皆已に佛道を成じき。

諸佛滅度の後、若し人善軟の心ありし、是の如き諸の衆生、皆已に佛道を成じき。

諸佛滅度し已つて、舍利を供養する者、萬億種の塔を起て、金銀及び頗梨、

砮磔碼磔、玫瑰瑠璃珠をもつて、清淨に廣く嚴飾し、諸の塔を莊校し、

或は石廟を起て、栴檀及び沈水、木檜并に餘の材、甄瓦泥土等をもつてせる有り、

若しは曠野の中に於て、土を積んで佛廟を成し、乃至童子の戯れに、沙を聚めて佛塔と爲せる、

【三五】 玫瑰。瑠玕なり。
【三六】 沈水、木檜。並に香木の
名なり。

是の如き諸人等、皆已に佛道を成じき。

若し人佛の爲の故に、諸の形像を建立し、刻雕して衆相を成せる、皆已に佛道を成じき。

或は七寶を以て成し、鍮鉏赤白銅、白鐵及び鉛錫、鐵木及與び泥、

或は膠漆布を以て、嚴飾して佛像を作せる、是の如き諸人等、皆已に佛道を成じき。

彩畫して佛像の、百福莊嚴の相を作すこと、自らも作し若しは人をし

てもせる、皆已に佛道を成じき。

乃至童子の戯れに、若しは草木及び筆、或は指の爪甲を以て、畫いて

佛像を作せる。

是の如き諸人等、漸漸に功德を積み、大悲心を具足して、皆已に佛道

を成じき。

但諸の菩薩を化し、無量の衆を度脱しき。

若し八塔廟、寶像及び畫像に於て、華香幡蓋を以て、敬心にして供養し、

若しは人をして樂を作さしめ、鼓を撃ち、角只を吹き、簫笛琴、篳篥、琵琶、鐃銅鈸、

是の如き衆の妙音、盡く持て以て供養し、或は歡喜の心を以て、歌唄して佛徳を頌し、

乃至一小音をもつてせし、皆已に佛道を成じき。

【三】角只。角は五音の一の名なり、之を將つて樂器の名と爲すなり。

【三】篳篥。坎侯、高濟等の異稱あり。又その音鄭聲にして亡國の音なるを以て空國侯と云ふ。篳篥はこの空侯に竹を冠したるなり。

若し人散亂の心に、乃至一華を以て、畫像に供養せ、漸く無數の佛を見たてまつりき。
或は人有つて禮拜し、或は復但合掌し、乃至一手を擧げ、或は復小し頭を低れ、
此れを以て像に供養せし、漸く無量の佛を見たてまつりて、自ら無上道を成じて、廣く無數の衆
を度し、

無餘涅槃に入ること、薪盡きて火の滅ゆるが如くなりき。

若し人散亂の心に、塔廟の中に入つて、一たび南無佛と稱せし、皆已に佛道を成じき。

諸の過去の佛の、在世或は滅後に於て、若し是の法を聞くこと有りし、皆已に佛道を成じき。

未來の諸の世尊、其の數量り有ること無けん。是の諸の如來等も、亦方便して法を説きたまはん。

一切の諸の如來、無量の方便を以て、諸の衆生を度脱して、佛の無漏智に入れたまはん。

若し法を聞くこと有らん者は、一りとして成佛せずといふこと無けん。

諸佛の本誓願は、我が所行の佛道を、普く衆生をして、亦同く此の道を得せしめんと欲す。
未來世の諸佛、百千億の、無數の諸の法門を説きたまふと雖も、其れ實には一乘の爲なり。
諸佛兩足尊、法は常に無性なり。
佛種は縁に従つて起ると知ろしめす、是故に一乘を説きた

【三九】(原文)。若有聞法者、無一不成佛。

【四〇】(原文)。佛種從緣起是故說一乘、是法住法位、世間相常住。

まふ。

是の法は法位に任して、世間の相常住なり。道場に於て知ろしめし已つて、導師方便して説きたまはん。

天人の供養したてまつる所の、現在十方の佛、其の數恒沙の如く、世間に出現したまふも、衆生を安穩ならしめんが故に、亦是の如き法を説きたまふ。

第一の寂滅を知ろしめして、方便力を以ての故に、種種の道を示すと雖も、其れ實には佛乘の爲なり。

衆生の諸行、深心の所念、過去所習の業、欲性精進力、及び諸根の利鈍を知ろしめして、種種の因縁、譬喩亦言辭を以て、應

に隨つて方便して説きたまふ。

今我も亦是の如し、衆生を安穩ならしめんが故に、種種の法門を以て、佛道を宣示す。

我智慧力を以て、衆生の性欲を知つて、方便して諸法を説いて、皆歡喜することを得せしむ。

舍利弗當に知るべし、我佛眼を以て觀じて、六道の衆生を見るに、貧窮にして福慧無し。

生死の險道に入つて、相續して苦斷えず、深く五欲に著すること、(四)犂牛の尾を愛するが如し。

貪愛を以て自ら蔽ひ、盲瞑にして見る所無し、大勢の佛、及與び斷苦の法を求めず。

【四】犂牛。長鬣の牛にして猶牛と云ふ。この牛尾を愛す、而もその尾の爲めに人に殺され、以て旌旗と爲るなり。即ち五欲を愛して而も五欲に害せらるるに喩へたるなり。

深く諸の邪見に入つて、苦を以て苦を捨てんと欲す、是の衆生の爲の故に、而も大悲心を起し

我始め道場に坐して、樹を觀じ亦經行して、三七日の中に於て、是の如きの事を思惟しき。

「我が所得の智慧は、微妙にして最も第一なり。衆生の諸根鈍にして、樂に著し癡に盲ひられたり。斯の如きの等類を、云何にしてか度す可き」と。

爾の時に諸の梵王、及び諸の天帝釋、護世四天王、及び大自在天、并に餘の諸の天衆、眷屬百千萬、恭敬合掌し禮して、我に轉法輪を

請す。

我即ち自ら思惟すらく、「若し但佛乘を讚めば、衆生苦に没在し、是の法を信すること能はず。

法を破して信せざるが故に、三惡道に墜らん。我寧ろ法を説かずとも、疾く涅槃にや入りなん。尋で過去の佛の、所行の方便力を念ふに、我が今得る所の道も、亦三乘と説く應し」と。

是の思惟を作す時、十方の佛皆現じて、梵音をもつて我を慰諭したまふ。

「善哉 釋迦文、第一の導師、是の無上の法を得たまへども、諸の一切の佛に隨つて、方便力を

用ひたまふ。

我等も亦皆、最妙第一の法を得れども、諸の衆生類の爲めに、分別して三乘と説く。

【四二】 樹・菩提樹なり。
【四三】 釋迦文・釋迦牟尼
muni)と同語なり。

少智は小法を樂つて、自ら作佛せんことを信せず、是故に方便を以て、分別して諸果を説く。復三乘と説くと雖も、但菩薩を教へんが爲めなり」と。

舍利弗當に知るべし、我聖師子の、深淨微妙の音を聞いて、喜んで南無佛と稱す。

復是の如き念を作す、「我濁惡世に出でたり、諸佛の所説の如く、我も亦隨順して行せん」と。

是の事を思惟し已つて、即ち波羅奈に趣く。

諸法寂滅の相は、言を以て宜ぶ可からず。方便力を以ての故に、五比丘の爲めに説く。

是れを轉法輪と名く。便ち涅槃の音、及び阿羅漢、法僧差別の名有り。

久遠劫従り來、涅槃の法を讚示して、生死の苦永く盡くすと、我常に

是の如く説き置く。

舍利弗當に知るべし、我佛子等を見るに、佛道を志求する者、無量千萬億、

咸く恭敬の心を以て、皆佛所に來至せり。曾て諸佛に従つて、方便所説の法を聞けり。

我即ち是の念を作さく、「如來出でたる所以は、佛慧を説かんが爲の故なり。今正しく是れ其の時

なり。

舍利弗當に知るべし、鈍根小智の人、著相憍慢の者は、是の法を信すること能はず。

今我喜んで畏れ無し、諸の菩薩の中に於て、正直に方便を捨てて、但無上道を説く。

【釋】(原文)。正直捨方便、但説無上道。

菩薩是の法を聞いて、疑網皆已に除く。千二百の羅漢、悉く亦當に作佛すべし。
三世の諸佛の、説法の儀式の如く、我今亦是の如く、無分別の法を説く。

諸佛世に興出したまふことは、懸に遠くして値遇したてまつること難し。正使ひ世に出でたまへども、是の法を説きたまふこと復難し。

無量無數劫にも、此の法を聞くこと亦難し。能く是の法を聴く者、斯の人亦復難し。

譬へば優曇華の、一切皆愛樂し、天人の希有とする所にして、時時に乃し一たび出づるが如し。

法を聞いて歡喜し讚めて、乃至一言を發すは、則ち爲れ已に、一切の三世の佛を供養するなり。

是の入甚た希有なること、優曇華に過ぎたり。汝等疑ひ有ること勿れ、我は爲れ諸法の王なり。

普く諸の大衆に告ぐ、但一乗の道を以て、諸の菩薩を教化して、聲聞の弟子無し。

汝等舍利弗、聲聞及び菩薩、當に知るべし是の妙法は、諸物の祕要なり。

五濁の惡世には、但諸欲に樂著するを以て、是の如き等の衆生は、終に佛道を求めず。

當來世の惡人は、佛説の一乘を聞いて、迷惑して信受せず、法を破して惡道に墮せん。

慚愧清淨にして、佛道を志求する者有らば、當に是の如き等の爲めに、廣く一乗の道を讚むべし。

舍利弗當に知るべし、諸佛の法是の如く、萬億の方便を以て、宜きに隨つて法を説きたまふ。

其の習學せざる者は、此れを曉了すること能はず。

汝等既に已に、諸佛世の師の、隨宜方便の事を知れり、復諸の疑惑無く、
心に大歡喜を生じて、自ら當に作佛すべしと知れ。」

卷の第二

譬喩品第三

爾の時に舍利弗、踊躍歡喜して、即ち起つて合掌し、尊顔を瞻仰して、佛に白して言さく、「今世尊に從ひたてまつり、此の法音を聞いて、心に踊躍を懷き、未曾有なることを得たり。所以は何、我昔も我等は斯の事に預らず。甚だ自ら如來の無量の知見を失へることを感傷しき。世尊、我常に獨り山林樹下に處して、若しは坐し若しは行じて、毎に是の念を作しき、「我等も同じく法性に入れり。云何ぞ如來小乗の法を以て濟度せらるる」と。是れ我等が咎なり。世尊には非ず。所以は何、若し我等、所因の阿耨多羅三藐三菩提を成就することを説きたまふを待せましかば、必ず大乘を以て度脱することを得てまし。然るに我等は方便隨宜の所説を解らずして、初め佛法を聞いて、遇ま便ち信受し、思惟して證を取れり。世尊、我昔從り來、終日竟夜、毎に自ら剋責しき。而るに今佛に從ひたてまつりて、未だ聞かざる所の未曾有の法を聞いて、諸の疑悔を斷じ

【一】菩薩の受記。爾前方等部の時菩薩に記を與へしことを指す。

【二】法性。今言はゆる法性は眞如實相の義を取らず、只二乘所證の眞空の偏理を云ふ。會て菩薩と同じく所證の眞空異ならずと念ひしなり。

身意泰然として、快く安穩なることを得たり。今日乃ち知んぬ、眞に是れ佛子なり。佛口従り生じ、法化従り生じて、佛法の分を得たり。」

爾の時に舍利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、

「我是の法音を聞いて、未曾有なる所を得て、心に大歡喜を懷き、疑網皆已に除こりぬ。」

昔より來佛教を蒙りて、大乘を失はず、佛の音は甚だ希有にして、能く衆生の惱みを除きたまふ。

我已に漏盡を得れども、聞いて亦憂惱を除く。我山谷に處し、或は林樹の下に在りて、

若しは坐し若しは經行して、常に是の事を思惟し、嗚呼して深く自ら責めき、「云何ぞ而も自ら欺

ける。

我等も亦佛子にして、同く無漏の法に入れども、未來に於て、無上道

を演説すること能はず。

【三】 金色三十二、十力諸の解脱、同く共に一法の中にして、而も此

の事を得ず。

【四】 八十種の妙好、十八不共の法、是の如き等の功德、而も我皆已に

失へり。」

我獨り經行せし時、佛大衆に在して、名聞十方に滿ち、廣く衆生を饒

【三】 三十二。佛の三十二相は具さに開經德行品に在り。

【四】 十力。方便品の註を見るべし。

【五】 八十種の妙好。即ち八十種好なり、開經德行品の註を見るべし。但し諸經論の記するところ同異あり、彼の註は且らく傳教の註釋に依る。

【六】 十八不共。身無失、口無失、念無失、無異想、無不定

益したまふを見て、

自ら惟はく「此の利を失へり、我爲れ自ら欺誑せり。」

我常に日夜に於て、毎に是の事を思惟して、以て世尊に問ひたてまつ

らんと欲す、「爲めて失へりや爲めて失はずや。」

我常に世尊を見たてまつるに、諸の菩薩を稱讚したまふ、是を以て日

夜に、是の如き事を籌量しき。

今佛の音聲を聞きたてまつるに、宜きに随つて法を説きたまへり、無

漏は思議し難し、衆をして道場に至らしむ。

我本邪見に著して、諸の梵志の師と爲りき、世尊、我が心を知ろし

めして、邪を抜き涅槃を説きたまひしかば、

我悉く邪見を除いて、空法に於て證を得たり。爾の時に心に自ら謂

ひき、「滅度に至ることを得たり」と。

而るに今乃ち自ら覺りぬ、是れ實の滅度に非ず。若し作佛することを

得ん時は、三十二相を具し、

天人夜叉衆、龍神等恭敬せん。是の時乃ち謂ふ可し、「永く盡滅して餘

心、無不知已捨。欲無滅、精進無滅、念無滅、慧無滅、解脫無滅、解脫知見無滅、一切身業隨智慧行、一切口業隨智慧行、一切意業隨智慧行、智慧知過去世無礙、智慧知未來世無礙、智慧知現在世無礙、已上十八種なり。尙ほ提婆品の註を見るべし。

【七】梵志。婆羅門(Brahman)

と云ふに同じ、前の方便品の註を見るべし。瑜伽論記卷十九に梵志の志は漢語、梵を志求するが故に梵志と云ふとあり、即ち梵漢兼稱なり。又一説には婆羅門中の俗人を云ふ、慧琳音義卷二十六にこの旨を記せり。之れに依れば梵志は佛家の優婆塞の如き類にして婆羅門四階の第二階の人を指して別して梵志と云ふなり。

無し」と。

佛、大衆の中に於て、「我當に作佛すべし」と説きたまふ。是の如き法音を聞いて、疑悔悉く已に除こりぬ。

初め佛の所説を聞いて、心中大に驚疑しき、「將に魔の佛と作つて、我が心を惱亂するに非ず耶」と。

佛、種種の縁、譬喩を以て巧みに言説したまふ。其の心安きこと海の如し。我聞いて疑網斷じぬ。

佛説きたまはく過去世の、無量の滅度の佛、方便の中に安住して、亦皆是の法を説きたまへり。

現在未來の佛、其の數量り有ること無きも、亦諸の方便を以て、是の如き法を演説したまふ。

今者の世尊の如きも、生じたまひし従り及び出家し、得道し法輪を轉じたまふまで、亦方便を以て説きたまふ。

世尊は實道を説きたまふ、(五)波旬は此の事無し。是を以て我定めて知りぬ、是れ魔の佛と作るには非ず。

【八】魔。具には魔羅(マラ)殺、及び殺者と翻す。衆生法身の慧命を斷つが故なり。亦擾亂、障礙、破壞等とも翻す。善功德を障へ壞亂せしむるが故なり。凡そ一切の魔は皆第六天主の屬なり。

【九】波旬。波旬の句は本は句の字なりしを寫し誤まりて句と爲す、然れども誤り久しきが故に竟に改めすと云ふ。梵音には旬の響なし、正さしくは波卑夜(バビヤ)にして、古譯は魔羅と同じく殺者又は惡者と翻せり。然るに魔と波旬とは自ら別なれば惡者の翻を取るべし。常に惡意有つて惡事を喜ぶの類なり。亦極惡とも云へり。一説に波旬は釋尊出世の時の魔王の名なりと。

我疑網に墮するが故に、是れ魔の所爲と謂へり。佛の柔輒の音、深遠に甚だ微妙にして、

清淨の法を演暢したまふを聞いて、我が心大に歡喜し、疑悔永く已

に盡きて、實智の中に安住す。

我定めて當に作佛して、天人に敬はるることを爲、無上の法輪を轉じて、諸の菩薩を教化すべし。』

爾の時に佛、舍利弗に告げたまはく、『吾今天、人、沙門、婆羅門等の大

衆の中に於て説く。我昔し曾て二萬億の佛の所に於て、無上道の爲の故に、

常に汝を教化す。汝亦長夜に我れに隨つて受學しき。我方便を以て汝を引

導せしが故に、我が法の中に生まれたり。舍利弗、我昔し汝をして佛道を志

願せしめき。汝今悉く忘れて、而も便ち自ら已に滅度を得たりと謂へり。

我今還つて汝をして本願所行の道を憶念せしめんと欲するが故に、諸の

聲聞の爲に、是の大乗經の妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念と名づくるを説

く。舍利弗、(二)汝未來世に於て、無量無邊不可思議劫を過ぎて、若干の千

萬億の佛を供養し、正法を奉持し、菩薩所行の道を具足して、當に作佛す

【二】汝未來世に於て。已下正

さしく授記なり。凡そ授記は一に劫數、今の未來無量無邊不可思議劫是れなり。二に行因、今の若干萬億佛の供養是れなり。三に得果、今の華光如來是れなり。四に國土、今の離垢世界是れなり。五に説法、今の三乘の法是れなり。六に劫名、今の大寶莊嚴是れなり。七に衆數、今の無量無邊不可思議の菩薩是れなり。八に壽量、今の佛の十二小劫及び人民の八小劫是れなり。九に補處、今の堅滿菩薩是れなり。十に法住、今の正法像法各三十二小劫是れなり。之れを略して劫國名號の記勅と云ふ。具略一定せざれども大旨この十種を以て授記の説相と知るべきなり。

ることを得べし。號をば、華光如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世閒解、無上士、調御丈夫、
 天人師、佛、世尊と曰ひ、國をば、離垢と名づけん。其の土平正に、清淨嚴飾に、安穩歡樂に
 して、天人熾盛ならん。瑠璃を地と爲して、八つの交道有り。黃金を繩と爲して、もつて其の側を界ひ、
 其の傍らに、各七寶の行樹有つて、常に華果有らん。華光如來、亦三乘を
 以て、衆生を教化せん。舍利弗、彼の佛出でたまはん時は、惡世に非ずと
 雖も、本願を以ての故に三乘の法を説きたまはん。其の劫をば、大寶莊
 嚴と名づけん。何が故ぞ名づけて大寶莊嚴と曰ふや、其の國の中には、菩薩
 を以て大寶と爲づくるが故なり。彼の諸の菩薩無量無邊不可思議にして、
 算數譬喩も及ぶこと能はざる所。佛の智力に非ずんば能く知る者無けん。
 若し行かんと欲する時は寶華足を承く。此の諸の菩薩は初めて意を發せる
 に非ず、皆久しく徳本を植えて、無量百千萬億の佛の所に於て淨く梵行を
 修し、恒に諸佛に稱嘆せらるることを爲、常に佛慧を修し、大神通を具し、善く一切の諸法の門を知
 り、質直無偽にして、志念堅固ならん。是の如きの菩薩其の國に充滿せん。舍利弗、華光佛は壽十二
 小劫ならん。王子と爲つて未だ作佛せざる時を除く。其の國の人民は壽八小劫ならん。華光如來、
 十二小劫を過ぎて、(三)堅滿菩薩に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けて、諸の比丘に告げん。「是の堅滿菩

【二】華光。正法華は蓮華光に作る。(尼波羅本 Indimipra-
 作る。)

【三】離垢。正法華同じ。(尼波羅本 *Paribhaya*)。

【四】大寶莊嚴。正法華は大寶殿に作る。(尼波羅本 *Maha-ratnaprabhavarajita*)。

【五】堅滿。正法華同じ。(尼波羅本 *Dhīrāparipūrṇa*)。

菩薩、次に當に作佛すべし、號をば(二五)華足安行、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀と曰はん。其の佛の國土も、亦復是の如くならん」と。舍利弗、是の華光佛の滅度の後、(二六)正法世に住すること三十二小劫、(二七)像法世に住すること亦三十二小劫ならん。」

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『舍利弗來世に、(二八)佛普智尊と成つて、號をば名づけて華光と曰はん、當に無量の衆を度すべし。』

無數の佛を供養し、菩薩の行、十力等の功德を具足して、無上道を證せん。

無量劫を過ぎ已つて、劫をば大寶嚴と名づけ、世界をば離垢と名づけん。清淨にして瑕穢無く、

琉璃を以て地と爲し、金繩其の道を界ひ、七寶雜色の樹、常に華果實有らん。

彼の國の諸の菩薩は、志念常に堅固にして、(二九)神通波羅密、皆已に悉く具足し、

無數の佛の所に於て、善く菩薩の道を學せん。是の如き等の大士、華光佛の所化ならん。

【二五】華足安行。正法華は度蓮華界に作る。ニ波羅本 Parid-maw-sha-ga-gi-kra-lai-to maw-sha-havikanti)。

【二六】正法。佛の滅後教、行、證の三尙は具足して闕けざる期間を云ふ。

【二七】像法。正法の次の期間にして教、行のみありて證果無き時なり。像は像似と熟字す、教、行の迹あつて正法に似るを云ふ。

【二八】佛普智尊。佛は佛陀、普智は智徧等正智、尊は世尊、合せて佛の異稱なり。

【二九】神通波羅密。六神通と六波羅密となり。

佛王子爲らん時、國を棄て世の榮を捨てて、最末後の身に於て、出家して佛道を成せん。

華光佛は世に住すること、壽十二小劫、其の國の人民衆は、壽命八小劫ならん。

佛の滅度の後、正法世に住すること、三十二小劫、廣く諸の衆生を度せん。

正法滅盡し已つて、像法三十二ならん。舍利廣く流布して、天人普く供養せん。

華光佛の所爲、其の事皆是の如し。其の兩足聖尊、最勝にして、(二〇) 倫匹無けん。

彼れ即ち是れ汝が身なり、宜く自ら欣慶す應し。』

爾の時に四部の衆の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、夜叉、乾

闍婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等の大衆、舍利弗の佛前に於て

阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを見て、心大に歡喜して、踊躍すること

無量なり。各各に身に著たる所の (三) 上衣を脱いで以て佛に供養したてまつる。釋提桓因、梵天王等、

無數の天子と與に、亦天の妙衣、天の曼荼羅華、摩訶曼荼羅華等を以て、佛に供養したてまつる。所

散の天衣、虚空の中に住して、而も自ら廻轉す。諸天の伎樂百千萬種、虚空の中に於て、一時に俱に

作し、衆の天華を雨らす。而も是の言を作さく、『佛昔波羅奈に於て初めて法輪を轉じ、今乃し復無

上最大の法輪を轉じたまふ』と。

爾の時に諸の天子、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、

【二〇】 倫匹。等倫匹對と熟字して比較の義なり。

【三】 上衣。上著衣なり。出家の二衆は大衣を上衣と言ふ。

『昔し波羅奈に於て、四諦の法輪を轉じ、分別して諸法の、五衆の生滅を説きたまひき。』

今復た最妙、無上の大法輪を轉じたまふ。是の法は甚だ深奥にして、能く信する者有ること少れなり。

我等昔從り來、數世尊の説を聞きたてまつるに、未だ曾て是の如き、深妙の上法を聞かず。

世尊是の法を説きたまふに、我等皆隨喜す。大智舍利弗、今尊記を受

くることを得たり。

我等も亦是の如く、必ず當に作佛して、一切世間に於て、最尊にして

上あること無きことを得べし。

佛道は思議し叵し、方便して宜きに隨つて説きたまふ。

我が所有の福業、今世若しは過世、及び見佛の功德、盡く佛道に廻向

す。

爾の時に舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、我今復疑悔無し。親り佛前

に於て阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得たり。是の諸の千二百の

心自在なる者、昔し學地に住せしに、佛常に教化して言たまはく、『我が法は能く生老病死を離れ

て涅槃を究竟す』と。是の學、無學の人、亦各自ら我見及び有無の見等を離るるを以て、涅槃を

得たりと謂へり。而るに今世尊の前に於て、未だ聞かざる所を聞いて、皆疑惑に墮しぬ。善哉世尊、

【三】學地。聲聞四果の中、前の須陀洹向、斯陀含、阿那含の三果を學地と云ひ、後の阿羅漢を無學地と云ふ。亦阿羅漢の中、阿羅漢向を學地と云ひ、阿羅漢果を無學地と云ふ。

【二】我見。萬物の主宰者を立つる外道の見計を云ふ。我は神我なり。

【一】有無の見。常見外道は有の見なり、斷見外道は無の見なり、この二見は一切外道の根本なり、故に餘を等攝す。

願はくは四衆の爲に、其の因縁を説き、疑悔を離れしめたまへ。」

爾の時に佛、舍利弗に告げたまはく、「我先に、諸佛世尊の種種の因縁、譬喩、言辭を以て方便して

法を説きたまふは、皆阿耨多羅三藐三菩提の爲なりと言はずや。是の諸の

所説は、皆菩薩を化せんが爲の故なり。然も舍利弗、今當に復譬喩を以て

更に此の義を明かすべし。諸の智有らん者は、譬喩を以て解ることを得ん。

舍利弗、國邑聚落に、大長者有り、其の年衰邁して、財富無量なり、多

く田宅及び諸の僮僕有り。其の家廣大にして唯一門のみ有り。諸の人衆多

くして、一百、二百、乃至五百人其の中に止住せり。堂閣朽ち故り、墻壁

隕れ落ち、柱根腐ち敗れ、梁棟傾き危し。周帛して俱時に歎然に火起つて

舍宅を焚燒す。長者の諸子、若しは十、二十、或は三十に至るまで、此の

宅の中に在り。長者是の大火の四面従り起るを見て、即ち大に驚怖して是

の念を作さく、「我能く此所燒の門より安穩に出づることを得たりと雖も、

而も諸子等は、火宅の内に於て、嬉戲に樂著して、覺えず知らず驚かず怖

ぢず。火來つて身を逼め、苦痛己れを切むれども、心厭患せず。出でんと求むる意無し。」舍利弗、是

の長者是の思惟を作さく、「我身手に力有り、當に衣械を以てや、若しは几案を以てや、舍從り之

【五】 因縁 前權後實の説法の次第の因縁なり。

【六】 國邑聚落 國と邑と聚落となり、國の小なるものを邑と云ひ、更に邑の小なるものを聚落と云ふ。今の長者はこの三處の中の最優徳者なるなり。

【七】 大長者 十徳を具して長者と稱す。一に姓貴、二に位高、三に大富、四に威猛、五に智深、六に年著、七に行淨、八に禮備、九に上敬、十に下歸なり。大長者はその中の更に優秀なるものなり。

【八】 衣械、華を盛るの器なり。

を出だすべき。」復更に思惟すらく、「是の舎唯一門のみ有り、而も復狭小なり。諸子幼稚にして、未だ識る所有らず、戯處に戀著せり。或は當に墮落して、火に焼かるべし。我當に爲に怖畏の事を説くべし。此の舎已に燒く、宜しく時に疾く出でて、火に燒害せられしむること無かるべし。」此の念を作し已つて、思惟する所の如く具さに諸子に告ぐ、「汝等速に出でよ」と。父、憐愍して善言をもつて誘諭すと雖も、而も諸子等は嬉戲に樂著し、肯て信受せず。驚かず畏れず。了に出づる心無し。亦復何者か是れ火、何者か爲れ舎、云何なるを失ふと爲づくるやを知らず。但東西に走り戯れて、父を視て已みぬ。爾の時に長者即ち是の念を作さく、「此の舎已に大火に燒かる。我及び諸子、若し時に出でずんば、必ず焚かれん。我今當に方便を設けて、諸子等をして斯の害を免るることを得せしむべし。」父、諸子の先心に各好む所有り。種種の珍玩奇異の物には情必ず樂著せんと知つて、之に告げて言はく、「汝等が玩び好む所は、希有にして得難し。汝若し取らずんば、後に必ず憂悔せん。此の如き種類の羊車、鹿車、牛車、今門外に在り。以て遊戯すべし。汝等此の火宅より宜く速に出で來るべし。汝が所欲に隨つて皆當に汝に與ふべし。」爾の時に諸子、父の所説の珍玩の物を聞くに、其の願に適へるが故に、心各勇銳して、互に相ひ推排し、競うて共に馳走し、争つて火宅を出づ。是の時に長者、諸子等の安穩に出づることを得て、皆四衢道の中の露地に於て坐して、復障礙無きを見て、其の心泰然として歡喜踊躍す。時に諸子等、各父に白

【三九】(原文)。羊車、鹿車、牛車、今在門外。

して言さく、「父先きに許したまふ所の、玩好の具の羊車、鹿車、牛車、願はくは時に賜與したまへ。」
 舍利弗、爾の時に長者 (三〇) 各諸子に等一の大車を賜ふ。其の車高廣にして、衆寶莊校せり。周匝して
 欄楯あつて、四面に鈴を懸けたり。又其の上にて (三一) 幡蓋を張り設けたり。亦珍奇の雜寶を以て之
 を嚴飾せり。寶繩絞絡して、諸の (三二) 華纓を垂れ、 (三三) 婉繩を重ね敷き、丹枕を安置す。駕するに白牛
 を以てす。膚色充潔に、形體姝好にして、大筋力有り。行步平正にして、其の疾きこと風の如し。
 又僕従多くして之を侍衛せり。所以は何。是の大富長者は財富無量にして、種種の諸藏に悉く皆充溢
 せり。而も是の念を作さく、「我が財物極り無し。下劣の小車を以て諸子等
 に與ふ應からず。今此の幼童は、皆是れ吾が子なり。愛するに偏黨無し。
 我是の如き七寶の大車有つて其の數無量なり。應當に等心に各各に之に與
 ふべし。宜しく差別すべからず。所以は何。我が此の物を以て周く一國に
 給すとも、猶尚ほ置しからず、何に況んや諸子をや。一是の時に諸子、各大車に乗つて未曾有なること
 を得て、本の所望に非ざるが若し。舍利弗、汝が意に於て云何、是の長者等しく諸子に珍寶の大車を
 與ふること、寧ろ虛妄有りや否や。」
 舍利弗の言さく、『いな、世尊。是の長者、但諸子をして火難を免れ其の軀命を全うすることを得
 せしむとも、爲れ虛妄に非ず。何を以ての故に。若し身命を全うすれば、便ち爲れ已に玩好の具を得

【三〇】 (原文)。各賜諸子、等一

大車。

【三一】 幡蓋。かけがさ。

【三二】 華纓。はなぶさ。

【三三】 婉繩。しとね。

たるなり。況んや復方便して彼の火宅より而も之を拔濟せんをや。世尊、若し是の長者、乃至最小の一車を與へずとも、猶ほ虚妄ならず。何を以ての故に。是の長者、先に是の意を作さく、「我方便を以て子をして出づることを得せしめん」と。是の因縁を以て虚妄無し。何に況んや長者自ら財富無量なりと知つて、諸子を饒益せんと欲して等しく大車を與ふるをや。」

佛、舍利弗に告げたまはく、「善哉善哉、汝が所言の如し。舍利弗、如來も亦復是の如し。則ち爲れ一切世間の父なり。諸の怖畏、衰惱、憂患、無明、闇蔽に於て永く盡くして餘無し。而も悉く無量の知見、力、無所畏を成就し、大神力及び智慧力有つて、方便、智慧波羅蜜を具足せり。大慈大悲、常に懈倦無く、恒に善事を求めて一切を利益す。而も三界の朽ち故りたる火宅に生ずることは、衆生の生、老、病、死、憂悲苦惱、愚痴暗蔽、三毒の火を度して、教化して阿耨多羅三藐三菩提を得せしめんが爲なり。」

諸の衆生を見るに、生、老、病、死、憂悲苦惱に燒煮せられ、亦五欲財利を以ての故に、種種の苦を受く。又貪著し追求するを以ての故に、現には衆苦を受け、後には地獄、畜生、餓鬼の苦を受く。若し天上に生まれ、及び人間に在つては、貧窮困苦、愛別離苦、怨憎會苦、是の如き等の種種の諸苦あり。衆生其の中に没在して、歡喜し遊戯して、覺えず知らず、驚かず怖ぢず、亦厭ふことを生

【三】種種の諸苦。生、老、病、死の四を四苦と稱し、更に愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦の四を加へて八苦と云ふ。これを種種の苦と云ふなり。上の文明かに七苦あり。又五欲財利云云は、即ち求不得苦なれば、八苦具さに在るなり。

さす、解脱を求めず。此の三界の火宅に於て、東西に馳走して、大苦に遭ふと雖も、爲れを以て患とせず。舍利弗、佛、此れを見已つて、便ち是の念を作さく、「我は爲れ衆生の父なり、應に其の苦難を抜き、無量無邊の佛の智慧の樂を與へて、其れをして遊戯せしむべし。」舍利弗、如來復是の念を作さく、「若し我但神力及び智慧力を以て、方便を捨てて、諸の衆生の爲に、如來の知見、力、無所畏を讃めば、衆生是れを以て得度すること能はじ。所以は何。是の諸の衆生、未だ生、老、病、死、憂悲苦惱を免れず、而も三界の火宅に燒かる。何に由つてか能く佛の智慧を解らん。」舍利弗、彼の長者の復し身手に力ありと雖も而も之を用ひず。但慇懃の方便を以て諸子の火宅の難を勉濟して、然る後各珍寶の大車を與ふるが如く。如來も亦復是の如し。力、無所畏有りと雖も、而も之を用ひず。但智慧方便を以て、三界の火宅より衆生を拔濟せんとして、爲に三乘の聲聞、辟支佛、佛乘を説く。而も是の言を作さく、「汝等樂つて三界の火宅に住することを得ること莫かれ。龜繫の色、聲香、味、觸を貪ること勿れ。若し貪著して愛を生ぜば、則ち爲れ燒かれん。汝速に三界を出でて、當に三乘の聲聞、辟支佛、佛乘を得べし。我今汝が爲に此の事を保任す。終に虛からじ。汝等但當に勤修精進すべし。」如來是の方便を以て、衆生を誘進す。復是の言を作さく、「汝等當に知るべし、此の三乘の法は、皆是れ聖の稱嘆したまふ所なり。自在無繫にして、依求する所無し。是の三乘に乗じて、無漏の根、力、覺、道、禪定、解脱、三昧等を以て、而も自ら娛樂して、便ち無量の安穩快樂を得べし。」舍利弗、若

し衆生有り、内に智性有つて、佛世尊に從つて、法を聞いて信受し、慇懃に精進し、速に三界を出でんと欲して、自ら涅槃を求む。是れを聲聞乘と名づく。彼の諸子の羊車を求むるが爲に火宅を出づるが如し。若し衆生有り、佛世尊に從つて、法を聞いて信受し、慇懃に精進し、自然慧を求め、獨善寂を樂ひ、深く諸法の因縁を知る。是れを辟支佛乘と名づく。彼の諸子の鹿車を求むるが爲に火宅を出づるが如し。若し衆生有り、佛世尊に從つて、法を聞いて信受し、勤修精進して一切智、佛智、自然智、無師智、如來の知見、力、無所畏を求め、無量の衆生を愍念安樂し、天人を利益し、一切を度脱す。是れを大乘と名づく。菩薩此の乘を求むるが故に名づけて摩訶薩と爲す。彼の諸子の牛車を求むるが爲に火宅を出づるが如し。舍利弗、彼の長者の、諸子等の安穩に火宅を出づることを得て無畏の處に到るを見て、自ら財富無量なることを惟うて、等しく大車を以て諸子に賜ふが如く、如來も亦復是の如し。爲れ一切衆生の父なり。若し無量億千の衆生の、佛敎の門を以て、三界の苦、怖畏の險道を出で、涅槃の樂を得るを見ては、如來爾の時に便ち是の念を作す、我に無量無邊の智慧、力、無畏等の諸佛の法藏有り。是の諸の衆生は、皆是れ我が子なり。等しく大乘を與ふべし。人として獨り滅度を得ること有らしめじ。皆如來の滅度を以て之を滅度せん。是の諸の衆生の三界を脱れたる者は、悉く諸佛の禪定、解脱等の娛樂の具を與ふ。皆是れ一相一種にして、聖の稱嘆したまふ所なり。能く淨妙第一の樂を生ず。舍利弗、彼の長者の、初め三車を以て諸子を誘引し、然る後但大車の寶物

莊嚴し安穩第一なるを與ふるに、然も彼の長者虚妄の咎無きが如く、如來も亦復是の如し。虚妄有ること無し。初め三乘を説いて衆生を引導し、然る後但大乘を以て之を度脱す。何を以ての故に。如來は無量の智慧、力、無所畏、諸法の藏有つて、能く一切衆生に大乘の法を與ふ。但盡くして能く受けず。舍利弗、是の因縁を以て當に知るべし、諸佛は方便力の故に、一佛乘に於て、分別して三と説きたまふ。」

佛、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『譬へば長者、一の大宅有らんに、其の宅久しく故りて、而も復た頓弊し、

堂舎高く危く、柱根摧け朽ち、梁棟傾むき斜がみ、基陛墮れ毀ぶれ、
 墻壁圯れ圻け、泥塗漚け落ち、覆苫亂れ墜ち、椽相差ひ脱け、
 周障屈曲して、雜穢充徧せり。五百人有つて、其の中に止住す。

鴟梟鷓鴣、烏鵲鳩鴿、蜈蚣蝮蠍、蜈蚣蚰蜒、

守宮百足、鼯狸鼯鼠、諸の惡蟲の輩、交横馳走す。

屎尿の臭き處、不淨流れ溢ち、蟻蝻諸蟲、而も其の上に集まれり。

狐狼野干、咀嚼踐蹋し、死屍を嗜齧して、骨肉狼藉し、

【三三】頓弊、やぶれ、やぶる。

【三六】椽相、椽はたるき、相はこまひ。

【三七】鴟はとび、梟はふくろ。

【三九】鴟はくまたか、鷓はわし、烏はからす。鵲はかささぎ、鳩はやまばと、鴿はいへばと、蜈蚣はからすへび、蝮蠍はくちばみ、まむし、蜈蚣はむかて。蚰蜒はげじげじ。守宮はやもり。百足はなさむし、むかで。鼯はいちち。狸はたねき。鼯鼠はあまくれずみ。

【四〇】蟻蝻はうち、くそむし。

【四一】狐はきつね。狼はおほかみ。野干はのぎつね。

是れに由つて羣狗、競ひ來つて 搏撮し、飢羸悼惶して、處處に食を求め、

【四〇】闘諍撻掣し、唯啾啾吠す。其の舎の恐怖、變狀是の如し。

處處に皆、魑魅魍魎有り。夜又惡鬼、人の肉を食噉す。

毒蟲の屬、諸の惡禽獸、孚乳產生して、各自ら藏くし護る。

夜又競ひ來つて、争ひ取つて之れを食す。之を食すること既に飽きぬ

れば、惡心轉た熾んにして、

鬪諍の聲、甚だ怖畏す可し。鳩槃荼鬼、土埵に蹲踞せり。

或時は地を離るること、一尺二尺、往返遊行し、縱逸に嬉戲す。

狗の兩足を捉つて、撲つて聲を失はしめ、脚を以て頸に加へて、狗を怖どして自ら樂しむ。

復諸の鬼有り、其の身長大に、裸形黒瘦にして、常に其の中に住せり。

大惡聲を發して、叫び呼んで食を求む。復諸の鬼有り、其の咽針の

如し。

復諸の鬼有り、首牛頭の如し、或は人の肉を食し、或は復狗を噉ふ。

【四〇】 咀はくらはふ。嚼はかむ。踐踏はふみふむ。

【四一】 啗齧。かみくらふ。

【四二】 搏撮。うちとる。

【四三】 飢羸ぼうみつかる。惶惶はまごつく。

【四四】 闘諍はたたかひあらそふ。撻掣はつかみひきさく。啾はいがみ。啾ははがみ。啾吠はおほいにほゆ。

【四五】 魑魅魍魎。魑魅は物の精の化したるにて山に在るを魑と云ひ、家に隱るるを魅と云ふと云へり。或は人面四足と云ひ、或は猪頭人形と云ふ、異説なり。魍魎は山中木石の精怪、水中にも住むと云ふ。

【四六】 孚乳。孚は育、乳は養の義。

【四七】 鳩槃荼鬼。亦鳩滿拏(ムルバインダ)と云ふ。厭眉鬼と翻せり。厭ふべき眉目の鬼と云へることにて、顔貌の狀貌

頭髮髮亂して、殘害兇險なり。饑渴に逼められて、叫喚馳走す。

夜叉餓鬼、諸の惡鳥獸、饑急にして四に向かひ、窗牖を窺ひ看る。

是の如き諸難、恐畏無量なり。是の朽ち故りたる宅は、一人に屬せり。

其の人近く出で、未だ久からざるの間に、後に宅舎に、忽然火起り、

四面一時に、其の焰俱に熾なり。棟梁椽柱、爆めく聲震ひ裂け、

摧け折れ墮ち落ちて、墻壁崩れ倒る。諸の鬼神等、聲を揚げて大に

叫び、

鷓鴣諸鳥、鳩槃荼等、周惶惶怖して、自ら出づること能はず。

惡獸毒蟲、孔穴に藏れ竄れ、毘舍闍鬼、亦た其の中に住せり。

福德薄きが故に、火に逼められ、共に相ひ殘害して、血を飲み肉を啜ふ。

野干の屬、並に已に前に死す。諸の大惡獸、競ひ來つて食噉す。

臭煙蓬焔して、四面に充塞す。蜈蚣蚰蜒、毒蛇の類、

火に燒かれて、争ひ走つて穴を出づ。鳩槃荼鬼、隨ひ取つて而も食ふ

又諸の餓鬼、頭に火然え、飢渴熱惱して、周惶悶走す。

其の宅是の如く、甚だ怖畏す可し。毒害火災、衆難一に非ず。

卑の物に似るが故なり。亦陰囊と翻す、この鬼の陰囊頗る大にして、坐する時は之に據り、行く時に之を肩にするが故なり。又その陰囊の狀を取つて冬瓜と翻す。南方增長天王に屬す。好んで人の精氣を啜ふ鬼なり。(弓槃荼、拘辨茶、鳩桓) ●毘舍闍鬼 (Pishachaya) 嘔精氣と翻す、人及び五穀の精氣を啜ふ鬼なり。

是の時に宅主、門外に在つて立つて、有る人の言を聞く、

「汝が諸子等、先きに遊戯せるに因つて、此の宅に來入し、

稚小無知にして、歡娛樂著せり」と。長者聞き已つて、驚いて火宅に入る。

方さに宜く救濟して、燒害無から令むべし。諸子に告諭して、衆の患難を説く、

「惡鬼毒蟲、災火蔓延せり。衆苦次第に、相續して絶えず。

毒蛇虻蝮、及び諸の夜叉、鳩槃荼鬼、野干狐狗、

鵬鷲鴟梟、百足の屬、飢渴の惱み急にして、甚だ怖畏す可し。

此の苦すら處し難し、況や復大火をや」と。

諸子無知にして、父の誨を聞くと雖も、猶故樂著して、嬉戲すること已まず。

是の時に長者、而も是の念を作さく、諸子此の如く、我が愁惱を益す。

今此の舍宅は、一として樂む可き無し。而るに諸子等、嬉戲に耽溺して、

我が教を受けず、將に火に害せられんとす。一即便ち思惟して、諸の方便を設けて、

諸子等に告ぐ、「我に種種の、珍玩の具の、妙寶の好車有り。

羊車鹿車、大牛の車なり。今門外に在り、汝等出で來れ。
吾汝等が爲に、此の車を造作せり。意の所樂に隨つて、以て遊戯す可し。」

諸子、此の如き諸の車を説くを聞いて、即時に奔競して、馳走して出で、空地に到つて、諸の苦難を離る。

長者子の、火宅を出づることを得て、四衢に住するを見て、師子の座に坐せり。

而も自ら慶んで言はく、「我今快樂なり。此の諸子等、生育すること甚だ難し。

愚小無知にして、而も險宅に入れり。諸の毒蟲多く、魘魅畏る可し。

大火猛焰、四面に俱に起れり。而るに此の諸子、嬉戯に貪著せり。

我已に之れを救ひて、難を脱ることを得せしめたり。是の故に諸人、我今快樂なり」と。

爾の時に諸子、父の安坐せるを知つて、皆父の所に詣つて、而も父に白して言さく、

「願はくは我等に、三種の寶車を賜へ。前きに許したまふ所の如き、諸子出で來れ、

當に三車を以て、汝が所欲に隨ふべしと。今正さに是れ時なり。惟だ給與を垂れたまへ。」

長者大に富んで、庫藏衆多なり。金銀瑠璃、砮磔瑪瑙、

衆の寶物を以て、諸の大車を造れり。莊校嚴飾して、周匝して欄楯あり。

四面に鈴を懸け、金繩絞絡せり。眞珠の羅網、其の上に張り施し、

金華の諸纓、處處に垂れ下だせり。衆彩雜飾し、周匝圍繞せり。

柔輓の繪纒、以て茵褥と爲し、上妙の細氎、價直千億にして、

【四七】繪纒、繪は帛、纒は綿絮なり。

【五〇】氎、氎は二種あり、一は細毛を以て織れるもの、一は

鮮白淨潔なる、以て其の上に覆へり。大白牛有り、肥壯多力にして、形體殊好なり。これを以て寶車を駕せり。諸の僮従多くして、而も之れを待衛せり。

是の妙車を以て、等しく諸子に賜ふ。諸子は是の時、歡喜踊躍して、是の寶車に乗つて、四方に遊び、嬉戲快樂して、自在無礙ならんが如し。舍利弗に告ぐ、我も亦是の如し。衆聖の中の尊、世間の父なり。

一切衆生は、皆是れ吾が子なり。深く世樂に著して、慧心有ること無し。三界は安きこと無し、猶ほ火宅の如し。衆苦充滿して、甚だ怖畏す可し。常に生老、病死の憂患有り。是の如き等の火熾然として息まます。

如來は已に、三界の火宅を離れて、寂然として閑居し、林野に安處せり。
【五】今此の三界は、皆な是れ我が有なり。其の中の衆生は、悉く是れ吾が子なり。

而も今ま此の處は、諸の患難多し。唯我一人のみ、能く救護を爲す。復た教詔すと雖も、而も信受せず。諸の欲染に於て、貪著深きが故に。是を以て方便して、爲に三乘を説いて、諸の衆生をして、三界の苦を知らしめ、

華を以て織れるもの、皆以て布と爲すなり。

【五】（原文）。今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子、而今此處、多諸患難、唯我一人、能爲救護。

これに釋尊の三徳を顯す。三界を我が有と云ふは主の徳なり。其の中の衆生を吾が子と云ふは親の徳なり。而も今已下能く救護を爲すと云ふは師の徳なり。これによりて釋尊を三徳有縁の教主と云ふなり。ことに唯我一人とあれば、この娑婆世界の衆生は釋尊一人の救護に依るべし。他佛の救護を仰ぐの理無し。聖祖の遺文中に多くこの三徳の文を擧げて彌陀念佛の誤謬を指斥せり。

出世間の道しうせうけんのだうを、開示し演説す。是の諸子等、若し心決定しぬれば、

三明、及び六神通を具足し、縁覺、不退の菩薩を得ること有り。

汝舍利弗、我衆生の爲に、此の譬喩を以て、一佛乘を説く。

汝等若し能く、是の語を信受せば、一切皆當に佛道を成ずることを得べし。

是の乘は微妙にして、清淨第一なり。諸の世間に於て、爲めて上有ること無し。

佛の悦可したまふ所、一切衆生の、應さに稱讚し、供養し禮拜すべき所なり。

無量億千の、諸力解脱、禪定智慧、及び佛の餘の法あり。

是の如きの乗を得せしめて、諸子等をして、日夜劫數に、常に遊戯することを得、

諸の菩薩、及び聲聞衆と、此の寶乘に乗じて、直ちに道場に至らしむ。

是の因縁を以て、十方に諦に求むるに、更に餘乘無し、佛の方便を除く。

【五二】三明。一に宿命明。能く過去宿世を知るなり、亦宿生智明とも云ふ。二に天眼明、能く衆生の死此生彼を知るなり、亦死生智明とも云ふ。三に漏盡明、漏盡智に由りて諸の神通を得るなり、亦漏盡智明とも云ふ。聲聞の中には第四果阿羅漢に之を具足し、及び辟支佛、菩薩、佛皆この三明あるなり。

【五三】六神通。天眼、天耳、他心、宿命、神足、漏盡の六通なり。前の三明と閉合の異なる。天眼より天耳を開し、宿命より他心を開し、漏盡より神足を開したるなり。天耳は遠く大千界の一切の音聲を聞知するなり。他心は衆生心中の所念を知るなり。神足は亦身如意とも云ふ、飛行自在、大身小身の變現、水火の出没

大身小身の變現、水火の出没

舍利弗に告ぐ、汝諸人等は、皆な是れ吾が子なり、我は則ち是れ父なり。

汝等累劫に、衆苦に焼かる。我皆な濟拔して、三界を出でしむ。

我先に、汝等滅度すと説くと雖も、但生死を盡くして、而も實には滅せず。今の應に作すべき所は、唯佛の智慧なり。

若し菩薩有らば、是の衆の中に於て、能く一心に、諸佛の實法を聽け。

諸佛世尊は、方便を以てしたまふと雖も、所化の衆生は、皆な是れ菩薩なり。

若し人小智にして、深く愛欲に著せる、此れ等の爲の故に、苦諦を説きたまふ。

衆生、心喜んで、未曾有なることを得。佛の説きたまふ苦諦は、眞實にして異無し。

若し衆生有つて、苦の本を知らず。深く苦の因に著して、暫くも捨つること能はず。

是れ等の爲の故に、方便して道を説きたまふ。諸苦の所因は、貪欲爲れ本なり。

若し貪欲を滅すれば、依止する所無し。諸苦を滅盡するを、第三の諦と名づく。

滅諦の爲の故に、道を修行す。諸の苦縛を離るるを、解脱を得と名づく。

是の人何に於てか、而も解脱を得る。但虚妄を離るるを、名づけて解脱と爲す。

其れ實には未だ、一切の解脱を得ず。佛是の人は、未だ實に滅度せずと説きたまふ。

等なり。

【五四】(原文)。乘此寶乘、直至

道場。

【五五】(原文)。但離虚妄、名爲

解脱。

斯の人未だ、無上道を得ざるが故に、我が意にも、滅度に至らしめたりと欲はず。

我は爲れ法王、法に於て自在なり 衆生を安穩ならしめんが故に、世に現す。

汝舍利弗、我が此の法印は、世間を利益せんと、欲するが爲の故に説く。

所遊の方に在つて、妄りに宣傳すること勿れ。若し聞くこと有らん者、隨喜し頂受せば、

當に知るべし是の人は、阿惟越致なり。若し此の經法を、信受する

こと有らん者は、

是の人は已に曾て、過去の佛を見たてまつつて、恭敬供養し、亦是の

法を聞けるなり。

若し人能く、汝が所説を信すること有らんは、則ち爲れ我を見、亦汝及び比丘僧、並びに諸の

菩薩を見るなり。

斯の法華經は、深智の爲めに説く。淺識は之を聞いて、迷惑して解らず。

一切の聲聞、及び辟支佛は、此の經の中に於て、力及ばざる所なり。

汝舍利弗、尙ほ此の經に於ては、信を以て入ることを得たり、況や餘の聲聞をや。

其餘の聲聞も、佛語を信するが故に、此の經に隨順す、己が智分に非ず。

又舍利弗、憍慢懈怠、我見を計する者には、此の經を説くこと莫かれ。

【五六】阿惟越致 (Avivartant) 不退、不退轉、無退等の諸翻あり、正しくは七住已去の菩薩地を稱して云ふなり。(阿毘跋致)

凡夫の淺識にして、深く五欲に著せるは、聞くとも解ること能はじ、亦爲に説くこと勿れ。

【五】 若し人信せずして、此の經を毀謗せば、則ち一切、世間の佛種を斷せん。

或は復鬻賣して、而も疑惑を懷かん、汝當に、此の人の罪報を説くを聽くべし。

「若しは佛の在世にもあれ、若しは滅度の後にもあれ、其れ斯の如き、

經典を誹謗すること有らん。

經を讀誦し、書持すること有らん者を見て、輕賤憎嫉して、而も結恨

を懷かん。

此人の罪報を、汝今復聽くべし。其人命終して、阿鼻獄に入らん。

一劫を具足して、劫盡きなば更た生れん。是の如く展轉して、無數劫

に至らん。

地獄より出でば、當に畜生に墮つべし。若し狗野干としては、其の形

ち頹瘦し、

【五】 鬻賣疥癩にして、人に觸燒せられ、又復人に、惡賤せられん。常に饑渴に困んで、骨肉枯

竭せん。

生きては、楚毒を受け、死しては瓦石を被らん。佛種を斷するが故に、斯の罪報を受けん。

【五】 (原文)。若人不信毀謗此經、即斷一切世間佛種。

【五】 (原文)。其人命終、入阿鼻獄、具足一劫、劫盡更生、如是展轉、至無數劫。

【五】 癩は黒黄。黧は桑黒。疥ははたけ。癩はしらばたけ。

【六】 觸はふるる。燒はなやます。

【六】 楚毒。楚は荆と同字、痛楚とも熟字す。荆楚の痛毒と云へる詞なり。

若しは駮駝と作り、或は驢の中に生まれて、身に常に重きを負ひ、諸の杖捶を加へられん。但水草を念うて、餘は知る所無けん。斯の經を誘するが故に、罪を獲ることは是の如し。

有ひは野干と作つて、聚落に來入せば、身體疥癩にして、又一目無からん。

諸の童子に、打擲せられ諸の苦痛を受けて、或時は死を致さん。

此に死し已つて、更に(三)蟒身を受けん。其の形長大にして、五百由旬ならん。

聾聵無足にして、踠轉腹行し、諸の小蟲に、(四)啖食せられて、

晝夜苦を受くるに、休息有ること無けん。斯の經を誘するが故に、罪

を獲ることは是の如し。

若し人と爲ることを得ては、諸根闔鈍にして、(五)矬陋癡覺、(六)盲聾、(七)背

偃ならん。

言説する所有らんに、人信受せず。口の氣常に臭く、鬼魅に著せられん。

貧窮下賤にして、人に使はれ、多病瘠瘦にして、依怙する所無く。

人に親附すと雖も、人意に在かず。若し所得有らば、尋いで復忘失せん。

若し醫道を修して、方に頓じて病を治せば、更に他の疾を増し、或は復死を致さん。

若し自ら病有らば、人の救療するもの無く、設ひ良薬を服すとも、而も復増劇せん。

【六二】蟒。大蛇。おほろち。

【六三】啖。異本字啖に作る、血をすふなり。

【六四】矬はひくし。陋はみにくし。癡はてつり。覺はあしなへ。

【六五】背偃。せむし。

若しは他の反逆し、抄劫し竊盜せん。是の如き等の罪、横さまに其の殃に罹らん。

斯の如き罪人、永く佛、衆聖の王の、説法教化したまふを見たてまつらず。

斯の如きの罪人は、常に難處に生まれ、狂聾心亂にして、永く法を聞かず。

無數劫の、恒河沙の如きに於て、生まれては輒ち聾啞にして、諸根不具ならん。

常に地獄に處ること、園觀に遊ぶが如く、餘の惡道に在ること、己が舍宅の如く、

驢猪狗、是れ其の行處ならん。斯の經を誘するが故に、罪を獲ることは是の如し。

若し人と爲ることを得ては、聾盲瘖瘂にして、貧窮諸衰、これを以て

自ら莊嚴し。

〔六〕 水腫乾消、疥癩癰疽、是の如き等の病、これを以て衣服と爲さん。

身常に臭き處にして、垢穢不淨に、深く我見に著して、瞋恚を増益し、

姪欲熾盛にして、禽獸を擇ばじ。斯の經を誘するが故に、罪を獲ることは是の如し。

舍利弗に告ぐ、此の經を誘せん者、若し其の罪を説かんに、劫を窮むとも盡きじ。

是の因縁を以て 我故に汝に語る。無智の人の中に、此の經を説くこと莫かれ。

若し利根にして、智慧明了に、多聞強識にして、佛道を求むる者有らん。

是の如きの人には、乃ち爲に説く可し。若し人會て、億百千の佛を見たてまつりて、

〔六六〕 抄劫、強盜。
〔六七〕 水腫等。皆皮膚病の種類の名なり。

諸の善本を植ゑ、深心堅固ならん。是の如きの人には、乃ち爲に説く可し。

若し人精進して、常に慈心を修し、身命を惜まざらんには、乃ち爲に説く可し。

若し人恭敬して、異心あること無く、諸の凡愚を離れて、獨り山澤に處せん。

是の如きの人には、乃ち爲に説く可し。又舍利弗、若し人有つて、

惡知識を捨てて、善友に親近するを見ん。是の如きの人には、乃ち爲に説く可し。

若し佛子の、持戒清潔にして、淨明珠の如くにして、大乘經を求むるを見ん。

是の如きの人には、乃ち爲に説く可し。若し人瞋無く、質直柔軟にして、

常に一切を慙れみ、諸佛を恭敬せん。是の如きの人には、乃ち爲に説く可し。

復佛子の、大衆の中に於て、清淨の心を以て、種種の因縁、

譬喩言辭をもつて、説法すること無礙なる有らん。是の如きの人には、乃ち爲に説く可し。

若し比丘の、一切智の爲に、四方に法を求めて、合掌し頂受し、

但樂つて、大乘經典を受持して、乃至、餘經の一偈をも受けざる有らん。

是の如きの人には、乃ち爲に説く可し。人の至心に、佛舍利を求むるが如く、

是の如く經を求め、得已つて頂受せん。其の人復、餘經を志求せず、

【六】(原文)。捨惡知識、親近善友。

【六九】(原文)。但樂受持大乘經典、乃至不受餘經一偈。

亦未だ曾て、外道の典籍を念せざらん。是の如き人には、乃ち爲に説くべし。
舍利弗に告ぐ、我是の相にして、佛道を求むる者を説かんに、劫を窮むとも盡くさじ。
是の如き等の人は、則ち能く信解せん。汝當に爲に、妙法華經を説くべし。』

信解品第四

爾の時に慧命須菩提、摩訶迦旃延、摩訶迦葉、摩訶目犍連、佛に從ひたてまつりて聞ける所の未曾有の法と、世尊の舍利弗、阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまふとに、希有の心を發し、歡喜踊躍す。即ち座從り起つて衣服を整へ、偏へに右の肩を袒にし、右の膝を地に著け、一心に合掌し、曲躬恭敬し、尊顔を瞻仰して、佛に白して言さく、「我等僧の首めに居し、年並びに朽邁せり。自ら已に涅槃を得て堪任する所無しと謂うて、復阿耨多羅三藐三菩提を進み求めず。世尊、往昔の説法既に久し。我時に座に在りて、身體疲懈し、但空、無相、無作を念じて、菩薩の法の神通に遊戲し、佛國土を淨め、衆生を成就するに於て、心に喜樂せざりき。所以は何。世尊、我等をして、三界を出で、涅槃の證を得せしめたまへり。又今我等、年已に朽邁して、佛の菩薩を教化したまふ阿耨多羅三藐三菩提に於て、一念の好樂の心を生ぜざりき。我等今佛前に於て、聲聞に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまふを聞いて、心甚だ歡喜し、未曾有なることを得たり。謂はざりき、今忽然に希有の法を聞くことを得んとは。深く自ら慶幸す、大善利を獲たりと。三無量の珍寶を求めざるに自ら得たり。世尊、我等今樂はくは譬喩を説いて以て斯の義を明かさん。

【一】 空、無相、無作。これを三昧と名づく、亦三解脱門とも名づく。無作を無願とも云ふなり。

【二】 (原文) 無量珍寶、不求自得。

譬へば、人有つて、年既に幼稚にして、父を捨てて逃逝し、久しく他國に住して、或は十、二十より、五十歳に至る。年既に長大にして加す復窮困し、四方に馳騁して衣食を求め、漸漸に遊行して遇ま本國に向ひぬ。其の父先きより來子を求むるに得ずして、一城に中止す。其の家大に富んで、財寶無量なり。金、銀、琉璃、珊瑚、琥珀、玻璃珠等、其の諸の倉庫に悉く皆盈溢せり。多く僮僕臣佐吏民有つて、象馬、車乘、牛羊無數なり。出入息利すること乃ち他國に徧し。商估賈客亦甚た衆多なり。時に貧窮の子、諸の聚落に遊び、國邑を経歴して遂に其の父の所止の城に到りぬ。父毎に子を念ふ。子と離別して五十餘年、而も未だ曾て人に向つて此の如き事を説かず。但自ら思惟して心に悔恨を懷く。自ら念はく、「老朽して多く財物あり。金銀珍寶倉庫に盈溢すれども、子息有ること無し。一旦に終没しなば、財物散失して委付する所無けん。」是を以て懇懇に毎に其の子を憶ふ。復是の念を作さく、「我若し子を得て財物を委付せば、坦然快樂にして、復憂慮無けん」と。世尊、爾の時に窮子、傭賃展轉して遇ま父の舍に到りぬ。門の側に住立して遙に其の父を見れば、師子の牀に踞して寶几足を承け、諸の婆羅門、刹利、居士、皆恭敬し圍繞せり。眞珠の瓔珞の價直千萬なるを以て其の身を莊嚴し、吏民僮、手に白拂を執つて、左右に侍立せり。覆ふに寶帳を以てし、諸の華旛を垂れ、香水を地に灑ぎ、衆の名華を散じ、寶物を羅列して、出内取與す。是の如き等の種種の嚴飾有つて威徳

【三】刹利。具さには刹帝利 (Kshatriya) と云ふ。土田主、田主、歷代王種等と翻す、印度四姓の一にして王族貴種を云ふなり。

特尊なり。窮子父の大力勢有るを見て、即ち恐怖を懷いて、此に來至せることを悔ゆ。竊に是の念を
作さく、「此れ或は是れ王か、或は是れ王と等しきか。我が備力して物を得べきの處に非ず。如かじ貧
里に往至して肆力に地有つて衣食得易からんには。若し久しく此に住せば或は逼迫せられ、強ひて我
をして作さしめん。」是の念を作し已つて、疾く走つて去りぬ。時に富める長者師子の座に於て、子を
見て便ち識りぬ。心大に歡喜して即ち是の念を作さく、「我が財物庫藏今付する所有り。我常に此の子
を思念するに、之を見るに由無し。而るを忽にして自ら來たり。甚だ我が願に適へり。我年朽ちたり
と雖も、猶故貪惜す。」即ち傍人を遣はして、急に追うて將ゐて還らしむ。爾の時に使者、疾く走り往
いて捉らふ。窮子驚愕して、怨なりと稱して大に喚ばふ、「我相犯さず。何ぞ捉らへらるることを爲る
や。」使者之を執らふること逾急にして、強ひて牽將ゐて還る。時に窮子自ら念はく、「罪無くして囚執
へらる。此れ必定して死なん」と。轉た更に惶怖し、悶絶して地に躡る。父遙に之れを見て使に語つて
言はく、「此の人を須ひじ。強ひて將ゐて來ること勿かれ。冷水を以て面に灑いで醒悟することを得せ
令めよ。復興に語ることを莫かれ」と。所以は何。父其の子の志意下劣なるを知り、自ら豪貴にして子の
爲めに難からるるを知つて、審かに是れ子なりと知れども、而も方便を以て、佗人に語つて是れ我が
子なりと云はず。使者之に語らく、「我今汝を放るす。意の所趣に隨へ」と。窮子歡喜して未曾有なるこ
とを得て、地従り起つて貧里に往至して、以て衣食を求む。爾の時に長者、將に其の子を誘引せんと

欲して、方便を設けて、密かに二人の形色憔悴して、威徳無き者を遣はす。汝彼に詣りて徐くに窮子に語るべし、「此に作處有り、倍して汝に直を與へん」と。窮子若し許さば、將ゐて來りて作さ使めよ。もし何の所作をか欲すると言はば、便ち之れに語るべし、「汝を雇ふことは糞を除らはしめんとなり。我等二人亦汝と共に作さん」と。時に二人の使人即ち窮子を求むるに、既に已に之れを得て具さに上の事を陳ぶ。爾の時に窮子先づ其の價を取つて、尋いで與に糞を除らふ。其の父、子を見て慙んで之を怪しむ。又他日を以て窓牖の中より遙に子の身を見れば、羸瘦憔悴して、糞土塵空、汚穢不淨なり。即ち瓔珞、細軟の衣服、嚴飾の具を脱いで、更に麤弊垢膩の衣を著。塵土に身を全し、右の手に除糞の器を執持して、畏るる所有るに狀たり。諸の作人に語らく、「汝等勤作して懈怠することを得ること勿かれ」と。方便を以ての故に、其の子に近づくことを得たり。後に復告げて言く、「咄や男子、汝常に此にして作せ、復餘に去ること勿かれ。當に汝に價を加ふべし。諸の所須有る罌器、米麴、鹽醋の屬あり、自ら疑ひ難かること莫かれ。亦老弊の使人あり、須るば相給はん。好く自ら意を安うせよ。我は汝が父の如し、復憂慮すること勿かれ。所以は何。我年老大にして汝は少壯なり。汝常に作さん時、欺怠、嗔恨、怨言有ること無かれ。都て汝が此の諸惡有らんを、餘の作人の如くに見じ。今より已後、所生の子の如くせん。」即時に長者、更に與めに字を作つて、之を名づけて兒と爲す。爾の時に窮子此の遇を欣ぶと雖も、猶故自らは客作の賤人なりと謂へり。是れに由るが故に、二十年の中に於

て常に糞を除らはしむ。是れを過ぎて已後、心相體信して入出に難り無し。然れども其の所止は猶ほ本處に在り。世尊、爾の時に長者疾有つて、自ら將に死せんこと久しからじと知つて、窮子に語つて言く、「我今多く金銀珍寶有つて倉庫に盈溢せり。其の中の多少、取與す應き所は、汝悉く之を知れ。我が心是の如し。當に此の意を體るべし。所以は何。今我と汝と便ち爲れ異ならず。宜く用心を加へて、漏失せしむること無かるべし。」爾の時に窮子、即ち教勅を受けて、衆物の金銀珍寶及び諸の庫藏を領知すれども、而も一餐を希取するの意無し。然れども其の所止は故ほ本處に在りて、下劣の心亦未だ捨つること能はず。復少時を経て、父、子の意漸く已に通泰して、大志を成就し、自ら先きの心を鄙んずと知つて、終はらんと欲する時に臨んで、其の子に命じ、並びに親族、國王、大臣、刹利、居士を會むるに、皆悉く已に集りぬ。即ち自ら宣言すらく、「諸君當に知るべし、此れは是れ我が子なり。我が所生なり。某れの城中に於て我を捨てて逃走して、四伶俚辛苦すること五十餘年、其の本の字は某し、我が名は某甲、昔本城に在つて憂ひを懷いて推ね覓めき。忽ちに此の間に於て遇ひ會うて之を得たり。此れ實に我が子なり。我は實に其の父なり。今我が所有の一切の財物は皆是れ子の有なり。先きに出内する所は、是れ子の所知なり。」世尊、是の時に窮子、父の此の言を聞いて、即ち大に歡喜して、未曾有なることを得て、是の念を作さく、「我本心に希求する所有ること無かりき。今此の寶藏、自然にして至りぬ」といはんが如し。世尊、

【四】 伶俚。孤獨の義。

大富長者は即ち是れ如來なり。我等は皆佛子に似たり。如來常に我等を爲れ子なりと説きたまへり。世尊、我等三苦を以ての故に、生死の中に於て、諸の熱惱を受け、迷惑無知にして小法に樂著せり。今日世尊、我等をして思惟して諸法の戲論の糞を蠲除せしめたまふ。我等中に於て勤加精進して、涅槃に至る一日の價を得たり。既に此れを得已つて、心大に歡喜して、自ら以て足りぬと爲し、便ち自ら謂つて言はく、佛法の中に於て、勤め精進するが故に、所得弘多なりしと。然るに世尊、先より我等が心弊欲に著し小法を樂ふを知ろしめして、便ち縱し捨てられて、爲に汝等當に如來の知見、寶藏の分有るべしと分別したまはず。世尊方便力を以て如來の智慧を説きたまふ。我等佛に従ひたてまつりて、涅槃一日の價を得て、以て大いに得たりと爲して、此の大乗に於て志求有ること無かりき。我等又如來の智慧に因りて、諸の菩薩の爲に開示演説せしかども、而も自らは此れに於て志願有ること無かりき。所以は何佛、我等が心に小法を樂ふを知ろしめして、方便力を以て我等に隨つて説きたまふ。而も我等は眞に是れ佛子なりと知らず。今我等方に知んぬ、世尊は佛の智慧に於て慍惜したまふ所無し。所以は何、我等昔より來、眞に是れ佛子なれども、而も但小法を樂ふ。若し我等大を樂ふの心有らましかば、佛則ち我が爲に大乘の法を説きたまはん。此の經の中に唯一乘を説きたまふ。而も昔菩薩の前に於て、聲聞の小法を樂ふ者を毀訾したまへども、然も佛實には大乘を以て教化したまへり。此の故に我等説く、本心に希求する所有ること無かりしかども、今法王の大寶、自然にして至

れり。佛子の得べき所の者は皆已に之を得たり。」

爾の時に摩訶迦葉、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、

「我等今日、佛の音教を聞いて、歡喜踊躍して、未曾有なることを得たり。

佛聲聞、當に作佛することを得べしと説きたまふ。無上の寶聚、求めざるに自ら得たり。

譬へば童子の、幼稚無識にして、父を捨てて逃逝して、遠く他土に到りぬ。

諸國に周流すること、五十餘年、其の父憂念して、四方に推ね求む。

之を求むるに既に疲れて、一城に頓止す。舍宅を造立して、五欲自ら娛む。

其の家巨に富んで、諸の金銀、硨磲碼磲、眞珠琉璃多く、

象馬牛羊、輦輿車乘、田業僮僕、人民衆多なり。

出入息利すること、乃ち他國に徧く、商估賈人、處として有らざること無し。

千萬億の衆、圍繞し恭敬し、常に王者に、愛念せらるることを爲、

羣臣豪族、皆共に宗重し、諸の縁を以ての故に、往來する者衆し。

豪富なることは是の如くにして、大力勢有り、而も年朽邁して、益子を憂念す。

夙夜に惟念すらく、「死の時將に至らんとす。

癡子我を捨てて、五十餘年、庫藏の諸物、當に之を如何がすべき。」

【五】(原文)。無上寶聚、不求自得。

爾の時に窮子、衣食を求索して、邑從り邑に至り、國從り國に至る。

或は得る所有り、或は得る所無し、飢餓羸瘦して、體には瘡癬を生ぜり。

漸次に經歷して、父の住せる城に到り、傭賃展轉して、遂に父の舍に至る。

爾の時に長者、其の門の内に於て、大寶帳を施こして、師子の座に處し、

眷屬圍繞し、諸人侍衛し、或は金銀、寶物を計算し、

財産を出内し、注記券疏する有り。窮子父の、豪貴尊嚴なるを見て、

謂はく「是れ國王か、若しは國王と等しきか」と、驚怖して自ら怪む、何が故ぞ此に至れる。

覆かに自ら念言すらく、「我若し久しく住せば、或は逼迫せられ、強ひて驅つて作さしめん。」

是を思惟し已つて、馳走して去りぬ。貧里を借問して、往て傭作せんと欲す。

長者は是の時に、師子の座に在りて、遙かに其の子を見て、黙して之を識る。

即ち使者に敕して、追ひ捉らへて將ゐて來らしむ。窮子驚き喚ばはりて、迷悶して地に躡る。

「是の人我を執らふ。必ず當に殺さるべし。何ぞ衣食を用つて、我をして此に至らしむるや。」

長者子の、愚癡狹劣にして、我が言を信せず、是れ父なりと信せざるを知らず。

即ち方便を以て、更に餘人の、眇目矇陋にして、威徳無き者を遣はす。

「汝之に語つて、云ふべし當に相雇うて、諸の糞穢を除はしむべし、倍して汝に價を與へん」と。

窮子之を聞いて、歡喜し隨ひ來り、爲に糞穢を除らひ、諸の房舍を淨む。

長者牖より、常に其の子を見て、子の愚劣にして、樂つて鄙事を爲すを念ふ。

是に長者、弊垢の衣を著、除糞の器を執つて、子の所に往き到り、

方便して附近し、語らひて勸作せしむ。「既に汝に價を益し、并に足に油を塗り、

飲食充足し、薦席厚煖ならしめん。」是の如く苦言すらく、「汝當に勸作すべし」と。

又以て輕語すらく、「若を我が子の如くせん」と。長者智有つて、漸く入出せしめ、

二十年を経て、家事を執作せしむ。其れに金銀、眞珠玻瓈、

諸物の出入を示して、皆令知せしむ。猶ほ門外に處し、草庵に止宿して、

自ら貧事を念ふ、「我には此の物無し」と。父子の心、漸く已に曠大なるを知つて、

財物を與へんと欲して、即ち親族、國王大臣、刹利居士を聚めて、

此の大衆に於て、説くらく「是れ我が子なり。我を捨てて他行して、五十歳を経たり。

子を見てより來、已に二十年。昔某の城に於て、是の子を失ひき。

同行し求索して、遂に此に來至せり。凡そ我が所有の、舍宅人民、

悉く以て之れに付す、其の所用を恣にすべし」と。子念はく「昔は貧しくして、志意下劣なりき。

今は父の所に於て、大に珍寶、并に舍宅、一切の財物を獲たり」と。

甚だ大に歡喜して、未曾有なることを得るが如し。佛も亦是の如し、我が小を樂ふを知ろしめして、

未だ曾て説いて、「汝等作佛すべし」と言はず。而も我等をば、「諸の無漏を得て、

小乘を成就する、聲聞の弟子なり」と説きたまふ。佛我等に敕して、最上の道を説かしたまふ。

「此れを修習する者は、當に成佛することを得べし」と。我佛の敕を承けて、大菩薩の爲に、

諸の因縁、種種の譬喩、若干の言辭を以て、無上道を説く。

諸の佛子等、我に従つて法を聞いて、日夜に思惟し、精勤修習す。

是の時諸佛、即ち其れに記を授けたまふ、「汝來世に於て、當に作佛することを得べし」と。

一切諸佛の、祕藏の法をば、但菩薩の爲に、其の實事を演べて、

我が爲には、斯の眞要を説きたまはず。彼の窮子の、其の父に近づくことを得て、

諸物を知ると雖も、心に希取せざるが如く、我等、佛法の寶藏を説くと雖も、

自ら志願無きこと、亦復是の如し。我等内の滅を、自ら足ることを爲たりと謂うて、

唯此の事を了つて、更に餘事無し。我等若し、佛の國土を淨め、

衆生を教化するを聞いては、都て欣樂無かりき。所以は何。「一切の諸法は、

皆悉く空寂にして、無生無滅、無大無小、無漏無爲なり。」

是の如く思惟して、喜樂を生ぜず。我等長夜に、佛の智慧に於て、

貧無く著無く、復志願無し。而も自ら法に於て、是れ究竟なりと謂ひき。

我等長夜に、空法を修習して、三界の、苦惱の患を脱がることを得、

最後身、有餘涅槃に住せり。佛の教化したまふ所は、得道虚しからず。

則ち已に、佛の恩を報ずることを得たりと爲す。我等、諸の佛子等の爲に、

菩薩の法を説いて、以て佛道を求めしむと雖も、而も是の法に於て、永く願樂無かりき。

導師捨てられたることは、我が心を觀じたまふが故に、初め勸進して、實の利有りとな説きたまはず。

富める長者の、子の志の劣なるを知つて、方便力を以て、其の心を柔伏して、

然る後乃し、一切の財寶を付するが如く、佛も亦是の如く、希有の事を現じたまふ。

小を樂ふ者なりと知ろしめして、方便力を以て、其の心を調伏して、乃し大智を教へたまふ。

我等今日、未曾有なることを得たり。先きの所望に非ざるを、而も今自ら得ること、

彼の窮子の、無量の寶を得るが如し。世尊、我今、道を得果を得、

無漏の法に於て、清淨の眼を得たり。我等長夜に、佛の淨戒を持ちて、

始めて今日に於て、其の果報を得。法王の法の中に、久しく梵行を修して、

今無漏、無上の大果を得。我等今者、眞に是れ聲聞なり。

佛道の聲を以て、一切をして聞かしむべし。我れ等今者、眞に阿羅漢なり。

諸の世間、天人魔梵に於て、普く其の中に於て、應に供養を受くべし。

世尊は大恩まします、希有の事を以て、憐愍教化して、我等を利益したまふ。

無量億劫にも、誰れか能く報する者あらん。手足をもつて供給し、頭頂をもつて禮敬し、

一切をもつて供養すとも、皆報すること能はじ。若しは以て頂戴し、兩肩に荷負して、

恒沙劫に於て、心を盡くして恭敬し、又美膳、無量の寶衣、

及び諸の臥具、種種の湯藥を以てし、牛頭旃檀、及び諸の珍寶、

これを以て塔廟を起て、寶衣を地に布き、斯の如き等の事、以て用つて供養すること、

恒沙劫に於てすとも、亦報すること能はじ。諸佛は希有にして、無量無邊、

不可思議の、大神通力まします。無漏無爲にして、諸法の王なり。

能く下劣の爲に、斯の事を忍び、取相の凡夫に、宜しきに隨つて爲に説きたまふ。

諸佛は法に於て、最自在を得たまへり。諸の衆生の、種種の欲樂、

及び其の志力を知ろしめして、堪任する所に隨つて、無量の喩を以て、而も爲に法を説きたまふ。

諸の衆生の、宿世の善根に隨ひ、又成熟と、未成熟との者を知ろしめし、

種種に籌量し、分別し知ろしめし已つて、一乗の道に於て、宜しきに隨つて三と説きたまふ。』

卷の第三

藥草喩品第五

爾の時に世尊、摩訶迦葉及び諸の大弟子に告げたまはく、「善哉善哉、迦葉、善く如來の眞實の功德を説く。誠に所言の如し。如來復無量無邊阿僧祇の功德有り。汝等若し無量億劫に於て説くとも盡くすこと能はじ。迦葉當に知るべし、如來は是れ諸法の王なり、若し所説有るは皆虚しからず。一切の法に於て、智の方便を以て之を演説す。其の所説の法は、皆悉く (一)一切智地に到らしむ。如來は一切諸法の歸趣する所を觀知し、亦一切衆生の深心の所行を知つて通達無礙なり。又諸法に於て究盡明了にして、諸の衆生に一切の智慧を示す。迦葉、譬へば、三千大千世界の山川谿谷の土地に生ひたる所の卉木、叢林及び諸の藥草、種類若干にして名色各異なり。密雲彌布して徧く三千大千世界に覆ひ、一時に等しく溍ぐ。其の澤普く卉木、叢林及び諸の藥草の小根、小莖、小枝、小葉、中根、中莖、中枝、中葉、大根、大莖、大枝、大葉に洽ふ。諸樹の大小、上中下に隨つて各受くる所有り。一雲の雨らす所、

【一】一切智地。智は佛智なり、實相の一理を究盡するの智を云ふ。地は喩へなり。實相の一理能く諸法を生ずること大地の萬物を生ずるが如くなるを云ふ。この實相の一理即ち佛の智體なるが故に直ちに實相と呼んで智地と稱す。故に一切智地は諸法實相と云ふに同じきなり。

其の種性に稱つて生長することを得て、華果敷け實る。一地の所生、一雨の所潤なりと雖も、而も諸の草木各差別有るが如し。迦葉當に知るべし、如來も亦復是の如し。世に出現すること大雲の起るが如く、大音聲を以て普く世界の天人阿修羅に徧せること、彼の大雲の徧く三千大千國土を覆ふが如し。大衆の中に於て是の言を唱ふ、我は是れ如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛世尊なり。未だ度せざる者をば度せしめ、未だ解せざる者をば解せしめ、未だ安せざる者をば安せしめ、未だ涅槃せざる者をば涅槃せしむ。今世後世、實の如く之れを知る。我は是れ一切知者、一切見者、知道者、開道者、說道者なり。汝等天人阿修羅衆、皆應に此に到るべし。法を聽かんが爲の故なり。爾の時に無數千萬億種の衆生、佛所に來至して法を聽く。如來時に、是の衆生の、諸根の利鈍、精進懈怠を觀じ、其の堪ふる所に隨つて、爲に法を説くこと種種無量にして、皆歡喜し快く善利を得せしむ。此の諸の衆生、是の法を聞き已つて、現世安穩にして、後に善處に生じ、道を以て樂を受け、亦法を聞くことを得。既に法を聞き已つて諸の障礙を離れ、諸法の中に於て力の能ふる所に任せて、漸く道に入ることを得。彼の大雲の一の切の卉木、叢林及び諸の藥草に雨るに、其の種性の如く、具足して潤を蒙り、各生長することを得るが如し。如來の説法は一相一味なり。謂は所る 解脱相、離相、滅相なり。究竟して一切種智に至る。其れ衆生有つ

【二】(原文)。現世安穩、後生善處。

【三】解脱相等。この三相は上の一相を承けて説く、一相の中の三相なり、解脱相とは生

て如來の法を聞いて、若しは持ち讀誦し説の如く修行せんに、得る所の功德自ら覺知せず。所以は何唯如來のみ有つて、此の衆生の種、相、體、性、何の事を念じ、何の事を思し、何の事を修し、云何に念じ、云何に思し、云何に修し、何の法を以て念じ、何の法を以て思し、何の法を以て修し、何の法を以て何の法を得るといふことを知れり。衆生の種種の地に住せるを、唯如來のみ有つて如實に之れを見て明了無礙なり。彼の卉木、叢林、諸の藥草等の、而も自ら上中下の性を知らざるが如し。如來は是れ一相一味の法なりと知れり、所謂解脱相、離相、滅相、究竟涅槃、常寂滅相にして、終に空に歸す。佛是れを知り已れども、衆生の心欲を觀じて、而も之を將護す。是の故に即ち爲に一切種智を説かず。汝等迦葉、甚だ爲れ希有なり。能く如來の隨宜の説法を知つて、能く信じ能く受く。所以は何諸佛世尊の隨宜の説法は、解り難く知り難ければなり。」

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『有を破する法王、世間に出現して、衆生の欲に隨つて、種種に法を説く。』

如來は尊重にして、智慧深遠なり。久しく斯の要を默して、務いで速に説かず。智有るは若し聞いて、則ち能く信解し、智無きは疑悔して、則ち永く失ふべし。

死を解脱したる相なり。離相とは解脱をも離したる相なり。滅相とはその離したるものも亦滅無なるの相なり。畢竟唯一實相なるを一相と云ふなり。

【四】有。二十五有を云ふ、佛は二十五三昧を以て二十五有を破して法中の王と爲るなり。

是の故に迦葉、力に随つて爲に説いて、種種の縁を以て、正見を得せしむ。

迦葉當に知るべし、譬へば大雲の、世間に起つて、徧く一切を覆ふに、

慧雲潤を含み、電光晃り曜き、雷聲遠く震ひて、衆をして悦豫せしめ、

日光掩ひ蔽して、地の上清涼に、雲垂布して、承攬す可きが如し。

其の雨普等にして、四方俱に下り、流澍すること無量にして、率土充ち洽ふ。

山川險谷の、幽邃に生ひたる所の、卉木藥草、大小の諸樹、百穀苗稼、甘蔗蒲萄、

雨の潤す所、豊にして足らざること無し。乾地普く洽ひ、藥木並に茂る。

其の雲より出づる所の、一味の水に、草木叢林、分に随つて潤を受く。

一切の諸樹、上中下等しく、其の大小に稱つて、各生長することを得。

根莖枝葉、華果光色、一雨の及ぼす所、皆鮮澤なることを得。

其の體相、性の大小に分れたるが如く、潤す所是れ一なれども、而も各滋茂るが如し。

佛も亦是の如し、世に出現すること、譬へば大雲の、普く一切を覆ふが如し。

既に世に出でぬれば、諸の衆生の爲に、諸法の實を、分別し演説す。

大聖世尊、諸の天人、一切衆の中に於て、而も是の言を宣ぶ、

「我は爲れ如來、兩足の尊なり。世間に起つて、猶は大雲の如し。

一切の、枯槁の衆生に充潤して、皆苦を離れ、安穩の樂、

世間の樂、及び涅槃の樂を得せしむ。諸の天人衆、一心に善く聽け。

皆此に到りて、無上尊を觀るべし。我は爲れ世尊なり。能く及ぶ者無し。

衆生を安穩ならしめんとして、故らに世に現じて、大衆の爲に、甘露の淨法を説く。

其の法は一味にして、解脱涅槃なり。一の妙音を以て、斯の義を演暢す。

常に大衆の爲に、而も因縁を作す。我一切を觀するに、普く皆平等なり。

彼此、愛憎の心有ること無し。我貪著無く、亦た限礙無し。

恒に一切の爲に、平等に法を説く。一人の爲にするが如く、衆多も亦た然かなり。

常に法を演説して、曾て他事無し。去來坐立、終に疲厭せず。

世間に充足すること、雨の普く潤すが如し。貴賤上下、持戒毀戒、

威儀具足せる、及び具足せざる、正見邪見、利根鈍根に、

等く法雨を雨らして、而も懈倦無し。

一切衆生の、我が法を聞く者は、力の受くる所に隨つて、諸の地に住す。

或は人天、轉輪聖王、釋梵諸王に處するは、是れ小の藥草なり。

無漏の法を知つて、能く涅槃を得、六神通を起し、及び三明を得、

獨山林に處し、常に禪定を行じて、緣覺の證を得るは、是れ中の藥草なり。

世尊の處を求めて、我當に作佛すべしと、精進定を行ずるは、是れ上の藥草なり。

又諸の佛子、心を佛道に専らにして、常に慈悲を行じ、自ら作佛せんこと、

決定して疑ひ無しと知る、是れを小樹と名づく。

神通に安住して、不退の輪を轉じ、無量億、百千の衆生を度する、

是の如き菩薩を、名づけて大樹と爲す。

佛の平等の説は、一味の雨の如し。衆生の性に隨つて、受くる所同じからず。

彼の草木の、涼くる所各異なるが如し。佛此の喩を以て、方便して開示す。

種種の言辭をもつて、一法を演説すれども、佛の智慧に於ては、海の一滴の如し。

我法雨を雨らして、世間に充滿す。一味の法を、力に隨つて修行すること、

彼の叢林、藥草諸樹、其の大小に隨つて、漸く増茂して好きが如し。

諸佛の法は、常に一味を以て、諸の世間をして、善く具足することを得、

漸次に修行して、皆道果を得せしめたまふ。聲聞緣覺の、山林に處し、

最後身に住して、法を聞いて果を得る、是れを藥草の、各增長することを得と名づく。

若し諸の菩薩、智慧堅固にして、三界を了達し、最上乘を求むる、

是れを小樹の、増長することを得と名づく。復た禪に住して、神通力を得、
 諸法空を聞いて、心大に歡喜し、無數の光りを放つて、諸の衆生を度すること有り、
 是れを大樹の、増長することを得と名づく。是の如く迦葉、佛の所説の法は、
 譬へば大雲の、一味の雨を以て、人華を潤ほして、各實成ることを得せしむるが如し。
 迦葉當に知るべし、諸の因縁、種種の譬喩を以て、佛道を開示す。
 是れ我が方便なり。諸佛も亦然かなり。今汝等が爲に、最實事を説く。
 諸の聲聞衆は、皆滅度せるに非ず。汝等が所行は、是れ菩薩の道なり。
 漸漸に修學して、悉く當に成佛すべし。』

授記品第六

爾の時に世尊、是の偈を説き已つて、諸の大衆に告げて是の如き言を唱へたまはく、『我が此の弟子摩訶迦葉は、未來世に於て、當に三百萬億の諸佛世尊を奉觀して、供養恭敬し、尊重讚嘆して、廣く諸佛の無量の大法を宣ぶることを得べし。最後身に於て、佛と成ることを得ん。名をば光明如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世閒解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。國をば光徳と名づけ、劫をば大莊嚴と名づけけん。佛の壽は十二小劫、正法世に住すること二十小劫、像法亦住すること二十小劫ならん。國界嚴飾して、諸の穢惡、瓦礫荆棘、便利の不淨無く、其の土平正にして、高下、坑坎、堆阜有ること無けん。瑠璃を地と爲して、寶樹行列し、黃金を繩と爲して、以て道の側りを界ひ、諸の寶華を散じて、周徧して清淨ならん。其の國の菩薩無量千億にして、諸の聲聞衆亦復無數ならん。魔事有ること無く、魔及び魔民有りと雖も、皆佛法を護らん。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

- 【一】 三百萬億。正法華には三千億佛に作る。
- 【二】 光明。正法華には時大光明に作る。(尼波羅本 *Kasmi-Plarai-sa Pradibha*)。
- 【三】 光徳。正法華には建明に作る。(尼波羅本 *Avdhara-Indra*)。
- 【四】 大莊嚴。正法華には弘大に作る。(尼波羅本 *Mahā-yūha*)。
- 【五】 小劫。正法華には佛壽及び住法皆中劫に作る。尼波羅本之に同じ。

『諸の比丘に告ぐ、我佛眼を以て、是の迦葉を見るに、未來世に於て、無數劫を過ぎて、當に作佛することを得べし。而も來世に於て、三百萬億の、

諸佛世尊を、供養し奉觀して、佛の智慧の爲に、淨く梵行を修し、

最上の、二足尊を供養し已つて、一切の、無上の慧を修習し、

最後身に於て、佛と成ることを得ん。其の土清淨にして、瑠璃を地と爲し、

諸の寶樹多くして、道の側りに行列し、金繩道を界ひて、見る者歡喜せん。

常に好き香を出だし、衆の名華を散じて、種種の奇妙なる、これを以て莊嚴と爲し、

其の地平正にして、丘坑有ること無けん。諸の菩薩衆、稱計す可からず。

其の心調柔にして、大神通を逮し、諸佛の、大乘經典を奉持せん。

諸の聲聞衆の、無漏の後身にして、法王の子なる、亦計る可からず。

乃し天眼を以ても、數へ知ること能はじ。其の佛は當に、壽十二小劫なるべし。

正法世に住すること、二十小劫、像法亦住すること、二十小劫ならん。光明世尊、其の事はの

如し。』

爾の時に大目犍連、須菩提、摩訶迦旃延等、皆悉く悚慄し、一心に合掌し、尊顔を瞻仰して、目暫らくも捨てず、即ち共に聲を同うして、偈を説いて言さく、

『大雄猛世尊、諸釋の法王、我等を哀愍したまふが故に、而も佛の音聲を賜へ。』

若し我が深心を知ろしめして、授記せられなば、甘露を以て灑ぐに、熱を除ひて清涼を得るが如くならん。

饑ゑたる國より來つて、忽ちに大王の膳へに遇へらんに、心猶ほ疑懼を懷いて、未だ敢て即ち食せず、

若し復王の教を得ては、然る後に乃し敢て食するが如し。我等も亦是の如し、毎に小乗の過を惟うて、

當に云何にして、佛の無上慧を得べきと知らず。佛の音聲の、我等作佛せんと言ふことを聞くと雖も、

心尚ほ憂懼を懷くこと、未だ敢て便ち食せざるが如し。若し佛の授記を蒙りなば、爾も乃し快く安樂ならん。

大雄猛世尊、常に世間を安せんと欲す。願はくは我等に記を賜へ。饑ゑて教を須つて食するが如くならん。』

爾の時に世尊、諸の大弟子の心の所念を知ろしめして、諸の比丘に告げたまはく、『是の須菩提は當來世に於て、三百萬億那由佗の佛を奉觀して、供養、恭敬、尊重、讚嘆し、常に梵行を修し、菩薩』

【六】 三百萬億那由佗、正法華には八千三百億千垓佛に作る。

道を具して、最後身に於て、佛と成爲ることを得ん。號をば名相如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。劫をば有實と名け、國をば寶生と名づけん。其の土平正にして、頗黎を地と爲し、寶樹莊嚴して、諸の丘坑、沙磧、荆棘、便利の穢れ無く、寶華地に覆ひ、周徧して清淨ならん。其の土の人民皆寶臺珍妙の樓閣に處せん。聲聞の弟子無量無邊にして、算數譬喩の知ること能はざる所ならん。諸の菩薩衆、無數千萬億那由佗ならん。佛の壽は十二小劫、正法世に住すること二十小劫、像法亦住すること二十小劫ならん。其の佛常に虚空に處して、衆の爲に法を説いて、無量の菩薩及び聲聞衆を度脱せん。」

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『諸の比丘衆、今汝等に告ぐ、皆當に一心に、我が所説を聽くべし。』

我が大弟子、須菩提は、當に作佛することを得べし、號をば名相と曰はん。

當に無數、萬億の諸佛を供して、佛の所行に隨つて、漸く大道を具すべし。

最後身に、三十二相を得て、端正殊妙なること、猶ほ寶山の如くならん。

其の佛の國土は、嚴淨第一にして、衆生の見る者、愛樂せずといふこと無し。

- 【七】 名相。正法華には稱嘆に作る。(尼波羅本 Sankham)。
- 【八】 有實。正法華には寶音に作る。(尼波羅本 Ratnāvahāsa)。
- 【九】 寶生。正法華には寶成に作る。(尼波羅本 Ratnāvahāsa)。
- 【一〇】 小劫。正法華は佛壽住法皆中劫に作る、尼波羅本之に同じ。

佛其の中に於て、無量の衆を度せん。其の佛の法の中には、諸の菩薩多く、皆悉く利根にして、不退の輪を轉せん。彼の國は常に、菩薩を以て莊嚴せん。

諸の聲聞衆、稱數す可からず。皆三明を得、六神通を具し、

(二) 八解脱に住して、大威徳有らん。其の佛の説法には、無量の、

神通變化を現じて、不可思議ならん。諸天人、數恒沙の如く、

皆共に合掌して、佛語を聽受せん。其の佛は常に、壽十二小劫なるべし。

正法世に住すること、二十小劫、像法亦住すること、二十小劫ならん。』

爾の時に世尊、復諸の比丘衆に告げたまはく、『我今汝に語る、是の大

迦旃延は、當來世に於て、諸の供具を以て、八千億の佛に供養し奉事して、

恭敬尊重せん。諸佛の滅後に、各塔廟を起てん。高さ千由旬、縱廣正等

にして五百由旬ならん。金、銀、瑠璃、砮磈、瑪瑙、眞珠、玫瑰の七寶を

以て合成し、衆華、瓔珞、塗香、抹香、燒香、繪蓋、幢幡を塔廟に供養せ

ん。是れを過ぎて已後、當に復 二萬億の佛を供養すること亦復是の如く

すべし。是の諸佛を供養し已つて、菩薩道を具して、當に作佛することを得べし、號をば 閻浮那

提金光如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世閒解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。

【二】 八解脱。八背捨の觀想を修して得たることを轉じて

八解脱と名づく、八背捨とは一に内有色相外觀色、二に内

無色相外觀色、三に淨背捨身作證、四に虛空處背捨、五に

識處背捨、六に無所有處背捨、七に非有想非無想背捨、八に

滅受想背捨なり。欲に背き著を捨つるの觀想なり。

【三】 二萬億。正法華には二十億に作る。

【三】 閻浮那提金光。正法華には逮已紫磨金色に作る。○尼波羅本 Janvunakharahisa)

其の土平正にして、玻瓈を地と爲し、寶樹莊嚴し、黄金を細と爲して、以て道の側りを界ひ、妙華地に覆ひ、周徧清淨にして、見る者歡喜せん。四惡道の、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅道無く、多く天人有らん。諸の聲聞衆、及び諸の菩薩、無量萬億にして其の國を莊嚴せん。佛の壽は、(四)十二小劫、正法世に住すること二十小劫、像法亦住すること二十小劫ならん。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、
 『諸の比丘衆、皆一心に聽け。我が所説の如きは、眞實にして異なること無し。』

是の迦旃延は、當に種種の、妙好の供具を以て、諸佛を供養すべし。
 諸佛の滅後に、七寶の塔を起て、亦華香を以て、舍利を供養し、
 其の最後身に、佛の智慧を得て、等正覺を成せん。

國土清淨にして、無量萬億の衆生を度脱し、皆十方に、供養せらるることを爲ん。
 佛の光明、能く勝ざる者無けん。其の佛の號をば、閻浮金光と曰はん。

菩薩聲聞の、一切の有を斷せる、無量無數、其の國を莊嚴せん。』

爾の時に世尊、復大衆に告げたまはく、『我今汝に語る、是の大目犍連は、當に種種の供具を以て、八千の諸佛を供養し、恭敬尊重したてまつるべし。諸佛の滅後、各塔廟を起てて、高さ千由旬、縱廣正等にして五百由旬ならん。金、銀、琉璃、砗磲、瑪瑙、眞珠、玫瑰の七寶を以て合成し、衆華、瓔

【四】十二小劫。正法華には十小劫に作る。

路、塗香、抹香、燒香、繒蓋、幢幡を以て用つて供養せん。是れを過ぎて已後、當に復(二五)にひやまんのかく二百萬億

の諸佛を供養すること亦復是の如くすべし。當に成佛することを得べし。

號をば 多摩羅跋旃檀香如來 應供、正徧知、明行足、善逝、世閒解、

無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。劫をば 喜滿と名づけ、

國をば 意樂と名づけん。其の土平正にして、玻瓈を地と爲し、寶樹莊

嚴し、眞珠華を散じ、周徧清淨にして、見る者歡喜せん。諸の天人多く、

菩薩聲聞、其の數無量ならん。佛の壽は 二十四小劫ならん、正法世に

住すること四十 小劫、像法亦住すること四十小劫ならん。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『我が此の弟子、大目犍連、是の身を捨て已つて、八千、

二百萬億の、諸佛世尊を見たてまつることを得て、佛道の爲の故に、

供養恭敬し、

諸佛の所に於て、常に梵行を修し、無量劫に於て、佛法を奉持せん。

諸佛の滅後に、七寶の塔を起てて、長く 金刹を表はし、華香伎樂

【二五】にひやまんのかく

【二五】二百萬億、正法華には二百億萬佛に作る。

【二六】多摩羅跋旃檀香、正法華には建已金華梅檀香に作る。

【二七】喜滿、正法華には樂滿に作る。 尼波羅本 *Tamapattana (Tamsapatti)*。

【二八】意樂、正法華同じ。 尼波羅本 *Manobhramo*。

【二九】二十四小劫、正法華には二十中劫に作る。

【三〇】小劫、正法華には中劫に作る。

【三一】金刹、塔の露盤の柱頭を刹と云ふ。金幡、金華を以て柱頭を飾るを金刹と名づくるなり。

而も以て、諸佛の塔廟に供養し、漸漸に、菩薩の道を具足し已つて、
意樂國に於て、作佛することを得て、多摩羅、旃檀の香と號づけん。

其の佛の壽命は、二十四劫、常に天人の爲に、佛道を演說せん。

聲聞無量にして、恒河沙の如く、三明六通あつて、大威徳有らん。

菩薩無數にして、志固く精進し、佛の智慧に於て、皆退轉せじ。

佛の滅度の後、正法當に住すること、四十小劫なるべく、像法亦爾かなり。

我が諸の弟子の、威徳具足せる、其の數五百なるも、皆當に授記すべし、未來世に於て、咸く、
成佛することを得ん。

成佛することを得ん。

我及び汝等の、宿世の因縁、吾今當に説くべし、汝等善く聽け。』

化城喻品第七

佛 諸の比丘に告げたまはく、『乃往過去無量無邊不可思議阿僧祇劫、爾の時に佛有ましき、大通智勝如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世閑解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と名づけたまつる。其の國をば 好城と名づけ、劫をば 大相と名づけき。諸の比丘、彼の佛の滅度したまうてより已來、甚だ大いに久遠なり。譬へば、三千大千世界の有ゆるの地種を、假使人有つて、磨りて以て墨と爲し、東方千の國土を過ぎて、乃ち一點を下さん。大さき微塵の如し。又千の國土を過ぎて、復一點を下さん。是の如く展轉して地種の墨を盡くさんが如き、汝等が意に於て云何、是の諸の國土をば、若しは算師、若しは算師の弟子、能く邊際を得て、其の數を知らんや不や。』『不なり世尊。』『諸の比丘、是の人の經る所の國土の、若しは點せると點せざるとを、盡く抹して塵と爲して、一塵を一劫とせんに、彼の佛の滅度したまうてより已來、復是の數に過ぎたること、無量無邊百千萬億阿僧祇劫なり。我如來の知見力を以ての故に、彼の久遠を觀ること猶ほ今日の如し。』

化城喻品第七

- 【一】 大通智勝。正法華には大通衆慧に作る。(尼波羅本 *Atthapannabhaya*)
- 【二】 好城。正法華には大植稼に作る。(尼波羅本 *Stambha*)
- 【三】 大相。正法華には所在形色に作る。(尼波羅本 *Maha-rupa*)
- 【四】 三千大千等。この三千大千世界の塵點譬喩を連門の三千塵點と云ふ、十方諸佛の本地の久遠なり。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『我過去世の、無量無邊劫を念ふに、佛兩足尊有しき、大通智勝と名づけたてまつる。』

如し人の力を以て、三千大千の土を磨して、此の諸の地種を盡くして、皆悉く以て墨と爲して、千の國土を過ぎて、乃ち一の塵點を下し、是の如く展轉し點して、此の諸の塵の墨を盡くさん。

是の如き諸の國土の、點せると點せざる等を、復盡く抹して塵と爲して、一塵を一劫と爲さん。此の諸の微塵の數よりも、其の劫は復是れに過ぎん。彼の佛の滅度したまうてより來、是の如く無量劫なり。

如來の無礙智、彼の佛の滅度、及び聲聞菩薩を知ること、今の滅度を見るが如し。

諸の比丘當に知るべし、佛智は淨くして微妙に、無漏無所礙にして、無量劫を通達す。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『大通智勝佛は、壽五百四十萬億那由佉劫なり。其の佛、本道場に坐して、魔軍を破し已つて、阿耨多羅三藐三菩提を得たまふに垂とするに、而も諸佛の法現在前せず。

是の如く一小劫、乃至十小劫、結跏趺坐して、身心動じたまはず。而も諸佛の法、猶ほ在前せず。爾の時に切利の諸天、先きより彼の佛の爲に菩提樹の下に於て師子の座を敷けり。高さ一由旬なり。佛此の座に於て當に阿耨多羅三藐三菩提を得たまふべしと。適めて此の座に坐したまふ時、諸の梵天王、衆の天華を雨らすこと、面ごとに百由旬なり。香ばしき風時に來りて、萎める華を吹き去つて、

更に新しき者を雨らす。是の如く絶えず十小劫を満てて佛を供養したてまつる。乃至滅度まで常に此の華を雨らしき。四王の諸天、佛を供養したてまつらんが爲に常に天鼓を撃つ。其の餘の諸天、天の伎樂を作すこと十。小劫を満す。滅度に至るまで亦復是の如し。諸の比丘、大通智勝佛十小劫を過ぎて諸佛の法乃し現在前して、阿耨多羅三藐三菩提を成じたまひき。其の佛未だ出家したまはざりし時に十六の子有り、其の第一をば名を智積と曰ふ。諸子各種種の珍異玩好の具有り。父の阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまへりと聞いて、皆所珍を捨てて佛所に往詣す。諸母涕泣して隨つて之を送る。其の祖轉輪聖王、一百の大員及び餘の百千萬億の人民と與に、皆共に圍繞して隨つて道場に至る。咸く大通智勝如來に親近して、供養恭敬、尊重、讚嘆したてまつらんと欲し、到り已つて、頭面に足を禮し、佛を繞りたてまつること畢已つて一心に合掌し、世尊を瞻仰して、偈を以て頌して曰さく、

『大威徳世尊、衆生を度せんが爲の故に、無量億歳に於て、爾も乃し成佛することを得たまへり。諸願已に具足したまふ、善哉吉無上なり、世尊は甚だ希有なり、一たび坐したまうてより十小劫、身體及び手足、靜然として安んじて動じたまはず。其の心常に憍怕にして、未だ曾て散亂有らず。究竟して永く寂滅し、無漏の法に安住したまへり。今者世尊の、安穩に佛道を成じたまふを見たてまつりて、

【五】小劫。正法華には中劫に作る。

我等善利を得。稱慶して大に歡喜す。衆生は常に苦惱し、盲瞑にして導師無し。

苦盡の道を識らず、解脱を求むることを知らず、長夜に惡趣を増し、諸の天衆を減損す。

冥きより冥きに入りて、永く佛の名を聞かず。今佛最上の、安穩無漏の法を得たまへり。

我等及び天人、爲めて最大利を得ん。是の故に咸く稽首して、無上尊に歸命したてまつる。

爾の時に十六王子、偈をもつて佛を讚めたてまつること已つて、世尊に法輪を轉じたまへと勸請

し、咸く是の言を作さく、『世尊法を説きたまはば、安穩ならしむる所多からん。諸天人民を憐愍し饒

益したまへ。』重ねて偈を説いて言さく、

『世尊は等倫無し、百福をもつて自ら莊嚴し、無上の智慧を得たまへり、願はくは世間の爲に説

いて、

我等、及び諸の衆生類を度脱し、爲に分別し顯示して、是の智慧を得せしめたまへ。

若し我等佛を得ば、衆生亦復然かならん。世尊は衆生の、深心の所念を知り、

亦所行の道を知り、又智慧の力を知ろしめせり。欲樂及び修福、宿命所行の業、

世尊は悉く知ろしめし已れり、當さに無上輪を轉じたまふべし。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『大通智勝佛、阿耨多羅三藐三菩提を得たまひし時、十方各五百萬

億の諸佛の世界六種に震動し、其の國の中閉幽冥の處、日月の威光も照らすこと能はざる所、而も皆

大に明かなり。其の中の衆生、各相見ることを得て、咸く是の言を作さく、「此の中云何ぞ忽ちに衆生を生せるや。」又其の國界の諸天の宮殿、乃至梵宮まで、六種に震動し、大光普く照して、世界に徧滿し、諸天の光りに勝されり。爾の時に東方五百萬億の諸の國土の中の梵天の宮殿、光明照耀して、常の明に倍せり。諸の梵天王各是の念を作さく、「今者宮殿の光明昔より未だ有らざる所なり。何の因縁を以てか、而も此の相を現する。」是の時に諸の梵天王即ち各相詣つて、共に此の事を議る。時に彼の衆の中に一りの大梵天王有り、救一切と名づく、諸の梵衆の爲に偈を説いて言はく、

「我等の諸の宮殿、光明昔より未だ有らず。此れは是れ何の因縁ぞ、宜しく各共に之を求むべし。」

爲れ大徳の天生せるや、爲れ佛の世間に出でたまへるや、而も此の大光明は、徧く十方を照らせり。」

爾の時に五百萬億の國土の諸の梵天王、宮殿と與に俱に、各衣械を以て諸の天華を盛つて、共に西方に詣つて、是の相を推尋するに、大通智勝如來の道場菩提樹の下に處し、師子の座に坐したまうて、諸の天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の恭敬し圍繞したてまつるを見、及び十六王子の佛に轉法輪を請じたてまつるを見る。即時に諸の梵天王、頭面に佛を繞し、繞ること百千匝して、即ち天華を以て佛の上に散じたてまつる。其の所散の華、須彌山の如し、并に以て佛の菩提樹に

【六】 數一切。正法華には護群生に作る。(尼波羅本) サツトワトライツル (Sattvatrayitṣu) サルガ

供養す。其の菩提樹、高き十由旬なり。華を供養すること已つて、各宮殿を以て彼の佛に奉上して是の言を作さく、「惟我等を哀愍し饒益せられて、獻つる所の宮殿願はくは納處を垂れたまへ。」時に諸の梵天王、即ち佛前に於て一心に聲を同うして、偈を以て頌して曰さく、

「世尊は甚だ希有なり、値遇したてまつることを得べきこと難し。無量の功德を具して、能く一切を救護し、

天人の大師として、世間を哀愍し、十方の諸の衆生、普く皆饒益を蒙る。

我等從來せる所は、五百萬億の國なり、深禪定の樂を捨てたることは、佛を供養したてまつらんが爲の故なり。

【七】 高き十由旬。正法華には高四十里に作る。

我等先世の福あつて、宮殿甚だ嚴飾せり、今以て世尊に奉る、惟願はくは哀れんで納受したまへ。」爾の時に諸の梵天王、偈をもつて佛を讚めたてまつること已つて、各是の言を作さく、「惟願はくは世尊法輪を轉じて衆生を度脱し、涅槃の道を開きたまへ。」時に諸の梵天王、一心に聲を同うして、偈を説いて言さく、

「世雄兩足尊、惟願はくは法を演説し、大慈悲の力を以て、苦惱の衆生を度したまへ。」

爾の時に大通智勝如來默然として之を許したまふ。又諸の比丘、東南方の五百萬億の國土の諸の大梵王、各自ら宮殿の光明の照耀して昔より未だ有らざる所なるを見て、歡喜踊躍して、希有の心

を生じ、即ち各相詣つて共に此の事を議る。時に彼の衆の中に一りの大梵天王有り、名づけて大悲と曰ふ。諸の梵衆の爲に偈を説いて言はく、

「是の事何の因縁あつて、此の如き相を現するや。我等が諸の宮殿、光明昔より未だ有らず。爲れ大徳の天の生せるや、爲れ佛の世間に出でたまへるや。未だ曾て此の相を見ず、當に共に一心に求むべし。」

千萬億の土を過ぐとも、光りを尋ねて共に之れを推ねん。多くは是れ佛の世に出でて、苦の衆生を度脱したまふならん。

爾の時に五百萬億の諸の梵天王、宮殿と與に俱に、各衣祴を以て諸の天華を盛りて、共に西北方に詣つて是の相を推尋するに、大通智勝如來の道場菩提樹の下に處し、師子の座に坐したまうて、諸の天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の恭敬し圍繞したてまつるを見、及び十六王子の佛に轉法輪を請じたてまつるを見る。時に諸の梵天王、頭面に佛を禮し、繞ること百千匝して、即ち天華を以て佛の上に散じたてまつる。所散の華、須彌山の如し。并に以て佛の菩提樹を供養す。華を供養すること已つて、各宮殿を以て彼の佛に奉上して是の言を作さく、「惟我等を哀愍し饒益せられて、獻つる所の宮殿願はくは納受を垂れたまへ。」爾の時に諸の梵天王、即ち佛前に於て一心に聲を同うして、偈を以て頌して曰さく、

【八】大悲。正法華には最慈哀に作る。(尼波羅本 *Adhara trankrīṅka*)。

「聖主天中王、迦陵頻伽の聲ましまして、衆生を哀愍したまふ者、我等今敬禮したてまつる。世尊は甚た希有にして、久遠に乃し一たび現じたまふ。一百八十劫、空く過ぎて佛有しなすこと無し。」

三惡道充滿し、諸天衆減少せり。今佛世に出でて、衆生の爲に眼と作り、

世間の歸趣する所として、一切を救護し、衆生の父と爲つて、哀愍し饒益したまふ者なり。

我等宿福の慶ありて、今世尊に値ひたてまつることを得たり。

爾の時に諸の梵天王、偈をもつて佛を讚めたてまつること已つて、各是

の言を作さく、「惟願はくは世尊、一切を哀愍して、法輪を轉じ衆生を度脱

したまへ。」時に諸の梵天王、一心に聲を同じうして偈を説いて言さく、

「大聖法輪を轉じて、諸法の相を顯示し、苦惱の衆生を度して、大歡喜

を得せしめたまへ。」

衆生此の法を聞かば、道を得若しくは天に生じ、諸の惡道減少し、忍善の者増益せん。」

爾の時に大通智勝如来、默然として之を許したまふ。又諸の比丘、南方五百萬億の國土の諸の大

梵王、各自ら宮殿の光明の照耀して昔より未だ有らざる所なるを見て、歡喜踊躍し希有の心を生じ

て、即ち各相詣つて共に此の事を議る。何の因縁を以てか我等が宮殿此の光耀有る。而も彼の衆の中

【九】迦陵頻伽。亦歌羅頻伽 (Kāraṇḍikā) とも云ふ、好聲、妙聲、美妙聲、美音、哀聲等の諸翻あり、鳥の名なり。衆中に在つて能く鳴き、微妙の聲衆鳥に勝ると云ふ、以て佛の音聲に喩ふるなり。(羯毘伽羅、加畏伽羅、加蘭迦)

に一りの大梵天王有り、名を妙法と曰ふ。諸の梵衆の爲に偈を説いて言はく、

「我等が諸の宮殿、光明甚だ威曜せり。此れ因縁無きに非ず、是の相宜しく之を求むべし。

百千劫を過ぐれども、未だ曾て此の相を見ず。爲れ大徳の天の生せる

【一〇】妙法。正法華には善法に作る。(尼波羅本 Siddharma)

にや、爲れ佛の世間に出でたまへるにや。」
爾の時に五百萬億の諸の梵天王、宮殿と與に俱に、各衣袂を以て諸の天華を盛つて、共に北方に詣つて是の相を推尋するに、大通智勝如来の道場菩提樹の下に處し、師子の座に坐したまひ、諸の天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の恭敬圍繞したてまつるを見、及び十六王子の佛に轉法輪を請じたてまつるを見る。時に諸の梵天王、頭面に佛を禮し、繞ること百千匝して、即ち天華を以て佛の上に散じたてまつる。散ずる所の華、須彌山の如し。并に以て佛の菩提樹に供養す。華を供養すること已つて、各宮殿を以て彼の佛に奉上して、是の言を作さく、「惟我等を哀愍し饒益せられて、獻る所の宮殿願はくは納受を垂れたまへ。」爾の時に諸の梵天王、即ち佛前に於て一心に聲を同うして、偈を以て頌して曰さく、

「世尊は甚だ見たてまつること難し、諸の煩惱を破したまへる者なり、百三十劫を過ぎて、今乃し一たび見たてまつることを得。」

諸の饑渴の衆生に、法雨を以て充滿せしめたまふ、昔より未だ曾て觀ざる所の、無量の智慧ま

しませる者、

優曇鉢華の如くなるに、今日乃し值遇したてまつる。我等諸の宮殿、光りを蒙るが故に嚴飾せり、

世尊大慈悲をもつて、惟願はくは納受を垂れたまへ。」

爾の時に諸の梵天王、偈をもつて佛を讚めたてまつること已つて、各是の言を作さく、「惟願はく

は世尊、法輪を轉じて、一切世間の諸天、魔、梵、沙門、婆羅門をして皆安穩なることを獲て、度脱

することを得せしめたまへ。」時に諸の梵天王、一心に聲を同うして、偈を以て頌して曰さく、

「惟願はくは天人尊、無上の法輪を轉じ、大法の鼓を撃ち、大法の螺を吹き、

普く大法の雨を雨らして、無量の衆生を度したまへ。」

我等咸く歸請したてまつる、當に深遠の音を演べたまふべし。」

爾の時に大通智勝如来、默然として之を許したまふ。西南方、乃至下方も、亦復是の如し。爾の時

に上方五百萬億の國土の諸の大梵王、皆悉く自ら止る所の宮殿の光明威曜ありて、昔より未だ有

らざる所なるを觀て、歡喜踊躍し希有の心を生じて、即ち各相詣つて、共に此の事を議る。「何の因

縁を以てか我等が宮殿斯の光明有る。」時に彼の衆の中に一りの大梵天王有り、名を尸棄と曰ふ。

諸の梵衆の爲めに偈を説いて言はく、

「今何の因縁を以てか、我等の諸の宮殿、威徳光明曜き、嚴飾せること未曾有なる。」

【二】尸棄。正法華には妙識に作る。(尼波羅本のSiddhi)。

是の如きの妙相は、昔より未だ聞き見ざる所なり。爲れ大徳の天の生せるにや、爲れ佛の世間に
出でたまへるにや。

爾の時に五百萬億の諸の梵天王、宮殿と與に俱に、各衣械を以て諸の天華を盛つて、共に下方に詣つて是の相を推尋するに、大通智勝如來の道場菩提樹の下に處し、師子の座に坐したまひ、諸の天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の恭敬圍繞したてまつるを見、及び十六王子の佛に轉法輪を請じたてまつるを見る。時に諸の梵天王、頭面に佛を禮し、繞ること百千匝して、即ち天華を以て佛の上に散じたてまつる。散ずる所の華、須彌山の如し。并に以て佛の菩提樹に供養す。華を供養すること已つて、各宮殿を以て彼の佛に奉上して是の言を作さく、「惟我等を哀愍し饒益せられて、獻つる所の宮殿願はくは納處を垂れたまへ。」時に諸の梵天王、即ち佛前に於て一心に聲を同うして、偈を以て頌して曰さく、

「善哉諸佛、救世の聖尊を見たてまつる。能く三界の獄従り、勉めて諸の衆生を出だしたまふ。

普智天人尊、羣萌類を哀愍して、能く甘露の門を開いて、廣く一切を度したまふ。

昔の無量劫に於て、空しく過ぎて佛有しますこと無し。世尊未だ出でたまはざる時は、十方常に
闍暝にして、

三惡道増長し、阿修羅亦盛んなり。諸の天衆轉た減じて、死して多く惡道に墮つ。

【三】羣萌類。羣生類と云ふに
同じ。

佛に從つて法を聞かず、常に不善の事を行じ、色力及び智慧、斯れ等皆減少す。罪業の因縁の故に、樂及び樂の想を失ふ。

邪見の法に住して、善の儀則を識らず。佛の所化を蒙らずして、常に惡道に墮つ。

佛は爲れ世間の眼なり、久遠に時に乃し出でたまふ。諸の衆生を哀愍し、故らに世間に現じて、超出して正覺を成じたまへり。我等甚た欣慶す。及び餘の一切の衆も、喜んで未曾有なりと歎す。

我等が諸の宮殿、光りを蒙るが故に嚴飾せり。今以て世尊に奉る、惟哀れみを垂れて納受したまへ。願はくは此の功德を以て、普く一切に及ぼして、我等と衆生と、皆共に佛道を成せん。」

爾の時に五百萬億の諸の梵天王、偈をもつて佛を讚めたてまつること已つて、各佛に白して言さく、

惟願はくは世尊、法輪を轉じたまへ。安穩ならしむる所多く、度脱する所多からん。」時に諸の梵天王、而も偈を説いて言さく、

「世尊法輪を轉じ、甘露の法鼓を撃つて、苦惱の衆生を度し、涅槃の道を開示したまへ。惟願はくは我が請を受けて、大微妙の音を以て、哀愍して、無量劫に習ひたまへる法を敷演したまへ。」

爾の時に大通智勝如来、十方の諸の梵天王及び十六王子の請を受けて、即時に(三)三たび(四)十二行の法輪を轉じたまふ。若しは沙門、婆羅門、

【三】三たび。示一轉、勸一轉、證一轉、これを三たび轉ずと云ふなり。示とは苦集滅道の諦理を示すなり。勸とは苦集は斷すべく滅道は修すべしと

若しは天、魔、梵、及び餘の世間の轉ずること能はざる所なり。謂はゆる是れ苦、是れ苦の集、是れ苦の滅、是れ苦の滅する道なり。及び廣く十二因縁の法を説きたまふ。無明は行に縁たり、行は識に縁たり、識は名色に縁たり、名色は六入に縁たり、六入は觸に縁たり、觸は受に縁たり、受は愛に縁たり、愛は取に縁たり、取は有に縁たり、有は生に縁たり、生は老死の憂悲苦惱に縁たり。無明滅すれば則ち行滅す、行滅すれば則ち識滅す、識滅すれば則ち名色滅す、名色滅すれば則ち六入滅す、六入滅すれば則ち觸滅す、觸滅すれば則ち受滅す、受滅すれば則ち愛滅す、愛滅すれば則ち取滅す、取滅すれば則ち有滅す、有滅すれば則ち生滅す、生滅すれば則ち老死の憂悲苦惱滅す。佛、天人大衆の中に於て、是の法を説きたまひし時、六百萬億那由佗の人、一切の法を受けざるを以ての故に、而も諸漏に於て、心解脱を得、皆深妙の禪定、三明、六通を得、八解脱を具しぬ。第二、第三、第四の説法の時も、千萬億恒河沙那由佗等の衆生、亦一切の法を受けざるを以ての故に、而も諸漏に於て心解脱を得。是れより已後、諸の聲聞衆無量無邊にして、稱數す可からず。爾の時に十六王子、皆

勸むるなり。證とはこの諦理を證せしむるなり。

【二】 十二行。四諦の一諦ごとに各各前の三轉あるが故に十二行なり。

【三】 謂はゆる是れ苦等。苦は逼惱の義、三界の生死なり。集は招集の義、生死の苦果を招集する見思の煩惱なり。滅は滅無の義、生死を滅無したる涅槃なり。道は能通の義、能く涅槃に通ずる戒定慧の正道及び助道なり。これを四諦と云ふ。諦は審實不虛の義にして必然の理誤まらざるを云ふ。言はゆる苦聖諦(Dukkha)、集聖諦(Samudaya)、滅聖諦(Nirodha)、道聖諦(Magga)の四諦なり。

【四】 十二因縁。

一、無明(avidya)。過去に於ける一切の煩惱を云ふ。

二、行(samskara)。過去に於

童子(どうじ)を以て出家(しゅつげ)して、沙彌(しゃみ)と爲りぬ。諸根(しよこん)通利(つうり)にして、智慧(ちゑ)明了(みやうりやう)なり。

已(すで)に曾(かつ)て百千萬億(ひやくせんまのく)の諸佛(しよぶつ)を供養(くやう)し、淨(じやく)く梵行(ぼんぎやう)を修(しゆ)して、阿耨多羅三藐三菩(あつたらくさんみやくさんぽ)提(だい)を求(もと)む。

俱(とも)に佛(ほとけ)に白(まを)して言(こと)さく、「世尊(せそん)、是(こゝ)の諸(しよ)の無量(むりやう)千萬億(せんまのく)の大德(だいとく)の聲聞(しやうもん)は、皆(みな)已(すで)に成就(じやうじゆ)しぬ。世尊(せそん)、亦(また)當(まさ)に我(われ)等(ら)が爲(ため)に阿耨多羅三藐三菩(あつたらくさんみやくさんぽ)提(だい)を求(もと)む。

俱(とも)に佛(ほとけ)に白(まを)して言(こと)さく、「世尊(せそん)、是(こゝ)の諸(しよ)の無量(むりやう)千萬億(せんまのく)の大德(だいとく)の聲聞(しやうもん)は、皆(みな)已(すで)に成就(じやうじゆ)しぬ。世尊(せそん)、亦(また)當(まさ)に我(われ)等(ら)が爲(ため)に阿耨多羅三藐三菩(あつたらくさんみやくさんぽ)提(だい)を求(もと)む。

法(ほふ)を説(と)きたまふべし。我等(われら)聞(き)き已(よ)つて、皆(みな)共(とも)に修學(しゆがく)せん。世尊(せそん)、我(われ)等(ら)は如(に)來(らい)の知見(ちけん)を志願(しごわん)す。深心(しんしん)の所念(しよねん)は、佛(ほとけ)自(みづか)ら證知(じやうち)したまはん。爾(そ)の時(とき)に轉輪(てんりん)聖王(じやうわう)の將(ひき)ぬたる所(ところ)の衆(しゆ)の中(なか)の八萬億(はちまん)の人(ひと)、十六王子(じふろくわうじ)の出家(しゅつげ)を見て亦(また)出家(しゅつげ)を求(もと)む。

王(わう)即(すなは)ち聽許(しやうしよ)しき。爾(そ)の時(とき)に彼(か)の佛(ほとけ)、沙彌(しゃみ)の請(しやう)を受けて、二萬劫(にまんごふ)を過(す)ぎ已(よ)つて、乃(すなは)ち四衆(ししゆ)の中(なか)に於(お)いて、是(こゝ)の大乗(だいじやう)經(きやう)の妙法蓮華(めうほふれんげ)華(け)教(ぎやう)菩薩(ぼさつ)法(ほふ)佛(ほとけ)所(ところ)護念(ごねん)と名(な)づくるを説(と)きたまふ。是(こゝ)の經(きやう)を説(と)きたまふこと已(よ)つて、十六(じふろく)の沙彌(しゃみ)、阿耨多羅三藐三菩(あつたらくさんみやくさんぽ)提(だい)の爲(ため)の故(ゆゑ)に、皆(みな)共(とも)に受持(じゆぢ)し、誦誦(ぶじゆ)通利(つうり)しき。是(こゝ)の經(きやう)を説(と)きたまひし時(とき)、十六(じふろく)の菩薩(ぼさつ)沙彌(しゃみ)、皆(みな)悉(ことごと)く信受(しんじゆ)す、聲聞(しやうもん)衆(しゆ)の中(なか)に

も、亦(また)信解(しんげ)する者(もの)有(あ)り。其(そ)の餘(よ)の衆生(しゆじやう)の、千萬億(せんまのく)種(しゆ)なるは、皆(みな)疑惑(ぎわく)を生(しやう)じき。佛(ほとけ)、是(こゝ)の經(きやう)を説(と)きたまふこと、八千劫(はつせんごふ)に於(お)いて、未(いま)だ曾(かつ)て休廢(きゆうはい)したまはず。此(こゝ)の經(きやう)を説(と)きたまふこと、即(すなは)ち靜室(じやうしつ)に入(い)つて、禪定(ぜんぢやう)に住(ぢゆう)したまふこと、八

ける煩惱(ぼんご)の造作(ぞうさく)を云ふ。

三、識(チチニヤクナ) (Vijnana)。現世母胎(げんじぼたい)に托(たく)する陰妄(いんわう)の意識(いしやく)を云ふ。

四、名色(ナマイりやう) (Namarupa)。母胎(ぼたい)の中に處(ち)して、一七日(いちしちにち)に五蘊(ごいん)の心質(しんしつ)を成(な)ずるを云ふ。名(な)は心の四蘊(しよいん)、色(しき)は形質(けいしつ)の一蘊(いん)なり。

五、六入(ロクにやく) (Shiodai)。母胎(ぼたい)の中(なか)にして、六根(ろくこん)を成(な)ずるを云ふ。

六、觸(シュツ) (Shubutsu)。出胎(しゅつたい)已(よ)後(ご)三四歳(さんしよさい)までの間(ま)に、稍(しやく)く外塵(がいじん)の根(こん)に觸(ふ)るるを覺(しる)ゆるを云ふ。

七、受(ウチ) (Uchi)。五六歳(ごろくさい)より十二三歳(じふにさんさい)までの間(ま)に、一層(いちじやう)強(か)く外塵(がいじん)を受けて好惡(こうあく)の了別(りやうべつ)を起(おこ)すを云ふ。

八、愛(アイ) (Ai)。十四五歳(じふごさい)より十八九歳(じふはちくさい)までの間(ま)に外塵(がいじん)を貪(おん)愛(あい)するの念(ねん)を生(し)ずるを云ふ。

九、取(ウチ) (Uchi)。二十歳(にじふさい)より後(ご)、一層(いちじやう)強(か)く外塵(がいじん)に取著(とくぢやく)の

萬四千劫なり。是の時に十六の菩薩沙彌、佛の室に入りて寂然として禪定したまふを知つて、各法座に升つて、亦八萬四千劫に於て、四部の衆の爲に、廣く妙法華經を説き分別す。一一に皆六百萬億那由佉恒河沙等の衆生を度し、示教利喜して、阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむ。大通智勝佛八萬四千劫を過ぎ已つて、三昧より起つて、法座に往詣し、安詳として坐して、普く大衆に告げたまはく、「是の十六の菩薩沙彌は甚だ爲れ希有なり。諸根通利にして、智慧明了なり。已に曾て無量千萬億數の諸佛を供養し、諸佛の所に於て常に梵行を修し、佛智を受持し、衆生に開示して、其中に入らしむ。汝等皆當に數數親近して之れを供養すべし。所以は何。若し聲聞、辟支佛、及び諸の菩薩、能く是の十六の菩薩の所説の經法を信じ、受持して毀らざらん者は、是の人皆當に阿耨多羅三藐三菩提の如來の慧を得べし。」佛、諸の比丘に告げたまはく、「是の十六の菩薩は、常に樂つて是の妙法蓮華經を説く。一一の菩薩の所化の六百萬億那由佉恒河沙等の衆生、世世に生るる所は菩薩と與に俱にして、其れに従つて法を聞いて、悉く皆信解せり。此の因縁を以て、四萬億の諸佛世尊に値ひたてまつることを得て、今に盡きず。諸の比丘、我今汝に語る、

念を生ずるを云ふ。

十、有 (Dhava)。未來三有の果を招くべき諸の業因を造作し積集するを云ふ。

十一、生 (jati)。未來六道の中に生ずるを云ふ。

十二、老死 (Charamana)。未來受生の身復遂に朽壞するを云ふ。

【七】一切の法。諸の邪見を云ふなり。

【八】沙彌、亦室羅末尼羅 (Sāmaṇera) と云ふ。勸策、勞策、息慈、息慈等と翻す。息慈とは息惡行慈の義なり。男子出家して沙門比丘と爲るの前先づ十戒を受けて沙彌と稱せらるるなり。(室羅摩拏、室摩那拏、室羅摩拏浴迦)

悉く皆信解せり。此の因縁を以て、四萬億の諸佛世尊に値ひたてまつることを得て、今に盡きず。諸の比丘、我今汝に語る、

彼の佛の弟子の、十六の沙彌は、今皆阿耨多羅三藐三菩提を得て、十方の國土に於て、現に在しまして法を説きたまふ。無量百千萬億の菩薩聲聞有つて、以て眷屬と爲せり。其の二りの沙彌は、東方にして作佛す。一をば

阿闍と名づく、(一)歡喜國に在します。二をば須彌頂と名づく。東南方に二佛あり、一をば師子音と名づけ、二をば師子相と名づく。南方に二佛あり、一をば虚空住と名づけ、二をば常滅と名づく。西南方に二佛あり、一をば帝相と名づけ、二をば梵相と名づく。西方に二佛あり、一をば阿彌陀と名づけ、二をば度一切世間苦惱と名づく。西北方に二佛あり、一をば多摩羅跋旃檀香神通と名づけ、二をば須彌相と名づく。北方に二佛あり、一をば雲自在と名づけ、二をば雲自在王と名づく。東北方の佛をば壞一切世間怖畏と名づく。第十

六は我釋迦牟尼佛なり。娑婆國土に於て、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜり。諸の比丘、我等沙彌爲りし時、各各に無量百千萬億恒河沙等の衆生を教化せり。我に従つて法を聞きしは阿耨多羅三藐三菩提の爲なり。此の一諸の衆生、今に聲聞地に住せる者あり。我常に阿耨多羅三藐三菩提に教

【九】 阿闍。正法華には無怒に作る。(尼波羅本 Akṣobhya)。

【一〇】 歡喜。正法華には甚樂に作る。(尼波羅本 Abhirati)。

【一一】 須彌頂。正法華には山崗に作る。(尼波羅本 Merukiti)。

【一二】 師子音。正法華には師子響に作る。(尼波羅本 Simha-ghoṣa)。

【一三】 師子相。正法華には師子幢に作る。(尼波羅本 Simhadravajra)。

【一四】 虚空住。正法華には一住に作る。(尼波羅本 Akāśapratisthita)。

【一五】 常滅。正法華には常滅度に作る。(尼波羅本 Nityanirvāṇa)。

【一六】 帝相。正法華には帝幢に作る。(尼波羅本 Indradhvaja)。

【一七】 雲自在。正法華には雲自在に作る。(尼波羅本 Cloud-king)。

【一八】 壞一切世間怖畏。正法華には怖畏に作る。(尼波羅本 Fear-destroyer)。

けす、是の諸人等、應に是の法を以て漸く佛道に入るべし。所以は何如来の智慧は、信じ難く解し難ければなり。爾の時の所化の無量恒河沙等の衆生は、汝等諸の比丘、及び我が滅度の後の、未來世の中の、聲聞の弟子是れなり。我が滅度の後、復弟子有つて、是の經を聞かず、菩薩の所行を知らず覺らず、自ら所得の功德に於て、滅度の想を生じて、當に涅槃に入るべし。我餘國に於て作佛して、更に異名有らん。是の人滅度の想を生じ涅槃に入ると雖も、而も彼の土に於て、佛の智慧を求めて、是の經を聞くことを得ん。唯佛乘を以て滅度を得、更に餘乘無し。諸の如来の方便の說法をば除く。諸の比丘、若し如来、自ら涅槃時到り、衆又清淨に、信解堅固にして空法を了達し、深く禪定に入れりと知りぬれば、便ち諸の菩薩及び聲聞衆を集めて、爲に是の經を説く。世間に二乗として滅度を得ること有ること無し。唯一佛乘をもつて滅度を得るのみ。比丘當に知るべし、如来の方便は深く衆生の性に入る。其の小法を志樂し。深く五欲に著するを知つて、是れ等の爲の故に涅槃を説く。是の人若し聞かば、則便ち信受す。譬へば五百由旬の、險難惡道の、曠かに絶えて人無き怖畏の處あり。

【七】梵相。正法華には梵幢に作る。(尼波羅本 *Brahmadh-*

Wajjar。Culva)。

【八】阿彌陀。正法華には無量壽に作る。(尼波羅本 *Ami-ta-hyo*)。

【九】度一切世間苦惱。正法華には超度因縁に作る。尼波羅本 *Sarvalokadhatupatichavod-*

gandhabhinna)。多摩羅跋旃檀香神通。正法華には梅檀神通に作る。尼波羅本 *Tamalapattirocandana-*

gandhabhinna)。須彌相。正法華には山藏念に作る。(尼波羅本 *Meur-*

Kanjan)。雲自在。正法華には樂雨に作る。(尼波羅本 *Megha-*

varu)。雲自在王。正法華には雨音に作る。(尼波羅本 *Megha-*

svavarajita)。

らん。若し多くの衆有りて、此の道を過ぎて、珍寶の處に至らんと欲せんに、一りの導師有り、聰慧明達にして、善く險道の通塞の相を知れり。衆人を將導して、此の難を過ぎんと欲す。將る所の人衆、中路に懈怠して、導師に白して言はく、「我等疲極して復怖畏す。復進むこと能はず。前路猶は遠し、今退き還らんと欲す」と。導師諸の方便多くして、是の念を作さく、此れ等慫れむ可し。云何ぞ大珍寶を捨てて、而も退き還らんと欲するや。是の念を作し已つて、方便力を以て、險道の中に於て、三百由旬を過ぎて、一の城を化作す。衆人に告げて言はく、「汝等怖るること勿れ。退き還ることを得ること莫かれ。今此の大城の中に於て止まつて、意の所作に隨ふ可し。若し是の城に入りなば、快く安穩なることを得ん。若し能く前んで寶所に至らば亦去ることを得可し。」是の時に疲極の衆、心大に歡喜して、未曾有なりと嘆す。「我等今者、斯の惡道を免れて、快く安穩なることを得つ」と。是に於て衆人、前んで化城に入つて、已度の想を生じ、安穩の想を生ず。爾の時に導師、此の人衆の、既に止息することを得て、復た疲倦無きを知つて、即ち化城を滅して、衆人に語つて、「汝等去來や、寶處は近きに在り。向きの大城は、我が化作する所なり、止息の爲ならくのみ」と言はんが如し。諸の比丘、如來も亦復是の如し。今汝等が爲に、大導師と作りて、諸の生死煩惱の惡道、險難長遠にして去るべく度すべきを知れり。若し衆生但一佛乘を聞かば、即ち佛を見んと欲せ

【四】 婁一切世間怖畏。正法華

には除世體に作る（尼波羅本
 ナル・ローカバヤルスタム・ビクテラ
 Sarvalokahyāsambhūtiya-
 キラム・サカラ
 Pāṭivāyikāna）

【五】 經迦牟尼佛。正法華には
 能仁に作る（尼波羅本
 キヤムニ
 Kyanūjīo）

ず、親近せんと欲せじ。便ち是の念を作さく、「佛道は長遠なり。久しく勤苦を受けて乃し成ずることを得可し」と。佛是の心の怯弱下劣なるを知つて、方便力を以て、中道に於て止息せしめんが爲の故に、二涅槃を説く。若し衆生、二地に住すれば、如來爾の時に、即便ち爲に説く、「汝等は所作未だ辨せず、汝が所住の地は佛慧に近し。當に觀察し籌量すべし。所得の涅槃は眞實に非ず、但是れ如來方便の力をもつて、一佛乘に於て分別して三と説く。」彼の導師の止息せしめんが爲の故に大城を化作し、既に息み已んぬと知つて、之れに告げて、「實處は近きに在り、此の城は實に非ず、我が化作ならくのみ」と言はんが如し。」

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、
『大通智勝佛、十劫道場に坐して、佛法現前せず、佛道を成ずることを得たまはず。』

諸の天神龍王、阿修羅衆等、常に天華を雨らして、以て彼の佛に供養したてまつる。
諸天天鼓を撃ち、並びに衆の伎樂を作し、香風萎める華を吹いて、更に新しき好き者を雨らす。
十小劫を過ぎ已つて、乃し佛道を成ずることを得たまへり。諸天及び世人、心に皆踊躍を懷く。
彼の佛の十六の子、皆其の眷屬、千萬億の圍繞せると與に、俱に佛の所に行き至り、
頭面に佛足を禮して、轉法輪を請す。「聖師子法雨をもつて、我れ及び一切に充てたまへ。」

【三六】 二涅槃。有餘無餘の二涅槃なり。
【三七】 二地。二涅槃を證したるを云ふ。

世尊は甚だ値ひたてまつること難し、久遠の時に一たび現じ、羣生を覺悟せんが爲に、一切を震動したまふ。

東方の諸の世界、五百萬億國の、梵の宮殿の光曜、昔より未だ曾て有らざる所なり。

諸梵此の相を見て、尋で佛所に來至して、華を散じて以て供養したてまつり、并に宮殿を奉上し、佛に轉法輪を請じ、偈を以て讚嘆したてまつる。佛は時未だ至らずと知ろしめして、請を受けて

默然として坐したまへり。

三方及び四維、上下亦復爾なり。華を散じ宮殿を奉り、佛に轉法輪を請じたてまつる。

「世尊は甚だ値ひたてまつること難し、願はくは大慈悲を以て、廣く

甘露の門を開き、無上の法輪を轉じたまへ。」

無量慧の世尊、彼の衆人の請を受けて、爲に種種の法、四諦十二縁を宣べたまふ。

「無明より老死に至るまで、皆生縁によつて有り。是の如きの衆の過患、汝等應當に知るべし。」

是の法を宣揚したまふ時、六百萬億 姪、諸苦の際を盡くすを得て、皆阿羅漢と成る。

第二の説法の時、千萬恒沙の衆、諸法に於て受けずして、亦た阿羅漢を得。

是れより後の得度、其の數量有ること無し。萬億劫に算數すとも、其の邊りを得ること能はじ。

時に十六王子、出家して沙彌と作り、皆共に彼の佛に、「大乘の法を演説したまへ」と請す。

【云】姪。萬億を姪と云ふ、或は千億を姪と云ふ、異説なり。

「我等及び（三九）營從、皆當に佛道を成すべし。願はくは世尊の如く、慧眼第一淨なることを得ん。」
佛童子の心、宿世の所行を知ろしめして、無量の因縁、種種の諸の譬喩を以て、
六波羅蜜。及び諸の神通の事を説き、眞實の法、菩薩所行の道を分別して、
是の法華經の、恒河沙の如きの偈を説きたまひき。彼の佛經を説きたまひ已つて、靜室にして禪
定に入り、

一心に一處に坐したまふこと、八萬四千劫なり。是の諸の沙彌等、佛
の禪より未だ出でたまはざるを知つて、

【三九】營從。營は衛と同じ、衛
護の從者なり。

無量億衆の爲に、佛の無上慧を説く。各各に法座に坐して、是の大乗經を説き、
佛の寂の後に於て、宣揚して法化を助く。一一の沙彌等の、度する所の諸の衆生、
六百萬億、恒河沙等の衆有り。彼の佛の滅度の後、是の諸の法を聞ける者、
在在の諸の佛土に、常に師と與に俱に生ず。是の十六の沙彌、具足して佛道を行じて、
今現に十方に在りて、各正覺を成ずることを得たまへり。爾の時の法を聞ける者、各諸佛の所
に在り。
其の聲聞に住すること有るは、漸く教ふるに佛道を以てす。我十六の數に在りて、曾て亦汝が爲
に説く。

是の故に方便を以て、汝を引いて佛慧に趣かしむ。是の本の因縁を以て、今法華經を説いて、汝をして佛道に入らしむ。愼んで驚懼を懷くこと勿れ。譬へば險惡の道の、廻かに絶えて毒獸多く、又復水草無く、人の怖畏する所の處あらん。無數千萬の衆、此の險道を過ぎんと欲す。其の路甚だ曠遠にして、五百由旬を經。時に一りの導師有り、強識にして智慧有り、明了にして心決定せり、險に在りて衆難を濟ふ。衆人皆疲倦して、導師に白して言さく、「我等今頓乏せり、此れより退き還らんと欲すと」。導師是の念を作さく、「此の輩甚だ慙れむべし。如何ぞ退き還つて、大珍寶を失はんと欲する。」尋いで時に方便を思はく、「當に神通力を設くべし」と。

大城廓を化作して、諸の舍宅を莊嚴す。周匝して園林、渠流及び浴池、重門高樓閣有つて、男女皆充滿せり。即ち是の化を作し已つて、衆を慰めて言く「懼るること勿れ。汝等此を城に入りなば、各所樂に隨ふ可し。」諸人既に城に入りて、心皆大に歡喜し、皆安穩の想を生じ、自ら已に度することを得つと謂へり。導師息すみ已んぬと知つて、衆を集めて告げて、

「汝等當に前進むべし、此は是れ化城ならくのみ。我汝が疲極して、中路に退き還らんと欲するを見る。

故に方便力を以て、權に此の城を化作せり。汝今勤め精進して、當に共に寶所に至るべし」と言はんが如し。

我も亦復是の如し、爲れ一切の導師なり。

諸の道を求むる者、中路にして懈廢し、生死、煩惱の諸の險道を度すること能はざるを見る。故に方便力を以て、息すめんが爲に涅槃を説いて、「汝等の苦滅し、所作皆已に辨せり」と言ふ。既に涅槃に到り、皆阿羅漢を得たりと知つて、爾して乃し大衆を集めて、爲に眞實の法を説く。諸佛は方便力をもつて、分別して三乘を説きたまふ。唯一佛乘のみ有り、息處の故に二を説く。今汝が爲に實を説く、汝が得る所は滅に非ず、佛の一切智の爲に、當に大精進を發すべし。汝一切智、十力等の佛法を證し、三十二相を具しなば、乃ち是れ眞實の滅ならん。諸佛導師は、息すめんが爲に涅槃を説きたまふ。既に是れ息すみ已んぬと知れば、佛慧に引入したまふ。』

卷の第四

五百弟子受記品第八

爾の時に富樓那彌多羅尼子、佛に従ひたてまつりて、是の智慧方便の隨宜の説法を聞き、又諸の大弟子に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまふを聞き、復宿世の因縁の事を聞き、復諸佛の大自在神通の力有し、まことに事を聞きたてまつりて、未曾有なることを得、心淨く踊躍す。即ち座より起つて、佛前に到り、頭面に足を禮して却つて一面に住し、尊顔を瞻仰して目暫らくも捨てず。而も是の念を作さく、「世尊は甚だ奇特にして所爲希有なり。世間の若干の種性に隨順して、方便知見を以て爲に法を説いて、衆生の處處の貪著を拔出したまふ。我等は佛の功德に於て、言はをもつて宣ぶること能はず。唯佛世尊のみ能く我等が深心の本願を知ろしめせり。」

爾の時に佛、諸の比丘に告げたまはく、「汝等是の富樓那彌多羅尼子を見るや不や。我常に其の説法人の中に於て最も第一なりと稱し、亦常に其の種種の功德を歎ず。精勤して我が法を護持し助宣し、能く四衆に於て示教利喜し、具足して佛の正法を解釋して、大に同梵行者を饒益す。如來を捨ててよりは、能く其の言論の辯を盡くすもの無けん。汝等謂ふこと勿れ、富樓那は但能く我が法を護持し助

宣すと。亦過去の九十億の諸佛の所に於て、佛の正法を護持し助宣し、彼の説法人の中に於ても亦最も第一なりき。又諸佛の所説の空法に於て明了に通達し、四無礙智を得て、常に能く審諦に清淨に法を説いて疑惑有ること無く、菩薩の神通の力を具足し、其の壽命に隨つて常に梵行を修しき。彼の佛の世人、咸く皆之を實に是れ聲聞なりと謂へり。而も富樓那は、斯の方便を以て、無量百千の衆生を饒益し、又無量阿僧祇の人を化して阿耨多羅三藐三菩提を立せしむ。佛土を淨めんが爲の故に、常に佛事を作して衆生を教化しき。

諸の比丘、富樓那は、亦七佛の説法人の中に於て第一なることを得、今我が所の説法人の中に於ても、亦第一なることを爲。賢劫の中の當來の諸佛の説法人の中に於ても亦復第一にして皆佛法を護持し助宣せん。亦未來に於ても無量無邊の諸佛の法を護持し助宣し、無量の衆生を教化し饒益して阿耨多羅三藐三菩提を立せしめん。佛土を淨めんが爲の故に、常に勤め精進して衆生を教化せん。漸漸に菩薩の道を具足して、無量阿僧祇劫を過ぎて、當に此の土に於て阿耨多羅三藐三菩提を得べし。號をば法明

【一】四無礙智、即ち四無礙辯なり。名數已に之を記せり。

今更に解せば、一に義無礙智とは諸法の義趣に了達して礙滯なきなり。二に法無礙智とは諸法の名相を分別するに礙滯なきなり。三に言辭無礙智とは一切衆生の語言に應説して礙滯なきなり。四に樂説無礙智とは所説自在にして化度に礙滯なきなり。

【二】七佛。毘婆尸 (Vipashī) 尸棄 (Śikhinī)、毘舍浮 (Vasīṣṭhī) 俱留孫 (Kṛakīṣānī) 拘那含牟尼 (Kānakamuni) 迦葉 (Kāśyapa)、釋迦牟尼 (Śakya-muni) の七佛なり。

前の三佛は過去莊嚴劫の千佛の中の最後、後の四佛は賢劫の千佛の中の最初、之れを過去七佛と云ふ、昔今の釋尊以前の古佛なり。

如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。其の佛恒河沙等の三千大千世界を以て一佛土と爲し、七寶を地と爲し、地の平かなること掌の如くにして、山陵、谿澗、溝壑有ること無けん。七寶の臺觀其の中に充滿し、諸天の宮殿近く虚空に處し、人天交も接はりて、兩に相見ることを得ん。諸の惡道無く、亦女人無くして、一切衆生皆以て化生し、姪欲有ること無けん。大神通を得て、身より光明を出だし、飛行自在ならん。志念堅固に、精進智慧あつて、普く皆金色に、三十二相をもつて自ら莊嚴せん。其の國の衆生は、常に二食を以てせん。一には法喜食、二には禪悅食なり。無量阿僧祇千萬億那由他の諸の菩薩衆有つて、大神通四無礙智を得て善能く衆生類を教化せん。其の聲聞衆は、算數校計すとも知ること能はざる所ならん。皆六通、三明、及び八解脫を具足することを得ん。其の佛の國土は是の如き等の無量の功德有つて莊嚴し成就せん。劫をば寶明と名づけ、國をば善淨と名づけん。其の佛の壽命は無量阿僧祇劫、法住すること甚だ久しからん。佛の滅度の後七寶の塔を起てて其の國に徧滿せん。』

【三】 當來の諸佛。今の釋尊の後、當來世に於て彌勒以下九百九十六佛出現すべし。此等を指して當來の諸佛と云ふなり。

【四】 法明。正法華には法照に作る。尼波羅本 (Dharma-prajñā) 作る。

【五】 二食。一に法喜食とは法を聞いて隨喜して慧命を支持し増益するを云ふ、即ち聞法を食と爲すなり。二に禪悅食とは禪を修して心神悅豫し諸根を長養するを云ふ、即ち修禪を食と爲すなり。

【六】 寶明。正法華之に同じ。 (尼波羅本 Jaina-yasas)

【七】 善淨。正法華之に同じ。 (尼波羅本 Svayambhūti)。

其の佛の壽命は無量阿僧祇劫、法住すること甚だ久しからん。佛の滅度の後七寶の塔を起てて其の國に徧滿せん。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『諸の比丘諦かに聽け、佛子所行の道は、善く方便を學するが故に、思議することを得可からず。

諸の大法を樂つて、大智を畏るることを知れり。是の故に諸の菩薩は、聲聞緣覺と作る。

無數の方便を以て、諸の衆生類を化して、自ら是れ聲聞なり。佛道を去ること甚だ遠しと説き、

無量の衆を度脱して、皆悉く成就することを得せしめ、少欲懈怠なりと雖も、漸く當さに作佛

せしむべし。

内に菩薩の行を祕し、外に是れ聲聞なりと現じ、少欲にして生死を厭へども、實には是れ佛土を

淨む。

衆に三毒有りと示し、又邪見の相を現す。我が弟子是の如く、方便して衆生を度す。

若し我具足して、種種の現化の事を説かば、衆生の是れを聞かん者、心則ち疑惑を懷きなん。

今此の富樓那は、昔の千億の佛に於て、所行の道を勤修し、諸佛の法を宣護し、

無上慧を求むるを爲つて、而も諸佛の所に於て、現じて弟子の上に居し、多聞にして智慧有り、

所説畏るる所無く、能く衆をして歡喜せしめ、未だ曾て疲倦有らずして、而も以て佛事を助く。

已に大神通に渡り、四無礙智を具し、諸根の利鈍を知つて、常に清淨の法を説き、

是の如き義を演暢して、諸の千億の衆を教へ、大乘の法に住せしめて、而も自ら佛土を淨む。

未來にも亦、無量無數の佛を供養し、正法を護し助宣して、亦自ら佛土を淨め、常に諸の方便を以て、法を説くに畏るる所無く、不可計の衆を度して、一切智を成就せしめん。諸の如來を供養し、法の寶藏を護持して、其の後に成佛することを得ん、號を名づけて法明と曰ん。

其の國をば善淨と名づけ、七寶の合成する所ならん。劫をば名けて寶明と爲さん。

菩薩衆甚だ多く、其の數無量億にして、皆大神通に度り、威徳力具足して、其の國土に充滿せん。聲聞亦無數にして、三明八解脱あり、四無礙智を得たる、是れ等を以て僧と爲さん。

其の國の諸の衆生は、淫欲皆已に斷じ、純一に變化生にして、相を具して身を莊嚴し、法喜禪悅食にして、更に餘の食想無く、諸の女人有ること無く、亦諸の惡道無けん。

富樓那比丘、功德悉く成滿して、當に斯の淨土の、賢聖衆甚だ多きを得べし。

是の如き無量の事、我れ今但略して説く。

爾の時に千二百の阿羅漢の心自在なる者、是の念を作さく、「我等歡喜して、未曾有なることを得つ。若し世尊、各授記せらるること餘の大弟子の如くならば、亦快からずや。」

佛此れ等の心の所念を知らしめして、摩訶迦葉に告げたまはく、「是の千二百の阿羅漢に、我今當に現前に次第に阿耨多羅三藐三菩提の記を與へ授くべし。此の衆の中に於て、我が大弟子、橋陳如比

丘は、當に六萬二千億の佛を供養し、然る後に佛に成爲ることを得べし。號をば 普明如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰ん。其の五百の阿羅漢の、優樓頻螺迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉、迦留陀夷、優陀夷、阿菴樓駄、離婆多、劫賓那、薄拘羅、(二)周陀、(三)莎伽陀等、皆當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。盡く同く一號にして、名づけて普明と曰ん。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『橋陳如比丘、當に無量の佛を見たてまつり、阿僧祇劫を過ぎて、乃し等正覺を成すべし。』

常に大光明を放ち、諸の神通を具足し、名聞十方に徧じ、一切に敬はれて、常に無上道を説かん。

故に號けて普明と爲さん。其の國土清淨にして、菩薩皆勇猛ならん。咸く妙樓閣に升つて、諸の十方の國に遊び、無上の供具を以て、諸佛に奉獻せん。

是の供養を作し已つて、心に大歡喜を懷き、須臾に本國に還らん。是

【八】 普明。正法華には普光に作る。(尼波羅本 Samantaprabhita)。

【九】 迦留陀夷。正法華には黒曜に作る。(尼波羅本 Kaidi-yin)。亦黒光とも翻す、其身色極黒なるが故に此名あり、故に亦大黒とも云ふ。釋尊悉達太子爲りし時の射衛の師にして、後に佛弟子と爲りしなり。嘉祥は時起と翻ぜり。

【一〇】 優陀夷。正法華には優陀に作る。(尼波羅本 Udayin)。出、出現等と翻す、日出の時生まれたるより此の名あり。釋尊悉達太子爲りし時の宮中の學友にして父優陀那那は國師なり、後に佛弟子と爲る。(烏陀夷、鄒陀夷)

【一一】 周陀。正法華には淳庵に作る。(尼波羅本 Chunda) 傳教の無量義經註釋には蛇奴と

の如き神力有らん。

佛の壽は六萬劫ならん。正法住すること壽に倍し、像法復是れに倍せ
ん。法滅せば天人憂へなん。

其の五百の比丘、次第に當に作佛すべし。同く號けて普明と曰ひ、轉
次して授記せん。

我が滅度の後、某甲當に作佛すべしと。其の所化の世間、亦我が今日
の如くならん。

國土の嚴淨、及び諸の神通力、菩薩聲聞衆、正法及び像法、

壽命の劫の多少、皆上に説く所の如くならん。迦葉汝已に、五百の自在の者を知りぬ。

餘の諸の聲聞衆も、亦當に復是の如くなるべし。其の此の會に在らざるには、汝當に爲に宣説す
べし。

爾の時に五百の阿羅漢、佛前に於て受記を得已つて歡喜踊躍し、即ち座より起つて佛前に到り、頭
面に足を禮し、過を悔いて自ら責む。『世尊、我等常に是の念を作して、自ら已に究竟の滅度を得たり
と謂ひき。今乃し之を知りぬ、無智の者の如し。所以何我等應に如來の智慧を得べかりき。而る
を便ち自ら小智を以て足りぬと爲しき。世尊、譬へば人有り、親友の家に至つて酒に酔うて臥せり。

翻ぜり、亦不樂とも翻す。

【二】 莎伽陀。正法華には善業
に作る。(尼波羅本 *Spārīkata*.)

亦善業とも翻ぜり。前の周陀
の弟にして、周陀は大路邊生、
莎伽陀は小路邊生と云ふ。小
路邊生は即ち周利槃特なり、
但し此れには尙ほ異説あり。

是の時に親友官事の當に行くべきあつて、無價の寶珠を以て其の衣裏に繫け之を與へて去りぬ。其の人醉ひ臥して都べて覺知せず。起き已つて遊行し佗國に到りぬ。衣食の爲の故に勤力求索すること甚だ大に艱難なり。若し少し得る所有れば便ち以て足りぬと爲す。後に親友會ひ遇うて之を見て、是の言を作さく、「咄哉丈夫、何ぞ衣食の爲に乃し是の如くなるに至る。我昔汝をして安樂なることを得、五欲自ら恣ならしめんと欲して、某の年日月に於て、無價の寶珠を以て汝が衣裏に繫けぬ。今故ほ現に在り。而るを汝知らずして、勤苦憂惱して以て自活を求むること、甚だ爲れ癡なり。汝今此の寶を以て所須に貿易す可し。常に意の如く乏短なる所無かる可し」といはんが如し。佛も亦是の如し。菩薩爲りし時、我等を教化して、一切智の心を發さしめたまひき。而るを尋いで廢忘して知らず覺らず。既に阿羅漢道を得て自ら滅度せりと謂ひ、資生艱難にして少しきを得て足りぬと爲す。一切智の願猶ほ在つて失せず。今者世尊、我等を覺悟して、是の如き言を作したまはく、「諸の比丘、汝等が得たる所は究竟の滅に非ず。我久しく汝等をして佛の善根を種ゑしめたれども、方便力を以ての故に、涅槃の相を示す。而るを汝爲れ實に滅度を得たりと謂へり。」世尊、我今乃ち知んぬ、實に是れ菩薩なり。阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得つ。是の因縁を以て、甚だ大に歡喜して、未曾有なることを得たり。」

爾の時に阿若憍陳如等、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、

『我等、無上安穩の授記の聲を聞きたてまつり、未曾有なりと歡喜して、無量智の佛を禮したてまつる。』

今世尊の前に於て、自ら諸の過咎を悔ゆ。無量の佛實に於て、少しき涅槃の分を得。

無智の愚人の如く、便ち自ら以て足りぬと爲す。譬へば貧窮の人あり、親友の家に往き至る。其の家甚だ大に富み、具さに諸の餽膳を設け、無價の寶珠を以て、內衣裏に繋著し、

黙して與へて捨て去りぬ。時に臥して覺知せず。是の人既に已に起きて、遊行して佗國に詣り、衣食を求て自ら濟り、資生甚だ艱難にして、少きを得て便ち足りぬと爲して、更に好き者を願はず、內衣裏に、無價の寶珠有ることを覺らず。

珠を與へし親友、後に此の貧人を見て、苦切に之を責め已つて、示すに繋ぐる所の珠を以てす。貧人此の珠を見て、其の心大に歡喜し、諸の財物を富有して、五欲に而も自ら恣ならんが如し。

我等も亦是の如し。世尊長夜に於て、常に愍れんで教化せられて、無上の願を種ゑしめたまへり。我等無智なるが故に、覺らず亦知らず。少しき涅槃の分を得て、自ら足りぬとして餘を求めず。

今佛我を覺悟して、實の滅度に非ず、佛の無上慧を得て、爾して乃し爲れ眞の滅なりと言まふ。我今佛に従ひたてまつり、授記莊嚴の事、及び轉次に受決せんことを聞きたてまつりて、身心徧

く歡喜す。』

授學無學人記品第九

爾の時に阿難、羅睺羅、是の念を作さく、「我等毎に自ら思惟すらく、設し授記を得ば、亦快からずや。」即ち座より起つて佛前に到り、頭面に足を禮し、俱に佛に白して言さく、「世尊、我等此れに於て亦應に分有るべし。唯如來のみ有しまして、我等が歸する所なり。又我等は爲れ一切世間の天人阿修羅に知識せらる。阿難は常に侍者と爲つて、法藏を護持す。羅睺羅は是れ佛の子なり。若し佛阿耨多羅三藐三菩提の記を授けられなば、我が願既に満じて、衆の望み亦足りなん。」

爾の時に學無學の聲聞の弟子二千人あり、皆座より起つて、偏へに右の肩を袒はにし、佛前に到り、一心に合掌し、世尊を瞻仰して、阿難、羅睺羅の所願の如くにして一面に住立せり。

爾の時に佛、阿難に告げたまはく、「汝來世に於て、當に作佛することを得べし。山海慧自在通王如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號づけん。當に六十二億の諸佛を供養し、法藏を護持して、然る後に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。二十千萬億恒河沙の諸の菩薩等を教化して、阿耨多羅三藐三菩提を成せしめん。國をば常立勝幡と名づけん。

【一】 山海慧自在通王。正法華には海持覺娛樂神通に作る。

(尼波羅本 Sāgaravardhara-
ブダイキワリーナターレヒンヤ
buchi-Vikrādhijñā)。

【二】 常立勝幡。正法華には國名を記せず唯その相を説くに
堅諸幢幡自然莊嚴等とあり。
アヌアアケレメクワイジャ
(尼波羅本 Anvānānīyavaj-
yanti)。

其の土清淨にして瑠璃を地と爲さん。劫をば 妙音徧滿と名づけけん。其の佛の壽命は無量千萬億阿僧祇劫ならん。若し人あり千萬億無量阿僧祇劫の中に於て、算數校計すとも、知ることを得ること能はじ。正法世に住すること壽命に倍し、像法世に住すること復正法に倍せん。阿難、是の山海慧自在王佛は、十方の無量千萬億恒河沙等の諸佛如來に、共に其の功徳を讚歎し稱せらるることを爲ん。」

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『我今僧中にして説く、阿難持法者は、當に諸佛を供養して、然る後に正覺を成ずべし。』

號をば、山海慧自在通王佛と曰ん。其の國土清淨にして、常立勝幡と名づけけん。

諸の菩薩を教化すること、其の數恒河沙の如くならん。佛大威徳有し

まして、名聞十方に滿ち、

壽命は量り有ること無けん、衆生を愍れむを以ての故に。正法壽命に倍し、像法復是れに倍せん。

恒河沙等の如き、無数の諸の衆生、此の佛の法の中に於て、佛道の因縁を種ゑん。』

爾の時に會中に新發意の菩薩八千人あり、咸く是の念を作さく、「我等は尙ほ諸の大菩薩の是の如き記を得ることを聞かず。何の因縁有つてか諸の聲聞是の如きの決を得る。」

爾の時に世尊、諸の菩薩の心の所念を知ろしめして、之に告げて曰はく、「諸の善男子、我と阿難

【三】 妙音徧滿。正法華には柔和無有雷震に作る。(尼波羅本 Manojusabhagavata)。

とは、與に等しく空王佛の所に於て、同時に阿耨多羅三藐三菩提の心を發しき。阿難は常に多聞を樂ひ、我は常に勤め精進す。是の故に我は已に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。而るに阿難は我が法を護持し、亦將來の諸佛の法藏を護つて、諸の菩薩衆を教化し成就せん。其の本願是の如し。故に斯の記を獲。』

阿難、面り佛前に於て自ら授記及び國土の莊嚴を聞き、所願具足し、心大に歡喜して、未曾有なることを得たり。即時に過去の無量千萬億の諸佛の法藏を憶念するに、通達無礙なること、今の所聞の如し。亦本願を識んぬ。

爾の時に阿難偈を説いて言さく、
『世尊は甚だ希有なり、我をして過去を念はしむ。

無量の諸佛の法、今日の所聞の如し。

我今復疑ひ無くして、佛道に安住しぬ。

方便をもつて侍者と爲つて、諸佛の法を護持せん。』

爾の時に佛、羅睺羅に告げたまはく、汝來世に於て當に作佛することを得べし。蹈七寶華如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世閒解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號げけん。當に十世界微塵等數の諸佛如來を供養したてまつるべし。常に諸佛の爲に而も長子と作ること猶ほ今の如くな

【四】 蹈七寶華。正法華には七寶蓮華に作る。ニ波羅本サプタラトナパドマギララレンタカリ Aparakampitana-Vikrantangamino。

らん。是の蹈七寶華佛の國土の莊嚴、壽命の劫數、所化の弟子、正法像法、亦た山海慧自在通王如來の如くにして異なること無けん。亦此の佛の爲に而も長子と作らん。是れを過ぎて已後當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『我太子爲りし時、羅睺は長子と爲り、我今佛道を成ずれば、法を受けて法子と爲る。』

未來世の中に於て、無量億の佛を見たてまつりて、皆其の長子と爲つて、一心に佛道を求めん。

羅睺羅の密行は、唯我のみ能く之を知れり。現に我が長子と爲つて、

以て諸の衆生に示す。

無量億千萬、功德數ふ可からず。佛法に安住して、以て無上道を求む。』

爾の時に世尊、學無學の二千人を見えなはしたまふに、其の意柔順に、寂然清淨にして、一心に

佛を觀たてまつる。

佛、阿難に告げたまはく、『汝是の學無學の二千人を見るや不や。』唯然已に見る。』阿難、是の諸

人等は當に五十世界微塵數の諸佛如來を供養し、恭敬尊重し、法藏を護持して、末後に同時に十方の

國に於て、各成佛することを得べし。皆同じく一號にして、名づけて寶相如來、應供、正徧知、

明行足、善逝、世閒解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰ん。壽命一劫ならん。國土の莊嚴、

【五】寶相。正法華には寶英に作る。(尼波羅本 Rainnkeiti-Rainnkeiti)。

聲聞菩薩 正法像法、皆悉く同等ならん。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『是の二千の聲聞、今我が前に於て住せるに、悉く皆記を與へ授く、未來に當に成佛すべし。』

供養したてまつる所の諸佛は、上に説ける塵數の如くならん。其の法藏を護持して、後に當に正

覺を成すべし。

各十方の國に於て、悉く同じく一名號ならん。

俱時に道場に坐して、以て無上慧を證し、皆名づけて寶相と爲さん。

國土及び弟子、正法と像法と、悉く等くして異なり有ること無けん。

咸く諸の神通を以て、十方の衆生を度し、名聞普く周徧して、漸く涅槃に入らん。』

爾の時に學無學の二千人、佛の授記を聞きたてまつり、歡喜踊躍して偈を説いて言さく、

『世尊は慧の燈明なり、我授記の音を聞きたてまつりて、

心に歡喜充滿せり、甘露をもつて灌がるるが如し。』

法師品第十

爾の時に世尊、藥王菩薩に因せて八萬の居士に告げたまはく、「藥王、汝是の大衆の中の無量の諸の天、龍王、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人、及び比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の聲聞を求めし者、辟支佛を求めし者、佛道を求めし者を見るや。是の如き等類咸く佛前に於て妙法華經の一偈一句を聞いて、乃至一念も隨喜せん者には我皆記を與へ授く。當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。」佛、藥王に告げたまはく、「又如來の滅度の後に、若し人有つて、妙法華經の乃至一偈一句を聞いて一念も隨喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與へ授く。若し復人有つて妙法華經の乃至一偈を受持し讀誦し解説し書寫し、此の經卷に於て敬ひ視ること佛の如くにして、種種に華、香、瓔珞、抹香、塗香、燒香、繪蓋、幢幡、衣服、伎樂を供養し、乃至合掌恭敬せん。藥王、當に知るべし、是の諸人等は已に曾て十萬億の佛を供養し、諸佛の所に於て、大願を成就して、衆生を愍れむが故に、此の人間に生まれたり。藥王、若し人有つて、何等の衆生か未來世に於て當に作佛することを得べき」と問はば、應に示すべし、「是の諸人等未來世に於て必ず作佛することを得ん」と。何を以ての故に。若し善男子、善女人、法華經の乃至一句に於ても受授し讀誦し解説し書寫し、種種に經卷に華、香、瓔珞、抹香、塗香、燒香、繪蓋、幢幡、衣服、伎樂を供養し、合掌恭敬せん。是の

人は一切世間の應に瞻奉すべき所なり、應に如來の供養を以て之を供養すべし。當に知るべし、此の人は是れ大菩薩なり、阿耨多羅三藐三菩提を成就して、衆生を哀愍して、願つて此の間に生まれ、廣く妙法華經を演べ分別するなり。何に況や盡くして能く受持し、種種に供養せんものをや。藥王、當に知るべし、是の人は、自ら清淨の業報を捨てて、我が滅度の後に於て、衆生を愍れむが故に惡世に生まれて廣く此の經を演ぶるなり。若し是の善男子、善女人、我が滅度の後に、能く竊かに一人の爲にも法華經の乃至一句を説かん。當に知るべし、是の人は則ち如來の使なり、如來に遣はされて、如來の事を行するなり。何に況や大衆の中に於て廣く人の爲に説かんをや。藥王、若し惡人有つて不善の心を以て一劫の中に於て、現に佛前に於て常に佛を毀罵せんは、其の罪尙は輕し。若し一人の惡言を以て、在家出家の法華經を讀誦する者を毀訾せんは、其の罪甚だ重し。藥王、其れ法華經を讀誦すること有らん者は、當に知るべし、是の人は佛の莊嚴を以て而も自ら莊嚴するなり。則ち如來の肩に荷擔せらるることを爲ん。其の所至の方には、應に隨つて向ひ禮すべし。一心に合掌して恭敬供養尊重讚嘆し、華、香、瓔珞、抹香、塗香、燒香、繪蓋、幢幡、衣服、肴膳をもつてし、諸の伎樂を作し、人中の上供をもつて之を供養せよ。應に天の寶を持つて、以て之に散すべし。天上の寶聚應に以て奉獻すべし。所以は何。是の人歡喜して法を説かんに、
 (二) 須臾も之を聞かば、即ち阿耨多羅三藐三菩提を究竟することを得んが故なり。』

【二】(原文)。須臾聞之、即得究竟阿耨多羅三藐三菩提。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

「若の佛道に住して、自然智を成就せんと欲せば、常に當に勤めて、法華を受持せん者を供養すべし。

其れ疾く、一切種智慧を得んと欲すること有らんは、當に是の經を受持し、并に持者を供養すべし。

若し能く、妙法華經を受持すること有らん者は、當に知るべし佛の所使として、諸の衆生を愍念するなり。

諸の能く、妙法華經を受持すること有らん者は、清淨の土を捨てて、衆を愍れむが故に此に生まれたり。

當に知るべし是の如き人は、生まれんと欲する所に自在なれば、能く此の惡世に於て、廣く無上の法を説くなり。

應に天の華香、及び天寶の衣服、天上の妙寶聚を以て、説法者に供養すべし。

吾が滅後の惡世に、能く是の經を持たん者をば、當に合掌し禮敬して、世尊に供養したてまつるが如くすべし。

上饌の衆の甘美、及び種種の衣服をもつて、是の佛子を供養して、須臾も聞くことを得んと冀ふべし。

若し能く後の世に於て、是の經を受持せん者は、我遣はして人中に在らしめて、如來の事を行せしむるなり。

若し一劫の中に於て、常に不善の心を懷いて、色を作して而も佛を罵らんは、無量の重罪を獲ん。其れ是の法華經を、讀誦し持つこと有らん者に、須臾も惡言を加へん

は、其の罪復彼に過ぎん。

人有つて佛道を求めて、而も一劫の中に於て、合掌して我が前に在つて、無數の偈を以て讚めん。

是の讚佛に由るが故に、無量の功德を得ん。持經者を歎美せんは、其の福復彼に過ぎん。

八十億劫に於て、最妙の色聲、及與び香味觸を以て、持經者に供養せよ。是の如く供養し已つて、若し須臾も聞くことを得ば、則ち應に自ら欣慶すべし、我今大利を獲つと。

藥王今汝に告ぐ、我が所説の諸經あり、而も此の經の中に於て、法華最も第一なり。

爾の時に佛、復藥王菩薩摩訶薩に告げたまはく、「我が所説の經典は、無量千萬億にして、已に説き、今説き、當に説かん、而も其の中に於て此の法華經は最も爲れ難信難解なり。藥王、此の經は

【二】已に説き等。此の文に依つて法華經を已今當三説超過の經と云ふなり。

【三】難信難解。唯佛與佛の妙法にして祕要の藏なるが故に難信難解と云ふ。而も之を以て末法濁惡の下凡に運會せしむ、本化付囑の尊重すべき所以なり。謬つて解して戴行難修と謂ふこと勿れ。今品に須臾聞之即得究竟と説けるを按ずべし。

是れ諸佛の祕要の藏なり。分布して妄りに人に授與すべからず。諸佛世尊の守護したまふ所なり。昔
 従り已來、未だ曾て顯說せず。而も此の經は、如來の現在すら猶ほ怨嫉多し。況や滅度の後や。藥
 王、當に知るべし、如來の滅後に其れ能く書持し讀誦し供養し、他人の爲に説かん者は、如來則ち衣
 を以て之を覆ひたまふべし。又他方の現在の諸佛に護念せらるることを爲ん。是の人は大信力及び志
 願力、諸善根力有らん。當に知るべし、是の人は如來と與に共に宿するなり。則ち如來の手をもつて
 其の頭を摩でたまふことを爲ん。藥王、在在處處に、若しは説き、若しは讀み、若しは誦し、若しは
 書き、若しは經卷の所住の處には、皆應に七寶の塔を起てて、極めて高廣
 嚴飾ならしむべし。復舍利を安ずることを須ひざれ。所以は何。此の中に
 は已に如來の全身有します。此の塔をば應に一切の華、香、瓔珞、繒蓋、幢幡、伎樂、歌頌を以て供
 養恭敬し、尊重讚嘆したてまつるべし。若し人有つて此の塔を見たてまつることを得て禮拜し供養せ
 ん。當に知るべし、是の人は皆阿耨多羅三藐三菩提に近づきぬ。藥王、多く人有つて在家出家の菩薩
 の道を行せんに、若し是の法華經を見聞し讀誦し書持し供養すること得ること能はずんば、當に知る
 べし、是の人は、未だ善く菩薩の道を行せざるなり。若し是の經典を聞くこと得ること有らば、乃ち
 能善く菩薩の道を行するなり。其れ衆生の佛道を求むる者有つて、是の法華經を若しは見、若しは聞
 き、聞き已つて信解し受持せば、當に知るべし、是の人は阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり。

【四】(原文)。如來現在、猶多
 怨嫉、況滅度後。

藥王、譬へば人有つて、渴乏して水を須ひんとして、彼の高原に於て、穿鑿して之を求むるに、猶ほ乾ける土を見ては水尙ほ遠しと知る。功を施すこと已ますして、轉た濕へる土を見、遂に漸く泥に至りぬれば、其の心決定して水必ず近しと知らんが如し。菩薩も亦復是の如し。若し是の法華經を未だ聞かず、未だ解らず、未だ修習すること能はざらん。當に知るべし、是の人は阿耨多羅三藐三菩提を未だ去ること尙ほ遠し。若し聞解し、思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ。所以は何。一切の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提は皆此の經に屬せり。此の經は方便の門を開いて、眞實の相を示す。是の法華經の藏は深固幽遠にして人能く到ること無し。今佛、菩薩を教化し成就して爲に開示す。藥王、若し菩薩有つて是の法華經を聞いて驚疑し怖畏せん。當に知るべし、是れを新發意の菩薩と爲づく。若し聲聞の人は是の經を聞いて驚疑し怖畏せん。當に知るべし、是れを増上慢の者と爲づく。藥王、若し善男子、善女人有つて、如來の滅後に、四衆の爲に是の法華經を説かんと欲せば、云何してか應に説くべき。是の善男子、善女人は、如來の室に入り、如來の衣を著、如來の座に坐して、爾して乃し應に四衆の爲に廣く斯の經を説くべし。如來の室とは一切衆生の中の大慈悲心是れなり。如來の衣とは柔和忍辱の心是れなり。如來の座とは一切法空是れなり。是の中に安住して、然る後不懈怠の心を以て、諸の菩薩及び四衆の爲に廣く是の法華經を説くべし。藥王、我餘國に於て化人を遣はして其れが爲

【五】(原文)。開方便門、示眞實相。

に聽法の衆を集め、亦化の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を遣はして其說法を聽かしめん。是の諸の化人法を聞いて信受し、隨順して逆はじ。若し說法者空閑の處に在らば、我時に廣く天、龍、鬼神、乾闥婆、阿修羅等を遣はして其の說法を聽かしめん。我異國に在りと雖も時時に說法者をして我身を見ることを得せしめん。若し此の經に於て句逗を忘失せば、我還つて爲に説いて具足することを得せしめん。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『諸の懈怠を捨てんと欲せば、應當に此の經を聽くべし。是の經は聞くことは得難し、信受する者亦難し。』

人の渴して水を須ひんとして、高原を穿鑿するに、猶ほ乾燥ける土を見ては、水を去ること尙ほ遠しと知る。

漸く濕へる土泥を見ては、決定して水に近きぬと知らんが如し。

藥王汝當に知るべし、是の如き諸人等、法華經を聞かざらんは、佛智を去ること甚だ遠し。

若し是の深經の、聲聞の法を決了して、是れ諸經の王なるを聞き、聞き已つて諦かに思惟せん。當に知るべし此の人等は、佛の智慧に近づきぬ。若し人此の經を説かば、應に如來の室に入り、如來の衣を著、而も如來の座に坐して、衆に處して畏るる所無く、廣く爲に分別して説くべし。

大慈悲を室と爲し、柔和忍辱を衣とし、諸法空を座と爲す。此に處して爲に法を説け。

若し此の經を説かん時、人有つて惡口をもつて罵り、刀杖瓦石を加ふとも、佛を念するが故に應に忍ぶべし。

我千萬億の土に、淨堅固の身を現じて、無量億劫に於て、衆生の爲に法を説く。

若し我が滅度の後に、能く此の經を説かん者には、我化の四衆、比丘比丘尼、

及び清信士女を遣はして、法師を供養せしめ、諸の衆生を引導して、之を集めて法を聽かしめん。

若し人ありて、惡の刀杖及び瓦石を加へんと欲せば、則ち變化の人を遣はして、之が爲に衛護と作さん。

若し説法の人、獨り空閑の處に在つて、寂莫として人の聲無からんに、此の經典を讀誦せば、

我爾の時に爲に、清淨光明の身を現せん。若し章句を忘失せば、爲に説いて通利せしめん。

若し人は是の徳を具して、或は四衆の爲に説き、空處にして經を讀誦せば、皆我身を見ることを得ん。

若し人空閑に在らば、我天龍王、夜叉鬼神等を遣はして、爲に聽法の衆と作さん。

是の人は法を樂説し、分別して罣礙無けん。諸佛護念したまふが故に、能く大衆をして喜ばしめん。

若し法師に親近せば、速に菩薩の道を得。是の師に隨順して學せば、恒沙の佛を見たてまつることを得ん。』

見寶塔品第十一

爾の時に佛前に、七寶の塔有り。高さ五百由旬、縱廣二百五十由旬なり。地從り涌出して、空中に住在す。種種の寶物をもつて之れを莊校せり。五千の欄楯あつて、龕室千萬なり。無數の幢幡、以て嚴飾と爲し、寶の瓔珞を垂れ、寶鈴萬億にして其の上に懸けたり。四面に皆多摩羅跋栴檀の香を出だして、世界に充徧せり。其の諸の幡蓋は、金、銀、瑠璃、砗磲、瑪瑙、眞珠、玫瑰の七寶を以て合成し、高く四天王宮に至る。三十三天は、天の曼陀羅華を雨らして寶塔に供養し、餘の諸の天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の千萬億の衆は、一切の華、香、瓔珞、幡蓋、伎樂を以て寶塔に供養し、恭敬し、尊重し、讚嘆したてまつる。

【一】(原文)。如是、如是、釋迦牟尼世尊如所說者皆是眞實。

爾の時に寶塔の中より、大音聲を出だして、歎めて言はく、『善哉善哉、釋迦牟尼世尊、能く平等大慧、教菩薩法、佛所護念の妙法華經を以て、大衆の爲に説きたまふ。』
 是の如し、是の如し。釋迦牟尼世尊の所説の如きは、皆是れ眞實なり。』

爾の時に四衆、大寶塔の空中に住在せるを見、又塔の中より出だしたまふ所の音聲を聞いて、皆法喜を得、未曾有なりと怪しみ、座より起つて、恭敬合掌して、却つて一面に住す。

爾の時に菩薩摩訶薩有り、大樂説と名づく。一切世間の天、人、阿修羅等の心の所疑を知つて、佛に白して言さく、『世尊、何の因縁を以てか此の寶塔有つて地より涌出し、又其の中よりは是の音聲を發したまふや。』

爾の時に佛、大樂説菩薩に告げたまはく、『此の寶塔の中には如來の全身在します。乃往過去東方の無量千萬億阿僧祇の世界に國あり、寶淨と名づく。彼の中に佛有す。號をば多寶と曰ふ。其の佛、菩薩の道を行せし時、大誓願を作したまはく、

「若し我成佛して滅度しなんの後、十方の國土に於て法華經を説くの處有らば、我が塔廟是の經を聽かんが爲の故に、其の前に涌現して、爲に證明と作つて、讚めて善哉善哉と言はん」と。彼の佛成道し已つて、滅度の時に臨んで、天人大眾の中に於て、諸の比丘に告げたまはく、「我が滅度の後、我が全身を供養せんと欲せん者は、應に一の大塔を起つべし」と。其の佛神通の願力を以て、十方世界の存在處處に、若し法華經を説くこと有れば、彼の寶塔皆其の前に涌出して、全身塔の中に在し、地

て、讚めて「善哉善哉」と言ふ。大樂説、今多寶如來の塔は、法華經を説くを聞きたまはんが故に、地より涌出して、讚めて「善哉善哉」と言ふ。』

是の時に大樂説菩薩、如來の神力を以ての故に佛に白して言さく、『世尊、我等願はくは此の佛身

見寶塔品第十一

一五五

【一】 大樂説。正法華には大辯に作る。(尼波羅本 *Mahaprajñāpāramitā*)
【二】 寶淨。正法華之に同じ。(尼波羅本 *Ratnaseśudhī*)
【三】 多寶。正法華之に同じ。アラブイタラトナ *Prahātarāna*。
【四】 尼波羅本

を見たてまつらんと欲す。』

佛、大樂説菩薩摩訶薩に告げたまはく、『是の多寶佛は深重の願有ます、若し我が寶塔法華經を聽か
んが爲の故に、諸佛の前に出でん時、其れ我が身を以て四衆に示さんと欲すること有らば、彼の佛の
分身の諸佛十方世界に在しまして説法したまふを、盡く一處に還へし集めて、然る後に我が身乃し出
現せんのみ。大樂説、我が分身の諸佛十方世界に在しまして説法したまふ者を、今應當に集むべし。』
大樂説、佛に白して言さく、『我等亦願はくは世尊の分身の諸佛を見たてまつり、禮拜し供養せん
と欲す。』

爾の時に佛、白毫の一光を放ちたまふに、即ち東方五百萬億那由佗恒河沙等の國土の諸佛を見たて
まつる。彼の諸の國土は、皆玻璃を以て地と爲し、寶樹、寶衣、これを以て莊嚴と爲し、無數千萬億
の菩薩其の中に充滿せり。徧く寶幔を張り、寶網上に羅けたり。彼の國の諸佛大なる妙音を以て諸法
を説きたまふ。及び無量千萬億の菩薩の諸の國に徧滿して衆の爲に法を説くを見る。南、西、北方、
四維、上下、白毫相の光の所照の處、亦復是の如し。

爾の時に十方の諸佛、各衆の菩薩に告げて言はく、『善男子、我今應に娑婆世界の釋迦牟尼佛の所
に往き、并に多寶如來の寶塔を供養すべし。』

時に娑婆世界即ち變じて清淨なり。瑠璃を地と爲して寶樹莊嚴し、黄金を繩と爲して以て八道を界

ひ、諸の聚落、村營、城邑、大海、江河、山川、林藪無く、大寶香を燒き、曼陀羅華徧く其の地に布
 き、寶の網帳を以て其の上に羅け覆ひ、諸の寶鈴を懸けたり。唯此の會の衆を留めて、諸の天人を移
 して他土に置く。是の時に諸佛、各一りの大菩薩を將ゐて以て侍者と爲し、娑婆世界に至つて 各寶
 樹の下に到りたまふ。一一の寶樹高さ五百由旬、枝葉華果次第に莊嚴せり。諸の寶樹の下に皆師子の
 座有り、高さ五由旬。亦た大寶を以て之を校飾せり。爾の時に諸佛、各此
 の座に於て結跏趺坐したまふ。是の如く展轉して三千大千世界に徧滿せり。
 而も釋迦牟尼佛の一方の所分の身に於て、猶故未だ盡きず。
 時に釋迦牟尼佛、所分身の諸佛を容受せんと欲すが故に、八方に各更に
 二百萬億那由佗の國を變じて、皆清淨ならしめたまふ。地獄、餓鬼、畜
 生、及び阿修羅有ること無し。又諸の天人を移して佗土に置く。所化の
 國亦瑠璃を以て地と爲し寶樹莊嚴せり。樹の高さ五百由旬、枝葉華果次第
 に嚴飾せり。樹下に皆寶の師子の座有り、高さ五由旬、種種の諸寶以て莊
 校と爲す。亦大海、江河、及び 目眞鄰陀山、摩訶目眞鄰陀山、鐵圍
 山、大鐵圍山、須彌山等の諸の 山王無く、通じて一佛國土と爲つて、
 寶地平正なり。寶をもつて交露せる幔徧く其の上に覆ひ、諸の幡蓋を懸け、

【五】目眞鄰陀。正法華には日
 鄰に作る。本は龍王 (Trendo-
 クンヤールコーナガラジヤール
 Kshakhi Sraja) の名を略取し
 て山に名づく、山はその龍王
 の所居なるを以てなり。脱、
 亦は脱王と翻す、石山と翻す
 るは義譯なり。

【六】鐵圍山。梵名は新迦羅
 チャラグラーダ (Cakravata) 須彌の外邊に在
 りて四方を圍む、十山王の一
 なり。

【七】須彌山。須彌は新譯の本
 には蘇迷盧 (Sumeru) と云ふ。
 妙高と翻す、四寶の所成なる
 が故に妙と云ふ。四寶とは東
 方は黄金、南方は頗梨、西方

大寶香を燒き、諸の天の寶華、徧く其の地に布けり。

釋迦牟尼佛、諸佛の當に來り坐したまふべきが爲の故に、復八方に於て

各更に二百萬億那由佗の國を變じて、皆清淨ならしめたまふ。地獄、

餓鬼、畜生、及び阿修羅有ること無し。又諸の天人を移して他土に置く。

所化の國亦琉璃を以て地と爲して寶樹莊嚴せり。樹の高さ五百由旬、枝葉

華果次第に莊嚴せり。樹下に皆寶の師子の座有り。高さ五由旬、亦大寶を

以て之を校飾せり、亦大海、江河、及び日真鄰陀山、摩訶日真鄰陀山、鐵

圍山、大鐵圍山、須彌山等の諸の山王無く、通じて一佛國土と爲つて、寶

地平正なり。寶をもつて交盡せる處徧く其の上に覆ひ、諸の幡蓋を懸け、

大寶香を燒き、諸の天の寶華、徧く其の地に布けり。爾の時に東方の釋迦

牟尼の所分の身の百千萬億那由他恒河沙等の國土の中の諸佛、各各に說法したまへる、此に來集した

まふ。是の如く次第に十方の諸佛皆悉く來集して、八方に坐したまふ。爾の時に一一の方の四百萬

億那由他の國土に、諸佛如來其の中に徧滿したまへり。

是の時に諸佛各寶樹の下に在まほし、師子の座に坐して、皆侍者を遣はして釋迦牟尼佛を問訊した

まふ。各寶華を齎らして掬に滿てて、之に告げて言はく、「善男子、汝者闍崛山の釋迦牟尼佛の所に

は白銀、北方は瑪瑙なり。一切の衆山よりも高きが故に高

と云ふ。大海の中に處して高さ三百三十六里と云ふ。是れ

印度世界創造説に於て談ずる所の山の名にして帝釋の所住

處なり。亦安明、妙光、好光等の諸翻あり。亦金剛山とも

稱せり。十山王の第一なり。

(須彌樓、修迷樓)

【八】山王、梵名波羅巴多羅圍

(Parvata)、高山の稱なり。

十山王あり、名目新華嚴卷三十九に出でたり。

往詣して、我が辭の如くに曰せ、「少病少惱にして、氣力安樂にましますや。及び菩薩聲聞衆、悉く安穩なりや不や」と。此の寶華を以て佛に散じ供養したてまつりて、是の言を作せ、「彼の某甲の佛此の寶塔を開かんと與欲す」と。諸佛使を遣はしたまふに亦復是の如し。

爾の時に釋迦牟尼佛、所分身の諸佛の悉く已に來集して、各各に師子の座に坐したまふを見そなし、皆諸佛の同じく寶塔を開かんと與欲したまふを聞こしめして、即ち座より起つて虚空の中に住したまふ。一切の四衆起立し合掌し、一心に佛を觀たてまつる。是に釋迦牟尼佛右の指を以て七寶の塔の戸を開きたまふ。大音聲を出だすこと、關鑰を却けて大城の門を開くが如し。

即時に一切の衆會、皆多寶如來の寶塔の中に於て師子の座に坐し、全身散せざること禪定に入るが如くなるを見たてまつり、又其の善哉善哉、釋迦牟尼佛、快く是の法華經を説きたまふ。我是の經を聽かんが爲の故に、而も此に來至せり」と言ふを聞きたてまつる。

爾の時に四衆等、過去の無量千萬億劫に滅度したまへる佛の、是の如き言を説きたまふを見たてまつりて、未曾有なりと嘆じ、天の寶華聚を以て多寶佛及び釋迦牟尼佛の上に散じたてまつる。

爾の時に多寶佛、寶塔の中に於て半座を分ち、釋迦牟尼佛に與へて、是の言を作したまはく、「釋迦牟尼佛此の座に就きたまふ可し。」即時に釋迦牟尼佛其の塔の中に入り、其の半座に坐して結跏趺坐したまふ。

爾の時に大衆、二如來の七寶の塔の中の師子の座の上に在しまして。結跏趺坐したまふを見たてまつりて、各是の念を作さく、「佛は高遠に坐したまへり。惟願はくは如來神通力を以て、我が等輩をして俱に虚空に處ら令めたまへ。」即時に釋迦牟尼佛、神通力を以て 諸の大衆を接して皆虚空に在きたまふ。

大音聲を以て普く四衆に告げたまはく、「誰か能く此の娑婆國土に於て、廣く妙法華經を説かん。今正しく是れ時なり。如來久しからずして、當に涅槃に入るべし。佛此の妙法華經を以て、付嘱して在ること有らしめんと欲す。」

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、
 『聖主世尊、久しく滅度したまふと雖も、寶塔の中に在しまして、尙

【九】（原文）。見二如來、在七寶塔中師子座上、結跏趺坐。
 【一〇】（原文）。接諸大衆、皆在虚空。

ほ法の爲めに來りたまへり。

諸人云何ぞ、勤めて法に爲はざらんや。此の佛滅度したまひて、無央數劫なり。處處に法を聽きたまふことは、遇ひ難きを以ての故なり。

彼の佛の本願は、我滅度の後、在所往に、常に法を聽かんが爲にせんとなり。

又た我が分身の、無量の諸佛、恒沙等の如き、來つて法を聽かんと欲し、

及び滅度の、多寶如來を見たてまつらんと、各妙土、及び弟子衆、

天人龍神の、諸の供養の事を捨てて、法をして久く住せしめんが故に、此に來至したまへり。
諸佛を坐せしめんが爲に、神通力を以て、無量の衆を移して、國をして清淨ならしむ。
諸佛各各、寶樹の下に詣りたまふ。清淨の池の、蓮華莊嚴せるが如し。

其の寶樹の下に、諸の師子の座あり、佛其の上に坐したまひて、光明嚴飾したまふ。

夜の闇の中に、大なる炬火を然せるが如し。身より妙香を出だして、十方の國に徧じたまふ。
衆生熏を蒙むりて、喜び自ら勝へず。譬へば大風の、小樹の枝を吹くが如し。

是の方便を以て、法をして久しく住せしむ。諸の大衆に告ぐ、我が滅度の後、
誰か能く斯の經を、護持し讀み説かん。今佛前に於て、自ら誓言を説け。

其れ多寶佛、久く滅度したまふと雖も、大誓願を以て、而も師子吼したまふ。
多寶如來、及與び我が身、集むる所の化佛、當に此の意を知るべし。

諸の佛子等、誰か能く法を護らん。當に大願を發して、久く住することを得せしむべし。
其れ能く此の經法を、護ること有らん者は、則ち爲れ、我及び多寶を供養するなり。

此の多寶佛、寶塔に處して、常に十方に遊びたまふは、此の經の爲の故なり。
亦復、諸の來りたまへる化佛の、諸の世界を、莊嚴し光飾したまふ者を供養するなり。

若し此の經を説かば、則ち爲れ我、多寶如來、及び諸の化佛を見たてまつるなり。

諸の善男子、各諦かに思惟せよ、此れは爲れ難事なり、宜しく大願を發すべし。

諸餘の經典、數恒沙の如し、此れ等を説くと雖も、未だ難しと爲すに足らず。

若し須彌を接つて、佗方の、無數の佛土に擲げ置かんも、亦未だ難しと爲さず。

若し足の指を以て、大千界を動かして、遠く佗國に擲げんも、亦未だ難しと爲さず。

若し有頂に立つて、衆の爲に、無量の餘經を演説せんも、亦未だ難しと爲さず。

若し佛の滅後、惡世の中に於て、能く此の經を説かんは、是れ則ち難しと爲す。

假使人有つて、手に虚空を把つて、而も以て遊行すとも、亦未だ難しと爲さず。

我が滅後に於て、若しは自らも書き持ち、若しは人をしても書かしめんは、是れ則ち難しと爲す。

若し大地を以て、足の甲の上に置いて、梵天に昇らんも、亦未だ難しと爲さず。

佛の滅度の後、惡世の中に於て、暫くも此の經を讀まんは、是れ則ち難しと爲す。

假使劫燒に、乾ける草を擔ひ負うて、中に入つて燒けざらんも、亦未だ難しと爲さず。

我が滅度の後に、若し此の經を持つて、一人の爲にも説かんは、是れ則ち難しと爲す。

若し八萬四千の、法藏、十二部經を持つて、人の爲に演説して、

諸の聽かん者をして、六神通を得せしめん、能く是の如くすと雖も、

【一】劫燒。世界の最終劫燒の時、大火發してこの世界を燒

亡することあり、之れを劫燒と云ふなり。

【二】八萬四千の法藏。種種の

亦未だ難しと爲さず。

我が滅後に於て、此の經を聽受して、其の義趣を問はんは、是れ則ち難しと爲す。

若し人法を説いて、千萬億、無量無數、恒沙の衆生をして、

阿羅漢を得、六神通を具せしめん、是の益有りと雖も、亦未だ難しと爲さず。

我が滅後に於て、若し能く、斯の如き經典を奉持せんは、是れ則ち難しと爲す。

我佛道の爲に、無量の土に於て、始めより今に至るまで、廣く諸經を説く。

而も其の中に於て、此の經第一なり。若し能く持つこと有るは、則ち佛身を持つなり。

諸の善男子、我が滅後に於て、誰か能く、此の經を受持し讀誦せん。

今佛前に於て、自ら誓言を説げ。此の經は持つこと難し、若し暫くも持つ者は、我則ち歡喜す。諸佛も亦然なり。是の如き人は、諸佛の歎めたまふ所なり。是れ則ち勇猛なり、是れ則ち精進なり、是れを戒を持ち、(四)頭陀を行する者と名づく。

說あれども通途は八萬四千の煩惱に對して八萬四千の法藏と稱す。法藏とは佛の説法藏と云へることなり。

【三】十二部經。方便品の註を看るべし。

【四】頭陀。新譯に杜多(Gruta)と云ふ。修治と翻す、戒を修し心を治するなり。亦抖擻と翻す、惡を排除するなり。洗汰、棄除、洗滌、搖振等の諸翻意皆同じ。衣服、飲食、住處の三欲を去つて糞掃、乞食、樹下にして戒を嚴修するなり。

則ち爲れ疾く、無上の佛道を得るなり。

能く來世に於て、此の經を讀み持たんは、是れ眞の佛子、淳善の地に住するなり。
佛の滅度の後に、能く其の義を解せんは、是れ諸の天人、世間の眼なり。

恐畏の世に於て、能く須臾も説かんは、一切の天人、皆應に供養すべし。』

卷の第五

提婆達多品第十二

爾の時に佛、諸の菩薩及び天人四衆に告げたまはく、「吾過去無量劫の中に於て法華經を求めしに、懈倦すること無かりき。多劫の中に於て常に國王と作つて、願を發して無上菩提を求めしに、心に退轉せず。六波羅密を満足せんと欲するが爲めに布施を勤行せしに、心に象馬・七珍・國城・妻子・奴婢・僕從・頭目・髓腦・身肉・手足を憐惜すること無く、軀命を惜まざりき。時に世の人民、壽命無量なり。法の爲の故に、國位を捐捨して、政を太子に委せ、鼓を擊ちて四方に宣令して法を求めき。」誰か能く我が爲に大乘を説かん者なる。吾當に身を終るまで供給走使すべし。」時に仙人有り、來つて王に白して言さく、「我大乘を有てり、妙法蓮華經と名づけたてまつる。若し我に違はずんば、當に爲に宣説すべし。」王、仙の言を聞いて歡喜踊躍し、即ち仙人に隨つて所須を供給し、果を採り、水を汲み、薪を拾ひ、食を設け、乃至身を以て牀座と爲して、身心倦きこと無かりき。時に奉事すること千歳を経て、法の爲の故に、精勤給侍して、乏しき所無からしめき。」

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、而も偈を説いて言はく、

「我過去の劫を念ふに、大法を求むるを爲ての故に、世の國王と作ると雖、五欲の樂を貪らざりき。鐘を椎て四方に告ぐ、「誰か大法を有たん者なる。若し我が爲に解説せば、身當に奴僕と爲べし。」時に阿私仙有り、來つて大王に白さく、「我微妙の法を有てり、世間に希有なる所なり。」

若し能く修行せば、吾當に汝が爲に説くべし。」時に王、仙の言を聞いて、心に大喜悅を生じ、即便ち仙人に隨つて、所須を供給し、薪及び果藏を採つて、時に隨つて恭敬して與へき。情に妙法を存するが故に、身心懈倦無かりき。普く諸の衆生の爲に、大法を勤求して、亦己が身、及び五欲の樂の爲にせず。故に大國の王と爲つて、勤求して此の法を獲て、

遂に成佛を得ることを致せり。今故に汝が爲に説く。」

佛 諸の比丘に告げたまはく、「爾の時の王とは則ち我が身是れなり。時の仙人とは今の 提婆達多是れなり。提婆達多の善知識に由るが故に、我をして、六波羅密、慈悲喜捨、三十二相、八十種好、紫磨金色、十力、

四無所畏、四攝法、

十八不共、神通道力、

を具足せしむ。等正覺を成じて、廣く衆生を

【一】阿私仙、古譯には不白と

翻じ、新譯には無比と翻す。

亦端嚴、端正等とも翻す。具

さには阿私陀仙と云ふ。悉達

太子誕生の時、占相したる仙

人この名に同じ、同名異人歟。

(阿私多)

【二】提婆達多(Devadatta)略

して提婆とも云ひ、亦調達と

も云ふ。天熱と翻す、その生

まるる時、諸天心に熱惱を生

じたるを以ての故なり。亦天

授、天與等の諸翻あり。斛飯

王の子にして釋尊の從兄弟な

り。釋尊に敵して自ら佛と稱

し、阿闍世を檀那として具さ

に五逆罪を犯し、生きながら

地獄に墮つ。今その宿因を説

き成佛の記別を授く。法華の

惡人成佛と云ふは是れなり。

(提婆達兜、地婆達多、提婆達)

度すること、皆提婆達多
 の善知識に因るが故
 なり。諸の四衆に告
 ぐ、提婆達多は、却つ
 て後無量劫を過ぎて、
 當に成佛することを得
 べし。號をば天王
 如來、應供・正徧知・明
 行足・善逝・世間解・無
 上士・調御丈夫・天人
 師・佛・世尊と曰はん。
 世界をば天道と名
 づけん。時に天王佛世
 に住すること二十中
 劫、廣く衆生の爲に妙

【三】十力。如來と菩薩とに各
 十力あり。如來の十力とは、

一に知是處非處力 (Sādhana-
 tānājñāyānāpāram,
 tanyānāpāram)、三藏法數

卷三十五には知是處非處智力
 とあり。二に知業報力 (Kāra-
 māyāpaka-j.)、三藏法數に知
 過現未來業報智力とある是れ

なり。三に知衆生種種欲樂力
 (Nānādhammā-j.)、三藏法數
 に知種種解智力とある是れな

り。四に知世間種性力 (Sāma-
 dhātū-j.)、三藏法數に種種界
 智力とある是れなり。五に知

衆生諸根上下力 (Indriyapa-
 rā-pari-j.)、三藏法數に知諸根
 勝劣智力とある是れなり。六

に知一切道智處相力 (Sattva-
 sampannāpatti-j.)、三藏法數
 に知一切至處道智力とある是

レナウツタターナ
 nayuttāna-j.)、三藏法數に
 知諸禪解脫三昧智力とある是

れなり。八に知宿命力 (Tī-
 riyavivisānānu-j.)、三藏法
 數に知宿命無漏智力とある是

れなり。九に知天眼力 (Dī-
 yanapatti-j.)、三藏法數に知
 天眼無礙智力とある是れな

り。十に漏盡智力 (Asavakā-
 ya-j.)、三藏法數に知永斷習
 氣智力とある是れなり。次に

菩薩の十力とは、十波羅密の
 中の力波羅密を開して十種と
 爲すなり。一に深心力 (Asa-
 yavalāna)、亦意樂力とも云ふ。

二に増上深心力 (Adhiyāgya-
 ā.)、亦増上意樂力とも云ふ。
 三に方便力 (Upāya-b.)、亦

加行力とも云ふ。四に智力 (Pa-
 rajñāya-b.)、亦慧力とも云ふ。
 五に願力 (Prāṇāna-b.)、六
 に乘力 (Yāna-b.)、七に行力
 (Carya-b.)、八に神變力 (Vi-

クルタナ
 kurva-b.)、九に菩提力 (Bo-
 dhi-b.)、十に轉法輪力 (Dhā-
 mōkṛa-vartana-b.) なり。

【四】四無所畏。これに亦如來
 と菩薩との各四無所畏あり。

如來の四無所畏とは、一に「
 一切智無所畏 (Sarvādharmā-
 sūpti-vi-vairātyāna)」、二に

「漏盡無所畏 (Sarvasāvakasya
 jñāna-v.)」、三に「說障道無所畏
 (Antarāyikadharmānanyathā-
 tvānīkṛtvāyākṛṇṇa-v.)」、四

に「說盡苦道無所畏 (Sarvasa-
 mpañāhigamyanant yānikap-
 rātipatthātvā-v.)」なり。三
 藏法數卷十三のの名目と同

じ。亦一切智無所畏を諸法現
 等覺無畏と云ひ、漏盡無所畏
 を一切漏盡智無畏と云ひ、說

障道無所畏を障法不虛決定授
 記無畏と云ひ、說盡苦道無所
 畏を爲證一切具足出道如性無
 畏とも云ふ。次に菩薩の四無

歌頌を以て七寶の妙塔を禮拜し供養せん。無量の衆生阿羅漢果を得、無量の衆生辟支佛を悟り、不可思議の衆生菩提心を發して不退轉に至らん。佛、諸の比丘に告げたまはく、『未來世の中に若し善男子、善女人有つて、妙法華經の提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は、地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして十方の佛前に生ぜん。所生の處には、常に此の經を聞かん。若し人天の中に生ぜば、勝妙の樂を受け、若し佛前に在らば、蓮華より化生せん。』時に下方の多寶世尊の所從の菩薩、名を(九)智積と曰ふ、多寶佛に白さく、『當に本土に還りたまふべし。』

釋迦牟尼佛、智積に告げて曰はく、『善男子、且らく須臾を待て。此に菩薩あり、文殊師利と

提婆達多品第十二

カニマ、ニヤーナナフルブムサムム
 kenā jhāpiti vaṅgamaṃ j-
 ニヤーナニスリワルチ
 ānānupavāṇā). 十六に知過
 去無癡 (Aññānaṃ sanga-
 アチチドフニヤサガム
 ṇānānupāpānaṃ jñānaṃ ts' an p-
 ヲラチタムニヤナニヤワム
 rivaṇā). 三藏法數には智慧
 知過去世無癡と爲せり。十七
 アナリガドフ
 二に知未來無癡 (Aññānaṃ divi-
 ニヤサンガニヲラチハムニヤ
 nysānānupāpānaṃ jñāna-
 ヌルニヤナニヤワム
 ṇānānupāpānaṃ). 三藏法
 數には智慧知未來世無癡と爲
 セリ。十八に知現在無癡 (Pīṇi-
 トドパンネドフニヤサガム
 tyāpanne dhyaṃ saṅgama-
 ラハタムニヤナニヤワム
 ṇānānupāpānaṃ jñānaṃ saṃp-
 フルカチ
 rivaṇā). 三藏法數には智慧知
 現在世無癡と爲せり。已上如
 來の十八不共なり。次に菩薩
 の十八不共とは、一に具諸布
 施者 (Anupajātaṇṇā), 二に
 アスパダスタナー
 具諸戒律者 (Anupādisāṇā),
 アスパヒスタ
 三に具諸忍辱者 (Anupāyā-
 クニヤンタヤ
 ṇānupāyānā), 四に具諸精進者
 アスパダスタケルヤ
 (Anupādisāṇā), 五に具

諸靜慮者 (Anupādisāṇā),
 ナ), 六に具諸智者 (Anu-
 pad sūpanṇā), 七に以攝法收
 諸有情者 (Sampadhesuṣṭa-
 ルワサトフサムクラハカ
 rvaṣṭi sūpanṇā), 八に
 知回向儀者 (Purīṇānuy-
 デイニヤ
 dhīṇā), 九に以方便善巧隨
 衆生行演說大乘者 (Prajāka-
 ウシヤヤサワサトフチライニ
 ṇānānupāpānaṃ jñānaṃ saṃp-
 ナバライヤナニヤナニヤ
 tyāpanne dhyaṃ saṅgama-
 ルニヤカ
 rvaṣṭi), 十に不失大乘者 (Ma-
 ハヤナニヤ), 十一に開示輪
 廻涅槃門者 (Sāraṇaṅga-
 ムカサムタルニヤカ
 ṇānānupāpānaṃ jñānaṃ saṃp-
 ナバライヤナニヤナニヤ
 tyāpanne dhyaṃ saṅgama-
 ルニヤカ
 rvaṣṭi), 十二に
 明變於曠穢里者 (Yamkavya-
 トヤスターハハラクニヤ
 tyā tāhākusā), 十三に以
 隨智慧無想行而遠離過惡世
 現入者 (Nānupāpānaṃ jñānaṃ
 ビサムスカリニラドヤサ
 ṇānānupāpānaṃ jñānaṃ saṃp-
 ナバライヤナニヤナニヤ
 tyāpanne dhyaṃ saṅgama-
 ルニヤカ
 rvaṣṭi), 十
 四に身語意業具諸十善者 (Da-

名づく、與に相見る可し。妙法を論説して、本土に還る可し。』

爾の時に文殊師利、千葉の蓮華の大きき車輪の如くなるに坐し、俱に來れる菩薩も亦寶蓮華に坐して、大海の娑竭羅龍宮より、自然に涌出して、虚空の中に住し、靈鷲山に詣でて蓮華より下りて佛前に至り、頭面に二世尊の足を敬禮したてまつる。修敬すること已畢つて、智積の所に往いて、共に相慰問して、却つて一面に坐しぬ。

智積菩薩、文殊師利に問はく、『仁、龍宮に往いて化する所の衆生、其の數幾何ぞ。』

文殊師利の言はく、『其の數無量にして稱計す可からず。且らく須臾を待て、自ら當に證有るべし。』

所言未だ竟はらざるに、無數の菩薩寶蓮華に坐して海より涌出し、靈鷲山に詣でて虚空に住せり。

シヤクシヤロベタカヤワーグマナヌ
Sakṣaṣyaṣopetākayavāgmanānus
カルマーンター
karmānā) 十五に忍諸菩薩
不捨諸有情界者 (Sura hī-
カスカンダサハナートモババード
Kāskandasaḥānātāmōbābārd
ナナルブサツブヌーツバリトヤギ
Nanarubusatsubunūtsubaritoyagi
Narasvati Vallātiparityāgi-
ナ) 十六に爲諸有情示現喜
容者 (Svrajagadāhincāsa-
ムダルシヤカー
mudarsiyākā) 十七に多少凡夫
與聲聞中猶如衆善如意寶樹堅
固永遠不失普慧心者 (Kiyānk-
ルツチラバ、イラシラブカマドヤシユ
Kiyānkulutsuchirabakamadoyashiyu
pochrahāśāyānkamadyashiyu
バワユーンラトナカルパワルクシヤトル
Bhavayūnralatōnakarpawarukshiyōru
マサルブジニヤターチツサムプラム
Marsarubujinīyātātsūsampramu
Uhasvayāntācittāsampramu-
ヤカー
yākā) 十八に便施諸法巧以欲
得灌頂尋求佛法無有退轉者

【七】天王。正法華之れに同じ。(尼婆羅本、Devatā) 來の因果の諸徳なるなり。
【八】天道。正法華には天儒に作る。(尼婆羅本、Devasjanā) 來の因果の諸徳なるなり。
【九】智積。正法華之れに同じ。(尼婆羅本、prajākūta) 來の因果の諸徳なるなり。

【七】天王。正法華之れに同じ。(尼婆羅本、Devatā) 來の因果の諸徳なるなり。
【八】天道。正法華には天儒に作る。(尼婆羅本、Devasjanā) 來の因果の諸徳なるなり。
【九】智積。正法華之れに同じ。(尼婆羅本、prajākūta) 來の因果の諸徳なるなり。

此の諸の菩薩は皆是れ文殊師利の化度する所なり。菩薩の行を具して、皆共に六波羅密を論説す。本聲聞なりし人は虚空の中に在つて聲聞の行を説く。今皆大乘の空の義を修行す。

文殊師利、智積に謂つて曰はく、『海に於て教化すること其の事是の如し。』
爾の時に智積菩薩、偈を以て讚めて曰はく、

『大智徳勇健にして、無量の衆を化度せり。今此の諸の大會、及び我皆已に見つ。』

實相の義を演暢し、一乗の法を開闡して、廣く諸の羣生を導いて、速かに菩提を成せしむ。』

文殊師利の言はく、『我海中に於て、唯常に妙法華經を宣説す。』

智積、文殊師利に問うて言はく、『此の經は甚深微妙にして、諸經の中の寶、世に希有なる所なり。』

頗し衆生の勤加精進し此の經を修行して、速かに佛を得るもの有りや不や。』

文殊師利の言はく、『有り。娑竭羅龍王の女、年始めて八歳、智慧利根にして、善く衆生の諸根の行業を知り、陀羅尼を得、諸佛の所説の甚深の祕藏、悉く能く受持し、深く禪定に入つて諸法を了達し、刹那の頃に於て菩提心を發し、不退轉を得たり。辯才無礙にして、衆生を慈念すること、猶ほ赤子の如し。功德具足し、心に念ひ口に演ぶること、微妙廣大なり。慈悲仁讓、志意和雅にして、能く菩提に至れり。』

智積菩薩の言はく、『我釋迦如來を見たてまつるに、無量劫に於て、難行苦行したまひ、功を積み徳

を累ねて、菩薩の道を求むること、未だ曾て止息したまはず。三千大千世界を觀るに、乃至芥子の如き許りも、是菩薩にして身命を捨てたまふ處に非ざること有ること無し。衆生の爲の故なり。然る後乃し菩提の道を成ずることを得たまへり。信ぜじ此の女の、須臾の頃に於て便ち正覺を成ずることを。」

言論未だ訖らざるに、時に龍王の女、忽ち前に現じて、頭面に禮敬したまつり、却つて一面に住して、偈を以て讚めて曰さく、

「深く罪福の相を達して、徧く十方を照らしたまふ、微妙の淨き法身、相を具すること 三十二、

八十種好を以て、用つて法身を莊嚴したまへり。天人の戴仰する所、龍神も咸く恭敬す。

一切衆生の類、宗奉せざる者無し。又聞いて菩提を成ずることは、唯佛のみ當に證知したまふべし。我大乘の教を闡いて、苦の衆生を度脱せん。」

爾の時に舍利弗、龍女に語つて言はく、「汝久からずして無上道を得たりと謂へる、是の事信じ難し。所以は何。女身は垢穢にして是れ法器に非ず。云何ぞ能く無上菩提を得ん。佛道は懸曠なり。無量劫を経て勤苦して行を積み、具さに諸度を修して、然る後乃し成ず。又女人の身には猶ほ五つの障

【三十二】 八十種好。開經無量義經の註を看るべし。之に就て諸經論の所說開合不同なり。譬喻品の法華新註（卷二上）畫上に記するが如し。先の開經の註の八十種好は大品般若四攝品に據る。三藏法數（卷四十九）に掲ぐる所はまた頌いに異れり、煩しければ今略す、須るん者は往て檢せよ。

り有り、一には梵天王と作ることを得ず、二には帝釋、三には魔王、四には轉輪聖王、五には佛身なり。云何ぞ女身、速に成佛することを得ん。」

爾の時に龍女、一の寶珠有り、價直三千大千世界なり。持以て佛に上つる。佛即ち之れを受けたまふ。

龍女、智積菩薩、尊者舍利弗に謂つて言はく、「我寶珠を獻つる。世尊の納受、是の事疾しや不や。」

答へて言はく、「甚に疾し。」

女の言はく、「汝が神力を以て、我が成佛を觀よ、復此れよりも速かならん。」

當時の衆會、皆龍女の 忽然の間に変じて男子と成つて、菩薩の行を具して、即ち南方 無垢世界に往いて 寶蓮華に坐して等正覺を成じ、

三十二相、八十種好あつて、普く十方の一切衆生の爲に妙法を演説するを見る。

爾の時に娑婆世界の菩薩・聲聞・天・龍・八部・人・非人と、皆遙かに彼の龍女の成佛して、普く時の會の人天の爲に法を説くを見て、心大に歡喜して、悉く遙かに敬禮す。無量の衆生法を聞いて解悟し、不退轉を得、無量の衆生道の記を受くることを得たり。無垢世界六反震動す。娑婆世界の三千の衆生、不退の地に住し、三千の衆生、菩提心を發して而も受記を得たり。智積菩薩及び舍利弗、

【一】(原文)。忽然之間、變成男子。
【二】無垢。正法華には單に國王名號とありて無垢の稱を擧げず。(尼婆羅本、Vindha)

一切の衆會默然として信受す。

勸持品第十三

爾の時に薬王菩薩摩訶薩、及び大樂說菩薩摩訶薩、二萬の菩薩眷屬と與に俱に、皆佛前に於て是の誓言を作さく、『惟願はくは世尊、以て慮ひしたまふべからず。我等佛の滅後に於て當に此の經典を奉持し讀誦し説きたてまつるべし。後の惡世の衆生は、善根轉た少くして、増上慢多く、供養を貪利し、不善根を増し、解脱を遠離せん。教化す可きこと難しと雖も、我等當に大忍力を起して、此の經を讀誦し持説し書寫し、種種に供養して身命を惜まざるべし。』

爾の時に衆中の五百の阿羅漢の受記を得たる者、佛に白して言さく、『世尊、我等亦自ら誓願す、異の國土に於て、廣く此の經を説かん。』復學無學の八千人の受記を得たる者有り、座より而も起つて合掌し佛に向ひたてまつりて、是の誓言を作さく、『世尊、我等亦當に佗の國土に於て廣く此の經を説くべし。所以は何。是の娑婆國の中は、人弊惡多く、増上慢を懷き、功德淺薄に、瞋濁諸曲にして、心不實なるが故に。』

爾の時に佛の姨母摩訶波闍波提比丘尼、學無學の比丘尼六千人と與に俱に、座より而も起つて一心に合掌し、尊顔を瞻仰して、目暫くも捨てず。時に世尊、三、憍曇彌に告げたまはく、『何が故を憂の色にして如來を視る。

【一】 憍曇彌。亦喬答摩(カウタ)

【二】 と云ふ。刹帝利種の中の一姓なり。日種、甘蔗種、地種、泥土種、牛糞種等の諸翻あり。舊譯に瞿曇と云ふは轉訛なり。今摩訶波闍波提比丘尼またこの姓種なるが故に呼

汝が心に將に我汝が名を説いて阿耨多羅三藐三菩提の記を授けずと謂ふこと無しや。橋曇彌、我先に總じて一切の聲聞に皆已に授記すと説きき。今汝記を知らんと欲せば、將來の世、當に六萬八千億の諸佛の法の中に於て大法師と爲るべし。及び六千の學無學の比丘尼も俱に法師と爲らん。汝是の如く漸漸に菩薩の道を具して、當に作佛することを得べし。一切衆生意見如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世閒解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號けん。橋曇彌、是の一切衆生意見佛、及び六千の菩薩、轉次に授記して阿耨多羅三藐三菩提を得ん。』

爾の時に羅睺羅の母耶輸陀羅比丘尼、是の念を作さく、「世尊は授記の中に於て獨り我が名を説きたまはず。」

佛、耶輸陀羅に告げたまはく、「汝來世百千萬億の諸佛の法の中に於て、菩薩の行を修し、大法師と爲り、漸く佛道を具して、善國の中に於て當に作佛することを得べし。具足千萬光相如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世閒解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號けん。佛の壽は無量阿僧祇劫ならん。」

爾の時に摩訶波闍波提比丘尼、及び耶輸陀羅比丘尼、並びに其の眷屬、皆大に歡喜し、未曾有なる

んで橋曇彌と云ふ。一説に橋曇は姓、彌は女人の稱、即ち橋曇族の女と云へることにて之れを以つて摩訶波闍波提尼を呼べるなりと。摩訶波闍波提は序品の註を看るべし。

【一】一切衆生意見、正法華には一切衆生成敬如來に作る。

【二】尼波羅本、Sāḷvāyana (Sāḷvāyana) 一切衆生意見、正法華にハリクワットアブリヤタルニヤヤ

【三】具足千萬光相。正法華には具百千光幢幡如來に作る。
 (尼波羅本、Kasmīra-sūtra-
 Parīkṣitādvāyā
 Cāḍḍāyā) 具足千萬光相如來、應供、

ことを得て、即ち佛前に於て偈を説いて言さく、

『世尊導師、天人を安穩ならしめたまふ。我等記を聞いて、心安く具足せり。』

諸の比丘尼、是の偈を説き已つて、佛に白して言さく、『世尊、我等亦能く他方の國土に於て、廣く此の經を宣べん。』

爾の時に世尊、八十萬億那由佗の諸の菩薩摩訶薩を視をなほしたまふ。

是の諸の菩薩は皆是れ、阿惟越致にして、不退の法輪を轉じ、諸の陀羅尼を得たり。即ち座より起つて佛前に至り、一心に合掌して、是の念を作さく、『若し世尊、我等に此の經を持説せよと告勅し

たまはば、當に佛の教の如く廣く斯の法を宣ぶべし。』復是の念を作さく、

『佛今默然として告勅せられず、我當に云何がすべき。』時に諸の菩薩、佛意

に敬順し、並びに自ら本願を滿せんと欲して、便ち佛前に於て師子吼を作して、誓言を發さく、『世尊、我等如來の滅後に於て、十方世界に周旋往返して、能く衆生をして此の經を書寫し、受持し讀誦し、其の義を解説し、法の如く修行し、正憶念せしめん。皆是れ佛の威力ならん。惟願はくは世尊、他方に在しますとも遙かに守護せられよ。』

即時に諸の菩薩、俱に同く聲を發して、偈を説いて言さく、

『惟願はくは慮ひしたまふべからず、佛の滅度の後、恐怖惡世の中に於て、我等當に廣く説く』

【四】阿惟越致。譬喻品阿鞞跋致の註を見るべし。

べし。

諸の無智の人の、惡口罵詈等し、及び刀杖を加ふる者有らんに、我等皆當に忍ぶべし。

惡世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、未だ得ざるを爲れ得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん。

或は阿練若に、納衣にして空閑に在つて、自ら眞の道を行ずと謂つて、人間を輕賤する者有らん。

利養に貪著するが故に、白衣の與めに法を説いて、世に恭敬せらるること、六通の羅漢の如くならん。

是の人惡心を懷き、常に世俗の事を念ひ、名を阿練若に假りて、好んで我等が過を出たさん。

而も是の如き言を作さん、此の諸の比丘等は、利養を貪るを爲ての故に、外道の論議を説く。

自ら此の經典を作つて、世間の人を誑惑す、名聞を求むるを爲つての故に、分別して是の經を説くしと。

常に大衆の中に在つて、我等を毀らんと欲するが故に、國王大臣、婆

〔五〕 諸の無智の人。以下我等皆當に忍ぶべしまでの四句は三類敵人の第一俗衆増上慢なり。

〔六〕 惡世の中の比丘。以下我慢の心充滿せんまでの四句は三類敵人の第二道門増上慢なり。

〔七〕 或は阿練若。以下外道の論議を説くと謂はんまでの二十八句は三類敵人の第三僧聖増上慢なり。阿練若は亦阿蘭那(Araṇya)とも云ふ。無諍聲處、無諍處、無聲處、無喧雜、寂諍處、遠離處、閑靜處、無

寂諍處、遠離處、閑靜處、無

羅門居士、

及び餘の比丘衆に向つて、誹謗して我が惡を説いて、「是れ邪見の人、外道の論議を説く」と謂はん。

我等佛を敬ひたてまつるが故に、悉く是の諸惡を忍ばん。斯れに輕しめて、「汝等皆是れ佛あり」と言はん。

此の如き輕慢の言を、皆當に忍んで之れを受くべし。濁劫惡世の中は、多く諸の恐怖有らん。

惡鬼其の身に入つて、我を罵詈毀辱せん、我等佛を敬信したてまつりて、當に忍辱の鎧を著るべし。

是の經を説かんが爲の故に、此の諸の難事を忍ばん。
我身命を愛せず、但無上道を惜む。

我等來世に於て、佛の所囑を護持せん。世尊自ら當に知らしめすべし、濁世の惡比丘は、佛の方便、隨宜所説の法を知らずして、惡口して墮覺し、數數擯出せられ、

塔寺を遠離せん。是の如き等の衆惡をも、佛の告勅を念ふが故に、皆當に是の事を忍ぶべし。諸の聚落城邑に、其れ法を求むる者有らば、我皆其の所に到つて、佛の所囑の法を説かん。

事、空閑、空家等の諸翻あり。世間の憤闔を離れたる林中靜寂の處を云ふ。

【八】納衣。美好の服に對して

麤弊の衣を納衣と云ふ。故に又弊納衣とも云ふ。梵に芻摩(Srakā, Kṣamā)と云ふもの之れに中る、即ち弊麤の麻衣なり。納衣は衲と書く十二頭陀の一にこの著弊納衣の行あり。

【九】白衣。在家の人を云ふ。在家は白衣、出家は緇衣なるが故なり。

【一〇】(原文)。我不愛身命、但惜無上道。

我われは是これ世せ尊そんの使つかひなり、衆しゆに處しよして畏おそるる所ところ無し。我われ當まさに善よく法ほふを説とくべし。願ねがはくは佛ほとけ安あん穩ゑんに
住すましたまへ。

我われ世せ尊そんの前みまへ、諸もろもろの來きたりたまへる十方じつぱうの佛ほとけに於おて、是かくの如ごとき誓せい言ごんを發おこす、佛ほとけ自みづから我わが心こころを知しろし
めせ。

安樂行品第十四

爾の時に文殊師利法王子菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、「世尊、是の諸の菩薩は甚た爲れ有り難し。

佛に敬順したてまつるが故に、大誓願を發す。後に惡世に於て是の法華經を護持し讀誦し説かん。世尊、菩薩摩訶薩後の惡世に於て云何してか能く是の經を説かん。」

佛、文殊師利に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩後の惡世に於て是の經を説かんと欲せば、當に四法に安住すべし。一には菩薩の行處、親近處に安住して、能く衆生の爲に是の經を演説すべし。文殊師

利、云何なるをか菩薩摩訶薩の行處と名くる。若し菩薩摩訶薩忍辱の地に住し、柔和善順にして卒暴ならず、心亦驚かず、又復法に於て行する所無くして、諸法如實の相を觀じ、亦不分別を行せざる、

是れを菩薩摩訶薩の行處と名づく。云何なるをか菩薩摩訶薩の親近處と名づく。菩薩摩訶薩は國王、王子、大臣、官長に

親近せざれ。諸の外道、三梵志、三尼犍子等、及び世俗の文筆讚詠の外書を造り、及び

六師外道に攝せらる。一には富蘭那迦葉 (Purna Kassapa) 稱すれどもその最も主なるものは迦毘羅大仙 (Kāśyapa Mahārishi) の交流に屬する六師外道なり。外道の見計は概ねこの

【一】外道。九十五種の外道と稱すれどもその最も主なるものは迦毘羅大仙 (Kāśyapa Mahārishi) の交流に屬する六師外道なり。外道の見計は概ねこの

【二】、この人は空を至極と爲し、君臣父子の忠孝の道を無視す、斷見外道なり。二には末迦黎拘除黎 (Makkhali) の道あり。この人は衆生の苦樂は行因に關らずして自然にして有りと爲す、無因外道なり、亦自然外道とも云ふ。三には刪闍夜毘羅經 (Śālistambasūtra) の道あり。この人は八萬劫を過ぐれば自然に苦盡きて道を得るが故に修行を要せずと爲す、自然外道の一種なり。四には阿耨多羅含欽婆羅 (Ajita) の道あり。この人は衆生の苦樂は行因に關らずして自然にして有りと爲す、無因外道なり、亦自然外道とも云ふ。三には刪闍夜毘羅經 (Śālistambasūtra) の道あり。この人は八萬劫を過ぐれば自然に苦盡きて道を得るが故に修行を要せずと爲す、自然外道の一種なり。四には阿耨多羅含欽婆羅 (Ajita) の道あり。この人は衆生の苦樂は行因に關らずして自然にして有りと爲す、無因外道なり、亦自然外道とも云ふ。

路伽耶陀、逆路伽

耶陀の者に親近せざ

れ。亦諸の有らゆる

兇戲の相撲、相撲、及

び 那羅等の種種の

變現の戲に親近せざ

れ。又旃陀羅、及び

猪、羊、雞、狗を畜ひ、

毘獵し漁捕する諸の

惡律儀に親近せざ

れ。是の如き人等或時

に來らば、則ち爲に法

を説いて希望する所無

かれ。又聲聞を求むる

比丘、比丘尼、優婆塞、

タケイシャカムハラ (Takakumbhira)、この人(今

生に苦を受くれば未來に業を

得と計して諸の苦行を修す、

苦行外道なり。五には迦羅鳩

駄迦旃延 (Kakula Kātyāyana)

に對しては常見を執し、無相に

對しては斷見を執す、二途不

攝の異見外道なり。六には尼

健陀若提子 (Nigantho Jātaka)

に因あり道を行ずるも轉すこ

と能はずと爲す、常見外道な

り。これ等は皆佛教以外の諸

見にして各各一宗を爲して佛

教を受けず、故に外道と云ふ

なり。 【一】 梵志 印度固有の國教た

る婆羅門の種族教徒を梵志

一説には尼健は具さには尼健

連陀 (Nigantū) にして不

繫、離繫等と翻す、出家の外

道の通稱なりと。又一説には

苦行外道の一類なりとも云

ふ。按ずるに六師外道の第六

師の後この苦行外道の一類を

出しその祖の名を取つて稱し

て尼健子と名けたる歟、釋尊

の當時この苦行外道の一類最

も多かりしもの如し、彼の

一類の常に裸形なるを以て釋

尊は曾て無慙外道と呵したま

へり。 【四】 路伽耶陀、逆路伽耶陀。

路伽耶陀は亦路伽也底迦 (Rohita

Kāyā) とも云ふ、順世外道

世に反して世情に逆らふを主

義と爲す。法華文句には、路

伽耶を惡論、破論と云ひ、逆路

を君父に逆ふの論と解せり。

又師の弟子を破する論を路伽

耶と云ひ、弟子の師を破する

論を逆路と云ふとも解せり。

又路伽耶を惡對答、逆路を惡

微問と云ふ説あり。 【五】 那羅。妙樂の記には那羅

延と爲し角力の戲と爲せり、

然るに那羅 (Naraka) は舞戲

者にして俳優なり。那羅延力

士とは自ら異なり。文句に其

の身を縮盡して變異の相か作

すと云ふもの即ち是なり。 【六】 旃陀羅 亦旃荼羅 (Cātaka)

とも云ふ。主殺人と翻

す、獄卒を謂ふなり。又執暴

惡人、惡殺、可畏等と翻す。

又屠者、治狗人等と翻す、又

嚴轍と翻す、旃陀羅の市を行

くには竹を持し鈴を振つて轍

優婆夷に親近せざれ、

亦問訊せざれ。若しは

房中に於ても、若しは

經行の處、若しは講

堂の中に在つても、共

に住止せざれ。或時に

來らば、宜きに隨つて法を説いて希求する所無かれ。文殊師利、又菩薩摩訶薩は女人の身に於て能く

欲想を生ずる相を取つて爲に法を説くべからず。亦見んと樂はざれ。若し佗の家に入らんに、小女、

處女、寡女等と共に語らざれ。亦復（五）五種不男の人に近づいて以て親厚を爲さざれ。獨り佗の家に

入らざれ。若し因縁有つて、獨入ることを須ひん時には但一心に佛を念せよ。若し女人の爲に法を説

かんには、齒を露はにして笑まざれ。智應を現はさざれ。乃至法の爲にも猶ほ親厚せざれ。況や復餘

の事をや。樂つて年少の弟子、沙彌、小兒を畜へざれ。亦與に師を同うすることを樂はざれ。常に坐

禪を好んで閑かなる處に在つて其の心を修攝せよ。文殊師利、是れを初の親近處と名く。

復次に菩薩摩訶薩、一切の法を觀するに空なり、如實相なり、顛倒せず、動せず、退せず、轉せず、

虚空の如くにして、所有の性無し。一切の語言の道斷え、生せず、出せず、起せず、名無く、相無く、

標と爲すが故なり。凡そ牛羊猪鴛を養つて之れを殺して利を得るもの、及び釣魚、獵師、劫奪、魁贖、捕鳥、咒龍、并に獄卒等皆この旃陀羅にして、印度四姓の外の卑賤種なり。

【七】 惡律儀。如來の善律儀に對して云ふ。法華新註卷五、三

十七紙の畫上に涅槃經卷二十の十六種の惡律儀、毘曇雜心論卷三の十二種の惡律儀、雜集論卷八の十四種の惡律儀等々挙げたり。須者は往て看るべし。

【八】 五種不男。五種不男とは、一には生、生來不具にして男根を有せざるを云ふ。二には劇、刀を以て男根を斷切したるを云ふ。三には妬、他の姪を見て妬心あれども男根用を爲さざるを云ふ。四には變、男性變じて女性と爲りて男ならざるを云ふ。五には半、半月は男なれども半月は男ならざるを云ふ。

實に所有無し。無量、無邊、無礙、無障なり。但因縁を以て有り、顛倒によつて生ず。故に説く、常に樂つて是の如きの法相を觀せよと。是れを菩薩摩訶薩の第二の親近處と名づく。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して偈を説いて言はく、

『若し菩薩有つて、後の惡世に於て、無怖畏の心をもつて、是の經を説かんと欲せば、

應に行處、及び親近處に入るべし。常に國王、及び國王子、

大臣、官長、兇險の戲者、及び旃陀羅、外道梵志を離れ、

亦、増上慢の人、小乘に貪著する、三藏の學者、

破戒の比丘、名字の羅漢、及び比丘尼の、戲笑を好む者に親近せざれ。

深く五欲に著して、現の滅度を求むる、諸の優婆夷に、皆親近すること勿れ。

是の若き人等、好心を以て來り、菩薩の所に到つて、佛道を聞かんが爲にせば、

菩薩則ち、無所畏の心を以て、希望を懷かずして、爲に法を説け。

寡女處女、及び諸の不男に、皆親近して、以て親厚を爲すこと勿れ。

亦、屠兒、魁膾、吠獵漁捕、利の爲に殺害するに親近すること莫かれ。

肉を販つて自活し、女色を街賣する、是の如きの人に、皆親近すること勿れ。

兇險の相撲、種種の嬉戲、諸の姪女等に、盡く親近すること勿れ。

【九】魁膾。肉食の料理人を云ふ。

獨屏處にして、女の爲に法を説くこと莫かれ。若し法を説かん時には、戲笑することを得ること無かれ。

里に入つて乞食せんには、一りの比丘を將るよ。若し比丘無くんば、一心に佛を念せよ。

是れを則ち名けて、行處近處と爲す。此の二處を以て、能く安樂に説け。

又復、(一〇)上中下の法、(二)有爲無爲、實不實の法を行ぜざれ。

亦、是れ男是れ女と分別せざれ、諸法を得ず、知らず見ず。

是れを則ち名づけて、菩薩の行處と爲す。一切の諸法は、空にして所有無し。

常住有ること無く、亦起滅無し、是れを智者の、所親近處と名づく。

顛倒して、諸法は有なり無なり、是れ實なり非實なり、是れ生なり非生なりと分別す。

閑かなる處に在つて、其の心を修攝し、安住して動せざること、須彌山の如くせよ。

【一〇】上中下の法。四教の中に藏教を下と爲し、通教を中と爲し、別教を上と爲す。この三教を行ぜずして只一の圓教を行ぜよとなり。又上中下は菩薩緣覺聲聞の三乘なり。この三乘を行ぜずして只一の佛乘を行ぜよとなり。又藏通別の三教の菩薩乘を行ぜずして圓教の菩薩乘を行ぜよとなり。

【一一】有爲無爲。世間法を有爲と名け、出世間法を無爲と名く、無爲は實なり、有爲は不實なり。然るに平等法性なるが故に世間出世間の實不實を分別し行ぜざれとなり。即ち二邊を離れて圓教中道の妙行を修すべきことを云ふ。

一切の法を觀するに、皆所有無し、猶ほ虚空の如し、堅固なること有ること無し。

不生なり不出なり、不動なり不退なり、常住にして一相なり、是れを近處と名づく。

若し比丘有つて、我が滅後に於て、是の行處、及び親近處に入つて、

斯の經を説かん時には、怯弱有ること無けん。菩薩時有つて、靜室に入つて、

正憶念を以て、義に隨つて法を觀じ、禪定より起つて、諸の國王、

王子臣民、婆羅門等の爲に、開化し演暢して、斯の經典を説かば、

其の心安穩にして、怯弱有ること無けん。

文殊師利、是れを菩薩の、初の法に安住して、能く後の世に於て、法華經を説くと名く。』

『又文殊師利、如來の滅後、末法の中に於て、是の經を説かんと欲せば、應に安樂行に住すべし。若

しは口に宣説し、若し經を讀まん時、樂つて人及び經典の過を説かざれ。亦諸餘の法師を輕慢せざ

れ。他人の好惡長短を説かざれし。聲聞の人に於ても亦名を稱して其の過惡を説かざれ。亦名を稱して

其の美きを讚嘆せざれ。又亦怨嫌の心を生ぜざれ。善く是の如き安樂の心を修するが故に、諸の聽く

こと有らん者其の意に逆はじ。難問する所有らば、小乘の法を以て答へざれ。但大乘を以て爲に解説

して一切種智を得せしめよ。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『菩薩常に樂つて、安穩に法を説け。清淨の地に於て、牀座を施こし。

油を以て身に塗り、塵穢を潔浴し、新淨の衣を著、内外俱に淨くして、

法座に安處して、間に隨つて爲に説け。若し比丘、及び比丘尼、

諸の優婆塞、及び優婆夷、國王王子、羣臣士民有らば、

微妙の義を以て、和顔にして爲に説け。若し難問すること有らば、義に隨つて答へよ。

因縁譬喩をもつて、敷演し分別せよ。是の方便を以て、皆發心せしめ、

漸漸に増益して、佛道に入らしめよ。懶惰の意、及び懈怠の想を除き、

諸の憂惱を離れて、慈心をもつて法を説け。晝夜に常に、無上道の教を説け。

諸の因縁、無量の譬喩を以て、衆生に開示して、咸く歡喜せしめよ。

衣服臥具、飲食醫藥、而も其の中に於て、希望する所無かれ。

但一心に、説法の因縁を念じ、佛道を成じて、衆をして亦爾かならしめんと願すべし。

是れ則ち大利、安樂の供養なり。我が滅度の後、若し比丘有つて、

能く斯の、妙法華經を演説せば、心に嫉恚、諸惱障礙無く、

亦憂愁、及び罵詈する者無く、又怖畏し、刀杖を加へらるる等無く、

亦擯出せらるること無けん、忍に安住するが故に。

智者是の如く、善く其の心を修せば、能く安樂に住すること、我が上に説くが如くならん。

其の人の功德は、千萬億劫に、算數譬喩をもつて、説くとも盡くすこと能はじ。

『又文殊師利、菩薩摩訶薩後の末世の法滅せんと欲せん時に於て、斯の經典を受持し讀誦せん者は、嫉妬諂誑の心を懷くこと無かれ。亦佛道を學する者を輕罵し、其の長短を求むること勿れ。若し比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の聲聞を求むる者、辟支佛を求むる者、菩薩の道を求むる者、之れを惱まして、其れをして疑悔せしめて、其の人に語つて、汝等道を去ること甚だ遠し、終に一切種智を得ること能はじ、所以は何、汝は是れ放逸の人なり、道に於て懈怠なるが故にと言ふことを得ること無かれ。又亦諸法を戲論して爭競する所有るべからず。當に一切衆生に於て大悲の想を起し、諸の如來に於て禮拜すべし。一切衆生に於て平等に法を説け。法に順ずるを以ての故に多くもせず少くもせざれ。乃至深く法を愛せん者にも亦爲に多く説かざれ。文殊師利、是の菩薩摩訶薩後の末世の法滅せんと欲せん時に於て、是の第三の安樂行を成就すること有らん者は、是の法を説かん時能く惱亂するもの無けん。好き同學の共に是の經を讀誦するを得、亦大衆の而も來つて聽受し、聽き已つて能く持ち、持ち已つて能く誦し、誦し已つて能く説き、説き已つて能く書き、若しは人をしても書かしめ、經卷を供養し、恭敬、尊重、讚嘆することを得ん。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『若し是の經を説かんと欲せば、當に嫉妬、諂誑、邪偽の心を捨てて、常に質直の行を修すべし。人を輕蔑せず、亦法を戲論せざれ。佗をして疑悔せしめて、「汝は佛を得じ」と云はざれ。

是の佛子法を説かんに、常に柔和にして能く忍び、一切を慈悲して、懈怠の心を生ぜざれ。

十方の大菩薩は、衆を愍れむが故に道を行せり、應に恭敬の心を生ずべし、是れ則ち我が大師なりと。

諸佛世尊に於ては、無上の父の想を生ぜよ。憍慢の心を破して、法を説くに障礙無からしめよ。

第三の法是の如し、智者應に守護すべし。一心に安樂に行せば、無量の衆に敬はれん。』

『又文殊師利、菩薩摩訶薩後の末世の法滅せんと欲せん時に於て法華經を受持すること有らん者は、在家出家の人の中に於て、大慈の心を生じ、菩薩に非ざる人の中に於て大悲の心を生じて、應に是の念を作すべし。「是の如き人は、則ち爲れ大に如來の方便隨宜の說法を失へり。聞かず、知らず、覺らず、問はず、信せず、解せず。其の人は是の經を問はず、信せず、解せずと雖も、我阿耨多羅三藐三菩提を得ん時、隨つて何れの地に在つても、神通力、智慧力を以て、之を引いて是の法の中に住することを得せしめん。』文殊師利、是の菩薩摩訶薩如來の滅後に於て此の第四の法を成就すること有らん者は、是の法を説かん時過失有ること無けん。常に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、國王、王子、大

臣、人民、婆羅門、居士等に、供養、恭敬、尊重、讚嘆せらるることを爲ん。虚空の諸天、法を聽か
んが爲の故に、亦常に隨侍せん。若し聚落、城邑、空閑、林中に在らんに、人有つて來つて難問せん
と欲せば、諸天晝夜に常に法の爲の故に而も之れを衛護し、能く聽く者をして、皆歡喜することを得
せしめん。所以は何。此の經は是れ一切の過去、未來、現在の諸佛の神力をもつて護りたまふ所なる
が故に。文殊師利、是の法華經は無量の國の中に於て、乃至名字をも聞くことを得可からず。何に況
や見ることを得、受持し讀誦せんをや。文殊師利、譬へば強力の轉輪聖王の、威勢を以て諸國を降伏
せんと欲せんに、而も諸の小王、其の命に順はざらん。時に轉輪王、種種の兵を起して往いて討伐す
るに、王、兵衆の戰ふに功有る者を見ては即ち大に歡喜し、功に隨つて賞賜して、或は田宅、聚落、
城邑を與へ、或は衣服、嚴身の具を與へ、或は種種の珍寶、金、銀、琉璃、砗磲、瑪瑙、珊瑚、琥珀、
象馬、車乘、奴婢、人民を與ふ。唯髻中の明珠のみ以て之に與へず。所以は何。獨王の頂上に此の
一の珠有り。若し以て之れに與へば、王の諸の眷屬、必ず大に驚き怪まんが如し。文殊師利、如來も
亦復是の如し。禪定智慧の力を以て法の國土を得て三界に王たり。而も諸の魔王肯て順伏せず。如來
の賢聖の諸將之と與に共に戰ふに、其の功有る者には心亦歡喜して、四衆の中に於て爲に諸經を説い
て其の心をして悦ばしめ、賜ふに禪定、解脫、無漏根力の諸法の財を以てし、又復涅槃の城を賜與し
て、滅度を得たりと言つて其の心を引導して皆歡喜せしむ。而も爲に是の法華經を説かず。文殊師利、

轉輪王の諸の兵衆の大功有る者を見ては、心甚だ歡喜して、此の難信の珠の久しく髻中に在つて妄りに人に與へざるを以て、而も今之に與へんが如し。如來も亦復是の如し。三界の中に於て大法王爲り。法を以て一切衆生を教化す。賢聖の軍の五陰魔、煩惱魔、死魔と與に共に戰ふに、大功勳有つて、三毒を滅し、三界を出でて、魔網を破するを見ては、爾の時に如來亦大に歡喜して、此の法華經の能く衆生をして一切智に至らしめ、一切世間に怨多くして信じ難く、先に未だ説かざる所なるを、而も今之れを説く。文殊師利、此の法華經は是れ諸の如來の第一の説なり。諸説の中に於て最も爲れ甚深なり。末後に賜與すること、彼の強力の王の久しく護れる明珠を、今乃ち之に與ふるが如し。文殊師利、此の法華經は諸佛如來の祕密の藏なり。諸經の中に於て最も其の上に在り。長夜に守護して妄りに宣説せざるを、始めて今日に於て、乃ち汝等が與めに而も之れを敷演す。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、
『常に忍辱を行じ、一切を哀愍して、乃ち能く、佛の讚めたまふ所の

【三】五陰魔等。魔は具さには

魔羅(マハラ)能奪命と翻す。又殺者と翻す。能く智慧の命を奪つて出世の善根を殺害するが故なり。今茲に五陰魔等と云ふは四魔の中の三魔を擧ぐるなり。四魔とは一に蘊魔、即ち五陰魔なり、色受想行識の五陰能く智慧の命を奪ふを云ふ。二に煩惱魔、三界の中の一切の煩惱能く智慧の命を奪ふを云ふ。三に死魔、四大分散能く智慧の命を奪ふを云ふ。四には天魔、即ち欲界第六天の魔王なり、この魔王種種に行人を擾亂して能く智慧の命を奪ひ出世の善根を成就せざらしむ。菩薩八相成道の時この天魔を降すなり。

【三】三毒。貪慾、瞋恚、愚癡を云ふ。

【四】(原文)。一切世間、多怨難信。

經を演說せよ。

後の末世の時、此の經を持たん者は、(二)五ツリの家出家、及び非菩薩に於て、應に慈悲を生ずべし、斯れ等、是の經を聞かず信せず、則ち爲れ大に失へり、

我佛道を得て、諸の方便を以て、爲に此の法を説いて、其の中に住せしめんと。譬へば強力の、轉輪の王、兵の戰つて功有るに、諸物の、

象馬車乘、嚴身の具、及び諸の田宅、聚落城邑を賞賜し、或は衣服、種種の珍寶、奴婢、財物を與へ、歡喜して賜與す。

如し勇健にして、能く難事を爲すこと有るには、王の髻中の、明珠を解いて之を賜はんが如し。

如來も亦爾なり、爲れ諸法の王、忍辱の大力、智慧の寶藏あり。大慈悲を以て、法の如く世を化す。一切の人の、諸の苦惱を受けて、

解脱を欲求して、諸の魔と戰ふを見て、是の衆生の爲に、種種の法を説き、大方便を以て、此の諸經を説く。既に衆生、其の力を得已はんぬと知つては、

末後に乃ち爲に、是の法華を説くこと、王の髻の、明珠を解いて之に與へんが如し。此の經は爲れ尊、衆經の中の上なり。我れ常に守護して、妄りに開示せず。

【二五】家出家。在家と出家となり。

今正しく是れ時なり、汝等が爲に説く、我が滅度の後に、佛道を求めん者、
安穩に、斯の經を演説することを得んと欲せば、應當に、是の如き四法に親近すべし。
是の經を讀まん者は、常に憂惱無く、又病痛無く、顔色鮮白ならん、
貧窮卑賤、醜陋に生まれじ。衆生見んと樂ふこと、賢聖を慕ふが如くならん。
天の諸の童子、以て給使を爲さん。刀杖も加へず、毒も害すること能はず。
若し人惡み罵らば、口則ち閉塞せん。遊行するに畏れ無きこと、師子王の如く、
智慧の光明、日の照すが如くならん。若し夢の中に於ても、但妙なる事を見ん。
諸の如來の、師子の座に坐して、諸の比丘衆に、圍繞せられて説法したまふを見ん。
又龍神、阿修羅等、數恒沙の如くにして、恭敬合掌し、
自ら其の身を見るに、而も爲に法を説くを見ん。又諸佛の、身相金色にして、
無量の光を放つて、一切を照らし、梵音聲を以て、諸法を演説し、
佛四衆の爲に、無上の法を説きたまふ。身を見るに中に處して、合掌して佛を讚めたてまつり、
法を聞いて歡喜して、供養を爲し、陀羅尼を得、不退智を證す。
佛其の心、深く佛道に入れりと知しめして、即ち爲に最正覺を、成ずることを授記して、
「汝善男子、當に來世に於て、無量智の、佛の大道を得て、

國土嚴淨にして、廣大なること比無く、亦四衆有つて、合掌して法を聽くべし」とのたまふを見ん。

又自身、山林の中に在りて、善法を修習し、諸の實相を證し、

深く禪定に入つて、十方の佛を見たてまつると見ん。諸佛の身金色にして、百福の相莊嚴したまふ。

法を聞いて人の爲に説く、常に是の好き夢有らん。又夢むらく國王と作つて、宮殿眷屬、及び上妙の五欲を捨てて、道場に行詣し、菩提樹下に在つて、師子の座に處し、

道を求むること七日を過ぎて、諸佛の智を得、無上道を成じ已つて、起つて法輪を轉じ、四衆の爲に法を説くこと、千萬億劫を經、無漏の妙法を説いて、無量の衆生を度し、後に當に涅槃に入ること、煙盡きて燈の滅ゆるが如し。

若し後の惡世の中に、是の第一の法を説かば、是の人大利を得んこと、上の諸の功德の如くならん。」

從地涌出品第十五

爾の時に他方の國土の諸の來れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の數に過ぎたる、大衆の中に於て起立し、合掌し、禮を作して、佛に白して言さく、『世尊、若し我等、佛の滅後に於て此の娑婆世界に在つて、勤加精進して、是の經典を護持し、讀誦し、書寫し、供養することを聽るしたまはば、當に此の土に於て廣く之を説きたてまつるべし。』

爾の時に佛、諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまはく、『止みね、善男子、汝等が此の經を護持せんことを須ひじ。所以は何。我が娑婆世界には自ら六萬恒河沙等の菩薩摩訶薩有り。一一の菩薩に各六萬恒

河沙の眷屬有り。是の諸人等能く我が滅後に於て、護持し讀誦し廣く此の經を説かん。』

佛是れを説きたまふ時、娑婆世界の三千大千の國土、地皆振裂して、其の中より無量千萬億の菩薩

摩訶薩有つて同時に涌出せり。是の諸の菩薩は身皆金色にして、三十二相、無量の光明あり。先より

盡く此の娑婆世界の下の界の虚空の中に在つて住せり。是の諸の菩薩、釋迦牟尼佛の所説の音

聲を聞いて、下より發來せり。一一の菩薩皆是れ大衆の唱導の首なり。各六萬恒河沙の眷屬を將

たり。況や五萬、四萬、三萬、二萬、一萬恒河沙等の眷屬を將ゐたる者をや。況や復乃至一恒河沙、

半恒河沙、四分の一、乃至千萬億那由佗分の一なるをや。況や復千萬億那由佗の眷屬なるをや。況や

復億萬の眷屬なるをや。況や復千萬、百萬、乃至一萬なるをや。況や復一千、一百、乃至一十なるをや。況や復五、四、三、二、一の弟子を將るたる者をや。況や復單己にして遠離の行を樂へるをや。是の如き等比無量無邊にして、算數譬喩も知ること能はざる所なり。

是の諸の菩薩、地より出で已つて、各虚空の七寶の妙塔の多寶如來、釋迦牟尼佛の所に詣で、到り已つて、二世尊に向ひたてまつりて、頭面に足を禮し、乃至諸の寶樹の下の師子の座の上の佛の所にて亦皆禮を作して、右に遶ること三匝して合掌恭敬し、諸の菩薩の種種の讚法を以て、以て讚嘆したてまつり、一面に住らし、欣樂して二世尊を瞻仰したてまつる。是の諸の菩薩摩訶薩、地より涌出して、諸の菩薩の種種の讚法を以て佛を讚めたてまつる、是の如くする時の間、五十小劫を経たり。是の時に釋迦牟尼佛、默然として坐したまへり、及び諸の四衆も亦皆默然たること五十小劫、佛の神力の故に諸の大衆をして半日の如しと謂はしむ。爾の時に四衆亦佛の神力を以ての故に、諸の菩薩の無量百千萬億の國土の虚空に徧滿せるを見る。

是の菩薩衆の中に 四導師有り。一をば上行と名け、二をば無邊行と名け、三をば淨行と名け、四をば安立行と名く。是の四菩薩、其の衆の中に於て最も爲れ上首唱導の師なり。大衆の前に在つて

- 【一】 四導師。是れ言はゆる本化の四大菩薩なり。正法華には種種行菩薩、無量行菩薩、以清淨行菩薩、建立行菩薩に作る。尼波羅本は左の如し。
- 一、上行 (Vissācārī) アナリタチャーリト
 - 二、無邊行 (Anantārahita) スチヤ
 - 三、淨行 (Vasudhārī) アニエツタチャーリト
 - 四、安立行 (Sampatthiloca) スプラチシユタチャーリト

各共に合掌し釋迦牟尼佛を觀たてまつりて、問訊して言さく、『世尊、少病少惱にして、安樂に行じたまふや不や。應に度すべき所の者教を受くること易しや不や。世尊をして疲勞を生さしめずや。』

爾の時に四大菩薩、而も偈を説いて言さく、

『世尊は安樂にして、少病少惱にましますや。』

衆生を教化したまふに、疲倦無きことを得たまへりや。

又諸の衆生、化を受くること易しや不や、世尊をして、疲勞を生さしめずや。』

爾の時に世尊、諸の菩薩大衆の中に於て、是の言を作したまはく、『是の如し、是の如し、諸の善男子、如來は安樂にして少病少惱なり。諸の衆生等は、化度す可きこと易し。疲勞有ること無し。所以

は何、是の諸の衆生は、世世より已來、常に我が化を受けたり。亦過去の諸佛に於て、供養尊重して

諸の善根を種ゑたり。此の諸の衆生は始め我が身を見、我が所説を聞いて、即ち皆信受して如來の

慧に入りなき。先より修習して小乘を學せる者をば除く。是の如きの人も、我今亦是の經を聞いて佛

慧に入ることを得せしむ。』

爾の時に諸の大菩薩、而も偈を説いて言さく、

『善哉善哉、大雄世尊、諸の衆生等、化度したまふ可きこと易し。』

能く諸佛の、甚深の智慧を問ひたてまつり、聞き已つて信解せること、我等隨喜す。

時に世尊、上首の諸の大菩薩を讚嘆したまはく、「善哉善哉、善男子、汝等能く如來に於て、隨喜の心を發せり。」

爾の時に彌勒菩薩及び八千恒河沙の諸の菩薩衆、皆是の念を作さく、「我等昔より已來、是の如き大菩薩摩訶薩衆の地より涌出して世尊の前に住して、合掌し供養して如來を問訊したてまつるを見ず聞かず。」時に彌勒菩薩摩訶薩、八千恒河沙の諸の菩薩等の心の所念を知り、并に自ら所疑を決せんと欲して、合掌し佛に向ひたてまつりて、偈を以て問うて曰さく、

『無量千萬億の、大衆の諸の菩薩は、昔より未だ曾て見ざる所なり、願くは兩足尊説きたまへ。是れ何れの所よりか來れる、何の因縁を以てか集まれる。巨身にして大神通あり、智慧思議し亘し。』

其の志念堅固にして、大忍辱力有り。衆生の見んと樂ふ所なり、爲れ何れの所よりか來れる。

一一の諸の菩薩、所將の諸の眷屬、其の數量り有ること無く、恒河沙等の如し。

或は大菩薩の、六萬恒沙を將ゐたる有り。是の如き諸の大衆、一心に佛道を求む。

是の諸の大師等、六萬恒河沙あり、俱に來つて佛を供養し、及び是の經を護持す。

五萬恒沙を將ゐたる、其の數是れよりも過ぎたり。四萬及び三萬、二萬より一萬に至る、

一千一百等、乃至一恒沙、半及び三四分、億萬分の一、

千萬那由佗、萬億の諸の弟子、乃し半億に至る、其の數復上よりも過ぎたり。

百萬より一萬に至り、一千及び一百、五十と一十と、乃至三二一、

單己にして眷屬無く、獨處を樂ふ者、俱に佛所に來至せる、其の數轉た上よりも過ぎたり。

是の如き諸の大衆、若し人壽を行いて數ふること、恒沙劫を過ぐとも、猶ほ盡くして知ること能はじ。

是の諸の大威徳、精進の菩薩衆は、誰か其れが爲に法を説いて、教化して成就せる。

誰に從つて初めて發心し、何れの佛法をか稱揚し、誰れの經をか受持し行じ、何れの佛道をか修習せる。

是の如き諸の菩薩、神通大智力あり、四方の地振裂して、皆中より涌出せり。

世尊我昔より來、未だ曾て是の事を見ず。願はくは其の所從の、國土の名號を説きたまへ。

我常に諸國に遊べども、未だ曾て是の事を見ず、我此の衆の中に於て、乃し一人をも識らず。

忽然に地より出でたり、願はくは其の因縁を説きたまへ。今此の大會の、無量百千億なる、是の諸の菩薩等、皆此の事知らんと欲す。是の諸の菩薩衆の、本末の因縁あるべし。

無量徳の世尊、惟願はくは衆の疑を決したまへ。』

爾の時に釋迦牟尼佛の分身の諸佛無量千萬億の他方の國土より來りたまへる者、八方の諸の寶樹の

下の師子の座の上に在して、結跏趺坐したまへる、其の佛の侍者、各各に是の菩薩大衆の三千大千世界の四方に於て、地より涌出して虚空に住せるを見て、各其の佛に白して言さく、『世尊、此の諸の無量無邊阿僧祇の菩薩大衆は、何れの所よりか來れる。』

爾の時に諸佛、各侍者に告げたまはく、『諸の善男子、且く須臾を待て。菩薩摩訶薩有り、名を彌勒と曰ふ。釋迦牟尼佛の授記したまふ所なり。次で後に作佛すべし。已に斯の事を問ひたてまつる。佛今之に答へたまはん。汝等自ら當に是に因りて聞くことを得べし。』

爾の時に釋迦牟尼佛、彌勒菩薩に告げたまはく、『善哉善哉、阿逸多、乃し能く佛に是の如きの大事を問へり。汝等當に共に一心に精進の鎧を被、堅固の意を發すべし。如來今諸佛の智慧、諸佛の自在神通の力、諸佛の師子奮迅の力、諸佛の威猛大勢の力を顯發し宣示せんと欲す。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『當に精進にして一心なるべし。我此の事を説かんと欲す。疑悔有ること得ること勿れ。佛智は思議し亘し。』

汝今信力を出だして、忍善の中に住せよ。昔より未だ聞かざる所の法、今皆當に聞くことを得べし。

【二】阿逸多。序品彌勒の註を看るべし。

我今汝を安慰す。疑懼を懐くことを得ること勿れ。佛は不實の語無し。智慧量る可からず。

得る所の第一の法は、甚深にして分別し回し。是の如きを今當に説くべし。汝等一心に聽け。

爾の時に世尊、此の偈を説き已つて、彌勒菩薩に告げたまはく、「我今此の大衆に於て、汝等に宣告す。

阿逸多、是の諸の大菩薩摩訶薩の無量無數阿僧祇にして地より涌出する、汝等が昔より未だ見ざる所の者は、我是の娑婆世界に於て阿耨多羅三藐三菩提を得已つて、是の諸の菩薩を教化示導し、其

の心を調伏して道の意を發さしめたり。此の諸の菩薩は皆是の娑婆世界の下此の界の虚空の中に於て住せり。諸の經典に於て讀誦通利し思惟分別し正憶念せり。阿逸多、是の諸の善男子等は衆に在つて

多く所説有ることを樂はず。常に靜なる處を樂ひ、勤行精進して未だ曾て休息せず。亦人天に依止して住せず。常に深智を樂つて障礙有ること無し。亦常に諸佛の法を樂ひ、一心に精進して無上慧を

求む。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『阿逸汝當に知るべし、是の諸の大菩薩は、無數劫より來、佛の智慧を修習せり。

悉く是れ我が所化として、大道心を發さしめき。此等は是れ我が子なり、是の世界に依止せり。

常に頭陀の事を行じて、靜なる處を志樂し、大衆の慣聞を捨てて、所説多きを樂はず。

是の如き諸子等は、我が道法を學習して、晝夜に常に精進す、佛道を求むるを爲つての故に。

娑婆世界の、下方の空中に在つて住す。志念力堅固にして、常に智慧を勤求し、種種の妙法を説いて、其の心畏る所無し。我れ伽耶城、菩薩樹下に於て坐して、最正覺を成ずることを得て、無上の法輪を轉じ、爾して乃し之を教化して、初めて道心を發しむ。

今皆不退に住せり、悉く當に成佛することを得べし。我今實語を説く、汝等一心に信せよ。我久遠より來、是れ等の衆を教化せり。」

爾の時に彌勒菩薩摩訶薩及び無數の諸の菩薩等、心に疑惑を生じ、未曾有なりと怪しんで、是の念を作さく、「云何ぞ世尊、少時の間に於て是の如き無量無邊阿僧祇の諸の大菩薩を教化して、阿耨多羅三藐三菩提に住せしめたまへる。」即ち佛に白して言さく、「世尊、如來太子爲りし時、釋の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまへり。是れより已來始めて四十餘年を過ぎたり。世尊云何ぞ此の少時に於て大に佛事を作したまへる。佛の勢力を以てや、佛の功德を以てや、是の如き無量の大菩薩衆を教化して當に阿耨多羅三藐三菩提を成せしめたまふ。世尊、此の大菩薩衆は、假使人有つて千萬億劫に於て數ふとも盡くすこと能はず、其の邊りを得じ。斯れ等は久遠より已來無量無邊の諸佛の所に於て、諸の善根を植ゑ、菩薩の道を成就し、常に梵行を修せり。世尊、此の如きの事は世の信じ難き所なり。譬へば人有つて色美しく髮黒くして年二十五な

る、百歳の人を指して、是れ我が子なりと言ひ、其の百歳の人亦年少を指して、是れ我が父なり我等を生育せりと言はん、是の事信じ難きが如し。佛も亦是の如し。道を得たまひてより已來其れ實に未だ久しからず。而るに此の大衆の諸の菩薩等は已に無量千萬億劫に於て、佛道の爲の故に勤行精進し、善く無量百千萬億の三昧に入、出、住し、大神通を得、久しく梵行を修し、善能く次第に諸の善法を習ひ、問答に巧みに、人中の寶として、一切世間に甚だ爲れ希有なり。今日世尊、方に佛道を得たまひし時初めて發心せしめ、教化示導して阿耨多羅三藐三菩提に向はしめたりと云たまふ。世尊佛を得たまひてより未だ久しからざるに、乃し能く此の大功德の事を作したまへり。我等は復佛の隨宜の所説、佛の所出の言、未だ曾て虚妄ならずと信じ、佛の所知は皆悉く通達すと雖も、然も諸の新發意の菩薩は、佛の滅後に於て若し是の語を聞かば、或は信受せずして法を破する罪業の因縁を起さん。唯然世尊、願はくは爲に解説して、我等が疑を除きたまへ。及び未來世の諸の善男子、此の事を聞き已りなば亦疑を生ぜじ。』

爾の時に彌勒菩薩、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、

『佛昔釋種より、出家して伽耶に近く、菩提樹に坐したまへり、爾しより來尙ほ未だ久しからず。』

此の諸の佛子等は、其の數量る可からず。久しく已に佛道を行じて、神通智力に住せり。

善く菩薩の道を學して、世間の法に染まらざること、蓮華の水に在るが如し、地より而も涌出し、皆恭敬の心を起して、世尊の前に住せり。是の事思議し難し、云何ぞ信す可き。

佛の道を得たまへることは甚だ近く、成就したまへる所は甚だ多し。願はくは爲に衆の疑を除き、實の如く分別し説きたまへ。

譬へば少く壯なる人の、年始めて二十五なる、人に百歳の子の、髮白くして面皺めるを示して、是れ等は我が所生なりといひ、子も亦是れ父なりと説かん、父は少くして子は老いたる、世舉つて信せざる所ならんが如し。

世尊も亦是の如し、道を得たまひてより來甚だ近し。是の諸の菩薩等は、志固くして怯弱無し。

無量劫より來、而も菩薩の道を行せり。難問答に巧みにして、其の心畏るる所無く、忍辱の心決定し、端正にして威徳有り。十方の佛の讚めたまふ所なり、善能く分別し説けり。

人衆に在ることを樂はず、常に好んで禪定に在り。佛道を求むるを爲つての故に、下の空中に於て住せり。

我等は佛に従つて聞きたてまつれば、此の事に於て疑無し。願はくは未來の爲に、演説して開解せしめたまへ。

若し此の經に於て、疑を生じて信ぜざる者有らば、即ち當に惡道に墮つべしは願はくは今爲に解説したまへ。

是の無量の菩薩をば、云何してか少時に於て、教化し發心せしめて、不退の地に住せしめたまへる。』

【三】(原文)。生疑不信者、即當墮惡道。

卷の第六

如來壽量品第十六

爾の時に佛、諸の菩薩及び一切の大衆に告げたまはく、『諸の善男子、汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし。』又復諸の大衆に告げたまはく、『汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし。』又復諸の大衆に告げたまはく、『汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし。』是の時に菩薩大衆、彌勒を首と爲して、合掌して佛に白して言さく、世尊、『惟願はくは之を説きたまへ。我等當に佛の語を信受したてまつるべし。』是の如く三び白し已つて復言さく、『惟願はくは之を説きたまへ。我等當に佛の語を信受したてまつるべし。』爾の時に世尊、諸の菩薩の三たび請して止まざることを知しめして、之に告げて言はく、『汝等諦かに聽け、如來の祕密神通の力を。一切世間の天人、及び阿修羅は、皆今の釋迦牟尼佛、釋氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂へり。』

【一】諸の善男子。已下如來三たび如來の誠諦の語を信解すべしと識め、菩薩大衆三たび願はくは之を説きたまへと請す、之れを三誠三請と云ふ。又菩薩大衆三たび白し已つて更に復願はくは之を説きたまへと請す、之を重請と云ふ。如來又更に汝等諦に聽けと告ぐ、之を重誠と云ふ。即ち四誠四請なり。迹門方便品の初に三請一誠あり。今本門の四誠四請に合すれば前後五誠七請と成る。一期の大事なるが故に、此の如く懇懇鄭重なるなり。

【二】(原文)。如來祕密神通之力。

この一句是れ本門の極致、此

然るに善男子、我實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由他劫なり。

譬へば 五百千萬億那由他阿僧祇の三千大千世界を、假使人有つて抹し

て微塵と爲して、東方五百千萬億那由他阿僧祇の國を過ぎて乃ち一塵を下

し、是の如く東に行いて是の微塵を盡くさんが如し諸の善男子意に於て云

何、是の諸の世界は思惟し校計して其の數を知ることを得可しや不や。』

彌勒菩薩等、俱に佛に白して言さく、『世尊、是の諸の世界は、無量無邊

にして、算數の知る所に非ず。亦心力の及ぶ所に非ず。一切の聲聞、辟支

佛、無漏智を以ても、思惟して其の限數を知ること能はず。我等阿惟越致

地に住すれども、是の事の中に於ては、亦達せざる所なり。世尊、是の如

き諸の世界は、無量無邊なり。』

爾の時に佛、大菩薩衆に告げたまはく、『諸の善男子、今ま當に分明に汝

等に宣語すべし。是の諸の世界の若しは微塵を著き及び著かざる者を盡

く以て塵と爲して、一塵を一劫とせん。我成佛してより已來、復此に過ぎ

たること百千萬億那由他阿僧祇なり。是れより來、我常に此の娑婆世

界に在つて說法教化す。亦餘處の百千萬億那由他阿僧祇の國に於ても衆生

品の精髓なり。天台はこの中の

の秘密の二字を釋して、一身

即三身を祕と爲し三身即一身

を密と爲せり。言はゆる俱體

俱用の三身にして爾前諸經の

全く説かざる所なり。故に

昔説かざる所を名けて祕と爲

し、唯佛のみ知るを密と爲す

とも判ぜり。此の壽量の一品

は正さにこれを開示したるな

り。我が聖祖はこの句を以て

無作三身の依文と爲し、及び

三大秘法をこれによりて建立

せらる。この事開題に已に辯

ぜるが如し。所詮吾人の現に

本佛に歸命して南無妙法蓮華

經と信じ奉る當處全く如來祕

密神通之力なるなり。當體蓮

華とは即ち是れなり。

【三】 五百千萬億等。この譬喩

によりて本門の久遠を五百塵

點と云ふなり。故に委しく之

を云へば五百千萬億那由陀阿

を導利す。諸の善男子、是の中間に於て我然燈佛等と説き、又復其れ涅槃に入ると言ひき。是の如きは皆方便を以て分別せしなり。諸の善男子、若し衆生有つて、我が所に來至するには、我佛眼を以て其の（四）信等の諸根の利鈍を觀じて、度す應き所に隨つて、處處に自ら名字の不同、年紀の大小を説き、亦復現じて當に涅槃に入るべしと言ひ、又種種の方便を以て微妙の法を説いて、能く衆生をして歡喜の心を發さしめき。諸の善男子、如來は諸の衆生の（五）小法を樂へる。德薄垢重の者を見て、是の人の爲に我少くして出家し阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く。然るに我實に成佛してより已來久遠なること斯の如し。但方便を以て衆生を教化して佛道に入らしめんとして是の如き説を作す。諸の善男子、如來の演ぶる所の經典は皆衆生を度脱せんが爲めなり。（六）或は己身を説き、或は他身を説き、或は己身を示し、或は他身を示し、或は己事を示し、或は他事を示す。諸の言説する所は、皆實にして虚からず。所以は何（七）如來は如實に三界の相を見するに、生死の若しは退若しは出有ること無し。亦在世及び滅度の者無し。實に非ず虚に非ず。如に非ず異に非ず。三界の三界を見るが如く

僧祇塵點なり。

【四】 信等の諸根。信、進、念、定、慧の五根を云ふ。慧根は了因、他の四根は緣因なり。

【五】 年紀の大小。佛壽の長短を云ふ。

【六】 小法。小乘の人に非ず、但近成を樂ふの機を指して樂小と云ふ、南岳の説なり。即ち近成を説いて久遠を顯はさざる壽量品已前の一切の諸教を皆小法と名くるなり。

【七】 德薄垢重。緣了二因の善根微劣なるを德薄と云ひ、見思の煩惱未だ除かざるを垢重と云ふ、本門の意を以て之を言へば壽量品以前近成を樂ふの人は總じて皆德薄垢重也。

【八】 或は己身等。佛界の身を説き若しくは示すは己身なり。九界の身を説き若しくは示すは他身なり。又佛身の中にも法身は己身なり、應身は

ならず。斯の如きの事如來明かに見て錯謬有ること無し。諸の衆生の、種種の性、種種の欲、種種の行、種種の憶想分別有るを以ての故に、諸の善根を生ぜしめんと欲して、若干の因縁、譬喩、言辭を以て種種に法を説く。所作の佛事、未だ曾て暫くも廢せず。是の如く我成佛してより已來、甚だ大に久遠に、壽命無量阿僧祇劫、常住にして滅せず。諸の善男子、我本菩薩の道を行じて成せし所の壽命、今猶未だ盡きず、復上の數に倍せり。然るに今實の滅度に非ざれども、而も便ち唱へて「當に滅度を取るべし」と言ふ。如來是の方便を以て衆生を教化す。所以は何。若し佛久しく世に住せば、薄徳の人は善根を種ゑず、貧窮下賤にして五欲に貪著し、憶想妄見の網の中に入りなん。若し如來は常に在つて滅せずと見ば、便ち憍恣を起して、厭怠を懷き、難遭の想、恭敬の心を生ずること能はず。是の故に如來方便を以て説く、「比丘當に知るべし、諸佛の出世には値遇す可きこと難し」と。所以は何。諸の薄徳の人は、無量百千萬億劫を過ぎて、或は佛を見ること有り、或は見ざる者あり。此の事を以ての故に、我是の言を作す、「諸の比丘、如來は見ることを得可きこと難し」と。斯の衆生等、是の如き語を聞い

他身なり。隨自意の故に己身と云ひ、隨他意の故に他身と云ふ。已事を示すとば正報を、示現するなり。他事を示すとば依報を示現するなり。

【九】如來は如實に等。已下を六句知見の文と云ふ。如來は如實に三界の相を知見す、生死の若しは退苦しは出有ること無くとは是れ第一句なり。生死とは分段變易二種の生死なり、退とは生死の因なり、出とは生死の果なり。如來の知見によればこの三界の生死因果あること無きなり。次に亦在世及び滅度の者無しとは是れ第二句なり。在世とは迷うて生死の世界に在るを云ふ。滅度とは悟りて方便實報の二種の涅槃界に入るを云ふ。如來の知見によればこの在世滅度の迷悟の差別あることなきなり。次に實に非ず虛

ては、必ず當に難遭の想を生じ、心に戀慕を懷き、佛を渴仰して、便ち善根を種うべし。是の故に如來實に滅せずと雖も而も滅度と言ふ。又善男子、諸佛如來は法皆是の如し。衆生を度せんが爲なれば皆實にして虚からず。譬へば良醫の智慧聰達にして、明かに方藥に練し、善く衆病を治す。其の人諸の子息多し、若は十二乃至百數なり。事の縁有るを以て遠く餘國に至りぬ。諸の子後に他の毒藥を飲む。藥發し悶亂して地に宛轉す。是の時に其の父還り來つて家に歸りぬ。諸の子毒を飲んで、或は本心を失へる、或は失はざる者あり。遙に其の父を見て皆大に歡喜し、拜跪して問訊すらく、「善く安穩に歸りたまへり。我等愚癡にして誤つて毒藥を服せり。願はくは救療せられて更に壽命を賜へ」と。父、子等の苦惱することは是の如くなるを見て、諸の經方に依つて、好き藥草の(二〇)色香味皆悉く具足せるを求めて、擣節和合して、子に與へて服せしむ。而も是の言を作さく、「此の大良藥は色香味皆悉く具足せり。汝等服す可し。速に苦惱を除いて復衆の患無けん」と。其の諸の子の中に心を失はざる者は、此の良藥の色香俱に好きを見て即便ち之を服するに、病盡く除こり愈えぬ。餘の心を失へる者は、其の父の來

に非ずとは是れ第三句なり。生死の虚なるに非ず、涅槃の實なるに非ざるなり。次に如に非ず異に非ずとは是れ第四句なり。空を如と云ひ、假を異と云ふ、三界の當即中道の體なるが故に如異に非ざるなり。次に三界の三界を見るが如くならずとは是れ第五句なり。如來の三界を見るは三界の三界を見るに同じからざるなり。次に斯の如きの事如來明かに見て錯謬有ること無しとは是れ第六句なり。衆生の妄見に對して如來の知見を明見と云ふなり。この六句知見の文に就ては我が聖祖の活釋あり、御義口傳卷下十一紙須らく往きて看るべし。

【二〇】(原文)。色香味、皆悉具足、擣節和合、與子令服。

其の父の來

れるを見て、亦歡喜し問訊して、病を治せんことを求索むと雖も、然も其の薬を與ふるに、而も肯て服せず。所以は何毒氣深く入つて本心を失へるが故に、此の好き色香ある薬に於て而も美からずと謂へり。父是の念を作さく、「此の子愍れむ可し。毒に中られて、心皆顛倒せり。我を見て喜んで救療を求索むと雖も、是の如き好き薬を而も肯て服せず。我今當に方便を設けて此の薬を服せしむべし。」即ち是の言を作さく、「汝等當に知るべし、我今衰老して死の時已に至りぬ。(一)是の好き良薬を、今留めて此に在く。汝取つて服す可し。差えじと憂ふること勿れ。」是の教を作し已つて、復他國に至つて、(二)使を遣はして還つて告ぐ、「汝が父已に死しぬ」と。是の時に諸の子、父の背喪せりと聞いて、心大に憂惱して、是の念を作さく、「若し父在らましかば我等を慈愍して能く救護せられまし。今者我を捨てて遠く他國に喪したまひぬ。自ら惟れば孤露にして復恃怙無し。」常に悲感を懷いて、(三)心遂に醒悟し、乃ち此の薬の色香味美なるを知つて、即ち取つて之を服するに、毒の病皆愈ゆ。其の父、子悉く已に差ゆることを得つと聞いて、尋いで使を來り歸つて、咸く之を見えしめんが如し。諸の善男子、意に於て云何。願し人の能く此の良醫の虚妄の

【一】(原文)。是好良薬・今留在此、汝可取服、勿憂不差。是れ佛、末法失心の衆生の爲に妙法五字を留め置き給ふことを喻ふるなり。

【二】(原文)。遣使還告。

是れ末法に本化菩薩の出現あるべきことを喻ふるなり。

【三】(原文)。心遂醒悟。

この醒悟を促すの使命は偏に遣使還告の本化に在る也。故に末法の弘通は毒鼓の折伏を以て方規となす。汝父已死の四字は即ちこの折伏の威音なり。凡そ壽量品を讀まん者はこの良醫の譬喩を等閑に看過すること勿れ。末法に於ける本化の出現を信ぜざる者は未だこの良醫の譬喩を子細に檢せざるものなり。

罪を説くこと有らんや不や。』

『不なり、世尊。』

佛の言はく、『我も亦是の如し。成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由他阿僧祇劫なり。衆生の爲の故に、方便力を以て當に滅度すべしと言ふ。亦能く法の如く我が虚妄の過を説く者有ること無けん。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『我佛を得てより來、經たる所の諸の劫數、無量百千萬、億載阿僧

祇なり。

常に法を説いて、無數億の衆生を教化して、佛道に入らしむ。爾しより來、無量劫なり。

衆生を度せんが爲の故に、方便して涅槃を現す。而も實には滅度せず、常に此に住して法を説

く。

我常に此に住すれども、諸の神通力を以て、顛倒の衆生をして、近しと雖も而も見ざらしむ。

衆我が滅度を見て、廣く舍利を供養し、咸く皆戀慕を懷いて、渴仰の心を生ず。

衆生既に信伏し、質直にして意柔軟に、一心に佛を見たてまつらんと欲して、自ら身命を惜

まず。

【四】(原文)。一心欲見佛、不

自惜身命、時我及衆僧、俱出

靈鷲山。

時に我及び衆僧、俱に靈鷲山に出づ。我時に衆生に語る、常に此に在つて滅せず。

方便力を以ての故に、滅不滅有りと現す。餘國に衆生の、恭敬し信樂する者有れば、

我復彼の中に於て、爲に無上の法を説く。汝等此れを聞かずして、但我減度すと謂へり。

我諸の衆生を見れば、苦惱に没在せり。故に爲に身を現せずして、

其れをして渴仰を生せしむ。

其の心戀慕するに因つて、乃ち出でて爲に法を説く。神通力是の如し、

阿僧祇劫に於て、

(一五) 常に靈鷲山、及び餘の諸の住處に在り。衆生劫盡きて、大火に燒

かるると見る時も、

我が此の土は安穩にして、天人常に充滿せり。園林諸の堂閣、種種

の寶をもつて莊嚴せり。

寶樹華果多くして、衆生の遊樂する所なり。諸天天鼓を撃つて、常に

衆の伎樂を作し。

曼陀羅華を雨らして、佛及び大衆に散す。(一六) 我が淨土は毀れざるに、而も衆は燒け盡きて、

【一五】(原文)。常在靈鷲山、及餘諸住處。

この兩句に四土を談じて壽量の四土と云ふ。常在靈鷲山は寂光實報の二土なり、及餘諸住處は方便同居の二土なり。この四土皆本佛の所居にして常住不毀なるなり。

【一六】(原文)。我淨土不毀。本佛の本土たる娑婆世界を指して我淨土不毀と云ふ、即ち上の我此土安穩等の諸句を結して云ふなり。故にこの不毀本淨の娑婆を穢惡なりとして西方淨土を欣求するが如きものは皆罪衆生と名けらるるなり。

憂怖諸の苦惱、是の如き悉く充滿せりと見る。是の諸の罪の衆生は、惡業の因縁を以て、

阿僧祇劫を過ぐれども、二七三寶の名を聞かず、諸の有ゆる功德を修し、柔和質直なる者は、

則ち皆我が身、此に在つて法を説くと見る。或る時は此の衆の爲に、

佛壽無量なりと説く。

久しくあつて乃し佛を見たてまつる者には、爲に佛には値ひ難しと説

く。我が智力是の如し、慧光照すこと無量に、

壽命無數劫、久しく業を修して得る所なり。汝等智有らん者、此れに

於て疑を生ずること勿れ。

當に斷じて永く盡きしむべし、佛語は實にして虚しからず。醫の善き

方便をもつて、狂子を治せんが爲の故に、

實には在れども而も死すと言ふに、能く虚妄を説くもの無きが如く、

我も亦爲れ世の父、諸の苦患を救ふ者なり。

凡夫の顛倒せるを爲つて、實には在れども而も滅すと言ふ。常に我を

見るを以ての故に、而も憍恣の心を生じ、

放逸にして五欲に著し、惡道の中に墮ちなん。我常に衆生の、道を行じ道を行せざるを知つて、

【二七】三寶の名。三寶とは佛法僧なり。今三寶の名を聞かずとは即ち阿鼻獄に墮在することを表示するなり。凡そ阿鼻獄の衆生は三寶の名を聞かず。若し一たび三寶の名を聞くことあれば即ち阿鼻の重苦を免かるるなり。三寶に大小乗の別あり。又同體別體住持等の三寶あり。今の言はゆる三寶は大乗の中にも正しく法華の三寶なること論無し。而して三寶と行者と一體不二なる三寶を以て本門の三寶の實義と爲す、所謂南無妙法蓮華經の七字に即ち是れ其の三寶の名なるものなり。

度^どすべ^{べき}き^{ところ}所に^{したが}隨^{したが}つて、爲^{ため}に種^{しゆじゆ}種^{しゆじゆ}の法^{ほふ}を説^とく。毎^{つね}に自^{みづか}ら是^この念^{ねん}を作^なさく、「何^{なに}を以^{もつ}てか衆^{しゆじやう}生^{じやう}を
して、
無^む上^{じやう}道^{だう}に入^いり、速^{すみか}に佛^{ぶつ}身^{しん}を成^{じやうじゆ}就^{じゆ}するこ^とを^え得^えせしめんと。』

三藐三菩提を得べし。復八世界微塵數の衆生有つて皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。」

佛、是の諸の菩薩摩訶薩の大法利を得ることを説きたまふ時、虚空の中より曼陀羅華、摩訶曼陀羅華を雨らして、以て無量百千萬億の寶樹の下の師子の座の上の諸佛に散じたまつり、并に七寶塔の中、師子の座の上の釋迦牟尼佛、及び久滅度の多寶如來に散じたまつり、亦一切の諸の大菩薩、及び四部の衆に散す。又細抹の栴檀、沈水香等を雨らし、虚空の中に於て天鼓自ら鳴つて妙聲深遠なり。又千種の天衣を雨らし、諸の瓔珞、眞珠瓔珞、摩尼珠瓔珞、如意珠瓔珞を垂れて九方に徧せり。衆寶の香鑪には無價の香を燒き、自然に周く至つて大會に供養す。一一の佛の上に諸の菩薩有つて、幡蓋を執持して次第に上つて梵天に至る。是の諸の菩薩妙なる音聲を以て、無量の頌を歌して諸佛を讚嘆したてまつる。

爾の時に彌勒菩薩、座より而も起つて、偏に右の肩を袒にし、合掌し佛に向ひたてまつりて、偈を説いて言さく、

『佛希有の法を説きたまふ、昔より未だ曾て聞かざる所なり。世尊は大力有しまして、壽命量る可からず。』

無數の諸の佛子、世尊の分別して、法利を得る者を説きたまふを聞いて、歡喜身に充徧す。或は不退の地に住し、或は陀羅尼を得、或は無礙の樂説、萬億の旋總持あり。

或は大千界、微塵數の菩薩有つて、各々に皆能く、不退の法輪を轉ず。

復中千界、微塵數の菩薩有つて、各々に皆能く、清淨の法輪を轉ず。

復小千界、微塵數の菩薩有つて餘り、各八生在つて、當に佛道を成ずることを得べし。

或は四三二、此の如き四天下、微塵數の菩薩有つて、數の生に隨つて成佛せん。

或は一四天下、微塵數の菩薩、餘り一生在ること有つて、當に一切智を得べし。

是の如き等の衆生、佛壽の長遠なることを聞いて、無量無漏の清淨の果報を得。

復八世界の微塵數の衆生有つて、佛の壽命を説きたまふを聞いて、皆無上の心を發す。

世尊無量、不可思議の法を説きたまふに、多く饒益する所有ること、虚空の無邊なるが如し。

天の曼陀羅、摩訶曼陀羅を雨らして、釋梵恒沙の如く、無數の佛土より來り。

栴檀沈水を雨らして、續紛として亂れ墮つること、鳥の飛んで空より下るが如くにして、諸佛に

供散したてまつる。

天鼓虚空の中にして、自然に妙なる聲を出だし、天衣千萬種、旋轉して來下し、

衆寶の妙なる香鑪に、無價の香を燒いて、自然に悉く周徧して、諸の世尊に供養したてまつる。

其の大菩薩衆は、七寶の幡蓋の、高妙にして萬億種なるを執つて、次第に梵天に至る。

一一の諸佛の前に、寶幢に勝幡を懸けたり。亦千萬の偈を以て、諸の如來を歌詠したてまつる。

是の如き種種の事、昔より未だ曾て有らざる所なり。佛壽の無量なることを聞いて、一切皆歡喜す。

佛の名十方に聞えて、廣く衆生を饒益したまふ。一切善根を具して、以て無上の心を助く。』

爾の時に佛、彌勒菩薩摩訶薩に告げたまはく、『阿逸多、其れ衆生有つて、佛の壽命の長遠なることは是の如くなるを聞いて、乃至能く一念の信解を生ぜば、所得の功德、限量有ること無けん。若し善男子善女人有つて、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、八十萬億那由陀劫に於て、五波羅蜜を行せん。檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜なり。般若波羅蜜をば除く。是の功德を以て前の功德に比ぶるに、百分、千分、百千萬億分にして其の一にも及ばず。乃至算數譬喩も知ること能はざる所なり。若し善男子善女人、是の如き功德有つて、阿耨多羅三藐三菩提に於て退すといはば、是の處有ること無けん。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言たまはく、

【三】(原文)。乃至能生一念信解、所得功德無有限量。

【四】五波羅蜜。六波羅蜜の第六般若波羅蜜を除くが故に五波羅蜜なり。今一念信解の功德を格量するに五波羅蜜に對して般若波羅蜜に對せず、何となれば一念の信解は、即ち般若波羅蜜なるを以ての故なり。亦五波羅蜜は緣因の行、般若波羅蜜は了因の行、而して今一念の信解は了因の開發なるを以て般若波羅蜜に對せざるなり。六波羅蜜の名義左の如し。

檀波羅蜜 (Dāna-pāramitā)。檀

は布施と翻し、亦單に施と翻す、具さには檀那なり。菩薩己が財物等を分布して一切に施與するを云ふ。波羅蜜は度と翻す、具さには波羅蜜多なり、菩薩これを行じて衆生を度するなり。亦度無極、到彼

『若し人佛慧を求めて、八十萬億、那由他の劫數に於て、五波羅蜜を行せん。

是の諸の劫の中に於て、佛、及び緣覺弟子、并に諸の菩薩衆に布施し供養せん。

珍異の飲食、上服と臥具と、栴檀をもつて精舎を立て、園林を以て莊嚴せる、

是の如き等の布施の、種種に皆微妙なる、此の諸の劫數を盡くして、以て佛道に廻向せん。

若し復禁戒を持つて、清淨にして缺漏無く、無上道の、諸佛の歎めたまふ所なるを求めん。

若し復忍辱を行じて、調柔の地に住し、設ひ衆の惡來り加ふとも、其の心傾動せず、

諸の有ゆる法を得といふ者の、増上慢を懷ける、斯れに輕しめ惱されん、是の如きをも亦能く忍ばん。

若し復勤め精進し、志念常に堅固にして、無量億劫に於て、一心に懈

岸、事究竟等とも翻す。

尸羅波羅蜜 (Śīlāparāmitā)。尸

羅は清涼と翻す、戒を持ちて

煩惱の熱を離るるが故なり。

亦止得と翻す、惡を止め善を

得るが故なり。亦性善と翻す、

戒の自性善淨なるが故なり。

亦直ちに戒とも翻せり。菩薩

この戒を行じて衆生を度する

なり。

屠提波羅蜜 (Kṣānti-parāmitā)。

忍、忍辱、安忍等と翻す、他

人の毀辱を受けて怒らざるを

云ふ。菩薩この忍辱を行じて

衆生を度するなり。

毘梨耶波羅蜜 (Vīrya-parāmitā)。

向。毘梨耶は精進と翻す、勇

往邁進して不屈不退なるを云

ふ。菩薩この精進を行じて衆

生を度するなり。

禪波羅蜜 (Dhyāna-parāmitā)。

思惟修と翻す、思惟して修習

するが故なり。亦靜慮と翻す、

怠せざらん。

又無數劫に於て、空閑の處に住して、若しは坐し若しは經行し、睡を除いて常に心を攝めん。

是の因縁を以ての故に、能く諸の禪定を生じ、八十億萬劫に、安住して心亂れず、

此の一心の福を持つて、無上道を願求し、我一切智を得て、諸の禪定の際を盡くさんと。

是の人百千、萬億の劫數の中に於て、此の諸の功德を行すること、上の所説の如くならん。

善男女等有つて、我が壽命を説くを聞いて、乃至一念も信せば、其の福彼に過ぎたらん。若し人悉く、一切の諸の疑悔有ること無くして、深心に須臾も信せん、其の福此の如くなることを爲。

其れ諸の菩薩の、無量劫に道を行する有つて、我が壽命を説くを聞いて、是れ則ち能く信受せん。

是の如き諸人等、此の經典を頂受して、我未來に於て、「長壽にして衆生を度せんこと、

心を安じ慮を靜めて散亂せしめざるが故なり。亦棄惡、功德衆林等の諸翻あり、具さには禪那なり。菩薩この禪定を行じて衆生を度するなり。般若波羅蜜 (Pratyparamita)、般若に智慧と翻す、亦單に慧と翻じ、明と翻す。亦正知見、出離慧等の諸翻あり。具さには鉢羅若孃なり、出世間正道の智慧よく諸法を曉了するを云ふ。菩薩この智慧を行じて衆生を度するなり。

今日の世尊の、諸釋の中の王として、道場にして師子吼し、法を説くに畏るる所無きが如く、我等も未來世に、一切に尊敬せられて、道場に坐せん時、壽を説くこと亦是の如くならん」と願せん。

若し深心有らん者、清淨にして質直に、多聞にして能く總持し、義に隨つて佛語を解せん。

是の如きの人等、此れに於て疑有ること無けん。

『又阿逸多、若し佛の壽命の長遠なるを聞いて、其の言趣を解する有らん。是の人の所得の功德は、限量有ること無くして、能く如來の無上の慧を起さん。何に況や、廣く是の經を聞き、若しは人をして聞かしめ、若しは自らも持ち、若しは人をして持たしめ、若しは自らも書き、若しは人をして書かしめ、若しは華、香、瓔珞、幢幡、繒蓋、香油、酥燈を以て經卷に供養せんをや。是の人の功德は、無量無邊にして、能く一切種智を生ぜん。阿逸多、若し善男子、善女人、我が壽命の長遠なるを説くを聞いて深心に信解せば、則ち爲れ佛常に耆闍崛山に在しまして、大菩薩諸の聲聞衆の圍繞すると共に説法するを見、又此の娑婆世界其の地琉璃にして坦然平正に、閻浮檀金、これを以て八道を界ひ、寶樹行列し、諸臺樓觀、皆悉く寶をもつて成じて、其の菩薩衆咸く其の中に處せるを見ん。若

【五】酥燈。酥油燈(Chira Diya)にして燈油に牛酥を加へたる者なり。蘇燈とも書けり。
【六】閻浮檀金。具さに梵名を存せば、當に閻浮那提修跋拏(Jambudsvarna)と云ふべし。修跋拏は亦は蘇伐羅、金と翻す。即ち梵漢並稱して閻浮檀金と云ふ。閻浮檀は正しくは瞻部捺陀にして、閻浮は

し能く是の如く観ずること有らん者は、當に知るべし是れを深信解の相と爲づく。(七)又復如來の滅後に、若し是の經を聞いて而も毀訾せずして隨喜の心を起さん。當に知るべし已に深信解の相と爲づく。何に況や讀誦し受持せん者をや。斯の人は則ち爲れ如來を頂戴したてまつるなり。阿逸多、是の善男子、善女人は我が爲に復塔寺を起て、及び僧坊を作り、四事を以て衆僧を供養することを須ひざれ。所以は何。是の善男子、善女人の是の經典を受持し讀誦せん者は、爲れ已に塔を起て、僧坊を造立し、衆僧を供養するなり。則ち是れ佛舍利を以て七寶の塔を起て、高廣漸小にして梵天に至り、諸の幡蓋及び衆の寶鈴を懸け、華、香、瓔珞、抹香、塗香、燒香、衆鼓、伎樂、簫笛、箏篋、種種の舞戲あつて、妙なる音聲を以て歌唄讚頌するなり。則ち爲れ已に無量千萬億劫に於て是の供養を作し已るなり。阿逸多、若し我が滅後に、是の經典を聞いて能く受持し。若しは自らも書き、若しは人をしても書かしむること有らんは、則ち爲れ僧坊を起立し、赤梅檀を以て諸の殿堂を作ること三十有二、高さ(一〇)はつたらじゆ、八多羅樹、高廣嚴好にして、百千の比丘其の中に於て止み園林、浴池、經行、禪窟、衣

膽部、樹の名、檀は捺陀、江河亦海の義、闍浮樹の下を流るる河なるを以て闍浮檀と云ふ。即ち河の名なり。この河底より金沙を出す。名けて闍浮檀金と云ふ。其色赤黄にして紫氣を帶ぶ、闇中能く光輝あり、金中の珍なりと云ふ。
 【七】(原文)。又復如來滅後、若聞是經、而不毀訾、起隨喜心、當知已爲深信解相。
 【八】四事。衣服、飲食、臥具、醫藥の四種の供養を云ふ。
 【九】赤梅檀(Caustana)。赤色の梅檀なり。梅檀は香木なり、支那に無きを以て原語を存す、具さには梅檀那なり。此れに赤白の二種あり、白檀は熱を治し、赤檀は風腫を去るの効ありと云ふ。慧琳の音義卷三には赤白二種の中赤梅檀を上と爲すと記せり。或は興藥と翻ぜり、蓋し義翻ならん。

服、飲食、牀褥、湯藥、一切の樂具其の中に充滿せん。是の如き僧坊、堂
 閣、若干百千萬億にして其の數無量なる、此れを以て現前に我及び比丘僧
 に供養するなり。是の故に我説く、如來の滅後に、若し受持し讀誦し、他
 人の爲に説き、若しは自らも書き、若しは人をしても書かしめ、經卷を供
 養すること有らんは、復塔寺を起て、及び僧坊を造り、衆僧を供養するを
 須ひざれ。況や復人有つて、能く是の經を持ち、兼て布施、持戒、忍辱、
 精進、一心、智慧を行せんをや。其の徳最勝にして無量無邊ならん。譬へ
 ば虚空の東、西、南、北、四維、上下、無量無邊なるが如く、是の人の功
 徳も、亦復是の如し。無量無邊にして疾く一切種智に至らん。若し人は是の
 經を讀誦し受持し、他人の爲に説き、若しは自らも書き、若しは人をしても書かしめ、復能く塔を起
 て、及び僧坊を造り、聲聞の衆僧を供養し讚嘆し、亦百千萬億の讚嘆の法を以て、菩薩の功徳を讚嘆
 し、又他人の爲に種種の因縁を以つて義に隨つて此の法華經を解説し、復能く清淨に戒を持ち、柔和
 の者と與に共に同止し、忍辱にして瞋り無く、志念堅固にして、常に坐禪を貴び、諸の深定を得、精
 進勇猛にして諸の善法を攝し、利根智慧にして善く問難を答へん。阿逸多、若し我が滅後に、諸の善
 男子、善女人、是の經典を受持し讀誦せん者は、復是の如き諸の善功徳有らん。當に知るべし是の人

傷文に準すれば即ち牛頭梅檀
 なり、序品の文句を看るべし。
 【一〇】 八多羅樹、八の多羅樹な
 り。多羅(トロ)は重と翻す。
 この樹の形機欄の如く直高に
 して、極めて高きは八九十尺
 に及び、果は赤色にして石榴
 に似たりと云ふ。一説に多羅
 樹は眼高七仞、一仞は七尺な
 り、即ち四十九尺の高さなり。
 今八多羅樹と云へば三百九十
 二尺の高さなり。印度の一
 尺は周尺八寸の量と同じ。

は已に道場に趣き、阿耨多羅三藐三菩提に近づきて道樹の下に坐せるなり。阿逸多、是の善男子、善女人の若は坐し、若しは立し、若しは經行せん處には、此の中に便ち應に塔を起つべし。一切の天人、皆應に供養すること佛の塔の如くすべし。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『若し我が滅度の後に、能く此の經を奉持せん。斯の人の福無量なること、上の所説の如し。是れ則ち爲れ、一切の諸の供養を具足し、舍利を以て塔を起て、七寶をもつて莊嚴し、

表刹甚だ高廣に、漸小にして梵天に至り、寶鈴千萬億にして、風

の動かすに妙なる音を出だし、

又無量劫に於て、此の塔に、華香諸の瓔珞、天衣衆の伎樂を供養し、

香油酥燈を然して、周匝して常に照明するなり。惡世末法の時、能く是の經を持たん者は、

則ち爲れ已に上の如く、諸の供養を具足するなり。若し能く此の經を持たんは、則ち佛の現

在に、

牛頭梅檀を以て、僧坊を起てて供養し、堂三十二有つて、高さ八多羅樹、

上饌妙なる衣服、牀臥皆具足し、百千の衆の住處、園林諸の浴池、

經行及び禪窟、種種に皆嚴好にするが如し。若し信解の心有つて、受持し讀誦し書き、

【二】表刹。塔上の露柱を云ふ。

若しは復人をしても書かしめ、及び經卷を供養し、華香抹香を散じ、

【三】須曼 薔蔔。

【四】阿提目多伽の、熏油を以て常に之を然さん。是の如く供養せん者は、無量の功德を得ん。

虚空の無邊なるが如く、其の福も亦是の如し。況や復此の經を持つて、兼ねて布施し持戒し、

忍辱にして禪定を樂ひ、瞋らず惡口せざらんをや。塔廟を恭敬し、諸の比丘に謙下し、

自高の心を遠離して、常に智慧を思惟し、問難すること有らんに瞋らず、隨順して爲に解説せん。

若し能く是の行を行せば、功德量る可からず。若し此の法師の、是の如き徳を成就せるを見ては、

應に天華を以て散じ、天衣を其の身に覆ひ、頭面に足を接して禮し、心を生じて佛の想の如くにすべし。

又應に是の念を作すべし、久しからずして道場に詣して、無漏無爲を

【三】須曼。具さには須曼那 (Sumana) と云ふ。樹の名也。好喜、好意、悅意、善稱意等と翻す。この樹の華を以て香油を製するなり。

【三】薔蔔。具さには薔蔔迦 (Chamuka) と云ふ。樹の名なり。金色華、黄色華、黃華樹、金色華樹等と翻す。この樹の華香氣甚高く、數里の外に及ぶ、これを以て香油を製するなり。

【四】阿提目多伽。亦阿地目得加 (Amuktaka) とも書く。善思夷華と翻す。善思は譯名、夷華は中國に非ざるを以て云ふ。亦苜蓿子と翻す、苜蓿は胡麻なり、亦龍華とも翻す、龍紙は麻の一種なり。是れ草華にして、形大麻に類し、赤華青葉なりと云ふ。但中國にこの草華無きを以て正翻無し

得、廣く諸の上天を利せん」と。

其の所住止の處、經行し若しは坐臥し、乃至一偈をも説かん、是の

中には應に塔を起てて、

莊嚴し妙好ならしめて、種種に以て供養すべし。佛子此の地に住すれば、

ひ、

常に其の中に在して、經行し若しは坐臥したまはん。」

と云へる説あり。この草華を以て亦香油を製するなり。若し慧琳の經音義卷十二には華樹とあり、草華には非ず。

則ち是れ佛受用したま

隨喜功德品第十八

爾の時に彌勒菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、『世尊、若し善男子、善女人有つて是の法華經を聞いて隨喜せん者は、幾所の福をか得ん。』

而も偈を説いて言さく、

『世尊滅度の後に、其れ是の經を聞くこと有つて、若し能く隨喜せん者は、幾所の福をか得爲

阿。』

爾の時に佛、彌勒菩薩摩訶薩に告げたまはく、『阿逸多、如來の滅後に、若し比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及び餘の智者、若しは長、若しは幼、是の經を聞いて、隨喜し已つて、法會より出でて餘處に至らん。若しは僧坊に在り、若しは空閑の地、若しは城邑、巷陌、聚落、田里にして、其の所聞の如く、父母、宗親、善友、知識の爲に、力に隨つて演說せん。是の諸人等聞き已つて、隨喜して、復行ひて轉教せん。餘人聞き已つて、亦隨喜して轉教せん。是の如く展轉して第五十に至らん。阿逸多、其の第五十の善男子、善女人の隨喜の功德を我今之を説かん。汝當に善く聽くべし。若し四百萬億阿僧祇の世界の六趣、四生の衆生、卵生、胎生、濕生、化生、若しは有形、無形、有想、無想、非有想、非無想、無

【一】四生。下の卵、胎、濕、化の四生なり。一に卵生（Ani-dzshier）とは鳥類の如き卵殼の

中より生ずるものを云ふ。二

足、二足、四足、多足、是の如き等の衆生の數に在らん者も、人有つて福を求めて、其の所欲に隨つて娛樂の具を皆之に給與せん。一一の衆生に、
 閻浮提に滿てらん金、銀、瑠璃、碾磔、瑪瑙、珊瑚、琥珀、諸の妙なる珍寶、及び象馬、車乘、七寶所成の宮殿、樓閣等を與へん。是の大施主、
 是の如く布施すること八十年を滿じ已つて、是の念を作さく、「我已に衆生に娛樂の具を施すこと意の所欲に隨へり。然るに此の衆生、皆已に衰老して、年八十を過ぎ、髮白く面皺んで、將に死せんこと久しからじ。我當に佛法を以て之れを訓導すべし。即ち此の衆生を集めて、法化を宣布し、示教利喜して、一時に皆須陀洹道、斯陀含道、阿那含道、阿羅漢道を得、
 諸の有漏を盡くし、深禪定に於て皆自在を得、八解脱を具せしめん。汝が意に於て云何、是の大施主の所得の功德寧ろ爲れ多しや不や。」
 彌勒、佛に白して言さく、「世尊、是の人の功德は甚だ多くして無量無邊なり。若し是の施主、但衆生に一切の樂具を施さんすら、功德無量なり。何に況や阿羅漢果を得せしめんをや。」
 佛、彌勒に告げたまはく、「我今分明に汝に語らん。是の人一切の樂具を

に胎生(ジャライユジャー)とは人間の如き母胎より生ずるものを云ふ。三に濕生(サムスエーラジャー)とは蛆蟲の如き水濕の地より生ずるものを云ふ。四に化生(ウパイククジャー)とは天人の如く前の三生の縁を假らずして忽然に生ずるものを云ふ。凡そ六趣の衆生はこの四生に攝せざるは莫きなり。

【一】有形無形。有形は欲色二界なり、無形は無色界なり。

【三】有想等。有想は空處識處の二天なり。無想は無所有處なり。非有想非無想は無色界の第四天非想非非想處なり。

【四】閻浮提。須彌四洲の南方を云ふ。正音は具さば瞻部提鞞波(Jambudvīpa)。閻浮は瞻部の訛音にして樹の名。提は提鞞波の略にして洲と譯

以て四百萬億阿僧祇の世界の六趣の衆生に施し、又阿羅漢果を得せしめん。
 所得の功德は是の第五十の人の法華經の一偈を聞いて隨喜せん功德には如
 かじ。百分、千分、百千萬億分にして其の一にも及ばじ。乃至算數譬喩も
 知ること能はざる所なり。阿逸多、是の如く第五十の人の展轉して法華經
 を聞いて隨喜せん功德尙ほ無量無邊阿僧祇なり。何に況や最初會中に於て
 聞いて而も隨喜せん者をや。其の福復勝ぐれたること無量無邊阿僧祇にし
 て比ぶることを得可からず。又阿逸多、若し人、是の經の爲の故に僧坊に
 往詣して、若しは坐し、若しは立つて、須臾も聽受せん。是の功德によつて、身を轉じて生まるる所
 には好き上妙の象馬・車乘、珍寶の輦輿を得、及び天宮に乗せん。若し復人有つて講法の處に於て坐
 せん。更に人の來ること有らんに勸めて坐して聽かしめ、若しは座を分かつて坐せしめん。是の人の
 功德は、身を轉じて帝釋の坐處、若しは梵天王の坐處、若しは轉輪聖王の所坐の處を得ん。阿逸多、
 若し復人有つて餘人に語つて言はく、經有り法華と名づけたてまつる。共に往いて聽く可し」と。即ち
 其の教を受けて乃至須臾の間も聞かん。是の人の功德は、身を轉じて陀羅尼菩薩と與に共に一處に生
 ずることを得て、利根智慧ならん。百千萬世に終に瘡陞ならず、口の氣臭からず、舌に常に病無く、
 口に亦病無けん。齒は垢つき黑からず、黄ならず、疎かず、亦缺け落ちず、差はず、曲らず、唇は下

す。この南洲には一大樹あり、
 名けて瞻部と云ふ、縱横七由
 旬、其葉狀南洲の地形に似る
 を以て名と爲すと。或は瞻部
 を翻じて輪王居處と云ひ、亦
 好金地と翻す。亦穢洲、穢樹
 城等の諸翻あり。今吾人の住
 する世界即ち是れなり。

【五】須陀洹等。名義は開經說
 法品の註を見るべし。

り垂れず、亦た褻り縮まらず、龐く澁からず、瘡疹あらず、亦缺け壞れず、亦凹凸斜ならず、厚からず、大いならず、亦黧み黒まず、諸の惡む可きこと無けん。鼻は匾に匿らならず、亦曲り戻らず、面の色は黒からず、亦狭く長からず、亦窻み曲らず、一切の喜ぶ可からざるの相有ること無けん。唇、舌、牙、齒、悉く皆嚴好ならん。鼻修く高く直ぐにして、面貌圓滿に、眉高くして長く、額廣く平正にして人相具足せん。世世に生まるる所には佛を見たてまつり、法を聞きたてまつりて、教誨を信受せん。阿逸多、汝且く是れを觀せよ。一人を勸めて往いて法を聽かしむる功德此の如し。何に況や、一心に説を聽いて讀誦し、而も大衆に於て人の爲に分別し、説の如く修行せんをや。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、
『若し人法會に於て、是の經典を聞くことを得て、乃至一偈に於ても、隨喜して他の爲に説かん。是の如く展轉して教へて、第五十に至らん。最後の人の福を獲んことをば、今當に之を分別すべし。』

如し大施主有つて、無量の衆に供給すること、具さに八十歳を満てて、意の所欲に隨はん。

彼の衰老の相の、髮白くして面皺み、齒疎き形枯竭せるを見て、「其れ死せんこと久しからじ、我今應當に教へて、道果を得せしむべし」と念うて、即ち爲に方便して、涅槃眞實の法を説かん。
「世は皆牢固ならざること、水沫泡餼の如し。汝等咸く應當に、疾く厭離の心を生ずべし」と。

諸人是の法を開いて、皆阿羅漢を得て、六神通、三明八解脫を具足せん。

最後第五十の、一偈を聞いて隨喜せん。是の人の福彼に勝れたること、譬喩を爲べからず。

是の如く展轉して聞くすら、其の福尙ほ無量なり。何に況や法會に於て、初めて聞いて隨喜せん者をや。

若し一人を勸めて、將引して法華を聽かしむること有つて、言はん「此の經は深妙なり、千萬劫にも遇ひ難し」と。

即ち教を受けて往いて聽いて、乃至須臾も聞かん。斯の人の福報、今當に分別して説くべし。

世世に口の患無く、齒は疎き黄み黒まず、唇は厚く褰り缺けず、惡む可きの相有ること無けん。

舌は乾き黒み短からず、鼻は高く修く且つ直く、額は廣くして平正に、面目悉く端嚴にして、人に見ることを喜ばれん。

口の氣は臭穢無くして、優鉢華の香、常に其の口從り出でん。

若し故らに僧坊に詣り、法華經を聽かんと欲して、須臾も聞いて歡喜せん、今當に其の福を説くべし。

後に天人の中に生まれて、妙なる象馬車、珍寶の輦輿を得、及び天の宮殿に乗せん。

【六】優鉢華 優鉢羅華 (Uppala) の略、番蓮華なり。

若し講法の處に於て、人を勸めて坐して經を聽かしめん。是の福の因縁をもつて、釋梵轉輪の座を得ん。

何に況や一心に聽き、其の義趣を解説し、説の如く修行せんをや、其の福限る可からず。」

法師功德品第十九

爾の時に佛、常精進菩薩摩訶薩に告げたまはく、『若し善男子、善女人、是の法華經を受持し、若しは讀み、若しは誦し、若しは解説し、若しは書寫せん。是の人は當に八百の眼の功德、千二百の耳の功德、八百の鼻の功德、千二百の舌の功德、八百の身の功德、千二百の意の功德を得べし。是の功德を以て六根を莊嚴して皆清淨ならしめん。是の善男子、善女人は、父母所生の清淨の肉眼をもつて、三千大千世界の内外の、有ゆる山、林、河、海を見ること、下は阿鼻地獄に至り、上は有頂に至らん。亦其の中は一切衆生を見、及び業の因縁、果報の生處、悉く見、悉く知らん。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『若し大衆の中に於て、無所畏の心を以て、是の法華經を説かん、汝其の功德を聽け。

是の人は八百の、功德の殊勝の眼を得ん。是れを以て莊嚴するが故に、其の目甚だ清淨ならん。

父母所生の眼をもつて、悉く三千界の、内外の彌樓山、須彌及び鐵圍、

并に諸餘の山林、大海江河水を見ること、下は阿鼻獄に至り、上は有頂天に至らん。

其の中の諸の衆生、一切皆悉く見ん。未だ天眼を得ずと雖も、肉眼の力是の如くならん。』

『復次に常精進、若し善男子、善女人、此の經を受持し、若しは讀み、若しは誦し、若しは解説し、

若しは書寫せば、千二百の耳の功德を得ん。是の清淨の耳を以て、三千大千世界の、下は阿鼻地獄に至り、上は有頂に至る、其の中の内外の、種種の有ゆる語言の音聲、象聲、馬聲、牛聲、車聲、啼哭聲、愁嘆聲、螺聲、鼓聲、鐘聲、鈴聲、笑聲、語聲、男聲、女聲、童子聲、童女聲、法聲、非法聲、苦聲、樂聲、凡夫聲、聖人聲、喜聲、不喜聲、天聲、龍聲、夜叉聲、乾闥婆聲、阿修羅聲、迦樓羅聲、緊那羅聲、摩睺羅伽聲、火聲、水聲、風聲、地獄聲、畜生聲、餓鬼聲、比丘聲、比丘尼聲、聲聞聲、辟支佛聲、菩薩聲、佛聲を聞かん。要を以て之を言はば、三千大千世界の中の、一切の内外の有ゆる諸の聲、未だ天耳を得ずと雖も、父母所生の清淨の常の耳を以て皆悉く聞き知らん。是の如く種種の音聲を分別すとも而も耳根を壞らじ。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『父母所生の耳、清淨にして濁穢無く、此の常の耳を以て、三千世界の聲を聞かん。』

象馬車牛の聲、鐘鈴螺鼓の聲、琴瑟箏篋の聲、簫笛の音聲、

清淨好歌の聲、之を聽いて而も著せじ。無數種の人の聲、聞いて悉く能く解了せん。

又諸天の聲、微妙の歌の音を聞き、及び男女の聲、童子童女の聲を聞かん。

山川嶮谷の中の、迦陵頻伽の聲、(二)命命等の諸鳥、悉く其の音聲

なり。この鳥の鳴くに著婆者婆と呼ぶが故に名と爲す。其

【一】命命。梵名は者婆者婆 (ジワムジワ、命命はその翻名

なり。この鳥の鳴くに著婆者婆と呼ぶが故に名と爲す。其

を聞かん。

地獄の衆の苦痛、種種の楚毒の聲、餓鬼の饑渴に逼められ、飲食を求

索するの聲、

諸の阿修羅等の、大海の邊に居在して、自ら共に言語する時、出だ

せる大音聲、

是の如き說法者は、此の間に安住して、遙に是の衆の聲を聞いて、而も耳根を壞らじ。

十方世界の中の、禽獸の鳴いて相呼べる、其の說法の人、此に於て悉く之を聞かん。

其の諸の梵天上、光音及び徧淨、乃至有頂天の、言語の音聲、

法師此に住して、悉く皆之を聞くことを得ん。一切の比丘衆、及び諸の比丘尼の、

若しは經典を讀誦し、若しは他人の爲に説かんと、法師此に住して、悉く皆之を聞くことを得

ん。

復諸の菩薩有つて、經法を讀誦し、若しは他人の爲に説いて、撰集して其の義を解せん、

是の如き諸の音聲、悉く皆之を聞くことを得ん。諸佛大聖尊の、衆生を教化したまふ者、

諸の大會の中に於て、微妙の法を演説したまふ、此の法華を持たん者は、悉く皆之を聞くこと

を得ん。

音甚だ美なりと云ふ。或説にこの鳥一身兩首なるが故に共命と翻すと。亦生生、活活等の翻あり。印度雪山に棲めり、人面禽形とも傳へらる。

三千大千世界の、内外の諸の音聲、下は阿鼻獄に至り、上は有頂天に至るまで、皆其の音聲を聞いて、而も耳根を壞らじ。其の耳聰利なるが故に、悉く能く分別して知らん。是の法華を持たん者は、未だ天耳を得ずと雖も、但所生の耳を用ふるに、功德已に是の如くならん。』

『復次に常精進、若し善男子、善女人、是の經を受持し、若しは讀み、若しは誦し、若しは解説し、若しは書寫せば、八百の鼻の功德を成就せん。是の清淨の鼻根を以て、三千大千世界の上下内外の種種の諸の香を聞かん、(三)須摩那華の香、(四)閻提華の香、(五)末利華の香、(六)蘆蔔華の香、(七)波羅羅華の香、赤蓮華の香、青蓮華の香、白蓮華の香、華樹の香、果樹の香、栴檀の香、沈水の香、(八)多摩羅跋の香、(九)多伽羅の香、及び千萬種の和せる香、若しは抹せる、若しは丸せる、若しは塗香、是の經を持たん者は、此の間に於て住して、悉く能く分別せん。又復衆生の香、象の香、馬の香、牛羊等の香、男の香、女の香、童子の香、童女の香、及び草木叢林の香を別へ知らん。若しは近き、若しは遠き、有ゆる諸の香、悉く皆聞くことを得て、分別して錯まらじ。是の經を持たん者は、此に住せりと雖も、亦天上の諸天の香を聞かん。(十)波利質多羅拘鞞陀羅樹の香、及び曼陀羅華の香、

【二】須摩那。分別功德品の註を看るべし。

【三】閻提華(ジャチチカ)生と翻じ、實と翻す。亦荳蔻とも翻す。支子花の香に似たりと云ふ。一如の新註には金錢華と翻べり。

【四】末利華(Malika)亦摩利華とも書く。鬘華と翻す。此の華を以て鬘と爲すべきが故なり。華色は黄金色なりと云

摩訶曼陀羅華の香、曼殊沙華の香、摩訶曼殊沙華の香、栴檀、沈水、種種の抹香、諸の雜華の香、是の如き等の天香より和合して出す所の香、聞き知らざること無げん。又諸天の身の香を聞かん。釋提桓因の勝殿の上に在つて、五慾に娛樂し嬉戲する時の香、若しは妙法堂の上に在つて、(三) 忉利の諸天の爲に說法する時の香、若しは諸の園に於て遊戯する時の香、及び餘の天等の男女の身の香、皆悉く遙に聞かん。是の如く展轉して乃し梵天に至り、上有頂に至る諸天の身の香、亦皆之を聞き、并に諸天の燒く所の香を聞かん。及び聲聞の香、辟支佛の香、菩薩の香、諸佛の身の香、亦皆遙に聞いて其の所在を知らん。此の香を聞くと雖も、然も鼻根に於て壞らず錯らず。若し分別して他人の爲に説かんと欲せば、憶念して謬らず。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、
『是の人の鼻は清淨にして、此の世界の中に於て、若しは香しき若しは臭き物、種種悉く聞き知らん。』

須曼那闍提、多摩羅栴檀、沈水及び桂香、種種の華果の香、

ふ。亦慧琳の香義卷二十六には摩利迦華、次第華と翻すと云へり。華の香頗る須曼那に似たりと傳へらる。

【五】 蘼華。分別功德品の註を看るべし。

【六】 波羅羅華 (Palastra)。即ち波吒羅樹にして此土の楸樹に似たりと云ふ。その華紫色にして甚だ香氣あり。重葉華と翻す。

【七】 多摩羅跋 (Tamaraka)。草葉の香の名にして葵香、霍香、靈葉香等の諸翻あり。

【八】 多伽羅 (Tigara)。亦多揭羅、多藥羅等とも書く。根香と翻す。即ち零陵香なり。

【九】 波利質多羅 (Palijata)。香遍樹と翻す。この樹は根莖枝葉華實一切皆香ありて雜色莊嚴なりと云ふ。亦忉利天宮に在つて諸樹の最上なるが故に天樹王とも翻す。拘陀羅は

及び衆生の香、男子女人の香を知らん。説法者は遠く住して、香を聞いて所在を知らん。

大勢の轉輪主、小轉輪及び子、羣臣諸の宮人、香を聞いて所在を知らん。

身に著くる所の珍寶、及び地中の寶藏、轉輪王の寶女、香を聞いて所在を知らん。

諸人の嚴身の具、衣服及び瓔珞、種種の塗れる所の香、聞いて則ち其の身を知らん。

諸天の若しは行ける坐せる、遊戯及び神變、是の法華を持たん者は、香を聞いて悉く能く知らん。

諸樹の華果實、及び酥油の香氣、持經者は此に住して、悉く其の所在を知らん。

諸山の深く險しき處に、梅檀樹の華敷き、衆生の中に在る者、香を聞いて悉く能く知らん。

鐵圍山大海、地中の諸の衆生、持經者は香を聞いて、悉く其の所在を

その異名なり。探玄記卷二十によれば波利質多樹の梵音は眞さには波喇耶哩羅毘陀羅樹なりと。若し然らば異名に非ずして合せて一の樹稱なるなり。

【一〇】勝殿。具さには殊勝殿と云ふ。初利天善見大城の中央に在りて、帝釋所住の宮殿なり。瓔珞の所成と傳へらる。

【一一】妙法堂。亦善法堂とも云ふ。六齋日に帝釋諸天と與にこの堂中に於て人間の如法不如法の事を議すと云ふ。又種福出世の道をも宣説すと云ふ。善見大城の西北の角隅にこの堂ありて亦瓔珞の所成と傳へらる。

【一二】初利の諸天。初利(Chulika)は具さには恒惛耶(Chulika)は具さには恒惛耶(Chulika)恒惛奢と云ふ。恒惛耶は三、恒惛奢は十三、即ち三十三天と翻するなり。須彌山の頂上

知らん。

阿修羅の男女、及び其の諸の眷屬の、鬪諍し遊戯する時、香を聞いて皆能く知らん。

曠野險隘の處の、師子象虎狼、野牛水牛等、香を聞いて所在を知らん。若し懷妊せる者有つて、未だ其の男女、無根及び非人を辨へざるを、

香を聞いて悉く能く知らん。

香を聞く力を以ての故に、其の初めて懷妊し、成就し成就せざる、安樂にして福子を産まんことを知らん。

香を聞く力を以ての故に、男女の所念、染欲癡惑の心を知り、亦善を修する者を知らん。

地中の衆の伏藏、金銀諸の珍寶、銅器の盛れる所、香を聞いて悉く能く知らん。種種の諸の瓔珞の、能く其の價を識ること無き、香を聞いて貴賤、出處及び所在を知らん。

天上の諸華等の、曼陀曼殊沙、波利質多樹、香を聞いて悉く能く知らん。

天上の諸の宮殿、上中下の差別、衆の寶華の莊嚴せる、香を聞いて悉く能く知らん。

天の園林勝殿、諸觀妙法堂、中に在つて而も娛樂する、香を聞いて悉く能く知らん。

諸天の若しは法を聽き、或は五欲を受くる時、來往し行坐臥する、香を聞いて悉く能く知らん。

四方に各八天あり、中央に更に一天ありて、三十三を成す。中央の一天は即ち帝釋の所居善見城なり。この三十三天を總じて名けて忉利と云ふ。六欲天の第二なり。

天女の著たる所の衣、好き華香をもつて莊嚴して、周旋し遊戯する時、香を聞いて悉く能く知らん。

是の如く展轉し上つて、乃し梵天に至る、入禪出禪の者、香を聞いて悉く能く知らん。

光音徧淨天、乃し有頂に至るまでの、初生及び退没、香を聞いて悉く能く知らん。

諸の比丘衆等の、法に於て常に精進し、若しは坐し若しは經行し、及び經法を讀誦し、

或は林樹の下に在つて、專精にして坐禪せる、持經者は香を聞いて、悉く其の所在を知らん。

菩薩の志し堅固にして、坐禪し若しは讀經し、或は人の爲に說法する、香を聞いて悉く能く知らん。

在在方の世尊の、一切に恭敬せられて、衆を惑んで說法したまふ、香を聞いて悉く能く知らん。

衆生の佛前に在つて、經を聞いて皆歡喜し、法の如く修行する、香を聞いて悉く能く知らん。

未だ菩薩の、無漏法生の鼻を得ずと雖も、而も是の持經者は、先づ此の鼻の相を得ん。

『復次に常精進、若し善男子、善女人、是の經を受持し、若しは讀み、若しは誦し、若しは解説し、

若しは書寫せば、千二百の舌の功德を得ん。若しは好、若しは醜、若しは美、若しは不美、及び諸の

苦澁の物、其の舌根に在けば皆變じて上味と成つて、天の甘露の如くにして、美からざる者無けん。

若し舌根を以て大衆の中に於て演說する所有れば、深妙の聲を出だして能く其の心に入れて皆歡喜し

快樂せしめん。又諸の天子、天女、釋、梵、諸天、是の深妙の音聲の演説する所有る言論の次第を聞いて、皆悉く來つて聽かん。及び諸の龍、龍女、夜叉、夜叉女、乾闥婆、乾闥婆女、阿修羅、阿修羅女、迦樓羅、迦樓羅女、緊那羅、緊那羅女、摩睺羅伽、摩睺羅伽女、法を聽かんが爲の故に、皆來つて親近し恭敬供養せん。及び比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、國王、王子、羣臣、眷屬、小轉輪王、大轉輪王、七寶千子、内外の眷屬、其の宮殿に乗じて、俱に來つて法を聽かん。是の菩薩善く説法するを以ての故に、婆羅門、居士、國內の人民、其の形壽を盡くすまで隨侍して供養せん。又諸の聲聞、辟支佛、菩薩、諸佛、常に樂つて之を見そなはしたまはん。是の人の所在の方面には、諸佛皆其の處に向つて法を説きたまはん。悉く能く一切の佛法を受持し、又能く深妙の法音を出ださん。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『是の人は舌根淨くして、終に惡味を受けじ。其の食噉する所有るは、悉く皆甘露と成らん。』

深淨の妙聲を以て、大衆に於て法を説かん。諸の因縁喻を以て、衆生の心を引導せん。

聞く者皆歡喜して、諸の上供養を設けん。諸の天龍夜叉、及び阿修羅等、

皆恭敬の心を以て、共に來つて法を聽かん。是の説法の人、若し妙音を以て、

三千界に徧滿せんと欲せば、意に隨つて即ち能く至らん。大小の轉輪王、及び千子眷屬、

合掌し恭敬の心をもつて、常に來つて法を聽受せん。諸の天龍夜叉、羅刹毘舍闍、

亦歡喜の心を以て、常に樂つて來つて供養せん。梵天王魔王、自在大自在、

是の如き諸の天衆、常に其の所に來至せん。諸佛及び弟子、其の説法の音を聞いて、

常に念じて守護し、或時は爲に身を現じたまはん。』

『復次に常精進、若し善男子、善女人、是の經を受持し、若しは讀み、若しは誦し、若しは解説し、若しは書寫せば、八百の身の功德を得て、清淨の身、淨琉璃の如くにして、衆生見んと喜ふを得ん。

其の身淨きが故に、三千大千世界の衆生の、生ずる時、死する時、上下、好醜、善處、惡處に生ずる、

悉く中に於て現せん。及び鐵圍山、大鐵圍山、彌樓山、摩訶彌樓山等の諸山王、及び其の中の衆生、

悉く中に於て現せん。下は阿鼻地獄に至り、上は有頂に至る所有、及び衆生、悉く中に於て現せん。

若しは聲聞、辟支佛、菩薩、諸佛の説法したまふまで、皆身中に於て、其の色像を現せん。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『若し法華經を持たんは、其の身甚だ清淨なること、彼の淨琉璃の如くにして、衆生皆見んと喜

はん。

又淨明の鏡に、悉く諸の色像を見るが如く、菩薩の淨身に於て、皆世の所有を見ん。

唯獨自ら明了にして、餘人の見ざる所ならん。三千世界の中の、一切の諸の羣萌、

天人阿修羅、地獄鬼畜生、是の如き諸の色像、皆身中に於て現せん。

諸天等の宮殿、乃し有頂に至る、鐵圍及び彌樓、摩訶彌樓山、

諸の大海水等、皆身中に於て現せん。諸佛及び聲聞、佛子菩薩等の、

若しは獨り若しは衆に在つて、說法する悉く皆現せん。未だ無漏・法性の妙身を得ずと雖も、

清淨の常の體を以て、一切中に於て現せん。』

『復次に常精進、若し善男子、善女人、如來の滅後に、是の經を受持し、若しは讀み、若しは誦し、若しは解説し、若しは書寫せば、千二百の意の功德を得ん。是の清淨の意根を以て、乃至一偈一句を聞くに、無量無邊の義に通達せん。是の義を解り已つて、能く一句一偈を演説して、一月、四月、乃至一歲に至らん。諸の所説の法、其の義趣に隨つて、皆實相と相違背せじ。若し俗閒の經書、治世の語言、資生の業等を説かんに、皆正法に順せん。三千大千世界の六趣の衆生の心の行する所、心の動作する所、心の戲論する所、皆悉く之を知らん。未だ無漏の智慧を得ずと雖も、而も其の意根の清淨なること此の如くならん。是の人の思惟し籌量し言説する所有らんは、皆是れ佛法にして眞實ならざること無く、亦是れ先佛の經の中の所説ならん。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『是の人は意清淨に、明利にして穢濁無く、此の妙なる意根を以て、上中下の法を知り、乃至一偈を聞くに、無量の義に通達せん。次第に法の如く説くこと、月四月より歲に至らん。』

是の世界の内外の、一切の諸の衆生、若しは天龍及び人、夜叉鬼神等、

其の六趣の中に在る、所念の若干種、法華を持つ報は、一時に皆悉く知らん。

十方無数の佛、百福莊嚴の相ましまして、衆生の爲に說法したまふを、悉く聞いて能く受持せん。

無量の義を思惟し、說法すること亦無量にして、終始忘れ錯らず、法華を持つを以ての故に、

悉く諸法の相を知り、義に隨つて次第を識り、名字語言に達して、知れる所の如く演說せん。

此の人の所説有るは、皆是れ先佛の法ならん。此の法を演ぶるを以ての故に、衆に於て畏るる所

無し。

法華經を持つ者は、意根淨きこと斯の若くならん。未だ無漏を得ずと雖も、先づ是の如きの相有

らん。

是の人は是の經を持つて、希有の地に安住し、一切衆生に、歡喜して愛敬せられ、能く千萬種の、

善巧の語言を以て、分別して演說せん、法華經を持つが故なり。』

卷の第七

常不輕菩薩品第二十

爾の時に佛、得大勢菩薩摩訶薩に告げたまはく、『汝今當に知るべし、若し比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の法華經を持たん者を、若し惡口罵詈誶すること有らば、大なる罪報を獲んこと、前に説く所の如し。其の所得の功德は、向に説く所の如く、眼、耳、鼻、舌、身、意、清淨ならん。得大勢、乃往古昔に無量無邊不可思議阿僧祇劫を過ぎて佛有しき。』
 威音王如來、應供、正徧知、明行、足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と名づけたてまつる。劫を離衰と名づけ、國を大成と名づく。其の威音王佛彼の世の中に於て、天、人、阿修羅の爲に法を説きたまふ。聲聞を求むる者の爲には、應せる四諦の法を説いて、生、老、病、死を度し、涅槃を究竟せしめ、辟支佛を求むる者の爲には、應せる十二因縁の法を説き、諸の菩薩の爲には、阿耨多羅三藐三菩提に因せて、應せる六波羅蜜の法を説いて、佛慧を究竟せしめたまふ。得大勢、是の威音王佛の壽は四十萬億那由他恒河沙

- 【一】 威音王。正法華には寂趣音王に作る。(尼波羅本 *Mūsa-magaljitastavāra-lāṅkā* *maghāṅkavāra-lāṅkā*)
- 【二】 離衰。正法華には離大財に作る。(尼波羅本 *Vandito* *ṅgā*)
- 【三】 大成。正法華には大柱に作る。(尼波羅本 *Māhāsam-* *dhānī*)

劫なり。正法世に住せる劫數は一閻浮提の微塵の如く、像法世に住せる劫數は四天下の微塵の如し。其の佛衆生を饒益し已つて、然して後に滅度したまひき。正法像法滅盡の後、此の國土に於て復佛出でたまふこと有りき。亦威音王如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號づけたてまつる。是の如く次第に二萬億の佛有ます。皆同じく一號なり。最初の威音王如來既に滅度したまひて、正法滅して後、像法の中に於て、増上慢の比丘大勢力有り。爾の時に一りの菩薩比丘有り、常不輕と名づく。得大勢、何の因縁を以てか常不輕と名づくる。是の比丘、凡そ見る所有る、若しは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を、皆悉く禮拜讚嘆して、是の言を作さく、「我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず。所以は何。汝等皆菩薩の道を行じて、當に作佛することを得べし」と。而も是の比丘、専らに經典を讀誦せずして、但禮拜を行す。乃至遠く四衆を見ても、亦復故らに往いて禮拜讚嘆して、是の言を作さく、「我敢て汝等を輕しめず、汝等當に作佛すべきが故に」と。四衆の中に瞋恚を生じて心不淨なる者あり、惡口罵詈して言はく、「是の無智の比丘、何れの所より來つてか、我汝を輕しめずと言つて、我等が與に當に作佛することを得べしと授記する。我等是の如き虛妄の授記を用ひず」と。此の如く多年を経歴して、常に罵詈せらるれども、瞋恚を生ぜずして、常に是の言を作す、「汝當に作佛すべし」と。是の語を説く時、

【四】常不輕。正法華には常不輕に作る。(尼波羅本 *paribhūta*)

【五】原文。我深敬汝等、不敢輕慢、所以者何、汝等皆行菩薩道、當得作佛。

の諸佛を供養し、恭敬、尊重、讚嘆して、諸の善根を種ゑ、後に復千萬億の佛に値ひたてまつり、亦
 諸佛の法の中に於て、是の經典を説いて、功德成就して、當に作佛することを得たり。得大勢、意に
 於て云何。爾の時の常不輕菩薩は豈に異人ならんや、則ち我が身是れなり。若し我宿世に於て此の經を
 受持し讀誦し他人の爲に説かずんば、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はじ。我先佛の所に於て
 此の經を受持し讀誦し人の爲に説きしが故に、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得たり。得大勢、彼の時の四
 衆の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷は、瞋恚の意を以て我を輕賤せしが故に、二百億劫常に佛に値は
 ず、法を聞かず、僧を見ず、千劫阿鼻地獄に於て大苦惱を受く。是の罪を畢へ已つて、復常不輕菩薩
 の阿耨多羅三藐三菩提に教化するに遇ひにき。得大勢、汝が意に於て云何。
 爾の時の四衆の常に是の菩薩を輕しめし者は豈に異人ならんや、今此の會
 の中の、跋陀婆羅等の五百の菩薩、師子月等の五百の比丘尼、(一)思
 佛等の五百の優婆塞の、皆阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉せざる者は是れな
 り。得大勢、當に知るべし、是の法華經は大に諸の菩薩摩訶薩を饒益して、
 能く阿耨多羅三藐三菩提に至らしむ。是の故に諸の菩薩摩訶薩、如來の滅後に於て、常に是の經を受
 持し讀誦し解説し書寫すべし。』爾の時に世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、
 『過去に佛有しき、威音王と號づけたてまつる。神智無量にして、一切を將導したまふ。

- 【九】 跋陀婆羅 序品菩薩列名の註を見るべし、十六大士の第一賢護菩薩是なり。
- 【一〇】 師子月。(Shishimatsudō) シムハチヤンドラー
- 【一一】 思佛。善道思。(Shinobō) スガタチエー トーナーなり。

天人龍神の、共に供養したてまつる所なり。是の佛の滅後、法盡きなんと欲せし時、

一りの菩薩有り、常不輕と名づく。時に諸の四衆、法に計著せり。

不輕菩薩、其の所に往き到つて、而も之に語つて言はく、「我汝を輕しめず、汝等道を行じて、皆當に作佛すべし」と。諸人聞き已つて、輕毀罵詈せしに、

不輕菩薩、能く之を忍受しき。其の罪畢へ已つて、命終の時に臨んで、

此の經を聞くことを得て、六根清淨なり。神通力の故に、壽命を増益して、

復諸人の爲に、廣く是の經を説く。諸の著法の衆、皆菩薩の、

教化し成就して、佛道に住せしむることを蒙る。不輕命終して、無

數の佛に値ひたてまつる。

是の經を説くが故に、無量の福を得、漸く功德を具して、疾く佛道を成す。

彼の時の不輕は、則ち我が身是れなり。時の四部の衆の、著法の者の、

不輕の、「汝當に作佛すべし」と言ふを聞きしは、是の因縁を以て、無數の佛に値ひたてまつる。

此の會の菩薩、五百の衆、并及に四部、(二三)清信士女の、

今我が前に於て、法を聽く者は是れなり。我前世に於て、是の諸人を勸めて、

斯の經の、第一の法を聽受せしめ、開示して人を教へて、涅槃に住せしめ、

【二三】 清信士女。優婆塞を清信士と云ひ、優婆夷を清信女と云ふなり。

世世に、是の如き經典を受持しき。億億萬劫より、不可議に至つて、
時に乃し、是の法華經を聞くことを得。億億萬劫より、不可議に至つて、
諸佛世尊、時に是の經を説きたまふ。是の故に行者、佛の滅後に於て、
是の如き經を聞いて、疑惑を生ずること勿れ。應當に一心に、廣く此の經を説くべし。
世世に佛に値ひたてまつりて、疾く佛道を成せん。』

如來神力品第二十一

爾の時に千世界微塵等の菩薩摩訶薩の地より涌出せる者、皆佛前に於て一心に合掌し、尊顔を瞻仰して、佛に白して言さく、「世尊、我等佛の滅後、世尊分身所在の國土、滅度の處に於て、當に廣く此の經を説くべし。所以は何、我等も亦自ら是の眞淨の大法を得て、受持し讀誦し解説し書寫して之を供養せんと欲す。」爾の時に世尊、文殊師利等の無量百千萬億の舊住娑婆世界の菩薩摩訶薩、及び諸の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等の一切の衆の前に於て、大神力を現じたまふ。廣長舌を出して上梵世に至らしめ、一切の毛孔より無量無數色の光を放つて、皆悉く徧く十方世界を照したまふ。衆の寶樹の下の師子の座の上の諸佛も亦復是の如く、廣長舌を出し、無量の光を放ちたまふ。釋迦牟尼佛及び寶樹の下の諸佛神力を現じたまふ時百千歳を滿す。然して後に還つて舌相を攝めて、一時に譬歎し、俱共に彈指したまふ。是の二つの音聲、徧く十方の諸佛の世界に至つて、地皆六種に震動す。其の中の衆生、天、

- 【一】 大神力、以下其さに十神力を現じたまふ。
- 【二】 廣長舌、之を吐長舌相と名づく、十神力の第一なり。
- 【三】 一切の毛孔、之を通身放光と名づく、十神力の第二なり。
- 【四】 然して後、之を譬歎之聲と名づく、十神力の第三なり。
- 【五】 俱共に、之を彈指之聲と名づく、十神力の第四なり。
- 【六】 是の二、之を地六種動と名づく、十神力の第五なり。
- 【七】 其の中の衆生、之を普見大會と名づく、十神力の第六なり。

龍、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等、佛の神力を以ての故に、皆此の娑婆世界の無量無邊百千萬億の衆の寶樹の下の師子の座の上の諸佛を見、及び釋迦牟尼佛、多寶如來と共に寶塔の中に在して師子の座に坐したまへるを見たてまつり、又無量無邊百千萬億の菩薩及び諸の四衆の釋迦牟尼佛を恭敬圍繞したてまつるを見る。既に是れを見已つて、皆大に歡喜して未曾有なることを得。即時に諸天、虛空の中に於て高聲に唱へて言はく、『此の無量無邊百千萬億阿僧祇の世界を過ぎて國あり、娑婆と名づく。是の中に佛有ます、釋迦牟尼と名づけたてまつる。今諸の菩薩摩訶薩の爲に、大乘經の妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念と名づくるを説きたまふ。汝等當に深心に隨喜すべし。亦當に釋迦牟尼佛を禮拜し供養すべし。』彼の諸の衆生、虛空の中の聲を聞き已つて、合掌して娑婆世界に向つて、是の如き言を作さく、『南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛と。種種の華、香、瓔珞、旛蓋及び諸の嚴身の具、珍寶、妙物を以て、皆共に遙に娑婆世界に散ず。所散の諸物十方より來ること、譬へば雲の集まるが如し。變じて寶帳と成つて、徧く此の間の諸佛の上に覆ふ。』時に十方世界、通達無礙にして一佛土の如し。

(三) 爾の時に佛、上行等の菩薩大衆に告げたまはく、『諸佛の神力は是の

【八】即時に諸天。之を空中唱聲と名づく、十神力の第七なり。

【九】彼の諸の衆生。之を咸皆歸命と名づく、十神力の第八なり。この中南無釋迦牟尼佛の南無(Namaste)は歸命と翻じ。又度我、救我と翻す。又歸禮、我禮、敬禮、禮拜、稽首、屈膝等の諸翻あり。信順を表する敬禮の詞なり。

【一〇】種種の華。之を遙散諸物と名づく、十神力の第九なり。

【一一】時に十方。之を同一佛土と名づく、十神力の第十なり。

如く無量無邊不可思議なり。若し我是の神力を以て、無量無邊百千萬億阿
 僧祇劫に於て、囑累の爲の故に、此の經の功德を説かんに、猶ほ盡くすこ
 と能はじ。 (二三) 要を以て之を言はば、如來の一切の所有の法、如來の一切
 の自在の神力、如來の一切の祕要の藏、如來の一切の甚深の事、皆此の經
 に於て宣示顯説す。是の故に汝等如來の滅後に於て、應當に一心に受持し
 讀誦し解説し書寫して説の如く修行すべし。所在の國土に、若しは受持し
 讀誦し解説し書寫して説の如く修行すること有らん、若しは經卷所住の
 處、若しは園の中に於ても、若しは林の中に於ても、若しは樹の下に於て
 も、若しは僧坊に於ても、若しは白衣の舍にても、若しは殿堂に在つても、
 若しは山谷曠野にても、是の中に皆塔を起てて供養すべし。所以は何當
 を知るべし、是の處は即ち是れ道場なり。諸佛此に於て阿耨多羅三藐三菩
 提を得、諸佛此に於て法輪を轉じ、諸佛此に於て般涅槃したまふ。』
 爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、

『諸佛救世者、大神通に住して、衆生を悦ばしめんが爲の故に、無量の神力を現じたまふ。
 舌相梵天に至り、身より無數の光を放つて、佛道を求むる者の爲に、此の希有の事を現じたまふ。』

【三】 爾の時に。以下本化付囑の文なり、これに四あり。初に爾の時より、猶ほ盡くすこと能はじまでは稱嘆付囑、次に要を以て之を言はばより、宣示顯説すまでは結要付囑、又次に是の故に汝等より供養すべしまでは勸善付囑、復次に所以は何より、般涅槃したまふまでは釋付囑なり。就中結要付囑の如來一切等の四句最も肝要なり。この結要に由りて本化の弘通は題目の五字七字に限るなり。

【三】 原文。以要言之、如來所有之法、如來一切自在神力、如來一切祕要之藏、如來一切甚深之事、皆於此經、宣示顯説。

諸佛警效の聲、及び彈指の聲、周く十方の國に聞えて、地皆六種に動す。

佛の滅度の後に、能く此の經を持たんを以ての故に、諸佛皆歡喜して、無量の神力を現じたまふ。是の經を囑累せんが故に、受持の者を讚美すること、無量劫の中に於てすとも、猶故盡くすこと能はじ。

是の人の功德は、無邊にして窮り有ること無けん。十方の虚空の、邊際を得可からざるが如し。

能く是の經を持たん者は、則ち爲れ已に我を見、亦多寶佛、及び諸の分身者を見、又我が今日、教化せる諸の菩薩を見るなり。能く是の經を持たん者は、我及び分身、

滅度の多寶佛をして、一切皆歡喜せしめ、十方現在の佛、并に過去未來、

亦は見亦は供養し、亦は歡喜することを得せしめん。諸佛道場に坐して、得たまへる所の祕要の法、

能く是の經を持たん者は、久しからずして亦當に得べし。能く是の經を持たん者は、諸法の義名字及び言辭に於て、樂説窮盡無きこと、風の空中に於て、一切障礙無きが如くならん。

如來の滅後に於て、佛の所説の經の、因縁及び次第を知つて、義に隨つて實の如く説かん。

日月の光明の、能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて、能く衆生の闇を滅し、無量の菩薩をして、畢竟じて一乘に住せしめん。是の故に智有らん者、此の功德の利を聞いて、

我滅度の後に於て 應に斯の經を受持すべし。是の人佛道に於て、決定して疑有ること無けん。』

囑累品第二十二

爾の時に釋迦牟尼佛、法座より起つて大神力を現じたまふ。右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩でて、是の言を作したまはく、『我無量百千萬億阿僧祇劫に於て、是の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。今以て汝等に付囑す。汝等應當に一心に此の法を流布して、廣く増益せしむべし。』是の如く三び諸の菩薩摩訶薩の頂を摩でて、是の言を作したまはく、『我無量百千萬億阿僧祇劫に於て、是の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。今以て汝等に付囑す。汝等當に受持し讀誦し廣く此の法を宣べて、一切衆生をして普く聞知することを得せしむべし。所以は何。如來は大慈悲有つて、諸の慳慳無く、亦畏るる所無くして、能く衆生に佛の智慧、如來の智慧、自然の智慧を與ふ。如來は是れ一切衆生の大施主なり。汝等亦隨つて如來の法を學すべし。慳慳を生ずること勿れ。未來世に於て、若し善男子、善女人有つて、如來の智慧を信せん者には、當に爲に此の法華經を演説して、聞知することを得せしむべし。其の人をして佛慧を得せしめんが爲の故なり。若し衆生有つて信受せざらん者には、當に如來の餘の深法の中に於て示教利喜すべし。汝等若し能く是の如くせば、則ち爲れ已に諸佛の恩を報ずるなり。』時に諸の菩薩摩訶薩、佛の是の説を作したまふを聞き已つて、皆大歡喜其の身に徧滿して、益恭敬を加へ、躬を曲げ頭を低れ、合掌して佛に向ひたてまつりて、俱に聲を

發して言さく、『世尊の敕の如く當に具さに奉行すべし。唯然世尊、願はくは、慮有さざれ。』諸の菩薩
 摩訶薩衆是の如く三反、俱に聲を發して言さく、『世尊の敕の如く當に具さに奉行すべし。唯然世尊、
 願はくは、慮有さざれ。爾の時に釋迦牟尼佛、十方より來りたまへる諸の分身の佛をして、各本土に
 還らしめんとして、是の言を作したまはく、『諸佛各所安に隨ひたまへ。多寶佛塔、還つて故の如く
 したまふ可し。』是の語を説きたまふ時、十方無量の分身の諸佛の寶樹の下の師子の座の上に坐したま
 へる者、及び多寶佛、并に上行等の無邊阿僧祇の菩薩大衆、舍利弗等の聲聞四衆、及び一切世間の
 天、人、阿修羅等、佛の所説を聞きたてまつりて、皆大に歡喜す。

藥王菩薩本事品第二十三

爾の時に 宿王華菩薩、佛に白して言さく、「世尊、藥王菩薩は云何してか娑婆世界に遊ぶ。世尊、

是の藥王菩薩は若干百萬億那由佗の難行苦行有らん。善哉世尊、願はくは少し解説したまへ。諸の

天、龍神、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人

等、又佗の國土の諸の來れる菩薩、及び此の聲聞衆、聞いて皆歡喜せん。」

爾の時に佛、宿王華菩薩に告げたまはく、「乃往過去無量恒河沙劫に佛有し

き、日月淨明德如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世閒解、無上

士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號づけたてまつる。其の佛に八十億の

大菩薩摩訶薩、七十二恒河沙の大聲聞衆有り。佛の壽は四萬二千劫、菩薩

の壽命も亦等し。彼の國には女人、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅等及び諸難

有ること無し。地の平かなること掌の如くにして、瑠璃の所成なり。寶

樹莊嚴し、寶帳上に覆ひ、寶の華幡を垂れ、寶瓶、香爐國界に周徧せり。

七寶を臺と爲して、一樹に一臺あり。其の樹、臺を去ること一箭道を盡くせり。此の諸の寶樹に

皆菩薩、聲聞有つて其の下に坐せり。諸の寶臺の上に、各百億の諸天有つて天の伎樂を作し、佛を歌

【一】宿王華。正法華には宿華王に作る。(尼波羅本 *Naṅgaśāyaka* 上ラニヤサムクスマニシヤ *naṅgaśāyaka*)

【二】日月淨明德。正法華には離垢日月光首如來に作る(尼波羅本 *Candrasūrya-prabhākarī*)

【三】一箭道。新註に依れば或は弓箭の射埒の百二十歩を一箭道と云ひ、或は百三十歩、百五十歩等の異説あり。嘉祥の義疏には二里となせり。

歎して以て供養を爲す。爾の時に彼の佛一切衆生意見菩薩及び衆の菩薩、諸の聲聞衆の爲に、法華經を説きたまふ。是の一切衆生意見菩薩樂つて苦行を習ひ、日月淨明德佛の法の中に於て、精進經行して一心に佛を求むること萬二千歳を滿じ已つて、現一切色身三昧を得。此の三昧を得已つて、心大に歡喜して、即ち念言を作さく、「我現一切色身三昧を得たる、皆是れ法華經を聞くことを得る力なり。我今當に日月淨明德佛及び法華經を供養すべし。即時に是の三昧に入りて、虚空の中に於て曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、細抹堅黒の梅檀を雨らし、虚空の中に滿てて雲の如くにして下し、又、海此岸の梅檀の香を雨らす。此の香の六鉢は價直婆娑世界なり、以一佛に供養す。是の供養を作し已つて、三昧より起つて、自ら念言すらく、「我神力を以て佛を供養すと雖も、身を以て供養せんには如何じ。」即ち諸の香、梅檀、薰陸、兜樓婆、畢力迦、沈水、膠香を服し、又瞻蔔、諸の華香油を飲むこと千二百歳を滿じ已つて、香油を身に塗り、日月淨明德佛の前に於て、天の寶衣を以て自ら身に纏ひ已つて、諸の香油を灑ぎ、神通力の願を以て自ら身を然して、光明徧く八十億

- 【四】 一切衆生意見。正法華に衆生意見に作る（尼波羅本 Sarvatalpinipudankam）
- 【五】 海此岸。須彌山の内海の南岸を海此岸と云ふ。この處の香を海此岸と名づくるなり。
- 【六】 六鉢。二十四鉢を一兩と爲す。故に六鉢は一兩の四分の一の量なり。
- 【七】 薰陸 (Kundurū)。樹の名なり。南印度の界阿吒釐國に産するものを西香と云ひ、大食國の南に産するものを乳香と稱すと。樹の脂の香なり。委くは新註の冠註を看るべし。
- 【八】 兜樓婆 (Turūṣka)。蘇合香なり。或は藿香と云ひ、或は白茅香なりと云ふ。
- 【九】 畢力迦 (Pīlaka)。丁香なり、或は收宿なりと云ふ。
- 【一〇】 膠香 (Gāṅḍaka)。即ち白

恒河沙の世界を照す。其の中の諸佛、同時に讚めて言はく、「善哉善哉、善男子、是れ眞の精進なり。是れを眞の法をもつて如來を供養すと名づく。若し華、香、瓔珞、燒香、抹香、塗香、天繒、旛蓋及び海此岸の栴檀の香、是の如き等の種種の諸物を以て供養すとも及ぶこと能はざる所なり。假使國城妻子をもつて布施すとも亦及ばざる所なり。善男子、是れを第一の施と名づく。諸の施の中に於て最尊最上なり。法を以て諸の如來を供養するが故に」と。是の語を作し已つて各默然したまふ。其の身の火然ゆること千二百歳、是れを過ぎて已後其の身乃ち盡きぬ。一切衆生慈見菩薩是の如き法の供養を作し已つて、命終の後に、復日月淨明德佛の國の中に生じて、坐して忽然に化生し、即ち其の父の爲に而も偈を説いて言さく、

「大王今當に知るべし、我れ彼の處に經行して、即時に一切、現諸身三昧を得、

大精進を勤行して、所愛の身を捨てにき。」

是の偈を説き已つて、父に白して言さく、「日月淨明德佛今故は現に在す。我先に佛を供養し已つて解一切衆生語言陀羅尼を得、復是の法華經の八百千萬億那由佗、甄迦羅、頻伽羅、阿閼婆等の偈を聞けり。大王、我今當に還つて此の佛を供養すべし」と。白し已つて即ち七寶の臺に坐し、

膠香なり。委しくは新註を看るべし。

【二】淨徳王。正法華には離垢施國王に作る。(尼波羅本マラダツタ mularata)

【三】甄迦羅。又は捨羯羅(ニカラ)俱舍五十二數の十、百、千、萬、億、兆、京、秬、垓、壤、溝、澗、正、載の十五を超えたる第十六の數也。一説には千の千萬億なりと云ふ。

【三】頻伽羅。又は頻伽羅(ビ)

虛空に上昇ること高さ七多羅樹にして、佛所に往到し、頭面に足を禮し、十の指爪を合せて、偈を以て佛を讚めたてまつる。

「容顏甚だ奇妙にして、光明十方を照したまふ。我適昔供養し、今復還つて親觀したてまつる。」

爾の時に一切衆生意見菩薩是の偈を説き已つて、佛に白して言さく、「世尊、世尊甚故世に在す。爾の時に日月淨明德佛、一切衆生意見菩薩に告げたまはく、「善男子、我涅槃の時に滅盡の時至りぬ。汝牀座を安施す可し。我今夜に於て當に般涅槃すべし。又一切衆生意見菩薩に救したまはく、「善男子、我佛法を以て汝に囑累す。及び諸の菩薩大弟子并に阿耨多羅三藐三菩提の法、亦三千大千の七寶の世界、諸の寶樹、寶臺、及び給侍の諸天を以て悉く汝に付す。我が滅度の後、所有の舍利亦汝に付囑す。當に流布せしめて廣く供養を設くべし。應に若干千の塔を起つべし。是の如く日月淨明德佛、一切衆生意見菩薩に救し已つて、夜の後分に於て涅槃に入りたまひぬ。爾の時に一切衆生意見菩薩、佛の滅度を見て、悲感懊惱して佛を戀慕したてまつり、即ち海此岸の梅檀を以て積と爲して、佛身を供養して以て之を焼きたてまつる。火滅えて已後舍利を收取し、八萬四千の寶瓶を作つて、以て八萬四千の塔を起つること三世界より高く、表刹莊嚴して諸の旛蓋を垂れ、衆の寶鈴を懸けたり。爾の時に一切衆生意見菩薩、復自ら念言すらく、「我是の供養を作すと雖も心猶は

ムベラ
Mithra)。俱舍五十二數の第十八の數なり。一説に百千の千萬億なりと云ふ。

【四】阿闍婆 又は阿闍婆 (Akṣobhya)。俱舍五十二數の第二十數なり。一説には萬千の千萬億なりと云ふ。

未だ足らず。我今當に更舍利を供養すべし。便ち諸の菩薩大弟子及び天、龍、夜叉等一切の大衆に告ぐ、汝等當に一心に念ずべし、我今日月淨明德佛の舍利を供養せん」と。是の語を作し已つて、即ち八萬四千の塔の前に於て、百福莊嚴の臂を然すこと七萬二千歳にして以て供養す。無數の聲聞を求むる衆、無量阿僧祇の人をして、阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしめ、皆現一切色身三昧に住することを得せしむ。爾の時に諸の菩薩、天、人、阿修羅等、其の臂無きを見て、憂惱悲哀して是の言を作さく、「此の一切衆生意見菩薩は是れ我等が師、我を教化したまふ者なり。而るに今臂を焼いて身具足したまはず。時に一切衆生意見菩薩、大衆の中に於て此の誓言を立つ、我兩つの臂を捨てて必ず當に佛の金色の身を得べし。若し實にして虚しからずんば、我が兩つの臂をして還復すること故の如くならしめん。是の誓を作し已つて自然に還復しぬ。斯の菩薩の福德、智慧の淳厚なるに由つて致す所なり。爾の時に當つて三千大千世界六種に震動し、天より寶華を雨らして、一切の天人、未曾有なることを得たり。佛、宿王華菩薩に告げたまはく、『汝が意に於て云何。一切衆生意見菩薩は豈に異人ならんや、今の藥王菩薩は是れなり。其の身を捨て布施する所、是の如く無量百千萬億那由佗數なり。宿王華、若し發心して阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲すること有らん者は、能く手の指、乃至足の一指を然して佛塔に供養せよ。國城、妻子及び三千大千國土の山林、河池、

【五】百福莊嚴。三十二相を云ふ、一一の相好は各百福を修して種うるが故なり。百福とは大千の盲人を愈すを一の福と爲すと云へり。有らゆる一切の福事善根を稱して云ふなり。

諸の珍寶物を以て供養せん者に勝らん。若し復人有つて、七寶を以て三千大千世界に満てて、佛及び大菩薩、辟支佛、阿羅漢に供養せん。是の人の所得の功德も、此の法華經の乃至一四句偈を受持する、其の福の最も多きには如かじ。宿王華、(二六)譬へば一切の川流江河の諸水の中に、海爲れ第一なるが如く、此の法華經も亦復是の如し。諸の如來の所説の經の中に於て最も爲れ深大なり。又(二七)土山、(二八)黒山、(二九)小鐵圍山、(三〇)大鐵圍山及び(三一)十寶山の衆山の中に、須彌山爲れ第一なるが如く、此の法華經も亦復是の如し。諸經の中に於て最も爲れ其の上なり。又衆星の中に、月天子最も爲れ第一なるが如く、此の法華經も亦復是の如し。千萬億種の諸の經法の中に於て最も爲れ照明なり。又日天子の能く諸の闇を除くが如く、此の經も亦復是の如し。能く一切不善の闇を破す。又諸の小王の中に、轉輪聖王最も爲れ第一なるが如く、此の經も亦復是の如し。衆經の中に於て最も爲れ其の尊なり。又帝釋の三天の中に於て王なるが如く、此の經も亦復是の如し。諸經の中の王なり。又大梵天王の一切衆生の父なるが如く、此の經も亦復是の如し。一切の賢聖、學、無學及び菩薩の心を發す者の父なり、又一切の凡夫人の中に、須

【二六】譬へば、以下藥王品の十喻と云ふ。即ち大海、須彌、月天子、轉輪聖王、帝釋、大梵天王、四果、支佛、菩薩、佛の十喻なり。

【二七】土山。土石の諸山を云ふ。

【二八】黒山。南閻浮提の中央より北方に三重の黒山ありと云ふ。

【二九】小鐵圍山。小千界を繞るを小鐵圍山と云ふ。

【三〇】大鐵圍山。中千大千界を繞るを大鐵圍山と云ふ。

【三一】十寶山。晉譯華嚴卷二十八に十寶山の名を列ねて雪山、香山、轉輪羅山、仙聖山、由乾陀山、馬耳山、尼民陀羅山、新逝羅山、宿慧山、須彌山とあり。

陀洹たごん、斯陀含しだこん、阿那含あなこん、阿羅漢あらかん、辟支佛びやくしぶつ爲れ第一だいいちなるが如く、此この經きやうも亦復是またまたかくの如し。一切いっさいの如來にょらいの所說しよせつ、若しは菩薩ぼつぼつの所說しよせつ、若しは聲聞しやうもんの所說しよせつ、諸もろもろの經法きやうほふの中に最も爲れ第一だいいちなり。能く是この經典きやうでんを受持じゆすること有らん者ものも亦復是またまたかくの如し。一切衆生いっさいしゆじやうの中に於て亦爲れ第一だいいちなり。一切いっさいの聲聞しやうもん、辟支佛びやくしぶつの中に、菩薩ぼつぼつ爲れ第一だいいちなり。此この經きやうも亦復是またまたかくの如し。一切いっさいの諸もろもろの經法きやうほふの中に於て最も爲れ第一だいいちなり。佛ほとけは爲れ諸法しよほふの王わうなるが如く、此この經きやうも亦復是またまたかくの如し。諸經しよきやうの中の王わうなり。宿王華しゆくわげ、此この經きやうは能く一切衆生いっさいしゆじやうを救すくひたまふ者ものなり。此この經きやうは能く一切衆生いっさいしゆじやうをして諸もろもろの苦惱くなうを離はなしめたまふ。此この經きやうは能く大おほまに一切衆生いっさいしゆじやうを饒益ねうやくして、其その願ねがひを充滿じゆうまんせしめたまふ。清涼しやうりやうの池いけの能く一切いっさいの諸もろもろの渴乏かつぱふの者ものに滿みつるが如く、寒さむき者ものの火ひを得えたるが如く、裸はだかなる者ものの衣ころもを得えたるが如く、商人しやうにんの主しゆを得えたるが如く、子この母ははを得えたるが如く、渡わたり船ふねを得えたるが如く、病やまひに醫いを得えたるが如く、暗やみに燈ともしびを得えたるが如く、貧まつしきに寶たからを得えたるが如く、民たみの王わうを得えたるが如く、賈客こかくの海うみを得えたるが如く、炬こもの暗くらを除のぞくが如く、此この法華ほふけ經きやうも亦復是またまたかくの如し。能く衆生しゆじやうをして一切いっさいの苦く、一切いっさいの病痛びやうつうを離はなれ、能く一切いっさいの生死しやうじの縛はくを解とかしめたまふ。若し人ひと此この法華經ほふけきやうを聞きくことを得えて、若しは自らみづかも書かき、若しは人ひとをしても書かかしめん。所得しよとくの功德くどくは、佛ほとけの智慧ちゑを以もつて多少たせうを籌量ちゆうりやうすとも其その邊へを得えじ。若し是この經卷きやうくわんを書かいて華け、香かう、瓔珞やうらく、燒香せうかう、抹香まつかう、塗香づかう、麝香せうかう、麝蓋せうがい、衣服えぶく、種種しゆしゆの燈とう、蘇燈そとう、油燈うとう、諸もろもろの香油燈かうゆとう、瞻蔔油燈せんぷくとう、須曼那油燈しゆまんなとう、波羅羅油燈はららとう、婆利師迦油燈ぱりしかとう、

【三】 瞻蔔油燈等。瞻蔔 (ヤム)

羅 (Rohita)、波羅 (Pala)

須曼那 (Sumanā)、波羅 (Pala)

那婆摩利油燈をもつて供養せん。所得の功德亦復無量ならん。宿王華、若

し人有つて、是の藥王菩薩本事品を聞かん者は、亦無量無邊の功德を得ん。

若し女人有つて、是の藥王菩薩本事品を聞いて能く受持せん者は、是の女

身を盡くして後に復受けじ。若し如來の滅後、後の五百歳の中に、若し女

人有つて、是の經典を聞いて説の如く修行せば、此に於て命終して、即ち

安樂世界の、阿彌陀佛の大菩薩衆の圍繞せる往處に往いて、蓮華の中

の寶座の上を生ぜん。復貪欲に惱されじ。亦復瞋恚、愚癡に惱されじ。亦

復憍慢、嫉妒、諸垢に惱されじ。菩薩の神通、無生法忍を得ん。是の忍を

得已つて眼根清淨ならん。是の清淨の眼根を以て、七百萬二千億那由陀

恒河沙等の諸佛如來を見たてまつらん。是の時に諸佛、遙に共に讚めて言

はん、善哉善哉、善男子、汝能く釋迦牟尼佛の法の中に於て、是の經を受

持し、讀誦し、思惟し、他人の爲に説けり。所得の福德無量無邊なり。火

も焼くこと能はず、水も漂はずこと能はず、汝の功德は、千佛共に説きた

まふとも、盡くさしむること能はず。汝今已に能く諸の魔賊を破し、生死

の軍を壊し、諸餘の怨敵皆悉く摧滅せり。善男子、百千の諸佛、神通力

【一】、那婆摩利(Nāgavāri)カ、

皆香華の名なり、瞻蔔は黄色

華と翻じ、須曼那は悦意華と

翻じ、波羅羅は重生華と翻じ、

波利師迦は夏生華、又は雨華

と翻じ、那婆摩利は雜華と

翻す、又那婆と摩利と二種に

分つ説もあり、此等の香華を

以て製したる油燈なり。

【三】後の五百歳、釋尊の滅後

に五箇の五百歳あり、第一の

五百年は彌陀堅固、第二の五

百歳は禪定堅固、第三の五百

歳は讀誦堅固、第四の五百歳

は多造塔寺堅固、第五の五百

歳は白法隱沒闍諍堅固、第一

第二は正法一千年、第三第四

は像法一千年、第五は末法一

萬年の始なり。今その最後の

第五の五百歳即ち末法を指し

て後の五百歳と云ふなり。

【四】安樂世界、正法華には安

樂園に作る、尼波羅本(ニボロ)

を以て共に汝を守護したまふ。一切世間の天、人の中に於て汝に如く者無し。唯如來を除いて、其の諸の聲聞、辟支佛、乃至菩薩の智慧、禪定も、汝と等しき者有ること無けん」と。宿王華、此の菩薩は是の如き功德、智慧の力を成就せり。若し人有つて是の藥王菩薩本品を聞いて、能く隨喜して善しと讚めば、是の人現世に口の中より常に青蓮華の香を出し、身の毛孔の中より常に牛頭栴檀の香を出さん。所得の功德上に説く所の如し。是の故に宿王華、此の藥王菩薩本品を以て汝に囑累す。我が滅度の後、後の五百歳の中、閻浮提に廣宣流布して、斷絶して惡魔、魔民、諸の天、龍、夜叉、鳩槃荼等に其の便を得せしむること無かれ。宿王華、汝當に神通の力を以て是の經を守護すべし。所以は何。此の經は則ち爲れ閻浮提の人の病の良藥なり。若し人病有らんに、是の經を聞くことを得ば、病即ち消滅して不老不死ならん。宿王華、汝若し是の經を受持すること有らん者を見ては、應に青蓮華を以て抹香を盛り滿てて、其の上にお供散すべし。散じ已つて是の念言を作すべし。此の人久しからずして、必ず當に草を取つて道場に坐して諸の魔軍を破すべし。當に法の螺を吹き、大法の鼓を撃つて、

【アチ
1111】

【五】阿彌陀佛。正法華には無量壽佛に作る。(尼波羅本 Amitayus)。この佛因位に法藏比丘として世自在佛の所に於て四十八願を發し、五劫思惟兆載修行の後成佛して西方安樂世界に在り、善く名號を稱する念佛の衆生を攝取すとは法華已前四十餘年の權説也。若し法華に説くが如んば三千塵點劫の過去久遠大通智勝佛の十六王子の一人にして、法華を聞いて始めて得道成佛したるなり。化城喻品を看るべし。故に今彼の世界に往生するもこの法華を聞いて説の如く修行するの報果なり、稱名念佛に關からず。

【六】原文 此經則爲閻浮提人病之良藥、若人有病、得聞是經、病即消滅、不老不死。

一切衆生の老、病、死の海を度脱すべしと。是の故に佛道を求めん者、是の經典を受持すること有らん人を見ては、應當に是の如く恭敬の心を生ずべし。』是の藥王菩薩本品を説きたまふ時、八萬四千の菩薩、解一切衆生語言陀羅尼を得たり。多寶如來寶塔の中に於て、宿王華菩薩を讚めて言はく、善哉善哉、宿王華、汝不可思議の功德を成就して、乃し能く釋迦牟尼佛に此の如きの事を問ひたてまつりて、無量の一切衆生を利益す。』

施菩薩、宿王華菩薩、上行意菩薩、莊嚴王菩薩、藥王菩薩を見るべし。爾の時に淨華宿王智佛、妙音菩薩に告げたまはく、「汝彼の國を輕しめて下劣の想を生ずること莫かれ。善男子、彼の娑婆世界は高下不平にして、土石、諸山、穢惡充滿せり。佛身卑小にして、諸の菩薩衆も其の形亦小なり。而るに汝が身は四萬二千由旬、我が身は六百八十萬由旬なり。汝が身は第一端正にして、百千萬の福あつて光明殊妙なり。是の故に汝往いて彼の國を輕しめて若しは佛菩薩及び國土に下劣の想を生ずること莫かれ。」妙音菩薩、其の佛に白して言さく、「世尊、我今娑婆世界に詣らんこと、皆是れ如來の力、如來の神通遊戲、如來の功德智慧莊嚴ならん。」是に於て妙音菩薩、座を起たす身動搖せずして三昧に入り、三昧力を以て耆闍崛山に於て法座を去ること遠からずして、八萬四千の衆寶の蓮華を化作せり。閻浮檀金を莖と爲し、白銀を葉と爲し、金剛を鬚と爲し、甄叔迦寶を以て其の臺と爲せり。爾の時に文殊師利法王子、是の蓮華を見て、佛に白して言さく、「世尊、是れ何の因縁あつてか先づ此の瑞を現せる。若干千萬の蓮華有つて、閻浮檀金を莖と爲し、白銀を葉と爲し、金剛を鬚と爲し、甄叔迦寶を以て其の臺と爲せり。」爾の時に釋迦牟尼佛、文殊師利に告げたまはく、「是れ妙音菩薩摩訶薩、淨華宿王智佛の國より、八萬四千の菩薩の圍繞せると與に、而も此の娑婆世界に來至して、我を供養し親近し禮拜せんと欲し、亦法華經を供養し聽きたてまつらんと欲せるなり。」文殊師利、佛に白して

【四】甄叔迦（キムシユカ）の本は樹の名なり、其の華の色赤好なるを以て亦寶に名く、この寶その華の色に似るが故なりと云ふ。

言さく、世尊、是の菩薩は何なる善本を種る何なる功德を修してか能く是の大神通力ある。何なる三昧を行ずる。願はくは我等が爲に是の三昧の名字を説きたまへ、我等亦之を勤め修行せんと欲す。此の三昧を行じて、乃ち能く是の菩薩の色相の大小、威儀、進止を見ん。唯願はくは世尊、神通力を以て、彼の菩薩の來らんに、我をして見んことを得せしめたまへ。爾の時に釋迦牟尼佛、文殊師利に告げたまはく、『此の久滅度の多寶如來、當に汝等が爲に而も其の相を現じたまふべし。』時に多寶佛、彼の菩薩に告げたまはく、『善男子來れ、文殊師利法王子汝が身を見んと欲す。』時に妙音菩薩、彼の國に於て没して、八萬四千の菩薩と俱に共に發來す。所經の諸國六種に震動して、皆悉く七寶の蓮華を雨らし、百千の天樂鼓せざるに自ら鳴る。是の菩薩の目は廣大の青蓮華の葉の如し。正使百千萬の月を和合せりとも、其の面貌端正なること復此れに過ぎんや。身は眞金の色にして、無量百千の功德莊嚴せり。威徳熾盛にして、光明照耀し、諸相具足して、那羅延の堅固の身の如し。七寶の臺に入つて虚空に上昇り、地を去ること七多羅樹、諸の菩薩衆恭敬し圍繞して、此の娑婆世界の耆闍崛山に來詣す。到り已つて七寶の臺を下り、價直百千の瓔珞を以て、持つて釋迦牟尼佛の所に至り、頭面に足を禮し、瓔珞を奉上して、佛に白して言さく、『世尊、淨華宿王智佛、世尊を問訊したまふ。』少病少惱起居輕利にして安樂に行じたまふや

【五】那羅延。具さには那羅延
 ナイライヤナ
 那 (Nairayana)。堅固と翻じ、
 堅牢と翻じ、人生本と翻じ、
 人種神と翻す。毘紐天の異名
 なり。多力を得んと欲する者
 はこの天に祈る。力量七十象
 に倍すと云ふ。又世界の風輪
 を持つるの力ありとも云ふ。

不いなや。四大調和しだいてうわなりや不いなや。世事せじは忍しのびつ可べしや不いなや。衆生しゆじやうは度たし易やすしや不いなや。貪欲とんよく、瞋恚しんに、愚癡ぐち、嫉妬しやくと、慳慢けんまん多おほきこと無なしや不いなや。父母ふぼに孝けうせず。沙門しゃもんを敬うやはず、邪見じけんなること無なしや不いなや。善心ぜんしんなりや不いなや。五情ごじやうを攝あむるや不いなや。世尊せそん、衆生しゆじやうは能ちく諸しよの魔怨まをんを降かう伏ふくするや不いなや。久滅度くくつどの多寶如來たはうにらいは七寶塔しちほうたふの中に在まして來きたつて法ほふを聽ききたまふや不いなや。又多寶如來またたはうにらいを問訊もんじんしたまふ。安穩あんゑん少惱せうなうにして堪忍かんにんし久住くぢゆうしたまふや不いなや。世尊せそん、我今われいま多寶佛たはうぶつの身みを見みたてまつらんと欲ほつす。唯ただ願ねがはくは世尊せそん、我われに示しめして見みせしめたまへ。爾その時ときに釋迦牟尼佛しやくかむにぶつ、多寶佛たはうぶつに語かたりたまはく、『是こゝの妙音菩薩めうおんはつさつ相見あひみたてまつることを得えんと欲ほつす。』時ときに多寶佛たはうぶつ、佛ぶつ、妙音めうおんに告つげて言のたまはく、『善哉善哉ぜんざいぜんざい、汝能なんぢよく釋迦牟尼佛しやくかむにぶつを供養くやうし、及び法華經ほふけやうを聽きき、并ならびに文殊師利等もんじゆしりとうを見みんが爲ための故ゆゑに此こゝに來き至しせり。』爾その時ときに華德菩薩けたくはつさつ、佛ぶつに白まをして言まをさく、『世尊せそん、是こゝの妙音菩薩めうおんはつさつは、何いかなる善根ぜんこんを種うゑ何いかなる功德くどくを修しゆしてか是こゝの神力じんりきある。』佛ぶつ、華德菩薩けたくはつさつに告つげたまはく、『過去くわこに佛ぶつ有ありき、雲雷音王うんらいおんのう、多陀阿伽度ただあかぜ、阿羅訶あらか、三藐三佛陀さんみやくさんぶつだと名なづけたてまつる。國くにを現げん一切世間いつせけんと名なづけ、劫くわつを喜見ぎけんと名なづけ、妙音菩薩めうおんはつさつ萬二千歲まんにせんさいに於おて、十萬種じゆばんしゆの伎樂ぎがくを以もつて雲雷音王佛うんらいおんのうぶつに供養くやうし、并ならびに八萬四千はちまんしせんの七寶しちほうの鉢はつを奉お上うす。是こゝの因緣いんねんの果報くわはうを以もつて、今淨華宿王智佛いまじやうけしやくわうぢぶつの國くにに生しやうじて、是こゝの神力じんりき有あり。華德けたくはつ、汝なんぢが意いに於おて云何いかな。爾その時ときの雲雷音王佛うんらいおんのうぶつの所みちに

【六】 華德。正法華には蓮華首菩薩に作る。(尼波羅本 P. 141-142) マスリー (M. 151)

【七】 雲雷音王。正法華之に同じ。(尼波羅本 Megasthenes, P. 141, 142) マスリー

【八】 現一切世間。正法華に國名無し。(尼波羅本 Devavali, P. 141, 142) マスリー

【九】 喜見。正法華に劫名無し。(尼波羅本 P. 141, 142) マスリー

妙音菩薩として伎樂をもつて供養し、寶器を奉上せし者、豈に異人ならんや、今此の妙音菩薩摩訶薩
是れなり。華徳、是の妙音菩薩は已に曾て無量の諸佛に供養し親近して、久しく徳本を植ゑ、又恒河
沙等の百千萬億那由陀の佛に値ひたてまつる。華徳、汝但妙音菩薩其の身此に在りとのみ見る。しか
に是の菩薩は種種の身を現じて、處處に諸の衆生の爲に是の經典を説く。或は梵王の身を現じ、或は
帝釋の身を現じ、或は自在天の身を現じ、或は大自在天の身を現じ、或は天大將軍の身を現じ、或は
毘沙門天王の身を現じ、或は轉輪聖王の身を現じ、或は諸の小王の身を現じ、或は長者の身を現じ、
或は居士の身を現じ、或は宰官の身を現じ、或は婆羅門の身を現じ、或は比丘、比丘尼、優婆塞、優
婆夷の身を現じ、或は長者居士の婦女の身を現じ、或は宰官の婦女の身を現じ、或は婆羅門の婦女の
身を現じ、或は童男、童女の身を現じ、或は天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺
羅伽、人、非人等の身を現じて是の經を説く。諸有の地獄、餓鬼、畜生及び衆の難處皆能く救濟す。
乃至王の後宮に於ては、變じて女身と爲つて是の經を説く。華徳、是の妙音菩薩は、能く娑婆世界の
諸の衆生を救護する者なり。是の妙音菩薩は是の如く種種に變化し身を現じて、是の娑婆國土に在
つて諸の衆生の爲に是の經典を説く。神通、變化、智慧に於て損減する所無し。是の菩薩は若干の智慧
を以て明かに娑婆世界を照して、一切衆生をして各所知を得せしむ。十方恒河沙の世界の中に於ても
亦復是の如し。若し聲聞の形を以て得度すべき者には、聲聞の形を現じて爲に法を説き、辟支佛の形

を以て得度すべき者には、辟支佛の形を現じて爲に法を説き、菩薩の形を以て得度すべき者には、菩薩の形を現じて爲に法を説き、佛の形を以て得度すべき者には、即ち佛の形を現じて爲に法を説く。是の如く種種に度すべき所の者に隨つて爲に形を現す。乃至滅度を以て得度すべき者には滅度を示現す。華德、妙音菩薩摩訶薩は大神通、智慧の力を成就せること、其の事は是の如し。爾の時に華德菩薩、佛に白して言さく、「世尊、是の妙音菩薩は深く善根を植ゑたり。世尊、是の菩薩何なる三昧に住してか、能く是の如く在所に變現して衆生を度脱する。」佛、華德菩薩に告げたまはく、「善男子、其の三昧を現一切色身と名づく。妙音菩薩是の三昧の中に住して、能く是の如く無量の衆生を饒益す。」是の妙音菩薩品を説きたまふ時、妙音菩薩と俱に来れる者八萬四千人皆現一切色身三昧を得。是の娑婆世界の無量の菩薩亦是の三昧及び陀羅尼を得たり。爾の時に妙音菩薩摩訶薩、釋迦牟尼佛及び多寶佛塔を供養し已つて本土に還歸す。所經の諸國六種に震動して、寶蓮華を雨らし、百千萬億の種種の伎樂を作す。既に本國に到つて、八萬四千の菩薩の圍繞せると與に、淨華宿王智佛の所に至つて、佛に白して言さく、「世尊、我娑婆世界に到つて衆生を饒益し、釋迦牟尼佛を見たまつり、及び多寶佛塔を見たまつりて禮拜供養し、又文殊師利法王子菩薩を見、及び藥王菩薩、得勤精進力菩薩、勇施菩薩等を見る。亦是の八萬四千の菩薩をして現一切色身三昧を得せしむ。」是の妙音菩薩來往品を説きたまふ時、四萬二千の天子無生法忍を得、華德菩薩法華三昧を得たり。

卷の第八

觀世音菩薩普門品第二十五

爾の時に 無盡意菩薩、即ち座より起つて、偏に右の肩を袒にし、合掌し、佛に向ひたてまつりて、
 是の言を作さく、『世尊、
 觀世音菩薩は何の因縁を以てか觀世音と名づくる。』佛、無盡意菩薩に告げ
 たまはく、『善男子、若し無量百千萬億の衆生有つて、諸の苦惱を受けんに、是の觀世音菩薩を聞いて
 一心に名を稱せば、觀世音菩薩即時に其の音聲を觀じて、皆解脱することを得せしめん。若し是の觀
 世音菩薩の名を持つこと有らん者は、設ひ大火に入るとも火も焼くこと能はじ。是の菩薩の威神力に
 由るが故に。若し大水に漂はされんに、其の名號を稱せば即ち淺き處を得ん。若し百千萬億の衆生有
 つて金、銀、瑠璃、砗磲、瑪瑙、珊瑚、琥珀、眞珠等の寶を求むるを爲つ
 て大海に入らんに、假使 黒風其の船舫を吹いて 羅刹鬼の國に飄墮せ
 ん。其の中に若し乃至一人有つて觀世音菩薩の名を稱せば、是の諸人等皆
 羅刹の難を解脱することを得ん。是の因縁を以て觀世音と名づく。若し復
 人有つて當に害せらるべきに臨んで觀世音菩薩の名を稱せば、彼の執れる

【一】 無盡意。正法華之に同
 じ。尼波羅本ニ云ヤマヤチ。東
 方不向國の普賢佛の菩薩に
 の無盡意あること無盡意經に
 云へるが如し。
 【二】 觀世音菩薩。正法華は光
 世音に作る。梵名は序品の註

し、若し女人有つて設ひ男を求めんと欲して、觀世音菩薩を禮拜し供養せば、便ち福德智慧の男を生まん。設ひ女を求めんと欲せば、便ち端正有相の女の宿徳本を植ゑて衆人に愛敬せらるるを生まん。無盡意、觀世音菩薩は是の如き力有り。若し衆生有つて觀世音菩薩を恭敬禮拜せば、福唐捐ならじ。是の故に衆生皆觀世音菩薩の名號を受持すべし。無盡意、若し人有つて六十二億恒河沙の菩薩の名字を受持し、復形を盡くすまで飲食、衣服、臥具、醫藥を供養せん、汝が意に於て云何、是の善男子、善女人の功德多しや不や。』無盡意の言さく、『甚だ多し、世尊。』佛の言はく、『若し復人有つて觀世音菩薩の名號を受持し、乃至一時も禮拜し供養せん。是の二人の福、正等にして異なること無けん。百千萬億劫に於ても窮め盡くす可からず。無盡意、觀世音菩薩の名號を受持せば、是の如き無量無邊の福德の利を得ん。』無盡意菩薩、佛に白して言さく、『世尊、觀世音菩薩は云何してか此の娑婆世界に遊び、云何してか衆生の爲に法を説く。方便の力、其の事云何。』佛、無盡意菩薩に告げたまはく、『善男子、若し國土の衆生有つて佛身を以て得度すべき者には、觀世音菩薩即ち佛身を現じて爲に法を説き、辟支佛の身を以て得度すべき者には、即ち辟支佛の身を現じて爲に法を説き、聲聞の身を以て得度すべき者には、即ち聲聞の身を現じて爲に法を説き、梵王の身を以て得度すべき者には、即ち梵王の身を現じて爲に法を説き、帝釋の身を以て得度すべき者には、即ち帝釋の身を現じて爲に法を説き、自在天の身を以て得度すべき者には、即ち自在天の身を現じて爲に法を説き、大自在天の身を以て得度

すべき者には、即ち自在天の身を現じて爲に法を説き、天大將軍の身を以て得度すべき者には、即ち天大將軍の身を現じて爲に法を説き、毘沙門の身を以て得度すべき者には、即ち毘沙門の身を現じて爲に法を説き、小玉の身を以て得度すべき者には、即ち小玉の身を現じて爲に法を説き、長者の身を以て得度すべき者には、即ち長者の身を現じて爲に法を説き、居士の身を以て得度すべき者には、即ち居士の身を現じて爲に法を説き、婆羅門の身を以て得度すべき者には、即ち婆羅門の身を現じて爲に法を説き、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の身を以て得度すべき者には、即ち比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の身を現じて爲に法を説き、長者、居士、宰官、婆羅門の婦女の身を以て得度すべき者には、即ち婦女の身を現じて爲に法を説き、童男、童女の身を以て得度すべき者には、即ち童男、童女の身を現じて爲に法を説き、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の身を以て得度すべき者には、即ち皆之を現じて爲に法を説き、執金剛神を以て得度すべき者には、即ち執金剛神を現じて爲に法を説く。無盡意、是の觀世音菩薩は是の如き功徳を成就して、種種の形を以て諸の國土に遊んで衆生を度脱す。是の故に汝等應當に一心に觀世音菩薩を供養すべし。是の觀世音菩薩摩訶薩は怖畏急難の中に於て能く無畏を施す。是の故に此の娑婆世界に皆之を號して

【六】執金剛神。梵者は跋闍羅波膩、(Vajrapāṇi) 金剛手と翻す、手に金剛杵を執るを以て名づく。靈形神とも云ふ。力士なり。佛の左右にこの五百の執金剛神あつて侍衛するなり。

施無畏者と爲す。』無盡意菩薩、佛に白して言さく、『世尊、我今當に觀世音菩薩を供養すべし。即ち
 頭の衆寶珠の瓔珞の價直百千兩金なるを解いて以て之を與へて、是の言を作さく、『仁者、是の法施
 の珍寶の瓔珞を受けたまへ。』時に觀世音菩薩肯て之を受けず。無盡意、復觀世音菩薩に白して言さ
 く、『仁者、我等を愍むが故に此の瓔珞を受けたまへ。』爾の時に佛、觀世音菩薩に告げたまはく、『當に
 此の無盡意菩薩、及び四衆、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人
 等を愍むが故に是の瓔珞を受くべし。』即時に觀世音菩薩、諸の四衆、及び天、龍、人、非人等を愍ん
 で其の瓔珞を受け、分つて二分と作して、一分は釋迦牟尼佛に奉り、一分
 は多寶佛塔に奉る。』無盡意、觀世音菩薩は是の如き自在神力有つて娑婆世
 界に遊ぶ。』爾の時に無盡意菩薩、偈を以て問うて曰さく、

『世尊は妙相具はりたまへり、我今重ねて彼を問ひたてまつる。』佛子

何の因縁あつてか、名づけて觀世音と爲る。』

妙相を具足したまへる尊、偈をもつて無盡意に答へたまはく、『汝觀音の行を聽け、善く諸の方
 所に應じて、

弘誓の深きこと海の如し、劫を歴とも思議せじ。多千億の佛に侍へて、大淸淨の願を發せり。
 我汝が爲に略して説かん、名を聞き及び身を見、心に念じて空しく過ぎざれば、能く諸有の苦を

【七】施無畏者は、Aparāhita 等の譯語なり。十四種の施無畏のこと大佛頂經に説く所の如し。

滅す。

假使害意を興して、大火坑に推し落されんに、彼の觀音の力を念せば、火坑變じて池と成らん。

或は巨海に漂流して、龍魚諸鬼の難あらんに、彼の觀音の力を念せば、波浪も没すること能はじ。

或は須彌の峯に在つて、人に推し墮されんに、彼の觀音の力を念せば、日の如くにして虚空に住

せん。

或は惡人に逐はれて、金剛山より墮落せんに、彼の觀音の力を念せば、一毛をも損すること能

はじ。

或は怨賊の繞んで、各刀を執つて害を加ふるに値はんに、彼の觀音の力を念せば、咸く即ち慈

心を起さん。

或は王難の苦に遭うて、刑せらるるに臨み壽終らんと欲せんに、彼の觀音の力を念せば、刀尋い

で段段に壞れなん。

或は枷鎖に囚禁せられ、手足に桎械を被らんに、彼の觀音の力を念せば、釋然として解脱するこ

とを得ん。

咒詛諸の毒藥に、身を害せんと欲せられん者、彼の觀音の力を念せば、還つて本人に著きなん。

或は惡羅刹、毒龍諸鬼等に遇はんに、彼の觀音の力を念せば、時に悉く敢て害せじ。

若しは惡獸圍繞して、利き牙爪の怖る可からんに、彼の觀音の力を念せば、疾く無邊の方に走りなん。

蚯蚓及び蝮蠍、氣毒煙火の然ゆるがごとくならんに、彼の觀音の力を念せば、聲に尋いで自ら回りに去らん。

雲雷鼓掣電し、雹を降らし大雨を澍がんに、彼の觀音の力を念せば、時に應じて消散することを大得ん。

衆生困厄を被つて、無量の苦身を逼めんに、觀音妙智の力、能く世間の苦を救はん。

神通力を具足し、廣く智の方便を修して、十方の諸の國土に、刹として身を現せざること無し。種種の諸の惡趣、地獄鬼畜生、生老病死の苦、以て漸く悉く滅せしむ。

眞觀清淨觀、廣大智慧觀、悲觀及び慈觀あり、常に願して常に瞻仰すべし。無垢清淨の光、慧日諸の闇を破し、能く災風火を伏して、普く明かに世間を照らす。

悲體の戒雷震のごとく、慈悲の妙大雲のごとく、甘露の法雨を澍ぎ、煩惱の骸を滅除す。諍訟して官處を經、軍陣の中に怖畏せんに、彼の觀音の力を念せば、衆の怨悉く退散せん。

妙音觀世音、梵音海潮音、勝彼世間音あり、是の故に須らく常に念すべし。念念に疑を生ずること勿れ、觀世音淨聖は、苦惱死厄に於て、能く爲に依怙と作れり。

一切の功德を具して、慈眼をもつて衆生を視る、福聚の海無量なり、
是の故に應に頂禮すべし。』

爾の時に 持地菩薩、即ち座より起つて、前んで佛に白して言さく、

『世尊、若し衆生有つて是の觀世音菩薩品の自在の業、普門示現、神通力を

聞かん者は、當に知るべし、是の人の功德は少からじ。』佛、是の普門品を説きたまふ時、衆中の八萬

四千の衆生、皆無等々の阿耨多羅三藐三菩提の心を發しき。

【八】 持地菩薩。正法華之に同じ。
波羅木 (Dharmajvan) (尼波羅木 Dharmajvan) じ。
【九】 無等等。極地の佛を指して無等と云ふ。無等の佛に等しきが故に無等等なり。

陀羅尼品第二十六

爾の時に藥王菩薩、即ち座より起つて偏へに右の肩を袒にし、合掌し、佛に向ひたてまつりて、佛に白して言さく、『世尊、若し善男子、善女人の能く法華經を受持すること有らん者、若しは讀誦し通利し、若しは經卷を書寫せんに、幾所の福をか得ん。』佛、藥王に告げたまはく、『若し善男子、善女人有つて、八百萬億那由他恒河沙等の諸佛を供養せん。汝が意に於て云何、其の所得の福寧ろ爲れ多しや不や。』甚だ多し、世尊。佛の言はく、『若し善男子、善女人能く是の經に於て、乃至一四句偈を受持し、讀誦し、解義し、説の如く修行せん、功德甚だ多し。』爾の時に藥王菩薩、佛に白して言さく、『世尊、我今當に説法者に』陀羅尼呪を與へて、以て之を守護すべし。』即ち呪を説いて曰く、

- ③安爾一 曼爾二 摩爾三 摩摩爾四 旨隸五
 遮梨弟六 除咩七 除履多瑋八 羶帝九 目帝
 十目多履十一 娑履十二 阿瑋娑履十三 桑履

【一】陀羅尼呪。陀羅尼の名義は序品の註を見るべし。呪は四陀羅尼の一にして之に四あり。一には治病、二には滅罪、三には護經、四には般若、今この品の咒は護經咒なり。呪は支那の言にして願の義、咒の義なり、梵華兼稱して陀羅尼呪と云ふ、即ち密語なり。密語の故に古來多く陀羅尼呪を翻せず。但正法華は今品の呪を譯せり。

【二】安爾等。

- 安爾。(正法華)奇異、(尼波羅本) Anye
 曼爾。(正法華)所思、(尼波羅本) Manye
 摩爾。(正法華)意念、(尼波羅本) Mane
 摩摩爾。(正法華)無意、(尼波羅本) Mame
 旨隸。(正法華)永久、(尼波羅本) Chite
 遮梨弟
 除咩
 除履多瑋
 羶帝
 目帝

十四 娑履 十五 叉裔 十六 阿叉裔 十七 阿耆賦
 十八 犢帝 十九 除履 二十 陀羅尼 二十一 阿盧
 伽婆娑簸蔗毘 又賦 二十二 禰毘刺 二十三 阿便
 哆邏禰履刺 二十四 阿寔哆波隸輸地 二十五 歐
 究隸 二十六 牟究隸 二十七 阿羅隸 二十八 波羅
 隸 二十九 首迦差 三十 阿三磨三履 三十一 佛馱
 毘吉利表帝 三十二 達磨波利差帝 三十三 僧伽
 涅瞿沙彌 三十四 婆舍婆舍輸地 三十五 曼哆邏
 三十六 曼哆羅 又夜多 三十七 郵樓哆 三十八 郵
 樓哆憍舍羅 三十九 惡叉邏 四十 惡叉治多治
 四十一 阿婆盧 四十二 阿摩若那多夜 四十三』
 『世尊、是の陀羅尼神咒は、六十二億恒河沙等の
 諸佛の所説なり。若し此の法師を侵毀すること
 有らん者は、則ち爲れ是の諸佛を侵毀し已れる
 なり。』時に釋迦牟尼佛、藥王菩薩を讚めて言は

迦樂弟。(正法華)所行奉修、
 (尼波羅本) Carite
 除咩。(正法華)寂然、(尼波羅
 本) Same
 除履多璫。(正法華)澹泊、(尼
 波羅本) Samita
 犢帝。(正法華)志獸、(尼波羅
 本) Visante
 目帝。(正法華)解脫、(尼波羅
 本) Muktā
 目多履。(正法華)濟度、(尼波
 羅本) Mukṭāme
 娑履。(正法華)平等、(尼波羅
 本) Sama
 阿瑋娑履。(正法華)無邪、(尼
 波羅本) Avigane
 桑履。(正法華)安和、(尼波羅
 本) Sama
 娑履。(正法華)普平、(尼波羅
 本) Sama
 又裔。(正法華)誠盡、(尼波羅
 本) Jaye

二八四
 阿又裔。(正法華)無盡、(尼波
 羅本) Kṣaye, Akṣaye
 阿耆賦。(正法華)莫脫、(尼波
 羅本) akṣīne
 犢帝。(正法華)玄獸、(尼波羅
 本) S nte
 除履。(正法華)澹然、(尼波羅
 本) Samite
 陀羅尼。(正法華)總持、(尼波
 羅本) Dhāraṇī
 阿盧伽娑婆。簸蔗毘又賦。(正
 法華)觀察、(尼波羅本) Aloka-
 bhāṣe, Pratyavakṣaṇī
 禰毘刺。(正法華)光耀、(尼波
 羅本) Nidhira
 阿便哆邏禰履刺。(正法華)有
 所依倚特枯於內、(尼波羅本)
 Abhayantrāyāḥāretā
 Abhayantrāyāḥāretā
 竟清淨。(尼波羅本) Abhayan-
 taraprasuddhi
 歐究隸。(正法華)無有坑坎、
 (尼波羅本) Utkule

く、『善哉善哉、藥王、汝此の法師を慈念し擁護するが故に是の陀羅尼を説く。諸の衆生に於て饒益する所多からん。』

爾の時に勇施菩薩、佛に白して言さく、世尊、我亦法華經を讀誦し受持せん者を擁護せんが爲に陀羅尼を説かん。若し此の法師、此の陀羅尼を得ば、若しは夜叉、若しは羅刹、若しは富單那、若しは吉蔗、若しは鳩槃荼、若しは餓鬼等、其の短を伺ひ求むとも能く便を得ること無げん。』即ち佛前に於て咒を説いて曰さく、

- (五) 『座隸一摩訶座隸二郁枳三目枳四阿隸五阿羅婆弟六涅隸弟七涅隸多婆弟八伊緞柅九韋緞柅十旨緞柅十一涅隸埤柅十二涅梨埤婆底十三』

牟究隸。(正法華)亦無高下、
(尼波羅本) Munkle
阿羅隸。(正法華)無有廻旋、
(尼波羅本) Arate
波羅隸。(正法華)所周旋處、
(尼波羅本) Parite
首迦差。(正法華)其目清淨、
(尼波羅本) Sukanksi
阿三磨三履。(正法華)等無所
等。(尼波羅本) Asamsanu
佛駄毘吉利婁帝。正法華、覺
已超度。(尼波羅本) Buddha-
vikiite
達磨波利差帝。(正法華)而察
於法。(尼波羅本) Ithuna-
parite

值伽涅羅沙禰。(正法華)合衆
無音。(尼波羅本) Sanghvir-
ghosanirogosani
婆舍婆舍輪地。曼哆邏。(正法
華)所設鮮明。(尼波羅本)
Bhayaḥavyavasthanti, Mantra
曼哆邏又夜多。(正法華)而懷

止足。(尼波羅本) Mantrakga-
yate
郵樓哆。(正法華)盡除節限、
(尼波羅本) Rute
郵樓修橋舍羅。(正法華)宣暢
音響。(尼波羅本) Katakau-
shalye
惡又遷。(正法華)曉了衆聲、
(尼波羅本) Aksaye
惡又治多治。(正法華)而了文
字。(尼波羅本) Aksayama-
taye
阿婆盧。(正法華)無有窮盡、
(尼波羅本) Yakti' Vajin
阿摩若那多夜。(正法華)永無
勢力無所思念。(尼波羅本)
Anurayantayo, Svahā
尼波羅本最後の Svaha (沙波
訶)は一般陀羅尼の結後に置
ける詞にして各陀羅尼に皆之
れあり。妙本は之を略せるな
り。

【世尊、是の陀羅尼神呪は恒河沙等の諸佛の所説なり。亦皆隨喜したまふ。若し此の法師を侵毀すること有らん者は、則ち爲れ是の諸佛を侵毀し已れるなり。】

爾の時に 毘沙門天王護世者、佛に白して言さく、『世尊、我亦衆生を愍念し、此の法師を擁護せんが爲の故に是の陀羅尼を説かん。』即ち呪を説いて曰さく、

(七) 『阿梨一那梨二婆那梨三阿那盧四那履五拘那履六』

『世尊、是の神呪を以て法師を擁護せん。我亦自ら當に是の經を持たん者を擁護して、百由旬の内に、諸の衰患無からしむべし。』

爾の時に 持國天王、此の會中に在つて、千萬億那由佗の乾闥婆衆の恭敬し圍繞せると與に

【三】 富單那 (Pūtana)。臭鬼と翻す、身形臭穢なるが故なり。

餓鬼中最も福ある者にして眞

餓鬼とも云ふ。又人の爲めに

祟りを作すが故に、作災怖鬼

とも云ふ。又熱病鬼とも云へ

り。

【四】 吉蔗 (Kṛtā)。所作、亦

は造と翻す。起尸鬼なり。

【五】 瘞隸等。

瘞隸。(正法華) 晃耀、尼波羅

本) Jyāṭī

摩訶瘞隸。(正法華) 大明、(尼

波羅本) Malayāṭī

郁枳。(正法華) 炎光、(尼波羅

本) Utkā, Tukki

日隸。(正法華) 演暉、(尼波羅

本) Muṅku

阿隸。(正法華) 順來、(尼波羅

二八六

羅本) Nitye

涅隸多婆弟。(正法華) 欣然、

(尼波羅本) Nityavāni

伊綴梘。(正法華) 住止、(尼波

羅本) Itthi

韋綴梘。(正法華) 立制、(尼波羅

本) Vitthi

旨綴梘。(正法華) 永住、(尼波

羅本) Vitthi

涅隸埤梘。(正法華) 無合、(尼

波羅本) Nityoni

涅梨埤婆底。(正法華) 無集、

(尼波羅本) Nityavāni, Nitya

【六】 毘沙門天王護世者。序品

四大天王の註を看るべし。

【七】 阿梨等

阿梨。(正法華) 富有、(尼波羅

本) Aṭṭe

那梨。(正法華) 調戲、(尼波羅

本) Aṭṭe

兜那梨。(正法華) 無戲、(尼波

羅本) Nāṭṭe, Vanāṭṭe

阿那盧。(正法華) 無量、(尼波

羅本) Anāṭṭe

阿那盧。(正法華) 無量、(尼波

すんで佛所に詣りて、合掌し佛に白して言さく、

「世尊、我亦陀羅尼神呪を以て、法華經を持たん者を擁護せん。」即ち呪を説いて曰さく、

- (五) 阿伽彌 伽彌 瞿利 三 乾陀利 四 旃陀利 五 摩蹉者 六 常求利 七 浮樓莎梏 八 頰底 九

「世尊、是の陀羅尼神呪は四十二億の諸佛の説なり。若し此の法師を侵毀すること有らん者は、則ち爲れ是の諸佛を侵毀し已れるなり。」

爾の時に羅刹女等有り、一を藍婆と名づけ、二を毘藍婆と名づけ、三を曲齒と名づけ、四を華齒と名づけ、五を黒齒と名づけ、六を多髮と名づけ、七を無厭足と名づけ、八を持瓔珞と名づけ、九を皐諦と名づけ、十を奪一切衆生精氣と名づく。是の十羅刹女、(三) 鬼子母并に

羅本) Anāpī 那履。(正法華) 無富、(尼波羅本) Nāpī

拘那履。(正法華) 何富、(尼波羅本) Kṛnāvī, Kṛnāvī

【八】 持國天王。序品四大天王の註を看るべし。

【九】 阿伽彌等。阿伽彌、伽彌。(正法華) 無波、(尼波羅本) Agāyī, Sṃgī

瞿利。(正法華) 有數、(尼波羅本) Gaṇī

乾陀利。(正法華) 持香、(尼波羅本) Gaṇḍhārī

旃陀利。(正法華) 囉黑、(尼波羅本) Gaṇḍhārī

摩蹉者。(正法華) 頰祝、(尼波羅本) Māṅgī, Tūkaṇī

常求利。(正法華) 大體、(尼波羅本) Cāṅkī

浮樓莎梏。(正法華) 于器順述、(陀波羅本) Vṛṣṭī

頰底。(正法華) 暴言至有、(尼波羅本) Anāpī

波羅本) Śe, Yānī 藍婆等。

【10】 藍婆。(正法華) 有結縛、(尼波羅本) Lambā

毘藍婆。(正法華) 離結、(尼波羅本) Vīlambā

曲齒。(正法華) 施積、(尼波羅本) Kṛṣṭāṇṭī

華齒。(正法華) 施華、(尼波羅本) Kṛṣṭāṇṭī

黒齒。(正法華) 施黒、(尼波羅本) Kṛṣṭāṇṭī

多髮。(正法華) 被髮、(尼波羅本) Kṛṣṭāṇṭī

無厭足。(正法華) 無著、(尼波羅本) Aśāṇṭī

持瓔珞。(正法華) 持華、(尼波羅本) Māṅgī

皐諦。(正法華) 何所、(尼波羅本) Kṛṣṭāṇṭī

奪一切衆生精氣。(正法華) 取一切精、(尼波羅本) Vṛṣṭī

鬼子母并に

其の子及び眷屬と與に俱に佛所に詣りて、同聲に佛に白して言さく、「世尊、我等亦法華經を讀誦し受持せん者を擁護して、其の衰患を除かんと欲す。若し法師の短を伺ひ求むる者有りとも、便を得ざらしめん。」即ち佛前に於て咒を説いて曰さく、

- (三) 一伊提履 二伊提泯 三伊提履 四伊提履 五泥履 六泥履 七泥履 八泥履 九泥履 十樓醢 十一樓醢 十二樓醢 十三樓醢 十四多醢 十五多醢 十六多醢 十七兜醢 十八窶醢

十九】

『寧ろ我が頭の上にと上るとも法師を惱すこと

莫からしめん。若しは夜叉、若しは羅刹、若し

は餓鬼、若しは富單那、若しは吉蕉、若しは

毘駄羅、若しは 毘駄、若しは 烏摩勒

【一】 鬼子母。梵名訶利帝 (Hariti) 又歡喜母、愛子母等と云ふ。大夜叉女なり。千子ありて五百の子は天上に、五百の子は世間に、各皆鬼王と爲つて諸天及び人間を擾亂す。後佛に従つて五戒を受け善鬼と爲る。始め好んで他人の兒を食ひしに、佛に吾子を隠されて悔心を起したりと傳ふ。鬼子母經一卷ありて、鬼子母の事を廣説せり。

【二】 伊提履等。

- 伊提履。(正法華)於是、(尼波羅本) Itine
- 伊提泯。(正法華)於斯、(尼波羅本) Itine
- 伊提履。(正法華)於爾、(尼波羅本) Itine
- 阿提履。(正法華)於氏、(尼波羅本) Itine
- 伊提履。(正法華)極甚、(尼波羅本) Itine

泥履。(正法華)無我、(尼波羅本) Nime

泥履。(正法華)無音、(尼波羅本) Nime

泥履。(正法華)無身、(尼波羅本) Nime

泥履。(正法華)無所、(尼波羅本) Nime

泥履。(正法華)俱同、(尼波羅本) Nime

樓醢。(正法華)已興、(尼波羅本) Rube

樓醢。(正法華)已生、(尼波羅本) Rube

樓醢。(正法華)已成、(尼波羅本) Rube

樓醢。(正法華)而住、(尼波羅本) Rube

多醢。(正法華)而立、(尼波羅本) Stube

多醢。(正法華)亦住、(尼波羅本) Stube

多醢。(正法華)嗟嘆、(尼波羅

伽、若しは (二) 阿跋摩羅、若しは夜叉吉蕉、若しは人吉蕉、若しは熱病せしむること若しは一日、若しは二日、若しは三日、若しは四日、乃至七日、若しは常に熱病せしめん。若しは男形、若しは女形、若しは童男形、若しは童女形、乃至夢の中にも亦復惱すこと莫からしめん。』即ち佛前に於て偈を説いて言さく、

『若し我が咒に順せずして、説法者を惱亂せば、頭破れて七分と作ること、(一) 阿梨樹の枝の如くならん。

父母を殺す罪の如く、亦油を壓すの殃、斗秤をもつて人を欺誑し、(二) でうだつ 調達が破僧罪の如く、

此の法師を犯さん者は、當に是の如き殃を獲べし。』

諸の羅刹女、此の偈を説き已つて、佛に白して言さく、『世尊、我等亦當に身自ら是の經を受持し讀誦し修行せん者を擁護して、安穩なることを得、諸の衰患を離れ、衆の毒藥を消せしむべし。』佛、諸の羅刹女に告げたまはく、『善哉善哉、(一) 汝等但能く法華の名を受持せん者を擁護せんに、福量る可からず。何に況や具足して受持し、經卷に華、香、瓔珞、抹香、

【本】 Stūpa
兜藍。(正法華)亦非。(尼波羅本) Stūpa

【四】 健駄。(カシヤヤ) 黄色鬼。
【五】 烏摩勒伽 (Umara) 黒色鬼。

【六】 阿跋摩羅 (Apsamara) 青色鬼。

【七】 阿梨樹。阿梨の正音は頰杜迦曼折利 (Arjaka-manjari) にて樹の名なり。頰杜迦は蘭香。曼折利は禰頭の義、樹の禰頭蘭香に似るが故にこの名ありと云ふ。

【八】 調達。提婆達多を略して云ふなり。

【九】 (原文) 汝等但能擁護受持法華名者福不可量。

塗香、燒香、旛蓋、伎樂を供養し、種種の燈、蘇燈、油燈、諸の香油燈、蘇摩那華油燈、瞻蔔華油燈、
 婆師迦華油燈、優鉢羅華油燈を然し、是の如き等の百千種をもつて供養せん者を擁護せんをや。臯諦、
 汝等及び眷屬應當に是の如き法師を擁護すべし。此の陀羅尼品を説きたまふ時、六萬八千人無生法忍
 を得たり。

妙莊嚴王本事品第二十七

爾の時に、佛、諸の大衆に告げたまはく、「乃往古世に、無量無邊不可思議阿僧祇劫を過ぎて佛有しき、(一)雲雷音宿王華智、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀と名づけたてまつる。國を(二)光明莊嚴と名づけ、劫を(三)喜見と名づく。彼の佛の法の中に王あり、妙莊嚴と名づく。其の王の夫人名を(四)淨徳と曰ふ。二子あり、一を(五)淨藏と名づけ、二を(六)淨眼と名づく。是の二子大神力、福德、智慧有つて、久しく菩薩所行の道を修せり。所謂檀波羅密、尸羅波羅密、羼提波羅密、毘梨耶波羅密、禪波羅密、般若波羅密、方便波羅密、慈、悲、喜、捨、乃至三十七品の助道法、皆悉く明了に通達せり、又菩薩の淨三昧、日星宿三昧、淨光三昧、淨色三昧、淨照明三昧、長莊嚴三昧、大威徳藏三昧を得、此の三昧に於て亦悉く通達せり。爾の時に彼の佛、妙莊嚴王を引導せんと欲し、及び衆生を愍念したまふが故に、此の法華經を説きたまふ。時に淨藏、淨眼の二子其の母の所に到つて、十指爪掌を合せて白して言さく、「願はくは母、雲雷

【一】雲雷音宿王華智。正法華

には總水雷音宿華慧王に作る。(尼波羅本 *śāhānuraṅgarajātā hoṣṣe svanurakṣatvarejā-samāksmitātibhīṇyāze mīksamātibhīṇyā*)

【二】光明莊嚴。正法華には照明嚴飾に作る。(尼波羅本 *āyāpīcchāyārasīpīrāthāyāntīkāreṇakāṣṭhīpīrāthāyāntīkā*)

【三】喜見。正法華には愛見に作る。(尼波羅本 *Prīyatārāṣyā*)

【四】妙莊嚴。正法華には淨得淨に作る。(尼波羅本 *śubha-vyūha*)

【五】淨徳。正法華には離垢施に作る。(尼波羅本 *Vimāla-dattā*)

【六】淨藏。正法華には離垢藏に作る。(尼波羅本 *Vimāla-gaṇḍī*)

【七】淨眼。正法華には離垢目に作る。(尼波羅本 *Vimāla-netra*)

音宿王華智佛の所に往詣したまへ。我等亦當に侍從し親近し供養し禮拜すべし。所以は何。此の佛、一切天人衆の中に於て法華經を説きたまふ、宜しく聽受すべし。母、子に告げて言はく、「汝が父外道を信受して、深く婆羅門の法に著せり。汝等往いて父に白して與に共俱に去らしむべし。」淨藏、淨眼十指爪掌を合せて母に白さく、「我等は是れ法王の子なり。而るに此の邪見の家に生れたり。」母、子に告げて言はく、「汝等當に汝が父を憂念して爲に神變を現すべし。若し見ることを得ば心必ず清淨ならん。或は我等が佛所に往至することを聽されん。」是に於て二子其の父を念ふが故に、虛空に踊在すること高さ七多羅樹にして、種種の神變を現す。虛空の中に於て行、住、坐、臥し、身の上より水を出し、身の下より火を出し、身の上より水を出し、身の下より火を出し、身の上より火を出し、或は大身を現じて虛空の中に滿ち、而も復小を現じ、小にして復大を現じ、空中に於て滅し、忽然として地に在り、地に入ること水の如く、水を履むこと地の如し。是の如き等の種種の神變を現じて、其の父の王をして心淨く信解せしむ。時に父、子の神力是の如くなるを見て、心大に歡喜し未曾有なることを得、合掌して子に向つて言はく、「汝等が師は爲めて是れ誰ぞ、誰の弟子ぞ。」二子白して言さく、「大王、彼の雲雷音宿王華智佛、今七寶菩提樹下の法座の上に在して坐したまへり。一切世間の天人衆の中に於て廣く法華經を説きたまふ。是れ我等が師なり。我は是れ弟子なり。」父、子に語つて言はく、「我今亦汝等が師を見たてまつらんと欲す、共俱に往く可し。」是に二子空中より下りて其の母の所に到つて、合掌して母

に白さく、「父の王今已に信解して、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すに堪任せり。我等父の爲に已に佛事を作しつ。願はくは母、彼の佛の所に於て、出家し得道せんことを聽されよ。」爾の時に二子、重ねて其の意を宣べんと欲して、偈を以て母に白さく、

「願はくは母我等の、出家して沙門と作ることを放したまへ。諸佛には甚だ値ひたてまつること難し、我等佛に隨ひたてまつりて學せん。」

し、我等佛に隨ひたてまつりて學せん。
優曇波羅の如く、佛に値ひたてまつることは復是れよりも難し、諸難を脱ること亦難し、願はくは我が出家を聽したまへ。」

母即ち告げて言はく、「汝が出家を聽す。所以は何。佛には値ひたてまつること難きが故に。」是に二子、父母に白して言さく、「善哉父母、願はくは時に雲雷音宿王華智佛の所に往詣して、親觀し供養したまへ。所以は何。佛には値ひたてまつること得難し。優曇波羅華の如く、又一眼の龜の浮木の孔に値へるが如し。而るに我等宿福深厚にして佛法に生れ値へり。是の故に父母、當に我等を聽して出家することを得せしめたまふべし。所以は何。諸佛には値ひたてまつること難し。時にも亦遇ふこと難し。彼の時に妙莊嚴王の後宮の八萬四千人、皆悉く是の法華經を受持するに堪任しぬ。淨眼菩薩は法華三昧に於て久しく已に通達せり。淨藏菩薩は已に無量百千萬億劫に於て、離諸惡趣三昧に通達せり。一切衆生をして諸の惡趣を離れしめんと欲するが故なり。其の王の夫人は諸佛集三昧を得て、能

く諸佛の祕密の藏を知れり。二子是の如く方便力を以て善く其の父を化して、心に佛法を信解し好樂せしむ。是に妙莊嚴王は群臣眷屬と俱に、淨德夫人は後宮の采女眷屬と俱に、其の王の二子は四萬二千人と俱に、一時に共に佛所に詣る。到り已つて頭面に足を禮し、佛を繞ること三匝して、却つて一面に住す。爾の時に彼の佛、王の爲に法を説いて示教利喜したまふ。王大に歡悦す。爾の時に妙莊嚴王及び其の夫人、頸の眞珠瓔珞の價直百千なるを解いて、以て佛の上に散じたてまつるに、虚空の中に於て化して四柱の寶臺と成る。臺の中に大寶の牀あつて、百千萬の天衣を敷けり。其の上に佛有して結跏趺坐して大光明を放ちたまふ。爾の時に妙莊嚴王是の念を作さく、「佛身は希有にして端嚴殊特なり。第一微妙の色を成就したまへり。」時に雲雷音宿王華智佛、四衆に告げて言はく、「汝等、是の妙莊嚴王の我が前に於て合掌して立てるを見るや不や。此の王我が法の中に於て比丘と作り、助佛道の法を精勤修習して、當に作佛することを得べし、(一) 娑羅樹王と號づけん。國を大光と名づけ、劫を大高王と名づけん。其の娑羅樹王佛は、無量の菩薩衆、及び無量の聲聞有つて、其の國平正ならん。功德是の如し。」其の王、即時に國を以て弟に付して、王と夫人、二子、并に諸の眷屬と、佛法の中に於て出家し修道しき。王出家し已つて、八萬四千歳に於て、常に勤め精進して妙法華經を修行す。是れ

【八】 娑羅樹王、正法華には種帝王に作る。(尼波羅本 Sāliya-draḥarājā) (Tibetan)
 【九】 大光、正法華には廣音に作る。(尼波羅本 Vasthira-Pratī) (Tibetan)
 【一〇】 大高王、正法華には超王に作る。(尼波羅本 Anhyud-gata) (Tibetan)

を過ぎて已後、一切淨功德莊嚴三昧を得たり。即ち虚空に昇ること高さ七多羅樹にして、佛に白して言さく、「世尊、此の我が二子已に佛事を作し、神通變化を以て、我が邪心を轉じて佛法の中に安住することを得、世尊を見たてまつることを得せしむ。此の二子は是れ我が善知識なり。宿世の善根を發起して、我を饒益せんと欲するを爲ての故に、我が家に來生せり。」爾の時に雲雷音宿王華智佛、妙莊嚴王に告げて言はく、「是の如し是の如し、汝が所言の如し。若し善男子、善女人、善根を種うるが故に、世世に善知識を得、其の善知識能く佛事を作し、示教利喜して阿耨多羅三藐三菩提に入らしむ。大王當に知るべし、

善知識は是れ大因縁なり。所謂化導して佛を見阿耨多羅三藐三菩提の

心を發すことを得せしむ。大王、汝此の二子を見るや不や。此の二子は已に會て六十五百千萬億那由佗恒河沙の諸佛を供養し、親近し恭敬して、諸佛の所に於て法華經を受持して邪見の衆生を愍念して正見に住せしむ。妙莊嚴王即ち虚空の中より下りて、佛に白して言さく、「世尊、如來は甚た希有なり。功德、智慧を以ての故に、頂上の肉髻、光明顯照す。其の眼長廣にして紺青の色なり。眉間の毫相白きこと珂月の如し。齒白く齊密にして常に光明あり。唇の色亦好にして如しの如し。」爾の時に妙莊嚴王、佛の是の如き等の無量百千萬億の功德を讚歎し已つて、如來の前に於て

【二】(原文)善知識者、是大因縁。

【三】肉髻。佛の頂上に赤肉ありて髻の如くなるを云ふ。三十二相の一にして、師父に孝順なるよりこの相を感するなり。

【三】頻婆果。頻婆(ビムバ)は樹の名、その果實赤くして美なりと云ふ。支那には相思子と翻ぜり。

一心に合掌して、復佛に白して言さく、世尊、未曾有なり。如來の法は不可思議微妙の功德を具足し成就したまへり。教戒の所行安穩快善なり。我今日より復自ら心行に隨はじ。邪見、憍慢、瞋恚、諸惡の心を生ぜじ。是の語を説き已つて、佛を禮して出でにき。』佛、大衆に告げたまはく、『意に於て云何、妙莊嚴王は豈に異人ならんや、今の華德菩薩是れなり。其の淨徳夫人は今佛前にある。』(一五)くわうせうしやうこんさうはさつこ 光照莊嚴相菩薩是れなり。妙莊嚴王、及び諸の眷屬を哀愍せんが故に、彼の中に於て生ぜり。其の二子は今の藥王菩薩、藥上菩薩是れなり。是の藥王、藥上菩薩は此の如き諸の大功德を成就し、已に無量百千萬億の諸佛の所に於て衆の徳本を植ゑ、不可思議の諸善功德を成就せり。若し人有つて是の二菩薩の名字を識らん者は、一切世間の諸天人民亦應に禮拜すべし。』佛是の妙莊嚴王本事品を説きたまふ時、八萬四千人遠塵離垢して、諸法の中に於て法眼淨を得たり。

【四】華德。正法華には蓮華首に作る。(尼波羅本 *Tanhu*)

【五】光照莊嚴相。正法華には光照嚴飾に作る。(尼波羅本 *Vairocana arambhadrakarmadivya*)

古來この文を點して今の佛、前に光をもつて照したまふ莊嚴相の菩薩と讀みて、莊嚴相の菩薩とは妙音菩薩を指すと解したり。然れども正法華及び尼波羅本を取つて之を按ずるに光照莊嚴相と云へる菩薩の名なること明らかかなり。故に今敢て點訓を更正す、尼波羅本を譯すれば遍照光莊嚴幢王なり。

普賢菩薩勸發品第二十八

爾の時に 普賢菩薩、自在神通力、威徳名聞を以て、大菩薩の無量無邊不可稱數なると與に東方より來る。所經の諸國普く皆震動し、寶蓮華を雨らし、無量百千萬億の種種の伎樂を作す。又無數の諸天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の大衆の圍繞せると與に各威徳神通の力を現じて、娑婆世界の耆闍崛山の中に到つて、頭面に釋迦牟尼佛を禮し、右に繞ること七帀して、佛に白して言さく、『世尊、我

三 寶威徳上王佛の國に於て、遙に此の娑婆世界に法華經を説きたまふを聞いて、無量無邊百千萬億の諸の菩薩衆と共に來つて聽受す。唯願はくは世尊、當に爲に之を説きたまふべし。若し善男子、善女人の如來の滅後に於て云何してか能く是の法華經を得ん。』佛、普賢菩薩に告げたまはく、『若し善男子、善女人、四法を成就せば如來の滅後に於て當に是の法華經を得べし。一には諸佛に護念せらるることを爲、二には諸の徳本を植ゑ、三には正定聚に入り、四には一切衆生を救ふの心を發せるなり。善男子、善女人、是の如く四法を成就せば如來の滅後に於て必ず是の經を得ん。』爾の時に普賢菩薩、佛に白して言さく、『世尊、後の五百歲濁惡世の中に於て、其れ是の經典を支持すること有らん者

【一】普賢。梵名は三曼多跋陀羅 (Sammahāra) 、三曼多は普の義、跋陀羅は賢の義なり。亦翻じて福吉とも云ふなり。

【二】寶威徳上王。正法華には寶超威王に作る。尼波羅本ヲトナテ、リコービユドガタラシヤ (Kumudōshyū Ictāra) 。

二九七

は、我當に守護して其の衰患を除き安穩なることを得せしめ、伺ひ求むるに其の便を得る者なからしむべし。若しは魔、若しは魔子、若しは魔女、若しは魔民、若しは魔に著せられたる者、若しは夜叉、若しは羅刹、若しは鳩槃荼、若しは毘舍闍、若しは吉庶、若しは富單那、若しは韋陀羅等の諸の人を惱す者、皆便を得ざらん。是の人若しは行き、若しは立つて、此の經を讀誦せば、我爾の時に六牙の白象王に乗つて、大菩薩衆と俱に其所に詣つて、自ら身を現じて供養し守護して其の心を安慰せん。亦法華經を供養せんが爲の故なり。是の人若しは坐して此の經を思惟せば、爾の時に我復白象王に乗つて其の人の前に現せん。其の人若し法華經に於て一句一偈をも忘失する所有らば、我當に之を教へて與共に讀誦し、還つて通利せしむべし。爾の時に法華經を受持し讀誦せん者、我が身を見ることを得て、甚だ大に歡喜して轉た復精進せん。我を見るを以ての故に即ち三昧及び陀羅尼を得ん。名づけて 旋陀羅尼、百千萬億旋陀羅尼、法音方便陀羅尼と爲す。是の如き等の陀羅尼を得ん。世尊、若し後の世の後の五百歳濁惡世の中に、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の求索せん者、受持せん者、讀誦せん者、書寫せん者、是の法華經を修習せんと欲せば、三七日の中に於て一心に精進すべし。三七日を満じ了らんに、我當に六牙の白象に乗つて、無量の菩薩の而も自ら圍繞せると與に、一切衆生の見ん

【三】 毘舍闍 (Vishaya) 鬼の名なり、嗔精氣、嗔人精氣鬼等と翻す、亦食血肉鬼とも云ふ。

【四】 韋陀羅 毘陀羅に同じ、陀羅尼品の註を看るべし。

【五】 旋陀羅尼等 旋陀羅尼は正法華には回轉總持に作る、(尼波羅本 Jāṭaka-vāra) 百

千萬億旋陀羅尼は正法華には

と喜ぶ所の身を以て其の人の前に現じて、爲に法を説いて示教利喜すべし。亦復其れに陀羅尼呪を與へん。是の陀羅尼を得るが故に非人の能く破壊する者有ること無けん。亦女人に惑亂せられじ。我が身亦自ら常に是の人を護らん。唯願はくは世尊、我が此の陀羅尼呪を説くことを聽したまへ。』即ち佛前に於て呪を説いて曰さく、

- 〔六〕阿檀地 一 檀陀婆地 二 檀陀婆帝 三 檀陀鳩除隸 四 檀陀修陀隸 五 修陀隸 六 修陀羅婆底 七 佛駄波賴禰 八 薩婆陀羅尼阿婆多尼 九 薩婆婆沙阿婆多尼 十 修阿婆多尼 十一 僧伽婆履又尼 十二 僧伽涅伽陀尼 十三 阿僧祇 十四 僧伽婆伽地 十五 帝隸阿惰僧伽兜略阿羅帝波羅帝 十六 薩婆僧伽三摩地伽蘭地 十七 薩婆達磨修波利帝 十八 薩婆薩埵樓駄憍舍畧阿菴伽地 十九 辛阿毘吉利地帝 二十』

『世尊、若し菩薩有つて此の陀羅尼を聞くことを得ん者は、當に知るべし善賢神通の力なり。若し法華經の閻浮提に行せんを受持すること有らん者は、此の念を作すべし、皆是れ善賢威神の力なりと。若し受持し讀誦し正憶念し、其の義趣を解し、説の如く修行すること有らん、當に知るべし是

若千百千億周旋總持に作る、
 (尼波羅本) *Chakras'pariv-*
raṭī、法音方便陀羅尼は正法華
 には一切諸善總持に作る、(尼
 波羅本) *Samvartanakaṅkav-*
ī、古師は之を解して旋陀羅
 尼は空觀智、法音方便陀羅尼
 には中道觀智を爲して此、三陀
 羅尼を三觀智に配するなり。
 【六】阿檀地等。

阿檀地。(正法華) 無我、(尼波
 羅本) *Aṅgī*
 檀陀婆地。(正法華) 除我、(尼
 波羅本) *Danḍarati*
 檀陀婆帝。(正法華) 回我、(尼
 波羅本) *Danḍarati*
 檀陀鳩除隸。(正法華) 方便資
 仁和除、(尼波羅本) *Danḍarati*
 至三。
 檀陀修陀隸。(正法華) 甚柔
 輒、(尼波羅本) *Danḍarati*
 修陀隸。(正法華) 甚柔弱、(尼

の人は普賢の行を行するなり。無量無邊の諸佛の所に於て、深く善根を種ゑたるなり。諸の如來の手をもつて其の頭を摩でたまふことを爲ん。若し但書寫せんは、是の人命終して當に忉利天上に生ずべし。是の時に八萬四千の天女、衆の伎樂を作して來つて之を迎へん。其の人即ち七寶の冠を著て、采女の中に於て娛樂快樂せん。何に況や受持し讀誦し正憶念し、其の義趣を解し、説の如く修行せんをや。若し人有つて受持し讀誦し其の義趣を解せん。是の人命終せば、千佛の手を授けて、恐怖せず惡趣に墮ちざらしめたまふことを爲、即ち兜率天上の彌勒菩薩の所に往かん。彌勒菩薩は三十二相有つて、大菩薩衆と共に圍繞せらる。百千萬億の天女眷屬有り。而も中に於て生せん。是の如き等の功德利益有らん。是の故に智者、應當に一心に自ら書き、若しは人をしても書かしめ、受持し讀誦し正憶念し、説の如く修行すべし。世尊、我今神通力を以ての故に是の經を守護して、(七) 如來の滅後に於て、閻浮提の内に、廣く流布せしめて斷絶せざらしめん。『爾の時に釋迦牟尼佛讚めて言はく、『善哉善哉、普賢、汝能く是の經を護助して、多所の衆生をして安樂し利益せしめん。汝已に不可思議

- 波羅本) Sullari.
- 修陀羅婆底 (正法華) 句見、
Stidharapadi
- (尼波羅本) Sullarapadi
- 佛馱波羶欄 (正法華) 諸佛
フツツハバンヌネ
- 廻 (尼波羅本) Bribhupasya-
ni
- 薩婆陀羅尼阿婆多尼。 (正法
華) 諸總持 (尼波羅本) Dha-
ra-ni-at-wulka-
- 薩婆婆沙阿婆多尼。 (正法華)
行衆説。
- 修阿婆多尼。 (正法華) 蓋廻
サアトルタニ
- 轉 (尼波羅本) Santarvani
- 僧伽婆履又尼。 (正法華) 盡衆
サンガバリアク
- 會 (尼波羅本) Sanghapatika-
site
- 僧伽涅伽陀尼。 (正法華) 除衆
サンガニルカガ
- 趣 (尼波羅本) Samkhang-
lanu
- 阿僧祇。 (正法華) 無央數。
- 僧伽婆伽地 (正法華) 計諸句。
- 帝釋阿僧伽兜略阿羅帝波羅
帝。 (正法華) 三世數等。

の功德、深大の慈悲を成就せり。久遠より來阿耨多羅三藐三菩提の意を發して、能く是の神通の願を作して是の經を守護す。我當に神通力を以て、能く普賢菩薩の名を受持せん者を守護すべし。普賢、若し是の法華經を受持し讀誦し正憶念し修習し書寫すること有らん者は、當に知るべし是の人は釋迦牟尼佛を見るなり。佛口より此の經典を聞くが如し。當に知るべし是の人は釋迦牟尼佛を供養するなり。當に知るべし是の人は佛、善哉」と讚む。當に知るべし是の人は釋迦牟尼佛の手をもつて、其の頭を摩づるを爲ん。當に知るべし是の人は釋迦牟尼佛の衣に覆はるることを爲ん。是の如きの人は復世樂に貪著せじ。外道の經書手筆を好まじ。亦復熇つて其の及及び諸の惡者の若しは屠兒、若しは猪羊雞狗を畜ふもの、若しは獵師、若しは女色を街賣するものに親近せじ。是の人は心意質直にして、正憶念有り、福德力有らん。是の人は三毒に惱されじ。亦嫉妬、我慢、邪慢、増上慢に惱されじ。若し人有つて法華經を受持し讀誦せん者を見ては、是の念を作すべし、此の人は久しからずして當に道場に詣して諸の魔衆を破し、阿耨多羅三藐三菩提を得、法輪を轉じ、法鼓を撃ち、法螺を吹き、法雨を雨らすべし。當に

●薩婆僧伽三摩地伽蘭地。正法華。越有爲。
 ●薩婆達磨修波利帝。正法華。學諸法。尼波羅本。Dharmapariṣiṭṭi
 ●薩婆陸埤樓伽舍略阿窻伽地。正法華。曉衆生音。尼波羅本。Zarvashtvatrakausi-yāngavē
 ●辛阿毘吉利地帝。正法華。獅子娛樂。尼波羅本。Zimhivakriyadīyāyāsmulāyārtakuskrīḍe, Amvart, Vartan, Alukāyārti, Svāyāhē
 【七】(原文)於如來滅後、闍浮提內、廣令流布、使不斷絕。

若し人有つて法華經を受持し讀誦せん者を見ては、是の念を作すべし、此の人は久しからずして當に道場に詣して諸の魔衆を破し、阿耨多羅三藐三菩提を得、法輪を轉じ、法鼓を撃ち、法螺を吹き、法雨を雨らすべし。當に

國譯佛說觀普賢菩薩行法經

是の如く我聞き。一時、佛、毘舍離國、

大林精舍、重閣講堂に在して、諸の比丘

に告げたまはく、『却つて後三月、我當に般涅槃すべし。』尊者阿難即ち座より起つて衣服を整

へ、又手合掌して、佛を繞ること三市して、佛

の爲に禮を作し、胡跪し合掌して、諦かに如

來を觀たてまつりて、目暫くも捨てず。長老摩

訶迦葉、彌勒菩薩摩訶薩も亦座より起つて、合

掌し禮を作して尊顔を瞻仰したてまつる。時に

三大士、異口同音にして佛に白て言さく、『世

尊、如來の滅後に云何してか衆生、菩薩の心を起

し、大乘方等經典を修行し、正念に一實の境界

【一】毘舍離國、西域記卷七に

據るに、毘舍離は訛音にして、

正音は吠舍釐(Vishali)、印度

恒河の東北百五十里に在る國

名にして國內現に維摩詰故宅

の蹟ありと云ふ。十六大國の

一なり。國都の寛平華麗なる

より翻じて廣博嚴淨と云へ

り、又好稻とも翻ず、この國

の粳米好良にして餘國に勝さ

るが故なり。又好道とも翻ず、

この國の道路極直平正なるが

故なり。或はこの國の人民正

道を好樂するが故ともいふ。

(釋奢隸夜、維耶、維耶離、毘

摩訶婆大、婆那林、毘訶羅

は精舍なり。精舍とは僧房の

別號にして、精進練修の行者

の所居と云へることなり。釋

尊の止住して說法教化したま

へるところ多くこの名を付

す。摩揭陀國の竹林精舍、舍

衛國の祇園精舍の如し。今の

大林精舍は毘舍離國宮城の西

北五六里の處に在りしと云

ふ。但し西域記には之を錄せ

ず、已に圯壞せしが故歟。

【三】重閣講堂、總陀俱胝伽藍

【二】大林精舍、梵名は摩訶婆

那毘訶羅(Mahāvihāra)、

摩訶婆大、婆那林、毘訶羅

は精舍なり。精舍とは僧房の

別號にして、精進練修の行者

の所居と云へることなり。釋

尊の止住して說法教化したま

へるところ多くこの名を付

す。摩揭陀國の竹林精舍、舍

衛國の祇園精舍の如し。今の

大林精舍は毘舍離國宮城の西

北五六里の處に在りしと云

ふ。但し西域記には之を錄せ

ず、已に圯壞せしが故歟。

【三】重閣講堂、總陀俱胝伽藍

を思惟せん。云何してか無上菩提の心を失はざらん。云何してか復當に煩惱を斷せず五欲を離れずして、諸根を淨め諸罪を滅除するを得、父母所生の清淨の常の眼に、五欲を斷せずして而も能く諸の障外の事を見ることを得べき。」
 佛阿難に告げたまはく、「諦かに聽け、諦かに聽け、善く之を思念せよ。如來昔者闍崛山及び餘の住處に於て、已に廣く一實の道を分別せしかども、今此の處に於て、未來世の諸の衆生等の大乘無上の法を行せんと欲せん者、普賢の行を學し普賢の行を行せんと欲せん者の爲に、我今當に其の所念の法を説くべし。若しは普賢を見、及び見ざる者の罪數を除却せんこと、今汝等が爲に當に廣く分別すべし。阿難、普賢菩薩は乃し東方の淨妙國土に生ず。其の國土の

【四】 胡跪。右膝を地に着くるを胡跪と云ひ、左右の膝を地に着くるを長跪と云ふ。長跪の禮は尼女の爲めに佛これを聽せども、正體は必ず右膝着地の胡跪なるべきなり。又五體投地の禮の時も第一に先づ右膝を地に着け、次に左膝を下し、次に二肘を地に着け、次に頭を地に着くるの順序なり。左右の膝を一時に地に着くるは禮の儀に非ず。止觀輔行卷二に胡跪の儀を記せるを看るべし。

【五】 三大士。阿難・摩訶迦葉、彌勒の三人なり。阿難は開法傳持の人、摩訶迦葉は結集の正主、彌勒は當來の化主、並に特に滅後の事に關ること深重なれば、この三大士の發請あるなり。

【六】 (原文) 不斷煩惱、不離五欲 得淨諸根、滅除諸罪。

【七】 耆闍崛山及び餘の住處。耆闍崛山は正しく一乘を顯示せし法華會座を指す。餘の住處とは法華已前華嚴、阿舍、方等、般若の諸經の會座なり。然るに華嚴は一乘の圓に別教を兼ね、阿舍は全く一乘を祕し、方等は一乘の圓に藏、通、別の三教を對説し、般若は一乘の圓に通別の二教を帶ぶ。如來の已證に約せば皆一乘の道を分別し宣説したるなれども、純一無雜の開會の一乘は獨り法華會座に在り、故に主として指して耆闍崛山と云ひ、他は從として及び餘の住處と云ふなり。又法華に一たび開會すれば諸大乘經は皆一乘を分別し宣説したるに非ざるは、英きが故なり。

【八】 雜華經。華嚴經なり。華嚴は雜華嚴飾と云へる語の略されたること、開題に已に云

相は 雜華經の中に已に廣く分別せり。我今此の經に於て略して解説せん。阿難、若し比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、八部、一切衆生の大乘を誦せん者、大乘を修せん者、大乘の意を發せん者、普賢菩薩の色身を見んと樂はん者、多寶佛の塔を見たとまつらんと樂はん者、釋迦牟尼佛及び分身の諸佛を見たとまつらんと樂はん者、六根清淨を得んと樂はん者は、當に是の觀を學すべし。此の觀の功德は、諸の障礙を除いて上妙の色を見る。三昧に入らざれども、但誦持するが故に、心を専らにして修習し、心心相次いで大乘を離れざること、一日より三七日に至れば、普賢を見ることを得。重障有らん者は、七七日にして然して後見することを得。復重きこと有らん者は、一生に見ることを得。復重きこと有らん者は、二生に見ることを得。復重きこと有らん者は、三生に見ることを得。是の如く種種に業報不同なり、是の故に異説す。普賢菩薩は身量無邊、音聲無邊、色像無邊なり。此の國に來らんと欲して、自在神通に入り、身を促めて小ならしむ。閻浮提の人は 三障重きが故なり。智慧力を以て、化して白象に乗れり。其の象に 六牙あり、七支地を跄へたり。其の七

へり。

【九】(原文)不入三昧、但誦持故。

【一〇】三障。煩惱障、業障、報障を云ふ。

【一一】六牙。この六牙及び七支、七蓮華、六浴池、十四蓮華等すべて所表の法門あること智證の記に書けるが如し。然るに今の白象は觀普賢の行人目前瞻視するところの形貌なれば單に法門を表したる無形の物に非ず實に六牙七支等の白象なるにてあるなり。但その形貌に自ら所表の意あらん、其は普賢不可思議威神の力なれば漫に比擬すべきに非ず、目前瞻視したる觀普賢の行人方に之を知るべきのみ。

【一二】七支。四足と、一鼻と、一尾と、一根となり。他の四足の傍生類亦七支あれども、今の白象は七支地を跄ふ、此

しの下に七蓮華を生ぜり。其の象の色鮮白にして、白の中の上れたる者なり。
 (三) 頗黎雪山も比と爲すことを得ず。象の身の長さ四百五十由旬、高さ四百由旬。六牙の端に於て六つの浴池有り、一一の浴池の中に十四の蓮華を生ぜり。池と與に正等にして、其の華開敷せること 天の樹王の如し。一一の華の上に一りの玉女有り、顔色紅の暉の如くにして天女に過ぎたる有り。手の中に自然に五つの 筵篋を化せり、一一の筵篋に五百の樂器ありて以て眷屬と爲せり。五百の鳥有り、 鳧、雁、鴛鴦、皆衆寶の色にして、華葉の間に生ぜり。象の鼻に華有り、其の莖譬へば赤眞珠の色の如し。其の華金色にして、含んで未だ敷けず。是の事を見已つて復更に 懺悔し、至心に諦かに觀じて大乘を思惟して心に休廢せざれば、華を見るに即ち敷けて金色金光なり。其の蓮華臺は是れ 甄叔迦寶、妙梵摩尼を以て華鬘と爲し、 金剛寶を以て華鬘と爲し、化佛有して蓮華臺に坐し、衆多の菩薩蓮華鬘に坐せるを見る。化佛の眉間より亦金色の光を出して象の鼻の中に入り、紅蓮華の色にして象の鼻の中より出でて象の眼の中に入り、象の眼の中より出でて象の耳の中に入り、象の耳より出で

れを奇特の相と爲すなり。梵は柱なり、地に立つて柱の如くなればなり。

【三】 頗黎雪山。頗黎の正しき梵音は塞蘭那迦(Shalankya)。水精、水玉、白珠等の諸翻あり。透明鮮白の珠寶にして七寶の一なり。雪山は即ち崑崙山(クイライサ)の異稱なり。堆雪の白美なるに於て名ある山なり。

【四】 天の樹王。初利天上の波利質多羅樹を云ふ。波利質多羅は正音波利耶哩羅(Balivayatra)にて香遍樹と翻す。枝葉實一切皆香ありて一切に遍す、今蓮華の香を之れに比するなり。

【五】 筵篋。本經方便品の註を看るべし。

【六】 鳧はけり。雁ばかり。鴛鴦はおし。

【七】 懺悔。梵語懺悔(Shamaya)を

て象の頂上を照らし、化して金臺と作る。象の頭の上に當つて三たりの化人あり、一りは金輪を捉り、一りは摩尼珠を持ち、一りは金剛杵を把れり。杵を舉げて象に擬するに象即ち能く行歩す。脚地を履ます、虚を躡んで遊ぶ。地を離ること七尺、地に印文あり。印文の中に於て (三) 千輻あり、轂輞皆悉く具足せり。

(一) 一の輞の間に二の大蓮華を生じ、此の蓮華の上に二の化象を生ぜり。亦七支有り、大象に隨つて行く。足を舉げ足を下すに七千の象を生じ、以て眷屬と爲して大象に隨從せり。象の鼻の紅蓮華の色なる上に、化佛有して眉間の光を放ちたまふ。其の光金色にして、前の如く象の鼻の中に入り、象の鼻の中より出でて象の眼の中に入り、象の眼より出でて還た象の耳に入

悔過と翻す、己が往昔の過非を發露して改悔するを云ふ。懺悔は梵漢並言なり。此に三あり、一には作法懺、佛菩薩に對して、身に禮拜し、口に稱唱し、意に觀察して哀れ求めて懺悔す、是れ作法懺なり。二には取相懺、必ず好相の現するを期して悔過するなり、好相とは佛來つて摩頂し、或は光現じ、或は華飛び、或は空中の聲を聞く等なり。三には無生懺、心性の本空無生を了し罪福無主と達して悔過するなり。今この觀普賢の中には具さに三懺あり、須らくこれを檢して懺悔の何たるを知るべし。

【二】 觀救迦寶。本經妙香品の註を看るべし。

【三】 金剛寶。普通の嚙曰羅 (A. B. E.) を言ふに非ずして、専ら帝釋所持の寶。 Suddhanti

ラケナラトナ (Jagannath) 即ち那羅延金剛寶を指す、以て上の妙梵摩尼の梵天王所得の珠玉なるに對比するなり。

【四】 金剛杵。是れ嚙曰羅 (A. B. E.) にして現に密教には修法に之を用ふ。獨鉤、三鉤、五鉤等の種類あり、摧折を象るの法器なり。

【五】 千輻あり轂輞。佛の三十二相の中足底に千輻の輪相あり轂輞を具足す。今白象に亦この印文あるなり。輻は輪の矢、轂は矢の湊まる輪の軸、輞は輪の外匝なり。

【六】 一の輞の間。地に現はれたる印文の輞にして即ち輞輞を具したる輪なり。この一の輞輪の印文より一に大蓮華を生ずるなり、故に一とは當に白象の行く一步一步の印文と解すべし。智證の記は甚だ謬論なり。

り、象の耳より出でて象の頂上に至る。漸漸に上つて象の脊に至り、化して金鞍と成つて七寶杖具せり。鞍の四面に於て七寶の柱有り、衆寶校飾して以て寶臺を成せり、臺の中に一の七寶の蓮華鬘有り、其の蓮華鬘は百寶をまつて共に成せり。其の蓮華臺は是れ大摩尼なり。一の菩薩有りて結跏趺坐す、名を普賢と曰ふ。身は白玉の色にして五十種の光あり、光ごとに五十種の色あり、以て頂の光と爲せり。身の諸の毛孔より金光を流出す。其の金光の端に無量の化佛ましまして、諸の化菩薩を以て眷屬と爲せり。安詳として徐くに歩み、大なる寶蓮華を雨らして、行者の前に至らん。其の象口を開くに、象の牙の上に於て、諸池の玉女鼓樂絃歌す。其の聲微妙にして、大乘一實の道を讃嘆す。行者見已りなば、歡喜し敬禮して、復更に甚深の經典を讀誦し、遍く十方無量の諸佛を禮し、多寶佛塔及び釋迦牟尼佛を禮したてまつり、并に普賢、諸の大菩薩を禮して、是の誓願を發せ、若し我宿福あつて應に普賢を見つべくんば、願はくは尊者(四)遍吉、我に色身を示したまへ」と。是の願を作し已つて、(五)晝夜六時に十方の佛を禮して懺悔の法を行せよ。大乘經を讀み、大乘經を誦し、大乘の義を思ひ、大乘の事を念じ、大乘を持つ者を恭敬し供養し、(六)一切

【三】退吉、普賢の梵名三曼多跋捺羅(Samantabhadra)を或は翻じて遍吉と云ふ、大論卷九看るべし。故に遍吉は是れ普賢の名なり、「遍吉して」と訓讀するは當らず。又傳教の結經科文の版本に遍吉を遍善に作りて「遍善して」と訓ぜ

る亦非なり、遍善も遍吉と同じく普賢の異翻なること仁王儀軌に書けるが如し。

【四】晝夜六時。晝三夜三を云ふ、晝三は晨朝と、午時と、黄昏と、夜三は初夜と、中夜と、後夜となり。又午時を開して齋前と齋後とに分つて七時禮念と呼ぶもあるなり。

【五】(原文)視一切人、猶如佛想、於諸衆生、如父母想。

の人を視ること猶ほ佛の想の如くし、諸の衆生に於て父母の想の如くせよ。是の念を作し已りなば、普賢菩薩即ち眉間より大人相の白毫の光明を放たん。此の光現する時に、普賢菩薩身相端嚴にして紫金山の如く、端正微妙にして、三十二相皆悉く備有し、身の諸の毛孔より大光明を放つて其の大象を照らして金色と作らしめん。一切の化象も亦金色と作り、諸の化菩薩も亦金色と作らん。其の金色の光東方無量の世界を照らして皆同じく金色ならん。南西北方四維上下も亦復是の如くならん。爾の時に十方面、一一の方に於て一りの菩薩有り、六牙の白象王に乗ること、亦普賢の如くにして等しくして異なること有ること無けん。是の如く十方無量無邊の中に満てる化象も、普賢菩薩の神通力の故に、持經者をして皆悉く見ることを得せしめん。是の時に行者、諸の菩薩を見ては、身心歡喜し、其れが爲に禮を作して白して言せ、「大慈大悲者、我を愍念したまふが故に我が爲に法を説きたまへ」と。是の語を説く時に、諸の菩薩等、異口同音に、各清淨の大乗經法を説いて、諸の偈頌を作つて行者を讚嘆すべし。是れを始めて普賢菩薩を觀する最初の境界と名づく。爾の時に行者是の事を見已つて、心に大乘を念じて晝夜に捨てずんば、睡眠の中に於て、夢に普賢其れが爲に法を説くと見ん。覺の如くにして異なること無く、其の心を安慰して是の言を作さん、「汝が誦持する所、是の句を忘失し是の偈を忘失せり」と。爾の時に行者、普賢の深法を説くを聞いて、其の義趣を解し、憶持して忘れず、日日に是の如くして其の心漸く利ならん。普賢菩薩其れをして十方の諸佛を憶念せしめ

善賢の教に隨つて正信正憶にして、漸く心眼を以て東方の佛の身黄金の色にして端嚴微妙なる
 を見たてまつらん。一佛を見たてまつり已つて、復一佛を見たてまつらん。是の如く漸漸に遍く東方
 の一切の諸佛を見たてまつり、心想利なるが故に、遍く十方の一切の諸佛を見たてまつらん。諸佛を
 見たてまつり已りなば、心に歡喜を生じて、是の言を作せ、「大乘に因るが故に大士を見ることを得、
 大士の力に因るが故に諸佛を見たてまつることを得たり。諸佛を見たてまつると雖も、猶ほ未だ了了ならず。目を閉づれば則ち見、目を開けば則ち失ふ」と。是の語を作し已つて、五體を地に投じて遍く十方の佛を禮せよ。
 諸佛を禮し已つて、胡跪し合掌して是の言を作せ、「諸佛世尊よ、十力、
 無畏、十八不共法、大慈、大悲、三念處まします。常に世間に在しましめて
 色の中の上色なり。我何の罪有つてか而も見たてまつることを得ざるしと。
 是の語を説き已つて復更に懺悔せよ。懺悔清淨なること已りなば、普賢菩薩復更に現前して行、住、坐、臥に其の側を離れず、乃至夢の中にも常に爲に法を説かん。此の人覺め已つて法喜の樂を得ん。是の如くして晝夜三七日を経て、然して後に、
 施陀羅尼を得ん。陀羅尼を得るが故に、
 諸佛、菩薩の所説の妙法憶持して失はじ。亦常に夢に過去の七佛を見

【三】十力等、本經提婆品の註

を看るべし。無畏は四無所畏なり。大慈大悲は四無量心の中之二を擧げて喜捨を略するなり。智證の記に大慈大悲は四無量心に非すと云へど、下の香根懺悔の文に四無量心を擧ぐるに大慈慈及び喜捨とあり、豈に大慈慈及び大慈大悲に異なりと言ふべけんや。殊に今文十力以下三念處まで皆法數に約す。中間の大慈大悲四無量心なるべきことは亦明かなることなり。但喜捨を略するは下の慈悲及び喜捨と云へる文體より推して以てその

たてまつらんに、唯釋迦牟尼佛のみ其れが爲に法を説きたまはん。是の諸の世尊、各各に大乘經典を稱讚したまはん。爾の時に行者復更に懺悔して、遍く十方の佛を禮せよ。十方の佛を禮し已りなば、普賢菩薩其の人の前に住して、教へて宿世の一切の業縁を説いて、黒惡の一切の罪事を發露せしめ、諸の世尊に向ひたてまつりて口に自ら發露せしめん。既に發露し已りなば、尋いで時に即ち 諸佛現前三昧を得ん。是の三昧を得已つて、東方の阿閼佛及び妙喜國を見たてまつること了了分明ならん。是の如く十方各諸佛の上妙の國土を見ること了了分明ならん。既に十方の佛を見たてまつり已りなば、夢に象の頭の上に一りの金剛人有り、金剛杵を以て遍く六根に擬せん。六根に擬し已りて普賢菩薩・行者の爲に六根清淨懺悔の法を説かん。是の如く懺悔すること、一日より三七日に至らん。諸佛現前三昧の力を以ての故に、普賢菩薩の說法莊嚴の故に、耳に漸漸に障外の聲を聞き、眼に漸漸に障外の事を見、鼻に漸漸に障外の香を聞かん。廣く説くこと 妙法華經の如し。是の六根清淨を得已つて、身心歡喜して、諸の惡想無からん。心を是の法に純らにして法と相應せん。復更に

意を知るべきのみ。

- 【一七】 三念處。亦三不共念住とも云ふ。一には諸の敬信の者に對して不平等心に住す、(Anupāsanāya samāhita)。
- 二には諸の敬信せざる者に對して平等心に住す、(Asāraṇāya samāhita)。
- 三には諸の敬信する者と敬信せざる者とに對して平等心に住す、(Samaṇānaṃ samāhita)。
- 智證の記は少しく違へり、云く、二には一心に法を聽かざるを以て憂と爲さず、二には一心に法を聽くを以て憂と爲さず、三には常に捨心を行すと。
- 【一八】 旋陀羅尼。本經普賢品の註を看るべし。
- 【一九】 過去の七佛。本經五百弟子品の註を看るべし。
- 【二〇】 諸佛現前三昧。智證の記

【三】百千萬億旋陀羅尼を得、復更に廣く百千萬億無量の諸佛を見たてまつらん。是の諸の世尊、各右の手を申べて、行者の頭を摩でて是の言を作したまはん。「善哉善哉、大乘を行ずる者、大莊嚴の心を發せる者、大乘を念ずる者なり。我等昔日菩提心を發せし時皆亦是の如し。汝愍懃にして失はざれ。我等先世に大乘を行せしが故に、今清淨、正遍知の身と成れり。汝今亦當に勤修して懈らざるべし。【四】此の大乘經典は諸佛の寶藏なり。十方三世の諸佛の眼目なり。三世の諸の如來を出生する種なり。此の經を待つ者は、即ち佛身を持ち、即ち佛事を行するなり。當に知るべし、是の人は即ち是れ諸佛の所使なり。諸佛世尊の衣に覆はる。諸佛如來の眞實の法の子なり。汝大乘を行じて法種を斷たざれ。汝今諦に東方の諸佛を觀じたてまつれしと。是の語を説きたまふ時、行者即ち東方の一切無量の世界を見るに、地の平かなること掌の如し。諸の堆阜、岳陵、荆棘無く、瑠璃をもつて地と爲し、黄金をもつて側を問てたり。十方世界も亦復是の如し。是の事を見已つて即ち寶樹を見ん。寶樹高妙にして五千由旬なり。其の樹常に黄金、白銀を出して七寶莊嚴せり。樹下に自然に寶の師子の座

に止觀を引いて般舟三昧なりと爲せり、般舟は翻じて佛立と云ふなり。今按するに下の經文は先づ佛國土を見、然る後佛身に及ぼすの狀歴然なり、故に諦觀の下にも俱寶地寶座及び寶樹を見て諸佛を見たてまつらす等と云へり、若し已に般舟三昧を得ば何ぞ斯ることあるべけんや、故に今の諸佛現前三昧は塵きにはれ百八三昧の中の大莊嚴三昧なるべし。後の文大莊嚴の心を發せる者と云ふは暗に之れに當れる聲、後賢更に詳にせよ。

【三】 妙法華經、法師功德品を指すなり。

【三】 百千萬億旋陀羅尼、本經普賢品の註を見るべし。

【三】 正通知の身、正通知は如來十號の一、即ち佛身を云ふなり。

【三】 (原文) 此大乘經典、諸佛

有り。其の師子の座の高さ二千由旬なり。其の座の上に亦百寶の光明を出す。是の如く諸樹及び餘の寶座、一一の寶座に皆百寶の光明有り。是の如く諸樹及び餘の寶座、一一の寶座に皆自然の五百の白象有り。象の上に皆普賢菩薩有り。爾の時に行者諸の普賢を禮して、是の言を作せ、「我何の罪有てか但寶地、寶座及び寶樹を見て、諸佛を見たてまつらざる」と。是の語を作し已りなば、一一の座の上に一りの世尊有しなさん。端嚴微妙にして寶座に坐したまへり。諸佛を見たてまつり已つて、心大に歡喜して、復更に大乘經典を誦習せん。大乘の力の故に、空中に聲有つて讚嘆して言はん、「善哉善哉、善男子、汝大乘を行する功德の因縁をもつて能く諸佛を見たてまつる。今諸佛世尊を見たてまつることを得たりと雖も、而も釋迦牟尼佛、分身の諸佛、及び多寶佛塔を見たてまつること能はず」と。空中の聲を聞き已つて、復勤めて大乘經典を誦習せん。大乘方等經を誦習するを以ての故に、即ち夢中に於て釋迦牟尼佛、諸の大衆と與に、耆闍崛山に在しまして、法華經を説き一實の義を演べたまふを見ん。教已りなば懺悔し渴仰して見たてまつらんと欲し、合掌胡跪して、耆者崛山に向つて是の言を作せ、「如來世雄は常に世間に在ます。我を愍念したまふが故に、我が爲に身を現じたまへ」

寶藏、十方三世諸佛眼目、出生三世諸如來種、持此經者、即拜佛身、即行佛事、當知是人即是諸佛所使、諸佛世尊之所覆、諸佛如來眞實法子、汝行大乘不斷法種此大乘經典とは餘經を指さず、但法華を稱して此と云ふなり、何となれば法華部の觀經にして此と稱するが故なり、夫れ方便品の時に獨り法華を大乘と名づく、豈にその結經に來つて忽ち違つて餘經を指さんや、故に今の觀經の中大乘方等の語皆正しく法華を稱して云ふなり、異解すべからず。

と。是の語を作し已つて耆闍崛山を見るに、七寶莊嚴して、無數の比丘聲聞大衆あり、寶樹行列し、寶地平坦に、復妙寶師子の座を敷けり。釋迦牟尼佛眉開の光を放ちたまふ。其の光遍く十方世界を照らし、復十方無量の世界を過ぐ。此の光の至る處の十方分身の釋迦牟尼佛一時に雲のごとく集り、廣く妙法を説きたまふこと妙法華經の如し。一一の分身の佛、身は紫金の色なり。身量無邊にして師子の座に坐し、百億無量の諸大菩薩を以て眷屬と爲したまへり。一一の菩薩、行普賢に同じ。此の如く十方無量の諸佛の菩薩の眷屬も亦復是の如し。大衆雲集し已つて、釋迦牟尼佛を見たてまつれば、

舉身の毛孔より金色の光を放ちたまふ。一一の光の中に百億の化佛有す。

諸の分身の佛眉開の白毫大人相の光を放ちたまふ。其の光釋迦牟尼佛の頂に流入す。此の相を見る時、分身の諸佛一切の毛孔より金色の光を出

【三五】 宿命通 六道の一にして過去宿世の事を洞見する神通力を云ふなり。

したまふ。一一の光の中に復恒河沙微塵數の化佛有す。爾の時に普賢菩薩、復眉開の大人相の光を放つて行者の心に入れん。既に心に入り已りなば、行者自ら過去無數百千の佛の所にして大乘經典を受持し誦誦せしことを憶し、自ら故の身を見るに、了了分明にして 宿命通の如く等しくして異なること有ること無けん。豁然として大悟し、旋陀羅尼、百千萬億の諸の陀羅尼門を得ん。三昧より起つて、面り一切の分身の諸佛衆寶樹の下に師子の床に坐したまへるを見たてまつらん。復瑠璃の地に蓮華聚の如きあり、下方の空中より涌出して、一一の華の間に微塵數の菩薩有つて結跏趺坐するを

見ん。亦普賢の分身の菩薩彼の衆の中に在つて大乘を讚説するを見ん。時に諸の菩薩、異口同音に行者をして六根を清淨ならしめん。或は説いて言ふこと有らん、汝當に佛を念すべし。或は説いて

言ふこと有らん、汝當に法を念すべし。或は説いて言ふこと有らん、汝當に佛を念すべし。或は説いて言ふこと有らん、汝當に戒を念すべし。或は説いて言ふこと有らん、汝當に天を念すべし。此の如き六法は是れ菩提心なり。菩薩を生ずる法なり。

汝今應當に諸佛の前に於て、先罪を發露し、至誠に懺悔すべし、無量世に於て、眼根の因縁をもつて諸色に貪著す。色に著するを以ての故に諸塵を貪愛す。塵を愛するを以て

の故に女人の身を受けて、世世に生ずる處において諸色に惑著す。色汝が眼を壞つて恩愛の奴と爲る。故に色汝をして三界を經歷せしむ。此の弊使

の爲めに盲にして見る所無し。今大乘方等經典を誦す。此の經の中に十方の諸佛色身滅せずと説けり。汝今見ることを得つ、審實にして爾りや不や。眼根の不善汝を傷害すること多し。我が語に隨順して、諸佛、釋迦牟尼佛に歸向したてまつり、汝が眼根の所有の罪咎

を説け。「諸佛、菩薩の慧眼の法水、願はくは以て洗滌して、我をして清淨ならしめたまへ」と。是の語を作し已つて遍く十方の佛を禮し、釋迦牟尼佛、大乘經典に向ひたてまつりて、復是の言を説け。

「我が今懺する所の眼根の重罪、障蔽穢濁にして盲にして見る所無し。願はくは佛大慈をもつて哀愍

【三】或は等、已下念佛、念法、念僧、念戒、念施、念天、これを六念と云ふなり。
【毛】此の經の中、法華の中の壽量品を指すなり。

覆護したまへ。普賢菩薩大法船に乗つて、普く一切の十方無量の諸の菩薩の伴を度したまへ、唯願はくは哀愍して我が眼根の不善惡業障を悔過する法を聽したまへ」と。是の如く三たび説いて五體を地に投じて、大乘を正念して心に忘捨せざれ。是れを眼根の罪を懺悔する法と名づく。諸佛の名を稱し、燒香、散華して、大乘の意を發し、繪、旛、蓋を懸けて、眼の過患を説き、罪を懺悔せば、此の人現世に釋迦牟尼佛を見たてまつり、及び分身、無量の諸佛を見たてまつり、阿僧祇劫に惡道に墮せじ。大乘の力の故に、大乘の願の故に、恒に一切の陀羅尼菩薩と與に共に眷屬と爲らん。是の念を作す者は是を正念と爲す。若し佗念する者を名づけて邪念と爲す。是れを眼根の初の境界の相と名づく。眼根を淨むること已つて、復更に大乘經典を讀誦し、晝夜六時に胡跪し懺悔して是の言を作せ、「我今云何ぞ但釋迦牟尼佛、分身の諸佛を見たてまつりて、多寶佛塔全身の舍利を見たてまつらざる。多寶佛塔は恒に在しまして滅したまはず。我濁惡の眼なり。是の故に見たてまつらず」と。是の語を作し已つて復更に懺悔せよ。七日を過ぎ已つて、多寶佛塔地より涌出したまはん。釋迦牟尼佛即ち右の手を以て其の塔の戸を開きたまはん。多寶佛を見たてまつれば、普現色身三昧に入りたまへり。一一の毛孔より恒河沙微塵數の光明を流出したまふ。一一の光明に百千萬億の化佛有す。此の相現する時、行者歡喜して讚偈をもつて塔を遶ること、七市を滿じ已り

【三八】陀羅尼菩薩。陀羅尼を具得せる菩薩を云ふ、天台の序品の釋に横豎の二義ありて、横に約せば初住、豎に約せば十地の中の第二地に到つて陀羅尼を具得するなり。

なば、多寶如來大音聲を出して讚めて言はん、「法の子、汝今眞實に能く大乘を行じ、普賢に隨順して眼根懺悔す。是の因縁を以て、我汝が所に至つて汝が證明と爲る」と。是の語を説き已つて、讚めて言はく、「善哉善哉、釋迦牟尼佛、能く大法を説き、大法の雨を雨らして、濁惡の諸の衆生等を成就したまふ。」是の時に行者、多寶佛塔を見已つて、復普賢菩薩の所に至つて、合掌し敬禮して白して言せ、大師、我に悔過を教へたまへ」と。

普賢復言さく、「汝多劫の中に於て、耳根の因縁をもつて、外聲に隨逐して、妙音を聞く時は心に惑著を生じ、惡聲を聞く時は、百八種の煩惱の賊害を起す。此の如き惡耳の報惡事を得、恒に惡聲を聞いて諸の攀縁を生ず。顛倒して聽くが故に、當に惡道、邊地、邪見の法を聞かざる處に墮すべし。汝今日に於て大乘の功德海藏を誦持す。是の因縁を以ての故に、十方の佛を見たてまつり、多寶佛塔は現じて汝が證と爲りたまふ。汝自ら當に己が過惡を説いて諸罪を懺悔すべし。」是の時行者、是の語を聞き已りなば、復更に合掌して五體を地に投じて是の言を作せ、「正遍知世尊、現じて我が證と爲りたまへ。我等經典は爲れ慈悲の主なり。唯願はくは我を觀、我が所説を聽きたまへ。我多劫より乃至全身まで、耳根の因縁をもつて、聲を聞いて惑著すること、膠の草に著くが如し。諸の惡聲を聞く時は煩惱の毒

【三九】 百八種の煩惱。開經十功德品の註を看るべし。
 【四〇】 惡道等。惡道は三惡道の邊地は佛法の到らざる邊障の地、邪見に佛法を容れざる外道國、この三處は並に法を聞かざるの處なり。
 【四一】 功德海藏。法華を指して功德海藏と云ふなり。天親の法華論に法華の十七異名を擧げ、その第七名一切諸佛藏を釋して如來功德三昧の藏此の經に在るが故にと云へり。

を起し、處處に惑著して暫くも停まる時無し。此の弊聲を出して我が識神を勞し、三塗に墜墮せしむ。今始めて覺知して、諸の世尊に向ひたてまつりて發路懺悔す」と。既に懺悔し已つて、多寶佛の大光明を放ちたまふを見たてまつらん。其の光金色にして、遍く東方及び十方界を照らしたまふ。無量の諸佛身眞金の色なり。東方の空中に是の唱言を作す。「此に佛世尊まします、號を善徳と曰ふ。亦無數の分身の諸佛あり、寶樹下の師子の座の上に坐して結跏趺坐したまへり」と。是の諸の世尊の一切皆普現色身三昧に入りたまへる、皆是の言を作して、讚めて言はく、「善哉善哉、善男子、汝今大乘經典を讀誦す。汝が誦する所は是れ佛の境界なり。」是の語を説き已つて、普賢菩薩復更に爲に懺悔の法を説かん。「汝先世無量劫の中に於て、香を貪るを以ての故に、分別の諸の識より處處に貪著して、生死に墮落せり。汝今當に大乘の因を觀すべし。大乘の因とは諸法實相なり」と。是の語を聞き已つて、五體を地に投じて復更に懺悔せよ。既に懺悔し已りなば、當に是の語を作すべし。「南無釋迦牟尼佛、南無多寶佛塔、南無十方釋迦牟尼佛分身諸佛」と。是の語を作し已つて、遍く十方の佛を禮したてまつれ、「南無東方善徳佛及び分身諸佛」と。眼に見る所の如くして、一一に心をもつて禮し、香華をもつて供養し、供養すること畢つて、胡跪し合掌して、種種の偈を以て諸佛を讚歎したてまつり、既に讚歎し已つて、

十惡業を説いて諸罪を懺悔せよ。

【四二】(原文)。汝今應當觀大乘因。大乘因者、諸法實相。

天台の女義にこの文を引き次に大乘果者、亦諸法實相と云へり。

【四三】十惡業。殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、兩舌、惡口、

既に懺悔し已りなば是の言を作せ、「我先世無量劫の時に於て、香、味、觸を貪つて衆惡を造作せり。是の因縁を以て、無量世より來恒に地獄、餓鬼、畜生、邊地、邪見の諸の不善の身を受く。此の如き惡業を今日發露し、諸佛正法の王に歸向したてまつりて說罪懺悔す」と。既に懺悔し已つて、身心懈らずして、復更に大乘經典を讀誦せよ。大乘の力の故に空中に聲有つて告げて言はん、「法の子、汝今應當に十方の佛に向ひたてまつりて大乘の法を讚說し、諸佛の前に於て自ら己が過を説くべし。諸佛如來は是れ汝が慈父なり。汝常に自ら舌根の所作の不善惡業を説くべし。此の舌根は惡業の想に動せられて、妄言、綺語、惡口、兩舌、誹謗、妄語、邪見の語を讚歎し、無益の語を説く。是の如き衆多の諸の雜惡業、鬪造壞亂して、法を非法と説く。是の如き衆罪を今悉く懺悔す」と。諸の世雄の前にして是の語を作し已つて、五體を地に投じて遍く十方の佛を禮したてまつり、合掌長跪して當に是の語を作すべし。此の舌の過患無量無邊なり。諸の惡業の刺は舌根より出づ。正法輪を斷すること此の舌より起る。此の如き惡舌は功德の種を斷ず。非義の中に於て多端に強ひて説き、

貪欲、瞋恚、愚癡の十罪惡業なり。その中殺生、偷盜、邪淫の三は身の罪惡業、妄語、綺語、兩舌、惡口の四は口の罪惡業、貪欲、瞋恚、愚癡の三は意の罪惡業、よりて之れ本身三口四意三と云ふ、即ち三業の罪なり。

【四】妄言等。妄言は言ふべからざることを浪りに言ふこと、俗にお喋り。綺語は飾り言、俗にお世辭。惡口は他を害する言、俗ににくまれ口。兩舌は甲乙雙方へ調子を合はせて言ふこと、俗に二枚舌。誹謗は他人の惡を擧げて言ふこと、俗にそしりこと。妄語は詐ること俗にうそつき。

【五】鬪造。鬪は争、造は和、和すべきに争ひ、争ふべきに和す、即ち鬪造壞亂なり。以て法を非法と説くの前提詞と爲すなり。

邪見を讚歎すること火に薪を益すが如し。猶ほ猛火の衆生を傷害するが如し。毒を飲める者の瘡疣無くして死するが如し。是の如き罪報惡邪不善にして、當に惡道に墮すること百劫、千劫なるべし。妄語を以ての故に大地獄に墮す。我今【四〇】南方の諸佛に歸向したてまつりて、黑惡を發露せん」と。

是の念を作す時空中に聲有らん。南方に佛有す、梅檀徳と名づけたてまつる。彼の佛に亦無量の分身有す。一切の諸佛皆大乘を説いて罪惡を除滅したまふ。此の如き衆罪を、今十方無量の諸佛大悲世尊に向ひたてまつりて、黑惡を發露し、誠心に懺悔せよ」と。是の語を説き已りなば、五體を地に投じて復諸佛を禮したてまつれ。是の時に諸佛、復光明を放つて行者の身を照らして、其の身心をして自然に歡喜せしめ、大慈悲を發し普く一切を念せしめん。爾の時に諸佛、廣く行者の爲に【四一】大慈悲及び喜捨の法を説き、亦【四二】愛語を教へ、【四三】六和敬を修せしめん。爾の時に行者、此の教敎を聞き已つて心大に歡喜して、復更に誦習して、終に懈怠せざらん。空中に復微妙の音聲有つて、是の如き言を出さん。汝今應當に身心を懺悔すべし。身とは殺、盜、姪なり。心とは諸の不善を念するなり。十惡業及

【四六】 正法輪。善く邪惡を摧伏するを以て輪を法に喩ふ。法即ち輪なり、即ち如來の教法を正法輪と云ふなり。

【四七】 南方。異本南無に作るは非なり。次下空中の聲南方の佛を示すを念ふべし。舌根の懺悔は南方を主とす、五根を五方に配する時舌は南方なるが故なり。後の身心懺悔に中央毘盧遮那を説示する等皆この旨なるに由る。輕忽に文を看過すべからざるなり。

【四八】 大慈悲及び喜捨。即ち四無量心なり。

【四九】 愛語。四攝法の一を擧げて他の三を略す、四攝法は本經提婆品の註を看るべし。

【五〇】 六和敬。同戒、同見、同行、身慈、口慈、意慈の六種和敬なり。

【五一】 五無間。無間地獄に就て趣果、受苦、時、命、形の五

び 五無間を造ること、猶ほ猿猴の如く、亦 獼膠の如く、處處に貪著して、遍く一切六情根の中に至る。此の六根の業、枝條華葉悉く三界、二十五有、一切の生處に満てり。亦能く無明、老、死、十二の苦事を増長す。【五】八邪、八難中に經ざること無し。汝今應當に是の如き惡不善の業を懺悔すべし」と。爾の時に行者此の語を聞き已つて、空中の聲に問ひたてまつる、「我今何れの處にして懺悔の法を行せん」と。時に空中の聲即ち是の語を説かん、「【五】釋迦牟尼佛を毘盧遮那遍一切處と名づけたてまつる。其の佛の住處を常寂光と名づく。常波羅蜜に攝成せられたる處、我波羅蜜に安立せられたる處、淨波羅蜜の有相を滅せる處、樂波羅蜜の身心の相に住せざる處、有無の諸法の相を見ざる處、如寂解脫、乃至般若波羅蜜なり。是の色常住の法なるが故に。是の如く應當に十方の佛を觀じたてまつるべし」と。時に十方の佛、各右の手を申べて行者の頭を摩でて、是の如き言を作したまはん、「善哉善哉、善男子、汝今大乘經を讀誦するが故に、十方の諸佛懺悔の法を説きたまふ。菩薩の所行は結使を斷せず。使海に住せず。心を觀するに心無し。顛倒の想より起る。此の如

の無間の義あるより、無間地獄をば五無間獄と云ふなり。五逆の墮處なるが故に五無間と云ふ説もあり。

【五二】 獼膠。獼もち。膠にかば。

【五三】 十二の苦事。十二因縁を云ふ。即ち無明老死はその始終なり。

【五四】 八邪。生、滅、去、來、一、異、斷、常の八邪執を云ふ。

【五五】 八難。在地獄、在畜生、在餓鬼、在長壽天、在北鬱單越、盲聾瘖瘂、世智辯聰、生佛前佛後、この八種は正法を聞くこと難ければ八難と云ふなり。

【五六】 (原文) 釋迦牟尼佛名毘盧遮那遍一切處、其佛住處名常寂光、常波羅蜜所攝成處、我波羅蜜所安立處、淨波羅蜜滅有相處、樂波羅蜜不住身心相處、不見有無諸法相處、如寂

き相の心は妄想より起る。空中の風の依止する處無きが如し。是の如き相は生ぜず没せず。何者か是れ罪、何者か是れ福。我心自ら空なれば罪福主無し。一切の法は是の如く住無く壞無し。是の如き懺悔は心を觀するに心無し。法、法の中に住せず。諸法は解脱なり。滅諦なり。寂靜なり。是の如き相をば大懺悔と名づけ、大莊嚴懺悔と名づけ、無罪相懺悔と名づけ、破壞心識と名づく。此の懺悔を行する者は、身心清淨にして、法の中に住せざること、猶ほ流るる水の如し。念念の中に普賢菩薩及び十方の佛を見たてまつることを得ん。時に諸の世尊、大悲光明を以て、行者の爲に無相の法を説きたまはん。行者第一義空を説きたまふを聞きたてまつらん。行者聞き已つて、心驚怖せず。時に

解脱、乃至般若波羅蜜、是色常住法故。

此の文をば天台は法華結成の文と稱せり、觀普賢經を法華の結經と爲す所以正しく茲に在るなり。

毘盧遮那 (Vairocana) 是れ印度に在りては日の別名なり、除暗通明を義と爲す、故

に亦遍光明照と翻す、普遍せる光明十方を照すの意なり。然るに但光明のみならず、色

身亦普通なるが故に遍一切處と云ふ、今文の旨即ち是れなり。此に準すれば毘盧遮那は

是れ釋尊なり、釋尊の外に毘盧遮那あるに非ざるなり。彼の眞言密教の一流全く此本義

か失ふ、悲傷すべきことなり。常寂光とは法身所居の土なり。而も今法華壽量の經意に

従ふが故に直ちに靈山を指す。其佛住處と云へるは是れ

なり、この靈山を常寂光と名づく、この處即ち身心懺悔の處なり、本門戒壇の處なり、故に吾等行人の住處即ち常寂光の靈山なるなり、佛身已に十方に遍ぜり、その住處たる靈山亦十方に遍して邊際なきの理を念ふべし、是れ實に本國土妙の深義なり。

常波羅蜜以下有無の諸法の相を見ざる處までは是れ四德波羅蜜なり、この四德波羅蜜は

即ち常寂光の相なり。故に一一に處と云ふ、これ皆上の行人の我今何れの處にしてか懺悔の法を行ぜんと云へるに對して示したるなり。この四德

波羅蜜は本化四大士の所表なること常途に言ふが如し。

如寂解脱等とは常寂光の四德波羅蜜の處は眞如なり。大

寂涅槃なり、眞正解脱なり、乃至般若波羅蜜の究竟智度一

是れに由つて狂心を起すこと、猶ほ癡なる猿猴の如し。但當に大乘を誦し、法の空無相を觀すべし。

永く一切の惡を盡くして、天耳をもつて十方を聞かん。鼻根は諸香に著して、染に隨つて諸觸を起す。

此の如き狂惑の鼻、染に隨つて諸塵を生ず。若し大乘經を誦し、法の如實際を觀せば、

永く諸の惡業を離れて、後世に復生せし。舌根は 五種の、惡口の不善業を起す。

若し自ら調順せんと欲せば、勤めて慈心を修し、法の眞寂の義を思うて、諸の分別の想無かるべし。

心根は猿猴の如くにして、暫くも停まる時有ること無し。若し折伏せんと欲せば、當に勤めて大乘を誦し、

佛の大覺身、力無畏の所成を念じたてまつるべし。身は爲れ機關の主、塵の風に隨つて轉ずるが如し。

六賊中に遊戯して、自在にして罣礙無し。若し此の惡を滅して、永く諸の塵勞を離れ、

は獨り能く五眼を具足したまふなり。

三種身は自性、受用、變化の三身を云ふ。自性身は法身、受用身は報身、變化身は應身なり。

【六】 五種。惡語、害語、苦語、龜語、弊語の五種なり。惡は好に對し、害は利に對し、苦は甘に對し、龜は鞭に對し、弊は美に對する稱なり。

【七】 六賊。六根の分別の識、即ち第六意識を賊に喩へて云ふなり。

常に涅槃の域に處し、安樂にして心憍怕ならんと欲せば、當に大乘經を誦して、諸の菩薩の母を念すべし。

無量の勝方便は、實相を思ふによつて得。此の如き等の六法を、名づけて六情根と爲す。

(三)一切の業障海は、皆妄想より生ず。若し懺悔せんと欲せば、端坐して實相を念へ。

衆罪は霜露の如し、慧日能く消除す。是の故に應に至心に、六情根を懺悔すべし。

是の偈を説き已つて、佛、阿難に告げたまはく、『汝今是の六根を懺悔し

普賢菩薩を觀する法を持つて、普く十方の諸天、世人の爲に廣く分別して説け。佛の滅度の後、佛の諸の弟子若し方等經典を受持し讀誦し解説すること有らば、應に靜處の若しは塚間、若しは樹下、阿練若處に於て、

方等を讀誦し大乘の義を思ふべし。念力強きが故に我が身及び多寶佛塔、十方分身の無量の諸佛、普賢菩薩、文殊師利菩薩、藥王菩薩、藥上菩薩を見たてまつることを得ん。法を恭敬するが故に、諸の

妙華を持つて空中に住立して、行持法の者を讚歎し恭敬せん。但大乘方等經を誦するが故に、諸佛

菩薩晝夜に是の持法の者を供養したまはん。佛、阿難に告げたまはく、『我賢劫の諸の菩薩及び十方の佛と與に、大乘眞實の義を思ふに因るが故

【六〇】六法の六根懺悔の法を云ふ。

【六一】(原文)。一切業障海、皆從妄想生、若欲懺悔者、端坐思實相、衆罪如霜露、慧日能消除、是故應至心、懺悔六情根。

【六二】阿練若。本經勸持品の註を看るべし。

に、百萬億阿僧祇劫の生死の罪を除却しき。此の勝妙の懺悔の法に因るが故に、今十方に於て各佛と爲ることを得たり。若し疾く阿耨多羅三藐三菩提を成せんと欲せん者、若し現身に十方の佛及び賢菩薩を見んと欲せば、當に淨く澡浴して淨潔の衣を著、衆の名香を燒き、空閑の處に在るべし。應當に大乘經典を讀誦し大乘の義を思ふべし。

佛、阿難に告げたまはく、『若し衆生有つて善賢菩薩を觀せんと欲せん者は、當に是の觀を作す者は是れを正觀と名づく。若し佗觀する者は是れを邪觀と名づく。佛の滅度の後、佛の諸の弟子、佛の語に隨順して懺悔を行せん者は、當に知るべし、是の人は善賢の行を行するなり。善賢の行を行せん者は惡相及び惡業報を見じ。其れ衆生有つて晝夜六時に十方の佛を禮したてまつり、大乘經を誦し、第一義甚深の空法を思はば、一彈指の頃に百萬億阿僧祇劫の生死の罪を除却せん。此の行を行する者は眞に是れ佛子、諸佛より生するなり。十方の諸佛及び諸の菩薩、其の和上と爲りたまふべし。是れを善薩戒を具足する者と名づく。』

爾の時に行者若し善薩戒を具足せんと欲せば、應當に合掌して、空

【六三】和上、異本和尚に作る、和閑、和閑利、等皆同じく梵語なり。然るに是れ于闐等の訛音にして、正音は郁波第耶(Uppalaya)なり。依學と翻す、この師に依りて戒を學するが故なり。又親教と翻す、親しくこの師より教戒を受くるが故なり。

【六四】善薩戒、大乘善薩戒を云ふ。然るに今この經は梵網璣珞等の善薩戒に異なりて、但讀誦大乘を戒の本體と爲す。法華の寶塔品に謂ふ所の是名持戒の戒體と全く同じきな

に成就し、應に一切人天の供養を受くべし。

閑の處に在つて、遍く十方の佛を禮したてまつり、諸罪を懺悔し、自ら己
 が過を説くべし。然して後に靜處にして、十方の佛に白して是の言を作せ、
 「諸佛世尊は常に世に住したまふ。我業障の故に方等を信ずと雖も佛を
 見たてまつること丁かならず。今佛に歸依したてまつる。唯願はくは釋迦
 牟尼佛正遍知世尊、我が和上と爲りたまへ。文殊師利具大慧者、願はくは
 智慧を以て我に清淨の諸の菩薩の法を授けたまへ。彌勒菩薩勝大慈日、
 我を憐愍するが故に亦我が菩薩の法を受くることを聽したまふべし。十方
 の諸佛、現じて我が證と爲りたまへ、諸大菩薩各其の名を稱して、是の
 勝大士、衆生を覆護し我等を助護したまへ。今日方等經典を受持したてま
 つる。乃至命を失ふまでにせん。設ひ地獄に墮ちて無量の苦を受くとも、
 終に諸佛の正法を毀謗せじ。是の因縁功德力を以ての故に、今釋迦牟尼佛、
 我が和上と爲りたまへ。文殊師利、我が阿闍黎と爲りたまへ。當來の
 彌勒、願はくは我に法を授けたまへ。十方の諸佛、願はくは我を證知したま
 へ。大徳の諸の菩薩、願はくは我が伴と爲りたまへ。我今大乘經典甚深
 の妙義に依つて佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依す」と。是の如く三た

り。

【六六】羯磨(Karma)、業、事、所作、作法、辦事等の諸翻あり。

授戒の時の業事作法にして之を示すものを羯磨師と云ふ。懺罪滅惡の業事作法なり。律の一派には「こんま」と云ひ、又「けん」とも云ふ。

【六六】爾の時に。以下自誓受戒の文なり。

【六七】阿闍黎。正音は阿遮利耶(Ācārya)なり。聖者、正行、應可行、軌範、傳授等の諸翻あり。羯磨師、傳授戒師、皆阿闍黎なり。今文殊は羯磨阿闍黎、彌勒は傳戒阿闍黎なれども、別して文殊を呼べるなり。

【六八】六重の法。不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒、不說四衆過罪。この六戒を六重と名づくること優婆塞戒經に見えたり。然るに今の意は大乗十重戒の中の六重なるべ

び説け。三寶に歸依したてまつること已つて、次に當に自ら誓つて (二六) 六重の法を受くべし。六重の法を受け已つて、次に當に勉めて無礙の梵行を修し、曠濟の心を發し、(二七) 八重の法を受くべし。此の誓を立て已つて、空閑の處に於て衆の名香を燒き華を散じ、一切の諸佛及び諸の菩薩、大乘方等に供養したてまつりて、是の言を作せ、我今日に於て菩提心を發しつ。此の功德を以て普く一切を度せん。是の語を作し已つて、復更に一切の諸佛及び諸の菩薩を頂禮し、方等の義を思へ。一日乃至三七日、若しは出家にもあれ、在家にもあれ、和上を須ひず、諸師を用ひず、(二八) 白羯磨せざれども、大乘經典を受持し讀誦する力の故に、普賢菩薩の助發行の故に、是れ十方の諸佛の正法の眼目なれば、

し。尙ほ後の八重の註に記せん。

【二六】 八重の法。智證の記には比丘尼の八重なりと爲せり、即ち不盜、不姪、不殺、不妄語、不觸男、屏處與男不立、不覆滅他罪、不隨攀比丘なり。然るに自誓受戒の行人一人にして前六重に更にこの八重の尼戒を受くると云ふは甚だ怪むべし。今按ずるに八重は前の六重に更に十重の中の不自讚毀他と、不謗三寶とを加ふるならん。即ち十重の中不貪、不瞋の二戒を略して先づ他の身口の戒を受くるの意ならん。八重は身口の戒なるが故なり。これに就て我が聖祖の御遺文大小戒事抄の中普賢經の自誓受戒作法を示すに亦十重戒に約したまへり、是れ今の文に對して大に考ふべきことなり。但し今の文に八重

と云ひて不貪、不瞋の二戒を略したるは、戒は身口を本と爲すの意を示すが故なり。即ち略すと雖も之を捨つるに非ず、先づ身口八重の戒を受けば必ずまた不貪不瞋の二戒を受くべきなり。已に菩薩戒を具せんと欲してこの自誓受戒あり、十重の中何ぞ永く二戒を捨てんや。この意に依るが故に聖祖は具さに十重を列したまふなり。若しこの六重八重を十重と爲さずんば聖祖の大小戒事抄は全く解すべからず、之を除いては經の前後に毫も十重のことを説かざればなり。問、若し十重に約せば應に一時に受くべし、何ぞ先づ六重にして後に八重なるや。答、瓔珞經によるに不説四衆過罪の次に不貪不瞋あり、今先づ身口を取るが故に乃ち六重を成す。又不貪、不瞋の

是の法に因り由つて、自然に五分法身の戒、定、慧、解脫、解脫知見を成就す。諸佛如來は此の法より生じ、大乘經に於て記莢を受くることを得たまへり。是の故に智者、若し聲聞の三歸及び五戒、八戒、比丘戒、三歸及び比丘尼戒、沙彌戒、沙彌尼戒、式又摩尼戒、及び諸の威儀を毀破し、愚癡、不善、惡邪心の故に多く諸の戒及び威儀の法を犯さん。若し除滅して過患無からしめ、還つて比丘と爲つて沙門の法を具せんと欲せば、當に勤修して方等經典を讀み、第一義甚深の空法を思うて、此の空慧をして心と相應せしむべし。當に知るべし、此の人は念念の頃に於て、一切の罪垢永く盡きて餘無けん。是れを沙門の法戒を具足し諸の威儀を具すと名づく。應に人天一切の供

下に不自讚毀他と不謗三寶とあり、不食不願を略するが故に乃ち八重を成す。戒の次第に隨つて而も中間を略するを以ての故に前後六八の受戒と爲るなり。凡そ是名持戒を戒體と爲すの行人にしてこの十重を受くるは戒具足の爲めなり。而も十重と云ふと雖も他の大乘の當分に約するに非ず、皆法華に開會して是名持戒の王戒に附する臣戒と爲して之を用ふるなり。此等の意亦大小戒事抄に示すを看るべし。

【七〇】 白羯磨。戒作法の白四羯磨を云ふ。道宣の羯磨疏卷一に委し。

【七一】 三歸。歸依佛、歸依法、歸依僧、これを三歸戒と云ふなり。

【七二】 五戒。殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒なり。以下聲聞の七衆戒にして、五戒と次の八戒は優婆塞優婆夷の二衆の戒なり。

【七三】 八戒。前の五戒に塗飾香鬘と歌舞觀聽麁座高床と過中食との三を加ふるなり、之を八齋戒とも云ふなり。

【七四】 比丘戒。比丘(Bhikkhu)男の大僧の持つ戒にて二百五十戒あり、即ち七衆戒の中の比丘衆の戒なり。

【七五】 比丘尼戒。比丘尼(Bhikkhuni)女の大僧の持つ戒にて五百戒と稱せり、然れども律の實數は三百四十八戒なり、即ち七衆戒の中の比丘尼衆の戒なり。前の比丘戒とこの比丘尼戒とを共に具足戒と稱せり。

【七六】 沙彌戒。沙彌(Samanna)男の小僧の持つ戒にて十戒あり、前の八戒に齋齋戒を別に數へ、更に捉金銀寶を加ふ。

養を受くべし。若し優婆塞、諸の威儀を犯し不善の事を作さん。不善の事を作すと、所謂佛法の過惡を説き、四衆の所犯の惡事を論説し、偷盜、姪姪にして慙愧有ること無きなり。若し懺悔して諸罪を滅せんと欲せば、當に勤めて方等經典を讀誦し第一義を思ふべし。若し王者、大臣、婆羅門、居士、長者、宰官、是の諸人等貪求して厭くこと無く、(五) 五逆罪を作り、方等經を謗じ、十惡業を具せん。是の大惡報應に惡道に墮つべきこと暴雨よりも過ぎん。必定して當に阿鼻地獄に墮つべし。若し此の業障を滅除せんと欲せば、慙愧を生じて諸罪を改悔すべし。』

佛の言はく、『云何なるをか (六) 刹利、居士の懺悔の法と名づくる。刹利、居士の懺悔の法とは、但當に正心にして、三寶を謗せず、出家を障へず、梵行人の爲に惡留難を作さざるべし。應當に繫念して、六念の法を修すべし。亦當に大乘を持つ者を供給し供養し、必ず禮拜すべし。應當に甚深の經法、第一義空を憶念すべし。是の法を思ふ者、是れを刹利、居士の第一の懺悔を修すと名づく。第二の懺悔とは、父母に孝養し、師長を恭敬する、是れを第二の懺悔の法を修すと名づく。第三の懺悔とは、正法をも

即ち七衆の中の沙彌戒なり。

【七】沙彌尼戒、沙彌尼 (Śālisthā) 女の小僧の持つ戒なり。七衆に分かつが故に沙彌尼戒と云ふなれども全く前の沙彌戒に同じきなり。

【六】式又摩尼戒、式又摩尼 (Śikṣamānī) は沙彌尼と比丘尼との中間の位にして年十八に及べば比丘尼たるの前準備として六法を學す、故に式又摩尼を學法女と翻じ、又正學女と翻す。六法とは殺畜生、盜三錢、摩觸、小妄語、飲酒、非時食なり、この六法即ち七衆の中の式又摩尼戒なり。尙ほ式又摩尼の三學あれども、三學は戒とは言はざるなり、式又摩尼、多くは式又摩那と書けり。

【七】五逆罪。殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血なり。

つて國を治め、人民を邪枉せざる、是れを第三の懺悔を修すと名づく。第四の懺悔とは、(一)六齋日に於て、諸の境内に殺して、力の及ぶ所の處に不殺を行せしむ。此の如き法を修する、是れを第四の懺悔を修すと名づく。第五の懺悔とは、但當に深く因果を信じ、一實の道を信じ、佛は滅したまはずと知る。是れを第五の懺悔を修すと名づく。」

佛、阿難に告げたまはく、「未來世に於て、若し此の如き懺悔の法を修習すること有らん時、當に知るべし、此の人は慙愧の服を著、諸佛に護助せられて、久しからずして當に阿耨多羅三藐三菩提を成すべしと。」是の語を説きたまふ時、十千の天子は、(一三)法眼淨を得、彌勒菩薩等の諸大菩薩及び阿難は、佛の所説を聞きたてまつりて歡喜し奉行しき。

國譯佛說觀普賢菩薩行法經 終

【八】刹利。具さには刹帝利 (Kshatriya) 印度四姓の一にして王種の稱なり。

【九】六齋日。白月の八、十四、十五の三日、黒月の二十三、二十九、三十の三日を合せて六齋日と稱す。この日は四天王の四天下を巡察する日なれば齋戒すべしとの事より起れば齋戒すべしとの事より起れば別敬の初地に當るなり。

【一〇】法眼淨。五眼の中の法眼の清淨を得て分明に諸法差別の相を諦觀し一切障礙あること無きを云ふ。小乗の慧眼見諦を法眼淨と名くるに同じからず、この法眼の清淨を得るは圓の菩薩の初住の位にして別敬の初地に當るなり。

(一)曹魏天竺 (二)三藏 (三)康僧鎧譯 (佛說無量壽經)

(四)宋 元嘉中 (五)晁良耶舍譯 (佛說觀無量壽經)

(七)姚秦三藏法師 鳩摩羅什奉詔譯 (佛說阿彌陀經)

淨土三部經解題

【淨土三部經】 淨土宗真宗等 依用する

彌陀の三部を淨土三部經と名く。(一〇)法華三

部、(二)大日三部、(三)鎮護國家三部、(四)彌勒

三部等に倣へる也。彌陀の三部とは無量壽

經觀無量壽經と阿彌陀經とにして、俱に

(五)正しく往生淨土を明すの教なり。この

三部を一括するの義は、遠く印度の (三)天

解題

【一】皇紀八八〇、曹丕魏文帝となり五帝五十九年を云ふ。

【二】三藏。經律論の三を受持し通達せるを云ふ。

【三】梁僧傳に嘉平の末來りて四部經を譯すと云ふ、皇紀九一二頃。十二譯説には第四譯とす。

【四】劉宋。(皇紀一〇八〇—一一三八)

【五】宋文帝の年號、元年甲子允

恭帝十三年、西紀四二四年。本經は元嘉七八年頃の譯なるべし。

【六】晁良耶舍(Kaishya)譯時稱、梁高僧傳第三、元嘉初期來朝、僧舍の請により譯出す。

【七】後秦姚興帝弘始四年、履仲天皇三年、西紀四〇二年。

【八】鳩摩羅什(Kumajiva)童壽と譯す。傳菩薩、梁高僧傳、

親菩薩に基き、曇鸞善導兩師を経て我が法然上人に至りて定まる。菩薩の往生論

に無量壽經と題するもの、言從容たるを以て別申論と見る者あるも、曇鸞の

(一) 論註は三經通申とするもの、如し。

(二) 道綽 迦才等淨土教義を汎く諸經論

に探るに反し、善導が讀誦正行を辨

じて一心專讀誦此觀經彌陀經無量壽經等と

云ふに至り淨土三部の義殆ど定ると雖、等

の言尙不定なり。(三) 選擇集が彌陀三部者

是淨土正依經也と云ふに至りて全く確定

せり。(四) 大小の經法多く、傍に淨土を

明すもの少からざるも、専ら念佛を宗とし

往生を體とし、西方の指南たるもの、この

三藏記等に出づ。

【九】三經一論を正依經論とす、彌陀三部と天親の往生論となり。

【一〇】法華三經、無量壽經、法華經、普賢觀經。

【一一】大日三部、大日經、金剛頂經、蘇悉地經。

【一二】法華經、仁王經、金光明經。

【一三】上生經、下生經、成嵬經。

【一四】選擇集第一章に云ふ。往生淨土門者、就此有二、一者正明往生淨土之教、二者傍明往生淨土之教。

【一五】天親は新譯世親、原名婆藪槃頭。

【一六】通稱往生論具さに無量壽經うたがひしやくんしやくりひ優婆提舍願生偈と云ふ。後號菩提流支の譯。

【一七】智昇經錄、智光の往生論記等然りと云ふ。

【一八】論註上、釋迦牟尼佛在王舍城及舍衛國於大衆之中說無量壽佛莊嚴功德、即以佛名號爲經體。後文に云、王舍城所說無量壽經云と、これ今の無量壽經即ち大經なり。

又云、舍衛國所說無量壽經云と、これ今の阿彌陀經即ち小經なり。觀經は前後に觀無量壽經として引用す。されど論の依修多羅を釋して是三藏外大乘修多羅と云ひ、獨り淨土三經と斷ぜず。

【一九】その著安樂集。

【二〇】その著淨土論。

【二一】觀經疏散善義就行立信。

【二二】第一章私釋。三部經釋には雙卷經、觀經、阿彌陀經、これを淨土三部經といふとせり。

【二三】開元錄所載二千二百七十八

三經に如くものなし。蓋しこれ上衍の極致不退の風航たるもの、仰ぎて信じ俯して奉すべき金典なり。

【無量壽經】一、原本。この經の原本印度

に如何に流傳せるか詳ならず。支那の

(一五)古譯本同じからざるによるも、(一六)十住

論所抄の經文亦異なるによるも、(一七)刊寫

所傳の梵本亦別なるに照すも、夙に異本鈔

からざるを知るのみ。本書梵本と云ふは馬

翁南條博士によりて刊行せられたるもの

を指す。若し原本の成立傳來を明かにせん

とせば、本文比較と一般大乘聖典發達とに

徴せざるべからず。今これを論せず。

二、譯本 支那譯經に關しては通常智昇

解題

部七千四十六卷、その後の譯出及び未譯頗る多し。

【一四】道緯迦才宗曉源信等搜引する所多きも、繼成の阿彌陀佛

說林近くに淨土宗全書一、傍說淨土教論集を見よ。

【一五】二の譯本解を見よ。

【一六】龍樹造十住毗婆沙易行品、羅什譯。

【一七】Anecdota Oxoniensia, Aryan series, Vol. I, part II, Sukhavatī Vyūha Ed. F. Max Müller and Bunyū Nanjo, Oxford, 1883.

【一八】尼波爾所傳寫本傳來。

【一九】大藏經目錄部、宋元以下の藏經その所定に従ひ追補す。

【二〇】一、佛說無量壽經二卷、後漢桓靈帝時、安息國沙門安世高譯。缺一。

二、佛說無量清淨平等覺經

二卷、又三卷若くは四卷、後漢月支國沙門支婁迦讖譯。存。本書平とし龜本とす。

三、佛說阿彌陀經二卷、内題佛說阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經、吳月支國優婆塞支謙恭明譯。存。本書阿とし支本とす。

四、佛說無量壽經二卷、曹魏嘉平四年印度沙門康僧鎧譯。存。今譯する所、本書とし康本とす。

五、佛說無量清淨平等覺經二卷、曹魏甘露三年龜茲沙門白延譯。缺一。

六、佛說無量壽經二卷、西晉永嘉二年沙門竺法護譯。缺一。

七、佛說無量壽至真等正覺經一卷、一名樂佛土經。

の (二) 開元錄を準とし、今經も 十二譯五存七缺と云ふを常とす。

若し單に諸錄を掇拾せば十五譯となるも、羅什、求那跋陀羅、玄奘の

三譯は小經にして今の大經にあらす。三藏記三寶記が羅什譯を、靜泰

錄が玄奘譯を、開元錄が德賢譯を加ふる誤濫を正して可なり。法力譯

は費長房が採録する所なるも確かならず、若し僧祐が失譯無量樂佛土

經一卷と云ふに同じくして、出譯ありとするも小經に外ならざるが

如し。僧祐は法力法秀の譯を云はず、法經錄に新無量壽經二卷宋世曇

摩密多(法秀)祇洹寺に譯すと云ふ。同じく疑似なりとするも法力譯を

撤して法秀譯を加ふるを可とす。安世高の第一譯を云ふは古錄に存せ

ずして費長房に始まる。依據記事信じ難きのみならず、世高所譯と傳

文とに徴して否定すべきを知る。支謙般舟三昧經を譯して彌陀思想を

傳ふるも平等覺經に至りては未だ彼の手に出でざるべし。現存本平は

龜茲白延譯に同視して可なり。覺賢寶雲の兩譯は同處同年の同名經に

して傳譯の關係より別本と見る能はず。以上略論する所によりて十二譯と云ふも支謙、僧鉉、白

一名極樂佛土經。東晉元
熙元年西域沙門竺法力
譯。缺。

八、新無量壽經二卷、宋永
初二年印度佛陀跋陀羅
(覺賢) 譯。缺。

九、新無量壽經二卷、宋永
初二年涼州沙門寶雲譯。
缺。

十、無量壽經一卷、宋元嘉
中中印沙門求那跋陀羅

(功德賢) 譯。缺。

十一、大寶積經卷第十七、十

八、無量壽如來會第五、

二卷、唐南印菩提流志(覺
希)譯。存。本書無とす。

十二、佛說大乘無量壽莊嚴經
三卷、宋西天沙門法賢譯。
存。本書莊とす。

延、法護、法秀、寶雲、覺希、法賢の八譯となる。更に古經錄を案ずるに (三) 僧祐は支謙、法護、

寶雲の三、(三三) 法經は白延、支謙、法護、覺賢、法秀、寶雲の六、(三三) 仁壽錄、(三三) 靜泰錄は白延、

支謙、法護とし、(三三) 憬興は (三三) 三代經を比較するに至る。支謙本を白

延に屬し、康僧鎧本を法護に歸す。此の如きは隋唐時代の本經傳譯の

意見なり。これを總括せば僧鎧、法護、法秀、覺賢、寶雲、は今の僧

鎧本の關係者と云ふべきが如し。別に三寶記に基く內典錄、開元錄、

貞元錄等の説ありて、通常十二代譯説とするもの却て信すべからざる

に似たり。要するに左の如きか、

一、支本阿支謙本、阿彌陀經二卷、吳黃武建興間、支謙譯、西紀約二二三——二二七

二、龜本平支謙本、無量清淨平等覺經二卷、魏高貴公時、龜茲白延譯、西紀約二五八

三、康本僧鎧本、無量壽經二卷、魏嘉平四二五二初譯、晉永嘉二年法護譯、西紀約三〇八

四、唐本無寶積本、無量壽如來會第五、二卷、唐菩提流志譯、西紀六九三——七一三

五、宋本莊大乘無量壽莊嚴經三卷、宋法賢譯西紀九八二——一〇〇一

若しかくの如くならば現存 (三七) 五本は殆ど本經譯出の全豹を傳ふと云ふべし。別に大阿彌陀

【三二】出三藏記第二。

【三三】衆經目錄第一。

【三四】結二、一八。

【三五】結二、二三。

【三六】無量壽經連義述文贊、續藏三十二ノ三。

【三七】魏白延、吳支謙西晉法護。

【三八】淨土宗全書第一卷。

經二卷あり、趙宋龍舒居士王日休紹興三十二年唐本以外の四本を刪補校正して五十六分とせるものなり。又後出阿彌陀佛偈經一卷あり、これ支識本の攝頌なり。

次に日本譯經としては惠隱開講以來訓讀行はれたるべきも、淨土教興隆以後讀誦盛行し、音義訓點次第に是正せられ、延書の刊行を見るに至る。本書は明治三十四年竹川辨中發行の國文淨土三部聖典を底本とせるが、これ此種の最善なるものとす。外に南條博士が梵本を和譯して支那五譯と對照せるもの四十一年に刊行せらる。

三、譯本の正異。これ等五譯存本の中に於て獨り第三を正依とし他を異譯とするは、四十八願具足して觀經所説と一致せると、第十八本願文の明瞭なると、曇鸞淨影以下の依準する所なると、流布最も廣きとによるも、早く流布して他の所依となれるは文義通暢なるが爲なり。而してこれ恐く康僧鎧所譯に基くも巨匠法護の斧鉞を經、更に曇摩密多佛陀跋陀羅の更新する所、六合山に寶雲の校訂を得て大成せるものなればなるべし。譯語新經に屬するものあると、隋錄法護を存とし寶雲を缺とせざると、寶雲の文辭を見とに於てこの感を深くす。憬興王日休の異譯經を對校せる、先德稀れに異譯文を引用せる、東域錄所出の一卷の平等覺經疏、若くは莊嚴經毛滯記の如き著作あるも異譯の依用多か

【三】補證に無量壽經異譯對映一

卷あり。

らずして正異の輕重その差頗る大なり。

四、本經の註疏。康僧鑑本の依用せらるる結果註疏少からず。支那に在ては曇鸞の略論淨土義一卷を首とし、靈裕、慧遠、吉

藏、圓測、善導、義寂、元曉、憬興、法位、玄

一、知玄、太賢等あり。慧琳は一切經音義第十にこれを辨ず。

近代の著には清の彭際清の起信論、王耕心の摩訶阿彌陀經衷

論等あり。この他未釋知らるるもの多きも此にこれを列ねず。存書大

概正續大藏中に網羅せらる。我邦には惠隱この經を宮中に講せしより

傳承相襲く、釋記少からざるべきも、古くは善珠、智憬、

靜昭、智光、良源、澄憲等の著ありと云ふ。法然上人に

は無量壽經釋一卷、和語三部經釋一卷あり。その後信瑞の三

部經音義集四卷聖覺の四十八願釋五卷あり。又隆寛の四十八願義四卷

稱名卷の義海十卷本願鏡五卷、等ありと云ふ。望西了慧に鈔七

卷大意一卷あり、良榮、知足、靈哲等これを敷衍す。禮阿に

【三九】東域傳燈目錄上。

【四〇】蕃鑑著、眞宗全書。

【四一】續藏貳編ノ十二ノ三。淨土宗全書一ノ六六六。

【四二】演空寺靈裕著無量壽經義疏二卷佚。

【四三】淨影寺慧遠著、義疏二卷、續藏三十二ノ二。淨全五。

【四四】嘉祥寺吉藏著、義疏一卷、續藏淨全同上。

【四五】西明寺圓測著、疏三卷佚。

【四六】光明寺善導著、彌陀義卷數未詳、或げ云ふ百卷、坊間一卷本あり偽書なり。

【四七】新羅義寂著、述義記三卷佚。

【四八】新羅元曉著、兩卷無量壽經宗要一卷、續藏三十二ノ三、淨全五。別に同著私記一卷ありと。

【四九】無量壽經連義述文贊三卷、續藏淨全同上。

大經開書四卷あり、了譽聖問の(六)頌義、聖聰の(六九)要註記、白辨の

(七)集解、岸了の(七二)要義、義山の(七三)隨聞記、觀徹の(七四)合讚、(七五)等あ

り、又加祐の科註六卷、空寂の鈔五卷、南楚の義苑七卷、炬範の略箋

八卷、圓澄の玄談一卷、補遺記四卷、慧空の開義六卷、峻誦の會疏十卷、

泰巖の海滯記二十二卷、道隱の(七六)甄解、性海の(七七)顯宗疏、慧雲の

大經(七八)安永錄(七九)等あり。近くは大經頭書、講述、五惡段辨釋、同

因果實驗錄、三部經鼓吹等の述作あり。

五、本經の大意。法然上人は釋して大意、立教開宗、淨教本末、釋

名、入文解釋の五段とす。一に大意とは釋迦彌陀諸佛衆生を攝取して

淨土に生せしむるに在り。二に立教開宗とは一代佛敎分れて聖道教と

淨土敎となる、大乘中往生淨土の法門を説くもの淨土敎にして本經を

の一なり。三に淨教本末とは往生敎にも餘を正とし兼て往生を明すは

枝末なり。此經は有具具足の正往生敎なり。四に釋名とは佛は能説の

覺者釋迦、説は口音陳唱、無量壽は所説の佛名即ち阿彌陀なり。經は

【六〇】義疏二卷。

【六一】記二卷。續藏三十二ノ二。上卷殘册。

【六二】疏三卷。僧徹これに註して疏法燈二卷を作る。

【六三】古述記一卷。

【六四】三卷。續藏三十二ノ三。

【六五】一卷。續藏同上。

【六六】讚鈔、註字釋各一卷。

【六七】私記一卷。

【六八】四十八願釋一卷、十最疏傳記、一卷。

【六九】四十八願釋一卷。

【七〇】同上。

【七一】同上及四十八願抄一卷。

【七二】又曰大經私記、淨全九漢語燈錄。

【七三】淨全九和語燈錄。

【七四】淨全十四。

【七五】鈔見聞八卷。

【七六】鈔名義辨事七卷、引據一卷。

梵ほんの修多羅しゆたらなり。五ごに入文解釋によもんげしやくとは一部兩卷分ちて三段、初はじめより「願樂ぐわんらくすらく聞ききたてまつらむと欲ほつす」までは序分じよぶん、次つぎに乃往過去ないわうくわこより下卷げくわんの「略りやくしてこれを説とけるのみ」までは正宗分しやうじゆぶん、以下流通分いかにるづらうぶんなり。序じよに二に、一いちに通序つうじよすな即しち證信序しやうしんじよ、二にに別序べつじよすな即しち發起序はつじじよ、「爾そのとき世尊せぜん諸根しよこん悅豫えつぞし」より下しもの文ぶんは今經こんきやうに局かぎる序説じよせつなり。正宗しやうじゆに四十八願興意しじふはちむげんこうい、依願修行えがんしゆぎやう、所得依正しよとくえしやう、往生行業わうじやうぎやうの四よあり。歸きする所念佛往生ところんねんぶつわうじやうを明あきらかにす。故ゆゑに流通分りゆうづぶんは諸行しよぎやうを廢はいして但念佛ただんねんぶつを明あきらして、「彼の佛ほとけの名號みやうかうを聞きくことを得とることありて」と云いひ、「當來たうらいの世經道滅盡よきやうだうめつじんせむに我われ慈悲じひを以もつて哀愍あいみんして獨ひとり此この經きやうを留とどめて止住しぢゆうすること百歲ひやくさいならしめむ」と云いふとす。詳つまびらかには彼の釋しか及び和語燈わごとうの三部經釋さんぶきやうしやくを見よ。夫それ淨佛國土じゆつぷつこくどじやう成就じゆしゆ衆生じゆうじやうは成佛じやうぶつの要諦えうたいなり。本經ほんきやうは念佛往生ねんぶつわうじやうを以もつてこの要諦えうたいを顯示けんじす。正宗しやうじゆに彌陀みやだの值遇ぢぢゆう諸佛しよぶつ、受教じゆけう、發願はつがん、修行しゆぎやう、成佛じやうぶつを明あきらすもの、歸きする所成就じやうじゆ衆生じゆうじやうに在あり。念佛皆往ねんぶつがいわうは彌陀みやだの願行ぐわんぎやうの詮要せんえうにして、衆生しゆじやうの得脫とくだつ頼たうむ所ところも亦また此こに在あり。能化にやうけの攝取せつしゆと所化しよけの順應じゆんおうとを詳つまびらかにす。誠まことにこ

解題

- 【六】鈔引文私考七卷。
- 【六八】頌義二十二より二十七に至る六卷、別願義。
- 【六九】大經直談要註記二十四卷、淨全十三。
- 【七〇】無量壽經集解十五卷（或云十六卷）續淨全三。
- 【七一】十卷。
- 【七二】無量壽經隨聞講錄六卷、淨全十四。
- 【七三】合讚四卷に討原記六卷あり。
- 【七四】隨天の大經曼荼羅開境記四卷、義海の大經義疏選要記二卷、本阿の無量壽經精決六卷等。
- 【七五】十八卷、眞宗全書。
- 【七六】十五卷、續眞全。
- 【七七】十二卷、續眞全。
- 【七八】長西錄、蓮門經籍錄上、學部必用目錄前編、眞宗教典志、

れ一代佛教の本意衆生向上の歸趣を明す法寶と云ふべし。珍敬受持せずして可ならんや。

【觀無量壽經】一、原本。この經の原本明かならず、往生論の如き五念の中に觀察を廣説するも、二十九種莊嚴を説き、直接本經の諸觀に依らず。然れども數次の譯出あるに徴しても、梵本將來訪得せらるることあらん。

二、譯本。經錄を總攬せば、一漢代失譯無本、二晉失源有本、三、宋薑良耶舍(時稱)譯有本現行、四宋曇摩密多譯無本とあるも、一は三寶記の錯誤と云ふべく、三と四との兩譯ありとは

智昇の説なるも同時同處二人の別譯となるは、共譯の別傳せられたるものならんか。別個の譯出としては二と三とあるべし。二の古本觀經に關しては經錄只晉失源有本と云ひ、その名目を傳ふるのみなるも、(二)往生傳の僧顯の條に梵僧傳譯の新經三事因願より九品往生次第に洎ぶも

のを得て西方を願求せりと云ふ。これ三福九品にして觀經なるは明かなり。譯者明かならざるも、東晉の初めに譯出されたるものなるべし。次に三の新本觀經は劉宋文帝元嘉七八年頃薑良耶舍の譯出に係る。轉障の祕術淨土の洪因として受持諷誦せるが故に、僧舍その譯出を請へるに

第二第三、及び同一卷本參照。
【七】費長房三寶記(致六、三四)。
【八】開元錄(結四、七、二八、四一)。
【八】續藏、武編、乙、八ノ一ノ十七。

因る。今淨土正依の一として和譯する所はこの經なり。和譯底本等、前述の大經の解に同じ。

三、觀經の註疏。古本は註疏を見るに及ばざりしが、新本に及び註疏講解最も盛なり。これ此

經が禪觀と滅罪と臨終と往生とに適すとせられたるが爲なり。靈裕の義疏を魁とし、慧遠、

智顛、吉藏の三疏諸師淨土教の蘭菊妍を競ふ。窺基澄觀にも疏ありと云ひ、義寂、慧均、

龍興、憬興、太賢、玄一、法位、法常、道闇、等各紹述する所あり

と云ふ。宋に元照戒度を最とし、擇瑛、用欽、道心、可觀等

名あり。明に傳燈あり、清また人なしとせず。前後脈絡絶えざ

るも就中經要を得るもの、道綽の安樂集と善導の四帖御疏こ

れなり。殊に後者は聖僧の指授古今楷定の妙釋とし、日本淨土教の

指南たり。

日本には前記天台四明、西河光明の末釋極めて多きも、直ちに

本經を註解するものも少からず。智光の疏最も古く、當麻の觀經曼荼

羅また耳目に久し。降りて良源の九品往生義、九品往生略註より靜照、

淨算、利源、實範等の小著あり。法然上人には觀經釋一卷、信瑞

【八二】義疏二卷、或は義記一卷とす、續藏三十二ノ四、淨土宗全書五。

【八三】疏二卷、續藏三十二ノ五、淨全同上、妙樂の疏記一卷、法聰の記一卷科一卷、義通、

行靖の疏記、知禮の妙宗鈔三卷、源清の顯要記二卷、智圓の

刊正記二卷、如波の淨業記四卷、從義の往生記四卷等あり、又妙宗鈔の末釋種種あり。

【八四】唐延興寺古藏作義疏一卷、續藏三十二ノ四、淨全五。

【八五】義疏三卷續藏三十二ノ五、

に音義一卷、聖聰の曼陀羅鈔四十八卷、祐崇の要義鈔、源譽の直談鈔、義山の隨聞記、觀徹の合讚、鸞宿の廻瀾鈔、加祐の科註、洞空の會疏、法霖の述要、慧雲の微笑記、大乘の講述等あり。

四、大意 この經は兩處二會の説たり。王宮會と耆闍崛山會となり。韋提の致語に應じて光臺に佛國を現じ、空中に三尊出現し給ひ、佛具さに十三定善と三福九品の散善とを説き給ふ。十三とは日想水想地想、寶樹寶池寶樓、華座像想、佛身觀音勢至普觀雜想これ也。九品散善は釋尊自ら進みて説く所、別して本意は念佛に在りとす。これ善導の釋意に基く本經の大綱なり。

【阿彌陀經】一、原本。この經の梵本は古來我國にも弘通せり。南條博士はこれを大經原本と俱に牛津に出版せり。

二、譯本。支那譯は經錄を總括して四、一、姚秦羅什譯阿彌陀經即ち今和譯する所の淨土正依三部の一たり。二東晉若くは劉宋に屬せられ、曇摩密多譯とも云はるる樂佛土經にして早く佚せり。三劉宋 孝建中荊州に於て譯する小無量壽經或は阿彌陀經これ也。又佚せり。四唐玄奘、

- 淨全五。三聖立像記一卷。
- 【八】正觀記三卷、扶新論一卷。
- 續藏三十三ノ一、淨全五。
- 【六七】圖頌一卷、續藏同上。
- 【八】續法集 直指疏二卷、彭際清約論一卷。俱に續藏同上に在り。
- 【九】續藏貳ノ十二ノ三。淨全一。
- 【九】續藏三十二ノ四。淨全二。
- 【九】蓮門經籍錄上傳通記以下廿二部、觀門要義鈔以下了意の鼓吹まで廿七部を列ぬ。その他近代の述作多し。
- 【九】智頌、知禮、道綽、善導。
- 【九】西紀四五四―四五六。

【西】永徽元年一月譯稱讚淨土佛攝受經一卷なり。若し第二は大經に屬すとせば三譯兩存一缺となる。和譯底本等大經に辨したる所に同じ。南條博士は梵文を和譯して支那兩譯と對照（五七）出版せり。

三、小經の註疏。疏者梁善慧。（五七）隋智顛。（五八）唐慧淨。（五九）窺基。（六〇）元

曉。智首。圓測。玄一。慈藏。宋（一〇〇）智圓。（一〇一）元照。（一〇二）戒度。仁岳。

用欽。元（一〇三）性澄。明（一〇四）大佑（一〇五）株宏。（一〇六）大慧智旭。（一〇七）清に淨

挺、續法、彭際清、了根等あり。日本に空海、永海、源空、凝然以下

【一〇八】迹作甚だ多し。

四、大意。本經序正流通あること常の如し。文に就て知れ。正宗には極樂依正の莊嚴功德と念佛往生と證誠勸進とを明す。六方諸佛釋迦彌陀一意を知り、念佛行者を證誠し護念し勸進す。

【三經總說】淨土三部は法然上人以後我邦淨土門淨土宗眞宗時宗等通依する所なりと雖、三經異轍なりや同轍なりや。經文の細釋に至りて

は微を穿ち細を極め流派の別を致す。今の加注解說只本文を讀解するを助くるのみ、宗義の異同

【九四】西紀六五〇。
【九五】明治四十一年四月。
【九六】續藏三十三ノ一、淨全五。
【九七】續藏同上。
【九八】續藏三十三ノ一、二、淨全五。
【九九】淨全五。
【一〇〇】續藏三十三ノ二、淨全五。
【一〇一】同上。
【一〇二】同上。
【一〇三】續藏同上。
【一〇四】同上。
【一〇五】續藏三十三ノ二、三。
【一〇六】續藏三十三ノ四。
【一〇七】初藏同上。
【一〇八】經籍錄教典誌等前註參照。

に觸^ふるることを避^さけたり。

譯者 椎尾辨匡識

淨^{じやう}土^ど三^{さん}部^ぶ經^{きやう}解^{かい}題^{だい}終

國譯佛說無量壽經

卷の上の本

我れ聞き是の如きを。一時、佛

王舎城の耆闍崛山の中に住しまして、

大比丘衆萬二千人と俱なりき。

一切大聖にして神通すでに達せり。

其名を尊者了本際、尊者正願、尊者正

語、尊者大號、尊者仁賢、尊者離垢、尊者

名聞、尊者善實、尊者具足、尊者牛王、尊

者優樓頻羸迦葉、尊者伽耶迦葉、

尊者那提迦葉、尊者摩訶迦葉、尊

者舍利弗、尊者大目犍連、尊者劫

卷の上の本

【一】淨土三部經の第一、釋尊阿彌陀佛に就き説き給へる經なり、分ちて二卷とす。

【二】一經三段中第一序分九頁八行まで、その中の一句を證信序とす、梵に従へば我によりて開かれたり是の如くと云ふべし、結集者開持止しきを證す。六成就には開成就信成就なり。

【三】この經説時を示す、時成就なり。

【四】教主釋迦佛陀 (Tathāgata) の主成就。

【五】說處を明す、處成就。

【六】耆闍崛 (Gṛdhrakūṭa)。巴利に (Sāṅhāra) 靈鷲と譯す。

【七】以下第六の衆成就、一會に集る大衆。

【八】比丘 (Bhikkhu)。乞士と譯す、大衆の中先づ聲聞衆を擧ぐ。

【九】今本阿無同じ平は千二百五十莊と梵本とは三萬二千。

【一〇】この句底本一切の大聖と訓す。皆無學の大阿羅漢なるを云ふ。

【一一】六通自在。

【一二】今本阿莊三十一名平三十五無二十九梵三十四の阿羅漢を列ぬ。

賓那、尊者大住、尊者大淨志、尊者摩訶周那、尊者滿願子、尊者離障、尊者流龍、尊者堅伏、尊者面王、尊者異乘、尊者仁性、尊者嘉樂、尊者善來、尊者羅云、尊者

阿難と曰ひき。皆是の如き等の上首たる者なり。

【四】また大乘の衆の菩薩と俱なり。

【五】普賢菩薩、妙德菩薩、慈氏菩薩等。

この賢劫の中の一切の菩薩となり。また賢護等の十六正士あり。善思議菩薩、信慧菩薩、空無菩薩、神通華菩薩、光英菩薩、慧上菩薩、智幢菩薩、寂根菩薩、願慧菩薩、香象菩薩、寶英菩薩、中住菩薩、制行菩薩、解脱菩薩あり。みな普賢大士の

【三】Urvishā-Kāśyapa
ウルクシルブアーカシヤパ
カヤーカシヤパ

【四】Śrīyaḥ Kāśyapa
シュリヤハカシヤパ

【五】Ani Kāśyapa
アニーカシヤパ

【六】Māta Kāśyapa
マターカシヤパ
シヤリフントラ

【七】Sri-Pitṛa
シュリピトラ
マハーマウダガリヤヤナ

【八】Maṅga-Mudgalīyaṇa
マンガムドガリヤナ

【九】Kaphila
カピラ
マハーチヤマ

【一〇】Mīṭha-Gaṇḍa
ミータガンダ
ラーフ

【一一】Rishaba
リシャバ
デーサマ

【一二】Ananda
アナンダ

【一三】上に列める三十一聖は大衆中の特に上席たる者なり。

【一四】徒衆の中に菩薩衆を列す。

【一五】Poḥiṣṭeva 覺有情と譯す。

【一六】今本十七名無十三名梵慈氏一名平阿莊に名なし。

佛出世すと云ふ。慈氏等その成佛すべき者、普賢妙徳はその中なるや否や異説あり。

【一七】元智度論七に善守等十六菩薩是居家菩薩と云ふ。大般若第一、思益經第一等その名を列す。

【一八】善思議以下の十四菩薩は十六正士の中とするとせざると異説す。別なるべし。

【一九】華嚴四十に説く普賢十大願行を云ふ。

【二〇】以下菩薩の勝徳を讚歎す。

【二一】行願。六度四攝等の行、四弘誓十大願の願。

【二二】感應自在に十方に顯はる。

【二三】宜しきに隨ひ種種に現じ化竟りて隱くる。權とは假なり。

【二四】彼岸。涅槃の果。

【二五】等覺。佛の覺悟正等なる故等覺と云ふ、三藐三菩提なり。

【二六】

【二七】

【二八】

【二九】

【三二】徳に遵へり、諸の菩薩の無量の

行願を具して一切功德の法に安住せ

り。十方に遊歩して權方便を行じ、

佛法藏に入りて彼岸を究竟す。無量の

世界において等覺を成ずることを現

す。兜率天に處して正法を弘宣

し、彼の天宮を捨てて神を母胎に降

し、右脇より生ぜり。行くこと七步

を現じ、光明顯耀してあまねく十方を照

らし、無量の佛土を六種に震動す。聲を

擧げて自から稱すらく、吾れ當に世におい

て無上尊と爲るべしと。釋梵奉侍し

天人歸仰す。算計文藝射御を示現し、

道術を博綜し群籍を貫練す。後園に

【三〇】示現分證にて實成ならず。

【三一】兜率。以下現成等覺の別説

にて列ゆる所九相あり、通途

云ふ八相成道なり。初に上天

の相 兜率。(ツシタ)知足或は

喜足と譯す 欲界第四天なり。

【四〇】正法又は妙法、佛道のこと。

【四一】第二下天入胎の相。

【四二】第三出胎の相、右脇に生處

穢れなきを表す。

【四三】七步。六道超過を示す。

【四四】底本「なし」なし。六種震動、

動と涌と震と撃と吼と爆との

六相。

【五〇】以下第六出家の相。

【五一】三三三底本助辭なし。

【五四】劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁

の五なり。以下第七成道の相。

【五五】金流。尼連禪河。

【五六】吉祥感徴。成道せんとする

時帝釋化して吉祥と號し草座

を奉り因位種徳の功を表す。

【五七】佛樹。菩提樹又は道場樹と

も云ふ。諸佛成道に各各樹あ

り、釋尊には畢鉢羅樹なり。

【五八】降魔の相。魔具さに魔羅

(Māra)といふ。

【五九】大論三魔王十八億衆を將ゐ

遊びて武を講ひ藝を試み、宮中色味の間あひだに處することを現す、(五〇)老病死を見て世の非常を悟り、
 國と財と位とを棄てて山に入りて道を學ぶ。服乘の白馬と(五一)寶冠と(五二)環珞とは(五三)これを遣は
 して還さしむ。珍妙衣ちんめうえを捨てて法服ほふくを著し、鬚髮しゆほつを剃除す。樹下じゆげに端坐たんざして勤苦ごんくすること六年ろくねんな
 り、行所ぎやうじよ應おつに如かふ。(五四)五濁ごじゆくの刹せつに現げんじて群生ぐんじやうに隨順ずいじゆんするをもて、塵垢ちんこあることを示しめして(五五)金流
 に沐浴もくよくす。天樹てんじゆ枝しを按おさへて攀よちて池いけを出いづることをえしむ。靈禽りやうきん翼よく從じゆして道場だうぢやうに往詣わうげいす。(五六)吉
 祥じやうの感徵かんぢやう功祚こうそを表章へうしやうす。哀あはれみて施草せさうを受け(五七)佛樹ぶつじゆの下もとに敷しきて跏趺かふたして坐ざす。(五八)大光明だいこくめいを奮ふるひ
 て魔まをしてこれしを知らしむ。(五九)魔官屬まくわんじやくを率ひきゐて來きたりて逼せめ試こころみる。制せいするに智力ちりきを以もつてしてみな
 降伏かうふくせしむ。微妙みめうの法ほふをえて最正覺さいじやうがくを成じやうす。(六〇)釋梵しやくはん祈勸きんして法輪ほふりんを轉てんせむことを請しやうす。佛の遊歩ほとげ
 を以もてし、佛吼ぶつこをもて吼こす。(六一)法鼓ほふこを扣たたき、法癩ほふらを吹ふき、法劍ほふけんを執とり、法幢ほふどうを建たて、法雷ほふらいを震ふるひ、
 法電ほふでんを曜あかき、法雨ほふうを澍そぎ、法施ほふせを演つぶ。常つねに法音ほふおんを以もつて諸もろもろの世間せけんを覺かくせしむ。光明くわうめいあまねく無む
 量の佛土りやうぶつどを照てらし、一切いっさいの世界せかい六種りくしゆに震動しんどうするに、總すべて魔界まかいを(六一)攝せつして魔まの宮殿くわうぐんを動うごかす。
 衆魔しゆま慄せふ怖ふして歸伏きふくせずといふことなし。邪網じやまうを擱裂かくれつして(六二)諸見しよけんを消せう
 滅めつし、諸もろもろの塵勞ちんらうを散さんじ諸もろもろの欲慳よくけんを壞えす。(六三)法城ほふじやうを嚴護えんごして法門ほふもんを
 開闡かいせんす。垢汙かうびを洗濯せんぢやくすること顯明けんめい清白しやうびやくにして、光はるく佛法ぶつほふを融ゆうじて正しやう

【六一】邪見身見邊見等の見惑。

【六二】五欲の境に勞す。思惑。

【六三】正法の涅槃の妙果を喻ふ。

【六四】分衛。具さに資茶波底迦

化を宣流す。國に入りて(六〇)分衛して諸の豐膳をえ、功德を貯へて

福田を(六一)示し、法を宣むと欲して欣笑を現じ、諸の法薬をもて(六二)三

苦を救療す。(六三)道意無量の功德を顯現し、菩薩に(六四)記を授けて等正

覺を成せしむ。(六五)滅度を示現して拯濟すること極まりなし。(六六)諸漏

を消除して衆の徳本を植ゑしむ。功德を具足すること微妙にして量り

難し。諸佛の國に遊びて普く道教を現す。(六七)其の修するところの

行清淨にして穢れなし。譬ふれば幻師の衆の異像を現するに、

男を爲し、女を爲して所として變せずといふことなく、(六八)本學明了

にして意の所爲に在るがごとし。此の諸の菩薩もまたまた是のごとし。

一切の法を學して貫綜練練し、(六九)所住安諦にして化を致さずといふこ

となし。無數の佛土にみな悉く普く現す。未だ曾て慢恣せず衆生を慙

傷す。是のごとき法一切具足せり。菩薩の經典要妙を究暢し、名稱

普く至りて十方を導御す。無量の諸佛ごとごとく共に護念したまふ。

(七〇)佛の所住には皆すずに住することをえ、(七一)大聖の所立には皆すで

〔六〇〕Bin-dai Pa-tsu-ai-ka 托鉢、乞食。

〔六一〕福田。世の福善を生ずる故に、三寶を福田と云ふ。

〔六二〕三苦の苦、壞苦、行苦の三、苦空無常を苦より觀るもの。

〔六三〕道意。菩提心。

〔六四〕記。何時何國にて成佛すべしと豫示するを記別又は授記と云ふ。

〔六五〕第九涅槃相。如來の涅槃は非滅に滅を現す。

〔六六〕漏は煩惱。三漏あり欲漏四十一、有漏五十二、無明漏十五合して百八。

〔六七〕以下菩薩二利の徳を歎す。

〔六八〕行。六度四攝等。

〔六九〕本學。先きに學習する謂。

〔七〇〕所住。所化の衆生は菩薩智悲の安住する所。

〔七一〕佛の住する涅槃の理は菩薩も亦證す。

に立てり、如來の導化おのおの能く宣布し、諸の菩薩の爲に大師と作りて甚深の禪慧を以て衆人を開導す。諸法の性に通じ、衆生の相に達し、諸國を明了にす。諸佛を供養するにその身を化現すること猶し電光のごとし。善く(五)無畏の網を學して幻化の法を曉了す。魔網を壞裂し諸の縛縛を解く。(六)聲聞緣覺の地を超越して空無相無願(七)三昧をえたり。善く方便を立てて(八)三乘を顯示し、此の中下において滅度を現す。また所作なくまた所有なく不起不滅にして平等の法をえたり。無量の(九)總持、百千の三昧、(十)諸根智慧を具足し成就し、廣普の寂定ありて深く菩薩の法藏に入り(十一)佛華嚴三昧をえたり。一切の經典を宣暢し演説す。深定門に住して悉く現在の無量の諸佛を觀たてまつり、一念の頃に周徧せずといふことなし。諸の(十二)劇難と(十三)諸閑と(十四)不閑とを濟ひ、眞實の際を分別し顯示するに諸の如來の辯才の智をえたり。衆の言音を入りて一切を開化す。世間もろもろのあらゆる法を超過して、心つねに(十五)度世の道に誦住す。一切の萬物

【七】大聖 如來、皆佛のこと。

【八】一切智、遍盡、說障道、說苦盡道の因無畏は如來の德。

【九】聲聞緣覺、二乘即ち小乘。

【十】三三昧或は三解脱門と云ふ。諸法の無自性を空と云ひ、

如幻の假相にして自相と云ふべきなきを無相と云ひ、念願も亦無なるを無願と云ふ。

【十一】三昧(Samādhi) 等持又は正定と譯す。

【十二】中は緣覺、下は聲聞。

【十三】總持、諸善を散失せざらむ、陀羅尼これ。

【十四】總じては一切善法、別しては信、進、念、定、慧の五根。

【十五】佛華嚴三昧、法界唯心の三昧。

【十六】劇難、三途八難。

【十七】諸閑、人天の善惡業を作ら

において意に随ひて自在なり。諸の 庶類のために 不請の友と作り、羣生を荷負してこれを重擔とす。如來甚深の法藏を受持し、

佛種性を護りて常に絶えざらしむ。大悲を興こして衆生を愍み、

慈辯を演べて法眼を授け、三趣を杜ぎ善門を開き、不請の法をもて

諸の黎庶に施す。純孝の子の父母を愛敬するがごとし。もろもろの衆生において視ること自己のごとし。一切の善本みな 彼岸に渡る。

悉く諸佛無量の功德を獲たり。智慧聖明なること思議すべからず。

是のごとき等の菩薩大士稱計すべからず一時に來會せり。

(七) 爾のとき世尊諸根悅豫し姿色清淨にして 光顏巍巍たり。尊者阿

難、佛の 聖旨を承けて、即ち座より起ちて、 偏袒右肩し (一〇〇) 長

跪 (一〇一) 合掌して佛に白して言さく、「今日世尊諸根悅豫し姿色清淨にし

て光顏巍巍たること、明淨なる鏡のかげ表裏に暢るがごとし。威容顯

曜にして超絶したまへること無量なり。未だかつて殊妙なること今の

ごとくなるをばみたてまつらざりき。唯しかり。大聖、わが心に念言

【九〇】不閉。業惑二障あるもの。

【九一】度世。涅槃、その道は智。

【九二】庶類。多類の衆生。

【九三】大。深きが故に請を待たず

【九四】佛種性。衆生の佛性。

【九五】三趣。地獄餓鬼畜生なり。

【九六】涅槃。菩薩は分證。

【九七】正しく發記序、説法の起因を明す。

【九八】佛の間に應ずる許容。

【九九】師に事ふる法。右肩を脱ぎて命に應ぜんとするなり。

【一〇〇】長跪。兩膝を地に著け兩

肢を空に身を立てて兩足地を指す、敬禮。

【一〇一】合掌。胸上に置き一心を表す。

【一〇二】世中最尊。

【一〇三】世中最猛。

【一〇四】世人の眼を聞く。

【一〇五】佛智世に於て美勝。

すらく、今日(一〇一)世尊奇特の法に住し、今日(一〇二)世雄諸佛の所住に住

し、今日(一〇三)世眼導師の行に住し、今日(一〇四)世英最勝の道に住し、今

日(一〇五)天尊如來の徳を行じたまへり。(一〇六)去來現の佛佛と佛と相ひ念

じたまふ。今の佛も諸佛を念じたまふことなきことを得むや。何がゆ

ゑぞ威神の光光たること乃ち爾る。是において世尊阿難に告げて曰た

まはく、『いかにぞ阿難諸天なむちに教へて來りて佛に問はしむるか、

自ら慧見をもて威顔を問ふか。』阿難佛に白さく、『諸天の來りて我れ

に教ふる者あることなく、自ら所見をもて斯の義を問ひたてまつるの

み。』佛の言たまはく、『善きかな阿難、とふところ甚だ快し、(一〇七)深

智慧を發こして眞妙の辯才あり、衆生を愍念するをもて斯の慧義を問

へり。如來(一〇八)無盡の大悲を以て(一〇九)三界を矜哀す、ゆるに世に出興

して光く道教を聞き、羣萌を極はむと欲して恵むに(一一〇)眞實の利を以

てす。無量億劫にも値ひがたく見がたし。猶し(一一一)靈瑞華の時ありて

すなはち出づるがごとし。今とふところは饒益するところ多くして、

【一〇六】聖道得果を施す大悲と聖道不堪の常没に施す大悲とあり。今常没を救ふ大悲を出世の本懷とす。無盡異本無盡。

【一〇七】過去未來現在の三世。世英天尊は、皆佛のこと。

【一〇八】世尊の奇特法等の五徳を知れるを云ふ。

【一〇九】舉道得果を施す大悲と聖道不堪の常没に施す大悲とあり。今常没を救ふ大悲を出世の本懷とす。無盡異本無盡。

【一一〇】欲界、色界、無色界。

【一一一】往生淨土萬機普益の念佛を實利と云ふ。

【一二】靈瑞華。優曇華。

【一三】定を食に喩ふ。或は因の一施食と云ひ、或は果の一受食と云ふ。

【一四】住むる。底本住ましむる。

【一五】第二段正宗分、第一所行即ち彌陀因位の願行を明す、その内先づ勝因を明す、初に發願の緣。

一切の諸天人民を開化す。阿難まさしく知るべし、如來正覺は其の智はかり難くして導御するところ多し、慧見無礙にして、能く遏絶することなし、(二三)食の力をもて能く壽命を(二四)住むること億百千劫無數無量にして復これに過ぎたり。諸根悅豫して以て毀損せず、姿色不變にして光顔ことなることなし。ゆるはいかに。如來は定慧究暢して極まりなし。一切の法において自在をえたり。阿難あきらかに聽け、いま汝がために説かむ。』對へく曰さく、『唯しかり、願樂すらく聞きたてまつらむと欲す。』

(二五)佛阿難に告げ給はく、『乃往過去久遠無量不可思議無央數(二六)劫に(二七)錠光如來世に興出して、無量の衆生を教化し、度脱してみな得道せしめて乃ち滅度を取りたまひき。次ぎに如來まします、名づけて光遠といふ。次ぎをば月光と名づけ、次ぎをば(二八)梅檀香と名づけ、次ぎをば善山王と名づけ、次ぎをば(二九)須彌天冠と名づけ、次ぎをば須彌等曜と名づけ、次ぎをば月色と名づけ、次ぎをば正念と名づけ、次ぎをば離垢と名づけ、次ぎをば無著と名づけ、次ぎをば龍天と名づけ、次ぎをば夜光と名づけ、次ぎをば安明頂と名づけ、次ぎをば不動地と名づけ、次ぎを

【二六】劫具さに劫波Kalpa譯時。
【二七】本經は錠光より世自在まで過去五十四佛。平三十七佛、阿三十四佛、無四十三佛、莊三十八佛、姓本八十一佛、十住論九十一佛を列ね法藏發願に至る值遇受教の遠縁を示す。
【二八】梅檀(Castana)香樹なり。
【二九】須彌(Sumeru)山名、妙高と譯す。

ば (二三) 瑠璃妙華と名づけ、次ぎをば瑠璃金色と名づけ、次ぎをば金藏と名づけ、次ぎをば餓光と名づけ、次ぎをば餓根と名づけ、次ぎをば地動と名づけ、次ぎをば月像と名づけ、次ぎをば日音と名づけ、次ぎをば解脱華と名づけ、次ぎをば莊嚴光明と名づけ、次ぎをば海覺神通と名づけ、次ぎをば水光と名づけ、次ぎをば大香と名づけ、次ぎをば離塵垢と名づけ、次ぎをば捨厭意と名づけ、次ぎをば寶饌と名づけ、次ぎをば妙頂と名づけ、次ぎをば勇立と名づけ、次ぎをば功德持慧と名づけ、次ぎをば蔽日月光と名づけ、次ぎをば日月瑠璃光と名づけ、次ぎをば無上瑠璃光と名づけ、次ぎをば最上首と名づけ、次ぎをば菩提華と名づけ、次ぎをば月明と名づけ、次ぎをば日光と名づけ、次ぎをば華色王と名づけ、次ぎをば月明と名づけ、次ぎをば日光と名づけ、次ぎをば華色王と名づけ、次ぎをば水月光と名づけ、次ぎをば除癡暝と名づけ、次ぎをば度蓋行と名づけ、次ぎをば淨信と名づけ、次ぎをば善宿と名づけ、次ぎをば威神と名づけ、次ぎをば法慧と名づけ、次ぎをば鸞音と名づけ、次ぎをば師子音と名づけ、次ぎをば龍音と名づけ、次ぎをば處世と名づく。此のごとき諸佛みな悉く已に過ぎたまひき。

【二三】瑠璃具さに吠瑠璃耶(ワライ
 ブールヤ) 遠山寶。
 【二三】如來等は佛の十號。
 【二三】以下比丘發願の相を明す。

人師佛世尊と名づく。(二三) 時に國王あり、佛の説法を聞きて心に悦豫を懷き、尋ち無上正眞の道

意を發はこし、國くにを棄すて王わうを捐すてて、行ぎやうじて二三沙門しゃもんと作る。號がうして法藏ほふぞうといふ。高才勇哲かうさいゆうてつにして世よと超てう異いせり。世自在ざいざい王わう如來にょらいの所ところに詣まうでて、佛足ぶつそくを稽首けしゆし右みぎに繞めぐること二四三匝さんざふちやうき長跪ちやうきし合掌がつしやうして二三頰ほほをもて讚さんじて曰まをさく、

光顏くわうげん巍巍ゑゑとして、威神ゐじんきはまりなし。是かくの如ごとき欲明えんみやう、共ともに等ひとしきものなし。

日月にちがつ 二三摩尼まにの、珠光しゆくわう欲耀よくえうなるも、皆みな悉ことごとく隱蔽おんぺいして、猶なほし聚墨じゆもくのごとし。

如來にょらいの容顏ようげんは、世よに越こえて二五倫ともがらなし。正覺しやうがくの大音だいおん、ひびき十方じつぱうに流ながる。

二七戒門かいもん精進しやうじん、三昧さんまい智慧ちゐ、威徳ゐとくともがらなく、殊勝しゆしやう希有きゆうなり。

深諦じんたいとして善よく、諸佛しよぶつの法海ほふかいを念ねんじ、深じんを窮きはめ奥おくを盡つくくして、其その涯底がいていを究きはむ。無明むみやうと欲よくと怒ぬと、世尊せそんは永ながく無なし、二八人雄にんゆう師子しし、神徳じんとく無量むりやうなり。

功勳くくん廣大くわうだいにして、智慧ちゐ深妙じんめうなり。光明くわうみやうの威相ゐさう、二九大千だいせんを震動しんどうしたまふ。願ねがはくは我われ作佛さくぶつして、聖法王しやうほふわうに齊ひとしく、生死しじふじを過度くわどして、解脫げだつせずといふことなからむ。

【二三】沙門 Sramana。勤善息惡と譯す。
 【二四】三匝するは敬意を表す。
 【二五】偈頌今本四言八十句、平五言八十句、阿なし無七言四十二句、莊七言三十六句、梵本十首。
 【二六】摩尼 Mani。如意寶。
 【二七】戒定慧は多聞に依て生じ精進に依て成る。三昧は定。
 【二八】人雄も師子も佛のこと。
 【二九】大千は三千世界なり。

布施調意、戒忍精進、是のごときは三昧と、智慧とを上れたりとす。
吾れ誓ふ佛を得るまでに、普くこの願を行じて、一切の恐懼に、爲に大安を作さむ。

たとひ佛ありて、百千億萬、無量にして大聖、かす (三〇〇) 恆沙のごとくならむに、

一切のこれらの、諸佛を供養せむより、道を求めて堅正にして、卻かざるにはしかじ。

譬へば恆沙のごとくならむ、諸佛世界、また不可計、無數の (三一) 刹土ありて、

光明のごとく照らして、此の諸の國に徧からむ。是のごとく精

進にして、威神はかり難からむに、

我が作佛の國土をして、第一ならしめむ。其の衆奇妙にして、道場

超絶し、

くに (三二) 泥洹のごとくにして、等變なからむ。我れまささに一切を、哀愍度脱すべし。

十方より來生せむもの、心悅清淨にして、すでに我が國に到りなば、快樂安穩ならしめむ。

幸はくは、佛信明したまへ、是れ我が眞證なり、願を彼れに發こして、所欲を力精せむ。

十方の世尊、智慧無礙なり、常に此の尊をして、我が心行を知らしめむ。

たとひ身を、諸の苦毒の中に止むとも、我が行は精進にして、忍びて終に悔いざらむ。』

【三〇】恆伽 (Gangai) 河の沙數。

【三一】刹 (Kshetra) 國、田。

【三二】泥洹 (Nirvāṇa) 不生不滅

又圓寂と譯す。涅槃に同じ。

(二三) 佛阿難に告げたまはく、「法藏比丘、この願を説きはりて、佛に白して言さく、「唯しかり。

世尊われ無上正覺の心を發せり。願はくは佛が爲に廣く經法を宣べたまへ。我れまさに修行

して佛國清淨なる莊嚴無量の妙土を攝取すべし。我れをして世において速かに正覺を成じ、諸の

生死勤苦の本を抜かしめたまへ。」佛阿難に語げたまはく、「時に 世饒王佛法藏比丘に告げた

まはく、「汝が修行するところの莊嚴佛土なむ自らたまさに知るべし。」比丘、佛に白さく、「斯の

義弘深にして我が境界にあらず。唯ねがはくは世尊、ひろく爲に諸佛

如來の淨土の行を敷演したまへ。我れこれを聞きをはりて、當に説の

ごとく修行して、所願を成滿すべし。」爾のとき世自在王佛、その高明

の志願の深廣なることを知るしめして、即ち法藏比丘の爲に經を説き

て言たまはく、「譬ふれば大海の如きも一人升量して劫數を経歴せばな

ほ底を窮めて其の妙寶を得べし。人至心ありて精進に道を求めて止まずば會ず當に剋果すべし、

いづれの願か得ざらむ。」と。是において世自在王佛、すなはち爲に廣く

土の天人の善惡、國土の麤妙を説きて、其の心願に應じて悉く現じてこれを與へたまふ。時に

かの比丘 佛の所説の嚴淨の國土を聞き、皆ごとく觀見して、無上殊勝の願を超發す。其こ

【二三】二重發心とせば前は地前、今は地上發心。

【三四】世饒王佛。世自在王佛。

【三五】今本平阿同じ、無は二十億莊は八千四百千俱胝那由他、梵八十一百千俱胝尼由他。

こゝろ寂靜にして、こゝろざし所著なく一切世間よく及ぶものなし。(三三)五劫を具足して莊嚴佛

國清淨の行を思惟し攝取す。阿難佛に白さく、彼の佛の國土の壽量いくばくぞや。佛の言たま

はく、其の佛の壽命(三七)四十二劫なり。時に法藏比丘二百一十億の諸佛妙土の清淨の行を攝取

す、是のごとく修しをはりて彼の佛の所に詣でて、稽首して足を禮し、佛を繞ること三匝合掌し

て住し、佛に白して言さく、世尊われすでに莊嚴佛土の清淨の行を攝取しぬ。(三三)佛比丘に告げ

たまはく、汝いま説くべし、宜しく知るべし是の時なり、一切の大衆

を發起し悦可せしめよ。菩薩きき已はらば、此の法を修行して、縁り

て無量の大願を満足することを致さむ。比丘佛に白さく、ただ聽察を

垂れたまへ、我が所願のごとくまさに具さにこれを説くべし。(三九)

(一)説し我れ佛を得たらむに、國に地獄餓鬼畜生あらば、正覺を

取らじ。

(二)もしわれ佛をえたらむに、國中の人天壽終の後また三惡道に

更らば、正覺をとらじ。

(三)もしわれ佛をえたらむに、國中の人天、ことごとく眞金色な

【三六】以下別願の序。

【三七】梵本無莊滿四十劫平阿になし。

【三八】以下別願の序。

【三九】以下正しく別願四十八を説く無も亦四十八願平阿二十

四願莊は三十六梵文四十六願

五略なり今第一(一)無三惡趣

願 四十八願今三種七科に分

つも一一の願攝身攝土攝生に

通ず。

【四〇】(一)不更惡趣願。
【四一】(三)悉竹金色願。

らずば、正覺をとらじ。

(四) もしわれ佛をえたらむに、國中の人天形色不同にして好醜あらば、正覺をとらじ。

らば、正覺をとらじ。

(五) もしわれ佛をえたらむに、國中の人天宿命を識らず、下百千億(四)那由陀諸劫の事を知らざるに至らば、正覺をとらじ。

(六) もしわれ佛をえたらむに、國中の人天天眼をえず、下百千億

(七) もしわれ佛をえたらむに、國中の人天耳をえず、下百千億

那由他諸佛の國を見ざるに至らば、正覺をとらじ。

(八) もしわれ佛をえたらむに、國中の人天見他心智をえず、下百千億那由陀諸佛國中の衆生

の心念を知らざるに至らば、正覺をとらじ。

(九) もしわれ佛をえたらむに、國中の人天神足をえず、一念の頃において下百千億那由陀の

諸佛の國を超過することあたはざるに至らば、正覺をとらじ。

(一〇) もしわれ佛をえたらむに、國中の人天、もし想念を起こし身を貪計せば、正覺をとらじ。

【四三】(四) 無有好醜願。

【四四】(五) 宿命智通願。以下の六は六通自在の願なり。

【四五】(六) 天眼智通願。

【四六】(七) 天耳智通願。

【四七】(八) 他心智通願。

【四八】(九) 神境智通願。

【四九】(一〇) 速得漏盡願、或は無貪

著身願。

(一四〇)

(二) もしわれ佛をえたらむに、國中の人天定聚に住し必ず滅度に至らずば、正覺をとらじ。

(一四一)

(三) もしわれ佛をえたらむに、光明よく限量ありて、下百千億那由陀諸佛の國を照らさざる

に至らば、正覺をとらじ。

(一四二)

(三) もしわれ佛をえたらむに、壽命よく限量ありて、下百千億那由他劫に至らば、正覺をと

らじ。

(一四三)

(四) もしわれ佛をえたらむに、國中の聲聞、よく計量ありて下三

千大千世界の聲聞緣覺百千劫において悉く共に計校して其

の數を知るに至らば、正覺をとらじ。

(一四四)

(五) もしわれ佛をえたらむに、國中の人天壽命よく限量なから

む、其の本願ありて脩短自在ならむをば除く、若し爾らずば

正覺をとらじ。

(一四五)

(六) もしわれ佛をえたらむに、國中の人天乃至不善の名あること

を聞かば、正覺をとらじ。

(一五六)

(七) もしわれ佛をえたらむに、十方世界の無量の諸佛、ことごと

【一四〇】(二)住正定聚願又は必ず滅度願 正定聚は邪定聚不定聚に對す、以上十一願、第一

科攝衆生の願。

【一四一】(三)光明無量願。

【一四二】(三)壽命無量願。以上二願

第二科攝法身願と云ふ。

【一四三】(四)聲聞無數願。

【一四四】(五)眷屬長壽願又は人天壽命願。

【一四五】(六)離諸不善願。以上三願

第三科重攝衆生願。

【一五六】(七)諸佛稱揚願。第四科重

攝衆生願。

く咨嗟して我が名を稱せずば、正覺をとらじ。

(一五七)

(二八) もしわれ佛をえたらむに、十方の衆生至心に信樂して我が國

に生ぜむと欲して、乃至十念せむに、若し生ぜずば正覺をと

らじ。ただ 五逆と正法を誹謗するのを除く。

(一五九)

(一九) もしわれ佛をえたらむに、十方の衆生、菩提心を發こし諸

の功徳を修し、至心に發願して我が國に生ぜむと欲せむに、

壽終の時に臨みて、もし大衆のために圍繞せられて其の人の

前に現せずば、正覺をとらじ。

(一六〇)

(二〇) もしわれ佛をえたらむに、十方の衆生、わが名號を聞きて、

念を我が國に係けて、諸の徳本を植ゑ至心に廻向して我が國

に生ぜむと欲せむに、果遂せずば正覺をとらじ。

(一六一)

(二一) もしわれ佛をえたらむに、國中の人天、ことごとく三十二大

人の相を成滿せずば、正覺をとらじ。

(一六二)

(二二) もしわれ佛をえたらむに、他方佛土の諸の菩薩衆、わが國に來生せば究竟して必ず一生

攝法身願。

【一五七】(一八)念佛往生願。四十八願

の王とする所の願なり。至心

等は安心、乃至十念は上盡一

形下至十聲一聲の稱名行。

【一五九】(一九)殺父殺母殺和上破和

合殺聖人なり。

【一六〇】(二〇)來迎引接願。これと次

願とを諸行生因の願と解する

ものあり。

【一六一】(二一)係念定生願。三生等に

往生の係念を果遂せしむ。

【一六二】(二二)三十二相願又は具足

諸相願、阿三十二相八十種好

と云ふ。

【一六三】(二三)必至補處願。

(二二) 補處に至らむ。其の本願ありて自在の化するところ、衆生の爲のゆゑに、弘誓の鐘を被て徳本を積累し一切を度脱し、諸佛の國に遊びて菩薩の行を修し、十方の諸佛如來を供養し恆沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立てしめむをば除く。常倫諸地の行を超出し現前に普賢の徳を修習せむ。もし爾らずば正覺をとらじ。

(二三) もしわれ佛をえたらむに、國中の菩薩、佛の神力を承けて諸佛を供養せむに、一食の頃に徧く無數無量那由他の諸佛の國に至ることあたはずば、正覺をとらじ。

(二四) もしわれ佛をえたらむに、國中の菩薩、諸佛の前にありて其の徳本を現せむに、諸の欲求するところの供養の具もし意のごとくならずば、正覺をとらじ。

(二五) もしわれ佛をえたらむに、國中の菩薩、一切智を演説することあたはずば、正覺をとらじ。

(二六) もしわれ佛をえたらむに、國中の菩薩、金剛那羅延身をえずば、正覺をとらじ。

(二七) もしわれ佛をえたらむに、國中の人天、一切の萬物嚴淨光

【二二】補處、佛處を補ふ、次位なり。

【二四】(三)供養諸佛願、

【二五】(四)供具如意願、

【二六】(五)説一切智願、

【二七】一切智道相智一切相智の三智を總じて一切智智と云佛智なり。

【二八】(六)得金剛身願又は那羅延身願、

【二九】那羅延(Narayana)力勝と譯す。

麗に形色殊特にして、微を窮め妙を極めて能く稱量すること

なからむ。其のもろもろの衆生乃至天眼を逮得すとも能く明了に其の名數を辯ずることあらば、正覺をとらじ。

(一七) (三六) もしわれ佛をえたらむに、國中の菩薩、乃至少功德の者、その道場樹の無量の光色ありて高さ四百萬里なるを見しるこ

とあたはずば、正覺をとらじ。

(一七) (三九) もしわれ佛をえたらむに、國中の菩薩、もし經法を受讀し諷

誦持説して辯才智慧をえずば、正覺をとらじ。

(一七) (四〇) もしわれ佛をえたらむに、國中の菩薩、智慧辯才もし限量すべくば、正覺をとらじ。

(一七) (四一) もしわれ佛をえたらむに、國土清淨にして、皆ことごとく十方一切無量無數不可思議の

諸佛世界を照見せむこと、猶し明鏡をもて其の面像を視るがごとくならむ。若し爾らず

ば正覺をとらじ。

(一七) (四二) もしわれ佛をえたらむに、地より以上虚空に至るまで、宮殿樓觀池流華樹國中のあらゆる

一切の萬物みな無量の雜寶百千種の香をもて共に合成し、嚴飾奇妙にして諸の人天に

【一七】(一七) 萬物嚴淨願

【一七】(一八) 見道場樹願

【一七】(一九) 得辯才智願

【一七】(二〇) 智辯無窮願又は辯才

無窮願。以上十三願第五科重

攝衆生願

【一七】(三) 微見十方願又は國土

清淨願

【一七】(三) 國土嚴飾願 又は雜物

薰香願、以上二願、第六科攝

淨土願

超えむ。其の香あまねく十方世界に熏じて、菩薩きかむ者はみな佛行を修せむ。若し是のごとくならずば正覺をとらじ。

(二七) もしわれ佛をえたらむに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、わが光明を蒙りて其の身に觸れむ者は身心柔軟にして人天に超過せむ。若し爾らずば正覺をとらじ。

(二八) もしわれ佛をえたらむに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、わが名字を聞きて菩薩の 無生法忍もろもの深總持をえずば、正覺をとらじ。

(二九) もしわれ佛をえたらむに、十方無量不可思議の諸佛世界に、其れ女人ありて我が名字を聞きて歡喜信樂して、菩提心を發

こし女身を厭惡せむに、壽終の後また女像とならば、正覺をとらじ。

(三〇) もしわれ佛をえたらむに、十方無量不可思議の諸佛世界の諸菩薩衆、わが名字を聞きて壽終の後つねに梵行を修して佛

道を成ずるに至らむ。若し爾らずば正覺をとらじ。

(三一) もしわれ佛をえたらむに、十方無量不可思議の諸佛世界の諸

【二七】(三)觸光柔軟願又は光觸減罪願。

【二七】(四)聞名得忍願。

【二八】無生法忍。諸法空の智を忍可す、悟證なり。

【二九】(三)女人往生願又は轉女成男願

【三〇】(三)常修梵行願。梵行とは別しては離欲清淨、總じては佛道修行。

【三一】(三)人天致敬願。

天人てんにん、わが名字なみやうじを聞きて五體投地ごたいとうぢし稽首作禮けいしゆさくらいし歡喜信樂くわんぎしんらくして菩薩ぼさつの行ぎやうを修しゆせむに、諸天世人しよてんせにん敬やまひを致いたさすといふことなからむ。若もししからずば正覺しやうかくをとらじ。

(二八三)

(三八) もしわれ佛ほとけをえたらむに、國中こくちゆうの人天にんでん、衣服えぶくを得えむと欲ほつせば念ねんにしたがひて即すなはち至いたらむ、佛ほとけの所讚しよさんのごとくなる 應法おうほふの妙服自然めうぶくじねんに身みに在あらむ。若もし裁縫さいほう 擣染たぢぜんくわんたく洗濯せんたくすることあらば、正覺しやうかくをとらじ。

(二八五)

(三九) もしわれ佛ほとけをえたらむに、國中こくちゆうの人天にんでん、うけむところの快樂けらく漏盡ろうじん比丘びくのごとくならずば、正覺しやうかくをとらじ。

(二八六)

(四〇) もしわれ佛ほとけをえたらむに、國中こくちゆうの菩薩ぼさつ、こころに隨したがひて十方無量じつぱうむりやう嚴淨げんじやうの佛土ぶつどを見みむと欲ほつせば、時ときに應おほじて願ねがひのごとく寶樹ほうじゆの中なかにおいて皆みなごとく照見せうけんせむこと、猶なほし明鏡みやうきやうをもて其その面像めんざうを觀みるがごとくならむ。若もししからずば正覺しやうかくをとらじ。

(二八七)

(四一) もしわれ佛ほとけをえたらむに、他方國土たほうこくどの諸もろの菩薩ぼさつ衆しゆ、わが名字なみやうじを聞きて佛ほとけをうるに至いたるまで諸根闕陋しよこんけつろうして具足ぐそくせずば、正覺しやうかくをとらじ。

【二八二】三〇衣服隨念願。

【二八三】應法、法量の袈裟を著す。

【二八四】擣は春也敲也。うつこと。

【二八五】三九受樂無染願又は自然漏盡願。

【二八六】四〇見諸佛土願又は普見十方願。

【二八七】四一諸根具足願又は聞名具根願。

(二八)

もしわれ佛をえたらむに、他方國土の諸の菩薩衆、わが名字を聞きて皆悉く、清淨

(四二) もしわれ佛をえたらむに、是の三昧に住して一たび意を發こさむ

頃、無量不可思議の諸佛世尊を供養して、定意を失せざ

らむ。若ししからずば正覺をとらじ。

(二九)

(四三) もしわれ佛をえたらむに、他方國土の諸の菩薩衆、わが名字

を聞きて壽終ののち尊貴の家に生ぜむ。若ししからずば正覺

をとらじ。

(三〇)

(四四) もしわれ佛をえたらむに、他方國土の諸の菩薩衆、わが名字

を聞きて歡喜踊躍して菩薩の行を修し、徳本を具足せむ。

若ししからずば正覺をとらじ。

(三一)

(四五) もしわれ佛をえたらむに、他方國土の諸の菩薩衆、わが名字

を聞きて皆悉く、普等三昧を逮得せむ。是の三昧に住し

て成佛に至るまで常に無量不可思議の一切の諸佛を見たま

つらむ。若ししからずば正覺をとらじ。

【二八】(四二) 住定供佛願又は聞名得定願。

【二九】染惑なき無生忍を清淨解脫と云。

【三〇】定意。不動三昧。

【三一】(四三) 生尊貴家願。

【三二】(四四) 具足徳本願。

【三三】徳本。名號或は六度を指すなり。

【三四】(四五) 住定見佛願又は常見諸佛願。

【三五】普等三昧。正受見佛なり。

【三六】(四六) 隨意聞法願。

【三七】(四七) 得不退轉願。

【三八】不退に處位行念の四あり、淨上に生ずれば處不退なるが今は位不退なり。

【三九】(四八) 得三法忍願。三忍とは音響忍、柔順忍、無生忍なり。

(二六) もしわれ佛をえたらむに、國中の菩薩、その志願に隨ひて聞かむと欲するところの法自

然に聞くことをえむ。若ししからずば正覺をとらじ。

(二七) もしわれ佛をえたらむに、他方國土の諸の菩薩衆、わが名字を聞きて即ち不退轉に

至ることを得ずば、正覺をとらじ。

(二八) もしわれ佛をえたらむに、他方國土の諸の菩薩衆、わが名字を聞きて即ち第一第二第三

法忍に至ることをえず、諸佛の法において即ち不退轉を得ることあたはずば、正覺をと

らじ。』

卷の上の末

佛阿難に告げたまはく、「爾のとき法藏比丘、この願を説きをいりて、
 「われ 超世の願を建つ、必ず無上道に至らむ、斯の願満足せずば、誓ひて正覺を成せじ。
 われ無量劫において、大施主と爲りて、普く諸の貧苦を濟はすば、誓ひて正覺を成せじ。」

われ佛道を成ずるに至りなば、名聲十方に超えむ、究竟して聞こゆるところなくば、誓ひて正覺を成せじ。

離欲と深正念と、淨慧との修梵行をもて、無上道を志求して、

諸の 天人師と爲らむ。

神力大光を演べ、普く無際(むがい)の土を照らし、三垢(さんこう)の冥(みやみ)を消除(せうじゆ)して、
 廣く衆の厄難(やくなん)を濟ひ、

彼の 智慧(ちゑい)の眼を開きて、此の昏盲(こんまう)の闇を滅し、諸の 惡道(あくどう)を閉塞(へいそく)して、善趣(ぜんす)の門に通達(つうだつ)せしめ、

【一】以下立誓請證、故にこの偈を重誓偈と云ふ。

【二】梵本偈十二首、平阿なし無七言四十八句莊今と同く五言四十四句。

【三】超世、四十八願地前世間に超え通途諸佛の願に優る。

【四】大施主、財施法施無畏施窮りなきもの。

【五】この一句佛の因徳にして、無貪無瞋無癡の三菩提を満足す、或は六度を充たす。

【六】天人師、九界に通ずるも受

(一〇) 功祚満足することを成じて、威曜十方に朗かなり、日月重輝

を戢め、(一一) 天光も隠れて現せず、

衆の爲に法藏を開きて、廣く功德の寶を施し、常に大衆の中において、説法、師子吼したまふ。

一切の佛を供養し、衆の徳本を具足し、願慧ことごとく成満して、

(一二) 三界の雄と爲ることを得たまへり。

佛の無礙智のごときは、通達して照らしたまはずといふことなし。願はくは我が功慧の力、この(一三) 最勝尊に等しからむ。

(一四) 斯の願もし剋果せば、大千まさに感動すべし、虚空の諸の天

人、まさに珍妙の華を雨らすべし。』

(一五) 佛阿難に告げたまはく、『法藏比丘、この頌を説き已はるに、時

に應じて(一六) 普地六種に震動し、天より妙華を雨らして、以て其の上

に散す。自然の音樂ありて、空中に讃じて言はく、決定して必ず無上

正覺を成せむ』と。是において法藏比丘、かくのごとき大願を具足し

化の主なる人と天とを擧ぐ。

【七】三垢。貪瞋癡なり。

【八】智慧。人空法空の智慧。

【九】惡道。別しては地獄餓鬼畜生の三なれど、總じては流轉の六道なり。

【一〇】功祚。因位の行を功と云ひ果位の福を祚と云ふ。

【一一】天光。梵天等の光。

【一二】師子吼。大理を宣べて怖れざるを喩ふ。

【一三】佛果を三界の雄と云。

【一四】佛のと世自在王佛を指す。

【一五】第四の誓。故に重誓偈を四誓偈とも云ふ。

【一六】大千。三千世界、國土のこと。

【一七】現瑞證誠。

【一八】普地。大千のこと。誓願虚しからず。

【一九】寂滅。大涅槃即ち佛果。

【二〇】以下正宗第二、法藏因位の

修滿して、誠諦むなしからず、世間を超出して深く寂滅を樂へり。

(10)阿難、ときに彼の比丘、その佛の所の諸天と魔梵と龍神との

八部大衆の中において、斯の弘誓を發す。此の願を建て已りて、

一向に志を専らにして妙土を莊嚴す。修するところの佛國恢廓

廣大にして超勝獨妙なり。建立常然にして無衰無變なり。不可

思議兆載永劫において菩薩の無量の德行を積植す。欲覺瞋覺害覺

を生ぜず、欲想瞋想害想を起さず、色聲香味觸法に著せず、忍力

成就して、衆苦を計せず、少欲知足にして染患癡なく、三昧

常寂にして智慧無礙なり、虛偽諸曲の心あることなく、和顏愛語し

て、意に先だちて承問す、勇猛精進にして志願うむことなく、専ら清

白の法を求めて、もて羣生を惠利す。三寶を恭敬し師長に奉事し、

大莊嚴をもて衆行を具足し、諸の衆生をして功德成就せしむ。空

無相無願の法に住して、作もなく起もなく、法は化のごとしと觀

勝行を明す。

【二】魔(Mara)梵(Brahma)。

【三】八部とは天、龍、夜叉、乾達婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽なり。

【四】恢廓、廣大の義。

【五】梵本無量無數不可思議無比不可數不可量不可說なる白千俱胝那由他年。時節永きを示す。長時修。

【六】欲覺、財色を思ふ。

【七】忍力、安受苦忍、耐怨害忍、法思惟忍。

【八】内外苦を忍びて憎怨せず。

【九】染患癡、三毒染患即ち貪瞋。

【一〇】三寶、佛法僧寶。

【一一】大莊嚴、恭敬三寶等の福智行は佛果の莊嚴なり。

【一二】無作無起は因果を空す。

【一三】他人も自己も俱に利益す。

す。麤言（三）と自害（四）と害彼（五）と彼此（六）俱害（七）とを遠離（八）し、善語（九）と自利（十）と利人（十一）と人我兼利（十二）とを修習（十三）す。國（十四）を棄て王（十五）を捐て、財色（十六）を絶去（十七）して、自ら六波羅蜜（十八）を行じ、人（十九）を教へて行せしむ。無央數劫（二十）に功（二十一）を積み徳（二十二）を累ぬ。

其（一）の生處（二）に隨（三）ひて、意（四）の所欲（五）に在（六）りて無量（七）の寶藏（八）自然（九）に發應（十）し、無數（十一）の衆生（十二）を教化（十三）し、安立（十四）して無上（十五）正眞（十六）の道（十七）に住（十八）せしむ。或（十九）は長者（二十）居士（二十一）豪姓（二十二）尊貴（二十三）と爲（二十四）り、或（二十五）は利利（二十六）國君（二十七）轉輪（二十八）聖帝（二十九）と爲（三十）り、或（三十一）は欲天（三十二）主（三十三）乃至（三十四）梵王（三十五）と爲（三十六）り、常（三十七）に四事（三十八）をもて、一切（三十九）の諸佛（四十）を供養（四十一）し恭敬（四十二）したてまつる。是（四十三）のごとき功德（四十四）稱說（四十五）すべからず。口氣（四十六）香潔（四十七）にして（四十八）優盃（四十九）羅華（五十）のごとし、身（五十一）の諸（五十二）の毛孔（五十三）より梅檀（五十四）香（五十五）を出（五十六）だす。其（五十七）の香（五十八）あまねく無量（五十九）の世界（六十）に薰（六十一）す。容色（六十二）端正（六十三）にして相好（六十四）殊妙（六十五）なり。其（六十六）の手より常（六十七）に無盡（六十八）のたから、衣服（六十九）飲食（七十）珍妙（七十一）華香（七十二）、繪蓋（七十三）幢幡（七十四）莊嚴（七十五）の具（七十六）を出（七十七）だす。是（七十八）のごとき等（七十九）の諸（八十）の天人（八十一）に超（八十二）えたり。一切（八十三）の法（八十四）において自在（八十五）をえたり。』

【三】六波羅蜜、施、戒、忍、進、定、慧也。波羅蜜 (Parimita) 到彼岸と譯す。

【四】正宗第三、法藏因位の勝果を明す。

【五】利利の具さに利帝利 (Ritiriki) 四姓の一、王種貴族軍人の階級。

【六】轉輪聖帝。王者の輪法轉して一切を服す。金輪は四天下、銀輪は三天下、銅輪は二天下、鐵輪は一天下とす。

【七】六欲。四王、忉利、夜摩、都率、化樂、他化自在天也。

【八】四事とは飲食、衣服、臥具、湯藥也。

【九】優盃羅 (Upanama)。青蓮と譯す。

【十】梅檀 (Chandan)。興樂と譯す。香の最良なる者。

【十一】繪は張帛トバリ蓋は天蓋キ

【三】阿難、佛に白さく、『法藏菩薩すでに成佛して、滅度を取りたま

ひきとやせむ。未だ成佛したまはずとやせむ。いま現に在しますとや

せむ。』佛阿難に告げたまはく、『法藏菩薩いま已に成佛して、現

に西方に在しませり、此を去ること十萬億刹なり、其の佛の世界

を名づけて安樂といふ。』阿難また問ひたてまつる。『其の佛成道より

このかたいくばく時を還とかせむ。』佛の言たまはく、『成佛よりこの

かた凡そ十劫を歴たり。其の佛の國土は自然の七寶金銀瑠璃

珊瑚珀砗磲碼瑙をもて合成して地と爲り、恢廓曠蕩として限極すべか

らず、悉くあひ雜廁し、うたたあひ入間せり、光赫焜耀として微

妙奇麗なり。清淨の莊嚴十方一切の世界に超踰せり、衆寶の中

の精なり、其の寶なほし。第六天の寶のごとし。又その國土には須

彌山および金剛鐵圍一切の諸山なく、また大海小海谿渠井谷

なし。佛神力のゆるぎに見むと欲すれば即ち現す。また地獄餓鬼畜生

諸難の趣なく、また四時春秋冬夏なし、不寒不熱にして常和調適

【三】正宗第四、法藏の勝報成佛を明す、淨影正宗三分によれば以下第二に所成を明す、彌陀果位の身土。

【四】滅度。入滅。

【五】彼佛現在の教證にして淨土の信仰中最要項の一。

【六】彌陀經にもこの文意出づ。

【七】平阿千億萬須彌山佛國無十萬億佛刹彌陀經同じ、莊稱讚經梵本百千俱胝那由他佛土、寶積經諸佛功德經には十萬と云。

【八】平十八劫阿凡十小劫無經今十劫莊於今十劫、稱讚經に經十大劫。梵本單に十劫と云。

【九】第三十二國土嚴飾の願成。

【五】願は雜也。

【五】第三十一國土清淨願參照。

【五】欲界天の中には第六天最勝

なり。爾のとき阿難佛に白して言さく、『世尊もし彼の國土に須彌山な
くば、其の四天王および切利天なに依りてか住せる。』佛阿難に
語げたまはく、『第二』欲天乃至色究竟天みな何に依りてか住せる。』
阿難佛に白さく、『无』『行業果報不可思議なればなり。』佛阿難に語げた
まはく、『行業果報不可思議なれば、諸佛世界もまた不可思議なり。其
の諸の衆生功德善力をもて行業の地に住す、故に能く爾るのみ。』阿難
佛に白さく、『我れ此の法を疑はず、ただ將來の衆生の爲に、其の疑惑
を除かむと欲して、ことさらに斯の義を問ひたてまつる。』

佛阿難に告げたまはく、『无量壽佛の威神光明最尊第一にして、
諸佛の光明よく及ばざるところなり。或は佛光あり、百佛世界或は千
佛世界を照らす。要を取りてこれを言はば、乃ち東方恒沙の佛刹を照
らす、南西北方四維上下も亦また是のごとし、或は佛光あり七尺を照
らし、或は一由旬二三四五由旬を照らす、是のごとく轉倍して乃
至一佛刹土を照らす。是のゆゑに无量壽佛をば、無量光佛、無

の故に比す。

【五】金剛鐵圍。大小の鐵圍山、

洲外に在り、金剛所成と云ふ。

【六】外海を大海、内海を小海と云ふ。

【七】第一無三惡趣願成就。

【八】諸難。八難處。

【九】切利。トライヤストリンジャー

(天)。四王切利は地居天とす。

【十】欲天。ヤマー。第三夜摩天以上は空居天にて須彌山によらずとも住すとす。

【十一】五不思議力に業力不思議あり、佛力最も不可思議とす。

【十二】十二光明無量願成就。

【十三】由旬。ヨウジュン。限量と譯す。四十里なり。

【十四】今十二佛平九阿十無十五

莊十三、梵十九光。此光皆彌陀の常光。

【十五】無量光。佛光數量なし。

邊光佛、(六三)無礙光佛、(六四)無對光佛、(六五)欲王光佛、(六六)清淨光佛、

(六七)歡喜光佛、(六八)智慧光佛、(六九)不斷光佛、(七〇)難思光佛、(七一)無稱光

佛、(七二)超日月光佛と號したてまつる。其れ衆生ありて、(七三)斯の光り

に遇はむものは、三垢消滅し、身意柔軟に歡喜踊躍して善心生ぜむ。

もし、(七四)三塗勤苦の處にありて、此の光明を見たてまつらば、みな休

息を得てまた苦惱なく、壽終の後みな(七五)解脫を蒙らむ。(七六)無量壽佛

の光明顯赫にして十方を照耀す、諸佛の國土に聞こえざることなし。

ただ我れ今その光明を稱するのみにあらず、一切の諸佛聲聞緣覺もろ

もろの菩薩衆も感く共に歎譽したまふこと、亦また是のごとし。もし

衆生ありて、其の光明の威神功德を聞きて、日夜に(七七)稱説して至心

不斷ならば、意の所願に隨ひて、其の國に生ずることを得て、諸の菩

薩聲聞大衆に共に歎譽して其の功德を稱せられむ。(七八)其の然してのち

佛道を得る時に至りて、普く十方の諸佛菩薩に其の光明を歎せられむ

こと亦いまのごとくならむ。佛の言たまはく、我れ無量壽佛の光明威

【六四】無邊光。曠に邊際なし。

【六五】無礙光。他の入法の障る所にあらず。

【六六】無對光。他光の敵對する所にあらず。

【六七】欲王光。光明自在。

【六八】清淨光。無貪善根に生じて衆生貪濁を除く。

【六九】歡喜光。無瞋善根に生じ衆生瞋恚を除く。

【七〇】智慧光。無癡善根に生じ衆生無明の癡闇を除く。

【七一】不斷光。常光相續不絕。

【七二】難思光。二乘菩薩等の思量し難きを云ふ。

【七三】無稱光。大菩薩も言語道斷の故に。

【七四】超日月光。彼光晝夜に通じ色心を照し心垢を除く、日月の比にあらず。

【七五】第三十三觸光。柔軟成就。

【七六】三塗。火塗は地獄、刀塗は

神の(八)纏巍殊妙なるを説くこと、晝夜一劫すともなほ未だ盡くすこと
あたはほじ。』

佛阿難に語げたまはく、一また無量壽佛の壽命長久にして稱計す

べからず。汝いづくにぞ知らむや。たとひ十方世界の無量の衆生をし

てみな人身を得しめ、悉く聲聞緣覺を成就せしめて、都べて共に

集會し、禪思一心に其の智力を竭くして、百千萬劫において悉く共に

推算して、其の壽命の長遠の數を計るとも、窮盡して其の限極を知ること

とあたはほじ。(八四)聲聞菩薩天人の衆の壽命の長短もまたまた是のごと

し、算數譬喩の能く知るところにあらす。また聲聞菩薩その數は

かりがたし、稱説すべからず、神智洞達にして威力自在なり、

能く掌中において一切の世界を持せり。』

佛阿難に語げたまはく、『彼の佛の初會の聲聞衆のかす稱計す

べからず、菩薩も亦しかり。いま大毘連のごとき百千萬億無量

無數ありて、阿僧祇那由佉劫において乃至滅度まで悉く共に計校す

餓鬼、血塗は畜生。

【七】解脫。往生を得るを云ふ。

【七】第十七諸佛稱揚顯成就。諸佛稱揚は下卷の初にも彌陀經

にも出づ。

【七】稱説。通じては讚嘆、別しては稱名。

【八】この一句は新生人の後成佛する時の意。

【八】纏巍。高勝の義。

【八】第十三壽命無量顯成就。

【八】聲聞緣覺の解脫分人中三洲と定むる故に先づ人身を得しめと云。

【八】第十五眷屬長壽顯成就。

【八】第十四聲聞無數顯成就、彌陀經もこれを説く。

【八】第三十智見無窮顯成就。

【八】第二十六得金剛身。

【八】第十四成就細説。

【八】初會。彌陀成道最初の説法。

とも、多少の數を究了すること能はじ。譬ふれば大海の深廣無量ならむに、もし人ありて其の一毛を拵きて以て百分と爲し、一分の毛を以て一滯を沾取せむがごとし。意においていかにぞ、其の滯るところのものを彼の大海においてするに、何れか多しとするところぞ。阿難佛に白さく、「彼の滯るところの水を大海に比するに、多少の量 巧曆の算數言辭譬類のよく知るところにあらず。」佛阿難に語げたまはく、
 (三) 目連等のごとき、百千萬億那由佉劫において、彼の初會の聲聞菩薩を計りて知るところの數は猶し一滯のごとく、其の知らざるところは大海の水のごとくならむ。

(四) 又その國土には七寶の諸樹世界に周滿せり。

(五) 金樹、銀樹、瑠璃樹、玻璃樹、珊瑚樹、碼

瑙樹、砮磈樹あり。或は二寶三寶乃至七寶うたた共に合成せるあり。或は金樹の銀葉華果なる

あり、或は銀樹の金葉華果なるあり、或は瑠璃樹あり玻璃を葉とす、華果また然なり、或は水精

樹あり瑠璃を葉とす、華果また然なり、或は珊瑚樹あり碼瑙を葉とす、華果また然なり、或は碼

瑙樹あり瑠璃を葉とす、華果また然なり、或は砮磈樹あり衆寶を葉とす、華果また然なり、或は

【九〇】大目健連は釋迦弟子中神通第一の稱ある故に擧ぐ。

【九一】阿僧祇 (Asankhyā)。無數と譯す。

【九二】巧曆。數學に長ずる曆師。

【九三】前出の大目健連に同じ。

【九四】以下第五段極樂依報、觀經寶樹觀。第三十二國土嚴飾願成。

【九五】純樹。

【九六】雜樹。

寶樹あり、紫金を本とし白銀を莖とし瑠璃を枝とし水精を條とし珊瑚を葉とし碼磔を華とし砵磔
 を實とす、或は寶樹あり、白銀を本とし瑠璃を莖とし水精を枝とし珊瑚を條とし碼磔を葉とし砵
 磔を華とし紫金を實とす、或は寶樹あり、瑠璃を本とし水精を莖とし珊瑚を枝とし碼磔を條とし
 砵磔を葉とし紫金を華とし白銀を實とす、或は寶樹あり、水精を本とし珊瑚を莖とし碼磔を枝と
 し砵磔を條とし紫金を葉とし白銀を華とし瑠璃を實とす、或は寶樹あり、珊瑚を本とし碼磔を莖
 とし砵磔を枝とし紫金を條とし白銀を葉とし瑠璃を華とし水精を實とす、或は寶樹あり、碼磔を
 本とし砵磔を莖とし紫金を枝とし白銀を條とし瑠璃を葉とし水精を華とし珊瑚を實とす、或は寶
 樹あり、砵磔を本とし紫金を莖とし白銀を枝とし瑠璃を條とし水精を葉とし珊瑚を華とし碼磔を
 實とす、此の諸の寶樹 (七) 行行あひ値ひ、莖莖あひ望み、枝枝あひ向ひ、華華あ
 ひ順ひ、實實あひ當たり、榮色光耀として視るにたふべからず、 (八) 清風ときに發こりて (九) 五音
 の聲を出だす、微渺の (一〇) 宮商、自然にあひ和せり。

(一〇) また無量壽佛の其の (一一) 道場樹は、高さ四百萬里なり、其の本
 周圍五十由旬なり、枝葉四もに布けること二十萬里なり、一切の衆寶
 自然に合成せり。 (一二) 月光摩尼持海輪寶衆寶の王たる (一三) ものを以て

【七】行行相値とは行樹(ナミキ)の出入なき也。
 【八】清風は次文に云ふ清涼の微風、萬種の樂音。
 【九】五音とは宮、商、角、徵、

これを莊嚴せり、條の間に周匝して寶瓔珞を垂れたり。百千萬のいろ

種種に異變す、無量の光徹照耀することきはまりなし、珍妙の寶網そ

の上に羅覆せり、一切の莊嚴よろしきに隨ひて現す。微風ゆるく動き

て、諸の枝葉を吹くに無量の妙法の音聲を演出す、其のこゑ流布して

諸佛の國に徧す、其の音を聞かむものは、(一〇五)深法忍を得て不退轉に

住せむ。佛道を成ずるに至るまで、耳根清徹にして苦患に遭はず、目

にその色を觀、耳にその音を聞き、鼻にその香を知り、舌にその味ひ

を嘗め、身にその光りを觸れ、心に法を以て緣するに、一切みな甚深

法忍を得て不退轉に住せむ。佛道を成ずるに至るまで(一〇六)六根清徹

にして、諸の惱患なからむ。阿難、もし彼の國の人天この樹を見むも

のは、三法忍を得む、一つには(一〇七)音響忍、二つには(一〇八)柔順忍、三

つには(一〇九)無生法忍なり。此れみな無量壽佛の(一一〇)威神力のゆゑに、

本願力のゆゑに、満足願のゆゑに、明了願のゆゑに、堅固願のゆゑに、

究竟願のゆゑなり。『佛阿難に告げたまはく、世間の帝王に百千の音樂

羽にて六拍子の基準。

【一〇〇】宮は喉音、商は齒音。

【一〇一】第二十八見道場樹願成就。

【一〇二】彌陀成道の場にある樹、釋迦の菩提樹畢鉢羅樹の如し。

【一〇三】摩尼(一)珠に勝光あるを月光摩尼、勝徳あるを持海摩尼と云。

【一〇四】もの底本なし。

【一〇五】深法忍、初地以上の忍を云ふ、或は第三忍。得忍は第四十八得三法忍願成就。

【一〇六】六根は眼、耳、鼻、舌、身、意。清徹は互用の徳、目に聞き耳に觀る類なり。

【一〇七】音響忍、音響有にして實に非すと知る。

【一〇八】柔順忍、空に順じて有を觀る。

【一〇九】無生法忍、生滅不生不滅を絶して諸法を觀る。

【一一〇】威神力等六故を擧ぐ前の

あり、轉輪聖王より乃至第六天上の伎樂の音聲、展轉してあひ勝るること、千億萬倍なり、第六天上の萬種の樂の音は、無量壽國の諸の七寶樹の一種の音聲にしかざること千億倍なり、また自然の萬種の伎樂あり、又その樂のこゑ法音にあらすといふことなく、
 (一一三) 清揚哀亮
 にして微妙和雅なり、十方世界の音聲の中に最も第一とす。
 (一一四) また講堂 精舍宮殿樓觀あり、みな七寶の莊嚴 自然の化成なり、また眞珠明月摩尼の衆寶をもて、
 (一一五) 交露とし、其の上に覆蓋せり、内外左右に諸の浴池あり、或は十由旬、或は二十三十乃至百千由旬にして、縱廣深淺おのおのみな
 (一一七) 一等なり。
 (一一八) 八功德水 湛然として盈滿せり、清淨香潔にして味ひ甘露のごとし。黄金の池には底に白銀の沙あり、白銀の池には底に黄金の沙あり、水精の池には底に瑠璃の沙あり、瑠璃の池には底に水精の沙あり、珊瑚の池には底に琥珀の沙あり、琥珀の池には底に珊瑚の沙あり、磔磔の池には底に碼瑙の沙あり、碼瑙の池には底に磔磔の沙あり、白玉

一故は、如來十方等の現在の力。後の五故は因位の願が分なる故とす。衆生得忍は如來因果の力なり。

【二】清揚哀亮。シミ、ノビ、アレにして而も調子明亮なり。

【三】第三十二國土嚴飾顯成就。宮殿樓觀細說。

【四】工匠の所作にあらす。

【五】交露。珠珍交結せる幔

【六】彌陀經八功德池、觀經寶池

觀參照。

【七】一等。十由旬の池は縱廣深淺各十由旬、一様の義。

【八】八功德は澄淨、清冷、甘美、輕軟、潤澤、安和、飲時調適、飲已無患。

【九】湛然。湛へて流れず。

【一〇】優曇羅。ウツハラ。青蓮。

【一一】蓋曇摩。タマン。蓮華、赤

の池には底に紫金の沙あり、紫金の池には底に白玉の沙あり。或は二

寶三寶乃至七寶うたた共に合成せり。其の池の岸の上に梅檀樹あり、

華葉垂れ布きて香氣あまねく薫ず。天の(二四〇)優曇羅華(二四一)益曇摩華

拘物頭華(二四二)分陀利華あり、雜色の光りうるはしくして水上に彌

覆せり。彼の諸の菩薩および聲聞衆、もし寶池に入りて、意に水をし

て足を沒めしめむと欲せば、水すなはち足を沒めむ、膝に至らしめむ

と欲せば、すなはち膝に至らむ、腰に至らしめむと欲せば、水すなは

ち腰に至らむ、頸に至らしめむと欲せば、水すなはち頸に至らむ、身

に灌がしめむと欲せば、自然に身に灌がむ、還復せしめむと欲せば、

水すなはち還復せむ。調和冷煖にして、自然に意に隨ひて、(二四三)神

を開き體を悦ばしめ、(二四四)心垢を蕩除す、清明澂潔にして淨きこと

形なきがごとし、寶沙映徹して深しとして照らさずといふことなし。

(二四五)微瀾廻流して轉あひ灌注す、安詳として徐く逝きて、遅からず疾

からず。(二四六)波は無量自然の妙聲を揚ぐ、其の所應に隨ひて聞かざる

蓮、紅蓮、(二四七)拘物頭(Kumudaka)、赤蓮或は黃蓮。

(二四八)分陀利(Pundarikaka)、白蓮。

(二四九)身意調適。

(二五〇)心垢、煩惱。

(二五一)微瀾、小波。

(二五二)第四十六隨意開法願成就。

(二五三)佛聲、佛德讚嘆。

(二五四)法聲、佛法真理の説。

(二五五)僧聲、大衆和合の説。

(二五六)寂靜、涅槃。

(二五七)空無我、諸法緣起の故に空無我平等なり、眞理勝義諦。

(二五八)大慈悲、無緣平等慈悲究竟。

(二五九)到彼岸の六度十度等。

(二六〇)十方は是處非處力、業智力、定力、根力、欲力、性力、至處道力、宿命力、天眼力、漏盡力。

(二六一)不共法、十方に四無畏等を

ものなし。或は (二二六) 佛聲を聞き、或は (二二九) 法聲を聞き、或は (三〇〇) 僧

聲を聞き、(三二) 或は 寂靜のこころ、(三三) 空無我のこころ、(三四) 大慈悲の

こころ、(三五) 波羅蜜のこころ、或は (三六) 十力 (三七) 無畏不共法のこころ、諸

の (三八) 通慧のこころ、(三九) 無所作のこころ、(四〇) 不起滅のこころ、無生忍の

こころ、乃至 (四一) 甘露灌頂もろもろの妙法のこころ、是のごとき等の聲、

その所聞に稱ひて歡喜無量なり。清淨離欲寂滅眞實の義に隨順し、

三寶力無所畏不共の法に隨順し、通慧菩薩聲聞所行の道に隨順す。

(四二) 三途苦難の名あることなく、ただ自然快樂の音のみあり。是のゆ

ゑに其の國を名つけて安樂といふ。

(四三) 阿難、かの佛の國土の (四四) 諸の往生せる者は、是のごとき

清淨の色身、もろもろの (四五) 妙音聲 (四六) 神通功德を具足す。

(四七) 處るところの宮殿 衣服飲食もろもろの妙華香莊嚴の具、なほ

し第六天の自然の物のごとし。若し食せむと欲せむときは七寶の盜器

自然に前にあり、金銀瑠璃砗磲碼瑙珊瑚琥珀明月眞珠かくのごとき諸

加へ、般若六には身無失等十
八とし、十住論四十不共徳を
説く。

【三七】通慧。六通定慧。

【三八】實因所作なし無自性の義。

【三九】不起滅。實果起滅なき義。

【四〇】灌頂。菩薩の十地に佛記を
授く、天子讓位の式の如し。

【四一】第十六離諸不善願成就。

【四二】以下國土に就て人を明す。

【四三】生因攝機の願によるもの。

【四四】第二十一具足諸相願成就。

【四五】第三十智辨無窮願成就。

【四六】第五宿命以下第十漏盡通
まで諸願成就。

【四七】第二十七萬物嚴淨願成就。

【四八】第三十八衣服隨念願成就。

【四九】百味。衆味具足、必ずしも
百種に限らず。

【五〇】有爲無漏の快樂、無爲無漏
に等し。次々隣近、次續と解

し、或は次は歸と解す。

盜はちころらに隨したがひて至いたり。〔二五〕百味ひやくみの飲食おんじき自然じねんに盈やうまん滿まんせむ。此この食じきあり

といへども、實じつに食じきするものなし、ただ色いろを見香みかを聞ききて、意こころに食じきな

りとおもへば自然じねんに飽足はたそくす。身心しんじん柔順じゆんにして味著みせやくするところなし、事

をはれば化けし去さり、時ときいたればまた現げんす。彼の佛ほとけの國土こくどは清淨しやうじやうあん安穩あんゑんに

して微妙みひやく快樂くわくなり。無爲むゐ泥洹たいゑんの道みちに〔二五〕次つげり。

其そのの諸もろろの聲聞しやうもん菩薩ぼさつ天人てんじん、智慧ちゐゐ高明かうみやうに神通洞達じんづうとうたつし、威ゐおなじく一

類るいにしてかたも異狀いじやうなし。ただ〔二五〕餘方じゆほうに因順いんじゆんするがゆゑに、天人てんじん

の名なあり、顔貌げんめう端正たんじやうにして、世よに超こえて希有きやうなり、容色ようしき微妙めいひやくにして天

にあらず人にんにあらず、みな〔二五〕自然じねん虛無こむの身み、〔二五〕無極むごくの體たいを受けた

り。』

〔二五〕佛阿難ほとけあなんに告つげたまはく、『譬たとへば世閒せけんの貧窮びんぐう乞人こつにんの帝王たいわうの邊ほとりに在

るがごとき、形貌ぎやうめう容狀ようじやういづくにぞ類るすべきか。』〔二五〕阿難佛あなんほとけに白まをさく、『もし此この人帝王ひとたいわうの邊ほとりに在

むに、〔二五〕羸陋るゐる醜惡しゆあくにして、以もて喩たとへとすることなきこと、百千萬億ひやくせんまんぶく不可計倍ふかけばいならむ。然しかるゆゑは

貧窮びんぐう乞人こつにんは〔二五〕底極たいごく斷下たんげにして、衣ころもは形かたちを蔽かくさず、食じきは趣むづかに命いのちを支ささふ、飢寒きかん困苦こんくして〔二五〕人理にんりは

〔二五〕第四無有好醜願成就。

〔二五〕本義に隨ひて人天と云ふあり、居處天地に依るを例して人と云ひ天と云ふ。

〔二五〕胎生等にあらずるを示す。

〔二五〕無極。圓滿無上即ち佛果。

〔二五〕此土好醜差別を比較し善惡の應報なるを説く。

〔二五〕慳貪を識め無貪を勸むる因果應報は可なるも佛教の俗門なり、本經の要にあらず、故に阿難これを詳説す。

〔二五〕羸は瘦也、困也。

〔二五〕底極斷下は最極斷下也

〔二五〕人理。人間の分。

此の人帝王の邊に在らむ。然るゆゑは

飢寒困苦して

人理は

とんど盡きなむとす。みな前世に徳本を植ゑず、財を積みて施さず、富有にしてますます慳しみ、ただ唐らに得むと欲して、貪求して厭くことなく、あへて善を修めず、惡を犯して山のごとくに積みしに坐る。是のごとくして壽をはりぬれば財寶消散す、身を苦めて聚積して、これがために憂惱したれども、己れにおいて益なくして徒らに他の有と爲る。〔二六〕善として怙むべきなく、徳として恃むべきなし、是のゆゑに死して惡趣に墮して、此の長苦を受けぬ。罪をはりて出づることを得たれども、生れて下賤と爲り、愚鄙廝極にして、〔二七〕示れば人類に同じ。世間の帝王の人中に獨尊たるゆゑは、みな宿世積徳の致すところに由る、慈悲ありて博く施し、仁愛ありて兼ね濟ひ、信を履み善を修めて違諍するところなかりき。是をもて壽をはりぬれば〔二八〕福應じて善道に昇ることをえ、天上に上生して茲の福樂を享けぬ。積善の餘慶ありて、いま人と爲ることを得て、たまたま王家に生れて自然に尊貴なり、儀容端正にして衆に敬事せられ、紗衣珍饈ころにしたがひて服御す、宿福の追ふところ故に能く此れを致す。』

〔二九〕佛阿難に告げたまはく、『汝が言是なり。たとひ帝王人中の尊貴にして形色端正なりといへ

【二六】善、徳。十善五徳等。下卷に善徳を出す。

【二七】外相を視れば人類なるも實に人理なきを云ふ。

【二八】善業に應報せる善道。

【二九】欲界第六天王も極樂聖業に比較とならざるを示す。

ども、これを轉輪聖王に比せむに、甚だ鄙陋なりとす、猶し彼の乞人の帝王の邊に在るがごとくならむ。轉輪聖王の威相殊妙は天下第一なれども、これを忉利天王に比せば、またまた醜惡にしてあひ喻ふことを得ざること、萬億倍ならむ。もし天帝を第六天王に比せば、百千億倍にしてあひ類せざらむ。設し第六天王を無量壽佛國の菩薩聲聞に比せむに、光顏容色あひおよびざること、百千萬億不可計倍ならむ。

二畜 佛阿難に告げたまはく、『無量壽國の其の諸の天人、二畜 衣服飲

食華香瓔珞繪蓋幢旛、微妙の音聲、所居の 舍宅宮殿樓閣、その形

色に稱ひて高下大小あり、或は一寶二寶乃至無量の衆寶、こころの所

欲に隨ひ念に應じてすなはち至る。また衆寶の妙衣を以て徧く其の地

に布けり、一切の天人これを踐みて行く、無量の寶網佛土に彌覆せり、みな金縷眞珠百千の雜寶

奇妙珍異なるを以て莊嚴交飾せり、四面に周匝して垂るるに寶鈴を以てす、光色晃耀にしてこと

ごとく嚴麗を極めたり。自然の徳風ゆるく起りて、微動するに其のかせ調和にして、寒からず

暑からず、溫涼柔輦にして、遅からず疾からず、諸の羅網および衆の寶樹を吹きて、無量の微妙

の法音を演發し、萬種の溫雅の徳香を流布す。其の聞くことあらむものは、塵勞垢習自然に起こ

【二畜】極樂正報の勝れたるを説く、
以下依報の勝れたるを説く、
寶具身に應ず。

【二畜】第三十八願。
【二六六】第三十二願。

【二六六】第三十二願。

らず、風その身に觸るるにみな (二七) 快樂を得む、譬ふれば比丘の (二六) 滅盡三昧を得るがごとし。

(二六) また風はなを吹き散じて佛土に徧滿す、色の次第に隨ひて雜亂せず 柔輒光澤にして、馨香

芬烈せり。足その上を履むに、陷下すること四寸なり、足を擧げをは

るに隨ひて、還復すること故のごとし。華もちゐをはりぬれば地すな

はち開裂す、次でて以て化没して、清淨にしてのこりなし、其の時節

に隨ひて、風はなを吹き散す。是の如とくすること (二七) 六返なり。ま

た衆寶の蓮華世界に周滿せり、一一の寶華に百千億の葉あり、其の華

の光明無量種の色あり、青色には青光あり、白色には白光あり、玄黃

朱紫の光色もまた然なり、 (二七) 曄曄煥爛にして、明曜なること日月の

ごとし。一一の華の中より三十六百千億の光りを出だす、一一の光り

の中より三十六百千億の (二七) 佛を出だす、身色紫金にして相好殊特

なり、一一の諸佛また百千の光明を放ちて、普く十方のために微妙

の法を説きたまふ、是のごとき諸佛おのおの無量の衆生を、佛の (二七) 正道に安立せしめたまふ。

【二七】第三十九受樂無染願成就。

【二六】人法の實在の執滅し、二空

成就して滅盡定の樂を得。

【二六】香華敷地の徳を説く。

【二七】六返。彼土晝夜なきも此土

一日に準すれば晨朝日中晡時

初中後夜の六時。

【二七】曄は光り盛明、曄は華光の

盛、煥爛は炳明。

【二七】華より現はるる化佛なれ

ば依報に屬す、かかる化佛に

ば身口業化ありて意業化なし

とす。

【二七】無上正眞の大菩提道なり。

卷の(二)下の本

(三) 佛阿難に告げたまはく、『其れ衆生ありて彼の國に生ぜむ者は、皆ことごとく、正定の衆に住せむ。ゆゑはいかに。彼の佛國の中には諸の邪衆および不定聚なし。』
 (四) 十方恆沙の諸佛如來みな共に無量壽佛の威神功德の不可思議なることを讚歎したまふ。
 (五) あらゆる衆生その名號を聞きて、信心歡喜して、乃至一念至心に廻向して彼の國に生ぜむと願はば、即ち往生を得て不退轉に住せむ。
 (六) ただ五逆と正法を誹謗するとを除く。』

(六) 佛阿難に告げたまはく、『十方世界の諸天人民、それ至心ありて彼の國に生ぜむと願はんに、凡そ三輩あり。其の上輩の者は、家を捨てて欲を棄てて、沙門を作り、菩提心を發こし、一向に専ら無量壽佛を念じ、諸の功德を修して、彼の國に生ぜむと願ふ。此れ等の衆生、壽終の時に臨みて、無量壽佛もろもろの大衆とともに、其の人の前に現じたまはむ。即ち彼の佛に隨ひて其の國に往生し、便ち七寶華の中に

【一】下卷は彌陀果上の事を説く。

【二】第六段悲化を明す。淨影は第三所攝を明すと云ふ。

【三】第十一住正定聚願成就。三定聚に異説多きも普通の一説は正定聚は三賢十聖、不定聚は十信、邪定聚は十信前と、これ位に就て云ふ。今は諸行念佛を問はず往生するもの土徳により不退なれば邪聚不定聚なしと云ふ。

【四】第十七諸佛稱揚願成就。

おいて自然に化生し、不退轉に住して智慧勇猛神通自在ならむ。是の
ゆゑに阿難、それ衆生ありて
〔二〇〕今世において無量壽佛を見たてまつ
らむと欲せば、まさに無上菩提の心を發こし功德を修行して、彼の國
に生せむと願ふべし。』

佛阿難に告げたまはく、『其の中輩の者は、十方世界の諸天人民、
それ至心ありて彼の國に生せむと願はば、行じて沙門と作り、大に功
徳を修することあたはずとも、當に無上菩提の心を發こして、一向に
専ら無量壽佛を念すべし、多少に善を修して、齋戒を奉持し塔像を
起立し、沙門に飯食せしめ、
〔二三〕繪を懸け燈を然し、華を散じ香を燒
き、此れを以て廻向して彼の國に生せむと願はば、其の人をばりに臨
みて、無量壽佛その身を化現したまひ、光明相好つぶさに眞佛のごと
く、諸の大衆とともに其の人の前に現じたまはむ。即ち化佛に隨ひて
其の國に往生し、不退轉に住せむ。功德智慧は次ぎて上輩のもののごとくならむ。』
佛阿難に告げたまはく、『其の下輩の者は、十方世界の諸天人民、それ至心ありて彼の國に

【五】第十八念佛往生願成就。

【六】願文には乃至十念と云へり。

【七】逆誘を除くは抑止の説と云ふ。

【八】三輩往生を説く。第十九願成就、三輩と觀經の九品と同意に就て異説す。

【九】三輩に但念佛、助念佛、但諸行の三類あり、念佛は本願なれば一向と云ふ。

【一〇】正しくは臨終見佛、兼ては平生。

【一一】中輩。

【一二】齋戒。八戒と齋となり、在家一日夜出家の戒を持つ。

【一三】繪は彩旛也。

【一四】下輩。

生せむと欲せむに、たとひ諸の功德を作すことあたはずとも、當に無上菩提の心を發こして、一向に意を専らにして乃至十念無量壽佛を念じて其の國に生せむと願ふべし。若し 深法を聞きて歡喜信樂して疑惑を生せず、乃至一念かの佛を念じて、至誠心を以て其の國に生せむと願ふは、此の人臨終に、夢のごとくに彼の佛を見たてまつりてまた往生を得む。功德智慧は次ぎて中輩の者のごとくならむ。』

佛阿難に告げたまはく、『無量壽佛の威神きはまりなし。十方世

界の無量無邊不可思議の諸佛如來稱歎したまはずといふことなし。

彼の東方恆沙の佛國において、無量無數の諸の菩薩衆、みな悉く

無量壽佛の所に往詣して、及び諸の菩薩聲聞大衆を恭敬し供養し

て、經法を聽受し道化を宣布す。南西北方四維上下も亦また是のごと

し。爾のとき世尊頌を説きて曰たまはく、

『東方の諸佛の國、そのかず恒沙のごとし、彼の土の菩薩衆、ゆきて無量覺に觀えた

てまつる。

南西北四維、上下も亦また然なり、彼の土の菩薩衆、ゆきて無量覺に觀えたてまつる。

【五】深法。彌陀の功德。

【六】第十七諸佛稱揚顯成流顯說。又前の凡夫往生に對し十方聖者往生を兼説す。

【七】第四十五住定見佛顯參照。

【八】及の上に佛ある意にて讀むべし。

【九】釋尊の別讚。

【一〇】無量覺。阿彌陀佛。

一切の諸の菩薩、おのおの天の妙華と、寶香と無價の衣とを齎て、無量覺を供養す。

〔三〕成然として天樂を奏し、和雅の音を暢發し、最勝尊を歌歎して、無量覺を供養す。

神通と慧とを究達して、深法門に遊入す、功德藏を具足して、妙智等倫なし。

慧日世間を照らして、生死の雲を消除したまふ、恭敬して繞るこ

と 〔三〕三匝して、無上尊に稽首したてまつる。

彼の嚴淨の土を見るに、微妙にして思議し難し、因りて無上心を

發こす、願はくは我が國もまた然ならむと。

時に應じて無量尊、容を動かして欣笑を發こし、口より無數の

〔四〕光りを出だして、徧く十方の國を照らしたまふ。

光りを廻らして身を圍繞せしむること、三匝して 〔五〕頂より入

る、一切の天人衆、踊躍してみな歡喜す。

大士觀世音、服を整へて稽首して問ひたてまつる、佛に白さく何

に緣りてか笑みたまへる、 〔六〕唯しかり願はくは意を説きたまへ。

〔七〕梵聲は猶し雷震のごとく、 〔八〕八音妙響を暢べたまふ。當に善

〔一〕成然。皆。

〔二〕深法門。涅槃なり、究竟の

定慧にて大涅槃の理に入る。

〔三〕右繞三匝は町重なる恭敬なり。或は佛の三徳を以て三毒

を滅するを表すと云。

〔四〕この類の光を神通光と云。

〔五〕得佛を記するとき光頂より入る。

〔六〕唯然に意中を示す助語。

〔七〕二句は彌陀の説音を形容せる也。梵は清淨の義。

〔八〕八音、説法の聲、最好聲、易了聲、柔輭聲、和調聲、尊惠

聲、不誤聲、深妙聲、不女聲。

〔九〕授記。決定して成佛すべし

薩に(二五)記を授くべし、いま説かむ仁あきらかに聴け。

十方より來れる正士、われ悉く彼の(二六)願を知れり、嚴淨の土を

志求す、(二七)決を受けて當に作佛すべし。

一切の法は、猶し(二八)夢と幻と響とのごとしと覺了して、諸の妙

願を満足して、必ず是のごとき刹を成せむ。

法は電と影とのごとしと知りて、菩薩の道を究竟す、諸の功德の

本を具せるをもて、決を受けて當に作佛すべし。

諸法の性は、一切空無我なりと通達して、専ら淨佛土を求む、必ず是のごとき刹を成せむ。

諸佛は菩薩に告げて、安養の佛に觀えしむ、法を聞きて樂受して行じて、疾く清淨の處を得

よ。

彼の嚴淨の國に至らば、便ち速かに神通を得む、必ず無量尊において、記を受けて等覺を成

すべし。

其の佛の本願のちから、(二九)名を聞きて往生せむと欲せば、皆ことごとく彼の國に到りて、自

ら不退轉に致らむ。

と記説する也。

【二五】願。前の第七偈に願我國亦然とせる彌陀に同する願。

【二六】決。受記決定。

【二七】無實の故に如夢、而有の故に如幻。

【二八】第四十七得不退轉願成就、第十八第十一參照。

菩薩ぼつたつしん至願しげんを興おこすらく、願ねがはくは己わたくしが國くにも異なることなからしめむ、普あまねく一切いっさいを度どし、名なあらはれて十方じつぱうに達たつせむと念ねんず。

億おくの如來にょらいに奉事ぶじするに、飛化ひけして諸刹しよさつに徧へんじ、恭敬くいきやうし歡喜くわんぎして去さりて、還かへりて安養國あんようこくに到いたる。

【四〇】若もし人善本ひとぜんほんなくば、此この經きやうを聞きくことを得えじ、清淨しやうじやうにして

【三九】戒かいを有たもてらむもの、乃すなはち正法しやうほふを聞きくことを獲えむ。

曾かつて更さらに世尊せそんを見みたてまつりしもの、すなはち能よく此この事ことを信しんず、

謙敬けんきやうして聞ききて奉行ぶぎやうし、踊躍ゆやくして大おほいに歡喜くわんぎす。

【三八】憍慢けうまんと弊へいと懈怠けがいとは、以もて此この法ほふを信しんじがたし、宿世しゆくせに諸しよ

佛ぶつを見みたてまつりしもの、樂れがひて是こゝのごとき教をへを聽きく。

聲聞しやうもんあるひは菩薩ぼつたつ、よく聖心しやうしんを究きうむることなし、譬たとふれば生う

れてより【三七】盲めしひたる者ものの、行ゆきて人ひとを開導かいだうせむと欲ほつするがごと

し。如來にょらいの智慧ちゑ海かいは、深廣せんくわうにして涯底がいていなし、二乘にじまうの測はかるところに

あらず、ただ佛ほとりのみひとり明瞭みやうれうなり。

たとひ一切いっさいの人ひと、具足ぐそくしてみな道だうをえ、淨慧じやうゑありて【四〇】本空ほんくうを知しり、億劫おくにきに佛智ぶつちを思おもはむに、

【四〇】以下釋尊の讚嘆なり。
【三九】善本。廣く通ずるも、戒は諸善の初佛法の壽なれば、以て開經の宿因とす。
【三八】憍は自高、慢は卑他、謙敬の反對なり。
【三七】六弊は六度を閉塞す。
【三六】聖心。彌陀果上の佛智。
【三五】生盲は不知にして他を導き難きを以て聖心の究め難きに譬ふ。
【四〇】本空。人法畢竟空。

力を窮め講説を極めて、壽を盡くすともなほ知らじ。佛慧は邊際なし、是のごとく清淨なることを致す。

壽命はなほだ得がたく、
佛世また値ひ難し、人
信慧あること難し、若し聞かば精進に求めよ。

法を聞きてよく忘れず、見ては敬ひ得ては夫に慶ぶべし、即ち我が善き親友なり、是のゆゑに當に意を發こすべし。

たとひ世界に滿てらむ火をも、必ず過ぎて要す法を聞け、會ず當に佛道を成じて、廣く生死の流れを濟ふべし。

佛阿難に告げたまはく、彼の國の菩薩みな當に一生補處を究竟すべし。其の本願ありて衆生の爲の故に、弘誓の功德を以て自ら莊

嚴して、普く一切衆生を度脱せむと欲せむをば除く。阿難、かの佛國の中の諸の聲聞衆は、身光一尋なり。菩薩の光明は百由旬を照らす。二菩薩あり、最尊

第一なり、威神の光明あまねく三千大千世界を照らす。阿難佛に白さく、『彼の二菩薩、その號いかにぞ。』佛の言たまはく、『一をば觀世音と名づけ、二をば大勢至と名づく。是の二菩薩この

【四一】佛世等。序分無量億劫難值難見と同意。

【四二】聞て疑はざるは信、思擇して正解を得るは慧。

【四三】濟。一本度に作る。

【四四】樂事を説き極樂を欣ばしむ。

【四五】第二十二必至補處願所成。

【四六】實は一樣なるも教門暫く差別して説く。

國土において、菩薩の行を修し、命終轉化して彼の佛國に生ぜり。阿難、(四六) それ衆生ありて

彼の國に生ぜむ者は、みな悉く三十二相を具足す、(四七) 智慧成滿して深く諸法を入り、(四八) 要妙を

究暢し、(四九) 神通無礙にして諸根明利ならむ。其の鈍根のものは、(五〇) 二忍を成就し、其の利根

のものは不可計の無生法忍を得む。又(五一) かの菩薩乃至成佛まで惡趣

に更らず、神通自在にして、常に宿命を識らむ。他方の五濁惡世に生

じて、示現して彼れに同すること、我が國のごとくならむをば除く。(五二)

佛阿難に告げたまはく、(五三) 彼の國の菩薩、佛の威神を承けて、一

食のあひだに、(五四) 十方無量の世界に往詣して、諸佛世尊を恭敬し供養

す。(五五) 心の所念に隨ひて、華香伎樂繪蓋幢旛無數無量の供養の具、

自然に化生して念に應じて即ち至る。珍妙殊特にして世の所有にあら

ず、輒ち以て諸佛菩薩聲聞大衆に、(五六) 奉散す。虛空の中に在りて化し

て華蓋と成る、光色、(五七) 昱燦として、香氣あまねく薫ず。其のはな周

圓四百里なるものあり、是のごとく轉倍して、乃ち三千大千世界を覆

ふ。其の前後に隨ひて次でを以て化没す。其の諸の菩薩、(五八) 僉然と

- 【四七】寶積經悲華經觀世音授記經如幻三摩地經等に觀音勢至此土發心修行往生極樂を説く。
- 【四八】第二十一具足諸相願所成。
- 【四九】第三十智辨無窮願。
- 【五〇】第二十五說一切智願所成。
- 【五一】第五以下第十、第四十一願參照。
- 【五二】第四十八得三法忍願。
- 【五三】二忍、音響忍、柔順忍。
- 【五四】第二不更惡趣願所成。
- 【五五】第二十三供養諸佛願所成。
- 【五六】第九神境通願所成。
- 【五七】第二十四供具如意願所成。
- 【五八】奉散、散じて供養する也。
- 【五九】昱は燦なり、火光盛明、燦

して欣悦す。虚空の中において共に天樂を奏し、微妙の音を以て佛徳を歌歎す。經法を聽受して、歡喜すること無量なり。佛を供養しをはりて、未だ食せざる前に忽然として 輕舉して其の本國に還る。

佛阿難に告げたまはく、『無量壽佛もろの聲聞菩薩大衆の

ために法を 班宣したまふとき、都べて悉く七寶の講堂に集會して、

廣く道教を宣べ、妙法を演暢したまふに、歡喜し心解し得道せずとい

ふことなし。即ち時に四方より自然に風おこりて、普く 寶樹を吹

きて、五音の聲を出だし、無量の妙華を雨らして、風に隨ひて周徧す。

自然の供養かくのごとく絶えず、一切の諸天みな天上百千の華香萬種

の伎樂を齎て、其の佛および諸の菩薩聲聞大衆を供養し、普く華香を

散じ、諸の音樂を奏し、前後に來往してかはるがはるあひ 開避す。

斯の時にあたりて 無怡快樂いふにたふべからず。』

佛阿難に語けたまはく、『彼の佛國に生せる諸の菩薩等講説すべ

きところあれば常に正法を宣ふ、智慧に隨順して違ふことなく、失る

は光なり。

【六〇】僉。皆也。

【六一】神通變化輕く速疾也。

【六二】上來他土、以下極樂自土事。

【六三】第三十智壽無窮願所成。

【六四】班ば遍也。

【六五】上卷寶樹の説相參照。

【六六】開避。アケテラダス。

【六七】漂怡は和悦也。

【六八】第二十五說一切智願所成。

【六九】第十漏盡願所成。我所とは

自我を認めその所有所作とす

敷に貪愛染著す。

【七〇】適英。適適たる親なく、英

莫たる疏なし、厚薄親疎なき

なり。

【七一】財物を訟争す。

【七二】離蓋。五蓋煩惱を離る。

【七三】等心。諸行等修の心。

【七四】勝心。所修勝上の心。

【七五】深心。向上懇懃の心。

【七六】愛法。聞思修の三慧法體を

ことなし。其の國土のあらゆる萬物において (七五) 我所の心なく染著の
 心なし、去來進止情に係るところなし、意に隨ひて自在にして (七〇) 適
 莫するところなし、彼れもなく我れもなく、競ふことなく (七二) 認ふる
 ことなし。諸の衆生において大慈悲饒益の心を得たり、柔軟に調伏し
 て忿恨の心なし、 (七三) 離蓋清淨にして厭怠の心なし、 (七四) 等心 (七五) 勝心
(七六) 深心定心 (七七) 愛法樂法喜法の心のみあり、諸の煩惱を滅して惡趣
 の心を離れ、一切菩薩の所行を究竟せり、無量の功德を具足し成就
 す。 (七八) 深禪定と諸の (七九) 通と (八〇) 明と (八一) 慧とを得て、志を (八二) 七
 覺に遊ばしめ、心を佛法に修す。 (八三) 肉眼清徹にして分了ならずとい
 ふことなく、天眼通達して無量無限なり、 (八四) 法眼觀察して諸道を究
 竟す。 (八五) 慧眼眞を見てよく彼岸に度る、 (八六) 佛眼具足して法性を覺了
 す。 (八七) 無礙智を以て人のために演説す。等しく三界は空なり (八八) 無所
 有なりと觀じて、佛法を志求し、諸の辯才を具して衆生の煩惱の患へ
 を除滅す。 (八九) 如來より生じて (九〇) 法の如如を解し、善く (九一) 習滅音聲

卷の下の本

(七五) 證得する心。
(七六) 深禪定。四禪四空定。
(七七) 通は六通。
(七八) 明は三明。
(七九) 慧は三慧。
(八〇) 七覺は擇法、精進、喜、輕安、定、捨、念なり。
(八一) 五眼の徳を述ぶ。この徳佛徳なるも因に一分も成するを説くなり。
(八二) 法眼。俗諦差別十界三乘道法を知る。
(八三) 慧眼。眞諦平等空理を知る。
(八四) 四眼佛果に至れば等く佛眼なり中道を緣する一切種智なり、無緣究竟の大慈悲なり。
(八五) 法義詞辯の四無礙。
(八六) 諸法緣生の故に空なり、實有とすべきなし。
(八七) 菩薩の解行は佛口より生ず、佛子とも云ふ。

の方便を知りて、世語を欣はず、正論に樂在す。諸の善本を修めて、

こころざし佛道を崇む。一切の法はみな悉く寂滅なりと知りて、

生身と煩惱と〔五二〕二餘ともに盡くせり。甚深の法を聞きて心に疑懼

せず、常に能く修行す、其の大悲は深遠微妙にして、覆載せずといふ

ことなし。〔五三〕一乘を究竟して彼岸に至り、疑網を決斷して〔五四〕慧こ

ろに由りて出づ、佛の教法において該羅して外なし、智慧は大海のご

とく、〔五五〕三昧は山王のごとし。慧光明淨にして日月に超踰せり。

清白の法具足し、圓滿すること猶し雪山のごとし、諸の功德を照ら

すこと等一にして淨きがゆゑに。猶し大地のごとし、淨穢好惡〔五六〕異

心なきがゆゑに。猶し淨水のごとし、〔五七〕塵勞もろもろの垢染を洗除す

るがゆゑに。猶し火王のごとし、一切の煩惱の薪を燒滅するがゆゑに。

猶し大風のごとし、諸の世界を行くに障礙なきがゆゑに。猶し虚空のごとし、

所著なきがゆゑに。猶し蓮華のごとし、諸の世間において汚染なきがゆゑに。猶し

とし、羣萌を運載して生死を出だすがゆゑに。猶し重雲のごとし、大法雷を震ひて未覺を覺する

【五二】空無所有にして而も有なり。この如實に知見せる理智を如如と云ふ。

【五三】習滅。習善滅惡、苦因滅。

【五四】生身は苦、煩惱は惑、三道の中業は苦惑に含む。

【五五】苦惑二道の餘殘。習氣。

【五六】一乘。一佛乘。

【五七】疑を斷じて實理を證す。その智は心に由り能く佛法を該ぬ、深廣なること大海の如し。

【五八】慧所依の定體なり。

【五九】異心なきは平等心なり。

【六〇】塵は五塵、勞は勞役。塵勞は思惑煩惱。

【六一】大乘。大車。

一切の有において〔六二〕大乘のごとし、

がゆるるに。猶し大雨のごとし、甘露の法を雨らして衆生を潤すがゆるるに。金剛山のごとし、

衆魔外道も動すること能はざるがゆるるに。梵天王のごとし、諸の善法において最上首なるが

ゆるるに。尼拘類樹のごとし、普く一切を覆ふがゆるるに。優曇鉢華のごとし、希有にして遇

ひ難きがゆるるに。金翅鳥のごとし、外道を威伏するがゆるるに。衆の遊禽のごとし、藏積する

ところなきがゆるるに。猶し牛王のごとし、能く勝つものがなきがゆるるに。猶し象王のごとし。

善く調伏するがゆるるに。師子王のごとし、畏るるところなきがゆるるに。

曠きこと虚空のごとし、大慈ひとしきがゆるるに、嫉心を摧滅して、勝

れたるを忘まざるがゆるるに。専ら法を樂求して心に厭足なし、常に廣

説を欲してころざし疲倦なし、法鼓を撃ち、法幢を建て、慧日を曜

かし、癡闇を除き、六和敬を修す。常に法施を行じ、志勇精進に

してころろ退弱せず。世の燈明と爲りて最勝の福田なり。常

に導師と爲りて等しくして憎愛なし。ただ正道を樂ひて餘の欣

戚なし、諸の欲刺を抜きて以て群生を安んず。功慧殊勝に

して、尊敬せられずといふことなし。三垢の障りを滅して諸の神通に

【九】金剛山。洲外の鐵圍山。

【一〇〇】梵天は娑婆の主にして最も善を喜ぶとす。

【一〇一】尼拘類(Nyagrodha)の無節と譯す。縱廣葉樹。子小にして樹大、能く五百乘車を蔭す。

【一〇二】優曇鉢(Tumbura)靈瑞。輪王出世の時現すと。

【一〇三】金翅鳥即ち迦樓羅。日に一大龍王五百小龍を食すと。

【一〇四】象王は小象諸獸を調伏すと。

【一〇五】六和敬は同戒和敬、同見

遊ぶ。 (二三) 因力 (二四) 緣力 (二五) 意力 (二六) 願力 (二七) 方便の力 (二八) 常力

(二九) 善力 (三〇) 定力 (三一) 慧力 (三二) 多聞の力 (三三) 施戒忍辱精進禪定智慧の力 (三四) 正念 (三五) 正觀もろもろの (三六) 通明の力 (三七) 如法に諸の衆生を

調伏する力、かくのごとき等の力一切具足せり。 (三八) 身色 (三九) 相好功

徳 (四〇) 辯才具足し、莊嚴してともに等しきものなし。無量の諸佛を恭

敬し、供養して、常に諸佛に共に稱歎せらる。菩薩の諸波羅蜜を究竟

し、空無相無願三昧と、不生不滅との諸の三昧門を修めて、聲聞緣覺

の地を遠離せり。阿難、かの諸の菩薩は是のごとき無量の功徳を成就

せり。我れただ汝がために略してこれを説くのみ、若し廣く説かば百

千萬劫にも窮盡することあたはじ。』

(四一) 佛 (四二) 彌勒菩薩諸天人等に告げたまはく、『無量壽國の聲聞菩

薩の功徳智慧稱げて説くべからず。又その國土微妙安樂にして清淨な

ること (四三) 此のごとし。 (四四) なにぞ力めて善を爲さざる。 (四五) 道を念

ずれば自然なり、著にして上下なし、洞達して邊際なし、宜しく各

- 和敬、同行和敬、身慈和敬、
- 語慈和敬、意慈和敬。
- 【一〇六】能生物善故。
- 【一〇七】能生物善故。
- 【一〇八】欣戚。スキキラヒ。
- 【一〇九】欲刺。五欲人を惱ます、針刺の如し。
- 【一一〇】慧一本徳に作る。
- 【一一一】因力。宿世善根。
- 【一一二】緣力。親近知識。
- 【一一三】意力。如理作意。
- 【一一四】願力。求菩提心。
- 【一一五】方便。手段を立て加行す。
- 【一一六】常力。無間修行。
- 【一一七】善力。捨惡正修。
- 【一一八】定力。止行成就。
- 【一一九】慧力。觀行成就。
- 【一二〇】多聞。所聞妙解。
- 【一二一】正念。捨相入實。
- 【一二二】正觀。離礙見性。
- 【一二三】通明。六通三明。

勤精進してつとめて自らこれを求むべし。必ず超絶し去りて、安養國に往生することを得れば、横に五惡趣を截り、惡趣自然に閉ぢ、道に昇ること窮極なし、往き易くして人なし、其のくに逆違せず、自然の牽くところなり。何ぞ世事を棄てて勤行して道徳を求めざる。極長生を獲て壽樂きはまりあることなかるべし。然るに世人薄俗にして共に不急の事を諍ふ。此の劇惡極苦の中において勤身營務して以て自ら給濟す、尊となく卑となく貧となく富となく、少長男女ともに錢財を憂ふること有無おなじく然り、憂思まさに等し、屏營として愁苦して念を累ね慮りを積む、心に走使せられて安き時あることなし。田あれば田を憂へ、宅あれば宅を憂へ、牛馬六畜奴婢錢財衣食什物また共にこれを憂ふ、思ひを重ね息を重ねて憂念愁怖す。横に非常の水火盜賊怨家債主に焚漂し劫奪せられて、消散し磨滅す。憂毒松松として解くる時あることなし、憤りを心中に結びて憂惱を離れず、こころ堅くこころ固くして適ひて縱捨する

【三四】第三願。

【三五】第二十一願。

【三六】第二十九、第三十願。

【三七】以下總じて能依人と所依土との勝を明す。

【三八】彌勒(Maitreya)。慈氏菩薩なり。この菩薩在會のことは序分に出づるも、今まで阿難に對告するに、以下慈氏に告ぐることに注意すべし。

【三九】土勝未だ説かず。上卷終の國土莊嚴當卷初に粗説するを指すか。

【四〇】衆生の無道なとがめ、以善攻惡念佛往生を説く。

【三一】道は出離の道即ち念佛往生。

【三二】五惡趣は地獄、餓鬼、畜生、人、天。

【三三】出離の道徳なき行爲生活。

【三四】極長生。出離道徳の結果。

ことなし、或は (一四〇) 摧碎に坐りて身ほろび、命をほりぬればこれを棄
捐して去る、誰れの隨ふものなし、尊貴豪富も亦この患へあり、憂苦

萬端にして勤苦すること此のことし、衆の寒熱を結びて痛と共に居

す。貧窮下劣は困乏にして常に無し、田なければまた憂へて田あらむ

ことを欲し、宅なければまた憂へて宅あらむことを欲し、牛馬六畜奴

婢錢財衣食什物なければまた憂へてこれあらむことを欲す、たまたま

(一四一) 一あればまた一を少き、是れあれば是れを少く、(一四二) 齊等あらむ

ことを思ふ、欲するに適ひて具さにあれば便ちまた糜散す。かくのご

とく憂苦す、當にまた求索すれども時に得ることあたはず、思想して

益なし、身心ともに勞して坐起やすからず、憂念あひ隨ひて勤苦することかくのごとし、また衆

の寒熱を結びて痛と共に居す。或時はこれに坐りて身を終へ命を夭ぼす、肯て善を爲し道を行ひ

徳に進まず、壽をほり身死して當にひとり遠く去るべし、趣向するところあれども、善惡の道よ

く知るものなし。世間の人民父子兄弟夫婦家室中外の親屬まさにあひ敬愛してあひ憎嫉すること

なく、有無あひ通じて貪惜することなく、言色つねに和してあひ違戾することなかる

【一三】世人諍ふ所、有無俱に苦なるを辨じて、厭離せしむ。

【一四】瑜伽四十四に六苦、因苦果苦求財位苦勤守護苦無厭足苦變壞苦を擧ぐ。

【一五】六畜は牛馬鶏犬羊家。

【一六】松松は迅速也心動也。

【一七】解一本解に作る。

【一八】正くは怨家、諸難をも含む。

【一九】田あるも宅なきの類。

【二〇】彼此具足して等一。

べし。或ときはこころ諱ひて悲怒するところあり、今世の恨みのこころ微妙しくあひ憎嫉せば、後世にうたた劇しくして大怨と成るに至らむ。ゆるはいかに。世間の事たがひにあひ患害す、即時に急かにあひ破すべからずといへども、然も毒を含み怒りを畜へ、憤りを精神に結びて、自然に刻識してあひ離るることをえず、皆まさに(三)對生して更ひにあひ報復すべし。人世間愛欲の中において、ひとり生じひとり死しひとり去りひとり來る、行ひを當ひて苦樂の地に至り趣く、身みづからこれを當く、代はる者あることなし、善惡變化し殃福ところを異にし、あらかじめ嚴かに待つ、當にひとり趣入すべし。遠く他所に到りねれば能く見るものなし、善惡自然にして行ひを追ひて生ずるところなり、(四)窈窈冥冥として別離すること久長なり、道路おなじからざれば會見期なし、甚だ難く甚だ難し、復あひ値ふことを得むや。何ぞ衆事を棄てて、おのおの強健の時に曇びてつとめて善を勤修し、精進に度世を願はざる。極長生を得べし、いかにぞ道を求めざる、安にまつべきところぞ、なにの樂みをか欲する。是の如き世人善を作して善をえ、道を爲して道を得ることを信せず、人死して更に生じ、惠施して福を得ることを信せず、善惡の事すべてこれを信せず、これを然らずと謂ひて終に是とすることあることなし。ただ(五)此

【三】敵者相對して一處に生ず。
 【四】窈冥は幽遠。
 【五】上述の善惡因果を信せず恨結びて解けず、惡を造りて悔いざるなり。

れに坐るが故に且みづから (四六) これを見る、更ひにあひ瞻視して先後おなじく然り、うたたあひ承受するに (四七) 父教令をのこす、先人祖父もとより善を爲さず、道徳を識らず、身おろかに神

くらく、心ふさがり意とぢて、死生の趣善惡の道みづから見ることあたはず、語るものあることなし。吉凶禍福きそひておのおの作これども、一つとして怪しむことなし。生死の常の道うたた

あひ嗣立す、或は父子を哭し、或は父子を哭し、兄弟夫婦たがひにあひ哭泣す、顛倒上下無常の根本なり。皆まごさに過ぎ去るべし、常に保

つべからず、教語開導すれどもこれを信するものは少し、是を以て生死の流轉休止あることなし。かくのごとき人 (四八) 矇冥抵突して經法を

信せず、心に遠慮なくしておのおの快意せむと欲す、愛欲に癡惑せられて道徳に達らず、瞋怒に迷没して財色を貪狼す、これに坐りて道を

えず、當に惡趣の苦に更りて、生死きはまり已むことなかるべし。哀れなるかな甚た傷むべし。或ときは室家父子兄弟夫婦一は死し一は生じて更ひにあひ哀慙し、思愛思慕して憂念結縛し、心

意痛著して迷ひにあひ願戀す、日を窮め歳を卒へて解け已むことあることなし。道徳を教語すれどもこころ開明せず、恩好を思想して情欲を離れず、昏矇閉塞して愚惑に覆はる。深く思ひつら

【四六】道を信ぜず、却て邪見の謬執を抱く。

【四七】子の無知は父の邪言を受く。

【四八】矇は眸子ありて見るなきもの、抵突は唐突也、了知なきなり。

つら計りて、心みづから端正にして專精に道を行ひ、世事を(二四九)決斷することあたはず、便旋し

て竟りに至る。年壽をはり盡くれども道を得ることあたはず、いかにともすべきことなし、(二五〇)總

猥(二五一)慣擾してみな愛欲を食る。道に惑へる者は衆くこれを悟る者は寡し。世閒忽として

膠賴すべきことなし、尊卑上下貧富貴賤勤苦忽務して、おのおの殺毒を懷く。惡氣竊冥にし

て妄りに事を興こさむとす、天地に違逆し、人心に従はず、自然の非

惡まづ隨ひてこれに興す、恣に所爲を聽るして其の罪の極まるを待

つ。其の壽いまだ盡きざるに、たちまちこれを奪ひて惡道に下し入れ

て、累世に勤苦せしむ、其の中に展轉して數千億劫出期あることなし、

痛み言ふべからず、甚だ哀愍すべし。』

(二五二)佛彌勒菩薩諸天人等に告げたまはく、『我れいま汝に語る。世閒

のこと人これを用てのゆるに、坐りて道を得ず。當につらつら思ひ計りて、衆惡を遠離し、其の

善きものを擇びて勤めてこれを行ふべし。愛欲榮華つねに保つべからず、皆まさに別離すべし、

樂しむべきものなし。佛の在世に憂びてまさに勤精進すべし。其れ至心ありて安樂國に生れんと

願はんものは、智慧明達に功德殊勝なることを得べし。心の所欲に隨ひて經戒に(二五四)虧負して、

【二四九】決斷。放捨。

【二五〇】總は濫也。

【二五一】慣は闇也。

【二五二】膠は聊と同じ、賴也。

【二五三】上に三毒の状態を説く、今

修捨を勸む。

【二五四】虧負は缺連也。

人の後に在ることを得ることなかれ。もし疑意ありて經を解せずば具さに佛に問ふべし、當に爲にこれを説くべし。彌勒菩薩長跪して白して言さく、『佛は威神尊重にして所説快善なり。佛の經語を聽きたてまつりて、貫心にこれを思ふに、世人實に爾なり、佛の言たまふところのごとし。今佛慈愍をもて大道を顯示したまふに、耳目開明にしてながく度脱をえたり、佛の所説を聞ききたてまつりて歡喜せずといふことなし。諸天人、(一)要口類、蠕動の類もみな慈恩を蒙りて憂苦を解脱す。佛語の教誡はなほだ深く甚だ善し、智慧明見にして八方上下去來今のこと究暢したまはずといふことなし。今われ衆等度脱を得ることを蒙るゆゑは、皆佛の(二)毛髮、前世に道を求めたまひしとき、謙苦せしが致すところなり。思徳あまねく覆ひて福祿巍巍たり、光明徹照して空に達するこゝと極まりなし、泥洹に開入し教授典攬し、威制をもて消化して十方を感動せしめたまふこと無窮無極なり。佛は法王たるをもて尊きこと衆聖に超えたまへり、普く一切天人の師と爲りて、心の所願に隨ひてみな道を得しめたまふ。今佛に値ひたてまつることを得、また無量壽佛の名を聞きたてまつりて、歡喜せずといふことなし、こゝろ開明することを得たり。』

(一)要口、佛彌勒菩薩に告げたまはく、『汝が言是なり。若し佛を慈敬する

【一】要、貫心。通心、熟慮。
 【二】要、蟲行の貌。蠕動の類は衆生の類。
 【三】毛、前の釋尊讚偈に云ふ若人無善本不得聞此經等の意。

ことあらむ者は實に大善たらむ。天下久久にして乃ち復佛ましまさむ。
 今われ此の世において作佛して、經法を演説し道教を宣布して、諸の
 疑網を斷ち、愛欲の本を抜き衆惡の源を杜ぐ、三界に遊歩して拘礙す
 るところなし、(二五)典攬の智慧は衆道の要なり、綱維を執持して照然
 分明なり、(二六)五趣を開示し未度の者を度し、生死泥洹の道を決正す。
 彌勒まさし知るべし、なむち無數劫よりこのかた菩薩の行を修して、
 衆生を度せむと欲したること其れ已に久遠なり、汝に従ひて道をえ泥
 洹に至りしもの數を稱るべからず。汝および十方の諸天人民一切の
(二六)四衆、永劫よりこのかた(二七)五道に展轉して憂畏勤苦すること具

さに言ふべからず、乃至今世まで生死たえず、佛とおひ値ひて經法を聽受し、又また無量壽佛を
 聞くことを得たりし、快きかな甚だ善し。我れ汝を助けて喜ばしむ。汝いま亦みづから生死老病の
 痛苦を厭ふべし、(二八)惡露不淨にして樂しむべきものなし、宜しく自ら決斷すべし。身を端し行
 ひを正しくしてますます諸善を作し、己れを修め體を潔くし、心垢を洗除し、言行忠信にして表
 裏相應すべし。人よく自ら度して轉あひ拯濟し、精明に求願して善本を積累せば、一世の勤苦は

- 【二五】重れて懇に修捨を勸む。
 【二六】經典を解釋して衆義を攬
 知す。
 【二七】五趣は天、人、鬼、畜、地
 獄。五道之に同じし。
 【二八】四衆は僧、尼、信男、信
 女。出家在家の男女。
 【二九】五道。五趣に同じし。
 【三〇】惡露。老病者の出す穢物。
 【三一】佛智を疑ふもの邊地七寶
 宮殿に胎生す、後に細説あり。
 【三二】重誨。殷重に修捨を勸め給
 へるを云ふ。

須臾しゆゆの閒あひだなりといへども、後のちには無量壽佛むりやうじゆふつの國くにに生しやうじて快樂けらくきはまりなく、長ながく道徳だうとくと合明がふみやうし、永ながく生死しやうじの根本こんぽんを抜き、また貪とんい悲い愚癡ぐちく苦惱くなうの患うれへなからむ。壽いのちは一劫いっこふひやくこふせしまんおおくこふ百劫ひやくこふせしまんおおくこふ千萬億劫せんまんおおくこふならむと欲ほつせば、自在じざいに意こころに隨したがひて皆みなこれを得うべし、無爲むゐ自然じねんにして泥洹ないをんの道だうに次つげり。汝なむぢら宜よろしくおのおの精進しやうじんして心こころの所願しよくわんを求もとむべし。疑惑ぎやくし中悔ちゆうけして、自ら過咎みづかくなを爲なすことを得うることなかれ。彼かの二畜ちく邊地へんぢの七寶しつぽうの宮殿くうぐんに生しやうじなば五百歲ごひやくさいの中に諸しよの厄やくを受けなむ。『彌勒佛みらくはつに白まをして言まをさく、一佛ひととけの一重誨ぢゆうけを受けたり、專精せんしやうに修學しゆがくして教をへのごとく奉行ぶぎやうして敢あへて疑うたがふことあらじ。』

卷の下の末

佛彌勒に告げたまはく、『汝ら能く此の世において、端心正意にして衆惡を作さざるを甚だ至

徳とす、十方世界最も倫匹なし。ゆるはいかに。諸佛國土の天人

の類は、自然に善を作して大に惡を爲さず、開化すべきこと易し。

今われ、此の世間において作佛して、五惡、五痛、五燒の中に處

すること最も劇苦なりとす。羣生を教化して五惡を捨てしめ五痛を去

らしめ五燒を離れしめ、其の意を降化して、五善を持ちて、其の福德

度世長壽泥洹の道を獲しむ。佛の言たまはく、『なにか五惡なにか

五痛なにか五燒なる。なにか五惡を消化し五善を持ちて其の福德

度世長壽泥洹の道を獲しむる。』

佛の言たまはく、『その一惡とは、諸天人人民蠕動の類衆惡を爲さむ

と欲す、皆しからずといふことなし。強きものは弱きを伏し、うたた

あひ剋賊し、殘害殺戮して迭ひにあひ吞噬す、善を修むることを知らず、惡逆無道なり、後に殃

【一】以下五惡段、三毒所起の五惡を消除すべきを説く。

【二】匹は輩也。

【三】此土五濁惡なるも、他土然らず。後文參照。

【四】序分八相成道參照。

【五】五惡は殺、盜、邪淫、妄語、飲酒、五惡是れ因業。

【六】五痛は惡業により現世に罪せられ又厄に逢ふ、是れ華報。

【七】五燒は惡業により來世に惡趣に墮す、是れ果報。

【八】五善。五惡に反する五正行。

【九】第一惡、殺生不仁。

罰を受けて自然に趣向す、神明記識して犯せる者を赦るさず。ゆるに貧窮下賤乞 匄孤獨聾盲

瘡痼愚癡弊惡なるものあり、 庭狂 不逮のたぐひあるに至る。また尊貴豪富高才明達なる

ものあり、みな宿世の慈孝修善積徳の致すところに由る。世に常の道の王法の牢獄あれども、肯

て畏れ愼まず、惡を爲し罪に入りてその殃罰を受く、解脱を求め望めども免れ出づることを得が

たし。世間にこの目前に見る事あり。壽をはりて後世に尤だ深く尤だ劇し。その幽冥に入りて生

を轉じて身を受く、譬へば王法の痛苦極刑のごとし。故に自然の三塗無量の苦惱あり、その身を

轉質し形を改め道を易ふ、受くるとこゝの壽命あるは長く、あるは短

し、魂神精識自然にこれに趣く、當にひとり値ひ向ひあひ從ひて共に

生ずべし、たがひに報復して絶え已むことあることなし、殃惡いまだ

盡きざればあひ離るることをえず、其の中に展轉して出期あることな

し。解脱を得がたし、痛み言ふべからず。天地の間に自然にこれあり。即時にたちまちに應至せ

ずとも善惡の道かならず當にこれに歸すべし。これを一大惡一痛一燒とす。勤苦することは是のご

とし、譬ふれば大火の人身を燒燒するがごとし。人よく中において、一心に意を制し、身を端し

行ひを正しくして、ひとり諸善を作して衆惡を爲さずば、身ひとり度脱してその福徳度世上天泥

- 【一〇】匄。貧にして乞ふ者。
- 【一一】乞は短少なり、又僕也。
- 【一二】不逮は事に觸れ人後にあり。

洄の道を獲得。これを一大善とす。」

佛の言たまはく、『その二惡とは、世間の人民父子兄弟室家夫婦すべて義理なく法度に順せず、奢淫憍縱にしておのおの快意せむと欲す、心に任せて自らほしいままにし、たがひに欺惑し、心口おのおの異にして言念實なし、佞諂不忠にして言を巧みにして諛ひ媚び、賢を嫉み善を誇りて冤枉におとし入る。主上あきらかならずして臣下を任用す、臣下自在にして機偽多端なり、踐度能行してその形勢を知る。位に在りて正しからざれば其れに欺かる。妄りに忠良を損じて天心に當たらす、臣はその君を欺き子はその父を欺く、兄弟夫婦中外の知識たがひに欺誑す。おのおの貪欲瞋恚愚癡を懷きて、自ら己れを厚くせむと欲して多く有らむことを欲食す。尊卑上下こころ俱に同じく然なり。家を破り身を亡ぼし前後を顧みず、親屬内外これに坐りて滅ぶ。或ときは室家の知識郷黨市里の愚民野人うたたともに事に従ふ、たがひに利害して忿り成り怨むすばる。富有なれども慳惜して肯て施與せず、寶を愛し重きを貪りてこころ勞し身くるしむ。かくのごとくして竟りに至りて悒悒するところなし、ひとり來りひとり去りて一も隨ふものなし、善惡禍福命を追ひて生ずるところなり。或は樂處に在り或は苦毒に入る、然して後に乃ち悔ゆともまさに復なにぞ

【三】第二惡、劫盜不義。

【四】君情を伺ひ佞佞己に厚くせんとす。或は法度を履む。

及ぶべき。世間の人民こころ愚に智すくなくして善を見ては憎謗して慕ひ及ぶむことを思はず、ただ惡を爲さむと欲して妄りに非法を作し、常に盜心を懷きて他の利を稀望す、消散し麤盡してまた求索す。邪心ただしからずして人の色あらむことを懼る、豫め思ひ計らず事いたりて乃ち悔ゆ。今世に現に王法の牢獄あり、罪に隨ひて趣向してその殃罰を受く、その前世に道徳を信せず善本を修めざりしに因りて今また惡を爲す、天神剋識してその名籍を別かつ、壽をほり神ゆきて惡道に下ち入る。ゆるに自然の三塗無量の苦惱あり、その中に展轉して世世累劫に出期あることなし、解脱を得がたし、痛み言ふべからず。これを二大惡二痛二燒とす。勤苦することかくのごとし、譬ふれば大火の人身を焚燒するがごとし。人よく中において、一心に意を制し、身を端し行ひを正しくして、ひとり諸善を作して衆惡を爲さずば、身ひとり度脱してその福德度世上天泥洹の道を獲む。これを二大善とす。』

佛の言たまはく、『その三惡とは、世間の人民あひ因りて寄生して共に天地の間に居る、處

年壽命よくいくばくなることなし。上に賢明長者尊貴豪富あり、下に

貧窮厮賤庖厨愚夫あり、中に不善の人あり。常に邪惡を懷けり、ただ

姪姪を念じて煩ひ智中に滿つ、愛欲交亂して坐起やすからず、貪意守惜してただ唐らに得むこと

【一五】第三惡は姪姪不禮。

を欲す、細色を（二）眇眇して邪態ほかに逸なり、自妻をば厭憎して私かに妄りに入出し、家財を費損して事非法を爲す、こもこも聚會を結びて師を興こしてあひ伐つ、攻劫殺戮して強奪不道なり、惡心ほかに在りて自ら業を修めず、盜竊して趣かに得れば欲繫ことを成す、（三）恐熱迫脅せしめて妻子に歸給す、恣心快意して身を極めて樂を作す、或は親屬において尊卑を避けざるをもて家室中外うれへてこれを苦しむ、亦また王法の禁令を畏れず。かくのごとき惡は人鬼に著され、日月照見し神明記識す、ゆゑに自然の三塗無量の苦惱あり、其の中に展轉して世世累劫に出現あることなし、解脱を得がたし、痛み言ふべからず。これを三大惡三痛三燒とす。勤苦することかくのごとし、譬ふれば大火の人身を焚燒するがごとし。人よく中において、一心に意を制し、身を端し行ひを正しくして、ひとり諸善を作して衆惡を爲さずば、身ひとり度脱してその福徳度世上天泥洹の道を獲む。これを三大善とす。

（二）佛の言たまはく、『その四惡とは、世間の人民善を修めむことを念はず、うたたあひ教令して共に衆惡を爲すに、（一）兩舌（二）惡口（三）妄言（四）綺語す。讒賊鬪亂して善人を憎嫉し賢明を敗壞し、（五）傍

（一）において快喜して、二親に孝せず、師長を輕慢し、朋友に信なくして

【六】胸臆。傍視。

【七】恐怖熱惱脅迫して得る所を妻子に給し正業を事とせず。

【八】第四惡。欺妄不信。

【九】兩舌。離間語。

【一〇】惡口。龜惡語、毀譽。

【一一】妄言。虛誑語、心口各異。

誠實を得がたし。尊貴自大にして己れ道ありと謂ひて横に威勢を行ひて人を侵易す、自ら知ることあたはず、惡を爲して恥づることなし、自ら強健なるをもて人の敬難を欲す。天地神明日月を畏れず、肯て善を作さず、降化すべきことかたく、自ら用て（西）優健して常に爾るべしと謂へり、憂懼するところなくして常に憍慢を懷けり。かくのごとき衆惡天神記識す。其の前に頗る福德を作ししに頼りて、小善扶接し營護してこれを助く。今世に惡を爲して福德盡滅す、諸の善鬼神のおの共（と）にこれを離れて、身ひとり空しく立ちてまた依るところなし。壽命終盡して諸惡の歸するところなり、自然に迫促して共に趣きてこれに頼る。又その名籍神明に記在せり、殃咎牽引して當に往きて趣向すべし、罪報自然にして捨離するところなし、ただ前行に得りて火鑊に入る、身心摧碎して精神痛苦す、斯の時に當たりて悔ゆとも復なにぞ及ばむ。天道自然にして蹉跌すること（を）えす、ゆるに自然の塗無量の苦惱あり、その中に展轉して世世累劫に出期あることなし、解脫を得がたし、痛みいふべからず。是れを四大惡四痛四燒とす、勤苦することかくのごとし、譬ふれば大火の人身を焚燒するがごとし。人よく中において、一心に意を制し、身を端し行ひを正しくして、ひとり諸善を作して衆惡を爲さずば、身ひとり度脱してその福

【三】綺語。雜穢語、染心所發。
 【三】夫婦のみ傍室に快喜放逸なるなり。
 【四】優健は猶憍傲と言ふが如し。

徳度世上天泥洹の道を獲む。これを四大善とす。」

佛の言たまはく、『その五惡とは、世間の人民 徒倚憊惰して、肯て善を作し身を治め業を修めず、家室眷屬飢寒困苦し、父母教誨すれば目を瞋らして怒りて膺ふ、言令不和にして違戾反逆す。譬ふれば怨家のごとし、子なからむにはしかじ。取與節なくして衆ともに患へ厭ふ、恩に負き義に違ひて報償の心あることなし、貧窮困乏にしてまた得ることあたはず、(二七) 辜較縦奪にし

てほしいままに遊散す、しばしば店らに得るに串ひて用て自ら賑給す。酒に耽り美を嗜みて飲食はかりなし、肆心に蕩逸し (二六) 魯扈牴突

して人情を識らず、強ひて抑制せむことを欲す、人の善あるを見ては憎嫉してこれを惡む、義なく禮なくして顧難するところなし、自ら用て (二五) 職當して諫曉すべからず。六親眷屬の所資の有無憂念すること

あたはず、父母の恩を惟はず、師友の義を存せず、心つねに惡を念ひ、口つねに惡を言ひ、身つねに惡を行ひて曾て一善もなし。先聖諸佛の經法を信せず、道を行ひて度世を得べきことを信せず、死してのち神明さらに生せむことを信せず、善を作して善をえ惡を爲して惡をうることを信せず、眞人を殺し衆僧を鬪亂せむと欲し、父母兄弟眷屬を害せむと欲す。六親憎惡して其れをし

【二五】第五惡、飲酒無智。

【二六】徒倚。徘徊。

【二七】辜較は猶苛斂と言ふがことし。

【二八】魯扈は魯鈍にして跋扈。

【二九】職當。自高、これを掌る。

て死せしめむことを願ふ。是のごとき世人心意ともに然り、愚癡蒙昧にして自ら智慧を以てして、生の從來するところ死の趣向するところを知らず、不仁不順にして天地に惡逆す、而もその中において憐望僥倖して長生を求めむと欲すれども會ずまさに死に歸すべし。慈心をもて教誨して其れをして善を念はしめ、生死善惡の趣自然に是れあることを開示すれども肯てこれを信せず。ねんごろに與に語れども其の人に益なし、心中閉塞してころ開解せず、大命まさに終はらむとして悔懼もごもいたる、豫め善を修めず窮まりに臨みて方に悔ゆ。これを後に悔ゆともはたなにぞ及ばむ。天地の間に五道分明なり、恢廓窈窕浩浩茫茫たり、善惡報應して禍福あひ承く、身みづからこれを當く誰れも代はる者なし、數の自然なるをもて其の所行に應ず、殃咎命を追ひて縦捨することを得ることなし。善人は善を行ひて樂より樂に入り明より明に入る、惡人は惡を行ひて苦より苦に入り冥より冥に入る、誰れか能く知るものあらむ、ひとり佛のみ知りたまふのみ。教語開示するに信用する者は少し、生死やまず惡道たえず、かくのごとき世人つぶさに盡くすべきことかたし。ゆるに自然の三塗無量の苦惱あり、其の中に展轉して世世累劫に出現あることなし、解脱を得がたし、痛み言ふべからず。是れを五大惡五痛五燒とす。勤苦することかくのごとし、譬ふれば大火の人身を焚燒するがごとし。人よく中において、一心に意を制し、身を端し念

ひを正しくし、言行おび副ひ所作至誠にして、所語語のごとく心口轉せず、ひとり諸善を作して衆惡を爲さずば、身ひとり度脱してその福德度世上天泥洹の道を獲む。これを五大善とす。』

佛彌勒に告げたまはく、『吾れ汝らに語る、此の世の五惡勤苦することかくのごとし、五痛

五燒展轉してあひ生ず、ただ衆惡を作して善本を修めず、皆ことごとく自然に諸の惡趣に入る。或は其の今世に先づ殃病を被りて、死を求むるに得ず生を求むるに得ず、罪惡の招くところ示して衆これを見る、身死すれば行ひに隨ひて三惡道に入る、苦毒無量にして自らあひ焦然せらる。其の久しくして後に至りて共に怨結を作す、小微より起こりて遂に大惡と成る、みな財色を貪著して施惠することあたはざるに由りてなり。癡欲に迫められ心の思想に隨ひて煩惱結縛して解け

已むことあることなし。己れを厚くし利を諍ひて省録するところなし。富貴榮華とくに當たりて快意して忍辱することあたはず、務めて善を修めず。威勢いくばくもなければ隨ひて以て磨滅す、身勞苦を坐けて久しくしてのち大に劇し、天道 施張して自然に糺

舉するに綱紀羅網上下相應す、犛犛犛松松として當に其の中に入る

べし。古今これまり、痛ましきかな傷むべし。』

佛彌勒に語げたまはく、『世間かくのごとし、佛皆これを哀む、

佛彌勒に語げたまはく、『世間かくのごとし、佛皆これを哀む、

佛彌勒に語げたまはく、『世間かくのごとし、佛皆これを哀む、

佛彌勒に語げたまはく、『世間かくのごとし、佛皆これを哀む、

佛彌勒に語げたまはく、『世間かくのごとし、佛皆これを哀む、

佛彌勒に語げたまはく、『世間かくのごとし、佛皆これを哀む、

【一】再び上述の五惡を捨つべきを説く。

【二】施張。正直。

【三】犛犛松松。孤獨無依。

【四】佛道を持し五善を修すべき

威神力をもて衆惡を摧滅して悉く善に就かしむ、所思を棄捐して經戒

を奉持し、道法を受行して違失するところなく、終に度世泥洹の道を

得しむ。佛の言たまはく、『汝いま諸天人民および後世の人、佛の經語

を得てまさにつらつらこれを思ひて能く其の中において心を端し行ひ

を正しくすべし。主上善を爲して其の下を率化せよ、うたたあひ勅令しておのおの自ら端しく守

るべし。聖を尊び善を敬ひ仁慈ありて博く愛せよ、佛語の教誨あへて虧負することなかれ、當に

度世を求めて生死衆惡の本を拔斷すべし、當に三塗無量の憂畏苦痛の道を離るべし。汝ら是こに

おいて廣く徳本を植ゑよ、恩を布き施恵して道禁を犯すことなく、忍辱と精進と一心と智慧とを

以てすべし、うたたあひ教化して徳を爲し善を立てよ。正心正意にして齋戒清淨なること(三)一

日一夜すれば、無量壽國に在りて善を爲すこと百歳するに勝れたり。ゆるはいかに。彼の佛の國

土は無爲自然にして、みな衆善を積みて毛髮の惡なし。此こにおいて善を修むること(三)十日十夜

すれば、他方諸佛の國土において善を爲すこと千歳するに勝れたり。ゆるはいかに。他方の佛國

は善を爲す者は多く惡を爲す者は少く、福德自然にして造惡なき地なり、唯この間のみ惡おほく

して自然なることあることなく、勤苦求欲してうたたあひ欺給す、こころ勞し形くるしみて苦を

を説く。

【三】穢土一日の善は淨土百歳に優る。

【五】般舟三昧經十日念佛を説く、十夜説。

飲み毒を食ふ、是のごとく忽務して未だ嘗て寧息せざればなり。吾れ汝ら天人の類を哀みて、ねむごろに誨諭して教へて善を修めしめ、器に隨ひて開導して經法を授與するに承用せずといふことなし。意の所願にありてみな得道せしむ。佛の遊履するところの國邑丘聚化を蒙らずといふことなし、天下和順し日月清明なり、風雨ときを以てして災厲おこらず、國ゆたかに民やすくして兵戈もちゐることなし、徳を崇め仁を興こして務めて禮讓を修む。』

佛の言たまはく、『我れ汝ら諸天人民を哀愍すること父母の子を念ふよりも甚し、今われ此の世間において作佛して、五惡を降化し五痛を消除し五燒を絶滅し、善を以て惡を攻め生死の苦を抜き、五徳を獲て無爲の安きに昇らしむ。』

吾れ世を去りてのち經道やうやく滅び、人民諂偽にしてまた衆惡を爲し、五燒五痛かへりて前の法のごとくならむ、久しくして後うたた劇し、悉く説くべからず、我れただ汝がために略してこれを言へるのみ。』佛彌勒に語げたまはく、『汝らおのおの善くこれを思ひ、うたたあひ教誡して佛の經法のごとくせよ、犯すことを得ることなかれ。』是において彌勒菩薩合掌して白して言さく、『佛の所説はなはだ苦なり、世人まことに爾なり、如來普慈をもて哀愍して悉く度脱せしめたまふ、佛の重誨を受けて敢て違失せじ。』

【三六】斯經護國として重んぜらるる點。
【三七】修捨總結。

佛阿難に告げたまはく、『なむち起ちて更に衣服を整へ、合掌し恭敬して無量壽佛を禮したてまつるべし。十方國土の諸佛如來つねに共に彼の佛の無著無礙を稱揚し讚歎したまへり。』是において、阿難たちて衣服を整へ、正身西面し恭敬し合掌して、五體を地に投じて無量壽佛を禮したてまつる。白してまをさく、『世尊、ねがはくは彼の佛の安樂國土および諸の菩薩聲聞大衆を見たてまつらむ。』是の語を説きはるに、即時に無量壽佛大光明を放ちて普く一切の諸佛世界を照らしたまふ、金剛圍山須彌山王大小の諸山一切の所有みな同じく一色なり。譬ふれば劫水の世界に彌滿して、その中の萬物沈没して現せず、混糝濇汗としてただ大水のみを見るがごとし。彼の佛の光明も亦また是のごとし。聲聞菩薩一切の光明みな悉く隱蔽して、ただ佛光の明顯顯赫なるを見たてまつる。爾の時に阿難すなはち無量壽佛を見たてまつるに、威徳巍巍たること須彌山王の高く一切の諸の世界の上に出でたるがごとし、相好光明照耀せずといふことなし。此の會の四衆一時に悉く見たてまつる、彼しこより此の土を見ることも亦また是のごとし。

爾の時佛阿難および慈氏菩薩に告げたまはく、『汝かの國を見るに地より已上淨居天に至る

【三】第七智慧を明す。上來の悲化・彌陀の五智によるを以てこれを信すべきを説く。

【元】混糝濇汗。ヒロクダタヨヘル漫漫たる大水。

【四】四衆とは發起、影響、當機、結縁。

【五】極樂の觀見を壽かにして化生胎生に及ぶ。

まで其の中のあらゆる微妙嚴淨自然の物ごとごとく見たりとせむやいなや。阿難こたへて曰さく、『唯しかり、すでに見たてまつりぬ。』汝いかにまた無量壽佛の大音一切世界に宣布して衆生を化しまたへるを聞きたてまつれりやいなや。阿難こたへて曰さく、『唯しかり、已に聞きたてまつりぬ。』彼の國の人民百千由旬の七寶の宮殿に乗じて、障礙あることなく普く十方に至りて諸佛を供養せり、汝また見たりやいなや。』對へて曰さく、『已に見たてまつりぬ。』彼の國の人民胎生の者あり、汝また見たりやいなや。』對へて曰さく、『已に見たつまつりぬ、其の胎生の者の處るところの宮殿、あるは百由旬、あるは五百由旬、おのおの其中において諸の快樂を受くること切利天上のごとくにして亦みな自然なり。』

【二】胎生化生を辨じて信疑の得失を述ぶ。

【三】佛智は總、不思議智以下の四は別、如來の五智なり。

爾のとき慈氏菩薩佛に白して言さく、『世尊なにの因なにの縁ありてか彼の國の人民胎生化生なる。』佛慈氏に告げたまははく、『若し衆生ありて疑惑の心を以て諸の功德を修めて彼の國に生ぜむと願はむに、佛智不思議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智を了せず、此の諸の智において疑惑して信せず。然れどもなほ罪福を信するをもて善本を修習して其の國に生ぜむと願はむに、此の諸の衆生かの宮殿に生じて壽五百歳までに常に佛を見たてまつらず、經法を聞きたてまつら

す、菩薩聲聞聖衆を見たてまつらざらむ、是のゆゑに彼の國土においてこれを胎生といふ。若し衆生ありて明かに佛智乃至勝智を信じて、諸の功德を作して信心回向せば、此の諸の衆生七寶の華の中において自然に化生して、跏趺して坐し、須臾の頃に身相光明智慧功德もろもろの菩薩のごとく具足し成就せむ。

復つぎに慈氏、他方佛國の諸の大菩薩發心して無量壽佛を見たてまつり、及び諸の菩薩聲聞の衆を恭敬し供養せむと欲せば、彼の菩薩ら命終して無量壽國に生ずることをえて、七寶の華の中において自然に化生せむ。彌勒まさを知るべし、彼の化生の者は智慧すぐれたるがゆゑなり。其の胎生の者はみな智慧なきをもて五百歳の中において常に佛を見たてまつらず、經法を聞かず、菩薩もろもろの聲聞衆を見ず、佛を供養するに由なし、菩薩の法式を知らず、功德を修習することをえず。當に知るべし、此の人は宿世のとき智慧あることなくして疑惑せしが致すところなり。

佛彌勒に告げたまはく、『譬へば轉輪聖王の別に七寶の宮室ありて、種種に莊嚴し牀帳を張設し諸の繪幡を懸けたらむに、若し諸

の小王子ありて罪を王に得ば、輒ち彼の宮中に内れて繫ぐに金鎖を以てせられ、飲食衣服牀褥華

【四四】喩に寄せて胎生の過を説く。

香妓樂を供給すること轉輪王のごとくにして、乏少するところなきがごとくならむ。意において
いかにぞ、此の諸の王子むしろ彼の處を樂はむやいなや。』對へて曰さく『不なり、ただ種種に方便
して諸の大力を求めて自ら免れ出でむことを欲せむ。』佛彌勒に告げたまはく、『此の諸の衆生も亦
またかくのごとし。佛智を疑惑せしを以てのゆゑに、彼の宮殿に生じて刑罰乃至一念の惡事ある
ことなく、ただ五百歳の中において三寶を見たてまつらず、供養して諸の善本を修むることをえ
ず、此れを以て苦とす、餘樂ありといへども猶かの處を樂はず。若し此の衆生その本罪を識りて、
深く自ら悔責して、彼の處を離れむことを求めば、即ち意のごとく無量壽佛の所に往詣して恭敬
し供養することを得、また徧く無量無數の諸餘の佛の所に至りて諸の功德を修むることを得む。
彌勒まさを知るべし、其れ菩薩ありて疑惑を生ずる者は大利を失せりとす。是のゆゑに當に明か
に諸佛の無上智慧を信すべし。』

彌勒菩薩佛に白して言さく、『世尊この世界においていくばく所の
不退の菩薩ありてか彼の佛國に生ぜむ。』佛彌勒に告げたまはく、『此
の世界に六十七億の不退の菩薩ありて彼の國に往生せむ。一一の菩薩すでに曾て無數の諸佛を供
養せしこと、次ぎて彌勒のごとき者なり。諸の小行の菩薩および少功德を修習せし者あげて計ふ

【四】菩薩の往生を擧げて凡火を
勤む。

べからず、皆まさに往生すべし。佛彌勒に告げたまはしく、一ただ我が刹の諸の菩薩のみ、彼の國に往生するにあらず、他方の佛土も亦またかくのごとし。其の第一の佛を名づけて遠照といふ、彼しこに百八十億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第二の佛を名づけて寶藏といふ、彼しこに九十億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第三の佛を名づけて無量音といふ、彼しこに二百二十億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第四の佛を名づけて甘露味といふ、彼しこに二百五十億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第五の佛を名づけて龍勝といふ、彼しこに四億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第六の佛を名づけて勝力といふ、彼しこに萬四千の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第七の佛を名づけて師子といふ、彼しこに五百億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第八の佛を名づけて離垢光といふ、彼しこに八十億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第九の佛を名づけて徳首といふ、彼しこに六十億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第十の佛を名づけて妙徳山といふ、彼しこに六十億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第十一の佛を名づけて人王といふ、彼しこに十億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第十二の佛を名づけて無上華といふ、彼しこに無數不可稱計の諸の菩薩衆あり、みな不退轉にして智慧勇猛なり、已に曾て無量の諸佛を供養して、七日の中において即ちよく百千億劫

に大士の修するところの堅固の法を攝取せり、斯れらの菩薩みなまさきに往生すべし。其の第十三の佛を名づけて無畏といふ。彼しこに七百九十億の大菩薩衆あり、諸の小菩薩および比丘等あけて計ふべからず、皆まさきに往生すべし。』佛彌勒に語げたまはく、『ただ此の十四佛國の中の諸の菩薩等のみまさきに往生すべきにあらず、十方世界の無量の佛國より其の往生せむ者またまた是のごとく甚だ多くして無數なり。我れただ十方諸佛の名號および菩薩比丘の彼の國に生ぜむ者を説くこと晝夜一劫すとも尙いまだ竟はることあたはじ、我れいま汝がために略してこれを説けるのみ。』

【四六】佛彌勒に語げたまはく、『其れ彼の佛の名號を聞くことを得るこ

とありて、歡喜踊躍して乃至一念せむに、まさ知るべし、此の人は

大利を得たりとす、則ち是れ無上の功德を具足す。是のゆるゑに彌勒、たとひ大火三千大千世界に充滿することありとも、要す當にこれを過ぎて是の經法を聞きて、歡喜信樂し受持し讀誦し説のごとく修行すべし。ゆるゑはいかに。多く菩薩ありて此の經を聞かむと欲すれども得ることあたはず、若し衆生ありて此の經を聞かむ者は無上道において終に退轉せじ、是のゆるゑにまさきに專心に信受し持誦し説行すべし。』佛の言たまはく、『吾れいま諸の衆生の爲に此の經法を説き、無量壽佛

【四六】以下流通分。念佛の大利無上功德たるを示す。

および其の國土の一切の所有を見せしむ。當に爲すべきところのものをば皆これを求むべし。我が滅度の後たるをもてまた疑惑を生ずることをうることなかれ。當來の世、經道滅盡せむに、我れ慈悲を以て哀愍してひとり此の經を留めて止住すること百歲ならしめむ。其れ衆生ありて斯の經に値はむものは意の所願に隨ひてみな得度すべし。佛彌勒に語げたまはく、「如來の興世には値ひがたく見がたし、諸佛の經道は得がたく聞きがたし、菩薩の勝法、諸波羅蜜きくことを得むこと亦かたし、善知識に遇ひて法を聞きて能く行せむことこれ亦かたしとす、若し斯の經を聞きて信樂し受持せむこと、難が中の難なり、この難に過ぎたるはなし。是のゆゑに我が法は是のごとく作し、是のごとく説き、是のごとく教ふ。まさに信順して如法に修行すべし。』

爾のとき世尊この經法を説きたまへるに、無量の衆生みな無上正覺の心を發こし、萬二千那由佗の人、清淨法眼をえ、二十二億の諸天人民、阿那含果をえ、八十萬の比丘漏盡意解し、四十億の菩薩不退轉をえたり、弘誓の功德を以て自ら莊嚴し、將來の世において當に正覺を成すべし。爾のとき三千大千世界六種に震動し、大光あまねく十方の國土を照らし、百千の音樂自然

【七】經道滅盡。本法萬年の後諸遺教悉く滅す。

【八】難中之難。他力易行の法門は信じ難きを云ふ。易往而無人たる所以なり。

【九】清淨法眼。平等の慧眼の上には法界差別を觀る。

【一〇】阿那含果。第三果、不還果。

にして作し、無量の妙華紛紛として降る。佛經を説きたまふこと已はりて、彌勒菩薩および十方來の諸の菩薩衆、長老阿難もろもろの大聲聞、一切の大衆佛の所説を聞きたてまつりて、歡喜せずといふことなかりき。

國譯佛說無量壽經終

國譯佛說觀無量壽經

本

(10) 是のごときを我れ聞えり。(11) 一時佛王
舍城の 耆闍崛山の中に在しまして、大
比丘衆千二百五十人と俱なりき。(12) 菩薩
三萬二千あり、文殊師利法王子を上首と
す。

(13) 爾のとき王舍大城に一の太子あり、
阿闍世と名づく、(14) 調達、惡友の教へに
隨順して、父王 (15) 頻婆娑羅を收執し、幽
閉して七重の室内に置き、諸の群臣を制
して、一も往くことを得ざらしむ。國の (16)

本

【一】觀無量壽經。無量壽觀經、或

は觀無量壽佛經と作せるもあり。此經の末には觀極樂國土無量壽佛觀世音菩薩大勢至菩薩と云へるが從を主に依を正に攝して觀無量壽と云ふ。又淨除業障生諸佛前とも名く。

【二】大文第一序分。善導疏第二序分義廣説す。この經王宮耆闍の兩會あり、王宮會に序、正、得益、流通の四み分つ。序に證信發起の二とするか、化前を加へて三とするかあり、今は第一證信序、是の如き定散の法を王宮に於て佛より親

く聞けりと。

【三】時處大衆等、これ發起序の第一化前序、前經の始を見よ。

【四】耆闍崛 (Gṛhakuṭa)。靈鷲と譯す。

【五】比丘 (Bhikkhu)。乞士と譯す。

【六】菩薩 (Bodhisattva)。覺有情と譯す。

【七】文殊師利 (Mañjuśrī)。妙吉祥又は妙徳と譯す。(Kumārabhāva) 法王子、如來の跡を補ふ意。

【八】以下發起序第二禁父縁。

【九】阿闍世 (Aśoka)。未生怨と譯す。影堅王の長子。

大夫人を(二五)韋提希と名づく、大王を恭敬して、澡浴清淨にして、(二四)酥蜜を以て、麩に和して用て其の身に塗り、諸の瓔珞の中に蒲桃の

(二六)漿を盛れて、密かに以て王にたてまつる。爾のとき大王麩を食し、

漿を飲み、水を求めて口を漱ぐ。口を漱ぎをはりて、合掌恭敬して、

耆闍崛山に向ひて、遙かに世尊を禮して、是の言を作さく、『(二七)大目

犍連は是れわが親友なり、願はくは慈悲を興(二八)こして、我れに八戒

を授けしめたまへ。』時に目犍連、鷹隼の飛ぶごとく、疾く王の所に

至る。日日かくのごとく、王に八戒を授く。世尊また尊者(二九)富樓那

を遣はして、王の爲に法を説かしむ。是のごとき時の間に三七日を經

たり。王麩蜜を食し、法を聞くことを得るがゆゑに、顔色和悦せり。

(三〇)時に阿闍世、守門の者に問はく、『父王いまなほ存在せりや。』時

に守門の人まをして言さく、『大王、くにの大夫人は身に麩蜜を塗り、

瓔珞に漿を盛れて、もて王にたてまつり、(三一)沙門目連および富樓那は

空より來りて、王の爲に說法す、禁制すべからず。』時に阿闍世この語

【一〇】調達。具(こ)調達婆達多又は提婆達多(Devadatta)天授と譯す。佛の從弟、曾て佛門に

入り、後背きて敵となる。

【二】頻婆娑羅(Kimbhara)。影堅王と譯す。阿闍世の父。

【三】大夫夫人。正后、これ影堅の妃、阿闍世の母。

【三】韋提希(Vedici)。思惟と譯す。

【四】酥蜜。牛羊の乳酪より精製せるもの。

【五】麩。乾飯の粉末。

【六】漿。藥水。

【七】Malamudgalyāyana

【八】八戒とは、一日一夜不殺、不盜、不婬、不妄語、不飲酒、不脂粉塗身、不歌舞及觀聽、不坐高廣大牀なり。

【九】Purna

【一〇】發起序第三禁母緣。

【一一】沙門(Sramana)。勤勞と譯す。

を聞きをはりて、其の母を怒りて曰はく、『我が母はこれ賊なり、賊と伴たればなり。沙門は悪人なり、幻惑呪術をもて、この悪王をして多日に死せざらしむ』と。即ち利劔を執りて、其の母を害せむと欲す。時に一の臣あり、名づけて月光といふ、聰明多智なり、及び 耆婆 とともに、王の爲に禮を作して白して言さく、『大王、臣、毗陀論經の説を聞くに、劫初よりこのかた諸の悪王あり、國位を貪るがゆゑに、其の父を殺害せしこと一萬八千なり、未だ曾て無道にして母を害せしことあることを聞かず、王いま此の殺逆の事を爲さば、(二四) 刹利種を汚さむ、臣きくに忍びず、是れ 旃陀羅 なり、宜しく此に住ましむべからず。』時に二大臣この語を説きはりて、手を以て劔を按へて (二五) 御行して退く。時に阿闍世、驚怖惶懼して、耆婆に告げて言はく、『汝わが爲にせずや。』耆婆まをして言さく、『大王、つつしみて母を害すことなかれ。』王この語を聞きて、懺悔して救はむことを求む。すなはち劔を捨てて止めて母を害せず、内宮に勅語し、深宮に閉置して、また出ださしめす。

(二六) 時に韋提希幽閉せられをはりて、愁憂憔悴して遙かに耆闍崛山に向ひて、佛の爲に禮を作

す。出家の行者。

【三】耆婆 (Kāśyapa)。固活と譯す、阿闍世の庶兄、名醫。

【四】毗陀 (Veda)。四吠陀のこと。

【五】刹利 (Kshatriya)。田主と譯す、印度四種姓の一、君主貴族。

【六】旃陀羅 (Chandala)。屠兒と譯す、五種姓の劣等。

【七】御行。アトスザリ。

【八】發起序第四厭苦緣。

して是の言を作さく。『如來世尊むかしの時は恒に阿難を遣はして來して我れを慰問したまひき。我れいま愁憂す、世尊は威おもくして見たてまつることを得るに由なし。願はくは目連尊者阿難をして我がために相見せしめたまへ。』此の語を作しをはりて、悲泣して涙を雨らし、遙かに佛に向ひて禮したてまつる。未だ頭を擧げざる頃に、爾の時に世尊者闍崛山に在しまして、韋提希の心の所念を知ろしめして、即ち大目犍連および阿難に勅して空より來らしめ、佛は耆闍崛山より没して王宮において出でたまふ。時に韋提希禮しをはりて頭を擧ぐるに、世尊釋迦牟尼佛の身は紫金色にして百寶の蓮華に坐し、目連は左に侍し、阿難は右にあり、釋梵護世の諸天は虚空の中にありて、普く天華を雨らしてもて供養せるを見る。時に韋提希佛世尊を見たてまつりて、自ら瓔珞を絶ち擧身地に投じ、號泣して佛に向ひて白して言さく、『世尊われ宿なみの罪ありてか此の惡子を生める、世尊またならの因縁ありてか提婆達多と共に眷屬と爲りたまへる。』

唯ねがはくは世尊わが爲に廣く憂惱なき處を説きたまへ、我れ當に往生すべし。閻浮提の濁惡世を樂はず。此の濁惡の處には地獄餓鬼畜生盈滿して不善聚おほし。願はくは我れ未來に

【二六】阿難 (Ananda) 慶喜と譯す。

【二九】發起序第五欣淨緣。初に十方の淨土を通語す。

【三〇】閻浮提 (Jambudvīpa) 勝金洲と譯す。此の世界の名。

【三〇】閻浮提

惡聲を聞かず、惡人を見ざらむ。いま世尊に向ひて五體を地に投じて、哀を求めて懺悔す。唯ねがはくは佛日われをして清淨業の處を觀せしめたまへ。一爾の時に世尊眉閉の光りを放ちたまふ。其の光り金色にして、徧く十方無量の世界を照らし、佛頂に還り住まりて化して金臺と爲る、

須彌山のごとし。十方諸佛の淨妙の國土みな中において現す、或は國土あり七寶をもて

合成せり、また國土あり純らこれ蓮華なり、また國土あり自在天宮のごとし、また國土あり玻璃鏡のごとし、十方の國土みな中において現

す。是のごとき等の無量の諸佛國土の嚴顯にして觀つべきありて、韋

提希をして見せしめたまふ。時に韋提希佛に白して言さく、世尊この

諸の佛土また清淨にしてみな光明ありといへども、我れいま極樂

世界の阿彌陀佛の所に生せむことを樂ふ。唯ねがはくは世尊われに

思惟を教へたまへ、我れに正受を教へたまへ。

爾のとき世尊すなはち微笑したまふに、五色の光りありて佛口

より出づ、一一の光り頻婆娑羅の頂を照らす。爾のとき大王幽閉に在

りといへども、心眼さはりなくして遙かに世尊を見たてまつり、頭面

五

【一】金臺の形、須彌(Sumera)の山に似たり。
【二】これを光臺現國と云ふ。
【三】別して彌陀の極樂を選ぶ。
【四】正しく別行思惟正受を求む。
【五】思惟。勝境を想念す。
【六】正受。心勝境に契ふ、定也。
【七】發起序第六散善顯行緣の中先づ佛光父王を益するを明す。
【八】阿那含(Anāgāmi)不還生死と譯す。小乘第三果。
【九】韋提の致請に應じ許説す

に禮を作すに、自然に増進して 阿那含を成す。

爾のとき世尊韋提希に告げたまはく、『汝いま知るやいなや、阿

彌陀佛ここを去ること 遠からず、汝まさに念ひを繫けて諦かに彼

の國を 觀すべし。淨業成せむものなり。我れいま汝が爲に廣く衆

の譬へを説かむ、また未來世の一切凡夫の淨業を修せむと欲せむ者を

して、西方極樂國土に生ずることを得しめむ。彼の國に生せむと欲

せむ者は、當に三福を修すべし。一つには父母に孝養し、師長に奉

事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。二つには 三歸を受

持し、衆戒を具足して、威儀を犯せず。三つには 菩提心を發こ

し、深く 因果を信じ、大乘を讀誦し、行者を 勸進す。此く

のごとき三事を名づけて淨業とす。』佛韋提希に告げたまはく、『汝い

ま知るやいなや、此の三種の業は過去未來現在三世諸佛の淨業の正因

なり。』

佛阿難および韋提希に告げたまはく、『諦かに聽き諦かに聽け、

るに當り世戒行の三福を説く。三福は後の九品の行業と開合の異。

【四〇】極樂は十萬億土の西と云ふに今不遠とするは分齊不遠、去時一念即到、定境相應常見の三義に由る。

【四一】觀。觀想也。

【四二】今の三福後の第四十觀上品上生に出す三種衆生と比較すべし。

【四三】世福。後の第十五觀中品中下生參照。

【四四】十善。不殺、不盜、不邪行、不妄語、不綺語、不惡罵、不兩舌、不貪、不瞋、不邪見。

【四五】戒福。中品上生中參照。

【四六】三歸。歸依佛法僧。

【四七】行福。上品參照。

【四八】この菩提心は願行に通ず。

【四九】世出世の因果なり。

善くこれを思念せよ、如來いま未來世の一切衆生の煩惱の賊に害せられむ者の爲に清淨業を説かむ。善きかな韋提希ころよく此の事を問へり。(五三) 阿難なむちまささに受持して廣く多衆の爲めに佛語を宣説すべし。如來いま韋提希および未來世の一切衆生をして西方極樂世界を觀せしめむ、佛力を以てのゆゑにまさかに彼の清淨國土を見ることを得むこと、明鏡を執りて自ら面像を見るがごとくなるべし。彼の國土の極妙の樂事を見て、こころ歡喜するがゆゑに、時に應じて即ち(五四) 無生法忍を得む。(五五) 佛韋提希に告げたまはく、『汝は是れ凡夫にして心想事成劣なり、未だ天眼を得ざれば遠く觀ることあたはず、諸佛如來に異の方便あり、汝をして見ることを得しめむ。』時に韋提希佛に白して言さく、『世尊わがごときはいま佛力を以てのゆゑに彼の國土を見たてまつる。(五六) 若し佛滅後の諸の衆生等は濁惡不善にして(五七) 五苦に逼められむ、いかにまへに阿彌陀佛の極樂世界を見たてまつるべきか。』

(五八) 佛韋提希に告げたまはく、『汝および衆生まさきに心を專にして、

本

【五〇】大乘・華嚴・大集・般若・法華、涅槃等の大乘經典。

【五一】勸進。聖道淨土の法門を説くと作善修福との勸進あり。

【五二】發起序第七定善示觀緣。

【五三】後の流通文者聞會と照應せり。

【五四】他力觀にして聖道自力と異なるを示す。

【五五】無生を悟る智。その位次の高下あるも十信無生と定む。

【五六】未來衆生の爲に正受方便の開説を懇請す。本經の序分究竟す。

【五七】五苦は生、老、病、死、愛別離。

【五八】次文第二正宗分。分ちて十六觀、前三定善は善導疏第三定善義廣説す。後三散善。十三中前十二次第觀後一略觀。今第一日觀。

七

は黄金わうごんの繩なはを以て雜ざつ 廁閉錯けんごくせり、七寶しちほうを以て界まかひて分齊ぶんざい分明ぶんみやうなり。一一いちいちの寶たからの中に五百色ごひやくしきの光ひかりあり、其その光ひかり華はなのごとく、また星しやう月に似にたり、虚空こくうに懸處けんじよして光明臺くわうみやうたいと成る、樓閣ろうかく千萬せんまんあり 百寶ひやくほうをもて合成がふじやうせり、臺うてなの兩邊りやうへんにおいておのおの百億ひやくおくの華幢けどう無量むりやうの樂器がくきあり、以て莊嚴しやうごんとす。(六六)八種はつしゆの清風しやうふう光明くわうみやうより出いで、此この樂器がくきを鼓ならして、(六九)苦空くくう無常むじやう無我むがの音おとを演說えんぜつせしむ。是これを 水想すいさうとし、第二だいにの觀くわんと名なづく。

(七二)此この想成まうじやうじたらむとき、一一いちいちにこれこを觀くわんじて極きはめて了れう了れうならしめよ、目めを閉めぢ目めを開ひらくにも散失さんしつせしめざれ、ただ睡時すいじを除のぞきて恒ねに此この事ことを憶おもへ。此このごとく想さうするを名なづけて、ほば極樂國ごくらくこくの地ぢを見るみるとす。若もし (七三)三昧さんまいを得えば彼かの國地こくぢを見るみること了れう了れう分明ぶんみやうならむ。具つさに説とくべからず。是これを地想ぢさうとし、第三だيسانの觀くわんと名なづく。(七四)佛阿難ほとけあなんに告つげたまはく、『なむち佛語ぶつごを持ぢして、未來世みらいぜの一切大衆いちさいだいしゆの苦くを脱だつせむと欲ほつせむ者ものの爲ために、是この觀地くわんぢの法ほふを説とけ。若もし是この地ぢを觀くわんせむ者は八十億はちじふおく

本

【七〇】廁。雜也。

【六一】四方四維の八方を八種とす。

【六九】身受心法の四念處に常樂我淨の四倒なき四眞を説くの義不淨を云はずして空を擧ぐるは觀想によらず觀成を云ふと。但苦は苦苦壞苦行苦を觀じ、空無常を明にし、無我に達せしむ、故に緣生無我を説くと解するも可なり。

【七二】冰想瑠璃想あるも本に就て水想とす。

【七三】第三地想觀、地の眞觀なり。文は前觀と联接す。

【七四】三昧。三摩地 (samādhi) 正受、等持等と譯す。

【七五】極樂を本國とし娑婆を他世とす。若し「身を捨てて他世に」とせば捨身を娑婆現身、他世は未來極樂となる。

九

劫生死の罪を除き、身を他世に捨ててかならず淨國に生ぜむ、心に疑ひなきことを得よ。是の觀を作すをば名づけて正觀とし、若し他觀せむをば名づけて邪觀とす。』

佛阿難および韋提希に告げたまはく、『地想成じをはりなば、次に

寶樹を觀せよ。寶樹を觀すとは一にこれを觀じて七重行樹

の想ひを作せ。一一の樹の高さ八千由旬なり、其の諸の寶樹七寶の華

葉具足せずといふことなし、一一の華葉異の寶色を作す、瑠璃色の中

より金色の光りを出だし、玻瓈色の中より紅色の光りを出だし、瑪瑙

色の中より磔磔の光りを出だし、磔磔色の中より綠真珠の光りを出だ

す、珊瑚琥珀一切の衆寶もて映飾とせり。妙真珠の網うゑきの上に彌

覆せり、一一の樹の上に七重の網あり、一一の網の間に五百億の妙華

宮殿あり、梵王宮のごとし。諸の天子童子自然に中にあり、一一の童子

五百億の釋迦毗楞伽摩尼を以て瓔珞とせり、其の摩尼の光り百

由旬を照らす、猶し百億の日月を和合せるがごとし、具さに名づくべ

【七四】觀想の時愛見等を雜ふれば妄境現す、これを妄想又は邪觀と云ふ。

【七五】第四寶樹觀。前に所依能持を觀す、以下能依所持に就て、先づ林樹を觀す。

【七六】寶樹は大經上末廣說小經また七重行樹を説く、參照。

【七七】釋迦毗楞伽摩尼 (Śakrabhīrajanimitra)。譯、能勝、帝釋執る所の寶。

【七八】閻浮檀金 (Jambūvatana)。譯、金。

【七九】旋火輪。圓轉の相に喩ふ。

【八〇】第五寶池觀。

【八一】或は水を池に作る。この觀は極樂の池水にして單なる水想にあらず。又此土の水にあらず。

【八二】八功德ある池水の義、八功德水のこと大經上末、小經抄

からず、衆寶閒錯して色中の上れたるものなり。此の諸の寶樹行行あ
 ひ當たり、葉葉あひ次げり、衆葉の閒において諸の妙華を生ず、華の
 上に自然に七寶の果あり、一一の樹葉縱廣正等にして二十五由旬な
 り、其の葉千色にして百種の畫あり、天の瓔珞のごとし。衆の妙華あ
 り、閻浮檀金の色を作せり、旋火輪のごとく葉の閒に婉轉す。涌
 生せる諸果帝釋の餅のごとし、大光明あり化して幢旛無量の寶蓋と成る、是の寶蓋の中に三千大
 千世界の一切の佛事を映現す、十方の佛國また中において現す。此の樹を見をはりなば亦まさに
 次第に一一にこれを觀すべし、樹莖枝葉華果を觀見してみな分明ならしめよ。是れを樹想とし、
 第四の觀と名づく。

(四〇) 次ぎにまさるに (四一) 水を想ふべし。水を想ふとは極樂國土に (四二) 八池水あり、一一の池水七寶
 の所成なり。其のたから柔軟にして如意珠王より生ず、分かれて十四支と爲る。一一の支七寶の
 いろを作す、黄金を渠とす、渠の下にはみな雜色の金剛をもて以て底沙とす。一一の水の中に
 六十億の七寶の蓮華あり、一一の蓮華團圓正等にして十二由旬なり。其の摩尼の水、はなの閒に
 流れ注ぎて樹を尋ねて上下す、其のころ微妙にして苦空無常無我諸 (四三) 波羅蜜を演説す。また諸

說參照、無量功德の中八功德
 を云ふは阿耨達池にその説あ
 ればなり。
 【八三】本池を廻る十四道の支葉各
 各に於ての意。
 【八四】波羅蜜 (パーラミター)
 度等にして岸を度る意。

佛の相好を讚歎するものあり。如意珠王より金色微妙の光明を涌出す。其の光り化して百寶色の鳥と爲る、和鳴哀雅にして常に念佛念法念僧を讚す、是れを八功德水の想とし、第五の觀と名づく。

(八七)衆寶國土の一一の界の上に五百億の寶樓閣あり、其の樓閣の中に無量の諸天ありて天の伎樂を作す。また樂器あり虚空に懸處せり、天の寶幢のごとく鼓せざるに自ら鳴る。此の衆の音の中にみな念佛念法念比丘僧を説く。此の想成じをはるを名づけて、(八七)は極樂世界の寶樹寶地寶池を見るとき、是れを(八八)總觀の想とし、第六の觀と名づく。若し此れを見む者は、無量億劫の極重の惡業を除きて、命終の後かならず彼の國に生ぜむ。是の觀を作すをば名づけて(八九)正觀とし、若し他觀せむをば名づけて邪觀とす。』

(九〇)佛阿難および韋提希に告げたまはく、(九一)諦かに聽き、諦かに聽け、善くこれを思念せよ。佛まさに汝が爲に苦惱を除く法を分別し解説すべし、汝ら憶持して廣く大衆の爲に分別し解説せよ。』是の語を説

【八七】化鳥。小經に詳也、參照。

【八八】第六寶樓閣。

【八七】正受の定觀を粗見と云ふに就て定中の影像たると後觀の勝境に比するとよりほぼと云ふと。

【八九】前の三觀と合して云ふにあらず、樓閣觀には地樹池も現するも、名ば依報觀の終結なるより來る。

【九〇】上來假二眞四の六觀、通の依報終る。

【九一】第七華座觀。これ彌陀の受用する別依報なり。

【九二】前に韋提無愛惱處を求め所見の土に就て請ふ。故に定善示觀緣の諦聽等より前段六觀を以て能請に應じ終るも佛意

きたまふとき、(五)無量壽佛空中に住立したまふ、觀世音大勢至この二
 大士左右に侍立したまふ。光明熾盛なり具さに見るべからず、百千の
 閻浮檀金の色も比へとすることを得ず。(六)時に韋提希無量壽佛を見たて
 まつりをはりて、足を接して禮を作し、佛に白して言さく、(七)世尊わ
 れいま佛力に因るがゆるに、無量壽佛および二菩薩を見たてまつるこ
 とを得たり。未來の衆生まさにいかに無量壽佛および二菩薩を觀たて
 まつるべきか。『佛韋提希に告げたまはく、『彼の佛を觀むと欲せばまさ
 に想念を起すべし。七寶の地の上において蓮華の想を作せ、其の蓮
 華の一一の葉をして百寶の色を作さしめよ、八萬四千の脈あり、猶し
 天の畫のごとし、脈に八萬四千の光りあり、了了分明にしてみな見ることを得しめよ、華葉の小
 なるものは縱廣二百五十由旬なり、是くのごとき蓮華に八萬四千の葉あり、一一の葉の間に
 おの百億の摩尼珠王ありて、以て映飾とせり、一一の摩尼より千の光明を放つ、其の光り蓋のご
 とくにして七寶合成せり、徧く地上に覆へり、(八)釋迦毗楞伽寶を以て其の臺とす、此の蓮華臺は
 八萬の金剛(九)甄叔迦寶(十)梵摩尼寶妙眞珠網を以て交飾とせり、其の臺の上において自然に

は依正俱説せんとす、別依は
 正報觀の由序なり、此に重
 て諦聽等と云ふ。

【二】序分欣淨緣の光臺現國參
 照。

【三】序分末段の韋提の請問參
 照。

【四】釋迦毗楞伽能勝り前出
 照。

【五】甄叔迦(Trishula)赤色と
 譯す。甄叔迦樹の美華に擬し
 て寶珠の名とす。

【六】梵摩尼(Brahmani)淨如
 意と譯す。

四柱の寶幢あり、一一の寶幢百千萬億の須彌山のごとし。幢上の寶幔(老)は夜摩天宮のごとし。

五百億の微妙の寶珠ありて以て映飾とせり、一一の寶珠に八萬四千の光りあり、一一の光り八萬

四千の異種の金色を作す、一一の金色その寶土に徧し、處處に變化しておのおの異相を作す、或

は金剛臺となり、或は眞珠網と作り、或は雜華雲と作りて、(九七)十方の面において(九八)意に隨ひて

變現して、(一〇〇)佛事を施作す。是れを華座の想とし、第七の觀と名づく。佛阿難に告げたまはは

く、『此くのごとき妙華は、これ本と法藏比丘の願力の所成なり。若し彼の佛を念はむと

欲せば、まさに先づこの華座の想を作すべし。此の想を作さむとき雜

觀することを得ざれ。皆まささに一一にこれを觀すべし、一一の葉、一

一の珠、一一の光り、一一の臺、一一の幢みな分明ならしめむこと、

鏡中において自ら面像を見るがごとくせよ。此の想成せむ者は、(一〇二)五

萬劫の生死の罪を滅除して、必定してまさに極樂世界に生ずべし。是

の觀をなすをば名づけて正觀とし、若し他觀せむをば名づけて邪觀と

す。

(一〇一)佛阿難および韋提希に告げたまはく、『此の事を見をばりば、

【九七】夜摩(ヤマイ)。

又ば焰摩天、欲界第三善時天。須彌の如き

寶幢の上に寶幢に張ること

須彌上に夜摩懸るに似たり

【九八】十方。極樂の十方。

【九九】觀者の意樂。

【一〇〇】八相示現作佛授記等。

【一〇一】第三十二國土嚴飾願。

【一〇二】後の第九佛身觀。

【一〇三】五萬劫。或本五百億劫と作す。地觀八十億劫今五萬多

少あるは觀功の多少にあらず

次ぎにまゝに (一〇五) 佛を想ふべし。ゆるはいかに。 (一〇六) 諸佛如来は是れ

(一〇七) 法界身なり、一切衆生の (一〇八) 心想の中に入りたまふ。是のゆるに

汝ら心に佛を想ふとき、是の (一〇九) 心すなはち是れ (一一〇) 三十二相 (一一一) 八

十隨形好なり、是のこころ (一一二) 佛を作る、是のこころ (一一三) 是れ佛な

り。諸佛 (一一四) 正徧知海は心想より生ず、是のゆるにまゝに一心に念ひ

を繫けて、諦かに彼の佛 (一一五) 多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀を觀すべ

し。彼の佛を想はむ者は先づまゝに (一一六) 像を想ふべし。 (一一七) 目を閉ぢ

目を聞くにも一つの寶像の (一一八) 閻浮檀金の色のごとくにして、彼の華

の上に坐したまへるを見よ。像の坐したまへるを見をはりなば、 (一一九)

心眼ひらくことを得て、了了分明に極樂國の七寶の莊嚴寶地寶池寶

樹行列し、諸天の寶幔その上に彌覆し、衆寶の羅網虛空の中に滿つる

を見る。此のごとき事を見ば、極めて明了なること掌中を觀るがご

とくならしめよ。 (一二〇) 此の事を見をはりなば、復まゝに更に一つの大

蓮華を作して、佛の左邊に在くべし、前の蓮華のごとく等しくして異

機界の多少に隨ふ。

【一〇四】第八、像觀眞佛初心者に直觀難きが故に先づ形像を觀する也。

【一〇五】この佛は第九觀に云ふ眞身なり。

【一〇六】諸佛等く法界普徧の徳あれば此に諸佛と云ふ。

【一〇七】法界身。理法界ならば清淨眞如、事法界は全衆生界、十界。今この法界を度する彌陀を法界身と云ふ。

【一〇八】衆生見んと願すれば佛これを知り想心若くば夢定中に現するを云ふ。

【一〇九】佛身相好が衆生心中に現するを心卽是三十二相等と云ふ。佛と心と不離なり若し理觀を云ふ諸師は、不二の卽とし、この凡心の當體を佛とす。

【一一〇】報身の八萬四千相好を觀

なることあることなし。また一つの**大蓮華**

を作して佛の右邊に在け。一の**觀世音菩薩**

の像の左の華座に坐せるを想へ。また**金光**

を放つこと前のごとくにして異なることなし。

一の大勢至菩薩の像の右の華座に坐せるを想へ。(三三)此の想成ずるとき、佛菩薩

の像みな光明を放つ。其の光り金色にして

諸の寶樹を照らす、一一の樹下にまた三

蓮華あり、諸の蓮華の上におのおの一佛二

菩薩の像ありて、彼の國に徧滿す。此の想

成ずるとき、行者まことに水流光明および

諸の寶樹 覺鴈鴛鴦みな妙法を説くを

聞くべし、(三三) 出定入定に恒に妙法を聞き

かむ。行者の所聞出定のとき憶持して捨

るに根本たる三十二相あり。

頂上肉髻、頭髮右旋、額廣平、

眉間白毫、眼色紺青眼睫如牛

王、四十齒具足、齒齊密、齒

根深、齒白淨、咽中津液得上

味、頰如師子、舌覆面至髮際、

聲如梵王、臂頭圓相、七處平

滿、兩腋滿相、皮膚細滑、正

立不屈二手過膝、上身如師子、

身縱廣等如諸瞿陀、身毛上生

青色柔軟、毛上靡、陰藏如馬

王、足跟圓好、足不露蹠、手

足柔軟、手足纒網、指纖長、

手足具千輻輪、足下安平、足

佛身全現す。

【二四】正徧知海。次の三藐三佛

陀なり、又等正覺と云。法の如

く普く一切法を正しく知る。

【二五】多陀阿伽度阿羅訶三藐三

佛陀 (Tadga-ā-ga-ta-ā-ro-ho-sa-m-bhū-ta) 如來應供等正覺

と譯す。

【二六】想像、方便觀として、金色

等身の佛座像を觀するなり。

【二七】閉目は眼見、閉目は思想

位、未だ粗見にも達せず。

【二八】閻浮檀金 (Jambūvatī-gold)、黄金、帶紫色。

【二九】心眼ひらく。正受三昧位。

ここに眞佛の化して小身と成りて現するなり。

【三〇】以下二菩薩觀、第十第十一觀の豫習。

【三一】以下多身觀、この像思想には三轉觀あり、觀佛、觀二

てず、(三〇)修多羅と合せしめよ。若し合せ

ざらむをば名づけて妄想とす。若し合する

ことあらむをば名づけて(三一)麤想をもて極

樂世界を見るとす。是れを像想とし、第八

の觀と名づく。是の觀を作さむ者は無量億

劫の生死の罪を除き、(三二)現身の中にお

いて(三三)念佛三昧を得む。』

(三〇) 佛阿難および韋提希に告たまはく、

『此の想成じをばりなば、次ぎにまさに更

に無量壽佛の身相光明を觀すべし。阿難ま

さに知るべし。無量壽佛の身は百千萬億の

夜摩天の閻浮檀金の色のごとし。佛身の高

さ六十萬億(三九)那由佗恒河沙(四〇)由旬な

り。眉間の(四一)白毫は右に旋りて婉轉せり、

本

菩薩、成多身觀。今第三也。

【三】水鳥。彌陀經廣說參照。

【三】出定は散心なるも定力餘

勢あるを以て聞く。

【三】修多羅(スートラ)。契經と譯

す。定中所聞と經中所說と比

較して合すれば正しく、合せ

ざれば妄想なるを以て懺悔更

に觀すべし。

【三】正受觀なるも後の眞身觀

に比して麤想と云ふ。

【三】現身。その一生の中。

【三】第九佛身觀成就を云ふ。

即ち觀佛を念佛と云へるな

り。

【三】第九佛身觀。彌陀の眞身

を觀す。十三定善觀中の最上

なり。

【三】那由佗(ナユタ)千萬億

と譯す。

【三】由旬(Yojana)。四十里。

【三】白毫。三十二相の一。眉

の間に玉の如く、その毛白く

柔婉にして右旋す。

【三】五須彌。一須彌の高量八

萬山旬なれば四十萬山旬。

【三】四大海。一海の縱廣八萬

四千由旬。但しこれ等は非數

量を假説する也。

【三】圓光。佛頂の光相。

【三】八萬四千。報身相なり。

【三】西山には色光心光を分た

す、本文を「光明遍く十方世

界の念佛衆生を照らして攝取

して捨てたまはず」とす。

【三】心光唯念佛者を攝するを

明す。念佛に觀稱に通ずるも

今の念佛を稱名と定む。

【三】佛佛平等の故に一佛を見

れば一切佛を見る。

【四】この念佛は前の像觀の念

(二三) 五須彌山のごとし。佛眼は (二五) 四大海水のごとし、青白分明なり。

身みの諸もろの毛孔さうくより光明くわうみやうを演出えんしゆつすること須彌山しゆみせんのごとし。彼の佛かの佛ほとけの

(二四) 圓光えんくわうは百億ひやくおくせん三千大千世界さんぜんたいせんせかいのごとし、圓光えんくわうの中なかにおいて百萬億那由

他た恒河沙ごうがしやの化佛けぶつあり、一一いちいちの化佛けぶつにまた衆多無數しゆたむしゆの化菩薩けぼさつありて、以

て侍者じしやとせり。無量壽佛むりやうじゆぶつに (二五) 八萬四千はちまんしせんの相さうあり、一一いちいちの相さうにおのお

の八萬四千はちまんしせんの隨形好ずいぎやうかうあり、一一いちいちの好かうにまた八萬四千はちまんしせんの光明くわうみやうあり、一一いちいち

の光明くわうみやうあまねく (二六) 十方世界じつぱうせかいを照てらして、(二七) 念佛ねんぶつの衆生しゆじやうを攝せつ

取しゆして捨てたまはず。其その光明相好くわうみやうさうかうおよび化佛けぶつつぶさに説とくべからず。

ただまさに憶想おくさうして心眼しんげんをして見みせしむべし。此この事ことを見る者ものは、即すなはち

(二八) 十方一切じつぱういっさいの諸佛しよぶつを見みたてまつる、諸佛しよぶつを見みたてまつるを以もての

ゆゑに、(二九) 念佛三昧ねんぶつさんまいと名なづく。是この觀くわんを作なすをば、(三〇) 一切いっさいの佛身ぶつしん

を觀くわんすと名なづく。佛身ぶつしんを觀くわんるを以もてのゆゑにまた、(三一) 佛心ぶつしんを見みる、佛

心しんとよは (三二) 大慈悲だいじひこれなり、(三三) 無緣むげんの慈じを以もて諸しよの衆生しゆじやうを攝せつしたま

ふ。此この觀くわんを作なさむ者は (三四) 身みを他世たがいに捨すてて諸佛しよぶつの前まへに生しやうじて無生むしやう

佛三昧と同じく觀佛三昧と定む。念佛衆生と流通の若念佛者との念佛は稱名なり。此經念佛觀佛兩三昧を宗とする根據なり。

【三二】一切の佛身。彌陀を觀するのみ、別に一切佛身を所觀とするにあらず。

【三三】佛心に佛にあらざれば知らざるも、大悲の相好を見るを見佛心と云。

【三四】大慈悲、無限量の慈悲平等甚深なるを云ふ。

【三五】無緣、法緣衆生緣は法と衆生とに寄せて起す故に有緣、相實相應して無限に緣ぜざるなく緣じて緣する心なきを以て無緣とす。

【三六】第三觀同文參照

【三七】白毫餘相に勝れ、彌陀因

行に順するが故に多くこの觀

忍を得む。是のゆるゑに智者まさに心を繋けて諦かに無量壽佛を觀すべし。無量壽佛を觀せむ者は一の相好より入れ。ただ眉開の白毫を觀じて極めて明了ならしめよ。眉開の白毫を見たてまつる者には八萬四千の相好自然にまさに現すべし。無量壽佛を見たてまつる者は即ち十方無量の諸佛を見たてまつる。無量の諸佛を見ることを得るがゆるゑに、諸佛現前に授記したまふ。是れを徧く一切の色身を觀する相とし、第九の觀と名づく。此の觀を作すをば名づけて正觀とし、若し他觀せむをば名づけて邪觀とす。』

を勸む。

【四七】近くは往生、遠くは成佛を記す。

末

(二) 佛阿難および韋提希に告げたまはく、「無量壽佛を見たてまつること了了分明にしをはりな

ば、次ぎに復たまさに觀世音菩薩を觀すべし。此の菩薩の身のたけ八十萬億那由陀由旬なり、身

は紫金色なり、頂に肉髻あり、頂に圓光あり、面のおの百千

由旬なり、其の圓光の中に五百の化佛あり、釋迦牟尼佛のごとし、一

一の化佛に五百の化菩薩あり、無量の諸天を以て侍者とせり、擧身の

光中に五道の衆生の一切の色相みな中において現す。頂上には毗

楞伽摩尼寶を以て天冠とせり、其の天冠の中に一の立てる化佛あり、

高さ二十五由旬なり。觀世音菩薩の面は閻浮檀金の色のごとし。眉間

の毫相に七寶の色を備へたり、八萬四千種の光明を流出す、一一の

光明に無量無數百千の化佛あり、一一の化佛無數の化菩薩を以て侍

者とせり、變現自在にして十方世界に滿つ、譬ふれば紅蓮華の色

のごとし。八十億の光明あり、以て瓔珞と爲り、其の瓔珞の中に普く一

【一】第十、觀音觀。

【二】異本那由陀の下恒河沙の三字を加ふ却つて佛身より高さ

こととなる。非數量の量のみ。

【三】肉髻。佛頂一層の高處蓋拳の如きもの。

【四】縱橫各各なり。

【五】五道。地獄、餓鬼、畜生、人、天の五とす。菩薩大悲能

化の故にこれを現す。

【六】七寶の色。毫相純白色なる

に七寶の光澤ある也

【七】化佛侍者の多きを紅蓮の盛

美に喩ふ。異本譬を臂とす。

一切の諸の莊嚴の事を現す。手掌には五百億の雜蓮華の色を作せり。手
 の十指の端一一の指端に八萬四千の畫あり、猶し印文のごとし、一一
 の畫に八萬四千の色あり、一一の色に八萬四千の光りあり、其の光り
 柔軟にして普く一切を照らす、此の寶手を以て衆生を接引す。足を舉
 ぐるとき、足下に千輻輪の相あり、自然に化して五百億の光明臺と
 成る、足を下すとき金剛摩尼の華あり、一切に布散して彌滿せずとい
 ふことなし。其餘の身相衆好具足せること佛のごとくにして異なることなし。ただ頂上の肉髻
 とおよび、無見頂相とのみ世尊に及ばず。是れを觀世音菩薩の眞實の色身を觀する想とし、第
 十の觀と名づく。佛阿難に告げたまはく、「若し觀世音菩薩を觀むと欲せむ者あらば、まさに是の
 觀を作すべし、是の觀を作さむ者は、(一)諸禍に遇はず、業障を淨除し、無數劫の生死の罪を除か
 む。此のごとき菩薩はただ其の名を聞くに無量の福を獲む、いかにいはむや諦かに觀せむを
 や。若し觀世音菩薩を觀せむと欲せむ者あらば、先づ頂上の肉髻を觀じ、次に天冠を觀せよ、
 其餘の衆相また次第にこれを觀じて、また明了なること掌中を觀るがごとくならしめよ。是の
 觀を作すをば名づけて正觀とし、若し他觀せむをば名づけて邪觀とす。

末

然らば「臂は」とて臂相を觀す
 ることとなる。

【八】足下に四相十六好八文あり
 千輻輪の相その一。

【九】無見頂。八十種好の一。肉
 髻は大相、無見頂は小相。

【一〇】不遇諸過淨除業障ば現益、
 無數劫等ば當益。

(11) 次ぎにまたままた大勢至菩薩を觀すべし。此の菩薩の身量大小また觀世音のごとし。圓光
 は面おのおの百二十五由旬なり、二百五十由旬を照らす。擧身の光明十方の國を照らすに、紫金
 の色を作せり、(12) 有縁の衆生はみな悉く見ることを得む。(13) ただ此の菩薩の一毛孔の光りを見

ば、即ち十方無量の諸佛の淨妙の光明を見たてまつらむ。是のゆゑに此の菩薩を號して
 邊光と名づく。智慧の光りを以て普く一切を照らし、三塗を離れしむ
 (14) 至と名づ

るに無上力を得たり、是のゆゑに此の菩薩を號して大勢 至と名づ
 (15) 此の菩薩の天冠に五百の寶華あり、一一の寶華に五百の寶臺あり、
 一一の臺の中に十方諸佛の淨妙の國土の廣長の相、みな中において現

す。頂上の肉髻(一六) 盃頭摩華のごとし、肉髻の上において一つの寶
 餅あり、諸の光明を盛れて普く佛事を現す。餘の諸の身相は觀世音

のごとく、等しくして異なることあることなし。此の菩薩ゆくととき十
 方の世界一切震動す、地の動する處に當たりて五百億の寶華あり、一

一の寶華莊嚴高顯なること極樂世界のごとし。此の菩薩坐するととき七
 寶の國土一時に動搖す、下方の金光佛刹より、乃し上方の光明王佛

【一】第十一勢至觀。

【二】勢至結緣の單。勢至圓通に
 我本因地以念佛心入無生忍今
 於此界攝念佛人歸於淨土。

【三】勢至の光明の德勝ぐるるな
 説く。

【四】彌陀十二光の一號と同じ。

【五】他經に至る志とす、悲華經
 の如し。今は勢力至極の義。

【六】盃頭摩 (Patana) 紅蓮と譯
 す。

【七】坐時十方の震動を明すが故
 にここに「動搖せすと云ふこ
 となし」の一句を加へよ。

【八】苦。極樂に實苦なきも下位

刹に至るまで。(二七) 其の中間において無量塵數の分身の無量壽佛、分身の觀世音大勢至みな悉く雲のごとく極樂國土に集まり、空中に側だち塞がりて蓮華座に坐し、妙法を演説して (二八) 苦の衆生を度したまふ。此の觀を作すをば名づけて正觀とし、若し他觀せむをば名づけて邪觀とす。大勢至菩薩を見る、是れを大勢至の色身を觀する想とし、第十一の觀と名づく。此の菩薩を觀せむ者は無量劫阿僧祇の生死の罪を除かむ、是の觀を作さむ者 (二九) 胞胎に處せず、常に諸佛淨妙の國土に遊ばむ。此の觀成じをはるを名づけて、具足して觀世音大勢至を觀すとす。

(三〇) 此の事を見る時まさに (三一) 自心を起こすべし。 (三二) 西方極樂世界に生じて、蓮華の中において結跏趺坐し、蓮華合する想ひを作し、蓮華ひらく想ひを作せ。蓮華ひらくとき五百色の光りありて來りて身を見て、水鳥樹林および諸佛の出だすところの音聲みな妙法を演

を上位に望めて苦と云ふ。

【九】胞胎。三界四生の生死を人界に於て胞胎と云、又三界繫處、又疑惑の胎生を云ふと。

【一〇】左右悲智具備する故に。

【一二】第十二普觀想。具さには普往生觀なり。極樂の依正主伴を具觀せるも往生の爲なり。故にこの觀あり。

【一三】勝解作意して觀想を運ぶ。

【一四】この處經文略なり。自心を起すとば命終の想をなし、聖衆來迎すと想ひ、蓮華臺に乗じて往生すとの想ひを作しし等の文意ありと知るべし。

【一五】新に十二分數。修多、祇夜、和伽羅那、伽陀、優陀那、尼陀那、阿波陀那、伊帝目多伽、闍陀伽、毗佛略、阿浮陀達磨、優波提舍の十二、もて聖教の區分なるが、今は淨土の三部

ぶ、(四)十二部經と合す、出定のとき憶持して失せざれ。此の事を見をばるを無量壽佛の極樂世界を見ると名づく、是れを普觀想とし、第十二の觀と名づく。無量壽佛化身無數にして觀世音大勢至とともに、常に此の行人の所に來至したまふ。』

佛阿難および韋提希に告げたまはく、『若し至心ありて西方に

生せむと欲せば、先づまさに一の丈六の像の池水の上に在しますを觀すべし。(一七)先の所説のごとく無量壽佛は、身量無邊なり、是れ凡夫

心力の及ぶところにあらず。(一八)然るに彼の如來、宿願力のゆゑに、

憶想することあらば必ず成就することを得む。(一九)ただ佛像を想ふだ

に無量の福を得、いかにいはいはむや佛の具足せる身相を觀せむをや。

阿彌陀佛の神通如意にして十方の國において變現したまふこと自在な

り、或は、大身を現すれば虚空の中に滿ち、或は、小身を現すれ

ば丈六八尺なり、現するところの形みな眞金色なり。(二〇)圓光の化佛

および、寶蓮華は上に説くところのごとし。觀世音菩薩および大勢

經を云ふ。

【五】第十三雜想觀。依正通別眞假總雜して觀する故に雜想觀と云ふ。或は小心下機の次第觀なる故に漸觀と云ふ。

【六】前の十二觀成ぜざるも求生の意彌々加はる。

【七】第九佛身觀。

【八】身量無邊。前に六十萬億等と云ふも實に無邊なり

【九】如來願力にて凡夫も眞觀成就するものありとの意を明す。他力觀成なり。

【一〇】宿願力。三方中の大誓願力、これに三昧定力、本功德力を加へて三方とす。

【一一】丈六像觀と眞身觀との比較。

【一二】大身。六十萬億身。

【一三】丈六八尺身即ち今の觀境。

【一四】第九觀。

至、一切の處において(三六)身おなじ。衆生ただ(三七)首相を觀て是れ觀

世音と知り、これ大勢至と知る。此の二菩薩阿彌陀佛を助けて普く一

切を化す。是れを(三八)雜想の觀とし、第十三の觀と名づく。(三九)

佛阿難および韋提希に告げたまはく、(四〇)上品上生の者とは、

若し衆生ありて(四一)彼の國に生せむと願せば、三種の心を發こすべ

し、すなはち往生す。(四二)何らをか三とする。一つには(四三)至誠心、二

つには(四四)深心、三つには(四五)廻向發願心なり。三心を具する者は必

ず彼の國に生ず。(四六)また三種の衆生あり、まさに往生を得べし。(四七)何

らかを三とする。一つには(四八)慈心にして殺さず、諸の(四九)戒行を具

す。二つには(五〇)大乘方等經典を讀誦す。三つには(五一)六念を修行す。

廻向發願して彼の國に生せむと願す。(五二)此の功德を具して一日乃

至七日すれば即ち往生を得。(五三)かの國に生ずる時、この人精進勇猛

なるがゆゑに、阿彌陀如來觀世音大勢至無數の化佛、百千の比丘聲聞

大衆無數の諸天、七寶の宮殿とともなり。觀世音菩薩は金剛臺を執り、

【三六】第七觀。

【三七】觀音八尺なれば勢至も八尺等。

【三八】首相。觀音の頂上には化佛あり、勢至の頂上には寶瓶あるを云ふ。

【三九】異本想字なし。

【四〇】上来定善依正十三觀終る韋提の致請に答ふるもの盡く。

【四一】上品上生。以下善導疏第四散善義廣説す。散機を攝ぜんが爲に三福九品を説く。九品の行業は三福に同じく、九品の機は大經の三輩に同じ。諸師は十六皆定とするも善導は散善とし如來自説の法門とす。各品に十一門義ありとし、今第一總明告命。

【四二】機の上中下に各三別すれば九品となる、所生の土別ならず。第二に辨定其位、往生

大勢至菩薩とともに行者の前に至り、阿彌陀佛は大光明を放ちて行者の身を照らし、諸の菩薩とともに手を授けて迎接したまふ。觀世音大勢至無數の菩薩とともに行者を讚歎して、其の心を勸進す、行者見をばりて歡喜踊躍し、自らその身を見れば、金剛臺に乗じて佛後に隨從す。彈指の頃のごときに彼の國に往生す。彼の國に生じをばりて、佛の色身の衆相具足したまへるを見たてまつり、諸の菩薩の色相具足せるを見る。光明寶林妙法を演説す、聞きをはりて即ち無生法忍を悟る。須臾の閒を経て諸佛に歷事して十方界に徧じ、諸佛の前においで次第に授記せられ、還りて本國に到

の品類なり。諸師上品は上位菩薩とするも、善導は九品悉く凡夫とし、遇大の緣勝るるを以て大乘上善とするのみ。
 【四二】第三に總舉有緣之類。具三心者なり。
 【四三】總相欣求心。
 【四四】第四に辨定三心以爲正因。
 【四五】至誠等は第十八願の至心信樂欲生我國の文に當る。至誠とは三業二利、制修皆眞實なるを云ふ。
 【四六】深心。信する心、機に凡夫自ら出離の緣なしと信じ、法に彌陀本願三佛三經を信す。
 【四七】廻向發願心。過現三業に修せる世出世の自作隨喜一切の善を眞實信心中に廻向して往生せんと願する也。
 【四八】第五に正明簡機堪與不堪。去行實に三種のみにあらず、

横に萬行に通ず。
 【四九】第六に受法不同。序の三福と比するに今三福を第一に攝め、行福中の讚誦を第二に、六念を別開して第三とす。
 【五〇】初の不殺を擧げて修十善業を攝し慈下を示して孝養奉事の敬上を顯はす。
 【五一】諸大乘戒佛敎の道德を該羅す。
 【五二】六念とは佛、法、僧、戒、捨、天を念す。
 【五三】今第七。十一門義第八廻所修行願生彌陀佛國なり。
 【五四】今第八。十一門義第七修業時節延促有異。通じては一發心後畢命爲期無有退轉なり。
 【五五】第九臨命終時聖來迎接不同去時迎疾を明す。
 【五六】第十、到彼華開遲疾不同を明す、今は華合の障なし。

りて無量百千の(五八)陀羅尼門を得。(五九)これ
を上品上生の者(六〇)と名づく。

上品中生の者(六一)とは、必ずしも方

等經典を受持し讀誦せずとも、善く(六二)義

趣を解して(六三)第一義においてこころ驚動

せず、深く(六四)因果を信じて(六五)大乘を謗

せず。此の功德をもて廻向して極樂國に生

せむと願求す。此の行を行ずる者のち終

はらむと欲するとき、阿彌陀佛觀世音大勢

至無量の大衆とともに、眷屬に圍繞せられ

て、紫金臺(六六)を持して行者の前に至りたまひ、

讚じて言たまはく、(六七)法子なむち(六八)大乘

を行じて第一義を解す、是のゆゑに我れい

ま來りて汝を迎接す(六九)と。千の化佛とともに

末

【五】第十一華開以後得益。後の八品文に具缺あるも等しく十一門あるべしとば善導の説なり。

【六】陀羅尼(Dharani)。總持と譯す。

【六九】第十二總結。

【七〇】第二上品中生。大乘次善の凡夫。

【七一】讀不讀あるを云ふ。若し横には品百萬行あるも豎には上上の三種の中讀誦を受法とし、上中これに對して不必讀誦と云ふ。

【七二】義趣。經旨即ち大乘空義。

【七三】第一義。緣起無自性の空也

第二に對する第一にあらず。

【七四】因果は世出世に通ず。善惡苦樂因果と、解脫道果となり。

【七五】謗法は最重の罪、五逆よりも重し。

【六〇】法子。佛法中に智解を生ずる故に法の子なり。

【六一】大乘の義、これ第一義。

【六二】合掌又手。十指相又て掌を合するを云ふ。歸命合掌金剛合掌とも名づく。

【六三】淨土に晝夜なく華の開合を晝夜とす。今此方の一夜を宿とし華合すとす。

【七〇】阿耨多羅三藐三菩提(Anuttara-samyaksambodhi)。無上正徧知と譯す。

【七一】不退。往生に處不退を得たり。今は三賢位不退たるべし。

【七二】大般若四一四の三摩地品に百十三三昧を列釋す、參照。

【七三】第三上品下生。大乘下善の凡夫。

【七四】或信或不信を亦信と云ひ、或は前品の深信因果に同じきを亦信と云ふ。

一時に手を授けたまふ。行者みづから見れば紫金臺に坐せり、合掌又手して諸佛を讚歎したてまつる。一念の頃のごときに即ち彼の國の七寶池の中に生ず。此の紫金臺は大寶華のごとし、

宿を経て則ち開く、行者の身紫摩金色と作る。足下にまた七寶の蓮華あり。佛および菩薩俱

時に光明を放ちて行者の身を照らしたまふ。目すなはち開明なり。前の宿習に因りて普く衆聲を

聞くに純ら甚深の第一義諦を説く。即ち金臺より下りて佛を禮し、合掌して世尊を讚歎したてま

つる。七日を経て時に應じて即ち阿耨多羅三藐三菩提において不退轉を得。ときに應じ

て即ち能く飛行して、徧く十方に至りて諸佛に歷事し、諸佛の所において諸の三昧を修し、

一小劫を経て無生忍をえ、現前に授記せらる。是れを上品中生の者と名づく。

(七三) 上品下生の者とは、また因果を信じて大乘を謗せず、ただ無上道心を發こす。此の

功德を以て廻向して、極樂國に生ぜむと願求す。行者いのち終はらむ

と欲するときは、阿彌陀佛および觀世音大勢至もろもろの眷屬とともに、

金蓮華を持して五百の化佛を化作して、來りて此の人を迎へたまふ。五百の化佛一時に手を授け

て讚じて言たまはく、「法子なむちいま清淨にして無上道心を發こす、我れ來りて汝を迎ふこと。此

の事を見るとき、即ち自ら身を見れば金蓮華に坐す、坐しをはればはな合し、世尊の後に隨ひて

【七三】佛果菩提を求むる心。

即ち七寶池の中に往生することをおえ、一日一夜にして蓮華すなはち聞く。七日の中に乃ち佛を見
たてまつることを得。佛身を見るときいへども、諸の相好においてこころ明了ならず。三七日の後
において乃ち了として見たてまつる。衆の音聲のみな妙法を演ぶるを聞く、十方に遊歴して諸
佛を供養し、諸佛の前において甚深の法を聞く、三小劫を経て 百法明門をえて歡喜地に住
す。是れを上品下生の者と名づく。是れを 上輩生想と名づけ、
第十四の觀と名づく。』

佛阿難および韋提希に告げたまはく、『中品上生の者とは、若し
衆生ありて 五戒を受持し、(一)八戒齋を持し、(二)諸戒を修行して、五
逆を造らず、衆の過患なからむ。此の善根を以て廻向して西方極樂世
界に生ぜむと願す。命終の時に臨みて、阿彌陀佛もろもろの比丘と
ともに、眷屬に圍繞せられて、金色の光りを放ちて、其の人の所に至
りて、(三)苦空無常無我を演説し、出家の衆苦を離るることを得ること
を讚歎したまふ。行者見をはりてこころ大に歡喜す。自ら己身を見れ
ば蓮華臺に坐せり、長跪合掌して佛のために禮を作す、未だ頭を擧げ

末

【七】環珞經所說十信各十、十ありて百法明門とす。十地經初地所成とす。或は云ふ五位百法に三諦に達すと。前説可。
【八】大經下本の始、上輩等參照。
【九】第四中品上生。小乘根性上善の凡夫。
【一〇】五戒。不殺、不盜、不婬、不妄語、不飲酒。
【一一】八戒と齋食。八戒は五戒に不著華鬘環珞香油、不歌舞及觀聽、不坐高廣大牀を加ふ。
【一二】五と八とは在家二衆の戒。
【一三】諸戒。五八十具の戒。十戒具是戒は出家五衆の戒。

ざる頃に、即ち極樂世界に往生することを得。蓮華すなはち開く。華の開く時にあたりて衆の音聲の(八三)四諦を讚歎するを聞く、時に應じて即ち(八四)阿羅漢道をえ(八五)三明(八六)六通ありて(八七)八解脱を具す。是れを中品上生の者と名づく。

中品中生の者とは、若し衆生ありて若しは(八八)一日一夜八戒齋

を受持し、若しは(八九)一日一夜(九〇)沙彌戒を持し、若しは一日一夜

具足戒を持し、(九一)威儀缺くることなし。此の功德を以て廻向して

極樂國に生ぜむと願求す。戒香薰修するをもて此のごとき行者いのち

をはらむと欲するとき、阿彌陀佛もろもの眷屬とともに金色の光り

を放ち、七寶の蓮華を持して行者の前に至りたまふを見る。行者みづ

から聞けば空中に聲ありて讚じて言はく、「善男子なむちがごとき善人

(九二)三世諸佛の教へに隨順するがゆるに、我れ來りて汝を迎ふ」と。行

者みづから見れば蓮華の上に坐す。蓮華すなはち合す、西方極樂世界

に生じて寶池の中に在り、七日を経て蓮華すなはち敷く。華すでに敷

【八二】苦空等を説き出家を讚する皆小乘根機なればなり

【八三】四諦とは苦、集、滅、道。

【八四】阿羅漢(アルハン)。應供と譯す。無學究竟の位。

【八五】三明。又三達とも云ふ。宿

住智證明、過去に通ず。死生

智證明、未來に通ず。漏盡智

證明、現在の事に通ず。

【八六】六通とは天眼、天耳、神足、

他心、宿命、漏盡。

【八七】八解脱とは内有色外觀色、

内無色外觀色、不淨相、空處、

識處、無所有處、非非想所、

滅盡。

【八八】第五中品中生。小乘下善の

凡人。

【八九】齋日に在家が一日一夜を期

して出家の八戒を持つ故に八

戒を一日夜戒とも云ふ。

【九〇】沙彌の十戒比丘の具足戒は

きはよりぬれば目を開き合掌して世尊を讚歎し、法を聞きて歡喜して須陀洹をえ、半劫を經をはりて阿羅漢を成ず。是れを中品中生の者と名づく。

【五七】中品下生の者とは、若し善男子善女人ありて父母に孝養し、世

の仁慈を行せむに、此の人のち終はらむと欲するとき、善知識の

其れが爲めに廣く阿彌陀佛の國土の樂事を説き、また法藏比丘の

【五八】四十八願を説くに遇へり、此の事を聞きをはりてすなはち命終す。

譬ふれば壯士の臂を屈伸する頃のごときに、即ち西方極樂世界に生ず。

生じて七日を経て、觀世音および大勢至に遇ひ、法を聞きて歡喜す。

一小劫を経て阿羅漢を成ず。是れを中品下生の者と名づく。是れを

【五九】中輩生想と名づけ、第十五の觀と名づく。』

佛阿難および韋提希に告げたまはく、『下品上生の者とは、或は

衆生ありて衆の惡業を作る、方等經典を誹謗せずといへども、

此のごとき【六〇】愚人おほく衆惡を造りて慚愧あることなし。命をばら

生涯受持すべきもの、今臨終の一日一夜受持を云ふ。

【六一】沙彌 (Śāmanera) 息慈、勤策と譯す。小沙門、十戒を持つ。

十戒は八戒齋と提寶戒【六二】具足戒。大僧大尼所受の戒、二百五十等なり。

【六三】威儀。大乘に八萬、小乘に三千の威儀細則あり。

【六四】諸佛の教。三世諸佛通じて斷惡修善の持戒を勸む。謂ゆる通誠偈、諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教と。

【六五】須陀洹 (Srotāpanna) 預流と譯す。小乘初果。

【六六】第六中品下生の世善上福の凡夫。

【六七】善知識。指導者、以下四品等しく臨終回心なれば善知識は教へて淨土の旨趣を明すを要す。

むと欲するとき、善知識のために 大乘十二部經の 首題の名字を

讚するに遇へり。是のごとき諸經の名を聞くを以てのゆゑに、千劫の

極重の惡業を除却す。智者また教へて合掌又手して 南無阿彌陀佛

と稱せしむ。佛名を稱するがゆゑに五十億劫生死の罪を除く。爾の時

かの佛すなはち化佛化觀世音化大勢至を遣はして、行者の前に至らし

めて讚じて言たまはく、善男子なむち佛名を稱するがゆゑに諸罪消滅

せり、我れ來りて汝を迎ふ」と。是の語を作しをはりたまふに、行者す

なはち化佛の光明の其の室に徧滿せるを見る。見をはりて歡喜してす

なはち命終す。寶蓮華に乗じて化佛の後に隨ひて寶池の中に生ず。七

七日を経て蓮華すなはち敷く。華の敷く時にあたりて、大悲觀世音菩

薩および大勢至、大光明を放ちて其の人の前に住して、爲に 甚深

の十二部經を説く。聞きをはりて信解して 無上道心を發こし、十

小劫を経て百法明門を具して、初地に入ることを得。これを下品上生

の者と名づく。佛名法名を聞き、および僧名を聞くことをえ、三

【九八】大經上本の值過發心參照。

【九九】大經上本の順文參照。

【一〇〇】大經下本、三輩の中參照。

【一〇一】第七下品上生。造十惡輕

罪の凡夫。

【一〇二】謗法の重罪なきも十惡等

を作すの意。

【一〇三】愚人。善惡因果の理を辨

ぜざるを愚とす。

【一〇四】小乘に十二部ありや否や

異説あるも、大乘には十二部

を具すとす。大乘十二部經は

即ち大乘經也。

【一〇五】首題。南無大方廣佛華嚴經

南無妙法蓮華經等を云ふ。

【一〇六】稱名念佛の明文。下下品

及び付屬文參照。南無阿彌陀

佛は歸命無量覺なり無量壽

Amītiyus (Amītiyus)

なれば Namah amītiyus

ブツダハなるも俗化の Ami-

實の名を聞きて即ち往生を得。』

佛阿難および韋提希に告げたまはく、『下品中生の者とは、或は

衆生ありて五戒八戒および具足戒を毀犯す。かくのごとき愚人僧

祇物を偷み、現前僧物を盗み、不淨說法して慚愧あることな

く、諸の悪業を以て自ら莊嚴す。かくのごとき罪人悪業を以てのゆる

にまさに地獄に墮すべし。命をはらむと欲するとき地獄の衆火一

時に俱に至る、善知識の大慈悲を以て爲に阿彌陀佛の十力威徳を

説き、廣く彼の佛の光明神力を説き、また戒定慧解脱解脱

知見を讚するに遇へり。此の人ききはりて八十億劫の生死の罪を除

く。地獄の猛火化して清涼の風と爲りて諸の天華を吹く。華の上

にみな化佛菩薩ありて此の人を迎接したまふ。一念の頃のごときに即

ち往生を得。七寶池の中に蓮華の内にして六劫を経て蓮華すなは

ち敷く。華の敷く時にあたりて觀世音大勢至梵音聲を以て彼の人

を安慰して、爲に大乘甚深の經典を説く。此の法を聞きをはりて、時

【一〇】無量壽として Namamita-buddha なるか。

【一七】諸法實相の教理。

【一八】下三品三心具足の念佛によりて往生し生後菩提心を發す。

【一九】天台所覽本には以下往生を得までの文なし。善導はこの文を重舉行者之益、非但念佛獨得往生、法僧通念亦得去也と釋せり。三寶通念の機も往生することを顯はす。

【二〇】第八下品中生。破戒次罪の凡夫人。

【二一】僧祇 (Sangha)。僧衆に屬する物四あり。一常住常住物、寺院田園穀財等常住大衆のみ受用すべきもの。二十方常住物粥飯等作相して十方往來僧共に受用すべきもの。今僧祇物と云ふはこの二なり。

三現前現前物、施主が現在僧

に應じて即ち無上道心を發す。是れを下品中生の者と名づく。』

(二二) 佛阿難および韋提希に告げたまはく、『下品下生の者とは、或は

衆生ありて不善の業たる (二三) 五逆十惡を作りて諸の不善を具す。かく

の如き愚人惡業を以てのゆゑに、まさに惡道に墮して多劫を經歷して

苦を受くること窮まりなかるべし。是の如き愚人命終の時に臨みて、

善知識の種種に安慰して、爲に妙法を説きて教へて念佛せしむるに遇

へり。此の人苦に逼められて (二四) 念佛するに違あらず、善友つげて言

はく、『汝もし (二五) 念することあたはずば、まさに無量壽佛と稱すべし』

と。是のごとく (二六) 至心に聲をして絶えざらしめ、十念を具足して南

無阿彌陀佛と稱す。佛名を稱するがゆゑに、念念の中に於いて八十億

劫の生死の罪を除く。命終のとき金蓮華の猶し日輪のごとくなるが、

其の人の前に住せるを見る。一念の頃のごときに即ち極樂世界に往生

することを得。蓮華の中において十二大劫を滿じて、蓮華さきさきに開く。

觀世音大勢至大悲の音聲を以て其れが爲に廣く諸法實相 (二七) 除滅罪の

に供養するもの。四十方現前
物施主作相して十方衆僧に供
養するもの。

【二二】前項の三と四となり。

【二三】不淨說法。名利の爲にする
說法。佛藏經五過を擧ぐ。

【二四】獲揚鑪炭鑿鋼鐵丸等ある
を以て衆火と云ふ。

【二五】十方とは知是處非處方、
業智力、定力、根力、欲力、

性力、至處道力、宿命力、天
眼力、漏盡力。

【二六】大經上末威神光明最尊の
説參照。

【二七】五分法身。前三因德後二
果德即ち戒定慧三學究竟して

涅槃菩提を成就するなり。又
是れ大經下本の五眼、下末の

五智に相應する佛德なり。

【二八】淨華を吹散す。
【二九】この二句は上に屬して

法を説く、聞きをばりて歡喜して、時に應じて即ち菩提の心を發こす。是れを下品下生の者と名づく。是れを『三七』下輩生想と名づけ、第十六の觀と名づく。』

【二三】是の語を説たまふとき、韋提希五百の侍女とともに 佛の所説を聞き、時に應じて即ち 極樂世界の廣長の相を見、

【二四】佛身および二菩薩を見んことを得て、心に歡喜を生じて未曾有なりと歎じて、廓然として大悟して無生忍を得。五百の侍女阿耨多羅三藐三菩提心を發こして、彼の國に生ぜむと願す。世尊【二五】「ことごとく皆まさに往生すべし、彼の國に生じをばりなば」
【二六】諸佛現前三昧を得む」と記したまふ。無

木

訓せば、即ち七寶池の中の蓮花の内に往生するを得となす。

【二五】五清淨なるを梵音と云ふ。正直、和雅、清徹、深滿、遠聞。

【二六】第九下品下生。具造五逆重罪の凡夫。

【二七】五逆は殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、惡心出佛身血にして願文に往生を除くも、阿闍世に禁父禁母等あり、提婆に逆罪あり、今經の由致となる。故に當品に逆者往生を明す。

【二八】領解して佛名を念するの還なし。

【二九】念より稱を行するは尙難く、稱より念を起すの易きを示す。

【三〇】至心とは助け給へを云ふ

なり、三心なり。

【三一】この品滅罪三。一往生障十念即ち滅す。二見佛障、滿十二大劫滅。三發心障、今開法除滅す。

【三二】大經下本三輩の下參照。

【三八】大文第三得益分。

【三九】一經始終を聞く。

【四〇】序分欣淨緣の光臺現國。

【四一】第七觀の初に見たる住立空中の三尊。

【四二】往生の授記。

【四三】往生以後諸佛の目前に現在するを見ること。

【四四】大文第四流通分。

【四五】一に經名を問ふ。

【四六】二に經宗を問ふ。

【四七】初六觀依報。

【四八】第九觀七八ここに攝す。

【四九】第十觀。

【五〇】第十一觀。

三五

量の諸天は無上道心を發こしぬ。

〔一四四〕爾のとき阿難すなほち座より起ちて、前みて佛に白して言さく、

〔一四五〕世尊まさにかに此の經を名づくべき。此の法の要をばよき

にいかを受持すべきか。佛阿難に告げたまはく、『此の經を觀 極

樂國土 無量壽佛 觀世音菩薩 大勢至菩薩と名づけ、また

〔一四六〕淨除業障生諸佛前と名づくべし。汝まさにかに受持して忘失せしむ

ることなかるべし。此の三昧を行せむ者は、現身に無量壽佛およ

び二大士を見ることを得む。若し善男子善女人ただ佛の名二菩薩の名

を聞くだに、無量劫の生死の罪を除く、いかにいはむや 〔一四七〕憶念せむ

をや。〔一四八〕若し念佛せむ者はまさにかに知るべし、此の人は是れ人中の

〔一四九〕分陀利華なり、觀世音菩薩大勢至菩薩その勝友と爲る、當に 〔一五〇〕道

場に坐すべきをもて 諸佛の家に生ずべし。』

〔一五一〕佛阿難に告げたまはく、『汝よく是の語を持て。是の語を持つと

は即ち是れ無量壽佛の名を持つなり。』佛この語を説きたまふとき、尊

〔一四一〕每觀滅罪生善を説く故に。

〔一四二〕兩三昧を宗とするも先づ定觀を勤む。定觀多きも三尊

を主とす。

〔一四三〕觀察憶持忘れざる也。

〔一四四〕散善流通。散善中稱名最たるが故に特に念佛を牒す。

〔一四五〕分陀利 (Pundarikā)。白蓮と譯す。花中之最。

〔一四六〕道場。佛衆の異名。

〔一四七〕諸佛の家。極樂のこと。諸佛同等より名く。

〔一四八〕付屬念佛。廣く定散を説くも、獨り念佛持名を付屬するは、彌陀の本願釋迦の本意なればなり。

〔一四九〕玉宮會終る。

〔一五〇〕大文第五者閑會。初に序分。

〔一五一〕正宗分。

〔一五二〕流通分。化前序聲聞菩薩

者目健連阿難おほいくわんおよび韋提希等、
大に歡喜す。
佛の所説ほつしよせつを聞きたてまつりてみな

(二五〇) 爾そのとき世尊せそんみあし虚空こくうを歩あゆみて耆闍崛山しよつろくせんに還りたまふ。(二五一)

爾そのとき阿難あなんひろく大衆だいしゆの爲ために上かみのごとき事ことを説とく。
無量むりやうの諸天しよてんおよび龍りゆう、夜叉佛やしやほつの所説しよせつを聞きたてまつりて、みな大に歡喜おほいくわんして佛ほつを禮らいしたてまつりて退しりぞきど。

ありて雜類なく、今雜類ありて聲聞菩薩ヤクシヤなし、互に顯あはすと譯す。八部の一。

國譯佛說觀無量壽經 終

國譯佛說阿彌陀經

【一】是のごとくを我れ聞やう。【二】一時佛

舍衛國の 祇樹給孤獨園に在しまして、

大比丘衆 千二百五十人と俱なりき。

皆これ大阿羅漢なり、衆に 知識せられたり。

長老 舍利弗 摩訶目犍

連 摩訶迦葉 摩訶迦旃延 摩訶俱

絺羅 離婆多 周利槃陀伽 難陀

阿難陀 羅睺羅 憍梵波提 寶頭盧

頗羅墮 迦留陀夷 摩訶劫賓那 薄

拘羅 阿菟樓駄かくのごとき等の諸の大

弟子なり。ならびに諸の 菩薩 摩訶

【一】この經極樂依正、願生念佛、諸佛證誠を説く。念佛を宗とし、往生を體とす。依正の主、所歸の佛、所證の體を擧げて經名とす。本文には稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經と名く。

【二】大文第一序分。證信序。

【三】以下發起序。

【四】舍衛(Savasti)。聞物寶。又は豐徳と譯す。これ國名に非ず

中央北憍薩羅國の都城の名。

【五】祇樹又は逝多林(Jetavana)。勝林と譯す。

【六】比丘(Bhikkhu)。乞士と譯す。衆は僧伽、和合團なり。

【七】千二百五十人を擧ぐるは三迦葉の弟子一千人舍利弗日蓮の弟子二百五十人を併せ度するに基き大衆の代表とす。

【八】阿羅漢(Arahant)應供と譯す。

【九】徳高く望み重く名天下に満

【一〇】長老。舍利弗以下十六人年長し徳高き上座なれば也。

【一一】Sariputa ヲンノイワードガリヤトヤナ

【一二】Mahamaudgalyayana マハマカウダガリヤナ

【一三】Matakasypa マハカキヤヤナ

【一四】Mahakatyayana マハカチヤヤナ

【一五】Mahakausilya マハカウシリヤ

【一六】Kevata ケヴァタ

【一七】Suddhi-pantaka チユエタパ

薩あり、
【二五】文殊師利法王子
【二六】阿逸多菩薩

【二七】乾陀訶提菩薩、常精進菩薩かくのごとき等の諸の大菩薩および
【二八】釋提桓因

等の無量の諸天大衆と俱なりとぞ。
【二九】爾の時佛長老舍利弗に告げたまはく、
【三〇】是れより 西方 十萬億の佛土を過ぎて世界あり、名づけて 極樂といふ。其の土に佛まします、
【三一】阿彌陀と號づけられたてまつる。いま現に在しまして説法したまへり。舍利弗かの土を何がゆるぞ名づけて極樂とする。其の國の衆生もろもろの 苦あることなく、ただ諸の樂のみを受く、ゆるに極樂と名づく。

【三五】また舍利弗極樂國土には七重の欄楯

説經として大悲と深智の流出とす。

【二四】南閻浮提にありて西を定む。一方を指すは亂想を絶つなり。西は後方未來を表す。

【二五】一大千世界を一佛土とし十萬億に及ぶ、大經上末に現在西方去此十萬億刹と云ふに同じ。

【二六】極樂は須摩提(Sukhāvatī)。大經には安樂と云ひ、又安養、清泰、妙意(Sumanā)と云ふ。

【二七】梵本には(Amitayū)とせり無量壽也。

【二八】身にも心にも憂苦なし。
【二九】以下四段依報莊嚴を擧げて極樂を明かにす。一に寶樹、大經上末寶樹周滿、觀經第四寶樹觀詳説。

【三〇】二に寶池樓閣蓮華。寶池は大經上末寶池徳水、觀經第五

【一】Zanda
【二】Ananda
【三】Ananda
【四】Kāṣṭhā
【五】Gāvaṃpātī
【六】Pīṅgola-Bhāradvāja
【七】Kāśyapa
【八】Kāśyapa
【九】Vākula
【一〇】Anurūpa
【一一】Polaśastrāya
【一二】Mahaśatva
【一三】Maṅgala-kumārābhūta
【一四】Aśiṣa bodhisatva
【一五】Gandhasthī bodhisatva

【一六】釋提桓因(Sakra-devānāmpitṛ)。帝釋天王と譯す。

【一七】大文第二正宗分。今の如く請問なくして説く經を無問自

七重の羅網ある七重の行樹あり。皆これ四寶をもて周匝し圍繞せり。是のゆるゑに彼の國を名づけて極樂といふ。

(四〇) また舍利弗極樂國土には 七寶の池

あり。八功德水その中に充滿せり。池の

底には純ら金沙を以て地に布けり。四邊に階道あり、金銀瑠璃玻瓈をもて合成せり。

上に 樓閣あり、また金銀瑠璃玻瓈磈磈

赤珠瑪瑙を以て而もこれを嚴飾せり。池の

中に 蓮華あり、大さ車輪のごとし、青

色には青光あり、黄色には黄光あり、赤色

には赤光あり、白色には白光あり、微妙香

潔なり。舍利弗極樂國土には是のごとき功

徳莊嚴を成就せり。

寶池觀參照。

【四〇】七寶は次に云ふ金銀等なり。大經は赤珠を珊瑚とす。

【四一】八功德とは澄淨、清冷、甘美、輕軟、潤澤、安和、除飢渴諸患、長養諸根。

【四二】觀經第六寶樓閣觀。

【四三】大經上末蓮華放光。

【四四】三に天樂、金地、雨華、供佛、經行。

【四五】觀經第六寶樓觀に細説す。鼓せざるに自ら鳴る。

【四六】大經上末七寶爲地。觀經第二木想觀瑠璃地。

【四七】大經上末香華敷地參照。

【四八】曼陀羅(Mandala)適意と譯す。而雨曼陀羅華は異本雨天に作る可なり。

【四九】一足ある華を盛る器。

【五〇】第廿三供養諸佛願。大經下本讚偈徳の如來等。同、供佛

如意の文を見よ。

【五一】第九神境通願。大經下本神變自在。

【五二】大經上末飲食自然盈滿。

【五三】經行。行道、散步也。遊行と思惟と少病と消食と得定との五益あり。

【五四】四に化鳥演法風樹作樂。

【五五】觀經第八像想觀參照。

【五六】舍利のヤリカ。春鷲、黃鸞、鶯鶯等と譯す。

【五七】迦陵頻伽(Kalavinka)。妙香鳥と譯す。

【五八】共命(Jivajivika) 又は生

生、命命鳥と云ふ、兩首一身。

【五九】呂律の調子整へるなり。

【六〇】五根五力とは信、進、念、定、慧の根と力。七菩提分とは念、擇法、精進、喜、輕安、定、捨の覺支。

【六一】八聖道分とは正見、正思惟、

(四) また舍利弗かの佛の國土には常に天樂を作す。(五) 黄金を地

とせり。(六) 晝夜六時に曼陀羅華を雨らす。其の國の衆生常に清

日を以ておのおの衣被を以て諸の妙華を盛りて、他方十萬億の佛

を供養す。即ち食時を以て還りて本國に到りて飯食し

經行す。舍利弗極樂國土には是のごとき功德莊嚴を成就せり。

(七) また次ぎに舍利弗かの國には常に種種の奇妙なる雜色の鳥あ

り、白鶴孔雀鸚鵡舍利迦陵頻伽共命の鳥なり。是の諸

のとり晝夜六時に和雅の音を出たす、其のこゑ五根五力七菩提

分八聖道分かくのごとき等の法を演暢す。其の土の衆生この音を

聞きをはりて、皆ことごとく佛を念じ僧を念ず。舍利弗

なむち此の鳥は實に是れ罪報の所生なりと謂ふことなかれ。ゆゑはい

かに。彼の佛の國土には三惡趣なし。舍利弗その佛の國土にはな

ほ三惡道の名もなし、いかにいはむや實あらむや。是のもろもろの鳥は皆これ阿彌陀佛の法音をして宣流せしめむと欲して變化して作

正語、正業、正命、正精進、正念、正定

【六三】三歸を深くす。入道の初中後共に念佛念法念僧の三歸に外ならざれば也。

【六四】第一無三惡趣願。同上末願成。

【六五】大經上本第十六灌諸不善願。上末願成。

【六六】上末寶樹寶網參照。

【六七】以下正報に著て莊嚴を明す。阿彌陀の釋。

【六八】彌陀を無量光(Amitayus)に就て明す、第十二光明無量願。大經上末願成。觀經第九願身觀。

【六九】無量壽(Amitayus)に就て明す、第十三壽命無量願。上末願成。壽命長久。

【七〇】第十五眷屬長壽願。上末願成。

成文。

したまへるところなり。舍利弗かの佛の國土には、(六六)微風ふきて、諸の寶行樹および寶羅網を動かして、微妙の音を出せり。譬ふれば百千種の樂を同時に俱に作すがごとし。是の音を聞く者はみな自然に念佛念法念僧の心を生ず。舍利弗その佛の國土には是のごとき功德莊嚴を成就せり。

(六七)舍利弗なむちが意においていかに、彼の佛を何がゆるぞ阿彌陀と號づけたてまつれる。舍利弗 かの佛の光明無量にして十方の國を照らして障礙するところなし、是のゆるに號づけて阿彌陀とせり。また舍利弗 (六九)かの佛の壽命および其の (七〇)人民無量無邊 (七一)阿僧祇劫なり、故に阿彌陀と名づく。舍利弗阿彌陀佛成佛よりこのかた今において十劫なり。また舍利弗かの佛に (七二)無量無邊の聲聞弟子あり、みな (七三)阿羅漢なり、是れ算數のよく知るところにあらず。諸の菩薩衆も亦また是のごとし。舍利弗かの佛の國土には是のごとき (七四)功德莊嚴を成就せり。

【七〇】阿僧祇 (Asankhyeya) 無數と譯す。

【七一】劫、具々に劫波 (Kalpa) 長時。

【七二】大經上末、凡歷十劫。

【七三】第十四聲聞無數類、上末顯成。

【七四】阿羅漢 (Arhan) 無生、應供と譯す。

【七五】正報も依報相應の故に極樂功德成就の中とす。

【七七】菩薩所得を明す。

【七八】阿鞞跋致 (Avivartaniya) 不退轉と譯す。始は處不退、進みては位と行と念との不退。

【七九】最後の等覺の一生、佛位を補ふ。第廿二必至補處願、下本願成、補處究竟。

【八〇】上來極樂依正功德を稱讚す。

(七) また舍利弗極樂國土には衆生する者は皆これ阿鞞跋致なり。其の中に多く一(七)生補處あり。其の數はなほだ多し、是れ算數

のよく知るところにあらず。ただ無量無邊阿僧祇劫をもて説くべし。

(八) 次(八)に念佛の行を明すに際し難善を備ふ。

(九) 有戒無戒の善人を云ふも善導は廣く一切造惡の凡夫と釋

せり。觀經下三品の意。又大經第十八願并に下本願成及び

三輩の一向專念無量壽佛の意を以て見るべし。

(十) 禮贊に云ふ一心稱佛不亂と。

(十一) 一日より増して七日乃至一生これ多善根を明す。一日七日は尋常別行にして臨終に通ず。

(十二) 起行の一心、念佛專稱無間、安心の一心即ち横具三心。

(十三) 裏脇石刻經一心不亂の下に

舍利弗衆生(九)者(十)はまよひに發願して彼の國に生ぜむと願すべし。ゆるはいかに。是のごとき諸の上善人と俱に一處に會することを得ればなり。舍利弗少善根福徳の因縁を以ては彼の國に生ずることを得べからず。

舍利弗もし善男子善女人ありて、阿彌陀佛を説くを聞きて名號を執持すること、若しは一日、若しは二日、若しは三日、若しは四日、若しは五日、若しは六日、若しは七日、一心みだれずば、

其の人いのち終はる時に臨みて、阿彌陀佛もろもろの聖衆とともに現に其の前に在します。是の人をはる時、

阿彌陀佛の極樂國土に往生することを得む。舍利弗われ是の利

を見るがゆゑに此の言を説く。若し衆生ありて是の説を聞かむ者はまさに發願して彼の國土に生ずべし。

(五) 舍利弗われいま阿彌陀佛の不可思議功德を讚歎するがごとく、東方にまた阿閼鞞佛、須彌相佛、大須彌佛、須彌光

佛、妙音佛かくのごとき等の恆河沙數の諸佛まします。おのおの

其の國において廣長の舌相を出だして、徧く三千大千世界を覆

ひて誠實の言を説きたまふ。汝ら衆生まさに是の稱讚不可思議功

徳一切諸佛所護念經を信ずべし。

(10) 舍利弗南方世界に日月燈佛、名聞光佛、大焰肩佛、須彌燈佛、

無量精進佛かくのごとき等の恆河沙數の諸佛まします。おのおの其の

國において廣長の舌相を出だして、徧く三千大千世界を覆ひて誠實の

言を説きたまふ。汝ら衆生まさに是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護

念經を信ずべし。

(11) 舍利弗西方世界に無量壽佛、無量相佛、無量幢佛、大光佛、大

國譯佛說阿彌陀經

專持名號以稱名故諸罪淨滅即是多善根福德因緣の廿一字あり。

【八】第十九來迎引接願、大經下本三輩觀經九品差別參照。

【九】慈悲加祐の故に。

【一〇】釋尊の選擇念佛。

【一一】六方段、第一東方。唐譯には十方を列ぬ、他佛證誠を引

き衆生の疑を除く、智圓は以下流通とす、非也。

【一二】總じては依正莊嚴、別しては名號。

【一三】阿閼鞞、アクンヨウジヤ

譯す、不動と

【一四】須彌相、スミールドウシヤ

【一五】大須彌、マハスミール

【一六】須彌光、スミールカウ

【一七】恆河又は恆伽河、ガンガナ

【一八】無量劫來不虛妄の徳に依て

明佛、寶相佛、淨光佛かくのごとき等の恒河沙數の諸佛まします。おのおの其の國において廣長の舌相を出だして、徧く三千大千世界を覆ひて誠實の言を説きたまふ。汝ら衆生まさに是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

(一〇三) 舍利弗北方世界に焰肩佛、最勝音佛、難沮佛、日生佛、網明佛かくのごとき等の恒河沙數の諸佛まします。おのおの其の國において廣長の舌相を出だして、徧く三千大千世界を覆ひて誠實の言を説きたまふ。汝ら衆生まさに是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

(一〇四) 舍利弗下方世界に師子佛、名聞佛、名光佛、(一〇五) 達摩佛、法

幢佛、持法佛かくのごとき等の恒河沙數の諸佛まします。おのおの其の國において廣長の舌相を出だして、徧く三千大千世界を覆ひて誠實の言を説きたまふ。汝ら衆生まさに是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

この相を得。誠實を表す。言
虛安ならば舌還入せずして壞
爛すべしとす。

【一〇〇】この經名、所詮は念佛往生。

【一〇一】第二南方。

【一〇二】第三西方。

【一〇三】第四北方。

【一〇四】第五下方。

【一〇五】達摩(Dharma)。法と譯す。

【一〇六】第六上方。

【一〇七】梵音(Brahmanic Logic)

【一〇八】娑羅樹王(Salvatranajit)

【一〇九】經名に約して三世の利益を顯はす。慈恩義記は以下流

通とす。

【一一〇】異本に聞此經受持者及聞

諸佛名者とす。これによらば

諸佛名、本文は彌陀名とする

妥當也。

【一一一】異本共之に作る。

(101)舍利弗上方世界に (101)梵音佛、宿王佛、香上佛、香光佛、大焰

肩佛、雜色寶華嚴身佛、 (102)娑羅樹王佛、寶華德佛、見一切義佛、如

須彌山佛かくのごとき等の恒河沙數の諸佛まします。おのおの其の國

において廣長の舌相を出だして、徧く三千大千世界を覆ひて誠實の言

を説きたまふ。汝ら衆生まさに是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念

經を信すべし。

(103)舍利弗なむちが意においていかに、何が故を名づけて一切諸佛

所護念經とする。舍利弗もし善男子善女人ありて、 (104)是の諸佛所説

の名および經の名を聞かむ者は、是の諸の善男子善女人みな一切諸佛

に (105)共に護念せられて、みな (106)阿耨多羅三藐三菩提を (107)退轉

せざることを得む。是のゆゑに舍利弗なむちら皆まさに我が語および

諸佛の所説を信受すべし。舍利弗もし人ありて (108)已に發願し、いま

發願し、常に發願して、阿彌陀佛國に生せむと欲せむ者は、是の諸人

等みな阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを得て、彼の國土におい

【一〇一】阿耨多羅三藐三菩提 (Anuttarasamyaksambodhi)。無上正徧知と譯す。

【一〇二】天經下末、聞此經者於無上道終不退轉の意。

【一〇三】過去發願せるものは已に生じ、今世發願するものは順次に生じ、未來世に發願するものはその順次に往生すべきを發願往生の三世因果とす。

【一〇四】實に發願せば三心を具し持名必生す。

【一〇五】諸佛、釋尊を讚す。

【一〇六】六方段を云ふ。彼は諸佛彌陀を讚するものなるが、果徳同證の故に此方釋迦より云へば諸佛所讚ともなる。

【一〇七】釋迦牟尼 (Sikhananda)。能仁寂默と譯す。

【一〇八】娑婆 (Saha-loka)。堪忍世界、此土等と譯す。

て若しは已に生じ、若しはいま生じ、若しは當に生ぜむ。是のゆるに
舍利弗もろもろの善男子善女人もし信することあらむ者はまさに發願
して彼の國土に生ずべし。

〔二五〕舍利弗われいま 諸佛の不可思議功德を稱讚するごとく、

彼の諸佛等もまた我が不可思議功德を稱説して、是の言を作したまは

く、〔二七〕釋迦牟尼佛よく甚難希有の事を爲して、よく 娑婆國土の

〔二九〕五濁惡世の 劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、壽命

濁の中において阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の衆生の爲に是の一切

世間 難信の法を説くと。舍利弗まさに知るべし、我れ五濁惡

世において此の難事を行して阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切世間の

爲に此の難信の法を説く、是れを甚難とす。佛この經を説き終りたまふに、舍利弗および諸

の比丘一切世間天人 阿修羅等佛の所説を聞き奉りて、歡喜し信受して禮を作して去りき。

國譯佛說阿彌陀經終

【一九】五濁即ち惡世。
【二〇】劫滅の時諸惡增す、故に劫濁と云。

【二一】身見邪見等競ひ起る故。
【二二】貪瞋癡慢等思惑盛なる故。
【二三】人身の量力也等減する故。
【二四】命弱く壽促む故。

【二五】他力念佛の法門、大經下末若聞斯經信樂受持難中之難無過此難等參照。

【二六】大經上本、序分八相示現等。

【二七】大文第三流通分。

【二八】阿修羅(アスラ) 非天と譯す。八部の一。

無量義經德行品第一

(麗鳴) (宋鳳) (元鳳) (明草)

蕭齊天竺三藏曇摩伽陀耶舍譯

經題經下元有
一卷二字德行
品第一五字三
本俱在如是在前
行○譯號三藏
三本俱作沙門
譯上元有第二
二字○在三本
俱作○修同
作脩○尼下同
有及字○轉輪
同作輪之

光下三本俱無
輪字○跋同作
聽

漢元明俱作寔
○志同作之○
能善三本俱作
善能○礙同作
闕○請同作諸
○滂同作滴○
熱惱同作惱熱

大上同有大良
導導師五字

如是我聞。一時佛在王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆萬二千人俱。菩薩摩訶薩八萬人。天龍夜叉。閻闍阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。諸比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。俱。大轉輪王。小轉輪王。金輪銀輪。諸轉輪王。國王。王子。國臣。國民。國士。國女。國大長者。各與眷屬百千萬數。而自圍遶。來詣佛所。頭而禮足。遶百千匝。燒香散華。種種供養。供養佛已。退一而坐。其菩薩名曰文殊師利法王子。大威德藏法王子。無憂藏法王子。大辯藏法王子。彌勒菩薩。導首菩薩。藥王菩薩。藥上菩薩。花幢菩薩。花光幢菩薩。陀羅尼自在王菩薩。觀世音菩薩。大勢至菩薩。常精進菩薩。寶印手菩薩。寶積菩薩。寶杖菩薩。越三界菩薩。毗摩跋羅菩薩。香象菩薩。大香象菩薩。師子吼王菩薩。師子遊戲世菩薩。師子奮迅菩薩。師子精進菩薩。勇銳力菩薩。師子威猛伏菩薩。莊嚴菩薩。大莊嚴菩薩。如是等菩薩摩訶薩。八萬人俱。是諸菩薩。莫不皆是法身大士。戒定慧解脫解脫。知見之所成就。其心禪寂。常在三昧。恬安。恬怕。無爲無欲。顛倒亂想。不復得入。靜寂清澄。志玄虛漠。守之不動。億百千劫。無量法門。悉現在前。得大智慧。通達諸法。曉了分別。性相眞實。有無長短。明明顯白。又能善知諸根性欲。以陀羅尼無礙辯才。請佛轉法輪。隨順能轉。微滯先墮。以淹欲塵。開涅槃門。扇解脫風。除世熱惱。致法清涼。次降甚深十二因緣。用灑無明老病死等。猛盛熾然。苦聚日光。爾乃洪注。無上大乘。潤漬衆生。諸有善根。布善種子。遍功德田。普令一切發菩提萌。智慧日月。方便時節。扶疎增長。大乘事業。令衆疾成。阿耨多羅三藐三菩提。常住快樂微妙眞實。無量大悲救苦衆生。是諸衆生眞善知識。是諸衆生大良福田。是諸衆生不請之師。是諸衆生安隱樂處。救護護處。大依止處。處處爲衆作大導師。能爲生盲而作眼目。聾瞶啞

渡同作度

是同作斯○德

上同無功字○

憂同作憂下同

○云同作雲○

如是等同作等

座次同○燒散

二字宋作散燒

香元作燒香散

○于三本俱作

上○轉同作軒

下同○轉同作

胡○怕同作泊

妄宋作忘

短長宋元俱作

長短

照三本俱作鏡

○曉元明俱作

曉○葉同作果

○卍三本俱作

萬○餘元作臚

明作修○臚臚

者作耳鼻舌諸根毀缺能令具足顛狂荒亂作大正念船師大船師運載羣生渡生死河置涅槃岸醫王大醫王分別病相曉了藥性隨病授藥令衆樂服調御大調御無諸放逸行猶如象馬師能調無不調師子勇猛威伏衆獸難可沮壞遊戲菩薩諸波羅蜜於如來地堅固不動安住願力廣淨佛國不久得成阿耨多羅三藐三菩提是諸菩薩摩訶薩皆有如是不思議功德其比丘名曰大智舍利弗神通目捷速慧命須菩提摩訶迦旃延彌多羅尼子富樓那阿若憍陳如天眼阿那律持律憂波離侍者阿難佛子羅云優波難陀離婆多劫賓那薄拘羅阿周陀莎伽陀頭陀大迦葉憂樓頻螺迦葉伽耶迦葉那提迦葉如是等比丘萬二千人皆阿羅漢盡諸結漏無復縛著真正解脫爾時大莊嚴菩薩摩訶薩遍觀衆坐各定意已與衆中八萬菩薩摩訶薩俱從坐而起來詣佛所頭面禮足遶百千匝燒散天華天衣天瓔珞天無價寶從于空中旋轉來下四面雲集而獻於佛天厨天鉢器天百味充滿盈溢見色聞香自然飽足天幢天幡天幟蓋天妙樂具處處安置作天伎樂娛樂於佛即前踰跪合掌一心俱共同聲說偈讚言

大哉大悟大聖主 無垢無染無所著 天人象馬調御師 道風德香熏一切 智恬情怕慮凝靜
 意滅識亡心亦寂 永斷夢妄思想念 無復諸大陰入界 其身非有亦非無 非因非緣非自他
 非方非圓非短長 非出非沒非生滅 非造非起非爲作 非坐非臥非行住 非動非轉非閑靜
 非進非退非安危 非是非非非得失 非彼非此非去來 非青非黃非赤白 非紅非紫種種色
 戒定慧解知見生 三明六通道品發 慈悲十力無畏起 衆生善業因緣出 示爲丈六紫金暉
 方整照耀甚明徹 毫相月旋頂日光 旋髮紺青頂肉髻 淨眼明照上下胸 眉睫紺舒方口頰
 脣舌赤好若丹菓 白齒四十猶珂雪 額廣鼻脩面門開 曾表卍字師子臆 手足柔軟具千幅
 腋掌合縵内外握 臂脩肘長指直纖 皮膚細軟毛右旋 踝膝露現陰馬藏 細筋鏤骨鹿膊腸
 表裏映徹淨無垢 濁水莫染不受塵 如是等相三十二 八十種好似可見 而實無相非相色

宋作躡服元明
俱作躡騰○微
宋作激○相宋
元俱作根○度
三本俱作投○
幢同作種○繻
元明俱作響

池三本俱作渠

倦宋作倦

等三本俱作復
○俱元作來

品目明無經名
次同

一切有相眼對絕 無相之相有相身 衆生身相亦不然 能令衆生歡喜禮 虔心表敬誠懇
因是自高我慢除 成就如是妙色軀 今我等八萬之衆 俱皆稽首咸歸命 善滅思想心意識
象馬調御無著聖 稽首歸依法色身 戒定慧解知見聚 稽首歸依妙幢相 稽首歸依難思議
梵音雷震嚮八種 微妙清淨甚深遠 四諦六度十二緣 隨順衆生心業轉 若有聞莫不意開
無量生死衆結斷 有聞或得須陀洹 斯陀阿那阿羅漢 無漏無爲緣覺處 無生無滅菩薩地
或得無量陀羅尼 無礙樂說大辯才 演說甚深微妙偈 遊戲澡浴法清池 或躍飛騰現神足
出沒水火身自由 如來法輪相如是 清淨無邊難思議 我等咸復共稽首 歸依法輪轉以時
稽首歸依梵音聲 稽首歸依緣誦度 世尊往昔無量劫 勤苦修習衆德行 爲我人天龍神王
普及一切諸衆生 能捨一切諸難捨 財寶妻子及國城 於法內外無所慳 頭目髓腦悉施人
奉持諸佛清淨禁 乃至失命不毀傷 若人刀杖來加害 惡口罵辱終不瞋 歷劫挫身不倦惰
晝夜攝心常在禪 遍學一切衆道法 智慧深入衆生根 是故今得自在力 於法自在爲法王
我等咸共俱稽首 歸依能勲諸難勲

無量義經說法品第二

爾時大莊嚴菩薩摩訶薩與八萬菩薩摩訶薩。說是偈讚佛已。俱白佛言。世尊。我等八萬菩薩之衆。今者欲於如來法中有所諮問。不審世尊。垂愍聽不。佛告大莊嚴菩薩及八萬菩薩言。善哉善哉善男子。善知是時。恣汝所問。如來不久當般涅槃。涅槃之後。普令一切無復餘疑。欲何所問。便可說也。於是大莊嚴菩薩與八萬菩薩。即共同聲白佛言。世尊。菩薩摩訶薩欲得疾成阿耨多羅三藐三菩提。應當修行何等法門。何等法門。能令菩薩摩訶薩疾成阿耨多羅三藐三菩提。佛告大莊嚴菩薩及八萬菩薩言。善男子。有一法門。能令

諸元明俱作受

量下三本俱有故字

薩下明有摩訶薩三字

脫宋作說○惑三本俱作難○切同作相法下元明俱有忍法二字

慧三本俱作哀

菩薩疾得成阿耨多羅三藐三菩提。若有菩薩學是法門者。則能疾得阿耨多羅三藐三菩提。世尊。是法門者。號字何等。其義云何。菩薩云何修行。佛言。善男子。是一法門。名爲無量義。菩薩欲得修學無量義者。應當觀察一切諸法。自本來今性相空寂。無大無小無生無滅。非住非動不進不退。猶如虛空。無有二法。而諸衆生。虛妄橫計。是此是彼。是得是失。起不善念。造衆惡業。輪迴六趣。備諸苦毒。無量億劫。不能自出。菩薩摩訶薩。如是諦觀。生憐愍心。發大慈悲。將欲救拔。又復深入一切諸法。法相如是。生如是法。法相如是。住如是法。法相如是。異如是法。法相如是。滅如是法。法相如是。能生惡法。法相如是。能生善法。住異滅者。亦復如是。菩薩如是。觀察四相始末。悉遍知已。次復諦觀一切諸法。念念不住。新新生滅。復觀即時生住異滅。如是觀已。而入衆生諸根性欲。性欲無量。故說法無量。說法無量。義亦無量。無量義者。從一法生。其一法者。卽無相也。如是無相。無相不相。不相無相。名爲實相。菩薩摩訶薩安住如是眞實相已。所發慈悲。明諦不虛。於衆生所眞能拔苦。苦既拔已。復爲說法。令諸衆生。受於快樂。善男子。菩薩若能如是修一法門。無量義者。必得疾成阿耨多羅三藐三菩提。善男子。如是甚深無上大乘無量義經。文理眞正。尊無過上。三世諸佛。所共守護。無有衆魔。羣道得入。不爲一切邪見。生死之所壞敗。是故善男子。菩薩摩訶薩。若欲疾成無上菩提。應當修學。如是甚深無上大乘無量義經。爾時大莊嚴菩薩。復白佛言。世尊。世尊說法不可思議。衆生根性。亦不可思議。法門解脫。亦不可思議。我等於佛所說諸法。無復疑惑。而諸衆生。生迷惑心。故重諮問。世尊。自從如來得道已來。四十餘年。常爲衆生演說諸法。四相之義。苦義空義。無常無我。無大無小。無生無滅。一切無相。法性法相。本來空寂。不來不去。不出不沒。若有聞者。或得煖法。頂法。世第一法。須陀洹。果斯陀含。果阿那含。果阿羅漢。果辟支佛。道。發菩提心。登第一地。第二地。第三地。至第十地。往日所說諸法之義。與今所說有何等異。而言甚深。無上大乘無量義經。菩薩修行。必得疾成無上菩提。是事云何。唯願世尊。慈愍一切。廣爲衆生而分別之。善令現在及未來世。有聞法者。無餘疑網。於是佛告大莊嚴菩薩。善哉善哉。大善男子。能問如來如

○生下同有等
字○性欲不同
種種說法宋元
俱作種種說法
性欲不同明無
種種說法四字
○曾顯三本俱
作顯真○海下
同無向字○辭
同作詞次同○
奈宋作奈捺

今元作後○差
三本俱作別
得果宋作異

雲演三本俱作
空宣○量下元
明俱有衆生二
字○斯上二阿
上並三本俱無
得字○漢下同
有果字○然同
作生○切同作
相

是甚深無上大乘微妙之義。當知汝能多所利益。安樂人天拔苦衆生。真大慈悲信實不虛。以是因緣必得疾成無上菩提。亦令一切今世來世諸有衆生得成無上菩提。善男子。我先道場菩提樹下端坐六年。得成阿耨多羅三藐三菩提。以佛眼觀一切諸法不可宣說。所以者何。知諸衆生性欲不同。性欲不同種種說法。種種說法以方便力。四十餘年未曾顯實。是故衆生得道差別。不得疾成無上菩提。善男子。法譬如水能洗垢穢。若井若池若江若河溪渠大海。皆悉能洗。諸有垢穢。其法水者亦復如是。能洗衆生諸煩惱垢。善男子。水性是一。江河井池溪渠大海。各各別異。其法性者亦復如是。洗除塵勞等無差別。三法四果二道不一。善男子。水雖俱洗。而非非池。池非江河。溪渠非海。而如來世雄於法自在。所說諸法亦復如是。初中後說。皆能洗除衆生煩惱。而初非中。而中非後。初中後說文辭雖一。而義各異。善男子。我起樹王詣波羅奈鹿野園中。爲阿若拘隣等五人轉四諦法輪時。亦說諸法本來空寂。代謝不住。念念生滅。中間於此及以處處。爲諸比丘并衆菩薩。辯演宣說十二因緣六波羅蜜。亦說諸法本來空寂。代謝不住。念念生滅。今復於此演說大乘無量義經。亦說諸法本來空寂。代謝不住。念念生滅。善男子。是故初說中說今說。文辭是一。而義差異。義異故。衆生解異。解異故。得法得果。得道亦異。善男子。初說四諦。爲求聲聞人。而八億諸天來下聽法。發菩提心。中於處處演說甚深十二因緣。爲求辟支佛人。而無量衆生發菩提心。或住聲聞。次說方等十二部經。摩訶般若華嚴海雲。演說菩薩歷劫修行。而百千比丘萬億人天。無量得須陀洹。得斯陀含。得阿那含。得阿羅漢。住辟支佛。因緣法中。善男子。以是義故。故知說同而義別異。義異故。衆生解異。解異故。得法得果。得道亦異。是故善男子。自我得道。初起說法。至于今日。演說大乘無量義經。未曾不說苦空無常無我。非真非假。非大非小。本來不然。今亦不滅。一切無相。法相法性不來不去。而諸衆生四相所遷。善男子。以是義故。諸佛無有二言。能以一音普應衆聲。能以一身。示百千萬億那由他無量無數恒河沙身。一一身中。又示若干百千萬億那由他阿僧祇恒河沙種種類形。一一形中。又示若干百千萬億那由他阿僧祇恒河沙形。善男子。是則

三三本俱作二
 數無量同作量
 無數○退下同
 無轉字○修同
 作條○轉輪同
 作輪之○如來
 說同作所說如
 ○法下元明俱
 有忍法二字

諸佛不可思議甚深境界。非二乘所知。亦非十住菩薩所及。唯佛與佛乃能究了。善男子。是故我說微妙甚深無上大乘無量義經。文理真正尊無過上。三世諸佛所共守護。無有衆魔外道得入。不爲一切邪見生死之所壞敗。菩薩摩訶薩若欲疾成無上菩提。應當修學如是甚深無上大乘無量義經。佛說是已。於是三千大千世界六種震動。自然空中雨種種天華。天鬘鉢羅華。鉢曇摩華。拘物頭華。分陀利華。又雨無數種種天香。天衣。天瓔珞。天無價寶。於上空中旋轉來下。供養於佛。及諸菩薩。聲聞大衆。天厨。天鉢器。天百味。食充滿盈溢。天幢。天幡。天憶蓋。天妙樂具。處處安置。作天伎樂歌歎於佛。又復六種震動。東方恒河沙等諸佛世界。亦雨天華。天香。天衣。天瓔珞。天無價寶。天厨。天鉢器。天百味。天幢。天幡。天憶蓋。天妙樂具。作天伎樂歌歎。彼佛及彼菩薩。聲聞大衆。南西北方四維上下亦復如是。於是衆中三萬二千菩薩摩訶薩。得無量義三昧。三萬四千菩薩摩訶薩。得無數無量陀羅尼門。能轉一切三世諸佛不退轉法輪。其諸比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。天龍。夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。大轉輪王。小轉輪王。銀輪。鐵輪。諸轉輪王。國王。王子。國臣。國民。國士。國女。國大長者。及諸眷屬。百千衆俱。聞佛如來說。是經時。或得煥法。頂法。世間第一法。須陀洹果。斯陀含果。阿那含果。阿羅漢果。辟支佛果。又得菩薩無生法忍。又得一陀羅尼。又得二陀羅尼。又得三陀羅尼。又得四陀羅尼。五六七八九十陀羅尼。又得百萬千億陀羅尼。又得無量無數恒河沙阿僧祇陀羅尼。皆能隨順轉不退轉法輪。無量衆生發阿耨多羅三藐三菩提心。

無量義經十功德品第三

爾時大莊嚴菩薩摩訶薩。復白佛言。世尊。世尊說是微妙甚深無上大乘無量義經。真實甚深甚深。所以者何。於此衆中。諸菩薩摩訶薩。及諸四衆。天龍鬼神國王臣民。諸有衆生。聞是甚深無上大乘無量義經。無不獲得陀羅尼門。三法四果菩提之心。當知此經。文理真正尊無過上。三世諸佛之所守護。無有衆魔羣

經同作法

阿耨多羅三藐
三十七字三本俱
作無上二字下
同

薩下三本俱無
摩訶薩三字

何下同無所字
○宮同作室○
行明作住

嚴下三本俱有
菩薩二字○於
慈心宋元俱作
於慈仁明作慈
仁心

以下明無其字
於下三本俱無
於字

道得入。不爲一切邪見生死之所壞敗。所以者何。一聞能持一切法故。若有衆生得聞是經。則爲大利。所以者何。若能修行。必得疾成阿耨多羅三藐三菩提。其有衆生不得聞者。當知是等爲失大利。過無量無邊。不可思議阿僧祇劫。終不得成阿耨多羅三藐三菩提。所以者何。不知菩提大直道故。行於險徑。多留難故。世尊。是經典者不可思議。唯願世尊。廣爲大衆慈哀敷演。是經甚深不可思議事。世尊。是經典者。從何所來。去何所至。住何所住。乃有如是無量功德不思議力。令衆疾成阿耨多羅三藐三菩提。爾時世尊告大莊嚴菩薩摩訶薩言。善哉善哉善男子。如是如是如汝所言。善男子。我說是經甚深甚深。實甚深。所以者何。令衆疾成阿耨多羅三藐三菩提故。一聞能持一切法故。於諸衆生大利益故。行大直道無留難故。善男子。汝問是經。從何所來。去至何所。住何所。住者。當善諦聽。善男子。是經本從諸佛宮宅中來。去至一切衆生發菩提心。住諸菩薩所行之處。善男子。是經如是來如是去如是住。是故此經。能有如是無量功德不思議力。令衆疾成阿耨多羅三藐三菩提。善男子。汝寧欲聞是經復有十不思議功德力。大莊嚴言。願樂欲聞。佛言。善男子。第一是經。能令菩薩未發心者發菩提心。無慈仁者起於慈心。好殺戮者起大悲心。生嫉妬者起隨喜心。有愛著者起能捨心。諸慳貪者起布施心。多憍慢者起持戒心。瞋恚盛者起忍辱心。生懈怠者起精進心。諸散亂者起禪定心。多愚癡者起智慧心。未能度彼者起度彼心。行十惡者起十善心。樂有爲者志無爲心。有退心者作不退心。爲有漏者起無漏心。多煩惱者起除滅心。善男子。是名是經第一功德不思議力。善男子。第二是經不可思議功德力者。若有衆生得聞是經者。若一轉若一偈。乃至一句。則能通達百千億義。無量數劫不能演說所受持法。所以者何。以其是法義無量故。善男子。是經譬如從一種子生百千萬。百千萬中。一一復生百千萬數。如是展轉乃至無量。是經典者亦復如是。從於一法生百千義。百千義中。一一復生百千萬數。如是展轉乃至無量無邊之義。是故此經。名無量義。善男子。是名是經第二功德不思議力。善男子。第三是經不可思議功德力者。若有衆生得聞是經。若一轉若一偈乃至一句。通達百千萬億義已。雖有

心同作總

實同作任○德

元明俱作他○

船舟三本俱作

舟船○辦同作

辦○生下同無

能字明有衆生

若下宋元俱無
至字

萬下三本俱無
億若二字

徧元明俱作徧

子下宋無善女
人三字

令下三本俱無
得字○遊巡同
作遊遊

煩惱如無煩惱。出入生死無怖畏想。於諸衆生。生憐愍心。於一切法。得勇健想。如壯力士。能擔能持。諸有重者。是持經人。亦復如是。能荷無上菩提重寶。擔負衆生。出生死道。未能自度。已能度彼。猶如船師。身嬰重病。四體不御。安止此岸。有好堅牢船舫。常辦諸度彼者之具。給與而去。是持經者。亦復如是。雖嬰五道諸有之身。百八重病。常恒相纏。安止無明老死此岸。而有堅牢此大乘經。無量義辦。能度衆生。能如說行者。得度生死。善男子。是名是經第三功德。不思議力。善男子。第四是經不可思議功德力者。若有衆生。得聞是經。若一轉。若一偈。乃至一句。得勇健想。雖未自度。而能度他。與諸菩薩。以爲眷屬。諸佛如來。常向是人。而演說法。是人聞已。悉能受持。隨順不逆。轉復爲人。隨宜廣說。善男子。是人譬如國王夫人。新生子。若一日。若二日。若至七日。若一月。若二月。若至七月。若一歲。若二歲。若至七歲。雖復不能領理國事。已爲臣民之所宗敬。諸大王子。以爲伴侶。王及夫人。愛心偏重。常與共語。所以者何。以稚小故。善男子。是持經者。亦復如是。諸佛國王。是經夫人。和合共生。是菩薩子。若是菩薩。得聞是經。若一句。若一偈。若一轉。若二轉。若十。若百。若千。若萬。若億。萬億。若恒河沙。無量無數。轉。雖復不能體真理極。雖復不能震動三千大千國土。雷奮梵音。轉大法輪。已爲一切四衆八部之所宗仰。諸大菩薩。以爲眷屬。深入諸佛祕密之法。所可演說。無違無失。常爲諸佛之所護念。慈愛徧覆。以新學故。善男子。是名是經第四功德。不思議力。善男子。第五是經不可思議功德力者。若善男子。善女人。若佛在世。若滅度後。其有受持讀誦書寫。如是甚深無上大乘無量義經。是人雖復具縛煩惱。未能遠離諸凡夫事。而能示現大菩提道。延於一日。以爲百劫。百劫亦能促爲一日。令彼衆生歡喜信伏。善男子。是善男子。善女人。譬如龍子。始生七日。卽能興雲。亦能降雨。善男子。是名是經第五功德。不思議力。善男子。第六是經不可思議功德力者。若善男子。善女人。若佛在世。若滅度後。受持讀誦是經典者。雖具煩惱。而爲衆生說法。令得遠離煩惱。生死斷一切苦。衆生聞已。修行得法。得果得道。與佛如來等無差別。譬如王子。雖復稚小。若王遊巡。及以疾病。委是王子領理國事。王子是時依大。王命如法教令。羣寮百官宣流。正

用說教法同作
所用說教○於
明作若次同

雖未三本俱作
未得○生下同
有法字○即昇
乃至薩位十字
宋作昇於第七
之地與大菩薩
位十一字元作
昇第七地大菩
薩位八字明作
昇於菩薩第七
之地八字○皆
悉三本俱作悉
以○發三本俱
作令○人下同
有以蒙化功故
男子女人九字
○及同作若○
爲上明無廣字
○人上同無衆
字○速下三本
俱有得字○國
下同有土字○
不下宋元俱有
可字○及明作
若○即同作既

化。國土人民各隨其要。如大王治等無有異。持經善男子善女人亦復如是。若佛在世若滅度後。是善男子。雖未得住初不動地。依佛如是用說教法而敷演之。衆生聞已一心修行。斷除煩惱得法得果。乃至得道。善男子。是名是經第六功德。不思議力。善男子。第七是經不可思議功德力者。若善男子善女人。於佛在世若滅度後。得聞是經。歡喜信樂生希有心。受持讀誦書寫解說。如說修行發菩提心。起諸善根興大悲意。欲度一切苦惱衆生。雖未修行六波羅蜜。六波羅蜜自然在前。即於是身得無生忍。生死煩惱一時斷壞。即昇無七地與大菩薩位。譬如健人爲王除怨。怨既滅已。王大歡喜。賞賜半國之封。皆悉與之。持經善男子善女人亦復如是。於諸行人最爲勇健。六度法寶不求自至。生死怨敵自然散壞。證無生忍。半佛國寶封賞安樂。善男子。是名是經第七功德。不思議力。善男子。第八是經不可思議功德力者。若善男子善女人。於佛在世若滅度後。有人能得是經典者。敬信如視佛身。令等無異。愛樂是經。受持讀誦書寫頂戴。如法奉行。堅固戒忍。兼行檀度。深發慈悲。以此無上大乘無量義經。廣爲人說。若人先來都不信有罪福者。以是經示之。設種種方便。強化令信。以經威力故。發其人信心。欵然得廻。信心既發。勇猛精進。故能得是經威德勢力。得道得果。是故善男子善女人。即於是身得無上法忍。得至上地。與諸菩薩以爲眷屬。速能成就衆生淨佛國土。不久得成無上菩提。善男子。是名是經第八功德。不思議力。善男子。第九是經不可思議功德力者。若善男子善女人。若佛在世及滅度後。有得是經歡喜踊躍。未曾有。受持讀誦書寫供養。廣爲衆人分別解說。是經義者。即得宿業餘罪重障。一時滅盡。便得清淨。速得大辯。次第莊嚴。諸波羅蜜。獲諸三昧。楞嚴三昧。入大總持門。得勤精進力。速越上地。善能分身散體。遍十方國。拔濟一切二十五有極苦衆生。悉令解脫。是故是經有如此力。善男子。是名是經第九功德。不思議力。善男子。第十是經不可思議功德力者。若善男子善女人。若佛在世及滅度後。若得是經發大歡喜。生希有心。即自受持讀誦書寫供養。如說修行。復能廣勸在家出家人。受持讀誦書寫供養。解說如說修行。既令餘人修行。是經力故。得道得果。皆由是善男子善女人慈心。

○勲元明俱作
勳○救三本俱
作救○衆同作
此○練元明俱
作施○住三本
俱作位

勲化力故。是善男子善女人。即於是身便速得無量諸陀羅尼門。於凡夫地自然初時能發無數阿僧祇弘誓大願。深能發救一切衆生成就大悲廣能救苦。厚集善根饒益一切。而演法澤洪潤枯涸。以衆法藥練諸衆生安樂一切。漸見超登住法雲地。恩澤普潤慈被無外。攝苦衆生令入道迹。是故此人不久得成阿耨多羅三藐三菩提。善男子。是名是經第十功德不思議力。善男子。如是無上大乘無量義經。極有大威神之力。尊無過上。能令諸凡夫皆成聖果。永離生死而得自在。是故此經名無量義也。能令一切衆生於凡夫地生起諸菩薩無量道芽。令功德樹蔚茂扶疎增長。是故此經號十不可思議功德力也。於是大莊嚴菩薩摩訶薩及八萬菩薩摩訶薩同聲白佛言。世尊。佛所說甚深微妙無上大乘無量義經。文理真正尊無過上。三世諸佛所共守護。無有衆魔羣道得入。不爲一切邪見生死之所壞敗。是故此經乃有如是十種功德不思議力。大饒益無量一切衆生。令一切諸菩薩摩訶薩各得無量義三昧。或得百千陀羅尼門。或令得菩薩諸地諸心。或得緣覺羅漢四道果證。世尊慈愍。快爲我等說如是法。令我大獲法利。甚爲奇特。未曾有也。世尊慈恩。實難可報。爾時三千大千世界六種震動。於上空中復雨種種天華。天覆鉢羅華。鉢曇摩華。拘物頭華。分陀利華。又雨無數種種天香。天衣。天瓔珞。天無價寶。於上空中旋轉來下。供養於佛及諸菩薩。聲聞大衆。天厨天鉢器。天百味充滿盈溢。見色聞香自然飽足。天幢天幡。天蓋。天妙樂具。處處安置。作天伎樂歌歎於佛。又復六種震動。東方恒河沙等諸佛世界。亦雨天華。天衣。天瓔珞。天無價寶。天厨天鉢器。天百味。見色聞香自然飽足。天幢天幡。天蓋。天妙樂具。處處安置。作天伎樂歌歎。彼佛及諸菩薩聲聞大衆。南西北方四維上下亦復如是。爾時佛告大莊嚴菩薩摩訶薩。及八萬菩薩摩訶薩言。汝等當於此經應深起敬心。如法修行。廣化一切。勲心流布。常常懇懃晝夜守護。普令衆生各獲法利。汝等真是大慈大悲。以立神通願力守護。是經勿使疑滯。於當來世必令廣行閻浮提。令一切衆生使得見聞讀誦書寫供養。以是之故。亦令汝等速得阿耨多羅三藐三菩提。是時大莊嚴菩薩摩訶薩。與八萬菩薩摩訶薩。即從坐起來詣佛所。頭面

而同作皆○此
同作是○茂宋
明俱作盛○號
下三本俱無十
字○是同作時
○佛上同有如
字○十下同無
種字○力下同
有也字○得上
明無令字○羅
上元明俱有阿
字○報下三本
俱有作是語已
四字○天下宋
無華字○變三
本俱作優

鉢明作滿○諸
三本俱作彼

普令同作令諸
○守同作愛○
得上同無使字
○亦下同有疾

汝等速得阿耨多羅三藐三菩提。是時大莊嚴菩薩摩訶薩。與八萬菩薩摩訶薩。即從坐起來詣佛所。頭面

字○坐同作座
○跪下明無俱
共二字
切下三本俱無
衆生乃至供養
十二字○法元
明俱作典○力
明作福

本題經下元有
一卷二字

禮足遠百千匝。卽前胡跪俱共同聲白佛言。世尊。我等快蒙世尊慈愍。爲我等說是甚深微妙無上大乘無量義經。敬受佛勅。於如來滅後。當廣令流布。是經典者。普令一切受持讀誦書寫供養。唯願世尊。勿垂憂慮。我等當以願力。普令一切衆生。使得見聞讀誦書寫供養。得是經法威神之力。爾時佛讚言。善哉善哉。諸善男子。汝等今者。真是佛子。大慈大悲。深能拔苦救厄者矣。一切衆生之良福田。廣爲一切作大良導師。一切衆生大依止處。一切衆生之大施主。常以法利廣施一切。爾時大會皆大歡喜。爲佛作禮。受持而去。

無量義經

妙法蓮華經卷第一

(麗鳴) (宋鳳) (元鳳) (明草)

譯號後三本俱作姚○同秦下

同無龜茲國三字下卷皆同○

品目上宋元俱

有妙法蓮華經

五字

攬三本俱作健

殖同作植下同

序品第一

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什奉

詔譯

如是我聞。一時佛住王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆萬二千人俱。皆是阿羅漢。諸漏已盡。無復煩惱。逮得已利。盡諸有結。心得自在。其名曰阿若憍陳如。摩訶迦葉。優樓頻螺迦葉。伽耶迦葉。那提迦葉。舍利弗。大目犍連。摩訶迦旃延。阿菴樓駄。劫賓那。憍梵波提。離婆多。畢陵伽婆蹉。薄拘羅。摩訶拘絺羅。難陀。孫陀羅難陀。富樓那。彌多羅尼子。須菩提。阿難。羅睺羅。如是衆所知識。大阿羅漢等。復有學無學二千人。摩訶波闍波提比丘尼。與眷屬六千人俱。羅睺羅母耶輸陀羅比丘尼。亦與眷屬俱。菩薩摩訶薩八萬人。皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉。皆得陀羅尼樂說辯才。轉不退轉法輪。供養無量百千諸佛。於諸佛所殖衆德本。常爲諸佛之所稱歎。以慈修身。善入佛慧。通達大智。到於彼岸。名稱普聞。無量世界。能度無數百千衆生。其名曰文殊師利菩薩。觀世音菩薩。得大勢菩薩。常精進菩薩。不休息菩薩。寶掌菩薩。藥王菩薩。勇施菩薩。寶月菩薩。月光菩薩。滿月菩薩。大力菩薩。無量力菩薩。越三界菩薩。跋陀婆羅。彌勒菩薩。寶積菩薩。導師菩薩。如是等菩薩。摩訶薩八萬人俱。爾時釋提桓因。與其眷屬二萬天子俱。復有名月天子。普香天子。寶光天子。四大天王。與其眷屬萬天子俱。自在天子。大自在天子。與其眷屬三萬天子俱。娑婆世界主梵天王。尸棄大梵。光明大梵等。與其眷屬萬二千天子俱。有八龍王。難陀龍王。跋難陀龍王。娑伽羅龍王。和脩吉龍王。德叉迦龍王。阿那婆達多龍王。摩那斯龍王。優鉢羅龍王等。各與若干百千眷屬俱。有四緊那羅王。法緊那羅王。妙法緊那羅王。大法緊那羅王。持法緊那羅王。各與若干百千眷屬俱。有四軋闍婆王。樂軋闍婆王。樂音軋闍

修同作偈下同

加明作跏下同

婆王。美軋闍婆王。美音軋闍婆王。各與若干百千眷屬俱。有四阿修羅王。婆稚阿修羅王。佉羅騫駄阿修羅王。毗摩質多羅阿修羅王。羅睺阿修羅王。各與若干百千眷屬俱。有四迦樓羅王。大威德迦樓羅王。大身迦樓羅王。大滿迦樓羅王。如意迦樓羅王。各與若干百千眷屬俱。韋提希子阿闍世王。與若干百千眷屬俱。各禮佛足。退坐一面。爾時世尊。四眾圍繞。供養恭敬。尊重讚歎。為諸菩薩說大乘經。名無量義。教菩薩法。佛所護念。佛說此經已。結跏趺坐。入於無量義處三昧。身心不動。是時天雨曼陀羅華。摩訶曼陀羅華。曼殊沙華。摩訶曼殊沙華。而散佛上及諸大眾。普佛世界六種震動。爾時會中比丘比丘尼。優婆塞。優婆夷。天龍夜叉。軋闍婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人。及諸小王。轉輪聖王。是諸大眾。得未曾有。歡喜合掌一心觀佛。爾時佛放眉間白毫相光。照東方萬八千世界。靡不周徧。下至阿鼻地獄。上至阿迦尼吒天。於此世界。盡見彼土六趣衆生。又見彼土現在諸佛。及聞諸佛所說經法。并見彼諸比丘比丘尼。優婆塞。優婆夷。諸修行得道者。復見諸菩薩摩訶薩。種種因緣。種種信解。種種相貌。行菩薩道。復見諸佛般涅槃者。復見諸佛般涅槃後。以佛舍利起七寶塔。爾時彌勒菩薩作是念。今者世尊現神變相。以何因緣而有此瑞。今佛世尊入于三昧。是不可思議。現希有事。當以問誰。誰能答者。復作是念。是文殊師利法王子。已曾親近供養過去無量諸佛。必應見此希有之相。我今當問。爾時比丘比丘尼。優婆塞。優婆夷。及諸天龍鬼神等。咸作此念。是佛光明神通之相。今當問誰。爾時彌勒菩薩欲自決疑。又觀四眾比丘比丘尼。優婆塞。優婆夷。及諸天龍鬼神等衆會之心。而問文殊師利言。以何因緣而有此瑞神通之相。放大光明照于東方萬八千土。悉見彼佛國界莊嚴。於是彌勒菩薩欲重宣此義。以偈問曰

梅宋作梅下同

文殊師利	導師何故	眉間白毫	大光普照	雨曼陀羅	曼殊沙華	梅檀香風	悅可衆心
以是因緣	地皆嚴淨	而此世界	六種震動	時四部衆	咸皆歡喜	身意快然	得未曾有
眉間光明	照于東方	萬八千土	皆如金色	從阿鼻獄	上至有頂	諸世界中	六道衆生

生死所趣	善惡業緣	受報好醜	於此悉見	又觀諸佛	聖主師子	演說經典	微妙第一
其聲清淨	出柔軟音	教諸菩薩	無數億萬	梵音深妙	令人樂聞	各於世界	講說正法
種種因緣	以無量喻	照明佛法	開悟衆生	若人遭苦	厭老病死	爲說涅槃	盡諸苦際
若人有福	曾供養佛	志求勝法	爲說緣覺	若有佛子	修種種行	求無上慧	爲說淨道
文殊師利	我住於此	見聞若斯	及千億事	如是衆多	今當略說	我見彼土	恒沙菩薩
種種因緣	而求佛道	或有行施	金銀珊瑚	眞珠摩尼	碑礫碼碯	金剛諸珍	奴婢車乘
寶飾葦輿	歡喜布施	回向佛道	願得是乘	三界第一	諸佛所歎	或有菩薩	駟馬寶車
欄楯華蓋	軒飭布施	復見菩薩	身肉手足	及妻子施	求無上道	又見菩薩	頭日身體
欣樂施與	求佛智慧	文殊師利	我見諸王	往詣佛所	問無上道	便捨樂土	宮殿臣妾
剃除鬚髮	而被法服	或見菩薩	而作比丘	獨處閑靜	樂誦經典	又見菩薩	勇猛精進
入於深山	思惟佛道	又見離欲	常處空閑	深修禪定	得五神通	又見菩薩	安禪合掌
以千萬偈	讚諸法王	復見菩薩	智深志固	能問諸佛	聞悉受持	又見佛子	定慧具足
以無量喻	爲衆講法	欣樂說法	化諸菩薩	破魔兵衆	而擊法鼓	又見菩薩	寂然宴默
天龍恭敬	不以爲喜	又見菩薩	處林放光	濟地獄苦	令入佛道	又見佛子	未嘗睡眠
經行林中	勲求佛道	又具具戒	威儀無缺	淨如寶珠	以求佛道	又見佛子	住忍辱力
增上慢人	惡罵捶打	皆悉能忍	以求佛道	又見菩薩	離諸戲笑	及癡眷屬	親近智者
一心除亂	攝念山林	億千萬歲	以求佛道	或見菩薩	肴饍飲食	百種湯藥	施佛及僧
名衣上服	價直千萬	或無價衣	施佛及僧	千萬億種	栴檀寶舍	衆妙臥具	施佛及僧
清淨園林	華菓茂盛	流泉浴池	施佛及僧	如是等施	種種微妙	歡喜無厭	求無上道

或有菩薩 說寂滅法 種種教詔 無數衆生 或見菩薩 觀諸法性 無有二相 猶如虛空
 又見佛子 心無所著 以此妙慧 求無上道 文殊師利 又有菩薩 佛滅度後 供養舍利
 又見佛子 造諸塔廟 無數恆沙 嚴鏘國界 寶塔高妙 五千由旬 縱廣正等 二千由旬
 一一塔廟 各千幢幡 珠交露幔 寶鈴和鳴 諸天龍神 人及非人 香華伎樂 常以供養
 文殊師利 諸佛子等 爲供舍利 嚴鏘塔廟 國界自然 殊特妙好 如天樹王 其華開敷
 佛放一光 我及衆會 見此國界 種種殊妙 諸佛神力 智慧希有 如一淨光 照無量國
 我等見此 得未曾有 佛子文殊 願決衆疑 四衆欣仰 瞻仁及我 世尊何故 放斯光明
 佛子時答 決疑令喜 何所饒益 演斯光明 佛坐道場 所得妙法 爲欲說此 爲當授記
 示諸佛土 衆寶嚴淨 及見諸佛 此非小緣 文殊當知 四衆龍神 瞻察仁者 爲說何等
 爾時文殊師利語彌勒菩薩摩訶薩及諸大士善男子等。如我惟忖。今佛世尊。欲說大法。雨大法雨。吹大法
 螺。擊大法鼓。演大法義。諸善男子。我於過去諸佛。曾見此瑞。放斯光已。卽說大法。是故當知。今佛現光。亦復
 如是。欲令衆生咸得聞知一切世間難信之法。故現斯瑞。諸善男子。如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫。
 爾時有佛。號日月燈明。如來應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。演說正法。
 初善中善後善。其義深遠。其語巧妙。純一無雜。具足清白梵行之相。爲求聲聞者。說應四諦法。度生老病死。
 究竟涅槃。爲求辟支佛者。說應十二因緣法。爲諸菩薩說應六波羅蜜。令得阿耨多羅三藐三菩提。成一切
 種智。次復有佛。亦名日月燈明。次復有佛。亦名日月燈明。如是二萬佛。皆同一字。號日月燈明。又同一姓。姓
 頗羅墮。彌勒當知。初佛後佛。皆同一字。名日月燈明。十號具足。所可說法。初中後善。其最後佛未出家時。有
 八王子。一名有意。二名善意。三名無量意。四名寶意。五名增意。六名除疑意。七名嚮意。八名法意。是八王子。
 威德自在。各領四天下。是諸王子。聞父出家。得阿耨多羅三藐三菩薩。悉捨王位。亦隨出家。發大乘意。常修

倦同作倦
修宋元俱作倦

梵行。皆爲法師。已於千萬佛所。隨諸善本。是時日月燈明佛。說大乘經。名無量義。教菩薩法。佛所護念。說是經已。卽於大衆中。結跏趺坐。入於無量義處三昧。身心不動。是時天雨曼陀羅華。摩訶曼殊沙華。摩訶曼殊沙華。而散佛上。及諸大衆。普佛世界六種震動。爾時會中比丘比丘尼。優婆塞優婆夷。天龍夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人。及諸小王。轉輪聖王等。是諸大衆。得未曾有。歡喜合掌。一心觀佛。爾時如來。放眉間白毫相光。照東方萬八千佛土。靡不周徧。如今所見。是諸佛土。彌勒當知。爾時會中有二十億菩薩。樂欲聽法。是諸菩薩。見此光明。普照佛土。得未曾有。欲知此光所爲。因緣。時有菩薩。名曰妙光。有八百弟子。是時日月燈明佛。從三昧起。因妙光菩薩。說大乘經。名妙法蓮華。教菩薩法。佛所護念。六十小劫不起于座。時會聽者。亦坐一處。六十小劫。身心不動。聽佛所說。謂如食頃。是時衆中。無有一人。若身若心。而生懈怠。日月燈明佛。於六十小劫。說是經已。卽於梵魔沙門婆羅門。及天人阿修羅衆中。而宣此言。如來於今日中夜。當入無餘涅槃。時有菩薩。名曰德藏。日月燈明佛。卽授其記。告諸比丘。是德藏菩薩。次當作佛。號曰淨身多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀。佛授記已。便於中夜。入無餘涅槃。佛滅度後。妙光菩薩。持妙法蓮華經。滿八十小劫。爲人演說。日月燈明佛八子。皆師妙光。妙光教化。令其堅固阿耨多羅三藐三菩提。是諸王子。供養無量百千萬億佛已。皆成佛道。其最後成佛者。名曰然燈。八百弟子中。有一人。號曰求名。貪著利養。雖復讀誦衆經。而不通利。多所忘失。故號求名。是人亦以種種善根。因緣。故得值無量百千萬億諸佛。供養恭敬。尊重讚歎。彌勒當知。爾時妙光菩薩。豈異人乎。我身是也。求名菩薩。汝身是也。今見此瑞。與本無異。是故惟忖。今日如來。當說大乘經。名妙法蓮華。教菩薩法。佛所護念。爾時文殊師利。於大衆中。欲重宣此義。而說偈言。

我念過去世 無量無數劫 有佛入中尊 號日月燈明 世尊演說法 度無量衆生
無數億菩薩 令入佛智慧 佛未出家時 所生八王子 見大聖出家 亦隨修梵行

時佛說大乘	經名無量義	於諸大眾中	而為廣分別	佛說此經已	即於法座上
加趺坐三昧	名無量義處	天雨曼陀華	天鼓自然鳴	諸天龍鬼神	供養人中尊
一切諸佛土	卽時大震動	佛放眉間光	現諸希有事	此光照東方	萬八千佛土
示一切衆生	生死業報處	有見諸佛土	以衆寶莊嚴	琉璃玻璃色	斯由佛光照
及見諸天人	龍神夜叉衆	輒闍緊那羅	各供養其佛	又見諸如來	自然成佛道
身色如金山	端嚴甚微妙	如淨琉璃中	內現真金像	世尊在大衆	敷演深法義
一一諸佛土	聲聞衆無數	因佛光所照	悉見彼大衆	或有諸比丘	在於山林中
精進持淨戒	猶如護明珠	又見諸菩薩	行施忍辱等	其數如恒沙	斯由佛光照
又見諸菩薩	深入諸禪定	身心寂不動	以求無上道	又見諸菩薩	知法寂滅相
各於其國土	說法求佛道	爾時四部衆	見日月燈佛	現大神通力	其心皆歡喜
各各自相問	是事何因緣	天人所奉尊	適從三昧起	讚妙光菩薩	汝爲世間眼
一切所歸信	能奉持法藏	如我所說法	唯汝能證知	世尊旣讚歎	令妙光歡喜
說是法華經	滿六十小劫	不起於此座	所說上妙法	是妙光法師	悉皆能受持
佛說是法華	令衆歡喜已	尋卽於是日	告於天人衆	諸佛法實相義	已爲汝等說
我今於中夜	當入於涅槃	汝一心精進	當離於放逸	諸佛甚難值	億劫時一遇
世尊諸子等	聞佛入涅槃	各各懷悲惱	佛滅一何速	聖主法之王	安慰無量衆
我若滅度時	汝等勿憂怖	是德藏菩薩	於無漏實相	心已得通達	其次當作佛
號曰爲淨身	亦度無量衆	佛此夜滅度	如薪盡火滅	分布諸舍利	而起無量塔
比丘比丘尼	其數如恒沙	倍復加精進	以求無上道	是妙光法師	奉持佛法藏

懷元明俱作壞

品目上明無經名

八十小劫中	廣宣法華經	是諸八王子	妙光所開化	堅固無上道	當見無數佛
供養諸佛已	隨順行大道	相繼得成佛	轉次而授記	最後天中天	號曰然燈佛
諸仙之導師	度脫無量衆	是妙光法師	時有一弟子	心常懷懈怠	貪著於名利
求名利無厭	多遊族姓家	棄捨所習誦	廢忘不通利	以是因緣故	號之爲求名
亦行衆善業	得見無數佛	供養於諸佛	隨順行大道	具六波羅蜜	今見釋師子
其後當作佛	號名曰彌勒	廣度諸衆生	其數無有量	彼佛滅度後	懈怠者汝是
妙光法師者	今則我身是	我見燈明佛	本光瑞如此	以是知今佛	欲說法華經
今相如本瑞	是諸佛方便	今佛放光明	助發實相義	諸人今當知	合掌一心待
佛當雨法雨	充足求道者	諸求三乘人	若有疑悔者	佛當爲除斷	令盡無有餘

妙法蓮華經方便品第二

爾時世尊從三昧安詳而起告舍利弗諸佛智慧甚深無量其智慧門難解難入一切聲聞辟支拂所不能知所以者何佛會親近百千萬億無數諸佛盡行諸佛無量道法勇猛精進名稱普聞成就甚深未曾有法隨宜所說意趣難解舍利弗吾從成佛已來種種因緣種種譬喻廣演言教無數方便引導衆生令離諸著所以者何如來方便知見波羅蜜皆已具足舍利弗如來知見廣大深遠無量無礙力無所畏禪定解脫三昧深入無際成就一切未曾有法舍利弗如來能種種分別巧說諸法言辭柔軟悅可衆心舍利弗取要言之無量無邊未曾有法佛悉成就止舍利弗不須復說所以者何佛所成就第一希有難解之法唯佛與佛乃能究盡諸法實相所謂諸法如是相如是性如是體如是力如是作如是因如是緣如是果如是報如是本末究竟等爾時世尊欲重宣此義而說偈言

世雄不可量	諸天及世人	一切衆生類	無能知佛者	佛力無所畏	解脫諸三昧
及佛諸餘法	無能測量者	本從無數佛	具足行諸道	甚深微妙法	難見難可了
於無量億劫	行此諸道已	道場得成果	我已悉知見	如是大果報	種種性相義
我及十方佛	乃能知是事	是法不可示	言辭相寂滅	諸餘衆生類	無有能得解
除諸菩薩衆	信力堅固者	諸佛弟子衆	曾供養諸佛	一切漏已盡	住是最後身
如是諸人等	其力所不堪	假使滿世間	皆如舍利弗	盡思共度量	不能測佛智
正使滿十方	皆如舍利弗	及餘諸弟子	亦滿十方刹	盡思共度量	亦復不能知
辟支佛利智	無漏最後身	亦滿十方界	其數如竹林	斯等共一心	於億無量劫
欲思佛實智	莫能知少分	新發意菩薩	供養無數佛	了達諸義趣	又能善說法
如稻麻竹葦	充滿十方刹	一心以妙智	於恒河沙劫	咸皆共思量	不能知佛智
不退諸菩薩	其數如恒沙	一心共思求	亦復不能知	又告舍利弗	無漏不思議
甚深微妙法	我今已具得	唯我知是相	十方佛亦然	舍利弗當知	諸佛語無異
於佛所說法	當生大信力	世尊法久後	要當說真實	告諸聲聞衆	及求緣覺乘
我令脫苦縛	速得涅槃者	佛以方便力	示以三乘教	衆生處處著	引之令得出

爾時大衆中有諸聲聞漏盡阿羅漢阿若憍陳如等千二百人及發聲聞辟支佛心比丘比丘尼優婆塞優婆夷各作是念今者世尊何故殷勤稱歎方便而作是言佛所得法甚深難解有所言說意趣難知一切聲聞辟支佛所不能及佛說一解脫義我等亦得此法到於涅槃而今不知是義所趣爾時舍利弗知四衆心疑自亦未了而白佛言世尊何因何緣殷勤稱歎諸佛第一方便甚深微妙難解之法我自昔來未曾從佛聞如是說今者四衆咸皆有疑唯願世尊敷演斯事世尊何故殷勤稱歎甚深微妙難解之法爾時舍利弗

唯三本俱作惟
下同

欲重宣此義而說偈言

慧日大聖尊 久乃說是法 自說得如是 力無畏三昧 禪定解脫等 不可思議法

道場所得法 無能發問者 我意難可測 亦無能問者 無問而自說 稱歎所行道

智慧甚微妙 諸佛之所得 無漏諸羅漢 及求涅槃者 今皆墮疑網 佛何故說是

其求緣覺者 比丘比丘尼 諸天龍鬼神 及乳闍婆等 相視懷猶豫 瞻仰兩足尊

是事爲云何 願佛爲解說 於諸聲聞衆 佛說我第一 我今自於智 疑惑不能了

爲是究竟法 爲是所行道 佛口所生子 合掌瞻仰待 願出微妙音 時爲如實說

諸天龍神等 其數如恆沙 求佛諸菩薩 大數有八萬 又諸萬億國 轉輪聖王至

合掌以敬心 欲聞具足道

爾時佛告舍利弗。止。止。不須復說。若說是事。一切世間諸天及人。皆當驚疑。舍利弗。重白佛言。世尊。唯願說之。唯願說之。所以者何。是會無數百千萬億阿僧祇衆生。曾見諸佛。諸根猛利。智慧明了。聞佛所說。則能敬信。爾時舍利弗欲重宣此義。而說偈言。

法王無上尊 唯說願勿慮 是會無量衆 有能敬信者

佛復止。舍利弗。若說是事。一切世間天人阿修羅。皆當驚疑。增上慢比丘。將墜於大坑。爾時世尊。重說偈言。

止。止。不須說 我法妙難思 諸增上慢者 聞必不敬信

爾時舍利弗。重白佛言。世尊。唯願說之。唯願說之。今此會中。如我等。比百千萬億。世世已曾從佛受化。如此人等。必能敬信。長夜安隱。多所饒益。爾時舍利弗欲重宣此義。而說偈言。

無上兩足尊 願說第一法 我爲佛長子 唯垂分別說 是會無量衆 能敬信此法

佛已曾世世 教化如是等 皆一心合掌 欲聽受佛語 我等千二百 及餘求佛者

世世南北藏俱
作出世

貞明作真下同

願爲此衆故。唯垂分別說。是等聞此法。則生大歡喜。

爾時世尊告舍利弗。汝已慫慂三請。豈得不說。汝今諦聽。善思念之。吾當爲汝分別解說。說此語時。會中有比丘比丘尼。優婆塞。優婆夷。五千人等。卽從座起。禮佛而退。所以者何。此輩罪根深重。及增上慢。未得謂得。未證謂證。有如此失。是以不住。世尊默然而不制止。爾時佛告舍利弗。我今此衆無復枝葉。純有眞實。舍利弗。如是增上慢人。退亦佳矣。汝今善聽。當爲汝說。舍利弗言。唯然世尊。願樂欲聞。佛告舍利弗。如是妙法。諸佛如來時乃說之。如優曇鉢華時一現耳。舍利弗。汝等當信佛之所說言不虛妄。舍利弗。諸佛隨宜說法。意趣難解。所以者何。我以無數方便種種因緣譬喻言辭演說諸法。是法非思量分別之所能解。唯有諸佛乃能知之。所以者何。諸佛世尊。唯以一大事因緣故出現於世。舍利弗。云何名諸佛世尊。唯以一大事因緣故出現於世。諸佛世尊。欲令衆生開佛知見。使得清淨。故出現於世。欲示衆生佛之知見。故出現於世。欲令衆生悟佛知見。故出現於世。欲令衆生入佛知見。道故出現於世。舍利弗。是爲諸佛以一大事因緣故出現於世。佛告舍利弗。諸佛如來。但教化菩薩。諸有所作。常爲一事。唯以佛之知見。示悟衆生。舍利弗。如來但以一佛乘。故爲衆生說法。無有餘乘。若二若三。舍利弗。一切十方諸佛法。亦如是。舍利弗。過去諸佛。以無量無數方便種種因緣譬喻言辭。而爲衆生演說諸法。是法皆爲一佛乘。故。是諸衆生從諸佛聞法。究竟皆得一切種智。舍利弗。未來諸佛。當出於世。亦以無量無數方便種種因緣譬喻言辭。而爲衆生演說諸法。是法皆爲一佛乘。故。是諸衆生從佛聞法。究竟皆得一切種智。舍利弗。現在十方無量百千萬億佛土中。諸佛世尊。多所饒益。安樂衆生。是諸佛亦以無量無數方便種種因緣譬喻言辭。而爲衆生演說諸法。是法皆爲一佛乘。故。是諸衆生從佛聞法。究竟皆得一切種智。舍利弗。是諸佛但教化菩薩。欲以佛之知見。示悟衆生。故。欲以佛之知見。示悟衆生。故。欲令衆生入佛之知見。故。舍利弗。我今亦復如是。知諸衆生有種種欲深心所著。隨其本性。以種種因緣譬喻言辭。方便力故。而爲說法。舍利弗。如此皆爲得一佛乘。一切種智。故。舍利弗。十方世界。

中尚無二乘。何況有三。舍利弗。諸佛出於五濁惡世。所謂劫濁煩惱濁眾生濁見濁命濁。如是舍利弗。劫濁亂時。衆生垢重。慳貪嫉妬成就。諸不善根。故諸佛以方便力。於一佛乘分別說三。舍利弗。若我弟子。自謂阿羅漢。辟支佛者。不聞不知。諸佛如來。但教化菩薩事。此非佛弟子。非阿羅漢。非辟支佛。又舍利弗。是諸比丘。比丘尼。自謂已得阿羅漢。是最後身。究竟涅槃。便不復志求阿耨多羅三藐三菩提。當知此輩皆是增上慢人。所以者何。若有比丘。實得阿羅漢。若不信此法。無有是處。除佛滅度後。現前無佛。所以者何。佛滅度後。如是等經。受持讀誦解義者。是人難得。若遇餘佛。於此法中。便得決了。舍利弗。汝等當一心信解。受持佛語。諸佛如來。言無虛妄。無有餘乘。唯一佛乘。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

疵三本俱作班

修宋作倫

不自見其過	於戒有缺漏	護惜其瑕疵	是小智已出	衆中之糟糠	佛威德故去
斯人尠福德	不堪受是法	此衆無枝葉	唯有諸貞實	舍利弗善聽	諸佛所得法
無量方便力	而爲衆生說	衆生心所念	種種所行道	若干諸欲性	先世善惡業
佛悉知是已	以諸緣譬喻	言辭方便力	令一切歡喜	或說修多羅	伽陀及本事
本生未曾有	亦說於因緣	譬喻并祇夜	優婆提舍經	鈍根樂小法	貪著於生死
於諸無量佛	不行深妙道	衆苦所惱亂	爲是說涅槃	我設是方便	令得入佛慧
未曾說汝等	當得成佛道	所以未曾說	說時未至故	今正是其時	決定說大乘
我此九部法	隨順衆生說	入大乘爲本	以故說是經	有佛子心淨	柔軟亦利根
無量諸佛所	而行深妙道	爲此諸佛子	說是大乘經	我記如是人	來世成佛道
以深心念佛	修持淨戒故	此等聞得佛	大喜充遍身	佛知彼心行	故爲說大乘
聲聞若菩薩	聞我所說法	乃至於一偈	皆成佛無疑	十方佛土中	唯一乘法

無二亦無三 除佛方便說 但以假名字 引導於衆生 說佛智慧故 諸佛出於世
唯此一事實 餘二則非真 終不以小乘 濟度於衆生 佛自住大乘 如其所得法
定慧力莊嚴 以此度衆生 自證無上道 大乘平等法 若以小乘法 乃至於一人
我則墮慳貪 此事爲不可 若人信歸佛 如來不欺誑 亦無貪嫉意 斷諸法中惡
故佛於十方 而獨無所畏 我以相嚴身 光明照世間 無量衆所尊 爲說實相印
舍利弗當知 我本立誓願 欲令一切衆 如我等無異 如我昔所願 今者已滿足
化一切衆生 皆令入佛道 若我遇衆生 盡教以佛道 無智者錯亂 迷惑不受教
我知此衆生 未曾修善本 堅著於五欲 癡愛故生惱 以諸欲因緣 墜墮三惡道
輪迴六趣中 備受諸苦毒 受胎之微形 世世常增長 薄德少福人 衆苦所逼迫
入邪見稠林 若有若無等 依止此諸見 具足六十二 深著虛妄法 堅受不可捨
我慢自矜高 諂曲心不實 於千萬億劫 不聞佛名字 亦不聞正法 如是人難度
是故舍利弗 我爲設方便 說諸盡苦道 示之以涅槃 我雖說涅槃 是亦非真滅
諸法從本來 常自寂滅相 佛子行道已 來世得作佛 我有方便力 開示三乘法
一切諸世尊 皆說一乘道 今此諸大衆 皆應除疑惑 諸佛語無異 唯一無二乘
過去無數劫 無量滅度佛 百千萬億種 其數不可量 如是諸世尊 種種緣譬喻
無數方便力 演說諸法相 是諸世尊等 皆說一乘法 化無量衆生 令入於佛道
又諸大聖主 知一切世間 天人羣生類 深心之所欲 更以異方便 助顯第一義
若有衆生類 值諸過去佛 若聞法布施 或持戒忍辱 精進禪智等 種種修福德
如是諸人等 皆已成佛道 諸佛滅度已 若人善軟心 如是諸衆生 皆已成佛道

諸佛滅度已	供養舍利者	起萬億種塔	金銀及玻璃	罽磈與碼碯	玫瑰琉璃珠
清淨廣嚴飭	莊校於諸塔	或有起石廟	栴檀及沈水	木槿并餘材	磚瓦泥土等
若於曠野中	積土成佛廟	乃至童子戲	聚沙為佛塔	如是諸人等	皆已成佛道
若人為佛故	建立諸形像	刻雕成衆相	皆已成佛道	或以七寶成	鍤石赤白銅
白鐵及鉛錫	鐵木及與泥	或以膠漆布	嚴飭作佛像	如是諸人等	皆已成佛道
彩畫作佛像	百福莊嚴相	自作若使人	皆已成佛道	乃至童子戲	若草木及筆
或以指爪甲	而畫作佛像	如是諸人等	漸漸積功德	具足大悲心	皆已成佛道
但化諸菩薩	度脫無量衆	若人於塔廟	寶像及畫像	以華香幡蓋	敬心而供養
若使人作樂	擊鼓吹角貝	簫笛琴箏篪	琵琶鐃銅鈸	如是衆妙音	盡持以供養
或以歡喜心	歌頌頌佛德	乃至一小音	皆已成佛道	若人散亂心	乃至以一華
供養於畫像	漸見無數佛	或有人禮拜	或復但合掌	乃至舉一手	或復小低頭
以此供養像	漸見無量佛	自成無上道	廣度無數衆	入無餘涅槃	如薪盡火滅
若人散亂心	入於塔廟中	一稱南無佛	皆已成佛道	於諸過去佛	在世或滅度
若有聞是法	皆已成佛道	未來諸世尊	其數無有量	是諸如來等	亦方便說法
一切諸如來	以無量方便	度脫諸衆生	入佛無漏智	若有聞法者	無一不成佛
諸佛本誓願	我所行佛道	善欲令衆生	亦同得此道	未來世諸佛	雖說百千億
無數諸法門	其實為一乘	諸佛兩足尊	知法常無性	佛種從緣起	是故說一乘
是法住法位	世間相常住	於道場知已	導師方便說	天人所供養	現在十方佛
其數如恆沙	出現於世間	安隱衆生故	亦說如是法	知第一寂滅	以方便力故

雖示種種道	其實爲佛乘	知衆生諸行	深心之所念	過去所習業	欲性精進力
及諸根利鈍	以種種因緣	譬喻亦言辭	隨應方便說	今我亦如是	安隱衆生故
以種種法門	宣示於佛道	我以智慧力	知衆生性欲	方便說諸法	皆令得歡喜
舍利弗當知	我以佛眼觀	見六道衆生	貧窮無福慧	入生死嶮道	相續苦不斷
深著於五欲	如犛牛愛尾	以貪愛自蔽	盲瞶無所見	不求大勢佛	及與斷苦法
深入諸邪見	以苦欲捨苦	爲是衆生故	而起大悲心	我始坐道場	觀樹亦經行
於三七日中	思惟如是事	我所得智慧	微妙最第一	衆生諸根鈍	著樂癡所盲
如斯之等類	云何而可度	爾時諸梵王	及諸天帝釋	護世四天王	及大自在天
并餘諸天衆	眷屬百千萬	恭敬合掌禮	請我轉法輪	我卽自思惟	若但讚佛乘
衆生沒在苦	不能信是法	破法不信故	墜於三惡道	我寧不說法	疾入於涅槃
尋念過去佛	所行方便力	我今所得道	亦應說三乘	作是思惟時	十方佛皆現
梵音慰喻我	善哉釋迦文	第一之導師	得是無上法	隨諸一切佛	而用方便力
我等亦皆得	最妙第一法	爲諸衆生類	分別說三乘	少智樂小法	不自信作佛
是故以方便	分別說諸果	雖復說三乘	但爲教菩薩	舍利弗當知	我聞聖師子
深淨微妙音	喜稱南無佛	復作如是念	我出濁惡世	如諸佛所說	我亦隨順行
思惟是事已	卽趣波羅奈	諸法寂滅相	不可以言宣	以方便力故	爲五比丘說
是名轉法輪	便有涅槃音	及以阿羅漢	法僧差別名	從久遠劫來	讚示涅槃法
生死苦永盡	我常如是說	舍利弗當知	我見佛子等	志求佛道者	無量千萬億
咸以恭敬心	皆來至佛所	曾從諸佛聞	方便所說法	我卽作是念	如來所以出

喜稱南無三本
俱作稱南無諸

爲說佛慧故	今正是其時	舍利弗當知	鈍根小智人	著相憍慢者	不能信是法
今我喜無畏	於諸菩薩中	正直捨方便	但說無上道	菩薩聞是法	疑網皆已除
千二百羅漢	悉亦當作佛	如三世諸佛	說法之儀式	我今亦如是	說無分別法
諸佛興出世	懸遠值遇難	正使出于世	說是法復難	無量無數劫	聞是法亦難
能聽是法者	斯人亦復難	譬如優曇花	一切皆愛樂	天人所希有	時時乃一出
聞法歡喜讚	乃至發一言	則爲已供養	一切三世佛	是人甚希有	過於優曇花
汝等勿有疑	我爲諸法王	普告諸大衆	但以一乘道	教化諸菩薩	無聲聞弟子
汝等舍利弗	聲聞及菩薩	當知是妙法	諸佛之祕要	以五濁惡世	但樂著諸欲
如是等衆生	終不求佛道	當來世惡人	聞佛說一乘	迷惑不信受	破法墮惡道
有慚愧清淨	志求佛道者	當爲如是等	廣讚一乘道	舍利弗當知	諸佛法如是
以萬億方便	隨宜而說法	其不習學者	不能曉了此	汝等旣已知	諸佛世之師
隨宜方便事	無復諸疑惑	心生大歡喜	自知當作佛		

妙法蓮華經卷第一

妙法蓮華經卷第二

(麗鳴) (宋鳳) (元鳳) (明草)

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什奉

詔譯

譬喻品第三

品目上宋元俱有妙法蓮華經五字
勇三本俱作踊
授同作受○常元作誓下同

爾時舍利弗踊躍歡喜，即起合掌瞻仰尊顏，而白佛言：「今從世尊聞此法音，心懷勇踊，得未曾有。所以者何？我昔從佛聞如是法，見諸菩薩授記作佛，而我等不預斯事，甚自感傷。失於如來無量知見，世尊，我常獨處山林樹下，若坐若行，每作是念：我等同入法性，云何如來以小乘法而見濟度？是我等各非世尊也。所以者何？若我等待說所因成就阿耨多羅三藐三菩提者，必以大乘而得度脫。然我等不解方便，隨宜所說，初聞佛法，遇便信受，思惟取證，世尊，我從昔來終日竟夜，每自剋責。而今從佛聞所未聞，未曾有法，斷諸疑悔，身意泰然，快得安隱。今日乃知真是佛子，從佛口生，從法化生，得佛法分。爾時舍利弗欲重宣此義，而說偈言：

我聞是法音	得所未曾有	心懷大歡喜	疑網皆已除	昔來蒙佛教	不失於大乘
佛音甚希有	能除衆生惱	我已得漏盡	開亦除憂惱	我處於山谷	或在林樹下
若坐若經行	常思惟是事	嗚呼深自責	云何而自欺	我等亦佛子	同入無漏法
不能於未來	演說無上道	金色三十二	十力諸解脫	同共一法中	而不得此事
八十種妙好	十八不共法	如是等功德	而我皆已失	我獨經行時	見佛在大衆
名聞滿十方	廣饒益衆生	自惟失此利	我爲自欺誑	我常於日夜	每思惟是事
欲以問世尊	爲失爲不失	我常見世尊	稱讚諸菩薩	以是於日夜	籌量如此事
今聞佛音聲	隨宜而說法	無漏難思議	令衆至道場	我本著邪見	爲諸梵志師

此三本俱作是

無上宋作求佛

業三本俱作果
下同

殖三本俱作植
下同
固宋作因

世尊知我心 拔邪說涅槃 我悉除邪見 於空法得證 爾時心自謂 得至於滅度
而今乃自覺 非是實滅度 若得作佛時 具三十二相 天人夜叉衆 龍神等恭敬
是時乃可謂 永盡滅無餘 佛於大衆中 說我當作佛 聞如是法音 疑悔悉已除
初聞佛所說 心中大驚疑 將非魔作佛 惱亂我心耶 佛以種種緣 譬喻巧言說
其心安如海 我聞疑網斷 佛說過去世 無量滅度佛 安住方便中 亦皆說是法
現在未來佛 其數無有量 亦以諸方便 演說如是法 如今者世尊 從生及出家
得道轉法輪 亦以方便說 世尊說實道 波旬無此事 以是我定知 非是魔作佛
我墮疑網故 謂是魔所爲 聞佛柔軟音 深遠甚微妙 演暢清淨法 我心大歡喜
疑悔永已盡 安住實智中 我定當作佛 爲天人所敬 轉無上法輪 教化諸菩薩
爾時佛告舍利弗。吾今於天人沙門婆羅門等大衆中說。我昔曾於二萬億佛所。爲無上道故。常教化汝。汝
亦長夜隨我受學。我以方便引導汝。故生我法中。舍利弗。我昔教汝志願佛道。汝今悉忘。而便自謂已得滅
度。我今還欲令汝憶念本願所行道故。爲諸聲聞說。是大乘經。名妙法蓮華教菩薩法。佛所護念。舍利弗。汝
於未來世。過無量無邊不可思議劫。供養若干千萬億佛。奉持正法。具足菩薩所行之道。當得作佛。號曰華
光。如來應供。正徧知。明行足。善逝世間。解無上士調御丈夫。天人師。佛世尊。國名離垢。其土平正。清淨嚴飭。
安隱豐樂。天人熾盛。瑠璃爲地。有八交道。黃金爲繩。以界其側。其傍各有七寶行樹。常有華菓。華光如來。亦
以三乘教化衆生。舍利弗。彼佛出時。雖非惡世。以本願故。說三乘法。其劫名大寶莊嚴。何故名曰大寶莊嚴。
其國中。以菩薩爲大寶故。彼諸菩薩。無量無邊。不可思議。算數譬喻所不能及。非佛智力。無能知者。若欲行
時。寶華承足。此諸菩薩。非初發意。皆久殖德本。於無量百千萬億佛所。淨修梵行。恒爲諸佛之所稱歎。常修
佛慧。具大神通。善知一切諸法之門。質直無僞。志念堅固。如是菩薩。充滿其國。舍利弗。華光佛壽十二小劫。

妙法蓮華經卷第二

(麗鳴) (宋鳳) (元鳳) (明草)

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什奉

詔譯

譬喻品第三

品目上宋元俱有妙法蓮華經五字
勇三本俱作踊
授同作受○常元作嘗下同

爾時舍利弗踊躍歡喜，即起合掌瞻仰尊顏，而白佛言：今從世尊聞此法音，心懷勇踊，得未曾有。所以者何？我昔從佛聞如是法，見諸菩薩授記作佛，而我等不預斯事，甚自感傷。失於如來無量知見，世尊，我常獨處山林樹下，若坐若行，每作是念：我等同入法性，云何如來以小乘法而見濟度，是我等咎非世尊也。所以者何？若我等待說所因成就，阿耨多羅三藐三菩提者，必以大乘而得度脫。然我等不解方便，隨宜所說，初聞佛法，遇便信受，思惟取證。世尊，我從昔來終日竟夜，每自剋責，而今從佛聞所未聞，未曾有法，斷諸疑悔，身意泰然，快得安隱。今日乃知真是佛子，從佛口生，從法化生，得佛法分。爾時舍利弗欲重宣此義，而說偈言：

我聞是法音	得所未曾有	心懷大歡喜	疑網皆已除	昔來蒙佛教	不失於大乘
佛音甚希有	能除衆生惱	我已得漏盡	聞亦除憂惱	我處於山谷	或在林樹下
若坐若經行	常思惟是事	嗚呼深自責	云何而自欺	我等亦佛子	同入無漏法
不能於未來	演說無上道	金色三十二	十力諸解脫	同共一法中	而不得此事
八十種妙好	十八不共法	如是等功德	而我皆已失	我獨經行時	見佛在大衆
名聞滿十方	廣饒益衆生	自惟失此利	我爲自欺誑	我常於日夜	每思惟是事
欲以問世尊	爲失爲不失	我常見世尊	稱讚諸菩薩	以是於日夜	籌量如此事
今聞佛音聲	隨宜而說法	無漏難思議	令衆至道場	我本著邪見	爲諸梵志師

此三本俱作是

無上宋作求佛

業三本俱作果
下同

殖三本俱作植
下同
因宋作因

世尊知我心 拔邪說涅槃 我悉除邪見 於空法得證 爾時心自謂 得至於滅度
而今乃自覺 非是實滅度 若得作佛時 具三十二相 天人夜叉衆 龍神等恭敬
是時乃可謂 永盡滅無餘 佛於大衆中 說我當作佛 聞如是法音 疑悔悉已除
初聞佛所說 心中大驚疑 將非魔作佛 惱亂我心耶 佛以種種緣 譬喻巧言說
其心安如海 我聞疑網斷 佛說過去世 無量滅度佛 安住方便中 亦皆說是法
現在未來佛 其數無有量 亦以諸方便 演說如是法 如今者世尊 從生及出家
得道轉法輪 亦以方便說 世尊說實道 波旬無此事 以是我定知 非是魔作佛
我墮疑網故 謂是魔所爲 聞佛柔軟音 深遠甚微妙 演暢清淨法 我心大歡喜
疑悔永已盡 安住實智中 我定當作佛 爲天人所敬 轉無上法輪 教化諸菩薩
爾時佛告舍利弗。吾今於天人沙門婆羅門等大衆中說。我昔曾於二萬億佛所。爲無上道故。常教化汝。汝亦長夜隨我受學。我以方便引導汝。故生我法中。舍利弗。我昔教汝志願佛道。汝今悉忘。而便自謂已得滅度。我今還欲令汝憶念本願所行道故。爲諸聲聞說。是大乘經。名妙法蓮華教菩薩法。佛所護念。舍利弗。汝於未來世。過無量無邊不可思議劫。供養若干千萬億佛。奉持正法。具足菩薩所行之道。當得作佛。號曰華光。如來應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。國名離垢。其土平正。清淨嚴勝。安隱豐樂。天人熾盛。瓊瑤爲地。有八交道。黃金爲繩。以界其側。其傍各有七寶行樹。常有華菓。華光如來。亦以三乘教化衆生。舍利弗。彼佛出時。雖非惡世。以本願故。說三乘法。其劫名大寶莊嚴。何故名曰大寶莊嚴。其國中。以菩薩爲大寶故。彼諸菩薩。無量無邊。不可思議。算數譬喻所不能及。非佛智力。無能知者。若欲行時。寶華承足。此諸菩薩。非初發意。皆久殖德本。於無量百千萬億佛所。淨修梵行。恒爲諸佛之所稱歎。常修佛慧。具大神通。善知一切諸法之門。實直無僞。志念堅固。如是菩薩。充滿其國。舍利弗。華光佛壽十二小劫。

除爲王子未作佛時。其國人民壽八小劫。華光如來過十二小劫。授堅滿菩薩阿耨多羅三藐三菩提記。告諸比丘。是堅滿菩薩。次當作佛。號曰華足安行。多陀阿伽度。阿羅訶三藐三佛。其佛國土亦復如是。舍利弗。是華光佛滅度之後。正法住世三十二小劫。像法住世亦三十二小劫。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言。

舍利弗來世 成佛普智尊 號名曰華光 當度無量衆 供養無數佛 具足菩薩行

十力等功德 證於無上道 過無量劫已 劫名大寶嚴 世界名離垢 清淨無瑕穢

以琉璃爲地 金繩界其道 七寶雜色樹 常有華菓實 彼國諸菩薩 志念常堅固

神道波羅蜜 皆已悉具足 於無數佛所 善學菩薩道 如是等大士 華光佛所化

佛爲王子時 棄國捨世榮 於最末後身 出家成佛道 華光佛住世 壽十二小劫

其國人民衆 壽命八小劫 佛滅度之後 正法住於世 三十二小劫 廣度諸衆生

正法滅盡已 像法三十二 舍利廣流布 天人普供養 華光佛所爲 其事皆如是

其兩足聖尊 最勝無倫匹 彼即是汝身 宜應自欣慶

修宋元俱作脩

爾時四部衆。比丘比丘尼。優婆塞。優婆夷。天龍夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽等。大衆見舍利弗於佛前受阿耨多羅三藐三菩提記。心大歡喜。踊躍無量。各各脫身所著上衣。以供養佛。釋提桓因。梵天王等。與無數天子。亦以天妙衣。天曼陀羅華。摩訶曼陀羅華等。供養於佛。所散天衣。住虛空中。而自迴轉。諸天伎樂。百千萬種。於虛空中。一時俱作。雨衆天華。而作是言。佛昔於波羅捺初轉法輪。今乃復轉無上最。大法輪。爾時諸天子。欲重宣此義。而說偈言。

昔於波羅捺 轉四諦法輪 分別說諸法 五衆之生滅 今復轉最妙 無上大法輪

是法甚深奧 少有能信者 我等從昔來 數聞世尊說 未曾聞如是 深妙之上法

世尊說是法 我等皆隨喜 大智舍利弗 今得受尊記 我等亦如是 必當得作佛

棕三本俱作奈
下同

於一切世間。最尊無有上。佛道叵思議。方便隨宜說。我所有福業。今世若過世。及見佛功德。盡廻向佛道。

爾時舍利弗白佛言。世尊。我今無復疑悔。親於佛前得受阿耨多羅三藐三菩提記。是諸千二百心自在者。昔住學地。佛常教化言。我法能離生老病死究竟涅槃。是學無學人。亦各自以離我見及有無見等。謂得涅槃。而今於世尊前。聞所未聞。皆墮疑惑。善哉世尊。願爲四衆說其因緣。令離疑悔。爾時佛告舍利弗。我先不言。諸佛世尊。以種種因緣譬喻。言辭方便說法。皆爲阿耨多羅三藐三菩提耶。是諸所說皆爲化菩薩故。然舍利弗。今當復以譬喻更明此義。諸有智者。以譬喻得解。舍利弗。若國邑聚落有大長者。其年衰邁。財富無量。多有田宅及諸僮僕。其家廣大。唯有一門。多諸人衆。一百二百乃至五百人。止住其中。堂閣朽故。牆壁隕落。柱根腐敗。梁棟傾危。周匝俱時歎然。火起焚燒舍宅。長者諸子。若二十或至三十。在此宅中。長者見是大火從四面起。卽大驚怖。而作是念。我雖能於此所燒之門安隱得出。而諸子等。於火宅內樂著嬉戲。不覺不知。不驚不怖。火來逼身。苦痛切己。心不厭患。無求出意。舍利弗。是長者作是思惟。我身手有力。當以衣被。若以杙案。從舍出之。復更思惟。是舍唯有一門而復狹小。諸子幼稚。未有所識。戀著戲處。或當墮落。爲火所燒。我當爲說怖畏之事。此舍已燒。宜時疾出。無令爲火之所燒害。作是念已。如所思惟。具告諸子。汝等速出。父雖憐愍。善言誘喻。而諸子等。樂著嬉戲。不肯信受。不驚不畏。了無出心。亦復不知何者是火。何者爲舍。云何爲失。但東西走戲視父而已。爾時長者卽作是念。此舍已爲大火所燒。我及諸子。若不時出。必爲所焚。我今當設方便。令諸子等得免斯害。父知諸子先心各有所好。種種珍玩奇異之物。情必樂著。而告之言。汝等所可玩好。希有難得。汝若不取。後必憂悔。如此種種羊車鹿車牛車。今在門外。可以遊戲。汝等於此火宅。宜速出來。隨汝所欲。皆當與汝。爾時諸子聞父所說。珍玩之物。適其願故。心各勇銳。互相推排。競共馳走。爭出火宅。是時長者見諸子等安隱得出。皆於四衢道中露地而坐。無復障礙。其心泰然。歡喜踊躍。時諸子等各

机三本俱作几

較同作交○統
縫同作縫縫

倦三本俱作倦

愆元明俱作冤

白父言。父先所許玩好之具。羊車鹿車牛車。願時賜與。舍利弗。爾時長者。各賜諸子等一大車。其車高廣衆寶莊校。周匝欄楯四面懸鈴。又於其上張設幟蓋。亦以珍奇雜寶而嚴飾之。寶繩絞絡垂諸華纓。重敷綉綺。安置丹枕。駕以白牛。膚色充潔。形體姝好。有大筋力。行步平正。其疾如風。又多僕從而侍衛之。所以者何。是大長者財富無量。種種諸藏悉皆充溢。而作是念。我財物無極。不應以下劣小車與諸子等。今此幼童皆是吾子。愛無偏黨。我有如是七寶大車。其數無量。應當等心各各與之。不宜差別。所以者何。以我此物周給一國。猶尚不匱。何況諸子。是時諸子各乘大車。得未曾有。非本所望。舍利弗。於汝意云何。是長者等與諸子珍寶大車。寧有虛妄。不舍利弗言。不也。世尊。是長者。但令諸子得免火難。全其軀命。非爲虛妄。何以故。若全身命。便爲已得玩好之具。況復方便於彼火宅而拔濟之。世尊。若是長者。乃至不與最小一車。猶不虛妄。何以故。是長者先作是意。我以方便令子得出。以是因緣無虛妄也。何況長者。自知財富無量。欲饒益諸子等。與大車。佛告舍利弗。善哉善哉。如汝所言。舍利弗。如來亦復如是。則爲一切世間之父。於諸怖畏哀惱憂患。無明闇蔽。永盡無餘。而悉成就。無量知見力。無所畏。有大神力及智慧力。具足方便智慧。波羅蜜。大慈大悲。常無懈倦。恆求善事利益一切。而生三界。朽故火宅。爲度衆生。老病死憂悲苦惱。愚癡闇蔽。三毒之火。教化令得阿耨多羅三藐三菩提。見諸衆生。爲生老病死憂悲苦惱之所燒煮。亦以五欲財利。故受種種苦。又以貪著追求。故現受衆苦。後受地獄畜生餓鬼之苦。若生天上及在人間。貧窮困苦。愛別離。苦怨憎會。苦如是等種種諸苦。衆生沒在其中。歡喜遊戲。不覺不知。不驚不怖。亦不生厭。不求解脫。於此三界火宅東西馳走。雖遭大苦。不以爲患。舍利弗。佛見此已。便作是念。我爲衆生之父。應拔其苦難。與無量無邊佛智慧樂。令其遊戲。舍利弗。如來復作是念。若我但以神力及智慧力。捨於方便。爲諸衆生讚如來知見力。無所畏者。衆生不能以是得度。所以者何。是諸衆生。未免生老病死憂悲苦惱。而爲三界火宅所燒。何由能解佛之智慧。舍利弗。如彼長者。雖復身手有力而不用之。但以殷勤方便。勉濟諸子火宅之難。然後各與珍寶大車。如來亦

復如是。雖有力無所畏。而不用之。但以智慧方便。於三界火宅。拔濟衆生。爲說三乘聲聞辟支佛佛乘。而作是言。汝等莫得樂住三界火宅。勿貪麤弊色聲香味觸也。若貪著生愛。則爲所燒。汝速出三界。當得三乘聲聞辟支佛佛乘。我今爲汝保任此事。終不虛也。汝等但當勤修精進。如來以是方便。誘進衆生。復作是言。汝等當知。此三乘法。皆是聖所稱歎。自在無繫。無所依求。乘是三乘。以無漏根力。覺道禪定。解脫三昧等。而自娛樂。便得無量安隱快樂。舍利弗。若有衆生。內有智性。從佛世尊。聞法信受。慇懃精進。欲速出三界。自求涅槃。是名聲聞乘。如彼諸子。爲求羊車。出於火宅。若有衆生。從佛世尊。聞法信受。慇懃精進。求自然慧。樂獨善寂。深知諸法。因緣。是名辟支佛乘。如彼諸子。爲求鹿車。出於火宅。若有衆生。從佛世尊。聞法信受。勤修精進。求一切智。佛智。自然智。無師智。如來知見。力無所畏。愍念安樂。無量衆生。利益天人。度脫一切。是名大乘菩薩。求此乘。故名爲摩訶薩。如彼諸子。爲求牛車。出於火宅。舍利弗。如彼長者。見諸子等。安隱得出火宅。到無畏處。自惟財富。無量等。以大車而賜諸子。如來亦復如是。爲一切衆生之父。若見無量億千衆生。以佛教門。出三界。苦怖畏。險道。得涅槃樂。如來爾時。便作是念。我有無量無邊智慧力。無畏等。諸佛法藏。是諸衆生。皆是我子。等與大乘。不令人獨得滅度。皆以如來滅度而滅度之。是諸衆生。脫三界者。悉與諸佛。禪定。解脫等娛樂之具。皆是一相。一種。聖所稱歎。能生淨妙第一之樂。舍利弗。如彼長者。初以三車。誘引諸子。然後但與大車。寶物。莊嚴。安隱。第一。然彼長者。無虛妄之咎。如來亦復如是。無有虛妄。初說三乘。引導衆生。然後但以大乘。而度脫之。何以故。如來有無量智慧力。無所畏。諸法之藏。能與一切衆生。大乘之法。但不盡能受。舍利弗。以是因緣。當知諸佛。方便力。故於一佛。乘分別說三。佛欲重宣此義。而說偈言。

觀元明俱作地
○鷄三本俱作
鷄下同○狄宋

譬如長者 有一大宅 其宅久故 而復頓弊 堂舍高危 柱根摧朽 梁棟傾斜 基陛墮毀
 牆壁圯圻 泥塗灑落 覆苫亂墜 椽椳差脫 周障屈曲 雜穢充遍 有五百人 止住其中
 鷄鳥鴟鷂 烏鵲鳩鴿 蚺蛇蝮蠍 蜈蚣蚰蜒 守宮百足 狝狸鼯鼠 諸惡蟲輩 交橫馳走

明俱作飽○齧
元明俱作嚼○
齧三本俱作齧

茶宋明俱作茶
下同
返宋作反

蓬元明俱作蓬
○凶三本俱作
兇

舍宅同作宅舍
○炎同作燄下
同○章三本俱
作悼下同

縫宋作蓬

耽元作妣

屎屎臭處	不淨流溢	蜚蠊諸蟲	而集其上	狐狼野干	咀嚼踐踏	齧齧死屍	骨肉狼藉
由是羣狗	競來搏撮	飢羸悼惶	處處求食	鬪爭鬪擊	噬噉嗥吠	其舍恐怖	變狀如是
處處皆有	魍魎魍魎	夜叉惡鬼	食噉人肉	毒蟲之屬	諸惡禽獸	孚乳產生	各自藏護
夜叉競來	爭取食之	食之既飽	惡心轉熾	鬪爭之聲	甚可怖畏	鳩槃荼鬼	蹲踞土墀
或時離地	一尺二尺	往返遊行	縱逸嬉戲	捉狗兩足	撲令失聲	以脚加頸	怖狗自樂
復有諸鬼	其身長大	裸形黑瘦	常住其中	發大惡聲	叫呼求食	復有諸鬼	其喘如鐵
復有諸鬼	首如牛頭	或食人肉	或復噉狗	頭髮蓬亂	殘害凶險	飢渴所逼	叫喚馳走
夜叉餓鬼	諸惡鳥獸	飢急四向	窺看窻牖	如是諸難	恐畏無量	是朽故宅	屬于一人
其人近出	未久之間	於後舍宅	忽然火起	四面一時	其炎俱熾	棟梁椽柱	爆發震裂
摧折墮落	牆壁崩倒	諸鬼神等	揚聲大叫	鷓鴣諸鳥	鳩槃荼等	周章惶怖	不能自出
惡獸毒蟲	藏竄孔穴	毗舍闍鬼	亦住其中	薄福德故	為火所逼	共相殘害	飲血噉肉
野干之屬	竝已前死	諸大惡獸	競來食噉	臭煙燄焯	四面充塞	蜈蚣蝮蛇	毒蛇之類
為火所燒	爭走出穴	鳩槃荼鬼	隨取而食	又諸餓鬼	頭上火燃	飢渴熱惱	周章悶走
其宅如是	甚可怖畏	害毒火災	衆難非一	是時宅主	在門外立	聞有人言	汝諸子等
先因遊戲	來入此宅	稚小無知	歡娛樂著	長者聞已	驚入火宅	方宜救濟	令無燒害
告喻諸子	說衆患難	惡鬼毒蟲	灾火蔓延	衆苦次第	相續不絕	毒蛇虺蝮	及諸夜叉
鳩槃荼鬼	野干狐狗	鷓鴣鴟梟	百足之屬	飢渴惱急	甚可怖畏	此苦難處	況復大火
諸子無知	雖聞父誨	猶故樂著	嬉戲不已	是時長者	而作是念	諸子如此	益我愁惱
今此舍宅	無一可樂	而諸子等	耽溺嬉戲	不受我教	將為火害	即便思惟	設諸方便

告諸子等	我有種種	珍玩之具	妙寶好車	羊車鹿車	大牛之車	今在門外	汝等出來
吾為汝等	造作此車	隨意所樂	可以遊戲	諸子聞說	如此諸車	即時奔競	馳走而出
到於空地	離諸苦難	長者見子	得出火宅	住於四衢	坐師子座	而自慶言	我今快樂
此諸子等	生育甚難	愚小無知	而入險宅	多諸毒蟲	魑魅可畏	大火猛炎	四面俱起
而此諸子	貪著嬉戲	我已救之	令得脫難	是故諸人	我今快樂	爾時諸子	知父安坐
皆詣父所	而白父言	願賜我等	三種寶車	如前所許	諸子出來	當以三車	隨汝所欲
今正是時	唯垂給與	長者大富	庫藏衆多	金銀琉璃	碑磬瑪瑙	以衆寶物	造諸大車
莊校嚴飭	周匝欄楯	四面懸鈴	金繩絞絡	真珠羅網	張施其上	金華諸纓	處處垂下
衆綵雜飭	周匝圍繞	柔軟繒纈	以為茵蓐	上妙細氎	價直千億	鮮白淨潔	以覆其上
有大白牛	肥壯多力	形體殊好	以駕寶車	多諸僮從	而侍衛之	以是妙車	等賜諸子
諸子是時	歡喜踊躍	乘是寶車	遊於四方	嬉戲快樂	自在無礙	告舍利弗	我亦如是
衆聖中尊	世間之父	一切衆生	皆是吾子	深著世樂	無有慧心	三界無安	猶如火宅
衆苦充滿	甚可怖畏	常有生老	病死憂患	如是等火	熾然不息	如來已離	三界火宅
寂然閑居	安處林野	今此三界	皆是我有	其中衆生	悉是吾子	而今此處	多諸患難
唯我一人	能為救護	雖復教詔	而不信受	於諸欲染	貪著深故	以是方便	為說三乘
令諸衆生	知三界苦	開示演說	出世間道	是諸子等	若心決定	具足三明	及六神通
有得緣覺	不退菩薩	汝舍利弗	我為衆生	以此譬喻	說一佛乘	汝等若能	信受是語
一切皆當	成得佛道	是乘微妙	清淨第一	於諸世間	為無有上	佛所悅可	一切衆生
所應稱讚	供養禮拜	無量億千	諸力解脫	禪定智慧	及佛餘法	得如是乘	令諸子等

轉跋三本俱作
惟越

若狗野干	其人命終	其有誹謗	則斷一切	計我見者	以信得入	淺識聞之	若人有能	當知是人	汝舍利弗	斯人未得	是人於何	若滅貪欲	若有衆生	若人小智	若有菩薩	我皆濟拔	更無餘乘	日夜劫數
其形頹瘦	入阿鼻獄	如斯經典	世間佛種	莫說此經	況餘聲聞	迷惑不解	信汝所說	阿鞞跋致	我此法印	無上道故	而得解脫	無所依止	深著愛欲	於是衆中	令出三界	除佛方便	常得遊戲	
鰲鼉疥癩	具足一劫	見有讀誦	或復響聲	凡夫淺識	其餘聲聞	一切聲聞	則爲見我	若有信受	爲欲利益	我意不欲	但離虛妄	滅盡諸苦	深著苦因	能一心聽	我雖先說	告舍利弗	與諸菩薩	
人所觸燒	劫盡更生	書持經者	而懷疑惑	深著五欲	信佛語故	及辟支佛	亦見於汝	此經法者	世間故說	令至滅度	名爲解脫	名第三諦	不能暫捨	諸佛實法	汝等滅度	汝諸人等	及聲聞衆	
又復爲人	如是展轉	輕賤憎嫉	汝當聽說	聞不能解	隨順此經	於此經中	及比丘僧	是人已曾	在所遊方	我爲法王	其實未得	爲滅諦故	爲是等故	諸佛世尊	皆是吾子	乘此寶乘	乘此寶乘	
之所惡賤	至無數劫	而懷結恨	此人罪報	亦勿爲說	非已智分	力所不及	并諸菩薩	見過去佛	勿妄宣傳	於法自在	一切解脫	修行於道	方便說道	雖以方便	而實不滅	我則是父	直至道場	
常困飢渴	從地獄出	此人罪報	若佛在世	若人不信	又舍利弗	汝舍利弗	斯法華經	恭敬供養	若有聞者	安隱衆生	佛說是人	離諸苦縛	諸苦所因	所化衆生	今所應作	汝等累劫	以是因緣	
骨肉枯竭	常墮畜生	汝今復聽	若滅度後	毀謗此經	憍慢懈怠	尙於此經	爲深智說	亦聞是法	隨喜頂受	故現於世	未實滅度	名得解脫	貪欲爲本	皆是菩薩	唯佛智慧	衆苦所燒	十方誦求	

生受楚毒	死被瓦石	斷佛種故	受斯罪報	若作駝駝	或生中驢	身常負重	加諸杖捶
但念水草	餘無所知	謗斯經故	獲罪如是	有作野干	來入聚落	身體疥癩	又無一目
為諸童子	之所打擲	受諸苦痛	或時致死	於此死已	更受蟒身	其形長大	五百由旬
聾蹙無足	宛轉腹行	為諸小蟲	之所喫食	晝夜受苦	無有休息	謗斯經故	獲罪如是
若得為人	諸根闇鈍	婬陋攀躓	盲聾背偻	有所言說	人不信受	口氣常臭	鬼魅所著
貧窮下賤	為人所使	多病瘠瘦	無所依怙	雖親附人	人不在意	若有所得	尋復忘失
若修醫道	順方治病	更增他疾	或復致死	若自有病	無人救療	設服良藥	而復增劇
若他反逆	抄劫竊盜	如是等罪	橫羅其殃	如斯罪人	永不見佛	眾聖之王	說法教化
如斯罪人	常生難處	狂聾心亂	永不聞法	於無數劫	如恒河沙	生輒聾瘖	諸根不具
常處地獄	如遊園觀	在餘惡道	如已舍宅	駝驢豬狗	是其行處	謗斯經故	獲罪如是
若得為人	聾盲瘖瘡	貧窮諸衰	以自莊嚴	水腫乾瘠	疥癩癰疽	如是等病	以為衣服
身常臭處	垢穢不淨	深著我見	增益瞋恚	姪欲熾盛	不擇禽獸	謗斯經故	獲罪如是
告舍利弗	謗斯經者	若說其罪	窮劫不盡	以是因緣	我故語汝	無智人中	莫說此經
若有利根	智慧明了	多聞強識	求佛道者	如是之人	乃可為說	若人曾見	億百千佛
殖諸善本	深心堅固	如是之人	乃可為說	若人精進	常修慈心	不惜身命	乃可為說
若人恭敬	無有異心	離諸凡愚	獨處山澤	如是之人	乃可為說	又舍利弗	若見有人
捨惡知識	親近善友	如是之人	乃可為說	若見佛子	持戒清潔	如淨明珠	求大乘經
如是之人	乃可為說	若人無瞋	質直柔軟	常愍一切	恭敬諸佛	如是之人	乃可為說
復有佛子	於大眾中	以清淨心	種種因緣	譬喻言辭	說法無礙	如是之人	乃可為說

若有比丘 爲一切智 四方求法 合掌頂受 但樂受持 大乘經典 乃至不受 餘經一偈
如是之人 乃可爲說 如人至心 求佛舍利 如是求經 得已頂受 其人不復 志求餘經
亦未曾念 外道典籍 如是之人 乃可爲說 告舍利弗 我說是相 求佛道者 窮劫不盡
如是等人 則能信解 汝當爲說 妙法華經

妙法蓮華經信解品第四

爾時慧命須菩提。摩訶迦旃延。摩訶迦葉。摩訶目犍連。從佛所聞。未曾有法。世尊授舍利弗。阿耨多羅三藐三菩提。發希有心。歡喜踊躍。即從座起。整衣服。偏袒右肩。右膝著地。一心合掌。前躬恭敬。瞻仰尊顏。而白佛言。我等居僧之首。年並朽邁。自謂已得涅槃。無所堪任。不復進求。阿耨多羅三藐三菩提。世尊。往昔說法。既久。我時在座。身體疲憊。但念空無。相無作。於菩薩法。遊戲神通。淨佛國土。成就衆生。心不喜樂。所以者何。世尊。令我等出於三界。得涅槃證。又今我等年已朽邁。於佛教化。菩薩阿耨多羅三藐三菩提。不生一念好樂之心。我等今於佛前。聞授聲聞。阿耨多羅三藐三菩提。記。心甚歡喜。得未曾有。不謂於今。忽然得聞。希有之法。深自慶幸。獲大善利。無量珍寶。不求自得。世尊。我等今者。樂說譬喻。以明斯義。譬若有人。年既幼稚。捨父逃逝。久住他國。或二十至五十歲。年既長大。加復窮困。馳騁四方。以求衣食。漸漸遊行。遇向本國。其父先來。求子不得。中止一城。其家大富。財寶無量。金銀琉璃。珊瑚琥珀。珠璣等。其諸倉庫。悉皆盈溢。多有僮僕。臣佐吏民。象馬車乘。牛羊無數。出入息利。乃遍他國。商估賈客。亦甚衆多。時貧窮子。遊諸聚落。經歷國邑。遂到其父所止之城。父每念子。與子離別。五十餘年。而未曾向人說如此事。但自思惟。心懷悔恨。自念老朽。多有財物。金銀珍寶。倉庫盈溢。無有子息。一旦終沒。財物散失。無所委付。是以慙懃。每憶其子。復作是念。我若得子。委付財物。坦然快樂。無復憂慮。世尊。爾時窮子。備貨展轉。遇到父舍。住立門側。遙見其父。踞師子牀。

寶几承足。諸婆羅門刹利居士皆恭敬圍繞。以真珠瓔珞價直千萬莊嚴其身。吏民僮僕手執白拂侍立左右。覆以寶帳。垂諸華簾。香水灑地。散衆名華。羅列寶物。出入取與。有如是等種種嚴飾。威德特尊。窮子見有大勢力。卽懷恐怖。悔來至此。竊作是念。此或是王。或是王等。非我傭力得物之處。不如往至貧里。肆力有地。衣食易得。若久住此。或見逼迫。強使我作。作是念已。疾走而去。時富長者於師子座見子便識。心大歡喜。卽作是念。我財物庫藏。今有所付。我常思念此子。無由見之。而忽自來。甚適我願。我雖年朽。猶故貪惜。卽遣傍人急追將還。爾時使者疾走往捉。窮子驚愕。稱怨大喚。我不相犯。何爲見捉。使者執之。愈急強牽將還。于時窮子自念。無罪而被囚執。此必定死。轉更惶怖。悶絕。躄地。父遙見之。而語使言。不須此人。勿強將來。以冷水灑面。令得醒悟。莫復與話。所以者何。父知其子志意下劣。自知豪貴爲子所難。審知是子。而以方便不語他人云。是我子。使者語之。我今放汝隨意所趣。窮子歡喜。得未曾有。從地而起。往至貧里。以求衣食。爾時長者將欲誘引其子。而設方便。密遣二人形色憔悴。無威德者。汝可詣彼。徐語窮子。此有作處。倍與汝直。窮子若許將來。使作。若言欲何所作。便可語之。雇汝除糞。我等二人亦共汝作。時二人卽求窮子。旣已得之。具陳上事。爾時窮子先取其價。尋與除糞。其父見子惑而怪之。又以他日於窓牖中遙見子身。羸瘦憔悴。糞土塵坭。汗穢不淨。卽脫瓔珞細軟衣服。嚴飭之具。更著麤弊垢膩之衣。塵土坭身。右手執持除糞之器。狀有所畏。語諸作人。汝等勤作。勿得懈怠。以方便故。得近其子。後復告言。咄男子。汝常此作。勿復除去。當加汝價。諸有所須。盆器米麪鹽醋之屬。莫自疑難。亦有老弊使人。須者相給。好自安意。我如汝父。勿復憂慮。所以者何。我年老大而汝少壯。汝常作時。無有欺怠。曠恨怨言。都不見汝有此諸惡。如餘作人。自今已後。如所生子。卽時長者更與作字名之爲兒。爾時窮子雖欣此遇。猶故自謂客作賤人。由是之故。於二十年中。常今除糞。過是已後。心相體信。入出無難。然其所止。猶在本處。世尊。爾時長者有疾。自知將死不久。語窮子言。我今多有金銀珍寶。倉庫盈溢。其中多少。所應取與。汝悉知之。我心如是。當禮此意。所以者何。今我與汝便爲不異。宜

而便自謂三本
俱作便自謂言

加用心無令漏失。爾時窮子。即受教勅。領知衆物。金銀珍寶及諸庫藏。而無怖取一餐之意。然其所止。故在本處。下劣之心亦未能捨。復經少時。父知子意。漸已通泰。成就大志。自鄙先心。臨欲終時。而命其子。并會親族。國王大臣。剝利居士。皆悉已集。即自宣言。諸君當知。此是我子。我之所生。於某城中。捨吾逃走。踰嶺辛苦。五十餘年。其本字某。我名某甲。昔在本城懷憂推覓。忽於此間遇會得之。此實我子。我實其父。今我所有一切財物。皆是子有。先所出內。是子所知。世尊。是時窮子聞父此言。即大歡喜。得未曾有。而作是念。我本無心有所希求。今此寶藏自然而至。世尊。大富長者。則是如來。我等皆似佛子。如來常說我等爲子。世尊。我等以三苦故。於生死中受諸熱惱。迷惑無知。樂著小法。今日世尊。令我等思惟。蠲除諸法戲論之糞。我等於中勤加精進。得至涅槃。一日之價。既得此已。心大歡喜。自以爲足。而便自謂。於佛法中。勤精進故。所得弘多。然世尊。先知我等心著弊欲。樂於小法。便見縱捨不爲分別。汝等當有如來。知見寶藏之分。世尊。以方便力說如來智慧。我等從佛得涅槃。一日之價。以爲大得。於此大乘。無有志求。我等又因如來智慧。爲諸菩薩開示演說。而自於此。無有志願。所以者何。佛知我等心樂小法。以方便力隨我等說。而我等不知。真是佛子。今我等方知。世尊於佛智慧。無所吝惜。所以者何。我等昔來。真是佛子。而但樂小法。若我等有樂大之心。佛則爲我說大乘法。於此經中。唯說一乘。而昔於菩薩前。毀訾聲聞樂小法者。然佛實以大乘教化。是故我等說本無心有所怖求。今法王大寶自然而至。如佛子所應得者。皆已得之。爾時摩訶迦葉。欲重宣此義。而說偈言。

我等今日	聞佛音教	歡喜踊躍	得未曾有	佛說聲聞	當得作佛	無上寶聚	不求自得
譬如童子	幼稚無識	捨父逃逝	遠到他土	周流諸國	五十餘年	其父憂念	四方推求
求之既疲	頓止一城	造立舍宅	五欲自娛	其家巨富	多諸金銀	碑磔碼碯	眞珠琉璃
象馬牛羊	輦輿車乘	田業僮僕	人民衆多	出入息利	乃遍他國	商估賈人	無處不有
千萬億衆	圍繞恭敬	常爲王者	之所愛念	羣臣豪族	皆共宗重	以諸緣故	往來者衆

我承佛教	為大菩薩	以諸因緣	種種譬喻	若干言辭	說無上道	諸佛子等	從我聞法
而說我等	得諸無漏	成就小乘	聲聞弟子	佛敕我等	說最上道	修習此者	當得成佛
并及舍宅	一切財物	甚大歡喜	得未曾有	佛亦如是	知我樂小	未曾說言	汝等作佛
凡我所有	舍宅人民	悉以付之	恣其所用	子念昔貧	志意下劣	今於父所	大獲珍寶
捨我他行	經五十歲	自見子來	已二十年	昔於某城	而失是子	周行求索	遂來至此
父知子心	漸已廣大	欲與財物	即聚親族	國王大臣	刹利居士	於此大衆	說是我子
示其金銀	真珠瓊瑤	諸物出入	皆使令知	猶處門外	止宿草庵	自念貧事	我無此物
如是苦言	汝當勤作	又以軟語	若如我子	長者有智	漸令入出	經二十年	執作家事
執除糞穢	往到子所	方便附近	語令勤作	既益汝價	并塗足油	飲食充足	薦席厚煖
為除糞穢	淨諸房舍	長者於牖	常見其子	念子愚劣	樂為鄙事	於是長者	著弊垢衣
眇目矧陋	無威德者	汝可語之	云當相雇	除諸糞穢	倍與汝價	窮子聞之	歡喜隨來
何用衣食	使我至此	長者知子	愚癡狹劣	不信我言	不信是父	即以方便	更遣餘人
遙見其子	默而識之	即敕使者	追捉將來	窮子驚喚	迷悶蹙地	是人執我	必當見殺
或見逼迫	強驅使作	思惟是已	馳走而去	借問貧里	欲往備作	長者是時	在師子座
窮子見父	豪貴尊嚴	謂是國王	若是王等	驚怖自怪	何故至此	覆自念言	我若久住
施大寶帳	處師子座	眷屬圍繞	諸人侍衛	或有計算	金銀寶物	出內財產	注記券疏
庫藏諸物	當如之何	爾時窮子	求索衣食	從邑至邑	從國至國	或有所得	或無所得
飢餓羸瘦	體生瘡癬	漸次經歷	到父住城	備賃展轉	遂至父舍	爾時長者	於其門內
益憂念子	夙夜惟念	死時將至	癡子捨我	五十餘年			

日夜思惟	精勤修習	是時諸佛	即授其記	汝於來世	當得作佛	一切諸佛	祕藏之法
但爲菩薩	演其實事	而不爲我	說斯真要	如彼窮子	得近其父	雖知諸物	心不希取
我等雖說	佛法寶藏	自無志願	亦復如是	我等內滅	自謂爲足	唯了此事	更無餘事
我等若聞	淨佛國土	教化衆生	都無欣樂	所以者何	一切諸法	皆悉空寂	無生無滅
無大無小	無漏無爲	如是思惟	不生喜樂	我等長夜	於佛智慧	無貪無著	無復志願
而自於法	謂是究竟	我等長夜	修習空法	得脫三界	苦惱之患	住最後身	有餘涅槃
佛所教化	得道不虛	則爲已得	報佛之恩	我等雖爲	諸佛子等	說菩薩法	以求佛道
而於是法	永無願樂	導師見捨	觀我心故	初不勸進	說有實利	如富長者	知子志劣
以方便力	柔伏其心	然後乃付	一切財寶	佛亦如是	現希有事	知樂小者	以方便力
調伏其心	乃教大智	我等今日	得未曾有	非先所望	而今自得	如彼窮子	得無量寶
世尊我今	得道得果	於無漏法	得清淨眼	我等長夜	持佛淨戒	始於今日	得其果報
法王法中	久修梵行	今得無漏	無上大果	我等今者	真是聲聞	以佛道聲	令一切聞
我等今者	眞阿羅漢	於諸世間	天人魔梵	普於其中	應受供養	世尊大恩	以希有事
憐愍教化	利益我等	無量億劫	誰能報者	手足供給	頭頂禮敬	一切供養	皆不能報
若以頂戴	兩肩荷負	於恒沙劫	盡心恭敬	又以美饍	無量寶衣	及諸臥具	種種湯藥
牛頭栴檀	及諸珍寶	以起塔廟	寶衣布地	如斯等事	以用供養	於恒沙劫	亦不能報
諸佛希有	無量無邊	不可思議	大神通力	無漏無爲	諸法之王	能爲下劣	忍于斯事
取相凡夫	隨宜爲說	諸佛於法	得最自在	知諸衆生	種種欲樂	及其志力	隨所堪任
以無量喻	而爲說法	隨諸衆生	宿世善根	又知成熟	未成熟者	種種壽量	分別知已

於一乘道 隨宜說三

妙法蓮華經卷第二

信解品第四

妙法蓮華經卷第二

〔麗鳴〕宋鳳〔元鳳〕明草

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什奉

詔譯

品目上宋元俱
有妙法蓮華經
五字

藥草喻品第五

菓三本俱作果
下同○修宋元
俱作脩次同

爾時世尊告摩訶迦葉及諸大弟子。善哉善哉。迦葉。善說如來真實功德。誠如所言。如來復有無量無邊阿僧祇功德。汝等若於無量億劫說不能盡。迦葉當知。如來是諸法之王。若有所說皆不虛也。於一切法以智方便而演說之。其所說法。皆悉到於一切智地。如來觀知一切諸法之所歸趣。亦知一切衆生深心所行。通達無礙。又於諸法究盡明了。示諸衆生一切智慧。迦葉。譬如三千大千世界。山川谿谷土地所生卉木叢林。及諸藥草種類若干名色各異。密雲彌布徧覆三千大千世界。一時等澍其澤。普洽卉木叢林。及諸藥草。小根小莖小枝小葉。中根中莖中枝中葉。大根大莖大枝大葉。諸樹大小。隨上中下各有所受。一雲所雨。稱其種性而得生長。華菓敷實。雖一地所生。一雨所潤。而諸草木各有差別。迦葉。當知如來亦復如是。出現於世。如大雲起。以大音聲。普遍世界。天人阿修羅。如彼大雲。徧覆三千大千國土。於大衆中而唱是言。我是如來。應供正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。未度者令度。未解者令解。未安者令安。未涅槃者令得涅槃。今世後世。如實知之。我是一切知者。一切見者。知道者。開道者。說道者。汝等天人阿修羅衆。皆應到此。爲聽法故。爾時無數千萬億種衆生。來至佛所。而聽法。如來于時觀是衆生。諸根利鈍。精進懈怠。隨其所堪。而爲說法。種種無量。皆令歡喜。快得善利。是諸衆生。聞是法已。現世安隱。後生善處。以道受樂。亦得聞法。既聞法已。離諸障礙。於諸法中。任力所能。漸得入道。如彼大雲。雨於一切卉木叢林。及諸藥草。如其種性。具足蒙潤。各得生長。如來說法。一相一味。所謂解脫。相離相滅。相究竟。至於一切種智。其有衆生。

聞如來法。若持讀誦如說修行。所得功德不自覺知。所以者何。唯有如來。知此衆生種相體性。念何事。思何事。修何事。云何念。云何思。云何修。以何法念。以何法思。以何法修。以何法得何法。衆生住於種種之地。唯有如來。如實見之。明了無礙。如彼卉木叢林諸藥草等。而不自知上中下性。如來知是一相一味之法。所謂解脫相離相滅相。究竟涅槃常寂滅相。終歸於空。佛知是已。觀衆生心欲而將護之。是故不卽爲說一切種智。汝等迦葉。其爲希有。能知如來隨宜說法。能信能受。所以者何。有諸佛世尊隨宜說法難解難知。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言。

破有法王	出現世間	隨衆生欲	種種說法	如來尊重	智慧深遠	久默斯要	不務速說
有智若聞	則能信解	無智疑悔	則爲永失	是故迦葉	隨力爲說	以種種緣	令得正見
迦葉當知	譬如大雲	起於世間	遍覆一切	慧雲含潤	電光晃曜	雷聲遠震	令衆悅豫
日光掩蔽	地上清涼	雲霧垂布	如可承攬	其雨普等	四方俱下	流澍無量	率土充洽
山川險谷	幽邃所生	卉木藥草	大小諸樹	百穀苗稼	甘蔗蒲萄	雨之所潤	無不豐足
乾地普洽	藥木竝茂	其雲所出	一味之水	草木叢林	隨分受潤	一切諸樹	上中下等
稱其大小	各得生長	根莖枝葉	華菓光色	一雨所及	皆得鮮澤	如其體相	性分大小
所潤是一	而各滋茂	佛亦如是	出現於世	譬如大雲	普覆一切	既出于世	爲諸衆生
分別演說	諸法之實	大聖世尊	於諸天人	一切衆中	而宣是言	我爲如來	兩足之尊
出于世間	猶如大雲	充潤一切	枯槁衆生	皆令離苦	得安隱樂	世間之樂	及涅槃樂
諸天人衆	一心善聽	皆應到此	覲無上尊	我爲世尊	無能及者	安隱衆生	故現於世
爲大衆說	甘露淨法	其法一味	解脫涅槃	以一妙音	演暢斯義	常爲大乘	而作因緣
我觀一切	普皆平等	無有彼此	愛憎之心	我無貪著	亦無限礙	恒爲一切	平等說法

帝明作滴

如爲一人	衆多亦然	常演說法	曾無他事	去來坐立	終不疲厭	充足世間	如雨普潤
貴賤上下	持戒毀戒	威儀具足	及不具足	正見邪見	利根鈍根	等雨法雨	而無憊倦
一切衆生	聞我法者	隨力所受	住於諸地	或處入天	轉輸聖王	釋梵諸王	是小藥草
知無漏法	能得涅槃	起六神通	及得三明	獨處山林	常行禪定	得緣覺證	是中藥草
求世尊處	我當作佛	行精進定	是上藥草	又諸佛子	專心佛道	常行慈悲	自知作佛
決定無疑	是名小樹	安住神通	轉不退輪	度無量億	百千衆生	如是菩薩	名爲大樹
佛平等說	如一味雨	隨衆生性	所受不同	如彼草木	所稟各異	佛以此喻	方便開示
種種言辭	演說一法	於佛智慧	如海一滴	我雨法雨	充滿世間	一味之法	隨力修行
如彼叢林	藥草諸樹	隨其大小	漸增茂好	諸佛之法	常以一味	令諸世間	普得具足
漸次修行	皆得道果	聲聞緣覺	處於山林	住最後身	開法得果	是名藥草	各得增長
若諸菩薩	智慧堅固	了達三界	求最上乘	是名小樹	而得增長	復有住禪	得神通力
聞諸法空	心大歡喜	放無數光	度諸衆生	是名大樹	而得增長	如是迦葉	佛所說法
譬如大雲	以一味雨	潤於人華	各得成實	迦葉當知	以諸因緣	種種譬喻	開示佛道
是我方便	諸佛亦然	今爲汝等	說最實事	諸聲聞衆	皆非減度	汝等所行	是菩薩道
漸漸修學	悉當成佛						

妙法蓮華經授記品第六

品目上同無經
名次品亦同

爾時世尊說是偈已告諸大衆唱如是言我此弟子摩訶迦葉於未來世當得奉觀三百萬億諸佛世尊供養恭敬尊重讚歎廣宣諸佛無量大法於最後身得成爲佛名曰光明如來應供正遍知明行足善逝世間

解無上士調御丈夫天人師佛世尊。國名光德。劫名大莊嚴。佛壽十二小劫。正法住世二十小劫。像法亦住二十小劫。國界嚴飭無諸穢惡。瓦礫荆棘便利不淨。其土平正。無有高下坑坎堆阜。琉璃爲地寶樹行列。黃金爲繩以界道側。散諸寶華周遍清淨。其國菩薩無量千億。諸聲聞衆亦復無數。無有魔事。雖有魔及魔民。皆護佛法。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言

告諸比丘 我以佛眼 見是迦葉 於未來世 過無數劫 當得作佛 而於來世 供養奉觀

三百萬億 諸佛世尊 爲佛智慧 淨修梵行 供養最上 二足尊已 修習一切 無上之慧

於最後身 得成爲佛 其土清淨 琉璃爲地 多諸寶樹 行列道側 金繩界道 見者歡喜

常出好香 散衆名華 種種奇妙 以爲莊嚴 其地平正 無有丘坑 諸菩薩衆 不可稱計

其心調柔 逮大神道 奉持諸佛 大乘經典 諸聲聞衆 無漏後身 法王之子 亦不可計

乃以天眼 不能數知 其佛當壽 十二小劫 正法住世 二十小劫 像法亦住 二十小劫

光明世尊 其事如是

梅三本俱作旃
次同

爾時大目犍連。須菩提。摩訶迦旃延等。皆悉悚慄。一心合掌瞻仰尊願。目不暫捨。卽共同聲。而說偈言

大雄猛世尊 諸釋之法王 哀愍我等故 而賜佛音聲 若知我深心 見爲授記者

如以甘露灑 除熱得清涼 如從饑國來 忽遇大王饍 心猶懷疑懼 未敢卽便食

若復得王教 然後乃敢食 我等亦如是 每惟小乘過 不知當云何 得佛無上慧

雖聞佛音聲 言我等作佛 心尙懷憂懼 如未敢便食 若蒙佛授記 爾乃快安樂

大雄猛世尊 常欲安世間 願賜我等記 如飢須教食

爾時世尊。知諸大弟子心之所念。告諸比丘。是須菩提。於當來世。奉觀三百萬億那由他佛。供養恭敬尊重讚歎。常修梵行具菩薩道。於最後身得成爲佛。號曰名相如來。應供正遍知。明行足善逝。世間解。無上士調

御丈夫天人師佛世尊。劫名有寶。國名寶生。其土平正。頗梨為地。寶樹莊嚴。無諸丘坑沙磧荆棘便利之礙。寶華覆地。周遍清淨。其土人民。皆處寶臺。妙樓閣。聲聞弟子。無量無邊。算數譬喻。所不能知。諸菩薩眾。無數千萬億那由他。佛壽十二小劫。正法住世二十小劫。像法亦住二十小劫。其佛常處虛空。為眾說法。度脫無量菩薩及聲聞眾。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言。

諸比丘眾 今告汝等 皆當一心 聽我所說 我大弟子 須菩提者 當得作佛 號曰名相

當供無數 萬億諸佛 隨佛所行 漸具大道 最後身得 三十二相 端正殊妙 猶如寶山

其佛國土 嚴淨第一 衆生見者 無不愛樂 佛於其中 度無量衆 其佛法中 多諸菩薩

皆悉利根 轉不退輪 彼國常以 菩薩莊嚴 諸聲聞衆 不可稱數 皆得三明 具六神通

住八解脫 有大威德 其佛說法 現於無量 神通變化 不可思議 諸天人民 數如恒沙

皆共合掌 聽受佛語 其佛當壽 十二小劫 正法住世 二十小劫 像法亦住 二十小劫

爾時世尊復告諸比丘眾。我今語汝。是大迦旃延。於當來世。以諸供具。供養奉事。八千億佛。恭敬尊重。諸佛

滅後。各起塔廟。高千由旬。縱廣正等五百由旬。皆以金銀琉璃。砗磲碼碯。真珠玫瑰。七寶合成。衆華瓔珞。塗

香。抹香。燒香。繪蓋。幢幡。供養塔廟。過是已後。當復供養二萬億佛。亦復如是。供養是諸佛已。具菩薩道。當得

作佛。號曰閻浮那提金光。如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。其土平

正。頗梨為地。寶樹莊嚴。黃金為繩。以界道側。妙華覆地。周遍清淨。見者歡喜。無四惡道。地獄。餓鬼。畜生。阿修

羅道。多有天人。諸聲聞眾。及諸菩薩。無量萬億。莊嚴其國。佛壽十二小劫。正法住世二十小劫。像法亦住二

十小劫。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言。

諸比丘眾 皆一心聽 如我所說 真實無異 是迦旃延 當以種種 妙好供具 供養諸佛

諸佛滅後 起七寶塔 亦以華香 供養舍利 其最後身 得佛智慧 成等正覺 國土清淨

以上三本俱無
皆字次同

度脫無量 萬億衆生 皆爲十方 之所供養 佛之光明 無能勝者 其佛號曰 閻浮金光
菩薩聲聞 斷一切有 無量無數 莊嚴其國

梅宋元俱作旃

爾時世尊復告大衆。我今語汝。是大目犍連。當以種種供具供養八千諸佛恭敬尊重。諸佛滅後。各起塔廟。高千由旬。縱廣正等五百由旬。皆以金銀琉璃磚磑碼碯眞珠玫瑰七寶合成。衆華瓔珞塗香抹香燒香繪蓋幢幡。以用供養。過是已後。當復供養二百萬億諸佛。亦復如是。當得成佛。號曰多摩羅跋旃檀香如來應供。正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。劫名喜滿。國名意樂。其土平正。頗梨爲地。寶樹莊嚴。散眞珠華周遍清淨。見者歡喜。多諸天人菩薩聲聞。其數無量。佛壽二十四小劫。正法住世四十小劫。像法亦住四十小劫。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言。

梅宋明俱作旃

我此弟子 大目犍連 捨是身已 得見八千 二百萬億 諸佛世尊 爲佛道故 供養恭敬
於諸佛所 常修梵行 於無量劫 奉持佛法 諸佛滅後 起七寶塔 長表舍利 華香伎樂
而以供養 諸佛塔廟 漸漸具足 菩薩道已 於意樂國 而得作佛 號多摩羅 旃檀之香
其佛壽命 二十四劫 常爲天人 演說佛道 聲聞無量 如恒河沙 三明六通 有大威德
菩薩無數 志固精進 於佛智慧 皆不退轉 佛滅度後 正法當住 四十小劫 像法亦爾
我諸弟子 威德具足 其數五百 皆當授記 於未來世 咸得成佛 我及汝等 宿世因緣
吾今當說 汝等善聽

妙法蓮華經化城喻品第七

佛告諸比丘。乃往過去無量無邊不可思議阿僧祇劫。爾時有佛。名大通智勝。如來應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。其國名好成。劫名大相。諸比丘。彼佛滅度已來。甚大久遠。譬如

成三本俱作城

末同作抹下同

三千大千世界所有地種。假使有人磨以爲墨。過於東方千國土。乃下一點。大如微塵。又過千國土。復下一點。如是展轉盡地種墨。於汝等意云何。是諸國土。若算師若算師弟子。能得邊際知其數不。不也。世尊。諸比丘。是人所經國土。若點不點。盡末爲塵。一塵一劫。彼佛滅度已來。復過是數。無量無邊百千萬億阿僧祇劫。我以如來知見力故。觀彼久遠。猶若今日。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言。

我念過去世 無量無邊劫 有佛兩足尊 名大通智勝 如人以力磨 三千大千土

盡此諸地種 皆悉以爲墨 過於千國土 乃下一塵點 如是展轉點 盡此諸塵墨

如是諸國土 點與不點等 復盡末爲塵 一塵爲一劫 此諸微塵數 其劫復過是

彼佛滅度來 如是無量劫 如來無礙智 知彼佛滅度 及聲聞菩薩 如見今滅度

諸比丘當知 佛智淨微妙 無漏無所礙 通達無量劫

佛告諸比丘。大通智勝佛。壽五百四十萬億那由他劫。其佛本坐道場。破魔軍已。垂得阿耨多羅三藐三菩提。而諸佛法不現在前。如是一小劫。乃至十小劫。結加趺坐。身心不動。而諸佛法猶不在前。爾時。切利諸天。先爲彼佛於菩提樹下。敷師子座。高一由旬。佛於此座。當得阿耨多羅三藐三菩提。適坐此座。時諸梵天王。雨衆天華。面百由旬。香風時來。吹去萎華。更雨新者。如是不絕。滿十小劫。供養於佛。乃至滅度。常雨此華。四王諸天。爲供養佛。常擊天鼓。其餘諸天。作天伎樂。滿十小劫。至于滅度。亦復如是。諸比丘。大通智勝佛。過十小劫。諸佛之法。乃現在前。成阿耨多羅三藐三菩提。其佛未出家時。有十六子。其第一者。名曰智積。諸子各有種種珍異玩好之具。聞父得成阿耨多羅三藐三菩提。皆捨所珍。往詣佛所。諸母涕泣。而隨送之。其祖轉輪聖王。與一百大臣及餘百千萬億人民。皆共圍繞。隨至道場。咸欲親近大通智勝如來。供養恭敬。尊重讚歎。到已。頭面禮足。繞佛畢。已。一心合掌。瞻仰世尊。以偈頌曰。

劫三本俱作歲

加明作跏
座三本俱作坐

大威德世尊 爲度衆生故 於無量億劫 爾乃得成佛 諸願已具足 善哉吉無上

世尊甚希有 一坐十小劫 身體及手足 靜然安不動 其心常惛怕 未曾有散亂
究竟永寂滅 安住無漏法 今者見世尊 安隱成佛道 我等得善利 稱慶大歡喜
衆生常苦惱 盲瞶無導師 不識苦盡道 不知求解脫 長夜增惡趣 滅損諸天衆
從冥入於冥 永不聞佛名 今佛得最上 安隱無漏道 我等及天人 爲得最大利
是故咸稽首 歸命無上尊

爾時十六王子偈讚佛已，勸請世尊轉於法輪。咸作是言：世尊說法多所安隱，憐愍饒益諸天人民，重說偈言

世雄無等倫 百福自莊嚴 得無上智慧 願爲世間說 度脫於我等 及諸衆生類
爲分別顯示 令得是智慧 若我等得佛 衆生亦復然 世尊知衆生 深心之所念
亦知所行道 又知智慧力 欲樂及修福 宿命所行業 世尊悉知已 當轉無上輪
佛告諸比丘：大通智勝佛，得阿耨多羅三藐三菩提時，十方各五百萬億諸佛世界六種震動。其國中，閻浮提之處，日月威光所不能照，而皆大明。其中衆生各得相見，咸作是言：此中云何忽生衆生？又其國界諸天宮殿，乃至梵宮六種震動。大光普照，遍滿世界。勝諸天光。爾時東方五百萬億諸國土中，梵天宮殿光明照曜，倍於常明。諸梵天王各作是念：今者宮殿光明，昔所未有，以何因緣而現此相？是時諸梵天王，卽各相詣共議此事。時彼衆中，有一大梵天王，名救一切，爲諸梵衆，而說偈言

我等諸宮殿 光明昔未有 此是何因緣 宜各共求之 爲大德天生 爲佛出世間
而此大光明 遍照於十方

爾時五百萬億國土諸梵天王，與宮殿俱，各以衣被盛諸天華，共詣西方推尋是相。見大通智勝如來處于道場，菩提樹下坐師子座。諸天龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽人，非人等恭敬圍繞，及見十六王子請佛轉

唯三本俱作惟
下同○受同作
處

法輪。即時諸梵天王。頭而禮佛。繞百千匝。即以天華而散佛上。其所散華如須彌山。并以供養佛菩提樹。其菩提樹高十由旬。華供養已。各以宮殿奉上彼佛。而作是言。唯見哀愍饒益我等。所獻宮殿願垂納受。時諸梵天王。即於佛前一心同聲。以偈頌曰

世尊甚希有 難可得值遇 具無量功德 能救護一切 天人之大師 哀愍於世間

十方諸衆生 普皆蒙饒益 我等所從來 五百萬億國 捨深禪定樂 爲供養佛故

我等先世福 宮殿甚嚴飭 今以奉世尊 唯願哀納受

爾時諸梵天王。偈讚佛已。各作是言。唯願世尊。轉於法輪。度脫衆生。開涅槃道。時諸梵天王。一心同聲。而說偈言

世雄兩足尊 唯願演說法 以大慈悲力 度苦惱衆生

爾時大通智勝如來。默然許之。又諸比丘。東南方五百萬億國土。諸大梵王。各自見宮殿。光明照耀。昔所未有。歡喜踊躍。生希有心。即各相詣。共議此事。時彼衆中。有一大梵天王。名曰大悲。爲諸梵衆。而說偈言

是事何因緣 而現如此相 我等諸宮殿 光明昔未有 爲大德天生 爲佛出世間

未曾見此相 當共一心求 過千萬億土 尋光共推之 多是佛出世 度脫苦衆生

爾時五百萬億諸梵天王。與宮殿俱。各以衣被盛諸天華。共詣西北方推尋。是相。見大通智勝如來。處于道場。菩提樹下。坐師子座。諸天龍王。輒闍婆。緊那羅。摩睺羅伽人。非人等。恭敬圍繞。及見十六王子。請佛轉法輪。時諸梵天王。頭而禮佛。繞百千匝。即以天華而散佛上。所散之華如須彌山。并以供養佛菩提樹。華供養已。各以宮殿奉上彼佛。而作是言。唯見哀愍饒益我等。所獻宮殿願垂納受。爾時諸梵天王。即於佛前一心同聲。以偈頌曰

聖主天中王 迦陵頻伽聲 哀愍衆生者 我等今敬禮 世尊甚希有 久遠乃一現

一百八十劫。空過無有佛。三惡道充滿。諸天衆減少。今佛出於世。爲衆生作眼。世間所歸趣。救護於一切。爲衆生之父。哀愍饒益者。我等宿福慶。今得值世尊。爾時諸梵天王。偈讚佛已。各作是言。唯願世尊。哀愍一切。轉於法輪。度脫衆生。時諸梵天王。一心同聲。而說偈言。

大聖轉法輪。顯示諸法相。度苦惱衆生。令得大歡喜。衆生聞此法。得道若生天。

諸惡道減少。忍善者增益。

爾時大通智勝如來。默然許之。又諸比丘。南方五百萬億國土。諸大梵王。各自見宮殿。光明照耀。昔所未有。歡喜踊躍。生希有心。卽各相詣。共議此事。以何因緣。我等宮殿有此光曜。時彼衆中。有一大梵天王。名曰妙法。爲諸梵衆。而說偈言。

我等諸宮殿。光明甚威曜。此非無因緣。是相宜求之。過於百千劫。未曾見是相。

爲大德天生。爲佛出世間。

爾時五百萬億諸梵天王。與宮殿俱。各以衣被。盛諸天華。共詣北方。推尋是相。見大通智勝如來。處于道場。菩提樹下。坐師子座。諸天龍王。輒圍婆緊那羅摩睺羅伽人。非人等。恭敬圍繞。及見十六王子。請佛轉法輪。時諸梵天王。頭面禮佛。繞百千匝。卽以天華而散佛上。所散之華。如須彌山。并以供養佛菩提樹。華供養已。各以宮殿奉上。彼佛而作是言。唯見哀愍饒益我等。所獻宮殿。願垂納受。爾時諸梵天王。卽於佛前。一心同聲。以偈頌曰。

世尊甚難見。破諸煩惱者。過百三十劫。今乃得一見。諸飢渴衆生。以法雨充滿。

昔所未曾見。無量智慧者。如優曇鉢花。今日乃值遇。我等諸宮殿。蒙光故嚴飭。

世尊大慈悲。唯願垂納受。

見三本俱作觀
悲同作啟

爾時諸梵天王偈讚佛已。各作是言。唯願世尊。轉於法輪。令一切世間諸天魔梵沙門婆羅門。皆獲安隱。而得度脫。時諸梵天王。一心同聲。以偈頌曰。

唯願天人尊 轉無上法輪 擊于大法鼓 而吹大法螺 普雨大法雨 度無量衆生

我等咸歸請 當演深遠音

爾時大通智勝如來。默然許之。西南方乃至下方亦復如是。爾時上方五百萬億國土諸大梵王。皆悉自觀所止宮殿。光明威曜。昔所未有。歡喜踊躍。生希有心。即各相詣共議此事。以何因緣我等宮殿有斯光明。時彼衆中有一大梵天王。名曰尸棄。爲諸梵衆。而說偈言。

今以何因緣 我等諸宮殿 威德光明曜 嚴飭未曾有 如是之妙相 昔所未聞見

爲大德天生 爲佛出世間

爾時五百萬億諸梵天王。與宮殿俱。各以衣被盛諸天華。共詣下方推尋是相。見大通智勝如來處于道場。菩提樹下。坐師子座。諸天龍王。輒闍婆緊那羅摩睺羅伽人。非人等恭敬圍繞。及見十六王子。請佛轉法輪。時諸梵天王。頭面禮佛。繞百千匝。即以天華而散佛上。所散之花。如須彌山。并以供養佛菩提樹。花供養已。各以宮殿奉上彼佛。而作是言。唯見哀愍饒益我等。所獻宮殿願垂納受。時諸梵天王。即於佛前一心同聲。以偈頌曰。

善哉見諸佛 救世之聖尊 能從三界獄 勉出諸衆生 普智天人尊 哀愍羣萌類

能開甘露門 廣度於一切 於昔無量劫 空過無有佛 世尊未出時 十方常暗冥

三惡道增長 阿修羅亦盛 諸天衆轉滅 死多墮惡道 不從佛聞法 常行不善事

色力及智慧 斯等皆減少 罪業因緣故 失樂及樂想 住於邪見法 不識善儀則

不蒙佛所化 常墮於惡道 佛爲世間眼 久遠時乃出 哀愍諸衆生 故現於世間

暗冥同作闇冥

受三本俱作處

超出成正覺 我等甚欣慶 及餘一切衆 喜歎未曾有 我等諸宮殿 蒙光故嚴飾
今以奉世尊 唯垂哀納受 願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成佛道

爾時五百萬億諸梵天王偈讚佛已各白佛言。唯願世尊轉於法輪。多所安隱。多所度脫。時諸梵天王而說偈言。

世尊轉法輪 擊甘露法鼓 度苦惱衆生 開示涅槃道 唯願受我請 以大微妙音

哀愍而敷演 無量劫習法

爾時大通智勝如來。受十方諸梵天王及十六王子請。卽時三轉十二行法輪。若沙門婆羅門。若天魔梵及餘世間。所不能轉。謂是苦。是苦集。是苦滅。是苦滅道。及廣說十二因緣法。無明緣行。行緣識。緣名色。名色緣六入。六入緣觸。觸緣受。受緣愛。愛緣取。取緣有。有緣生。生緣老死憂悲苦惱。無明滅則行滅。行滅則識滅。識滅則名色滅。名色滅則六入滅。六入滅則觸滅。觸滅則受滅。受滅則愛滅。愛滅則取滅。取滅則有滅。有滅則生滅。生滅則老死憂悲苦惱滅。佛於天人大衆之中。說是法時。六百萬億那由他人。以不受一切法故。而於諸漏心得解脫。皆得深妙禪定。三明六通。具八解脫。第二第三第四說法時。千萬億恒河沙那由他等衆生。亦以不受一切法故。而於諸漏心得解脫。從是已後。諸聲聞衆。無量無邊不可稱數。爾時十六王子。皆以童子出家。而爲沙彌。諸根通利智慧明了。已曾供養百千萬億諸佛。淨修梵行。求阿耨多羅三藐三菩提。俱白佛言。世尊。是諸無量千萬億大德聲聞。皆已成就世尊。亦當爲我等說阿耨多羅三藐三菩提法。我等聞已。皆共修學。世尊。我等志願如來知見。深心所念。佛自證知。爾時轉輪聖王。所將衆中八萬億人。見十六王子出家。亦求出家。王卽聽許。爾時彼佛。受沙彌請。過二萬劫已。乃於四衆之中。說是大乘經。名妙法蓮華。教菩薩法。佛所護念。說是經已。十六沙彌。爲阿耨多羅三藐三菩提故。皆共受持諷誦通利。說是經時。十六菩薩沙彌。皆悉信受。聲聞衆中。亦有信解。其餘衆生。千萬億種。皆生疑惑。佛說是經。於八千劫。未曾休廢。說此

四下三本俱無
百字

梅宋作旃

經已卽入靜室。住於禪定。八萬四千劫。是時十六菩薩沙彌。知佛入室。寂然禪定。各昇法座。亦於八萬四千劫。爲四部衆廣說分別妙法華經。一一皆度六百萬億那由他恒河沙等衆生。示教利喜。令發阿耨多羅三藐三菩提心。大通智勝佛。過八萬四千劫已。從三昧起。往詣法座安詳而坐。普告大衆。是十六菩薩沙彌。甚爲希有。諸根通利智慧明了。已曾供養無量千萬億數諸佛。於諸佛所常修梵行。受持佛智開示衆生。令入其中。汝等皆當數數親近而供養之。所以者何。若聲聞辟支佛及諸菩薩。能信是十六菩薩所說經法。受持不毀者。是人皆當得阿耨多羅三藐三菩提。如來之慧。佛告諸比丘。是十六菩薩常樂說是妙法蓮華經。一菩薩所化六百萬億那由他恒河沙等衆生。世世所生與菩薩俱。從其聞法悉皆信解。以此因緣。得值四百萬億諸佛。尊子今不盡。諸比丘。我今語汝。彼佛弟子十六沙彌。今皆得阿耨多羅三藐三菩提。於十方國土。現在說法。有無量百千萬億菩薩聲聞。以爲眷屬。其二沙彌東方作佛。一名阿閼。在歡喜國。二名須彌頂。東南方二佛。一名師子音。二名師子相。南方二佛。一名虛空住。二名常滅。西南方二佛。一名帝相。二名梵相。西方二佛。一名阿彌陀。二名度一切世間苦惱。西北方二佛。一名多摩羅跋梅檀香神通。二名須彌相。北方二佛。一名雲自在。二名雲自在王。東北方佛名壞一切世間怖畏。第十六我釋迦牟尼佛。於娑婆國土。成阿耨多羅三藐三菩提。諸比丘。我等爲沙彌時。各各教化無量百千萬億恒河沙等衆生。從我聞法爲阿耨多羅三藐三菩提。此諸衆生。子今有住聲聞地者。我當教化阿耨多羅三藐三菩提。是諸人等。應以是法漸入佛道。所以者何。如來智慧難信難解。爾時所化無量恒河沙等衆生者。汝等諸比丘及我滅度後。未來世中聲聞弟子是也。我滅度後。復有弟子不聞是經。不知不覺菩薩所行。自於所得功德生滅度想。當入涅槃。我於餘國作佛。更有異名。是人雖生滅度之想。入於涅槃。而於彼土求佛智慧。得聞是經。唯以佛乘而得滅度。更無餘乘。除諸如來方便說法。諸比丘。若如來自知涅槃時到。衆又清淨信解堅固。了達空法。深入禪定。便集諸菩薩及聲聞衆。爲說是經。世間無有二乘而得滅度。唯一佛乘得滅度耳。比丘當知。如來方便深入

衆生之性。知其志樂小法深著五欲。爲是等故說於涅槃。是人若聞則便信受。譬如五百由旬險難惡道。曠絕無人怖畏之處。若有多衆。欲過此道至珍寶處。有一導師。聰慧明達。善知險道通塞之相。將導衆人。欲過此難。所將人衆。中路懈怠。白導師言。我等疲極而復怖畏。不能復進。前路猶遠。今欲退還。導師多諸方便。而作是念。此等可愍。云何捨大珍寶而欲退還。作是念已。以方便力。於險道中過三百由旬。化作一城。告衆人言。汝等勿怖。莫得退還。今此大城。可於中止。隨意所作。若入是城。快得安隱。若能前至寶所。亦可得去。是時疲極之衆。心大歡喜。歎未曾有。我等今者。免斯惡道。快得安隱。於是衆人。前入化城。生已度想。生安隱想。爾時導師。知此人衆。既得止息。無復疲倦。卽滅化城。語衆人言。汝等去來寶處。在近。向者大城。我所化作爲止息耳。諸比丘。如來亦復如是。今爲汝等作大導師。知諸生死煩惱。惡道險難。長遠應去。應度。若衆生但聞一佛乘者。則不欲見佛。不欲親近。便作是念。佛道長遠。久受勤苦。乃可得成。佛知是心怯弱下劣。以方便力。而於中道爲止息。故說二涅槃。若衆生住於二地。如來爾時卽便爲說。汝等所作未辦。汝所住地。近於佛慧。當觀察籌量。所得涅槃。非真實也。但是如來方便之力。於一佛乘分別說三。如彼導師爲止息。故化作大城。既知息已。而告之言。寶處在近。此城非實。我化作耳。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言。

大通智勝佛	十劫坐道場	佛法不現前	不得成佛道	諸天神龍王	阿修羅衆等
常雨於天華	以供養彼佛	諸天擊天鼓	并作衆伎樂	香風吹萎華	更雨新好者
過十小劫已	乃得成佛道	諸天及世人	心皆懷踊躍	彼佛十六子	皆與其眷屬
千萬億圍繞	俱行至佛所	頭面禮佛足	而請轉法輪	聖師子法雨	充我及一切
世尊甚難值	久遠時一現	爲覺悟羣生	震動於一切	東方諸世界	五百萬億國
梵宮殿光曜	昔所未曾有	諸梵見此相	尋來至佛所	散華以供養	并奉上宮殿
請佛轉法輪	以偈而讚歎	佛知時未至	受請默然坐	三方及四維	上下亦復爾

大三本俱作本

散華奉宮殿	請佛轉法輪	世尊甚難值	願以大慈悲	廣開甘露門	轉無上法輪
無量慧世尊	受彼衆人請	爲宣種種法	四諦十二緣	無明至老死	皆從生緣有
如是衆過患	汝等應當知	宣暢是法時	六百萬億姪	得盡諸苦際	皆成阿羅漢
第二說法時	千萬恒沙衆	於諸法不受	亦得阿羅漢	從是後得度	其數無有量
萬億劫算數	不能得其邊	時十六王子	出家作沙彌	皆共請彼佛	演說大乘法
我等及營從	皆當成佛道	願得如世尊	慧眼第一淨	佛知童子心	宿世之所行
以無量因緣	種種諸譬喻	說六波羅蜜	及諸神通事	分別真實法	菩薩所行道
說是法華經	如恒河沙偈	彼佛說經已	靜室入禪定	一心一處坐	八萬四千劫
是諸沙彌等	知佛禪未出	爲無量億衆	說佛無上慧	各各坐法座	說是大乘經
於佛宴寂後	宣揚助法化	一一沙彌等	所度諸衆生	有六百萬億	恒河沙等衆
彼佛滅度後	是諸聞法者	在在諸佛土	常與師俱生	是十六沙彌	具足行佛道
今現在十方	各得成正覺	爾時聞法者	各在諸佛所	其有住聲聞	漸教以佛道
我在十六數	曾亦爲汝說	是故以方便	引汝趣佛慧	以是本因緣	今說法華經
令汝入佛道	慎勿懷驚懼	譬如險惡道	迴絕多毒獸	又復無水草	人所怖畏處
無數千萬衆	欲過此險道	其路甚曠遠	經三百由旬	時有一導師	強識有智慧
明了心決定	在險濟衆難	衆人皆疲倦	而白導師言	我等今頓乏	於此欲退還
導師作是念	此輩甚可愍	如何欲退還	而失大珍寶	尋時思方便	當設神通力
化作大城郭	莊嚴諸舍宅	周匝有園林	渠流及浴池	重門高樓閣	男女皆充滿
卽作是化已	慰衆言勿懼	汝等入此城	各可隨所樂	諸人旣入城	心皆大歡喜

三同作五

皆生安隱想	自謂已得度	導師知息已	集衆而告言	汝等當前進	此是化城耳
我見汝疲極	中路欲退還	故以方便力	權化作此城	汝等勤精進	當共至寶所
我亦復如是	爲一切導師	見諸求道者	中路而懈廢	不能度生死	煩惱諸險道
故以方便力	爲息說涅槃	言汝等苦滅	所作皆已辦	既知到涅槃	皆得阿羅漢
爾乃集大衆	爲說眞實法	諸佛方便力	分別說三乘	唯有一佛乘	息處故說二
今爲汝說實	汝所得非滅	爲佛一切智	當發大精進	汝證一切智	十力等佛法
具三十二相	乃是眞實滅	諸佛之導師	爲息說涅槃	既知是息已	引入於佛慧

妙法蓮華經卷第三

妙法蓮華經卷第四

〔麗鳴〕宋鳳三元鳳〔明草〕

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什奉 詔譯

五百弟子受記品第八

品目上宋元俱
有妙法蓮華經
五字

爾時富樓那彌多羅尼子。從佛聞是智慧方便隨宜說法。又聞授諸大弟子阿耨多羅三藐三菩提記。復聞宿世因緣之事。復聞諸佛有自在神通之力。得未曾有心淨踊躍。卽從座起到於佛前。頭面禮足。却住一面。瞻仰尊顏。目不暫捨。而作是念。世尊甚奇特。所爲希有。隨順世間若干種性。以方便知見。而爲說法。拔出衆生。處處貪著。我等於佛功德。言不能宣。唯佛世尊。能知我等深心本願。爾時佛告諸比丘。汝等見是富樓那彌多羅尼子不。我常稱其於說法人中最爲第一。亦常歎其種種功德。精勤護持助宣我法。能於四衆示教利喜。具足解釋佛之正法。而大饒益同梵行者。自捨如來。無能盡其言論之辯。汝等勿謂富樓那但能護持助宣我法。亦於過去九十億諸佛所。護持助宣佛之正法。於彼說法人中亦最第一。又於諸佛所說空法。明了通達。得四無礙智。常能審諦清淨說法。無有疑惑。具足菩薩神通之力。隨其壽命。常修梵行。彼佛世人咸皆謂之實是聲聞。而富樓那以斯方便。饒益無量百千衆生。又化無量阿僧祇人。令立阿耨多羅三藐三菩提。爲淨佛土故。常作佛事。教化衆生。諸比丘。富樓那亦於七佛說法人中而得第一。今於我所說法人中亦爲第一。於賢劫中。當來諸佛說法人中亦復第一。而皆護持助宣佛法。亦於未來護持助宣無量無邊諸佛之法。教化饒益無量衆生。令立阿耨多羅三藐三菩提。爲淨佛土故。常勤精進教化衆生。漸漸具足菩薩之道。過無量阿僧祇劫。當於此土得阿耨多羅三藐三菩提。號曰法明如來。應供正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。其佛以恒河沙等三千大千世界爲一佛土。七寶爲地。地平如掌。無有

山陵谿澗溝壑七寶臺觀充滿其中。諸天宮殿近處虛空。人天交接兩得相見。無諸惡道亦無女人。一切衆生皆以化生。無有婬欲得大神通。身出光明飛行自在。志念堅固精進智慧。普皆金色三十二相。而自莊嚴。其國衆生常以二食。一者法喜食。二者禪悅食。有無量阿僧祇千萬億那由他諸菩薩衆。得大神通四無礙智。善能教化衆生之類。其聲聞衆。算數校計所不能知。皆得具足六通三明及八解脫。其佛國土。有如是等無量功德莊嚴成就。劫名寶明。國名善淨。其佛壽命無量阿僧祇劫。法住甚久。佛滅度後。起七寶塔遍滿其國。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言。

諸比丘諦聽 佛子所行道 善學方便故 不可得思議 知衆樂小法 而畏於大智

是說諸菩薩 作聲聞緣覺 以無數方便 化諸衆生類 自說是聲聞 去佛道甚遠

度脫無量衆 皆悉得成就 雖少欲懈怠 漸當令作佛 內祕菩薩行 外現是聲聞

少欲厭生死 實是淨佛土 示衆有三毒 又現邪見相 我弟子如是 方便度衆生

若我具足說 種種現化事 衆生聞是者 心則懷疑惑 今此富樓那 於昔千億佛

勤修所行道 宣護諸佛法 爲求無上慧 而於諸佛所 現居弟子上 多聞有智慧

所說無所畏 能令衆歡喜 未會有疲倦 而以助佛事 已度大神通 具四無礙智

知諸根利鈍 常說清淨法 演暢如是義 教諸千億衆 令住大乘法 而自淨佛土

未來亦供養 無量無數佛 護助宣正法 亦自淨佛土 常以諸方便 說法無所畏

度不可計衆 成就一切智 供養諸如來 護持法寶藏 其後得成就 號名曰法明

其國名善淨 七寶所合成 劫名爲寶明 菩薩衆甚多 其數無量億 皆度大神通

威德力具足 充滿其國土 聲聞亦無數 三明八解脫 得四無礙智 以是等爲僧

其國諸衆生 婬欲皆已斷 純一變化生 具相莊嚴身 法喜禪悅食 更無餘食想

憺三本俱作倦
下同

無有諸女人 亦無諸惡道 富樓那比丘 功德悉成滿 當得斯淨土 賢聖衆甚多

如是無量事 我今但略說

爾時千二百阿羅漢心自在者作是念我等歡喜得未曾有若世尊各見授記如餘大弟子者不亦快乎佛知此等心之所念告摩訶迦葉是千二百阿羅漢我今當現前次第與授阿耨多羅三藐三菩提記於此衆中我大弟子憍陳如比丘當供養六萬二千億佛然後得成爲佛號曰普明如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊其五百阿羅漢優樓頻螺迦葉伽耶迦葉那提迦葉迦留陀夷優陀夷阿菴樓駄離婆多劫賓那薄拘羅周陀莎伽陀等皆當得阿耨多羅三藐三菩提盡同一號名曰普明爾時世尊欲重宣此義而說偈言

憍陳如比丘 當見無量佛 過阿僧祇劫 乃成等正覺 當放大光明 具足諸神通

名聞遍十方 一切之所敬 常說無上道 故號爲普明 其國土清淨 菩薩皆勇猛

威昇妙樓閣 遊諸十方國 以無上供具 奉獻於諸佛 作是供養已 心懷大歡喜

須臾還本國 有如是神力 佛壽六萬劫 正法住倍壽 像法復倍是 法滅天人憂

其五百比丘 次第當作佛 同號曰普明 轉次而授記 我滅度之後 某甲當作佛

其所化世間 亦如我今日 國土之嚴淨 及諸神通力 菩薩聲聞衆 正法及像法

壽命劫多少 皆如上所說 迦葉汝已知 五百自在者 餘諸聲聞衆 亦當復如是

其不在此會 汝當爲宣說

受明作授

爾時五百阿羅漢於佛前得授記已歡喜踊躍卽從座起到於佛前頭面禮足悔過自責世尊我等常作是念自謂已得究竟滅度今乃知之如無智者所以者何我等應得如來智慧而便自以小智爲足世尊譬如有人至親友家醉酒而臥是時親友官事當行以無價寶珠繫其衣裏與之而去其人醉臥都不覺知起已

遊行到於他國。爲衣食故。勤力求索。甚大艱難。若少有所得。便以爲足。於後親友會遇見之。而作是言。咄哉丈夫。何爲衣食。乃至如是。我昔欲令汝得安樂。五欲自恣。於某年日月。以無價寶珠。繫汝衣裏。今故現在。而汝不知。勤苦憂惱。以求自活。甚爲癡也。汝今可以此寶貿易。所須常可如意。無所乏短。佛亦如是。爲菩薩時。教化我等。令發一切智心。而尋廢忘。不知不覺。既得阿羅漢道。自謂滅度。資生艱難。得少爲足。一切智願。猶在不失。今者世尊覺悟我等。作如是言。諸比丘。汝等所得非究竟滅。我久令汝等種佛善根。以方便力。故示涅槃相。而汝謂爲實得滅度。世尊。我今乃知實是菩薩。得受阿耨多羅三藐三菩提。記。以是因緣。甚大歡喜。得未曾有。爾時阿若憍陳如等。欲重宣此義。而說偈言。

我等聞無上	安隱授記聲	歡喜未曾有	禮無量智佛	今於世尊前	自悔諸過咎
於無量佛寶	得少涅槃分	如無智愚人	便自以爲足	譬如貧窮人	往至親友家
其家甚大富	具設諸餽饈	以無價寶珠	繫著內衣裏	默與而捨去	時臥不覺知
是人既已起	遊行詣他國	求衣食自濟	資生甚艱難	得少便爲足	更不願好者
不覺內衣裏	有無價寶珠	與珠之親友	後見此貧人	苦切責之已	示以所繫珠
貧人見此珠	其心大歡喜	富有諸財物	五欲而自恣	我等亦如是	世尊於長夜
常愍見教化	令種無上願	我等無智故	不覺亦不知	得少涅槃分	自足不求餘
今佛覺悟我	言非實滅度	得佛無上慧	爾乃爲真滅	我今從佛聞	授記莊嚴事
及轉次受決	身心遍歡喜				

妙法蓮華經授學無學人記品第九

爾時阿難羅睺維。而作是念。我等每自思惟。設得受記。不亦快乎。卽從座起到於佛前。頭面禮足。俱白佛言。

品目上明無經
名下同

季三本俱作授

修宋元俱作脩
下同

世尊。我等於此亦應有分。唯有如來我等所歸。又我等爲一切世間天人阿修羅所見知識。阿難常爲侍者。護持法藏。羅睺羅是佛之子。若佛見授阿耨多羅三藐三菩提記者。我願旣滿衆亦足。爾時學無學聲聞弟子二千人。皆從座起。偏袒右肩。到於佛前。一心合掌。瞻仰世尊。如阿難羅睺羅所願。住立一面。爾時佛告阿難。汝於來世當得作佛。號山海慧自在通王。如來應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。當供養六十二億諸佛。護持法藏。然後得阿耨多羅三藐三菩提。教化二十千萬億恒河沙諸菩薩等。令成阿耨多羅三藐三菩提。國名常立勝幢。其土清淨。琉璃爲地。劫名妙音遍滿。其佛壽命。無量千萬億阿僧祇劫。若人於千萬億無量阿僧祇劫中。算數校計不能得知。正法住世倍於壽命。像法住世復倍正法。阿難。是山海慧自在通王佛。爲十方無量千萬億恒河沙等諸佛如來。所共讚歎。稱其功德。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言。

我今僧中說 阿難持法者 當供養諸佛 然後成正覺 號曰山海慧 自在通王佛
其國土清淨 名常立勝幢 教化諸菩薩 其數如恒沙 佛有大威德 名聞滿十方
壽命無有量 以愍衆生故 正法倍壽命 像法復倍是 如恒河沙等 無數諸衆生
於此佛法中 種佛道因緣

爾時會中新發意菩薩八千人。咸作是念。我等尙不聞諸大菩薩得如是記。有何因緣。而諸聲聞得如是決。爾時世尊。知諸菩薩心之所念。而告之曰。諸善男子。我與阿難等。於空王佛所。同時發阿耨多羅三藐三菩提心。阿難常樂多聞。我常勤精進。是故我已得成阿耨多羅三藐三菩提。而阿難護持我法。亦護將來諸佛法藏。教化成就諸菩薩衆。其本願如是。故獲斯記。阿難面於佛前。自聞授記及國土莊嚴。所願具足。心大歡喜。得未曾有。即時憶念過去無量千萬億諸佛法藏。通達無礙。如今所聞。亦識本願。爾時阿難。而說偈言。

世尊甚希有 令我念過去 無量諸佛法 如今日所聞 我今無復疑 安住於佛道

方便爲侍者 護持諸佛法

爾時佛告羅睺羅。汝於來世當得作佛。號蹈七寶華。如來應供。正遍知。明行足。善逝世間。解無上士調御丈夫。天人師。佛世尊。當供養十世界微塵等數諸佛。如來。常爲諸佛而作長子。猶如今也。是蹈七寶華佛。國土莊嚴。壽命劫數。所化弟子。正法像法。亦如山海慧自在通王。如來無異。亦爲此佛而作長子。過是已後。當得阿耨多羅三藐三菩提。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

我爲太子時 羅睺爲長子 我今成佛道 受法爲法子 於未來世中 見無量億佛
皆爲其長子 一心求佛道 羅睺羅密行 唯我能知之 現爲我長子 以示諸衆生
無量億千萬 功德不可數 安住於佛法 以求無上道

爾時世尊。見學無學二千人。其意柔軟。寂然清淨。一心觀佛。佛告阿難。汝見是學無學二千人。唯然已見。阿難。是諸人等。當供養五十世界微塵數諸佛。如來。恭敬尊重。護持法藏。末後同時。於十方國各得成佛。皆同一號。名曰寶相。如來應供。正遍知。明行足。善逝世間。解無上士調御丈夫。天人師。佛世尊。壽命一劫。國土莊嚴。聲聞菩薩。正法像法。皆悉同等。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

是二千聲聞 今於我前住 悉皆與授記 未來當成佛 所供養諸佛 如上說塵數
護持其法藏 後當成正覺 各於十方國 悉同一名號 俱時坐道場 以證無上慧
皆名爲寶相 國土及弟子 正法與像法 悉等無有異 咸以諸神通 度十方衆生
名聞普周遍 漸入於涅槃

爾時學無學二千人。聞佛授記。歡喜踊躍。而說偈言。

世尊慧燈明 我聞授記音 心歡喜充滿 如甘露見灌

妙法蓮華經法師品第十

爾時世尊。因藥王菩薩。告八萬大士。藥王。汝見是大衆中無量諸天龍王。夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人與非人。及比丘比丘尼。優婆塞。優婆夷。求聲聞者。求辟支佛者。求佛道者。如是等類。咸於佛前。聞妙法華經一偈一句。乃至一念。隨喜者。我皆與授記。當得阿耨多羅三藐三菩提。佛告藥王。又如來滅度之後。若有人聞妙法華經。乃至一偈一句。一念。隨喜者。我亦與授阿耨多羅三藐三菩提記。若復有人。受持讀誦。解說書寫妙法華經。乃至一偈。於此經卷。敬視如佛。種種供養。華香瓔珞。抹香塗香。燒香。繪蓋。幢幡。衣服。伎樂。乃至合掌恭敬。藥王。當知。是諸人等。已曾供養十萬億佛。於諸佛所。成就大願。愍衆生。故生此人間。藥王。若有人問。何等衆生。於未來世。當得作佛。應示是諸人等。於未來世。必得作佛。何以故。若善男子。善女人。於法華經。乃至一句。受持讀誦。解說書寫。種種供養經卷。華香瓔珞。抹香塗香。燒香。繪蓋。幢幡。衣服。伎樂。合掌恭敬。是人一切世間。所應瞻奉。應以如來供養。而供養之。當知此人。是大菩薩。成就阿耨多羅三藐三菩提。哀愍衆生。願生此間。廣演分別妙法華經。何況盡能受持種種供養者。藥王。當知。是人自捨清淨業報。於我滅度後。愍衆生。故。生於惡世。廣演此經。若是善男子。善女人。我滅度後。能竊爲一人說法。華經乃至一句。當知是人。則如來使。如來所遣。行如來事。何況於大衆中。廣爲人說。藥王。若有惡人。以不善心。於一劫中。現於佛前。常毀罵佛。其罪尚輕。若人以一惡言。毀謗在家出家。讀誦法華經者。其罪甚重。藥王。其有讀誦法華經者。當知是人。以佛莊嚴。而自莊嚴。則爲如來所荷擔。其所至方。應隨向禮。一心合掌恭敬。供養。尊重讚歎。華香瓔珞。抹香塗香。燒香。繪蓋。幢幡。衣服。繡像。作諸伎樂。人中上供。而供養之。應持天寶。而以散之。天上寶聚。應以奉獻。所以者何。是人歡喜說法。須臾聞之。即得究竟阿耨多羅三藐三菩提。故。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

若欲住佛道	成就自然智	常當勤供養	受持法華者	其有欲疾得	一切種智慧
當受持是經	并供養持者	若有能受持	妙法華經者	當知佛所使	愍念諸衆生
諸有能受持	妙法華經者	捨於清淨土	愍衆故生此	當知如是人	自在所欲生
能於此惡世	廣說無上法	應以天華香	及天寶衣服	天上妙寶聚	供養說法者
吾滅後惡世	能持是經者	當合掌禮敬	如供養世尊	上饌衆甘美	及種種衣服
供養是佛子	冀得須臾聞	若能於後世	受持是經者	我遣在人中	行於如來事
若於一劫中	常懷不善心	作色而罵佛	獲無量重罪	其有讀誦持	是法華經者
須臾加惡言	其罪復過彼	有人求佛道	而於一劫中	合掌在我前	以無數偈讚
由是讚佛故	得無量功德	歎美持經者	其福復過彼	於八十億劫	以最妙色聲
及與香味觸	供養持經者	如是供養已	若得須臾聞	則應自欣慶	我今獲大利
藥王今告汝	我所說諸經	而於此經中	法華最第一		

爾時佛復告藥王菩薩摩訶薩。我所說經典無量千萬億。已說今說當說。而於其中。此法華經最爲難信難解。藥王。此經是諸佛祕要之藏。不可分布妄授與人。諸佛世尊之所守護。從昔已來未曾顯說。而此經者。如來現在猶多怨嫉。況滅度後。藥王當知。如來滅後。其能書持讀誦供養爲他人說者。如來則爲以衣覆之。又爲他方現在諸佛之所護念。是人有大信力及志願力。諸善根力。當知是人與如來共宿。則爲如來手摩其頭。藥王。在在處處。若說若讀若誦若書。若經卷所住處。皆應起七寶塔。極令高廣嚴飭。不須復安舍利。所以者何。此中已有如來全身。此塔應以一切華香瓔珞繪蓋幢幡伎樂歌頌。供養恭敬尊重讚歎。若有人得見此塔禮拜供養。當知是人皆近阿耨多羅三藐三菩提。藥王。多有人在家出家行菩薩道。若不能得見聞讀誦書持供養是法華經者。當知是人未善行菩薩道。若有得聞是經典者。乃能善行菩薩之道。其有衆生求

經下三本俱無者字

佛道者。若見若聞是法華經。聞已信解受持者。當知是人得近阿耨多羅三藐三菩提。藥王。譬如有人渴乏須水。於彼高原穿鑿求之。猶見乾土。知水尚遠。施功不已。轉見濕土。遂漸至泥。其心決定。知水必近。菩薩亦復如是。若未聞未解。未能修習。是法華經諸。當知是人去阿耨多羅三藐三菩提尚遠。若得聞解思惟修習。必知得近阿耨多羅三藐三菩提。所以者何。一切菩薩阿耨多羅三藐三菩提皆屬此經。此經開方便門。示真實相。是法華經藏深固幽遠。無人能到。今佛教化成就菩薩。而為開示。藥王。若有菩薩。聞是法華經。驚疑怖畏。當知是為新發意菩薩。若聲聞人。聞是經。驚疑怖畏。當知是為增上慢者。藥王。若有善男子善女人。如來滅後。欲為四眾說是法華經者。云何應說。是善男子善女人。入如來室。著如來衣。坐如來座。爾乃應為四眾廣說斯經。如來室者。一切眾生中大慈悲心是。如來衣者。柔和忍辱心是。如來座者。一切法空是。安住是中。然後以不懈怠心。為諸菩薩及四眾廣說是法華經。藥王。我於餘國遣化人。為其集聽法眾。亦遣化比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。聽其說法。是諸化人。聞法信受。隨順不逆。若說法者在空閑處。我時廣遣天龍鬼神。乾闥婆。阿修羅等。聽其說法。我雖在異國。時時令說法者得見我身。若於此經忘失句逗。我還為說。令得具足。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

欲捨諸懈怠	應當聽此經	是經難得聞	信受者亦難	如人渴須水	穿鑿於高原
猶見乾燥土	知去水尚遠	漸見濕土泥	決定知近水	藥王汝當知	如是諸人等
不聞法華經	去佛智甚遠	若聞是深經	決了聲聞法	是諸經之王	聞已諦思惟
當知此人等	近於佛智慧	若人說此經	應入如來室	著於如來衣	而坐如來座
處眾無所畏	廣為分別說	大慈悲為室	柔和忍辱衣	諸法空為座	處此為說法
若說此經時	有人惡口罵	加刀杖瓦石	念佛故應忍	我千萬億土	現淨堅固身
於無量億劫	為眾生說法	若我滅度後	能說此經者	我遣化四眾	比丘比丘尼

通明作讀

信四本俱作淨

及清信士女	供養於法師	引導諸衆生	集之令聽法	若人欲加惡	刀杖及瓦石
則遣變化人	爲之作衛護	若說法之人	獨在空閑處	寂寞無人聲	讀誦此經典
我爾時爲現	清淨光明身	若忘失章句	爲說令通利	若人具是德	或爲四衆說
空處讀誦經	皆得見我身	若人在空閑	我遣天龍王	夜叉鬼神等	爲作聽法衆
是人樂說法	分別無罣礙	諸佛護念故	能令大衆喜	若親近法師	速得菩薩道
隨順是師學	得見恒沙佛				

妙法蓮華經見寶塔品第十一

節三本俱作涌
下同
梅宋元俱作旃

爾時佛前有七寶塔。高五百由旬。縱廣二百五十由旬。從地踊出。住在空中。種種寶物而莊校之。五千欄楯。龕室千萬。無數幢幡。以爲嚴飾。垂寶瓔珞。寶鈴萬億。而懸其上。四面皆出多摩羅跋梅檀之香。充滿世界。其諸幡蓋。以金銀琉璃。磲磔瑪瑙。真珠玫瑰。七寶合成。高至四天王宮。三十三天。雨天曼陀羅華。供養寶塔。餘諸天龍。夜叉。輒闍婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等。千萬億衆。以一切華香瓔珞。幡蓋伎樂。供養寶塔。恭敬尊重。讚歎。爾時寶塔中。出大音聲。歎言。善哉善哉。釋迦牟尼世尊。能以平等大慧。教菩薩法。佛所護念。妙法華經。爲大衆說。如是如是。釋迦牟尼世尊。如所說者。皆是真實。爾時四衆。見大寶塔。住在空中。又聞塔中所出音聲。皆得法喜。怪未曾有。從座而起。恭敬合掌。却住一面。爾時有菩薩摩訶薩。名大樂說。知一切世間。天人。阿修羅等。心之所疑。而白佛言。世尊。以何因緣。有此寶塔。從地踊出。又於其中。發是音聲。爾時佛告大樂說菩薩。此寶塔中有如來全身。乃往過去東方無量千萬億阿僧祇世界。國名寶淨。彼中有佛。號曰多寶。其佛行菩薩道時。作大誓願。若我成佛。滅度之後。於十方國土。有說法華經處。我之塔廟。爲聽是經故。踊現其前。爲作證明。讚言善哉善哉。彼佛成道已。臨滅度時。於天人大衆中。告諸比丘。我滅度後。欲供

修三本俱作備

養我全身者。應起一大塔。其佛以神通願力。十方世界在在處處。若有說法華經者。彼之寶塔皆踊出其前。全身在於塔中。讚言善哉善哉。大樂說。今多寶如來塔。聞說法華經故。從地踊出。讚言善哉善哉。是時大樂說菩薩。以如來神力故。白佛言。世尊。我等願欲見此佛身。佛告大樂說菩薩摩訶薩。是多寶佛有深重願。若我寶塔。爲聽法華經。故出於諸佛前時。其有欲以我身示四衆者。彼佛分身諸佛。在於十方世界說法。盡還集一處。然後我身乃出現耳。大樂說。我分身諸佛。在於十方世界說法者。今應當集。大樂說。白佛言。世尊。我等亦願欲見世尊分身諸佛禮拜供養。爾時佛放白毫一光。卽見東方五百萬億那由他恒河沙等國土諸佛。彼諸國土。皆以頗梨爲地。寶樹寶衣。以爲莊嚴。無數千萬億菩薩。充滿其中。遍張寶幔寶網羅上。彼國諸佛。以大妙音而說諸法。及見無量千萬億菩薩。遍滿諸國爲衆說法。南西北方四維上下。白毫相光所照之處。亦復如是。爾時十方諸佛各告衆菩薩言。善男子。我今應往娑婆世界釋迦牟尼佛所。并供養多寶如來寶塔。時娑婆世界卽變清淨。琉璃爲地。寶樹莊嚴。黃金爲繩。以界八道。無諸聚落村營城邑。大海江河山川林藪。燒大寶香。曼陀羅華。遍布其地。以寶網幔羅覆其上。懸諸寶鈴。唯留此會衆。移諸天人置於他土。是時諸佛各將一大菩薩。以爲侍者。至娑婆世界。各到寶樹下。一一寶樹。高五百由旬。枝葉華菓。次第莊嚴。諸寶樹下。皆有師子之座。高五由旬。亦以大寶而校飾之。爾時諸佛各於此座結跏趺坐。如是展轉。遍滿三千大千世界。而於釋迦牟尼佛一方所分。之身。猶故未盡。時釋迦牟尼佛。欲容受所分身諸佛故。八方各更變二百萬億那由他國。皆令清淨。無有地獄餓鬼畜生及阿修羅。又移諸天人置於他土。所化之國。亦以琉璃爲地。寶樹莊嚴。樹高五百由旬。枝葉華菓。次第嚴飾。樹下皆有寶師子座。高五由旬。種種諸寶。以爲莊校。亦無大海江河及日真鄰陀山摩訶目真鄰陀山鐵圍山大鐵圍山須彌山等諸山王。通爲一佛國土。寶地平正。寶交露幔。遍覆其上。懸諸幡蓋。燒大寶香。諸天寶華。遍布其地。釋迦牟尼佛。爲諸佛當來坐故。復於八方。各更變二百萬億那由他國。皆令清淨。無有地獄餓鬼畜生及阿修羅。又移諸天人置於他土。所化之國。亦以

菓三本俱作果
下同
加明作跏下同

修宋元俱作脩
下同

尼
下三本俱無
佛字

琉璃爲地。寶樹莊嚴。樹高五百由旬。枝葉華菓。次第莊嚴。樹下皆有寶師子座。高五由旬。亦以大寶而校飾之。亦無大海江河及目真鄰陀山摩訶目真鄰陀山鐵圍山大鐵圍山須彌山等諸山王。通爲一佛國土。寶地平正。寶交露幔。遍覆其上。懸諸幡蓋。燒大寶香。諸天寶華。遍布其地。爾時東方釋迦牟尼佛所分之身。百千萬億那由他恒河沙等國土中諸佛。各各說法來集於此。如是次第十方諸佛。皆悉來集坐於八方。爾時一方四百萬億那由他國土。諸佛如來。遍滿其中。是時諸佛各在寶樹下坐師子座。皆遣侍者。問訊釋迦牟尼佛。各齎寶華。滿掬而告之言。善男子。汝往詣耆闍崛山。釋迦牟尼佛所。如我辭曰。少病少惱。氣力安樂。及菩薩聲聞衆。悉安隱不。以此寶華散佛供養。而作是言。彼某甲佛。與欲開此寶塔。諸佛遣使亦復如是。爾時釋迦牟尼佛。見所分身佛。悉已來集。各各坐於師子之座。皆聞諸佛與欲同開寶塔。卽從座起。住虛空中。一切四衆。起立合掌。一心觀佛。於是釋迦牟尼佛。以右指開七寶塔戶。出大音聲。如却關鑰。開大城門。卽時一切衆會。皆見多寶如來。於寶塔中坐師子座。全身不散。如入禪定。又聞其言。善哉善哉。釋迦牟尼佛。快說是法華經。我爲聽是經故。而來至此。爾時四衆等。見過去無量千萬億劫。滅度佛。說如是言。歎未曾有。以天寶華。聚散多寶佛及釋迦牟尼佛上。爾時多寶佛。於寶塔中分半座。與釋迦牟尼佛。而作是言。釋迦牟尼佛。可就此座。卽時釋迦牟尼佛。入其塔中坐其半座。結加趺坐。爾時大衆。見二如來在七寶塔中師子座上。結加趺坐。各作是念。佛座高遠。唯願如來以神通力。令我等輩俱處虛空。卽時釋迦牟尼佛。以神通力接諸大衆。皆在虛空。以大音聲。普告四衆。誰能於此娑婆國土。廣說妙法華經。今正是時。如來不久當入涅槃。佛欲以此妙法華經。付囑有在。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

座三本俱作坐
○唯同作惟下

及明作又

聖主世尊	雖久滅度	在寶塔中	尙爲法來	諸人云何	不勤爲法	此佛滅度	無央數劫
處處聽法	以難遇故	彼佛本願	我滅度後	在所往	常爲聽法	又我分身	無量諸佛
如恒沙等	來欲聽法	及見滅度	多寶如來	各捨妙土	及弟子衆	天人龍神	諸供養事

令法久住	故來至此	為坐諸佛	以神通力	移無量衆	令國清淨	諸佛各各	詣寶樹下
如清淨池	蓮華莊嚴	其寶樹下	諸師子座	佛坐其上	光明嚴飾	如夜闌中	燃大炬火
身出妙香	遍十方國	衆生蒙薰	喜不自勝	譬如大風	吹小樹枝	以是方便	令法久住
告諸大衆	我滅度後	誰能護持	讀說斯經	今於佛前	自說誓言	其多寶佛	雖久滅度
以大誓願	而師子吼	多寶如來	及與我身	所集化佛	當知此意	諸佛子等	誰能護法
當發大願	令得久住	其有能護	此經法者	則為供養	我及多寶	此多寶佛	處於寶塔
常遊十方	為是經故	亦復供養	諸來化佛	莊嚴光飾	諸世界者	若說此經	則為見我
多寶如來	及諸化佛	諸善男子	各諦思惟	此為難事	宜發大願	諸餘經典	數如恒沙
雖說此等	未足為難	若接須彌	擲置他方	無數佛土	亦未為難	若以足指	動大千界
遠擲他國	亦未為難	若立有頂	為衆演說	無量餘經	亦未為難	若佛滅後	於惡世中
能說此經	是則為難	假使有人	手把虛空	而以遊行	亦未為難	於我滅後	若自書持
若使人書	是則為難	若以大地	置足甲上	昇於梵天	亦未為難	佛滅度後	於惡世中
暫讀此經	是則為難	假使劫燒	擔負乾草	入中不燒	亦未為難	我滅度後	若持此經
為一人說	是則為難	若持八萬	四千法藏	十二部經	為人演說	令語聽者	得六神通
雖能如是	亦未為難	於我滅後	聽受此經	問其義趣	是則為難	若人說法	令千萬億
無量無數	恒沙衆生	得阿羅漢	具六神通	雖有是益	亦未為難	於我滅後	若能奉持
如斯經典	是則為難	我為佛道	於無量土	從始至今	廣說諸經	而於其中	此經第一
若有能持	則持佛身	諸善男子	於我滅後	誰能受持	讀誦此經	今於佛前	自說誓言
此經難持	若暫持者	我則歡喜	諸佛亦然	如是之人	諸佛所歎	是則勇猛	是則精進

是名持戒 行頭陀者 則爲疾得 無上佛道 能於來世 讀持此經 是真佛子 住淳善地
佛滅度後 能解其義 是諸天人 世間之眼 於恐畏世 能須臾說 一切天人 皆應供養

妙法蓮華經卷第四

見寶塔品第十一

妙法蓮華經卷第五

〔麗鳴〕〔宋鳳〕〔元鳳〕〔明草〕

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什奉

詔譯

妙法蓮華經提婆達多品第十二

卷三本俱作倦
下同

政同作正

採菓同作采果

搥鐘同作椎鐘

爾時佛告諸菩薩及天人四衆。吾於過去無量劫中。求法華經。無有懈倦。於多劫中。常作國王。發願求於無上菩提。心不退轉。爲欲滿足六波羅蜜。勤行布施。心無吝惜。象馬七珍。國城妻子。奴婢僕從。頭目髓腦。身手。手足。不惜軀命。時世人民。壽命無量。爲於法故。捐捨國位。委政太子。擊鼓宣令四方求法。誰能爲我說大乘者。吾當終身供給走使。時有仙人來白王言。我有大乘。名妙法華經。若不違我。當爲宣說。王聞仙言。歡喜踊躍。卽隨仙人。供給所須。採菓汲水。拾薪設食。乃至以身而爲牀座。身心無倦。于時奉事經於千歲。爲於法故。精勤給侍。令無所乏。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

我念過去劫 爲求大法故 雖作世國王 不貪五欲樂 搥鐘告四方 誰有大法者

若爲我解說 身當爲奴僕 時有阿私仙 來白於大王 我有微妙法 世間所希有

若能修行者 吾當爲汝說 時王聞仙言 心生大喜悅 卽便隨仙人 供給於所須

採薪及菓蔬 隨時恭敬與 情存妙法故 身心無懈倦 普爲諸衆生 勤求於大法

亦不爲己身 及以五欲樂 故爲大國王 勤求獲此法 遂致得成佛 今故爲汝說

佛告諸比丘。爾時王者。則我身是。時仙人者。今提婆達多是。由提婆達多善知識故。令我具足六波羅蜜。慈悲喜捨三十二相八十種好。紫磨金色。十力四無所畏。四攝法。十八不共神通道力。成等正覺。廣度衆生。皆因提婆達多善知識故。告諸四衆。提婆達多。却後過無量劫。當得成佛。號曰天王。如來應供。正遍知。明行足。

有證三本俱作
證知

善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。世界名天道。時天王佛住世二十中劫。廣爲衆生說於妙法。恒河沙衆生得阿羅漢果。無量衆生發緣覺心。恒河沙衆生發無上道心。得無生忍。至不退轉。時天王佛般涅槃後。正法住世二十中劫。全身舍利起七寶塔。高六十由旬。縱廣四十由旬。諸天人。人民悉以雜華。抹香。燒香。塗香。衣服。瓔珞。幢幡。寶蓋。伎樂。歌頌。禮拜。供養。七寶妙塔。無量衆生得阿羅漢果。無量衆生悟辟支佛。不可思議衆生發菩提心。至不退轉。佛告諸比丘。未來世中。若有善男子。善女人。聞妙法華經。提婆達多品。淨心信敬。不生疑惑者。不墮地獄。餓鬼。畜生。生十方佛前。所生之處。常聞此經。若生人天中。受勝妙樂。若在佛前。蓮華化生。於時下方多寶世尊。所從菩薩。名曰智積。白多寶佛。當還本土。釋迦牟尼佛告智積曰。善男子。且待須臾。此有菩薩。名文殊師利。可與相見。論說妙法。可還本土。爾時文殊師利。坐千葉蓮華。大如車輪。俱來菩薩。亦坐寶蓮華。從於大海。娑竭羅龍宮。自然踊出。住虛空中。詣靈鷲山。從蓮華下。至於佛前。頭面敬禮二世尊足。修敬已畢。往智積所。共相慰問。却坐一面。智積菩薩問文殊師利。仁往龍宮所化衆生。其數幾何。文殊師利言。其數無量。不可稱計。非口所宣。非心所測。且待須臾。自當有證。所言未竟。無數菩薩坐寶蓮華。從海踊出。詣靈鷲山。住在虛空。此諸菩薩。皆是文殊師利之所化度。具菩薩行。皆共論說六波羅蜜。本聲聞人在虛空中說聲聞行。今皆修行大乘空義。文殊師利謂智積曰。於海教化其事如是。爾時智積菩薩。以偈讚曰。

大智德勇健 化度無量衆 今此諸大會 及我皆已見 演暢實相義 開闡一乘法

廣導諸羣生 令速成菩提

文殊師利言。我於海中。唯常宣說妙法華經。智積問文殊師利言。此經甚深微妙。諸經中寶世所希有。頗有衆生。勤加精進。修行此經。速得佛不。文殊師利言。有娑竭羅龍王女。年始八歲。智慧利根。善知衆生諸根行業。得陀羅尼。諸佛所說甚深祕藏。悉能受持。深入禪定。了達諸法。於利那頃。發菩提心。得不退轉。辯才無礙。

慈念衆生猶如赤子。功德具足心念口演。微妙廣大慈悲仁讓。志意和雅能至菩提。智積菩薩言。我見釋迦如來。於無量劫難行苦行。積功累德求菩薩道。未曾止息。觀三千大千世界。乃至無有如芥子許。非是菩薩捨身命處。爲衆生故。然後乃得成菩提道。不信此女於須臾頃便成正覺。言論未訖。時龍王女忽現於前。頭面禮敬。却住一面。以偈讚曰。

深達罪福相 遍照於十方 微妙淨法身 具相三十二 以八十種好 用莊嚴法身

天人所戴仰 龍神咸恭敬 一切衆生類 無不宗奉者 又聞成菩提 唯佛當證知

我闍大乘教 度脫苦衆生

爾時舍利弗語龍女言。汝謂不久得無上道。是事難信。所以者何。女身垢穢。非是法器。云何能得無上菩提。佛道懸曠。經無量劫。勤苦積行。具修諸度。然後乃成。又女人身猶有五障。一者不得作梵天王。二者帝釋。三者魔王。四者轉輪聖王。五者佛身。云何女身速得成佛。爾時龍女有一寶珠。價直三千大千世界。持以上佛。佛卽受之。龍女謂智積菩薩尊者舍利弗言。我獻寶珠。世尊納受。是事疾不。答言甚疾。女言。以汝神力。觀我成佛。復速於此。當時衆會皆見龍女。忽然之間。變成男子。具菩薩行。卽往南方無垢世界。坐寶蓮華。成正覺。三十二相八十種好。普爲十方一切衆生演說妙法。爾時娑婆世界菩薩聲聞天龍八部人。與非人。皆遙見彼龍女成佛。普爲時會人天說法。心大歡喜。悉遙敬禮。無量衆生聞法解悟。得不退轉。無量衆生得受道記。無垢世界六反震動。娑婆世界三千衆生住不退地。三千衆生發菩提心而得受記。智積菩薩及舍利弗。一切衆會默然信受。

妙法蓮華經勸持品第十三

爾時藥王菩薩摩訶薩。及大樂說菩薩摩訶薩。與二萬菩薩眷屬俱。皆於佛前作是誓言。唯願世尊不以爲

品目持上三本
俱無勸字

慮。我等於佛滅後。當奉持讀誦說此經典。後惡世衆生。善根轉少。多增上慢。貪利供養。增不善根。遠離解脫。雖難可教化。我等當起大忍力。讀誦此經。持說書寫種種供養。不惜身命。爾時衆中五百阿羅漢。得受記者。白佛言。世尊。我等亦自誓願。於異國土廣說此經。復有學無學八千人。得受記者。從座而起。合掌向佛。作是誓言。世尊。我等亦當於他國土廣說此經。所以者何。是娑婆國中人多弊惡。懷增上慢。功德淺薄。瞋濁諂曲。心不實故。爾時佛姨母摩訶波闍波提比丘尼。與學無學比丘尼六千人俱。從座而起。一心合掌。瞻仰尊顏。目不暫捨。於時世尊告憍曇彌。何故憂色而視如來。汝心將無謂我不說汝名。授阿耨多羅三藐三菩提耶。憍曇彌。我先總說一切聲聞。皆已授記。今汝欲知記者。將來之世。當於六萬八千億諸佛法中。爲大法師。及六千學無學比丘尼。俱爲法師。汝如是漸漸具菩薩道。當得作佛。號一切衆生喜見佛。及六千菩薩。轉次授記。明行足善逝世間解無上士調御丈夫。天人師佛世尊。憍曇彌。是一切衆生喜見佛。及六千菩薩。轉次授記。得阿耨多羅三藐三菩提。爾時羅睺羅母耶輸陀羅比丘尼。作是念。世尊於授記中。獨不說我名。佛告耶輸陀羅。汝於來世。百千萬億諸佛法中。修菩薩行。爲大法師。漸具佛道。於善國中。當得作佛。號具足千萬光相。如來應供。正遍知。明行足善逝世間解無上士調御丈夫。天人師佛世尊。佛壽無量阿僧祇劫。爾時摩訶波闍波提比丘尼。及耶輸陀羅比丘尼。并其眷屬。皆大歡喜。得未曾有。卽於佛前。而說偈言。

世尊導師 安隱天人 我等聞記 心安具足

圖下三本俱無
土字

返同作反

諸比丘尼。說是偈已。白佛言。世尊。我等亦能於他方國土廣宣此經。爾時世尊。視八十萬億那由他諸菩薩摩訶薩。是諸菩薩。皆是阿惟越致。轉不退法輪。得諸陀羅尼。卽從座起。至於佛前。一心合掌。而作是念。若世尊告敕我。等持說此經者。當如佛教。廣宣斯法。復作是念。佛今嘿然。不見告敕。我當云何。時諸菩薩敬順佛意。并欲自滿本願。便於佛前。作師子吼。而發誓言。世尊。我等於如來滅後。周旋往返十方世界。能令衆生書寫此經。受持讀誦。解說其義。如法修行。正憶念。皆是佛之威力。唯願世尊。在於他方。遙見守護。卽時諸菩薩。

俱同發聲而說偈言

唯願不為慮	於佛滅度後	恐怖惡世中	我等當廣說	有諸無智人	惡口罵詈等
及加刀杖者	我等皆當忍	惡世中比丘	邪智心諂曲	未得謂為得	我慢心充滿
或有阿練若	納衣在空閑	自謂行真道	輕賤人間者	貪著利養故	與白衣說法
為世所恭敬	如六通羅漢	是人懷惡心	常念世俗事	假名阿練若	好出我等過
而作如是言	此諸比丘等	為貪利養故	說外道論議	自作此經典	誑惑世間人
為求名聞故	分別說是經	常在大眾中	欲毀我等故	向國王大臣	婆羅門居士
及餘比丘眾	誹謗說我惡	謂是邪見人	說外道論議	我等敬佛故	悉忍是諸惡
為斯所輕言	汝等皆是佛	如此輕慢言	皆當忍受之	濁劫惡世中	多有諸恐怖
惡鬼入其身	罵詈毀辱我	我等敬信佛	當著忍辱鎧	為說是經故	忍此諸難事
我不愛身命	但惜無上道	我等於來世	護持佛所囑	世尊自當知	濁世惡比丘
不知佛方便	隨宜所說法	惡口而鑿鑿	數數見擯出	遠離於塔寺	如是等眾惡
念佛告敕故	皆當忍是事	諸聚落城邑	其有求法者	我皆到其所	說佛所囑法
我是世尊使	處眾無所畏	我當善說法	願佛安隱住	我於世尊前	諸來十方佛
發如是誓言	佛自知我心				

安樂行品第十四

品目上宋元俱有妙法蓮華經五字

爾時文殊師利法王子菩薩摩訶薩白佛言。世尊。是諸菩薩甚為難有。敬順佛故發大誓願。於後惡世護持讀誦說是法華經。世尊。菩薩摩訶薩。於後惡世云何能說是經。佛告文殊師利。若菩薩摩訶薩。於後惡世欲

說是經。當安住四法。一者安住菩薩行處。及親近處。能為衆生演說是經。文殊師利云。何名菩薩摩訶薩行處。若菩薩摩訶薩。住忍辱地。柔和善順。而不卒暴。心亦不驚。又復於法無所行。而觀諸法如實相。亦不行不分別。是名菩薩摩訶薩行處。云何名菩薩摩訶薩親近處。菩薩摩訶薩。不親近國王王子大臣官長。不親近諸外道梵志尼隸子等。及造世俗文筆讚詠外書。及路伽耶陀逆路伽耶陀者。亦不親近諸有兇戲相。相撲。及那羅等種種變現之戲。又不親近旃陀羅及畜豬羊雞狗。敗獵漁捕諸惡律儀。如是人等。或時來者。則為說法。無所怖望。又不親近求聲聞比丘比丘尼。優婆塞優婆夷。亦不問訊。若於房中。若經行處。若在講堂中。不共住止。或時來者。隨宜說法。無所怖求。文殊師利。又菩薩摩訶薩。不應於女人身取能生欲想。相而為說法。亦不樂見。若入他家。不與小女處。女寡女等共語。亦復不近五種不男之人。以為親厚。不獨入他家。若有因緣須獨入時。但一心念佛。若為女人說法。不露齒笑。不現胸臆。乃至為法。猶不親厚。況復餘事。不樂畜年小弟子沙彌小兒。亦不樂與同師。常好坐禪。在於閑處。修攝其心。文殊師利。是名初親近處。復次菩薩摩訶薩。觀一切法空如實相。不顛倒不動不退不轉。如虛空無所有性。一切語言道斷。不生不起。無名無相。實無所有。無量無邊無礙無障。但以因緣。有從顛倒生故。說常樂觀如是法相。是名菩薩摩訶薩第二親近處。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

若有菩薩	於後惡世	無怖畏心	欲說是經	應入行處	及親近處	常離國王	及國王子
大臣官長	兇險戲者	及旃陀羅	外道梵志	亦不親近	增上慢人	貪著小乘	三藏學者
破戒比丘	名字羅漢	及比丘尼	好戲笑者	深著五欲	求現滅度	諸優婆夷	皆勿親近
若是人等	以好心來	到菩薩所	為聞佛道	菩薩則以	無所畏心	不懷怖望	而為說法
寡女處女	及諸不男	皆勿親近	以為親厚	亦莫親近	屠兒魁膾	敗獵漁捕	為利殺害
販肉自活	街賣女色	如是之人	皆勿親近	兇險相撲	種種嬉戲	諸姪女等	盡勿親近

莫獨屏處 爲女說法 若說法時 無得戲笑 入里乞食 將一比丘 若無比丘 一心念佛

是則名爲 行處近處 以此二處 能安樂說 又復不行 上中下法 有爲無爲 實不實法

亦不分別 是男是女 不得諸法 不知不見 是則名爲 菩薩行處 一切諸法 空無所有

無有常往 亦無起滅 是名智者 所親近處 顛倒分別 諸法有無 是實非實 是生非生

在於閑處 修攝其心 安住不動 如須彌山 觀一切法 皆無所有 猶如虛空 無有堅固

不生不出 不動不退 常住一相 是名近處 若有比丘 於我滅後 入是行處 及親近處

說斯經時 無有怯弱 菩薩有時 入於靜室 以正憶念 隨義觀法 從禪定起 爲諸國王

王子臣民 婆羅門等 開化演暢 說斯經典 其心安隱 無有怯弱 文殊師利 是名菩薩

安住初法 能於後世 說法華經

又文殊師利。如來滅後。於末法中。欲說是經。應住安樂行。若口宣說。若讀經時。不樂說人。及經典過。亦不輕慢諸餘法師。不說他人好惡長短。於聲聞人。亦不稱名說其過惡。亦不稱名讚歎其美。又亦不生怨嫌之心。善修如是安樂心故。諸有聽者。不逆其意。有所難問。不以小乘法答。但以大乘而爲解說。令得一切種智。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

菩薩常樂 安隱說法 於清淨地 而施牀座 以油漆身 澡浴塵穢 著新淨衣 內外俱淨

安處法座 隨問爲說 若有比丘 及比丘尼 諸優婆塞 及優婆夷 國王王子 羣臣士民

以微妙義 和顏爲說 若有難問 隨義而答 因緣譬喻 敷演分別 以是方便 皆使發心

漸漸增益 入於佛道 除癡惰意 及懈怠想 離諸憂惱 慈心說法 晝夜常說 無上道教

以諸因緣 無量譬喻 開示衆生 咸令歡喜 衣服臥具 飲食醫藥 而於其中 無所悕望

但一心念 說法因緣 願成佛道 令衆亦爾 是則大利 安樂供養 我滅度後 若有比丘

詔三本俱作詔
次同

能演說斯 妙法華經 心無嫉恚 諸惱障礙 亦無憂愁 及罵詈者 又無怖畏 加刀杖等
亦無擯出 安住忍故 智者如是 善修其心 能住安樂 如我上說 其人功德 千萬億劫
算數譬喻 說不能盡

又文殊師利。菩薩摩訶薩。於後末世法欲滅時。受持讀誦斯經典者。無懷嫉妬誣誑之心。亦勿輕罵學佛道者。求其長短。若比丘比丘尼優婆塞優婆夷。求聲聞者。求辟支佛者。求菩薩道者。無得惱之令其疑悔。語其人言。汝等去道甚遠。終不能得一切種智。所以者何。汝是放逸之人。於道懈怠。故又亦不應戲論諸法。有所諍競。當於一切衆生起大悲想。於諸如來起慈父想。於諸菩薩起大師想。於十方諸大菩薩。常應深心恭敬禮拜。於一切衆生平等說法。以順法故不多不少。乃至深愛法者。亦不為多說。文殊師利。是菩薩摩訶薩。於後末世法欲滅時。有成就第三安樂行者。說是法時。無能惱亂。得好同學共讀誦是經。亦得大衆而來聽受。聽已能持。持已能誦。誦已能說。說已能書。若使人書。供養經卷。恭敬尊重讚歎。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言

常元作當

若欲說是經 當捨嫉恚慢 誣誑邪偽心 常修質直行 不輕蔑於人 亦不戲論法
不令他疑悔 云汝不得佛 是佛子說法 常柔和能忍 慈悲於一切 不生懈怠心
十方大菩薩 愍衆故行道 應生恭敬心 是則我大師 於諸佛世尊 生無上父想
破於憍慢心 說法無障礙 第三法如是 智者應守護 一心安樂行 無量衆所敬
又文殊師利。菩薩摩訶薩。於後末世法欲滅時。有受持法華經者。於在家出家人中生大慈心。於非菩薩人中。生大悲心。應作是念。如是之人。則為大失。如來方便隨宜說法。不聞不知。不覺不問。不信不解。其人雖不問。不信。不解。是經。我得阿耨多羅三藐三菩提時。隨在何地。以神通力智慧力。引之令得住。是法中。文殊師利。是菩薩摩訶薩。於如來滅後。有成就此第四法者。說是法時。無有過失。常為比丘比丘尼優婆塞優婆夷。

罰三本俱作伐

國王王子大臣人民婆羅門居士等。供養恭敬尊重讚歎。虚空諸天爲聽法故亦常隨侍。若在聚落城邑空閑林中。有人來欲難問者。諸天晝夜常爲法故而衛護之。能令聽者皆得歡喜。所以者何。此經是一切過去未來現在諸佛神力所護故。文殊師利。是法華經。於無量國中。乃至名字不可得聞。何況得見受持讀誦。文殊師利。譬如強力轉輪聖王。欲以威勢降伏諸國。而諸小王不順其命。時轉輪王起種種兵而往討罰。見兵衆戰有功者。卽大歡喜隨功賞賜。或與田宅聚落城邑。或與衣服嚴身之具。或與種種珍寶金銀琉璃車渠碼瑙珊瑚琥珀象馬車乘奴婢人民。唯髻中明珠不以與之。所以者何。獨王頂上有此一珠。若以與之。王諸眷屬必大驚怪。文殊師利。如來亦復如是。以禪定智慧力得法國土王於三界。而諸魔王不肯順伏。如來賢聖諸將與之共戰。其有功者心亦歡喜。於四衆中爲說諸經令其心悅。賜以禪定解脫無漏根力諸法之財。又復賜與涅槃之域。言得滅度。引導其心令皆歡喜而不爲說是法華經。文殊師利。如轉輪王見諸兵衆有大功者心甚歡喜。以此難信之珠久在髻中。不妄與人。而今與之。如來亦復如是。於三界中爲大法王。以法教化一切衆生。見賢聖軍與五陰魔煩惱魔死魔共戰。有大功勳。滅三毒出三界破魔網。爾時如來亦大歡喜。此法華經能令衆生至一切智。一切世間多怨難信。先所未說而今說之。文殊師利。此法華經。是諸如來第一之說。於諸說中最爲甚深。末後賜與。如彼強力之王。久護明珠今乃與之。文殊師利。此法華經。諸佛如來祕密之藏。於諸經中最在其上。長夜守護不妄宣說。始於今日。乃與汝等而敷演之。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言

常行忍辱	哀愍一切	乃能演說	佛所讚經	後末世時	持此經者	於家出家	及非菩薩
應生慈悲	斯等不聞	不信是經	則爲大失	我得佛道	以諸方便	爲說此法	令住其中
譬如強力	轉輪之王	兵戰有功	賞賜諸物	象馬車乘	嚴身之具	及諸田宅	聚落城邑
或與衣服	種種珍寶	奴婢財物	歡喜賜與	如有勇健	能爲難事	三解髻中	明珠賜之

三同作王次同

修宋元俱作脩
下同

踊三本俱作涌
下同

起下同無立字

如來亦爾	為諸法王	忍辱大力	智慧寶藏	以大慈悲	如法化世	見一切人	受諸苦惱
欲求解脫	與諸魔戰	為是衆生	說種種法	以大方便	說此諸經	既知衆生	得其力已
末後乃為	說是法華	如三解髻	明珠與之	此經為尊	衆經中上	我常守護	不妄開示
今正是時	為汝等說	我滅度後	求佛道者	欲得安隱	演說斯經	應當親近	如是四法
讀是經者	常無憂惱	又無病痛	顏色鮮白	不生貧窮	卑賤醜陋	衆生樂見	如慕賢聖
天諸童子	以為給使	刀杖不加	毒不能害	若人惡罵	口則閉塞	遊行無畏	如師子王
智慧光明	如日之照	若於夢中	但見妙事	見諸如來	坐師子座	諸比丘衆	圍繞說法
又見龍神	阿修羅等	數如恒沙	恭敬合掌	自見其身	而為說法	又見諸佛	身相金色
放無量光	照於一切	以梵音聲	演說諸法	佛為四衆	說無上法	見身處中	合掌讚佛
聞法歡喜	而為供養	得陀羅尼	證不退智	佛知其心	深入佛道	即為授記	成最正覺
汝善男子	當於來世	得無量智	佛之大道	國土嚴淨	廣大無比	亦有四衆	合掌聽法
又見自身	在森林中	修習善法	證諸實相	深入禪定	見十方佛		
諸佛身金色	百福相莊嚴	聞法為人說	常有是好夢	又夢作國王	捨宮殿眷屬		
及上妙五欲	行詣於道場	在菩提樹下	而處師子座	求道過七日	得諸佛之智		
成無上道已	起而轉法輪	為四衆說法	經千萬億劫	說無漏妙法	度無量衆生		
後當入涅槃	如煙盡燈滅	若後惡世中	說是第一法	是人得大利	如上諸功德		

妙法蓮華經從地踊出品第十五

爾時他方國土諸來菩薩摩訶薩。過八恒河沙數。於大衆中起立合掌作禮。而白佛言。世尊。若聽我等於佛

震同作振下同

滅後在此娑婆世界勤加精進護持讀誦書寫供養是經典者。當於此土而廣說之。爾時佛告諸菩薩摩訶薩衆。止善男子。不須汝等護持此經。所以者何。我娑婆世界自有六萬恒河沙等菩薩摩訶薩。一一菩薩各有六萬恒河沙眷屬。是諸人等能於我滅後護持讀誦廣說此經。佛說是時。娑婆世界三千大千國土地皆震裂。而於其中有無量千萬億菩薩摩訶薩同時踊出。是諸菩薩身皆金色。三十二相無量光明。先盡在此娑婆世界之下。此界虛空中住。是諸菩薩聞釋迦牟尼佛所說音聲從下發來。一一菩薩皆是大衆唱導之首。各將六萬恒河沙眷屬。況將五萬四萬三萬二萬一萬恒河沙等眷屬者。況復乃至一恒河沙半恒河沙四分之一。乃至千萬億。那由他分之一。況復千萬億。那由他眷屬。況復億萬眷屬。況復千萬百萬乃至一萬。況復一千一百乃至一十。況復將五四三二一弟子者。況復單已樂遠離行。如是等比。無量無邊算數譬喻所不能知。是諸菩薩從地出已。各詣虛空七寶妙塔多寶如來釋迦牟尼佛所。到已向二世尊頭面禮足。乃至諸寶樹下師子座上佛所。亦皆作禮右繞三匝合掌恭敬。以諸菩薩種種讚法。而以讚歎住在一面。欣樂瞻仰於二世尊。是諸菩薩摩訶薩從地踊出。以諸菩薩種種讚法而讚於佛。如是時間經五十小劫。是時釋迦牟尼佛默然而坐。及諸四衆亦皆默然五十小劫。佛神力故。令諸大衆謂如半日。爾時四衆亦以佛神力故。見諸菩薩遍滿無量百千萬億國土虛空。是菩薩衆中有四導師。一名上行。二名無邊行。三名淨行。四名安立行。是四菩薩於其衆中。最爲上首唱導之師。在大衆前各共合掌。觀釋迦牟尼佛。而問訊言。世尊。少病少惱安樂行不。所應度者受教易不。不令世尊生疲勞耶。爾時四大菩薩而說偈言。

倦三本俱作倦

世尊安樂 少病少惱 教化衆生 得無疲倦 又諸衆生 受化易不 不令世尊 生疲勞耶

供養同作恭敬

爾時世尊於菩薩大衆中而作是言。如是如是諸善男子。如來安樂少病少惱。諸衆生等易可化度。無有疲勞。所以者何。是諸衆生。世世已來常受我化。亦於過去諸佛供養尊重。種種善根。此諸衆生。始見我身聞我所說。即皆信受。入如來慧。除先修習學小乘者。如是之人。我今亦令得聞是經。入於佛慧。爾時諸大菩薩而

說偈言

善哉善哉 大雄世尊 諸衆生等 易可化度 能問諸佛 甚深智慧 聞已信解 我等隨喜
於時世尊讚歎上首諸大菩薩善哉善哉善男子汝等能於如來發隨喜心爾時彌勒菩薩及八千恒河沙
諸菩薩衆皆作是念我等從昔已來不見不聞如是大菩薩摩訶薩衆從地踊出住世尊前合掌供養問訊
如來時彌勒菩薩摩訶薩知八千恒河沙諸菩薩等心之所念并欲自決所疑合掌向佛以偈問曰

無量千萬億 大衆諸菩薩 昔所未曾見 願兩足尊說 是從何所來 以何因緣集

巨身大神通 智慧叵思議 其志念堅固 有大忍辱力 衆生所樂見 爲從何所來

一一諸菩薩 所將諸眷屬 其數無有量 如恒河沙等 或有大菩薩 將六萬恒沙

如是諸大衆 一心求佛道 是諸大師等 六萬恒河沙 俱來供養佛 及護持是經

將五萬恒沙 其數過於是 四萬及三萬 二萬至一萬 一千一百等 乃至一恒沙

半及三四分 億萬分之一 千萬那由他 萬億諸弟子 乃至於半億 其數復過上

百萬至一萬 一千及一百 五十與一十 乃至三二一 單已無眷屬 樂於獨處者

俱來至佛所 其數轉過上 如是諸大衆 若人行籌數 過於恒沙劫 猶不能盡知

是諸大威德 精進菩薩衆 誰爲其說法 教化而成就 從誰初發心 稱揚何佛法

受持行誰經 修習何佛道 如是諸菩薩 神通大智力 四方地震裂 皆從中踊出

世尊我昔來 未曾見是事 願說其所從 國土之名號 我常遊諸國 未曾見是事

我於此衆中 乃不識一人 忽然從地出 願說其因緣 今此之大會 無量百千億

是諸菩薩等 皆欲知此事 是諸菩薩衆 本末之因緣 無量德世尊 唯願決衆疑

爾時釋迦牟尼佛分身諸佛從無量千萬億他方國土來者在於八方諸寶樹下師子座上結加趺坐其佛

唯三本俱作惟
下同
加明作跏

以三本俱作已

侍者各各見是菩薩大衆於三千大千世界四方從地踊出住於虛空各白其佛言世尊此諸無量無邊阿僧祇菩薩大衆從何所來爾時諸佛各告侍者諸善男子且待須臾有菩薩摩訶薩名曰彌勒釋迦牟尼佛之所授記次後作佛以問斯事佛今答之汝等自當因是得聞爾時釋迦牟尼佛告彌勒菩薩善哉善哉阿逸多乃能問佛如是大事汝等當共一心被精進鎧發堅固意如來今欲顯發宣示諸佛智慧諸佛自在神通之力諸佛師子奮迅之力諸佛威猛大勢之力爾時世尊欲重宣此義而說偈言

當精進一心 我欲說此事 勿得有疑悔 佛智叵思議 汝今出信力 住於忍善中
昔所未聞法 今皆當得聞 我今安慰汝 勿得懷疑懼 佛無不實語 智慧不可量
所得第一法 甚深叵分別 如是今當說 汝等一心聽

爾時世尊說此偈已告彌勒菩薩我今於此大衆宣告汝等阿逸多是諸大菩薩摩訶薩無量無數阿僧祇從地踊出汝等昔所未見者我於是娑婆世界得阿耨多羅三藐三菩提已教化示導是諸菩薩調伏其心令發道意此諸菩薩皆於是娑婆世界之下此界虛空中住於諸經典讀誦通利思惟分別正憶念阿逸多是諸善男子等不樂在衆多有所說常樂靜處勤行精進未曾休息亦不依止人天而住常樂深智無有障礙亦常樂於諸佛之法一心精進求無上慧爾時世尊欲重宣此義而說偈言

阿逸汝當知 是諸大菩薩 從無數劫來 修習佛智慧 悉是我所化 令發大道心
此等是我子 依止是世界 常行頭陀事 志樂於靜處 捨大衆憒鬧 不樂多所說
如是諸子等 學習我道法 晝夜常精進 爲求佛道故 在娑婆世界 下方空中住
志念力堅固 常勤求智慧 說種種妙法 其心無所畏 我於伽耶城 菩提樹下坐
得成最正覺 轉無上法輪 爾乃教化之 令初發道心 今皆住不退 悉當得成佛
我今說實語 汝等一心信 我從久遠來 教化是等衆

爾時彌勒菩薩摩訶薩。及無數諸菩薩等。心生疑惑。怪未曾有。而作是念。云何世尊於少時間。教化如是無量無邊阿僧祇諸大菩薩。令住阿耨多羅三藐三菩提。即白佛言。世尊。如來為太子時。出於釋宮。去伽耶城不遠。坐於道場。得成阿耨多羅三藐三菩提。從是已來。始過四十餘年。世尊。云何於此少時。大作佛事。以佛勢力。以佛功德。教化如是無量。大菩薩眾。當成阿耨多羅三藐三菩提。世尊。此大菩薩眾。假使有人。於千萬億劫。數不能盡。不得其邊。斯等久遠已來。於無量無邊諸佛所。殖諸善根。成就菩薩道。常修梵行。世尊。如此之事。世所難信。譬如有人。色美髮黑。年二十五。指百歲人言。是我子。其百歲人。亦指年少言。是我父。生育我等。是事難信。佛亦如是。得道已來。其實未久。而此大衆諸菩薩等。已於無量千萬億劫。為佛道故。勤行精進。善入。出住。無量百千萬億三昧。得大神通。久修梵行。善能次第習諸善法。巧於問答。人中之寶。一切世間甚為希有。今日世尊。方云。得佛道時。初令發心。教化示導。令向阿耨多羅三藐三菩提。世尊。得佛未久。乃能作此大功德事。我等雖復信佛。隨宜所說。佛所出言。未曾虛妄。佛所知者。皆悉通達。然諸新發意菩薩。於佛滅後。若聞是語。或不信受。而起破法罪業。因緣。唯然世尊。願為解說。除我等疑。及未來世諸善男子。聞此事已。亦不生疑。爾時彌勒菩薩欲重宣此義。而說偈言。

佛昔從釋種	出家近伽耶	坐於菩提樹	爾來尚未久	此諸佛子等	其數不可量
久已行佛道	住於神通力	善學菩薩道	不染世間法	如蓮華在水	從地而踊出
皆起恭敬心	住於世尊前	是事難思議	云何而可信	佛得道甚近	所成就甚多
願為除衆疑	如實分別說	譬如少壯人	年始二十五	示人百歲子	髮白而面皺
是等我所生	子亦說是父	父少而子老	舉世所不信	世尊亦如是	得道來甚近
是諸菩薩等	志固無怯弱	從無量劫來	而行菩薩道	巧於難問答	其心無所畏
忍辱心決定	端正有威德	十方佛所讚	善能分別說	不樂在人衆	常好在禪定

爲求佛道故 於下空中住 我等從佛聞 於此事無疑 願佛爲未來 演說令開解
若有於此經 生疑不信者 卽當墮惡道 願今爲解說 是無量菩薩 云何於少時
教化令發心 而住不退地

妙法蓮華經卷第五

妙法蓮華經卷第六

〔麗鳴〕〔宋鳳〕〔元鳳〕〔明草〕

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什奉

詔譯

品目明無經題
下同

妙法蓮華經如來壽量品第十六

末三本俱作抹

爾時佛告諸菩薩及一切大衆。諸善男子。汝等當信解如來誠諦之語。復告大衆。汝等當信解如來誠諦之語。又復告諸大衆。汝等當信解如來誠諦之語。是時菩薩大衆。彌勒爲首。合掌白佛言。世尊。唯願說之。我等當信受佛語。如是三白已。復言。唯願說之。我等當信受佛語。爾時世尊。知諸菩薩三請不止。而告之言。汝等諦聽。如來祕密神通之力。一切世間天人及阿修羅。皆謂今釋迦牟尼佛出釋氏宮。去伽耶城不遠。坐於道場。得阿耨多羅三藐三菩提。然善男子。我實成佛已來。無量無邊百千萬億那由他劫。譬如五百千萬億那由他阿僧祇三千大千世界。假使有人。末爲微塵。過於東方五百千萬億那由他阿僧祇國。乃下一塵。如是東行。盡是微塵。諸善男子。於意云何。是諸世界。可得思惟。校計知其數不。彌勒菩薩等俱白佛言。世尊。是諸世界。無量無邊。非算數所知。亦非心力所及。一切聲聞辟支佛。以無漏智。不能思惟。知其限數。我等住阿惟越致地。於是事中。亦所不達。世尊。如是諸世界。無量無邊。爾時佛告大菩薩衆。諸善男子。今當分明宣語。汝等。是諸世界。若著微塵及不著者。盡以爲塵。一塵一劫。我成佛已來。復過於此百千萬億那由他阿僧祇劫。自從是來。我常在此娑婆世界說法教化。亦於餘處百千萬億那由他阿僧祇國。導利衆生。諸善男子。於是中間。我說燃燈佛等。又復言。其入於涅槃。如是皆以方便分別。諸善男子。若有衆生。來至我所。我以佛眼。觀其信等。諸根利鈍。隨所應度。處處自說名字。不同年紀大小。亦復現言。當入涅槃。又以種種方便。說微妙法。能令衆生發歡喜心。諸善男子。如來見諸衆生。樂於小法。德薄垢重者。爲是人說。我少出家。得阿耨多羅三

藐三菩提。然我實成佛已來久遠若斯。但以方便教化衆生。令入佛道。作如是說。諸善男子。如來所演經典。皆爲度脫衆生。或說己身。或說他身。或示己身。或示他身。或示己事。或示他事。諸所言說。皆實不虛。所以者何。如來。如實知見三界之相。無有生死。若退若出。亦無在世及滅度者。非實非虛。非如非異。不如三界見於三界。如斯之事。如來明見。無有錯謬。以諸衆生有種種性。種種欲。種種憶想。分別故。欲令生諸善根。以若干因緣譬喻。言辭種種說法。所作佛事。未曾暫廢。如是我成佛已來甚大久遠。壽命無量阿僧祇劫。常住不滅。諸善男子。我本行菩薩道。所成壽命。今猶未盡。復倍上數。然今非實滅度。而便唱言當取滅度。如來以是方便教化衆生。所以者何。若佛久住於世。薄德之人。不種善根。貧窮下賤。貪著五欲。入於憶想。妄見網中。若見如來。常在不滅。便起憍恣而懷厭怠。不能生於難遭之想。恭敬之心。是故如來以方便說。比丘當知。諸佛出世。難可值遇。所以者何。諸薄德人。過無量百千萬億劫。或有見佛。或不見者。以此事故。我作是言。諸比丘。如來難可得見。斯衆生等。聞如是語。必當生於難遭之想。心懷戀慕。渴仰於佛。便種善根。是故如來。雖不實滅。而言滅度。又善男子。諸佛如來法。皆如是。爲度衆生。皆實不虛。譬如良醫智慧聰達。明練方藥。善治衆病。其人多諸子息。若二十乃至百數。以有事緣。遠至餘國。諸子於後。飲他毒藥。藥發。悶亂。宛轉于地。是時其父還來歸家。諸子飲毒。或失本心。或不失者。遙見其父。皆大歡喜。拜跪問訊。善安隱歸。我等愚癡。誤服毒藥。願見救療。更賜壽命。父見子等。苦惱如是。依諸經方。求好藥。草色。香美味。皆悉具足。搗篩和合。與子令服。而作是言。此大良藥。色。香。美味。皆悉具足。汝等可服。速除苦惱。無復衆患。其諸子中。不失心者。見此良藥。色。香。俱好。即便服之。病盡除愈。餘失心者。見其父來。雖亦歡喜。問訊求索治病。然與其藥。而不肯服。所以者何。毒氣深入。失本心故。於此好色香藥。而謂不美。父作是念。此子可愍。爲毒所中心。皆顛倒。雖見我喜。求索救療。如是好藥。而不肯服。我今當設方便。令服此藥。卽作是言。汝等當知。我今衰老。死時已至。是好良藥。今留在此。汝可取服。勿憂不差。作是教已。復至他國。遣使還告。汝父已死。是時諸子聞父背喪。心大憂惱。而作

味香美元明俱
作香美味

是念。若父在者。慈愍我等。能見救護。今者捨我。遠喪他國。自惟孤露。無復恃怙。常懷悲感。心遂醒悟。乃知此藥色味香美。即取服之。毒病皆愈。其父聞子悉已得差。尋便來歸。咸使見之。諸善男子。於意云何。頗有人能說此良醫。虛妄罪不。不也。世尊。佛言。我亦如是。成佛已來。無量無邊。百千萬億。那由他阿僧祇劫。爲衆生故。以方便力。言當滅度。亦無有能如法說我虛妄過者。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言。

自我得佛來	所經諸劫數	無量百千萬	億載阿僧祇	常說法教化	無數億衆生
令入於佛道	爾來無量劫	爲度衆生故	方便現涅槃	而實不滅度	常住此說法
我常住於此	以諸神通力	令顛倒衆生	雖近而不見	衆見我滅度	廣供養舍利
咸皆懷戀慕	而生渴仰心	衆生既信伏	質直意柔軟	一心欲見佛	不自惜身命
時我及衆僧	俱出靈鷲山	我時語衆生	常在此不滅	以方便力故	現有滅不滅
餘國有衆生	恭敬信樂者	我復於彼中	爲說無上法	汝等不聞此	但謂我滅度
我見諸衆生	沒在於苦惱	故不爲現身	令其生渴仰	因其心戀慕	乃出爲說法
神通力如是	於阿僧祇劫	常在靈鷲山	及餘諸住處	衆生見劫盡	大火所燒時
我此土安隱	天人常充滿	園林諸堂閣	種種寶莊嚴	寶樹多花菓	衆生所遊樂
諸天擊天鼓	常作衆伎樂	雨曼陀羅花	散佛及大衆	我淨土不毀	而衆見燒盡
憂怖諸苦惱	如是悉充滿	是諸罪衆生	以惡業因緣	過阿僧祇劫	不聞三寶名
諸有修功德	柔和質直者	則皆見我身	在此而說法	或時爲此衆	說佛壽無量
久乃見佛者	爲說佛難值	我智力如是	慧光照無量	壽命無數劫	久修業所得
汝等有智者	勿於此生疑	當斷令永盡	佛語實不虛	如醫善方便	爲治狂子故
實在而言死	無能說虛妄	我亦爲世父	救諸苦患者	爲凡夫顛倒	實在而言滅

菓三本俱作果

以常見我故 而生憍恣心 放逸著五歌 墮於惡道中 我常知衆生 行道不行道 隨應所可度 爲說種種法 每自作是念 以何令衆生 得入無上道 速成就佛身

妙法蓮華經分別功德品第十七

爾時大會。開佛說壽命劫數長遠如是。無量無邊阿僧祇衆生。得大饒益。於時世尊。告彌勒菩薩摩訶薩。阿逸多。我說是如來壽命長遠時。六百八十萬億那由他恒河沙衆生。得無生法忍。復有千倍菩薩摩訶薩。得聞持陀羅尼門。復有一世界微塵數菩薩摩訶薩。得樂說無礙辯才。復有一世界微塵數菩薩摩訶薩。得百千萬億無量旋陀羅尼。復有三千大千世界微塵數菩薩摩訶薩。能轉不退法輪。復有二千中國土微塵數菩薩摩訶薩。能轉清淨法輪。復有小千國土微塵數菩薩摩訶薩。八生當得阿耨多羅三藐三菩提。復有四四天下微塵數菩薩摩訶薩。四生當得阿耨多羅三藐三菩提。復有三四天下微塵數菩薩摩訶薩。三生當得阿耨多羅三藐三菩提。復有二四天下微塵數菩薩摩訶薩。二生當得阿耨多羅三藐三菩提。復有一四天下微塵數菩薩摩訶薩。一生當得阿耨多羅三藐三菩提。復有八世界微塵數衆生。皆發阿耨多羅三藐三菩提心。佛說是諸菩薩摩訶薩。得大法利時。於虛空中。雨曼陀羅華。摩訶曼陀羅華。以散無量百千萬億衆寶樹下。師子座上。諸佛。并散七寶塔中。師子座上。釋迦牟尼佛。及久滅度多寶如來。亦散一切諸大菩薩。及四部衆。又雨細末梅檀沉水香等。於虛空中。天鼓自鳴。妙聲深遠。又雨千種天衣。垂諸瓔珞。眞珠瓔珞。摩尼珠瓔珞。如意珠瓔珞。遍於九方衆寶香。鑪燒無價香。自然周至。供養大會。一一佛上。有諸菩薩。執持幡蓋。次第而上。至于梵天。是諸菩薩。以妙音聲。歌無量頌讚歎諸佛。爾時彌勒菩薩。從座而起。偏袒右肩。合掌向佛。而說偈言。

佛說希有法 昔所未曾聞 世尊有大力 壽命不可量 無數諸佛子 聞世尊分別

億下三本俱無
衆字
梅宋明俱作旃
下同○鑷明作
爐

說得法利者 歡喜充滿身 或住不退地 或得陀羅尼 或無礙樂說 萬億旋總持
 或有大千界 微塵數菩薩 各各皆能轉 不退之法輪 復有中千界 微塵數菩薩
 各各皆能轉 清淨之法輪 復有小千界 微塵數菩薩 隨數生成佛 或一四天下 當得成佛道
 或有四三二 如此四天下 微塵數菩薩 隨數生成佛 得無量無漏 清淨之果報
 餘有一生在 當成一切智 如是等衆生 聞佛壽長遠 世尊說無量 不可思議法
 復有八世界 微塵數衆生 聞佛說壽命 皆發無上心 釋梵如恒沙 無數佛土來
 多有所饒益 如虛空無邊 雨天曼陀羅 摩訶曼陀羅 釋梵如恒沙 無數佛土來
 雨栴檀沈水 繽紛而亂墜 如鳥飛空下 供散於諸佛 天鼓虛空中 自然出妙聲
 天衣千萬種 旋轉而來下 衆寶妙香爐 燒無價之香 自然悉周遍 供養諸世尊
 其大菩薩衆 執七寶幡蓋 高妙萬億種 次第至梵天 一一諸佛前 寶幢懸勝幡
 亦以千萬偈 歌詠諸如來 如是種種事 昔所未曾有 聞佛壽無量 一切皆歡喜
 佛名聞十方 廣饒益衆生 一切具善根 以助無上心

爾時佛告彌勒菩薩摩訶薩。阿逸多。其有衆生。聞佛壽命長遠如是。乃至能生一念信解。所得功德無有限
 量。若有善男子善女人。爲阿耨多羅三藐三菩提故。於八十萬億那由他劫。行五波羅蜜。檀波羅蜜。尸羅波
 羅蜜。羼提波羅蜜。毗梨耶波羅蜜。禪波羅蜜。除般若波羅蜜。以是功德。比前功德。百分千分。百千萬億分不
 及其一。乃至算數譬喻所不能知。若善男子善女人。有如是功德。於阿耨多羅三藐三菩提退者。無有是處。
 爾時世尊欲重宣此義。而說偈言

若人求佛慧 於八十萬億 那由他劫數 行五波羅蜜 於是諸劫中 布施供養佛
 及緣覺弟子 并諸菩薩衆 珍異之飲食 上服與臥具 栴檀立精舍 以園林莊嚴

此元明俱作斯

諸三本俱作之

酥同作蘇

皆同作普

如是等布施 種種皆微妙 盡此諸劫數 以迴向佛道 若復持禁戒 清淨無缺漏

求於無上道 諸佛之所歎 若復行忍辱 住於調柔地 設衆惡來加 其心不傾動

諸有得法者 懷於增上慢 爲此所輕惱 如是亦能忍 若復勤精進 志念常堅固

於無量億劫 一心不懈息 又於無數劫 住於空閑處 若坐若經行 除睡常攝心

以是因緣故 能生諸禪定 八十億萬劫 安住心不亂 持此一心福 願求無上道

我得一切智 盡諸禪定際 是人於百千 萬億劫數中 行此諸功德 如上之所說

有善男女等 聞我說壽命 乃至一念信 其福過於彼 若人悉無有 一切諸疑悔

深心須臾信 其福爲如此 其有諸菩薩 無量劫行道 聞我說壽命 是則能信受

如是諸人等 頂受此經典 願我於未來 長壽度衆生 如今日世尊 諸釋中之王

道場師子吼 說法無所畏 我等未來世 一切所尊敬 坐於道場時 說壽亦如是

若有深心者 清淨而質直 多聞能總持 隨義解佛語 如是諸人等 於此無有疑

又阿逸多。若有聞佛壽命長遠解其言趣。是人所得功德無有有限量。能起如來無上之慧。何況廣聞是經。若

教人聞。若自持若教人持。若自書若教人書。若以華香瓔珞幢幡繒蓋香油酥燈供養經卷。是人功德無量

無邊。能生一切種智。阿逸多。若善男子善女人。聞我說壽命長遠深心信解。則爲見佛常在耆闍崛山。共大

菩薩諸聲聞衆圍繞說法。又見此娑婆世界。其地琉璃坦然平正。閻浮檀金以界八道寶樹行列。諸臺樓觀

皆悉寶成。其菩薩衆咸處其中。若有能如是觀者。當知是爲深信解相。又復如來滅後。若聞是經。而不毀

起隨喜心。當知已爲深信解相。何況讀誦受持之者。斯人則爲頂戴如來。阿逸多。是善男子善女人。不須爲

我復起塔寺及作僧坊。以四事供養衆僧。所以者何。是善男子善女人。受持讀誦是經典者。爲已起塔造立

僧坊供養衆僧。則爲以佛舍利起七寶塔。高廣漸小。至于梵天。懸諸幡蓋及衆寶鈴。華香瓔珞抹香塗香。燒

香、衆鼓伎樂、簫笛、篳篥、種種舞戲。以妙音聲歌頌讚頌。則爲已於無量千萬億劫。作是供養已。阿逸多。若我滅後。聞是經典。有能受持。若自書。若教人書。則爲起立僧坊。以赤梅檀作諸殿堂。三十有二。高八多羅樹。高廣嚴好。百千比丘於其中止。園林浴池。經行禪窟。衣服飲食。牀褥湯藥。一切樂具。充滿其中。如是僧坊堂閣。若干百千萬億。其數無量。以此現前供養於我及比丘僧。是故我說。如來滅後。若有受持讀誦爲他人說。若自書。若教人書。供養經卷。不須復起塔寺。及造僧坊供養衆僧。況復有人能持是經。兼行布施持戒忍辱。精進一心智慧。其德最勝。無量無邊。譬如虛空。東西南北四維上下。無量無邊。是人功德亦復如是。無量無邊。疾至一切種智。若人讀誦受持是經。爲他人說。若自書。若教人書。復能起塔及造僧坊。供養讚歎聲聞衆僧。亦以百千萬億讚歎之法。讚歎菩薩功德。又爲他人種種因緣。隨義解說。此法華經。復能清淨持戒。與柔和者而共同止。忍辱無瞋。志念堅固。常貴坐禪。得諸深定。精進勇猛。攝諸善法。利根智慧。善答問難。阿逸多。若我滅後。諸善男子善女人。受持讀誦是經典者。復有如是諸善功德。當知是人已趣道場。近阿耨多羅三藐三菩提。坐道樹下。阿逸多。是善男子善女人。若坐若立。若經行處。此中便應起塔。一切天人皆應供養。如佛之塔。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言。

若我滅度後	能奉持此經	斯人福無量	如上之所說	是則爲具足	一切諸供養
以舍利起塔	七寶至莊嚴	表利甚高廣	漸小至梵天	寶鈴千萬億	風動出妙音
又於無量劫	而供養此塔	華香諸瓔珞	天衣衆伎樂	燃香油酥燈	周匝常照明
惡世末法時	能持是經者	則爲已如上	具足諸供養	若能持此經	則如佛現在
以牛頭梅檀	起僧坊供養	堂有三十二	高八多羅樹	上饌妙衣服	牀臥皆具足
百千衆住處	園林諸浴池	經行及禪窟	種種皆嚴好	若有信解心	受持讀誦書
若復教人書	及供養經卷	散華香抹香	以須曼瞻蔔	阿提目多伽	薰油常燃之

瞻明元俱作齋

梅宋作旃

蘇三本俱作蘇

如是供養者	得無量功德	如虛空無邊	其福亦如是	況復持此經	兼布施持戒
忍辱樂禪定	不瞋不惡口	恭敬於塔廟	謙下諸比丘	遠離自高心	常思惟智慧
有問難不瞋	隨順為解說	若能行是行	功德不可量	若見此法師	成就如是德
應以天華散	天衣覆其身	頭面接足禮	生心如佛想	又應作是念	不久詣道場
得無漏無為	廣利諸人天	其所住止處	經行若坐臥	乃至說一偈	是中應起塔
莊嚴令妙好	種種以供養	佛子住此地	則是佛受用	常在於其中	經行及坐臥

隨喜功德品第十八

爾時彌勒菩薩摩訶薩白佛言。世尊。若有善男子善女人。聞是法華經隨喜者。得幾所福。而說偈言。

世尊滅度後 其有聞是經 若能隨喜者 為得幾所福

爾時佛告彌勒菩薩摩訶薩。阿逸多。如來滅後。若比丘比丘尼優婆塞優婆夷。及餘智者。若長若幼。聞是經隨喜已。從法會出。至於餘處。若在僧坊。若空閑地。若城邑巷陌。聚落田里。如其所聞。為父母宗親善友知識。隨力演說。是諸人等。聞已。隨喜復行轉教。餘人聞已。亦隨喜轉教。如是展轉至第五十。阿逸多。其第五十善男子善女人。隨喜功德。我今說之。汝當善聽。若四百萬億阿僧祇世界。六趣四生。衆生卵生胎生濕生化生。若有形無形。有想無想。非有想非無想。無足二足四足多足。如是等在衆生數者。有人求福。隨其所欲。娛樂之具。皆給與之。一一衆生。與滿閻浮提金銀琉璃車渠碼瑙珊瑚琥珀諸妙珍寶。及象馬車乘七寶所成宮殿樓閣等。是大施主。如是布施滿八十年已。而作是念。我已施衆生娛樂之具。隨意所欲。然此衆生皆已衰老。年過八十。髮白面皺。將死不久。我當以佛法而訓導之。即集此衆生。宣布法化。示教利喜。一時皆得須陀洹道。斯陀含道。阿那含道。阿羅漢道。盡諸有漏。於深禪定。皆得自在。具八解脫。於汝意云何。是大施主所得。

品目上宋元俱
有妙法蓮華經
五字

功德寧爲多不。彌勒白佛言。世尊。是人功德甚多無量無邊。若是施主。但施衆生一切樂具。功德無量。何況令得阿羅漢果。佛告彌勒。我今分明語汝。是人以一切樂具。施於四百萬億阿僧祇世界六趣衆生。又令得阿羅漢果。所得功德。不如是第五十八人聞法華經一偈。隨喜功德。百分千分。百千萬億分不及其一。乃至算數譬喻所不能知。阿逸多。如是第五十人展轉聞法華經。隨喜功德。尙無量無邊。阿僧祇。何況最初於會中聞而隨喜者。其福復勝無量無邊。阿僧祇。不可得比。又阿逸多。若人爲是經故。往詣僧坊。若坐若立。須臾聽受。緣是功德。轉身所生。得如上妙象馬車乘珍寶蓋輿及乘天宮。若復有人於講法處坐。更有人來勸令坐聽。若分座令坐。是人功德。轉身得帝釋坐處。若梵天王坐處。若轉輪聖王所坐之處。阿逸多。若復有人語餘人言。有經名法華。可共往聽。卽受其教。乃至須臾間聞。是人功德。轉身得與陀羅尼菩薩共生一處。利根智慧。百千萬世終不瘡癩。口氣不臭。舌常無病。口亦無病。齒不垢黑。不黃不踈。亦不缺失。不差不曲。唇不下垂。亦不褻縮。不麤澁。不瘡疥。亦不缺壞。亦不喎斜。不厚不大。亦不顰黑。無諸可惡。鼻不匾凹。亦不曲戾。面色不黑。亦不狹長。亦不窵曲。無有一切不可喜相。唇舌牙齒悉皆嚴好。鼻修高直。面貌圓滿。眉高而長。額廣方正。人相具足。世世所生。見佛聞法。信受教誨。阿逸多。汝且觀是勸於一人。令往聽法。功德如此。何況一心聽說讀誦。而於大衆爲人分別。如說修行。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言。

若人於法會	得聞是經典	乃至於一偈	隨喜爲他說	如是展轉教	至于第五十
最後人獲福	今當分別之	如有大施主	供給無量衆	具滿八十歲	隨意之所欲
見彼衰老相	髮白而面皺	齒踈形枯竭	念其死不久	我今應當教	令得於道果
卽爲方便說	涅槃真實法	世皆不牢固	如水沫泡焰	汝等咸應當	疾生厭離心
諸人聞是法	皆得阿羅漢	具足六神通	三明八解脫	最後第五十	聞一偈隨喜
是人福勝彼	不可爲譬喻	如是展轉聞	其福尙無量	何況於法會	初聞隨喜者

量三本俱作限

品目上明無經
名下同

鍾三本俱作鐘
次同

若有勸一人 將引聽法華 言此經深妙 千萬劫難遇 卽受教往聽 乃至須臾聞
 斯人之福報 今當分別說 世世無口患 齒不踈黃黑 唇不厚褻缺 無有可惡相
 舌不乾黑短 鼻高修且直 額廣而平正 面目悉端嚴 爲人所喜見 口氣無臭穢
 優鉢華之香 常從其口出 若故詣僧坊 欲聽法華經 須臾聞歡喜 今當說其福
 後生天人中 得妙象馬車 珍寶之輦輦 及乘天宮殿 若於講法處 勸人坐聽經
 是福因緣得 釋梵轉輪座 何況一心聽 解說其義趣 如說而修行 其福不可量

妙法蓮華經法師功德品第十九

爾時佛告常精進菩薩摩訶薩。若善男子善女人。受持是法華經。若讀若誦若解說若書寫。是人當得八百
 眼功德。千二百耳功德。八百鼻功德。千二百舌功德。八百身功德。千二百意功德。以是功德莊嚴六根。皆令
 清淨。是善男子善女人。父母所生清淨肉眼。見於三千大千世界。內外所有山林河海。下至阿鼻地獄。上至
 有頂。亦見其中一切衆生。及業因緣果報生處。悉見悉知。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言

若於大衆中 以無所畏心 說是法華經 汝聽其功德 是人得八百 功德殊勝眼
 以是莊嚴故 其目甚清淨 父母所生眼 悉見三千界 內外彌樓山 須彌及鐵圍
 并諸餘山林 大海江河水 下至阿鼻獄 上至有頂天 其中諸衆生 一切皆悉見
 雖未得天眼 肉眼力如是

復次常精進。若善男子善女人。受持此經。若讀若誦若解說若書寫。得千二百耳功德。以是清淨耳。聞三千
 大千世界。下至阿鼻地獄。上至有頂。其中內外種種所有語言音聲。象聲馬聲牛聲車聲。啼哭聲愁歎聲。螺
 聲鼓聲。鐘聲鈴聲。笑聲語聲。男聲女聲童子聲童女聲。法聲非法聲。苦聲樂聲。凡夫聲聖人聲。喜聲不喜聲。

修同作脩下同

天聲龍聲夜又聲。乳闍婆聲。阿修羅聲。迦樓羅聲。緊那羅聲。摩睺羅伽聲。火聲。水聲。風聲。地獄聲。畜生聲。餓鬼聲。比丘聲。比丘尼聲。聲聞聲。辟支佛聲。菩薩聲。佛聲。以要言之。三千大千世界中。一切內外所有諸聲。雖未得天耳。以父母所生清淨常耳。皆悉聞知。如是分別種種音聲。而不壞耳根。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言。

父母所生耳 清淨無濁穢 以此常耳聞 三千世界聲 象馬車牛聲 鍾鈴螺鼓聲

琴瑟箏篥聲 簫笛之音聲 清淨好歌聲 聽之而不著 無數種人聲 聞悉能解了

又聞諸天聲 微妙之歌音 及聞男女聲 童子童女聲 山川嶮谷中 迦陵頻伽聲

命令等諸鳥 悉聞其音聲 地獄衆苦痛 種種楚毒聲 餓鬼飢渴逼 求索飲食聲

諸阿修羅等 居在大海邊 自共語言時 出于大音聲 如是說法者 安住於此間

遙聞是衆聲 而不壞耳根 十方世界中 禽獸鳴相呼 其說法之人 於此悉聞之

其諸梵天上 光音及遍淨 乃至有頂天 言語之音聲 法師住於此 悉皆得聞之

一切比丘衆 及諸比丘尼 若讀誦經典 若爲他人說 法師住於此 悉皆得聞之

復有諸菩薩 讀誦於經法 若爲他人說 撰集解其義 如是諸音聲 悉皆得聞之

諸佛大聖尊 教化衆生者 於諸大會中 演說微妙法 持此法華者 悉皆得聞之

三千大千界 內外諸音聲 下至阿鼻獄 上至有頂天 皆聞其音聲 而不壞耳根

其耳聰利故 悉能分別知 持是法花者 雖未得天耳 但用所生耳 功德已如是

復次常精進。若善男子善女人。受持是經。若讀若誦。若解說若書寫。成就八百鼻功德。以是清淨鼻根。聞於三千大千世界上下內外種種諸香。須曼那華香。闍提華香。末利華香。瞻蔔華香。波羅羅華香。赤蓮華香。青蓮華香。白蓮華香。華樹香。菓樹香。栴檀香。沈水香。多摩羅跋香。多伽羅香。及千萬種和香。若抹若丸。若塗香。

瞻元作蘄
菓三本俱作果
下同

梅宋元俱作旃

持是經者於此間住悉能分別又復別知衆生之香象香馬香牛羊等香男女香童子香童女香及草木叢林香若近若遠所有諸香悉皆得聞分別不錯持是經者雖住於此亦聞天上諸天之香波利質多羅拘鞞陀羅樹香及曼陀羅華香摩訶曼陀羅華香曼殊沙華香摩訶曼殊沙華香梅檀沈水種種抹香諸羅華香如是等天香和合所出之香無不聞知又聞諸天身香釋提桓因在勝殿上五欲娛樂嬉戲時香若在妙法堂上爲忉利諸天說法時香若於諸園遊戲時香及餘天等男女身香皆悉遙聞如是展轉乃至梵天上至有頂諸天身香亦皆聞之并聞諸天所燒之香及聲聞香辟支佛香菩薩香諸佛身香亦皆遙聞知其所

梅宋作旃

是人鼻清淨

於此世界中

若香若臭物

種種悉聞知

須曼那閣提

多摩羅梅檀

沈水及桂香

種種華菓香

及知衆生香

男子女人香

說法者遠住

聞香知所在

大勢轉輪王

小轉輪及子

羣臣諸宮人

聞香知所在

身所著珍寶

及地中寶藏

轉輪王寶女

聞香知所在

諸人嚴身具

衣服及瓔珞

種種所塗香

聞則知其身

諸天若行坐

遊戲及神變

持是法華者

聞香悉能知

諸樹華菓實

及酥油香氣

皆三本俱作悉

持經者住此

悉知其所在

諸山深嶮處

梅檀樹花敷

衆生在中者

聞香皆能知

鐵圍山大海

地中諸衆生

持經者聞香

悉知其所在

阿修羅男女

及其諸眷屬

鬪諍遊戲時

聞香皆能知

曠野險隘處

師子象虎狼

野牛水牛等

聞香知所在

辯同作辨

若有懷妊者

未歸其男女

無根及非人

聞香悉能知

以聞香力故

知其初懷妊

成就不成就

安樂產福子

以聞香力故

知男女所念

染欲癡悲心

亦知修善者

地中悉伏藏

金銀諸珍寶

銅器之所盛

聞香悉能知

種種諸瓔珞

無能識其價

聞香知貴賤

出處及所在

天上諸華等

曼陀曼殊沙

波利質多樹

聞香悉能知

天上諸宮殿 上中下差別 衆寶花莊嚴 聞香悉能知 天園林勝殿 諸觀妙法堂
 在中而娛樂 聞香悉能知 諸天若聽法 或受五欲時 來往行坐臥 聞香悉能知
 天女所著衣 好華香莊嚴 周旋遊戲時 聞香悉能知 如是展轉上 乃至於梵天
 入禪出禪者 聞香悉能知 光音遍淨天 乃至于有頂 初生及退沒 聞香悉能知
 諸比丘衆等 於法常精進 若坐若經行 及讀誦經法 或在林樹下 專精而坐禪
 持經者聞香 悉知其在 菩薩志堅固 坐禪若讀誦 或爲人說法 聞香悉能知
 在在方世尊 一切所恭敬 愍衆而說法 聞香悉能知 衆生在佛前 聞經皆歡喜
 如法而修行 聞香悉能知 雖未得菩薩 無漏法生鼻 而是持經者 先得此鼻相
 復次常精進若善男子善女人受持是經若讀若誦若解說若書寫得千二百舌功德若好若醜若美若不
 美及諸苦澀物在其舌根皆變成上味如天甘露無不美者若以舌根於大衆中有所演說出深妙聲能入
 其心皆令歡喜快樂又諸天子天女釋梵諸天聞是深妙音聲有所演說言論次第皆悉來聽及諸龍龍女
 夜叉夜叉女 軋闍婆軋闍婆女 阿修羅阿修羅女 迦樓羅迦樓羅女 緊那羅緊那羅女 摩睺羅伽摩睺羅伽
 女爲聽法故皆來親近恭敬供養及比丘比丘尼優婆塞優婆夷國王王子羣臣眷屬小轉輪王大轉輪王
 七寶千子內外眷屬乘其宮殿俱來聽法以是菩薩善說法故婆羅門居士國內人民盡其形壽隨侍供養
 又諸聲聞辟支佛菩薩諸佛常樂見之是人所在方面諸佛皆向其處說法悉能受持一切佛法又能出於
 深妙法音爾時世尊欲重宣此義而說偈言

是人舌根淨 終不受惡味 其有所食噉 悉皆成甘露 以深淨妙聲 於大衆說法
 以諸因緣喻 引導衆生心 聞者皆歡喜 設諸上供養 諸天龍夜叉 及阿修羅等
 皆以恭敬心 而共來聽法 是說法之人 若欲以妙音 徧滿三千界 隨意卽能至

大小轉輪王 及千子眷屬 合掌恭敬心 常來聽受法 諸天龍夜叉 羅刹毗舍闍

亦以歡喜心 常樂來供養 梵天王魔王 自在大自在 如是諸天衆 常來至其所

諸佛及弟子 聞其說法音 常念而守護 或時爲現身

復次常精進。若善男子善女人。受持是經。若讀若誦。若解說若書寫。得八百身功德。得清淨身如淨琉璃。衆生喜見。其身淨故。三千大千世界衆生。生時死時。上下好醜。生善處惡處。悉於中現。及鐵圍山。大鐵圍山。彌樓山。摩訶彌樓山等諸山王。及其中衆生。悉於中現。下至阿鼻地獄。上至有頂。所有及衆生。悉於中現。若聲聞辟支佛。菩薩諸佛說法。皆於身中現其色像。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言

若持法花者 其身甚清淨 如彼淨琉璃 衆生皆喜見 又如淨明鏡 悉見諸色像

菩薩於淨身 皆見世所有 唯獨自明了 餘人所不見 三千世界中 一切諸羣萌

天人阿修羅 地獄鬼畜生 如是諸色像 皆於身中現 諸天等宮殿 乃至於有頂

鐵圍及彌樓 摩訶彌樓山 諸大海水等 皆於身中現 諸佛及聲聞 佛子菩薩等

若獨若在衆 說法悉皆現 雖未得無漏 法性之妙身 以清淨常體 一切於中現

復次常精進。若善男子善女人。如來滅後受持是經。若讀若誦。若解說若書寫。得千二百意功德。以是清淨意根。乃至聞一偈一句。通達無量無邊之義。解是義已。能演說一句一偈。至於一月四月乃至一歲。諸所說法。隨其義趣。皆與實相不相違背。若說俗間經書。治世語言。資生業等。皆順正法。三千大千世界六趣衆生。心之所行。心所動作。心所戲論。皆悉知之。雖未得無漏智慧。而其意根清淨如此。是人有所思惟。籌量言說。皆是佛法。無不真實。亦是先佛經中所說。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言

是人意清淨 明利無穢濁 以此妙意根 知上中下法 乃至聞一偈 通達無量義

次第如法說 月四月至歲 是世界內外 一切諸衆生 若天龍及人 夜叉鬼神等

穢濁三本俱作

其在六趣中	所念若干種	持法花之報	一時皆悉知	十方無數佛	百福莊嚴相
爲衆生說法	悉聞能受持	思惟無量義	說法亦無量	終始不忘錯	以持法華故
悉知諸法相	隨義識次第	達名字語言	如所知演說	此人有所說	皆是先佛法
以演此法故	於衆無所畏	持法花經者	意根淨若斯	雖未得無漏	先有如是相
是人持是經	安住希有地	爲一切衆生	歡喜而愛敬	能以千萬種	善巧之語言
分別而說法	持法花經故				

妙法蓮華經卷第六

妙法蓮華經卷第七

〔麗鳴〕宋鳳三元鳳〔明草〕

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什奉

詔譯

妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十一

爾時佛告得大勢菩薩摩訶薩。汝今當知。若比丘比丘尼優婆塞優婆夷。持法花經者。若有惡口罵詈誹謗。獲大罪報。如前所說。其所得功德。如向所說。眼耳鼻舌身意清淨。得大勢。乃往昔過無量無邊不可思議阿僧祇劫。有佛名威音王。如來應供正遍知。明行足善逝世間解。無上士調御丈夫。天人師佛世尊。劫名離衰。國名大成。其威音王佛。於彼世中。爲天人阿修羅說法。爲求聲聞者。說應四諦法。度生老病死。究竟涅槃。爲求辟支佛者。說應十二因緣法。爲諸菩薩。因阿耨多羅三藐三菩提。說應六波羅蜜法。究竟佛慧。得大勢。是威音王佛。壽四十萬億那由他恒河沙劫。正法住世劫數。如一閻浮提微塵。像法住世劫數。如四天下微塵。其佛饒益衆生已。然後滅度。正法像法滅盡之後。於此國土。復有佛出。亦號威音王。如來應供正遍知。明行足善逝世間解。無上士調御丈夫。天人師佛世尊。如是次第。有二萬億佛。皆同一號。最初威音王。如來。既已滅度。正法滅後。於像法中。增上慢比丘。有大勢力。爾時有一菩薩比丘。名常不輕。以大勢。以何因緣。名常不輕。是比丘。凡有所見。若比丘比丘尼優婆塞優婆夷。皆悉禮拜讚歎。而作是言。我深敬汝等。不敢輕慢。所以者何。汝等皆行菩薩道。當得作佛。而是比丘。不專讀誦經典。但行禮拜。乃至遠見四衆。亦復故往禮拜讚歎。而作是言。我不敢輕於汝等。汝等當作佛。故四衆之中。有生瞋恚心不淨者。惡口罵詈言。是無智比丘。從何所來自言。我不敢輕汝。而與我等授記。當得作佛。我等不用如是虛妄授記。如此經歷多年。常被罵詈。不生瞋恚。常作是言。汝當作佛。說是語時。衆人或以杖木瓦石。而打擲之。避走遠住。猶高聲唱言。我不敢輕於汝。

等。汝等皆當作佛。以其常作是語故。增上慢比丘比丘尼優婆塞優婆夷。號之爲常不輕。是比丘臨欲終時。於虛空中。具聞威音王佛先所說法華經。二十千萬億偈。悉能受持。卽得如上眼根清淨耳鼻舌身意根清淨。得是六根清淨已。更增壽命二百萬億那由他歲。廣爲人說是法華經。於時增上慢四衆。比丘比丘尼優婆塞優婆夷。輕賤是人。爲作不輕名者。見其得大神通力樂說辯力大善寂力。聞其所說皆信伏隨從。是菩薩復化千萬億衆。令住阿耨多羅三藐三菩提。命終之後。得值二千億佛。皆號日月燈明。於其法中。說是法華經。以是因緣。復值二千億佛。同號雲自在燈王。於此諸佛法中。受持讀誦。爲諸四衆說此經典故。得是常眼清淨耳鼻舌身意諸根清淨。於四衆中說法。心無所畏。得大勢。是常不輕菩薩摩訶薩。供養如是若干諸佛。恭敬尊重讚歎種種善根。於後復值千萬億佛。亦於諸佛法中。說是經典。功德成就。當得作佛。得大勢。於意云何。爾時常不輕菩薩苦異人乎。則我身是。若我於宿世。不受持讀誦此經。爲他人說者。不能疾得阿耨多羅三藐三菩提。我於先佛所。受持讀誦此經。爲人說故。疾得阿耨多羅三藐三菩提。得大勢。彼時四衆比丘比丘尼優婆塞優婆夷。以瞋恚意輕賤我故。二百億劫。常不值佛。不聞法。不見僧。千劫於阿鼻地獄受大苦惱。畢是罪已。復遇常不輕菩薩教化。阿耨多羅三藐三菩提。得大勢。於汝意云何。爾時四衆常輕是菩薩者。豈異人乎。今此會中。跋陀婆羅等五百菩薩。師子月等五百比丘尼。思佛等五百優婆塞。皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉者。是大勢。當知是法華經。大饒益諸菩薩摩訶薩。能令至於阿耨多羅三藐三菩提。是故諸菩薩摩訶薩。於如來滅後。常應受持讀誦解說書寫是經。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

過去有佛	號威音王	神智無量	將導一切	天人龍神	所共供養	是佛滅後	法欲盡時
有一菩薩	名常不輕	時諸四衆	計著於法	不輕菩薩	往到其所	而語之言	我不輕汝
汝等行道	皆當作佛	諸人聞已	輕毀罵詈	不輕菩薩	能忍受之	其罪畢已	臨命終時
得聞此經	六根清淨	神通力故	增益壽命	復爲諸人	廣說是經	諸著法衆	皆蒙菩薩

教化成就	令住佛道	不輕命終	值無數佛	說是經故	得無量福	漸具功德	疾成佛道
彼時不輕	則我身是	時四部衆	著法之者	聞不輕言	汝當作佛	以是因緣	值無數佛
此會菩薩	五百之衆	并及四部	清信士女	今於我前	聽法者是	我於前世	勸是諸人
聽受斯經	第一之法	開示教人	令住涅槃	世世受持	如是經典	億億萬劫	至不可議
時乃得聞	是法華經	億億萬劫	至不可議	諸佛世尊	時說是經	是故行者	於佛滅後
聞如是經	勿生疑惑	應當一心	廣說此經	世世值佛	疾成佛道		

妙法蓮華經如來神力品第二十一

跡三本俱作浦

爾時千世界微塵等菩薩摩訶薩。從地踊出者。皆於佛前一心合掌瞻仰尊顏而白佛言。世尊。我等於佛滅後。世尊分身所在國土滅度之處。當廣說此經。所以者何。我等亦自欲得是真淨大法。受持誦誦解說書寫而供養之。爾時世尊於文殊師利等無量百千萬億舊住娑婆世界菩薩摩訶薩。及諸比丘比丘尼優婆塞。優婆夷。天龍夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽人。非人等。一切衆前。現大神力。出廣長舌上至梵世。一切毛孔。放於無量無數色光。皆悉遍照十方世界。衆寶樹下。師子座上。諸佛亦復如是。出廣長舌。放無量光。釋迦牟尼佛及寶樹下諸佛。現神力時。滿百千歲。然後還攝舌相。一時警歎。俱共彈指。是二音聲。遍至十方諸佛世界。地皆六種震動。其中衆生。天龍夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽人。非人等。以佛神力故。皆見此娑婆世界。無量無邊百千萬億衆寶樹下。師子座上。諸佛。及見釋迦牟尼佛。共多寶如來在寶塔中坐師子座。又見無量無邊百千萬億菩薩摩訶薩。及諸四衆恭敬圍繞。釋迦牟尼佛。既見是已。皆大歡喜。得未曾有。即時諸天於虛空中高聲唱言。過此無量無邊百千萬億阿僧祇世界。有國名娑婆。是中有佛。名釋迦牟尼。今爲諸菩薩摩訶薩。說大乘經。名妙法蓮華。教菩薩法。佛所護念。汝等當深心隨喜。亦

當禮拜供養釋迦牟尼佛。彼諸衆生聞虛空中聲已。合掌向娑婆世界。作如是言。南無釋迦牟尼佛。南無釋迦牟尼佛。以種種華香瓔珞幡蓋及諸嚴身之具珍寶妙物。皆共遙散娑婆世界。所散諸物從十方來。譬如雲集變成寶帳。遍覆此間諸佛之上。于時十方世界通達無礙。如一佛土。爾時佛告上行等菩薩大衆。諸佛神力如是無量無邊不可思議。若我以是神力。於無量無邊百千萬億阿僧祇劫。爲囑累故說此經功德。猶不能盡。以要言之。如來一切所有之法。如來一切自在神力。如來一切祕要之藏。如來一切甚深之事。皆於此經宣示顯說。是故汝等於如來滅後。應當一心受持讀誦解說書寫如說修行。所在國土。若有受持讀誦解說書寫如說修行。若經卷所住之處。若於園中。若於林中。若於樹下。若於僧坊。若白衣舍。若在殿堂。若山谷曠野。是中皆應起塔供養。所以者何。當知是處卽是道場。諸佛於此得阿耨多羅三藐三菩提。諸佛於此轉于法輪。諸佛於此而般涅槃。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

諸佛救世者	住於大神通	爲悅衆生故	現無量神力	舌相至梵天	身放無數光
爲求佛道者	現此希有事	諸佛警效聲	及彈指之聲	周聞十方國	地皆六種動
以佛滅度後	能持是經故	諸佛皆歡喜	現無量神力	囑累是經故	讚美受持者
於無量劫中	猶故不能盡	是人之功德	無邊無有窮	如十方虛空	不可得邊際
能持是經者	則爲已見我	亦見多寶佛	及諸分身者	又見我今日	教化諸菩薩
能持是經者	令我及分身	滅度多寶佛	一切皆歡喜	十方現在佛	并過去未來
亦見亦供養	亦令得歡喜	諸佛坐道場	所得祕要法	能持是經者	不久亦當得
能持是經者	於諸法之義	名字及言辭	樂說無窮盡	如風於空中	一切無障礙
於如來滅後	知佛所說經	因緣及次第	隨義如實說	如日月光明	能除諸幽冥
斯人行世間	能滅衆生闇	教無量菩薩	畢竟住一乘	是故有智者	聞此功德利

於我滅度後 應受持斯經 是人於佛道 決定無有疑

品目上明無經
名次同

妙法蓮華經囑累品第二十二

爾時釋迦牟尼佛從法座起現大神力以右手摩無量菩薩摩訶薩頂而作是言我於無量百千萬億阿僧祇劫修習是難得阿耨多羅三藐三菩提法今以付囑汝等汝等應當一心流布此法廣令增益如是三摩諸菩薩摩訶薩頂而作是言我於無量百千萬億阿僧祇劫修習是難得阿耨多羅三藐三菩提法今以付囑汝等汝等當受持讀誦廣宣此法令一切衆生普得聞知所以者何如來有大慈悲無諸慳吝亦無所畏能與衆生佛之智慧如來智慧自然智慧如來是一切衆生之大施主汝等亦應隨學如來之法勿生慳吝於未來世若有善男子善女人信如來智慧者當爲演說此法華經使得聞知爲令其人得佛慧故若有衆生不信受者當於如來餘深法中示教利喜汝等若能如是則爲已報諸佛之恩時諸菩薩摩訶薩聞佛作是說已皆大歡喜遍滿其身益加恭敬曲躬低頭合掌向佛俱發聲言如世尊敕當具奉行唯然世尊願不有慮諸菩薩摩訶薩衆如是三反俱發聲言如世尊敕當具奉行唯然世尊願不有慮爾時釋迦牟尼佛令十方來諸分身佛各還本土而作是言諸佛各隨所安多寶佛塔還可如故說是語時十方無量分身諸佛坐寶樹下師子座上者及多寶佛并上行等無邊阿僧祇菩薩大衆舍利弗等聲聞四衆及一切世間天人阿修羅等聞佛所說皆大歡喜

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

爾時宿王華菩薩白佛言世尊藥王菩薩云何遊於娑婆世界世尊是藥王菩薩有若干百千萬億那由他難行苦行善哉世尊願少解說諸天龍神夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等又他國

修宋元俱作脩

修三本俱作脩
次同
爐明作爐

瞻元明俱作瞻
下同

加明作顯

身下元明俱無
供養乃至上慧
二句

土諸來菩薩。及此聲聞衆。聞皆歡喜。爾時佛告宿王華菩薩。乃往過去無量恒河沙劫。有佛號日月淨明德。如來應供正遍知。明行足。善逝世間。解無上士調御丈夫。天人師。佛世尊。其佛有八十億大菩薩摩訶薩。七十二恒河沙大聲聞衆。佛壽四萬二千劫。菩薩壽命亦等。彼國無有女人。地獄餓鬼畜生阿修羅等。及以諸難。地平如掌。琉璃所成。寶樹莊嚴。寶帳覆上。垂寶華幡。寶瓶香爐。周遍國界。七寶爲臺。一樹一臺。其樹去臺盡一箭道。此諸寶樹。皆有菩薩聲聞而坐其下。諸寶臺上。各有百億諸天。作天伎樂。歌歎於佛。以爲供養。爾時彼佛。爲一切衆生。憙見菩薩。及衆菩薩。諸聲聞衆。說法華經。是一切衆生。憙見菩薩。樂習苦行。於日月淨明德佛法中。精進經行。一心求佛。滿萬二千歲已。得現一切色身三昧。得此三昧已。心大歡喜。卽作念言。我得現一切色身三昧。皆是得聞法華經力。我今當供養日月淨明德佛及法華經。卽時入是三昧。於虛空中。雨曼陀羅華。摩訶曼陀羅華。細抹堅黑栴檀。滿虛空中如雲而下。又雨海此岸栴檀之香。此香六銖。價直娑婆世界。以供養佛。作是供養已。從三昧起。而自念言。我雖以神力供養於佛。不如以身供養。卽服諸香。栴檀薰陸。兜樓婆。畢力迦。沈水。膠香。又飲瞻蔔諸華香油。滿千二百歲已。香油塗身。於日月淨明德佛前。以天寶衣。而自纏身已。灌諸香油。以神通力願。而自然身。光明遍照八十億恒河沙世界。其中諸佛同時讚言。善哉。善哉。善男子。是真精進。是真法供養。如來。若以華香瓔珞。燒香。抹香。塗香。天繒幡蓋。及海此岸栴檀之香。如是等種種諸物供養。所不能及。假使國城妻子。布施亦所不及。善男子。是名第一之施。於諸施中最尊最上。以法供養諸如來。故。作是語已。而各默然。其身火燃千二百歲。過是已。後其身乃盡。一切衆生。憙見菩薩。作如是法供養已。命終之後。復生日月淨明德佛國中。於淨德王家。結加趺坐。忽然化生。卽爲其父。而說偈言。

大王今當知 我經行彼處 卽時得一切 現諸身三昧 勲行大精進 捨所愛之身
供養於世尊 爲求無上慧

說是偈已而白父言。日月淨明德佛。今故現在。我先供養佛已。得解一切衆生語言陀羅尼。復聞是法華經。八百千萬億那由他。甄迦羅。頻婆羅。阿閼婆等偈。大王。我今當還供養此佛。白已卽坐七寶之臺。上昇虛空。高七多羅樹。往到佛所。頭面禮足。合十指爪。以偈讚佛。

容顏甚奇妙 光明照十方 我適昔供養 今復還親觀

爾時一切衆生。喜見菩薩。說是偈已。而白佛言。世尊。世尊猶故在世。爾時日月淨明德佛。告一切衆生。喜見菩薩。善男子。我涅槃時到。滅盡時至。汝可安施牀座。我於今夜當般涅槃。又敕一切衆生。喜見菩薩。善男子。我以佛法。囑累於汝。及諸菩薩大弟子。并阿耨多羅三藐三菩提法。亦以三千大千七寶世界。諸寶樹寶臺。及給侍諸天。悉付於汝。我滅度後。所有舍利。亦付囑汝。當令流布廣設供養。應起若干千塔。如是日月淨明德佛。敕一切衆生。喜見菩薩已。於夜後。分入於涅槃。爾時一切衆生。喜見菩薩。見佛滅度。悲感懊惱。戀慕於佛。卽以海此岸。栴檀爲積。供養佛身。而以燒之。火滅已後。收取舍利。作八萬四千寶瓶。以起八萬四千塔。高三世界。表刹莊嚴。垂諸幡蓋。懸衆寶鈴。爾時一切衆生。喜見菩薩。復自念言。我雖作是供養。心猶未足。我今當更供養舍利。便語諸菩薩大弟子。及天龍夜叉等一切大眾。汝等當一心念。我今供養日月淨明德佛。舍利。作是語已。卽於八萬四千塔前。然百福莊嚴臂。七萬二千歲。而以供養。令無數求聲聞衆。無量阿僧祇人。發阿耨多羅三藐三菩提心。皆使得住現一切色身三昧。爾時諸菩薩天人。阿修羅等。見其無臂。憂惱悲哀。而作是言。此一切衆生。喜見菩薩。是我等師。教化我者。而今燒臂。身不具足。于時一切衆生。喜見菩薩。於大眾中立此誓言。我捨兩臂。必當得佛金色之身。若實不虛。令我兩臂還復如故。作是誓已。自然還復。由斯菩薩。福德智慧。淳厚所致。當爾之時。三千大千世界。六種震動。天雨寶華。一切人天。得未曾有。佛告宿王華菩薩。於汝意云何。一切衆生。喜見菩薩。豈異人乎。今藥王菩薩是也。其所捨身布施如是。無量百千萬億那由他數。宿王華。若有發心。欲得阿耨多羅三藐三菩提者。能燃手指乃至一指。供養佛塔。勝以國城妻子及

暗三本俱作開
次同

酥同作蘇

三千大千國土山林河池諸珍寶物而供養者。若復有人。以七寶滿三千大千世界。供養於佛及大菩薩辟支佛阿羅漢。是人所得功德。不如受持此法華經。乃至一四句偈。其福最多。宿王華譬如一切川流江河諸水之中。海爲第一。此法華經亦復如是。於諸如來所說經中。最爲深大。又如土山黑山小鐵圍山大鐵圍山及十寶山。衆山之中。須彌山爲第一。此法華經亦復如是。於諸經中最爲其上。又如衆星之中。月天子最爲第一。此法華經亦復如是。於千萬億種諸經法中。最爲照明。又如日天子能除諸闇。此經亦復如是。能破一切不善之闇。又如諸小王中。轉輪聖王最爲第一。此經亦復如是。於衆經中最爲其尊。又如帝釋。於三十三天中王。此經亦復如是。諸經中王。又如大梵天王。一切衆生之父。此經亦復如是。一切賢聖學無學及發菩薩心者之父。又如一切凡夫人中。須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛爲第一。此經亦復如是。一切如來所說。若菩薩所說。若聲聞所說。諸經法中最爲第一。有能受持是經典者。亦復如是。於一切衆生中亦爲第一。一切聲聞辟支佛中菩薩爲第一。此經亦復如是。於一切諸經法中最爲第一。如佛爲諸法王。此經亦復如是。諸經中王。宿王華。此經能救一切衆生者。此經能令一切衆生離諸苦惱。此經能大饒益一切衆生。充滿其願。如清涼池。能滿一切諸渴乏者。如寒者得火。如裸者得衣。如商人得主。如子得母。如渡得船。如病得醫。如暗得燈。如貧得寶。如民得王。如賈客得海。如炬除暗。此法華經亦復如是。能令衆生離一切苦。一切病痛。能解一切生死之縛。若人得聞此法華經。若自書。若使人書。所得功德。以佛智慧籌量多少。不得其邊。若書是經卷。華香瓔珞。燒香抹香塗香。幡蓋衣服。種種之燈。酥燈油燈。諸香油燈。瞻蔔油燈。須曼那油燈。波羅羅油燈。婆利師迦油燈。那婆摩利油燈。供養。所得功德。亦復無量。宿王華。若有人聞是藥王菩薩本事品者。亦得無量無邊功德。若有女人聞是藥王菩薩本事品。能受持者。盡是女身後不復受。若如來滅後。後五百歲中。若有女人。聞是經典。如說修行。於此命終。卽往安樂世界阿彌陀佛大菩薩衆圍繞住處。生蓮華中寶座之上。不復爲貪欲所惱。亦復不爲瞋恚癡所惱。亦復不爲憍慢嫉妬諸垢所惱。得菩薩神通無生法忍。

燒三本俱作焚

茶元作茶

得是忍已。眼根清淨。以是清淨眼根。見七百萬二千億那由他恒河沙等諸佛如來。是時諸佛遙共讚言。善哉善哉。善男子。汝能於釋迦牟尼佛法中。受持讀誦思惟。是經爲他人說。所得福德無量無邊。火不能燒。水不能漂。汝之功德。千佛共說不能令盡。汝今已能破諸魔賊。壞生死軍。諸餘怨敵皆悉摧滅。善男子。百千諸佛以神通力共守護汝。於一切世間天人之中。無如汝者。唯除如來。其諸聲聞辟支佛。乃至菩薩智慧禪定。無有與汝等者。宿王華。此菩薩成就如是功德智慧之力。若有人聞是藥王菩薩本品。能隨喜讚善者。是人現世口中常出青蓮華香。身毛孔中常出牛頭栴檀之香。所得功德如上所說。是故宿王華。以此藥王菩薩本品。囑累於汝。我滅度後。後五百歲中。廣宣流布於閻浮提。無令斷絕。惡魔魔民諸天龍夜叉鳩槃荼等。得其便也。宿王華。汝當以神通之力守護是經。所以者何。此經則爲閻浮提人病之良藥。若人有病。得聞是經。病即消滅。不老不死。宿王華。汝若見有受持是經者。應以青蓮華盛滿。抹香供散其上。散已。作是念言。此人不久。必當取草坐於道場。破諸魔軍。當吹法螺。擊大法鼓。度脫一切衆生。老病死海。是故求佛道者。見有受持是經典人。應當如是生恭敬心。說是藥王菩薩本品時。八萬四千菩薩。得解一切衆生語言。陀羅尼。多寶如來於寶塔中。讚宿王華菩薩言。善哉善哉。宿王華。汝成就不可思議功德。乃能問釋迦牟尼佛如。此之事。利益無量一切衆生。

妙音菩薩品第二十四

品目上宋元俱有妙法蓮華經五字

爾時釋迦牟尼佛。放大人相肉髻光明。及放眉間白毫相光。遍照東方八百萬億那由他恒河沙等諸佛世界。過是數已有世界。名淨光莊嚴。其國有佛。號淨華宿王智如來。應供正遍知。明行足。善逝世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。爲無量無邊菩薩大衆。恭敬圍繞。而爲說法。釋迦牟尼佛。白毫光明。遍照其國。爾時一切淨光莊嚴國中。有一菩薩。名曰妙音。久已殖衆德本。供養親近無量百千萬億諸佛。而悉成就甚深。

殖三本俱作植下同

巖宋作須次同

唯三本俱作惟
下同

智慧得妙幢相三昧。法華三昧。淨德三昧。宿王戲三昧。無緣三昧。智印三昧。解一切衆生語言三昧。集一切功德三昧。清淨三昧。神通遊戲三昧。慧炬三昧。莊嚴王三昧。淨光明三昧。淨藏三昧。不共三昧。日旋三昧。得如是等百千萬億恒河沙等諸大三昧。釋迦牟尼佛光照其身。卽白淨華宿王智佛言。世尊。我當往詣娑婆世界。禮拜親近供養釋迦牟尼佛。及見文殊師利法王子菩薩。藥王菩薩。勇施菩薩。宿王華菩薩。上行意菩薩。莊嚴王菩薩。藥王菩薩。爾時淨華宿王智佛告妙音菩薩。汝莫輕彼國生下劣想。善男子。彼娑婆世界。高下不平。土石諸山穢惡充滿。佛身卑小。諸菩薩衆其形亦小。而汝身四萬二千由旬。我身六百八十萬由旬。汝身第一端正。百千萬福光明殊妙。是故汝往莫輕彼國若佛菩薩及國土生下劣想。妙音菩薩白其佛言。世尊。我今詣娑婆世界。皆是如來之力。如來神通遊戲。如來功德智慧莊嚴。於是妙音菩薩不起于座。身不動搖。而入三昧。以三昧力。於耆闍崛山去法座不遠。化作八萬四千衆寶蓮華。閻浮檀金爲莖。白銀爲葉。金剛爲鬚。甄叔迦寶以爲其臺。爾時文殊師利法王子。見是蓮華而白佛言。世尊。是何因緣先現此瑞。有若干千萬蓮華。閻浮檀金爲莖。白銀爲葉。金剛爲鬚。甄叔迦寶以爲其臺。爾時釋迦牟尼佛告文殊師利。是妙音菩薩摩訶薩。欲從淨華宿王智佛國。與八萬四千菩薩圍繞。而來至此娑婆世界。供養親近禮拜於我。亦欲供養聽法華經。文殊師利白佛言。世尊。是菩薩種何善本修何功德。而能有是大神通力。行何三昧。願爲我等說是三昧名字。我等亦欲勤修行之。行此三昧。乃能見是菩薩色相大小威儀進止。唯願世尊。以神通力。使彼菩薩來令我得見。爾時釋迦牟尼佛告文殊師利。此久滅度多寶如來。當爲汝等而現其相。時多寶佛告彼菩薩。善男子。來。文殊師利法王子。欲見汝身。于時妙音菩薩於彼國沒。與八萬四千菩薩俱共發來。所經諸國六種震動。皆悉雨於七寶蓮華。百千天樂不鼓自鳴。是菩薩目如廣大青蓮華葉。正使和合百千萬月。其面貌端正復過於此。身真金色。無量百千功德莊嚴。威德熾盛。光明照耀。諸相具足。如那羅延堅固之身。入七寶臺上昇虛空。去地七多羅樹。諸菩薩衆恭敬圍繞。而來詣此娑婆世界耆闍崛山。到已下七寶臺。以

價直百千瓔珞。持至釋迦牟尼佛所。頭面禮足。奉上瓔珞。而白佛言。世尊。淨華宿王智佛。問訊世尊。少病少惱。起居輕利。安樂行不。四大調和不。世事可忍不。衆生易度不。無多貪欲。瞋恚愚癡。嫉妬慳慢不。無不孝父母不。不敬沙門邪見不。善心不。攝五情不。世尊。衆生能降伏諸魔怨不。久滅度多寶如來。在七寶塔中來聽法不。又問訊多寶如來。安隱少惱。堪忍久住不。世尊。我今欲見多寶佛身。唯願世尊。示我令見。爾時釋迦牟尼佛。語多寶佛。是妙音菩薩。欲得相見。時多寶佛告妙音言。善哉善哉。汝能爲供養釋迦牟尼佛。及聽法華經。并見文殊師利等。故來至此。爾時華德菩薩。白佛言。世尊。是妙音菩薩。種何善根。修何功德。有是神力。佛告華德菩薩。過去有佛。名雲雷音王。多陀阿伽度。阿羅訶三藐三佛陀。國名現一切世間。劫名熹見。妙音菩薩。於萬二千歲。以十萬種伎樂。供養雲雷音王佛。并奉上八萬四千七寶鉢。以是因緣。果報今生。淨華宿王智佛國。有是神力。華德於汝意云何。爾時雲雷音王佛。所妙音菩薩。伎樂供養。奉上寶器者。豈異人乎。今此妙音菩薩。摩訶薩是。華德是。妙音菩薩。已曾供養親近。無量諸佛。久殖德本。又值恒河沙等百千萬億那由他佛。華德。汝但見妙音菩薩。其身在此。而是菩薩。現種種身。處處爲諸衆生。說是經典。或現梵王身。或現帝釋身。或現自在天身。或現大自在天身。或現天大將軍身。或現毗沙門天王身。或現轉輪聖王身。或現諸小王身。或現長者身。或現居士身。或現宰官身。或現婆羅門身。或現比丘比丘尼。優婆塞。優婆夷身。或現長者居士婦女身。或現宰官婦女身。或現婆羅門婦女身。或現童男童女身。或現天龍夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽人。非人等身。而說是經。諸有地獄。餓鬼。畜生。及衆難處。皆能救濟。乃至於王後宮。變爲女身。而說是經。華德。是妙音菩薩。能救護娑婆世界諸衆生者。是妙音菩薩。如是種種變化現身。在此娑婆國土。爲諸衆生。說是經典。於神通變化智慧。無所損減。是菩薩。以若干智慧。明照娑婆世界。令一切衆生。各得所知。於十方恒河沙世界中。亦復如是。若應以聲聞形得度者。現聲聞形而爲說法。應以辟支佛形得度者。現辟支佛形而爲說法。應以菩薩形得度者。現菩薩形而爲說法。應以佛形得度者。即現佛形而爲說法。如

是種種隨所應度而爲現形。乃至應以滅度而得度者。示現滅度。華德。妙音菩薩摩訶薩。成就大神通智慧之力。其事如是。爾時華德菩薩白佛言。世尊。是妙音菩薩深種善根。世尊。是菩薩住何三昧。而能如是在所變現度脫衆生。佛告華德菩薩。善男子。其三昧名現一切色身。妙音菩薩住是三昧中。能如是饒益無量衆生。說是妙音菩薩品時。與妙音菩薩俱來者八萬四千人。皆得現一切色身三昧。此娑婆世界無量菩薩。亦得是三昧及陀羅尼。爾時妙音菩薩摩訶薩。供養釋迦牟尼佛及多寶佛塔已。還歸本土。所經諸國六種震動。雨寶蓮華。作百千萬億種種伎樂。既到本國。與八萬四千菩薩圍繞。至淨華宿王智佛所。白佛言。世尊。我到娑婆世界饒益衆生。見釋迦牟尼佛。及見多寶佛塔禮拜供養。又見文殊師利法王子菩薩。及見藥王菩薩。得勤精進力菩薩。勇施菩薩等。亦令是八萬四千菩薩得現一切色身三昧。說是妙音菩薩來往品時。四萬二天子得無生法忍。華德菩薩得法華三昧。

妙法蓮華經卷第七

妙法蓮華經卷第八

〔麗鳴〕宋鳳三元鳳〔明草〕

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什奉

詔譯

品目上明無經
名下同

妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五

爾時無盡意菩薩卽從座起。偏袒右肩合掌向佛。而作是言。世尊。觀世音菩薩。以何因緣名觀世音。佛告無盡意菩薩。善男子。若有無量百千萬億衆生。受諸苦惱。聞是觀世音菩薩。一心稱名。觀世音菩薩。卽時觀其音聲。皆得解脫。若有持是觀世音菩薩名者。設入大火。火不能燒。由是菩薩威神力故。若爲大水所漂。稱其名號。卽得淺處。若有百千萬億衆生。爲求金銀琉璃車渠瑪瑙琥珀眞珠等寶。入於大海。假使黑風吹其船舫。飄墮羅刹鬼國。其中若有乃至一人。稱觀世音菩薩名者。是諸人等。皆得解脫。羅刹之難。以是因緣。名觀世音。若復有人。臨當被害。稱觀世音菩薩名者。彼所執刀杖。尋段段壞。而得解脫。若三千大千國土。滿中夜叉羅刹。欲來惱人。聞其稱觀世音菩薩名者。是諸惡鬼。尙不能以惡眼視之。況復加害。設復有人。若有罪若無罪。枉械枷鎖檢繫其身。稱觀世音菩薩名者。皆悉斷壞。卽得解脫。若三千大千國土。滿中怨賊。有一商主。將諸商人。齎持重寶。經過嶮路。其中一人。作是唱言。諸善男子。勿得恐怖。汝等應當一心稱觀世音菩薩名號。是菩薩能以無畏施於衆生。汝等若稱名者。於此冤賊。當得解脫。衆商人聞俱發聲音。南無觀世音菩薩。稱其名號。卽得解脫。無盡意。觀世音菩薩摩訶薩。威神之力。巍巍如是。若有衆生。多於姪欲。常念恭敬。觀世音菩薩。便得離世音菩薩。便得離欲。若多瞋恚。常念恭敬。觀世音菩薩。便得離瞋。若多愚癡。常念恭敬。觀世音菩薩。便得離癡。無盡意。觀世音菩薩。有如是等大威神力。多所饒益。是故衆生。常應心念。若有女人。設欲求男。禮拜供養。觀世音菩薩。便生福德智慧之男。設欲求女。便生端正有相之女。宿殖德本。衆人愛敬。無盡意。觀世音菩

慈元明俱作竟
下同

修宋元俱作脩
下同○身三本
俱作神次同

薩有如是力。若有衆生恭敬禮拜觀世音菩薩。福不唐捐。是故衆生皆應受持觀世音菩薩名號。無盡意。若有人受持六十二億恒河沙菩薩名字。復盡形供養飲食衣服臥具醫藥。於汝意云何。是善男子善女人功德多不無盡意言。甚多世尊。佛言。若復有人受持觀世音菩薩名號。乃至一時禮拜供養。是二人福正等無異。於百千萬億劫不可窮盡。無盡意。受持觀世音菩薩名號。得如是無量無邊福德之利。無盡意。菩薩白佛言。世尊。觀世音菩薩。云何遊此娑婆世界。云何而爲衆生說法方便之力。其事云何。佛告無盡意。菩薩善男子。若有國土衆生。應以佛身得度者。觀世音菩薩。卽現佛身而爲說法。應以辟支佛身得度者。卽現辟支佛身而爲說法。應以聲聞身得度者。卽現聲聞身而爲說法。應以梵王身得度者。卽現梵王身而爲說法。應以帝釋身得度者。卽現帝釋身而爲說法。應以自在天身得度者。卽現自在天身而爲說法。應以大自在天身得度者。卽現大自在天身而爲說法。應以天大將軍身得度者。卽現天大將軍身而爲說法。應以毗沙門身得度者。卽現毗沙門身而爲說法。應以小王身得度者。卽現小王身而爲說法。應以長者身得度者。卽現長者身而爲說法。應以居士身得度者。卽現居士身而爲說法。應以宰官身得度者。卽現宰官身而爲說法。應以婆羅門身得度者。卽現婆羅門身而爲說法。應以比丘比丘尼優婆塞優婆夷身得度者。卽現比丘比丘尼優婆塞優婆夷身得度者。卽現婦女身而爲說法。應以童子身得度者。卽現童子身而爲說法。應以長者居士宰官婆羅門婦女身得度者。卽現婦女身而爲說法。應以童男童女身得度者。卽現童男童女身而爲說法。應以天龍夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等身得度者。卽皆現之而爲說法。應以執金剛身得度者。卽現執金剛身而爲說法。無盡意。是觀世音菩薩。成就如是功德。以種種形遊諸國土。度脫衆生。是故汝等。應當一心供養觀世音菩薩。是觀世音菩薩摩訶薩。於怖畏急難之中。能施無畏。是故此娑婆世界。皆號之爲施無畏者。無盡意。菩薩白佛言。世尊。我今當供養觀世音菩薩。卽解頸衆寶珠瓔珞。價直百千兩金。而以與之。作是言。仁者。受此法施珍寶瓔珞。時觀世音菩薩不肯受之。無盡意。復白觀世音菩薩言。仁者。愍我等。故受此瓔珞。爾時佛告觀世音菩薩。當愍此

無盡意菩薩及四衆天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等故。受是瓔珞。即時觀世音菩薩。啟諸四衆及於天龍人非人等。受其瓔珞。分作二分。一分奉釋迦牟尼佛。一分奉多寶佛塔。無盡意觀世音菩薩。有如是自在神力。遊於娑婆世界。爾時無盡意菩薩。以偈問曰

世尊妙相具 我今重問彼 佛子何因緣 名爲觀世音 具足妙相尊 偈答無盡意

汝聽觀音行 善應諸方所 弘誓深如海 歷劫不思議 侍多千萬佛 發大清淨願

我爲汝略說 聞名及見身 心念不空過 能滅諸有苦 假使興害意 推落大火坑

念彼觀音力 火坑變成池 或漂流巨海 龍魚諸鬼難 念彼觀音力 波浪不能沒

或在須彌峯 爲人所推墮 念彼觀音力 如日虛空住 或被惡人逐 墮落金剛山

念彼觀音力 不能損一毛 或值怨賊繞 各執刀加害 念彼觀音力 咸卽起慈心

或遭王難苦 臨刑欲壽終 念彼觀音力 刀尋段段壞 或囚禁枷鎖 手足被杻械

念彼觀音力 釋然得解脫 呪詛諸毒藥 所欲害身者 念彼觀音力 還著於本人

或遇惡羅刹 毒龍諸鬼等 念彼觀音力 時悉不敢害 若惡獸圍遶 利牙爪可怖

念彼觀音力 疾走無邊方 旣蛇及蝮蠍 氣毒煙火燃 念彼觀音力 衆生被困厄

雲雷鼓掣電 降雹澍大雨 念彼觀音力 應時得消散 衆生被厄 無量苦逼身

觀音妙智力 能救世間苦 具足神通力 廣修智方便 十方諸國土 無刹不現身

種種諸惡趣 地獄鬼畜生 生老病死苦 以漸悉令滅 眞觀清淨觀 廣大智慧觀

悲觀及慈觀 常願常瞻仰 無垢清淨光 慧日破諸闇 能伏災風火 普明照世間

悲體戒雷震 慈意妙大雲 澍甘露法雨 滅除煩惱焰 諍訟經官處 怖畏軍陣中

念彼觀音力 衆怨悉退散 妙音觀世音 梵音海潮音 勝彼世間音 是故須常念

○慈悲等七項二十八句是現流梵本說高楠博士所譯漢譯諸本俱無

◎除下元有音註式車反三字明有音註詩遮切三字○咩下夾註羊鳴音元作彌夜反明作莫者切○履下三本俱無音註

念念勿生疑 觀世音淨聖 於苦惱死厄 能為作依怙 具一切功德 慈眼視衆生
福聚海無量 是故應頂禮

慈悲救世間 當來成正覺 能滅憂畏苦 頂禮觀世音 法藏比丘尊 詣世自在王 修行幾百劫 證無上淨覺
常侍左右邊 扇涼彌陀尊 三昧示幻力 供養一切佛 西方清淨土 安養極樂國 彌陀住彼土 調御丈夫尊
彼土無女人 不見不淨法 佛子今往生 乃入蓮華藏 彼無量光佛 淨妙蓮華臺 獅座放白光 如沙羅樹王
如是世界尊 三界無等倫 禮讚積功德 速為最勝人

爾時持地菩薩即從座起前白佛言世尊若有衆生聞是觀世音菩薩品自在之業普門示現神通力者當知是人功德不少佛說是普門品時衆中八萬四千衆生皆發無等等阿耨多羅三藐三菩提心

妙法蓮華經陀羅尼品第二十六

爾時藥王菩薩即從座起偏袒右肩合掌向佛而白佛言世尊若善男子善女人有能受持法華經者若讀誦通利若書寫經卷得幾所福佛告藥王若有善男子善女人供養八百萬億那由他恒河沙等諸佛於汝意云何其所得福寧為多不甚多世尊佛言若善男子善女人能於是經乃至受持一四句偈讀誦解義如說修行功德甚多爾時藥王菩薩白佛言世尊我今當與說法者陀羅尼呪以守護之即說呪曰 安爾

一曼爾二摩爾三摩爾四旨隸五遮梨第六除咩羊鳴音七除履因維多多瑋八躡輪反帝九目帝十日多履一沙履二阿瓊娑履三桑履四娑履五又裔六阿又裔七阿者賦八羶帝九除履十陀羅尼一阿盧伽娑娑蘇秦反簸蔗毗又賦二十福毗荆三阿便哆都微反邏補履荆四阿寔哆波隸輸地途實反二十五漚究隸六牟究隸七阿羅隸八波羅隸九首迦差初九反阿三磨三履三十佛蛇毗吉利麥帝三十達磨波利差猜離反帝三十僧伽涅瞿沙彌三十婆舍婆舍輸地三十曼哆邏六十曼哆邏又夜多七十郵樓哆八十郵樓哆橋舍略來加反惡又邏十惡又冶多

○檀下音註輪

宋宋作式連元

作輪干明作尸

連同反明作切

下同○喬下元

有夾註音曳二

字○哆下音註

都鐵元作多可

明無音註○選

下元有音註郎

佐反三字○壹

下元明俱有音

註多罕反三字

○地下音註途

寶宋作途買元

作宅解明無音

註○溼三本俱

作歐○萎下元

明俱有夾註音

姪二字○差下

音註離宋作离

○郵下元明俱

有夾註音尤二

字○哆元明俱

作多○遮三本

治四十 阿婆盧四十二 阿摩若在藥那多夜四十

世尊是陀羅尼神呪六十二億恒河沙等諸佛所說若有侵毀此法師者則為侵毀是諸佛已時釋迦牟尼

佛讚藥王菩薩言善哉善哉藥王汝愍念擁護此法師故說是陀羅尼於諸衆生多所饒益爾時勇施菩薩

白佛言世尊我亦為擁護讀誦受持法華經者說陀羅尼若此法師得是陀羅尼若夜叉若羅刹若富單那

若吉遮若鳩槃荼若餓鬼等伺求其短無能得便即於佛前而說呪曰

十旨緻梃一淫隸墀梃二淫梨墀底三 淫隸一淫隸墀梃二淫梨墀底三 阿羅婆第六淫隸第七淫隸多婆第八伊緻猪履反梃女氏九草緻梃

世尊是陀羅尼神呪恒河沙等諸佛所說亦皆隨喜若有侵毀此法師者則為侵毀是諸佛已爾時毗沙門

天王護世者白佛言世尊我亦為愍念衆生擁護此法師故說是陀羅尼即說呪曰

阿梨一那梨二窈那梨三阿那盧四那履五拘那履六

世尊以是神呪擁護法師我亦自當擁護持是經者令百由旬內無諸衰患爾時持國天王在此會中與千

萬億那由他輒闍婆衆恭敬圍繞前詣佛所合掌白佛言世尊我亦以陀羅尼神呪擁護持法華經者即說

呪曰

阿伽彌一伽彌二瞿利三毘陀利四旃陀利五摩蹉者六常求利七浮樓莎梃八頰底九

世尊是陀羅尼神呪四十二億諸佛所說若有侵毀此法師者則為侵毀是諸佛已爾時有羅刹女等一名

藍婆二名毗藍婆三名曲齒四名華齒五名黑齒六名多髮七名無厭足八名持璣九名皁諦十名奪一

切衆生精氣是十羅刹女與鬼子母并其子及眷屬俱詣佛所同聲白佛言世尊我等亦欲擁護讀誦受持

法華經者除其衰患若有伺求法師短者令不得便即於佛前而說呪曰

伊提履一伊提泯二伊提履三阿提履四伊提履五泥履六泥履七泥履八泥履九泥履十樓醯十一樓醯十二樓醯十三

樓醯十一樓醯十二樓醯十三

樓醯十一樓醯十二樓醯十三

○椷下音註猪
履宋作猪里元
作音利明作者
利○椷下宋無
音註同氏元明
俱作紙
○軌下元明俱
有夾註音虔二
字○躡下同有
夾註音鄒二字
○頰下同有夾
註音過二字
○醴下元有音
註呼奚二字明
有呼奚切三字
○乃三本俱作
若○酥同作蘇
○瞻元明俱作
藩

梨三本俱作離

樓醴^十多醴^十多醴^十多醴^十兜醴^十菴醴^十九

寧上我頭上。莫惱於法師。若夜又若羅刹。若餓鬼。若富單那。若吉遮。若毗陀羅。若健馱。若烏摩勒伽。若阿跋摩羅。若夜又吉遮。若人吉遮。若熱病。若一日若二日若三日若四日乃至七日。若常熱病。若男形若女形。若童男形若童女形。乃至夢中亦復莫惱。即於佛前而說偈言

若不順我呪 惱亂說法者 頭破作七分 如阿梨樹枝 如殺父母罪 亦如壓油殃

斗秤欺誑人 調達破僧罪 犯此法師者 當獲如是殃

諸羅刹女。說此偈已。白佛言。世尊。我等亦當身自擁護。受持讀誦修行。是經者。令得安隱。離諸衰患。消衆毒藥。佛告諸羅刹女。善哉善哉。汝等但能擁護。受持法華名者。福不可量。何況擁護具足。受持供養經卷。華香瓔珞。抹香塗香。燒香。幡蓋。伎樂。燃種種燈。酥燈。油燈。諸香油燈。蘇摩那華油燈。瞻蔔華油燈。婆伽華油燈。優鉢羅華油燈。如是等百千種種供養者。阜誦。汝等及眷屬。應當擁護。如是法師。說是陀羅尼品時。六萬八千人。得無生法忍。

妙法蓮華經妙莊嚴王本事品第二十七

爾時佛告諸大衆。乃往古世。過無量無邊不可思議阿僧祇劫。有佛。名雲雷音宿王華智多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀。國名光明莊嚴。劫名喜見。彼佛法中有王。名妙莊嚴。其王夫人。名曰淨德。有二子。一名淨藏。二名淨眼。是二子。有大神力。福德智慧。久修菩薩所行之道。所謂檀波羅蜜。尸羅波羅蜜。羼提波羅蜜。毗梨耶波羅蜜。禪波羅蜜。般若波羅蜜。方便波羅蜜。慈悲喜捨。乃至三十七品助道法。皆悉明了通達。又得菩薩淨三昧。日星宿三昧。淨光三昧。淨色三昧。淨照明三昧。長莊嚴三昧。大威德藏三昧。於此三昧亦悉通達。爾時彼佛欲引導妙莊嚴王。及愍念衆生故。說是法華經。時淨藏淨眼二子。到其母所。合十指爪掌白言。願母

踊三本俱作涌

往詣雲雷音宿王華智佛所。我等亦當侍從親近供養禮拜。所以者何。此佛於一切天人衆中。說法華經。宜應聽受。母告子言。汝父信受外道深著婆羅門法。汝等應往白父與共俱去。淨藏淨眼合十指爪掌白母。我等是法王子。而生此邪見家。母告子言。汝等當憂念汝父爲現神變。若得見者。心必清淨。或聽我等往至佛所。於是二子念其父故。踊在虛空高七多羅樹。現種種神變。於虛空中行住坐臥。身上出水。身下出火。身下出水。身上出火。或現大身。滿虛空中。而復現小小復現大。於空中滅。忽然在地。入地如水。履水如地。現如是等種種神變。令其父王心淨信解。時父見子神力如是。心大歡喜。得未曾有。合掌向子言。汝等師爲是誰。誰之弟子。二子白言。大王。彼雲雷音宿王華智佛。今在七寶菩提樹下法座上坐。於一切世間天人衆中。廣說法華經。是我等師。我是弟子。父語子言。我今亦欲見汝等師。可共俱往。於是二子從空中下。到其母所。合掌白母。父王今已信解。堪任發阿耨多羅三藐三菩提心。我等爲父已作佛事。願母見聽於彼佛所出家修道。爾時二子欲重宣其意。以偈白母。

羅同作華

願母放我等 出家作沙門 諸佛甚難值 我等隨佛學 如優曇波羅 值佛復難是

脫諸難亦難 願聽我出家

母卽告言。聽汝出家。所以者何。佛難值故。於是二子白父母言。善哉。父母。願時往詣雲雷音宿王華智佛所。親觀供養。所以者何。佛難值。如優曇波羅華。又如一眼之龜。值浮木孔。而我等宿福深厚。生值佛法。是故父母當聽我等令得出家。所以者何。諸佛難值。時亦難遇。彼時妙莊嚴王。後宮八萬四千人。皆悉堪任受持。是法華經。淨眼菩薩。於法華三昧久已通達。淨藏菩薩。已於無量百千萬億劫。通達離諸惡趣三昧。欲令一切衆生離諸惡趣故。其王夫人。得諸佛集三昧。能知諸佛祕密之藏。二子如是。以方便力善化其父。令心信解好樂佛法。於是妙莊嚴王與羣臣眷屬俱。淨德夫人與後宮嫔女眷屬俱。其王二子與四萬二千人俱。一時共詣佛所。到已頭面禮足。繞佛三匝。却住一面。爾時彼佛爲王說法。示教利喜。王大歡悅。爾時妙莊嚴王。

採同作采次同

及其夫人解頸真珠瓔珞價直百千。以散佛上。於虛空中化成四柱寶臺。臺中有大寶牀。敷百千萬天衣。其上有佛。結跏趺坐。放大光明。爾時妙莊嚴王。作是念。佛身希有端嚴殊特。成就第一微妙之色。時雲雷音宿王華智佛。告四衆言。汝等見是妙莊嚴王。於我前合掌立不。此王於我法中。作比丘。精勤修習。助佛道法。當得作佛。號娑羅樹王。國名大光。劫名大高王。其娑羅樹王佛。有無量菩薩衆。及無量聲聞。其國平正。功德如是。其王卽時以國付弟。與夫人二子。并諸眷屬。於佛法中出家修道。王出家已。於八萬四千歲。常勤精進。修行妙法華經。過是已後。得一切淨功德莊嚴三昧。卽昇虛空。高七多羅樹。而白佛言。世尊。此我二子。已作佛事。以神通變化。轉我邪心。令得安住於佛法中。得見世尊。此二子者。是我善知識。爲欲發起宿世善根。饒益我故。來生我家。爾時雲雷音宿王華智佛。告妙莊嚴王言。如是如是。如汝所言。若善男子善女人。種善根故。世世得善知識。其善知識。能作佛事。示教利喜。令入阿耨多羅三藐三菩提。大王。汝見此二子不。此二子已曾供養六十五百千萬億那由他恒河沙諸佛。親近恭敬。於諸佛所受持法華經。愍念邪見衆生。令住正見。妙莊嚴王。卽從虛空中下。而白佛言。世尊。如來甚希有。以功德智慧。故頂上肉髻光明顯照。其眼長廣而紺青色。眉間毫相白如河月。齒白齊密。常有光明。唇色亦好如頻婆菓。爾時妙莊嚴王。讚歎佛如是等無量百千萬億功德。已於如來前一心合掌。復白佛言。世尊。未曾有也。如來之法。具足成就。不可思議微妙功德。教誠所行。安隱快善。我從今日不復自隨心行。不生邪見。憍慢。瞋恚。諸惡之心。說是語已。禮佛而出。佛告大衆。於意云何。妙莊嚴王。豈異人乎。今華德菩薩是。其淨德夫人。今佛前光照莊嚴相菩薩是。哀愍妙莊嚴王。及諸眷屬。故於彼中生。其二子者。今藥王菩薩藥上菩薩是。是藥王藥上菩薩。成就如此諸大功德。已於無量百千萬億諸佛所。殖衆德本。成就不可思議諸善功德。若有人識是二菩薩名字者。一切世間諸天人民。亦應禮拜。佛說是妙莊嚴王本事品時。八萬四千人。遠塵離垢。於諸法中。得法眼淨。

妙法蓮華經普賢菩薩勸發品第二十八

修同作偈

爾時普賢菩薩。以自在神通力。威德名聞。與大菩薩無量無邊。不可稱數。從東方來。所經諸國。普皆震動。寶蓮華。作無量百千萬億種種伎樂。又與無數諸天龍夜叉。輒闍婆阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽人。非人等。大眾圍繞。各現威德神通之力。到娑婆世界耑闍崛山中。頭面禮釋迦牟尼佛。右繞七匝。白佛言。世尊。我於寶威德上王佛國。遙聞此娑婆世界說法華經。與無量無邊百千萬億諸菩薩衆。共來聽受。唯願世尊。當爲說之。若善男子善女人。於如來滅後。云何能得是法華經。佛告普賢菩薩。若善男子善女人。成就四法。於如來滅後。當得是法華經。一者爲諸佛護念。二者殖諸德本。三者入正定聚。四者發救一切衆生之心。善男子善女人。如是成就四法。於如來滅後。必得是經。爾時普賢菩薩白佛言。世尊。於後五百歲濁惡世中。其有受持是經典者。我當守護。除其衰患。令得安隱。使無伺求得其便者。若魔若魔子。若魔女若魔民。若爲魔所著者。若夜叉若羅刹。若鳩槃荼。若毗舍闍。若吉遮。若富單那。若韋陀羅等。諸惱人者。皆不得便。是人若行若立。讀誦此經。我爾時乘六牙白象王。與大菩薩衆俱詣其所。而自現身。供養守護。安慰其心。亦爲供養法華經故。是人若坐思惟此經。爾時我復乘白象王。現其人前。其人若於法華經。有所忘失一句一偈。我當教之。與其讀誦。還令通利。爾時受持讀誦法華經者。得見我身。甚大歡喜。轉復精進。以見我故。卽得三昧。及陀羅尼。名爲旋陀羅尼。百千萬億旋陀羅尼。法音方便陀羅尼。得如是等陀羅尼。世尊。若後世後五百歲濁惡世中。比丘比丘尼。優婆塞。優婆夷。求索者。受持者。讀誦者。書寫者。欲修習是法華經。於三七日中。應一心精進。滿三七日已。我當乘六牙白象。與無量菩薩。而自圍繞。以一切衆生所喜見身。現其人前。而爲說法。示教利喜。亦復與其陀羅尼呪。得是陀羅尼故。無有非人能破壞者。亦不爲女人之所惑亂。我身亦自常護是人。唯願世尊。聽我說此陀羅尼呪。卽於佛前。而說呪曰。

唯元明俱作惟

○地下音註途
實宋作途買元
作宅解明無音
註○修三本俱
作脩下同○修
宋元俱作脩次
同○波三本俱
作婆○略下音
註反明作切○
婆三本俱作波
○伽下同有地
字

亦下三本俱無
復字

阿檀地途實檀陀婆地二檀陀婆帝三檀陀鳩賒隸四檀陀隸五修陀隸六修陀羅婆底七佛馱波羶禰八
薩婆陀羅尼阿婆多尼九薩婆婆沙阿婆多尼十修阿婆多尼十一僧伽婆履又尼十二僧伽涅伽陀尼十三阿僧祇
四僧伽波伽地十帝隸阿情僧伽兜略阿羅帝婆羅帝十薩婆僧伽三摩地伽蘭地七薩婆達磨修波利
刹帝十薩婆薩埵樓馱舍略阿菟伽地辛阿毗吉利地帝十
世尊若有菩薩得聞是陀羅尼者當知普賢神通之力若法華經行闍浮提有受持者應作此念皆是普賢
威神之力若有受持讀誦正憶念解其義趣如說修行當知是人行普賢行於無量無邊諸佛所深種善根
爲諸如來手摩其頭若但書寫是人命終當生忉利天上是時八萬四千元女作衆伎樂而來迎之其人即
著七寶冠於姝女中娛樂快樂何況受持讀誦正憶念解其義趣如說修行若有人受持讀誦解其義趣是
人命終爲千佛授手令不恐怖不墮惡趣即往兜率天上彌勒菩薩所彌勒菩薩有三十二相大菩薩衆所
共圍繞有百千萬億天女眷屬而於中生有如是等功德利益是故智者應當一心自書若使人書受持讀
誦正憶念如說修行世尊我今以神通力故守護是經於如來滅後闍浮提內廣令流布使不斷絕爾時釋
迦牟尼佛讚言善哉善哉普賢汝能護助是經令多所衆生安樂利益汝已成就不可思議功德深大慈悲
從久遠來發阿耨多羅三藐三菩提意而能作是神通之顯守護是經我當以神通力守護能受持普賢菩
薩名者普賢若有受持讀誦正憶念修習書寫是法華經者當知是人則見釋迦牟尼佛如從佛口聞此經
典當知是人供養釋迦牟尼佛當知是人佛讚善哉當知是人爲釋迦牟尼佛手摩其頭當知是人爲釋迦
牟尼佛衣之所覆如是之人不復貪著世樂不好外道經書手筆亦復不憚親近其人及諸惡者若屠兒若
畜豬羊雞狗若獵師若街賣女色是人心意質直有正憶念有福德力是人不爲三毒所惱亦復不爲嫉妬
我慢邪慢增上慢所惱是人少欲知足能修普賢之行普賢若如來滅後後五百歲若有人見受持讀誦法
華經者應作是念此人不久當詣道場破諸魔衆得阿耨多羅三藐三菩提轉法輪擊法鼓吹法螺雨法雨

若下同無有字

當坐天人大衆中。師子法座上。普賢若於後世。受持讀誦是經典者。是人。不復貪著衣服臥具飲食資生之物。所願不虛。亦於現世。得其福報。若有人輕毀之言。汝狂人耳。空作是行。終無所獲。如是罪報。當世世無眼。若有供養讚歎之者。當於今世。得現果報。若復見受持是經典者。出其過惡。若實若不實。此人現世得白癩病。若有輕笑之者。當世世牙齒疎缺。醜唇平鼻。手脚瘰戾。眼目角昧。身體臭穢。惡瘡膿血。水腹短氣。諸惡重病。是故普賢。若見受持是經典者。當起遠迎。當如敬佛。說是普賢勸發品時。恒河沙等無量無邊菩薩。得百千萬億旋陀羅尼。三千大千世界微塵等諸菩薩。普賢道。佛說是經時。普賢等諸菩薩。舍利弗等諸聲聞。及諸天龍人非人等。一切大會。皆大歡喜。受持佛語作禮而去。

妙法蓮華經卷第八

佛說觀普賢菩薩行法經

(麗改)宋得(元得)(明短)

宋元嘉年曇無蜜多於楊州譯

經題下元明俱
有一名觀普賢
觀經一名出深
功德經十四字
○譯號宋作宋
關省三藏法師
曇摩蜜多於楊
州譯十五字元
作劉宋元嘉年
關省三藏法師
曇摩蜜多於楊
州第三譯二十
一字明作劉宋
關省三藏法師
曇摩蜜多譯十
三字○胡宋作
關○在三本俱
作於○學下同
無普賢行三字
○法同作雜○
乘下同有行字
○專心宋作心
專○日下三本
俱無盡字

註元明俱作註

象上三本俱有
其字○身上同
有象字○池上

如是我聞。一時佛在毗舍離國大林精舍重閣講堂。告諸比丘。却後三月。我當般涅槃。尊者阿難。卽從座起。整衣服。叉手合掌。遶佛三匝。爲佛作禮。胡跪合掌。諦觀如來。目不暫捨。長老摩訶迦葉。彌勒菩薩。摩訶薩。亦從座起。合掌作禮。瞻仰尊顏。時三大士異口同音。而白佛言。世尊。如來滅後。云何衆生起菩薩心。修行大乘。方等經典。正念思惟。一實境界。云何不失無上菩提之心。云何復當不斷煩惱。不離五欲。得淨諸根。滅除諸罪。父母所生。清淨常眼。不斷五欲。而能得見諸障外事。佛告阿難。諦聽。諦聽。善思念之。如來昔在耆闍崛山。及餘住處。已廣分別一實之道。今於此處。爲未來世諸衆生等。欲行大乘。無上法者。欲學普賢行。普賢行者。我今當說其所念法。若見普賢及不見者。除却罪數。今爲汝等。當廣分別。阿難。普賢菩薩。乃生東方淨妙國土。其國土相。法華經中已廣分別。我今於此略而解說。阿難。若比丘比丘尼。優婆塞。優婆夷。天龍八部。一切衆生。誦大乘經者。修大乘者。發大乘意者。樂見普賢菩薩色身者。樂見多寶佛塔者。樂見釋迦牟尼佛。及分身諸佛者。樂得六根清淨者。當學是觀。此觀功德。除諸障礙。見上妙色。不入三昧。但誦持故。專心修習。心心相次。不離大乘。一日至三七日。得見普賢。有重障者。七七日。盡然後得見。復有重者。一生得見。復有重者。二生得見。復有重者。三生得見。如是種種業報不同。是故異說。普賢菩薩。身量無邊。音聲無邊。色像無邊。欲來此國。入自在神通。促身令小。閻浮提人。三障重故。以智慧力。化乘白象。其象六牙七支。註地。其七支下生七蓮華。象色鮮白。白中上者。頗黎雪山。不得爲比。身長四百五十由旬。高四百由旬。於六牙端。有六浴池。一一浴池中。生十四蓮華。與池正等。其華開敷如天樹王。一一華上。有一玉女。顏色紅暉。有過天女。手中自然化

同無浴字○鳥
上同無飛字○
衆元明俱作是
妙三本俱作如

其同作當

於同作從○鼻
下同無中字

加宋作跏

摩三本俱作詳

誦讀元明俱作
讀誦下同○寶

下三本俱有佛
字○音同作頰

○聲下同有者
字

面一方同作
一方

悲下三本俱無
者字

五筵篔。一一筵篔。有五百樂器以爲眷屬。有五百飛鳥。鳧鴈鴛鴦皆衆寶色。生華葉間。象鼻有華。其莖譬如赤真珠色。其華金色含而未敷。見是事已。復更懺悔。至心諦觀。思惟大乘。心不休廢。見華即敷。金色金光。其蓮華臺是甄叔迦寶。妙梵摩尼以爲華鬘。金剛寶珠以爲華鬘。見有化佛坐蓮華臺。衆多菩薩坐蓮華鬘。化佛眉間。亦出金色光入象鼻中。紅蓮華色。從象鼻中出入象眼中。從象眼出入象耳中。從象耳出照象頂上。化作金臺。其象頭上有三化人。一捉金輪。一持摩尼珠。一執金剛杵。舉杵擬象。象即能行。脚不履地。躡虛而遊。離地七尺。地有印文。於印文中。千輻轂輻皆悉具足。一一輻間生一大蓮華。此蓮華上生一化象。亦有七支。隨大象行。舉足下足。生七千象以爲眷屬。隨從大象。象鼻紅蓮華色。上有化佛放眉間光。其光金色。如前入象鼻中。於象鼻中出入象眼中。從象眼出還入象耳。從象耳出至象頂上。漸漸上至象背。化成金鞍。七寶校具。於鞍四面有七寶柱。衆寶校飾以成寶臺。臺中有一七寶蓮華。其蓮華鬘百寶共成。其蓮華臺是大摩尼。有一菩薩結加趺坐。名曰普賢。身白玉色。五十種光。光五十種色。以爲頂光。身諸毛孔流出金光。其金光端無量。化佛諸化菩薩以爲眷屬。安庠徐步。兩大寶蓮華至行者前。其象開口。於象牙上。諸池玉女鼓樂絃歌。其聲微妙。讚歎大乘一實之道。行者見已。歡喜敬禮。復更誦讀甚深經典。遍禮十方無量諸佛。禮多寶塔。及釋迦牟尼佛。并禮普賢諸大菩薩。發是誓言。若我宿福。應見普賢。願尊遍吉。示我色身。作是願已。晝夜六時。禮十方佛。行懺悔法。誦大乘經。讀大乘經。思大乘義。念大乘事。恭敬供養。持大乘者。視一切人。猶如佛想。於諸衆生。如父母想。作是念已。普賢菩薩。即於眉間。放大人相。白毫光明。此光現時。普賢菩薩身相端嚴。如紫金山。端正微妙。三十二相皆悉備有。身諸毛孔放大光明。照其大象。令作金色。一切化象亦作金色。諸化菩薩亦作金色。其金色光。照于東方無量世界。皆同金色。南西北方四維上下。亦復如是。爾時十方。面一方。有一菩薩。乘六牙白象王。亦如普賢等。無有異。如是十方無量無邊。滿中化象。普賢菩薩神通力故。令持經者皆悉得見。是時行者。見諸菩薩。身心歡喜。爲其作禮。白言。大慈大悲者。愍念我故。爲我說法。說是語時。

說深法宋作善
薩說三字元明
俱無

相三本俱作想

共下同有法字

嚴下同有力字

仲宋作申

諸菩薩等異口同音各說清淨大乘經法。作諸偈頌讚歎行者。是名始觀普賢菩薩最初境界。爾時行者見是事已。心念大乘晝夜不捨。於睡眠中夢見普賢爲其說法。如覺無異。安慰其心。而作是言。汝所誦持忘失是句。忘失是偈。爾時行者聞普賢說深法。解其義趣。憶持不忘。日日如是。其心漸利。普賢菩薩教其憶念十方諸佛。隨普賢教。正信正憶。漸以心眼見東方佛。身黃金色。端嚴微妙。見一佛已。復見一佛。如是漸漸。遍見東方一切諸佛。心相利故。遍見十方一切諸佛。見諸佛已。心生歡喜。而作是言。因大乘故。得見大士。因大士力故。得見諸佛。雖見諸佛猶未了了。閉目則見。開目則失。作是語已。五體投地。遍禮十方佛。禮諸佛已。胡跪合掌。而作是言。諸佛世尊。十力無畏。十八不共。大慈大悲。三念處。常在世間色中上色。我有何罪而不得見。是語說已。復更懺悔。懺悔清淨已。普賢菩薩復更現前。行住坐臥不離其側。乃至夢中常爲說法。此人覺已。得法喜樂。如是晝夜經三七日。然後方得旋陀羅尼。得陀羅尼故。諸佛菩薩所說妙法。憶持不失。亦常夢見過去七佛。唯釋迦牟尼佛爲其說法。是諸世尊。各各稱讚大乘經典。爾時行者復更懺悔。遍禮十方佛。禮十方佛已。普賢菩薩住其人前。教說宿世一切業緣。發露黑惡一切罪事。向諸世尊。口自發露。既發露已。尋時卽得諸佛現前三昧。得是三昧已。見東方阿閼佛及妙喜國。了了分明。如是十方。各見諸佛。上妙國土。了了分明。既見十方佛已。妙象頭上有一金剛人。以金剛杵遍擬六根。擬六根已。普賢菩薩爲於行者。說六根清淨懺悔之法。如是懺悔。一日至七日。以諸佛現前三昧力故。普賢菩薩說法莊嚴故。耳漸漸聞障外聲。眼漸漸見障外事。鼻漸漸聞障外香。廣說如妙法華經。得是六根清淨已。身心歡喜。無諸惡相。心純是法。與法相應。復更得百千萬億旋陀羅尼。復更廣見百千萬億無量諸佛。是諸世尊。各伸右手摩行者頭。而作是言。善哉善哉。行大乘者。發大莊嚴心者。念大乘者。我等昔日發菩提心時。皆亦如是。汝殷勤不失。我等先世行大乘故。今成清淨。正遍知身。汝今亦當勤修不懈。此大乘經典諸佛寶藏。十方三世諸佛眼目。出生三世諸如來。種種持此經者。卽持佛身。卽行佛事。當知是人。卽是諸佛所使。諸佛世尊衣之所覆。諸佛如來眞實法子。汝

側三本俱作廁

然下三本俱有

而字○座下同

有皆有百寶光

明如是寶座一

一十二字○座

同作樹○樹同

作座

教同作覺

身明作聲

鋪三本俱作敷

床同作座○如

同作妙○聚同

作處○踊明作

湧○敷三本俱

行大乘。不斷法種。汝今諦觀東方諸佛。說是語時。行者即見東方一切無量世界地平如掌。無諸堆阜。陵
 荆棘琉璃為地。黃金間側。十方世界亦復如是。見是地已。即見寶樹。寶樹高妙五千由旬。其樹常出黃金白
 銀七寶莊嚴。樹下自然有寶師子座。其師子座高二千由旬。座上亦出百寶光明。如是諸樹及餘寶座。一一
 寶座皆有自然五百白象。象上皆有普賢菩薩。爾時行者禮諸普賢。而作是言。我有何罪。但見寶地寶座及
 與寶樹。不見諸佛。作是語已。一一座上。有一世尊端嚴微妙。而坐寶座。見諸佛已。心大歡喜。復更誦習大乘
 經典。大乘力故。空中有聲而讚歎言。善哉善哉善男子。汝行大乘功德因緣。能見諸佛。今雖得見諸佛。世尊
 而不能見釋迦牟尼佛。分身諸佛及多寶佛塔。聞空中聲已。復勤誦習大乘經典。以誦大乘方等經故。即於
 夢中見釋迦牟尼佛。與諸大眾。在耆闍崛山。說法華經。演一實義。教已懺悔。渴仰欲見。合掌胡跪。向耆闍崛
 山。而作是言。如來世雄常在世間。愍念我故。為我現身。作是語已。見耆闍崛山七寶莊嚴。無數比丘聲聞大
 眾。寶樹行列。寶地平正。復鋪妙寶師子之座。釋迦牟尼佛放眉間光。其光遍照十方世界。復過十方無量世
 界。此光至處。十方分身釋迦牟尼佛。一時雲集。廣說妙法。如妙法華經。一分身佛。身紫金色。身量無邊。坐
 師子座。百億無量諸大菩薩。以為眷屬。一一菩薩。行同普賢。如此十方無量諸佛菩薩眷屬。亦復如是。大眾
 雲集已。見釋迦牟尼佛。舉身毛孔放金色光。一一光中有百億化佛。諸分身佛。放眉間白毫大人相光。其光
 流入釋迦牟尼佛頂。見此相時。分身諸佛一切毛孔。出金色光。一一光中。復有恒河沙微塵數化佛。爾時普
 賢菩薩。復放眉間大人相光。入行者心。既入心已。行者自憶過去無數百千佛。所受持讀誦大乘經典。自見
 故。身了了分明。如宿命通等。無有異。豁然大悟。得旋陀羅尼。百千萬億諸陀羅尼門。從三昧起。面見一切分
 身諸佛。眾寶樹下坐師子床。復見琉璃地。如蓮華聚。從下方空中踊出。一一華間。有微塵數菩薩。結加趺坐。
 亦見普賢分身菩薩。在彼眾中讚歎大乘。時諸菩薩異口同音。教於行者清淨六根。或有說言。汝當念佛。或
 有說言。汝當念法。或有說言。汝當念僧。或有說言。汝當念戒。或有說言。汝當念施。或有說言。汝當念天。如此

作說

色使使同作故
色使

尼下同有佛字

○明同作眼○

以元明俱作與

○我三本俱作

得○說元明俱

作作

涌宋元俱作踊

讚偈三本俱作
偈讚

悔過同作懺悔

八百元明俱作

百八

緣故三本俱作

因緣

六法。是菩提心。生菩薩法。汝今應當於諸佛前發露先罪。至誠懺悔。於無量世。眼根因緣貪著諸色。以著色故。貪愛諸塵。以愛塵故。受女人身。世世生處。惑著諸色。色壞汝眼。為思愛奴。色使使汝經歷三界。為此弊使。盲無所見。今誦大乘方等經典。此經中說。十方諸佛。色身不滅。汝今得見。審實爾不。眼根不善傷害汝多。隨順我語。歸向諸佛。釋迦牟尼。說汝眼根所有罪咎。諸佛菩薩。慧明法水。願以洗除。令我清淨。作是語已。遍禮十方佛。向釋迦牟尼佛。大乘經典。復說是言。我今所懺。眼根重罪障蔽穢濁。盲無所見。願佛大慈哀愍。覆護普賢菩薩。乘大法船。普度一切。十方無量諸菩薩。伴唯願哀愍。聽我悔過。眼根不善惡業障法。如是三說。五體投地。正念大乘。心不忘捨。是名懺悔。眼根罪法。稱諸佛名。燒香散華。發大乘意。懸繪幡蓋。說眼過患。懺悔罪者。此人現世見釋迦牟尼佛。及見分身無量諸佛。阿僧祇劫不墮惡道。大乘力故。大乘願故。恒與一切陀羅尼菩薩。共為眷屬。作是念者。是為正念。若他念者。名為邪念。是名眼根初境界相。淨眼根已。復更誦讀大乘經典。晝夜六時。胡跪懺悔。而作是言。我今云何。但見釋迦牟尼佛。分身諸佛。不見多寶佛塔。全身舍利。多寶佛塔。恒在不滅。我濁惡眼。是故不見。作是語已。復更懺悔。過七日已。多寶佛塔。從地涌出。釋迦牟尼佛。即以右手。開其塔戶。見多寶佛。入普現色身三昧。一一毛孔。流出恒河沙微塵數光明。一一光明。有百千萬億化佛。此相現時行者。歡喜讚頌。遠塔滿七匝已。多寶如來。出大音聲。讚言法子。汝今真實能行大乘。隨順普賢眼根懺悔。以是因緣。我至汝所。為汝證明。說是語已。讚言善哉。善哉。釋迦牟尼佛。能說大法。雨大法雨。成就濁惡諸眾生等。是時行者。見多寶佛塔已。復至普賢菩薩所。合掌敬禮言白。大師教我悔過。普賢復言。汝於多劫。中耳根因緣。隨逐外聲。聞妙音時。心生惑著。聞惡聲時。起八百種煩惱。賊害如此。惡耳報得惡事。恒聞惡聲。生諸攀緣。顛倒聽故。當墮惡道。邊地邪見。不聞法處。汝於今日。誦持大乘功德海藏。以是緣故。見十方佛。多寶佛塔。現為汝證。汝應自當說。已過惡懺悔諸罪。是時行者。聞是語已。復更合掌五體投地。而作是言。正遍知世尊。現為我證。方等經典。為慈悲主。唯願觀我。聽我所說。我從多劫。乃至今身。耳根因緣。聞聲惑

諸惡同作惡聲

言上同無讚字

聞上同無是字

尼下同無佛字

搆闢三本俱作
闕邊

方同作無

著如膠著草聞諸惡時起煩惱毒處處惑著無暫停時出此弊聲勞我識神墜墮三塗今始覺知向諸世尊發露懺悔既懺悔已見多寶佛放大光明其光金色遍照東方及十方界無量諸佛身真金色東方空中作是唱言此佛世尊號曰善德亦有無數分身諸佛坐寶樹下師子座上結跏趺坐是諸世尊一切皆入普現色身三昧皆作是讚言善哉善哉善男子汝今讀誦大乘經典汝所誦者是佛境界說是語已普賢菩薩復更爲說懺悔之法汝於先世無量劫中以貪香故分別諸識處處貪著墮落生死汝今應當觀大乘因大乘因者諸法實相是聞是語已五體投地復更懺悔既懺悔已當作是語南無釋迦牟尼佛南無多寶佛塔南無十方釋迦牟尼佛分身諸佛作是語已遍禮十方佛南無東方善德佛及分身諸佛如眼所見一一心禮香華供養供養畢已胡跪合掌以種種偈讚歎諸佛既讚歎已說十惡業懺悔諸罪既懺悔已而作是言我於先世無量劫時貪香味觸造作衆惡以是因緣無量世來恒受地獄餓鬼畜生邊地邪見諸不善身如此惡業今日發露歸回諸佛正法之王說罪懺悔既懺悔已身心不懈復更誦讀大乘經典大乘力故空中有聲告言法子汝今應當向十方佛讚說大乘法於諸佛前自說已過諸佛如來是汝慈父汝當自說舌根所作不善惡業此舌根者動惡業相妄言綺語惡口兩舌誹謗妄語讚歎邪見說無益語如是衆多諸雜惡業搆闢壞亂法說非法如是衆罪今悉懺悔諸世雖前作是語已五體投地遍禮十方佛合掌長跪當作是語此舌過患無量無邊諸惡業刺從舌根出斷正法輪從此舌起如此惡舌斷功德種於非義中多端強說讚歎邪見如火益薪猶如猛火傷害衆生如飲毒者無瘡死如是罪報惡邪不善當墮惡道百劫千劫以妄語故墮大地獄我今歸向南方諸佛發露黑惡作是念時空中有聲南方有佛名栴檀德彼佛亦有無量分身一切諸佛皆說大乘除滅罪惡如此衆罪今向十方無量諸佛大悲世尊發露黑惡誠心懺悔說是語已五體投地復禮諸佛是時諸佛復放光明照行者身令其身心自然歡喜發大慈悲普念一切爾時諸佛廣爲行者說大慈悲及喜捨法亦教愛語修六和敬爾時行者聞此教敕已心大歡喜復更誦習終不懈息空

出同作作

中明作歷

淨三本俱作樂
○有相處樂同
作受想處淨

汝下同有今字

滅同作後○切

下同有諸字○

如上同有皆亦

二字○識下同

有懺悔二字

懺三本俱作行

印同作般○誦
讀元作讀誦

中復有微妙音聲出如是言。汝今應當身心懺悔。身者殺盜姪。心者念諸不善。造十惡業及五無間。猶如猿猴。亦如藕膠。處處貪著。逼至一切六情根中。此六根業。枝條華葉。悉滿三界二十五。有一切生處。亦能增長。無明老死十二苦事。八邪八難。無不經中。汝今應當懺悔。如是惡不善業。爾時行者聞此語已。問空中聲。我今何處行懺悔法。時空中聲。卽說是語。釋迦牟尼佛。名毗盧遮那。遍一切處。其佛住處。名常寂光。常波羅蜜所攝成處。我波羅蜜所安立處。淨波羅蜜滅有相處。樂波羅蜜不住身心相處。不見有無諸法相處。如寂解脫。乃至般若波羅蜜。是色常住法故。如是應當觀十方佛。時十方佛各伸右手。摩行者頭。作如是言。善哉善哉。善男子。汝誦讀大乘經故。十方諸佛。說懺悔法。菩薩所行。不斷結使。不住使海。觀心無心。從顛倒想起。如此相心。從妄想起。如空中風。無依止處。如是法相不生不滅。何者是罪。何者是福。我心自空。罪福無主。一切法如是。無住無壞。如是懺悔。觀心無心。法不住法中。諸法解脫。滅諦寂靜。如是想者。名大懺悔。名大莊嚴懺悔。名無罪相懺悔。名破壞心識。行此懺悔者。身心清淨。不住法中。猶如流水。念念之中。得見普賢菩薩及十方佛。時諸世尊。以大悲光明。爲於行者說無相法。行者聞說第一義空。行者聞已。心不驚怖。應時卽入菩薩正位。佛告阿難。如是行者。名爲懺悔。此懺悔者。十方諸佛。諸大菩薩。所懺懺悔法。佛告阿難。佛滅度後。佛諸弟子。若有懺悔惡不善業。但當誦讀大乘經典。此方等經。是諸佛眼。諸佛因是得具五眼。佛三種身。從方等生。是大法印。印涅槃海。如此海中。能生三種佛清淨身。此三種身。人天福田。應供中最。其有誦讀大乘方等經典。當知此人。具佛功德。諸惡永滅。從佛慧生。爾時世尊。而說偈言。

若有眼根惡 業障眼不淨 但當誦大乘 思念第一義 是名懺悔眼 盡諸不善業
耳根聞亂聲 壞亂和合義 由是起狂心 猶如癡猿猴 但當誦大乘 觀法空無相
永盡一切惡 天耳聞十方 鼻根著諸香 隨染起諸觸 如此狂惑鼻 隨染生諸塵
若誦大乘經 觀法如實際 永離諸惡業 後世不復生 舌根起五種 惡口不善業

根三本俱作想

恬同作憺

阿上同有若字
○誦讀同作讀
誦次同

億下同無億字
次同

是名同作名爲
去三本俱作却
上同作尙下同

若欲自調順 應勤修慈心 思法真寂義 無諸分別想 心根如猿猴 無有暫停時
 若欲折伏者 當勤誦大乘 念佛大覺身 力無畏所成 身爲機關主 如塵隨風轉
 六賊遊戲中 自在無罣礙 若欲滅此惡 永離諸塵勞 常處涅槃城 安樂心恬怡
 當誦大乘經 念諸菩薩母 無量勝方便 從思實相得 如此等六法 名爲六情根
 一切業障海 皆從妄想生 若欲懺悔者 端坐念實相 衆罪如霜露 慧日能消除
 是故應至心 懺悔六情根

說是偈已。佛告阿難。汝今持是懺悔六根觀普賢菩薩法。普爲十方諸天世人。廣分別說。佛滅度後。佛諸弟子。若有受持讀誦解說方等經典。應於靜處。若在塚間。若林樹下。阿練若處。誦讀方等。思大乘義。念力強故。得見我身及多寶佛塔。十方分身無量諸佛。普賢菩薩。文殊師利菩薩。藥王菩薩。藥上菩薩。恭敬法故。持諸妙華住立空中。讚歎恭敬行持法者。但誦大乘方等經故。諸佛菩薩。晝夜供養是持法者。佛告阿難。我與賢劫諸菩薩等及十方諸佛。因思大乘真實義故。除却百萬億億阿僧祇劫生死之罪。因此勝妙懺悔法故。今於十方各得爲佛。若欲疾成阿耨多羅三藐三菩提者。若欲現身見十方佛及普賢菩薩。當淨澡浴著淨潔衣。燒衆名香。在空閑處。應當誦讀大乘經典。思大乘義。佛告阿難。若有衆生。欲觀普賢菩薩者。當作是觀。作是觀者。是名正觀。若他觀者。是名邪觀。佛滅度後。佛諸弟子。隨順佛語行懺悔者。當知是人行普賢行。行普賢行者。不見惡相及惡業報。其有衆生。晝夜六時禮十方佛。誦大乘經。思第一義甚深空法。一彈指頃。除去百萬億億阿僧祇劫生死之罪。行此行者。真是佛子。從諸佛生。十方諸佛及諸菩薩。爲其和上。是名具足菩薩戒者。不須羯磨自然成就。應受一切人天供養。爾時行者。若欲具足菩薩戒者。應當合掌在空閑處。遍禮十方佛懺悔諸罪。自說已過。然後靜處。白十方佛。而作是言。諸佛世尊。常住在世。我業障故。雖信方等見佛不了。今歸依佛。唯願釋迦牟尼佛正遍知世尊。爲我和上文殊師利具大慧者。願以智慧。授我清淨諸菩薩

廣同作曠

別同作蒯○聞
下同有人字○
及五戒同作五
戒及○法下同
有者字○念同
作一○說上同
有論字
殊元明俱作沃

改三本俱作懺
○名下同有爲
字○悔下同有
罪字

悔下同無法字

法。彌勒菩薩勝大慈日。憐愍我故。亦應聽我受菩薩法。十方諸佛。現爲我證。諸大菩薩。各稱其名。是勝大士。覆護衆生。助護我等。今日受持方等經典。乃至失命。設墮地獄。受無量苦。終不毀謗諸佛正法。以是因緣。功德力故。今釋迦牟尼佛。爲我和上。文殊師利。爲我阿闍黎。當來彌勒。願授我法。十方諸佛。願證知我。大德諸菩薩。願爲我伴。我今依大乘經甚深佛義。歸依佛。歸依法。歸依僧。如是三說。歸依三寶。已。次當自誓受六重法。受六重法已。次當勤修無礙梵行。發廣濟心。受八重法。立此誓已。於空閑處。燒衆名香。散華供養一切諸佛。及諸菩薩。大乘方等。而作是言。我於今日發菩提心。以此功德普度一切。作是語已。復更頂禮一切諸佛。及諸菩薩。思方等義。一日乃至三七日。若出家在家。不須和上。不用諸師。不白羯磨。受持讀誦大乘經典。力故。普賢菩薩助發行。故。是十方諸佛正法眼目。因由是法。自然成就。五分法身。戒定慧解脫解脫知見。諸佛如來。從此法生。於大乘經得受記別。是故智者。若聲聞毀破三歸。及五戒八戒。比丘戒比丘尼戒。沙彌戒沙彌尼戒。式叉摩尼戒。及諸威儀。愚癡不善惡邪心故。多犯諸戒。及威儀法。若欲除滅令無過患。還爲比丘具沙門法。當勤修讀方等經典。思第一義甚深空法。令此空慧與心相應。當知此人。於念念頃。一切罪垢永盡無餘。是名具足沙門法式。具諸威儀。應受人天一切供養。若優婆塞。犯諸威儀。作不善事。不善事者。所謂說佛法過惡。論說四衆所犯惡事。偷盜姪。姪無有慚愧。若欲懺悔滅諸罪者。當勤讀誦方等經典。思第一義。若王者大臣。婆羅門居士長者宰官。是諸人等。貪求無厭。作五逆罪。謗方等經。具十惡業。是大惡報。應墮惡道。過於暴雨。必定當墮阿鼻地獄。若欲除滅此業障者。應生慚愧。改悔諸罪。佛言。云何名利居士懺悔法。名利居士懺悔法者。但當正心。不謗三寶。不障出家。不爲梵行人作惡留難。應當繫念修六念法。亦當供給供養。持大乘者。不必禮拜。應當憶念甚深經法第一義空。思是法者。是名利居士修第一懺悔。第二懺悔者。孝養父母。恭敬師長。是名修第二懺悔法。第三懺悔者。正法治國。不邪枉人民。是名修第三懺悔。第四懺悔者。於六齋日。救諸境內力所及處。令行不殺。修如此法。是名修第四懺悔。第五懺悔者。但當深信因果。信一

實道。知佛不滅。是名修第五懺悔。佛告阿難。於未來世。若有修習如此懺悔法。當知此人。著慚愧服。諸佛護助。不久當成阿耨多羅三藐三菩提。說是語時。十千天子。得法眼淨。彌勒菩薩等諸大菩薩。及以阿難。聞佛所說。歡喜奉行。

佛說觀普賢菩薩行法經

佛說無量壽經卷上

(麗字) (宋乃) (元乃) (明乃)

譯號三本俱無
天竺三藏四字

下卷同

障下同無闍字
○果同作異○
喜同作嘉

遵同作導

權同作權

率同作術

振同作震

按同作案

曹魏天竺三藏康僧鎧譯

我聞如是。一時佛住王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆萬二千人俱。一切大聖神通已達。其名曰尊者了本際。尊者正願。尊者正語。尊者大號。尊者仁賢。尊者離垢。尊者名聞。尊者善實。尊者具足。尊者牛王。尊者優樓頻螺迦葉。尊者伽耶迦葉。尊者那提迦葉。尊者摩訶迦葉。尊者舍利弗。尊者大目犍連。尊者劫賓那。尊者大住。尊者大淨志。尊者摩訶周那。尊者滿願子。尊者離障闍。尊者流灌。尊者堅伏。尊者面王。尊者果乘。尊者仁性。尊者喜樂。尊者善來。尊者羅云。尊者阿難。皆如斯等。上首者也。又與大乘衆菩薩俱。普賢菩薩。妙德菩薩。慈氏菩薩等。此賢劫中一切菩薩。又賢護等十六正士。善思議菩薩。信慧菩薩。空無菩薩。神通華菩薩。光英菩薩。慧上菩薩。智幢菩薩。寂根菩薩。願慧菩薩。香象菩薩。寶英菩薩。中住菩薩。制行菩薩。解脫菩薩。皆遵普賢大士之德。具諸菩薩無量行願。安住一切功德之法。遊步十方行權方便。入佛法藏究竟彼岸。於無量世界現成等覺。處兜率天弘宣正法。捨彼天宮降神母胎。從右脅生。現行七步。光明顯曜。普照十方無量佛土。六種振動。舉聲自稱。吾當於世爲無上尊。釋梵奉侍。天人歸仰。示視算計文藝射御。博綜道術。貫練群籍。遊於後園。講武試藝。現處宮中。色味之間。見老病死。悟世非常。棄國財位。入山學道。服乘白馬寶冠瓔珞。遣之令還。捨珍妙衣。而著法服。剃除鬚髮。端坐樹下。勤苦六年。行如所應。現五濁剎。隨順群生。示有塵垢。沐浴金流。天按樹枝。得攀出池。靈禽翼從。往詣道場。吉祥感徵。表章功祚。哀受施草。敷佛樹下。跏趺而坐。奮大光明。使魔知之。魔率官屬而來逼試。制以智力。皆令降伏。得微妙法。成最正覺。釋梵祈勸。請轉法輪。以佛遊步。佛吼而吼。扣法鼓。吹法螺。執法劍。建法幢。震法雷。曜法電。澍法雨。演法施。常以法音覺諸世間。光明普照。無量

僣同作情

殖同作植

導三本俱作道

次同

開導之導明作

道○人同作生

○畏下宋元俱

無之綱二字○

幻下三本俱有

化之二字○中

下明作化終

物下三本俱有

而字○衆生同

作諸庶○任同

作摠○猶如孝

子愛五字同作

如純孝之子受

六字○之若同

作若自○是下

同有之等二字

○大上同無無

量二字○佛上

同有諸字○勝

下同有之字○

佛土一切世界六種震動總攝魔界動魔宮殿衆魔懾怖莫不歸伏擱裂邪網消滅諸見散諸塵勞壞諸欲

漸嚴護法域開闡法門洗濯垢汙顯明清白光融佛法宣流正化入國分衛獲諸豐饒貯功德示福田欲宣
一法現欣笑以諸法藥救療三苦顯現道意無量功德授菩薩記成等正覺示現滅度拯濟無極消除諸漏植
衆德本具足功德微妙難量遊諸佛國普現道教其所修行清淨無穢譬如幻師現衆異像爲男爲女無所
不變本學明了在意所爲此諸菩薩亦復如是學一切法貫綜縷練所住安諦靡不感化無數佛土皆悉普
現未曾慢恣愍傷衆生如是之法一切具足菩薩經典究暢要妙名稱普至導御十方無量諸佛咸共護念
佛所住者皆已得住大聖所立而皆已立如來導化各能宣布爲諸菩薩而作大師以甚深禪慧開導衆人
通諸法性達衆生相明了諸國供養諸佛化現其身猶如電光善學無畏之網曉了幻法壞裂魔網解諸纏
縛超越聲聞緣覺之地得空無相無願三昧善立方便顯示三乘於此中下而現滅度亦無所作亦無所有
不起不滅得平等法具足成就無量總持百千三昧諸根智慧廣普寂定深入菩薩法藏得佛華嚴三昧宣
揚演說一切經典住深定門悉觀現在無量諸佛一念之頃無不周遍濟諸劇難諸閑不閑分別顯示真實
之際得諸如來辯才之智入衆言音開化一切超過世間諸所有法心常諦住度世之道於一切萬物隨意
自在爲衆生類作不請之友荷負群生爲之重任受持如來甚深法藏護佛種種性常使不絕興大悲愍衆生
演慈辯授法眼杜三趣開善門以不請之法施諸黎庶猶如孝子愛敬父母於諸衆生視之若己一切善本
皆度彼岸悉獲諸佛無量功德智慧聖明不可思議如是菩薩無量大士不可稱計一時來會爾時世尊諸
根悅豫姿色清淨光顏巍巍尊者阿難承佛聖旨卽從座起偏袒右肩長跪合掌而白佛言今日世尊諸根
悅豫姿色清淨光顏巍巍如明鏡淨影暢表裏威容顯耀超絕無量未常瞻觀殊妙如今唯然大聖我心念
言今日世尊住奇特之法今日世雄住佛所住今日世眼住導師之行今日世英住最勝道今日天尊行如
來德去來現在佛佛相念得無今佛念諸佛耶何故威神光光乃爾於是世尊告阿難曰云何阿難諸天教

來下同有之字
○普令群萌獲
真法利八字同
作欲拯濟群萌
惠以眞實之利
十一字○喰明
作餐

汝來問佛耶。自以慧見問威顏乎。阿難白佛。無有諸天來教我者。自以所見問斯義耳。佛言。善哉。阿難。所問甚快。發深智慧。眞妙辯才。愍念衆生。問斯慧義。如來以無盡大悲。於三界。所以出興於世。光闡道教。普令群萌獲眞法利。無量億劫。難值難見。猶靈瑞華時。乃出。今所問者。多所饒益。開化一切諸天人民。阿難當知。如來正覺。其智難量。多所導御。慧見無礙。無能遏絕。以一喰之力。能住壽命。億百千劫。無數無量。復過於此。諸根悅豫。不以毀損。姿色不變。光顏無異。所以者何。如來定慧究暢。無極於一切法。而得自在。阿難。諦聽。今爲汝說。對曰。唯然。願樂欲聞。佛告阿難。乃往過去久遠。無量不可思議。無央數劫。錠光如來。興出於世。教化度脫。無量衆生。皆令得道。乃取滅度。次有如來名曰光遠。次名月光。次名梅檀香。次名善山王。次名須彌天冠。次名須彌等曜。次名月色。次名正念。次名離垢。次名無著。次名龍天。次名夜光。次名安明頂。次名不動地。次名琉璃妙華。次名琉璃金色。次名金藏。次名炎光。次名炎根。次名地種。次名月像。次名日音。次名解脫華。次名莊嚴光明。次名海覺神通。次名水光。次名大香。次名離塵垢。次名捨厭意。次名寶炎。次名妙頂。次名勇立。次名功德持慧。次名蔽日月光。次名日月琉璃光。次名無上琉璃光。次名最上首。次名菩提華。次名月明。次名日光。次名華色王。次名水月光。次名除癡冥。次名度蓋行。次名淨信。次名善宿。次名威神。次名法慧。次名鸞音。次名師子音。次名龍音。次名處世。如此諸佛。皆悉已過。爾時。次有佛。名世自在王。如來應供等正覺。明行足。善逝世間解。無上士調御丈夫。天人師。佛世尊。時有國王。聞佛說法。心懷悅豫。尋發無上眞道。意棄國捐王行。作沙門。號曰法藏。高才勇哲。與世超異。詣世自在王。如來所。稽首佛足。石躡三市。長跪合掌。以頌讚曰。

容顏三本俱作
顏容
崖同作涯

光顏巍巍 威神無極 如是炎明 無與等者 日月摩尼 珠光炎耀 皆悉隱蔽 猶如聚墨
如來容顏 超世無倫 正覺大音 響流十方 戒聞精進 三昧智慧 威德無侶 殊勝希有
深諦善念 諸佛法海 窮深盡奧 究其崖底 無明欲怒 世尊永無 人雄師子 神德無量

德同作勳

功德廣大 智慧深妙 光明威相 震動大千 願我作佛 齊聖法王 過度生死 靡不解脫

布施調意 戒忍精進 如是三昧 智慧為上 吾誓得佛 善行此願 一切恐懼 為作大安

假令有佛 百千億萬 無量大聖 數如恒沙 供養一切 斯等諸佛 不如求道 堅正不却

譬如恒沙 諸佛世界 復不可計 無數刹土 光明悉照 遍此諸國 如是精進 威神難量

令我作佛 國土第一 其眾奇妙 道場超絕 國如泥洹 而無等雙 我當愍哀 度脫一切

十方來生 心悅清淨 已到我國 快樂安隱 幸佛信明 是我真證 發願於彼 力精所欲

到同作至○信
明同作明信○
令同作使

十方世尊 智慧無礙 常令此尊 知我心行 假令身止 諸苦毒中 我行精進 忍終不悔

語同作告○告
同作語

佛告阿難法藏比丘說此頌已而白佛言唯然世尊我發無上正覺之心願佛為我廣宣經法我當修行攝

取佛國清淨莊嚴無量妙土令我於世速成正覺按諸生死勤苦之本佛語阿難時世自在王佛拈法藏比

丘汝所修行莊嚴佛土汝自當知比丘白佛斯義弘深非我境界唯願世尊廣為敷演諸佛如來淨土之行

我聞此已當如說修行成滿所願爾時世自在王佛知其高明志願深廣即為法藏比丘而說經言譬如大

海一人斗量經歷劫數尚可窮底得其妙寶人有至心精進求道不止會當剋果何願不得於是世自在王

佛即為廣說二百一十億諸佛刹土天人之善惡國土之粗妙應其心願悉現與之時彼比丘聞佛所說嚴

淨國土皆悉觀見超發無上殊勝之願其心寂靜志無所著一切世間無能及者具足五劫思惟攝取莊嚴

佛國清淨之行阿難白佛彼佛國土壽量幾何佛言其佛壽命四十二劫時法藏比丘攝取二百一十億諸

佛妙土清淨之行如是修已詣彼佛所稽首禮足遶佛三匝合掌而住白言世尊我已攝取莊嚴佛土清淨

之行佛告比丘汝今可說宜知是時發起悅可一切大眾菩薩聞已修行此法緣致滿足無量大願比丘白

佛唯垂聽察如我所願當具說之設我得佛國有地獄餓鬼畜生者不取正覺設我得佛國中人人壽終之

後復更三惡道者不取正覺設我得佛國中人人天不悉真金色者不取正覺設我得佛國中人人形色不同

白下同有佛字

人天同作天人
下皆同

識上同無悉字

有下同無能字
次同

生下同有悉成
二字

係元明俱作繫
○祇諸三本俱
作植衆

量無數三本俱
作數無量

有好醜者。不取正覺。設我得佛。國中人天。不悉識宿命。下至知百千億那由他諸劫事者。不取正覺。設我得佛。國中人天。不得天眼。下至見百千億那由他諸佛國者。不取正覺。設我得佛。國中人天。不得天耳。下至聞百千億那由他諸佛所說。不悉受持者。不取正覺。設我得佛。國中人天。不得見他心智。下至知百千億那由他諸佛國中衆生心念者。不取正覺。設我得佛。國中人天。不得神足。於一念頃。下至不能超過百千億那由他諸佛國者。不取正覺。設我得佛。國中人天。若起想念貪計身者。不取正覺。設我得佛。國中人天。不住定聚。必至滅度者。不取正覺。設我得佛。光明有能限量。下至不照百千億那由他諸佛國者。不取正覺。設我得佛。壽命有能限量。下至百千億那由他劫者。不取正覺。設我得佛。國中聲聞有能計量。乃至三千大千世界衆生緣覺。於百千劫悉共計。知其數者。不取正覺。設我得佛。國中人天。壽命無能限量。除其本願脩短自在。若不爾者。不取正覺。設我得佛。國中人天。乃至聞有不善名者。不取正覺。設我得佛。十方世界無量諸佛。不悉咨嗟稱我名者。不取正覺。設我得佛。十方衆生至心信樂。欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。唯除五逆。誹謗正法。設我得佛。十方衆生發菩提心。修諸功德。至心發願。欲生我國。臨壽終時。假令不與大衆圍遶。現其人前者。不取正覺。設我得佛。十方衆生聞我名號。係念我國。殖諸德本。至心廻向。欲生我國。不果遂者。不取正覺。設我得佛。國中人天。不悉成滿三十二大人相者。不取正覺。設我得佛。他方佛土諸菩薩衆。來生我國。究竟必至一生補處。除其本願。自在所化。爲衆生故。被弘誓鏡。積累德本。度脫一切。遊諸佛國。修菩薩行。供養十方諸佛。如來。開化恒沙無量衆生。使立無上正真之道。超出常倫諸地之行。現前修習普賢之德。若不爾者。不取正覺。設我得佛。國中菩薩。承佛神力。供養諸佛。一食之頃。不能遍至無量無數億那由他諸佛國者。不取正覺。設我得佛。國中菩薩。在諸佛前。現其德本。諸所求欲。供養之具。若不如意者。不取正覺。設我得佛。國中菩薩。不能演說一切智者。不取正覺。設我得佛。國中菩薩。不得金剛那羅延身者。不取正覺。設我得佛。國中人天。一切萬物。嚴淨光麗。形色殊特。窮微極妙。無能稱量。其諸衆生。乃至逮得天眼。有能明

辨同作辯

爾者同作如是
○體同作身

若有裁縫染治
同作有求裁縫
擗染
觀下同有見字

如來三本俱作
諸佛

了辨其名數者。不取正覺。設我得佛。國中菩薩。乃至少功德者。不能知見其道場樹。無量光色。高四百萬里者。不取正覺。設我得佛。國中菩薩。若受讀經法。諷誦持說。而不得辯才智慧者。不取正覺。設我得佛。國中菩薩。智慧辯才。若可限量者。不取正覺。設我得佛。國土清淨。皆悉照見十方一切無量無數不可思議諸佛世界。猶如明鏡。觀其面像。若不爾者。不取正覺。設我得佛。自地以上。至于虛空。宮殿樓觀。池流華樹。國土所有。一切萬物。皆以無量雜寶。百千種香。而共合成。嚴飾奇妙。超諸人天。其香普熏十方世界。菩薩聞者。皆修佛行。若不爾者。不取正覺。設我得佛。十方無量不可思議諸佛世界。衆生之類。蒙我光明。觸其體者。身心柔軟。超過人天。若不爾者。不取正覺。設我得佛。十方無量不可思議諸佛世界。衆生之類。聞我名字。不得菩薩無生法。忍諸深總持者。不取正覺。設我得佛。十方無量不可思議諸佛世界。其有女人。聞我名字。歡喜信樂。發菩提心。厭惡女身。壽終之後。復爲女像者。不取正覺。設我得佛。十方無量不可思議諸佛世界。諸菩薩衆。聞我名字。壽終之後。常修梵行至成佛道。若不爾者。不取正覺。設我得佛。十方無量不可思議諸佛世界。諸天人。聞我名字。五體投地。稽首作禮。歡喜信樂。修菩薩行。諸天人。莫不致敬。若不爾者。不取正覺。設我得佛。國中人天。欲得衣服。隨念卽至。如佛所讚。應法妙服。自然在身。若有裁縫染治。浣濯者。不取正覺。設我得佛。國中人天。所受快樂。不如漏盡比丘者。不取正覺。設我得佛。國中菩薩。隨意欲見十方無量嚴淨佛土。應時如願。於寶樹中。皆悉照見。猶如明鏡。觀其面像。若不爾者。不取正覺。設我得佛。他方國土。諸菩薩衆。聞我名字。至于得佛。諸根缺陋。不具足者。不取正覺。設我得佛。他方國土。諸菩薩衆。聞我名字。皆悉逮得清淨解脫三昧。住是三昧。一發意頃。供養無量不可思議諸佛世尊。而不失定意。若不爾者。不取正覺。設我得佛。他方國土。諸菩薩衆。聞我名字。歡喜踊躍。修菩薩行。具足德本。若不爾者。不取正覺。設我得佛。他方國土。諸菩薩衆。聞我名字。皆悉逮得普等三昧。住是三昧。至于成佛。常見無量不可思議一切如來。若不爾者。不取正覺。設我得佛。國中菩薩。

一下同有忍字
而說同作以偈
○至南藏作志
○是宋元俱作
具○不同作所
道三本俱作尊

量同作慶○通
同作照○人同
作神

彼同作其

殃同作植

觸下同無之字
○欲同作愛○
捲同作倦○慧
同作惠

彼同作人

隨其志願所欲聞法自然得聞若不爾者不取正覺設我得佛他方國土諸菩薩衆聞我名字不即得至不退轉者不取正覺設我得佛他方國土諸菩薩衆聞我名字不即得至第一第二第三法忍於諸佛法不能即得不退轉者不取正覺佛告阿難爾時法藏比丘說此願已而說頌曰

我建超世願 必至無上道 斯願不滿足 誓不成等覺 我於無量劫 不爲大施主

善濟諸貧苦 誓不成等覺 我至成佛道 名聲超十方 究竟靡不聞 誓不成等覺

離欲深正念 淨慧修梵行 志求無上道 爲諸天人師 神力演大光 普照無際土

消除三垢冥 明濟衆厄難 開彼智慧眼 滅此昏盲暗 閉塞諸惡道 通達善趣門

功祚成滿足 威曜朗十方 日月戡重暉 天光隱不現 爲衆開法藏 廣施功德寶

常於大衆中 說法師子吼 供養一切佛 具足衆德本 願慧悉成滿 得爲三界雄

如佛無量智 通達靡不遍 願我功德力 等此最勝尊 斯願若尅果 大千應感動

虛空諸天人 當雨珍妙華

佛語阿難法藏比丘說此願已應時普地六種震動天雨妙華以散其上自然音樂空中讚言決定必成無上正覺於是法藏比丘具足修滿如是大願誠諦不虛超出世間深樂寂滅阿難法藏比丘於彼佛所諸天魔梵龍神八部大衆之中發斯弘誓建此願已一向專志莊嚴妙土所修佛國開廓廣大超勝獨妙建立常然無衰無變於不可思議兆載永劫積殖菩薩無量德行不生欲覺瞋覺害覺不起欲惡瞋惡害惡不著色聲香味觸之法忍力成就不計衆苦少欲知足無染恚癡三昧常寂智慧無礙無有虛僞諂曲之心和顏歎語先意承問勇猛精進志願無倦專求清白之法以慧利群生恭敬三寶奉事師長以大莊嚴具足衆行令諸衆生功德成就住空無相無願之法無作無起觀法如化遠離麤言自害害彼彼此俱害修習善語自利利人彼我兼利棄國捐王絕去財色自行六波羅蜜教人令行無央數劫積功累德隨其生處在意所欲無

梅明作旃○諸
同作繪

曠三本俱作廣
○入間明作間
入○焜耀三本
俱作焜燦

或下同無有佛
光三字

尺宋元俱作赤
○一上三本俱
無照字○勤明
作極

知三本俱作焉
大同作之

量寶藏自然發應教化安立無數衆生住於無上正真之道或爲長者居士豪姓尊貴或爲利國君轉輪聖帝或爲六欲天主乃至梵王常以四事供養恭敬一切諸佛如是功德不可稱說口氣香潔如優鉢羅華身諸毛孔出栴檀香其香普薰無量世界容色端正相好殊妙其手常出無盡之寶衣服飲食珍妙華香諸蓋幢幡莊嚴之具如是等事超諸天人於一切法而得自在阿難白佛法藏菩薩爲已成佛而取滅度爲未成佛爲今現在佛告阿難法藏菩薩今已成佛現在西方去此十萬億刹其佛世界名曰安樂阿難又問其佛成道已來爲經幾時佛言成佛已來凡歷十劫其佛國土自然七寶金銀瑠璃珊瑚琥珀車渠瑪瑙合成爲地恢廓曠蕩不可限極悉相雜廁轉相入間光赫焜耀微妙奇麗清淨莊嚴超踰十方一切世界衆寶中精其寶猶如第六天寶又其國土無須彌山及金剛圍一切諸山亦無大海小海溪渠井谷佛神力故欲見則見亦無地獄餓鬼畜生諸難之趣亦無四時春秋冬夏不寒不熱常和調適爾時阿難白佛言世尊若彼國土無須彌山其四天王及忉利天依何而住佛語阿難第三炎天乃至色究竟天皆依何住阿難白佛行業果報不可思議佛語阿難行業果報不可思議諸佛世界亦不可思議其諸衆生功德善力住行業之地故能爾耳阿難白佛我不疑此法但爲將來衆生欲除其疑惑故問斯義佛告阿難無量壽佛威神光明最尊第一諸佛光明所不能及或有佛光照照百佛世界或千佛世界取要言之乃照東方恆沙佛刹南西北方四維上下亦復如是或有佛光照照于七尺或照一由旬二三四五由旬如是轉倍乃至照一佛刹是故無量壽佛號無量光佛無邊光佛無礙光佛無對光佛炎王光佛清淨光佛歡喜光佛智慧光佛不斷光佛難思光佛無稱光佛超日月光佛其有衆生遇斯光者三垢消滅身意柔軟歡喜踊躍善心生焉若在三塗勤苦之處見此光明皆得休息無復苦惱壽終之後皆蒙解脫無量壽佛光明顯赫照耀十方諸佛國土莫不聞知不但我今稱其光明一切諸佛聲聞緣覺諸菩薩衆咸共歎譽亦復如是若有衆生聞其光明威神功德日夜稱說至心不斷隨意所願得生其國爲諸菩薩聲聞大眾所共歎譽稱其功德至其然後得佛道時普

不同作未

無上同有又字

劫明作之

如上三本俱無
能字

梨三本俱作璃
○頗梨同作玻
璃○樹上同有
之字

爲十方諸佛菩薩。歎其光明亦如今也。佛言。我說無量壽佛光明威神巍巍殊妙。晝夜一劫尙不能盡。佛語阿難。無量壽佛壽命長久不可稱計。汝寧知乎。假使十方世界無量衆生皆得人身。悉令成就。聲聞緣覺。都共集會。禪思一心。竭其智力。於百千萬劫。悉共推算。計其壽命長遠劫數。不能窮盡。知其限極。聲聞菩薩。天人之衆。壽命長短亦復如是。非算數譬喻所能知也。又聲聞菩薩。其數難量不可稱說。神智洞達。威力自在。能於掌中持一切世界。佛語阿難。彼初會聲聞衆數不可稱計。菩薩亦然。能如大目犍連百千萬億無量無數。於阿僧祇那由他劫。乃至滅度。悉共計校。不能究了多少之數。譬如大海深廣無量。假使有人。析其一毛以爲百分。以一分毛沾取一滯。於意云何。其所滯者。於彼大海何所爲多。阿難白佛。彼所滯水比於大海。多少之量。非巧曆算數言辭譬類所能知也。佛語阿難。如目連等。於百千萬億那由他劫。計彼初會聲聞菩薩。所知數者。猶如一滯。其所不知。如大海水。又其國土。七寶諸樹。周滿世界。金樹。銀樹。琉璃樹。頗梨樹。珊瑚樹。馬瑙樹。車渠樹。或有二寶。三寶。乃至七寶。轉共合成。或有金樹。銀樹。華果。或有餘樹。金華果。或琉璃樹。玻璃爲華果。亦然。或水精樹。琉璃爲華果。亦然。或珊瑚樹。碼碯爲華果。亦然。或碼碯樹。琉璃爲華果。亦然。或碑磲樹。衆寶爲華果。亦然。或有寶樹。紫金爲本。白銀爲莖。琉璃爲枝。水精爲條。珊瑚爲葉。碼碯爲華。碑磲爲實。或有寶樹。白銀爲本。琉璃爲莖。水精爲枝。珊瑚爲條。碼碯爲葉。碑磲爲華。紫金爲本。白銀爲莖。琉璃爲枝。水精爲條。珊瑚爲葉。碼碯爲實。或有寶樹。白銀爲本。琉璃爲莖。水精爲枝。珊瑚爲條。碼碯爲葉。碑磲爲華。紫金爲本。白銀爲莖。琉璃爲枝。水精爲條。珊瑚爲葉。碼碯爲實。或有寶樹。碼碯爲本。碑磲爲莖。紫金爲枝。白銀爲條。琉璃爲葉。水精爲華。珊瑚爲實。或有寶樹。碑磲爲本。紫金爲莖。白銀爲枝。琉璃爲條。水精爲葉。珊瑚爲華。碼碯爲實。行行相繞。莖莖相望。枝枝相准。葉葉相向。華華相順。實實相當。榮色光曜。不可勝視。清風時發出五音聲。微妙宮商自然相和。又無量壽佛。其道場樹高四百萬里。其本周圍五千由旬。枝葉四布二十萬里。一切衆寶自然合成。以月光

動下同有吹諸
寶樹演五字〇
出下同有無量
二字〇音下同
有聲字〇普流
十方一切同作
其聲流布遍諸
〇其間同作聞
其〇道下同有
耳根清徹四字
〇色下同無耳
聞其音四字〇
舌同作日〇緣
下同無一切二
字〇國下同有
土字〇又同作
其〇露明作絡
〇各皆三本俱
作皆各〇或下
同有有字〇物
同作牟

極同作安

摩尼持海輪寶衆寶之王。而莊嚴之。周帀條間垂寶瓔珞。百千萬色種種異變。無量光炎照耀無極。極妙寶網羅覆其上。一切莊嚴隨應而現。微風徐動出妙法音。普流十方一切佛國。其聞音者得深法忍。住不退轉。至成佛道。不遭苦患。目觀其色。耳聞其音。鼻知其香。舌嘗其味。身觸其光。心以法緣。一切皆得甚深法忍。住不退轉。至成佛道。六根清徹。無諸惱患。阿難。若彼國人。天見此樹者。得三法忍。一者音響忍。二者柔順忍。三者無生法忍。此皆無量壽佛威神力故。本願力故。滿足願故。明了願故。堅固願故。究竟願故。佛告阿難。世間帝王有百千音樂。自轉輪聖王。乃至第六天上。伎樂音聲。展轉相勝。千億萬倍。第六天上。萬種樂音。不如無量壽國。諸七寶樹。一種音聲。千億倍也。亦有自然萬種伎樂。又其樂聲。無非法音。清暢哀亮。微妙和雅。十方世界音聲之中。最為第一。又講堂精舍宮殿樓觀。皆七寶莊嚴。自然化成。復以真珠明月摩尼衆寶。以為交露覆蓋其上。內外左右。有諸浴池。或十由旬。或二十三十。乃至百千由旬。縱廣深淺。各皆一等。八功德水。湛然盈滿。清淨香潔。味甘露。黃金池者。底白銀沙。白銀池者。底黃金沙。水精池者。底琉璃沙。琉璃池者。底水精沙。珊瑚池者。底琥珀沙。琥珀池者。底珊瑚沙。硨磲池者。底馬瑙沙。馬瑙池者。底硨磲沙。白玉池者。底紫金沙。紫金池者。底白玉沙。或二寶三寶。乃至七寶。轉共合成。其池岸上有栴檀樹。華葉垂布。香氣普薰。天優鉢羅華。鉢曇摩華。拘物頭華。分陀利華。雜色光茂。彌覆水上。彼諸菩薩。及聲聞衆。若入寶池。意欲令水沒足。水即沒足。欲令至膝。即至于膝。欲令至腰。水至至腰。欲令至頸。水即至頸。欲令灌身。自然灌身。欲令還復。水輒還復。調和冷煖。自然隨意。開神悅體。蕩除心垢。清明澄潔。淨若無形。寶沙映徹。無深不照。微瀾廻流。轉相灌注。安祥徐逝。不遲不疾。波揚無量。自然沙聲。隨其所應。莫不聞者。或聞佛聲。或聞法聲。或聞僧聲。或寂靜聲。空無我聲。大慈悲聲。波羅蜜聲。或十力無畏。不共法聲。諸通慧聲。無所作聲。不起滅聲。無生忍聲。乃至甘露灌頂衆妙法聲。如是等聲。稱其所聞。歡喜無量。隨順清淨。離欲寂滅。真實之義。隨順三寶。力無所畏。不共之法。隨順通慧菩薩聲聞所行之道。無有三塗苦難之名。但有自然快樂之音。是故其國名曰極樂。阿難。彼佛

應同作鉢○衆
同作諸

厮同作斯

殖同作植

積聚同作聚積

諍同作爭○昇
同作升○遇三
本俱作乃

邊下同有也字
○比下同有之
字

諸明作繪

上三本俱作土
○較同作校
德同作得

國土諸往生者具足如是清淨色身諸妙音聲神通功德所處宮殿衣服飲食衆妙華香莊嚴之具猶第六
天自然之物若欲食時七寶應器自然在前金銀琉璃車渠馬瑙珊瑚琥珀明月真珠如是衆鉢隨意而至
百味飲食自然盈滿雖有此食實無食者但見色聞香意以爲食自然飽足身心柔軟無所味著事已化去
時至復現彼佛國土清淨安穩微妙快樂次於無爲泥洹之道其諸聲聞菩薩人天智慧高明神通洞達咸
同一類形無異狀但因順餘方故有人天之名顏貌端正超世希有容色微妙非天人非人皆受自然虛無之
身無極之體佛告阿難譬如世間貧窮乞人在帝王邊形貌容狀寧可類乎阿難曰佛假令此人在帝王邊
羸陋醜惡無以爲喻百千萬億不可計倍所以然者貧窮乞人底極厮下衣不蔽形食趣支命飢寒困苦人
理殆盡皆坐前世不殖德本積財不施富有益慳但欲唐得貪求無厭不信修善犯惡心積如是壽終財寶
消散苦身積聚爲之憂惱於己無益徒爲他有無善可怙無德可恃是故死墮惡趣受此長苦罪畢得出生
爲下賤愚鄙厮極示同人類所以世間帝王人中獨尊皆由宿世積德所致慈惠博施仁愛兼濟履信修善
無所違諍是以壽終福應得昇善道上生天上享茲福樂積善餘慶今得爲人遇生王家自然尊貴儀容端
正衆所敬事妙衣珍饈隨心服御宿福所造故能致此佛告阿難汝言是也計如帝王雖人中尊貴形色端
正比之轉輪聖王甚爲鄙陋猶彼乞人在帝王邊轉輪聖王威相殊妙天下第一比切利天王又復醜惡不
得相喻萬億倍也假令天帝比第六天王百千億倍不相類也設第六天王比無量壽佛國菩薩聲聞光顏
容色不相及逮百千萬億不可計倍佛告阿難無量壽國其諸天人衣服飲食華香瓔珞諸蓋幢幡微妙音
聲所居舍宅宮殿樓閣稱其形色高下大小或一寶二寶乃至無量衆寶隨意所欲應念卽至又以衆寶妙
衣遍布其地一切人天踐之而行無量寶網彌覆佛上皆以金縷真珠百千雜寶奇妙珍異莊嚴綵飾周匝
四面垂以寶鈴光色晃曜盡極嚴麗自然德風徐起微動其風調和不寒不暑溫冷柔軟不遲不疾吹諸羅
網及衆寶樹演發無量微妙法音流布萬種溫雅德香其有聞者塵勞垢習自然不起風觸其身皆得快樂

陷同作蹈

葉同作華○亦
同作赫

譬如比丘得滅盡三昧。又風吹散華遍滿佛土。隨色次第而不雜亂。柔輒光澤馨香芬烈。足履其上陷下四寸。隨舉足已還復如故。華用已訖。地輒開裂。以次化沒清淨無遺。隨其時節風吹散華。如是六反。又衆寶蓮華周滿世界。一一寶華百千億葉。其葉光明無量種色。青色青光。白色白光。玄黃朱紫。光色亦然。焔燁煥爛。明曜日月。一一華中出三十六百千億光。一一光中出三十六百千億佛。身色紫金相好殊特。一一諸佛。又放百千光明。普爲十方說微妙法。如是諸佛各各安立無量衆生於佛正道。

明無末題

無量壽經卷上

佛說無量壽經卷下

曹魏天竺三藏康僧鎧譯

定下三本俱無
之字

語三本俱作皆
次同

恒下同有河字
大同作之

佛告阿難。其有衆生。生彼國者。皆悉住於正定之聚。所以者何。彼佛國中。無諸邪聚及不定之聚。十方恒沙諸佛如來。皆共讚歎無量壽佛威神功德。不可思議。諸有衆生。聞其名號。信心歡喜。乃至一念。至心廻向。願生彼國。卽得往生。住不退轉。唯除五逆。誹謗正法。佛告阿難。十方世界諸天人民。其有至心願生彼國。凡有三輩。其上輩者。捨家棄欲。而作沙門。發菩提心。一向專念無量壽佛。修諸功德。願生彼國。此等衆生。臨壽終時。無量壽佛。與諸大衆。現其人前。卽隨彼佛往生其國。便於七寶華中。自然化生。住不退轉。智慧勇猛。神通自在。是故阿難。其有衆生。欲於今世見無量壽佛。應發無上菩提之心。修行功德。願生彼國。佛語阿難。其中輩者。十方世界諸天人民。其有至心願生彼國。雖不能行作沙門。大修功德。當發無上菩提之心。一向專念無量壽佛。多少修善。奉持齋戒。起立塔像。飯食沙門。懸繒然燈。散華燒香。以此廻向願生彼國。其人臨終。無量壽佛。化現其身。光明相好。具如真佛。與諸大衆。現其人前。卽隨化佛往生其國。住不退轉。功德智慧。次如上輩者也。佛語阿難。其下輩者。十方世界諸天人民。其有至心欲生彼國。假使不能作諸功德。當發無上菩提之心。一向專意。乃至十念。念無量壽佛。願生其國。若聞深法。歡喜信樂。不生疑惑。乃至一念。念於彼佛。以至誠心。願生其國。此人臨終。夢見彼佛。亦得往生。功德智慧。次如中輩者也。佛告阿難。無量壽佛威神無極。十方世界。無量無邊。不可思議。諸佛如來。莫不稱歎。於彼東方。恒沙佛國。無量無數。諸菩薩衆。皆悉往詣。無量壽佛所。恭敬供養。及諸菩薩。聲聞大衆。聽受經法。宣布道化。南西北方。四維上下。亦復如是。爾時世尊。而說頌曰。

諸菩薩同作菩薩衆

照同作朗

門同作性
土同作國

志同作至○逢
元明俱作滿
本三本俱作心

崑元明俱作蓮
如三本俱作知

壽命甚難得	淨慧如本空	如來智慧海	宿世見諸佛	曾更見世尊	恭敬歡喜去	必於無量尊	諸佛告菩薩	具諸功德本	覺了一切法	當授菩薩記	大士觀世音	口出無數光	見彼巖淨土	具足功德藏	咸然奏天樂	彼土菩薩衆	東方諸佛國
佛世亦難值	億劫思佛智	深廣無崖底	樂聽如是教	則能信此事	還到安養國	願已國無異	令觀安養佛	受決當作佛	猶如夢幻響	今說仁諦聽	整服稽首問	遍照十方國	微妙難思議	妙智無等倫	暢發和雅音	往觀無量覺	其數如恒沙
人有信慧難	窮力極講說	二乘非所測	聲聞或菩薩	謙敬聞奉行	若人無善本	普念度一切	聞法樂受行	通達諸法門	滿足諸妙願	十方來正士	白佛何緣笑	迴光圍遶身	因發無量心	慧日照世間	歌歎最勝尊	一切諸菩薩	彼土諸菩薩
若聞精進求	盡壽猶不知	唯佛獨明了	莫能究聖心	踊躍大歡喜	不得聞此經	名顯達十方	疾得清淨處	一切空無我	必成如是刹	吾悉知彼願	唯然願說意	三印從頂入	願我國亦然	消除生死雲	供養無量覺	各贊大妙華	往觀無量覺
聞法能不忘	佛慧無邊際	假使一切人	譬如從生盲	憍慢弊懈怠	清淨有戒者	奉事憶如來	皆悉到彼國	專求淨佛土	知法如電影	志求嚴淨土	梵聲猶雷震	一切天人衆	應時無量尊	恭敬遶三印	究達神通慧	寶香無價衣	南西北四維
見敬得大慶	如是致清淨	具足皆得道	欲行開導人	難以信此法	乃獲聞正法	飛化遍諸刹	自致不退轉	必成如是刹	究竟菩薩道	受決當作佛	八音暢妙響	踊躍皆歡喜	動容發欣笑	稽首無上尊	遊入深法門	供養無量覺	上下亦復然

濟同作度

是同作此○此同作是

阿僧祇同作不可計○更同作受

繪同作衣

轉同作輒○佛

下同有及諸二字○大同作之

○晃耀同作昱

燦○大衆同作

天人○普吹同

作吹七○聲下

同無兩字○周

遍同作四散○

大同作之○然

同作怡○告同

作語

軟三本俱作潤

則我善親友 是故當發意 設滿世界火 必過要聞法 會當成佛道 廣濟生死流

佛告阿難。彼國菩薩。皆當究竟。一生補處。除其本願。為衆生故。以弘誓功德。而自莊嚴。善欲度脫一切衆生。阿難。彼佛國中。諸聲聞衆。身光一尋。菩薩光明。照百由旬。有二菩薩。最尊第一。威神光明。普照三千大千世界。阿難。白佛。彼二菩薩。其號云何。佛言。一名觀世音。二名大勢至。是三菩薩。於此國土。修菩薩行。命終轉化。生彼佛國。阿難。其有衆生。生彼國者。皆悉具足三十二相。智慧成滿。深入諸法。究暢要妙。神通無礙。諸根明利。其鈍根者。成就二忍。其利根者。得阿僧祇無生法忍。又彼菩薩。乃至成佛。不更惡趣。神通自在。常識宿命。除生他方。五濁惡世。示現同彼。如我國也。佛語阿難。彼國菩薩。承佛威神。一食之頃。往詣十方無量世界。恭敬養諸佛世尊。隨心所念。華香伎樂。繪蓋幢幡。無數無量。供養之具。自然化生。應念卽至。珍妙殊特。非世所有。轉以奉散。諸佛菩薩。聲聞大衆。在虛空中。化成華蓋。光色晃耀。香氣普薰。其華周圍。四百里者。如是轉倍。乃覆三千大千世界。隨其前後。以次化沒。其諸菩薩。僉然欣悅。於虛空中。共奏天樂。以微妙音。歌歎佛德。聽受經法。歡喜無量。供養佛已。未食之前。忽然輕舉。還其本國。佛語阿難。無量壽佛。為諸聲聞菩薩大衆。願宣法時。都悉集會。七寶講堂。廣宣道教。演暢妙法。莫不歡喜心解。得道。卽時四方。自然風起。普吹寶樹。出五音聲。雨無量妙華。隨風周遍。自然供養。如是不絕。一切諸天。皆贊天上。百千華香。萬種伎樂。供養其佛。及諸菩薩。聲聞大衆。普散華香。奏諸音樂。前後來往。更相開避。當斯之時。熙然快樂。不可勝言。佛告阿難。生彼佛國。諸菩薩等。所可講說。常宣正法。隨順智慧。無違無失。於其國土。所有萬物。無我所心。無染著心。去來進止。情無所係。隨意自在。無所適莫。無彼無我。無競無誣。於諸衆生。得大慈悲。饒益之心。柔軟調伏。無忿恨心。離蓋清淨。無厭念心。等心勝心。深心定心。愛法樂法。喜法之心。滅諸煩惱。離惡趣心。究竟一切菩薩所行。具足成就。無量功德。得深禪定。諸通明慧。遊志七覺。修心佛法。肉眼清徹。靡不分了。天眼通達。無量無限。法眼觀察。究竟諸道。慧眼見真。能度彼岸。佛眼具足。覺了法性。以無礙智。為衆人演說。等觀三界。空無所有。志求佛法。

習元明俱作集

望宋作要元明
俱作忌

感三本俱作威
○德同作慧

養同作樂○趣
同作道次同
獲同作得

具諸辯才除滅衆生煩惱之患。從如來生解法如如。善知習滅音聲方便。不欣世語樂在正論。修諸善本志崇佛道。知一切法皆悉寂滅。生身煩惱二餘俱盡。聞甚深法心不疑懼。常能修行。其大悲者深遠微妙。靡不覆載。究竟一乘。至于彼岸。決斷疑網。慧由心出。於佛教法該羅無外。智慧如大海。三昧如山王。慧光明淨。超踰日月。清白之法。具足圓滿。猶如雪山。照諸功德等一淨。故猶如大地。淨穢好惡無異心。故猶如淨水。洗除塵勞。諸垢染。故猶如火王。燒滅一切煩惱薪。故猶如大風。行諸世界無障闕。故猶如虛空。於一切有無所著。故猶如蓮華。於諸世間無染汙。故猶如大乘。運載群萌。出生死。故猶如重雲。震大法雷。覺未覺。故猶如大雨。雨甘露法潤衆生。故如金剛山。衆魔外道不能動。故如梵天王。於諸善法最上首。故如尼拘樹。普覆一切。故如優曇鉢華。希有難遇。故如金翅鳥。威伏外道。故如衆遊禽。無所藏積。故猶如牛王。無能勝。故猶如象王。善調伏。故如師子王。無所畏。故曠若虛空。大慈等故。摧滅嫉心。不望勝。故專樂求法。心無厭足。常欲廣說。志無疲倦。擊法鼓。建法幢。曜慧日。除癡闇。修六和敬。常行法施。志勇精進。心不退弱。爲世燈明。最勝福田。常爲師導。等無憎愛。唯樂正道。無餘欣。厭。拔諸欲刺。以安群生。功德殊勝。莫不尊敬。滅三垢障。遊諸神通。因力緣力。意力。願力。方便之力。常力。善力。定力。慧力。多聞之力。施戒忍辱。精進禪定。智慧之力。正念。止觀。諸通明力。如法調伏。諸衆生力。如是等力。一切具足。身色相好。功德辯才。具足莊嚴。無與等者。恭敬供養。無量諸佛。常爲諸佛所共稱歎。究竟菩薩諸波羅蜜。修空無相無願三昧。不生不滅。諸三昧門。遠離聲聞緣覺之地。阿難。彼諸菩薩成就如是無量功德。我但爲汝略言之耳。若廣說者。百千萬劫不能窮盡。佛告彌勒菩薩。諸天人等。無量壽國聲聞菩薩。功德智慧不可稱說。又其國土微妙安樂清淨。若此。何不力爲善念。道之自然。著於無上下洞達無邊際。宜各勤精進。努力自求之。必得超絕去。往生安養國。橫截五惡趣。惡趣自然閉。昇道無窮極。易往而無人。其國不逆違。自然之所牽。何不棄世事。勤行求道德。可獲極長生。壽樂無有極。然世人薄俗。共諍不急之事。於此劇惡極苦之中。勤身營務。以自給濟。無尊無卑。無貧無富。少長男女。共憂錢財。有無

俱三本俱作居次同

天元明俱作天

相三本俱作想

復元明俱作今
○曼明作遇

瞭三本俱作蒙
惑下同無於字

同然。憂思適等。屏營愁苦。累念積慮。爲心走使。無有安時。有田憂田。有宅憂宅。牛馬六畜。奴婢錢財。衣食什物。復共憂之。重思累息。憂念愁怖。橫爲非常。水火盜賊。怨家債主。焚漂劫奪。消散磨滅。憂毒怙松。無有解時。結憤心中。不離憂惱。心堅意固。適無縱捨。或坐摧碎。身亡命終。棄捐之去。莫誰隨者。尊貴豪富。亦有斯患。憂懼萬端。勤苦若此。結衆寒熱。與痛共俱。貧窮下劣。困乏常無。無田亦憂。欲有田。無宅亦憂。欲有宅。無牛馬六畜。奴婢錢財。衣食什物。亦憂。欲有之。適有一復少一。有是少是。思有齊等。適欲具有。便復糜散。如是憂苦。當復求索。不能時得。思想無益。身心俱勞。坐起不安。憂念相隨。勤苦若此。亦結衆寒熱。與痛共俱。或時坐之。終身天命。不肯爲善。行道進德。壽終身死。當獨遠去。有所趣向。善惡之道。莫能知者。世間人民。父子兄弟夫婦。家室中外。親屬。當相敬愛。無相憎嫉。有無相通。無得貪惜。言色常和。莫相違戾。或時心壽有所悲怒。今世恨意。微相憎嫉。後世轉劇。至成大怨。所以者何。世間之事。更相患害。雖不卽時。應急相破。然含毒畜怒。結憤精神。自然尅讎。不得相離。皆當對生。更相報復。人在世間。愛欲之中。獨生獨死。獨去獨來。當行至趣苦樂之地。身自當之。無有代者。善惡變化。殃福異處。宿豫嚴待。當獨趣入。遠到他所。莫能見者。善惡自然。追行所生。窈窕冥冥。別離久長。道路不同。會見無期。甚難甚難。復得相值。何不棄衆事。各曼強健時。努力勤修善。精進願度世。可得極長生。如何不求道。安所須待。欲何樂乎。如是世人。不信作善得善。爲道得道。不信人死更生。惠施得福。善惡之事。都不信之。謂之不然。終無有是。但坐此故。且自見之。更相瞻視。先後同然。轉相承受。父餘教令。先人祖父。素不爲善。不識道德。身愚神闇。心塞意閉。死生之趣。善惡之道。自不能見。無有語者。吉凶禍福。競各作之。無一恠也。生死常道。轉相嗣立。或父哭子。或子哭父。兄弟夫婦。更相哭泣。顛倒上下。無常根本。皆當過去。不可常保。教語開導。信之者少。是以生死流轉。無有休止。如此之人。矇冥抵突。不信經法。心無遠慮。各欲快意。癡惑於愛欲。不達於道德。迷沒於瞋怒。貪狼於財色。坐之不得道。當更惡趣苦。生死無窮已。哀哉。甚可傷。或時室家父子兄弟夫婦。一死一生。更相哀愍。恩愛思慕。憂念結縛。心意痛著。迭相顧戀。窮日卒

昏蒙閉同作昏
蒙閉○政同作
正○察同作少

未下三本俱有
終字○慧同作
勤

曼明作遇

者三本俱作語

識同作戒

拘闍同作罽

體元明俱作淨
○壽下三本俱
無佛字

歲無有解已。教語道德心不開明。思想思好不難情欲。昏蒙閉塞愚惑所覆。不能深思熟計。心自端政專精。行道決斷世事。便旋至竟年壽終盡。不能得道。無可奈何。總猥慣擾。皆貪愛欲。惑道者衆悟之者寡。世間忽忽無可聊賴。尊卑上下貧富貴賤。勤苦忽務。各懷殺毒。惡氣竊冥爲妄興事。違逆天地不從人心。自然非惡。先隨與之恣聽。所爲待其罪極。其壽未盡便頓奪之下入惡道。累世懣苦展轉其中。數千億劫無有出期。痛不可言。甚可哀愍。佛告彌勒菩薩諸天人等。我今語汝。世間之事。人用是故坐不得道。當熟思計。遠離衆惡。擇其善者勤而行之。愛欲榮華不可常保。皆當別離。無可樂者。曼佛在世當勤精進。其有至願生安樂國者。可得智慧。明達功德殊勝。勿得隨心所欲。虧負經戒在人後也。儻有疑意不解經者。可具問佛。當爲說之。彌勒菩薩長跪白言。佛威神尊重。所說快善。聽佛經者。貫心思之。世人實爾如佛所言。今佛慈愍。顯示大道。耳目開明。長得度脫。聞佛所說。莫不歡喜。諸天人。民騶動之類。皆蒙慈恩。解脫憂苦。佛語教誡甚深甚善。智慧明見。八方上下。去來今事。莫不究暢。今我衆等。所以蒙得度脫。皆佛前世求道之時。謙苦所致。恩德普覆。福祿巍巍。光明徹照。達空無極。聞入泥洹。教授典攬。威制消化。感動十方無窮無極。佛爲法王。尊超衆聖。普爲一切天人之師。隨心所願。皆令得道。今得值佛。復聞無量壽聲。靡不歡喜。心得開明。佛告彌勒。汝言是也。若有慈敬於佛者。實爲大善。天下久久乃復有佛。今我於此世作佛。演說經法。宣布道教。斷諸疑網。拔愛欲之本。杜衆惡之源。遊步三界。無所拘闍。典攬智慧衆道之要。執持網維。昭然分明。開示五趣度未度者。決正生死泥洹之道。彌勒當知。汝從無數劫來。修菩薩行。欲度衆生。其已久遠。從汝得道。至于泥洹。不可稱數。汝及十方諸天人。民一切四衆。永劫已來。展轉五道。憂畏勤苦。不可具言。乃至今世。生死不絕。與佛相值。聽受經法。又復得聞無量壽佛。快哉甚善。吾助汝喜。汝今亦可自厭生死。老病痛苦。惡露不淨。無可樂者。宜自決斷。端身正行。益作諸善。修己潔體。洗除心垢。言行忠信。表裏相應。人能自度。轉相拯濟。精明求願。積累善本。雖一世勤苦。須臾之間。後生無量壽佛。國快樂無極。長與道德合明。永拔生死根本。無復貪恚愚癡苦惱之患。

佛同作言

等下同無爲字

啞三本俱作瘧
○瘞同作弊
免同作勉

剝同作利

欲壽一劫百劫千萬億劫。自在隨意皆可得之。無爲自然。次於泥洹之道。汝等宜各精進求心所願。無得疑惑。中悔自爲過咎。生彼邊地七寶宮殿。五百歲中受諸厄也。彌勒白佛。受佛重誨。專精修學。如教奉行。不敢有疑。佛告彌勒。汝等能於此世。端心正意。不作衆惡。甚爲至德。十方世界最無倫匹。所以者何。諸佛國土。天人之類。自然作善。不大爲惡。易可開化。今我於此世間作佛。處於五惡五痛五燒之中。爲最劇苦。教化群生。令捨五惡。令去五痛。令離五燒。降化其意。令持五善。獲其福德。度世長壽。泥洹之道。佛言。何等爲五惡。何等五痛。何等五燒。何等消化五惡。令持五善。獲其福德。度世長壽。泥洹之道。其一惡者。諸天人民。騖動之類。欲爲衆惡。莫不皆然。強者伏弱。轉相尅賊。殘害殺戮。迭相吞噬。不知修善。惡逆無道。後受殃罰。自然趣向。神明記識。犯者不赦。故有貧窮下賤。乞丐孤獨。聾盲瘖瘂。愚癡惡。至有疋狂不逮之屬。又有尊貴豪富。高才明達。皆由宿世慈孝。修善積德。所致。世有常道。王法牢獄。不肯畏慎。爲惡入罪。受其殃罰。求望解脫。難得免出。世間有此目前現事。壽終後世。尤深尤劇。入其幽冥。轉生受身。譬如王法痛苦極刑。故有自然三塗。無量苦惱。轉質其身。改形易道。所受壽命。或長或短。魂神精識。自然趣之。當獨值向。相從共生。更相報復。無有止已。殃惡未盡。不得相離。展轉其中。無有出期。難得解脫。痛不可言。天地之間。自然有是。雖不卽時。卒暴應至。善惡之道。會當歸之。是爲一大惡。一痛。一燒。勤苦如是。譬如大火。焚燒人身。人能於中。一心制意。端身正行。獨作諸善。不爲衆惡者。身獨度脫。獲其福德。度世上。天泥洹之道。是爲一大善也。佛言。其二惡者。世間人民。父子兄弟。室家夫婦。都無義理。不順法度。奢婬。嬌縱。各欲快意。任心自恣。更相欺惑。心口各異。言念無實。佞諂不忠。巧言諛媚。嫉賢。謗善。陷入怨枉。主上不明。任用臣下。臣下自在。機僞多端。踐度能行。知其形勢。在位不正。爲其所欺。妄損忠良。不當天心。臣欺其君。子欺其父。兄弟夫婦。中外知識。更相欺誑。各懷貪欲。瞋恚。愚癡。欲自厚己。欲貪多有。尊卑上下。心俱同然。破家亡身。不顧前後。親屬內外。坐之滅族。或時室家。知識。鄉黨。市里。愚民。野人。轉共從事。更相剝害。忿成怨結。富有慳惜。不肯施與。愛保貪重。心勞身苦。如是至竟。無所恃怙。

備同作斯
姚宋作佚元明
俱作洪
不三本俱作無

神鬼同作鬼神
奪之宋元俱作
頓乏
自三本俱作同

獨來獨去無一隨者。善惡禍福追命所生。或在樂處。或入苦毒。然後乃悔當復何及。世間人民。心愚少智。見善憎謗。不思慕及。但欲爲惡。妄作非法。常懷盜心。恇望他利。消散磨盡。而復求索。邪心不正。懼人有色。不豫思計。事至乃悔。今世現有王法牢獄。隨罪趣向。受其殃罰。因其前世不信道德。不修善本。今復爲惡。天神尅識。別其名籍。壽終神逝。下入惡道。故有自然三塗無量苦惱。展轉其中。世世累劫。無有出期。難得解脫。痛不可言。是爲二大惡。二痛。二燒。勤苦如是。譬如大火焚燒人身。人能於中一心制意。端身正行。獨作諸善。不爲衆惡者。身獨度脫。獲其福德。度世上天泥洹之道。是爲二大善也。佛言。其三惡者。世間人民。相因寄生。共居天地之間。處年壽命。無能幾何。上有賢明長者。尊貴豪富。下有貧窮斷賤。疴劣愚夫。中有不善之人。常懷邪惡。但念姪姪。煩滿胷中。愛欲交亂。坐起不安。貪意守惜。但欲唐得。眄睐細色。邪態外逸。自妻厭憎。私妄出入。費損家財。事爲非法。交結聚會。興師相伐。攻劫殺戮。強奪不道。惡心在外。不自修業。盜竊趣得。欲繫成事。恐勢迫脅。歸給妻子。恣心快意。極身作樂。或於親屬。不避尊卑。家室中外。患而苦之。亦復不畏。王法禁令。如是之惡。著於人鬼。日月照見。神明記識。故有自然三塗無量苦惱。展轉其中。世世累劫。無有出期。難得解脫。痛不可言。是爲三大惡。三痛。三燒。勤苦如是。譬如大火焚燒人身。人能於中一心制意。端身正行。獨作諸善。不爲衆惡者。身獨度脫。獲其福德。度世上天泥洹之道。是爲三大善也。佛言。其四惡者。世間人民。不念修善。轉相教令。共爲衆惡。兩舌惡口。妄言綺語。讒賊鬪亂。憎嫉善人。敗壞賢明。於傍快喜。不孝二親。輕慢師長。朋友無信。難得誠實。尊貴自大。謂己有道。橫行威勢。侵易於人。不能自知。爲惡無恥。自以強健。欲人敬難。不畏天地。神明日月。不肯作善。難可降化。自用假塞。謂可常爾。無所憂懼。常懷憍慢。如是衆惡。天神記識。賴其前世頗作福德。小善扶接。營護助之。今世爲惡。福德盡滅。諸善神鬼。各去離之。身獨空立。無所復依。壽命終盡。諸惡所歸。自然迫促。共趣奪之。又其名籍。記在神明。殃咎牽引。當往趣向。罪報自然。無從捨離。但得前行。入於火鑊。身心摧碎。精神痛苦。當斯之時。悔復何及。天道自然。不得蹉跌。故有自然三塗無量苦惱。展轉其中。世

有下同無憎字

錄同作難○職

同作識

曠同作曠○逆

惡同作惡逆

不下同有肯字

其三本俱作期

惡下同無者字

其明作有

世累劫無有出期。難得解脫。痛不可言。是爲四大惡。四痛。四燒。勤苦如是。譬如大火焚燒人身。人能於中心制意。端身正行。獨作諸善。不爲衆惡。身獨度脫。獲其福德。度世上天泥洹之道。是爲四大善也。佛言。其五惡者。世間人民。徒倚懈惰。不肯作善。治身修業。家室眷屬。飢寒困苦。父母教誨。瞋目怒應。言令不和。違戾反逆。譬如怨家。不如無子。取與無節。衆共患厭。負恩違義。無有報償之心。貧窮困乏。不能復得。辜較縱尊。放恣遊散。串數唐得。用自賑給。耽酒嗜美。飲食無度。肆心蕩逸。魯扈抵突。不誠人情。強欲抑制。見人有憎善。妬嫉惡之。無義無禮。無所顧錄。自用職當。不可諫曉。六親眷屬。所資有無。不能憂念。不惟父母之恩。不存師友之義。心常念惡。口常言惡。身常行惡。曾無一善。不信先聖諸佛經法。不信行道可得度世。不信死後神明更生。不信作善得善。爲惡得惡。欲殺真人。鬪亂衆僧。欲害父母兄弟眷屬。六親憎惡。願令其死。如是世人心意俱然。愚癡蒙昧。而自以智慧。不知生所從來。死所趣向。不仁不順。逆惡天地。而於其中。悖望僥倖。欲求長生。會當歸死。慈心教誨。令其念善。開示生死善惡之趣。自然有是。而不信之。苦心與語。無益其人。心中閉塞。意不開解。大命將終。悔懼交至。不豫修善。臨窮方悔。悔之於後。將何及乎。天地之間。五道分明。恢廓窈冥。浩浩茫茫。善惡報應。禍福相承。身自當之。無誰代者。數之自然。應其所行。殃咎追命。無得縱捨。善人行善。從樂入樂。從明入明。惡人行惡。從苦入苦。從冥入冥。誰能知者。獨佛知耳。教語開示。信用者少。生死不休。惡道不絕。如是世人。難可具盡。故有自然三塗。無量苦惱。展轉其中。世世累劫。無有出期。難得解脫。痛不可言。是爲五大惡。五痛。五燒。勤苦如是。譬如大火焚燒人身。人能於中一心制意。端身正念。言行相副。所作至誠。所語如語。心口不轉。獨作諸善。不爲衆惡者。身獨度脫。獲其福德。度世上天泥洹之道。是爲五大善也。佛告彌勒。吾語汝等。是世五惡。勤苦若此。五痛。五燒。展轉相生。但作衆惡。不修善本。皆悉自然入諸惡趣。或其今世先被殃病。求死不得。求生不得。罪惡所招。示衆見之。身死隨行入三惡道。苦毒無量。自相焦然。至其久後。共作怨結。從小微起。遂成大惡。皆由貪著財色。不能施惠。癡欲所迫。隨心思想。煩惱結縛。無有解已。厚已誣利。無所省。

生三本俱作坐

紀明作維

永三本俱作當
○畏同作怖
慧同作惠

念同作惡○器
同作宜

吾同作我

昇同作升

告同作語

向三本俱作面

錄。富貴榮華當時快意。不能忍辱不務修善。威勢無幾隨以磨滅。身生勞苦。久後大劇。天道施張。自然糺舉。網紀羅網。上下相應。犛犛怙怙。當入其中。古今有是痛哉。可傷。佛語彌勒。世間如是。佛皆哀之。以威神力。摧滅衆惡。悉令就善。棄捐所思。奉持經戒。受行道法。無所違失。終得度世泥洹之道。佛言。汝今諸天人民。及後世人。得佛經語。當熟思之。能於其中。端心正行。主上爲善。率化其下。轉相勸令。各自端守。尊聖敬善。仁慈博愛。佛語教誨。無敢虧負。當求度世。拔斷生死衆惡之本。永離三塗。無量憂畏。苦痛之道。汝等於是。廣植德本。布恩施慧。勿犯道禁。忍辱精進。一心智慧。轉相教化。爲德立善。正心正意。齋戒清淨。一日一夜。勝在無量壽國。爲善百歲。所以者何。彼佛國土。無爲自然。皆積衆善。無毛髮之惡。於此修善。十日十夜。勝於他方。諸佛國中。爲善千歲。所以者何。他方佛國。爲善者多。爲惡者少。福德自然。無造惡之地。唯此間多惡。無有自然。勤苦求欲。轉相欺殆。心勞形困。飲苦食毒。如是。念務未嘗寧息。吾哀汝等。天人之類。苦心誨喻。教令修善。隨器開導。授與經法。莫不承用。在意所願。皆令得道。佛所遊履。國邑丘聚。靡不蒙化。天下和順。日月清明。風雨以時。災厲不起。國豐民安。兵戈無用。崇德興仁。務修禮讓。佛言。我哀愍汝等。諸天人民。甚於父母念子。今吾於此。世作佛。降化五惡。消除五痛。絕滅五燒。以善攻惡。拔生死之苦。令獲五德。昇無爲之安。吾去世後。經道漸滅。人民諂僞。復爲衆惡。五燒五痛。還如前法。久後轉劇。不可悉說。我但爲汝略言之耳。佛告彌勒。汝等各善思之。轉相教誨。如佛經法。無得犯也。於是。彌勒菩薩合掌白言。佛所說甚善。世人實爾。如來普慈哀愍。悉令度脫。受佛重誨。不敢違失。佛告阿難。汝起更整衣服。合掌恭敬。禮無量壽佛。十方國土。諸佛如來。常共稱揚讚歎。彼佛無著無闕。於是。阿難起。整衣服。正身西向。恭敬合掌。五體投地。禮無量壽佛。白言。世尊。願見彼佛。安樂國土。及諸菩薩。聲聞大衆。說是語已。卽時無量壽佛。放大光明。普照一切。諸佛世界。金剛圍山。須彌山王。大小諸山。一切所有。皆同一色。譬如劫水。彌滿世界。其中萬物。沈沒不現。混濛浩汗。唯見大水。彼佛光明。亦復如是。聲聞菩薩。一切光明。皆悉隱蔽。唯見佛光明。耀顯赫。爾時阿難。卽見無量壽佛。威德巍巍。如須彌山。

天下同有上字

加同作彌

之同作聖

生下同無者字

別有宮室七寶
莊飾八字同作
有七寶牢獄種
種莊嚴九字○
蓋宋作幡○宮
三本俱作獄○
給飲同作養飯
○智下同有故
字○彼下同有
七寶二字○壽
下同無佛字○

王高出一切諸世界上。相好光明靡不照耀。此會四衆一時悉見。彼見此土亦復如是。爾時佛告阿難及慈氏菩薩。汝見彼國。從地已上至淨居天。其中所有微妙嚴淨。自然之物爲悉見不。阿難對曰。唯然已見。汝寧復聞無量壽佛大音宣布一切世界化衆生不。阿難對曰。唯然已聞。彼國人民乘百千由旬七寶宮殿。無所障闕。遍至十方供養諸佛。汝復見不。對曰。已見。彼國人民有胎生者。汝復見不。對曰。已見。其胎生者所處宮殿。或百由旬或五百由旬。各於其中受諸快樂。如忉利天亦皆自然。爾時慈氏菩薩白佛言。世尊。何因何緣。彼國人民胎生化生。佛告慈氏。若有衆生。以疑惑心修諸功德。願生彼國。不了佛智。不思議智。不可稱智。大乘廣智。無等無倫最上勝智。於此諸智疑惑不信。然猶信罪福修習善本。願生其國。此諸衆生。生彼宮殿。壽五百歲。常不見佛。不聞經法。不見菩薩聲聞聖衆。是故於彼國土。謂之胎生。若有衆生。明信佛智。乃至勝智。作諸功德。信心廻向。此諸衆生。於七寶華中自然化生。加趺而坐。須臾之頃。身相光明智慧功德。如諸菩薩具足成就。復次慈氏。他方諸大菩薩。發心欲見無量壽佛。恭敬供養及諸菩薩聲聞之衆。彼菩薩等。命終得生無量壽國。於七寶華中自然化生。彌勒當知。彼化生者。智慧勝故。其胎生者。皆無智慧。於五百歲中。常見佛。不聞經法。不見菩薩諸聲聞衆。無由供養於佛。不知菩薩法式。不得修習功德。當知此人。宿世之時。無有智慧。疑惑所致。佛告彌勒。譬如轉輪聖王。別有宮室七寶莊飾。張設牀帳。懸諸繪蓋。若有諸小王子。得罪於王。輒內彼宮中。繫以金鎖。供給飲食衣服牀蓐華香伎樂。如轉輪王無所乏少。於意云何。此諸王子。寧樂彼處不。對曰。不也。但種種方便。求諸大力。欲自勉出。佛告彌勒。此諸衆生。亦復如是。以疑惑佛智。生彼宮殿。無有刑罰。乃至一念惡事。但於五百歲中。不見三寶。不得供養修諸善本。以此爲苦。雖有餘樂。猶不樂彼處。若此衆生。識其本罪。深自悔責。求離彼處。卽得如意。往詣無量壽佛。所恭敬供養。亦得遍至無量無數諸如來所。修諸功德。彌勒當知。其有菩薩生疑惑者。爲失大利。是故應當明信諸佛。無上智慧。彌勒菩薩白佛言。世尊。於此世界。有幾所不退菩薩。生彼佛國。佛告彌勒。於此世界。有六十七億不退菩薩。往生彼國。一一菩

如來三本俱作
餘佛○六上同
無有字

百下同無億字

竟同作盡
語同作告

明按譌曰恭讀
無量清淨平等
覺經云般泥洹
去後經道留止
千歲千歲後留
是經法止住百

薩。已曾供養無數諸佛。次如彌勒者也。諸小行菩薩及修習少功德者。不可稱計。皆當往生。佛告彌勒。不但我剎諸菩薩等往生彼國。他方佛土亦復如是。其第一佛名曰遠照。彼有百八十億菩薩。皆當往生。其第二佛名曰寶藏。彼有九十億菩薩。皆當往生。其第三佛名曰無量音。彼有二百二十億菩薩。皆當往生。其第四佛名曰甘露味。彼有二百五十億菩薩。皆當往生。其第五佛名曰龍勝。彼有十四億菩薩。皆當往生。其第六佛名曰勝力。彼有萬四千菩薩。皆當往生。其第七佛名曰師子。彼有五百億菩薩。皆當往生。其第八佛名曰離垢光。彼有八十億菩薩。皆當往生。其第九佛名曰德首。彼有六十億菩薩。皆當往生。其第十佛名曰妙德山。彼有六十億菩薩。皆當往生。其第十一佛名曰人王。彼有十億菩薩。皆當往生。其第十二佛名曰無上華。彼有無數不可稱計諸菩薩衆。皆不退轉。智慧勇猛。已曾供養無量諸佛。於七日中即能攝取百千億劫大士所修堅固之法。斯等菩薩皆當往生。其第十三佛名曰無畏。彼有七百九十億大菩薩衆。諸小菩薩及比丘等不可稱計。皆當往生。佛語彌勒。不但此十四佛國中諸菩薩等當往生也。十方世界無量佛國。其往生者亦復如是。甚多無數。我但說十方諸佛名號及菩薩比丘生彼國者。晝夜一劫尙未能竟。我今爲汝略說之耳。佛語彌勒。其有得聞彼佛名號。歡喜踊躍乃至一念。當知此人爲得大利。則是具足無上功德。是故彌勒。設有大火充滿三千大千世界。要當過此。聞是經法。歡喜信樂。受持讀誦。如說修行。所以者何。多有菩薩欲聞此經而不能得。若有衆生聞此經者。於無上道終不退轉。是故應當專心信受持誦說行。吾今爲諸衆生說此經法。令見無量壽佛及其國土一切所有。所當爲者皆可求之。無得以我滅度之後復生疑惑。當來之世。經道滅盡。我以慈悲哀愍。特留此經。止住百歲。其有衆生值斯經者。隨意所願。皆可得度。佛語彌勒。如來與世難值。難見。諸佛經道難得難聞。菩薩勝法諸波羅蜜。得聞亦難。遇善知識聞法能行。此亦爲難。若聞斯經信樂受持。難中之難。無過此難。是故我法如是作如是說如是教。應當信順如法修行。爾時世尊說此經法。無量衆生皆發無上正覺之心。萬二千那由他人得清淨法眼。二十二億諸天人。民得阿那含。八十萬

歲詳釋慈旨百
歲前尙千歲經
在後百藏中留
止經法○含下
三本俱有果字
○衆下三本俱
無聞佛所說四
字

末題無上明有
佛說二字

比丘漏盡意解。四十億菩薩得不退轉。以弘誓功德而自莊嚴。於將來世當成正覺。爾時三千大千世界六
種震動。大光普照十方國土。百千音樂自然而作。無量妙華芬芬而降。佛說經已。彌勒菩薩及十方來諸菩
薩衆。長老阿難諸大聲聞。一切大眾聞佛所說。靡不歡喜。

無量壽經卷下

佛說無量壽經卷下

佛說觀無量壽佛經

(麗鞠三宋養三元養三明貞)

宋西域三藏量良耶舍譯

譯號宋上元明
俱有劉字藏下
三本俱有法師
二字

葡萄宋元俱作
蒲桃明作葡萄

軋三本俱作健

次同
人同作者

者同作者

如是我聞。一時佛在王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆千二百五十人俱。菩薩三萬二千。文殊師利法王子。而爲上首。爾時王舍大城有一太子。名阿闍世。隨順調達惡友之教。收執父王頻婆娑羅。幽閉置於七重室內。制諸群臣一不得往。國太夫人名韋提希。恭敬大王。澡浴清淨。以酥蜜和。鈔用塗其身。諸瓔珞中盛葡萄漿。密以上王。爾時大王。食鈔飲漿。求水漱口。漱口畢已。合掌恭敬。向耆闍崛山遙禮世尊。而作是言。大日。輒連是吾親友。顯興慈悲。授我八戒。時日。輒連如鷹隼飛疾。至王所。日日如是。授王八戒。世尊亦遣尊者富樓那。爲王說法。如是時間。經三七日。王食鈔蜜得聞法故。顏色和悅。時阿闍世問守門人。父王今者猶存在耶。時守門者自言。大王。國太夫人身塗鈔蜜。瓔珞盛漿。持用上王。沙門日連及富樓那。從空而來。爲王說法。不可禁制。時阿闍世聞此語已。怒其母曰。我母是賊。與賊爲伴。沙門惡人。幻惑呪術。令此惡王多日不死。卽執利劍。欲害其母。時有一臣名曰月光。聰明多智。及與耆婆。爲王作禮。白言。大王。臣聞毗陀論經說。劫初已來。有諸惡王。貪國位故。殺害其父一萬八千。未曾聞有無道害母。王今爲此殺逆之事。汙利利種。臣不忍聞。是旃陀羅。我等不宜復住於此。時二大臣說此語竟。以手按劍。却行而退。時阿闍世驚怖惶懼。告耆婆言。汝不爲我耶。耆婆白言。大王。慎莫害母。王聞此語。懺悔求救。卽便捨劍。止不害母。勅語內官。閑置深宮。不令復出。時韋提希被幽閉已。愁憂憔悴。遙向耆闍崛山。爲佛作禮。而作是言。如來世尊。在昔之時。恒遣阿難來慰問我。我今愁憂。世尊威重。無由得見。願遣日連尊者阿難。與我相見。作是語已。悲泣雨淚。遙向佛禮。未舉頭頃。爾時世尊在耆闍崛山。知韋提希心之所念。卽勅大目犍連。及以阿難。從空而來。佛從耆闍崛山沒。於王宮

在同作侍

儼明作儼

出時韋提希禮已舉頭見世尊釋迦牟尼佛身紫金色坐百寶蓮華目連侍左阿難在右釋梵護世諸天在虛空中普雨天華持用供養時韋提希見佛世尊自絕環瓔舉身投地號泣向佛自言世尊我宿何罪生此惡子世尊復有何等因緣使我提婆達多共爲眷屬唯願世尊爲我廣說無憂惱處我當往生不樂閻浮提濁惡世也此濁惡處地獄餓鬼畜生盈滿多不善聚願我未來不聞惡聲不見惡人今向世尊五體投地求哀懺悔唯願佛日教我觀於清淨業處爾時世尊放眉間光其光金色遍照十方無量世界還住佛頂化爲金臺如須彌山十方諸佛淨妙國土皆於中現或有國土七寶合成復有國土純是蓮華復有國土如自在天宮復有國土如玻璃鏡十方國土皆於中現有如是等無量諸佛國土嚴顯可觀今韋提希見時韋提希白佛言世尊是諸佛土雖復清淨皆有光明我今樂生極樂世界阿彌陀佛所唯願世尊教我思惟教我正受爾時世尊卽便微笑有五色光從佛口出一光照頻婆娑羅王頂爾時大王雖在幽閉心眼無障遙見世尊頭面作禮自然增進成阿那含爾時世尊告韋提希汝今知不阿彌陀佛去此不遠汝當繫念諦觀彼國淨業成者我今爲汝廣說衆譬亦令未來世一切凡夫欲修淨業者得生西方極樂國土欲生彼國者當修三福一者孝養父母奉事師長慈心不殺修十善業二者受持三歸具足衆戒不犯威儀三者發菩提心深信因果讀誦大乘勸進行者如此三事名爲淨業佛告韋提希汝今知不此三種業乃是過去未來現在三世諸佛淨業正因佛告阿難及韋提希諦聽諦聽善思念之如來今者爲未來世一切衆生爲煩惱賊之所害者說清淨業善哉韋提希快問此事阿難汝當受持廣爲多衆宣說佛語如來今者教韋提希及未來世一切衆生觀於西方極樂世界以佛力故當得見彼清淨國土如執明鏡自見面像見彼國土極妙樂事心歡喜故應時卽得無生法忍佛告韋提希汝是凡夫心想羸劣未得天眼不能遠觀諸佛如來有異方便令汝得見時韋提希白佛言世尊如我今者以佛力故見彼國土若佛滅後諸衆生等濁惡不善五苦所逼云何當見阿彌陀佛極樂世界佛告韋提希汝及衆生應當專心繫念一處想於西方云何作想凡作想者一

日下三本俱有
欲沒之處四字
○觀下同無作
是乃至成已二
十八字○想下
同無想見乃至
大水十字

食明作睡

作此乃至成已
二十八字三本
俱作如此想者
四字

子下同無有字
以上同無寶字

宛宋作椀下同
○踊三本俱作
涌下同

切衆生自非生盲。有目之徒皆見日沒。當起想念。正坐西向諦觀於日。令心堅住。專想不移。見日欲沒狀如懸鼓。既見日已。閉目開目皆令明了。是爲日想。名曰初觀。作是觀者名爲正觀。若他觀者名爲邪觀。佛告阿難及韋提希。初觀成已。次作水想。想見西方。一切皆是大水。見水澄清。亦令明了。無分散意。既見水已。當起冰想。見冰映徹作瑠璃想。此想成已。見瑠璃地內外映徹。下有金剛七寶金幢。擎瑠璃地。其幢八方八楞具足。一一方面百寶所成。一一寶珠有千光明。一一光明八萬四千色。映瑠璃地。如億千日不可具見。瑠璃地上。以黃金繩雜廁間錯。以七寶界分齊分明。一一寶中有五百色光。其光如華。又似星月。懸處虛空。成光明臺。樓閣千萬百寶合成。於臺兩邊各有百億花幢。無量樂器以爲莊嚴。八種清風從光明出。鼓此樂器。演說苦空無常無我之音。是爲水想。名第二觀。此想成時。一一觀之極令了了。閉目開目不令散失。唯除食時。恒憶此事。作此觀者名爲正觀。若他觀者名爲邪觀。佛告阿難及韋提希。水想成已。名爲龜見極樂國地。若得三昧。見彼國地了了分明。不可具說。是爲地想。名第三觀。佛告阿難。汝持佛語。爲未來世一切大衆欲脫苦者。說是觀地法。若觀是地者。除八十億劫生死之罪。捨身他世。必生淨國。心得無疑。作是觀者名爲正觀。若他觀者名爲邪觀。佛告阿難及韋提希。地想成已。次觀寶樹。觀寶樹者。一一觀之作七重行樹想。一一樹高八千由旬。其諸寶樹七寶華葉無不具足。一一華葉作異寶色。瑠璃色中出金色光。玻瓈色中出紅色光。瑪瑙色中出碎礫光。車渠色中出綠真珠光。珊瑚琥珀一切衆寶。以爲映飾。妙真珠網彌覆樹上。一一樹上有七重網。一一網間有五百億妙華宮殿。如梵王宮。諸天童子自然在中。一一童子有五百億釋迦毗楞伽摩尼寶。以爲瓔珞。其摩尼光照百由旬。猶如和合百億日月。不可具名。衆寶間錯色中上者。此諸寶樹行行相當。葉葉相次。於衆葉間生諸妙花。花上自然有七寶果。一一樹葉縱廣正等二十五由旬。其葉千色。有百種畫。如天瓔珞。有衆妙華。作閻浮檀金色。如旋火輪。宛轉葉間。踊生諸果。如帝釋瓶。有大光明。化成幢幡。無量寶蓋。是寶蓋中。映世三千大千世界一切佛事。十方佛國亦於中現。見此樹已。亦當次第一一觀之。觀見樹

觀下同無作是乃至成已二十八字○明校謂曰水宋藏作池下同○寶下三本俱有妙字者下同無從字水同作池○觀下同無作是乃至韋提希二十四字

葉下三本俱有上字○畫下同無一二字○華下同有具字○葉上元明俱無大字○伽下三本俱無摩尼二字○交元明俱作校○鏡三本俱作帳下同○庶宋作臺

莖枝葉華果皆令分明是為樹想名第四觀。作是觀者名為正觀。若他觀者名為邪觀。佛告阿難及韋提希。樹想成已。次當想水。欲想水者。極樂國土有八池水。一池水七寶所成。其寶柔軟。從如意珠王生。分為十四支。一一支作七寶色。黃金為渠。渠下皆以雜色金剛以為底沙。一一水中有六十億七寶蓮花。一一蓮華團圓正等十二由旬。其摩尼水流注華間。尋樹上下。其聲微妙。演說苦空無常無我諸波羅蜜。復有讚歎諸佛相好者。從如意珠王。踊出金色微妙光明。其光化為百寶色鳥。和鳴哀雅。常讚念佛法念僧。是為八功德水想。名第五觀。作是觀者名為正觀。若他觀者名為邪觀。佛告阿難及韋提希。衆寶國土。一一界上有五百億寶樓。其樓閣中有無量諸天。作天伎樂。又有樂器懸處虛空。如天寶幢。不鼓自鳴。此衆音中。皆說念佛念法念比丘僧。此想成已。名為粗見極樂世界寶樹寶地寶池。是為總觀想。名第六觀。若見此者。除無量億劫極重惡業。命終之後。必生彼國。作是觀者名為正觀。若他觀者名為邪觀。佛告阿難及韋提希。諦聽諦聽。善思念之。吾當為汝分別解說除苦惱法。汝等憶持。廣為大衆分別解說。說是語時。無量壽佛住立空中。觀世音大勢至。是二大士侍立左右。光明熾盛。不可具見。百千閻浮檀金色。不得為比。時韋提希見無量壽佛已。接足作禮。白佛言。世尊。我今因佛力故。得見無量壽佛及二菩薩。未來衆生。當云何觀無量壽佛及二菩薩。佛告韋提希。欲觀彼佛者。當起想念。於七寶地上。作蓮花想。令其蓮花。一一葉作百寶色。有八萬四千脉。猶如天畫。一一脉有八萬四千光。了了分明。皆令得見。華葉小者。縱廣二百五十由旬。如是蓮華。有八萬四千大葉。一一葉間。有百億摩尼珠王。以為映飾。一一摩尼珠。放千光明。其光如蓋。七寶合成。遍覆地上。釋迦毗楞伽摩尼寶。以為其臺。此蓮花臺。八萬金剛甄叔迦寶。梵摩尼寶。妙真珠網。以為交飾。於其臺上。自然而有四柱寶幢。一一寶幢。如百千萬億須彌山。幢上寶縷。如夜摩天宮。復有五百億微妙寶珠。以為映飾。一一寶珠。有八萬四千光。一一光作八萬四千異種金色。一一金色。遍其寶土。處處變化。各作異相。或為金剛臺。或作真珠網。或作雜花雲。於十方。隨意變現。施作佛事。是為花座想。名第七觀。佛告阿難。如此妙花。是本

當先作此妙花
座宋作此華座
當先作六字其
文中元明俱無
妙字○五百三
本俱作五萬○
身下元明俱無
遍字

像既三本俱作
見像○樹同作
其

放金光同作作
金色
放妙光同作放
光明

想像同作像想
味下同無作是
乃至邪觀十六
字

眼下同俱無
清淨二字
清淨作青

法藏比丘願力所成。若欲念彼佛者。當先作此妙花座想。作此想時不得雜觀。皆應一一觀之。一一葉。一一珠。一一光。一一臺。一一幡。皆令分明。如於鏡中自見面像。此想成者。滅除五百億劫生死之罪。必定當生極樂世界。作是觀者名爲正觀。若他觀者名爲邪觀。

佛告阿難及韋提希。見此事已。次當想佛。所以者何。諸佛如來是法界身。遍入一切衆生心想中。是故汝等心想佛時。是心卽是三十二相八十隨形好。是心作佛。是心是佛。諸佛正遍知海從心想生。是故應當一心繫念諦觀彼佛多陀阿伽度阿羅阿三藐三佛陀。想彼佛者。先當想像。閉目開目見一寶像如閻浮檀金色坐彼華上。像既坐已。心眼得開了了分明。見極樂國七寶莊嚴寶地寶池寶樹行列。諸天寶纒彌覆樹上。衆寶羅網滿虛空中。見如此事極令明了。如觀掌中見此事已。復當更作一大蓮華在佛左邊。如前蓮華等無有異。復作一大蓮華在佛右邊。想一觀世音菩薩像坐左華座。亦放金光如前無異。想一大勢至菩薩像坐右華座。此想成時。佛菩薩像皆放妙光。其光金色照諸寶樹。一一樹下亦有三蓮華。諸蓮華上各有一佛二菩薩像。遍滿彼國。此想成時。行者當聞水流光明及諸寶樹鳧鴈鴛鴦皆說妙法。出定入定恒聞妙法。行者所聞。出定之時憶持不捨。令與修多羅合。若不合者名爲妄想。若與合者名爲麤想。見極樂世界。是爲想像。名第八觀。作是觀者。除無量億劫生死之罪。於現身中得念佛三昧。作是觀者名爲正觀。若他觀者名爲邪觀。

佛告阿難及韋提希。此想成已。次當更觀無量壽佛身相光明。阿難當知。無量壽佛身。如百千萬億夜摩天閻浮檀金色。佛身高六十萬億那由他。恒河沙由旬。眉間白毫右旋宛轉如五須彌山。佛眼清淨如四大海水。清白分明。身諸毛孔演出光明如須彌山。彼佛圓光如百億三千大千世界。於圓光中有百萬億那由他。恒河沙化佛。一一化佛。亦有衆多無數化菩薩。以爲侍者。無量壽佛有八萬四千相。一一相中各有八萬四千隨形好。一一好中復有八萬四千光明。一一光明遍照十方世界。念佛衆生攝取不捨。其光相好及與化

明元明俱作眼
心下同無諸字

見三本俱作現

○受同作變
色下同有身字

○想元明俱作
相○亦應宋藏

作復當○十下
三本俱有萬字

○他下同無恒
河沙三字○百

下同有化字○
尼下同無妙字

○方下同有世
字

薩下同有者字

光上同無當字

次上三本俱無
佛告乃至希八
字○各下同無

佛不可具說。但當憶想令心明見。見此事者。即見十方一切諸佛。以見諸佛故。名念佛三昧。作是觀者。名觀一切佛身。以觀佛身故。亦見佛心。諸佛心者。大慈悲是。以無緣慈攝諸衆生。作此觀者。捨身他世。生諸佛前。得無生忍。是故智者。應當繫心諦觀無量壽佛。觀無量壽佛者。從一相好入。但觀眉間白毫極明了。見眉間白毫相者。八萬四千相好自然當見。見無量壽佛者。即見十方無量諸佛。得見無量諸佛故。諸佛見前受記。是爲遍觀一切色相。名第九觀。作是觀者。名爲正觀。若他觀者。名爲邪觀。

佛告阿難及韋提希。見無量壽佛了了分明已。次亦應觀觀世音菩薩。此菩薩身長八十億那由他。恒河沙由旬。身紫金色。頂有肉髻。項有圓光。面各百千由旬。其圓光中有五百化佛。如釋迦牟尼。一一化佛。有五百菩薩。無量諸天。以爲侍者。舉身光中。五道衆生。一切色相。皆於中現。頂上毗楞伽摩尼妙寶。以爲天冠。其天冠中。有一立化佛。高二十五由旬。觀世音菩薩面如閻浮檀金色。眉間毫相。備七寶色。流出八萬四千種光明。一一光明。有無量無數百千化佛。一一化佛。無數化菩薩。以爲侍者。變現自在。滿十方界。譬如紅蓮花色。有八十億微妙光明。以爲瓔珞。其瓔珞中。普現一切諸莊嚴事。手掌作五百億羅蓮花色。手指端。一一指端。有八萬四千畫。猶如印文。一一畫。有八萬四千色。一一色。有八萬四千光。其光柔軟。普照一切。以此寶手。接引衆生。舉足時。足下有千輻輪相。自然化成五百億光明臺。下足時。有金剛摩尼花。布散一切。莫不彌滿。其餘身相。衆好具足。如佛無異。唯頂上肉髻及無見頂相。不及世尊。是爲觀觀世音菩薩眞實色身相。名第十觀。佛告阿難。若欲觀觀世音菩薩。當作是觀。作是觀者。不遇諸禍。淨除業障。除無數劫生死之罪。如此菩薩。但聞其名。獲無量福。何況諦觀。若有欲觀觀世音菩薩者。當先觀頂上肉髻。次觀天冠。其餘衆相。亦次第觀之。悉令明了。如觀掌中。作是觀者。名爲正觀。若他觀者。名爲邪觀。

佛告阿難及韋提希。次觀大勢至菩薩。此菩薩身量大小。亦如觀世音。圓光面各二百二十五由旬。照二百五十由旬。舉身光明。照十方國。作紫金色。有緣衆生。皆悉得見。但見此菩薩一毛孔光。即見十方無量諸佛。

二字

花上同無蓮字

有上同無各字

側元明俱作髮

晉下三本俱無及字○至下同無作是乃至提希二十四字○想作心自見同作自心二字○勦同作加○定下元明俱有之字○所下三本俱無作是乃至邪觀十六字

觀下同無作是乃至邪觀十六字○佛下元有佛字○希下三本俱無凡乃至

淨妙光明。是故號此菩薩名無邊光。以智慧光普照一切。令離三塗得無上力。是故號此菩薩名大勢至。此菩薩天冠有五寶蓮花。一一寶華有五百寶臺。一一臺中十方諸佛淨妙國土廣長之相。皆於中現。頂上肉髻如鉢頭摩華。於肉髻上有一寶瓶。盛諸光明。普現佛事。餘諸身相如觀世音等無有異。此菩薩行時。十方世界一切震動。當地動處。各有五百億寶花。一一寶花莊嚴高顯。如極樂世界。此菩薩坐時。七寶國土一時動搖。從下方金光佛刹。乃至上方光明王佛刹。於其中間無量塵數分身無量壽佛。分身觀世音大勢至。皆悉雲集極樂國土。側塞空中。坐蓮花座。演說妙法度苦衆生。作此觀者。名為觀見大勢至菩薩。是為觀大勢至身色相。觀此菩薩者。名第十一觀。除無數劫阿僧祇生死之罪。作是觀者。不處胞胎。常遊諸佛淨妙國土。此觀成已。名為具足觀觀世音及大勢至。作是觀者。名為正觀。若他觀者。名為邪觀。佛告阿難及韋提希。見此事時。當起想。作心自見。生於西方極樂世界。於蓮華中結跏趺坐。作蓮華合想。作蓮華開想。蓮華開時。有五百色光來照身。想眼目開想。見佛菩薩滿虛空中。水鳥樹林及與諸佛。所出音聲皆演妙法。與十二部經合。若出定時。憶持不失。見此事已。名見無量壽佛極樂世界。是為普觀想。名第十二觀。無量壽佛化身無數。與觀世音及大勢至。常來至此行人之所。作是觀者。名為正觀。若他觀者。名為邪觀。

佛告阿難及韋提希。若欲至心生西方者。先當觀於一丈六像在池水上。如先所說。無量壽佛身量無邊。非是凡夫心力所及。然彼如來宿願力故。有憶想者。必得成就。但想佛得無量福。況復觀佛具足身相。阿彌陀佛神通如意。於十方國變現自在。或現大身滿虛空中。或現小身丈六八尺。所現之形。皆真金色。圓光化佛及寶蓮花。如上所說。觀世音菩薩及大勢至。於一切處身同。衆生但觀首相。知是觀世音。知是大勢至。此二菩薩助阿彌陀佛。普化一切。是為難想觀。名第十三觀。作是觀者。名為正觀。若他觀者。名為邪觀。

佛告阿難及韋提希。凡生西方有九品人。上品上生者。若有衆生。願生彼國者。發三種心。即便往生。何等為三。一者至誠心。二者深心。三者回向發願心。具三心者。必生彼國。復有三種衆生。當得往生。何等為三。一者

人八字○願下元明俱有願字○國上同無佛字○猛下宋有力字○晉下元明俱無及字次同

即三本俱作則

俱下同有時字○光下同無明字○飛下同無行徧二字○生下同無法字○行上同無彼字○晉下元明俱無并字○眷屬三本俱作菩薩○百下元明俱無化字

觀下三本俱無作是乃至邪觀十六字

慈心不殺具諸戒行。二者讀誦大乘方等經典。三者修行六念。同向發願。生彼佛國。具此功德。一日乃至七日。即得往生。生彼國時。此人精進勇猛。故阿彌陀如來與觀世音及大勢至無數化佛百千比丘聲聞大眾。無量諸天七寶宮殿。觀世音菩薩執金剛臺。與大勢至菩薩至行者前。阿彌陀佛放大光明照行者身。與諸菩薩授手迎接。觀世音大勢至與無數菩薩讚歎行者勸進其心。行者見已歡喜踊躍。自見其身乘金剛臺。隨從佛後。如彈指頃。往生彼國。生彼國已。見佛色身衆相具足。見諸菩薩色相具足。光明寶林演說妙法。聞已即悟無生法忍。經須臾。問歷事諸佛。遍十方界。於諸佛前次第受記。還至本國。得無量百千陀羅尼門。是名上品上生者。上品中生者。不必受持讀誦方等經典。善解義趣。於第一義心不驚動。深信因果。不謗大乘。以此功德。同向願求生極樂國。行此行者。命欲終時。阿彌陀佛與觀世音及大勢至。無量大衆眷屬圍繞。持紫金臺。至行者前。讚言法子。汝行大乘解第一義。是故我今來迎接汝。與千化佛一時授手。行者自見坐紫金臺。合掌叉手讚歎諸佛。如一念頃。即生彼國七寶池中。此紫金臺如大寶華。經宿即開。行者身作紫磨金色。足下亦有七寶蓮華。佛及菩薩俱放光明。照行者身。目即開明。因前宿習普聞衆聲。純說甚深第一義諦。即下金臺禮佛合掌讚歎世尊。經於七日。應時即於阿耨多羅三藐三菩提。得不退轉。應時即能飛至十方。歷事諸佛。於諸佛所修諸三昧。經一小劫。得無生法忍。現前受記。是名上品中生者。上品下生者。亦信因果。不謗大乘。但發無上道心。以此功德。同向願求生極樂國。彼行者。命欲終時。阿彌陀佛及觀世音并大勢至。與諸眷屬持金蓮華。化作五百化佛來迎此人。五百化佛一時授手。讚言法子。汝今清淨發無上道心。我來迎汝。見此事時。即自見身坐金蓮華。坐已華合。隨世尊後。即得往生七寶池中。一日一夜蓮華乃開。七日之中。乃得見佛。雖見佛身於衆相好心不明了。於三七日後。乃了了見。聞衆音聲皆演妙法。遊歷十方供養諸佛。於諸佛前聞甚深法。經三小劫。得百法明門。住歡喜地。是名上品下生者。是名上輩生想。名第十四觀。作是觀者。名爲正觀。若他觀者。名爲邪觀。

惡同作患

界下同無行者
二字

義三本俱作慈
○八下元明俱
無大字○經上
三本俱無生字
○日下同有已
字○觀下同無
作是乃至邪觀
十六字○讚同
作說

言下同無善哉
二字○汝上同
有以字○已明
作日○者下三
本俱無得聞乃
至往生十八字

佛告阿難及韋提希。中品上生者。若有衆生受持五戒。持八戒齋。修行諸戒。不造五逆無衆過惡。以此善根。回向願求生於西方極樂世界。行者臨命終時。阿彌陀佛與諸比丘眷屬圍繞。放金色光至其人所。演說苦空無常無我。讚歎出家得離衆苦。行者見已心大歡喜。自見己身坐蓮華臺。長跪合掌爲佛作禮。未舉頭頃。即得往生極樂世界。蓮華尋開。當華開時。聞衆音聲讚歎四諦。應時即得阿羅漢道。三明六通具八解脫。是名中品上生者。中品中生者。若有衆生。若一日一夜持八戒齋。若一日一夜持沙彌戒。若一日一夜持具足戒。威儀無缺。以此功德。回向願求生極樂國。戒香薰修。如此行者命欲終時。見阿彌陀佛與諸眷屬放金色光。持七寶蓮華至行者前。行者自聞空中有聲。讚言善男子。如汝善人。隨順三世諸佛。救我來迎汝。行者自見坐蓮華上。蓮華即合。生於西方極樂世界。在寶池中。經於七日。蓮華乃敷。華既敷已。開目合掌讚歎世尊。聞法歡喜。得須陀洹。經半劫已成阿羅漢。是名中品中生者。中品下生者。若有善男子善女人。孝養父母。行世仁義。此人命欲終時。遇善知識。爲其廣說阿彌陀佛國土樂事。亦說法藏比丘四十八大願。聞此事已。尋即命終。譬如壯士屈伸臂頃。即生西方極樂世界。生經七日。遇觀世音及大勢至。聞法歡喜。得須陀洹。過一小劫成阿羅漢。是名中品下生者。是名中輩生想。名第十五觀。作是觀者名爲正觀。若他觀者名爲邪觀。佛告阿難及韋提希。下品上生者。或有衆生作衆惡業。雖不誹謗方等經典。如此愚人。多造惡法。無有慚愧。命欲終時。遇善知識。爲讚大乘十二部經首題名字。以聞如是諸經名故。除却千劫極重惡業。智者復教合掌叉手。稱南無阿彌陀佛。稱佛名故。除五十億劫生死之罪。爾時彼佛。即遣化佛化觀世音化大勢至。至行者前。讚言善哉善男子。汝稱佛名。故諸罪消滅。我來迎汝。作是語已。行者即見化佛光明遍滿其室。見已歡喜。即便命終。乘寶蓮華。隨化佛後。生寶池中。經七七日。蓮華乃敷。當華敷時。大悲觀世音菩薩。及大勢至菩薩。放大光明。住其人前。爲說甚深十二部經。聞已信解。發無上道心。經十小劫。具百法門。得入初地。是名下品上生者。得聞佛名法名。及聞僧名。聞三寶名。即得往生。佛告阿難及韋提希。下品中生者。或有衆生。毀

法同作業

爲下元明俱有

諸字

當下三本俱無

當華敷時四字

稱下元明俱無
歸命二字〇往
生宋作生〇

閣下宋無當花

敷三字元明俱

無當花敷時四

字〇即爲其人

廣說元明俱作

爲其廣說諸法

〇說上三本俱

無爾時世尊四

字〇得同作逮

〇起下同無前

字

同同作則〇芬

同作分

日下同有健字

日下同有健字

犯五戒八戒及具足戒。如此愚人。偷僧祇物盜現前僧物。不淨說法無有慚愧。以諸惡法而自莊嚴。如此罪人。以惡業故應墮地獄。命欲終時。地獄衆火一時俱至。遇善知識以大慈悲。卽爲讚說阿彌陀佛十力威德。廣讚彼佛光明神力。亦讚戒定慧解脫解脫知見。此人聞已除八十億劫生死之罪。地獄猛火化爲涼風。吹諸天華。華上皆有化佛菩薩。迎接此人。如一念頃。卽得往生七寶池中。蓮華之內。經於六劫蓮華乃敷。當華敷時。觀世音大勢至。以梵音聲安慰彼人。爲說大乘甚深經典。聞此法已。應時卽發無上道心。是名下品中生者。佛告阿難及韋提希。下品下生者。或有衆生作不善業五逆十惡。具諸不善。如此愚人以惡業故。墮墮惡道。經歷多劫受苦無窮。如此愚人臨命終時。遇善知識種種安慰。爲說妙法。教令念佛。彼人苦逼不遑念佛。善友告言。汝若不能念彼佛者。應稱歸命無量壽佛。如是至心令聲不絕。具足十念。稱南無阿彌陀佛。稱佛名故。於念念中。除八十億劫生死之罪。命終之時。見金蓮華。猶如日輪。住其人前。如一念頃。卽得往生極樂世界。於蓮華中。滿十二大劫。蓮華方開。當花敷時。觀世音大勢至。以大悲音聲。卽爲其人廣說實相除滅罪法。聞已歡喜。應時卽發菩提之心。是名下品下生者。是名下輩生。名第十六觀。

爾時世尊說是語時。韋提希與五百侍女。聞佛所說。應時卽見極樂世界。廣長之相。得見佛身及二菩薩。心生歡喜。歎未曾有。豁然大悟。得無生忍。五百侍女發阿耨多羅三藐三菩提心。願生彼國。世尊悉記皆當往生。生彼國已。得諸佛現前三昧。無量諸天發無上道心。爾時阿難卽從座起。前白佛言。世尊。當何名此經。此法之要。當云何受持。佛告阿難。此經名觀極樂國土。無量壽佛觀世音菩薩大勢至菩薩。亦名淨除業障。生諸佛前。汝等受持。無令忘失。行此三昧者。現身得見無量壽佛及二大士。若善男子及善女人。但聞佛名。二菩薩名。除無量劫生死之罪。何況憶念。若念佛者。當知此人卽是人中芬陀利華。觀世音菩薩大勢至菩薩。爲其勝友。當坐道場。生諸佛家。佛告阿難。汝好持是語。持是語者。卽是持無量壽佛名。佛說此語時。尊者目蓮尊者阿難及韋提希等。聞佛所說。皆大歡喜。爾時世尊。足步虛空。還者闍崛山。爾時阿難廣爲大衆說。

○人元明俱作
諸○龍下同無
神字

如上事。無量人天龍神夜叉。聞佛所說皆大歡喜禮佛而退。

佛說觀無量壽佛經

佛說觀無量壽佛經

佛說阿彌陀經

〔麗鞠〕〔宋養〕〔元養〕〔明真〕

姚秦龜茲三藏鳩摩羅什譯

譯號龜茲三藏
三本俱作三藏
法師

軌同作毘○梨
同作利○迦同
作伽○俱同作
拘

天雨三本俱作
雨天○國元明
俱作土
鶴三本俱作鶴

趣同作道○惡
上同無三字

如是我聞。一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園。與大比丘僧千二百五十人俱。皆是大阿羅漢。衆所知識。長老舍利弗。摩訶目犍連。摩訶迦葉。摩訶迦旃延。摩訶俱絺羅。離婆多。周梨槃陀迦。難陀。阿難陀。羅睺羅。憍梵波提。寶頭盧。頗羅墮。迦留陀夷。摩訶劫賓那。薄俱羅。阿菟樓駄。如是等諸大弟子。并諸菩薩摩訶薩。文殊師利法王子。阿逸多菩薩。皁陀訶提菩薩。常精進菩薩。與如是等諸大菩薩。及釋提桓因等。無量諸天大衆俱。爾時佛告長老舍利弗。從是西方過十萬億佛土。有世界名曰極樂。其土有佛號阿彌陀。今現在說法。舍利弗。彼土何故名爲極樂。其國衆生無有衆苦。但受諸樂。故名極樂。又舍利弗。極樂國土有七寶池。八功德水。充滿其中。池底重行樹。皆是四寶周匝圍繞。是故彼國名曰極樂。又舍利弗。極樂國土有七寶池。八功德水。充滿其中。池底純以金沙布地。四邊階道。金銀瑠璃頗梨合成。上有樓閣。亦以金銀瑠璃頗梨車渠赤珠碼磲而嚴飾之。池中蓮華大如車輪。青色青光。黃色黃光。赤色赤光。白色白光。微妙香潔。舍利弗。極樂國土成就如是功德莊嚴。又舍利弗。彼佛國土常作天樂。黃金爲地。晝夜六時。天雨曼陀羅華。其國衆生常以清旦。各以衣祴盛衆妙華。供養他方十萬億佛。卽以食時。還到本國。飯食經行。舍利弗。極樂國土成就如是功德莊嚴。復次舍利弗。彼國常有種種奇妙雜色之鳥。白鶴孔雀鸚鵡舍利迦陵頻伽共命之鳥。是諸衆鳥。晝夜六時。出和雅音。其音演暢。五根五力。七菩提分。八聖道分。如是等法。其土衆生聞是音已。皆悉念佛念法念僧。舍利弗。汝勿謂此鳥實是罪報所生。所以者何。彼佛國土無三惡趣。舍利弗。其佛國土尚無三惡道之名。何況有實。是諸衆鳥。皆是阿彌陀佛。欲令法音宣流。變化所作。舍利弗。彼佛國土。微風吹動。諸實行樹及寶羅網。出微妙音。

皆自然同作自然皆

薩下同有衆字

祇下明無劫字

德下三本俱有之利二字

沮宋作祖

譬如百千種樂同時俱作。聞是音者皆自然生念佛念法念僧之心。舍利弗。其佛國土成就如是功德莊嚴。舍利弗。於汝意云何。彼佛何故號阿彌陀。舍利弗。彼佛光明無量。照十方國無所障礙。是故號爲阿彌陀。又舍利弗。彼佛壽命及其人民無量無邊阿僧祇劫。故名阿彌陀。舍利弗。阿彌陀成佛已來於今十劫。又舍利弗。彼佛有無量無邊聲聞弟子。皆阿羅漢。非是算數之所能知。諸菩薩亦復如是。舍利弗。彼佛國土成就如是功德莊嚴。又舍利弗。極樂國土衆生者皆是阿鞞跋致。其中多有一生補處。其數甚多。非是算數所能知之。但可以無量無邊阿僧祇說。舍利弗。衆生聞者應當發願願生彼國。所以者何。得與如是諸上善人俱會一處。舍利弗。不可以少善根福德因緣得生彼國。舍利弗。若有善男子善女人。聞說阿彌陀佛。執持名號。若一日。若二日。若三日。若四日。若五日。若六日。若七日。一心不亂。其人臨命終時。阿彌陀佛與諸聖衆現在其前。是人終時心不顛倒。卽得往生阿彌陀佛極樂國土。舍利弗。我見是利。故說此言。若有衆生聞是說者。應當發願願生彼國土。舍利弗。如我今者讚歎阿彌陀佛。不可思議功德。東方亦有阿閼鞞佛。須彌相佛。大須彌佛。須彌光佛。妙音佛。如是等恒河沙數諸佛。各於其國出廣長舌相。遍覆三千大千世界。說誠實言。汝等衆生當信是稱讚不可思議功德。一切諸佛所護念經。舍利弗。南方世界有日月燈佛。名聞光佛。大焰肩佛。須彌燈佛。無量精進佛。如是等恒河沙數諸佛。各於其國出廣長舌相。遍覆三千大千世界。說誠實言。汝等衆生當信是稱讚不可思議功德。一切諸佛所護念經。舍利弗。西方世界有無量壽佛。無量相佛。無量幢佛。大光佛。大明佛。寶相佛。淨光佛。如是等恒河沙數諸佛。各於其國出廣長舌相。遍覆三千大千世界。說誠實言。汝等衆生當信是稱讚不可思議功德。一切諸佛所護念經。舍利弗。北方世界有燄肩佛。最勝音佛。難沮佛。日生佛。網明佛。如是等恒河沙數諸佛。各於其國出廣長舌相。遍覆三千大千世界。說誠實言。汝等衆生當信是稱讚不可思議功德。一切諸佛所護念經。舍利弗。下方世界有師子佛。名聞佛。名光佛。達摩佛。衆生當信是稱讚不可思議功德。一切諸佛所護念經。舍利弗。下方世界有師子佛。名聞佛。名光佛。達摩佛。法幢佛。持法佛。如是等恒河沙數諸佛。各於其國出廣長舌相。遍覆三千大千世界。說誠實言。汝等衆生當

共三本俱作之

說同作證

信是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經。舍利弗。上方世界有梵音佛。宿王佛。香上佛。香光佛。大篋肩佛。雜色寶華嚴身佛。娑羅樹王佛。寶華德佛。見一切義佛。如須彌山佛。如是等恒河沙數諸佛。各於其國。出廣長舌相。遍覆三千大千世界。說誠實言。汝等衆生。當信是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經。舍利弗。於汝意云何。何故名爲一切諸佛所護念經。舍利弗。若有善男子善女人。聞是經受持者。及聞諸佛名者。是諸善男子善女人。皆爲一切諸佛共所護念。皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提。是故舍利弗。汝等皆當信受我語及諸佛所說。舍利弗。若有人已發願。今發願。當發願。欲生阿彌陀佛國者。是諸人等。皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提。於彼國土若已生。若今生。若當生。是故舍利弗。諸善男子善女人。若有信者。應當發願生彼國土。舍利弗。如我今者稱讚諸佛不可思議功德。彼諸佛等。亦稱說我不可思議功德。而作是言。釋迦牟尼佛能爲甚難希有之事。能於娑婆國土五濁惡世。劫濁。見濁。煩惱濁。衆生濁。命濁中。得阿耨多羅三藐三菩提。爲諸衆生。說是一切世間難信之法。舍利弗。當知。我於五濁惡世。行此難事。得阿耨多羅三藐三菩提。爲一切世間。說此難信之法。是爲甚難。佛說此經已。舍利弗及諸比丘。一切世間天人阿修羅等。聞佛所說歡喜信受。作禮而去。

佛說阿彌陀經

佛說阿彌陀經

淨土三經校訂記

本文所刊佛說無量壽經者弘教書院縮刷大藏經地帙第八卷所載、佛說觀無量壽佛經及佛說阿彌陀經者同第十二卷所載之麗本也。冠註宋元明三本不同。國譯底本者坊間流布諸宗所依而有異彼。今不合麗本者併記於此。字傍附圈點者示底本所用、一等表本文頁數云

佛說無量壽經卷上

- 一、譯號三本俱無天竺三藏四字下卷同○螺作羸下同○障下三本無闕字○果同作異○喜同作嘉○遵同作導○權同作權○率同作術○振同作震○按同作案
- 二、僑同作懼○殖同作植○感作致○導三本俱作道次同○開導之導明作道○人同作生○畏下宋元俱無之網二字○幻下三本俱有化之二字○中下明作化終○揚作暢○物下三本俱有而字○衆生同作諸庶○任同作擔○猶如孝子四字同作如純孝之子○愛同作受○之若同作若○自○是下同有之等二字○大上同無無量二字○鏡淨作淨鏡○常作曾特下無之字○佛上三本有諸字○師下無之字○勝下三本有之字○來下同有之字
- 三、在作佛○普令群萌獲眞法利八字三本作欲拯濟群萌惠以眞實之利十一字、今欲拯群萌等十字○喰明作餐○炎作燄下同○種作動○逸作繞下同○如作若○容顏三本俱作顏容○崖同作涯
- 四、德同作勳○令作使○却作卻○愍哀作哀愍○到三本作至○隱作穩○信明三本作明信○令同作使○語同作告○自在作饒○告三本作語○斗作升○粗作麤○超三本俱作起○白下同有佛字○人天同作天人下皆同
- 五、識上同無悉字○知上有不字○見上有不字○知上有不字○有下三本無能字次同○乃作下○衆生作聲聞

○生下三本有悉成二字○係元明俱作繫○殖諸三本俱作植衆、今作植諸○遍作徧下同○量無數三本俱作數無量○那上無億字○求欲作欲求

六、辨三本作辯○土作中○爾者三本作如是、今作如是者○體三本作身○若有裁縫搗染治同作有求裁縫搗染、今作若有裁縫搗染○觀下三本有見字○如來三本俱作諸佛

七、一下同有忍字○而說同作以偈○至南藏作志○足宋元俱作具○等作正下同○不宋元作所○道三本俱作尊○明作廣○量三本作礙○遍同作照○德作慧○人三本作神○法藏今作時彼○彼三本作其○開作恢○殖三本作植○觸下同無之字○軟同作愛○倦同作倦○慧同作惠○彼同作人

八、鉢作盃下同○梅明作旃○諸同作繪○蓋作盃下同○幡作旛○人天今作天人○經作逕○車槩馬璫今作碑礪碼礪○曠三本俱作廣○入間明作間入○焜耀三本俱作煜燦○園上今有鐵字○溪今作谿○見今作現○或下三本無有佛光三字○尺宋元俱作赤○一上三本俱無照字○照下有於字○刹下有土字○勤明作極○知三本俱作焉○大同作之

九、不同作末○無上同有又字○劫明作之○如上三本俱無能字○大上今有今字○折作拆○梨三本俱作璃○頗梨同作玻璃○樹上同有之字○實下有此諸實樹四字○准作準○曜作耀下同○千作十○動下三本有吹諸寶樹演五字、今有吹諸枝葉演五字

一○、出下同有無量二字○音下同有聲字○普流十方一切同作其聲流布遍諸○其聞同作聞其○道下同有耳根清徹四字○色下同無耳聞其音四字○舌同作口○緣下同無一切二字○國下同有土字○暢作揚○又三本作其○露明作絡○各皆三本作皆各○或下同有有字○物同作牟○至生作卽至○映作映下同○極三本作安

一一、應同作鉢、今盃○虎作琥○衆三本作諸○人天今作天人○次同○斲三本作斯○殖同作植○信作宥○積聚三本作聚積○斯作廡○諍三本作爭○昇同作升○享作享○遇三本俱作乃、今作適○邊下三本有也字○

聚三本作聚積○斯作廡○諍三本作爭○昇同作升○享作享○遇三本俱作乃、今作適○邊下三本有也字○

佛說無量壽經卷下

比下同有之字○諸明作繪○人天作天人○上三本俱作土○絞同作校、今作交○德同作得○冷今作涼
一、陷三本作蹈○反作返○葉三本作華○亦同作赫○煒燁作曜○曄○明無末題、今同首題

一三、定下三本俱無之字○語三本俱作告次同○恒下同有河字○大同作之

一四、諸菩薩同作菩薩衆○賣作齋下同○照三本作朗○門同作性○土同作國○志同作至○達元明俱作滿○本三本俱作心○崖元明俱作涯○如三本俱作知

一五、濟同作度○是同作此○此同作是○阿僧祇同作不可計○更同作受○語作告○繪三本作衣○轉同作輒

○佛下同有及諸二字○大同作之○晃耀同作昱燦○大衆同作天人○頌作班○普吹三本作吹七○聲下同無兩字○周遍同作四散○大同作之○然同作怡○告同作語○軟三本俱作潤

一六、習元明俱作集○閔作礙下同○染汙作汙染○望宋作要元明俱作忌○師導作導師○感三本俱作戚○德同作慧○止作正○言作說○養同作樂○趣同作道次同○獲同作得

一七、俱三本俱作居次同○天元明俱作天○相三本俱作想○復元明俱作今○曼明作遇○乎作哉○矇三本俱作蒙、今作矇下同○惑下三本無於字

一八、昏矇同作昏蒙闇○政同作正○寡同作少○聊作憫○未下三本俱有終字○懃同作勤○曼明作遇○至下有心字○者三本俱作語○蠛作蠕下同○誠同作戒○壽下有佛字○勤下有菩薩二字○拘闍三本作罽礙、今作拘礙○體元明俱作淨○壽下三本俱無佛字

一九、億萬作萬億○佛三本作言、今佛下有言字○等下同無爲字○其上有佛言二字○丐作勾○啞三本俱作瘡○慙同作弊○免同作勉○現作見○止作絕○滅族作而滅○剝三本作利○保作寶

二〇、磨作糜。〇斷三本作斯、今作廡。〇殊宋作佚元明俱作洪。〇不三本俱作無。〇勢作熱。〇脅作憐。〇神鬼三本作鬼神。〇去作共。〇奪之宋元俱作頓乏、今作頓之。〇自三本俱作罔。

二一、惡下有者字。〇情作隋。〇應作響。〇有下三本無憎字。〇錄同作難。〇職同作識。〇矇同作蒙。〇逆惡同作惡。〇逆。〇不下同有肯字。〇冥作窈。〇其三本俱作期。〇惡下同無者字。〇其明作有。

二二、生三本俱作坐。〇紀明作維。〇永三本俱作當。〇畏同作怖。〇慧同作惠。〇中作土。〇殆作結。〇忿三本作惡。〇器同作宜。〇吾同作我。〇世下有問字。〇昇三本作升。〇告同作語。〇善作苦。〇向三本俱作面。

二三、耀作曜。〇天下三本有上字。〇加同作跏。〇方下有佛國二字。〇之三本作聖。〇生下同無者字。〇別有宮室七寶莊飾八字同作有七寶牢獄種種莊嚴九字、今作別有七寶宮室種種莊嚴十字。〇蓋宋作幡。〇宮三本俱作獄。〇給飲同作養飯。〇募作禡。〇伎作妓。〇勉作免。〇智下三本有故字。〇彼下同有七寶二字。〇壽下同無佛字。〇如來三本俱作餘佛。〇六上同無有字。

二四、百下同無億字。〇竟同作盡。〇語同作告。〇吾上有佛言二字。〇明按譌曰恭讀無量清淨平等覺經云般泥洹去後經道留止千歲千歲後留是經法止住百歲詳釋慈旨百歲前尙千歲經在後百歲中留止經法。〇含下三本俱有果字。

二五、芬芬作紛紛。〇衆下三本俱無聞佛所說四字。〇末題無上明有佛說二字。

佛說觀無量壽經

一、題號壽下無佛字。〇譯號宋上元明俱有劉字藏下三本俱有法師二字、今西域三藏作元嘉中。〇太作大。〇下同。

〇葡萄宋元俱作蒲桃明作蒲萄。〇軋三本俱作躡。〇次同人同作者。〇者同作人。〇我等八字作不宜住此。

二、在同作侍。〇餓明作饑。〇羅下無王字。〇業下無乃是二字。

三、日下三本俱有欲沒之處四字○觀下同無作是乃至成已二十八字○想下同無想見乃至大水十字○澄作澂○映作映下同○花作華下同○食明作睡○作此乃至成已二十八字三本俱作如此想者四字○馬作碼○車渠作碑磔○子下同無有字○以上同無寶字○宛宋作婉下同○踊三本俱作涌下同

四、觀下同無作是乃至成已二十八字○明校譌曰水宋藏作池下同○水下想上無欲字○寶下三本俱有妙字○者下同無從字○觀下同無作是乃至韋提希二十四字○水字作池○寶樓下有閣字○吾作佛○葉下三本俱有上字○畫下同無一一二字○華下同有具字○葉上元明俱無大字○有上有各字○尼下無珠字○伽下三本俱無摩尼二字○交元明俱作校○纒三本俱作幔下同○座宋作臺

五、當先作此妙花座宋作此華座當先作六字其文中元明俱無妙字○幡作幢○五百三本俱作五萬○身下元明俱無遍字○阿作訶○像既三本俱作見像○樹同作其○放金光同作作金色○放妙光同作放光明○亦作復○想像同作像○想○昧下同無作是乃至邪觀十六字○宛作婉○眼下三本俱無清淨二字○清同作青○相下無中字○好下無中字○光下有明字

六、元明俱作眼○心下同無諸字○毫下無相字○見三本俱作現○受同作授○色下同有身字○想元明俱作相○是作此○亦應宋藏作復當○十下三本俱有萬字○他下同無恒河沙三字○尼下有佛字○百下三本有化字○尼下同無妙字○方下同有世字○憶下無微妙二字○薩下三本有者字○先上同無當字○悉作亦○次上三本俱無佛告乃至希八字○次下有復應二字○各下三本無二字

七、花上同無蓮字○有上同無各字○側元明俱作愛○爲下有正觀若他觀者名爲邪九字○相作想○觀此菩薩者一句在名第十一觀次○數作量○音下三本俱無及字○至下同無作是乃至提希二十四字○想作心自見同作自心二字○踰同作加○出上無若字○定下元明俱有之字○音下無及字○所下三本俱無作是乃至邪觀十六字○況復作何況○觀下同無作是乃至邪觀十六字○佛下元有佛字○希下三本俱無凡乃至人八字○同作

廻下同

八、願下元明俱有願字○國上同無佛字○猛下宋有力字○音下元明俱無及字○次同○受作授○下同○至作到○即三本俱作則○俱下同有時字○光下同無明字○飛下同有行徧二字○生下同無法字○行上同無彼字○音下元明俱無拜字○眷屬三本俱作菩薩○百下元明俱無化字○觀下三本俱無作是○乃至邪觀十六字

九、惡同作患○界下同無行者二字○持上有受字○義三本俱作慈○八下元明俱無大字○經上三本俱無生字

○日下同有已字○喜下無得須陀洹四字○過作經○觀下同無作是○乃至邪觀十六字○惡法作衆惡○讚同作說○言下同無善哉二字○汝上同有以字○已明作日○者下三本俱無得聞○乃至往生十八字

一〇、法三本作業○即爲讚作爲一字○讚作說○爲下元明俱有清字○敷下三本俱無當華敷時四字○彼作此○念下無彼佛二字○稱下元明俱無歸命二字○往生宋作生生○開下宋無當花敷三字元明俱無當花敷時四字○即爲其人廣說元明俱作爲其廣說諸法○說上三本俱無爾時世尊四字○豁作廓○得三本作逮○得諸上無獲字○起下三本無前字○子下無及字○阿上無尊者二字○即三本作則、今無即字○芬三本作分○日下同有韃字

一一、人元明俱作諸○龍上有及字龍下同無神字

佛說阿彌陀經

一、譯號龜茲三藏三本俱作三藏法師○什下有奉詔○僧作衆○軋三本作韃○梨同作利○迦同作伽○俱同作拘○軋作乾○車渠作禪讓○天雨三本俱作雨天、今作而雨○國元明俱作土○鵠三本俱作鶴○趣同作道○惡下同無三字

二、皆自然同作自然皆○薩下同有衆字○祇下明無劫字○德下三本俱有之利二字○遍作徧○下同○沮宋作沮

三、經受持者及聞諸佛作諸佛所說名及經○共三本俱作之○說同作讚

(終)

大正六年六月廿三日印刷
大正六年六月廿六日發行
大正七年六月三十日再版發行
昭和二年四月二十三日三版發行

著作權所有

國譯大藏經 經部第一卷 (非賣品)

(岡山製本)

編輯者兼

國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

右代表者

鶴田久作
東京市本郷區西片町十番地

印刷者

君島潔
東京市小石川區久堅町百八番地

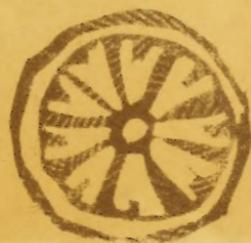
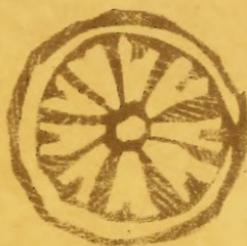
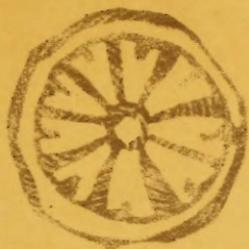
印刷所

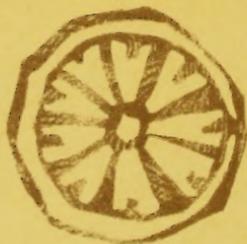
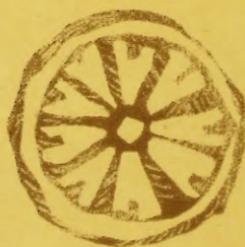
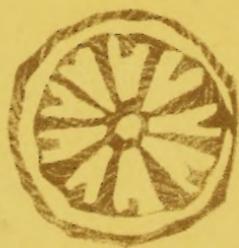
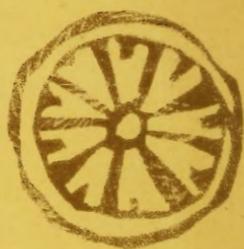
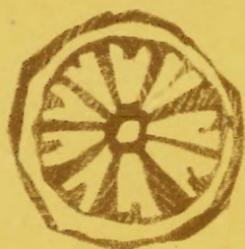
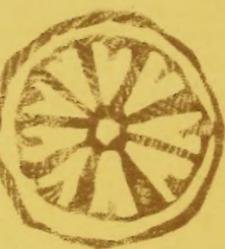
共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所

電話神田一八三三五番
振替東京一八五七二番

國民文庫刊行會





EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 1815

